日本名著全集
江戸文藝之部第弍巻

芭蕉全集

LIBRARY
FEB 21 1967
UNIVERSITY OF TORONTO

PL
755
.35
N5
V. 3

この卷の裝幀——

背及表紙意匠　木島櫻谷氏畫
見返し前附・後附　木島櫻谷氏畫
背文字　渡邊新三郎氏筆
扉文字　近藤雪竹氏筆
箱に用ひた圖案　小杉未醒氏畫

芭蕉全集目錄

書簡集……………………三三七

評語集……………………三八七

語録集

外篇

附錄……………………八五七

（目錄をはり）

不出世の大詩人芭蕉の研究はます〳〵廣くいよ〳〵深くなつて參るのであります。其研究資料としての作品全集の要求も相當强いものがあるのであります。芭蕉が歿しまして後、其作品を輯めてやゝ體を成しましたのは風國の「泊船集」でありますが、紀行一篇と發句六百有餘を收錄しました部分的のものに過ぎないのであります。天明復興期に入りまして蓼太曉臺闌更など、それ〴〵編著する所がありましたが、是亦部分的のものばかりであります。蝶夢の出しましたものは同じく部分的ではありますが、これを取集めますれば卽ち一大全集（書簡集を缺いてをりますが）となるのであります。其はじめて全集的體裁を具へましたものは湖中の「俳諧一葉集」であります。古學庵佛兮幻窓湖中の共編となつてをりますが、佛兮は早く歿しましたので、資料の蒐集より編纂の按排まで、湖中一人の裁量に成りましたもので、前後九篇、實によく網羅したものであります。只今の研究程度から見ますれば、多少不備の點が無いでもありませんが、とにかくあれまでにまとめ上げました努力と、所謂斷簡零墨も猶捨てなかつた周

門に分ち、尚外篇として芭蕉關係のもの十五部を收錄いたし、且つ附錄として傳記關係のもの四種を篇入いたしたのであります。其選擇書目等に關しましては、各部門解説中に申述べる事にいたしませう。尚『袖珍抄』に關しましては、連句集解説中に申述べる筈であります。

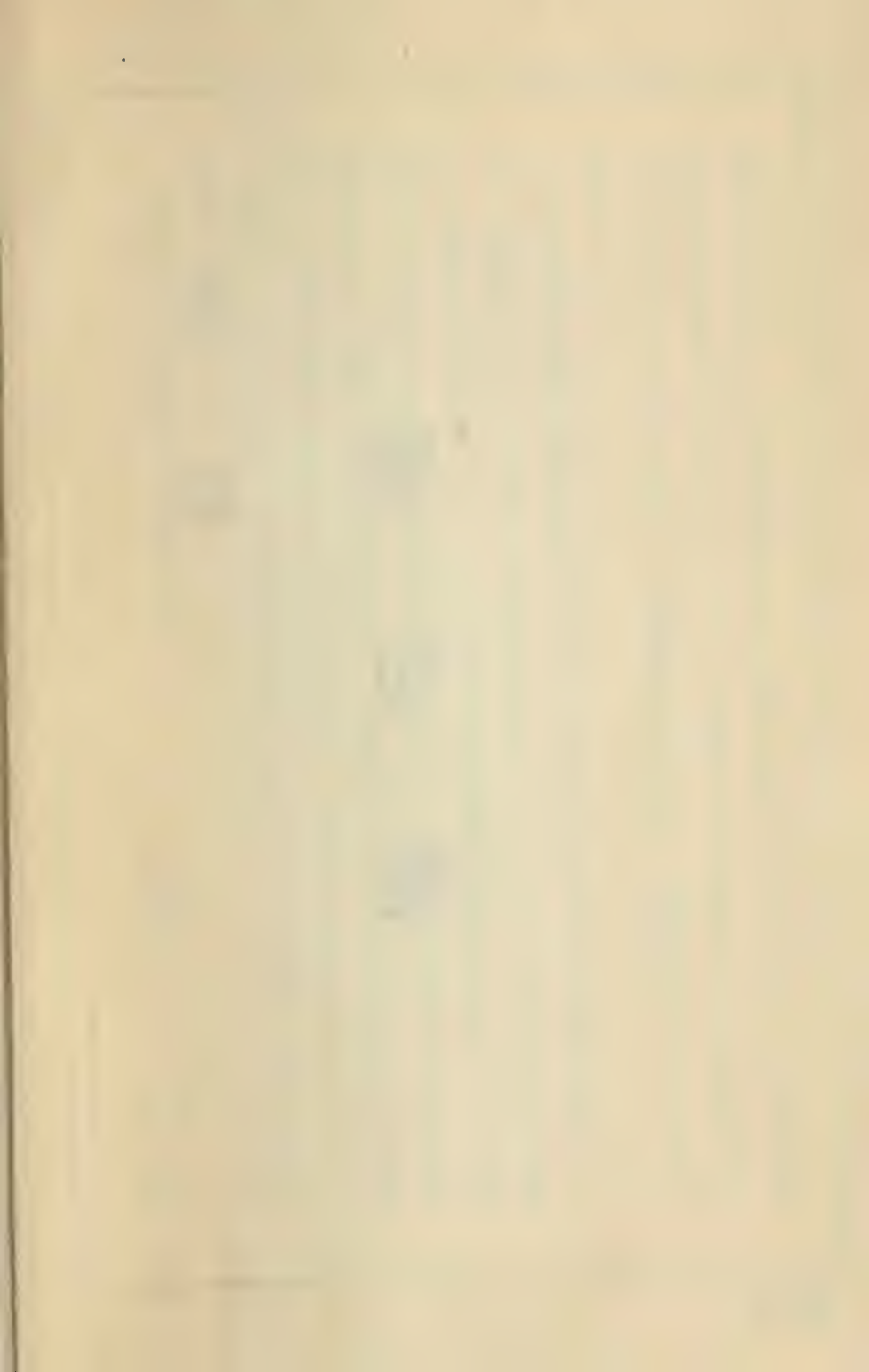
本書の編纂に際して、伊藤松宇先生は『俳文俳句集』の時と同じく、我事のやうにいろ〱御配慮下されまして、松宇文庫を開放、各種資料の自由閲覽を許されました事を特記して、感謝の誠意を表します。尚角田竹涼氏・頴原退藏氏・服部畊石氏勝峰晋風氏・倉重禾刀氏より藏書を貸與されました事、小出春松氏が年譜作成をお手傳ひ下された事、及び與文社の方が編纂上の用件で遠路たび〱おこし下された事等、多數の諸氏の御後援の下に此編纂を完了いたしました事は、私の牢記して忘れざる所であります。かくして出來上つたものが、果して諸氏の御期待に副ひ得るや否や、不安に禁へないのであります。

昭和四年立春の日池上庵南軒に於て

勢川佗庵

本篇

俳句集

俳句集解說

芭蕉の歿後其俳句集として第一番に出ましたのは元祿十一年上梓されました風國の『泊船集』であります。風國は京の醫師で去來の甥と申す事であります。之に繼いで出ましたものが華雀の『芭蕉句選』であります。『泊船集』の誤を正し不備を補ふといふ事であります。のち安永には蝶夢が伊賀の土芳の筆記に基きまして『芭蕉翁發句集』を出し、文政には何丸が『芭蕉翁句解參考』を出し、弘化には松什が『芭蕉翁發句類題集』を出しました。尙天保頃編者不明の『芭蕉翁句鑑』と申す寫本がありまして、何れも多數の俳句を纂輯いたしてをるのであります。近年出ました勝峰晋風氏の『芭蕉俳句定本』は博引旁搜、一々其出自を明かにし、且つ句々の年代鑑別を試みてをられます。此事は芭蕉の心の進み方を見る上に於て最も必要なものでありますから蝶夢以來しばしば試みられた所のものであります。石河積翠の如きは努力の結果『芭蕉句選年考』の稿本を殘しましたので、先年大野洒竹沼波瓊音二氏は數種の稿本を比較校訂の上、活字に附して通讀に便ならしめました。近年芭蕉研究が盛んになりましたので、活字の俳句

集が數種出たやうでありますが、私はまだ寓目の機會を得ません。此編纂に就てはただ沼波氏の『芭蕉全集』と、勝峰氏の『定本』及び『芭蕉一代集』を參照いたしたのであります。勝峰氏のものにしましても『定本』より『一代集』が進んでをるやうであります。共普及版では更に又加除訂正を行つたさうでありますが、手許にないので參照いたしませんでした。

他人の句が芭蕉のものと誤認されましたのは、『炭俵』及び『續猿蓑』にあります「ム羽」のものが「翁」と見誤られましたのをはじめとして、『泊船集』以來多々あるのであります。纂輯者が内容豐富を喜ぶための錯誤でありまして、特に宗房時代のものに多いのであります。此宗房違ひは沼波氏の調査に引續きまして、勝峰氏萩原蘿月氏並に頴原退藏氏あたりの精査がありまして、今日では大分篩ひ分けが出來たのでありますが、何分古俳書亡佚で、まだ不審のものが多少殘つてをるのであります。これらは名前の見違ひでありますが、原本の精讀を缺いた纂輯者の過失に屬するものも多々あります。共著しい一例を『泊船集』から擧げてみませう。同書卷之五（下卷十三丁の裏）にあります、

此忘れながるゝ年の淀ならん

と申す句は芭蕉のものではありません。

『葛の松原』に

此わすれながるゝ年の淀ならむ

名月や池をめぐりて夜もすがら

必とする事なきは素堂亭の年わすれにして、固とせさるは芭蕉庵の月見なるべし。

とありますのを、評語をよく見ずに、二句共芭蕉のものと速断いたしたのでありませう。評語を一讀しますれば此句の素堂たる事は直にわかるのであります。既に大魯の『俳諧五子稿』には明かに素堂の句としてあるのであります。風國の此誤りをだん〳〵傳へて參りまして、今日までも誰も心付かなかつたのであります。私も今度の編纂に當りましてはじめて發見いたした次第であります。纂輯者が資料選擇を第二にして、徒らに搔込主義を發揮いたす傾向を愼みたいとおもふのであります。

私は此機會に於て松岡大蟻の『俳諧翁反古』に就て、申述べて置きたいのであります。まづ大蟻の詞を聞きませう。

はせを翁文反古之事傳

濃州陽花庵（初代翁の庵室也）梅石は翁の随弟にして、殊にしたしかりきと也。としごろ翁の送れるふみどもをあつめてその庵室の天井にはり置けり。此梅石は翁にも先達て世を早ふせり。しかるを我師御香子大魚（因州産大阪住）翁の末弟にして、已に終焉の枕につかへり。大魚（時に元禄七戌年二十五歳也。年九十歳にて寛政九卯年卒す。）行翁めつ後にこの陽花庵に行て、本尊正観音一躰並みの笠と天井の裏に張りし反古を巻き、これをいたゞきて浪華にかへり、蓑笠は同門惟然にゆづる。此みの笠は今播州増位山風羅堂の蓑塚にあり。本尊と反古を大魚愛て珍とせり。稍老するにいたりて、この二ッ物を我に与ふ。凡反古三百餘枚、藏する事久し。予老よふにかゝるめでたき文反古の茅屋に朽しなんことゝをそれて、今年これを當君にゆづり、本尊は駒込蓮光寺におさめて、猶も大魚の心ざしをつぐと云爾。

芭蕉翁三世門人　大蟻

實に立派な傳來でありまして、御香と申す名も其角の「芭蕉翁終焉記」實香[illegible]の句の所に見えてをりますから、まんざら根據の無い事でも無ささうでありますが、風羅堂蓑笠の事は他の記録と一致いたしてをりません上に、芭蕉終焉の翌年四月に於て、岐阜大

北陸根方面を歴訪して芭蕉の遺事遺句を記錄しました支考の『笈日記』に[illegible]とも梅石とも見えないのが第一の不審であります。又收錄の書簡や俳句によりて考へをすれば、芭蕉は約一ケ年にわたりまして、[illegible]附近に在つて、梅石と[illegible]したのでありますが、只今までにわかつて[illegible]では之を肯定し得ないのであります。尚又其收錄の書簡二百二十餘(皆は上書きの短文で[illegible])俳句[illegible]でないものが十五、同時と認むべきものが三あります)は、「しのぶ摺」の一文を除きましては、全く他で見受けないものばかりであります。その「しのぶ摺」の一文も『奥の細道』『卯辰集』『小文庫』等所載のものとは相違いたしてをりまして、たゞ『花の雲』所載のものに少し似てをるのであります。改竄の一つと見れば見らるゝのであります。其餘句五十餘にいたしましても到底芭蕉のものとはおもはれないのであります。其例を示しませう。

人なきを恨みがほなる野梅かな

暮かぬる日の床しさよ山さくら

始めと終りの一句づゝであります。[illegible]の季節の一致と[illegible]のぬけたものであります。

『一葉集』の編者湖中は此書を知らなかつたのでありますか、又は知つて採用いたさなかつたのでありますか、とにかく『一葉集』には此書の俳句も書簡も編入いたしてありません。何丸は例の播込主義で其『句解參考』に此『翁反古』の句を取入れてをるのであります。此一事のみを以て湖中と何丸とを軒輊いたすわけではありませんが、私は湖中に與するものであります。

芭蕉の俳句の正確なものは先づ約一千句でありませう。寫本の『句鑑』何丸の『句解參考』松什の『類題集』は何れも一千二百餘句を收めてをりますが、申すまでもなく『翁反古』のものなどを播込んでをるのであります。湖中のものは一千一百ほどであります。故沼波氏の增訂『芭蕉全集』は矢張り一千一百餘句であります。勝峰氏の『俳句類聚』は一千二十三句を正確のものとして採錄し、尙「不審抄」共一に於て三百七十餘句を擧げてをるのであります。從來のものに比すれば二百句近く多いのであります。

私は出來るだけ正確を期する意味に置きまして、單行本としては『芭蕉句選』及び『芭蕉句選拾遺』の二書を採り、他は諸書より蒐集して補遺を編しました。其句數は『句選』から六百四十九句、『拾遺』から百二十一句、諸書から三百六十七句、合計一千、一百三十七

句に達したのであります。此一千一百三十七句が全部悉く正確に芭蕉のものであるとは素より斷言は出來ないのであります。又此外に芭蕉のものは無いと申すのではありません。只今の私としては此程度にとゞめて置きたいとおもふのであります。

と申しますのは、補遺の資料として選擇いたしたものゝうちに『もとの水』と申すものがあります。重厚が編したもので、成美が校訂の上板下を書いてをるものでありますから、相當信頼を置いてよろしいわけでありますが、其採錄されました九十五句のうち、他書に見ゆるものは僅々五七句に過ぎません。其大部分の出自が不明でありますのは、甚だ物足らない事であります。又同じ重厚の『あさかり』にあります名所八体の如きも、果して芭蕉の作なりや否や、斷定を差控へねばならないのであります。湖中の『一葉集』に就きましては先きにも申述べたのでありますが、其發句の部に於ける寛文延寶天和年中のもの、及び考證の部のものゝ中には、他書所載の明證を見るまでは、疑問符を附けて置かねばならないものがあるのであります。

更に又切捨斷行から生ずる脱漏の虞に就て一言させていたゞきませう。前にも申しました事ですが、『句解參考』『類題集』『句鑑』などは、內容の其質よりも其量に重きを置

く、即ち撮込主義でありましたから、此三書のもので沼波氏が其『全集』に收めましたものも私は切捨てたのであります。少し冒險の嫌ひ無きにあらずでありますが、不正確なものを編入するに忍びないからであります。

それから私が取るのも不安、捨てるのも不安、大に迷ひました末遂に捨てる事にいたしましたのは、所謂眞蹟と稱する所のものであります。（鑑定の事は自ら別問題でありますし）故沼波氏のものには三句、勝峰氏のものには七句あります。採錄者の鑑定眼を云々するわけではありませんが、敢て除外いたしたのであります。それにつけておもひ出しますのは、『平安二十歌仙』序文にあります

蔦や雀よけ行く枝うつり

の一句であります。此句は「一紙雨筆の書」と稱しまして、去來の書簡のはしに芭蕉が返信を記しましたもので、其文中に「此中蕉牛集にはるの句をのぞまれいて即席」として此句があるのであります。そして此書簡の末に「蕉翁去來一紙雨筆の書は、向莱より菊脣に傳來す。脣又長松下隨古に讓る。脣は古が叔父なり。向莱は去來が通家也。」と蕪村が其由來を記してをるものでありまして、これによりますれば、此句は疑ひもな

く芭蕉のものであります。然るに元祿七年上梓の素牛（惟然）の『藤の實』には明かに此句の下に「素牛」の名が見ゆるのであります。依て私は此鶯の句を除外いたしたのでありますが、それは撰集に名を入れてやりたいといふ意味で行はれる事であります。此『藤の實』の場合には當嵌まらないものであります。（芭蕉の句を素牛に與へたとも考へられるのであります。）

かういふ次第で、取るのも不安、捨てるのも不安、岐路に迷ふこと多々でありましたが、取捨選擇の末六十四種のものから、一句乃至九十句合計三百六十七句を採錄して補遺を編次いたしたのであります。が、定めし錯誤が多い事でありませう。謹で大方の是正を仰ぐ次第であります。

左に採擇單行本の紹介をいたしませう。

▽芭　蕉　句　選　　　半紙本　　二　冊

揮筆庵華雀が元文四年に上梓いたしたもので、風國の『泊船集』の誤を正し遺を補ふの意でありますが、風國の誤を其まゝ傳へてをる點もあります。總句數六百七十一句

のうち、他人のもの丶混入が十七句、訂正再記が四句、附句の混入が一句ありまして、正味は六百四十九句であります。初板を出して間もなく、俳句の誤字を訂し、頭註を改めまして再校本を出してをります。私は最初家藏本で校訂に從ひました所、誤字が頗る多い事に心付きまして、松宇文庫本を借り寄せたのであります。之を對照いたしてはじめて再校本のある事を知り、松宇文庫本を以て更に校訂を加へたのであります。題簽も序文も又奥附も違つてをりません、たゞ内容が改善され、追加の句が増してをるのでありますから、双方を比べなければ初板も再校も一寸わからないのであります。編者華雀の傳記は殘念ながらよくわかりません。たゞ江戸の人と申すだけわかつてをるのであります。

私が鳳國の『泊船集』や蝶夢の『芭蕉翁發句集』を捨てゝ、華雀の此書を取りましたのは、先きにも記しました積翠の『句選年考』が、一般研究者によく讀まれてをる事實に適合せしめるためであります。

▽芭蕉句選拾遺　半紙本　一冊

俳書專門の書林と申してもよろしい京の井筒屋の四代目の主人は、麥鄕觀寬治と號しまして、俳諧を方竟千梅に學んだのであります。伊賀上野の窪田何某から得ましたた資料により、華雀の『句選』に洩れましたものをまとめて一書を編し、之に芭蕉の俳文二章其他のものを附載して、寶暦六年に上梓いたしたのが此書であります。句數百二十七句のうち他人のものゝ混入が六句ありますから、正味は百二十一句であります。文章は俳文集に編入いたしました。竹冷文庫本によつて校訂を了しました。

惟然

丈草

芭蕉句選 上

世に誹諧といふものあり。其さま唐うたのめんだうもなく、大和歌のむづかしみもあらず、其理屈家〻にありて、その句評區〻なり。間高上の論あれども、こと葉俗を用ひて能く聾に通じ能く聴を笑はせり。されとて高位博識も自在な

らず、賤家短才も曲節を盡せり。是を以て是を思ふに、吾輩の愚なるには、彼おほく草木鳥獸の名を識といへる類ならん。こゝに貞享元祿の頃の誹風をしたふて、其文を味ひ其句を試るに、桃青は實に西上人の魂をうつし、杜部郎の腸をさ

ぐり、五七五の簡古に千萬のおもひをのぶ。宜哉。句は此叟にありと。かの風國が白地に泊船集をゑらみ、その足ざるを支考が笈日記に補ふ。予はそれらを見てしるし、其餘りを聞て記し、都合六百三十余句なりけり。その拾ふともつき

ぬことの葉のいつまで草の命毛も、おぼつかなき筆に四季をわかち、附るに雑の句聯錄して、ひそかに芭蕉句選と題す。朝な夕な是を閲するに、或は旅泊の情をおもひ、或は哀別の意をはかる。不斷に雪月華を翫びて、六時に四季のう

つりゆくを觀ず。彼乾坤無住の笠も同行二人とあれば、ひとりたのしむべきにあらず。やがて梓にうつし、部ど(ママ)に白紙をそへて、同志の友に追加をねがふ。もし風國が例にならいて、いまも五老井が譏りあらば、述而不作信而古しへを好と

いはん。

惟時元文三戊午のとし逢生のよもぎの窓にその逢ふける日擲筆庵主人自序す。

印　印

惟旹元文三戊午のとし蓬生の
よもきの窓にそのよふける
日擲筆菴主人自序す

凡例（再校本に附せり）

一四季の題は大概玉海集の次第に擬ひ、其季の雜は其季の末に載す。

一連歌に用ひざる題は、愚意にまかせて其類の所〳〵に記ス。

一月花をむすびたる句も、其句意を量て雜の部に入る。

一此集に引たる書間（簡）寫本もあれば、烏焉馬の誤有らん事を恐る。

一此集衆人の見に觸て後、校合の委しからざるを知。因て再校し、粗その誤を補ふて、猶後人之參考を待。

春之部

蓬萊に聞ばや伊勢のはつ便

年〳〵や猿にきせたる猿の面

元日に田毎の日こそ戀しけれ

誰やらが姿に似たり今朝の春

たれ人かこも着ています花の春

（『其袋』に上中を「薦を着て誰人います」とす。—他石）

とし立や新年ふくべ米五升

（◎原本頭註の符號也。以下倣之。—越人『鵲尾冠』には「似合しや新年ふるき米五升」とあり。猶考ふべし。—『三冊子』には「春立や新年ふるき米五升」とあり。—他石）

窓の名殘おしまむと、舊友の来りて酒興じけるに、元日の晝まで伏て、曙見はづして、

二日にもぬかりはせじな花の春

湖頭の無名庵に春をむかふ時、

三日閉口。題四日。

大津繪の筆のはじめは何佛

蓬萊にけふは賣かつ若菜かな

一とせに一度つまるゝなづな哉

春立てまだ九日の野山かな

春なれや名もなき山の朝霞

大日枝やしを引捨し一かすみ

（◎大日枝や—此句翁の吟なるよしある人に聞ぬ。實否は詳ならずと『泊船集』に書けり。—『六百番誹諧發句合』に中七を「しの字を引て」とす。—他石）

うぐひすや餅に糞する椽の先

うぐひすや柳のうしろ藪のまへ

梅が香にのつと日の出る山路かな

山里は萬歳おそしむめの花

人も見ぬ春やかゞみのうらの梅

春もやゝけしきとゝのふ月と梅

梅白しきのふや鶴を盗まれし

子良館の後に梅ありといへば

御子良子の一もとゆかし梅の花

餞乙州東武行

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁

網代民部の息に逢て

梅の木に猶やどり木やむめの花

こんにやくのさしみもすこし梅の花

旅がらす古巣は梅に成にけり

その女亭

暖簾の奥ものゆかし北の梅

門人何がしみちのくに下るを馬のはなむけして

忘るなよ藪の中なる梅の花

（『菜集』に上五を「又も訪へ」とす。—他石）

防川亭

香をさぐる梅に家見る軒端かな

（『◎笈の小文』には「藪みる」とあり。—此句は探梅の吟にして各季也。—他石）

子供らよ梅折のこせ牛の策

（『菜集』に上五「里の子よ」とす。—他石）

香に匂へ雲丹ほる岡の梅の花

（「うに」は介類にあらざれば「雲丹」の字不可也。—他石）

何がし新八みまかりける一周忌に父梅丸許へ一歳夢のごとくにして猶佛立さらぬ歎のほどおもひやる計に

梅が香にむかしの一字あはれなり

紅梅や見ぬ戀作る玉すだれ

凍とけて筆に汲干す清水かな
（◎『熱田三歌仙』に上五を「露凍て」とし、尾陽昌圭がもとにての句也。いづれの集にや凍解てと誤る。と附記せり。―他石）

初午に狐の剃しあたまかな
（是橋の剃髪を祝ひし句也。―他石）

涅槃會や皺手合する珠數の音

伊勢にて

神がきや思ひもかけず涅槃像

不性さやかき起されし春の雨

春雨や蜂の巣つたふ家根の漏

春雨の木下にかゝるしづくかな
（◎『笈の小文』に苔清水と題ありて「木下につたふ清水かな」とあり。）

からかさにおしわけ見たる柳かな

八九間空で雨ふるやなぎ哉
（◎イに「空に」とあり。）

はれものにさはる柳のしなへかな
（◎『小文庫』に「柳のさはる」とあり。―他石）

鶯を魂にねむるか嬌柳

かぞへ來ぬ屋鋪〳〵の梅柳

梅柳さぞ若衆かな女かな

うぐひすの笠おとしたる椿かな

打よりて花入探れむめ椿
（此句は冬季なり。―他石）

陽炎の我肩に有（たつ）紙子かな

かげろふや柴胡の原のうす曇

丈六に陽炎高し石の上

かれ芝やまだかげろふの一二寸

花の雲鐘は上野か淺草か

よし野にて

花ざかり山は日頃の朝ぼらけ

葛城のふもとを過る

猶見たし花に明行神の顔

湖水眺望

辛崎の松は花より朧にて

うへ野の花見にまかり侍りしに、人〳〵幕うちさはぎ、ものゝ音小唄の聲さま〴〵なりける。側の松陰をたのみて、

四ツ五器の揃はぬ花見ごゝろ哉

大和の國草尾村にて

花の陰謠に似たる旅寐かな

伊賀の國花垣の庄は、そのかみ奈良の八重櫻の料に附られけるといひつたへ侍れば、

一里はみな花守の子孫かや

ある人の山家に到りて

樫の木の花に構はぬすがたかな

紙衣のぬるとも折らん雨の花

さぞな都淨るり小うた爰の花
（◎『桃靑三百員』素堂が句也。）

觀音のいらか見やりつ花の雲

花も（を）宿にはじめおはりや廿日ほど

さびしさや花のあたりのあすならふ
（◎イに「日は花にくれて淋しや

あすならふ」ともみへたり。此句意別たるや、後人分別すべし。)

四方より花吹入て湖の海

(座五「鳰の湖」の誤寫ならん。—他石)

鶴下りて七日花みるふもとかな

(『一橋』に「花咲て七日鶴見る麓かな」とあり。—他石)

東行餞別

此こゝろ推せよ花に五器一具

散花や鳥もおどろく琴の塵

露沾公にて

西行の庵もあらん花の庭

伊勢神法樂

何の木の花ともしらず匂ひかな

二見の圖を拜み侍りて

うたがふな潮の花も浦の春

櫻を花と(「ばなど」を「花と」と誤りたるならん—他石)ねどころにせぬぞ。花に寐ぬ春の鳥の心よ。

花に寐ぬこれもたぐひか鼠の巣

景清も花見の座には七兵衛

物皆自得

花に遊ぶ虻なくらひそ友すゞめ

蝙蝠も出ようき世の花に鳥

あしだはく僧もみへたり花の雨

(『卯辰紀行』萬菊の句也。作者名を見落せるたらん。—他石)

龍門にて

龍門の花や上戸の土産(に脱カ)せん

酒のみにかたらんかゝる瀧の花

憂テハ方ニ知レ酒ノ聖ヲ　貧メハ始覺レ錢ノ神ヲ

花にうき世我酒白く食黒し

種芋や花のさかりを賣行て

(『己が光』に座五を「賣ありく」とす—。他石)

木の本に汁も鱠もさくらかな

春の夜は櫻に明て仕廻ひけり

顏に似ぬ發句も出よ初ざくら

最中の桃の中よりはつざくら

(前『小文庫』に「咲みだす」と上五もじ見えたり。)

あふぎにて酒くむ影や散櫻

山櫻瓦ふくもの先ふたつ

櫻狩きどくや日々に五里六里

よしのにて櫻見せうぞ檜木笠

故主蟬吟公の庭前にて

さまざまの事おもひ出す櫻哉

山家

鸛の巣にあらしの外の櫻かな

(〇『鵲尾冠』には「鶴の巣」と見えたり。)

水口にて廿年を經て故人に逢

命ふたつ(の)中に活たるさくらかな

加州白山奉納

うらやましうき世の北の山ざくら

なら七重七堂伽藍八重ざくら

おとろいや齒に喰當し海苔の砂

神の枕に寐あきて、まだほのぐらき中に、濱のかたに出て、

明ぼのやしら魚白き事一寸

鮎の子の白魚おくるわかれかな

親子讃

しら魚や黑き目を明法の網

伏見西岸寺任口上人に逢て

我衣にふしみの桃の雫せよ

(◎イに我來ぬと伏見の—)

草庵に桃櫻あり。門人に其角嵐雪あり。

兩の手に桃と櫻や草の餅

内裏雛人形天皇の御宇かとよ

(『江戸廣小路』に座五を「御字とかや」とす。—他石)

松島の月見(「月まづ」ならん)心にかゝりて、住る方は人に讓り、杉風が別墅に移る。

草の戸も住替る代ぞ雛の家

青柳の泥にしだるゝ汐干かな

永き日を囀りたらぬ雲雀哉

(『續虚栗』に「日も」とあり。—他石)

原中や物にもつかず啼雲雀

雲雀より上にやすらふ峠かな

(◎『笈の小文』に「臍峠」と題有て「空にやすらふ」とあり。)

ひばり鳴中の拍子や雉子の聲

さかづきに泥な落しぞむら燕

高野にて

父母のしきりに戀し雉子の聲

蛇くふと聞ばおそろし雉子のこゑ

雀子と聲鳴かはす鼠の巢

蝶の飛ばかり野中の日影かな

起よ〳〵我が友にせんぬる小蝶

古池やかはづ飛込水の音

這出よかいやが下のひきの聲

(『奥の細道』に夏の句とす。—他石)

二股に別れ初けり鹿の角

舊友に奈良にて別る

鹿の角先一ふしの別れかな

(此句『笈の小文』にあり。「二股」の句と同案なるべし。—他石)

猫の妻竈の崩よりかよひけり

麥めしにやつるゝ戀や猫の妻

(◎舍羅が『鏽鋩』には「やつるゝ頃か猫の戀」と有。いづれが是なるや。—『猿蓑』に「やつるゝ戀か」とあり。—他石)

猫の戀やむとき閨の朧月

山路來て何やらゆかし菫艸

悼呂丸

當歸よりあはれは塚の菫草

古畑に薺つみ行男ども

(◎『柱暦』『菜集』等上五を「古畑や」とす。—他石」

いろ〳〵の名も紛はし春の草

(◎『ひさご集』に珍碩の句にして翁の端あり。)

木曾の情雪や生ぬく春の草

能みればなづな花咲垣ねかな

菩提山

山寺の悲しさつげよ薢(ところ)ほり

(◎『笈の小文』「此山の」と見えたり。)

菜ばたけに花見顔なる雀かな

しばらくは花の色(上)なる月夜かな

つゝじいけて其陰に干鱈さく女

大和行脚の時

草臥て宿かる頃や藤の花

山吹や宇治の焙爐の匂ふ時

ほろ〳〵と山吹ちるか瀧の音

山吹の露菜の花のかこち顔なるや

望湖水惜春

行春をあふみの人とおしみける

前途三千里のおもひ胸にふさがりて幻のちまたに離別のなみだをそゝぐ

行春や鳥啼魚の目はなみだ

行春に和歌の浦にて追付たり

二月十七日神路山を出るとて

はだかにはまだ衣更着の嵐かな

子に飽くと申人には花もなし

高き屋にのぼりて見ればの御製の有がたきを今も猶

叡慮にて賑ふ民や庭竈

追加　句選彫刻の半、見聞の句を拾ふて、追加の例(列カ)に記す。

老僧

鯛よりは海苔をば老の賣もせで

しら魚に價あるこそ恨なれ

此句『おだまき』に見侍りしが名なければ疑ふてはぶく。今多聞の意に任て記す。

鸛の巣も見らるゝ花の葉越かな

阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍

草履の尻折て歸らん山櫻

(〇『江戸蛇之鮓』に「雨降ければ」と前書あり。—他石)

富士に行椿にかくれ家に出づ

落ざまに水こぼしけり花椿

夏之部

ひとつ脱て後におひぬ衣がへ

日光にて

あらたうと青葉若葉の日の光

青葉して御目の雫拭ばや

(〇『笈の小文』に「若葉して」とあり。)

夏來てもたゞひとつばの一葉哉

(〇『あら野集』に「ひとつ葉のひとつ哉」とあり。)

藪椿門は葎の若葉かな

(〇『笈日記』此句に「二乘軒」と前書を置く。『笈の小文』には「草庵會」として、上五を「いも植て」とす。—他石)

茅舍の畫讃

葎さへ若葉やさしや破れ家

逢龍尙舍

ものゝ名を先とふ荻の若葉哉

(〇『笈の小文』「蘆の若葉かな」とあり。—右三句は草の若葉なれば春季とすべし。—他石)

篠の露袴にかけし茂りかな

雲岸寺の奥にて

木啄も庵はやぶらず夏木立

須磨の浦一見の時

須磨寺に吹(ふか)ぬ笛きく木下闇

(〇『笈の小文』に「須磨寺や」とあり。—他石)

幻住庵にて

先たのむ椎の木もあり夏木立

杜若かたるも旅のひとつかな

山崎宗鑑が舊跡

有がたきすがた拜むかきつばた

こたび桐葉子が許にありて、今やあづまに下らんとするに、

牡丹蘂ふかく分出る蜂の名殘かな

桃隣新宅自畫自讚

寒からぬ露や牡丹の花の蜜

うの花やくらき柳の及ごし

圓覺寺大顚和尙、ことし睦月のはじめ迂化し給ふよし。誠や夢のこゝちせらるゝに、先道より其角が方へ申遣しける。

梅(梅)戀て卯の花拜むなみだ哉

奈良にて

灌佛の日に生れ逢鹿の子かな

日の道や葵かたぶく五月雨

野を橫に馬引むけよ郭公

烏賊賣の聲まぎらはしほとゝぎす

木がくれて茶摘も聞やほとゝぎす

すまの海士の矢先に鳴や杜鵑

京にても京なつかしやほとゝぎす

(◎「泊船集」に「京に居て京なつかし」と有。)

一聲の江に橫たふやほとゝぎす

(◎「篇突」に兩句兩評有考べし。)

ほとゝぎす聲橫たふや水の上

郭公正月は梅の花さかり

(「虛栗」に座五を「花咲り」とあり。——他石)

淸く聞む耳に香炷て時鳥

ほとゝぎすまねくか麥のむら尾花

子規大竹藪をもる月夜

ほとゝぎすきへ行かたや嶋ひとつ

ほとゝぎす啼〳〵飛ぶぞいそがはし

郭公鳴や五尺のあやめ草

不卜一周忌琴風興行

ほとゝぎす啼音や古き硯筥

うき我をさびしがらせよかんこ鳥

どんみりとあふちや雨の花曇

落柿舍

柚の花にむかしを忍ぶ料理の間

(◎イに料理哉)

贈杜國子

海士の顏先見らるゝやけしの花

白げしに羽もぐ蝶のかたみ哉

勢田の螢見

ほたる見や船頭醉て覺束な

愚にくらく茨をつかむ螢かな

草の葉を落るより飛螢かな

己が火を木々の螢や花の宿

我がやどは蚊のちいさきを馳走哉

この境はひわたるほどゝいへるもこゝの事にや

蝸牛角ふりわけよ須磨明石

うき人の旅にもならへ木曾の蠅

(「韻塞」「其詞」には「旅人の心にも似よ椎の花」の句と並記せり。他石)

日既に暮ければ、封人の家を見かけて舍を求む。三日風雨あれ

て、よしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿する枕もと

(◎イに「尿こく」と有。)

竹の子や稚ときの繪のすさび

うぐひすや竹の子藪に老を啼

竹睡(酔カ)日

降らずとも竹植る日は蓑と笠

奥州今のしら川に出る

早苗にも我が色黒き日數かな

(『雪丸げ』に「五月乙女に仕方望まん忍ぶ摺」とあり。――他石)

しのぶ摺の石を尋て

さなへとる手もとや昔しのぶ摺

渺々と尻ならべたる田うへかな

(◎『笈日記』に入集すれども、伊丹の句にして翁の句にあらずと『泊船集』に書けり。後人分明すべし。――伊丹の蟻道の句也。――他石)

清水ながるゝの柳、蘆野の里にありて、田の畔に殘る。

田一枚うへて立さる柳かな

風流のはじめや奥の田うへうた

名護屋にて

世を旅に代かく小田の行戻り

五月雨にかくれぬものや瀬田の橋

さみだれや蚕わづらふ桑の畑

髪生て容顔青し五月雨

さみだれに鳰の浮巣を見に行ん

大井川水出て、嶋田塚本氏のもとにとまりて

五月雨の空吹おとせ大井川

(「空」は「雲」をよしとす。思ふに「雲」の草体を「空」と見損じたるならん。――他石)

仙人掌岸に立、水みなぎつて、船あやうし。

五月雨を集てはやし最上川

經堂は三將の像を殘し、光堂三代の棺をおさめ、三尊の佛を安置す。

さみだれの降のこしてや光堂

洒落堂額破

五月雨や色紙へぎたる壁の跡

(『三冊子集』に「落柿舍」ト題して「色紙まくれし」とあり。――此句は『嵯峨日記』末尾の句也。――他石)

藤中將實方の塚を尋て

笠嶋やいづこ五月雨のぬかり道

(『奥の細道』に上五を「笠島は」とせり。――他石)

箱根の關越えて

目にかゝる時や殊さら五月富士

義經の太刀辨慶が笈をとゞめて什物とす

笈も太刀も五月にかざれ紙幟

松しま鹽がまの所々畫に書て送る。且紺の染緒付たる草鞋二足餞す。さればこそ風流のしれものこゝに至りて其實をあらはす。

菖蒲草足にむすばん草鞋の緒

粽ゆふ片手にはさむ額髪

正成之像。鐵肝石心此人之情

なでしこにかゝる泪や楠の露

國破て山河あり、城春にして草青みたりと、笠うち敷て、時のうつるまでなみだを落し侍り畢。

夏草や兵どもが夢の跡

殺生石

石の香や夏草赤く露暑し

行すゑは誰が肌ふれん紅の花

眉掃を俤にして紅の花

己百亭

やどりせん藜の杖になる日迄

もろき人にたとへむ花も夏野哉

陸奥に下らんとして、下野の國まで旅立ける。那須の羽黒といふ所に桃翠何がし住けるをたづねて、深き野を分入るほど、道もまがふばかり、草ふかければ、

秣負ふ人を枝折の夏野かな

人々川さきまでおくりて、餞別の句をいふ。そのかへし。

麥の穂をちからにつかむ別れかな

(『有磯海』に中七を「便につかむ」とす。—他石)

甲斐の國山家に立よりて

行駒の麥に慰むやどりかな

伊豆の國蛭か小嶋の桑門、去年の秋より行脚しけるに、我名を聞て草の枕の道づれにもと、尾張の國まで跡をしたひ來りければ、

いざともに穂麥くらはん草枕

青ざしや草餅の穂に出つらん

苣はまだ青葉ながらや茄子汁

重行亭

めづらしや山を出羽の初茄子

藤しろみかさといひけん、花は宗祇のむかしに匂ひて、

藤の實は誹諧にせん花の跡

椎の實や花なき蝶の世捨酒

紫陽草や帷子時の薄淺黄

あぢさいや藪を小庭の別座敷

象潟の雨や西施が合歡の花

(『奥の細道』に「象潟や雨に」とあり。—他石)

許六が木曾路におもむく時

旅人のこゝろにも似よ椎の花

(『韻塞』『其詞』の末には「椎の花の心に習へ木曾の蠅」の句と並記せり。—他石)

栗といふ文字は西の木と書て西方淨土に便ありと、行基菩薩の一生杖にも柱にも此木を用給ふとかや。

世の人の見付ぬ花や軒の栗

(『雪丸げ』に「隱家や目たゝぬ花を」とあり。—他石)

露川が等(翟カ)さやまで道送りしてともにかり寐す

水雞鳴くと人のいへばやさや泊り

大津湖仙亭

此宿も(は)水鷄もしらぬ扉かな

やがて死ぬけしきはみへず蟬の聲

撞鐘(つきがね)もひゞくやうなり蟬の聲

(『笈日記』に「稲葉山」と前書あり。—他石)

山形領に立石寺と云山寺あり。佳景寂寞として、心すみ行のみ。

閑(しづか)さや岩にしみ入蟬の聲

盤齋うしろむきの像に讃す

團扇もてあふがん人の背中つき

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

夏の月御油より出て赤坂や

大井川波に塵なし夏の月

（◎『陸奥千どり』に「清瀧や波に塵なし」とあり。―『拾遺』採録の「清瀧や波に散込む青松葉」は再案ならん。―他石）

月はあれど留主のやう也須まの夏

（◎『笈の小文』に「留主のやう也」『泊船集』に「月見てもものたらはずや」とあり。『小文庫』に上五を「月を見ても」とし、『芭蕉翁眞跡集』には「夏はあれど……須磨の月」とす。―他石）

ひら〳〵とあぐる扇や雲の峯

雲の峯いくつ崩れて月の山

湖や暑をおしむ雲の峯

六月や峯に雲おくあらし山

さゝ波や風のかほりの相拍子

丈山の像

風薫るはをりや襟もつくろはず

（『小文庫』に「羽織は」とあり。―他石）

小倉山

松杉をほめてや風の薫る音

瓜の花雫いかなるわすれ草

夕にも朝にもつかず瓜の花

花と實と一度に瓜のさかりかな

はつ眞桑たてにやわらん輪にやせん

柳ごり片荷は涼しはつ眞桑

我に似な二つにわれし眞桑瓜

瓜の皮むいた所が蓮臺野

山陰や身を養ん瓜ばたけ

朝露によごれて涼し瓜の泥

（◎『泊船集』に「瓜の土」とあり。）

子どもらよ晝顔咲ぬ瓜むかん

晝顔にひる寐せうもの床の山

ひるがほに米つき涼む哀なり

夕顔の白く夜の後架に紙燭とりて

ゆふがほや秋はいろ〳〵のふくべ哉

夕貌や酔て顔出す窓の穴

岐阜にて

おもしろうてやがて悲しき鵜舟かな

名にしあへる鵜飼といふものを見侍らんと、幕（暮カ）掛ていざなひ申されしに、人々稲葉の木陰に席をもうけ盃を擧て、

またたぐひ長良の川の鮎鱠

なまぐさし小なぎが上の鮠の腸

松魚うりいかなる人を酔すらん

鎌倉を生て出けんはつ鰹

水無月や鯛はあれども塩鯨

蓮の香に目をかよはすや面の鼻

あつき日を海にいれたり最上川

（◎「涼しさを海へいれたり」とも見へたり。）

湯をむすぶちかひも同じ石清水

岐阜山

城あとや古井の清水先問ん

清瀧の水汲よせてところてん

（◎異に「汲せてや」と有。）

無人の小袖も今や土用干

晋淵明をうらやむ

窓なりに晝寐の臺や簟

野明亭

涼しさを繪にうつしけり嵯峨の竹

すゞしさやほの三日月の羽黒山

涼しさを我宿にしてねまるなり

野水新宅

すゞしさを飛彈のたゝみが指圖かな

閑居を思ひ立ける人の許に行て

涼しさはさし圖に見ゆる住居かな

（此句は『笈日記』にあり。「飛彈のたくみ」の句は『陸奥衛』にあり。共に野水の新宅を賀するにして、書簡集中杉風宛のものに此二句を並べ記せり。—他石）

すゞしさや直に野松の枝の形

此あたり目に見ゆるもの皆涼し

（◎イに「目に見ゆる物は」と有。）

潮ごしや鶴脛ぬれて海すゞし

西行櫻

夕晴やさくらに涼む波の花

わすれずはさよの中山にてすゞめ

川中の根木によころふ涼かな

（『炭俵』に么羽の句とす。よろし。—他石）

唐破風の入日や薄き夕凉

（三句目にある「破風口」の句の初案なるべし。—他石）

川風やうすがき着たる夕すゞみ

飯あふぐ嬶が馳走や夕涼

破風口に日影やよはる夕涼

酒田の湊に下る。淵庵不玉といふ醫師の許を宿とす。

あづみ山吹浦かけて夕涼み

（『奥の細道』に「あづみ山や」とあり。—他石）

木節亭

秋ちかき心のよるや四疊半

行や我よき布着たり蟬衣

（『菜集』に「いでや我よききぬ」とあり。—他石）

夏の夜や崩て明し冷し物

櫻より松の（は）二木を三月越

夏衣いまだ虱をとりつくさす

夏山に足駄を拜むかど出哉

有がたや雪をかほらす南谷

語られぬ湯殿にぬるゝ袂かな

（『奥の細道』に「ぬらす」とあり。此句季語無きも、三山巡拜の句なれば、夏季に編せしならん。—他石）

追加

晋子が母追善

卯の花も母なき宿ぞ冷じき

甲斐山中

山賤のおとがい閉るむぐらかな

さゞれ蟹足はひのぼる清水かな

白芥子や時雨の花の咲つらん

杜宇うらみの瀧のうらおもて

晝見れば首筋赤きほたる哉

夕顏にかんぴやうむいて遊びけり

秋之部

初秋やたゝみながらの蚊屋の夜着

七夕や秋をさだむるはじめの夜

たなばたにかさねばうとし絹合羽
（「泊船集」に此句杉風。外篇『小文庫』參照—他石）

文月や六日も常の夜には似ず
（◎『文月の』とも有）

あら海や佐渡に横ふ天の川

合歡の木の葉ごしもいとへ星の影

高水に星も旅寐や岩の上
（杉風「絹合羽」の句と一聯の作也。—他石）

金澤の北枝といふものかりそめに見送りて、此處までしたひ來る今既に別れに望て

もの書て扇引さくなごりかな

稻妻や闇の方行五位の聲

いなづまにさとらぬ人のたうとさよ

稻づまを手にとる闇の紙燭かな

あの雲は稻妻を待たよりかな

本間主馬が宅に、骸骨どもの笛鼓をかまへて能する所を畫て、舞臺の壁に掛たり。まことに生前のたはぶれなどは此あそびにことならんや。かの髑髏を枕として、終に夢うつゝをわかたざるも、只此生前にしめさるゝもの也。

稻妻やかほの所がすゝきの穗

加賀の國をすぐるとて

熊坂がゆかりやいつの玉まつり
（「卯辰集」に「くま坂ざかと云所にて」と前書ありて、中七を「其名やいつの」とす。—他石）

魂祭けふも燒場のけぶりかな

尼壽貞が身まかりけると聞て

數ならぬ身となおもひぞ玉まつり

甲戌の夏大津に侍しを、このかみのもとより消息せられければ、舊里にかへりて盆會をいとなむとて、

家はみな杖にしら髮の墓參
（「行狀記」幷「むつちどり」には「一家皆杖に白髮や」とあり。—他石）

むかし聞け秩父殿さへ相撲取

曾良は腹を病て、伊勢の國長嶋といふ所にゆかりあれば先立て行に、「行〳〵てたふれ伏とも萩の原」と云置たり。行ものゝかなしみ、殘るものゝうらみ、雙鳧のわかれて雲にまよふがごとし。予もまた、

けふよりは書付消ん笠の露
（「奥の細道」に「今日よりや」とあり。—他石）

畫讃

西行の草鞋もかゝれまつの露

西上人の草の庵のあとは、奥の院より右の方二町ばかり分入、かのとく〳〵の清水はむかしにかはらずと見えて、今もとく〳〵としづく落る。

露とく〳〵こゝろみにうき世すゝがばや

二見の浦にて

硯かとひろふやくぼき石の露
關越る日は雨降て皆雲に隱れたり

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞおもしろき

朝顔に我はめしくふおとこ哉
(『虚栗』に「和角蓼螢句」と前書あり。—他石)

蕣は酒盛しらぬさかりかな

閉關

あさがほや晝は錠おろす門の垣

嵐雪が繪書しに讃望みければ

蕣は下手の書さへあはれなり

二上山當麻寺へ詣て、庭上の松を見るに、凡千とせも經たるならん、大かた非情といへども、佛緣にひかれて、斧斤の罪をまぬがれたるは、幸にしてたつとし。

僧朝顔幾死かへりのりの松
(『甲子吟行』に「幾死かへる」とあり。—他石)

しら露をこぼさぬ萩のうねり哉

萩はらや一夜はやどせ山の犬
(◎「狼も一夜はやどせ萩がもと」とも見えたり。笈日記には蘆がもと」とあり。)

加賀の小松にて

ぬれて行人もおかしや雨の萩

小萩ちれますほの小貝小さかづき

素堂の母、七十餘り七としの秋七月七日ことぶきする。萬葉七種をもて題とす、是につらなるもの七人。此結緣にふれて、各又七叟のよはひにならふ。

七株の萩の手もとやほしの秋
(『韻塞』等「手もと」とすれど、杉風家藏の卷物に「千もと」とある由、『一翁四哲集』に記せり。—他石)

波の間に小貝にまじる萩の塵
(『奧の細道』に「波の間や」とあり。—他石)

一家に遊女も寐たり萩と月

小松といふ所にて

しほらしき名や小松吹萩すゝき

ひよろ〳〵と猶露けしやおみなへし
(◎イによろ〳〵とこけて露けし」とも見えたり。)

玉川の水におぼれそ女郎花
(『杉風句集』に「たま川の水におぼれて女郎花」とあり。—他石)

ばせを野分して盥に雨を聞夜哉
(『武藏曲』に「茅舍感」と前書あり。—他石)

船となり帆となる風のばせをかな
(◎「船となり……此句翁の製なりとある人申されし。實否はしらず」と『泊船集』に有。—蓼太の『芭蕉句解』に「一品が句なり」とあり。—他石)

守榮院

門に入れば蘇鐵に蘭の匂ひかな
(◎『泊船集』に「蘭に蘇鉄の匂ひ哉」とあり。)

てうといへる女、あが名に發句せよと云て、白き絹出しけるに書付侍る。

蘭の香や蝶のつばさに薫(たきもの)す
(◎『笈日記』『美人圖』と題あり。)

草いろ〳〵おの〳〵花の手柄かな

雞頭や雁の來る時猶赤し

霧雨の空を芙蓉の天氣かな

畫讃

枝ぶりの日に〳〵かはる芙蓉かな

越後の國高田何がしにやどりて

藥園のいづれの花を草まくら
(『雪丸げ』に「藥園に」とあり。―他石)

後醍醐帝の御陵を拜む

御廟年經て忍ぶは何をしのぶ草
(『甲子吟行』に「年を經て」とあり。―他石)

鬼灯は實も葉もからも紅葉かな

青くても有べき物を唐がらし

無名庵

草の戸をしれや穗蓼に唐がらし

道のべの木槿は馬に喰れけり

花木槿はだかわらべのかざしかな

金(全)昌寺庭中の柳ちれば

庭掃て出るや寺に散柳

盆過て宵闇くらし虫の聲

床に來て鼾に入やきり〴〵す

白髮ぬく枕の下やきり〴〵す
(『江鮭子』に「枕の下や」とあり。―他石)

太田の神社に詣。實盛が甲錦の切あり。樋口の二郎が使せしと、まのあたり緣起にみへたり。

むざんやな甲の下のきり〴〵す

蓑虫の音を聞に來よ草の庵

海士の家は小海老にまじるいとゞかな

蜻蛉や取付かねし草のうへ

小蝶にもならで秋ふる菜むしかな

老の名のありともしらで四十雀

刈跡や早稻かた〳〵の鴫の聲

桐の木に鶉啼なる塀の内

鷹の目の今や暮ぬと鳴うづら

稻雀茶の木ばたけや逃所

ひいと啼尻聲寒し夜の鹿

棧や先おもひ出馬(駒)むかへ

早稻の香や分入右は有磯海

粟稗にまづしくもなし草の庵

蕎麥はまだ花でもてなす山路哉

堅田にて

病雁の夜寒に落て旅寐かな

名月の花かとばかり綿畠
(『續猿蓑』に「花かと見えて」とあり。―他石)

名月に麓の霧や田のくもり
(◎『篇突』に「霧か」とあり。◎)

名月や門へさし來る汐がしら
(◎イに「さし込」とあり。◎)

名月や池をめぐりてよもすがら

敦賀にて

名月や北國日和さだめなき

名月や座にうつくしき顏もなし
(『夕顏の歌』に「月見する」とあり。―他石)

名月は二つ有ても瀨田の月
(此句は元祿四年閏八月十八日石山に詣でたる時の吟也。―服部畊石氏示敎による。―他石)

夏かけて名月暑きすゞみかな

三井寺の門たゝかばやけふの月

こよひ誰よし野の月も十六里

米くるゝ友をこよひの月の客

雲おり〳〵人を休る月見かな

寺に寐て誠顔なる月見哉

月見せよ玉江の蘆を刈ぬへ(、さカ)き

座頭かと人に見られて月見哉

十六夜はわづかに闇のはじめかな
(◎『泊船集』に「とりわけ闇のはじめ哉」とあり。)

いざよひもまだ更科の郡かな

うち出の濱にて

十六夜や海老煮る程の宵の闇

いざよひのいづれか今朝に殘る菊
(◎『千鳥掛』に中七を「月と見はやせ」とす。素堂亭殘菊の會の吟也。―他石)

安〳〵と出ていざよふ月の雲

木曾の痩もまだ直らぬに後の月

住よしにて

桝買て分別かはる月見かな

三日月や蕣の夕べつぼむらん

三日月の地はおぼろ也蕎麥畑

何事の見たてにも似ず三日の月
(◎『泊船集』に「ありとあるたとへにも似ず三日の月」とあり。「大曾爾の成就院にて」と題あり。)

嵐蘭初七日詣墓

見しやその七日は墓の三日の月

常陸へまかりける船中にて

明ぼのや廿七夜も三日の月
(『菜集』に上五を「明行や」とす。他石)

深川のすゑ五本松といふ所に舟をさして

川上と此川しもや月の友

浅水(あさんづ)のはしを渡る時、俗あさうづといふ。清少納言の橋はと有、一條あさむつのと書る所なり。

あさむつや月見の旅の明はなれ

山寒し心の底や水の月

俤や姨ひとり泣月の友

鎖明て月さし入よ浮御堂

湯尾

月に名をつゝみかねてやいもの神

氣比の明神に夜參す

月清し遊行のもてる砂の上

柴の戸の月やそのまゝあみだ坊

悼遠流の天宥法印

その玉を羽黒にかへせ法の月

我宿は四角な影を窓の月

月さびよ明智の妻のはなしせん

秋もはやはらつく雨に月の形

燧山

義仲の寐覺の山か月かなし

大坂畦止亭月下に見兒

月澄や狐こはがる兒のとも

入月のあとは机の四隅かな
(◎東順身まかりし時、傳書て此句を添られし。)

月代や膝に手をおく雲の宿
(◎『泊船集』に「宵の宿」とあり。「雲」は「宵」の草体を見誤りしならん。―他石)

月のみか雨に相撲もなかりけり

門をひらけば西に山あり、伊吹といふ。花にもよらず、雪にもよらず、只是孤山の懐あり。

其まゝに月もたのまじ伊吹山

見る影やまだ片夏も宵月夜

（一に片夏いぶかし。『泊船集』見合すべし。「かたなり」ともよめ侍る。不審。『鳥の道』に「片なり」とありと云々。他石）

九たび起ても月の七つかな

侘て住(すめ)月侘網笠の窓を家とし

（此句『武藏曲』に「月をわび、身をわび、拙きをわびて、わぶと答へむとすれど、問人もなし。なほわび／＼て、」と前書ありて、「侘テ住め月侘齋がなら茶歌」とあるもの也。風國が他の句と混同して『泊船集』に記したる誤を傳へしなり。華雀は追加の部に訂正しあり。他石）

あの中に蒔繪書たし宿の月

橋桁のしのぶは月の名殘哉

善光寺

月影や四門四宗も唯ひとつ

廿日餘りの月かすかに見えて、山の根ぎはいとくらきに、馬上に鞭をたれて、數里いまだ鷄鳴ならず。杜牧が早行の殘夢、小夜の中山に至りてたちまち驚く。

馬に寐て殘夢月遠し茶の烟

よし野にて

碪うつて我に聞せよや坊が妻

西行の庵に[illegible]過て

そのかみは谷地なりけらし小夜砧

（『續猿蓑』に么翁の句とす。──他石）

はやく咲九日も近し菊の花

（一に「はやく咲」とあり。「はやく／＼」は見損じならん──他石）

くらがり峠にて

菊の香にくらがり登る節句かな

草の戸や日暮てくれし菊の酒

折ふしは酢になる菊のさかな哉

琴筥や古もの店の背戸の菊

稲こきの姥もめでたし菊の花

草庵の雨

起あがる菊ほのかなり水の跡

木因亭

隱家や月と菊とに田三反

闌女亭

しら菊の目に立て見る塵もなし

菊の花咲や石屋の石の間

秋を經て蝶もなめるや菊の露

蝶も來て酢をすふ菊の酢和哉

菊の後大根の外更になし

菊の香や庭に切れたる履(くつ)の底

菊に出て奈良と難波は薄月夜

（『笈日記』に座五を「宵月夜」とす。──他石）

菊の香や奈良はいく代の男ぶり

きくの香やならには古き佛達

見所のあれや野分の後の菊

山中温泉に浴す

山中や菊は手折らぬ湯の匂ひ

痩ながらわりなき菊のつぼみかな

蔦うへて竹四五本のあらしかな

桟や命をからむ蔦かづら

野の宮の鳥井に蔦もなかりけり
（『皮籠摺』に凉菟の句とす。—他石）

初茸やすたりかぞへぬ秋の露
（『猿まはし』には「まだ日數へぬ秋の露」とあり。考べし。—『句選』の誤寫なるべし。—他石）

松茸やしらぬ木の葉のへばり付

如水別墅

籠り居て木の實草の實拾はゞや

榎の實ちるむくの羽音や初嵐

木曾のとち浮世の人の土産かな

山は皆蜜柑の色の黄に成て
（『松風に新酒』五十韻二才五句目の附句也。—他石）

秋風の吹ども青し栗のいが

不破

秋風や藪もはたけも不破の關

悼松倉嵐蘭

秋風に折れて悲しき桑の杖

加賀山中桃夭に名づけて

桃の木の其葉ちらすな秋の風

牛部屋に蚊の聲よはし秋のかぜ
（『はせを塚』に「蚊の聲闇き殘暑かな」とあり。—他石）

富士川の邊を行に、三つ斗なる捨子の哀げに泣あり。袂より喰物なげてとふるに、

猿をきて（く）人捨子に秋の風いかに

金（全）昌寺といふ寺に泊る

終夜秋かぜ聞やうらの山
（『奥の細道』に曾良の句とす。—他石）

あか〳〵と日はつれなくも秋の風

石山の石より白し秋の風

身にしみて大根辛し秋の風

加州一笑墓に詣

塚もうごけ我泣聲は秋の風

西東あはれも同じ秋のかぜ
（『伊勢紀行』跋には「東にしあはれさ」とあり。—他石）

伊勢の守武が云ける、義朝に似たる秋風とは、いづれの所か似たりけん。我もまた

義朝のこゝろに似たり秋の風

貞享甲子秋八月江上の破屋を出るほど風の聲そゞろ寒げなり

野ざらしを心に風のしむ身かな

猪もともにふかるゝ野分かな

吹とばす石は淺間の野分哉

朝寒も誰松島の片ごゝろ
（『桃ねぶり』に「朝よさを誰まつしまぞ」とあり。華雀の誤聞なるべし。—他石）

乳麪の下たきたつる夜寒哉

車庸亭

面白き秋の朝寐や亭主ぶり

秋の夜をうち崩したる咄しかな

むさしのを出し時は、野ざらしを心におもひて、旅立ければ、

死もせぬ旅寐の果よ秋の暮

枯枝にからすのとまりけり秋のくれ
（『東日記』に中七を「からすのと

まりたるや」とす。―他石）

こちらむけ我も淋しきあきの暮

人の短をいふことなかれ。己が長をとくことなかれ。

物いへば唇寒し秋の風

此道や行人なしに秋の暮

人聲や此道かへる秋のくれ

鳴海知足亭

よき家や雀よろこぶ背戸の秋

（「千鳥掛」に「賀新宅」と前書あり、座五を「脊戸の栗」とす。―他石）

くれのさびしき感に堪たり

さびしさや須磨にかちたる浦の秋

（◎イに濱とあり。『泊船集』に「越前いろの濱にて」と前書あり。）

見渡せば詠れば見れば須磨の秋

おくられつ送りつ果は木曾の秋

秋十とせかへつて江戸をさす古郷

此秋は何にとしよる雲に鳥

（◎イに「何でとしよる」とあり。）

大坂芝柏興行

秋ふかき隣は何をする人ぞ

女木澤桐奚興行

秋に添て行ばや末は小松川

長月のはじめ故郷に歸て、母のしら髪おがめよと、浦島が子が玉手筥なんぢが眉もやゝ老たりとしばらく泣て、

手にとらば消ん涙ぞあつき秋の霜

梧うごく秋のおはりや蔦の霜

（「三册子」に「秋風や桐に動て蔦の霜」を此句の再案とす。―他石）

ある草庵にいざなはれて

秋涼し手ごとにむけや瓜茄子

冬瓜やたがいにかはる顔の形

懐老杜

髭風を吹て暮秋歎ずるは誰が子ぞ

大坂淸水茶店四郎左衛門にて

松風の軒をめぐりて秋くれぬ

行秋の猶たのもしや青蜜柑

行秋や身に引まとふ三布ぶとん

菊の露落て拾へばぬかごかな

西行谷のふもとに流あり。女どもの芋あらふを見るに、

芋あらふ女西行ならば歌よまん

粟津の庵にて殘暑の心を

ひや〳〵と壁をふまへて晝寐かな

大和の國に行脚して、葛下の郡竹の内といふ所にいたる。此所は例のチリが舊里なれば、日頃泊りて足を休む。藪より奥に家あり。

綿弓や琵琶になぐさむ竹の奥

外宮に詣侍りけるに、峯の松風身にしむばかり、ふかき心を起して、

晦日月なし千とせの杉を抱く嵐

たうとさに皆おしあひぬ御遷宮

追加

たうきびや軒端の荻(萩)の取ちがへ

秋海棠西瓜の色に咲にけり

侘て住め月侘斎がならちや歌

かゞり火にかじかや浪の下むせび
(『卯辰集』に「山中十景、高瀬漁火」と前書して、上五を「いさり火に」とす。—他石)

松茸やかぶれたほどは松の形

此寺は庭一ぱいのばせをかな

道細し相撲取草の花の露

猿蓑はさるの小袖の(を)きぬたかな

蛤のふた見にわかれ行秋ぞ

かくさぬぞ宿は菜汁にとうがらし

冬之部

はつ時雨猿も小蓑をほしげなり

けふばかり人もとしよれ初しぐれ

旅人と我名よばれんはつ時雨

馬方はしらじ時雨の大井川

山城へ井手の駕かるしぐれ哉

一屋根はしぐるゝ雲か富士の雪
(◎『泊船集』に「一尾根は」とあり。)

時雨るゝや田のあらかぶの黒む程

元祿三(四)年の冬、粟津の草廬より武江に趣くとて、島田の驛塚本か家に至りて、

宿かして名をなのらする時雨哉
(◎イに「宿かりて」とあり。)

草枕犬もしぐるゝか夜の聲

金屏の松のふるびや冬籠
(◎イに「金屏に」ともあり。)

千川亭

折〳〵に伊吹を見てや冬ごもり

贈酒堂

難波津や田にしのふたも冬籠

冬ごもり又よりそはん此はしら

しばらく隠れ居ける人に申遣す

先祝へ梅をこゝろの冬ごもり

三州菅沼亭

京に倦て此木がらしや冬住居

木枯に匂ひや付しかへり花

こがらしに岩吹とがる杉間哉
(三河國鳳来寺にての吟也。—他石)

木がらしや頰はれいたむ人の顔

こがらしの身は竹斎に似たるかな
(◎『冬の日』に「狂句」の二字をそへてあり。)

冬枯の礒に今朝みるとさかかな
(『炭俵』に么羽の句とす。—他石)

留守の間に荒たる神の落葉哉

たゞの權現にて

宮人よ我が名をちらせ落葉川
(◎『笈日記』に「たどの權現」と書けり。—美濃國ならん。—他石)

明照寺にて

百年の氣色を庭の落葉かな

おなじく

たうとがる涙や染て散紅葉

三尺の山も嵐の木の葉かな

葛の葉のおもてみせけりけさの霜

有がたやいたゞひて踏はしの霜
（◎武江の新大橋はじめてかゝりし時の吟なりと聞侍る。）

人の庵をたづねて

さればこそあれたきまゝの霜の宿
（◎『笈日記』に「さればこそ逢たきまゝの霜の宿」と有。「逢杜國」と題す。『泊船集』「霜の庵」とあり。）

病中

薬のむさらでも霜のまくらかな

貧山の釜霜に啼聲寒し

水仙や白き障子のともうつり

其匂ひ桃より白し水仙花

寒菊や粉糠のかゝる臼の端

信濃路を過るに

雪ちるや穂屋の薄の刈殘し

ともかくもならでや雪の枯尾花

桑名本當寺にて

冬牡丹千鳥よ雪のほとゝぎす

しのぶさへかれて餅かふやどりかな

霜後葎を訪て

花みな枯て哀をこぼす草のたね

鞍つぼに小坊主乗るや大根引
（◎「小坊主のせて」と『むつちどり』に有。）

旅に病て夢は枯野を駈廻る

馬ほく／＼我を繪に見るかれ野哉
（『水の友』に座五を「夏野哉」とす。「連句集」參照。―他石）

芹焼やすそ輪の田井のはつ氷
（◎『笈日記』に「裾輪の田井」とあり。）

氷苦く偃鼠が咽をうるをせり
（『虚栗』に「茅舍買水」と前書あり。―他石）

范蠡が趙南の心をいへる山家集の題にならふ

一露もこぼさぬ菊の氷かな

櫓の聲波をうつて腸氷る夜や泪
（『武藏曲』に「深川冬夜感」と前書あり。―他石）

訪杜國紀行

すくみ行や馬上に氷る影ぼうし
（◎『笈の小文』に「冬の日や」と上五もじあり。）

いかめしき音やあられの檜木笠

雜水に琵琶きく軒のあられ哉

初雪や水仙の葉のたはむほど
（◎イに「たはむまで」とあり。）

はつ雪やいつ大佛のはしらだて

初雪や掛かゝりたる橋の上

はつ雪や聖小僧の笈の色

初雪や幸庵に罷在

京迄はまだ半空や雪の雲

箱根越す人もあるらし今朝の雪

二人見し雪はことしも降にけり
（『庭竈』に「降けるか」とあり。―他石）

夜着は重し呉天に雪を見るあらん

寒山自畫讃

庭掃て雪をわするゝははきかな

酒のめばいとゞ寐られぬ夜の雪

いざさらば雪見にころぶ所まで

(◎イに「いざ行ん」と有。)
市人にいで是うらん雪の笠
(◎イに「市人よ此笠賣う雪の笠」とあり。考べし。)

對友人

君火たけ能物見せん雪丸け
(◎『泊船集』に「君火をたけ」とあり。)

日頃にくきからすも雪の朝かな

ためつけて雪見にまかる紙子哉

雪ごとにうつばりたはむ住居かな
(『小文庫』に此句を芭蕉のものとすれど、岱水の句也。―他石)

たはみては雪待竹のけしきかな
(此句中七を「雪もつ竹の」として『杉風句集』にあり。―他石)

馬をさへながむる雪のあした哉

雪の朝ひとり干鮭をかみ得たり
(『東日記』に「富家喰ニ肌肉ニ丈夫喫菜根。予は乏し。」と前書あり。―他石)

雪と雪こよひ師走の名月か
(◎此句尾州にて中あしき人をなだめられしとぞ。)

比良三上雪さしわたせ鷺の橋

鷹ひとつ見付てうれしいらご崎

二月堂に籠て

水鳥(取)や氷の僧の沓のおと
(二月堂水取は二月也。―他石)

海くれて鴨の聲ほのかに白し

闇の夜や巣をまどはして鳴千鳥
(水鳥の巣は夏季なるべし。―他石)

星崎の闇を見よとや鳴ちどり

毳(けごろも)につゝみてぬくし鴨の足

葱白くあらひ立たる寒かな

鳳來寺にて

夜着ひとついのり出したる寒かな
(◎『新出して旅寝哉』と有。)

旅宿

ご(松葉)を燒て手拭あぶる寒かな

越人と吉田の驛にて

寒けれど二人旅寐ぞたのもしき

塩鯛の歯ぐきも寒し魚の店

爐びらきや左官老行鬢の霜

支梁亭

口切に堺の庭ぞなつかしき

貞德翁の姿を讃して

おさな名やしらぬ翁の丸頭巾

大通庵の主道圓士(居士カ)芳名を聞事したしきまゝにまみへん事を契りしに、ついに其日をまたず、初冬一夜の霜と消ぬ。今日は伺ひとめぐりにあたりぬといふを聞て、

其方を見ばや枯木の杖の長
(『小文庫』に「其かたち見ばや」とあり。―他石)

御影講や油のやうな酒五升

ゑびす講酢賣に袴きせにけり

ふり賣の雁あはれなりゑびす講

水鼻にまこと見せけり御取越
(『韻塞』に千那の句とす。―他石)

霜月深川の舊草にかへりて

都出て神も旅寐の日數かな

あら何ともなきのふも過てふぐと汁
(◎イに「きのふは」とあり。)

熱田にて

あそび來ぬ鰒釣かねて七里迄

埋火や壁には客の影ぼうし

うづみ火もきゆやなみだの烹る音

ふるき世をしのびて

霜の後なでしこ咲る火桶かな

住つかぬ旅のこゝろや置火燵

面白し雪にやならん冬の雨

雁さはぐ鳥羽の田面の寒の雨
（『西華集』に「田面や」とあり。——他石）

月花の愚に針たてん寒の入

から鮭も空也の痩も寒の中

長嘯の塚もめぐるか鉢たゝき

納豆きる音しばしまて鉢たゝき

節季ゆを雀のわらふ出立かな

節季ゆの來ては風雅も師走哉
（『勸進牒』に「來れば」とあり。——他石）

煤はきやくれ行宿の高鼾

すゝはきは杉の一木のあらしかな
（『己か光』に中七を「杉の木の間の」とす。——他石）

煤はきは己が棚つる大工かな

旅寐して見しやうき世の煤はらひ

對門人の僧

これや世の煤にそまらぬ古格（盒）子

月白き師走は子路が寐覺かな

かくれけり師走の海の鳰（かいつぶり）

何をこの師走の市に行からす
（『伊駒堂』に「何にこの」とあり。）

——他石）

年の市線香買に出ばやな

有明も三十日に近し餅の音
（◎『行狀記』に上五もじ「月代や」とあり。——『笈日記』に「有明も」とあり。——他石）

乙州が新宅にて

人に家をかはせて我はとし忘

せつかれて年わすれする機嫌哉

此わすれ流るゝ年の淀ならん
（『葛の松原』をよく讀まずして、芭蕉のものと誤りしならん。評言によりて、素堂の句たる事明か也。——他石）

みづから雨の侘笠をはりて

世の中はさらに宗祇のやどりかな
（◎異に「世にふるも」と有。杉風所持の短尺に「□（不明）の中」とあり。——此句季語無きも冬季なるべし。——他石）

小町畫讃

麥はへてよき隱家や畠むら

たうとさや雪降らぬ日も蓑と笠

熱田御造營

とぎ直す鏡も淸し雪の玉（花）

こゝに草鞋をときかしこに杖を、旅寐ながらに年も暮ければ、

年暮ぬ笠着て草鞋はきながら

乞てくらひ、貰うてくらひ、さすがにとしの暮ければ

めでたき人の數にも入らん老の暮

ふるさとや臍の緒に泣としのくれ

盗人に逢ふた夜もありとしの暮

分別の底たゝきけりとしの暮

魚鳥の心はしらずとしのくれ
（「曠野」には「年忘れ」とす。—他石）

蛤のいける甲斐あれとしの暮

月雪とのさばりけらしとしのくれ

山家にとしを越て

誰が婿ぞ歯朶に餅おふ年の暮
（「甲子吟行」に座五を「うしの年」とす。—他石）

追加

わすれ草菜飯に摘ん年の暮

しぐれ行や船の舳縄に取つきて

杜國か不幸をいらご崎に尋て、
鷹の声を折ふし聞て、

夢よりも現の鷹ぞ頼母しき

米かひに雪の袋や投頭巾

雪の中に兎の皮の髭つくれ
（「いつを昔」に「雪の日や」とあり。—他石）

香を探る梅に家見る軒端かな

打よりて花入探れ梅つばき
（此一句初め春の部に編せしも、これと共に探梅の時にして冬季なれば、再校の際、改めて冬の部の追加に入れしならん。—他石）

にょき／＼と帆柱寒き入江かな
（此句は湖春也と云。—他石）

三州ほびといふ所にて

梅椿はや咲つぼむ保美の里

雑之部

酒飲居る人の絵に

月花もなくて酒のむひとりかな

布袋の絵讃

物ほしや袋のうちの月と花

三聖人の図

月花の是やまことのあるじ達

かちならば杖つき坂を落馬哉

あさよさを誰まつしまぞ片心
（此句秋の部に上五を「朝夜さを」として編せしも、再校の際、無題を心付きてこゝに加へしならん。—他石）

元文四己未年

二月下旬

芭蕉翁門人

俳諧書林

京寺町二条上ル町

井筒屋庄兵衛

同　宇兵衛

芭蕉句選拾遺
全

序

詩は漢より魏に三たび變じ、和歌は定家西行に風情改るといへり。俳諧又今古一躰ならず。上古は連歌とひとしく、中ころは野鐵炮にして全躰あたりはづれも辨ざる事になん。爰に芭蕉の

翁出て始て正風の眼を開き、理屈噂の俳諧を打破して風雅を天地にめぐらすと云場を說き、古今獨歩の風騷を盡す。其沒後今に六十餘年、都鄙一統これを慕はずといふものなし。されば後代の龜鑑也とて

翁遷化五とせの後、一世の句を集て洛の門人風國泊船を選、又遙の後元文戊午、武の華雀其洩るゝものを補て芭蕉句選を出す。句數凡六百卅餘員也。されども猶所々に殘れる秀岬多くして、伊州上野住

窪田何某粗これを拾ひて、洛の書林寛治当井筒屋庄兵衛に授く。寛治又道に信厚く志を運びて、年ころ國〳〵に求、嘗（且カ）古記を考探りて記し置けるもの倶に一百廿餘句。是泊船句選の兩集に洩たるものなり。

且古集に載ざる文章を附錄して、今年冬これを其家に版し、題して句選拾遺と號し、以風國華雀が丹志を繼。尤なる哉。其祖重擧 故庄兵衛 往昔貞德翁三ツ物所に定られしより、蕉師又とし每の試筆及選

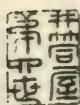
集の補梓を命ぜらる。其先より今に至て二百餘年、往古の貞操を失ずして、これを産とす。彼重勝句に三ッ物や馱荷に附出す國の花、まことに風雅のうへにおゐて大名望の家譜ならんかし。于時寶曆第

五臘雪中。予暫
在京の夜話に此
序を託して許さ
ねば、玄應寡陋
の才を恥ず、古
來耳底にあると
ころ毫を井筒の
懸水に濺ぐ。

耄千梅

白翁謾誌

此書を梓にちりばめし事は、方竟長等の兩主人序跋に委しく記されたれば、奚に筆を執べくもあらねど、至愚短才の予にしてたゞ遠近の便りに艸稿のまゝを模寫しぬれば、句意の自解せざるも多く、又四季の巡配文字手に於葉の違ひも粗あらん事を恐る。もとよりこの編に洩し金玉の光うせずして世にありもやすらん。通信の好士その誤をさとし。其のこれるに補ひあらむを希ふのつゐで、故德の文章八篇を合刻して謹て弘めんとするもの、書林井筒屋四世

麦郷欽寛治

春之部

立春

庭訓の往來誰が文庫より今朝の春
(◎―(原本頭註の符號也。以下倣之。)延寶六、一柳軒不卜編集。―『江戸廣小路』追―他石)

いく霜にこゝろばせをの松かざり
(◎貞三寅歳旦)

發句なりばせを桃青宿の春
(◎貞享年中、素堂キ角三物有)

子の日しに都へ行ん友もがな
(◎貞二)

淺草或人の庵にて

留主に來て梅さへ餘所の垣根哉
(◎貞元)

あこくそのこゝろもしらず梅の花
(◎貞五辰風麥方にて會の時也)

手鼻かむ音さへむめのさかりかな
(◎同年山家と有、當地。當地は伊賀上野也)

月まちやむめかたげ行小山伏
(◎元四此句卓袋にて正月月待の時也、當地)

梅咲てよろこぶ鳥のけしきかな

先しるや宜竹が竹に花の雪
(◎延六)

布子着て夏より暑しもゝの花
(此句『はせを盥』にも見ゆれど、支考の『蓮二吟集』にあれば、支考の句とすべきか。―他石)

もろこしの俳諧とはん飛ぶ小蝶
(◎貞元、莊子ノ畫賛也)

てふの羽の幾度越る塀の屋根
(◎句集ニ古木亭にて卜有)

畠うつをとやあらしの櫻あさ
(◎元三此句木白興行ニ一折有、三月十一日荒木白髭にての事也)

春雨や蓬をのばす艸の道
(◎元二)

はる雨やみの吹かえす川柳

こまかなる雨や二葉の茄子苗
(嵐雪宛書簡に「春雨や二葉にもゆる茄子種」とあり。「書簡集」參照。―他石)

藻にすだく白魚も取ば消へぬべき
(◎貞元ヽ此句『東日記』に「白魚や」とあり。延寶八年か)

袖よごすらん田螺の海士の隙をなみ
(◎同)

山ぶきや笠にさすべき枝の形
(◎元四赤坂の庵にて吟也。初の庵の時不性さやの句同時也)

初ざくら折しもけふはよき日なり
(◎貞五、當地薬師寺月次初會)

旅立日

此ほどを花に禮いふわかれかな
(◎貞五辰颯戸花をやとの句、のどかさにものもおもはぬ朝寐哉万きく此ほどの句一枚也。右當所瓢竹庵にて)

似合しや豆の粉めしに櫻狩
(◎當地)

のみ明て花生にせん二升樽
(◎元四末尾張の人方ヨリ淡酒一樽木曾のうど茶一種得られしをひろむると門人集ての時也。はいかい有)

はなみにとさす舟おそし柳原
(◎元七戌春玄虎子武江ノ旅舍に會の時也。歌仙六句にて終る)

万手別埜(◎大坂や次郎大夫ヿ)

とし〴〵や櫻をこやす花のちり

(◎元四未三月廿三日万乎別埜
さくら見一折有)

橋木亭にて　藤堂修理公ノ事トナン

土手の松花やこぶかき殿つくり
(◎元三、當地)

世にさかる花にも念佛申けり
(◎貞元)

艶なるやつこ花見るや誰歌のさま
(◎同)

煩へば餅こそ喰はねもゝの花
(◎同三)

入口は柳にのぼるよし野かな

すゝぼりてごみ焼家に啼燕

壁土の家する木曾のつばめかな

ひとり尼わら家すげなし白つゞし

獺の祭見てこよ瀬田のおく
(◎膳所へ行人にと有)

鐘つかぬ里は何を歟春のくれ

夏之部

あけぼのやまだ朔日にほとゝぎす
(『芭蕉翁眞蹟拾遺』に中七を「まだ紫に」とせる句あり。—他石)

手のとゞく水際うれしかきつばた
(◎土芳所持書捨ニ)

雨おり〳〵おもふ事なき早苗哉
(◎貞四倚水亭)

しばらくは瀧にこもるや夏の初

あやめ生り軒の鰯のされかうべ
(◎延六)

麥の穂や涙にそめて鳴雲雀
(◎元四。—『嵯峨日記』に「ひと日〳〵麥あからみて啼雲雀」の句を併記し、「ひと日〳〵」の句に墨を引きあり。抹消したるならん。—他石)

小督屋敷にて

うきふしや竹の子と成る人の果
(◎同)

あらし山藪のしげりや風の筋
(◎同)

手を打ば木魂に明る夏の月
(◎同。—『嵯峨日記』に「夏の夜やこだまに明る下駄の音」の句を並記し、「夏の夜」の句に墨を引きあり。抹消したるならん。—他石)

能なしの寐たし我をぎやう〳〵し
(◎同)

酔ふて寐ん撫子咲る石のうへ
(◎同)

みな月はふくやみの暑さかな
(◎同)

世の夏や湖水に浮む浪の上
(◎同)

駿河路や花橘も茶のにほひ
(◎元七中夏東武を立て吟行也)

柴附し馬の戻りや田うへ樽
(◎元七戊蔵田氏ニ遊ての事也。此句『芭蕉翁全傳』によれば猿難宅にての吟なり。猿難は内神屋惣七と通稱し、築山氏也(又窪田氏トモ)。剃髪して意專と號す。—他石)

清瀧や浪にちりこむ青まつば
(◎同年。最初大井川浪にちりなし夏の月といへるをそのめ方白きくの句に紛はしとてなしかへ)

られぬ）

はなあやめ一夜にかれし求馬哉
（◎俗士にさそはれさ月四日吉岡求馬を見るに五日はや死すよつて追善と有）

尾州笠寺奉納

笠寺や窟ももらず五月雨
（◎貞五。―『千鳥掛』に「笠寺奉納」と題して「笠寺やもらぬ窟も春の雨」とあり。―他石）

山のすがた蚕が茶臼の覆ひかな
（原本「蚕」の右傍に「蚕歟」と記せり。『芭蕉翁全傳』は原本の如く「蚕」とあり。『銭龍賦』には「不二の山蚕が茶臼の覆かな」とあり。―他石）

富士の風や扇にのせて江戸みやげ

百里來たるほどは雲井の下涼し
（◎元二、山岸氏半残に歌仙あり）

梢よりあだに落けり蟬のから
（◎延六）

佐夜の中山にて

命なりわづかの笠の下すゞみ
（◎同）

木啄のはしらをたゝく住居かな
（◎藤堂與三郎殿所持短冊。―此句秋なるべし。―他石）

不卜亡母追悼

水むけてあととひたまへ道明寺
（◎同）

松風の落葉歟水のをと涼し

納涼　東武より上りて人〳〵に對面す

東路の毛すね恥かし床すゞみ
（此句『はせを盥』に見ゆれど、『江戸蛇之鮓』に座五を「涼床」として作者を一鐵とす。―他石）

かけて置拂子は智恵の土用ぼし
（◎松舟聞書に有）

瓜つくる君かあれなと夕すゞみ

聲にみなきしまふてや蟬のから

松島は好風扶桑第一の景とかや。古今の人の風情この島より思ひをよせて、こゝろを盡したくみをめぐらすおよそ海のよ□三里□□てさま〳〵の島々奇曲天奇妙を刻みなせるがごとく、おの〳〵松生しげり、うるはしさ花やかさいはんかたなし。

しま〳〵や千〳〵にくだきて夏の海

秋之部

初秋

秋來にけり耳をたづねて枕の風

張ぬきの猫も知るべし今朝の秋

水艸も乘物かさん天の川
（上五『江戸廣小路』に「水學も」とあり。―他石）

あさがほの花に鳴行蚊のよはり

あさがほや是もまた我友ならず

いもの葉や月待里のやけ畠

月はやし梢はあめを持ながら
（◎貞二梨雪所持、遥山家雨後月）

賤の子やいねすりかけて月を見る
（◎元三）

影まちや菊の香のする豆腐ぐし
（◎元六）

明月の出るや五十一箇條
（◎延寶六、武藏守泰時仁愛を先とし政以去欲爲先と有）

木を伐て本口見ばやけふの月

伊勢の國中村といふ所にて

秋かぜやいせの墓はら猶すごし
（◎元二、元峰所持、宇治の中村といふ所を過るに墓所のありければとも有。土芳句集にいせの中村といふ所にてと計有。―『花摘』に上五を「秋の風」とす。―他石）

猪の床にもいるやきりぎりす

風いろやしどろに植し庭の秋（萩）
（◎元七戌、此句藤堂氏玄虎子に逢れし時庭半ばに作りたるを云り。表六句有）

深川やばせをを富士に預け行
（◎貞元道記。―此句は『甲子吟行』にある千里の句也。―他石）

ばせを葉をはしらに懸ん庵の月
（◎別移芭蕉詞有之）

祖父と親その子の庭や柹みかん
（◎元四、堅田柳瀨可休亭にてと有、中七孫のさかへやと有）

里ふかく柹の木もたぬ家もなし
（◎元七、片野氏望翠方ニ八月七日夜會歌仙有。―『全傳』に上五を「里ふりて」とす。―他石）

めにかゝるくもやしばしのわたり鳥
（◎同年）

蝶鳥のしらぬ花あり秋のそら

堅田禪瑞寺にて

朝茶のむ僧しづかなりきくの花

近江路を通見る頃日野山のほとりにて胡摩といふものに上の絹（衣）をとられて

剥れたる身にはきぬたのひゞき哉

刈あとやものにまぎれぬ蕎麥の莖

澁柹や一口はくらふ猿のつら

江鮭ありもやすらん富士の湖

花に來て花野に歸る燕かな
（◎松舟聞書に）

茸狩やあぶなきことに夕時雨
（◎畫賛、元伊賀今湖東辻村僧冠上家珍）

ちかづきに成ツて別るゝかゞし哉
（『惟然坊句集』所載意專宛書簡にある惟然の句也。―他石）

九月盡

秋の暮男は泣かぬものなればこそ
（此句『はせを盥』にも見ゆ。されど『俳諧白根嶽』に上五を「秋は夕べを」とし才麿の句とすと云。―他石」

崑崙は遠く聞、蓬萊方丈は仙の地也。まのあたり士峯地を抜て蒼（蒼）天をさゝえ、日月の爲に雲門をひらくかと、むかふところ皆表にして、美景千變ス。詩人も句をつくさず。才士文人も言をたち、畫工も筆捨てわしる。若藐姑射の山の神人有て其詩を能せんや其繪をよくせん歟。

雲霧の暫時百景をつくしけり
（◎甲州よし田ノ山家に所持ノ人ありしを今東武下谷剱志巖藏なるよし行脚祇法より傳寫して出ス）

冬之部

六出花

雪をまつ上戸のひたひいなびかり
（『茶のさうし』に「上戸の顔や」とす。—他石）

冬庭や月もいとなるむしの吟

きり〲すわすれ音になく火桶哉
（原本「桶」の右傍に「燵イ」とあり。）

人のかたへ初て行て

初しぐれ初の字を我時雨かな

矩外がもとに冬籠して

つくり木の庭をいさめる時雨かな

熱田にて

此海に草鞋を捨ん笠しぐれ
（◎貞元）

いづく時雨笠を手にさげて歸る僧
（◎元二短册に書て桐木にたまふ。當地ノ吟也）

新はらの出そめて早きしぐれかな

人々をしぐれよ宿は寒けれども

一しぐれ礫や降て小石川
（◎戸田權太夫利胤青龍院溪則日節と翁手帳ニ書付有）

一をねはしぐるゝ雲歟雨の雪
（◎貞四。富士の雪の此句いづれに決ス哉否不祥（詳カ）。俳名所の句心得てすべしとあれば此句可也。—「雨の雪」『富士の雪』に關する疑問の頭註なるが、此句『泊船集』『三册子』等皆「ふじの雪」とす。『句選』にも「富士の雪」とあれど、上五の「尾根」を「をね」と誤寫したり。—他石）

摘けんや茶を木枯の秋とも知らで
（◎『東日記』に此句を「[illegible]」の題下に置く。—他石）

あられせよ網代の氷魚煮て出さん
（◎元二。『花摘』に上五を「あられせば」とす。—他石）

瓶破るゝ夜の氷の寐覺かな
（◎同六、梨雪所持。）

菊鶏頭切盡しけり御影講
（◎武江千梅家珍藏書贊）

木がらしや竹にかくれてしづまりぬ
（◎貞二竹畫贊）

生ながらひとつに氷るなまこかな

仙化が父追善

袖のいろよごれて寒しこい鼠

菜根を喫して終日丈夫に（とカ）談話す

武士の大根にがきはなしかな
（◎元六酉玄虎子東武旅館に會の時の事也。此句にて一折龜毛所持。ワキは周竹にて三吟。—『金蘭集』『一葉集』等表六句だけを收錄し「周竹」を「舟竹」に作る。—他石）

白炭や彼浦島が老の箱
（『江戸廣小路』に座五を「老の霜」とす。—他石）

ふく汁や鯛もあるのに無分別

から〱と折ふしすごし竹の霜

薄氷折めの儘の茶巾かな
（◎紀の□。一字不明。此句は『雜談集』下卷にある普船の句也。—他石）

夜着に寢てかりがね寒し旅の宿

屛風には山を畫て冬ごもり
（◎貞元、平仲宅にての事也）

くれ〱て餅を木魂の侘寢哉

（◎同前。—天和二年の『蕨且發句牒』には座五を「わびね哉」とす。蓋し「音」と「寐」との同音異義による作意ならん。—他石）

大津にて智月といふ尼のすみかを尋て、をのが音の少將とかや、老の後此あたりちかくかくれ侍しといふをおもひ出て、

少將の尼のはなしや志賀の雪

洛御靈法印興行

半日は神を友にやとし忘れ

（◎元三）

成りにけり〳〵迄としの暮

雜之部

海に降雨や戀しき浮身宿

（『俳諧故事長』に「北國にて」『芭蕉翁發句集』に「越後新潟にて」と前書あり。—他石）

附錄

一杵折贊　はせを
右大津に眞蹟所持の人有を文意寫譲りて井筒屋に傳

一僧專吟餞別詞　同
右湖東辻村太田氏梅契家珍

一六玉川記　去來

一芭蕉翁遠波忌追善詞　丈艸

一三關の記　路通
右三軸井筒屋傳來の眞蹟也

一菊合序　支考
右支考眞筆大津寧陀所持して其うつし寧陀自書井筒屋に傳

一百韻之評　同
右八僊觀所持支考眞筆也

一奉納歌仙　麥林
右麥林眞蹟[illegible]所持なるを今井筒に譲り傳ふ

（此附錄中芭[illegible]一二篇は『俳文集』に採錄し、他は省略したり。—他石）

山川無□□

故を温て新しきをしるはもつて師たるべしと、まことなるかなや。蕉翁に面授口決の門人はさらにいはず、明暮親炙の弟子といふとも、日々變化の秀吟を感得し金言妙句を甘はずして、豈正風の高味をしりかたから

む。されば在世に其風をしたひ滅後に此道をあふぐともがら、泊船句撰あるは猿みの炭たはらを袖にしまくらにして、居ながら山岩野草の幽玄をおもひ風雲流水の寂ほそみをたのしみ、蕉習しておのづから向上にのぼらんとす。粤に

宜治のぬし撰集に
もれたる句〻文章
いたづらに埋れん
ことを歎き、人し
ら川の關のそなた
もわがしらぬ火の
くま〴〵まで諸好
士に尋もとめ、櫻
木にものして世に
普からむことをね
がふ。まことに此
門の大功何ごとか
是にしかむと、長

等窓のもとに燈を
かゝぐといふ。

栗津

可風書

可風

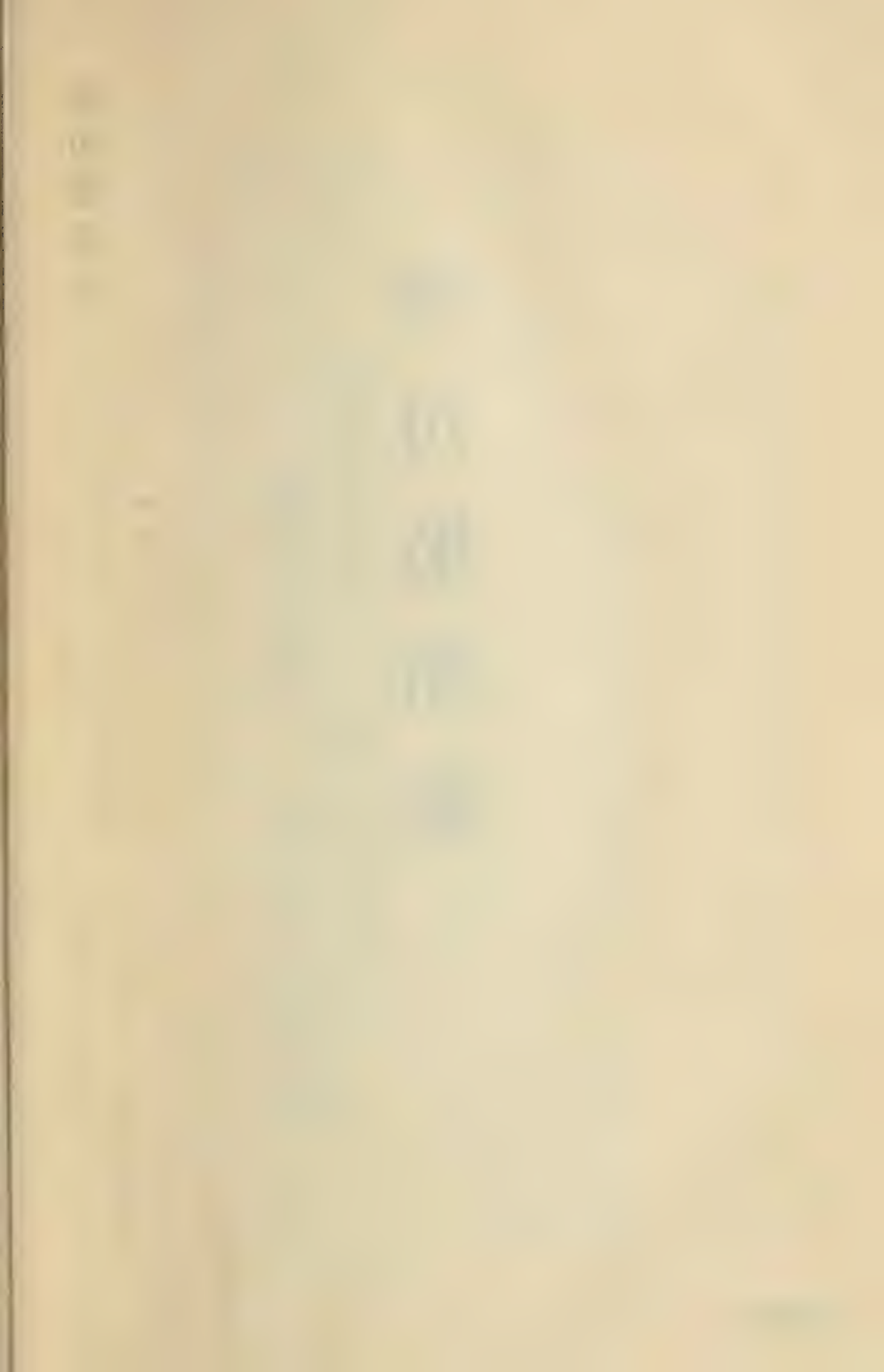
長等窓主人

寶曆六丙子天
立春之日

芭蕉翁并門人

俳諧書林

京二条寺町

井筒屋庄兵衛

俳句集補遺

俳句集補遺

▽梨一著『奥の細道菅菰抄』（安永六年）

いぬとさるの世の中よかれ酉の年

（梨一は伊賀の猿雖の曾孫桐雨の筆記によりて、此句を明暦三年芭蕉十四歳の歳旦とす。然るに勝峰晋風氏は西武の『鷹筑波』に「犬と猿の中立なれや酉の年」といふ一葉子の句を擧げ、荻原蘿月氏は季吟の點ある立圃の誹草に「犬と猿の中もよかれや酉の年」の句ある事を示して、共に此句を疑問視せり。）

▽重頼編『佐夜中山集』（寛文四年）

姥櫻さくや老後の思ひ出

月ぞしるべこなたへ入せ旅の宿

▽湖春編『續山井』（寛文七年）

花の顔に晴うてしてや朧月

盛なる梅にす手引風も哉

あち東風や面々さばき柳髪

餅雪をしら糸となす柳かな

花の本にて發句望れ侍て

花に明ぬなげきや我が歌袋

春風にふき出し笑ふ花も哉

なつちかし其口たばへ花の風

初瀬にて人々花みけるに

うかれける人や初瀬の山櫻

糸櫻こやかへるさの足もつれ

風吹ば尾ぼそうなるや犬櫻

花は賤のめにもみえけり鬼薊

五月雨に御物遠や月の顔

降音や耳もすふ成梅の雨

杜若にたりやにたり水の影

夕顔にみとるゝや身もうかりひよん

岩躑躅染る泪やほとゝぎす

しばしまもまつやほとゝぎす千年

秋風の鑓戸の口やとがりごゑ

七夕のあはぬ心や雨中天

たんたすめ住ば都ぞけふの月

影は天の下てる姫か月のかほ

荻の聲こや秋風の口うつし

寐たる萩や容顔無禮花の顔

月の鏡小春にみるや日正月

時雨をやもどかしがりて松の雪

子にをくれたる人の本にて

しほれふすや世はさかさまの雪の竹

霰まじる帷子雪はこもんかな

霜枯に咲くは辛氣の花野哉

▽正辰編『大和順禮』（寛文十年）

宇知山　山邊郡

うち山や外樣しらずの花盛

見馴河

五月雨も瀬ぶみ尋ぬ見馴河

▽友次編『藪香物』（寛文十一年）

春立とわらはも知やかざり繩

▽宗房編『貝おほひ』（寛文十二年）

きてもみよ甚べが羽織花ごろも

めをと鹿や毛に毛がそろふて毛むつかし

▽安靜編『如意寶珠』（延寶二年）

かつら男すまずなりけり雨の月

波の花と雪もや水にかへり花

▽宗信編『千宜理記』（延寶三年）

（本書は頴原退藏氏示教による。）

年は人にとらせていつも若夷

目の星や花をねがひの糸櫻

命こそ芋種よ又今日の月

文ならぬいろはもかきて火中哉

人毎の口に有也した椛

廿九日立春ナレバ

春やこし年や行けん小晦日

▽露沾判『五十番句合』（同年）

町醫師や屋敷がたより駒迎

針立や肩に槌うつからころも

▽蝶々子編『誹諧當世男』（延寶四年）

天秤や京江戸かけて千代の春

武藏野や一寸ほどな鹿の聲

（頴原退藏氏によれば、『坂東太郎』に此句の作者を西望とすと。）

重陽

盃の下ゆく菊や朽木盆

▽季吟編『續連珠』（同年）

我も神のひさうやあふぐ梅の花

植る事子のごとくせよ兒櫻

雲を根に富士は杉なりの茂かな

たかうなや雫もよゝの篠の露

けふの今宵寢る時もなき月見哉

見るに我もおれる斗ぞ女郎花

▽竹人編『蕉翁全傳』（寶暦十二年）

雲と隔つ友にや雁のいきわかれ

（此句の中七、諸書多くは「友かや雁の」とす。而して之を寛文六年の作とする説と、寛文十二年とする説とあり。同じく伊賀の人の手に成れる竹二坊の『はせを翁正傳集』及び桐雨の筆記等は六年説にして、竹人は十二年説なり。）

桑名氏興行渡邊何某の宅にて

詠るや江戸にはまれな山の月

（竹人は此句を、延寶四年江戸より歸省したる時のものとす。）

▽桃青編『奉納二百韻』（延寶五年）

此梅に牛も初音と鳴つべし

▽風虎編『六百番誹諧發句合』（同年）

門松やおもへば一夜三十年

龍宮もけふの塩路や土用干

またぬのに菜賣に來たか時鳥

あすは粽難波の枯葉夢なれや

五月雨や龍燈あぐる番太郎

近江蚊屋汗やさゞ波夜の床

今宵の月磨出せ人見出雲守

枝もろし緋唐紙やぶる秋の風

行雲や犬の欠尿むらしぐれ

（『江戸廣小路』に中七を「犬の逃ぼえ」とす。）

霜を着て風を敷寐の捨子哉

（『坂東太郎』に中七を「衣かたしく」とす。）

富士の雪廬生が夢をつがせけり

▽寛美編『芭蕉杉風両吟百韻』（天明六年）

色(いろ)付(づく)や豆腐に落て薄紅葉

▽二葉子編『江戸通り町』（延寶六年）

賓や月間口千金の通り町

▽春澄編『武蔵十歌仙』(同年)

塩にしていざことづけん都鳥

▽不卜編『江戸廣小路』(同年)

雨の日や世間の秋を堺町

▽才麿編『坂東太郎』(延寶七年)

今朝の雪根深を薗の枝折哉

盃や山路の菊と是を干す

蒼海の浪酒臭しけふの月

▽不卜編『向之岡』(延寶八年)

於春々大なる哉春と云々

蜘何と音をなにと鳴秋の風

愚按するに冥途もかくや秋の暮

小野炭や手習ふ人の灰せゝり

▽言水編『東日記』(延寶九年)

餅を夢に折結ふしだの草枕

藻にすだく白魚やとらば消ぬべき

盛じや花に坐浮法師ぬめり妻

五月雨に鶴の足みじかくなれり

闇夜きつね下はふ玉眞桑

よるべをいつ一葉に虫の旅ねして

夜ル竊ニ虫は月下の栗を穿ツ

石枯て水しぼめるや冬もなし

△重厚編『麻刈』(寛政五年)

辛崎夜雨

琵琶の海雨よ踈顔が松の律

粟津晴嵐

さぞ野分人の淡たつ市の聲

矢走歸帆

夕霞赤石の浦を帆の表

比良暮雪

さそへ雪白衣の天狗比良の雪

石山秋月

汐やかぬ須磨よ此海秋の月

瀬田夕照

遲き日に乾かぬ網の左袖

堅田落雁

鳥の文かた田の雁よ片便り

三井晩鐘

盃に片われはなし花の鐘

(原本「右　松尾甚七宗房」と署名ありと。)

▽三千風編『松島眺望集』(天和二年)

武蔵野の月の若ばへや松島種

▽其角編『虚栗』(天和三年)

雪の鰒 左勝 水無月の鯉

▽麥水編『新虚栗』(安永五年)

春陰

勢とあり氷消ては瀧津魚

(原本「此句今までの撰にもれたるよし但州より」と脇書あり。)

▽梅丸著『茜堀』(天明二年)

五月の雨巻柏の緑いつ迄ぞ

▽梅人編『續深川』(寛政二年)

(本書は杉風所藏の詠草など編次したるよしなれば、天和より元祿に至るまでの作句を含み居るがごとし。今便宜上玆に置く。)

試筆

元日やおもへばさびし秋の暮

人日

よもに打薺もしどろもどろ哉

上野にて

花に醉り羽織着てかたな指す女

李下芭蕉を送る

ばせを植てまづにくむ荻の二ば哉

石川北鯤生のおとうと山店子、我つれ〳〵なぐさめんとて、芹の食煮させてふかゞはまで持来る。青泥坊庭の芹にやあらむと、其世の佗も今さらに覺ゆ。

我ためか鶴はみのこす芹の飯

桑門宗波行脚せんとてたび立けるを送る。

古巣只あはれなるべき隣かな

文鱗生、出山の御かたちを送りけるを安置して、

南もほとけ草のうてなも涼しかれ

仙風が悼

手向けり芋ははちすに似たるとて

人に米をもらふて

よの中は稻かる頃か草の庵

悲海長老我草の戸にして身まかり侍るを葬りて

何事もまねき果たるすゝき哉

こゝのとせの春秋、市中に住佗て、居を深川のほとりに移す。長安は古来名利の地、空手にして金なきものは行路難し。と云けむ人のかしこく覺へ侍るは、この身のとぼしき故にや。

しばの戸にちやをこの葉かくあらし哉

ふたゝび芭蕉庵を造りいとなみて

あられきくやこの身はもとのふる柏

いさみたつ鷹引居る霰哉

▽曉臺編『熱田三歌仙』（安永四年）

木曾路を經て武の深川へ

思ひ出す木曾や四月の櫻がり

途中時雨

笠もなき我を時雨るゝか何と〳〵

十二月九日一井亭興行

たび寐よし宿は師走の夕月夜

▽知足編『千鳥掛』（正德二年）

知足亭庭前にて

杜若われに發句のおもひあり

さし樽書たる扇に

鳥さしも竿や捨けんほとゝぎす

鳴海眺望

はつ秋や海も青田の一みどり

蓮池や折らで其まゝ玉まつり

▽蝶羅編『合歡のいびき』（明和六年）

（本書は鱗峰吾風氏による。）

伊羅古に行道、越人醉て馬に乗る。

ゆきや砂むまより落て酒の醉

▽梅人編『鹿島紀行』（寛政二年）

神前

この松のみばへせし代や神の秋

田家

かりかけしたづらのつるやさとの秋

▽乙州編『笈の小文』（寶永六年）

初瀬

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅

▽士朗編『幽蘭集』（寛政十一年）
みな拝め二見の七五三を年の暮
▽成蹊編『菜集』（文化九年）
（本書は梅人の句集にして、芭蕉の詠草を附載しあり。）
もの一つ我がよはかろきひさご哉
（俳文集「瓢の銘」参照）
元起和尚より酒をたまはりけるかへしにたてまつりける。
水寒く寝入かねたるかもめかな
▽越人編『みつのかほ』（享保十一年）
木曾路のたびをおもひ立て大津にとゞまる頃、先せたの螢を見に出て、
此ほたる田ごとの月にくらべみん
野水が旅行を送りて
見送りのうしろや寂し秋の風
古法眼出どころあはれ年の暮
▽曾良遺稿『雪まろけ』（元文二年）
室の八島
絲遊に結びつきたる烟かな
入りかゝる日も絲遊の名殘かな

入相の鐘も聞えず春の暮
風流亭
水の奥氷室たづぬる柳かな
盛信亭
風の香も南に近し最上川
秋鴉主人の佳景に對す
山も庭も動き入るゝや夏座敷
田や麥や中にも夏のほとゝぎす
高久角左衞門に宿る。みちのく一見の桑門同行二人、那須のしのはらを尋ねて、なほ殺生石見むとこえける程に、雨降りければ先づ此所に宿りて、
落來るやたかくの宿のほとゝぎす
關守の宿を水雞に問ふものを
（『伊達衣』には座五を「とはふもの」とす。）
五月雨は瀧降り埋む水嵩かな
西濱
小鯛さす柳すゞしや海士が妻
畫贊

鶴啼やその聲に芭蕉やれぬべし
▽言水編『都曲』（元祿三年）
結ぶより早歯にひゞく泉かな
（此句北枝宛書簡に座五を「清水かな」とす。書簡集参照）
鐘消て花の香は撞夕べかな
聲澄みて北斗にひゞく砧かな
▽桐秋等編『木葉集』（寶曆八年）
いざ子どもはしりありかん玉あられ
（此句は梢風尼の句集『木葉集』に附載せる連句の立句にして、「元祿二年霜月朔日於良品亭、誹諧歌仙」と端作あり。連句集参照）
▽林鴻『京羽二重』（元祿四年）
物ずきや匂はぬ草にとまる蝶
（本書俳諧師の住所氏名を列記したる中に「西洞院二條上ル町」として此句あり。）
▽楚常編『卯辰集』（同年）
橘やいつの野中の郭公
▽蝶夢編『芭蕉翁俳諧集』（安永五年）
鼓子花のみじか夜ねぶる晝間哉

▽嘯山編『俳諧古選』（寶暦十三年）

送別

手はなせば夕風やどる早苗哉

（嘯山は「語妙而意婉。正是淸廟朱絃者。」と評せり。）

初月や向ひに家のなき所

（嘯山は「平易」と評し、且「此句湖南有眞蹟。諸集皆不錄。」と附記せり。）

▽春色編『移徙抄』（元祿五年）

吹くたびに蝶の居直る柳かな

（勝峰晋風氏によれば、春色は播州龍野の俗にして、御風山人とも號し、本書は初學者のための編著、作例中に此句あれど、不審とすべきものなりと。）

▽沾德編『誹林一字幽蘭集』（同年）

五月雨や桶の輪切る夜の聲

▽尙白遺稿『忘れ梅』（安永六年）

梅が香やしらゝおちくぼ京太郎

▽舍羅編『荒小田』（元祿十四年）

むめが香に追もどさるゝ寒さかな

初霜や菊冷初る腰の綿

（原本「此句羽紅のもとよりこしわたをつくりてをくられし返事也」と脇書あり。）

▽正秀等編『白馬』（元祿十五年）

別ればや笠手に提て夏羽織

▽桃先編『茶のさうし』（元祿十二年）

海ある所にたばねたる柴を繪書て

五つむつ茶の子にならぶ圍爐裏哉

須磨の浦の年取ものや柴一把

（原本「これは信濃國根羽といふ山里にあるよし、玩竹といふ人のかたられければ、なにとなくなつかしく、卷の上に置ぬ。物語せし人もなべてのたぐひにあらず。里の子もよくしれるなるべし」と脇書あり。）

あさくさ千里がもとにて

苔汁の手ぎは見せけり淺黃椀

まとふとな犬ふみつけて猫の戀

路通がみちのくにおもむくに

くさまくらまことの華見しても來よ

なに喰て小家は秋の柳蔭

土屋四友子を送りて、かまくらまでまかるとて、

霜をふむでちむば引まで送りけり

△序令編『のほり鶴』（寶永元年）

つるの毛のくろき衣や花の雪

（本書朝叟の序文中「むかし專吟房獨歩してみよしのゝおく山上伊勢熊野をかけし時のはなむけ」なる旨を記して此句あり。尙『芭蕉句選拾遺』附載「俳專吟餞別之詞」の末に此句ありて、座五を「花の雲」とす。俳文集參照）

▽雲鈴編『摩詰庵入日記』（元祿十五年）

朝な〳〵手習すゝむきり〴〵す

（本書下卷「示汎鶴詞」の中に此句あり。「古翁の舊跡を頭陀より取出でゝ彼に附屬す」と附記せり。）

▽泥足編『其便』（元祿七年）

皿鉢もほのかに闇の宵涼み

▽正興編『柴橋』（元祿十五年）

百景や杉の木の間のいろみ草

（『一葉集』に中七を「杉の木の間に」とす。尙連句集參照）

▽杏廬編『續寒菊』（安永九年）

梅が香や見ぬ世の人に御意を得る

鶯や茶袋かゝる庵の垣

皀角子の身は其まゝの落葉哉

塔山產業の爲に江府に居る事三月、予はかれが朝寢をおどろかせば、彼は己が宵寢をたゝきて、方寸をくみしり、寢食をともにしたる人に似たり。けふや故鄕へ歸るを見おくらむと、杖を曳てよろぼひ出たるに、秋の名殘もともにをしまれて、

むさし野やさはるものなき君が笠

▽晓鏡編『芭蕉翁眞蹟集』（明和二年）

夜すがらや竹こほらするけさのしも

▽蝶夢編『芭蕉翁發句集』（安永三年）

稻妻や湖の面をひらめかす

東寺を過るに

荻の穗や頭をつかむ羅生門

（『鹿嶋紀行』附錄に上五を「蘆の穗や」とすと。）

みの虫やおのれひとりの冬構

▽十丈編『射水川』（元祿十四年）

名月の夜やおもく\と茶臼山

（『袖草紙』に上中を「重々と名月の夜や」とす。連句集參照）

うとまるゝ身は梶原が厄拂

（『射水川』自序に、洛の法師をすかして、此二句の眞蹟を得たるよしを記せり。）

▽重厚編『もとの水』（天明七年）

季吟勸進卷頭

和歌の跡とふや出雲の八重霞

古鄕の梅や浪花の二年越

しほじりの尻も居らぬ春の駒

猿雖に對して

もろく\の心柳に任すべし

（『水薦刈』に此句を凉莵とす。）

伊勢が賣家にも來たり千代の春

正月も美濃と近江や閏月

半日の雨より長し糸ざくら

歌よみの先達多し山ざくら

捨ものに梨の接穗や山屋鋪

贈杜國

笠の緒に柳絡る旅出かな

（原本「脇御付可被成け」と脇書したり。書簡集參照）

古寺や花の旅出の拾ひばき

相國寺にて

蔦に感ある竹のはやし哉

（右三句を『惟然坊句集』「追加」の部に編入せるは不審也。）

葉にそむく椿や花のよそ心

嵐山

花の山二町のぼれば大悲閣

花の陰硯にかはるまる瓦

春風やきせるくはへて船頭殿

古寺の桃に米ふむ男かな

上醍醐にて

留守といふ小僧なぶらん山櫻

雪間より薄紫の芽獨活かな

題しらず

梅折て椿に迷ふたもとかな

萱つみて貧なる女樵による

遣水や椿ながるゝ竹のおく

暮遲き四谷過けり紙草履

伯白と浪花に下る

たゞ一夜桃に宿かる木幡かな

芳野を下る時

飯貝や雨に泊りて田螺聞

奈良行

はる風や人聲うつる三笠山

又越む佐夜の中山はつがつほ

夏山や杉に夕日の一里鐘

夏山や紙漉里は飯時分

芳野西行庵

硯洗ふ智惠は出たり苔清水

蛤の口しめてゐるあつさかな

しなの〻洗馬(せば)

つゆばれのわたくし雨や雲ちぎれ

畫賛

裾山や虹吐くあとの夕つゝじ

子規なくや黒戸の濱びさし

遠淺や夏の日の出の舟ごゝろ

峰入や一里をくるゝ小山伏

裾山や柴して戻る夏の雨

短夜や驛路の鈴の耳につく

髑骨の畫

夕風や盆挑灯も糊ばなれ

嵐雪が四國にわたる時

旅がらす二百十日も船支度

くすし何某が像

むら雨を脊中におふて柴胡掘

許六が畫に

おち角力いつも上手に米の飯

李由去來の二人に

蒟蒻と柿とうれしき草の庵

名所八体　　松尾宗房

秋や須磨すまや秋知る麥日和

貝寄る風の手じなや若の浦

汗水や吉野どまりの笈山伏

星會(あひ)の中や絶なむ龍田川

松嶋や雪の白地の衣くばり

姨石に啼かはしたる雉子かな

八朔や天の橋立たばね熨斗

（以上名所八体に一句を缺けり。）

なにがしの御代官に隨身して四國へ趣(赴)く人に、

七夕や裸すゞりの戯たび

六介六兵衛の二人にばせをを庵を訪(とは)れて、古郷の安否を聞。

いく千里へだつ思ひや秋の暮

名月や鶴脛高き遠干潟

名月や我と筆架のかげぼうし

橙や伊勢の白子の店さらし

淋しさや釘に懸けるきりぎりす

幻住庵

旅くせや寐冷煩ふあきの山

いたゞいておち穂拾はん闕の前

角髪(みづら)やおくを出羽の相撲取

古將監の古實を語りて

月やその鉢の木の日のした面

みちのくにて

くりからや三度起ても落し水

大風のあしたも赤し唐辛子

名月や我家に戻る門徒坊

ほね柴や斯と見るより蝶の殼

川舟やよい茶よい酒よい月夜

船頭の尻聲寒し秋のくれ

さらでさへ秋よ野寺のひとつ鐘

中秋の頃敦賀に止宿、雨ふりければ。

月いづこ鐘は沈みて海のそこ

幾秋のせまりて罌子にかくれけり

蔦の葉はむかしめきたる紅葉かな

水油なくて寐る夜や窓の月

一疋のはね馬もなし川千鳥

草菴に士あり

木枕の油ぬぐふやよるの雪

綿弓や窓に入日の影寒き

琵琶行の夜や三絃の音あられ

雛の聲にしぐるゝ牛屋かな

畫賛

行年や汝が親の小松うり

あらがねの土よりおこる火桶かな

うか〳〵と年よる人やふる暦

硯このむ奈良の法師が巨燵かな

ひつぢ田に霜の花見る朝かな

乾鮭や何がし殿は毛唐人

とし忘れ三人寄て喧嘩かな

家にふるき奴僕ありて、かたく聖の教を守る。

兄弟のくすし憎むや河豚汁

口上に書おとしけり土大根

(此句は杉風宛書簡のはしに認めしもの也。書簡集参照)

一休が土器買む年の市

冬がれや世は一色に風の音

大雪や婆々ひとり住藪の家

雪の竹笛つくるべう節あらん

ゆく年や薬に見たき梅の花

▽南水等編『熊野からす』(元祿七年)

(本書は勝峰晋風氏による。)

涼しさや竹握り行藪通り

▽井眉編『華鳥文庫』(文政年間)

ふく汁やあほうに成りとならばなれ

(太郎兵衛宛書簡にある句也。書簡集補遺之部参照)

▽廣綾編『芭蕉葉布編』(年次未考)

梅さくやちやうやうふりやう黑木賣

▽編者不明『障子紙』(寶曆五年)

行燕又來る芽はり柳迄

▽湖中等編『俳諧一葉集』(文政十年)

「寛文延寶天和年中」の部より

我年を棚へあげてや若えびす

かぴたんもつくばはせけり君が春

杉風夢想

さゝげたり二月中旬はつ茄子

去年ははやそこへすされよ次郎月

悲しまんや墨子芹燒を見ても猶

竹内一枝軒にて

世に匂へ梅花一枝のみそさゞゐ

(勝峰晋風氏によれば、此句青流の『住吉物語』にありと。)

けふひがん菩提の種を蒔日かな

箸の先に花咲せけり櫻海苔

まつ花や藤十郎がよしの山

初花にいのち七十五年ほど

（勝峰晋風氏によれば、此句『田毎の日』にありと。）

京は九萬九千群集の花見かな

啼やなけ耳のすうなるほとゝぎす

口すべれ油月夜のほとゝぎす

戸の口に宿札なのれ郭公

（何九の『芭蕉翁句解参考』に「戸の口といふ所にて」と前書あり。）

黒焼釜わつて捨けりほとゝぎす

時鳥いまだ俳諧師なき世かな

（勝峰晋風氏によれば『鹿島紀行』附録に中七を「今は俳諧師」とすと。）

さみだれや此笠森をさしも艸

こゝも三河むらさき麦のかきつばた

美しき其ひめゆりや后さね

箔押よとちも身のため夕すゞみ

秋来ぬと妻乞ほしや鹿の皮

月弓や婿の一蘂男七夕

於君時

松なれや霧えいさらえいとひくほどに

後家の秋物のあはれをとゞめたり

雪の旅それらではなし秋のくれ

ひれふりて牝鹿もよるや牡鹿島

（故沼波瓊音先生によれば、此句は陸奥名所のうち男鹿島を詠ぜしものにして、猫山黒森の二句と共に『五十四郡』にありと。尚同先生は「めじか」と假名書きして「鮑鰹」の題を置きたり。）

火吹竹音やしぐれて小豆食

むら時雨てれふれ町の名なるべし

龍安寺にて

山鳥よ我もかもねん宵まどひ

黒森を何といふとも今朝の雪

（此句亦『五十四郡』所載にして、「黒森」を詠ぜしもの也。）

笠の緒や咽喰しむる不二の雪

みちのく名所の内猫山

山は猫眠りはいでや雪のひま

雪の日や羅紗の羽折にたゝき鞘

「貞享元祿年中」の部より

古川にこびて芽をはる柳哉

（此句『芭蕉翁句解参考』に「矢矧堤」と前書し、中七を「鯉も目を張」とす。）

蝶鳥のうはつき立や花の雲

聲よくばうたはんものを櫻ちる

此たねと思ひこなさじ唐がらし

（書簡集『芭蕉翁消息集』所載、嵐雪宛書簡参照）

舟あしもやすむ時あり濱の桃

團角扇に讃を望むに

蛙子は目すり鱠を啼音哉

前髪もまだ若草のにほひかな

枝なくて世にかゝはらぬ蓮かな

書音

辨慶は夏もかみこの羽折哉

（書簡集『芭蕉翁消息集』参照）

悦堂和尚の隠室にまねかれて

香を残す蘭帳蘭のやどり哉

庵にかけんとて句空が書せける

衆好の繪に

秋のいろぬか味噌もなかりけり

しづかさや繪かゝる壁のきり〴〵す

（右二句書簡集『芭蕉翁消息集』所載句空宛のもの參照。尙「秋の色」の句は『俳諧世說』卷之四「句空蕉翁を尊む說」の中にあり。）

柳陰軒にて

散柳あるじも我も鐘を聞

（此句は『俳諧世說』卷之四「句空蕉翁を尊む說」の中にあり。）

名月や兒達ならぶ堂の椽

名月や海にむかへば七小町

（風國の『初蟬』によれば「兒達」が初案、「七小町」が再案、後「明月や座にうつくしき顏もなし」に定まる由。『句選』には上五を「名月や」とし、『夕顏の歌』採錄の連句には「古寺翫月」と前書して上五を『月見する』とせり。尙連句集書簡集語錄集等參照）

さし籠る葎の友や冬菜賣

（此句『雪まろげ』には中七を「葎の友か」とす。尙故沼波瓊音先生によれば『栢莚日記』元文五年七月十三日の條に「老こむる葎の友や冬菜賣」の懸物を、代金二朱にて求めし旨を記しありと。）

李下が妻の悼

かつぎふす蒲團や寒き夜や凄き

かりてねむ案山子の袖や夜半の霜

紙子にも霜や置かと撫て見し

石山の石にたばしる霰かな

與或人文

冬しらぬ宿や籾する音あられ

（俳文集補遺の部參照）

五百丸へ元服の祝として

春や立また春を見む此師走

題花生

此槌のむかし椿か梅の木か

（此句『句選拾遺』附載「杵折贊」にあり。俳文集參照）

「考證」の部より

まち兼て隣の梅を折にゆく

自畫自贊

惠方から曳やこともし牛の玉

坦堂和尙を悼む

地にたふれ根により花のわかれ哉

怒誰が製して贈りける筆の心、

まふくだが袴よそふかつく〴〵し

殊によろしければ、

君や蝶我や莊子が夢ごゝろ

那須の雲岸寺佛頂禪師の小庵を尋て

留守に來て棚さがしする藤の花

笈負僧　虫損

みえばやな出立〳〵のほとゝぎす

長貞亭

海ははれてひえ降の寺五月かな

（梅尺『芭蕉翁發句拾遺』には中七字を「比叡降殘す」とす。）

發心の時

松しまや夏を衣裳の水と月

拙虫損抔は野に臥こともたのしきやなど、あるじの問ければ、

散ばちれ千里一風の鐵線花

さみだれに寒いまゝなり旅すがた

李靑く竹笠破て石あぶなし

（此句原本に「或人云信州にての吟なりと」と脇書あり。」

のりたやと子の聲くらき鵜舟哉

夕がほやかいまはるほど秋は來ぬ

一草庵の席上饗應を制して

しら露のさびしき味をわするゝな
（此句は『俳諧世説』巻之一「芭蕉翁風雅の志を示す説」の末に記しあるもの也。）

瓢の銘

米のなき時は瓢にをみなへし

等栽に尋あひて

名月の見處問ん旅寐せむ

鮭馬の影見む關のわたし舟

秋の野や草の中ゆく風のおと

嵐雪におくる

さびしさを問てくれぬか桐一葉

名月や西にもほしき窓ひとつ

秋のくれ客か亭主か中柱
（此句原本に「此吟は井伊家の邸に許六を尋し時、許六たまく家にあらず。依てかれが歸るを待うちの作なりとぞ。其中柱といふものは、今も猶井伊家にありと云。」と脇書あり。尚『風俗文選犬註解』によれば、許六の住居は麹町喰違御門内の中屋敷にして、其中柱はぬきとりて御國元彦根の御城へうつされたりと云。）

我爲に日はうらゝ也冬の空

深草や是も淺草火鉢かな

餅花やかざしにさせるよめが君

大年の夜ぬすみにあひて

梅干にかよふ黃鳥あはれなり

消息

三十里尾張大根のはなしかな
（書簡集補遺の部參照）

畫賛

たのむぞよ寢酒なき夜の紙衾
（此句勝峰晋風氏によれば嵐雪の『其濱木綿』にあり、前書なしと。）

庵にうつりて

深川や根ごしの芭蕉雪がこひ
（此句梅人の『杉風句集』巻首に採錄せる『杉風秘記抜書』中、元祿十一寅年ばせを庵を外へ引移したる時「春待や根越のばせを雪がこひ」とある句に酷似す。）

頭巾着た貌さしこむや繩すだれ

▽編者不明『近古名流手蹟』

伊勢に居て見るそらいかに初日の出
（『句解參考』に中七を「三國一の」とせる句あり。）

▽大蟲編『芭蕉翁眞蹟拾遺』稿本

人の氣や花に乘行くさくら川
（書簡集石せ三之亟宛書簡參照）

足洗てつい明易き丸寢かな

月の雁羽裏も見せて渡り鳧

雁の聲寢處廣ふ覺けり
（右二句は他の芭蕉の句及其角の句などと一紙に記しあるものにて他に所見なきものゝ如し。）

塵土佐の腰張へげて秋の暮
（書簡集和休宛書簡參照）

木曾路にて落馬の時

馬士に落さるゝ身は木の子かな
（書簡集一水宛書簡參照）

雲岸島に住みける人みたり、更けて我草の戶に入り來るを、案内する人に其名をとへば、おのく七郎兵衞となむ申侍るを、かの獨酌の興によせて、いさゝかたはぶれとなしけり。

盃にみつの名をのむこよひ哉

（補遺　終）

連句集

連句集解説

芭蕉の連句を輯錄しましたものとしては、先づ第一に左のものを擧げねばなりません。

▽芭蕉翁俳諧集　半紙本　三冊

此書は蝶夢の編纂で、安永五年の自序があります。奥附は天明六年になつてをりますが、他の編纂書目を記しましたあとにあるものでありますから、果して此書の奥附か、どうか、斷言はいたしかねるのであります。

蝶夢は少時から佛門に入りまして、京の京極中川なる歸白院に住しました。其十一世で、幻阿彌陀佛と稱したのであります。遊行派の寺でありませう。俳諧は全くの獨學で、お寺に沽徳の『枝葉抄』が一冊ありましたのを熟讀して、俳諧の道を會得したのださうであります。明和の頃寺を法弟に讓り、洛東岡崎に引籠りまして、專ら俳諧に從ひました。草庵の名を泊庵又五升庵と呼びました。五升庵は伊賀の桐雨から、芭蕉の「春

立や新年ふるき米五升」の短冊を得た喜びを記念した名であります。蝶夢は天明復興期に際會しまして、蕪村一派をはじめ、當時の大家達と交遊いたしたのでありますが、創作よりも芭蕉の紹介に力を致したのでありまして、其業績は實に忠實親切を極めたものであります。其芭蕉に關する編纂を擧げますれば左の如くであります。

明和七年『芭蕉堂名録集』
安永三年『芭蕉翁發句集』
同　五年『芭蕉翁俳諧集』
同　　年『芭蕉翁文集』
同　六年『蕉門俳諧語録』
寛政元年『芭蕉門古人眞蹟』
同　五年『芭蕉翁繪詞傳』

外に『消息集』編纂に着手して遂げなかつたのでありますから、これだけを集めますれば立派な『芭蕉全集』が出來るのであります。

尚明和七年には義仲寺地内に在ります芭蕉堂(短冊堂と呼ばれてをりました)が大破

したので、新たに造立しまして、門人三十六人の畫像を、各其子孫又は其門葉の人に書かしめて掲げました。此記錄が『芭蕉堂名錄集』であります。其三十六人の畫像だけ一冊にして梓行しましたものが多く行はれてをります。明和九年には國分山幻住庵の遺址に碑を建てゝ其保存を謀りました。只今でも殘つてをりまして、訪問者をして懷古の情を濃かならしめてをるのであります。天明二年には芭蕉關係者なる伊賀の藤堂家をはじめ、各地諸家から古人の筆蹟を寄附せしめまして芭蕉堂の什物といたしました。九十回忌(翌三年に當ります)供養の意であります。此筆蹟はいつとなく殆んど散逸いたしましたのを、無名庵第十五世の庵主潮川露城氏(昭和三年五月七日歿)が力を盡して、其大部分を買戻したのであります。只今其貼込帖は無名庵の什物となつてをるのであります。之を板に上せまして、『芭蕉門古人眞蹟』と題しました。又百回忌追福としては『芭蕉翁繪詞傳』三卷を完成いたしました。(附錄參照)其上藤右相公(二條治孝?)より「正風宗師」の額を下されまして、四月十日より十二日まで懷舊俳諧を芭蕉堂に於て催したのであります。「おのれ當寺にあゆみをはこぶこと三十餘年」と「芭蕉翁百回忌序」に自ら記してをります。蝶夢はこれだけの業績を殘して、寛政七年の十二月二

十三日に六十四で歿しました。

かくの如く忠實な蝶夢の編纂に係る此『俳諧集』は權威あるものとしてよいのであります が、板下の筆耕が達筆に過ぎて誤記をいたし、又彫師が彫り誤つたと考へられます點も多々あります。加之、延寶時代の百韻數卷は一ト折又は二十句などの斷片を錄してあります。蝶夢の考としては此時代のものは只其標本を示せば足れりとしたのでありませう。併し芭蕉研究には其全部を知らねばなりません。芭蕉の延寶時代のものは、芭蕉が當時の俳壇に頭角をあらはしました出世作でありますから、之を閑却いたしましては芭蕉連句集の意義をなさないのであります。それらのものは即ち、

〇江戸兩吟集(又奉納二百韻)

〇江戸三吟(又桃靑三百韻)

〇誹諧次韵

の三書でありまして、各其當時上梓されましたのでありますが、板本は早く坊間に影を潛めたのであります。前二書は種彥の寫本が東京帝國大學國文學敎室(元酒竹文庫)にありまして、沼波氏が『芭蕉全集』を編纂されますとき參照されたのでありますが、大正

十二年の震災後に於て散逸したやうに仄聞してをります。又後の一書は神戸の和辭文庫に一本を藏するさうでありますが、之を確める機會を得ませんでした。と申す次第で此三書を板本として編入し得られなかつたのは甚だ遺憾でありますが、沼波氏の『全集』收錄のものはよく校訂が届いてをりますから、之によりまして蝶夢のものを增補いたしまして、それ〴〵完備のものといたしたのであります。

かくいたしましても尙全部の三分の一に達しませんから、新たに

▽連句集補遺

を編纂いたしました。外篇に編入いたした諸書に收錄されてをります所の、

虛栗　三卷　冬の日　五卷外表合一

曠野　一卷　其袋　一卷（半歌仙）

瓢　三卷　猿蓑　四卷

深川集　四卷　炭俵　四卷

別座鋪　一卷　笈日記　一卷（半歌仙）外端物

小文庫　二卷　　　　　　韻塞　一卷
續猿蓑　四卷
及び附錄編入の
　蕉翁全傳　端物
等を除きまして、先年來五七種の家藏本をはじめ、松宇文庫本其他の板本を以て校訂しておきました資料により、補遺編纂を行つたのであります。

近來古書採訪が盛んに行はれまして、芭蕉の連句も從來知られてをります以外のものが發見されたのであります。現に倉重禾刀氏の藏架に係る『元祿風韵』の一書は寫本ではありますが、氏の父君松田文志氏は『七部婆心錄』『俳諧海印錄』等の著者たる原田曲齋の門下でありまして、其藏書を手寫したものが澤山あるのであります。かゝる傳來でありますから、寫本としても信頼が置けるものであります。此『元祿風韵』に芭蕉の連句が二卷あつたのであります。其他潁原退藏氏の發見いたしたもの、勝峰晋風氏の見付け出しましたものなど數卷に上つてをります。宜麥は「芭蕉の俳諧三百卷、其半ばは支考の僞作也」と申してをります。此放言は直ちに肯定いたすわけにも參りません

が、此補遺編纂に際しましても、矢張り「量より質」の詞を考へさせられるのであります。

又從來芭蕉のものと認めてをりましたものが、他人のものであつた事を發見いたしたものもあります。『幽蘭集』等に採錄してをります所の、

湖水より光り出しけり比良の雪　　芭蕉

浪にまぶれていさゝとる人　　文草

歌よめと友がこしたる文ときて　　許六

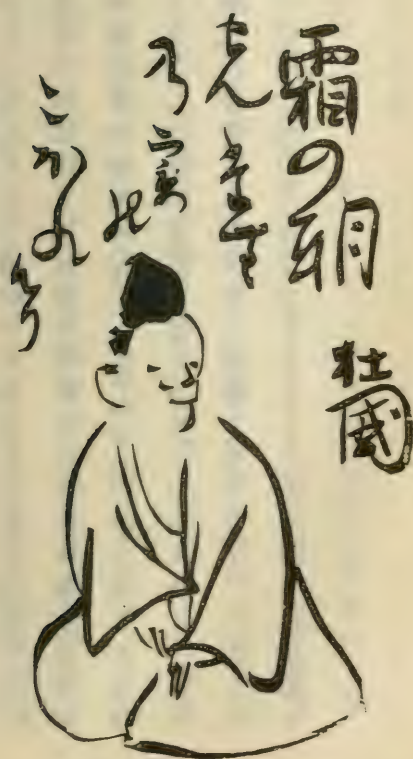
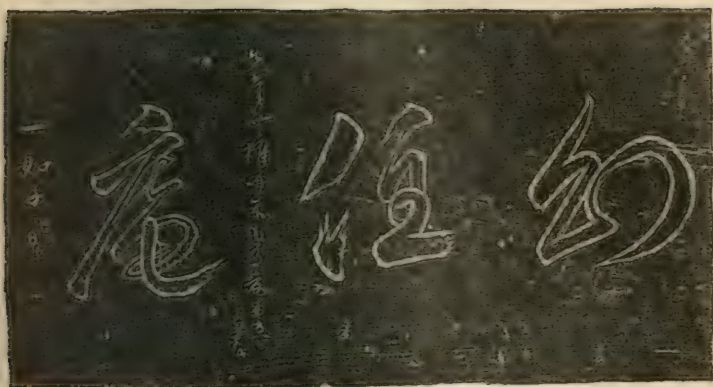
の端物は不審のものでありましたが、最近發見しました元祿十一年井筒屋の歲旦帖によりますれば、此「湖水より」の句は正秀のものであります。かく明かに誤謬がわかりましたものは斷然除外いたしました。が、まだ〳〵不審のものがあります。明證を得るまではとにかく收錄いたしておきませう。（松島獨吟は芭蕉のものでないのは申すまでもありません）

此機會に於て從來の芭蕉連句集に就て、一言申述べて置きたいとおもふのであります。蝶夢のものゝ外に、

曉臺編『幽蘭集』　　寛政十一年上梓

甘井編『金蘭集』　文化三年上梓
奇淵校『芭蕉袖草紙』　文化八年上梓
湖中等編『一葉集』　文政十年上梓
默池輯『俳諧袖珍抄』　嘉永五年上梓

などがあります。後の二つは全集的のものであります。『袖珍抄』は携帯に便なのと、俳句を類題別に、連句を型式別にいたしたなど、相當考慮を費してをるのでありますが、其内容に就ては未だ猝かに首肯いたしかぬるのであります。連句の部に於て、古式百韻「涼しさの」の卷に、普通百韻と同じく表八句の符號を附けました事、及び『江戸三吟』「ものゝ名の」の卷ウ十三句目「花に風あらきちんたをあたゝめて」と申す句の「あらきちんた」を「あまき醍酞」といたした事の二つだけでも、編者默池の用意如何を疑ひたくなるのであります。『一葉集』はさすがに湖中努力の結晶であります。多少の瑕疵は恕してよろしいとおもふのであります。『幽蘭集』は二句三句の端物までも取り入れ、年代鑑別をいたしてをるなど、親切を以て事に當りました點は認められますが、往々誤謬を發見いたしますので、注意すべきものとされてをります。『袖草紙』は年代鑑別と共に一

一其出自を示してをりますのは感心でありますが、果して一卷ごとに其原本と照校いたしたかどうか、疑ひ無き能はずであります。殊に卷々の間に挿入せる俳句にはまゝ混入があります。同時の句を列記する場合、芭蕉以外のものに作者の名を記し忘れたのでありませうが、これが爲めに誤られた人々も相當あつたのであります。『金蘭集』は金澤の萬子の輯錄せるものを、加賀の一菊法師より越中の浣花井廿井に傳來し、廿井が編次して上梓せんとして果さずに歿し、遂に南無庵（京か加賀か不明）のあるじが上梓いたしたと申す由來のものでありまして、比較的信賴が置けるものであります。近年になりましては沼波氏のもの勝峰氏のもの共に價値ある編纂であります。これらのものを參照いたす事を得ましたのは、實に私の仕合せでありまして、全く昭代の惠澤なりとおもふのであります。

杜國

芭蕉翁俳諧集
上

詩俳諧上　一

むかしは連歌誹諧とてさせる差別もなく、發句附句とてさだまれる式もあらで、たゞ句を人のいひかくれば、其句に附たるをのみいふとかや。しかるに中むかし連歌の式目いできて後、その中にざればみたる言葉を、誹諧の連歌と名付けるよりこのかた、詩歌連誹とて此國の四ツの言葉のもて遊びとはなれりける。夫より守武宗鑑貞徳季吟宗因などいふ此道の先達、世にあまたいでゝ此道を教けるにも、なべて連歌の附ものをもてし、いたづらに狂言秀句をむねとせしかば、更に風雅のこゝろありとは見えざりける。爰に右文の御代のためし、この道のおこるべき時いたりてや、ひとり芭蕉翁代々うつり來りし連歌の狂言を捨て、俳諧に古人なし

と看破し、其むかし連歌誹諧とわかれざりし古風の句躰にかへりて、無心躰の狂句を用ず、ひたぶる有心躰の句をなして、はじめて俳諧の道をおこせり。されども延寳天和貞享の頃までは、談林誹諧の異風体の余習盡ざりけるを、元祿のはじめよりやゝ正風躰さだまりけるとぞ。これたとはゞ佛の教の五時あるに似たるべし。三百韻次韻の集は、邪より正にうつるといへども、風躰のまつたからざること、華嚴より阿含の時なるべし。冬日瓢曠野の集は、方等般若の時なり。猿蓑炭俵の集こそ、法華涅槃の時の無上の醍醐味なるべけれ。さればこの道の好士は、蕉翁一代の風躰にも、淺きより深きにいたりて五時の流行あることをよく思ひ入りて、

かならずしも一時の異体になづむべからず。野衲としどろいたく此みちをすいたりければ、この事に思ひをとゞめて、蕉翁一代の附句を見聞の度に寫して、凡百七十餘巻草庵の什物とす。さるにても人にもしらさで、此身なからむ跡に、一つかねの反故とならん事のいと本意なければ、今の世諸集に現在したるをはぶきて、五十餘巻ばかり梓にえりて後學のたよりとす。されば蕉翁在世に、發句は門人にも作者あり　俳諧は老吟骨を得たりと戯申されしとか。其語によりて題号をも他にもとめず、芭蕉翁俳諧集と名づくるものなり。

安永五年秋のはじめ東山神樂岡崎の菴に

蝶夢幻阿彌陀佛書

芭蕉翁俳諧集　上

延宝天和年中

○

（此巻は「江戸三吟」又「桃青三百韻」の一にして、延寶五年の冬賦したる百韻也。本書たゞ一ト折二十二句を擧げしのみなれば、之を増補して完備の一巻となす。）

二字返音

あら何ともなきのふは過てふぐと汁　桃青
（「江戸三吟」上五を『あら何ともなや』とす。）
寒さしまつて足の先まで　信章
（「しまつて」は「しざつて」の誤ならん。）
居合ぬき霰の玉やみだるらん　信徳
拙者名字は風の篠はら　青
相應の御用もあらば池の邊(ほとり)　章
あみ雜喉ばかり折ふしは餉　徳
醤油の後は濁れば月すみて　青
（「濁れば」は「湯水に」の誤ならん。）
更てしば〳〵小便の露　章
ウ　聞耳や餘所かあやしき荻の聲　徳
難波の聲は伊勢の與茂一　青
屋敷がたあなたへさらりこなたへも　章
かはせ小判や袖にこぼるゝ　徳
もの際にことわりしらぬわが涙　青
干鱈一まい是式の戀を　章
（「江戸三吟」上七を「干鱈四五枚」とす。）
寺參り思ひ初たる衆(しゆ)道とて　徳
みじかきこゝろ錐で肩つく　青
糠釘のわづかの事にいひ募り　章
露がつもりて鐘鑄の功德　徳
嘘つきの坊主も秋や悲むらん　青
その一休にみせばやの月　章
花のいろ朱鞘に殘す夕しぐれ　徳
いつ焼つけの岸の山ぶき　青

以下七十八句増補

二オ　芳野川春も流るゝ水茶碗　章
紙袋より粉雪とけゆく　徳
風青く楊枝百本けづるらむ　青
野郎ぞろへの紋のうつり香　章
双六の菩薩も爰に伊達姿　徳
衆生の錢をすくひとらるゝ　青
目の前に島田金谷(かなや)の三瀬(みつせ)川　章
から尻しづむ淵は有けり　徳
小蒲團に大蛇の恨み鱗形　青
かねの食繼(めしつぎ)湯となりし中　章
二三獻跡は淋しく暮過て　徳
月はむかしの親仁友達　青
蓬無筆な侘そきり〳〵す　章

胸算用の薄みだるゝ　徳
二ウ 勝負も半の秋の濱風に　青
われになりたる波の關守　章
あらはれて石魂忽飛千鳥　徳
ふるい地藏の茅原更ゆく　青
瓢うりの人かよひけり跡見へて　章
文正が子を戀路ならなむ　徳
今日より新狂言と書くどき　青
ものにならずにものおもへとや　章
或時は藏の二階に追込で　徳
何ぞと問ば猫の目の露　青
月影や似せの琥珀に曇るらむ　章
隱元衣うつゝか夢か　徳
法の聲卽身卽非花散て　青
餘波の雁も一くだりゆく　章
三オ 上下のこしのしら山薄霞　徳
百萬石の梅匂ふなり　青
むかし棹今の帝の御時に　章
守隨ぎはめの歌の撰集　徳

掛乞も小町が方へといそぎ候　青
これなる朽木の横にねさうな　章
小夜あらしとぼそ落ては堂の月　徳
古入道は失せにけり露　青
海傘やちかいころ迄山の秋　章
さる柴人がことの葉の色　徳
縄帶のその様いやしとかゝれたり　青
これぞ雨夜のかち合羽なる　章
飛乘の馬からうとや時鳥　徳
森の朝影狐ではないか　青
三ウ 二柱彌右衛門と見えて立ちかくれ　章
三笠の山をひつかぶりつゝ　徳
萬代の古着かはうと呼ばうなる　青
質のながれの天の羽衣　章
田子の浦波打ちよせて負博奕　徳
不首尾で歸る海士の釣舟　青
前は海入日を洗ふうしろ疵　章
松が根枕石のわたとる　徳
つゞれとや仙女が夜なべ散艶　青

瓦燈の烟に佛の月　章
我戀を鼠のひきしあしたの秋　徳
泪じみたるつぎゝれの露　青
衣裝繪の姿うごかす花の風　章
匂ひをかくる願主しら藤　徳
ナオ 鈴の音一貫二百春くれて　青
片荷は財布めては香久山　章
雲介がたなびく空に來にけらし　徳
幽靈となつて娑婆の小盗み　青
無緣寺の橋の上より落さるゝ　章
都合その勢萬日まゐり　徳
祖父祖母早うつたてやものどもとて　青
鼓をいだき草鞋しめはく　章
米袋口をむすんで肩にかけ　徳
木賃の夕べ風の三郎　青
韋駄天もしばし休らふ早飛脚　章
出せや出せとせむる川舟　徳
はしり込追手顔なる波の月　青
すは請人か蘆の穗の聲　章

物の賭振舞にする天津雁　徳
木鏇子の尻山の端の雲　青
人形の鍬の下よりゆく嵐　章
畠にかはる芝居淋しき　徳
此翁茶屋をする事七度迄　青
住よし諸白砂ごしの海　章
淡路潟かよひに花の香をとめて　徳
神代このかたお出入の春　執筆

○

（此卷は『江戸三吟』の其二にして、延寶六年の春賦されたるもの也。本書一ト折に二句を缺けり。依て八十句を增補して全卷とす。）

三字中略

さぞな都淨瑠理小うたこゝの春　信章
（『江戸三吟』中七を「淨瑠理小歌は」とす。）
霞とゝもに道化人形　信徳
青い顏笑ふ山より雲見えて　桃青
（「顏」は「つら」、「雲」は「春」の誤ならん。）
土器の瀧の灰は呑ほど　章
（「の灰は」は「のめば」の誤ならん。）
聲かたちあらしに浪の遊び舟　徳
（『江戸三吟』上五を「聲がたつ」とす。）
鴈よ千どりよ阿房友達　青
五間口寂しき月に其名うれ　章
（『江戸三吟』座五を「其名をうる」とす。）
松に澄きる禮金の秋　徳
（『江戸三吟』上七を「松を證據に」とす。）

ウ

手かけ者相取のやうに覺えたり　青
思ひのきづなしめ殺しゝて　章
素麪うりある夕暮の事なるに　徳
（『江戸三吟』上五を「木綿賣」とす。）
門ほと／＼と敲く書出し　青
鎌田殿身体むきを頼まれて　章
二人の若の牢人小性　徳
竹馬にちぎれたれ共この具足　青
續けやつゞけ紙張の母衣　章
ところてん水のさかまく所をば　徳
浪せき入て大釜のわり　青
（「わり」は「淵」の誤ならん。）
天窓から地獄の底へすつぽんと　章
（『江戸三吟』此句を「落瀧津地獄の底へさかさまに」とす。）
鐵杖鯉の骨に碎くか　徳
（以下一之折二句の不足と共に八十句を增補す。）
酒の月後妻うちの御振舞　青
隣の内儀相客の露　章

ニオ

眉をとり袖ふさがする花芒　徳
野風も今は所帶持なり　青
鍋の尻入江の汐に氣をつけて　章
のつぺいうしと鴨の鳴くらむ　徳
山陰に精進落て松の聲　青
三十三年杉たてる庵　章

開帳や俊成作の本尊かけて　德
寂蓮法師小僧新發意　青
伊呂波韻横たつ山もなかりけり　章
雲を增補に時雨ふる秋　德
影ひとり長月頃の氣根もの　青
野の宮の夜すがら袷一枚　章
鵜繩かきも浮世をわたる蜉蝣なれや　德
まよひ子の母腰がぬけたか　青
二ウ
傷寒を人々いかにとがめしに　章
惡鬼となつて姿はその儘　德
正三の書置かれたる物がたり　青
こゝに道春これもこれとて　章
前は池東叡山の大屋敷　德
花の盛に町中をよぶ　青
青柳の髮ゆひ〳〵やい　章
舞臺に出づる胡蝶鶯　德
つれぶしに端唄うたひの蛙鳴　青
禿が酌に雨の夕ぐれ　章
戀の土手雲なへだてそ打またげ　德
御朱印使風の玉章　青
心中に山林竹木指きる事　章
末世の衆道菩提所の月　德
三オ
十歳の和尚のうは氣秋ふけて　青
彌陀はかゝ樣消えやすき露　章
蓮の糸組屋の店の風涼し　德
わかいものよる暖簾の波　青
戀の淵水におぼるゝ人相あり　章
首だけのおもひつゝしみてよし　德
うき中は下焦もかれてよわ〳〵と　青
家〳〵の書に寢汗かゝるゝ　章
しなひうち大夜着の裏表迄　德
鞍馬僧正床入のやま　青
若衆方先つくしには彥太郎　章
かつら姿や右近なるらむ　德
暮の月橘の精あらはれて　青
すもゝ山もゝ悉皆成佛　章
三ウ
見性の眼のひかり錫の鉢　德
轆轤のめぐり因果則　青
ゑいやとさ爰にひとつの片輪もの　章
敷がねとして十貫目箱　德
代八やしのび車のしのぶらむ　青
日傭をめして夕顔の宿　章
山雀のかきふんどしに尻からげ　德
青茶の目白羽織着て行く　青
膏藥の木の實のうみや流るらむ　章
よこねおろしに谷ふかき月　德
山高く湯船へだつる水遠し　青
淺間の烟輕石が飛ぶ　章
しらなへし花の吹雪の信濃なる　德
甲頭巾に駒いばふ春　青
ナオ
熊坂も中間霞引きつれて　章
山又山や三國の九郎介　德
關手形安宅に早く着きにけり　青
松風落て澁紙をとく　章
太物の庭の芭蕉葉五六端　德
楚國のかたはら横町の秋　青
邯鄲の里の新道月明て　章

よく／＼思へば會所を求る　徳
千句より十萬億も鼻の先　青
われらが爲の守武菩薩　章
音樂の小弓三味線あいの山　徳
四竹さわぐ竹の都路　青
姉そひてお伽比丘尼のゆくこども　章
後家ぞまことの佛にてまします　徳
ナウ
讓られし黄金の膚こまやかに　青
こぬかみがきの革袋あり　章
旅枕油くさゝや蟻ふらむ　徳
弱でかりの契りこがるゝ　青
はかゆきにざく／＼汁の薄情　章
連理の箸のかたしをもつて　徳
實や花白樂天が燒筆に　青
唐土に歸る羽箒の雁　執筆

○

（此巻は其三にして、延寳六年の春賦されしもの也。本書は其二と同じく二十句のみなれば、八十句を增補して全巻とす。）

飯何之誹諧

物の名の蛸や古郷の凧巾　信徳
（「江戸三吟」座五を「いかのぼり」とす。）
あふむく衆は百餘里の春　桃青
峯の雪かねのわらじの解初て　信章
千人力の東風わたる也　徳
よつ引てむかへば月の薄曇り　青
（「江戸三吟」上五を「熊つかひ」とす。）
水衣に笑ふ鴈の跡こゑ　章
（「江戸三吟」此句を「水右衛をわらふ初かりの聲」とす。）
墨の髭萩の下葉の移ひぬ　徳
尾花が袖に鎰がさら／＼　青
（「江戸三吟」下七を「鏡かさうか」とす。）
ウ
判はんじいかなる風の末ふくや　章
（「江戸三吟」座五を「閑にふく」とす。）
夫は山ぶし海士のよび聲　徳

一念の鯰となりて七まとひ　青
（「鯰」は「鰻」の誤ならん。）
かたちは鬼の火鉢いたゞく　章
紙ふりの伊勢の國より上りけり　徳
神のいがきもこえし壁ぬり　青
縄ばしご夜の契りや切つらむ　章
さすがわかれのちんば引見ゆ　徳
骨うづきしのび笠にて顔かくし　青
立出るよりふまれたる露　章
夕まぐれ水風呂に流す水の月　徳
（「水風呂」は「小風呂」の誤ならん。）
木綿さらさの祝ふ風呂敷　青
（「江戸三吟」下七を「紅葉かたしく」とす。以下增補）
花に風荒木珍太をあたゝめて　章
胸につかへし霞はれ行く　徳
ニオ
天津風借錢なして歸りけり　青
勘當ゆるす二月中旬　章
釋迦すでに跡式讓り給ふらむ　徳

八萬諸聖教古手形なり　青
腰張や十方世界法の聲　章
凡そ命は赤土の露　徳
いつ迄か炮碌賣の老の秋　青
ころばぬやうに杖で行く月　章
駒留て下踏打叩く雪の暮　徳
東坡が小者竹の一むら　青
その里へ石摺の文かよひけり　章
緞子の染木蠹のさすまで　徳
土用しれ山は紺地の靑嵐　青
谷水たゝへて蓼酢の如し　章
ニウ
巽風者金柑淵に遣捨る　徳
吹矢を折て墨染の月　青
秋のあはれ隣の茶屋もはやらねば　章
松虫鈴虫轡たふるゝ　徳
戀草をつれて走りし末がれて　青
その業平に請人やなき　章
木賊色の狩衣質に置し時　徳
貧乏神の社見かぎる　青
出雲にて世間咄のわる口に　章
松江の浦の相店のかゝ　徳
塗桶に鱸のわたをつみかけて　青
ひらめ白うらむくの黒鯛　章
花なるらむ龍の宮古の賺り者　徳
父大臣のかねつぶす春　青
ニオ
手道具や十二一重の薄霞　章
笈のうちより遠山の月　徳
小男鹿の妻をとられな宿かすな　青
公儀のおふれ武藏野の秋　章
闕所ものはらふ草より草の露　徳
火つけの螢とられ行くらむ　青
本三位戻子をはりたるごとくにて　章
貢の箱や飴おこしなる　徳
かたぐまに難波の梅の兄弟　青
貫之が筆朝書の春　章
それの年徳壺利の氷とけそめて　徳
饂飩きり落す橋の下水　青
つりものに中の間の障子引放し　章
戀のやごろさねだり來にけり　徳
三ウ
買がゝりしれぬ憂名を付かけて　青
いつの大よせいつの御一座　章
朝夷の三ぶ樣四郎さま五郎樣の　徳
地獄やぶりや芝居やぶりや　青
小柄ぬき劍の枝のたわむ迄　章
滅金の日影にぎる修羅王　徳
千早振木で作りたる神姿　青
岩戸ひらけて饅頭の見世　章
錢の文字一分もまださだまらず　徳
掟のかはる六道の月　青
秋やむかし二代目の地藏出たまふ　章
鎧腹帶殘しおく露　徳
花の枝綺麗高麗切とりて　青
賁しめの蔵人參甘草　章
ナオ
春霞氣を引きたつる薄醬油　徳
杓子はこけて足がひよろつく　青
やゝ暫し下女と〳〵の戰ひに　章
赤前垂の旗をなびかす　徳

酒桶に引導の一句しめされて　青
つら〳〵おもんみれば人は穴藏　章
うらがへす壘破れて夢もなし　德
盃にくはれて來ぬ夜數かく　青
君々爪の先程おもはぬか　章
しのぶることのまくる點取　德
戀弱し内親王の御言葉　青
乳母(めのと)さへあらばくろがねの楯　章
疱瘡(いも)の神鬼神なりとも閨の月　德
ましてや面(めん)は張貫の露　青
(ナウ)翁草布の衣裝をひるがへし　章
松は幾世の青砥左衞門　德
北條の宿を嵐に尋ぬれば　青
彼是をつぶしてひとつになる雲　章
火神鳴たゝらをふんで響くらむ　德
菅相丞も本庄の末　青
江戸の花延喜このかたの時とかや　章
鷺白鳥も驚かぬ春　執筆

○

（此卷及び「梅の風」の卷は延寶四年のものにして『江戸兩吟集』の名にて上梓せられたり。別に『春納二百韻』とも稱す。此卷は『梅の牛』にも採錄せられたり。本書は此卷の二十句のみを記し「梅の風」の卷を漏せり。依て此卷の八十句を增補すると共に「梅の風」の一卷を加へたり。）

此梅に牛も初音と鳴つべし　桃青
ましてや蛙人間の作　信章
はる雨のかるうしやれたる世の中に　、
酢味噌まじりの野邊の下萠　青
すり鉢にわか紫のすり衣　、
庭はたらきの男おきけり　章
（一本此句を「むかし働の男ありけり」とす。）
賑のひらけかゝりし二日月　、
爪立てゆく足引の山　青
(ウ)五寸ほど手のとゞかざる歌の道　章
一かひあまり住よしの松　青
淡路嶋さつと咄の余所に見て　章
（一本中七を「仕形ばなしの」とす。）
友よぶ千どり笑ひ聲なる　青
さる程におもしろ鷺の權之亟　章
（一本上中十二字を「青鷺の又白鷺の」とす。）
森のした風さわ〳〵〳〵と　青
（一本下七を「木葉六ばう」とす。）
眞葛原踏れて這て迯にけり　章
虫鳴までにむかふ靡かぬ　青
（一本上七を「むかし島まで」とす。）
戀の秋爰にたとへの道ぞとよ　章
（一本下五を「有磯海」とす。）
吉祥日のそれほどの月　青
（一本此句を「吉祥天女もこれ程の月」とす。）
あつらへの瓔珞かゝる山かつら　章
松の嵐の響くに似たり　青
（「に似たり」は「耳たぶ」の誤ならん。以下增補）

大黒の袋は花にほころびて　章
青海苔もろき天竺の衣、　青
（一本上七を「霞にもろきと」とす。）
二オ
今朝の雪貧女一文が糊を解く　青
風進退を削る竹べら　章
臍の緒を吉原通ひ切り果る　青
ほりこむ返事うらめしの中　章
（一本上七を「かみなりの太鼓」とす。）
地にあらば石臼などと誓ひてし　青
末の松山韮漬の水　章
千賀の浦鹽釜居ゑむ庭の隅　青
（一本中七を「しほがま居て」とす。）
雪隠さびて見えわたるかな　章
遁適(たまさか)にこととふものは下駄の音　青
猶山ふかく入りしすい風呂　章
よしやよし小糠袋の濁る世に　青
千里をかける馬子はあれども　章

雨の月見ぬ六道の札の辻　青
焰魔の町々引渡す霧　章
（「雨」は「西」の誤ならん。）
二ウ
煩悩の本縄中綱末の露　青
人足あれば山姥もあり　章
谷の戸を叩き起して備流し　青
諸鳥の小頭鶯の聲　章
花を踏んで雀は千の歩行(かち)の衆　青
上野浅草竹の春風　章
（一本上七を「上野下屋の」とす。）
鍔目貫朝(あした)の霜に朽はてゝ　青
鎧は毛切れ蟲は音を入れ　章
事あらば痩せたれどあの華薄　青
もゝとせの餓鬼も人數の月　章
大無盡世傘を親にとり立て　青
公儀の掟はのがれ給はず　章
土も石も三間ばかりに野づら石　青
（一本上中十二字を「土も木も三間ばりに」とす。）

此山一つ隠居料にと　青
三オ
富士の嶺頂く雪を剃りこぼし　章
人穴ふかき早桶の底　青
蝙蝠や三角の紙に散迷ふ　章
山椒粒や胡升なるらむ　青
小枕よころ〳〵ふしは引たふしは　章
臺所より下女の呼聲　青
通ひ路の二階は少し遠けれど　章
かしこは揚屋高砂の松　青
取なりを長柄の橋やつくるらむ　章
能因法師御若衆の時　青
照付て色の黒きに侘けらし　章
腸(わた)もちの木乃伊(みいら)眼前の月　青
飢餓年弱り果てぬる秋の昏　章
多くは傷寒荻の上風　青
三ウ
一葉宛柳の髪や禿(はげ)ぬらむ　章
是も虚空を這し蚰(げじ〳〵)　青
（一本此句を「これも虚空にはひ〳〵げじ〳〵」とす。）

判官の身は浮雲の定なき　章
時雨降おくむかし淨瑠璃　青
重くれたらうさいかたばち山の端に　章
松吹く風や風呂屋ものなる　青
君爰に紅の二布の下紅葉　章
契りし秋は産女なりけり　青
月すごく草履の鼻緒中絶て　章
河内の國へ通ふ飛石　青
四疊半屑屋の里も浦ちかく　章
浪に蘆墻仕つたり　青
時は花入江の雁の中歸り　章
やはら一流松に藤まき　、
ナオ
いでさらば魔法に春をとめて見よ　青
七リン響く入相の鐘　章
藥鍋三井の古寺汲あげて　青
落させられし宮の打疵　章
階の九ツ目より八ツ目より　青
湯立の釜に置合せあり　章
既に神にじりあがらせ給ひけり　青
白髭殿は御年よられて　章
つくゞと向うに居る鏡山　青
（「居る」は「立る」の誤ならん。）
わけ入ル部屋は小野の細道　章
忍ぶ夜は狐の穴にまよふらむ　青
油にあげしねず鳴の聲　章
唐人も夕べの月にうかれ出て　青
古文眞寶氣のつまる秋　章
ナウ
酒の露たはけ起て白雲飛ブ　青
天狗だふしや人の倒れや　章
直の弱き杉の大木大問屋　青
跡をひかへて糸荷よりくる　章
秤にて日本の知慧や懸ぬらむ　青
霰の玉をつらぬかれけり　章
花に破籠蔦の里は十團子　青
日坂越れば峯の早蕨　章

○

（此卷は『江戸兩吟集』の其二なるが、『梅の牛』には採錄せざるものにして本書亦缺く。依て玆に增補して完備のものとす。）

梅の風俳諧國に盛なり　信章
こちとうづれも此時の春　桃青
紗綾りんず霞の衣の袖はへて　、
儉約知らぬ心のどけき　章
してこゝに中頃公方おはします　、
かたちの雲のはげて淋しき　青
海見えて筆の雫に月少し　、
趣向うかべる船の朝霧　章
いかに漁翁心得たるか秋の風　青
實土用なりあまの羽衣　章
うつ蟬も吉野の山に琴ひきて　青
青嵐吹くひとよぎり吹く　章
松杉の木の間の庵京ばなれ　青
葮墻籬きよし村雨の空　章
夕陽に牛ひき歸る遠の雲　青
老子のすがた山の端がくれ　章
寓言の昔の落葉かきすてゝ　青
桐壺はゝき木しめぢ初茸　章

鍋の露ゆふべの煙すみやかに　青
釘五六升こけらもる月　章
ふる里のふるかねの聲花散て　青
志賀山の春ふいごふく風　、
二オ　さゞ浪や二藏が袖にさえかへり　章
あかゞり洗ふ蘆原の末　青
ある說に泡のかたまる石一つ　章
玉子の前やうち砕くらむ　青
傳へ聞く唐の羊羹かすていら　章
上碧落(へきらく)より下は杉折　青
附けとゞけたとひ千尋の底までも　章
親類分はのがれ難しや　青
世の中よ大名あれば町人あり　章
柳はみどりかけは取り勝　青
古帳に横點を引く朝霞　章
火鉢をはりし氷流るゝ　青
かねのあみかゝれとてしも波の月　章
河童の生けどり秋を悲しむ　、
二ウ　うそ嘶聞けばそなたは荻の聲　青

地獄の夕べさうもあらうか　章
飛螢水はかへつて燃えあがり　青
熊手鳶宮勢田の長橋　章
（「宮」は「ロ」の誤ならん。）
釣瓶とり龍宮までも探すらむ　青
龜は忽ち下女と現はれ　章
老鶴の隱居樣への御使に　青
白無垢添へて粟五十石　章
田舍寺跡とぶらひてたび給へ　青
ぬるい若衆も夢のあき風　章
床は海朝鮮人のねやの月　青
虎の毛ごろも別れ行く露　、
くろがねの築地(ついぢ)の崩(くづれ)花を踏で　章
草もえあがる秦の虫くそ　青
三オ　朝霞徐福が似せのうり藥　章
（一本「似せ」を「贋(ガン)」とす。）
まづ壺一つ乾坤の外　青
瀬戸の土崑輪際(こんりんざい)をほりぬきて　章
（一本「を」を「より」とす。）

辨才天に鱠さゝぐる　青
かまぼこの鹽ならぬ海このところ　章
その夜は不二に足引の山　青
かんな屑たいまつはつと振り立てゝ　章
（一本下五を「ふりあげて」とす。）
みよ〳〵成佛はきだめの虫　青
鶏の御齋を申す今朝の月　章
龍田の紅葉豆腐四五丁　青
むら時雨衆道ぐるひの二道に　章
人死の戀風騷ぐなり　青
大火事を袖ひく水にふせぎかね　章
（一本中七を「袖行水に」とす。）
漸越ゆる土手の松山　、
三ウ　日本橋ちんば馬にて踏みならし　青
方々(かたがた)見せうぞ佐野の源助　章
かいつかみはねうち拂ふ雪の暮　青
鷺はかへつて鳶となりけり　章
浪に罄盧のものいふ世の中に　青
何とて松はすねて見ゆらむ　章

うす柿とも茶ともわからぬ峯の雲　青
淺間の土を燒きかへしゝて　章
物語伊勢白粉とよまれたり　青
平家の秋に痤あれ行く　章
かみそりも内侍所も水の月　青
のうれん懸けしとこやみの霧　章
衣屋もすでに彌勒の花待て　青
かねの御嶽を雨替の春　、
ナオ
岩橋やりんとかけたる一霞み　章
天につらぬく虹のつゝばり　青
その四隅多門は手木を横たへて　章
日傭の札に惡魔をさむる　青
獨過都部安全になすべしと　章
慈悲は上よりさがる米の直　青
人として思はざらむや親の五器　章
願によつて雪の竹箸　青
いきの松ひねり艾葉の百までも　章
（一本下五を「のる迄も」とす。）
氣根の色を小謡に見す　青

朝より庭訓今川童子經　章
さてこなたには二條喜右衛門　青
宿の月城を弓手にひちまがり　章
後陣はいまだ横町の露　青
ナウ
上々新蕎麥面もふらず切て出す　章
大根の精たちかくれけり　青
夜もすがら此本草を讀誦する　章
南無いき藥師來迎の時　青
紫の蛸は雲路にはひ出て　章
とがり矢二筋まなばしの先　青
軍は花追手勝手をもみ合　章
その勢何百きさらぎの卷　青

○

（此卷及次の卷の二百韻は『芝肴』に收錄せられたるものにして、延寶六年頃の作と推定せらる。本書は一ト折のみなれば、以下を增補して完備のものとす。『一葉集』に「於四友亭興行」と端作あり。二卷共四友は脇をなせるのみにして、似春と芭蕉二人にて賦し了りしもの也。）

須磨ぞ秋志賀奈良ふしみでも是は　似春
ほの〴〵の浦さし添て月　四友
沖の石玉屋が袖の霧はれて　桃青
足きられてや鴈の啼らむ　、
山下し小柴のかげにさつと吹　春
白雲かろき手水てぬぐひ　、
紺淺黄鹿子まじりに櫻さく　友
麓は藤のつゝら明ゆく　、
ウ
盜人は三笠の春や呼ふらん　春
火付の野守とらへられたり　青
草薙の風公儀より烈しくて　春
御宿老には白髭の神　青
置頭巾額にたゝむさゞ浪や　春
洲崎の松のひとり狂言　、
てうち〳〵眞砂の鶴の子を思ふ　、
誕のいとに撥通ふらむ　青
又や來る酒屋門前の物囉ひ　春
南朝四百八十め米　青

よし野山みだれて武士の世也けり　春
なみこす岩を切てのはつての　、
花の庭月の夜嵐ねめ付て　青
青柳よはれ女房あなどる　、
（本書は是迄也。以下増補）
オ
血の道氣うらみ幾日の春の雨　春
胸のけぶりにさがす茶袋　青
朝飯のまつ間ほどふる我戀は　春
時雨の松の針立をよぶ　青
お夜詰にはひまつはりし蔦かづら　春
寝巻の月はいとうくらきに　青
焼亡（おんぼう）やふんどしさわぐ秋の風　春
蘆の丸屋にうつけ有けり　青
浦千鳥ふまれて歸る浪のおと　春
さし出の磯に住むあまのじやく　青
甲斐が根や須彌の麓に分入（いれ）ば　春
日上人の影てらすなり　青
瓦燈の火もらぬ窟に小夜更て　春
神代の鼠まくら驚く　青

ニウ
明けぬれば萩原どのゝ鶉啼　春
風に薊のぬるい若黨　青
お使に行とも秋の果所なき　春
二間ほどかく文箱の露　青
宿の月やりてや鞘をはづすらん　春
既によし原の合戰破れし　青
はやりうたさすが名をえし其身とて　春
でつち小坊主男なりひら　青
冷食（めし）を鬼一口に喰てけり　春
是生滅法生姜梅漬　青
煩惱の夢をさまして棚さがし　春
冥（くら）きにまよふ道は紙燭で　青
口惜の花の契りやぬく太郎　春
ふられて今朝はあたら山吹　、
三オ
ひよんな戀笑止がりてや啼蛙　青
あたまくだしに通路の雨　春
お情にあづかるほどの木なりとて　青
根なしかづらのかゝる浪人　春
長髮の霜より霜に朽ちんとは　青

葉ちがひに風寒きまで　春
幾月の小松がはらや隠すらん　青
とへど岩根の下女はこたへず　春
磯清水汝（なれ）がながれをたてぬかと　青
いかつに情を杓でくみよる　春
戀衣紺の袂にはし折て　青
雲引かつぐ星のかよひ路　春
ほと／＼と天の戸ぼその暮の月　青
帝近所へ夜ばなしの秋　春
三ウ
錦かと田樂染る龍田川　青
山は時雨て擂木（すりこぎ）の音　春
浮雲のそなたに近き隠里　青
日影を盗み仙境に入　春
幻を挑灯持や尋ぬらん　青
夢はやぶれて杖と草履と　春
しにはづれ此頃の禮お門まで　青
衣を肩にかゝる仕合　春
酒手乞白雲帶を解（とか）せたり　青
秋風（しうふう）起て出るより棒　春

氣違を月のさそへば忽に　青
尾を引ずりて森の下草　春
御神體則花は散給ふ　青
つくしはるかに春ぞ飛行　春
ナオ 捧げたる二ツの玉子かいわりて　青
うちまた廣き國の守へと　春
雪隠に伊豫の湯桁も打渡し　青
ふみ石九ツ中は十六　春
山作り硯にむかひ筆とりて　青
夢窓國師もいでや此世に　春
物相を都の西に參りつゝ　青
茶の湯の古道跡は有けり　春
太閤の下駄一足や殘らん　青
高麗までも隣ありきに　春
秋の寢覺火入をさげて行くものは　青
悋氣の袖に月を打わる　春
忍び路の霧の妻戸をつき倒し　青
喧嘩眼にくどく夕ぐれ　春
ナウ 薄情かゝりがましき若いもの　青
黒手にはねて殺すは〳〵　青
追剝の跡は裳ぬけと成にけり　春
蝦蟇鐵拐や吐息つくらむ　、
千年の膏藥既に和らぎて　青
折ふし松に藤の丸さく　、
より金の花郭公春のくれ　春
山もかすみの唐で我を折　執筆

○

（此巻は其二にして、其一と同時のものならん。本書は一ト折のみなれば次下を增補して全巻となす。）

見わたせば詠れば見れば須磨の秋　桃青
桂の帆ばしら十分の月　四友
盃に文を飛する鴈啼て　似春
山は錦に歌よむもあり　、
烏帽子着て家に歸ると人やいふ　青
うけたまはりし日傭大將　、
備へには鋤鍬魚鱗鶴のはし　春
前は畠に峯高うして　、
ウ 隱居にはおもしろき所にてゆ　青
おし繪さま〳〵松あり菊あり　春
金砂子うち拂ふにも千代の秋　青
みがゝれ出る御廣間の月　春
木賊かる山はうしろに長袴　青
（一本「山は」を「山を」とす。）
鷺が袂は木曾の麻衣　春
身を墨に何を恨てなく烏　青
異見は余所ふく森のこがらし　春
揚錢を其後の掛の大はらひ　青
長者のごとき君にぞ有ける　、
供養する別の鐘や響らん　春
寢物がたりを筆にまかさう　、
花の香を驪山宮より聞傳へ　青
宗盛のこゝろよぎもなき春　春
（本書はこれまで、以下增補）
二オ 白妙の旗に紛れて殘る雪　青
ふじを軒端にあやめふく頃　春
世の聞え定家西行ほとゝぎす　青

貫之以後の有明の月　春
八百年御燈の光露更て　青
狸のこつちやう如來寺の秋　春
狼や香の衣に散紅葉　青
骸(かばね)導く僧正が谷　春
一喧嘩岩に殘りし太刀の跡　青
處立ちのく波の瀬兵衛　春
今ははやすり切果て飛ぶほたる　青
賢の似せそこなひ竹の一村　春
（一本上七を「賢の似せあり」とす。）
鋸を挽て歸りし短氣もの　青
おのれが胸の火事場空しく　春
一ウ
立ちさわぐ車長持おしやられ　青
いざ又人を賣るものもなし　春
錢の數素盞雄よりも讀初て　青
正哉(まさや)勝(かつ)〻双六にかつ　春
おもへらくかるたは釋迦の道なりと　青
親仁の說法聞けばきくほど　春

茶小紋の羽折は墨に染ねども　青
つよさうな絹の日野山に入　春
簡略を木幡の關や守るらむ　青
駕籠はあれども毛見をおもへば　春
腰の骨いたくもあるゝ里の月　青
又なげられし丸山の色　春
片碁盤都の東花ちりて　青
かすみの間より膳が出ました　、
三オ
立はるや乘掛付てまつ內に　春
股引脚半きそ始して　青
御供にはなまぐさものゝ小殿原　春
つゞく兵鮹大根　青
無盡宿先をかけんもおとなげなし　春
萬事は未來前世のあきなひ　青
因果は夫秤の皿をまはるらん　春
善男善四と說せ給ひし　青
又爰に孔子字は忠治郎　春
時にあはねば落す前髪　青
不心中世にまじはりて何かせん　春

君は誰笛我ほてつぱら　青
しのぶ夜は取手にかゝる閨の月　春
秋を通さぬ中の關口　青
三ウ
寂滅の貝ふき立る初嵐　春
石こづめなる山本の雲　青
大地震つゞいて龍やのぼるらむ　春
長十丈の鯰なりけり　青
かまぼこの橋板遠く見わたして　春
粂升瀬田より參る庖丁　青
ぬれ緣や北に出づれば手盥の　春
粉糠こぼれて時雨初けん　青
六藏が伊駒の山の雲はやみ　春
河內は在所とゝの秋風　青
さられては飯匙(いひかひ)こぼす袖の露　春
顏は鍋ぶた胸こがす月　青
腫氣さす姿忽花もなし　春
春牛より西瓜は〳〵　青
ナオ
新道の温泉ながすうす氷　春
代八車御幸めづらし　青

伺公する例の與三郎大納言　春
たはけ狂ひのよし野軍に　青
口舌には空腹切て伏たりけり　春
弓手のわきより赤いふんどし　青
道具持つかへや京へのぼるらん　春
團子則五粒づゝのむ　青
唐に獨の茶數寄有りけるが　春
織部燒なる秦の舊跡　青
鉢一ッ萬民これを賞翫す　春
けんどむ蕎麥や山の端の雲　青
小半の雫に濁る月も月　春
屈平沈む瓢箪の露　青
ナウ
鸞鳳も山雀籠にかくれけり　春
からくりの天下おだやかにして　、
臣は水およぎ人形波風も　青
海士のむかしは斯の如くに　、
あはら嘶蘆火にあたりて夜もすがら　春
八盃豆腐冬ごもる空　、
面影のおろし大根花見して　青

あかり障子にかすむ夜の月　春

○

（此卷は『武藏曲』にあり。天和二年のもの也。本書は一ト折を收めしのみなれば、二之折以下を增補して全卷となす。）

錦とるみやこにうらん百つゝじ　麋塒
壹花さくら二番山ぶき　千春
風の愛三線の記をやはらげて　卜尺
雨双六に雷をわするゝ　曉雲
宵うつり盞の陣を退(マカ)りける　其角
せんじ所の茶に月を汲　芭蕉
霧輕く寒や温やの語を盡す　素堂
梧桐の夕べ孺子を抱いて　似春
ウ
孤村逢に悲風夫を恨かと　昨雲
媒酒旗に咲(エミ)をすゝむる　言水
別るゝに馬手(めて)は山崎小錢寺　執筆
猶ほれ塚を回向して過グ　麋塒
袖桶に忘れぬ草の哀折ル　春
小海老爪(ツマ)白母を慰さむ　尺

悴(カジケ)たる鷺の蓑を黒やかに　雲
捨杭の精かいどり立り　堂
行脚坊卒都婆を夢の草枕　蕉
八聲の月に笠を揮(タタ)く　角
味噌樽にもる露ふかき夜の戸は　水
泣ておのゝく荻の小女　雲
（作者「雲」は「昨雲」也。）
妻戀に花馴駒の見入たる　春
（作者「春」は「似春」にして、次の句は「千春」也。）
柱杖に蛇を切る心春　春
（本書これまで也。以下增補）

ニオ
陽炎の形をさして神なしと　麋塒
紙鳶(しえん)に乘て仙界に飛ぶ　曉雲
秦の代は隣の町と戰ひし　其角
ねり物高く五歩に一樓　芭蕉
露淡く瑠璃の眞瓜に錫(スヾ)寒し　素堂
蚊の聲氈に血を含むらむ　言水
夜を離れ蟻の漏(うろ)より旅立て　卜尺

槐のかくるゝ迄に歸り見しはや　似春
匂落つ杏に酒を買ふところ　芭蕉
强盜春の雨をひそめく　昨雲
嵐更け破魔矢つまよる音すごく　千春
鎧の櫃に餅荷ひける　麋塒
末の五器頭巾に帶て夕月夜　曉雲
猫口ばしる荻のさわ〳〵　素堂
二ウ
朝顔に齋まつりし鷺姫　言水
藏守の叟霜を身に着る　芭蕉
此所難波の北の濱なれや　似春
紀の舟伊勢の舟尾張船　麋塒
波は白浪さゞ波も又をかし　素堂
傾城に袴着せて見る心　曉雲
今宵年忘。戀の業を盡すらむ　其角
柊が枝に小歌奉りける　昨雲
庭稻荷椴に隱れて仄なる　卜尺
いたらぬ役者藝冥加あれ　千春
豊さわぎ院に日待を催され　芭蕉
霞の外の權田樂をなむ召す　素堂
桊の蜀を花に折しきて　言水
しだのみ荒し楪の宿　其角
三オ
去年ウラの月の三十日の月くらし　曉雲
雪ものぐるひ筆を杖つく　卜尺
山鳥の音に羽ぬけ子や尋ぬらむ　千春
鶴の箔衣ありし佛　似春
夢に入る玉落の瀧雲の洞　昨雲
日を額に打つ富士の棟上　芭蕉
松髮の祖父薦上下に出立て　麋塒
城主に鈴の蜜柑獻ずる　嵐蘭
或卜に火あての鰹生きかへり　峽水
旅小刀の吼脫けて行く　曉雲
世捨木や世捨の松に名を朽て　其角
からすの衣堤にくらし　素堂
橋上の斧太は鐘を恨みたる　嵐蘭
西瓜はしらず潮滿つらむ　千春
三ウ
露くだるしだれ角豆の散柳　曉雲
月は築地の古きにやどる　麋塒
遁世のよそに妻子をのぞき見て　芭蕉
つぎ歌耳にのこる吉原　峽水
步別れ馬は待つらん榎陰　其角
百姓の家に入て腹切る　嵐蘭
是此年先祖の榾の火の消ぬ　昨雲
時ならず米に生ふる菌　千春
雨を聞て放下の村に閑なる　素堂
燕尾小勝が墓に落ちくる　曉雲
衣裳草萌出る翠紅に　麋塒
雪ふゞき茶や花の端つゞき　其角
御池濱扈從の渡守しばし　峽水
薫ふるふか水引の蓑　昨雲
張雀鳴子〳〵に驚きて　麋塒
無レ情人秋の蟬　嵐蘭
月は問ふ山寺殿を離に　其角
石風呂の跡は哀ありける　素堂
箒木の茂きは鍬に夭せられ　千春
今其とかげ金色の王　峽水
袖に入る螭夢を契りけむ　芭蕉
淚の玉あり明暮にかわかす　麋塒

我聞けり鈍士は胸の中黒しと　昨雲
閻思君境町に溺るゝ　其角
肩を踏て短尺とりに立躁ぐ　曉雲
奥にての御遊隔レ塀ヲ戀　芭蕉
篝火を刀に掛て忍ぶ山　嵐蘭
浪は井積にかくす落人　千春
ナウ
物あらふ盥をふせて暮る程に　峽水
籃搗く臼のごほ〳〵し聲　麋塒
市賤の木びらを負る木陰には　曉雲
日傘さす子と嫗と男と　嵐蘭
玄關にて神樂をまふけ給ひけり　昨雲
夜と共照らす袋挑灯　素堂
花の奥盗人狩に泊して　芭蕉
八重〳〵霞飛行小天狗　其角
（『武藏曲』こゝに句メあれど略す。）

○

（此卷及び次の百韻二卷は、延寶九年―天和元年―に信德等の『七百五十韻』を次ぎしものなれば『誹諧次韵』と稱し、芭蕉の俳風に一時代を劃するものとして、重要視せらるゝもの也。本書は省略多きにより沼波氏『芭蕉全集』のものによりて增補す。）

表題

晉ノ伯倫傳フ二酒德頌ノ一ヲ樂天續ニス以二酒功ノ讃ヲ一青追テレ之ヲ續ニグ信德ガ七百五十韻ヲ一
挨拶を愛では仕たい花なれど又かさねての春もあるべく（以上增補）

鷺の足雉子脛ながく繼添て　桃青
這句以テ二荘子ヲ一可レ見ツ矣　其角
禪骨の力たわしう成までに　才麿
（「たわしう」は「たはゝに」の誤ならん。）
しばらく風の松にをかしき　揚水
夢に來て鼾をかたる郭公　角
灯心うりも詠じけむ月　青
（「も」は「と」の誤ならん。）
徽雨ゆく麻がら山の木の間より　水
（「徽」は「黴」の誤ならん。）
粟に稗さく黍はらの守　麿
ウ
わびすゞめ畵眉を客に呼けらし　青
慈悲齋が閑つれ〴〵にして　角
木枯の乞食に軒の下をかす　麿
先祖を見しる霜の夜語　水
燈をくらく幽靈を返す也　角
（「幽靈」の下「世に」を脱す。）
古きかうべにかつら引かけ　青
武士の双まつりをあれにけり　水
女はなくにはやきとていむ　丸
樣あしく鏡のひづみたるうらみ　青
こゝろの猫の月を背ける　角
露に寐て且易レ馴易レ忘　、
乳なしの嬰の歸る葛のは　水
春秋を花と淦とに暇なき　角
白うをゝかざすより餅春の宴　青
二
寛平の御誹諧合あり　水
衛士挑灯を枕して睡る　丸
はしたなりける女房の聲更て　青
血摺のねまき夜や忍ぶらん　角

別れ來しむくろは起てたよ／＼と　丸
囚獄ノ正をものくるはしむ　水
天帝に目安を書て聞えあげ　角
桂を掘て星種をうゆ　青
雨の擣子風のかますの冷かに　水
秋に對して所-帶-堂の記　丸
白親仁紅-葉-村に送ル聟ヲ　青
漁の火影鯛を射る　角
鰤魚は諫め鰻は胸を割ける　麿
安房の御崎に流人身を泣ク　水
向後にて行德寺の晩鐘を　角
枸杞に初音の魂鳥の魄　青
戀人の袂に似たるかりぎかな　水
雨をくねるか夏風がつま　丸
夕暮は息に烟をはく思ひ　青
民-屋あつて腹をせばむる　角
笑の木愁る草の野は昧く　丸
また露分る婆婆の古みち　水
月見けん高雄が手向嬉しくて　角
哀れと文を躍る夜終　青
脫置し小袖よ何と物いはぬ　水
朝ノ枕に。とゞめ。おどろく　丸
花に照る太神宮の奇特也　青
幣に巣つくる詫の鳥　角

○

（此卷は其二也。「雁にきけといふ五文字をこたふ」と前書あり。「七百五十韻」第五、春澄の句に「雁にきけいなおほせ鳥といへるあり」とあるによりてなり。）

春澄にとへ稻負鳥といへるあり　其角
ことし此秋京を寢覺て　才丸
月を連にそゞろ烏帽子をかぶる也　揚水
笹に德利を折かたげしや　桃青
おぼこさす川添草の葉をしごき　丸
卑山路に錢とらせける　角
（一本下七を「錢とらせきる」とす。）
夕こゆる關をかますにかくれきて　青
夜盜松かぜの音を相圖に　水
雨の闇にすげて敵を討せたる　角
舞臺に紫の庵しをり戸　丸
とひやう仁うは氣より世を懸て　水
犬切て其聲をかなしく　青
ねさま佗て雪の爐に根深溫る　丸
あらしはいづく帳の紙室　角
女の影歸ると見えて跡すごく　青
若衆氣にしてやつれ凋るゝ　水
ストント。茶入落しては命とも　角
とりあへず狂歌仕る月　丸
秋の末つかた嵯峨野を通り侍りて　水
薄の院の御陵をとふ　青
兎飼舍人は花に隱るめり　丸
子丑の番を寅に預けて　角

二

渾沌翠に乘て氣に遊ぶ　青
朝咲しらむ馬鹿ゝゝの山　水
雲の別れ女房に髭のある有けり　角
吉原君をぬすみいさなふ　麿

棒軍勇やつふせぎ止つて　水
つき臼の陰より杵に弦引　青
富の屋を徳明王の守ります　麿
摩訶右衛門苦奈國に生るゝ　角
愛を捨子を捨。毗盧遮阿毗羅吽　青
嵐と落て風はやりふく　水
夜の食乏しく寝覺ける頃は　角
蚓の音さへ耳に腹だつ　丸
月の秋うらみはこべの旦夕て　水
露にしがらむ妹が落髪　青
（一本「落」を「前」とす。）
一ウ
物いふて鏡に顔の残り見えよ　丸
繒と酒もりの興見えて泣ク　角
（「見えて」は「盡て」の誤ならん。）
小袖かす木枕に帶さうぞきて　青
納戸の神を齋し祭る　水
（一本「納戸」を「納豆」とす。）
煤掃之禮用ニ於鯨之脯ヲ　角
やとひの翁齒朶刈に入　丸
風いたく牛さへ氷るなりけるに　水

荒屋に馬の枯屎をたく　青
悷しと白骨のかね付て居たる　麿
曾呂利新話を讀に夜長し　角
禪小僧とうふに月の詩を刻む　青
雷盆鳴てばせをには風　水
花の今朝驛に羊を直切る也　角
樓にわらぢをつるすころ春　丸
（本書はこれまで也。以下増補）
三オ
所帶わび息はこその雪を掃　水
箕を着て寒く雀とるらむ　青
凩のからしの枝に薬干せる　丸
山彦嫁をだいてうせけり　角
忍びふす人は地藏にて明過し　青
木槿のまなじり木瓜の唇　水
細殿に鬼灯の燈籠照したる　角
をどり狩衣の裾にたつ波　丸
酒の月お伽坊主の夕ばえて　水
眞桑流しやる奥の泉水　青

河骨の葉にほれ歌を書きやつす　丸
ほむらにたえて蛇兒と化　角
築地ある根の底に車止め　青
天火々闇の金掘の傘　水
三ウ
蜆江の磯等岸等は白波に　角
青海苔うたひ蟹琴を彈　丸
花の苫屋芝に旅泊を賞る　水
月に秋とふ東金の僧　青
淋しさを蕎麥に露干す豆俵　丸
夕顔重く貧居ひしげる　角
桃の木に蟬鳴く頃は外に寝み　青
枕の清水香薷散くむ　水
夢の身を何と鰹にさめかねて　角
我聞ク俗は口にきたなき　丸
生づらを蹴折かれては念無量　水
泥坊消て雨の火青し　青
草の奥下妻が原にくれかゝり　丸
狄の里の足あらひ鍋　角
ナオ
配所人蘆の小莟布を干かねて　青

あらめの茵辛螺を枕と　水
心地やむ鯛に針さす生小船　角
まれに尾だきを出し山老　丸
麥星の豐の光を覺けり　水
勅使芋原の朝臣蕪房　青
秋を啼く鳥の鳥を迎へせし　丸
夏やきのふの郭公さに　角
津の國の生田の森の初月夜　讀人不知
道さまたげに乞食壻す　水
霜下て更行く里の粥配　角
寺々の納豆の聲あした冴ゆ　丸
よすがなき榁花賣の老を泣　水
國炭荷ふて小野に歸りし　青
二ウ
鷹をぞ洗ふ朧の淸水影とては　角
茂みがくれに牛逃したる　丸
竹の戸を人待つ下女が寢忘れて　水
打ぞつぶてに恨みこたへよ　青
消のみすほん〳〵と鳴をれば　丸
干とせをくさる水の埋木　角
菜傳ひて寸龍花に登るかと　青
如泉法師が春力あり　水

〇

（此卷は其三也。增補前の如し。）

世に有て家立は秋の野中哉　才麿
詠おく月にかぶ萩を買　揚水
哀とも茄子は菊にうら枯て　桃青
鮎さですたり海鼠漸ク　其角
雪の客嚢の客とふるまへば　水
蘇鐵の亭に題を設る　丸
樂やつこ隱れて風流林とよぶ　角
榾に羽織を着せてあふぎし　青
ウ
嬉しきや女房のせいて泣付を　丸
戀あふれたる弟手討に　水
音更て槇の戸板をこぢ放す　青
かれゆく宿に冬子うむ犬　角
髮結の住けん庭は蓬して　水
卒都婆の男ゆかた凋れる　丸
骨刀土器錫のもろきなり　角
痩たる馬の影に羞うつ　青
內に寢ても心はきのふ羈旅　丸
米とぐ音の耳に露けき　水
扨もかびて簀子折たく秋しもぞ　青
無錢居士とて朝深き月　角
筆耕靑磁の牛に花付て　水
燕茶水のながれくむらん　丸
二
后宮のやぶ入車やどりふる　角
ねたしや上の御若衆の様　青
頭巾かづきさげて。夜の雪踏の忍ぶ音　丸
挑灯切つて霜のかげろい　水
風前の角內と身を悟りける　青
入ルの山ぶみ狼にのり　角
雷の斧丁々として音更に　水
玄又玄し龍頭の國　丸
俗のいふ鹿嶋の海の底なるや　角
朝の日の東本地赤螺　青
何を覺て蛤の寐て夢見たる　丸
ひそか〳〵と雨蓑をもる　水

月を葺夕芋の葉の片軒端　青
栗刈敷て團子干すころ　角
露鷄の羽がひの殼ひよ〱と　水
水くみ起て箒尋ぬる　丸
釜かぶる人は忍びて別る也　角
槌を子にだく幻の君　青
古家の泣聲闇にさへなれば　丸
いたちの禿倉風の荒ぶる　水
麻の葉に生る小餠を折交て　青
かた枝さすなる生のうら柚子　角
きたなくて淸き隣と住月に　水
明て寢御座をかけ渡す露　丸
晝夢の食たく程に夕ぐるゝ　角
人死を待て生たはいなし　青
石ガ曰ク花のめで度咲にけり　丸
木玉にかなで風を舞柳　水
(本書はこれまで、以下は增補也。)

三オ
風雨臺の跡ハ霞ニ空シキゾ　青
驢馬ノ進マザル髑キラ〱シ　角
大根の葉越の閑のこなたより　水
雪のから鮭に文付てやる　丸
衰へや火桶の嫗の腰寒き　角
有佗し床にふとん引ずる　青
もや〱と寢入かねくとくにたへて　丸
通はす首の泣てたゝずむ　水
迷ひしれ恨が原の目かけ塚　青
横雲別之助修行し暮て　角
今宵月に村風と申す三味線を　水
やさしや薄泪こぼすか　丸
秋の霜腹切草をことわれば　角
住持ゆるして明る柴の戸　青
三ウ
面白く盞。曲を狂ひしに　丸
海老ちらしたる海苔の靑衣　水
戀崎の松が娘の花の臺　青
契世にのこる雪の明神　角
卜問し鷺の翁のしら〱と　水

蛇の氣立て草の煩　丸
笹深き皇居にかりの紙帳釣る　角
淸水の司麥を穆く　青
いつも參る法味寺の菱色殊に　丸
老尼はなしの敍ありけり　水
哀餘る捨子ひろひに遣はして　青
外里に鹿の裾引て入　角
松茸に道しまがへば枯いばら　水
栗の梢にあり明のいが　丸
佗竈に蛬の音をしのぶなる　角
足袋さす宿に風霜を待つ　青
扇折る女は夏に捨られて　丸
夫は江戸に戀わすれさく　水
むさし一歩さすがにと讀でやみけり　青
艷なる茶のみ所求めて　角
夜々に來て淨瑠璃語る聲細く　水
法眼がかきし武者繪とやらむ　丸
宮造る虛の匠の名乘して　角
熨斗を冠の纓に折かけ　青

篇なる峯嵐のうるめは枯殘り　文
故國今問へば蘭區し　水
風の月熱の御靈を鎮めける　青
青なる小雪の径しさよ露　角
山路わくいくちの笠を置忘れ　水
後の音祈を猿にことわる　文
岩彦の栖を深く立ちのぞき　青
氣を奪れし人のぬけがら　角
血を踏て鳳太刀を折る言嚴く　水
古寄をとつて野邊に就す　丸
行きくれて花に夜着かる芝莚　角
狐は醉て酸醬に入る　青

○

（此四句は以上二百五十句の外に附けあるもの也。依て附錄す。）

餘興

野巫一つ爰に置きけり曰く露　揚水
無用の枝を立し犬蘭　調青
夜ル貌の朝咲花にあらそひて　其角
墨江の四主青を隱したり　才丸

貞享元子年

○

（「熱田三歌仙」附錄にあり「十二月十九日一井亭興行」と端作あり。貞享四年ならん。）

艶寝よし宿は師走の夕月夜　芭蕉
庭さへせまくつもる薄雪　一井
とやくと覓をあぶる薬罐て　越人
紙燈を見に御幸あるころ　昌碧
琴持の莚のうへをつたひ行　荷兮
障子明ればきゆるともし火　是竹
起もせで聞しる匂ひ恐しき　東睡
みだれし髮の汗ぬぐひ居る　蕉
投られてまたとり附るをかしさよ　井
乳を飲子の我に似るらし　人
麻布を裁びる程に織衆て　碧
轟をとりこめばねごだせだしき　兮
白雨の先に聞ゆる雷の聲　竹
馬のありかぬ山際の露　睡
小男鹿のそれ矢を袖に射付させ　蕉
飛あがるほどあはれなる月　人
風におぢけて花の二ツ三ツ　兮
畠に續く野は崖なり　碧

貞享三寅年

○

（「初懷紙」「鶴の步」又「鶴百韻」と稱す。前半五十句の評註に評語集參照。）

日の春をさすがに鶴の步みかな　其角
砌にたかき去年の桐の實　文鱗
雪村が柳見に行棹さして　枳風
酒屋螃に入あひの月　コ齋
秋の山手束の弓の鳥うらむ　芳重
炭竈こねて冬のこしらへ　杉風

黒〳〵の髪ほのかなる前みどり　信化
わが乗る駒に雨覆ひせよ　李下
ウ
朝まだき三嶋を拜む道なれば　挙白
念佛に狂ふ僧いづくより　朱絃
浅ましく連歌の興を覺すらん　蚊足
敵よせ来るむら松のこゑ　千里
有明の梨うち烏帽子着たりけり　芭蕉
うき世の露を宴の見納め　執筆
借れし宿の木槿のちる庭に　鱗
後住女きぬたうち〳〵　角
山ふかみ乳をのむ猿の聲悲し　斎
命を甲斐の筏とも見よ　枳
法の土わが剃髪を埋み置む　杉
はつかしの記を閉る草の戸　重
咲日より車數ゆる花のかげ　杉
はしは小雨のもゆる陽炎　化
二
残る雪のこる案山子のめづらしく　絃
しづかに酔て蝶をとる歌　白
殿守が眠たがりつる朝ぼらけ　里

兀たる眉をかくす衣〳〵　蕉
髻子笑て情にみゆる宿なれや　枳
葉わけの風に矢篦切に入ル　斎
かゝれとて下手の鋳たる狐わな　角
あられ月夜のくもる傘　鱗
石の戸樋鞍馬の坊に住わびて　白
我三代の刀うつ鍛冶　下
永祿は金乏しく松の風　化
近江の田植美濃に恥らん　絃
とく起て聞勝にせん郭公　里
船に茶の湯の浦あはれ也　角
ウ
筑紫まで人の娘を召つれて　下
彌勒の堂に思ひ打ふし　枳
まつ宵の嵐は寛たる草の中　蕉
友よぶ蟾の物うきのこゑ　化
雨さへぞ賤しかりける鄙ぐもり　斎
門は魚ほす磯際の寺　白
理不盡に物くふ武士等六七騎　里
あら野の牧の御召撰みに　角

鴫の一聲夕日を月に改めて　鱗
糺の飴屋秋寒きなり　下
稲妻の木の間を花の心ばせ　白
つれなき聖野に笈を解ク　枳
人あまた年取物をかづき行　湍水
酒もり遊ぶ金山が洞　絃
三
この國の武仙を名ある畫にかゝせ　角
京に汲する醒井の水　斎
玉川やおの〳〵六の所にて　蕉
江淵〳〵に年よりにけり　化
卯の花のみな精にも見ゆる哉　重
竹うごかせば雀かたよる　水
南むく葛屋の畑の霜消て　不卜
親と碁を打晝のつれ〳〵　鱗
餅作る楢の廣葉をうち合せ　風
贄に買るゝ秋のこゝろは　蕉
鹿の音をものいはぬ人も聞つらめ　絃
にくき男の鼾すむ月　卜
苫の雨袂七里をぬらすらん　下

伊駒河内の冬の川づら　水
ウ水車米つく音はあらしにて　角
梅はさかりの院〳〵を閉ぢ　蕉
二月の蓬萊人もすさめずや　齋
姉待牛の遲き日の影　重
胸あはぬ越の縮を織かねて　蕉
おもひあらはす菅の刈さし　風
菱の葉をしがらみふせてたかべ鳴　鱗
木魚聞ゆる山陰にしも　下
囚人をやがて休むる朝月夜　齋
萩さし出す長がつれあい　下
問し時露と黍とに名を付て　春
（「黍と」は「禿」の誤ならん。）
こゝろなからむ世は蟬のから　絃
三度ふむよし野ゝ櫻よしの山　化
あるじは春か草の崩れ屋　下
名傾城を忘れぬきのふ合ふことし　鱗
（「合ふ」は「けふ」の誤ならん。）
經よみ習ふ聲の美し　重

竹深き笋ほりに駕かりて　白
梅まだ苦き匂ひなりけり　角
村雨に石の灯吹けしぬ　齋
蚫とる夜の沖も靜に　峽水
伊勢を月松に朝日の有がたき　ト
（「伊勢を月松に」は「伊勢を乗ル月に」の誤ならん。）
けや木えり來て橋造る秋　下
信長の治れる世や聞ゆらん　水
居士と呼るゝから國の兒　鱗
紅に牡丹十里の香を分て　春
雲すむ谷に出る湯をきく　水
岩根ふみ重き地藏を荷ひ捨　角
笑へや年の若法師ども　齋
（「年の」は「三井の」の誤ならん。）
ウ逢ぬ戀よしなきやつに返歌して　化
管絃をさます宵はなかるゝ　重
足引の廬山にとまるさびしさよ　水
千聲唱る觀音の御名　角

舟いくつ涼みながらの川づたひ　風
尾長にまじる松の白鷺　水
蓆むしろの七府に契る花匂へ　ト
連衆くはたつ春ぞ久しき　白
（「くはたつ」は「くはゝる」の誤ならん。此卷を享保二十年上梓の『初懐紙』に對校するに、字句に多少の異同あり。且つ作者名に於て相違せるも、たゞ字句の主なる點を註記するのみとせり。）

○

花咲て七日鶴見る麓かな　芭蕉
（此卷は淸風編『一橋』にあり。）
懼て蛙のわたる細はし　淸風
足駄木を春まだ氷る筏して　擧白
米一升をはかる關の戶　曾良
名月を隣はねたる草枕　コ齋
枝見ぐるしき桐の葉を刈　其角
ウ畫ごろもふるへば虫のから落て　風

内外の下向静なりけり　白
すでに立討手の使いかめしく　良
一夜の契り錢かづけたる　蕉
松明に影見んといふ君は誰　角
生て捨子の水にながるゝ　風
形かたちしれぬ敵を世に歎き　良
ことしの餅をおもふ山寺　齋
雪をもつ樫やさはらに露見えて　白
虹のはじめは日も匂なき　角
門口に溫泉をさます月すごし　蕉
三ッゆく鹿の一ッ矢を負ふ　齋
いき〱と軍に氣ある朝薄　嵐雪
男ながらの白粉をぬる　風
膝琴に明の風雅をわすれざる　角
涙をり〱牡丹ちりつゝ　白
耳うとく妹が告たるほとゝぎす　蕉
つれなく美濃に茶屋をして居る　良
札焼て刀ばかりをつたへけり　風
我うつ鷹を殿の御拳　角

楷もみぢ狂歌やさしく詠添て　齋
京の月夜はさぞ踊るらむ　雪
音もなく物やむ人の獨寐に　白
眉ぬく袖の翠簾にうつぶき　蕉
唐の文よめぬ所をうちやりて　良
葱かひに雪の山みち　齋
哀さは苫屋に捨し破れ網　風
何やらなくて鹽やかぬうら　蕉
相國の植給ひけん花と松　角
車を下りて春のやすらひ　白

○

（此卷支考編『三日月日記』にあり。「納涼の折々いひ捨てたる和漢、月の前にしてみたしむ」と前書あり。）

破風口に日かげやよわる夕すゞみ　芭蕉
煮レ茶蠅避レ烟　素堂
合歡醒二馬上一　、
かさなる小田の水落すなり　蕉
月代見二金氣一　堂
露繁添二玉涎一　、
張旭がものを書なる醉の中　蕉
（中七「もの書きなぐる」の誤ならん。）
幢を左右に分るむら竹　、
挈レ箒驅二倫鼠一　堂
ふるきみやこに殘る御魂屋　蕉
くろからぬ首かき立る柘の撥　、
乳をのむ膝に何を夢見る　、
舟鈞風早浦　堂
鐘絕日高川　、
顏ばかり早苗の泥によごされて　蕉
めしは煠けぬ蚊やり火の影　、
詫レ敎二三社一　堂
韻使二五車一塡　、
名
花月丈山閑　堂
剪レ銀鮎一寸　蕉
篠を杖つく老のうぐひす　堂
箕面の瀧の玉を簸らん　蕉

朝日かげかしらの鉦をかゞやかし　蕉
風ㇾ飧唯早乾ク　、
よられつる黍の葉あつく秋立て　堂
内は火ともす庭の夕月　蕉
霧ノ籬韻イツ執ㇾ興　堂
雲しぐれノ浦目潜ナミダグム　蕉
浦圍着て其夜に似たる鶏の聲　堂
わすれぬ旅の數珠と脇ざし　蕉

ウ
山伏ヘ山ヲ平ㇾ地　堂
門番ヘ門ヲ小ㇾ天　、
鵆鵆窺ニ水鉢ヲ　蕉
霜の曇りて明る雲やけ　堂
興深き初瀬の舞臺に花を見て　蕉
臨ㇾ谷テ伴ニ蛙フ仙ヲ　堂

○

（此卷『句餞別』にあり。「旅泊に年を越て、よしのゝ花にこゝろせん事を申す」と前書あり。内藤露沾公が芭蕉の首途を賀せる俳席のものにして、貞享四年の晩秋也。）

時は秋よし野にこめし旅のつと　露沾
鴈と友ねに雲風の月　芭蕉
山陰に刈田の顔の賑ばひて　沾蓬
武者追つめし早川の水　其角
くれかゝる空につめたき横しまき　露荷
（『句餞別』に座五を「横あられ」とす。）

ウ
おろさぬ松に枝覗く松　沾荷
傘の繪にかく頭かたむけて　蕉
祭むかへし神山の氏　沾
（「氏」は「民」ならん。）
あつき日の汗に悲しむ旅の聲　セン
すてし戸のよみがへりたる　蓬
行盡す五天のむかし法もなく　角
髪ある僧に鐘撞せきく　セン
（作者「セン」は「ロカ」ならん。）
戀にまつ鎌倉山の奥ふかし　沾
（『句餞別』に上五を「戀を斷ッ」とす。）
しぼる袂に匂ふ薫風　蕉
月清く白雨洗ふ三寸の味　蓬
客に遣ふて鯉てうじやる　角
（「やる」は「ける」の誤ならん。）
花咲て人ゝまゐる草の庵　セン
（作者「セン」は「ロカ」ならん。）
額板ひろふ山ぶきの橋　荷
（作者「荷」は「セン」ならん。）

ナ
信濃路やたゝらの使春さえて　沾
（「使」は「鋏の」誤ならん。）
磬うつかたに烏かへる道　沾徳
楢の葉にわが文集は書終り　蕉
（「は」は「を」の誤ならん。）
弟にゆるす妻のさかづき　荷
（作者「荷」は「ロカ」ならん。）
物かげは忍びやすきに月晴て　セン
琴に聞する夜の朝顔　蓬
馬下りて野服かいどる秋の露　荷
（作者「荷」は「ロカ」ならん。）
九輪をかざす尾上はるけき　沾

風の音ならぶ蘇鐵のいかめしき　蓬
大口着ながら庭の雪掃　蕉
(「ながら」は「たる」の誤ならん。)
うへもなく鳩のむれたる千木さびて　沾
ひとり簾を編くらす妻　荷
(作者「荷」は「セン」ならん。)
ウ一軸の記念の連歌膝に置　セン
(作者「セン」は「ロカ」ならん。)
名に耻ぬべき越の戰ひ　沾
面かけて鏡にむかふ男つき　蓬
御階を上る唐獅子の聲　セン
摺織る花の錦のをさ折て　蕉
(「折て」は「打て」の誤ならん。)
柳の水の澄かへる春　執筆

○

(此卷『其袋』にあり。「夕照」と題す。
貞享三年頃の作か。)

蜻蛉の壁を抱ゆる夕日かな　沾荷
潮落かゝる蘆の穗のうへ　芭蕉
霧の外鐘を隔る松こえて　露沾
杳にはさまる石はらの露　荷
入月に薄化粧たる武者一人　蕉
柴のかけひに笙をあやどる　沾
ワ山寺は晝も狐のさまかへて　荷
花問きやと酒造るらし　蕉
(「袖草紙」に上七を「花飛來やと」とす。)
夕霞日〲にかさなる鞠の音　沾
白き胡蝶の垣を飛こす　荷
絹張を欄の柱に筋かひて　蕉
みだれし髮を直すかんざし　沾
しらべうき記念の皷音もせず　荷
何も燒火にみな盡しけり　蕉
棒の月一ッの窓に僧瘦て　荷
謚つきそめしうらの藪かげ　沾
みゝづくの已が砧や啼ぬらん　蕉
四十雀こそ風も身にしめ　嵐雪

○

(此卷『句餞別』にあり。「十八句」と題す。貞享四年十月芭蕉の首途を賀する俳席のもの也。)

江戸櫻こゝろ通はん幾しぐれ　濁子
さつたの霜にかへりみる月　芭蕉
貝拾ひ〲ゆく磯なれて　嵐雪
醉ては人の肩にとりつく　其角
けふの賀のいと面白や祖父の舞　蕉
根松苗杉蟬のなくこゑ　子
ウ池の橋わたしはじめぬ垣ゆふて　角
湊入る帆のみゆる屋根ごし　雪
世の中は書にのがれたる茶の畑　子
(「中は」は「中を」の誤ならん。)
妹がかしらの唐輪やさしき　蕉
記念(かたみ)てふ袋のきれのはる〲に　雪
(「はる〲に」は「はつ〲に」の誤ならん。)
夢に占きく閨の朝かぜ　子
津の國の難波〲と物かりて　蕉
(「かりて」は「うりて」の誤ならん。)
二夜どまりの筑紫さぶらむ　雪

一巻の連歌を止むこの寺に　子
苗代もゆる雨こまかなり　雪
雉の巣のいくつか花に見え透て　蕉
頭宜をりかはる春の夕月　子

芭蕉翁誹諧集　上終

芭蕉翁誹諧集　中

貞享五辰年

○

（此巻「秋の日」にあり。「貞享五戊辰七月廿日、於竹葉軒長虹興行」と端作あり。）

粟稗にまづしくもあらず草の庵　芭蕉
（「秋の日」中七を「とぼしくもあらず」とす。）
藪の中より見ゆる青柿　長虹
秋の雨歩行鵯に出る暮かけて　荷兮
月なき蛆をまがる山間　一井
ひだるしと人の申せばひだるさよ　越人
藁もちよりて屋根葺にけり　胡及
ウ
木の葉ちる榎の末も神無月　鼠彈
つて待かぬる鵙の喰もの　蕉
筵着て蚊の鳴こゑに眠られず　虹
我に狂ふや妾がおとろへ　兮
水つけず立たる髪の冷じく　井
死て間もなき魂祭なり　人
石籠もあらはに出る夜の月　及
蓑をくむとて寝ぬわたし守　彈
火ぶりして歸るをのこは何者ぞ　蕉
白き袂のみゆる輿かき　井
雨乞にすは／＼花のうるほひて　兮
竹ゆひ添る軒の連翹　虹
ナ
のどかさよけふは氣相（きあひ）の少しよく　兮
木馬なほして子ものせにけり　及
色黒き下部つまげてかしこまり　彈
切籠をりかけすごき夕暮　井
樣〴〵の香（かう）かをり來る月の影　人
人一代の戀をとふ秋　蕉
捨し世はくずのうらみも引むしり　虹
きたなくなれど顔も洗はず　人
懐に脇ざし指てまた出る　及
下戸をにくめる雪の夜の亭　兮
早咲の梅をわが身のたとへもの　蕉
嫁せぬ娘の眉かゝで居る　彈
ウ
しのび音にすがゝきならす垣の奥　及
ふみきやさせる松のともし火　人
明やすき夜をますらが腹立て　兮

何を啼ゆく郭公やら　蕉
花による硯のふたに物書ぬ　弾
簾はり出す春の夕ぐれ　虹

○

（此巻は元祿六年頃巻きかけありしものを、芭蕉歿後杉風代り次ぎて一巻となせるもの也。蝶夢は其後半を省きたるならんも、芭蕉のものとしては裏六句目「中稻」の句までなれば、其以下は切捨つべき也。全巻は『木曾谷』にあり。）

生ながらひとつに氷るなまこ哉　芭蕉
ほどけば匂ふ寒菊の菰　岱水
代官のかり屋に冬の月を見て　蕉
水風呂桶の輪を入れにけり　丶
酢の糟を捨れば潮の引てゆく　水
けふも遊んで暮す相談　丶
ウ 親の時はやりし醫者の若手共　蕉
座敷しづまる能のはじまり　水
香箸のからりとしたる夜明前　蕉
旅から物にあたるしら粥　水
麻衣を馬にも着する木曾の谷　蕉
中稻のあれをくゆる風年　水
どこもかもまばらに漏て月すごく　杉風
つくねて置し網の露けさ　水
造られて村を呼るゝ寺の酒　風
わけておとなにつらき疱瘡　水
初花の沙汰なき春は寒越て　風
伊賀路のどかに山のうらみる　水

○

元祿二巳年

（此巻『伊達衣』にあり。此句に前書あり。俳句集參照。『奥の細道』大旅行中のもの也。）

かくれ家や目だゝぬ花を軒の栗　芭蕉
稀にほたるのとまる露草　栗齋
切崩す山の井の名は有ふれて　等躬
畔づたひする石の棚はし　曾良
把ねたる眞柴に月の暮かゝり　等雲
秋しり顔の矮屋はなれず　須竿
ウ 梓弓矢の羽の露をかわかせて　素蘭
願書をよめる暁のこゑ　蕉
松茵朶に吹よわりたる年の暮　齋
酒の遺恨をいふこゝろなし　躬
聟入は誰に聞ても耻かしき　良
されて賭れる傾城の文　雲
まづしさを神にうらめるつれなさよ　竿
月のひづみをこゝろよりみる　蘭
獨してはぜ釣かねし高瀬もり　躬
笠の端をする蘆のうら枯　齋
梅に出て初瀬や芳野は花の時　蕉
霞める谷に鉦鼓をり〳〵　良
名 あるほどに春をしらする鳥の聲　蘭
水ゆるされぬ黒髪ぞうき　躬
まだ雛をいたはる年の美しく　竿
かゝえし琴の膝や重たき　蕉

うたゝねの夢さへうとき御所の中　竿
朴をかたる市の酒醉　雲
行僧に三社の詫をいたゞきて　良
乗合(のりあひ)まてば明六ッのかね　蘭
伽になる嶋鴨の餌をしたひ　躬
四五日月を見たる蜑の屋　齋
たゞにのみ甲斐なき里の村栬(もみぢ)　雲
鹿の音たえて祭せぬ宮　良
ウ冠をも落すばかりに泣しをれ　蕉
うつかりつゞく文を忘るゝ　躬
戀すれば世にうとまれて憎い頬(つら)　蘭
氣もせきせはし忍ぶ夜の道　齋
入口は四門に法の花の山　良
燕をとむる蓬生の垣　雲

〇

(此巻は『継尾集』『俳諧袖の浦』等にあり。「江上晩望」と題す。東北大旅行中酒田の醫師伊東元順を訪ひし時のもの也。)

あづみ山や吹浦かけて夕すゞみ　芭蕉
海松(みる)かる磯に疊む帆むしろ　不玉
月出ば關屋をからん酒持て　曾良
土もの竈にけぶる秋かぜ　蕉
しるしゝて堀にやりたる色柏　玉
霰の玉をふるふ蓑の毛　良
ウ鳥屋籠る鵜飼の宿の冬の來て　蕉
火を焚影に白髮たれつゝ　玉
海道は道もなきほど切せばめ　良
松笠おくる武隈の土産　蕉
草まくらおかしき戀もしならひて　玉
岐(ちまた)の神に申すかねごと　良
御供してあてなき事も忍らん　蕉
(「事」は「我」の誤ならん。)
この世の末もみよし野に入　玉
朝づとめ妻帶寺の鐘の聲　良
けふも命としまの乞食　蕉
かじけたる花しちるなと茱萸をりて　良
朧の鳩の寢どころの用　玉
(「用」は「月」の誤ならん。)
ナ物いへば木魂にひゞく春の風　玉
姿は瀧にきゆる山姫　蕉
(『継尾集』に「かじけたる」以下の作者を「玉・良・蕉・玉」とし、『俳諧袖の浦』に「玉・良・玉・蕉」とす。)
剛力の蹴つま付たる笹傳ひ　良
棺をさむる墳のあら芝　玉
初霜はよしなき岩を粧ふらん　蕉
えびすの衣縫〳〵ぞなく　良
埿しめん鴈を俵に生置て　玉
月さへすごき陣中の夏　蕉
御輿は眞葛の奥に隠し入　良
小袖袴を贈る戒の師　玉
横顔の母に似たるも床しくて　蕉
貧にはあらぬ家はうれども　良
ウ奈良の京持つたへたる古今集　玉
花に封を切る坊の酒蔵　蕉
鶯の巣を立初る羽づかひ　良

蚕種にこきて箒手にとる　玉
（「にこきて」は「うごきて」の誤ならん。）
錦木をつくりて古き戀を見ん　蕉
ことなる色も好む宮達　良

○

（此巻は東北大旅行中加賀の歡生を訪ひし時の五十韻也。本書は『印の竿』によりしもの丶如く一折二十二句のみにして、且つ作者に異同多し。依て次に『金蘭集』によりて全巻を附載す。）

ぬれて行人もをかしき雨の萩　芭蕉
（『印の竿』に上五を「ぬれて行や」とす。）
薄がくれにすゝきふく家　亨子
月見とて獵にも出す船上ゲて　曾良
干ぬかたびらを待かぬるなり　北枝
松の風晝寐の夢のかいさめぬ　コ蟾
轡をならべて馬の一むれ　志格
日をへたる湯本の峯も幽なる　斧卜
下戸にもたせて重き酒樽　塵生
ウ
紫の古き鎧もちぎれたり　季邑
道の地藏に枕からばや　祝三
晩鐘に鳥の聲も鳴まじり　夕市
歌をすゝむる牢輿の船　蕉
肌の衣女のかをりとまりける　格
ふみ盗まれて我うつゝなき　蟾
よりかゝる木より降出す蟬の聲　枝
雷上る塔のふすぼり　良
世にすめば竹の柱も三四本　子
（「三」は「只」の誤ならん。）
朝露きゆる鉢の朝がほ　邑
夜もすがら虫には聲のかれめなき　市
むかしを戀る月の御陵　卜
散かゝる花に米つく里近き　生
雛うる翁みちたづねけり　三

○

（此巻は前巻の完備せるもの也。元祿二年七月廿六日歡生亭にて）

ぬれて行人もおかしや雨の萩　翁
すゝきがくれに薄ふく家　歡生
月見とて獵にも出ず舟上て　曾良
干ぬかたびらを待かぬるなり　北枝
松風に晝寢の夢のかひさめぬ　生
轡ならべて馬の一連　翁
日を經たる湯本の峯の幽なる　枝
下戸にもたせて重き酒樽　良
ウ
むら雨の古き鎧もちぎれたり　翁
（『金蘭集』上五を「紫の」とす。）
道の地藏に枕からばや　生
入相に鳥の聲も啼まじり　良
うたをすゝめる牢輿の舟　枝
肌の衣女子のかほりとまりけり　生
ふみ盗まれて我うつゝなき　翁
よりかゝる木より降出す蟬の聲　枝
雷あがる塔のふすぼり　良

世に住ば竹の柱も只四本　翁
あさ露きゆる鉢の朝貌　生
夜もすがら虫には聲のかれめなき　良
むかしを戀るつき(月)の御陵　枝
散かゝる花に米搗く里近き　生
雛うる翁道たづねけり　翁
二オ 蝶の羽や赤き袂に狂ふらん　枝
はしの上より投るさかづき　良
響来る木魚に心角折て　翁
目鏡して見て澄渡る月　生
道の名と盗人の名は残る露　良
しか(鹿)ふみくづす石の唐櫃　枝
野社は樫の實生の幾かゝへ　生
病の癒(いえ)て歩行はつ雪　翁
一度は報ひ返さん扶持の禮　枝
あながま鼠夜の戸障子　良
侘しさに心も狭き蚊張釣て　翁
かみ切る所を夫はおさゆる　生
入山のいばらに落しうき泪　良
霜に淋しき猿の足跡　枝
二ウ 岩にたゞ粥たき捨し鍋一ッ　生
甲は笹の中にかくれて　翁
追剝の砧をならす秋のくれ　枝
月に起臥乞食の樂　良
長き夜に碁をつゞり居るなつかしさ　翁
翠簾(みす)に二人がかはる物ごし　生
祈られてあら怖しとうち倒れ　良
汗は手透に残る朝風　枝
問丸の門より不二のうつくしく　生
鰤呼頃も都しづけき　翁
長生は殊更君の恩深き　枝
賤が袴はやれるともなき　良
はつ花は万才歸る時なれや　翁
酒にいさめる宿の山吹　生

〇

(此巻『卯辰集』にあり。「元祿二の秋翁をおくりて山中温泉に遊ぶ。三両吟」と端作あり。「山中三吟」又「燕歌仙」とも稱するもの也。)

馬かりて燕追ゆくわかれ哉　北枝
花野みだるゝ山のまがり目　曾良
月よしと相撲に袴踏ぬぎて　芭蕉
鞘ばしりしとやがて留けり　枝
青淵に獺の飛こむ水の音　良
柴かりこかす峯の笹道　蕉
ウ 霰ふるひだりの山は菅の寺　枝
遊女四五人田舎わたらひ　良
落書に戀しき墨の名も有て　蕉
(「墨の」は「君が」の誤ならん。)
髪は剃ねど魚喰ぬなり　枝
蓮のいととるも中〳〵罪ふかき　良
先祖の貧をつたへたる門　蕉
有明の祭の上坐かたくなに　枝
露まづはらふ獵の弓竹　良
秋かぜはものいはぬ子も泪にて　蕉
白き袂のつゞく葬禮　枝

花の香は古き都の町づくり　良
春をのこせる玄仍の箱　蕉
のどかさやしら〻難波の貝盡し　枝
銀の小鍋をいだす芹焼　良
手枕にしとねの埃うち拂ひ　蕉
美しかれとのぞく覆面　枝
つぎ小袖薫物うりの古風也　蕉
非蔵人なる人の菊畠　、
鴫一ッ臺にすゑても淋しさよ　枝
（「一ッ」は「二ッ」の誤ならん。）
哀につくる三日月の脇　、
初發心草の枕に修行して　蕉
小畠もちかし伊勢の神風　、
疱瘡は桑名日永もはやり過　枝
雨はれくもり枇杷つはるなり　、
細長き仙女の姿たをやかに　蕉
あかねをしぼる水のしら波　、
仲綱が宇治の網代とうち詠　枝
寺に使を立る口上　、
鐘撞て遊ばん花の散か〻る　蕉
酔くるひつ〻やよひ暮ゆく　執筆
（『卯辰集』等上七を「酔狂人」とす。）

○

（此巻『花の故事』にあり。「少幻庵にて」と題せり。東北大旅行中のもの也。）
殘暑しばし手毎に料理れ瓜茄子　芭蕉
みじかさまたで秋の日の影　一泉
月よりも行野〻末に馬次て　左任
透間さびしきむらの生垣　ノ松
（『花の故事』に上七を「透間きびしき」とす。）
鍬鍛冶の門をならべて槌の音　竹意
小桶の清水結ぶ明くれ　語子
七ッより生長せしも姉の恩　雲口
鳥はなちやる雨の粟原　乙州
讀習ふ歌に道あること〻地して　如柳
ともし消れば雲に出る月　北枝
肌寒み咳したるわたし守　曾良
おのが立木に干のこる稲　流志
ふたつ屋はわりなき中と縁組て　泉
さゞめ聞ゆる國の境め　蕉
糸かりて寐間に我ぬふ戀衣　枝
足駄踏べき遠山の雲　口
（『金蘭集』上七を「あした踏べき」とす。「あした」は「翌日」の意ならん。）
草の戸の花にもうつす所にて　浪生
（「所」は「野老」の誤ならん。）
畑うつこともしらで幾春　良

○

（此巻『木葉集』に附載しあり。「元祿二年霜月朔日於良品亭誹諧歌仙」と端作あり。）
いざ子どもはしりありかん玉霰　芭蕉
折敷に寒き椿水仙　良品
羽箒の風やむ跡に軸まきて　梢風

居ずまひはじむ月の小筵　三園
(『金蘭集』上七を「居角力はじむ」とす。)
鹿の聲蓑のかり着の哀なる　士芳
(『木葉集』座五を「哀れさや」とす。)
さら〳〵落る峯の團栗　半殘
ウ
雛頭の愛なふ窓に打折て　品
(「愛なふ」は「愛なき」の誤ならん。)
ものくふうちの蠅のくるしさ　蕉
常ながら熨斗ほしわぶる海士が妻　園
(『木葉集』中七を「のし乾て居る」とす。)
つかれたすけよ雨の手枕　風
疊紙しのび〳〵に鼻かみて　殘
袴もとらではやわかれけり　芳
馬の音傍輩達の聲〳〵に　蕉
月入かゝる富士のいたゞき　風
秋風の簾ふるへば雲出て　品

簫によりける鼓の山雀　園
(「簫」は「笛」の誤ならん。)
へしをれば雫にぬるゝ花の笠　芳
羽織揃へて春の參宮　蕉
名
鍬立て耕す肩をうち休め　風
首の兀たる賴朝の鶴　殘
初雪にまづ下の句を出しけり　蕉
いふ事多し奥州の客　品
(『木葉集』上七を「問事多し」とす。)
草生し君の卒都婆に泣こがれ　園
(「草」は「苔」の誤ならん。)
林はづれに結ぶ柴の戸　風
寢ざときも馴ればやすき瀧の音　芳
風雅仕上し酒呑の弟子　蕉
世の中は機嫌かいなる旅ごろも　品
よき石見れば彿きりたく　殘
瑠璃燈は月をくゝりし如く也　風
僧の髭剃る盆の夕暮　園

女郎花なま姤く也と踏敷て　蕉
(『金蘭集』中七を「なまめくなりと」とす。)
兎かゝれと畔に網はる　風
生れ來て煙草呑ぬも氣の樂か　品
白髮ながらに初子かゝえる　芳
左義長の暖さより花をまつ　殘
ながるゝ雪に道すべる岡　園

元祿三午年

○

(此卷蝶夢は元祿三年とすれど「の人」の加はれるを見れば元年なるべし。)
何の木の花ともしらず匂ひ哉　芭蕉
こゝに朝日を含むうぐひす　益光
春深き柴の橋もり雪掃て　又玄
二葉のすみれ御幸まちけり　雲庵
(『金蘭集』に作者を「平庵」とす。)
有明の草紙を絹に引つゝみ　勝延

ね覺はながき夜のあぶら火　清里

ウ
釣柹に鼠のかよふ音聞て　光
門細めなる田の中の寺　蕉
山路來て清水まれなる袖の汗　庵
わづらふ鷹をたのむ悲しさ　玄
女のみ古き御館の破すだれ　蕉
碁に肘つきて泪落しつ　延
いねがねに酒さへならず物思ひ　の人
（作者「の人」は杜國の變名にして、又「野仁」とも記す。）
陣のかり屋に僧のこもりて　光
しら雲にのぼれと鴈を放つらし　里
はじめて得たる國のはつ稲　庵
漏(もる)月を賤がはた織る窓にみて　玄
藍にしみつく指かくすらん　蕉
名
神役にやとはれきぬる注連の內　光
返歌につまるきぬの俤　人
こひ草と池のあやめを折かねて　延
水鷄を山に起し曉　玄
多葉粉すふ箝(かとり)の跡のけぶりたる　庵
（「山」は「追」の誤ならん。）
誰が乘ものに霜かゝるまで　里
あくがるゝ樂(がく)の一手を聽とりて　蕉
釣の玉子の浦はさびけり　光
（「玉」は「王」の誤ならん。）
聲立て華表(とりゐ)に殘る秋の蟬　玄
しぐるゝ風に銀杏吹ちる　延
笈かけて夜毎の月を見ありきし　人
心とすさむ家の圖もきへ　庵
（『金蘭集』下七を「家の圖もなき」とす。）

ウ
親ひとり茶によき水と歎つる　光
まづ初瓜を米に代(しろ)なす　蕉
此坊を郭公きくやどりにて　正永
ゆりこむ櫂に舟繫ぎけり　玄
ものゝふの弓弦に花を引撓め　延
短尺のこす神垣の春　人
（『金蘭集』に「ますみつもとめによりて筆をそむ」と奥書あり。）

〇

（此卷『金蘭集』に「元祿元年辰六月大津奇香亭興行」と端作あり。されど三年ならん。）
皷子花の短夜ねぶる晝間哉　芭蕉
せめてすゞしき蔦の青壁　奇香
初月の影長葉にたゝかひて　尙白
石にいとゞの聲ひゞくなり　自笑
松の木を秋風さそふ折〳〵に　通雪
砧をやめて琴の糸よる　松洞

ウ
うかれたる女になれて日を積る　香
矢數に腕のよはる戀草　蕉
古塚に古鄕の文を捨にけり　笑
柹の棠(たう)とる童部かしまし　雪
まだ暮ぬ先より出て螢狩　宜秀
浮世の外の清水わく寺　白
嵐ふく雲間をわたる月二ッ　洞

杖にまくらに菅笠の露　江山
稲妻に時々社拝まれて　蕉
横しまの身の汗ぞ流るゝ　笑
花を見て吉野は見ずに歸りきや　白
雨に肥たる峯のさわらび　香
麥めしに鶯まねく友ならん　雪
されたる窓に鉦の音きく　山
ともし火の幽にうつる松の枝　香
出よときそふ舟のむら雨　官江
道心のとふて悲しき野邊の墓　一龍
追れて鹿の子を捨てゆく　蕉
中の秋嵯峨なる竹を伏せけり　雪
三線ちかく萩を踏折ル　香
うき人を譽ては譏る月の前　白
大勢よせて遊ぶたはれ女　香
一條や二條あたりの小袖うり　洞
亥の子告こす比叡の山風　白
ころ〳〵と雪にまぶれて千鳥鳴　江
歯朶を荷ふてかへる嶮道　雪
醉ふ時は伯父の顏さへ見忘るゝ　香
都の妹が子を産にくる　龍
機たゝむ妻戸に花の香を焚て　蕉
よき夢かたるけふのはつ春　白

○

（此巻『江鮭子』にあり。「三吟」と題す。）

白髪ぬく枕のしたやきり〴〵す　翁
入日をすぐに西窓の月　之道
あま鹽の鰯かぞふる秋の來て　珍碩
苅そろへたるか雜この柴　翁
（『江鮭子』に下七を「かしらこの柴」とす。）
河風に竹の筏のから〳〵と　道
麥の小うねをたゝく冬空　碩
齋過て一むれ歸る繩手みち　翁
頤ほそる戀聟の顏　道
とし織の帯美しう脇とめて　碩
久しき銀の出る御屋しき　翁
山公事の埒の明たる初あらし　道
かぶと谷より踊觸けり　碩
月影に鬪の蘆毛を追かけて　翁
飼もさはらも踏すべりつゝ　道
ものぐさも布子の重き春風に　碩
又も彌生の家賃たゝまる　翁
時々に花も得咲ぬ新畠　道
晝茶わかして雲雀かたぶく　碩

○

（此巻は伊賀の上野にて巻きし五十韻也。元祿二年の冬ならん。）

曉や雪をすきぬく薮の月　園風
けぶりを作る榾のけだもの　梅額
暦よむ人なき里も安く居て　半残
かはり牡丹の名をひろめけり　土芳
献々に聞することの上手なる　良品
扇の角をつぶす舞まひ　風麥

春にあふ蒔繪の鞘をさげ帶に　芭蕉

はつ神鳴に將監が簑　木白

ウ馬の鞍ふまへて手折るさくら花　額

おこせを出す注連繩のかげ　配刀

（作者名「配刀」は「配力」をよしとす。以下同じ。）

伊勢の海よごれ素襖を打すゝぎ　麥

敵の首を送る古郷　風

村人は闕の筵にこゝなりて　芳

鯖江門徒を食がりけり　品

造り出すことしの酒も甘口に　殘

月も名殘のやゝ寒きあし　刀

妹がりや溝に穗蓼の生茂り　風

ふみ書ちらす庭のばせを葉　麥

それ／＼の樂の衣裳を脱捨て　蕉

出しかけたる饅頭の汁　芳

この花に瀧を登るも今はじめ　白

肩に持ぬる供のさわらび　額

二殘る雪身に見せん里がくれ　風

放て犬の跡を追來る　麥

葬禮にしをるゝ馬の哀也　品

女咳たる竹の戸のうち　芳

後朝の亥の子の餅を配るとて　蕉

背中は寒く頭うちける　白

しぐれたる旅の巾着たよりなき　額

手をひかへみる猿澤の魚　刀

歌よめと皆／＼烏帽子かたぶけて　白

なみだもろしや賤が黛　殘

七夕にうきをかしたる染ふくさ　風

家賣て世はあじきなき月　蕉

柿の木の枝もたわゝに實を持て　麥

飛てすさまじ名や紅葉鳥　芳

ウ修行者の踏迷ひたる峯づたひ　額

北斗の星をつゝむ村雲　白

鷹の爪あかゞり寒く啼ぬらん　殘

松は一本山の神／＼　風

乞食して花に卷する薦すだれ　蕉

雉子／＼逃そこはい事なき　芳

春雨によろ／＼醉のをかしくて　刀

（「よろ／＼」は「ほろ／＼」の誤ならん。）

思はぬかたの欵冬をつむ　麥

このごろは火を焚習ふひとりずみ　品

家ぬしの來て琵琶の名をとふ　白

引かつぐ菖蒲の階子おもたげに　芳

目の塵拭て貰ふ夕ぐれ　風

月の前しかみし顏もうつくしき　蕉

礒うち／＼戀のいさかひ　刀

○

（此卷『壬生山家』にあり。元祿二年冬のものならん。『金蘭集』に「元祿七年六月廿一日大津木節庵にて」とあるは、次葉「秋近き」の卷の端作が紛淆轉移したるもの也。）

霜下り行や北斗の星の前　百歲

（『壬生山家』に上五を「霜に今」とす。）

笛の音氷る曉の橋　式之

一番ひ鶴の來て寢る松ふりて　芭蕉
まばらに刈し田面はるけし　夢牛
盃の名をあらためん暮の月　村鼓
腕おし強き露の衣手　槐市
ウ
若殿の簾の中の大わらひ　梅額
奈良の小彌宜も宿に下りし　蕉
挑灯をともせと云し鐘の音　牛
紙子羽織をすこし匂はせ　之
浦〳〵を見に行人へ物書て　巌
古き名染の家をしへけり　市
有明の飼おく鴫に餌をかはせ　鼓
（「鴫」は「鷹」の誤ならん。）
しつくりしたる青山の秋　蕉
手習のきぬを砧にうたせける　之
瓶子に添て出すしらいと　、
杖つきて上れば坊に花の論　額
（「論」は「場」の誤ならん。）
空あたゝかに〇〇（本ノマヽ）怠たり　巌
名
春の來て猿に小歌を舞せけり　鼓

翠簾の屛風に画くから獅子　額
面影にうちかざしたる唐團　蕉
夜着のうつり香風にしらるゝ　牛
はら〳〵と霰の音のすぐるなり　之
むらがる雀藪くゞりゆく　鼓
柴賣の市の歸りに酒買て　市
明日の鐘鑄の月も晴たり　之
稻妻に舟漕習ふわたし守　鼓
露に消ばや着ものゝ紋　巌
子共らが傳る家を爭ひて　蕉
千木のひまよりみゆる棟札　之
ウ
狩衣の下知の烏帽子かたむけし　額
幕をしぼればみな箸をとる　蕉
鷄のうたふも花の晝なれや　之
畑うつ跡にもゆる陽炎　市
初はるの射場やあらんと弓提て　巌
鐙に付るすみれ一ふさ　鼓

〇

（此巻『物の親』に「ひと度『山櫻』といへる集にいづるといへども、今は只名のみ殘りて、……是を後の巻に加ふるにぞ有ける」として巻尾に附載しあり。「上御靈にて」と題す。元祿三年の冬ならん。）

半日は神を友にや年わすれ　翁
雪に土民の供物納る　示右
水ひかる蘆のふけ原鶴啼て　凡兆
闇の夜わたるおも梶の音（聲）　去來
なまらずに物いふ月の都人　景桃丸
秋につき折る虫喰の杖　乙州
ウ
實入よき岡部の早田あからみて　史邦
里ちかくなる馬の足あと　玄哉
押わつて犬にくれけりあぶり餅　右
奉加に出る僧の首途　蕉
白川や關屋の土をふし拜み　來
右も左も荊蕀咲けり　兆
洗濯にやとはれありく賤が業　州
猫のいがみの聲も恨めし　丸

上は上下は下とて物思ひ　蕉
みな白張の襖なりけり　右
高麗人に名所を見する月と花　好春
春の海邊に鯛の濱燒　邦
名 晝下り寢たらぬ空に歸る鴈　兆
雨ほろ〳〵と南ふくなり　來
米ふるふ隣づからの物がたり　丸
日をかぞへても駕籠はもどらず　蕉
くだり腹短夜ながら九十度　岩
おさへはづして蚤迯しける　來
閑なる窓に繪筆を引ちらし　邦
麓の里のおてゝ戀しき　兆
首とるかとらるべきかの烏啼　右
野中に捨る錢の有たけ　春
月細く小雨にぬるゝ石地藏　邦
世はなり次第芋燒てくふ　兆
ウ 萩を子に薄を妻に家建て　蕉
綾の寐まきにうつる日の影　右
なく〳〵も小さき草鞋求かね　來
多葉粉のかたに風のうごける　哉
（「かたに」は「形の」の誤ならん。）
眞白に華表を見こむ花盛　丸
霞にあぐる鷹の羽づかひ　邦

元祿四未年

○

（此卷は近江國の宮の能太夫本間主馬方のものにして、『笈日記』大津の部に此句ありて前書あり。一般に元祿四年のものとす。路通此時江戸方面より歸來せしか。裏八句目附句參照。）

ひら〳〵と揚る扇や雲の峯　翁
青葉ほちつく夕立の朝　安世
瀬を落す舟を名殘に見送りて　支考
はなれて家を造る原中　室芽
月の歐砧の拍子乘て來る　土龍
大かた虫の手を揃へなく　丹野
ウ 傘をすぼめて戻る秋の暮　芽
窓から呼る人の言傳　翁
さつぱりと物を着かへて連を待　世
夜の明るやらしらむ海際　考
いふ事に心を付る別して　野
眞向の風に顏を吹るゝ　芽
よう肥るむす子の居る膝のうへ　翁
そろ〳〵江戸の草臥の來る　路通
手一ッでひたひらなかの恩もきず　、
ちつとの事に枝ふしがつく　○
月花を糺の宮にかしこまり　○
あゝら氣うとや猫さかりゆく　野
名 石塔を見にとてけさはとう出る　、
背丈ヶ仲たる悴氣づかう　○
こくめんな仲間が寄てふ了簡　○
豆踏出して高い駕籠かる　○
絹帶に錢をはさみて穴があく　○
名馴の町の近付もへる　○
明月の餅にあてたる關東早稻　藥文

ことしはいかうわたるあちむら　○
薑葺はしつぽりと降る秋の雨　○
いつ作りても詩は上手なり　○
女房にたゞ笑れぬ覺悟して　○
尻はれ武士の二番ばへども　○
ウ 土手筋の紫竹は杖に切たがり　野
田の草時にはやる富士垢離　○
蚊の居ずば有ものでない夏の月　○
酒しほと名を付て呑るゝ　○
病ぬいて結局まめなる花ざかり　○
どちらへむくも空はどんみり　○

（作者名「○」の分『一葉集』には記入あれど、不審のもの也。）

○

（此巻『江鮭子』にあり。之道が大津に來りてのものにして、元祿三年ならん。）

秋立て干瓜辛き雨氣かな　及肩
敷居ふまえて戸をはづす月　珍碩
早稲藁をすぐり仕まへば用もなし　之道
人はしりよる辻の放下師　昌房
膳棚もさびしくみゆる田舎旅　正秀
もがりつぶれし此ごろの風　探志
ウ 畚提て船のこけらを拾らん　碩
はすね頭の髪もたばねず　道
居ならぶ雜炊時の夕まぐれ　房

（『江鮭子』に中七を「増水時の」とす。）

神鳴おじる娘かはゆき　秀
掛ておく合羽の雫たり止ず　道
肌寒〳〵と博奕はじめる　碩
月の前風にせはしき近がつへ　秀
茶をまく也と寺のやとひ人　志
上張に鶏ぬすむ臼の陰　房
日和にむきし霜の朝明　肩
どし〳〵と椽板ぬぐふ花盛　碩
荷ひつれたる春の入草　道

（「入」は「刈」の誤ならん。）

ナ 幅廣き砂川わたる長閑さよ　志
羽織そろゆる講参りなり　肩
行にして朝起ならふ五六日　道
薬をやすむ喰物の味　翁
母親の仕立て見する嫁入夜着　秀
戀にさし出る檀那山ぶし　房
江戸店を持て在所の門がまへ　碩
麥を煎る香に咽のかわきし　道
股引の間を蚤にせゝられて　志
宵の小雨に眞竹生出る　肩
しん〳〵と圍ひの伊豫簾もる月に　秀
こゝろを告る秋のひよ鳥　肩
ウ 山畠の木練色づく風のおと　翁
石地の坂を歸るみや坊　碩
情強き瓢井の大工噺して　道
かたぎを殘す奈良の濳上　肩
野の廣さ年〴〵花を植ひろげ　秀
から〳〵とする春のあけぼの　碩

○

（此巻『折つゝじ』に去來の書殘せしものを收錄しあり。作者は本書と同じ。『幽蘭集』『金蘭集』「一葉集」等は「野童・芭蕉・路通・史邦・丈草」とす。元祿四年ならん。）

蠅ならぶはや初秋の日數かな　去來
葛のうらふく帷子の皺　翁
小灯をさはらぬ萩に掛捨て　路通
釣して來たる魚の腸　丈草
一通りみぞれに曇る朝月に　惟然
たゞそろ〳〵と背中うたする　來
ウ打明ていはれぬ人を思ひかね　翁
手水つかひに出る面かげ　通
物ほしのはづれかゝりて危けれ　艸
取揃へたる芝の小ざかな　然
夕間暮煙管落して立歸り　來
泥うちかはす早乙女のざれ　翁
石佛いづれ欠ぬはなかりけり　通
牛の骨にて牛作らばや　艸
酒の德數へ上ては醉ふさり　然
室の八嶋に尋あひつゝ　來
陸奥は花より月の樣〳〵に　翁
唖の眞似するころのうぐひす　通

（「ころ」は「こち」の誤ならん。）

ナ餅すきの友をほしがる春の雨　艸
衣小刀にしむる卷藁　然

（『金蘭集』上七を「我小力に」とす。）

物申は誰ぞと窓に顏出して　來
疹(はしか)してとる跡のやすさよ　翁
片足づゝ拾ひ次第の古草履　通
あす作らふと雪になく鳥　草
供多くつれしも駕の靜なり　然
畑の中に落る稻づま　來
崩井に熊追入れし夕月夜　翁
松割鑿の見へぬ露けさ　通
やさし氣に手打かぶりを敎そめ　艸
御簾の外面にならぶ侍　然
ウ子規こゑ〳〵鳴て通りけり　來
畑の中におろすはや桶　翁
この嶋も片側ばかり立揃へ　通
食苞ほどく菅笠のうへ　草
佛にはかたみの花を奉る　然
茶をつむ髮の白き曙　來

○

（此巻『夕顏の歌』にあり。「古寺翫月」と題す。此句の推敲に關する事は俳句集に記したり。元祿四年大津にてのものならん。）

月見する坐に美しき顏もなし　翁
庭の柿の葉簑虫になれ　尚白
火桶ぬる窓の手際の身にしみて　、
別當どのゝふるき扶持米　翁
尾がしらのめで度かりつる鹽小鯛　、
百家しめたる川の水かみ　白
ウ寂寞と參る人なき藥師堂　、
雨のくもりに晝蚊痳させぬ　翁

一むしろなぐれて殘る市の草　白
這かゝる子の飯つかむ也　翁
いそがしとさがしかねたる油筒　白
ねぶとふまれて別わびつゝ　翁
月の前おさへてしひる小屋のもの　白
枯梗かるかや夜すがらの虫　翁
信發る髪は黄色に秋暮て　白
（『夕顔の歌』に上五を「位散る」とす。）
大工の損をいのる迁宮　翁
三石の猿樂やとふ花ざかり　白
八ッさがりより春の吹降　翁
鳫かへる白根に雲の廣がりて　白
打乘る馬にすくむ袗まき　翁
商人の腰にさしたる綿秤　白
ものよくしやべるいはらしの顔　、
韮の香に寄も添れぬ戀をして　翁
暑氣によわるみな月の蚊帳　白
蜩の聲盡したる玄關番　翁
高宮直ぎる盆もきにけり　白
薏苡仁に栗の葉向の風立て　翁
隨分細き小の三日月　白
高取の城に上れば一里半　翁
さても鳴たる子規かな　白
西行の無言の中の夕まぐれ　翁
小草ちら〳〵野は遙なり　白
薄雪のやがて晴たる日の寒さ　、
水くみかけて捨る宵の茶　翁
窓明て雀を入るゝ軒の花　、
折かけ垣に色〳〵の蝶　白

○

（此卷は本書以前の單行本に見えざるもの、元祿四年ならん。）

御明の消て夜寒や鬱むし　探志
月さしかゝる庭のこね土　正秀
旅の空國は茶をまく頃ならん　昌房
手拭帶のしめぢからなき　盤子
廣敷の草履を人に直させて　翁
又こがしたる魚の燒やう　及肩
窮屈に顋髭ばかりはやし置　楚江
鬱をすかす赤金の鍔　志
山づたひ伊賀の上野の年ふりて　秀
狂歌の集をあみかゝりけり　翁
出來合のものふるまはん初しぐれ　子
小鳥とび立そば垣のうへ　房
名月にかりそこなひし戻り馬　秀
新酒の醉のほき〳〵として　江
語る事なければ君にさし向ひ　翁
手のふるふとて書なぐる文　志
咲花のはれに疊の表がへ　肩
傘ほせる宵の春雨　房
かへる鳫おのが一くみ打つれて　秀
日高にとまる足よわの旅　子
見るばかり細工過たるもみ佛　江
湖水を呑で胸にさはらず　翁
隱家はもの靜なる勢田の奥　房

鹿のおどしのつゞく松明　秀
むさくさと太鼓咄しに月更て　志
名殘を惜む庭のらん菊　吟松
みちのくや勅の草紙を書仕舞　子
心にたらぬかろき膳立　秀
相組に男所帯のきれいずき　房
おはるゝことに法華あらそふ　翁
（「おはるゝ」は「たはるゝ」の誤ならん。）
一振（ういちぶり）の關より西は能登の國　秀
淨瑠璃やめて説經にする　子
風筋に片はら町を吹まくり　肩
馬にのりても鐘をかたげる　江
誰が藏ぞ白土付るはなの春　房
海から見えてのどかなる松　翁

〇

（此卷は成秀亭十六夜の月見の時のものにして、元祿四年也。俳文集「既望賦」參照。此卷は『十六夜集』『堅田集』等にあり。）

やすくと出ていざよふ月の雲　翁
舟をならべて置わたす露　成秀
ひらめきて咲も揃はぬ萩の葉に　路通
鍋こそげたる音のせはしき　丈草
とろくと眠ればたほる駕の醉　惟然
城とりまはす夕立の影　猪睡
ウ
我ものに手馴る鋤の心よき　正則
石の鳥居の書付をよむ　楚江
鸛鶴（かうづる）の森を見かけてきほひ行　勝重
衾つくりし日は時雨けり　葦香
拍子木に物くふ僧のうち連て　兎苓
瀧を隔る谷の大竹　正秀
月影にこなし置たる臼の上　則
たゞちらくときりくす鳴　重氏
糊こはき袴に秋を打うらみ　重古
鬢の白髮を今朝見付たり　翁
年くの花にならびし友の數　草
きしる車もせかぬ春の日　則
ナ
蔦の巣の下は芥を吹落し　睡
さゝやく事のもろき聲也　正幸
（「堅田集」下七を「もろ聞えなり」とす。）
なげきつゝ文書うちは戸をさして　江
いくらの山に添ふて來る水　苓
汗臭き人はかならず遠慮なき　香
せめてしばしも煙管はなさず　然
風やみて流るゝまゝのわたし舟　秀
只一しほと賴む染もの　通
はしくは古き都の荒殘り　紫萊
月見を當にやがて旅だつ　草
秋かぜに網の岩やく石の竈　苓
粟ひる鰈の夕部さびしき　睡
ウ
片輪なる子はあはれさに捨のこし　通
身細き太刀のそる方を見よ　重成
長椽に銀土器を打くだき　柳沅
ほとゝぎす鳴て夜は明にけり　秀
職人の品あらはせる花の陰　紘五

南おもてにめぐむ若草　香

○

（此卷は元祿四年のものならん。『袖草紙』は出自として『菊の露』を擧げたるが、此書未だ發見せられずと云ふ。）

うるはしき稻の穗並の朝日かな　路通
鴈もはなれず溜池の水　昌房
白壁のうちより砧うち初て　翁
蠟燭の火をもらふ夕月　正秀
たのまれて銀杏の廣葉かち落す　野徑
（「かち」は「うち」の誤ならん。）
すがりて乳をしぼる狗の子　乙州
[ウ]關守にはやなじみたる噺ずき　晝好
身は沓賣と成て悟りし　珍碩
天窓つき春と秋とは定まらず　盤子
金掘に入る洞のともし火　里東
田の中にいくつも鶴のうち並び　探志
芝居の札の米あつめけり　游刀
御嶽より駕籠の自由な旅の道　秀
夜寒にしむる帶のほころび　通
月影の二階に鐘をつき上て　好
蕎麥の匂ひにむせて下積　東
（「むせて」は「むせる」の誤ならん。）
陽炎や海手の花の盛なり　刀
東風吹しをる菊水の旗　子
[名]鴨の囀りながらくるふらん　秀
豆腐上手に揚て客まつ　碩
うらみある義理を語りて泪ぐむ　州
曇れと捨しもとの姿鏡　通
うすやうに書手もふるき筆の跡　翁
潮さし來る月の廻廊　秀
くれの露岩屋の坊主うち覗　子
みなおのが音を鳴からす虫　州
弓と矢もまだいたいけに膝まづき　碩
白髮さし出す簾のあはせめ　翁
ほとゝぎす奇麗に膳を拭立て　好
夜の間に延る竹の子の篠　徑
[ウ]文はまづ三史文選うつし書　通
（「書」は「出」の誤ならん。）
坐祿おしやる晝のうたゝ寐　刀
押へたる鼠を綛に取はづし　房
草履ふみこむ居風呂の漏　子
內裏たつほどは在家を花の宿　碩
燕の出入にぎやかな壁　徑

○

（此卷『後の旅』にあり。「元祿四年の初冬茅屋に芭蕉翁をまねきて」と此句の前書あり。）

もらぬほどけふは時雨よ草の屋根　斜嶺
火をうつ音に冬のうぐひす　如行
一年の仕事は麥にをさまりて　芭蕉
垣ゆふ舟をさし廻すなり　荊口
打連て弓射に出る有明に　文鳥
山雀籠を提る小坊主　此筋
[ウ]秋風に鍋かけわたす長圍爐裡　左柳
疊のうへを草鞋でふむ　恕風

蝙蝠の喰破りたる御簾のへり　行
念佛の聲の細う聞ゆる　殘香
わかれんとつめたき小袖あたゝめて　千川
をさなきどちの戀のあどなき　蕉
奥住居留主の表は戸をしきり　ロ
米舂さしてもの買に行　嶺
鞍下す馬は霙をうちはらひ　筋
峠に月のさえて出かゝる　鳥
初花の京にも庵を造らせて　蕉
目利で春を送る也けり　柳

○

（此卷『茶のさうし』にあり。「元祿辛未冬」と題す。芭蕉が東歸の際、三州新城の太田家を訪ひし時のもの也。）

その匂ひ桃よりも白し水仙花　芭蕉
土屋藁屋のならぶ薄雪　白雪
朝から嘴ならす鳥の來て　桃隣
はやう野分の吹てとるなり　蘆鳫
洗濯のいとまをもらふ宵の月　支考
野郎にわたすきり／＼す籠　以之
ウ　寢所は囉ひ集めた綸を押て　扇車
なにうたひやら鼻聲でやる　淡水
わかれ路の出ばつた石に腰かくる　桃先
藪いたちめが仰山に出た　桃後
水くみに目こすりながら戸を明て　桃鯉
みやこのかたも定まらぬ秋　雪丸
花すゝき若き坊主のもの狂ひ　雪
額やぶれたる白雲の月　蕉
猪の追れて歸る哀也　水
茶ばかり呑てけふも旅立　考
散はなに薄き化粧のところはげ　之
二月の雛のとつつけもない　先
名　おもしろき霞の中のこけら屋根　鳫
小鯛も鰡もとれるいせ次郎　隣
（「次郎」は「うら」の誤ならん。）
黒崎の濱は鳥の啼連て　後
雨にならふか西のつかえし　丸
籠つくる側にあぶなく目を塞ぎ　鯉
松葉の埃の煮る鍋ぶた　蕉
雉子笛を首に懸たる狩の供　丶
雪ふりこみてけふも鳴瀧　隣
にこ／＼と生死涅槃の夢覺て　考
院も白髪をわび給ひけり　後
やはらかに鶴啼ふかす夜の月　丸
須磨の礒は下手で持たぞ　蕉
ウ　あの家ははやう新酒をしぼらるゝ　之
馬繋いだる門の竹垣　鳫
干ものゝ筵かゝゆる一しぐれ　先
顏のしかみて黒き小倅　雪
咲花に獅子のさゝらを揩ならし　車
むらをはさんで肥るわか松　水

芭蕉翁俳諧集　中終

芭蕉翁俳諧集　下

元祿五申年

○

（此卷は『若菜』にあり。歌仙に二句を缺く。本書はじめ諸書「赤人」「かはらけ」の二句を附加するは誤ならん。元祿二年のものと推定す。）

こんにやくにけふは賣かつわかなかな　翁
吹揚らるゝはるの雪はな　嵐雪
歸る鴨かへらぬ鴨もさわだちて　、
七曜山をいでかゝる月　翁
町作り栗の焦たる砂ばたけ　、
露霜くぼくたまる馬の血　雪
ウ坊主とも老ともいはず追立歩　翁
土の餅つく神事恐ろし　翁
生篠に燃つく烟雨となり　雪
日暮て殘る杣の切かけ　翁
眞白な鹽なき飯をつき向て　雪
泪に顏をよごす目ぐすり　翁
舌根の念佛に疲る居士衣　雪
小城は稻の中にすつたち　翁
杖でうつ座頭が砧上手なり　雪
膝行ふ便や姨捨の月　翁
散花に垣根をうがつ鼠宿　雪
陽炎おもき籾の下じき　翁
名身のうきや弟子の見繼に春も立　、
（下五「春立て」の誤ならん。）
いづみのかつら桶の名に取　雪
柴垣のふるき都は破まさり　翁
讀はよんだり椎はくろいし　雪
（「讀は」は「讀みも」の誤ならん。）
年寄のしのびてわせる秋のかぜ　翁
髮切る宵の月ぞひかめく　雪
長門より西の噺の根問して　翁
粥に玉子は何と喰らん　雪
山茶花の後は水仙梅つばき　翁
雪に鞍おく〳〵貫の馬　雪
やどりせん大江の岸は八軒屋　翁
削りへらした狀箱の蓋　雪
ウ御謀反もまづ調はぬ金のさた　翁
禰宜の袂に神もうそつく　雪
花曇り鮑も物やおもふらん　翁
誰こい〳〵と田鶴わたる春　雪
赤人の今一しほの酒機嫌　珍碩
（「赤人の」は「赤人も」の誤ならん。）
かはらけ臭き公家の振舞　翁

○

（此卷は元祿五年ならん。五十餘年を經て『百囀』に發表せられたるもの也。）

うぐひすや餅に糞する椽の先　翁
日は眞すぐに晝のあたゝか　支考
養父入はたゞやぶ入と見せかけて　、
なぐさみながら籌もつなり　翁
むら烏月夜〳〵に鳴て居る　考
風もふかぬに笹の葉の露　、
ウ歌の會すみかゝる時はだ寒き　翁
臺子の間にもすわるさぶらひ　、
ぐはら〳〵と音する物を聞にやる　翁
瓦がよれは諸願成就　、
二三年立のは夢の其ごとく　考
髪をはやして見違る顔　、
座敷には行灯つけるくれの月　翁
機織るきぬは角力取の帯　、
何所の田へ行やら鴈の鳴連て　考
夜明の星のまだひとつあり　、
御供に常陸の介も花ごゝろ　翁
白い鸚鵡に紅の飛入　、
名陽炎の傘ほす側に燃にけり　考
手紙を以て人の名を問　、

（「以て」は「持て」の誤ならん。）

本膳が出ればおの〳〵かしこまり　翁
金を崩して錢を積おく　、
松風のずん〳〵と吹夜半過　考
捨子が有と告る門番　翁
湯は水のやうに成たる手水桶　考
馬一疋に留主を預る　、
小調市の時から居たる奉公人　翁
瘡がなければ女房とりもつ　、
出た口に涼しい月の入かゝり　考

（「出た」は「むだ」の誤ならん。）

あの榎から蚊ばしらの立　、
ウ二の丸の光かゞやく金屏風　翁
雨も上つてほんの朔日　、
さら〳〵と茶漬の飯を喰しまひ　考
口上いふてかへす若黨　考
氏神の花も盛に咲揃ひ　、
鳥居にこして伸る青柳　、

（「に」は「を」の誤ならん。）

元祿六酉年

○

（此卷『春と秋』にあり。『一葉集』は元祿四年とす。されど四年正月頃は路通は江戸に在り、芭蕉は大津に在りたり。又六年には路通芭蕉より遠ざかり居りたれば、此卷は元祿三年と推定すべきか。）

水仙は見る間を春に得たりけり　路通
窓の細目に開く歳旦　李沓

（作者「李沓」は杏沓の誤ならん。『一葉集』は「殘香」とす。）

わが猫にのら猫どもが鳴侘て　芭蕉
ほし忘れたる衣張の月　龜仙
槿に入らぬ糸瓜のからみあひ　泉川（本ノマヽ）
仁といはれてわたる白露　執筆

ウ 聟入に茶賣も己が名を替て　杏
戀に古風の殘る奥すぢ　蕉
めづらしき歌書付て覺ゆらん　仙
形もおかしう育つ賤の子　通
此里に持つたへたる布袴　蕉
餅そなへおく名月の空　杏
はら〳〵と葉廣柏の露の音　川
一むれあぐる雁の朝啄　仙
折ふしは鹽屋迄來る物貰ひ　通
亂より後はしらぬ年號　蕉
猪猿や無下に見殘す花の奥　川
雪のふすまをまくる春かぜ　通
名 この石の上をうき世に年とりて　蕉
彼岸に入ると鐘きこゆなり　仙
行違ふ中にわが子に似たるなし　杏
いはぬおもひのしるゝ溜息　川
元結のほつれてかゝる衣かづき　通
人の情を榾に柴かく　蕉
語つゝ萩さく秋の戀しさを　仙
頭陀袋さがす木曾の椽の實　通
（「頭陀」は「陀」の誤ならん。）
月の宿亭主盃もちいでよ　蕉
朽たる舟の底つくりけり　杏
唐人のしれぬ詞にうなづきて　川
しばらく俗に身をかへる僧　蕉
ウ 飼立し鳥もこのごろ見えぬ也　通
堤の家を降しづむ雪　川
（『春と秋』に下七を「降うづむ雪」とす。）
曙は筏のうへにたく篝　仙
赤きかしらを撫る青柳　通
花ざかり靜が舞をかたみにて　蕉
うぐひす遊ぶ中だちの聲　杏

○

（『此巻『幽蘭集』にあり。元祿二年とす。）

衣裳して梅あらたむる匂ひ哉　曾良
蝶めつらしき入口の松　前川
掃よせて消る雪をやかこふらん　路通
石のくぼみに墨を摺けり　芭蕉
月移る臺の薄をふみ敷て　川
のたうつ猪のかへる芋畑　通
ウ 賤の子が待戀ならふ秋の風　蕉
あかね染ほす倉の面影　良
（「倉」は「窓」の誤ならん。）
あぢきなく落殘りたる國の脇　川
寺のものかる罪の深さよ　良
振上て杖あてられぬ犬の聲　通
聟の利發を町にひろめん　川
手造りの酒の辛みも付にけり　良
月もこよひと見ぬ馬の市　蕉
（『幽蘭集』上七を「見ん驢馬の市」とす。）
狩衣を礎の主にうちくれて　通
我をさな名を君はしらずや　蕉
花の顏室の湊に泣せけり　通
古巣の鳩の子を持ぬころ　良
ナ 講堂に僧たちならぶ春の暮　川

流れに立る惡水の札　良
戸に生膾箸ならす注連の内　蕉
(『幽蘭集』上五を「形代に」とす。)
こぼるゝ星の寒き霜風　通
取葺も哀也けり不破の關　良
(『幽蘭集』上五を「屋根葺も」とす。)
植おくれたる田の中の小田　川
子規痩てや空に啼つらん　通
わがものおもひうき世一人　蕉
此戀をいはむとすればどもりにて　川
打れてかへる中の戸の御簾　蕉
柊に目をさすほどの星月夜　良
つらのをかしき谷の梟　通
ウ 火を焚て岩根の洞に冬籠　良
國も半にのこす順禮　蕉
おとろふる父の白髪を氣にかけて　通
折に載たる草のはつ物　川
入すぎてあまり吉野ゝ花の奥　蕉

何がなにやら春のしら雲　川

○

(此巻は元祿六年なるべし。『續寒菊』にあり。)

五人扶持とりてしだるゝ柳かな　野坡
日より〳〵に雪解の音　芭蕉
猿曳の月を力に山こえて　、
そこらをかける雉子の勢ひ　坡
跋うなりてもあけぬ北の窓　、
德利にほふて酢を買に行　蕉
ウ 丸三年旅から旅へ旅をして　、
境の公事の今に埒せぬ　坡
眞白う松も櫻も鳥の糞　、
うき世の望みたえて鐘きく　蕉
瘦腕に栗を一臼搗しまひ　、
藪入せよとなぶられて泣　坡
鷄頭も頰かぶりする秋更て　、
はねうちかはす鴈に月影　蕉
口〳〵にとしの酒をこゝろみる　蕉
ちかい佛へ朝のともし火　坡
咲花に十府の菅菰あみならべ　、
はや菜畑の摘しほが來る　蕉
ナ さら〳〵とよどまぬ水に春の風　蕉
鐺の迎に夕日ちら〳〵　坡
行義ようせよと子共をねめ廻し　、
やき味噌の灰ふきはらひつゝ　蕉
一握りくゝりあつめし居狀　、
けふも粉雪のどつかりと降　坡
おは黑をもらひに中戸さし覗き　、
むかしの榮耀今は苦にやむ　蕉
市原にそこはかとなく行〳〵子　、
神拜むには夜が尊とい　坡
月影に小學仲間の誘ひつれ　、
蕎麥うつ音を響る肌寒　蕉
ウ はら〳〵と桐の葉落る手水鉢　、
書付てある釜の稽古日　坡
やう〳〵とかきおこされて髮けづり　蕉

猶可愛がる人ぞ戀しき　坡
あの花の散らぬ工夫があるならば　蕉
持めのうへに色／＼の蝶　筆
（此巻は本書を初出とす。元祿五年ならん。）

○

水音や小鮎のいさむ二俣瀬　湖風
柳もすさる岸の刈株　翁
見しりたる乙切草の萌出て　沾蓬
刀の柄にくゝる状箱　利牛
食傷の腹をほしけり朝の月　風
晝寢て遊ぶ盆の友達　翁
ウ
小構えに家は木槿の取廻し　桃隣
錢一文に下駄をかる道　牛
菎蒻の色の黒きもめづらしく　蓬
祭のすゑは殿の數鑓　曾良
見るほどの子共にことし疱瘡の跡　翁
古き簾にころ蚊をつる　風

小さうて砂場をありく原の馬　牛
畚を擔て誰が喰そめ　隣
月影の臼も佛の臺座也　翁
盗人かへる蔦の朝しも　蓬
沓掛の峠ほのかに花の雲　良
けふも野あひに燕うつ網　風

○

（此巻は里圃の『翁草』にあり。元祿六年と推定せらる。）

朝顏や夜は明きりし空の色　史邦
おのれ／＼と蚯蚓鳴やむ　沾圃
舛落しまたぬに月は出にけり　翁
廊下口までゆるす板の間　魯可
（作者「魯可」は「露荷」と同じ人ならん。）
はやらかす酒に息子の智惠賣て　圃
栗丸太きる川上の山　邦
ウ
ころ／＼と形のをかしき石拾ふ　可
寺にかへりてすわる麥めし　翁

雨過て白く咲たる茨の花　邦
祖父(おほぢ)のふぐりの柴に取つく　圃
（「ふぐりの」の「の」は衍ならん。）
子共みな貧乏神と名を呼で　翁
繪馬をかくる年越の宮　可
きく／＼と雪ふむ道の薄明り　圃
見世をたゝきて日はり出する　邦
（『翁草』下七を「目ばる出する」とす。『金蘭集』は「日割書する」とす。）
鐵棒を戸塚の宿の傳馬觸　可
腹疫病のはやりしづまる　翁
すんすりと苗代めぐむ花の色　圃
光かすまぬいせの有明　可
ナ
春風に吹しほらかす袈裟衣　邦
質にながるゝ百兩の家　圃
色わるく痩たる顏も化粧して　可
薫(くん)じわたりし白無垢の夜着　邦
穢土(ゑど)厭離(おんり)うちさそはるゝ鐘の聲　翁

辨當ほどくもとの居屋敷　　可
うき事の佐渡一番を書立て　　圃
名古曾こへゆく兼裁の弟子　　翁
かぢけたる紅葉は松の間〱に　　可
袂をぬらす雫の月蝕　　圃
御しとねの上さへ風は身にしみて　　邦
愛らしげにも這まはる兒(ちご)　　可
ウ すゝめとて直に院家(かんげ)の廻らるゝ　　里圃
夏も小野にはうぐひすの鳴　　乙州
雨降ればめつたに土の匂ひ出　　圃
繩でからげし家ゆがみけり　　里
鹽ものに咽かわかする花盛　　州
奈良はやつぱり八重櫻かな　　圃

(此卷『袖草紙』は其出自として『鄙懷紙』を擧げたれども、同書未だ發見されず。『金蘭集』は「酉霜月」と前書を附けたり。之に從つて元祿六年のものとす。)

○

芹燒やすそ輪の田井の初氷　　翁
擧(こぞ)るも寒し卵うむ雞　　濁子
(『續繪歌仙』上七を「拳も寒し」とす。)
織下す絹を莚にひろ取て　　凉葉
折〱凉む裏の柿の木　　翁
薄月夜蝸だはらの腥く　　子
汐くむ牛もみえぬ朝霧　　葉
ウ 露霜の小村に鉦をたゝき入　　翁
榎の木の末に殘るしめ繩　　子
あさり飛土くれ鳩の賑しく　　葉
堀は開きにならぬ石はら　　翁
日ざかりは孫に吸筒提させて　　子
和田秩夫ともひとり若黨　　葉
(「夫」は「父」の誤ならん。)
掛乞の來ては詞をあらしけり　　翁
余所よりくらき月の枝折戸　　子
虫とりとしらで聟の居れて　　葉
松も薄も念佛のたね　　翁
富めば猶命なりけり花の陰　　子
破籠(わりご)はさめぬうぐひすの聲　　葉
名 雪國は春まで馬も繋れて　　翁
日記つまりし一帖の紙　　葉
旅宿や長き五月の船泊り　　子
名殘をかせぐ安藝の廣嶋　　翁
音信は見しらぬ伯母も懷しく　　葉
元米はかる酒の奥殿　　子
燒立て庭に饗する暮の月　　翁
卷葉も肌寒き風おと　　葉
寄聟は假諸大夫によそほひて　　子
うき名を辰の市で戀する　　翁
よい嶋と模様を譽て詠やり　　葉
葉茶壺なほす床の片隅　　子
ウ ほとゝぎすすはやと蚊屋を釣かけて　　翁
湖水もしらむ瀬田の朝鴉　　葉
薄雪の上に霞のころ〱と　　子
俵の塵をたゝく荒もの　　翁
折はなに子供のすがる袋町　　葉
わか松植る天神の宮　　子

元祿七戌年

○

（此卷は元祿七年の夏之道が大阪より來りし時、「落柿舍卽興」のものにして、『續有磯海』に收錄しあり。）

牛流す村のさわぎや五月雨　諷竹
青薬吹きる栴檀の花　去來
一枚の筵に晝寐おし合て　芭蕉
柄(つか)も小尻も古き脇ざし　惟然
月影に苞の海鼠の下るなり　丈草
堤おりては田の中の道　支考
ウ 家〳〵はなよ竹原の間にて　來
御齋は月に十五盃あり　竹
秋もやゝけさから寒き袷がけ　然
鷹より鴨のはやう來て居る　野明
抱込て松原廣き有明に　考
あふ人ごとの魚くさきなり　蕉
雨乞のしぶりながらに降出して　草
紡苧(うみを)をみたす櫛箱の蓋　然
極樂でよき居所をたのみやり　竹
しはぶきながらうき世經にけり　來
（『續有磯海』上七を「しはうきたなう」とす。）
道もなき畠の岨の花ざかり　草
半夏を雉子のむしる明ぼの　考
名 川舟のにごりて下すうす霞　明
塔に上りてきゆる白雲　然
賣に出す竹の子掘て惜らん　考
茶時の雨のめいわくな隙　竹
この頃の上下の衆の戻らるゝ　來
腰に杖さす宿(しく)の氣違　蕉
藁葺に夕顏の形の重たくて　然
（「夕顏」は「夕瓠(ゆふこ)」の誤ならん。）
ちら〳〵鳥のわたり初けり　明
朝の月起〳〵たば粉五六服　竹
分別なしに戀をしかゝる　來
蓬生におもしろげつく伏見脇　蕉
加減をせゝる淺漬の桶　然
ウ 出來てくる靑の下染氣に入て　明
なにをげら〳〵笑ふ髮結　竹
吸物で坐敷の客を立せたる　來
肥後の相場をまた聞て來る　蕉
（「來る」は「來い」の誤ならん。）
幾日路か花見の連にさそはれて　然
（『續有磯海』上五を「幾くちか」とす。）
日癖になりし春の雨かぜ　明

○

（此卷『鳥の道』にあり。又『雪の薄』にあり。「元祿七年六月廿一日、大津木節庵にて」と端作あり。）

秋ちかきこゝろのよるや四疊半　芭蕉
しどろにふける撫子の露　木節
（「ふける」は「ふせる」の誤ならん。）
月殘る夜ぶりの灯影うち消て　惟然
起ると澤に下るしら鷺　支考
降まじる霰みぞれの一頻　節
手のひらふいて糊細工する　蕉
ウ 夕食をくはで隣の膳をまち　考

何の箱ともしれぬ大きさ　然
宿〳〵で嘶のかはる喧嘩さた　蕉
うち〳〵蚕のせゝる獨寢　節
佛檀の障子に月のさしかゝり　然
梁から弓の落る秋かぜ　考
八朔の禮はそこ〳〵仕廻けり　節
舟荷の鯖の時分はづるゝ　蕉
西美濃は地低に水の出る所　考
もち寄にする醫者の草庵　然
結かけて細縄たらぬ花の垣　節
足袋脱でほす晝の陽炎　考
年禮にちひさきやつら供させて　蕉
かくすたよりを立ながらきく　節
行燈の上より白き額つき　然
疊に琵琶をどつさりとおく　蕉
半蔀は西面に雨を見るやうに　考
（『鳥の道』中七を「四面に雨を」とす。）
竹の根をゆく水のさら〳〵　節
した〳〵と京への枇杷を荷ひつれ　節
嫁と娘にわる口をこく　考
客はみな寒うてこぞる火燵の間　蕉
置わすれたる物さがすなり　節
髮結て番に出る日の朝月よ（夜）　然
木に十ばかり柿をたしなむ　蕉
滿作に中稻仕廻て節祭　考
（『鳥の道』下五を「喰祭」とす。）
桶も盥もあたらしき竹輪　然
投うちをはづれて猫の迯ありき　節
首に物をかぶる掃除日　考
花咲て茶摘はじまるうらの山　蕉
つゝじの肥る赤土の岸　然

〇

（此卷は『初便』にあり。「戊七月廿八日猿雖亭夜席」と端作したり。『芭蕉門古人眞蹟』に芭蕉添削のまゝを出せり。）

あれ〳〵て末は海ゆく野分哉　猿雖
鶴のかしらを擧る粟の穂　芭蕉
朝月夜駕籠にやう〳〵追付て　配刀
茶のけぶりたつ暖簾の皺　望翠
がつたりと枴をおろす雑水とり　土芳
窮屈さうに袴着るなり　卓袋
燭臺の小さき家にかゞやかし　蕉
名主と地下と立わかる制　翠
燒飯は割ても中のつめたうて　、
おもひ崩さず出ぬ暗がり　芳
此ごろは扇の要しならひし　苔蘇
湖水の面月を見はらす　刀
脇さしの小尻の露を拭ふ也　袋
角力に負ていふ事もなし　雖
山かげは山伏村の一かまへ　蕉
崩かゝりて軒の蜂の巣　袋
燒さして柴とりに行庭の花　芳
土かきさがす春の風筋　蕉
坪割の川除の石つみ上て　翠
日南〳〵に虱とりあふ　蘇

大名の供の長さの果もなき　刀
向ひの嬶の起る血のみち　雖
一舛の代を持來る酒の粕　蕉
盥の底に霰かたまる　翠
燈の革屋細工の夜は更て　芳
鼬のこゑの棚もとのさき　刀
箒木は蒔ぬに生て茂る也　蕉
うす帷子のしめる三日月　雖
神主は御供を持て上らるゝ　翠
しばらく岸にやすむ筏士　袋
ウ衣着て旅するこゝろ靜なり　蕉
兜へはいる鬮のわかれ戸　芳
(「兜」は「加太」、「戸」は「所」の誤ならん。)
耳たぶをそがるゝやうに横しぶき　雖
行儀のわろき雇ひ六尺　袋
大ぶりな蛸引上る花の陰　刀
米の調子のたるむきさらぎ　蘇

○

(此卷元祿七年伊賀の上野のものならん。『壬生山家』に編入せり。)

つぶ／＼と箒をもるゝ榎の實かな　望翠
竹のはづれを初あらし吹　惟然
朝月に鷄さきへ尾をふりて　土芳
すればするほど豆腐賣きる　雪芝
大八の通りかねたる細小路　猿雖
師走の顔に編笠も着ず　芭蕉
ウ痩ながら水仙ひらく川表　卓袋
野中へ牛の綱ほどきやる　九節
嫁入の來て賑な門まはり　芝
杖と草履をあづかりておく　翠
一くらゐ景色立たる月夜かげ　然
鱸釣なり鎌倉のうら　雖
大鳥のわたりて田にも畠にも　蕉
蕎麥粉をふるふかたびらの裾　袋
立ながら文書ておく店の端　雖
錢持手にて祖母の泣るゝ　蕉
眞丸に花の木陰の一かまへ　芳
どこやら寒き春の北かぜ　雖
名旅籠屋え雲雀が鳴ば出立焚　芝
習ひのわるい子を譽る僧　袋
冬枯の九年母をしむ霜覆ひ　蕉
たま／＼すれば居風呂の漏　翠
持鑓の一間所にはいりかね　芳
あ房つかへば皆つかはるゝ　節
宵の口入みだれたる道具市　然
茶の香ごろのぬるき小藥罐　雖
間があればまた見たくなる繪のもやう　芝
共に年よる逢坂の杉　蕉
有明にしばし隔て馬と駕籠　袋
露しぐれより頭痛やみけり　節
ウ引たてゝ留主にしておく萩の門　芳
ひとりたまかにはこぶ古竹　芝
ふら／＼と煙管に付る貝のから　雖
いくつ嚔の續く朝かぜ　然
さは／＼と花の(ホノマヽ)大手に　翠

（『金圖集』中下を「花の浪よる大手先」とす。）

柳にまじる土手のわか松　袋

○

（『笈日記』によれば、此卷は元祿七年九月三日、支考の伊勢より上野に來りし時のもの也。本書初出なるが如し。）

松茸やしらぬ木の葉のへばりつき　翁
秋の日和は霜でかたまる　文代
宵の月河原の道を中程に　支考
ことしはきけて里の賣家　雪芝
（「きけて」は「わけて」ならん。）
四五人で万事をしまふ能太夫　猿雖
いきりし駒に鞍を置かね　望翠
ウ　けさの雪この頃よりもたつぷりと　惟然
屛風疊で膳すゆるなり　卓袋
段〳〵に上州米の取さばき　代
わか手の象はそりのあはざる　考
鼠ゆく蒲團のうへの氣味わるく　芝
風になりたる八專の雨　雖
いそがしき躰にも見えず木藥屋　翠
三年立（たゝ）ど嫁が子のなき　翁
鷄の白きは人にとらせけり　袋
彫（きざ）みもはてぬ佛あかつく　荻子
はつ花の垣に古竹結わたし　然
道はかどらぬ月の朧さ　代
ナ　はら〳〵と雉子に小鳥のおどされて　袋
鹿が谷へも豆腐屋は行　考
年切（ねんぎれ）の小さい顏に角（すみ）を入　雖
水風呂の湯のうめ加減よき　子
二三本竹切たればかんがりと　考
愛宕の燈籠ならぶ番小屋　翁
醉ほれて枕にしたる駕籠の椽　雖
花ぎつしりと付し水仙　芝
味噌賣の宵闇〳〵に音信て　代
木綿を藍につきこみにけり　袋
有明に本家の籾を磨しまひ　然
茄子畠にみゆる露しも　子
ウ　此秋は螟のはれを煩ひて　翁
僧と俗との坐のわかるなり　翠
呵るほどよふ焚付ぬ竈の下　芝
芝切入て馬屋葺ける　考
花寒き片岨山のいたみ咲　雖
春の日南に晝のしたゝめ　代

○

（此卷も亦『壬生山家』にありと。元祿七年のものならん。）

殘る蚊に袷きてよる夜寒かな　定
（作者名「定」は敬意を表したる略字ならんも、其誰なるやは未考。）
餌畚ながらに見するさび鮎　芭蕉
夕月の光る椿は實になりて　土芳
うす柹いろに咲る雞頭　風麥
身をそばめ二人連たつ在鄕道　虎
（作者名「虎」は「玄虎子」ならん。）

こふちかけおく霜の明ぼの　苔蘇
楪萱を目利のうちにかた付て　蕉
つりて聳き門の鍔口　定
大木の梢は枝のちゞむなり　麥
野に麥をしくこかす俵物　芳
山ぶしについ成てきて札配る　蘇
一里行ても宿をとるたび　吊
掛ものゝ布袋の顔に月さして　定
百の灸にきり〴〵す鳴　蕉
秋かぜの雨ほろと〳〵川のうへ　芳
かち荷は舟をまづ上るなり　○
美濃山は殘らず花の咲揃ひ　蕉
とてもするなら春の順禮　蘇
ナながき日の西に成たる切目椽　吊
哀にぬるゝ雨の白鷺　定
のがれぬやよそからは來ぬ冬の來て　麥
柴焚くかげに遊ぶ夜すがら　芳
寒竹の杖の節よむ老のわざ　虎
しらぬ山路を馬にまかせて　○

くれるより寺を見かへる高燈籠　○
薄のかげにすつる帯だめ　○
むげなれや月にとはるゝ人も哉　○
琵琶のいはれをかたる竹椽　○
（作者名○の五句を『一葉集』は「虎・芝・蕉・芳・麥」とす。）
おもひ切跡より泪つきかけて　芳
にほひする髮しよぼ〳〵本ノマヽねたを　蘇
（『金蘭集』下七を「しよぼくねて置」とす。）

○

（此卷は五十韻にして、元祿七年伊賀にての作也。『蜜柑の色』に「戌九月四日會、猿雖亭」と端作あり。）

松風に新酒をすます夜寒哉　支考
月もかたぶく石垣のうへ　猿雖
町の門追るゝ鹿の飛こへて　翁
きてはゆかたの裾を引ずる　雪芝
二十日とも覺えずに行うつかりと　惟然

この山かりて郭公まつ　卓袋
粗相なる草履の尻は切かゝり　望翠
床で天窓をこそ〳〵と剃る　考
ウ夷講鵯の袴を手にさげて　雖
喧嘩の中を無理に引のけ　芝
仕合と矢橋の舟をのらなんだ　翁
あふげど餅のあぶれかねつる　翠
せり〳〵と泣子を籠につき居て　袋
（「せり〳〵」は「せた〳〵」の誤ならん。）
大工屋根屋のかへる暮すぎ　翁
用のある時はかけ込藪隣　考
雨のふる日の節句ゆるやか　芝
きは墨を置直しても同じ顔　袋
親といふ字をしらで幾秋　考
月影にまたくり返す責念佛　翠
かりた浦團の跡のひやゝか　雖
咲はなに毎年はなす連ばかり　然
陽氣をうけてつよき椽げた　袋

二
幸と獵のはじめの雉うちて　芝
内儀の留主に子共あばれる　考
道場の門のさし入だゝくさに　雖
一里の舟も腹のすきたる　翠
山はみな蜜柑の色の黄に成て　翁
日なれてかゝる畑の露霜　考
母方にはなれて月の物寂し　芝
鼠のこもるまき藁の中　袋
傍輩の髮を結あふ梅雨のうち　雖
肴出すほど酒はしむなり　芝
小倉とは向ひ合せの下の關　然
せんどの風に人死がある　考
水嗅き千日寺の粥くふて　翁
齒かけ足駄の雪に埋もれ　雖
ウ
漸に今はすみよる爲替銀　翠
加減の藥しつぱりとのむ　翁
しぶ紙をまくりて取れば青疊　考
こぼれて生る軒の花げし　袋
朝夕の茶の湯ばかりを尼の業　雖
飼へばしだいに牛の艶づく　芝
枯もせずふとるともなき楠の枝　翠
月見にいつも造作せらるゝ　考
駕(のりもの)もゆら〳〵とする秋の風　袋
濱の小家を過るむら雨　然
懐に取出しておく屆狀　袋
いそぎの茶に白豆腐煮る　考
雪隱の窓より覗くはなの枝　雖
根笹づたひに鶯の鳴　芝

○

（此卷は元祿七年九月廿一日大阪車庸亭のものにして、本書が初出なるべし。）

秋の夜をうち崩したる噺かな　芭蕉
月まつほどは蒲團身にまく　車庸
西の山二はな三はな鴈鳴て　洒堂
ひかゆる牛のよくうごくなり　游刀
男の名まんまと囉(もら)ふ眞性者　諷竹
小袖を出して寐たる大とし　惟然
ウ
使やる所をはたと打わすれ　支考
かへても醫者の見廻れにけり　蕉
拭ひ立惣〳〵の杜きら〳〵と　庸
寄て揃る辨當の椀　堂
糺より黒谷かけて暮かゝり　刀
薄がなくば野は見られまい　考
鹿の來ぬ夜は宿賃が百の損　然
雨氣の月の細き川すぢ　庸
火燈して藥師を下る誰が孀　蕉
七種まではよろづ隙なき　刀
見せ馬の荷鞍のあかね花やかに　堂
小屋かたならぶ金杉の春　然

○

（此卷は元祿七年九月二十七日大阪園女亭のものにして『菊の塵』に出でたり。）

白菊の目に立て見る塵もなし　芭蕉
紅葉に水を流す朝月　園女
冷〳〵と鯛の片身を折わけて　諷竹

何にもせずに年は暮行　滑川
小襖に坐右の銘は古びたり　支考
都おちつく國〳〵の旅　惟然
（『菊の塵』上七を「みやこをちつて」とす。）
ウ改まる秤に銀をためてみる　洒堂
袖ふさぐより親の名代　舍羅
垣ごしにちよつと聟の禮いふて　何中
普請のうちは小屋で火を焚　蕉
歸らぬにきはまる嫁のさめすまし　女
酒かふてのむ早稲のすり初　竹
はれ〳〵て月の出かゝる杉の森　川
（『菊の塵』上五を「はれ〳〵と」とす。）
夜詰ひけたる町宿の秋　考
取れたやら濱から通るさかな籠　然
彼岸のぬくさ是でかたまる　堂
青芝はことにもえたつ奈良の花　蕉
出代時の壹歩たしなむ　中
名かよひ路を横にならねば這入れず　竹
しどろに直す奥の空樋　川
淺〳〵と色美しき重の蒸　堂
雪のかへしの北になる風　女
榮賣の隣の子共連だゝせ　考
清藏口に夜のしらむ也　然
上下の橋の落たる川の音　中
植田の中を鴻のくわさつく　蕉
（「くわさつく」は「のさつく」の誤ならん。）
小がまへに不斷を輕う打なぐり　女
縞の仕出しのはやる帶機　堂
月影のさえて師走の夜の長さ　竹
杖一本を道の脇ざし　中
ウ野移のはなにも袖のぬらされて　蕉
老のちからに娘ほしがる　川
餅ちぎる鍋のあたりの賑さ　考
敷ぬ疊の積でかさなる　女
田の水の注連にながるゝ花盛　堂
柳のさし木みどり延行　然

○

（此卷は元祿七年九月廿六日泥足の爲めに賦せしものにして、『其便』にあり。）

所思

この道や行人なしに秋の暮　芭蕉
岨の畠の木にかゝる蔦　泥足
月しらむ蕎麥のこぼれに鳥の寐て　支考
小さき家を出て水くむ　游刀
天氣相羽織を入て荷ごしらへ　之道
酒で痛のとまる腹癖　車庸
ウ片づかぬ節句の座敷立かはり　洒堂
塀の覆ひにあかき梅ちる　畦止
線香も春の寒さの伽になる　惟然
蛭子の餅の殘るきさらぎ　亀柳
兵の宿する家は眠られず　足
かぐさき茸のまじる松風　蕉
（「の」は「に」の誤ならん。）
はら〳〵と山田の稲は立がれて　庸

地藏の埋る秋はかなしき　考
仕事なき身は茶にかゝる朝の月　道
鹽飽（しあく）の舟のどつといり込　然
ちる花に幕の芝引吹立て　止
御傍（そば）日ながき醫者の見事さ　堂

この芭蕉翁俳諧集は、わが五升菴大徳のとしごろひめおかれしを、同じ友にこの國の北淺井の住人何がし去何、ひそかにうつしけるなり。そもいまの世にこの道にあそぶ人の、この翁の遺風をしたはざるはあらず。さればこそ續扶桑隱逸傳も蕉翁の讃に、この風雅は佛祖の肝膽なり。衆生の心性也。濁海の寶筏なり。夜闇の明燈なり。と示し給ふとはあり。かくまでいとたうときことわりあるを、ひとりのみ見んも無下なり。ひろく同志の人にもしらせまほしく、梓にちりばむるよしを、

近江國甲賀山の杉風菴にて

曾秋謹書

蝶夢子著述書目

書名	冊数	書名	冊数
芭蕉翁繪詞傳	二巻	去来丈草句集	二冊
同　發句集	二冊	類題發句集	五冊
同　俳諧集	三冊	俳諧名所小鏡	三冊
同　文集	二冊	鉢敲集	一冊
芭蕉堂名録集	三冊	吉野の冬の記	同
蕉門俳諧語録	二冊	遠江乃記	同

天明六年丙午七月

蕉門俳諧書林

井筒屋庄兵衛

橘屋治兵衛

連句集補遺

連句集補遺

芭蕉の連句にして、蝶夢編の俳諧集及び外篇其他の部門に編入の諸書に收錄されし以外のものを纂輯して、此補遺を編したり。出來得る限り其出自原本によりて校訂し、其原本を得ざるものは『幽蘭集』『金蘭集』『袖草紙』及『一葉集』によりたり。（他石）

▽『續山井』　附句　三

其一

かたに着物かゝるものかはうき難所
今をたうげとあつき日の岡　宗房

其二

後生ねがひとみ侍がた
しやかの鑓あみだやすりのつば刀　松尾宗房

其三

賤が寢ざまの寒さつらしな
おだ巻のへそくりかねて酒をかはん　伊賀上野宗房

▽『談林誹諧』　百韻　一

（此百韻は和露文庫所藏に係る『談林誹諧』と題する寫本中より、頴原退藏氏の發見して『潮音』誌上に紹介せられたるもの也。）

延寶三卯五月東武にて

いと涼しき大德也けり法の水　宗因
軒を宗と因む蓮池　磫畫
反橋のけしきに扇ひらき來て　幽山
石壇よりも夕日こぼるゝ　桃青
領境松に殘して一時雨　信章
雲路をわけし跡の山公事　木也
或は日月は海から出るとも　吟市
よみくせいかに渡る雁がね　少才
ウ
四季もはや漸く早田刈ほして　似春
あの間此間に秋風ぞふく　執筆
夕暮は袖引次第局がた　畫
座頭もまよふ戀路なるらし　因
そびへたりおもひ積て加茂の山　青
室のとまりの其遊びもの　山
草枕おきつ汐風立わかれ　也
一生はたゞ萍におなじ　章
わびぬればとなん云ひしもきのふ今日　才
それ初秋の金のなし口　市
十年を爰に勤て袖の露　因
おほん賀仰ぐ山のはの月　春
春は花袘の頃は西の丸　山
參內過て旣に在江戶　畫
二オ
時を得たり法印法橋其外も　章
新筆なれどあたひいくばく　青
歌のこと世上に眼高ふして　春
明石の浦は蟹もしるらん　因
蛸にも其入道の名は有ぞかし　畫
八日〱は見えし堂守　也
今もかも例をたがへぬ佛生會　市
夏花やつゝじ咲匂ふらん　春
あの山の風をもがなと窓明けて　才

月の前なる雲無心なり　山
露時雨ふる借錢の其上に　因
見し太夫さま色替えぬ松　市
空起請烟となるも理りや　山
夜討むなしき野邊の夕暮　因
ニウ　あてのみの酒氣を風や盜むらん　春
雨一とをり願ふ川ごし　又吟
名號の本尊をかけよ鳥の聲　也
それ西方に別路の雲　章
口舌事手をさら〳〵とおしもんで　市
しら紙ひたす涙也けり　青
高面をのぞく障子の穴床し　才
ゆびのさきなる中川の宿　因
蒔繪さへ寺町物と成にけり　山
數寄は茶湯に化野の露　春
石灯籠月常住の影見えて　青
雪隱につゞく築山の色　畫
ますぎ垣南山並に花の枝　因
うり家淋し春の黄昏　市

三　欠落の跡は霞の立替り　春
雪崩れする其岩のはな　山
松明の灶につゞく白湯かた　章
果しあふよに出あへや出あへ　因
聲高のみなもと聞ば衆道也　畫
よりて芝居の垣間見をせん　市
おもほえず古巾着の錢さぐり　吟
めくら腰ぬけ夢の世の中　春
慮外者さはらばなどと肱を張　山
上樣風の吹旅の空　才
御荷物に唐船一艘つくられたり　因
蜘てふ虫も糸のわけ口　春
（作者「春」は「青」ならん。）
髮を撫で來べき宵也月の下　畫
伽羅の油に露ぞこぼるゝ　也
三ウ　戀草の色は外郎氣付にて　春
はながみ袋形見なりけり　才
さる間三年はこゝにさし枕　青
硯の細工をあらためずして　因

何物か人のかたちと成やらん　市
しばし樂屋の內ぞ床しき　山
來て見れば有し昔にかはら町　也
小石をひろひ塔となしけり　章
ない物ぞ眞の舍利は求めても　畫
誰かしつつる天竺の秋　春
浪人を尋出たる空の月　因
霧にこもりし城の遠近　山
花折る事附り堀の魚取事　章
すり餌によする梅のうぐひす　市
ナオ　やよ見たか祇園あたりのはるの空　才
うしろ帯して塗笠編笠　春
（作者「春」は「青」ならん。）
屋敷跡にたつたは年こはい　市
順の舞には小々性が先　吟
常紋の袴のそばをかいとりて　春
雨にも風にもかよはうよたう　因
夢うつゝ女姿のちみどろに　山
胸にたくのを別火とやいふ　也

しゝくふた酬いを慾にしられたり　章
たゞ參宮の伊勢ものがたり　市
見たい事ぢや松坂こえてかけ踊　因
遠く遊ばぬ盆の夕暮　春
佳つけば殘る暑さも苦にならず　畫
月はことゝふうら店の奥　山
ナウ 秋の風棒にかけたる干菜賣　青
賤がこゝろも明樽にあり　因
綱手をもくり返しぬる網のうち　山
あこぎが浦や牛のかけ聲　市
みづらいふわつぱも淸き渚にて　章
馴れてもつかへたてまつる院　畫
そも是は大師以來の法の華　春
工の氣にも道や云ふらん　才

▽『續連珠』附句 四

其一
松のこずゑにうつる日の入
節竹のよは夢よつゐ年の果　松尾氏 桃青

其二
川かぜ寒き夜半の雪隱
都出てけふみかのはら痛むらし　松尾氏 桃青

其三
むつくりとしてどこやらはかどあらせ
寢てねごゝろのよいはりまくら　桃青

其四
たまのちぎりに玉ぞとらるゝ
さりとてはあふて別のうかりひよん　伊州松尾氏 桃青

▽『誹諧當世男』附句 三

其一
草の庵夏を一種のたのしみに
茄子の煮物やまほとゝぎす　桃青

其二
燒亡はきのふと過て葛城や
あな藏のふたあくる侘しき　桃青

其三
月の中の桂は凡そ何程ぞ
かねにてかはん雲の一むら　桃青

▽『武藏十歌仙』歌仙 三

（此書は勝峰氏によれば、京の春澄が松島行の途次、江戸にて賦せる歌仙十卷を錄したるものにして、延寶六年十一月の上梓、芭蕉關係は其八・九・十の三卷也。）

其一
のまれけり都の大氣江戸の秋　春澄
詞のかはせ千金の月　似春
菊やどの家に久しき雁鳴て　桃青
酒舟あれば汀浪こす　澄
碓の音いそがしの松の風　春
與作あやまつて仙境に入　青
ウ はやり歌も雲の上まで聞えあげ　澄
いつも初音の〳〵　春
御町にて其御姿は〳〵　青
あしたの伊達染夕のときわけ　澄
むつ言のきがねの蚤のはひ出でゝ　春
釋迦に添寢の夢の短夜　青

所作らしい諸行無常の鐘の聲　澄
鼓の下手くそ寺は桂の　春
小芝居を君もをかしと思召し　青
・鬼こらへずを生捕にして　澄
天も花に毒の醉狂月に影　春
・鰒のこてふの春になり行　青
二
聲霞む猫はかへつて野ら遠し　澄
へついの下に草はもえなむ　春
夜の中に名もなき茸のさればこそ　青
金輪際より島山の露　澄
毘沙門の鉾のしたゝり國の秋　春
外道の首の落ちかゝる月　青
韮舌は八つにや裂けぬらむ　澄
空誓文に霜枯し中　春
藥物右近が歌を煎じても　青
古川のへに豚を見ましや　澄
先爰にパウの二けんの杉高し　春
日待に來たか山郭公　青
二ウ
やすき夜も寢ぬに目覺めず奈良茶ずき　澄
雲のいづこに匂ふ燒味噌　春
內熱に遠の嵐やにくむらむ　青
松はすねたる入道相國　澄
花はとぶ袖は錦の長絹きて　青
肌にはきむく鶯の聲　春

其二

青葉より紅葉散けり旅煙管　似春
時を感じては眠る遠山　春澄
頬杖にかたぶく月の影消えて　桃青
座頭はかたを衣うつなり　春
糸よせてしめ木わがぬる秋の風　澄
天下一竹田稻色になる　青
ウ
淀鳥羽も鏡のかげに見えたりや　春
やよ時鳥天帝のさた　澄
鶯の不受不施だにも置ぬ世に　青
殘るものとては古寺の雪　春
花は根にもとの裸でかへるなり　澄
すい風呂の底は龍宮の春　青
出女の玉依姬は是とかや　春
神代もきかず百文の戀　澄
靈寶の枕草子をふし拜み　青
奉加の帳の首書まで　春
爰に中頃儒者一人の月澄て　澄
或は廣澤熊澤の秋　青
二オ
狀箱の名を忘れたる雁の聲　春
とかう云ふ間にしぼむ初萩　澄
ふり袖の薄も髭と生出でゝ　青
小町が果の女方ども　春
緣訴訟ふしんながらも指上る　澄
告にまかせて口說申候　青
あゝ稻荷くるしき中を思へたゞ　春
杉の庵に腹ぞさびしき　澄
針立の玄賓僧都見まはれて　青
秋果てぬれば湯山の月　春
あみ楊枝きのふは峯の薄紅葉　澄
四五文ほどが露しぐるらむ　青
二ウ
夕日影光はちよくに傾て　春
鹽からあらふ沖津白浪　澄

竹戸棚阿波の鳴門や明けぬらむ　青
渦きり〳〵とまきし蜘の巣　春
山一つこぶの根おろし花の雲　青
耳せゝかくす峯の青柳　澄

其三

鹽にしてもいざことづてん都鳥　桃青
只今のぼる波のあぢ鴨　春澄
川淀の杭木や龍のつたふらむ　似春
千年になる苔みどりなり　青
又とはゞいかなるうそを岩根の月　澄
高う吹出す山の秋風　春
ウ ふらすこの見えすく空に霧はれて　青
油なに〳〵雲ぞなだるゝ　澄
浦島や櫛箱あけて悔むらん　春
鼠あれゆく與謝の夕浪　青
捨小舟米蛇(くちなは)の跡さびて　澄
藏も籬も水草生(おひ)けり　春
今朝みればゐてこし女は貧報神　青
大酒くらひ口そへて露　澄
一座の月八ツのかしらをふり立て　春
ばくちになりし小男鹿の角　青
數芝居ぬれてや袖の雨の花　澄
在郷寺を宿として春　春
二オ 麥飯の菩薩や爰に霞むらん　青
妙なるのりととろゝとかるゝ　澄
幽靈は紙漉舟にうかび出　春
さかさまにはひよる淺草の浪　青
股ぐらから金龍山や見えつらむ　澄
聖天高くつもるそろばん　春
帳面のしめを油にあげられて　青
ながるゝ年は石川五右衛門　澄
まかなひをすいたの太郎左いかならん　春
既に所帯も軍やぶれて　青
軒の月横町さして落給ふ　澄
後家を相手に戀衣うつ　春
二ウ 去男かねにほれたる秋更て　青
鶉の床にしめころし鳴く　澄
產出すをみくるし野とや思ふらん　春
きせうものなき天のかぐ山　青
さほ姫のよめり時分も花過て　春
古巣にかへる仲人の鳥　澄

▽『江戸通り町』歌仙―附句五

○歌仙

實(げに)や月間口千金の通り町　桃青
爰に數ならぬ看板の露　二葉子
新蕎麥や三島がくれに田鶴啼て　紀子
蘆の葉こゆるたれ味噌の浪　卜尺
臺處棚なし小舟こぎかへり　二葉子
下男には與市その時　桃青
ウ 乘ものを光悅流にかゝれたり　卜尺
藥草喩品くすりこしらへ　紀子
眞鍮の彌陀の釼を截て　桃青
西をはるかに綠青の山　二葉子
隈どりの峯より月の落かゝり　紀子
秋を坐布の床の山風　卜尺
燒鳥の鶉啼なる夕まぐれ　二葉子

精進あげの三位入道　桃青
かゝと寝て花咲事もなかりしよ　卜尺
又孕せて蛙子ぞなく　紀子
鶯の宿が金子をねだるらん　桃青
龍田のおくに博奕こうじて　二葉子
二オ 毛氈を御門の目には錦かと　紀子
そよや霓裳羅漢舞する　卜尺
破れ袈裟雲のかよひ路次とぢよ　二葉子
鼠に羽か郭公とぶ　桃青
押入や淀のわたりの箱階子　卜尺
織ものゝ巻衣笠の森　紀子
能太夫末は時雨の松見えて　桃青
殿様かたへゆくあらし哉　二葉子
雁鶴も高根の雲の立まどひ　紀子
俎板の月摺鉢の不二　卜尺
昔の秋三千人の拂物　二葉子
釋迦もこのよを欠落の時　桃青
二ウ 放埒に精舎のかねをつかひ捨　卜尺
大阪くづれ瓦のこれる　紀子
神鳴の火入とかやは是とかや　桃青
鬼一口に伽羅を喰割（くひわり）　二葉子
花の時千方といつつ若衆なり　紀子
戀のくせもの王代の春　卜尺

○附句

其一

寳いくつあつらへの夢あけの春
蓑笠小槌あら玉の空　桃青

其二

手盥に五日の雨と流すなり
菖蒲のかつら剃刀をとぐ　桃青

其三

.經によう似た鶯のこゑ
是も又うばそく優婆夷あま蛙　桃青

其四

寢覺わびしき澤庵の耳
菩提もと木枕一つかどありて　桃青

其五

御息所の店がへなりけり
ながむれば松浦と申す五郎兵衛町　晩秋

はや舟にのりのぼる京ばし　桃青

▽『芭蕉杉風兩吟百韻』

百韻一

（此巻の二オ四句目五句目、『江戸廣小路』にあれば、此巻の興行は延寳五年頃と推定せらる。）

色付くや豆腐に落て薄紅葉　桃青
山をしぼりし榧の下露　杉風
手みづ桶雲の廣袖月もりて　、
こぬか亂るゝ風の夕暮　青
或時は餅に詠むる雪の空　、
猿子をだいて峯の松原　風
朝日影岩根の床のわき風　、
熱湯をながす末の白浪　青
ウ 茶巾さばき袖よりつたふ風過て　風
何と軒號窓の明ぼの　青
五十點在るが中にもほとゝぎす　風
一村雲を織紙になむ　青
縫箔に好んでとほる瀧の糸　風

音羽嵐の松も姫君　青
小夜時雨忍ばせ給ひける程に　風
はねのあがりしきぬ〴〵の末　青
風匂ふ小便壺に浪越えて　風
灰吹捨る跡の夕露　青
唐金の秋や袂に磨くらむ　風
ろくしやう青き山の端の月　青
島の氣色胡粉に寄する花の浪　風
霞も空に烟るかきがら　、
二オ
そぎ板の破に春のしらみ來て　青
鼠の跡は惠方なりけり　風
米俵ふまへてますぞ有難き　青
心に叶ふ長持の蓋　風
送り膳道すこしだに隔ねば　青
普請の積りよい手廻しの　風
親仁殿扨法體はいつ頃ぞ　青
されば夏たけ彼岸たつ空　風
秋風や奇妙發願蟬の聲　青
草庵淋し森の下露　風

此月に藥罐の口も物をいへ　青
酒はこぼれてねぶり驚く　風
乗掛はたまりもあへず馬上より　青
四里のぼりたる關の岩角　、
二ウ
見渡せば雲ははがれて雪の峯　風
松のふぐりに下帶もなし　青
是もをかし磯うつ浪の子安貝　風
（原本「是」を消し、「またカ」とす。）
灘の鹽屋の櫛箱の底　青
破小船削しらけて道具とす　風
木賊にかゝる眞砂地の露　青
その原やこゝに築せて庭の月　風
からした所(とこ)が木曾山の秋　青
味噌すこしさびしき旅の谷傳　風
三千せつかいよしや修行者　青
つら〳〵思ふ火宅の門や火吹竹　風
時に和尚のときしのり賣　、
花曇五ケ庄より空晴れて　青
遠(をち)の里橋おもしろの春　風

三オ
薄氷や繪かきが胸に流るらむ　青
羽箒とれば風わたるなり　風
窓近き小さゝ亂るゝ竹の皮　青
夕日こぼれて柚べしかたまる　風
小德利の露もあらしと山や思ふ　青
色替へぬ松を碎く燈　風
でかいたぞ明日の足中牛の沓　青
雜水の桶のからりとしたは　風
上方のかたき忘れぬ使たて　青
はねもと結にかざすさし櫛　風
緣付や二度(ふたたび)返る事なかれ　青
若(もし)もみつちやに戀やさめなむ　風
岩橋の夜の小袖をひつかぶり　青
一汗流す谷川の月　、
二ウ
手拭の雫に浪やよごすらむ　風
六根罪障うたかたの泡　青
とろゝ汁生死の海を湛へたり　風
元小だゝみは無面目にて　青
開闢の天地すでに大砂鉢(さはち)　風

岩戸に隠し給ふ行燈　青
つらからむ鬼の目掛の初枕　風
思ひの烟果は釜焦　青
菜刀の先にうらみは盡すまじ　風
後妻打や相槌の露　青
唐衣涙洗ひし袖の月　風
終には無常早藁の灰　青
花紅葉明し暮して物として　風
葛籠一荷にためし夏冬　、
ナオ
故郷へは裁付着てや歸るらむ　青
葎の宿をおもふ獅子舞　風
笛の聲嵐木枯吹かれたり　青
義經是にて雪の曉　風
玉子酒卽事に須磨を打つぶし　青
冷も發らぬ大浪の跡　風
疝氣持藻に住む虫の音絶て　青
朝霧たゝむ夜着の蘆田鶴　風
揚屋より月は雲ゐに歸るゝ　青
乙女の姿白じゆすの帶　風

呉服物後藤源氏の物思ひ　青
石山寺に残るうち敷　風
夕暮は御前蠟燭飛ぶ螢　青
是彼岸の浮草の浪　風
ナウ
六度まで渡りかねたる橋越えて　青
よしなき□□□□千萬　風
（□字の所、瀬川露城氏藏懐紙に「謀反笑止」とあり。）
夢なれや□□□□夢なれや　、
（□字の所、同上「由井昌說」とあり。）
扨々荒し軒の宿札　青
朝ぼらけ原吉原を打過て　、
一分にいくら相場聞なり　風
折添て薪に花は〳〵　青
都のぐるり山里の春　風

▽『江戸廣小路』附句　二十

其一
大鋸屑の煙りもともに不二の嶽
蚊にさゝれ行田子の浦ふね　桃青

其二
虫の髭白髪とこそはなりにけれ
瓜の中ごの實盛が首　桃青

其三
孔子は鯉魚のさしみにあてられ
夜起する糞土の垣に月更て　桃青

其四
說經芝居うづら啼なり
荻すゝきさあ刈萱ちや〳〵　桃青

其五
捨る身も鬼の餌食の生肴
南無や酒樽醬油來迎　桃青

其六
鐵橋に大焦熱の苦を受る
仁藏菩薩に槌を打せて　桃青

其七
膳棚の少しこぶかき山見えて
大宮の御在所箸箱と哉覽は　桃青

其八

雁のうたも集にや入ぬらん
　大津奈良屋も奈良の御時　桃青

其九

武者ぶりを引つくろひてよはくと
　敵にうしろを見せる尻つき　桃青

其一〇

桶ひとつ物の哀をとゞめたり
　それ人間はぬかみその虫　桃青

其一一

馬の沓かゝる處の秋なりけり
　唐網打ば須磨の浦浪　桃青

其一二

もすそを見ればかるい装束
中がへり歸る處をしらんとて　桃青

其一三

うなり聲既に平家と聞時は
　脚布をきせたる鎌倉の山　桃青

其一四

あつたら眞桑泥水の末
此界をひつくりかへす大砂鉢　桃青

其一五

相場に立しよさの浦浪
紗綾りんず茶う鳥の子が玉手箱　桃青

其一六

上は脇ざし中は竹鎗
爰もとに紙子をどしの鎧着て　桃青

其一七

心にかなふ長持のふた
送り膳道少しだにへだてねば　桃青
（此附句は前記百韻ニオ四句目五句目也。）

其一八

魚の腸其まゝ海に沈められ
女院誰かれ二位の尼鯛　桃青

其一九

大屋の退屈うす紅葉する
味噌焼の七日つゞきし稲葉山　桃青

其二十

ひかる語石の枕の秋の暮
長嘯の筆きり〳〵す啼く　桃青

▽『俳諧一葉集』
歌仙四　表合一　三物三
（『一葉集』收錄のものにして、天和以前と考へらるゝものを、こゝに編次したり。）

〇三ツ物（寛文十年カ）

其一

君も臣もさぞな三肌をあはせ衣　助勝
夏しりがほにゆるり國民（くにたみ）　正朝
がけ作り河原おもてに見渡して　宗房

其二

抜けば露の玉散る太刀か一葉切　長忠
はなつ矢の根につよき秋風　定就
冷しき石はさながら虎に似て　宗房

其三

（『一葉集』天和年中の部に置き、「伊賀御集物」と出自を示す。）
栗野老（ところ）山菌栗尉が秋こそあれ　青府
自禮飾るか炭がまの松　一品
御幸をへだつ霞は坂をゆがむらん　桃青

○表八句（延寶七年カ）

夢想

さゝげたり二月中旬初茄子　桃青
天下のおかげ我等まで春　杉風
雨霞古藏ひろくおさまりて　仙風
しろき鼠に雪ぞ舞ゆく　龜
雲間より赤い鳥のほの〴〵と　惣代
谷の戸口にかゝる看板　杉風
上々吉有明の空吹くあらし　而已
千里の羽も金箔の秋　執筆

○歌仙

其一

（此卷ウ九句目十句目、延寶七年刊行の『新附合千句二葉集』にあれば、同六年頃の興行と推定せらる。）

わすれ草煎菜につまん年の暮　桃青
笊籬味噌こし岸傳ふ雪　千春
芦風の碁盤に餘る音冴て　信德
磯なれ衣おもくかけつゝ　青
鼠とりこれにも月の入りたるや　春
紙燭けしては鶉啼くなり　德
ウ
あゝ誰ぢや下女が枕の初尾花　青
百にぎらせてたはぶれの秋　春
仇し世をかるたの釋迦の說かれしは　德
あるひはでつち十六羅漢　青
又男か姿かたちはかはらねど　春
古い羽折に老ぞしらるゝ　德
つく〴〵と記念のやゝを寢させ置　青
結びもとめぬさんぎりの露　春
鎖がまもれて出たる三日の月　德
雲井に落つる雁の細首　青
料理人御前を立て花の浪　春
木具屋の扇沖の春風　德
ニオ
住吉の汐干に見えぬ小刀砥　青
箔の姫松縫ものをとく　春
しゝばゝに襁褓も袖も絞りつゝ　德
枕ならべし腰ぬけの君　青
踏みはづす天の浮はし中絶えて　春
脛の白きに錢をうしなふ　德
滑川ひねり艾に火をとぼし　青
鶴が岡より羽箒の風　春
いはうきはう利久といつし法師有て　德
朝比奈の三郎よし秀の月　青
虫の聲つゞり置たる判盡し　春
いさご長じて石摺の露　德
ニウ
とんよなも今此時をいはひ歌　青
園生の末葉ならす四竹　春
馴てやさし乞食の妹背花に蝶　德
うぐひす啼てこものきぬ〴〵　青
思ひ川垢離も七日の朝霞　春
南無や稻荷の瀧つせの春　德

其二

（此卷は天和三年芭蕉が甲州假寓中のものと推定せらる。此卷誤記と見へて、一句不適のものあれど、『一葉集』の外に採錄なく、

對校するを得ず。）

夏馬の遲行我を繪に見る心かな　芭蕉
麥手ぬるゝ瀧凋む瀧　槃塒
蕗の葉に酒灑竹の宿黴て　一晶
弦なき琵琶にとまる黃鳥　蕉
面洗ふ朧の鏡などとては　塒
さくらは二十八計けん　晶
（誤記あらんも考へ得ず。）
ウ
きさらぎや武者物語申上　蕉
後家御靈雨の翠簾の居がくれ　塒
かくらくも旅ねは少し矢背の里　晶
更てはるかに門たゝくおと　蕉
斯る雪詩を買に來る人あらん　塒
一爐の粥に江の燒屋舟　晶
國荒て憎しと雁肥にけり　蕉
（「し」は「く〳〵」ならん。）
暮風鎭ムル倫の宮　塒
（「倫」は恐くは誤記ならん。）
クツワ子が轡巻望む月照せ　晶

妹蕿米也もうき世萬葉　蕉
（誤記あらんも考へ得ず。）
花あはせ櫻は判をしりぞいて　塒
燕尾は風の裾をかへすなり　晶
二オ
陽炎の具殿屋作る日の大工　蕉
（「具殿屋」恐らくは誤記ならん。）
嫁に嫁咲百年の粟　塒
今朝の〳〵うかれ道者の袖を引　晶
櫛のり坂の清水濁るな　蕉
血に染る甲を松にかけ置て　塒
餅を拜する大年の例　晶
長史なる乞食は京の萊蕪　蕉
（「史」は「吏」の誤ならん。）
千木をふとる牛茱の糞　塒
崩たる頸は叉烏の媚をかり　晶
（誤記あらんも考へ得ず。）
古佛の腹に假寢せし月　蕉
身をしぐれ荒山伏の袖ぬれて　塒
彿白雲の后こがるゝ　晶

二ウ
ちぎり守牡丹は賣のかゞり火に　蕉
白袋袖躍あやめ髮結　晶
（誤記あらんも考へ得ず。）
我ほめる乙聟ばかり雨降な　塒
夕影長者且まつらん　晶
九ッの鼎に赤き花を煉　蕉
序を書殘す藤の文橋　塒

其三

（此巻は『蓑虫庵小集』にあり。「翁書連句二巻之内」として此巻を揭記したり。他の一巻は其二「夏馬」の巻なるべく、同時に賦されしものと推定せらる。）

胡艸垣穗に木瓜も無家かな　槃塒
笠おもしろや卯の實むら雨　一晶
ちるほたる沓にさくらを掃らん　芭蕉
市に小言をになふ朝月　塒
やゝさぶの殿は小袖をうちかけて　晶
紅白の菊かぜに碁を採　蕉
しづかなる卯塔雨の日をくらく　塒

とねりは緣をかりて居ねぶる　晶
揚弓のそれ矢は御簾にとゞまりて　蕉
上氣の神といはふ三線（さみせん）　塤
うば玉の躶を箔に彩けり　晶
密夫（みそかを）はぢよいのちつれなき　蕉
あさがほのくねるにゆすりをこされて　塤
うしと髮きる葛のいつはり　晶
母の親にあまえて月を背けをり　蕉
うもれてはてぬ身を支離（かたは）にて　塤
通夜堂のかいくれ花をのぞくところ　晶
さくら子消てつり鐘に垂　蕉
二オ
春風の池にかゞみほり出す　塤
鳥は緣をつぐるふくどり　晶
院の田に餅米刈ん君とつれて　蕉
青萩ぞめのはかま織する　塤
風のきぬけぶりの音をや括らん　晶
月野をたどる道行の感　蕉
あたらしき塚ゆさ／＼とぞ呼凄し　塤
奢を後の臣にいさめる　晶

千金はいやしく糞土をたからとす　蕉
麗姬もすつればあぶらくさしや　塤
吉原の三十年を老の九十九髮　晶
ねやのはしらに念佛書をく　蕉
二ウ
よもぎふに火を消狐來ざりけり　塤
ひとり胡弓をつくすよすがら　晶
鳥もりの髭等に酒を買せつゝ　蕉
松に巢をもる蝙蝠の千代　塤
俳諧のそらごと花の浮狂人　晶
馬蹄に鼓おくるはるかぜ　蕉

其四

（此卷は出自原本不明なるが、天和年中と推定せらる。）

時節さぞ伊賀の山越花の雪　杉風
身はこゝもとにかすむ武藏野　芭蕉
店賃の高き軒端に春の來て　、
どうやらかうやら暮る年なみ　風
發句脇されて名殘の月遠し　、
（「て」は「ば」の誤ならん。）

誰ぞ來い鐘は八か七か
ウ
寐ぐるしき例の絡に夢覺て
きのふの酒を訪ほとゝぎす
浮雲のきえて跡なき扣帳
親仁以來の山おろしの風　蕉
古鄕の松ははびこる境杭　、
朱印をそめて時雨降ゆく　風
探幽が筐（かたみ）の雲に殘る月　、
京ばし渡る初雁の聲　蕉
伏見駕さて其頃は秋の風　、
かこひを亭に手枕の露　風
一生は起る氣のなき我思ひ　、
世をうきものにかるうして置　蕉
二オ
張ぬきに都の辰巳山見えて　、
ふのりを解し寺さふらふな　風
前髮に立名をつゝむ絹のきれ　、
涙をむすぶ編笠のひも　蕉
落らるゝ心の中ぞ哀なる　、
眞さかさまに岸のしら露　風

又ひとりつゞいて進む法師武者　、
　いさごを蹴立尻馬にむち　蕉
寢とぼけて夜深き月に旅衣　、
　三里ばかりの跡に朝霧　風
追剝にさてもあぶなき野路の露　、
　うけて流いた太刀風の米　蕉
（「米」は「末」の誤ならん。）
ニウ
吉岡の松にかゝれる雲晴て　、
　雨や黒茶を染てゆくらん　風
消殘る手摺の幕の夕日かげ　、
　火繩のはしの一二寸ほど　蕉
何ものか詠め捨たる花のかげ　、
　江戸にも上野國もとの春　風

▽『熱田三歌仙』歌仙三端十

（此書は安永四年曉臺の刊行したるものなれど、其編纂は桐葉一派の手に成りしが如く、收錄する所のものは貞享元・二年芭蕉が熱田を訪ひしときのもの也。編次順序は原本に從ひたれど、實際作成の順とは相違あるべし。紀行集『甲子吟行』參照。）

○端物一

旅亭桐葉の主、心ざし淺からざりければ、しばしとゞまらんとせし程に、

此海に草鞋捨ん笠しぐれ　芭蕉
　むくも侘しき波のから蠣　桐葉
木枯に冬瓜ぶらりとぶら付て　東藤

○歌仙三

其一

尾張の國あつたにまかりける頃、人々師走の海みんとて船さしけるに、
（『一葉集』前書なくして「臘月十九日」とあり。貞享元年の事也。）

海暮れて鴨の聲ほのかに白し　芭蕉
　串に鯨をあぶる觴　桐葉
二百年我此山に斧とりて　東藤
　樫の種まく秋は來にけり　工山
入月に鵙の鳥のわたる空　葉
　駕なき國の露負れ行　蕉
ウ
降雨は老たる母の泪かと　山
　一輪咲し芍薬の窓　藤
棋の工夫二日とぢたる目を明て　蕉
　周に歸ると狐なくなり　葉
靈芝ほる河原遙に暮懸り　藤
　華表はげたる松の入口　山
笠敷て衣の破れ綴り居る　葉
　秋のからすの人喰に行　蕉
をととひの野分の濱は月すみて　山
　霧の雫に龍を書續く　藤
花曇る石の扉を押ひらき　葉
　美人の形拜むかげろふ　山
ニオ
蝦夷の聟聲なき蝶と身を侘て　蕉
　生海鼠干にも袖はぬれけり　藤
木間より西に御堂の壁白く　山
　藪にくずやの十ばかり見ゆ　蕉
ぼつ〳〵と炮碌作る祖父ひとり　藤
　京に名高し瘤の呪咀　葉
不二の根と笠着て馬にのりながら　蕉
（「と」恐らくは「を」の誤ならん。）

寝に行鶴のひとつ飛らむ　山
待つ暮に鏡を忍び薄粧ひ　葉
衣かづく小姓萩の戸をおす　藤
月細く時計の響八ツなりて　山
槍急ぐ消がたの露　蕉
ニウ
破れたる具足を國におくりける　藤
高麗の縣に畠作りて　葉
紅染の唐紙に花の香を絞り　蕉
ちひさき宮の永き日の伽　山
春雨の新發意粽荷ひ來て　葉
青草ちらす藤の撮折　藤

其二

（此巻『一葉集』「三月廿七日」と前書あり。貞享二年也。「甲子吟行」發句上五を「山路來て」とす。大津へ出るときの吟にして、熱田にて立句に用ひたるものなるべし。）

何とはなしに何やらゆかし菫艸　芭蕉
編笠敷て蛙聞居る　叩端
田螺わる賤の童のあたゝかに　桐葉
公家に宿かす竹の中道　蕉
月くもる雪の夜桐の下駄すげて　端
酒のむ姨のいかにさびしき　葉
ウ
双六のうらみを文に書つくし　蕉
琴爪をしむ袖のうつり香　端
髪おろす侍従が娘おとろへて　葉
野の宮のあらし妓王寺の鉦　蕉
虚樽に色なる草をかたげ添　端
藝者をとむる明月の關　葉
おもしろの遊女の秋の夜すがらや　蕉
燈火風をしのぶ紅粉皿　端
川瀬ゆく髻を角に結わけて　葉
舎利とる瀧に朝日うつらふ　蕉
かしこまる石の御坐の花久し　端
羽折に酒をかへる櫻や　葉
ニオ
歌よみて女に鸞おくりけり　蕉
枕屛風の繪に涙ぐみ　端
聞なれし笛のいろえの遠ざかり　葉
三股の舟深川の夜　蕉
庵住やひとり杜律を味ひて　端
花かすかなる竹こきの蕎麥　葉
いかに啼鴫は吹矢をおひながら　蕉
水汲小僧袖ひやゝかに　端
月明て打板山をへだつらん　葉
雲は夜盗の跡うづむなり　蕉
村雨のそゝぎ捨たる馬の沓　端
ひとつ鬼の瓜喰ふおと　葉
ニウ
笠見ゆる人は葎にとぢられて　蕉
男やもめの老ぞ悲しき　端
風くらき大年の夜の七つ聞　葉
御門をたゝく生鯉の奏　蕉
常盤山常盤之助が花咲て　端
霞に残る連歌師の松　葉

（『熱田三歌仙』に「右蕉翁眞蹟在暮雨巷」とあり。）

其三

（此巻『一葉集』「同日」と前書あり。）

つくづくと榎の花の袖にちる　桐葉

ひとり茶をつむ藪の一つ家　芭蕉
日影山野鶏の雛をおはへ來て　叩端
清水をすくふ馬柄杓の月　閑水
おもしろき野邊に飾うる艸の上　東藤
宿の土産に撫子をほる　工山
ウ 鼻紙に都の連歌書付て　蕉
暮る大津に三井の鐘きく　端
雪を侘ぶ漁の姥が袖を見よ　山
寢にゆく鴨の四五百の空　葉
（七） 松風の甕に酒を飲盡し　水
佛をきざむ西谷の僧　藤
烏羽玉の髮きる女夢に來て　端
戀を見破る朝がほの月　蕉
秋は猶只旨き物くらひけり　葉
白子の太夫我霧の海　山
浪よする鯨の骨に花栽て　藤
陰ほす於期のかつらはふ道　端
二オ 笠持て霞にたてるやせ男　蕉
五重の塔のほとり夕ぐれ　桂楫
鶺鴒の尾を蜘の圍に掛られて　端
風に身を置くけふの討死　葉
筆とりて朴の廣葉を引撓め　端
田舍祭りに物見そめたる　藤
打かづく前だれの香をなつかしく　楫
たはれて君と酒かひに行　蕉
白がねの鉢に鮊およがせて　葉
おほん歸京の時を占ふ　山
鞦韆の東の寺の月凄く　藤
猿手の栗の何をまねくぞ　端
二ウ 蟬啼てまだ澁柹の秋の空　蕉
草家かすかに馬の尾の琴　山
哀なるのり物燒て歸る野に　藤
入日の跡の星二ツみつ　葉
宮守が油さげつも花のおく　蕉
つゝじのふすま着たる西行　楫

○端　物九

其一　（貞享元年）

神前の茶店にて

しのぶさへ枯て餅買ふ舍り哉　芭蕉
しわびふしたる根深大根　桐葉

其二　（同）

其あした

馬をさへ詠むる雪のあした哉　芭蕉
木葉に炭を吹おこす鉢　閑水
はた〳〵と機織音の名乘來て　東藤

（『一葉集』に「年のよるほど伯母のせはしき」の四句目を加へあり。）

其三　（同）

翁美濃路へ打こえんと聞えければ、

檜笠雪をいのちのやどり哉
藁一つかね足つゝみゆく

其四　（貞享四年）

（『熱田三歌仙』に「みしうふくありし御やしろにふたゝびまうでゝ」と前書ありて脇までの二句のみなれば、『雪の花』によりて全卷を收む。『幽蘭集』に「貞享四年十一月廿四日」と端作あり。）

熱田の社御修覆ありければ

磨直す鏡も清し雪の花　芭蕉
石しく庭のさむきあかつき　桐葉
時々は松笠落る風やみて　、
我鳩歸る山のかげろひ　蕉
秋くれて月なきの岡一ツ家　、
杖にもらひし唐きびのから　葉
ウ 肌寒く習はぬ錢を襟にかけ　、
こぼるゝ鬢の黒き剛力　蕉
明わたる鐘ぬすむ夜はしらしらと　葉
破れし國の境守る庵　蕉
古畑にひとり生たる麥かりて　葉
物よぶ聲や野馬とるらん　蕉
松明に食荷ひ行秋の風　葉
宮もよし野の哀しる月　蕉
就中峰のきぬたぞ聞ゆなる　葉
溫泉はにえて人もすさめず　蕉
此塚の女は花の名にたはれ　葉
たが泣顏を咲るつゝじぞ　蕉
二オ 朝鷹にくまれて侘るきじの聲　、
ゆらゆら下る坂の乘掛　葉
水濁る一里の河原わづらひて　蕉
あらしにしづむ軒の砂除　葉
はつ霙幾度こけて起直り　蕉
勅衣をまとふ身こそ高けれ　葉
誇そふて經積船を送るかと　蕉
汐越す岩のかくれあらはれ　葉
打ゆがむ松にも似たる戀をして　蕉
髭の聟のしり目なる月　葉
あき山の伏猪を告る聲々に　蕉
道一すぢを刈分る萱　葉
二ウ 優婆塞が御廟つとむる文讀て　蕉
落人起す夜は明にけり　、
煎藥にぬれ柴いぶす雨の音　葉
水桶のぼる蝸牛はかなき　、
西行の辭にならふ花さきて　蕉
春の袂に鼓打つなり　葉

其五　（貞享二年）

みやこにあそびて、題秋風子之梅林。

梅白しきのふや鶴を盗まれし　芭蕉
杉菜に身する牛二ツ馬一ツ　京 秋風

其六　（同）

わか櫻鮎割く枇杷の廣葉かな　京鳴瀧 秋風
筧にうごく山藤の花　芭蕉
日の霞夜銅の氣をしりて　湖春

其七　（同）

山家

樫の木の花に構はぬすがたかな　芭蕉
家する土をはこぶもろつば　秋風

其八　（同）

梅たえて日永し櫻今三日　湖春
東の窓の蠶桑づく　芭蕉
巢の中に燕の顏の並び居て　、

其九　（同）

（『熱田三歌仙』は脇までなれば、『一葉集』によりて補ふ。されど十二句だけの端物也。）

本會を經て武の深川へ下るとて

おもひ立木曾や四月の櫻狩　芭蕉

京の杖つく岨の夏麥　東藤
牛の子の乳をのむ日影閑にて　桂楫
かげろふとまる竹の編棚　叩端
侘つゝも栗の毬たく細けぶり　桐葉
ひとりうけたる有明の松　工山
薄雪は淀の天守を降兼て　藤
狂歌の僧に駕を只かす　蕉
鼻紙に涙をつゝむ女あり　閑水
なさけの市に上の袍うる　楫
螢うつ夜半の黒戸に宴盡て　葉
よせる車のきしるなりけり　水

▽『ゆめのあと』歌仙一

（此書は希因五十回忌追善集にして、寛政九年上梓のもの、連句は貞享二年興行にして、『熱田三歌仙』に洩れたるもの也。原本「貞享二年夏叔父桐葉のもとを別るゝとて」とあるは後人のさかしらならん。）

牡丹蕋深くはひ出る蝶の別哉　芭蕉
朝月涼し露の玉鉾　桐葉
歌袋望みなき身に打かけて　叩端
たま〳〵膳について箸とる　蕉
新家根になじまぬ板の雨雫　葉
二百ちがひに馬の落札　端
ウ　たぶさ引跡は小聲の男同士　蕉
涙に濁る池の人かげ　葉
竹蜂のするどき月の夕嵐　端
茶の實こきゆく牛の嚏（にれかみ）　蕉
年ふりて吾妻祭りの鬪が原　葉
かちんのくゝり高き宿老　端
うすぐらき簾にはさむ紙の屑　蕉
硯のはゞの合（あは）ぬひら筆　葉
くり〳〵とさめたる酒の醉心　端
谷眞風（やまぜ）をかづく舟の眞下り　蕉
花散りて近き見こしの角矢倉　葉
燕の泥を落す肩衣　端
ニオ　出代の腰にさげたる持草履　蕉
午時の日あしに過る風空　葉
地雷火に逆立浪の赤走り　端
鷺の塒を替る枯梛　蕉
僧正のさかやき寒き簀子緣　葉
わすれて焦す飯の焚じり　端
お茶壺の雨にむかひて扇敷　蕉
旅の乞食の奢る小處　葉
物買の袂へおろす上蔀　端
鉦の音ひゞく盆の燈　蕉
蝙蝠のかけ廻りつる月の暮　葉
風冷初る馬場の白砂　端
ニウ　振舞をいくつもしたる仲間入　蕉
妾なぶりて貌を繪に書　葉
燃口の煙りにからき櫨油　端
湯さやの杉の廣き本宮　蕉
花垣に邊りの青葉引撓め　葉
かれも角組む春の蝸牛　端

▽『根本式』古式百韻一

（此百韻は普通のものと型式を異にし、表を十句に、名殘の裏を六句にしたるものにして、「花」も普通四ツを倍數の

八ッとするが如き相違あるもの也。享和三年石芠が『芭蕉翁古式之俳諧』一名『根本式』といふ書名にて刊行したるものによりて校訂す。）

貞享二年六月二日東武於小石川興行

賦花何俳諧之連歌　　歌

涼しさの凝くだくるか水車　清風
青鷺草を見こす朝月　芭蕉
松風のはかた箱崎露けくて　嵐雪
酒店の秋を障子明るき　其角
社日來にけり尋常の煤はくや　才丸
舞蝶仰ぐ我にしたしく　コ齋
みちの記も今は其まゝに霞こめ　素堂
飩を花なれいやよひの雛　風
老てだに侍従は老をへりくだり　蕉
氷きよしとうち守りたり　雪
戸隠の山下小屋の靜にて　角
阿闍梨もてなす父の三年　丸
笑顔よくうまれ自慢の一器量　齋
卅に夜〳〵いのちあきなふ　堂
雨そぼつ蚊遣火いたく煙てし　風
草庵あれも夏を十疊　蕉
既にたつ碁にまれ人をあざむきて　雪
鴻鴈高く白眼(にらみ)どもおちず　角
晩稲刈干みちのくの月よ日よ　丸
淨瑠璃聞ん宿からむ秋　齋
椎の實の價算る半蔀に　堂
うしろ見せたる美婦妬しき　風
花散す五日の風は誰がいのり　蕉
北京遠き丸山の春　雪
ニオ
三尺の鯉に小鮎に料理の間　角
はや兼好をにくむ此とし　丸
幾廻の戰ひ夢と覺やらず　齋
逝水やみを捨ぬものかは　堂
白鳥のはふり湯立の十五日　風
（「白鳥」は「白丁」ならん。）
夫(それ)醉醒の愚に嘘して　蕉
鐃のすゝみかねたる黄昏に　雪
をし恩愛の澤を二羽たつ　角
棧造り曲輪の罪を指をらん　丸
きぬ〴〵の衣薄きにぞ泣　齋
いかなればつくしの人のさわがしや　堂
古梵のせがき花皿を花　風
ひぐらしの聲絶る方に月見窓　蕉
引板(ひた)を業とすをのこ嘯く　雪
ニウ
武士のものすさましき競ひ　角
七里法華の七里秋風　齋
丑三の雷南の雲と化し　丸
槐の小鳥高くねぐらす　蕉
陰陽神の留主其まゝの假屋建　堂
狂女さまよふ跡したふなる　風
情しる身は黄金の朽てより　蕉
輕く味ふ出羽の鱘　丸
寒月のともづなあからさまなりし　雪
枯てあらしのつのる荻萩　角
獨樂の茶に起臥を舍るのみ　丸
三里もするゑず不二いまだ見ず　齋
鹿をおふ弓咲花に分入て　堂

春を愁る小の晦日　風
三オ 陽炎に坐す緣低く狹かりき　蕉
砥水きよむる五郎入道　雪
悴もたば上戸も讓るかくごなり　角
雲ちり〴〵に風かをる藪　丸
伊豫すだれ湯桁の數はいさしらず　齋
入院見舞の長に酌とる　堂
一陽を襲正月はやり來て　風
汝櫻よかへり咲ずや　蕉
染殿のあるじ朝日を拜む哉　雪
しのぶのみだれ瘧もゝたび　角
うき世とはうき川竹をはづかしめ　丸
名をあふ坂をこしてあらはす　齋
后の月家に入る尉出る兒　堂
わけてさびしき五器の燒米　風
ニウ みの虫の狂詩つくれと鳴ならむ　蕉
忠に死たる塚に彳む　育
初雪の石凸凹に〳〵　角
小女郎小まんが大根曳ころ　丸
血をそゝぐ起請もふけば願り　齋
見よもの好の門は西むき　堂
御あかしの夜をさゝがにの影消て　風
汗深かりし憤る夢　蕉
はらからの旅等閑に言葉なく　雪
ふるごとさとる小夜の中山　角
枝花をそむくる月の有明て　丸
ふらこゝつらん何がしが軒　齋
缺して修理する舟の春となり　堂
立初る虹の岩をいろどる　風
ナオ きれだこに乳人が魂は空に飛　蕉
麻布の寢覺ほとゝぎすなけ　雪
わくら葉やいなりの鳥居顯れて　角
文治二年のちから石もつ　丸
みだれ髮股くゞりしと僞らむ　齋
礫にかよふこゝろくるはし　堂
三日月の影西須磨に落てけり　風
秋はものかはあけ捨の棟　蕉
燈心をおもへばかならず初嵐　雪
只一眼も道は一すぢ　角
特(こつてい)のくろきもさすが夕間暮　丸
定家かづらの挑む冬ざれ　齋
低く咲花を八手と見るばかり　堂
桶の輪入の住ひいやしく　風
ナウ ひだるさを鰥にかへたるこゝろ太　蕉
瀧を惜ぬ不動尊き　雪
聲なくてさびしかりけるむら雀　角
出る日はれて四方靜也　丸
花降ば我を匠(たくみ)と人やいはむ　齋
さくら〳〵に奥深き園　執筆

▽『不猫蛇』　端物一

（此句は貞享三年の『蛙合』にあり。脇はいつのものか不明なるが、越人の『不猫蛇』によりて記す。）

古池や蛙飛びこむ水の音　翁
蘆のわか葉にかゝる蜘の巣　其角

▽『丙寅紀行』　端物一

（貞享三年風瀑か旅行せんとしたる時

のもの也。）

首途も近よらぬ間、むさし野の月見んと、芭蕉庵を訪て、

深川はすみれ咲く野も野分かな　嵐瀑

春のはたけに鴻のあし跡　芭蕉

初寅のはじめの市の日和えて　一晶

朝とき月の都をがみに　琴蔵

牛車我等が霧の道安き　虚洞

▽『無底籠』歌仙一

（貞享三年頃去來が江戸に下りし時のもの也。）

南窓一片春といふ題に

久方やこなれ〳〵とはつ雲雀　去來

旅なる友をさそひ越す春　芭蕉

からばかす櫻の庵掃過て　其角

よろしく長き一瓢の酒　嵐雪

（『七部拾遺』此句を「よしと口きる一瓶の酒」とす。）

月はれて灯火赤き海の上　蕉

峠のそこにふく秋の音　來

ウ

牛蝿に給おもたく羽折りける　雪

官位あたへて美女召具せり　角

挑灯に大蝋燭の高けぶり　來

出水にくだる谷の材木　蕉

世わたりは闕に道ある寺の背戸　角

つゝむにあまる腹氣押へし　雪

あだ人のために斯くまで氏をすて　蕉

何についたる年暮の雪　來

なきおくる八重山本の犬の聲　雪

軍の加減うとき長追ひ　角

さる程に心にそまぬ月も花も　來

やよひへかけて蝦夷の帳合　蕉

ニオ

雨もやう陽炎消ゆるばかりなり　角

小姓泣き行く葬禮の中　雪

叮嚀も事によるべき枚嚢　蕉

しくものとては須磨の鹽鷹　來

あはれます昔がたりの咨手鳥　雪

橘やせし竹の夕陰　角

冥加なう藥すゝめにお腰元　來

（『七部拾遺』「藥」を「夜食」とす。）

毛氈をしき書畫のはじまり　蕉

こちあくる庇の下の十萬家　角

日は何時ぞ醉さめの月　雪

きり〳〵すいかで心の情なき　蕉

（『七部拾遺』「心」を「浮身」とす。）

莖たくましき筒の鶏頭花　來

ニウ

いつとても雨部の護摩の片燃に　雪

四つの知慧には過ぎた家の子　角

鼻つまむ晝より先の生肴　來

あはづにまけぬ串の有樣　蕉

縄きれて架木に咲る花かろく　角

あそぶ思案のわけてのどけき　雪

▽『元祿風韵』歌仙二

（此書は倉重禾刀氏藏架寫本にして未だ板本を見ず。）

其一

（此巻貞享元年のものにして、諸書脇だけ也。）

師の櫻むかし拾はん落葉哉　嗒山

薄を霜の髭四十一　芭蕉
月夜すむ竹の曲彔琵琶澄て　木因
簾に鰥の聲を設けし　如行
洞鴨の石の古巣も冷まじく　蕉
作らぬ松の雨にのびたる　山
ウ
草鞋を印の塚に築きしより　行
鼠の太郎熊狩に入る　因
武かれと聟の心やためすらん　山
破軍の誓ひ餅北に搗く　蕉
日の諷ひ簇を踊る果の國　因
（「簇」は「簓」ならん。）
早苗はじめて得し寶草　行
世の愛を產みけん人の御粧　蕉
戀降雪のうへの月しら玉　山
（此句誤記あらん。「戀降る雪の月の白玉」カ。）
曙の三昧せん杖にすがりたる　行
寄手を招く水曳の麾　因
花を射て梢を船に贈りけり　蕉
詩を啼く鴉柳みどりに　山

ニオ
不二の晴覘に雪を計り見る　因
女に法を說く夜千年　行
朝がほに髮結ふ人ぞ哀なる　山
貧のやつれに萩の庭賣る　蕉
犬捨る名殘は露を吼えけらし　行
馬塊三谷の楊貴妃の秋　因
誰が國の記念ぞ鏡すむ月は　蕉
琴の唱歌に作り艶れて　山
明石なるしらゝ吹上須磨明石　因
（「明石なる」誤記ならんも考へ得ず。）
夕べ花しらぬ剛寺に寢ん　行
（「しらぬ」は「しら」ならん。）
霞うつ草刈鼓とり出て　山
梢に繭巣を紡る年の夜　蕉
ニウ
愚を溜めて金を我子に隱したる　行
二疋の牛を市に吟ずる　因
鷄兮鵺兮朝の喧き　蕉
美山の灘を產水に汲む　山
散れと折る花に白髮の芳しく　因

世の外輕し身は野老賣　行

其二

花園　貞享四　江戸

花に遊ぶ虻なくらひそ友雀　芭蕉
猫和らかにゆるゝ緒柳　岩松
春雨に留主の隣の屋根見えて　古益
碁盤によりし翁三人　爐方
るりの月水晶の酒重ねたる　松
鶯の卵をくゝむ桐の華　蕉
ウ
朝露の夢に佛を孕らん　方
笠の下端に結ぶ御祓　益
盗人の關は戶さしもなかりけり　蕉
あはれに枯し楮一本　方
凪寒き夕日に蔦の聲引て　益
軍にあすの首を占ふ　蕉
肌衣汗を管にすゝぐらん　方
箭に閉る松の潜り戶　松
都より三里遊女を忍ばせて　蕉
思ひ内にあれば日は何時ぞ　益

其まぎれ敲打べき雨の月　松
　玉むし賣て酒屋尋ぬる　方
お針して秋も命の緒を繋ぎ　益
　琴引く娘八ッになりける　蕉
石竹に小百合の露のこぼれつゝ　方
　風の南に麝香薫く　松
此山に傘の斧を踏たまひ　蕉
　松の蝉をはがす幕綱　益
紅の蔦は箱をかざるらん　松
　二聲啼て鶴月に入　方
西に見る長安城に霧細く　益
　大樽荷ふ上戸百人　蕉
箏乗て箔置牛の静なる　方
　牡丹を手をろ牡丹花の戀　益
薄様の文に櫻の實を染て　蕉
　ねりの嚢に螢包める　方
しよぼ／＼と信楽笠に小雨ふり　益
　出代り侘る一條の辻　蕉
寺々や社々の花さかり　益
　雲は彌生のぬひものゝ天　方

▽『續虚栗』端物一　四十四

○端物（其角の母の追善にして、貞享四年也。）

五七の日追善會

卯花も母なき宿ぞ冷じき　芭蕉
　香消のこるみじか夜の夢　其角
色〳〵の雲を見にけり月澄て　嵐雪

○四十四（貞享四年旅行の時也。）

十月十一日餞別會

旅人と我名呼ばれむ初霽　芭蕉
　亦さゞん花を宿〳〵にして　由之
鶺鴒の心ほど世のたのしきに　其角
　粮を分たる山かげの鶴　枳風
かけありく芝生の露の淺緑　文鱗
　新舞臺月にまはばや　仙化
中の秋畫工一つれかへるなり　魚兒
　鱸てうじておくる漢舟　觀水
神垣や次第にひくき波のひま　全峯
　齡とをしれ君が若松　嵐雪
酒のみにさをとめ連の並び居て　執筆
　卯月の雪を握るつくばね　蕉
鰥つる袖つくばかり早瀬川　之
　蔦一面に殘る橋杭　角
道しらぬ里に礎をかりに行　風
　月にや泣ん泊瀨の籠人　鱗
葛籠とく匂も都なつかしく　化
　おもはぬ事を諷ふ傀儡　峰
途中に立る車の簾を卷て　蕉
　沖こぐ船にめされしは誰　之
花ゆへに名の付く波ぞめづらしき　雪
　別るゝ雁をかへす琴の手　擧白
顧の峰しばしうき世の外に入　水
　萓のぬけめの雪を燒家　化
老の身の繩なふ程にほそりける　之
　君流されし跡の關守　蕉
明暮は干潟の松をかぞへつゝ　白
　いのちをおもへ舟に遁世　角

起出て手水つかはん海のはた　雪
しらぬお寺を頼む有明　水
葬や石ふむ坂の日にしほれ　峰
小畑さびしき案山子作らむ　風
草の戸の馬を酒債にさへられ　蕉
つね見る星を妹におしゆる　白
薫のしめり面白き夕涼み　化
織かざして氏の天王　角
ニウ
御牧野の笛吹習ふ童聲　峰
僧くるはしく腰にさす杖　風
見ぐるしと文字の子昂を嘲て　角
堺の錦蜀をあらへる　蕉
隠家や寄居虫の友に交りなん　水
筏に出て海苔すくふ頃　蕉
谷深き日うらは花の木目のみ　白
鞏しだれたる春の山鳥　之

▽『句餞別』端物二

其一

十句

しろがねに蛤をめせ霜夜の鐘　松江
一羽別るゝ千鳥一群　芭蕉
枯草にいよ〳〵松のみどりして　曾良
田中の道のとをりくれ行　依々
月ほそくをのが家しるはなし馬　泥芹
秋風上る門のはじとみ　水萍
ウ
露の糸錦をとをす梭の音　風泉
雨には見せじ蘭のきせ綿　夕菊
（「蘭」は「菊」の誤ならん。）
旅枕女あるじの情得て　苔翠
傾城かげをかくす明ぼの　執筆

其二

十句

時雨〳〵に鎰かり置ん草の庵　臯白
火燵の柴に侘を次ぐ人　芭蕉
松風にそれたる鵙を見のがして　溪石
朝氣はくらき湯の山の月　コ齋
鐘ひとつ三郷にかよふ秋の聲　其角
葛の纏面をゆるされし文　卜千
繻子をもいたはる嫁の名をとげて　嵐雪
餅二かさねえにしそふ帶　白
よし原の土手に子日の松ひかん　蕉
誰がぬし有て飾する宮　石

▽『春と秋』脇四　附句十

○脇（貞享元・二年）

其一

江戸を立日

芭蕉野分その句に草鞋かへよかし　李下
月ともみぢを酒の乞食　芭蕉

其二

伊勢山田にて芋洗ふといふ句を和す

宿まゐらせん西行ならば秋の暮　伊勢山田 雷枝
芭蕉と答ふ風の破笠　芭蕉

其三

花の咲く身ながら草の翁かな　伊勢山田 勝延
秋にしをるゝ蝶のくづをれ　芭蕉

其四（元禄元年カ）

われもさびよ梅よりおくの藪椿　伊賀 雅良
茶の湯に残る雪のひよどり　芭蕉

○附句 十

其一（「海くれて」の巻にあり。）

美人を拝むかげろふの塊
夷の聾聲なき蝶と身を泣いて　翁

其二（同）

一輪咲ける窓の芍薬
碁の夫二日とぢたる目を明て　翁

其三（「つく／＼と」の巻にあり。）

打かづく前垂の香のなつかしく
君にもたれて酒買にゆく　翁

其四（同）

木の間／＼に星見ゆるかげ
宮守が油さげ行く華のおく　翁

其五

ひとり書を見る草の戸の中
二町ほど西に碪のきこゆ也　翁

其六

榎木の風の豆殼を吹く
寒き爐に住持はひとり柿むきて　翅

其七

小僧二人ぞかしこまり居る
朝鮮の繪書に奈良の酒をくみ　翁

其八

我戀は色紙を持るわらひより
宮司が妻に惚れられてわぶ　翁

其九

すゝきを切て笘にふきけり
琴おふて鹿聞に入る篠の隈　翁

其十

侘おもしろく椽のかゆ煮る
更科の里の碪を聞きに行　翁

▽『千鳥掛』歌仙其他

（此書は正徳二年蝶羅の刊行したるものなれど、其父知足の編する所にして、『甲子吟行』及『笈の小文』二旅行に關するものを收めたり。）

○歌仙 三

其一（貞享四年）

星崎の闇を見よとや啼千鳥　芭蕉
船調ふる海士の埋火　安信
築山のなだれに梅を植かけて　自咲
遊ぶ子猫の春にあひつゝ　知足
うその聲夜をまつ月のほのか也　業言
岡のこなたの野邊青き風　如風
ウ 一里の雲母ながるゝ川上に　重辰
祠さだめて門ぞはびこる　言
市に出てしばし心を師走哉　足
牛にれかみて寒さわするゝ　信
籾臼の音聞ながら我いびき　風
月をほしたる蝶の酒　蕉
高紐にかぶとをかけて秋の風　咲
渡り初する宇治の橋守　風
鹿造る西行谷のあはれとへ　足
啄木鳥たゝく杉の古枝　信
咲花に晝飯の時をわすれけり　辰

山もかすむとまではつゞけし　足
二ウ
辛螺殻の油ながるゝうす氷　風
角ある眉に化粧ひする霜　蕉
まつ宵の文をくひさく帳の内　言
ねられぬ夢に枕あつかひ　風
罪なくて配所にうたひ慰ん　信
庶子にゆづりし家のつり物　足
（『つり物』を『幽蘭集』『金蘭集』は「つは者」とし、『一葉集』は「影物」とす。）
式日の日はかたぶきて心せく　風
浅草米の出る川口　辰
欄干に顔ならぶ夕すゞみ　蕉
笠もてあふつ螢火のかげ　咲
初月に外里の嫁の新通ひ　足
すゝきは招く荊袖ひく　蕉
二ウ
朝霧につらきは鴻の觜ならず　辰
あかゞね瓦なめらかにして　咲
氏人の床園多き花ざかり　言
鶯いくむれの春とゞまらず　風

田をかへすあたりに山の名を聞て　信
かすみの外に鐘をかぞふる　執筆

其二（同）

（『千鳥掛』は表六句だけを擧げ、「歌仙有、略之」と記せり。依て『冬のうちわ』によりて全巻を揭ぐ。）

はせをの翁を知足亭に訪ひ侍りて

めづらしや落葉のころの翁草　如風
衛士の薪と手折冬梅　芭蕉
御車のしばらくとまる雪かきて　安信
錢を袂にうつす夕月　重辰
矢巾の聲ほそながき荻の風　自咲
かしこの薄叓の篠庭　知足
ウ
岡の邊に心を外の家建て　業言
妾がなづけしひよこ啼なり　信
木綿機はてぬ涙にぬらしける　風
とはん佛の其日ちかづく　足
白雲をわけて故郷の山しろし　咲

はなてる鶴の啼かへる見ゆ　蕉
霜覆ひ蘇鐵に冬の季をこめて　信
煤けし額の軒をもる月　辰
秋や昔三ツにわけたる客とかや　足
いろ〳〵置る夕ぐれの露　風
散とこそ蓑着てゆする花の陰　信
痩たる馬の春につながる　辰
二オ
米かりに草の戸出る朝がすみ　蕉
山のわらびをつゝむ藁づと　信
我戀は岸を隔つるひとつ松　風
うき名をせむるさゞ波の音　咲
けふのみと北の櫓の添ぶしに　足
琵琶にあはれを楚の歌のさま　言
色白き有髪の僧の衣着て　蕉
疊に似たる岩たゝみあげ　辰
柱引御代のはじめうねび山　言
さゝらに削る伊勢の濱竹　蕉
貝のから色どる月の影清く　辰
部屋にやしなふ籠の松虫　信

二ウ
旨へとぞ鋪に編たる萌かりて　蕉
母のいのちをちかふ初霜　辰
羊啼くその暁のあさあらし　咲
外山の花の又夢に咲　足
日はながく雨のひらだに苫葺て　信
雁のなごりをまねくおの〳〵　言

○歌仙

其三（同）

海寺島氏僕言亭に烏井雅章雅の新詠草のかゝり侍りしを和す。
（此前書は『一葉集』によりて補ひたり。）

京まではまだ半空や雪の雲　芭蕉
千鳥しばらく此海の月　業言
小蛤ふめどたまらず袖ひぢて　知足
酒氣さむればうらなしの風　如風
弾捨し琵琶の嚢を打はらひ　安信
僕はおくれて牛いそぐなり　自咲
ウ
ふたつみつ反哺の鵄啼つるゝ　重辰
明日の命の飯けぶり立　信
わたり舟夜もあけがたに山見えて　咲
道いく處にしか東か　蕉
其姿わかれの後も一咲ひ　足
なみだをそへて習ひ腰折　言
髪けづる黄の油の名もつらし　蕉
身に瘡出て秋は寝苦し　風
鈎簾の外にたばこを吹む月の前　信
相夜相撲のちからあらそひ　足
小袖して花の風をもいとふべし　辰
こがるゝ猫の子を捨てゆく　信
二オ
憂年を取て二十もやや過ぬ　足
父の軍を起ふしの夢　蕉
松かげに少し草ある波の聲　咲
翅をふるふ鳩一つがひ　言
静なる龜は朝日をいたゞきて　信
三度ほしたる勅のかはらけ　咲
山守が車に削る木を荷ひ　蕉
燧ならして巖うちかく　足
瀧津瀬におこなふ法の朝あらし　風
狐かくるゝ蔦の草むら　咲
墓破て月はむかしの影ながら　言
老かむ聲がころも打音　蕉
二ウ
ふすぼりし褶の煙のしらけたる　辰
陣の假屋に碁を作るほど　信
山さらに横おりふせる雨のあし　風
氣をたすけなん時鳥なけ　足
花堂文を集むる窓開て　言
御燈かゝぐる神垣の梅　執筆

○端物八

其一（貞享四年）

はせを翁、本見し人を訪ひ、三河國に越へ、序おもしろければ、伊良古崎見んと、白濱よする渚をつたひ、からうじて蕎給ひし蔵の哀を聞て、

麦食や伊良古の雪にくづれけん　知足
砂さむかりし我あしの跡　芭蕉
松をぬく力に君が子日して　越人
いつか烏帽子の戯る春風　足

て全巻とす。）

七月十三日鳴海眺望

初秋や海も青田の一みどり　芭蕉
　のりゆく馬の口とむる月　重辰
藁庇霧ほのぐらく茶を酌て　知足
　痩たる藪の竹まばらなり　如風
蛤のからふみわくる高神子　安信
　笠ふりあげて船まねく聲　自咲
ウ 白雨の雲つゝみゆく雨のあし　風
　田面にむれし鷺の羽をのす　足
お乳そひてわからにものや云ぬらん　風
　おもひ殘せる遠の國椿　咲
琵琶彈て今宵は泣て明すべき　蕉
　鈎簾の一重も恥る黒髪　信
軒高き瓦の鬼の影さびし　辰
　施餓鬼過たる入あひの幡　蕉
淺瀬川向に角力とり初て　風
　樽きりほどき月を酌けり　信
花の雪鷹に見せたき泊山　足
　水おもしろき寺の春風　牛歩
二オ 勢多の橋なかばは霞たえぐに　信
　白壁遠く炭をうる市　足
芝原の朝霜はらふ布衣　咲
　けふ一七日戸帳ひらきて　足
かしこまる百首の歌をよみ終り　蕉
　妻に聞せん尺八の曲　信
湯あがりの肌には伽羅を炷こがし　足
　むかしはづかし今の竹垣　歩
ゑのころの踏あらしたる蘭の鉢　咲
　魚つむ船の岸による月　辰
露の身の島の乞食と黒み果　蕉
　次第にさぶき明くれの風　足
二ウ 猿の子の親なつかしく叫けむ　信
　鴉も鳩も柴の戸の伽　蕉
石ふみてかた下りなる岨の道　風
　杉葉まじりのつくぐし摘　足
かんざしに花折娘打むれて　信
　胡蝶をはやす鶴龜の舞　咲

其八（元祿元年）

賀新宅

よき家や雀よろこぶ背戸の粟　芭蕉
　珠にみゆる野菊刈萱　知足
投渡す岨の編橋霧こめて　安信
　風呂焼きに行月の明ぼの　蕉
杉垣のあなたにすごき鳩の聲　足
　初霜下りて紙子捫つゝ　信

○附句二

はせを老人、此所に杖を休め給ひ俳談のあまり、付句并にほくども書殘し置れけるを、反古の中よりさがし出し、なつかしさのまゝ、こゝに記し侍りぬ。

其一

琴引ならふ窓によらばや
打提る道にて菊の名を忘れ　芭蕉

其二

酒に興ある友を集る
ぬけ初るちゝの一齒のかなしくて　同

▽『幽蘭集』歌仙其他

（貞享元年『甲子吟行』旅行のときより、元祿元年『更級紀行』を終りて江戸に落付きし年の暮までのものにして、前記諸書に漏れたるものを『幽蘭集』より編入す。）

○端物 四

其一（貞享元年カ）

能程に積かはれよみのの雪　木因
冬のつれとて風も跡からはせを

其二（貞享四年カ）

（此卷は旅行前江戸にてのものと考へらる。傳寫のうちに、二ウの二句一聯を脫落して、三十四句の端物となりしならん。）

冬景や人寒からぬ市の梅　濁子
隣をまよふ入あひの雪　其角
年の貧俵おひゆく詠して　芭蕉
火をたく舟の星くらき空　仙化
驚うごく松おもしろき磯の月　枳風
かざしに折らんすゝき一むら　コ齋
ウ
太刀持る童のぬれて露時雨　化
車の翠簾につゝむ鈴虫　子
詩來る友引地藏茅朽て　角
うれしと飢にいちご拾はむ　風
櫛かざみ枕にそへて殘しけり　化
御歌合明日とちぎる夜　角
加茂川のながれを胸の火にほさん　齋
萩散かゝる市原のほね　蕉
鵙の啼方に杖つく夕間ぐれ　文鱗
牛を彩なす月の染ぎぬ　子
花の日を亡八の長とかしづかれ　李下
桃になみだか一國の醉　風
ニオ
朝がすみ賢者を流す舟見えて　蕉
詞のうみと繪に讃を乞　角
松島や雲居の庵に酒を飲　下
心は媚ずいくとせの旅　齋
四の時冬はあられのさら〳〵と　鱗
水仙ひらけ納豆きる音　蕉
片里の庄屋の息子角入て　子
伊勢思ひたつ草鞋菅笠　齋
美濃なるや蛤舟の朝よばひ　化
ながれに破る切籠折かけ　下
月入て電殘る蒲すごく　子
ことしの勞を荷ふ燒米　蕉
ニウ
塚の下母寒からむ秋の風　角
邦を軍にとられ行く道　齋
花のおく鳥うつ音に鐘つきて　化
すり餌をゆるす目白黃鳥　下

其三（貞享四年）

（此三句のものは芭蕉が越人を伴うて、杜國を畑村に訪ひし時のものにして、畑村は今愛知縣渥美郡福江町のうち也。そこの渡邊某の家に此詠草を藏すといふ。）

麥はえてよき隱家やはたけむら　芭蕉
冬をさかりに椿咲くなり　越人
晝の空蚤かむ犬の寐返りて　（杜國更）野仁

其四（貞享四年）

（此巻は落梧が荷兮亭留杖中の芭蕉を訪ひ来りて、美濃に誘引せんとしたる時のもの也。『如行子』によれば、十一月廿七日也と。）

凩や寒さかさねよ稲葉山　落梧
よき家續く雪の名どころ　芭蕉
（稿本『如行子』「や」を「の」とす。）
鴫の居るさとの垣根に餌をさして　荷兮
桒の折れ合ふみちほそき也　越人
有明の夜半は人のかげもなし　蕉笠
みなとにふねの入りかゝる聲　舟泉
ワ　住居するあたり見立にありくらん　野水
芥子などありて竹痩せし村　梧
被衣とる顔色（がんしよく）白くおとろへて　蕉
あの髪そりに來たがいたはし　兮
稱出して金持つ心はづかしく　人
紅葉をのみに薪伐るやま　笠
雨ふりの蜩聲のあはれ也　泉
硯もなくて居る秋の野　水
糸はづれ琴かきさがす月の下　梧
まだ目のさめぬ眉のうつくし　人
忍びこし鐘つき堂のはなざかり　水
追行く蝶のたかくなりけり　泉
ニオ　青々と動かぬ石ののどかにて　笠
醉ふて又ぬる此橋のうへ　蕉
夕ぐれは唄をもきかぬ蓮池に　兮
行水したるさまの兒ども　水
追歸る木幡の馬をかざりつれ　蕉
牛よごれし莚おろしつ　梧
ねたければ繪を書さいてね入けり　人
女師走の月とちぎる歟　兮
雪の日のきぬたに涙落したる　水
柴燒く壁のわれてほろ〳〵　笠
砂原の川のこちらに宮有て　泉
終に牛をば捨ず釣り行く　水
（原本「是までにて終る」と記す。）

〇歌仙一

（此条稿本『如行子』によれば貞享四年十一月廿六日　名古屋の昌碧亭のもの也。）

ためつけて雪見にまかる紙衣哉　芭蕉
凍るる土に拾はれぬ塵　昌碧
松風に眠る日向のすくなくて　亀洞
鶴白鳥のおりておもしろ　荷兮
水淺く舟押ほどの秋のくれ　野水
もう山の端に月の一寺　聽雪
（『金蘭集』等「寺」を「處」とす。）
ウ　きぬ〴〵や烏帽子置所（とこ）わすれけり　越人
眉ほそむるも耻るうかれ女　舟泉
寄手等はいつともなげに歌よみて　執筆
干飯の水のつめたきもよし　洞
着て來たる布子苦になる晝の頃　碧
涙うつりて能くはおぼえず　水
門跡の顔見る人はなかりけり　兮
笈に雨もる峰の稲妻　蕉
能ほどに寢てから後の碪聞　處
夜明るなりと膽つぶす月　人
うか〳〵と律義に花の待れつる　泉

雌ともしらで飼る黄鳥　洞
二オ
尼寺の春雨くらくしと／＼と　碧
釣瓶なければ水のとぎるゝ　雪
夕がほの軒にとりつく久しさよ　人
布杭二本よるはさびしき　兮
ひまくれし妹をあつかふ人も來ず　蕉
食(めし)たくことをわびて泣けり　碧
旅立の心はむさき物なれや　泉
けふ髮剃に加茂川の水　水
蟬の音に苔の衣も身に付ず　洞
（稿本『如行子』中七を「單の衣も」とす。）
ほそき肱の枕いたげに　人
月しのぶ紙燭をけしてすべり入　兮
物着て君をおどす秋風　蕉
二ウ
此橋を好て歸る霧の中　泉
山ひき出してのり初る駒　雪
しでかけて雁股つがふ弓太く　洞
狩ころびてよりひまころびけり　人
（原本此一句なし。稿本『如行子』によりて補ふ。）
何事も花になりたる花の陰　水
藪の中にも椿山吹　雪

○半歌仙一
（此巻は貞享四年如行が桐葉亭に芭蕉を訪ひし時のもの也。『幽蘭集』前書なし。『一葉集』によりて補ふ。）

我名呼れんと云旅人の句を聞て
旅人と我見はやさむ笠の雪　如行
さかづき寒し謳ひさふらへ　芭蕉
有明の鉢の木賊を苅そめて　桐葉
露になりけり庭の砂原　行
小御門に駒ひきむかふ頭ども　蕉
椎の古枝を腰に折そへ　葉
ウ
覆盆子蹈山より村の雨はれて　行
老聲苦し夏の黄鳥　蕉
物くはで晝寢がちなる物思ひ　葉
またふみ書て車かへしつ　行
樒(はな)籠に見よと摘たる山の草　蕉
玉子くづれし柴人の道　葉
（「玉子」稿本『如行子』は「卯」、『金蘭集』『桃の白實』は「印」、『一葉集』は「しるし」とす。）
橇作る家もさびしき春の風　行
三日月ほそく節句知けり　蕉
鵜を入る初川いそぐ花の陰　葉
美濃侍のしたりがほなる　行
御卽位によき白髮とえり出され　蕉
植て常盤の百本の竹　葉
（『金蘭集』こゝに「はせを翁心地不快にしてこれ迄にして止む」とあり。）

○表合
（稿本『如行子』によれば、貞享四年十二月三日、名古屋の書林風月堂夕道方のものにして、發句を「あられかとまたほどかれし笠舍り」とす。）

霰かと聞くほどうれし笠舍り　如行
夜の更るまで竹冴ゆる聲　夕道

給あてゝ裾もぎらるゝ磯際に　荷兮
汐のはやきをこゆる洲走魚　野水
海鳴て山より曇る暮の月　芭蕉
鐘つく秋の階子ほく〳〵　執筆

○歌仙一

（此巻稿本『如行子』によれば、熱田の聴雪亭にてのものにして、貞享四年十二月四日なるが如し。）

箱根こす人もあるらしけさの雪　芭蕉
舟に焚火を入る松の葉　聴雪
五六丁布網干せる家見えて　如行
椈(あふこ)むれつゝ葭の中ゆく　野水
明るまで戻らぬ月の酒機嫌　越人
蒂〳〵を揚る盆の夜　荷兮
ウ 帷子に袷羽織も秋めきて　執筆
食早稲くさき田舎なりけり　蕉
神主も常は大かたゑぼしなく　雪
塘見えすく藪の下刈　行
どや〳〵と遷御の跡に鶴釣て　兮
誰やら申出す念佛　人
忍び入戸を明かねて蚊に喰れ　水
うき名しれつる月の傘　行
長き夜を泣たるまみの重たげに　蕉
人に抱れて給をあがりぬ　水
花の賀にけふ狩衣を褻にする　兮
其まゝ梅を栽る幕串　雪

（稿本『如行子』に「是よりは人〳〵のおもむき有て、出がちに物せんといさみて、かく」とあり。）

二オ 下ごゝろ彌生千句の俳諧に　行
胡韮(あさつき)喰ふ人の臭さよ　兮
とろ〳〵と一寝入して目の覺る　人
堂もる雨の鎧通りて　行
ころつくはみな團栗の落しなり　水
共鬼見たしみの虫の父　蕉
布ころも破れ次第の秋の風　行
松島の月松島の月　人
ひよつとして歌の五文字を忘たり　雪
妻戸たゝきて逃て歸りぬ　蕉
泣〳〵てしやくりの留る果もなし　水
あたら姿に頭そられず　行
二ウ 世の中の茶釜賣こそ嬉しけれ　兮
眠たき晝はまろび轉げて　雪
旅衣尾張の國の十藏か　蕉

（「十藏」は越人の事也。）

富士かきかねて又馬にのる　水
懐に盃入る花をかし　行
影ほがらかに柳ながるゝ　人

○端物一（貞享四年カ）

藁のむさらでも霜の枕かな　芭蕉
むかしわすれぬ草枯の宿　起倒

○表合（同）

（此表合は貞享四年のものと推定せらる。然るに五句目に支考の名あり。甚だ不審也。發句は『笈の小文』にありて、上五を「いざ行ん」とす。『鶉衣』後篇拾遺「懐舊辭」に此句の懐紙を摸寫せるが、上五を「いざ出む」とす。）

いささらば雪見に轉ぶ所まで　芭蕉
硯の水の氷る朝起　左見
同じ茶の焙じたらねば氣香もなし　怒風
三十餘年もとのかほなり　杜國改 野人
あの山のあかりは月の御留やら　支考
かやつる世話もやめて此頃　故江

○端物一

（此卷は元祿元年芭蕉が伊勢に至りし時のものと推定せらる。單行本としては『一幅半』に收錄せられたれども、表以外は芭蕉の附句のみなり。『幽蘭集』『金蘭集』『袖草紙』亦然り。依て『一葉集』によりて「秋寒く」より「君が琴」までの十一句を補ふ。されど猶未だ完からざるもの也。）

紙ぎぬのぬるとも折ん雨の花　芭蕉
澄てまづ汲水のなまぬる　路草更 乙孝
酒うりが船さす棹に蝶飛て　一有
板屋〳〵のまじる山もと　杜國
夕暮の月まで傘を干て置　應宇
馬に西瓜を付てゆくなり　葛森
ウ 秋寒く米一升に雁はれて　蕉
繻牛（じゆばん）の糊のたらでさびしき　國
吹付て雨はぬけたる米市　森
夕に駕をかる都人　國
命ぞとけふの連歌を懐に　蕉
寺に祭りし業平の宮　宇
世の中を鶺鴒の尾にたとへたり　森
露にとばしる荻の下末　孝
いなづまの光て来れば筆投て　有
野中のわかれ片袖をもぐ　蕉
君が琴翠の風雅をしたひつゝ　宇

（以下『幽蘭集』による。）

汐は干て砂に文かく須磨の浦
日毎にかはる家を荷ひて　蕉
乞食年とる楷の木の中
聟して冥ながらの月も見つ　蕉
目前のけしき其まゝ詩に作り
八ツになる子の顏淸げなり　蕉

○歌仙一

（此卷『幽蘭集』貞享四年のものとすれど、發句の季語と一座の連衆より見て、四年ならざる事は明か也。しばらく『一葉集』の元祿元年とするに從ふ。されど芭蕉は元年四月は須磨より京方面、五月六月は美濃方面に在りたるを以て、脇の「さみだれ」に合致せざる也。或は貞享二年歟。）

時鳥こゝを西へかひがしへか　如行
うす〳〵はれるさみだれの暮　叩端
萱葺のわづかな庫を掃もせで　閑水
人のたからはとしの數なり　芭蕉
有明に土圭の加減直し置　桐葉
植木のかげに今に殘る蚊　東藤
ウ 物好は律にかなふて靜さよ　工山
茸がまはればいつも寒風　桂梓
篠竹の虎も居さうな谷續　執筆
はら〳〵と火うち出は手のさえ　行
觸事（ふれごと）も田舍となればゆるやかさ　嫣

蜘手の橋のかけつはづしつ　水
戀種を其中將とおもひ侘　蕉
かくせば文の袖におもたき　葉
隙明の用は序になりもせず　藤
一里までなき産神の森　山
散花をまたせて月も山際に　楫
窓から東風のけふもきのふも　端
二オ
暖な空ははやくもかはる雨　行
談義すみたる緣のどろ〳〵　藤
はさみては有るかと腰の汗拭ひ　葉
非人も都そだちなりけり　蕉
脫かぬるひとつ羽折の一ッ紋　水
五寸と書て一寸の雪　行
寒梅の床から添る茶の匂ひ　山
やかましい日は鐘もおぼえず　葉
又してもわすれた物を月あかり　蕉
何所やら凄き秋の水おと　楫
眞黑な石のそばだつ霧の中　端
手前の杖をいたゞいて置　水
二ウ
お十二に過た何かの御器用さ　葉
不淨をよける金欄の德　蕉
釋敎も末が末ほどあぢに成　藤
をさめかねたる儒者の小宅　山
六經の花を古瀬戸に祕藏せん　行
邪なしとおもへ日ながく　楫

○表合一

(『一葉集』に「林鐘十七日」と前書あり。元祿元年美濃にてのものならん。)

何處までも武藏野の月影涼し　寸木
水相似たり三股の夏　芭蕉
海老喰ひに群ゐる鳥の名を問て　荷兮
ゑぼし着ぬ日の更に樂なり　越人
懷をあけてうけたる山ざくら　落梧
蝶狂ひ落欄干の前　秋芽

○五十韻一

(此卷『幽蘭集』『金蘭集』『袖草紙』共に收錄せず。『一葉集』によりて補ふ。『つばさ』によれば、「貞享五戊辰歲林鐘十九日、於岐阜興行」と端作あるよし。)

六月十九日

蓮池の中に藻の花まじりけり　蘆文
水おもしろく見ゆるかるの子　荷兮
さゞなみやけふは火ともす暮待て　芭蕉
肝のつぶるゝ月の大きさ　越人
苅萱に道つけ人の通るほど　惟然
鹿うつ小家の晝はさびしき　炊玉
眞鐵ふく烟は空にほそ〳〵と　落梧
榿たつ岨の風のよめふり　蕉笠
ウ
古寺の瓦ふきたる軒あれし　己百
夜〳〵ちぎる盜人の妻　梅餇
淚より雨にしめりて蓑おもく　露蚕
馬の乘たる舟のせばさよ　鷗歩
須磨明石見殘すほどに暑くなり　拾景
筆ゆひかぬる茄子ちひさし　用呂
蓬生の垣根に機を卷かけて　東巡
齒ぬけの祖父の念佛をかしき　蕉

足跡に米のこぼれていま〳〵し　人
つなげる舟に在明の月　文
秋の風橋杭つくる手斧屑　兮
はかまをかけて薄からする　然
花ざかり節句を山に暮しけり　玉
僧のめしくふ鐘かすむ空　梧
ニオ
高欄に冠ならびて長閑也　飼
蹴あげし鞠に夕日まばゆき　蛩
みどりなる朴の梢の蟬の聲　百
辨當洗ふ清水なりけり　蕉
微塵ばかり片よせ通る風の跡　呂
荷をまちかけて馬士のいさかひ　景
手杵つく賤がかしらのとけながら　歩
もえしさる火にいとゞせはしき　巡
雪の日は内まで鳥の餌をはみて　文
琴ならひ居る梅しづかさ　笠
朝霞生捕れたる物おもひ　然
衣着かへねばわるき春雨　人
時鳥初音まつ夜はけはひして　蕉
まがきの月に車しのばせ　玉
ニウ
此里は籾する音のさら〳〵と　百
孝子蜜柑を折持て行　呂
しらぬ川人の渡るを詠め居て　景
餘所は降らん神のとゞろき　巡
士とりに此片山をほり崩し　笠
牛のくびする松うごきけり　文
おほひなき佛に鳥のとまりたる　然
はしりあがりてわたる反橋　歩
土産にと拾ふ汐干の空せ貝　梧
風ひき給ふ聲のうつくし　人
いづくからわかるゝ人ぞ衣かけて　蕉
御(み)隔子(かうし)あぐる月の寒けき　梧
木枯に花ちる庭の筒鼓　兮
懐紙をつゝむ玉だれの霜　飼

○歌仙一

（此卷「幽蘭集」「金蘭集」共に貞享四年秋とすれど、其非なる事は「時鳥こゝを一」の卷と同じ。元祿元年と推定すべき也。此卷表折端「揚場」より「息る牛」までの二十五句は前掲「凩や寒さ」の卷のものと大同小異なり。何れにか錯誤あらん。）

いろ〳〵の菊もひとつの匂ひかな　叩端
松のひゞきを草庵の秋　桐葉
眞丸に有明月(ライ)のかげ見えて　芭蕉
道のはやきは人のとりえか　東藤
聲高な咲ひも腹を立よりは　工山
揚場へ船の着かぬるやら　閑水
ウ
此あたり何をしるべに住ひせん　執筆
芥子などありて竹やせし村　端
被とる顔に驚く一むかし　葉
此髪剃んことの安さよ　蕉
精出して金持こゝろ恥しく　藤
紅葉をのみに薪きる山　山
雨降の蜩聲のあはれなり　水
硯をさぐる月の小ぐらき　葉
氣ばらしは何を思ひの窓のもと　蕉

まだ目の覺ぬ眉のらうたき　藤
散もせず撞樓に近き花盛　端
飛ゆく蝶の高くなりけり　水
二オ 青〳〵とうごかぬ石の長閑にて　山
醉て又寢る此橋の上　蕉
夕暮は謠ひも聞ぬ蓮池に　薬
行水したるさまの兒ども　端
追歸る木幡の馬をかざり連　蕉
牛よごれし菰おろしつ　山
いそぐほど繪を書さして横に成り　藤
女師走の月と契るか　薬
雪の日の砧に涙落しける　水
柴たく壁のゑみてほろ〳〵　藤
砂川を關にこちらも宮ありて　端
息る牛を捨ず釣ゆく　山
二ウ 奥深き事も悟れば近い筈　薬
行燈の火のほそき明方　端
くもるかと思へば果は風になり　藤
筆一本に花の一時　蕉

誰かしる桃源洞の芳しき　山
茶に酒に先づ水のあたゝか　薬

○脇一

（此發句『曠野』にあり。脇はいつなりや不明なれど、しばらくこゝに置く。）

ひよろ〳〵と猶露けしやをみなへし　芭蕉
菎蒻かひにゆく朝の月　、

○半歌仙二

其一

（此卷及次の卷は『幽蘭集』『金蘭集』共に採錄せざるにより、『袖草紙』によりて補ふ。芭蕉が越人を伴うて江戸に歸りし元祿元年の秋のもの也。）

しら菊に高き鷄頭おそろしや　杉風
泥かぶりたる稻を干す家根　越人
月幾日海なき國に旅ねして　芭蕉
笠に玉子をぬすむなりけり　苔翠
ぽつきりと折れてをかしき雪の竹　友五
はかま着ながら箒たばぬる　夕菊
ウ 御內にて念佛申と名をいはれ　依々
笊捨て行濱の海苔賣　泥芹
左義長の火におどさるゝ在鄉馬　人
かはら庇に朧なる月　風
盃を片手に人を引ずりて　翠
くらべまけたる名所の貝　五
香（かう）の香（か）に物の調子や狂ふらん　依
小袖もれ出る翠簾のかさねめ　風
談義の場泣は普誦（フジュ）上る人さうな　人

（「普誦」は「諷誦」ならん。）

うつくしい子の膝に眠りて　蕉
里遠き花の木陰に豆腐燒　五
たはるゝ蝶の編笠に入　菊

其二

苔翠亭

月出は行燈けさむ坐しき哉　越人
朝夕かゝる柴垣のひよん　苔翠
此君と名をいふ竹の露落て　芭蕉
まづ片假名のイロハ習ひに　友五

南から聲に雨もつほと〻ぎす　夕菊
よもぎをのぞく山の草かり　泥芹
ウ 打くだく燧のかけのさびしくて　依々
女房もどれば留主わたすなり　人
聟と物がたりする戀の友　五
痞おさへてあかつきを泣　蕉
まだ止ぬ雪の戸明て怕たる　翠
さし殘したる曲舞の章　菊
秋風や子を持ぬ身の哀より　人
谷の庵のあたらしき月　依
行鴈におくれて一羽殘りけり　菊
沖に船見る敦盛の塚　芹
唐人の頭巾に花の散かゝり　菊
醉て牛より落る春風　蕉

○歌仙 三

其一

（此卷及び次の二卷共に『幽蘭集』の年代鑑別は誤れるが如し。其一座の連衆によりて、元祿元年冬のものと推定せらる。）

大通庵道圓追善

其かたち見ばや枯木の杖の長ヶ　芭蕉
千鳥來て啼よし垣の池　夕菊
蓑作りみの作りさす雨止みて　苔翠
風のしきりにならす物の音　友五
內洞のくぼかなるより洩る月　素堂
油單をかくる蔦の紅葉々　路通
ウ 句めどもやがて冷たる物くひて　曾良
吾をおもはぬ家童子ども　堂
君はこで鵜の森を出るまで　五
聲うつくしき念佛聞ゆる　翠
いつかはと年かたぶく島の御所　通
隣を起す雪のあけぼの　菊
藪の月風吹たびに影ほそく　良
地に稻妻の種を蒔らん　蕉
拾はれぬ金の氣ながら秋の來て　堂
無理に望みをかけし師の坊　良
峰の供花の岩屋もつらからめ　通
のぼる小鮎を汲ん谷川　五
ニオ 若き身の隱居と成て日は永し　翠
顏のほくろをくやむ乙の子　通
舞衣をむなしく疊む箱の內　蕉
猿は木末の松かさを打　五
苔生し佛の膝を枕して　良
夢とおもひて覺かぬる夢　菊
振袖にいつまで拜む月の影　通
興じてぬすむ蘭の一もと　翠
露深き無言の僧の戸を明て　蕉
身の責代を子に殘しゆく　五
（「身を」は「身の」の誤ならん。）
泣顏をうつす畠のわすれ水　菊
奈良にも恥ぢぬ陶師なるらん　良
ニウ 酒を名に付けては人に憎るゝ　翠
（『金蘭集』上五を「酒に名を」とす。）
塞をも置ぬ庭の砂かむ　通
くみあぐる御堂の朝時ほのかなり　五
（「くみ」誤記ならん。）
皷にせゝられてかぶる笈摺　蕉

清き地に骨を納る花のかげ　良
春暮てゆく香の一時　菊

其二

雪の夜は竹馬の跡に我連よ　路通
花屋をとはん梅の早咲　宗波
打渡す外面に酒の食干て　友五
鵆啼あはす旅立の空　芭蕉
轉びたる船の乗場に殘る月　岱水
火を焚窓をさし覗く秋　曾良
ウ　てろ／＼と機おる虫の聲澄て　夕菊
朝日にむかひきるゝ珠數の緒　水
生れ付見にくき人のうらやまし　良
親にうらるゝ品もありけり　通
世のさわぎ鬪もこさせぬ御調物（みつぎもの）　波
蔓のあくたをあらす野鼠　五
不二詣おひねたわらを草枕　蕉
（中七誤記あらん。）
母の佛を假にあづかる　水
産棚に臼繪の桶を居並べ　五
濁りをすます砂川の水　菊
夜もすがらつぶねは月につかはれて　通
破れ扇の骨をつながん　五
ニオ　初秋はまだ帷子の氣色なり　菊
腹わづらひてにくむ喰もの　蕉
さんといふ娘の顔の美しき　水
いやしき家に積る文塚　通
解分る垣ねに黄なる綿掛て　五
うばより先に白髪おろさむ　水
苅頃にいつかなるべき糯（もち）の稻　良
嵐に月を吐出す雲　菊
秋山にあら山伏のいのる聲　蕉
こる人もなくこけし神の木　五
打みだれ何をか蟻のいそがしき　通
心をけしに入るかくれ家　蕉
ニウ　文字ひとつふしては習ふ腹の上　良
まなこくぢいてあはれ幾年　通
佛を浮世袋に殘しけり　五
馬うりかへて酒ひらく家　水
花に舞次男に名乗譲るらん　菊
貧にほこりし鍛冶の春風　蕉

其三

雪毎に梁たわむ住ひかな　岱水
けぶらで寒し浦の鹽燒　路通
さま／＼の魚の心も年くれて　芭蕉
はじめて雁の北にむく顔　友五
のけぞりて峰の梅咲朝月夜　曾良
瓢簞荷ふ春のあげまき　宗波
ウ　一里は其時よりの神さびて　嵐竹
尺とりて見む賴朝の釜　雨洞
からげたる書物を夜の艸枕　夕菊
かたぶく松に母の佛　緜絲
宿かりて此頃うつる三井の坊　通
力もちするたはら一俵　蕉
放されてねりかむ牛の夕涼み　五
つかへに障る旅の稻妻　水
西行の像を拜する浦の月　波
誰か住らむ碑の銘の露　洞

苫生を朽木の花に植そへて　良
春の遊びに母衣かゞるらん　通
ニオ
飴賣の霞をわくる矢瀬の里　絲
野火焚捨て道かはるなり　竹
後の世の罪とやならん毒ながし　五
九輪は落て青石の塔　良
ひとかいの松うごくほど吹嵐　水
むくろばかりを殘す夕月　竹
秋寒くあはれと拾ふ虫のから　菊
痩たる乳をしぼる露けさ　絲
とはぬ夜に膳さし入る蚊帳の内　蕉
蛭が小島もなさけしるらん　通
其まゝに剃たる僧を師と賴む　良
生木をもやしてあたる冬の日　水
（「を」は衍ならん。）
ニウ
かたく＼は袖なき衣にもる時雨　竹
悴四五人ほえて苦しき　蕉
菅笠も哀に見ゆる熊野道　通
峰には猿の小猿手を引　絲

優婆塞も花に心やうごくらん　五
麻の羽折につゝむ山吹　菊

○端物一

（此卷亦前三卷の歌仙と同年のものならん。）

皆拜め二見の七五三を年の暮　芭蕉
篠竹はこぶ煤掃の風　岱水
鰯うる俵の小口解そめて　曾良
村の地取におこす鍬形　嵐竹
珍敷湯水湧出る峰の月　宗波
ウ
薬をかく松の霧に横たふ　路通
霜置ぬ常盤の里の菊買に　友五
立ならびたる家根の繩あみ　泥芹
三絃を曉ごとにぽつ＼／と　夕菊
まくりて歸る榻のねむしろ　蕉
茶ひとつの情を思ふ衛士が妻　通
稲荷まゐりに緣かりし庵　良
朝月の杜にかゝる作の面　水
尊とや僧の施餓鬼よむ聲　波

侍の身をかへよとや秋の蝉　蕉
おもひのうちにも夢は見へけり　通
（『金蘭集』上七を「おひのうちにも」とす。）
羊腸の道散埋む花の坂　五
清水ほり出すきさらぎの雪　菊
ニオ
蛙啼窓のあかりに舟よせて　竹
硯をほどく顔のけだかさ　蕉
髮それば國なつかしき須磨の守　波
花はさかりに茄子ちひさき　菊
男なき妹がすだれを守かねて　通
涙火桶に鼻紙をほす　蕉
老ぬれば針の耳すの背けたる　五
子ながら僧のはづかしきぞや　水
賤の家に茶碗二は手を置ず　通
ぬすみするさへ掟さだめし　良
甲斐信濃月をあらそふ濁り酒　波
突はづされてのぼる初鮭　五

▽『冬のうちわ』脇一

（此句は『曠野』にあり。初案は『東日記』の「枯枝に烏のとまりたるや秋のくれ」なり。素堂の脇はいつのものか不明なれば、假りにこゝに置く。）

枯枝に烏のとまりけり　芭蕉
鍬かたげ行人霧の遠里　素堂
（原本「人」は「ん」とも見ゆ。『一葉集』「かたげゆく」とす。）

▽『雪の薄』

（此巻『雪まろげ』にもあり。「元祿二仲春、嗒山旅店にて」と端作あり。『奥の細道』大旅行首途前のものなるべし。）

かげろふの我肩に立かみこかな　芭蕉
水やはらかにはしり行おと　曾良
杣の家にうどのあへものあつらへて　嗒山
身はかりそめにさるのこしかけ　此筋
いざよひもおなじ名所に歸しけり　良
（「し」は「り」の誤ならん。）
こゝろをかくす物うりの秋　蕉
ウ 萩原は露にぬれても面白き　筋
ぶとふりはらふ供のたいまつ　山
五月迄小袖のわたもぬきあへず　蕉
おちたる髪をときそろへつゝ　良
こひられてこふ人よりも物ぐるし　山
ほそく書たるふみのやさしき　筋
盃をそこらにこたつ取まきて　良
年寄一人日待つとむる　蕉
ものの音もなつは夏をぞふきにける　嵐蘭
きりのたつたる其かげの家　山
（『花鏡』上七を「きりのたら立」とす。）
たびぐるまあくるひがしは月と花　良
なみはかすみのふじをうごかす　蘭
二オ 客よびてしほひながらのいかなます　蕉
いぬにおはるゝあぢのむらどり　良
城北のはつ雪はるゝみのぬぎて　山
おきて火をふくかねつきが妻　蕉
行歸りまよひ子よばる星月夜　蘭
組てこかせば鹿驚なりけり　山
やまかぜにきびしく落る栗のいが　良
黒木ふすべるたにかげの小屋　北鯤
たがよめと身をや任せむ物思ひ　蕉
あら野のゆりになみだかけつゝ　蘭
おほかみの番してあくる夏の月　嵐竹
みつのいはやに佛つくりて　山
二ウ 麥ゑます諏訪のいで湯のにへかへり　蕉
たび寐侘たる關のうちもの　良
何ゆへに人のじうさと身をさげて　蘭
膳にすはれば鯛のはまやき　山
一門の花見衣のさまざまに　鯤
つたはる藤の筋のどかなり　竹
（『幽蘭集』此句を「藤をつたふる攝政の筋」とす。）

▽『いつを昔』脇一

（此句は内藤露沾公が芭蕉の首途を送りたるものにして元祿二年也。）

松島行脚の餞別
月花を雨の袂の色香かな　露沾
蛙のからに身を入る聲　翁

▽『雪まろげ』歌仙其他

（此書は曾良の遺稿を其甥周徳が元文二年整理刊行したるものにして『奥の細道』大旅行中の連句の多數を收めたり。依て此書を主として大旅行中のものを編次したり。順序は此書によりたれば旅行順とは一致せざるものあり。尚『奥の細道』參照。）

〇歌仙 四

其一

（此卷は桃隣の『陸奥衞』にもあり。附句及び作者名に異同多し。主要なるものを註記するの外は省略す。）

那須余瀨翠桃亭尋て

秣おふ人を枝折の夏野かな　芭蕉
青き覆盆子をこぼす椎の葉　翠桃
村雨に市のかりやを吹とりて　曾良
町中を行川音の月　蕉
はし鷹を手に居ながら夕涼　桃
（『陸奥衞』此句を「鷹の子を手に居ながらきり〳〵す」とす。）
秋草畫く帷子はたそ　良
（同書此句を「萩の畫繪の縮緬は誰」とす。）

ウ
物いへば扇に顏を隱されて　蕉
（同書此句の中下十二字を「小笠に額を押入るゝ」とす。）
寢亂れ髮のつらき乘合　翅輪
尋るに火を焚付る家もなし　良
ぬす人こはき二十六（はたむり）の里　桃
（「二十六」は「とゞろく」ならん。）
松の根に筵をならべて年取ん　蕉
雪かきわけて連歌始る　桃
名所のおかしき小野の炭俵　輪
碪うたるゝ尼達の家　良
あの月も戀ゆへにこそ悲しけれ　桃
露とも消えぬ胸のいたきに　蕉
（「ぬ」は「め」ならん。）
錦繡の時めく花の憎かりし　良
己が羽に乘る蝶の小車（をぐるま）　桃

二オ
日傘さす子供誘ふて春の庭　輪
衣を捨て輕き世の中　桃里
酒呑めば谷の朽木も佛なり　蕉
狩人かへる岨の松明　良
落武者の明日の道問ふ草枕　桃
森の透間に千木の片そぎ　輪
（同書此句を「水こと〳〵と御手洗の音」とす。）
日中の鐘つく頃に成にけり　里
一釜の茶もかすり終りぬ　良
（同書此句を「一釜かする美濃の莖長」とす。）
乞食ともしらで浮世のものがたり　輪
洞の地藏にこもる有明　桃
蔦の葉は猿の涙や染つらん　蕉
流人柴かる秋風の音　里
（同書此句を「冬を譯て流人柴刈」とす。）

二ウ
けふも又朝日を拜む石の上　蕉
米とぎちらす瀧のしら浪　二寸
（同書此句を「殿付られて唯のする舟」とし、作者を「翅輪」とす。）
旗の手の雲かとみえて翻り　良
（同書此句を「奥衞も時は替らずほとゝぎす」とす。）

奥の風雅を物に書つく　輪
（同書此句を「嚙ずに呑メと投ル丸薬」とす。）
珍らしき行脚を花に留置て　秋鴉
（同書此句を「花の宿馳走をせぬが馳走也」とし、作者を「桃里」とす。）
彌生くれける春のつごもり　里
（同書此句を「ふさぐといふて火燵其まゝ」とし、作者を「翠桃」とす。）

其二

（此巻は等躬の『信夫摺』にも蓼太の『奥の細道拾遺』にもあり。同書には「四月十二日」と日附を記す。）

奥州岩瀬郡相楽伊左衛門亭にて

風流のはじめやおくの田植歌　芭蕉
覆盆子を折て我まうけ草　等躬
水せきて晝寢の石や直すらん　曾良
籭(ひく)に鮴(かじか)の聲生かすなり　蕉
一葉して月に益なき川柳　躬
日傭屋根葺く村ぞ秋なる　良
『信夫摺』「日傭」を「一雇(ユイ)に」とす。
ウ
賤の女が上總念佛に茶を酌て　蕉
世をたのしやと涼む敷物　躬
ある時は蟬にも夢の入りぬらむ　良
樟の小枝に戀を隔てて　蕉
うらみては嫁が畠の名も惜し　躬
霜降山や白髮おもかげ　良
酒もりは軍を送る關に來て　蕉
秋をしる身と物よみし僧　躬
更る夜の壁つき破る鹿の角　良
島のお伽の泣ふせる月　蕉
いろ〳〵の祈を花に籠りゐて　躬
悲しき骨をつなぐ糸遊　良
二オ
山鳥の尾におし鳥や向ふらん　蕉
（『信夫摺』中下を「尾にをく年や結ぶらん」とす。）
芹堀ばかり清水つめたき　躬
薪ひく雪車一筋の跡ありて　良
おの〳〵武士の冬籠る宿　蕉
筆とらぬもの故戀の世に合はず　躬
宮に召されしうき名はづかし　良
手枕にほそき肱をさし入て　蕉
何やら事のたらぬ七夕　躬
住替へる宿の柱の月を見よ　良
すゝき赤らむ六條の髮　蕉
切樒枝うるさゝにえり殘し　躬
太山鶫(つぐみ)の聲ぞしぐるゝ　良
二ウ
淋しさや湯守も寒くなるまゝに　蕉
殺生石の下はしる水　躬
花遠き馬に遊行を導きて　良
酒のまよひのさむる春風　蕉
六十の後こそ人の正月(むつき)なれ　躬
蠶飼する家に小袖かさぬる　良

其三

（此巻の懷紙今も大石田某家に存すと聞く。『奥細道拾遺』にも採錄されあり。「山形町にて」と題せるは誤りにして、大石田一榮方にてのものなる事は、此前

書及び『奥細道』の記事によりて明かなり。）

大石田高野平左衛門亭にて

五月雨をあつめて凉し最上川　はせを
（「凉」はのちに「早」と改む。）
岸に螢を繋ぐ船杭　一榮
瓜畑いざよふ空に月待つて　曾良
（『拾遺』「月」を「影」とす。）
星を迎ひに桑の細道　川水
（『同書』上七を「里をむかふに」とす。）
牛の子に心なぐさむ夕間暮　榮
水雲重し懷の吟　翁
（「水」は「雨」の誤ならん。）
侘笠を枕に充てゝ山颪　水
松結び置く國の境目　良
永樂の古き地領を戴きて　翁
夢と合せる大鷹の紙　榮
薫の名を曉とかこちたる　良
爪紅うつる双六の石　水
捲きあげる簾に兒の這入て　榮
わづらふ人に告げる秋風　翁
水かはる井出の月こそ哀なれ　水
（『拾遺』上五を「水かふる」とす。）
礫打とて撰て出さるゝ　良
（『拾遺』「撰て」を「えらび」とす。）
花の後花を織する花むしろ　榮
涅槃營む山蔭の塔　水
穢多村は浮世の外の春富て　翁
刀持する甲斐の一亂　良
（「持」は「狩」の誤ならん。）
葎垣人の通らぬ關所なり　水
物書くたびに削る松の木　榮
星祭る髪は白髪に枯るゝまで　良
集に遊女の名をとむる月　翁
鹿笛に囃ふもをかし筆足駄　良
柴うりに出て家路忘るゝ　水
ねぶた咲く木陰を晝のかげろいに　翁
絶え〴〵鳴らす萬日の鐘　良
古里の友かと後を振かへり　水
言葉論する舩の乘合　榮
雪霙師走の市の名殘とて　良
煤掃の日を草庵の客　翁
亡人を古き懷紙に數へられ　榮
やもめ鴉の迷ふ人相　水
平づゝみ明日も越べき峰の花　翁
山田の種を祝ふ村雨　良
（原本こゝに句〆ありて各九句宛のよし記す。されど榮は八・良は十なれば作者名に錯誤あるならん。）

其四

（此卷『雪の薄』及び『奥細道拾遺』にもあり。）

新庄風流亭にて

お尋の我宿せばし破蚊帳　風流
はじめてかをる風の薫物　芭蕉
菊作鍬に苣を折そへて　孤松
霧立かくす虹の本末　曾良
そゞろなる月に二千里隔けり　柳風

馬市くれて駒むかへせむ　執筆
ウ 煤けたる父が弓矢を取傳へ　蕉
筆こゝろみて判を定める　流
梅かざすみきもやさしき唐瓶子　良
すだれをあげて通す乙鳥　如柳
三夜さ見る夢に古郷の思はれて　木端
波の音きく島の墓原　風
雪知らぬ松はおのれと肥りけり　柳
萩ふみしけるゐのしゝの妻　蕉
行盡し月を燈の小社にて　松
疵あらはむと露そゝぐなり　端
散花の今は衣を着せ給へ　蕉
陽炎きゆる庭前の石　良
ニオ たのしみと茶を挽せたる春の水　流
はてなき戀に長きさかやき　端
袖香爐けぶりは草に立そひて　風
（『雪の薄』「草」を「糸」とす。）
牡丹の雫風ほのかなり　柳
老僧のいざ小盃はじめんと　蕉
武士みだれ入東西の門　良
おのづから鹿も啼なるおくの原　端
羽織につゝむ茸狩の月　流
秋更て捨子にかさん菅の笠　柳
うたひすませる美濃の谷汲　蕉
乗放す牛を尋る夕間暮　風
出城の裾に見ゆるかゞり火　端
ニウ 奉る供御の肴も疎にて　蕉
よごれて寒き禰宜の白張　流
ほり〳〵し石のかろ戸の崩れけり　風
しらざる山も雨のつれ〴〵　柳
咲かゝる花を左りに袖敷きて　端
黄鳥うたひ胡蝶まふ宿　良
（原本句〆あれど省略す。）

○端物二

其一
（此三句は前掲歌仙と同時のものならん。）
風流亭

水のおく氷室尋る柳かな　芭蕉
（此句上五を谷の奥とする書あり。）
ひるがほかゝる橋のふせ芝　風流
風わたる的の剪矢に鳩啼て　曾良

其二　（前と同時カ。）
盧信亭にて
風の香も南にちかしもがみ川　芭蕉
小家の軒を洗ふ白雨　柳風
物もなく麓は霧に埋れて　木端

○歌仙二

其一
（此卷其角の『花摘』にあり。「發句中七を「雪をめぐらす」とす。『奥の細道』には座五を「南谷」とす。）
元祿二、六月四日羽黒山本坊に於て興行
ありがたや雪を薫らす風の音　はせを
住みけん人の結ぶ夏草　露丸
（『花摘』「けん」を「ほど」とす。作者「露丸」即ち「呂丸」也。）

川船の綱に螢を引立て　曾良
鵜の飛ぶ後に見ゆる三日月　釣雪
すむ水に天も浮べる秋のくれ　珠妙
北も南も碪打けり　梨水
ゐねぶりて晝もかけ地に笠脱て　雪
（『花摘』上中十二字を「眠ては晝の陰に」とす。）
百里の旅を木曾の牛追　翁
山盡す心に城の記を書ん　丸
斧持すくむ神木の森　良
歌よみの跡慕行く家なくて　雪
豆打たぬ夜は何となく鬼　丸
古御所を寺になしたる檜皮葺　翁
糸に立枝にさまざまの萩　水
月見よと引起されて恥しき　良
髮あふがする羅の露　翁
まつはるゝ犬のかざしに花折て　丸
的場の末に咲る山吹　雪
春を經し七ツの年の力石　翁
汲でいたゞく醒が井の水　丸

足引の廰方までも迯り蓑　圓入
（作者名たゞ「圓」とのみあれど、圓入此句より加はりしなれば『花摘』によりて改む。）
敵の門に二夜寐にけり　良
掻消る夢は野中の地藏にて　丸
妻戀するか山犬の聲　翁
薄雪は橡の枯葉の上寒く　水
湯の香に曇る朝日淋しき　丸
鵲の背を狩衛に矢を刷て　雪
篠懸しぼる夜すがらの法　入
月の山嵐の風ぞ骨にしむ　良
（『花摘』上五を「月山の」とす。）
鍛冶が火燒す稲妻の影　水
散かゝる桐に見つけし心太　丸
（『花摘』上五を「ちるかひの」とす。）
鳴子驚く片藪の窓　雪
盗人につれそふ妹が身を泣て　翁
祈も盡きぬ關々の神　良
盃のさかなに流す花の浪　會覺

幕うちあぐるつばくろの舞　水
（此次傳によりて句〆あり。作者の身分を知り得べきよすがあれば、特に掲記す。）
ばせを　七　珠妙　一　南部法輪寺
露丸　八　梨水　五
曾良　六　圓入　二　江州飯道寺
釣雪　六　花洛　會覺　一　本坊

其二

（此卷『初茄子』にあり。）

羽黒山に參籠して後、鶴岡に至り重行亭にて興行

めづらしや山を出羽の初茄子　はせを
蟬に車の音添る井戸　重行
絹機の暮いそがしき筬打て　曾良
閏彌生の末の三日月　露丸
わが影に散かゝりたる梨の花　行
（「影」は「顔」の誤ならん。）
銘を胡蝶とつけし盃　翁
山の端にきえ返ゆく帆懸船　丸
葉らむ里は心とまらず　良

(『初茄子』上七を「葉なき里は」とす。)

栗稗を日毎の齋に喰飽て　翁
弓の力を祈る石の戸　行
赤樫を母の記念に植おかれ　良
雀に殘す小田の刈初め　丸
此秋も門の板橋崩れけり　行
赦免にもれて獨り見る月　翁
きぬ〴〵は夜なべも同じ寺の鐘　丸
宿の女の妬きものかげ　良
婿入の花見る馬に打群て　行
もとの廓は畑に燒ける　丸
金銀の春も一歩に改り　翁
奈良の都に豆腐はじめる　行
此雪に先づあたれとや釜揚て　良
寢卷ながらの化粧うつくし　翁
遊けさは目を泣腫す筑紫船　丸
ところ〴〵に友を討せて　良
千日の庵を結ぶ小松原　行
蝸牛の殼を踏つぶす音　丸

身は蟻のあなうと夢をさますらん　翁
こけて露けき女郎花かも　行
(『初茄子』下七を「女郎花々」とす。)
明はつる月を行脚の空に見て　良
温泉數ふる陸奥の秋風　翁
初雁の頃より思ふ氷のためし　丸
山樵が作る宮の葺かへ　良
(『初茄子』上七を「山そぎ作る」とす。)
尼衣男にまさる心にて　行
行通ふべき歌の繼橋　丸
花の時啼くとやらいふ呼子鳥　翁
艶に曇りし春の山彦　良
(原本例の如く句〆あれど略す。)

(端物九)

其一

(此卷『奥細道拾遺』にあり。發句『奥の細道』に「暑き日を海に入れたり最上川」とす。)

六月十五日寺島彥介(亭)にて

涼しさや海に入れたる最上川　はせを
月をゆりなす浪の浮海松　令道
黑鴨の飛行く庵に窓あけて　不玉
麓は雨にならん雲ぎれ　定連
樺とちの折敷作て市を待　曾良
(『拾遺』上五を「皮とちの」とす。)
影にまかする宵の油火　任曉
不機嫌の心に重き戀衣　扇風
(原本「末略」とあり。)

其二

(此二句は那須野旅行の時のもの也。)

みちのく一見の桑門同行二人、那須の篠原を尋ねて猶殺生石見んとえける程に、雨降ければ、先此所に宿りて、

落來るや高久の宿のほとゝぎす　芭蕉
木間を覗くみじかよの雨　曾良

其三

(此四句は須賀川に在りし時、桃雪の書信の句に次ぎしもの也。)

はせを翁みちのくへ下らんとして、我茅屋を音信て、猶しら川のあなたすか川といふ所に泊り侍と聞て申つかはしける。

雨はれて栗の花咲く跡見かな　桃雪
いづれの草に啼落つる蟬　等躬
夕餉くふ賤が外面に月出て　芭蕉
秋來にけりと布たぐるなり　曾良

其四

（此三句『信夫摺』にもあり。「此日や田植の日なりと、目馴ぬことぶきなどありて、まうけせられ侍りければ、」と前書あり。）

別會

旅衣早苗につゝむ食乞ん　曾良
淺香の堤あやめ折すな　芭蕉
（『信夫摺』上七を「いたかの鼓」とす。）
夏引の手びきの靑苧くり掛て　等躬

其五

（此三句亦『信夫摺』にあり。「……あさかの沼はあやしげなる田の溝などを今は申めるにぞ、いにしへ藤中將の傳へられし花かつみの草のゆかりも、いづれのなにとしる人侍らずと答ながら」と前書ありて、句の上五を「芙やうを」とす。）

別會

苅やうを又ならひけりかつみ草　等躬
市の子供の着たる細布　曾良
日面に笠をならぶる凉みして　芭蕉

其六

（此四句は芭蕉が酒田に至りし後、羽黑山本坊より書信の句に次ぎしもの也。）

羽黑より送る

忘るなよ虹に蟬鳴山の雪　會覺
杉の茂りをかへり三日月　芭蕉
磯傳ひ手束の弓を携て　不玉
汐に絶たる馬の足跡　曾良

其七

（此句『奧細道拾遺』にあり。「直江の津にて」と前書あり。）

直江津にて

文月や六日も常の夜には似ず　はせを
露に乘せたる桐の一葉　左栗
朝霧に飯たく烟立分て　曾良
蜑の小舟の走のぼる磯　眠鷗
鴉啼向ふに山を見せにけり　此竹
（『拾遺』下五を「見ざりけり」とす。）
松の木間より續く供鑓　布嚢
夕嵐庭吹はらふ石の塵　右雪
鹽取まく賤が行水　執筆
思ひがけぬ筧を傳ふ鳥一つ　栗
きぬ〴〵の場に起も直らず　良
かず〳〵の恨の品に指つきて　義年
鏡にうつるわが笑ひ顏　翁
明はづれ朝氣は月の色薄く　栗
（『拾遺』上五を「吹はなれ」とす。）
鹿引て來る犬の憎さよ　雪

礒打つすべさへ知らぬ墨衣　鷗
たつた二人の山本の庵　栗
花の吟其まゝ暮て星數ふ　年
(『拾遺』『吟』を「後」とす。)
蝶の羽惜む蠟燭の影　雪
ナ春雨は髮剃兒の涙にて　翁
香はいろ〳〵に人〳〵の文　良

其八

同所

星今宵師に駒牽て留めたし　右雪
色香はしき初刈の稲　曾良
瀑の水桶にいそ〳〵布つきて　はせを
(『金蘭集』此句上中十二字を「さらし水踊に急ぐ」とす。而して、原本「此間十三句なし」として、句を缺く。『金蘭集』は「此間十句キレテシレズ」とし、「秋風」「かの巻」「絕て」の三句だけ多く記す。依て同書によりて補ふ。)
秋風送る父が旅立　蕉
(『金蘭集』作者名「芭蕉」とし「翁」とせず。)
かの巻を錦に包拾ふべし　雪
絕て織たる國の古堂　右
種植て小枝に花の名を記し　也
(『蘭蘭集』作者名を「更也」とす。)
雨のあがりの日は長閑なり　良
ナ薺を引雪車もをかしき雪の上　翁
一むら鳥人馴て飛ぶ　雪
金山や侘干す砂を拾ふらん　右
(『金蘭集』中七を「侘て小砂を」とす。)
科の昔を島蔭の庵　也
憂きことの百首に魚の名を書て　翁
(『書』は「讀」の誤ならん。)
人いそがしき年の暮かな　良
松柏荒れて嵐の音すなり　雪
子を射させたる猪の床　翁
修業者の袂を濡す硯水　右
往昔の月山に問ひたし　也
檜皮むく老の頭の秋寒く　翁
しぐれて露の深き牛部屋　雪
ウ鹽濱の孤村のけぶり雲結ぶ　也
清水の流れ牛淡しき　右
(『金蘭集』上七を「清水に波の」とす。)
傾し地藏の膝に石かひて　良
笈を下せる里の物蔭　雪
(『金蘭集』此句の右傍に「鎌磨ならぶ里の草刈」と記し、下に「懷紙のまゝ」とす。改訂したるならん。)
俳諧を尋て花の實に入り　翁
身木を取まく梅のひこ生　良
(『金蘭集』「懷紙杉原竪紙也。曾良筆。金石斗筲所持」と記す。)

其九

細川青庵亭にて
(青庵は高田藩の醫師、昌庵又升庵を通稱とす。芭蕉此家に滯在して病を養へりと云ふ。)

藥園にいづれの花を草枕　はせを
萩の簾を揚かける月　棟雪
爐烟の夕を秋のいぶせくて　更也

馬乘りぬけし高藪の下　曾良

▽『つなぎ橋』歌仙二

（尾花澤の鈴木清風方にての二卷の歌仙を、文政二年刊行の此書に收錄したり。）

其一

すゞしさを我やどにしてねまる也　芭蕉
つねのかやりに草の葉を焚　清風
鹿子立をのへの清水田にかけて　曾良
ゆふづきまろし二の丸の跡　素英
槇紅葉人かげみえぬ笙のおと　風
鵙のつれ來るいろ〳〵の鳥　風流
ウ
ふりにける石にむすびしみしめ繩　英
山はこかれて石に血をぬる　蕉
わづかなる世をや繼母に僞られ　流
秋田酒田の浪まくらうき　良
馬とむる關の小家もあはれ也　蕉
柔くふむしの雷に恐ヅ　風
夏痩に美人のかたち衰へて　良
靈まつる日は誓ひはづかし　英
入月や申酉の方おくもなく　風
鷹をはなちてやぶる草の戶　蕉
ほし鮎の盡きては寒く花ちりて　英
去年のはたけに牛房芽を出す　良
ニオ
蛙寢てこてふに夢をかりぬらん　蕉
火串しるべに國の名をきく　風
扇にはやさしき連歌一兩句　良
ぬし討れては香を殘す櫛　英
はるゝ日は石の井蕪る天乙女　風
艷なる窓に法華よむ聲　蕉
勅に來て六位涙に彳みし　英
わかれをせむる炬の數　良
一さしは射向の袖をひるがへす　蕉
かはきつかれてみたらしの水　風
夕月夜宿とり貝も吹よはり　良
木賊かる男や嚢わすれけん　英
ニウ
たまさかに五穀の交る秋の露　風
篝に明る金山の神　蕉
行人の子をなす石に沓ぬれて　英
ものかきながす川上の家　良
追ふもうし花吹盛の春ばかり　風
夜の嵐に巢をふせぐ鳥　英

其二

おきふしの麻にあらはす小家かな　清風
狗ほえかゝるゆふだちの簑　芭蕉
ゆく翅いく里のにくからん　素英
石ふみかへす飛こえの月　曾良
露淸き靑花摘の朝もよひ　蕉
火の氣たえては秋をとよみぬ　風
ウ
この島に乞食せよとや捨つらん　良
雷きかぬ日は蠶のたねとる　英
立どまる鶴のから巢の霜さむく　風
わがのがるべき地を見置也　蕉
いさめても美女を愛する國有て　英
べにおしろいの市の爭ひ　良
秀句には秋の千種のさま〴〵に　蕉
碑に寢て象潟の月　風

筵むしろ船の中なるきり〴〵す　良
　束ね捨たる薪雨にほす　英
貧僧が花より後は人も來ず　蕉
　灸すゑながら眠き春の夜　風
二オ
まつほどは足音なくて飛蛙　英
　菅かりいれてせばき賤が家　良
果の日は梓にかたる哀さよ　風
　今ぞうき世を鏡うりける　蕉
二の宮はやへの几帳にときめきて　良
　鳥はなしやる月の十五夜　英
舍利ひろふ津輕の秋の汐ひがた　蕉
　椒懸る三の樟の木　風
つく〴〵と廿ばかりに夫なくて　英
　父が旅寢を泣あかすねや　良
うごかずも雲の遮る北のほし　風
　けふも坐禪に登る石上　蕉
二ウ
盗人の葎にすてる山がたな　良
　簗にかゝりし子の行へきく　英
繋ばし導く猿にまかすらん　蕉

けぶりとぼしき夜の詩のいへ　風
花とちる身は遺愛寺の鐘撞て　良
　鳥の餌わたす春の山守　蕉

▽『金蘭集』　四十四其他

（『奥の細道』大旅行中加賀より旅行終了までのものゝ補遺なり。）

○四十四（よゝし）―（加賀小松のもの）

しほらしき名や小松吹萩薄　芭蕉
　露を見知りて影うつす月　コセン
　（作者名、原本かくあり。「鼓蟾」也。）
踊る音淋しき秋の數ならん　北枝
　よしのあみ戸を問ぬ夕暮　斧卜
しら雪やあし駄ながらもまだ深キ　塵生
　あらしに乘りし烏一群　志格
波あらき磯に擧たる矢を拾ひ　夕市
　雨に洲崎の嵒をうしなふ　致益
ウ
鳥居たつ松よりおくに火は遠ク　觀生
　（作者名「觀」は「歡」の誤なら

乞食起して物くはせける　曾良
蜻の行ては笠に落かへり　枝
　茶をもむ頃やいとゞ夏の日　蕉
夕雨のすゞ懸乾に舍りけり　ト
　子を讐つゝも難少しいふ　枝
侍のおもふべき社命なり（れ）　コ
　そろ盤習ふすゑの世となる　觀
洞にさす月まで豊の光して　格
　皮はだ栗を焚て味ふ　市
　（「栗」は「粟」の誤ならん。」
朝露も狸の床やかわくらん　益
　帯解かけてはしる馬追　生
麓より花に庵をむすびかへ　良
　ぬるむ清水に洗ふ黒米　格
二ウ
春霞鐘捨ばしに人たちて　枝
　かたちばかりに蛙聲なき　市
一棒に打れておがむ三日の月　蕉
　秋の霜おく我眉の色　コ
富ながらくつわが袖の漸寒き　生
　戀によせたる虫くらべ見ん　ト

忘れ草しのぶの亂うへまぜに　觀
疊かさねし御所の板敷　蕉
頭陀よりも歌とり出し奉る　枝
最後のさまのしかたゆゝしき　良
闇明て互の貌はしれにけり　コ
聲さまぐ〜の程のせはしも　觀
（『幽蘭集』に「程」、『一葉集』に「ほど」とすれど句意通ぜず。原本の字體、「禮」とも讀み得らる。）
大かたは持たる金につかはるゝ　蕉
菴より見ゆる町の白壁　益
二ウ
風おくる鼓きこえて涼しやな　蕉
若衆ともいふ女ともいふ　ト
古き文筆のたてども愛らしき　市
なげの情に罸やあたらん　コ
しどろにもかたしく琴をかきならし　益
はなに暮して盞を友　觀
うぐひすの聲も筋よき所あり　良
うらゝ〜やちかき江の山　枝

〇歌仙一

（此卷『金蘭集』に見えず。仍て『一葉集』によりて補ふ。發句上五の「あな」はのちに削りたり。）

あなむざんやな胄の下のきりぐ〜す　芭蕉
ちからも枯し霜の秋草　享子
渡し守綱よる丘の月影に　鼓蟾
しばし住べき屋しき見立る　蕉
酒肴片手に雪の傘さして　子
ひそかにひらく大年の梅　蟾
ウ
遣水や二日ながるゝ蝶のいろ　蕉
音問る油隣はづかし　子
初戀に文書すべもたど〜し　蟾
世につかはれて僧のなまめく　蕉
提灯を湯女にあづけるむつましさ　子
玉子貰ふて戻る山もと　蟾
柴の戸は納豆たゝく頃靜なり　蕉
（「頃」の字衍カ。）
朝露ながら竹輪きる藪　子
鵙落す人は二十にみたぬ顔　蟾
よせて舟かす月の川端　蕉
鍋持ぬ廬屋は花もなかりけり　子
去年の軍の骨は白暴　蟾
二オ
やぶ入の嫁や送らむけふの雨　蕉
霞にほひの髮洗ふころ　子
うつくしき佛を御所に賜て　蟾
つゞけてかちし圍碁の仕合　蕉
暮かけて年の餅搗いそがしき　子
蕪ひくなる志賀の古里　蟾
しらぐ〜と明る夜明の犬の聲　蕉
舍利を唱ふる陵の坊　子
竹ひねて割し筧の岩根水　蟾
本家の早苗もらふ百姓　蕉
朝の月圍車に赤子をゆすり捨　子
討ぬ敵の繪圖はうき秋　蟾
二ウ
良寒く行は筑紫の船に醉　蕉
守の館にて簫かりて籟　子
十重二十重花のかげ有午時の庭　蟾
杉菜一荷をわける里人　蕉

鵜の來て天窓にとまる世の長閑　子
馳走の雜煮はこぶ神垣　蕉

○半歌仙一

元祿二年九月三日落着の夜

野嵐に鳩ふき立る行脚哉　不知
山にわかるゝ日を萩の露　荊口
初月やまづ西窓をはづすらん　翁
波の音すく人もありけり　如行
木をひきて枕の種と心ざし　左柳
酒の肴に出すほし瓜　殘香
おのづから隣の松をながむらん　斜嶺
過(とが)なきあやにしづむ武士　怒風
いとをしき人の文さへ引さきて　知
般若の面を面影になく　翁
待宵の鐘をやよそに忍ぶらし　行
藥たづぬる月の小筵　柳
薄着して礁聞こそくるしけれ　翁
網代の鮭を市にむさぼる　香
舟の形(なり)所によりて替りけり　嶺
上臈たちも旅のさがなき　知
花のふゞき谷の反橋ひぞりつゝ　行
(『桃の白實』此句を「花ふゞき宮の長橋ひとりづゝ」とす。)
欲に見ておく岨の山吹　風

○歌仙二

其一

・(此卷は前掲半歌仙につゞきて賦されしもの也。)

左柳亭

早く咲け九日も近し宿の菊　芭蕉
心うきたつ宵月の露　左柳
新畑去年の鶉の啼出て　路通
雲うすうすと山のかさなり　文鳥
酒呑のくせに障子を明たがり　越人
なほおかしくも文を狂はす　如行
足の裏なでゝ眠をすゝめけり　荊口
としを問れて衾かぶりぬ　此筋
二人めの妻に心や解ぬらん　木因
けづり溜に精進忘るゝ　殘香
兎角して灸(やいと)する坐をのがれいで　曾良
書物のうちの蠹(しみ)はらひ捨　斜嶺
飽果し旅も頃日戀しくて　柳
齒ぬけとなれば貝も吹れず　蕉
月寒く頭巾あぶりてかぶる也　鳥
曉かはる夜の分別　口
一棒にあづかる山の花咲て　通
塩すくひこむ春のぬかみそ　人
二オ　萬歲のすがた斗はいかめしく　因
村はづれまで犬に追るゝ　嶺
噺きく行脚の道のおもしろや　筋
二代上手の醫はなかりけり　香
楊弓の工ミするほどむづかしき　良
烏帽子かゝらぬ髮も薄くて　行
(『桃の白實』上七を「烏帽子かぶらぬ」とす。)
冬ごもり物覺への大雪に　柳
茶のたてやうも不案內なる　鳥
美しく貌生れつく物うさに　人
尼になるべき宵のきぬぎぬ　通

月影によろひとやらを見透して　翁
萩ぞと思ふ一かぶの荻　口
（「桃の白實」此句を「萩とぞ思ふ一株の萩」とす。）
何事も盆を仕廻ふ一隙に成　筋
追手もつれにさそふ参宮　良
丸腰に捨て中〳〵暮し能(よく)　香
ものゝ譯しる母の尊さ　因
花の陰かまくらどのゝ假枕　行
梅山吹に殘るつぎうた　嶺

其二

此巻は前巻につぐものにして、美濃若くは伊勢にての作ならん。）

元祿二年九月、前書畧。

ひとゝまり見かはる萩の枕かな　路通
むしの侘音をうす縁(べり)の下　蘭夕
紙子もむ夕ながらに月すみて　白之
あらしにたはむ笹のこまかさ　殘夜
植木屋はうへ木に軒をかくすらん　芭蕉
食のすゝまぬ事は覺えず　曾良
肌ぬぎて人に見せたる夕間暮　夕
兒そゝのかすときのおかしさ　通
薫物の烟に染し破簾　良
細きこゑして拔菜呼入レ　木因
月見歩行し旅の裝束　夜
葬にすゞめの寒く鳴にけり　之
さま〳〵の貝ひろふたる布袋　蕉
地獄繪をかくさまの哀さ　通
きぬ〳〵の尻目に鐘を恨らん　因
賤が垣根になやむ面影　夜
豆腐ひく音さへ聞ぬ里の花　之
鳥の巣もりと住あらす菴　蕉
二オ
きさらぎの峯行肩おもたくて　夕
嵐にひかる宵の明星　良
苫まくり舟に米積かしましく　夜
此ごろ室に身を賣られたる　通
文書てたのむ便の鏡磨　蕉
旅から旅へおもひたちぬる　之
たうとさは熊野参の咄して　夜
藥手づから人にほどこす　通
田を買ふて侘しくもなき桑門(よすてびと)　蕉
犬吼かゝる森の入口　夕
夕月夜笈を後につきはりて　良
そろ〳〵寒き秋の炭燒　夜
二ウ
谷越に新酒を呑(のめ)とよばる也　夕
はや辻堂の輕き棟上　通
打群てゑやみを送る朝ぼらけ　之
麥もかじけて一もとのまゝ　蕉
（「芭蕉林」此句を「麥もかじけて春木ノヤヽ」とす。「春」以下缺けたる也。）
鷹居て近う召るゝ花作り　夕
こてふみだるゝさかづきの陰　執筆

○端物　四

其一　（「ゆめのあと」より補ふ。）

翁を一夜とゞめて

寢る迄の名殘也けり秋の蚊屋　小春
あたら月夜の庇さし切　芭蕉
初嵐山あるかたの烈しくて　曾良

江ぶちのり越ス水のさゝ魚　北枝

其二（『一葉集』より補ふ。）

あか〳〵と日はつれなくも秋の風　翁
晩稲の筧ほそう聞ゆる　光清

其三（『卯辰集』より補ふ。）

松岡にて翁に別れ侍りし時、あふぎに書て給る。

もの書て扇引さく名殘かな　翁
（『金蘭集』中下十二字を「あふぎへぎ分る別かな」とす。）
笑ふて出る朝ぎりの中　となく〳〵申侍る。　北枝
（同書此句をわらふて霧にきほひ出ばやとす。）

其四（『後の旅』に「こゝにかくからびたる吟聲ありて我下の句を次」とある由。）

胡蝶にもならで秋ふる菜虫哉　翁
たねはさびしき茄子一もと　如行

▽『何袋』歌仙一

（此巻は今日庵一娥が文化九年刊行せる『何袋』に、伊賀にて得たる懐紙を摸刻附載しあり。別に其摸刻のみを小册としたるものもあり。伊賀上野にて賦されしもの也。）

元祿三年二月六日誹諧之連歌

黄鳥の笠落したる椿かな　桃青
古井の蛙草に入聲　乍木
陽炎の消ざま見たる夕影に　百歳
指さすかたに月ひづむ也　村鼓
梢なる隣の柿をからすらむ　式之
きびを吹折風のあらさよ　梅額
ウ 侘しらに牛の子にがす朝ぼらけ　一桐
世を土なべといのちなりけり　槐市
俤に妹が袷をうへに着て　鼓
夢さへ酒に二日酔する　青
古郷をわすれぬ馬にほく〳〵と　木
はへて程なき月の花蕎麥　歳
住持なき庭に木の實の落るをと　額
鳩吹人のなり窄（すぼ）き也　桐
給物（たべもつ）は麓の市にはし賣て　呉雪
機嫌にむけば幸若の舞　之
孫曾孫うちならべたる花のかげ　歳
藤むらさきにさま〴〵の蝶　木
ニオ 春の色新古今こそあはれなれ　青
尾上をへだつ木魚はかなき　市
むら雨の笠きぬ程に降過て　鼓
桑も早苗も一度成けり　雪
ゆるされて流され人の立かへり　桐
泣てゐる子のかほのきたなさ　額
宿かして米搗程は火も焼ず　青
脚氣を佗て膏藥をはる　市
大内に井戸ほりを召す秋のくれ　桐
地震にころぶ松の下露　木
有明に母の里より文をこし　歳
形見にびんを殘す陸奥　之
ニウ 掛香を小袖のふりに縫ふくみ　鼓
三味線引てならぶ乞食　青
東山中にもはなは清水寺　木
げにのどかなる智恩院のかね　桐
連歌師の杖をわするゝ春の空　之
すいかむたゝむ庭の若草　雪

（こゝに句〆あれど略す）

▽『己が光』歌仙一

（此巻は前書にある如く元祿三年伊賀の上野にてのものなり。）

午ノ年伊賀の山中

春興

種芋や花のさかりに賣ありく　芭蕉
こたつふさげば風かはる也　半殘
酒好のかしらも結ず春暮て　土芳
ぬぎかへがたき革の衣手　良品
有明の七ツ起なる藥院に　殘
ひさごの札を付わたしけり　蕉
ウ 秋風に槇の戸こぢる膝入て　品
小僧のくせに口ごたへする　芳
やす〳〵と矢州の河原のかち渉り　蕉
多賀の杓子もいつのことぶき　殘
手枕のおとこも持たで三つ輪組　芳
人にとりつく憂名くちおし　品
萱草の色もかはらぬ戀をして　殘
秋たつ蟬の啼しにゝけり　蕉
月暮て石屋根まくる風の音　品
こぼれて靑き藍瓶の露　芳
蕣の花の手際に咲そめて　蕉
細や鳴來る水のかはりめ　殘

（『金蘭集』等「細や」を「腹の」とす。）

ニオ 猫の目の六ツ柹核(さね)に四ツ圓く　芳
あすのもよひの織蘿蔔きる　品
からうすも病人あればかさぬ也　殘
たゞさゝやいて出る髮ゆひ　蕉
とり〴〵に紺屋の形を取散し　品
冬至の緣に物おもひます　芳
けはへどもよそへども君かへりみず　蕉
まだ元服のあどなかりける　殘
朝夕にきらひの多き膳まはり　芳
いとあはれなる野々宮の樂　品
田鼠の稻はみあらす月澄て　殘
風ひえそむる牛の子の旅　蕉
ニウ 露しぐれ越のさきおり袖もなし　品
しなずば人の何に成べき　芳
神風や吹起されてかい覺ぬ　蕉
筆をおとせば□□出す　殘

（□□の二字原本字體判明せず。『金蘭集』は「烏鳴」とし、『一葉集』は「追て書」とす。）

しら〳〵とひとへの花に指(さし)むかひ　芳
長閑き晝の大鼓うちけり　品

▽『蓑虫庵小集』歌仙一

（此巻と次巻と錯誤あるべしと考へらるゝが考へ得ず。『蓑虫庵小集』は土芳傳來のものを其三世庵主たる呉猪來が梓行したるものにして、此巻には「右一巻の連句は柳下生の家に藏す。乞て世に披露す」と附記しあり。）

木のもとに汁も鱠もさくら哉　芭蕉
明日來る人はくやしがる春　風麥
蜂を愛するほどのなさけにて　良品
水のにほひをわづらひにける　土芳
くさまくらこのごろになき月のはれ　雷洞
猿のなみだかおつる椎の實　蕉

石だんの縫目も見えずこけのつゆ　麥
　額よごれたる賤の子ども等　品
はらぐはんの烏帽子ほしやとおもふらむ　芳
　木幡あたりのゆきのゆふぐれ　麥
賣庵を見せんと人のみちびきて　蕉
　井戸のはたなるいぶきさるなり　洞
涼しさのはだかになりて月をまつ　品
　むしろをたてにはしり飛ばせる　蕉
寝てゐたかをかしく犬の尾をすゑて　麥
　神事見たつる騎母子が太刀　芳
まんぢうの紅つけちらす花ざかり　半殘
　日ながき空に二日醉さけ　三園
二オ
陽炎のみぎりに褟をひきずられ　蕉
　すげなくせいのたかきさげ髮　品
しのぶ夜の蠟燭おとす橋のもと　洞
　ひとへのきぬに蚤うつりけり　園
賤が家もかひこしまへば廣くなり　品
　またあたらしき麥うたをきく　麥
御佛につかゆる日よりまづしくて　芳
　源氏をうつす手はさがりつゝ　殘
ひちりきの音をふきいれるよもすがら　麥
　燕子楼のうち火の氣たえたり　蕉
ゆふ月を扇に繪がく秋の風　園
　露こひしがる人はみのむし　芳
二ウ
しらぎくの花の弟と名をつけて　殘
　能見にゆかん日よりよければ　洞
乘いるゝ二歳の駒をなでさすり　園
　鷄書さへならぬ老の身　品
降かゝる花になみだもこぼれずや　麥
　雉やかましく家居しにけり　芳
　（こゝに句メあれど略す。）

▽『花はさくら』　四十句一

（此卷は二之折の裏を十句にしたる變型歌仙式とも見るべきものにして、『花はさくら』の編者秋屋は「初折はあるじ風麥の執毫にして、二の表より翁の筆也」と其序文中に記せり。『十丈園筆記』にも收錄せられたり。前褐『蓑虫庵小集』採錄のものと比するに、初折十八句は殆んど同じく、二之折より附句も作者も異なり居れり。『一葉集』のものは誤寫多きもの也。）

元祿三年三月二日

俳諧之連歌

木の下に汁も鱠もさくら哉　芭蕉
　翌來る人はくやしがる春　風麥
蝶蜂を愛する程の情にて　良品
　水のにほひをわづらひにける　土芳
草枕此ごろになき月の晴　雷洞
　猿のなみだか落る椎の實　蕉
ウ
石壇の縫目も見へず苔の露　麥
　顏よごれたる賤の子供等　品
判官のえぼしほしやと思ふらん　芳
　木幡あたりの雪の夕ぐれ　麥
賣庵を見せんと人の道びきて　蕉
　井戸の端なるゆふき伐也　洞
　（『ゆふき』『十丈園筆記』「白槙」とあり。）
すゞしさの裸に成て月を待　品

莚をたてにはしり飛するゝ　蕉
寢て居るかおかしく犬の尾をすへて　麥
神事見たつるわぎも子がたち　芳
饅頭の紅粉つけちらす花ざかり　半殘
日なが き空に二日醉さけ　三蘭

二
鐘かすむ喰さき紙を飛つきて　麥
荷ひ□たる番匠のごき　蕉
（□不明。『一葉集』「まぜ」とす。『十丈園筆記』には上七を「落ころびたる」とす。）
何事にいそぐめくらのひづむらん　芳
かざす扇のかなめはしりし　洞
おかしさは鼓の拍子打のつて　麥
氣おもく見ゆる脇息の上　品
かけがねのひとりはづれし夕嵐　蘭
香ひしみたる狆の首たま　木白
はり道を傘さしてひとひつき　品
（「十丈園筆記」上五を「より道を」とす。」
飯のこはきを好れにけり　芳
月影に燈籠張て泣暮し　蘭

髮筋よりもほそき秋風　蕉

二ウ
鶴の夢すゝきの中にまどろみて　洞
冬のかゝしの弓を失ふ　蘭
房は留主佛はうにふすぼりし　白
けやき棋盤の板の薄さよ　麥
老ながら廿日鼠の哀にて　殘
石菖靑く目を覺しつゝ　品
着かゆれば染ものくさき單物　蕉
おくの坐敷へ膳すゆるなり　芳
花あればいやしき家にとゞめられ　蘭
終に出來たる燕の土　洞
木白あとよりきたりければ興に乘じて付延し侍る。されどとり鐘に筆をとゞむ。

▽『江鮭子』　端物一
（此端物は「第三まで」と前書して之道の『江鮭子』にあるもの也。元祿三・四年のものならん。）
椑柹（キザハシ）や鞠のかゝりの見ゆる家　珍碩
秋めく風に疊干門　之道

有明に湯入中間の荷を付て　翁

▽『柴橋』　端物一
（此端物は前揭のものと同じ頃なるべし。酒堂は珍碩、諷竹は之道の改名なり。『柴橋』は元祿十五年刊行のもの也。）
秋風は吹れて赤し鷺のあし　酒堂
伏てしらけし稻の穗の泥　諷竹
駕かきも新酒の里を過かねて　芭蕉

▽『俳諧勸進牒』　歌仙一
（此卷二之折表二句目迄は『ひさご』のものに同じ。おもふに此二十二句の未完のものを伊賀及び京の人々が次ぎしものを『ひさご』に編入し、一方江戸へ下りし乙州が、江戸の人々と滿尾せしめしものを、路通が其編著の『勸進牒』に收錄したるならん。依て元祿四年のものと推定せらる。）
乙州が江戸へ赴くとき
梅若菜鞠子の宿のとろゝ汁　芭蕉
（原本「芭蕉」を「風羅坊」と

せり。）

笠あたらしき春のあけぼの　乙州
雲雀啼小田に土持ころなれや　珍碩
しとぎいはふて下されにけり　素男
片隅に虫歯かゝえて暮の月　州
二階の客のたゝれたるあき　蕉
ウ　はなちやる鶉の跡は見えもせず　男
苗の葉延のちからなき風　碩
發心の初にこゆる鈴鹿山　蕉
内藏頭かとよぶ聲はたれ　州
卯の刻の箕の手に並ぶ小西方　碩
すみきる松のしづかなりけり　男
萩の札すゝきのふだによみなして　州
雀かたよる百舌鳥の一こゑ　智月
懐に手をあたゝむる秋の月　凡兆
汐さだまらぬ外の海づら　州
鑓の柄に立すがりたるはなのくれ　去來
灰まきちらすからしなのあと　兆
ニオ　春の日に仕舞てかへる經机　正秀
店屋もの喰供の手がはり　來
肩重きさがり衣のうそよごれ　探志
戀の作繪つかふまつらせ　其角
しづかなる杉を拜めば三輪の神　路通
出し入やすきはやみちの錢　曲水
まぎれずに返す芝居のたばこ盆　其角
蟹の面つる家が淋しき　乙州
樂々とやはら敎て五人口　曲水
よめかぬれども日蓮の御書　路通
行月の牛につけたる鹽俵　里東
松にすゝきを二方荒神　芹花
ニウ　畑もの一口なすびもぎとりて　キ角
かりなる物は島原の坪　素葉
あそこ爰ぬひなをしたる戀衣　寒水
二番煎じは茶のはながなき　落荷
散花にさそふて見れど誰もこず　路通
しきりに雉子のほろゝうつ朝　至陰

▽『ばせをだらひ』歌仙一附句六

○歌仙

（此巻は元祿四年京にてのものと推定せらる。輪雪の『星合集』にもあり。朱拙は此巻を丈草より得て藏し居りしが、有隣が『ばせをだらひ』編著に當りて收錄せしめたる旨を記せり。）

牛部屋に蚊の聲よはし秋の風　芭蕉
下樋の上に葡萄重なる　路通
酒しぼる雫ながらに月暮て　史邦
扇四五本書なぐりけり　丈草
くれ竹に置直したるすゞみ床　去來
蓮の卷葉のとけかゝるころ　野童
ウ　笈摺もまた新しく懸連て　正秀
遊行の輿を拜む傘さ　蕉
休み日も瘡ふるひの顔よわく　通
溝くむ臭の隣いぶせき　邦
生乾なる裏打紙をすかし見る　草
いつも露持萩の下枝　來
秋立て又一しきりなすび汁　童

薄縁（うすべり）たゝく僧堂の月　秀
分別の外を書るゝ筆のわれ　蕉
瘤につられてうき世さりけり　通
散時にならねば散ぬ花のいろ　邦
畑をふまるゝ春ぞ苦しき　草
一オ
人情（こゝろ）常陸國はさえかへり　來
產月までもかろき俤　童
うきことを辻井に語る隙もなし　秀
絈（かせ）買客の歸るきぬ〴〵　蕉
硝子（びいどろ）にへり際見する藥酒　通
たちばな咲ばむかし泣るゝ　邦
草むらに寢處替る行脚僧　草
明石の城の太鼓うち出す　來
大かたは同じやうなる紿印　童
ちからに似せぬ礫かひなき　秀
ゆるされて女の中の音頭取　蕉
藪潜られぬしのび路の月　通
二ウ
匂ひ水しだるくなりて初嵐　邦
又もいたちの小鼠（ねら）おひ出す　草

手に持し物見うしなふ閙しさ　來
湘あげせぬ庵はやせたり　童
うぐひすの花にはねじと高ぶりて　秀
柳は風のたすけてぞふく　執筆

○附句 六

（原本「芭蕉先生前句附」と題して左の六聯を掲記し、且其後に「右の附句は南都歲任子のもとにやどりし給ふ時、みづから前句をなして附給ふ自筆を朱拙におくられしも也。」と附記しあり。されど其一は補遺に編入せる「箱根こす」卷二オ五句目六句目と大小異也。）

（其一）

ころ〳〵となるは鈍栗落し也
その鬼見たしみが虫の父　翁

（其二）

かれ果てみじかき髮の口をしき
琵琶つき立て其かげに泣　同

（其三）

龜山やあらしの山や此山や
馬上に醉てかゝへられつゝ　同

（其四）

宵の間はかさなる山の月くらく
芋ほりかへす小男鹿の角　同

（其五）

笠敷てうれしく今朝となしけるよ
笈かゝへたる小僧わづらふ　同

（其六）

冬のきぬたの涙きはつく
世のうらみいまだ六位の名に呼れ　同

▽『みつのかほ』　脇一

（此は芭蕉が旅中に在て野水の旅行に餞せしものにして、元祿四年と推定せらる。）

野水が旅行を送りて

見送りのうしろや寂し秋の風　芭蕉
來る春までと柳ちる陰　野水

▽『雜宮物語』　端物

（元祿四年の初冬、芭蕉が桃隣支考を伴うて東歸の際、熱田梅人亭に立寄りし時のものにして、原本「これまた一巻になして」と記しながら、ウ三句目以後を缺く。諸書ウ六句目までを記すにより『金蘭集』によりて三句を補ふ。前書亦同書による。）

翁幻住庵を出て東武に赴き給ふを熱田にて

水仙やしろき障子のとも移り　翁
炭の火ばかり冬の饗應　梅人
宵の月舟を淺みに引あげて　支考
又はらはらとこほろぎの啼　湘水
初嵐膳にうすもの打おほひ　兼三
頬髭剃て見ちがひにけり　桃林
　作者「桃林」は「桃隣」なり。
ウ 旅の空いとま乞する雨はれて　馬嗁
また一しきり瀧のなる音　野幽
物ぐさき夜は折々に目を覺し　利雨
わすれぬやうに共疊紙（たゝうがみ）　越人
蒼天をながめ濃せろ三笠山　臨高（桐葉改）
時宜して次へ廻す盃　執筆

▽『誹諧曾我』　歌仙一

○歌仙

（此巻は元祿四年芭蕉東歸の際、三州新城なる太田家を訪ひし時のものにして、蝶夢編俳諧集中巻「其匂ひ」の巻と同時に賦されたるもの也。）

此里は山を四面や冬籠り　支考
青うて細くけぶる炭竈　淡水
いぶせさは千鳥一種の旅をして　白雪
波に飛込船の遠淺　雪丸
降々てけふは無兆に出ル月　蘆雁
殘る暑の門の行水　桃隣
ウ 小地頭の前に並居ル萩芒　扇車
総りのしれぬ下手の舞々　以之
鈴馬の拍子に乘て口を取る　桃先
世繼をいのる九世の觀音　桃後
待人に明てほどこす小袖櫃　芭蕉
あられはらめく谷の笹原　考
熊の子の親を尋て鳴て居ル　隣
切ッて付たる庵の三日月　雁
寒（さえ）初るいろり音請に取かゝり　丸
鶉の籠は形がきはまる　車
花散て楓は二葉に萌上り　之
春ともいはぬ火屋の白幕　桃鯉
ニオ やうやうと峠にかゝる雲かすみ　水
複子のしめる味噌の曲物　蕉
手を書と童に筆を取せける　之
明樒（アカシノマ）を廻す夜仕事　雪
海少し隔る水の鹽はゆき　後
秋風凄し義朝の墓　先
蕎麥切の荒ゆくまゝに道付て　鯉
　（「切」は「畑」の誤ならん。）
小づらのにくき衣々の月　丸
さまざまの戀は馬刀貝わすれ貝　考
乞食となりて夫婦かたらふ　蕉
さしむくろ背中の雪を打拂ひ　雁
きれたる弦をおし直す弓　之

二ウ
素湯ひとつお寺見かけて呼り兎　車
荷をおひながら牛は寢ころぶ　後
めた〳〵と日向の方の花盛　雪
柳の糸がひたる石鉢　水
念佛にすゝめ込たる蝶の夢　先
またいく度の彌生めで度　隣

▽『金蘭集』歌仙二

（元祿三年京大津滯在より同四年東歸までのものにして、單行本を得られざるものを編次す。）

〇歌仙

其一

（此卷は元祿三年京にてのものと推定せらる。寛政三年の『鵜の音』に收錄せらる。）

聽霜堂序（「序」は「席」の誤ならん。）

引起す霜のすゝき朝の内　丈草
（『鵜の音』「內」を「門」とす。『一葉集』「月」とす。）
柿の落葉をさがす焚付　支考
月にまつ狸の糞をしるしにて　芭蕉
（『一葉集』「月」を「畏」とす。）
磯山かげに鳩の啼聲　史邦
寢て直す旅のつかれの晝い雨　去來
紙まきそへて輕き笠の緒　野童
ウ
人の見ぬ時〳〵は泣物おもひ　考
こよひも舟にゆり起す夢　草
山間に猿のさわたる枝つゞき　邦
尾張をうつす木曾の大根　蕉
破殘る茶碗ひとつはいそがしき　童
かゝげてからに呼る堂の火　來
薦ばかり身にまく人を見知兼　草
湯の時偏る夕暮の月　考
樂笛を知て合する秋の風　蕉
虫の啼べき庭をこしらへ　邦
花咲を旅好人もなかりけり　來
舟ならべたる松本の春　童
二
北の方若狹ざかひに殘る雪　考
髭のまばらに白うなる年　草
酒入のちひさき破籠けなされて　邦
物のかげより拜む行幸　蕉
うれしさもつらさも藤太獨なり　童
膝をどろかすくせも直らず　來
（「ろ」は「ら」の誤ならん。）
挽きりし桐の枕も手もとにて　草
（『鵜の音』下五を「手もどりに」とす。）
たきもの灶て雪になす空　考
かけあひに申して通る鉢たゝき　蕉
御番にあがる中立の門　邦
夕月をことし見習ふ山の端に　來
盆の佛の名はあまたなり　童
二ウ
垣間に湯殿の前の萩咲て　考
少童のむつぎの干場かはれる　草
傘たゝむそれにも老の世話やかれ　邦
經一口もしらぬ齋の日　蕉
散花を掃あつめてぞ歸りける　童
何くつろぎてながる陽炎　來

其二

（此巻亦同じ所同じ頃と推定せらる。）

さびしさの底ぬけて降霙哉　丈草
ちら〳〵光る糠の埋火　去來
鯨ひく沖に一濱家あけて　芭蕉
苗栽初る砂留の松　鼠彈
つるかけの入日に月の打しらみ　來
露におもたき旅の帷子　草
ウ 有付の心にすまぬ初奉公　彈
戸尻につまる馬の干草　蕉
里富て實にも梅田の丘堤　草
かゝる血ぐさき世の修行人　來
つぶ足に草鞋ふとき二階堂　蕉
こもに火のもる舟こしの小屋　彈
啼飛や塒をよそに月の鶴　來
青き木實を絶す猿嘯（ホウ）　草
踊場にかりて長吏の三千歩　彈
なさけしらずの袖を引さく　蕉
冊子（とぢよう）の薬末にぬるゝ花筐　草
しら木の樽のにほふ宜春（よしき）　來
ニオ 今川の武威を籠たる謡初　蕉
泣て手をする夫の不屆き　彈
張籠に五百ばかりの米の錢　來
節句の宵に祭りかさなる　草
町端の埃掃ためて火に燃す　彈
死をわすれ居る祖父の岩疊　蕉
月まちの謂れ尋き薹の塵　草
內裏の帳に入し牛の子　來
萩垣の川をさかひに原の末　蕉
墓にものいふ秋は來にけり　彈
傘取にやるほどもなき月の雲　來
提灯さわぐ切の狂言　草
ニウ 鱐がらの庇に乾る店の先　彈
肥て氣味よき家の寢姿　蕉
ひとり子の分に過ぎたる榮耀事　草
呼にもゆかぬ醫者の乘物　來
花咲て軒端明るき鼠壁　蕉
他國（ひとつくに）まで鳳巾に慰む　彈

▽『三吟未來記』　歌仙一

（此巻は發句によりて元祿五年のものと推定せらる。蓼太が此書に發表せるを初出とす。多少疑問視せらるゝ巻なり。）

草庵に桃さくらあり。門人に其角嵐雪をもてり。

兩の手に桃とさくらや草の餅　芭蕉
翁に馴し蝶鳥の兒　嵐雪
野屋敷の火繩もゆるすかげろふに　其角
山のあなたの鐘聞ゆなり　蕉
のり下に月毛の駒の有明て　雪
風ひやゝかにきれ〴〵の雲　角
ウ 傍輩に相撲の打身いたはられ　蕉
帶ほころばす金のたしなみ　雪
寢言さへ初瀬籠の南無大慈　角
（「慈」は「悲」ならん。）
まめ蒔しまふ宵過の東風　蕉
酒さます杖にかぼそき禿ども　雪
剃やともらふ老の紅裏　角

負軍功者に引てかへる也　蕉
ふたゝび暮るゝ霧の明方　雪
見盡して蚊屋へ這入月の友　角
庵の雑水をすゝる小男鹿　蕉
一通彼岸の花の咲ちりて　雪
日永にめぐる嵯峨や太秦　角
ニウ あたゝかに綿子とらせん弱法師　雪
お醫者まじりに伽衆立るゝ　蕉
舷を浪よ〳〵と追もどし　角
てうちん見ゆる町の入口　雪
女房よぶ米屋の亭主若やぎて　蕉
高田の喧嘩はやむかし也　角
夏寒き闘の孫六ぬきはなし　雪
たしなき風の石菖へ來る　蕉
牛の子の牛にせかるゝ市の中　角
江湖披露の田舎六尺　雪
とつぷりと夜に入月の鳥羽繩手　蕉
いづこどまりと鴫の行らん　雪
ニオ 糊たちに四手うつ葛の裏表　角
ずんずとのびる男兒弟　蕉
一度は江戸を見たがる小あきなひ　雪
みたらし汲て神の門前　蕉
桒よと未來を植し花の陰　角
三人咲ふ春の日ぐらし　雪

▽『猿舞師』歌仙一

（此巻は史邦が江戸に下りて賦せるものにして、元祿五年と推定せらる。）

五吟歌仙

初茸やまだ日數經ぬ秋の露　芭蕉
青きすゝきに濁る谷川　岱水
野分より居村の持地定まりて　史邦
さしこむ月に藍瓶の蓋　半落
鹽付て餅くふほどの草枕　嵐蘭
撫てこはゞる革のひきはだ　蕉
ウ としよりは土持ゆるす夕間暮　水
諏訪の落湯に洗ふ馬の背　邦
辨當の菜を只おく石の上　落
やさしき色に咲るなでしこ　蘭
よつ折の蒲團に君が丸くねて　蕉
物書うちにつらき足音　水
月暮て雨の降止星明り　邦
早稻の俵にほめく刈大豆　蘭
胸虫にまた起さるゝ秋の風　水
畚に赤子をゆする小坊主　邦
花守の家と見えたる土手の下　落
ほそき井溝をのぼるわか鮎　蕉
ニオ 春風に太鼓聞ゆる旅芝居　蘭
呑口ならす伊丹諸白　水
琉球に野郎疊のおもて持　蕉
是非此際はあげん物役　邦
見しられて近付なりし木曾の馬士　落
嫁入するよりはや鳴子引　蕉
袖ぬらす染帷子の盆過て　蘭
月もわびしき醤油の粕　水
草赤き百石取の門がまへ　落
公事にまけたる奈良の坊方　蕉
からかさを廣げもあへず俄雨　邦

見るめも暑し牛の日おほひ　蘭
出店へと又も隠居の出られて　落
干物つきやる精進の朝　水
手拭のまぎれてそれを云募り　蕉
駄荷をかき込板敷の上　蘭
人つゞく毛利細川の花ざかり　邦
聲も賓なりきじの勢ひ　落
（こゝに句メあれど略す。）

▽『桃の實』歌仙一

（岡山藩の櫻井兀峰は其編者『桃の實』に此卷を收めたり。元祿五年江戸にてのものと推定せらる。洒堂亦來り居りて『深川集』を編せし也。）

水鳥よ汝は誰を恐るゝぞ　兀峰
白頭更に蘆靜也　芭蕉
中汲の醉も仄に棒提て　洒堂
月の徑に沓拾ふらし　峯
鳩吹ば榎の實こぼるゝさら〳〵と　蕉
板の埃に圓座かさぬる　堂
簾戸に袖口赤き日の移り　里東
君はみな〳〵撫子の時　蕉
泣出して土器ふるふ身のよはり　峯
御念頃にて鎌倉をたつ　東
門々に明日の餝をくばりをき　堂
筵踏むなとうつす鹽鰡　峯
山陰をまれに出でたる牛の尿　蕉
梨地露けき兒のさげ鞘　堂
名月に雲井の橋の一またげ　東
今年の米を背負ふ嬉しさ　蕉
花に來て我名は佛徳右衛門　堂
春はかはらぬ三輪の人宿　東
陽炎の庭に機へる杼打て　峯
たゝむ衣に菖蒲折置　堂
さんといふ娘は後のものおもひ　蕉
戀のあはれを見よや鳩胸　峯
城代の國はしまらず田は餒て　堂
美濃は伊吹で寒き秋風　蕉
夕月に荷鞍をおろす鈴の音　峯
髯なじまする質の出し入　堂
麥飯に交らぬ食をとりわけて　蕉
徳利引摺る川船の舳　峯
帷子に風も涼しき中小姓　堂
明日御返事を黄昏の文　其角
うつくしき聲の匂ひを似せて見る　峯
人めにたつとひきなぐる珠數　堂
一息に地主權現の花盛　角
膳に日のさす春ぞきらめく　峯
鶯は此頃の間にいとひ啼　堂
歳旦帳を鼻紙の間　角

▽『句兄弟』歌仙一

（此卷は其端作にある如く、元祿五年のものにして、其角（晋子）は其『句兄弟』中卷に採錄しあり。）

壬申十二月二十日即興

打よりて花入探れうめつばき　芭蕉
降りこむまゝのはつ雪の宿　彫棠
目にたゝぬつまり肴を引かへて　晋子
羽織のよさに行を繕ふ　黄山

夕月の道ふさげなりかんな屑　桃隣
出代過て秋ぞせはしき　銀杏
ウ 絹になるきぬはひかゆる槌の音　棠
肩でやしなふ駕籠かきが親　晋
足もとに菜種は臥て芥の花　杏
茶を煎て廻す泊瀬の學寮　蕉
下張の反古見えすくまくらして　山
つめたい猫の身をひそめ來る　隣
むづかしや襟にさし込む娵の顔　棠
硯法度と戀やせかるゝ　晋
夜の雨窓のかたにてなぐさまむ　蕉
三寸の殘をしたむ唇　隣
ま一つと噫をはやす朝の月　晋
らんときくとに遠ざかる疫　棠
二オ 愚なる和尚も友を秋の庵　杏
高みに水を揚る箱戸樋　山
山鳥のわかるゝ頃はしづか也　蕉
ねぶりかゝる䑓合歡の下闇　晋
かけむかひ襷へる床のいとまなし　山
思はぬ舟に晝の汐待　杏
氣色まで曹洞宗の寒がりに　隣
焦す疊にいたく手を燒　棠
見ぬふりの主人に戀を知られけり　晋
姿半分かくす傘　蕉
珍しき星は皎けてよるの月　棠
渡りはじめの聲低き雁　山
二ウ 松茸を近江路からは澤山に　晋
息災な子は下々に有　杏
老たるは御簾より外にかしこまり　蕉
花の名にくしどこが楊貴妃　棠
付ざしを中てはゝるゝ桃の色　山
こてふの影の跨ぐ三絃　隣

▽『小春笠』　表八句 ―

（此表合は「古人落柿舎除元の一枚摺」の中にありしを、机墨庵富鈴が其『小春笠』の巻末に附載せるもの也。―勝峰氏による―）

壬申歳暮之睦

世中をいとふまでこそかたからめ

小契情行てたぶらん年の暮　其角
頭巾ばかりに假のたきもの　渓石
吹さする袴のひだの赤らみて　芭蕉
かゆるこゝろになりし盃　普船
算盤をひそかに彈く市の中　盤子
いつも自由に出湯の行水　史邦
竹椽の葉ごしに並ぶ月の空　去來
胸すかしたる早稻の朝風　丈草

▽『翁草』　端物 四

其一（元祿五年カ）

其不二や五月晦日二星の旅　素堂
なすび小角豆も己が色なる　露沾
鷹の子の雲雀に爪のかたまりて　翁

其二（元祿六年カ）

漆せぬ琴や作らぬ菊の友　素堂
葱の笛ふく秋風の薗　翁
鮎よはく籠の目潜る水落て　沾圃

其三 （同年カ）

古將監の古實をかたりて

月やその鉢の木の日のひた面　翁
旅人なれば折からの冬　沾圃
水鳥に廻文のむらに來て　其角

其四 （元祿七年カ）

野々口立圃はわが母方にゆかりたる人也。ある夜夢に見えて、此句を予にあたへければ、幸を芭蕉翁に願ひて俳諧を改メ、古德をしたふもの也。

鞋ならで名乘をなのる人も哉
實植の櫻ことしより咲　沾圃
黄鳥の宿は東に戸を付て　翁

▽『初便』 端物一

（此卷は歌仙の二ウ四句を缺けるものにして、野坡は元祿六年芭蕉庵に於て興行せるが、芭蕉の意に適せざる句多くして滿尾せざりし旨を、漢文にて記し、門人梨里に其懷紙を與へたるなり。『初便』原本未だ見るを得ず。『七部拾遺』編入のものによりて採錄す。）

はせを庵にて

寒菊や粉糠のかゝる臼の傍　芭蕉
提て賣行はした大根　野坡
夏冬は取置橋を懸初て　同
門に顔出す月のたそがれ　蕉
雲行も秋の日癖のさんざ降　同
此一谷は栗の御年貢　坡
ウ 七十に成をよろこぶ助扶持　蕉
三尺通り裏のさし掛　坡
涼しさは堅田の出崎よく見えて　蕉
蛭取牛の方紀休むる　坡
墨染に寺の男のこゝろ入　蕉
其日に戻る旅の草臥　坡
押詰る師走の口を喰かねて　蕉
緒に緒を付けて啣す主筋　坡
田の中に掘せぬ石の年經し　蕉
芝に道つく月おぼろなる　坡
花の時祖父は目出度なられけり　蕉
俵で米かす春の蔵もと　坡
二オ 廣庭に青の駄染を引ちらし　同
這廻る子のよごす居どころ　蕉
裏合せ根藥のくゞる藪の岸　坡
蝮のあとのいたむ霜さき　蕉
とし寄て身は足輕の追からし　坡
泣て酒のむ乘物のまへ　蕉
どう／＼と榎に風の當る音　坡
稻盜人の繩を解やる　蕉
月見れば親に不足の出來心　坡
こぼれて露は何所へ行やら　蕉
假に剃あたまばかりは殘勝にて　坡
仕付てもどす聟方の客　蕉
二ウ 田を植る向近江の稻の出來　同
天氣に成し宵のかみなり　坡

▽『甲戌歳旦帳』 表八句一

（此八句表合は其角の歳旦帖卷頭にあるもの也。）

年たつや家中の禮は星月夜　其角

筆紅梅をたゝむ國紙　介我
春も雪茶通の手前ゆたかにて　岩翁
山より見たる夕ぐれの町　枳風
ひとりたゞ身を遊ばせて鴫子引　彫棠
蚊やり草干す秋になりけり　横几
有明もすくなき鯖のきざみ物　芭蕉
帆を八合に船頭の聲　仙化

▽『俳諧袖草紙』歌仙其他

（元祿五年より同七年最終の旅行前までのものにして、單行本になきもの又は其出自原本を得られざるものを、奇淵校刊の『俳諧袖草紙』より採錄編次したり。）

○歌仙（元祿五年カ）

（此卷は書肆菊舍太兵衞刊行の『七部拾遺』にあり。『袖草紙』は其出自を『部懐紙』とし、「餞別」の前書を附したれども、他書には見えず。『一葉集』は「芭蕉庵會」と題せり。『部懐紙』たる俳書は未だ發見せられざるもの也。）

風流のまことを啼や時鳥　涼葉
旅の草鞋にちの花の雪　芭蕉
砂川にひたす双釜のかたぶきて　青山
門ちがひする賢者の麁相さ　曾良
月の夜は見しらぬ犬も靜なり　濁子
しろき西瓜も今はすゞしき　嵐蘭
ウ　庫裏姥の手を束ねたる盆の中　岱水
ぬるみひとつと望む陸尺　曲水
三ッ目より人もしたしむ契にて　嵐雪
こゝろもあるか假名に名を書　葉
行燈を隔て影をかくし合　蕉
木賃泊りは不馳走にする　怒誰
入かげも細き高野の朝の月　良
鹽を荷て良寒き人　山
こほろぎに隣は臼を搬出しぬ　曲
小鐲の文を送る村〳〵　子
此花に判官殿やとゞめけむ　蘭
寺のくれ木をながす雪水　岱
二オ　入物も田螺に似せて竹筏（いかだ）　葉
かたるをきけば乞食を君　雪
長からぬ髭人參の賣處　山
また年くれて隱居苦しき　雪
火桶すらねぬ夜の夢に消殘り　子
蕎麥の粉ふるふ翠の振舞　蘭
返事せぬ手紙は捨て捨ぬらん　雪
おどけた顔は名のおぼえよき　葉
落着に風呂いひ付るいせのお師　岱
先日和よき秋の夕ぐれ　良
柿見世の富貴に見ゆる後の月　蕉
稲かりつれて小舟のりこむ　山
二ウ　狗の尾房さげたる雌の童　雪
碓氷の岩に殘るあし跡　蘭
ひきわたす弓にあたりを望れて　葉
きげん直しに酒盛られけり　岱
やよやまて宿まで送る花の暮　子
巣をくふ鳥の人に怖さる　良

○端物（元祿五年カ）

（此卷の出自を『袖草紙』は『部懐

紙」とせり。『桃の白實』は半歌仙なれども、本書をはじめ諸書十六句のみ。依て『桃の白實』より二句を補ふ。）

深川庵

月代をいそぐやうなりむら時雨　千川
小松のかしら揃ふ冬山　芭蕉
牡鹿飛嶽の透間の草かれて　此筋
水眞白に海へ出る川　左柳
泊るべき旅の酒屋も一里ほど　酒堂
（『桃の白實』上中十二字を「酒機嫌旅の板屋も」とす。）
えりにおしこむおとがひの髭　海動
ウ物書て慰む日あり五月雨　岱水
散際かろし南天の花　川
笠とれば前髪ゆがむ草鞋がけ　蕉
なみだも急にいさむ大酒　嵐蘭
（『桃の白實』此句を「泪も戀にいさむ寺住」とす。）
高館は年穿鑿になりにけり　柳
居風呂たてる雪の降出し　筋
ふくさ藁取みだしたる菅と鱏　動
（「菅」は「すけ」の誤ならん。）
傷寒病のあたまかゝゆる　水
伊豆の海みさきに船を漕入て　川
一夜の法に宗旨定る　蕉
とし〳〵の花にならひし友の枝　丈草
きしる車もせかぬ春の日　川

○半歌仙　（同年カ）

（此巻も前巻と同じく『桃の白實』にもあり。）

木がらしにうめ間遅き入湯哉　荊口
毛をひく鴨をのする俎板　酒堂
掛乞の中脇差に袴着て　芭蕉
處〳〵は木履はくみち　此筋
梨の枝おもりを觧ば暮の月　左柳
桶にいろこき芋がらのあく　大舟
ウ秋風に枯拵る鷹のやど　千川
鼠のわたる梁の弓　蕉
六月の日も照仕舞柞の木　堂
手數の入し荷繩ゆるまる　柳
袈裟ばかり懸て供する浄土宗　筋
箕面の瀧のくもる山降　川
籠ふせの駒鳥おとす篠の蔭　舟
俵に豆の葉をしごく秋　堂
月代も小ぐらき里のはなれ際　川
手綱ひかへて馬の順くる　筋
盃は今朝よりとれぬ花ざかり　柳
疊の上にのぼる陽炎　蕉

○歌仙　（同六年）

（此巻亦前巻と同じ。）

野は雪に河豚の非をしる若菜哉　涼葉
まだ黄鳥の啼きらぬ聲　千川
門番の寢顔にかすむ月を見て　芭蕉
けさむき初る前栽の柹　宗波
秋風にむしろをたるゝ裏坐敷　此筋
蟲も雨夜は目ざめがちなる　濁子
ウ肌寒く疳の方を下になし　川
手本に墨を付て悔めり　葉
尼寺の老尼はひとり髮剃て　子

奈良はむぐらの内にこそあれ　蕉
掛わたす小袖の黴をもみ落し　筋
金の團扇を閨のなぐさみ　川
見る度に源氏一部のしのばしく　葉
捨てうき世をやすき僧正　波
出來合も伊勢の料理は麁相にて　蕉
はだしでありく内庭の砂　筋
朝月に花の乘物せつき立　川
日かげの藤の雫つめたき　葉
二オ 石疊む鳥居のおくの春がすみ　筋
地取の株に見ゆる名苗字　蕉
（「株」は「杭」の誤ならん。）
爰まではとゞかぬ鹿の音をしたひ　葉
寺のひかへは四五反の秋　川
夕月に植木つり出す塀の破　左柳
見よ水籠を懸られし軒　葉
先ばなは土俵籾の一繩手　蕉
着てゐるうちに帷子の干る　筋
うつぶきて糸さす宿の暮かゝり　川
あはれ氣もなき講の題目　柳
三條の橋より西は時雨けり　葉
茶屋の二階は酒の樓閣　蕉
二ウ 美しき顏も丈より年ふけて　筋
うらみの文を作る琴の手　川
花咲ば又來てのぼる塚の上　蕉
高荷にはさむ蓬たんぽゝ　葉
もろ雲雀夕日をしげに囀りて　柳
只よきほどに春風ぞ吹　執筆

○歌仙　（同年）
（此巻も前巻と同じ。）

雨中
からかさにおしわけ見たる柳かな　芭蕉
わか草靑む塀の築さし　濁子
朧月いまだ火燵にすくみ居て　涼葉
使のものに禮いふてやる　野坡
洗濯をしてより裄のつまりけり　利牛
ほめられてまた出す吸物　宗波
ウ 湯入衆の入草臥て峰の堂　曾良
黒部の杉のおし合て立　蕉
はびこりし廣葉の茶園二度摘で　子
けふも暑に家を出て行く　牛
伊勢の連又變替をしておこす　坡
おこしかねたる道心の沙汰　波
金はらひ名月までは延られず　葉
のぼり日和の浦の初雁　良
秋もはや升ではかりし蕃椒　蕉
淸涕（はな）たらす子の髮結てやる　波
在所から半道出れば花咲て　牛
瓢の蝶をはらふ麻だね　子
二オ 春の空十方暮の時〻に　坡
汐干に出もをしむ精進日　蕉
駕舁の一人は酒をかぎもせず　牛
先手（さきて）揃る宿のとりつき　葉
むづかしき苗字に長き名を呼て　蕉
丸ロすゆる鯖の燒物　坡
祝言も母が見て來て極めけり　牛
木綿ふき立つ高安の里　蕉
足場よき月の細道一すぢに　子

鹿おふ聲のねぶたさうなる　良
念佛にちひさき鉦は殊勝にて　牛
四五十日に居あく太秦　坡
ニウ
藪かげは麥も伸たる霜柱　岱水
荷ふた物を問ば鹽うり　葉
男ども遊び仕事を晝の辻　坡
寝入もはやし年のよるほど　牛
切株も若木は花のうきやかに　子
陽炎落る岩の細瀧　良

○端物　四

其一　（元祿六年カ）

春うれし野は蝶鳥に懐しき　其角
水際もゆる陽炎の石
（此句作者名を缺く。）
出代の荷物去年よりかさ高に　芭蕉

其二　（同年カ）

梅が香や通り過れば弓の音　毛紈
土取鍬に雲雀囀る　許六
陽炎に野飼の牛の杭ぬけて　芭蕉
（右二つ『袖草紙』採録せざるにより『金蘭集』より補ふ。）

其三　（同年カ）

長閑さや寒の殘りも三ケ一　利牛
打かへしやく雉子の胴がら　岱水
薹に立冬菜のつぼみきり捨て　芭蕉

○歌仙　（元祿六年カ）

（此巻亦前巻と同じ。千川は大垣藩士宮崎荊口の次男にして、岡田氏を嗣ぎし也。）

城主君日光御代參勤させ給ふに扈從す岡田氏にまうす。

篠の露はかまにかけし茂り哉　芭蕉
牡丹の花をおがむ廣場（にはに）　千川
みじか夜も月はいそがぬ形して　涼葉
壁に立をく琵琶を轉す　左柳
雪よりは藁ふむ馬の冬籠り　川
出口とゞまる金山の砂　蕉
ウ
吹倒す杉もおこさず此社　柳
いつも茶のみによる端の家　葉
犬の子のあゆまれぬほど能肥て　青山
稲する臼をかりにこそやれ　川
露深き曹洞寺の夕づとめ　蕉
瀬のひゞきよりのぼる月代　山
生ながら鮒は鱠に作られて　葉
すのこ出來せば先疊しく　柳
巡禮の歸て旅のものがたり　川
兄より兄につたふ脇差　蕉
花見んと直る圓坐の暖り　山
くるへば梅にさはる前髪　葉
ニオ
あられ降踏歌の宵を戀渡り　蕉
もりならべたる片器の蛤　此筋
湯上りの浴衣干る間をまちかねて　葉
窓の破れに入るゝ北風　柳
さびしさにすゝみくづせば鳥も來ず　筋
霧のまがきは何時の山　遊糸
萩島年貢の柴にかりそへて　川
酒屋の門をたゝく月の夜　葉
人足の貫目引あふ崖づゝみ　大舟
國を問れて笠を見せけり　蕉

草むらと日頃思ひし死處　糸
　降出す雨にさわぐ蟬の音　筋
二ウ
隨身のかざす矢並をつくろひて　柳
　火にかゞやきし門の金物　舟
院内に宇治川近き波の聲　葉
　噺とぎれてやすむ筆とり　川
（「筆」或は「草」の誤ならん。）
此春はいつより寒き花のかげ　蕉
　蛙のせいの見ゆる苗代　糸

○歌仙　（元祿六年カ）

（此卷從來疑問視せられたれども、發句は「名月の夜やおも〳〵と」と『射水川』序文中にありて芭蕉のものに疑ひなく、又立圃は沾圃の改名なる事は『翁草』によりて編入したる「雛ならで」の夢想開によりて明か也。『袖草紙』は其出自を『さいつ頃』とすれど、同書は未見の書なり。）

重〳〵と名月の夜や茶臼山　桃青
　肌寒しとてかり着初る　立圃
秋の藥のその匂ひより麝香草　圃
　ほうろく買てたれ賴ばや　青
かくばかり足の入たる高瀨舟　圃
　けふも一日蟬のなく椎　青
ウ
宿ありと五里程出る家童子　圃
　老はみな〳〵十念をまつ　青
水仙のさかりを見する神無月　圃
　松毬まだ常盤なりけり　青
登られぬ大内川の后（きさき）がね　圃
　雨はら〳〵と郭公聞　青
かりそめに尻をまくるも川渡り　圃
　煩ふてさへ西行は歌　青
秋までは畑に作るしろ茄子　圃
　花火とぼして星祭也　青
傾城と横（よこ）の中から袖の月　圃
　狐の歩行く足音も屋根　、
二オ
魚籃寺と言へば其名も醒き　青
　附木賣まで濡る白雨　圃
お袋の部屋に植たるわすれ草　青
　沙石を讀で聞す不可思議　圃
精進もけふは延さず煤はらひ　青
　都鳥まで見る江戸の舟　圃
三ッ輪くむ老の姿も志賀之助　青
　またけ〳〵と戸を叩く風呂　圃
布袋とは彌勒菩薩の化身也　青
　鯉のうろこは三十六員　圃
仙人に成る事もがな秋の月　青
　その原〴〵はみな木賊刈　圃
二ウ
むらさきのみのりてみする朝ぼらけ　、
　此川こえばうき人に逢ふ　青
みちのくの千引の石もこゝろあれ　圃
　かく捨し世を誰ひろふ戀　青
花も名になえてふ加藤壹歩殿　圃
　能（のう）はじめより高砂の松　執筆

○半歌仙　（元祿六年カ）

（此卷『袖草紙』は其出自を『鄙懷紙』とする事、前數卷に同じ。『桃の白實』收錄亦同じ。）

仲秋雨懐故人

名月やさゝふく雨のはれをまて　濁子
客に枕のたらぬ虫の音　芭蕉
秋を経て庭にさだまる石の色　千川
まだなまなれの酒のこゝろみ　涼葉
端たゝぬ鼻紙重きふところに　此筋
曲れば坂の下に見る瀧　子
ウ
獵人の矢先のけよと手を振て　蕉
青き空より雪のちらめく　川
入口の鎰あづかれとたのむ也　筋
きりかひ鷹の鈴板をとく　子
舟こぞり狭くば下（おり）て夕すゞみ　葉
輕う着こなすあらひ帷子　川
伏見まで行にも足袋の底抜て　蕉
めしのこはきも喰なるゝ秋　筋
月影は夢かとぞ思ふ烏帽子髪　子
殿の疊の古びたる露　川
花咲ば木馬の車引ずりて　蕉
ほこりもたゝぬ春の波風　筋

○歌仙（同年カ）
（此巻亦同じ。）

十六夜はとりわけ闇のはじめ哉　芭蕉
鵜舟のあかをかゆるさび鮎　濁子
近道に鶏頭畑をふみ付て　倚水
肩の揃ひし米の持次　依々
見かへせば屋根に日の照むら時雨　子
青菜煮る香の田舎めきけり　蕉
ウ
よりつきのなき女房の顔おもき　水
夜すがらぬらす山伏の髪　蕉
若皇子にはじめて草鞋奉り　子
わたしの舟で草の名をきく　依
鸛の巣に赤きかしらの重りて　蕉
化物曲輪掃殘す城　子
梅の枝おろしかねたる暮の月　水
（『金蘭集』「梅」を「根」とす。）
姨まちうける後の藪入　馬莧
ひとり住古き砧をしらけゝり　子
うらみはてゝや琴箱のから　蕉

都より十月も遅き花ざかり　曾良
爪を立たる獨活の茹物　水
ニオ
年禮を御師の下人に詞して　莧
ゑぼしかぶれば児もかくるゝ　蕉
持付ぬお太刀を右にかしこまり　子
よればはねたる馬のふり髪　良
夏川にはや宵の瀬を踏ちがへ　涼葉
道祖のやしろ月を見隠す　子
我戀は千束の茅を積かさね　蕉
鴈も大事にとゞけゆく文　葉
眉作る姿似よかし水かがみ　子
大原の紺屋里に久しき　蕉
數おほくつなげば牛も富貴也　葉
冬のみなとにこのしろを釣　子
ニウ
初時雨六里の松を傳ひ來て　蕉
老が草鞋のいつぬけたやら　蕉
（作者名「蕉」は「葉」の誤ならん。）
朝過を六雛の起すねざめ也　子

笋あらすゐのしゝの道　蕉
雪ならば雪車にのるべき花の山　葉
春風さらす谷の細布　子

○歌仙（同年カ）

（此巻亦同じ。）

十三夜暁やみのはじめ哉　濁子
小袖の糊のこはき薄霧　曾良
燒飯に瓜の粕漬口あけて　芭蕉
荏胡麻のからに四十雀つく　史邦
雨氣付笠の干反のしめりあひ　杉風
ごみかき流す風呂の水やり　岱水
ウ　きり麥をはや朝影に打立て　涼葉
幸手をゆけば栗橋の關　蕉
松杉をはさみ揃る寺の門　良
ひとりやもめの冬のこしらへ　子
梟の身をも隠さぬ戀をして　水
涙くらべむ、椽落るなり　蕉
うす月夜麻の衣の影ぼうし　邦
客まつ暮に薪わる秋　風
末廣を釘にかけたる禰宜の家　子
塵打はらふ片器の喰積　葉
先汁と箸を始るはつ花に　蕉
うぐひす啼て旅にたす空　邦
ニオ　ねさめにも指をうごかす一節切　水
中よくちなむ兄が膝元　蕉
具足着に屈るゝほど場の有て　葉
顔には似せぬ饅頭の好き　邦
盛なる隠居の牡丹見て歸る　風
襷はづして出るをほな子　水
笠からん歎の返事にみのもなし　邦
あしはむくみて河原行けり　良
よごれたる衣に輪袈裟打しほれ　蕉
伯母の泣るゝ酌人の貌　子
（「貌」は「かげ」の誤ならん。）
けふの月貫稙の梨の穂がけして　良
枝もぐ菊の括りちひさき　葉
ニウ　露霜に土とそげたる沓の裏　子
潜りほそめにあける肴屋　良
初産は思の外に安かりて　水
かりし屛風をかへす夕暮　風
花にまた花をかざりし弓空穂　葉
はや鎌倉の道のわか草　邦

○歌仙（元祿六年）

（此巻の懐紙、杉風の家に傳はりて、平山梅人が『續深川』に收錄したるものあり。發句は『續猿蓑』編入歌仙里圃のものと、「あられ」「あらし」の相違あるのみ。『金蘭集』「霜月八日即興、杉風自筆にて寫之」と記せり。）

いさみ立鷹引居るあられ哉　芭蕉
ながれのなりに枯る水草　沾圃
宿はづれ明店おほく戸をさして　馬莧
三味線さげる旅の乞食　蕉
夕月夜空豆くふて更しける　圃
ふすまこそぐる秋さぶき也　莧
ウ　露霜に誰か訪るゝ下駄の音　蕉
大黄の葉の幾重かさなる　圃

力なく肱ほそりしうき思ひ　莧
繕ふかひもなき木綿もの　蕉
持佛堂六疊敷に出ばるらむ　圃
あつきをほめてかへるさこ汁　莧
釣の錢十二匁の相場なり　蕉
伏見の橋も京の名殘ぞ　圃
懐へたゝんで入る夏羽織　莧
親仁〳〵とみな可愛がる　蕉
月花の宵から仕込よせ豆腐　圃
陽炎たちて餅は破(われ)けり　莧
二オ 瀧水のとく〳〵落る春の風　蕉
門の左りは見猿いはざる　圃
時の間に一むら雨の降通り　莧
菰より琵琶を出す蟬丸　蕉
鳥てふおほおそ鳥はしれがたみ　圃
雪の細江の山を取まく　莧
入口は松さま〴〵の竹扉　蕉
佛御前を神はうけずも　圃
黒絹の小袖は襟のあからみて　莧
呉洲の茶碗を賣に出さるゝ　蕉
なま禪の二階を居間に閉籠　圃
月を隣に癩痛をきく　莧
二ウ ねり物の一番見ゆる花すゝき　圃
蛸に酢懸る柚子のきり形　同
秋の空年〳〵下る旅功者　莧
奉加帳にはつかぬなりけり　圃
不公儀に花咲山のあら三位　蕉
田舍の谷になまる黄鳥　莧

〇半歌仙　（元祿六年カ）

（此巻の懐紙、杉風の家に傳はりしを、平山梅人其『繼はし』に收錄したり。『袖草紙』之を出自として編次したるなり。）

雪やちる笠の下なる頭巾まで　杉風
刀の柄に氷る手拭　芭蕉
唐がらし木ながら軒に打かけて　岱水
秋來てよはる鍋蓋の蠅　依々
朝〳〵は布子を羽折暮の月　曾良
硏とて捨る履の印形　蕉
ウ 島守に言葉の禮をしみ〴〵と　水
あからむ麥は鳥のたみだか　野坡
白かしの梢は寺の林にて　風
髮をきりても身を作りけり　水
燒薫る物見のむしろ押まくり　蕉
もらひよせしも茶に合ぬ水　良
藪こはす跡にうき立霜柱　風
出家に物をやり上る也　坡
御局もいとまがちなる鄕の月　良
取草の湯のさめてゆく空　依
初花は蓬搗よりいそがれて　坡
塀のつり木にうぐひすの鳴　執筆

▽『一葉集』端物二

其一　（元祿六年）

（此端物二つは同時に賦されしものと考へらる。『蕉翁全傳』に其二の發句を酉の冬玄虎子旅館にての卽興にて、一折ありと記せり。『一集葉』は元祿二年とすれど從ひがたし。）

うしろ風鳶の身ぶるひ猶寒し　玄虎
虎落(もがり)の氷柱ながくみじかき　舟竹
十露盤を片手に米の印して　芭蕉
こゝろあてなき旅のいとなみ　虎
けふの月處のものは山の猿　竹
よき岩組に秋の水おと　蕉
ウ 一株の芒は物に似たるかな　虎
（一本「た」を「ざ」とす。）
人見ねばこそ闇の臆病　竹
片道はしるき足駄をぶらさげて　蕉
右もひだりも崖造りなり　虎
わき出る雲より下のほとゝぎす　竹
尾上にかゝる鐘のつきぞめ　蕉
東國のあらき男も口そゝぎ　虎
鳴戸の月を待てのる船　竹
秋風に木綿肌着も吹しめり　蕉
並ぶ在所を霧の隔る　虎
花ざかり志賀の田の畝きり立て　竹
なにおくれけむ蝶になる虫　蕉

ニオ 春の日に長柄の傘の繪のもやう　虎
熨斗を付たる駕かきの紋　蕉
白粉に千代をや闘の姥が顔　竹
錢よむ業を專にする　虎
風はなに油へる火のちら付て　蕉
時を引ずる棒の片そぎ　竹

其二（同）

ものゝふの大根苦きはなしかな　芭蕉
一通りゆく木がらしの音　玄虎
歌枕揃ぬ紙を綴そへて　舟竹
火たきにはいる古旦那の内　蕉
物の葉のすき間かぞへて月の色　虎
うしろを見せて歸る小男鹿　竹

▽『刀奈美山』歌仙二

其一（元祿七年）

（此卷は去來浪化兩吟に、中途より芭蕉の加はりしものにして、浪化編の『刀奈美山』に收められたり。）

黄鳥に朝日さす也竹閤子　浪化
禮者うすらぐ春の靜さ　去來
やぶ入のみやげ似合に拵て　同
又時の間にわるうなる空　化
火燵切寒さもちかしくれの月　同
ひろい處を丸口にかる　來
ウ 旅人に錢をかはるゝ田舍道　同
かひこのくさき六月の末　化
雫たる網を一ぱい引ちらし　同
小屋敷並ぶ城の裏町　來
謂分のちよつ／＼と起る衆道事　同
梅咲そめて立花はやらず　化
年中を松の内より料理ぐひ　同
いせの状日のいそがしき春　來
上紺の木綿合羽に傘さして　同
湯屋の手透は八ツさがり也　化
名月のもやう互にかくしあひ　同
一分でもなき梨の切物　芭蕉

二オ
玉味噌の信濃にかゝる秋の風　芭蕉
不足な寺を無理に持する　來
右の手の振ひしだひに强ふなり　同
點かけてやる相役の文　化
此宿をわめいて通る鮎の鮓　同
青田うねりて夕立のかぜ　蕉
平めなる石を敷たる行水場　同
給仕をさせて馬夫が食喰　來
月くらき夜の隴梅を星で見る　同
聖靈棚はよほど窮屈　化
しのぶ間を踊に出るとおもはせて　同
來てうからかす去年の傍輩　來
二ウ
參宮といへば盜もゆるしけり　化
につと朝日にむかふよこ雲　蕉
蒼みたる松より花の咲こぼれ　來
四五人通る僧長閑なり　化
薪過町の子供の稽古能　蕉
いづくも春にしたきよの中　來

其二（同年）

（此巻は同書巻末に附載しあり。
其次第は浪化の記述に譲る。）

蕉翁の落柿舍に寓居し給ひけるころ、たづねまゐりて、主客三句の情をむすび立歸りぬるを、その後人々まゐりける序、終に一巻にみち侍るとて、去來がもとより遣られける。（浪化）

葉がくれをこけ出て瓜の暑さ哉　去來
野松に蟬のなき立る聲　浪化
歩荷持手振の人と咄して　芭蕉
かごと御供の間ひとぎるゝ　之道
牛時ほど夜のかゝりたる月の入　丈草
火のはち／＼と燃てやゝ寒　支考
ウ
軒口は蔦はひのぼるふしん前　惟然
兄弟どもが兄をあがむる　野童
切立て畠見わたす丹波やま　野明
そろ／＼出す冬のうり物　來
寄合は鯨のとれぬさたばかり　道
あからすゝけしあんどんのさや　草
ちくとした風呂敷さげて戸を敲　考
こそり／＼とそよぐ黍の葉　然
砂川の淺くながるゝ夕月夜　童
露しとれども輕荷ふらつく　明
百遣ふ花の木かげの店屋もの　道
菜種朧に西を見はらす　來
二オ
此寺に楞嚴よめしこその春　草
獵場の公事のむづかしうなる　考
朝の内むす子に馬をおはせやり　然
餅つきあげて汁粉もり出す　童
はご板の寄て一間にあまるほど　明
借上いふて妾たづぬる　道
茶小紋にろの十德のすんがりと　來
手舟さつさと秋は來にけり　草
此夕月を野にとり山にとり　考
しづが畠のなることがらつく　然
雨氣づく鉢の戻りのはら／＼と　童
早ふ出來たる市の小屋懸　明
二ウ
此ごろの化物ばなししづまりて　道
むこと舅のなほる挨拶　考

お局の里下しては涙ぐみ　草
ぬつたはこより物のだし入　蕉
花の香の暫く止ぬ宮うつし　然
日がな一日鳥のさへづり　明

▽『芭蕉翁眞跡集』脇一

（塚本如舟の家は靜岡縣島田町に在りしが、退轉して今無し。此眞蹟は其姻戚天野家に藏せらる。）

やわらかにたけよことしの手作麥　如舟
田植とともにたびの朝起　芭蕉

元祿七五月雨に降こめられてあるじのもてなしに心うごきて聊筆とる事になん。

▽『市の庵』歌仙一

（大阪に在りし洒堂が芭蕉を落柿舍に訪ひし時のものにして元祿七年也。）

閏五月廿二日　落柿舍亂吟

柳小折片荷はすゞし初眞瓜　芭蕉
間引捨たる道中の稗　洒堂
村雀里より岡に出ありきて　去來
霧かけ渡す手前石がき　支考
月殘る河水ふくむ船の端　丈草
小鰯かれて砂に照り付　素牛
上を着てそこらを誘ふ墓參　堂
手桶を入るゝ御通のあと　蕉
濡にも食はいつものごとくにて　來
大工の邪魔に鋸をかる　考
竹樋の水汲かくる庫裏の先　牛
便をまちて酢徳利をやる　堂
降出しも忘るゝ雨のした〳〵と　草
惣々やめにしたる洗足　來
打鮑を燒と鮨と兩方に　堂
黑みてたかき樫の木の森　牛
月花に小き門を出ツ入ツ　蕉
巢おろす兒の登る腰板　堂
陽炎に眠氣付たる醫者の供　草
新茶のかさのほつとして來る　蕉
片口の溜をそつと指し出して　堂
迎をたのむ明日の別端　來
薄雪の一簾庭に降渡り　考
御前はしんと次の田樂　蕉
追込の網を鼠のならす音　堂
隣の明屋あらし吹也　牛
葬禮の跡で經よむ道心坊　來
手拭脫ておろす牛の荷　考
川ひとつ渡て寒き有明に　蕉
岩にのせたる田上の庵　草
正月もいにやれば淋し廿日過　堂
種漬に來るとゝの名代　來
咲花の片へら殘ッしほ鰹　牛
彼岸をかけてお隙さゝやく　草
白粉をぬれども下地くろい顏　考
役者もやうの衣の薰　來

▽『七部拾遺』歌仙一

（此卷は元祿七年嵯峨方面にてのものと推定せらる。菊舍の『拾遺』に收めし此卷の二オ五句目以後を異にする一卷あり。稿本『ゆすり物』にあり。『一葉

集』採錄する所のものと文字殆んど同じ。かく一卷の中途以後を異にするは『ひさご』『勸進牒』二書に於ける『梅若菜』の歌仙と同じ事情に因るものならん。依て先づ『拾遺』のものを擧げ、次に『一葉集』のものを載せたり。）

夕顔や蔓に場をとる夏座敷　爲有
西日をふせぐ藪の下刈　翁
ちら〳〵と淺瀬に沙魚のつれ立て　惟然
馬のまはりはみな手人也　鳳仭
一貫の錢で酒かふ昏の月　翁
稗に穂蓼に庭の埒なき　然
ウ
松茸も小僧もたねば守られず　仭
ほたゆる牛も人にかゝるゝ　翁
臺所のつゞきに部屋の口明て　然
旅の馳走に尿瓶さし出す　仭
物ひとついふても念佛唱られ　翁
今の間に何度しぐるゝ　然
めき〳〵と川より寒き鳥の聲　仭
米の味なき此里の稻　翁
月影に馴染のふかき宿かりて　然
霧のおくなる初瀬の晩鐘　仭
花の香に啼ぬ鴉の幾むれか　翁
土ほりかへす芋種の穴　然
ニオ
陽炎に田舍役者の荷の通り　仭
伊勢のはなしに料理先だつ　翁
椙の木をすらすと風の鳴わたり　然
尻も結ばぬ虚言ぞほぐるゝ　仭
膳取を最期に眠る宵の月　露川
きり〳〵す飛さや糠の中　如行
秋もはやいろり戀しく成にけり　松星
合點のゆかぬ雲の出て來る　夷始
脇差をかるふ請取るうき藏主　行
木に抱付てのぞく谷底　川
仰山になり音たてゝ家根普請　始
日やけ畠も上田の出來　星
ニウ
夏の夜も明がた冴る笹の露　川
笊（いかき）かぶりて樒どりに行　行
隱家は美濃の中でも高須也　星
此月末にをはる楞嚴　始
むかしから花に日が照雨が降　行
たらはぬ聲もまじる鶯　筆

其二

（前卷註記の如し。或は此卷芭蕉の校閲を得しならんか。）

夕貌や蔓に場をとる夏坐敷　爲有
西日をふせぐ藪の下刈　翁
ひら〳〵と淺瀬に鮠のつれ立て　素牛
（『ゆすり物』『鮠』を『鯵』とす。）
馬のまはりはみな手人なり　鳳仭
一貫の錢で酒かふくれの月　翁
稗に穂蓼に庭の埒なき　牛
ウ
松茸も小僧持ねば守られず　仭
ほたえる牛を人にうらるゝ　翁
（『ゆすり物』『う』を『借』とす。）
臺所のつゞきに部屋の口明て　牛
旅の馳走に尿瓶さし出す　仭
ものひとついふては念佛唱られ　翁
今の間に何度しぐるゝ　牛

めき〳〵と川より寒き鳥の聲　似
米の味なき此里の稻　翁
月影になじみの深き宿かりて　牛
霧のおくなる泊瀬の入相　似
花の香に啼ぬ小鳥のいくむれか　翁
土はねかへす芋だねのあな　牛
二オ 陽炎に田舍役者の荷の通り　似
伊勢の噺に料理先だつ　翁
杉の木をすう〳〵と風の吹わたり　牛
尻も結ばぬ戀ぞほぐるゝ　似
うと〳〵と夜すがら君をおひ歩行　翁
豆腐しかゝる窓間の月　牛
美しきお堀廻りのうす紅葉　去來
合羽ひろぐる芝原の露　之道
蹲(つくぼ)ふて湯漬かき込釜の前　似
師走の役にたゝぬ雨替　來
だぶ〳〵と水汲入ていさぎよき　牛
松のみどりのさえ〴〵として　似
（「ゆすり物」「さえ〴〵」を「すいく〳〵」とす。）

二ウ ふし經の慰になる二人庵　來
心きいたる雲の赤坂　牛
草臥しきのふの軍ものがたり　似
髮おしたばね羽折る廣袖　來
難波なる花の新町まれに來て　牛
文に書るゝ柳山吹　似

▽『畫兄弟』歌仙一

（此卷は元祿七年の九月大阪にて賦せしものと推定せらる。『幽蘭集』等の連句集に採錄せられざりしもの也。）

秋もはやはらつく雨に月の形　芭蕉
下葉色づく菊の結ひ添　其柳
こつそりと獨りの當に蕎麥操て　支考
手間隙いれし屛風出來たり　洒堂
朝寢する内に使のつどひ居る　游刀
繩切ほどく炭の俵口　惟然
ウ 此際は師にてあへる市のもの　車庸
逢坂暮し夜の人音　蕉
美しき尼のなまりの伊勢らしく　堂
住ゐに過る湯どの雪隱　庸
木の下で直に木綿を揉まはれ　柳
早稻も晩稻も米になりけり　刀
月影はおもひちがへて夜が更る　然
奉行のひきの甲斐を求し　考
高うなり低うなりたる酒の辭義　蕉
財布切らるゝ柴賣の連　堂
さく花に内裏の浦の大へいさ　之道
馬を引出す軒のかげろふ　然
二オ 雇人の名を忘れたる節の客　考
手ばやく埒を明る縁組　庸
藪先の窓の障子のあたらしく　柳
燒てたしなむ魚串(くし)の煤鮠　堂
此錢の有うち雪のふれかしと　蕉
宵の口よりねたたやしけり　考
（「ねた」は「ほた」の誤ならん。）
相撲取の宿は夕飯居へならべ　刀
疇を打越すはつ汐の浪　然

日は入てやがて月さす松の間　庸
笑ふ事より泣がなぐさみ　蕉
洗濯のおそきを文でせつかるゝ　堂
十夜の明に寒い雨降る　柳
ニウ
逗留は茶で馳走する山家衆　考
あつらへて置臼のかすがい　刀
一二町つけ出す馬を呼かへし　蕉
雛おりる長塀の外　然
花ざかり何ぞといへば立て舞　庸
上髯あつてあたゝかなかほ　堂

▽『一葉集』　歌仙其他

（元祿七年初秋伊賀上野のものより晩秋大阪のものまで、及び年次不明の端物幷附句を編次したり。）

○脇一

（元祿七年初秋伊賀上野にてのもの。）

折〳〵や雨戸にさはる荻の聲　雪芝
放す處にをらぬ松虫　芭蕉

○表合一

（右と同じ頃のものか。）

いなづまに額かゝえる戸口かな　土芳
はたけ境にのびる唐黍　猿雖
清水出る溝の小草に秋立て　芭蕉
わすれごろなる醉ほのか也　芳
又おきて有明ほそき家の霜　雖
松風こもる山の中だん　蕉

○端物一

（伊賀上野にてのものにして、「笈日記」によれば九月四日なるが如し。此卷「一葉集」以前所見なきもの也。）

松茸や都にちかき山の形　惟然
雨に縄手のしるき秋風　土芳
おもしろく噺す間に月暮て　猿雖
まだ入人なき次の居風呂　芭蕉
はこばする道具そこ〳〵置直し　芳
日のさしこみに雀來て啼　然
ウ
冬はじめ熟柿を包むすぐり藁　蕉
置て廻りし伊勢の御祓　雖
庇さへなくて古風の家造り　然
内儀出て來る酒のとれ際　芳
ちりつきて又も痛める頭はげ　雖
今宵は冷る淺茅生の番　蕉
有明より國よりはれて一かへし　芳
（誤記あらんも考へ得ず。）
見するほどなき沙魚籠の内　然
弓はてゝはら〳〵歸る丸の外　蕉
縄を引はり壁の上ぬり　雖

○歌仙一

（此卷は『笈日記』によれば、九月十四日に賦されたるが如し。）

住よしの市に立て、其戻り長谷川畦止亭。おの〳〵を見侍るに、

升かふて分別替る月見かな　芭蕉
秋のあらしに魚荷連立　畦止
家のある野は刈跡に花咲て　惟然
いつものくせにこのむ中服　洒堂
此ごろと成て土用を暮しかね　支考

庭のかゞり火たてるたそがれ
うねめ召玉のお膝の打くづれ　芭蕉

其三

端居がちなるあざみ石竹
夏ながらえりふる〳〵と物思ひ
祈るしるしのかひなくもあれ　同

其四

綿ふきありく猫の眞白
人しらぬ中を火燵にもたれ合
師走の日數折指もなし　同

其五

緣に草履の打しめる春
石ぶしに細き小鮎をより分て　同

其六

煤掃の道具大方取出し
向ひの人と中直りけり　同

其七

鐘つく人もたへし此寺
朝日さす小松に雪の降かゝり　同

其八

櫻をこぼす市のあさけり
大和路へ入日はけふも花曇　同

其九

やしきの客はかはる獻立
きのふけふ庭は櫻の惣あかり　同

▽『有耶無耶關』脇一　表合一

（此書は千那の編著と稱するものなり。書中例句として掲記せるものを採錄す。）

○脇一

（此句は貞享二年大津尙白亭の吟也。脇はいつ附けしにや判明せず。）

からさきの松は花より朧にて　芭蕉
山はさくらを絞る春雨　千那

○表十句一

（「本式表十句之章」として示せる作例也。此九人が同席したらん時は未だ考へ得ず。）

松杉にすくひあげたるみぞれかな　去來
鐘面白う冴るたそがれ　許六
ひたすらにねばる誓の丁字風呂　芭蕉
長い羽折も四五年の內　曾良
吹晴てあとは踊の月まろく　千那
橋まで押してのぼる初汐　來
鰯網干場を鳶の離れかね　六
編笠組に入は何故　蕉
神明の花に願をひらかせて　良
天高かれど地にも鼓草（たんぽゝ）　那

▽『芭蕉翁眞蹟拾遺』

（此夢想開は『金蘭集』にもあり。「此三ツ物はせを自筆是あり」と附記せり。年次不明なれば假りにこゝに置く。）

仲秋初三夢想

薄原龍のいびきに鹿の聲　御
神の慮にまかす秋風　某甲
（『金蘭集』「慮」を「めぐみ」とす。）
盃のまはる間遲き月出て　芭蕉

連句集補遺　終

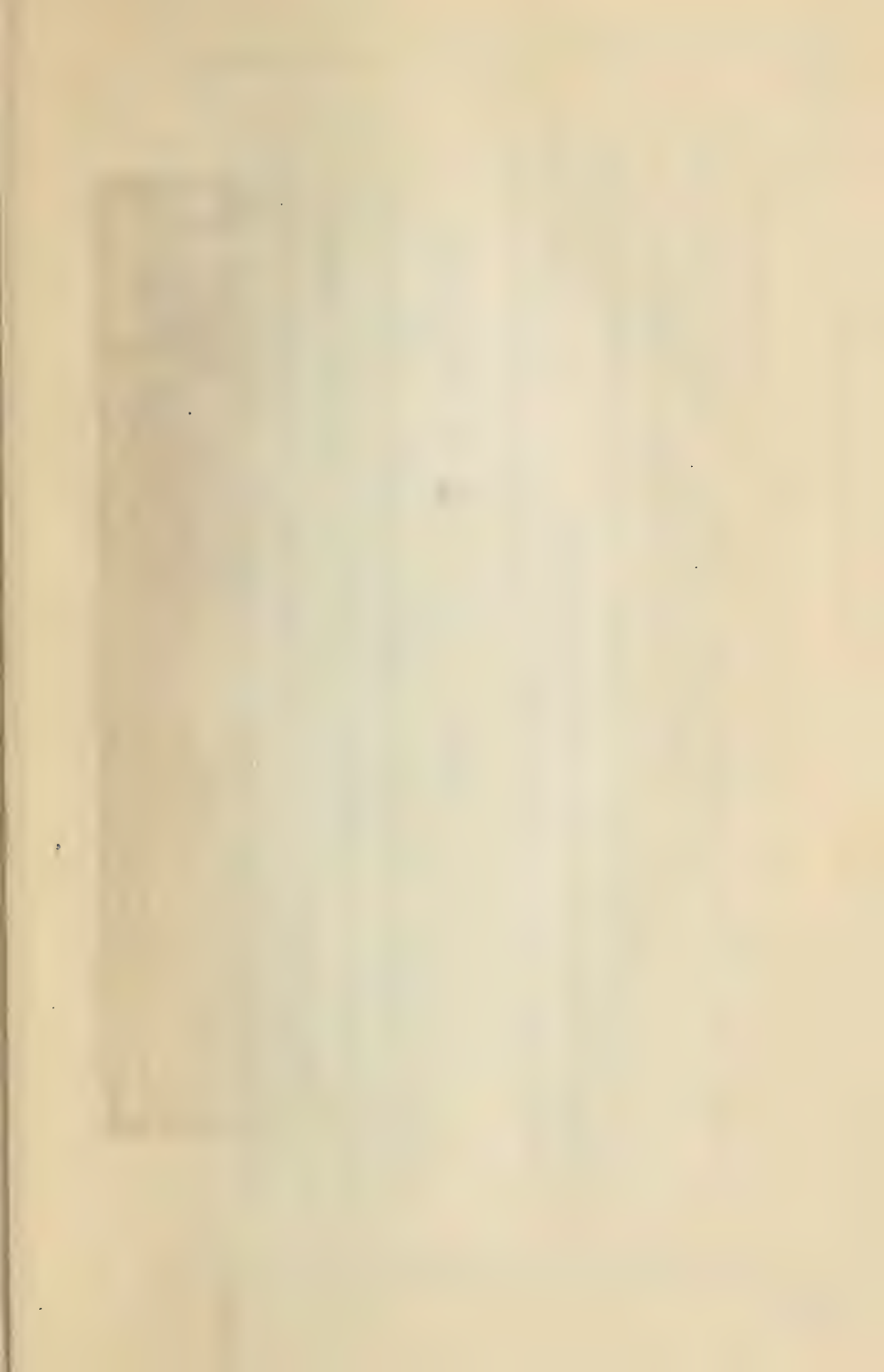
俳文集

俳文集解説

俳諧の心を以て書きしもの即ち俳文なりと申された芭蕉の俳文は、日記紀行の類を除きましても相當あります。是等を纂輯いたしたのが蝶夢の『芭蕉翁文集』であります。小林風德の『芭蕉文集』と申すものもありますが、蝶夢のものほど完備いたしません。本集には蝶夢のものを採錄いたし、尚漏れたのを拾ひ集めて補遺を編しました。

▽芭蕉翁文集　半紙本　二冊

安永五年に編したもので、文章紀行共三十九篇を收めてをります。當時としましてはよく努めたりであります。此三十九篇中本集の他の部門に於て、其原本と共に編入されますものは省略いたしました。『俳文俳句集』の『風俗文選』にあるものも亦除きました。豫定頁數の大超過を恐れるためであります。

「補遺」は諸書にあるもののうち、備ふべしと考へましたものを採りました。其出所は一々記して置きませう。

芭蕉翁文集
上

ある文章を論ぜし書に、文章は氣を以て主とし、氣は誠を以て主とすと。そもやこの國に誹諧體の句ありて、誹諧の文章なきにはあらざらめど、誹諧の文章といふ體格をつたへざるは、たゞ詞華言葉を翫ひて、文章に誠あることをしらざるものか。しかるに芭蕉翁は世にいふ誹諧の狂句を用ひず、もはらいにしへの俳諧を學びて、句ごとに誠を述給ひ、文章また同じく氣を以てしまことを以て書給へる故に、をのつから俳諧の文章の模範となれる物ならし。しかもその文體やすらかにして、かりにも奇語怪字なければ、あやし

の女童部までも讀て厭さる事たとはゞ飯の如し。世の文章は八珍のごとく、うましといへども常にくらはゞ厭ぬべし。飯は朝夕くらへどもあかず。これ八珍は奇味、飯は正味のいはれなりと、歐陽(修)が文章を稱したると同し。野衲もまたつねにこの翁の文章を誦て厭ず几の上におく。さればこの年ごろ蕉翁發句集俳諧集等の家の集を編けるに、文章なからではと、土芳が芭蕉文選をもとゝし、乙州が笈の小文史邦が小文庫許六か文選支考が文操文鑑のたぐひの諸書に散在せしを拾ひて、芭蕉翁文集と題してわが庵の

什物とせしを、筑前の蝶酔これを見て頻にこひ、板にえりて蕉翁の文章の不朽の盛事をあらはして、後の好士につたへんといふ。そのいたく風雅にすけるこゝろざしにめでゝあたふる。頃は安永五年の春正月人日

東山神楽岡崎の草庵にて、

蝶夢幻阿自序

目録

芭蕉翁文集巻上

松嶋の賦

(『風俗文選』にあり。『奥の細道』松島の記事を潤飾して此賦となせるが如し。依て省略す。)

既望の賦

(本集外篇『小文庫』にあり。依て省略す。)

烏の賦 (蕉門昔語)

(書簡集採錄加生宛の書簡によれば加生の文を添削して芭蕉のものとなせるが如し。)

一、烏小大有て名を異にす。小を烏鵲といひ、大を鸒太といふ。此鳥反哺の孝を讃して、鳥中の曾子に比す。或は人家に行人をつげ、天の川に翅をならべて二星の媒となれり。或は大年のやどりをしりて春風をさとり、巣を改むといへり。雪の曙の聲寒げに、夕に寝處へ行なんど、詩歌の才士も情あるに云なし、絵にも書れてかたちを愛す。只貪狢の中にいふ時は其徳大也。又汝が罪をかぞふる時は、其徳小にして害また大也。就中かの鸒太は性佞強惡にして、鷲の翅をあなどり、鷹の爪の利ことを恐れず。肉は鴻鴈の味もなく、聲は黄鳥の吟にも似ず。啼く時は人不正の氣を抱て、かならず凶事をひいて愁をむかふ。里にありては栗柿の梢をあらし、田野にありては田畑を費す。粮に辛苦の勞をしらずや。或は雀のかひこをつかみ、池の蛙を喰ふ。人の尸をまち、牛馬の膓をむさぼりて、終にいかの爲にいのちをあやまり、鵜の眞似をしてあやまりを傳ふ。是みな汝むさぼること大にして、其智を責さるあやまり也。汝が如き心貪欲にしてかたちを墨に染たる、人にありて賣僧といふ。釋氏もこれを憎み、俗士も甚うとむ。嗚呼汝 くつゝしめ、羿が矢先にかゝりて三足の金烏に罪せられんことを。

芭蕉を移す辭 (三日月日記)

菊は東籬にさかえ、竹は北窓の君となる。牡丹は紅白の是非ありて世塵にけがさる。荷葉は平地にたゝず、水清からされば花咲かず。いづれの年にや栖(すみか)を此境に移す時、芭蕉一もとを植ゆ。風土芭蕉の心にやかなひけむ、數株莖をそなへ、其葉茂りかさなりて庭を狭め、萱が軒端もかくるゝばかりなり。人呼て草庵の名とす。舊友門人ともに愛して、芽をかき根をわかちて、處々に送る事年々になむなりぬ。一とせみちのくの行脚思ひ立て、芭蕉庵すでに破れむとすれば、籬の隣に

地を替へて、あたりちかき人々に、霜の覆ひ風の圍ひなど頼み置て、はかなき筆のすさみにも書き殘し、松はひとりになりぬべきにやと、遠き旅宿の胸にたゝまり、人々のわかれ、芭蕉の名殘、ひとかたならぬ侘しさも、終に三とせの春秋を過して、ふたゝび芭蕉に涙をそゝぐ。今年五月の半、花たちばなのにほひもさすがに遠からざれば、人々の契りも昔にかはらず、猶此あたり得立ちさらで、舊き庵も稍近う、三間の茅屋つき／＼しう、杉の柱いと清げに削りなし、竹の枝折戸安らかに、葭垣厚うしわたし、南にむかひ池にのぞみて水樓（樓ナラン）となす。地は富士に對して、柴門景をすゝめてなゝめなり。浙江の潮、三股の淀にたゝへて月を見る便よろしければ、初月の夕より雲をいとひ雨をくるしむ。名月のよそほひにとて先づ芭蕉を移す。その葉廣うして琴をおほふに足れり。或は半吹折れて鳳鳥の尾をいたましめ、青扇破れて風を悲しむ。たま／＼花咲もはなやかならず。莖太けれども斧にあたらず。かの山中不材の類木にたぐへて其性よし。僧懐素はこれに筆をはしらしめ、張横渠は新葉を見て修學の力とせしとなり。予其二つをとらず、唯此陰にあそびて風雨に破れやすきを愛す。

徒然の詞

小督塚の辭

（此二章は『嵯峨日記』の文段を引抜きて獨立の文章となせるもの也。依て省略す。）

柴門の辭

許六に離別の辭

（此二章は外篇（續集）にある「許六離別詞」「其詞」の二と同じ。依て省略す。）

僧專吟餞別之辭　（句選拾遺）

杖頭に草鞋をかけて、笠のうちに名をあらはす。元祿六年やよひのはじめ、僧專吟武江の東深川の草扉をひらいて、旣に一歩をはじむと告ぬ。此僧常に風雅をこのみ、市を避て年／＼斗藪行脚の身となる。ことし又伊勢熊野に詣んとて、身は雲外の鶴にひとしく、ながれに笻をすゝぎ、千尋の岡に翅をふるふて、野にふし雲に消らん胸中の塵いさぎよし。予葎の交りをなすこと久し。今此わかれに望（臨）て、ともに岸上に立て、箱根山はるかに見やる。かの白雲のたはめる所こそ、旅愁の嶮難さかしきちまた成べけれ。君かならず首をめぐらして見よ。我また岸上に立んと云て袂をわかちぬ。

鶴の毛の黒き衣や花の雲

笠張の説　（和漢文操）

（文操には「蓑笠銘」とあり。）

草扉にひとりわびて秋風さびしき折々、竹取のたくみにならひ、妙觀が刀をかり

て、みづから竹をわり竹を削て、笠つくりの翁となのる。心しづかならざれば日を經るに物うく、巧(工ヵ)みつたなければ夜をつくしてならず。あしたに紙をかさね、夕にほして又かさね／＼て、澁といふものをもて色をさはし、ます／＼かたからん事をおもふ。廿日過る程にこそやゝいできにけれ。其かたちうらのかたにまき入、外さまに吹かへりなど、荷葉のなかばひらくるに似て、中／＼おかしき姿なり。さらばすみかねのいみじからんより、ゆがみながらに愛しつべし。西行法師のふじみ笠か、東坡居士が雪見笠か。宮城野の露に供つれねば、呉天の雪に杖をやひかむ。霰にさそひ時雨にかたぶけ、そぞろにめでゝ殊に興ず。興のうちにして俄に感ずる事あり。ふたゝび宗祇の時雨ならでも、かりのやどりに袂をうるほして、みづから笠のうらに書つけ侍る。

世にふるはさらに宗祇のやどり哉

煤掃の說

閉關の說

栖去の辭

(以上三章は『小文庫』にあり。依て省略す。)

夢の辨

(『嵯峨日記』杜國を夢みし一段なり。依て省略す。)

曠野集の序

(本集外篇『曠野』俳文俳句集『風俗文選』にあり。依て省略す。)

銀河の序

(『風俗文選』にあり。依て省略す。)

續原集跋

(本集評語集『續の原』にあり。依て省略す。)

伊勢紀行の跋 (伊勢紀行)

ねなし草の花もなく、實もみのらず、たゞ賤しき口にいひのゝしれるたはぶれごとの世なるを、其角一とせ都の空に旅寐せしころ、向井氏去來のぬしむつまじきちぎりありて、酒のみ茶にかたる折／＼、甘き辛きしぶき淡き心の水の淺きより深きを傳へて、終に一掬して百川の味ひをしれるなるべし。今年の秋いもうとをゐて伊勢に詣づ。白川の秋風よりかの濱荻の聲を聞て、とまり／＼のあはれなる事どもかたはし書あらはして、わが草の戸の案下にをくる。一たび吟じて感を起し、ふたゝび誦して感をわする、三度よみて其無事なることを覺ふ。此人やこの道に至れり盡せり。

東にしあはれさひとつ秋の風

十八樓の記

(右二章は『風俗文選』にあり。依て省略す。)

壺碑文の記

紙衾の記 （和漢文操）

古き枕古きふすまは、貴妃がかたみより傳へて、戀といひ、哀傷とす。錦床の夜のしとねの上には鴛鴦をぬひ物にして、ふたつの翼に後の世をかこつ。彼はその膚にちかく、其にほひ残りとゞまれらむをや。戀の一物とせん、むべなりけらし。いでや此紙のふすまは戀にもあらず、無常にも非ず、蜑の苫屋の蚤をいとひ、驛のはにふのいぶせさを思ひて、出羽國最上といふ處にて、或人の作り得させたる也。越路の浦〻　山館野亭の枕の上には、二千里の外の月をやどし、蓬葎の敷寐の下には、霜にさむしろのきりぎりすを聞て、晝はたゝみて背中に負ひ、三百餘里の嶮難をわたり、終に頭を白くして、美濃の國大垣の府に至る。猶も心のわびをつぎて、貧者の情をやぶる事なかれと、我をしたふ者にうちくれぬ。

幻住菴の記

（本集外篇『猿蓑』及俳文俳句集の『風俗文選』にあり。依て省略。尚「幻住庵賦」と稱するもの『和漢文操』にあり。草按の一か。）

酒落堂の記 （白馬集）

山は靜にして性をやしなひ、水はうごひて情を慰む。靜動二の間にして住家を得るものあり。濱田氏珍夕といへり。目に佳境を盡し、口に風雅を唱へて、濁りをすまし塵をあらふが故に酒落堂といふ。門に戒幡を懸て、分別の門内に入る事をゆるさずと書けり。かの宗鑑が客にをしゆるざれ歌に一等くはへておかし。且それ簡にして方丈なるもの二間、休紹二子の侘をつぎて、しかもそののりをみず。木を植、石をならべてかりのたはぶれとなす。抑おものゝ浦は勢多唐崎を左右の袖のごとくし、湖を抱て三上山にむかふ。海は琵琶のかたちに似たれば、松のひゞき波をしらぶ。日枝の山比良の高根をなゝめに見て、音羽石山を肩のあたりになん置り。長等の花を髪にかざして、鏡山は月をよそふ。淡粧濃抹の日〻にかはれるが如し。心匠の風雲もまたこれにならふ成べし。

四方より花吹入て鳰のうみ

芭蕉翁文集巻下

甲子吟行

鹿島紀行

卯辰紀行

更級記行

（右四篇は本集紀行集に收めたり。依て省略す。）

石臼の頌

（「小文庫」幷に「風俗文選」にあり。「不猫蛇」に越人の記す所によれば、此文は越人の作を芭蕉が添削浄書せしものを、支考が芭蕉のものと誤認せしなりといふ。）

雲竹の讃（出自未考）

洛の桑門雲竹自の像にやあらん、あなたの方に顔ふりむけたる法師を畫て、これに讃せよと申されければ、君は六十年あまり、予は既に五十にちかし。ともに夢中にして、夢の形をあらはす是にくはふるに寐言を以す。

こちらむけ我もさびしき秋のくれ

杵折の賛（句選拾遺）

此杵の折れと名付るものは、上つかたにてめでさせたまひ、目出度扶桑の奇物となれり。汝いづれの山より生出て、何國の里の賤が砧のかたみなるぞや。むかし

は横槌たり。今は花入と呼て、貴人頭上の具に名を改といへり。人またかくのごとし。髙きにゐて驕べからず、ひきゝに在てうらむべからず。たゞ世中は横槌なるべし。

この槌のむかし椿か梅の木歟

卒都婆小町の賛（本朝文鑑）

あなたふと〳〵、蓑もたふとし、笠もたふとし。いづれの人かかたりつたへ、いかなる人か寫しとゞめて、千歳のまぼろし今こゝに現す。そのかたちある時はたましひもまた爰にあらむ。蓑もたふとし、笠もたふとし。

西行上人の讃

（右「小文庫」幷に「風俗文選」にあり。依て省略す。）

たふとさや雪ふらぬ日も蓑と笠

閑居の箴（本朝文鑑）

あら物ぐさの翁や、日頃は人のとひ來る

もうろさく、人にもまみえじ、人をもまねかじと、あまたゝび心にちかふなれど、月の夜雪の朝のみ友のしたはるゝもわりなしや。物をもいはず、ひとり酒のみて、心にとひ、心にかたる。庵の戸をしあけて雪をながめ、または盃をとりて筆をそめ筆をすつ。あら物ぐるほしの翁や

　酒のめばいとど寝られぬ夜の雪

自得の箴（出自未考）

もろふてくらひ、こふて喰ひ、飢寒わづかにのがれて、

　目出度人の數にも入らん年の暮

机の銘

座右の銘

東順の傳

古戰場を吊ふの文

嵐蘭の誄

（右五篇共に『風俗文選』にあり。依て省略す。「机銘」は本集外篇「小文庫」にも編入せり。）

このころ都のたよりにこの二冊の草紙をくらる。これなん世にいふ芭蕉翁の文集なりと。つらつら讀に、そのはじめ賦よりをこりて誄にをはるまで三十九篇、もろこしの文選の例にならへて載す。まことに祖翁の文集と仰べく、この道の好士の眞寶なるべし。しかるに邊鄙の人の寫し得る事のかたからん事をおもひ、いさゝか彫工に賃をつぐのひて、此文集を梓にちりばめて、あまねく都鄙の友の見んことをねがふも、此道に遊ぶの冥加をおもふといふべしや。

筑前福岡　五竹庵のあるじ

蝶　醉　書　之

蕉門俳諧書林

江戸

山　崎　金　兵　衞

井　筒　屋　庄　兵　衞　合　梓

橘　屋　治　兵　衞

俳文集補遺

補遺

瓢之銘（隨齋諧話）

一瓢重黛山　白咲稱箕山　山素堂
草慣首陽餓　這中飯顆山

顏公のかきほに生えるかたみにもあらず、惠子がつたふ種にしもあらで、我にひとつのひさごあり。是をたくみにつけて、花入る器にせんとすれば、大にしてのりにあたらず。さゝえにつくりて酒をもらんとすれば、かたち見る處なし。ある人の曰。草庵のいみじき糧入つべきものなりと。まことによもぎの心あるかな。やがて用ひて隱士素翁に乞てこれが名をえさしむ。其言葉は右に記す。其句みな山をもておくらるゝが故に四山とよぶ。中にも飯顆山は老杜が住める地にして、李白がたはぶれの句あり。素翁李白にかはりて我貧をきよくせんとす。かつむなしき時はちりの器となれ、得る時は一壺も千金をいだきて、黛山もかろしとせんことしかり。

物ひとつ瓢はかろきわが世かな

芭蕉桃靑書

白髮吟（和漢文操）

たよりも文月の玉まつる頃、武陵より古里に歸るに、二十とせの月日も夢なれや。北堂の萱草も霜がれて、今は其おもかげだになかりしが、何ごともむかしに立かはりて、はらからの鬢しろく眉しわみて。つれなきいのちありとのみ、いひ出る言の葉もなきに、兄の守袋をほどきて、母の白髮をがめよ、浦しまがこの玉手箱、汝が眉もやゝ老たりと、年月のをこたりはかたみに泣つゝ、

手にとらば消ん淚ぞあつき秋の霜

蓑虫跋（一葉集）

（「風俗文選」に素堂の「蓑虫の說」あり。それに對して此文ありしなれば、素堂の文を併せ見るをよしとす。）

草の戸さしこめて物わびしき折しも、たま／＼みの虫の一句をいふ。我友素翁甚あはれがりて詩を題し文字をつらぬ。其詩やにしきをぬひものにし、其文や玉をまろばすがごとし。つら／＼見れば離騷のたくみあるに似たり。また蘇新黃奇あり。はじめに虞舜曾參の孝をいへるは、人にをしへをとれと也。其無能を感ずる事は、ふたゝび南華の心を見よと也。終に玉虫のたはれは色をいさめんとならし。翁にあらずば誰か此蟲の心をしらむ。靜に見れば物みな自得すといへり。此人によりて此句をしる。むかしより筆をもてあそぶ人、おほくは花にふけりて實をそこなひ、實をこのみて風流を忘る。此文やはた其花を愛すべし。其實なほくらひ

つべし。爰に何某朝湖と云あり。此事を傳聞てこれを畫く。まことに丹青淡くして情こまやかなり。心をとゞむれば虫うごくがごとく、黄葉落るかとうたがふ。耳をたれて是をきけば、其むし聲をなして、秋の風そよ〳〵と寒し。猶閑窓に閑を得、兩士の幸にあづかること、みのむしのめいぼくあるに似たり。

歳　暮（千鳥掛）

代々の賢き人々も、古里はわすれがたきものにおぼえ侍るよし。我今ははじめの老も四とせを過て、何事につけても昔のなつかしきまゝに、はらからのあまた齡かたぶきて侍るも見捨がたく、初冬の空のうちしぐるゝ頃より、雪をかさね霜を經て、師走の末伊陽の山中に至る。猶父母のいまそかりせばと、慈愛のむかしも悲しく、思ふことのみあまた有て、

　古さとや臍の緒に泣く年のくれ

伊賀新大佛之記（小文庫）

（外篇にあるにより省略す。）

夏の須磨（芭蕉翁眞蹟集）

卯月の中頃須磨の浦一見す。うしろの山は青葉にうるはしく、月いまだ朧にて春の名殘も哀ながら、只此浦のまことは秋を宗とすることにや。心に物のたらぬけしきあれば、

　夏はあれど留主のやうなり須磨の月

鵜　飼（芭蕉翁眞蹟集拾遺）

（原本標題なし。今假りに設く。）

ぎふの庄ながら川のうがひとて、よにこと〳〵しう言ひのゝしる。まことや其興人のかたり傳ふるにたがはず、淺智短才の筆にもことばにも盡べきにあらず。心しれらん人に見せばやなど言て、やみぢにかへる此身の名ごりをしさをいかにせむ。

　おもしろうてやがて悲しき鵜舟哉

與或人文（一葉集）

大和國長尾の里といふ處は、さすがに都遠きにあらず、山里にして山ざとにあらず。あるじ心あるさまにて、老たる母のおはしけるを、其家のかたへにしつらひ、庭前に木草のをかしげなるを栽置て、岩尾めづらかにすゑなし、手づから枝をため石を撫ては、蓬萊の島ともなりぬ。いく藥とりてんよと老母につかへ、なぐさめなどせし賢ありけり。家まづしくして孝をあらはすとこそ聞なれ。まづしからずして孝を盡す。古人もかたきことになんいひける。

　冬しらぬ宿や籾する音あられ

山中の湯（芭蕉翁眞蹟拾遺）

（原本標題なし。今假に設く。）

北海の磯づたひして加州山中の涌湯に浴す。さと人のいはく。此處は扶桑三の名湯の其一なりと。誠に浴すること しば

〱なれば、皮肉うるほひ筋骨に通りて、神心ゆるくひとへに顔色をとゞむる心地す。かの桃源も船をうしなひ、慈童の菊の枝折もしらず。

やまなかや菊は手折らじ湯の匂ひ

成秀が庭上の松をほむる詞
（堅田集）

松あり。高さ九尺ばかり、下枝さし出るもの一丈餘、枝上だんをかさね、其葉森々とこまやか也。風琴をあやどり、雨をよび、波を起す。箏に似、笛に似、鼓に似て、浪天籟をとく。當時牡丹を愛する人、奇出をあつめて他にほこり、菊を作れる人は、小輪を咲つて人にあらそふ。柿木柑類は其實を見て枝葉のかたちをいはず。唯松ひとり霜後に秀、四時常盤にしてしかも其けしきをわかつ。樂天曰。松よく舊氣を吐く、故に千歳を經と。主人目をよろこばしめ、心を慰するのみにあらず。長生保養の氣を知て、齢を松に契るなるべし。

元祿四年仲秋日

吊初秋七日雨星文（小文庫）
（外篇にあるにより省略す。）

歌仙讃（風徳編芭蕉文集）
（伊豫の井海が「雪しやれて翁閑(さび)けん芭蕉洞」といふ句にて一巻を送りしに對するものと云。）

伊豫國松山の嵐、ばせをの洞の枯葉を吹て、其壁歌仙を吟ず。颼寥々刀々たる風の音、玉をならし、金鐵のひゞき、或はつよく或は和らかに吹て、且人をして泣しめ、人に心をつく。萬竅怒號ひゞき嚔て、句毎の意味各別也。只これ天籟自然の作者。芭蕉は破れて風飄々。

贈風弦子號（芙蓉文集）

風弦は琴にあらず、瑟にあらず、彈に爪を用ひず柱を立ず、天籟の禮をよく調へて、宮商角徵羽の音に落ず。

畫讃（水の友）

かさ着て馬に乘たる坊主は、いづれの境より出て何をむさぼりありくるや。このぬしのいへる、是は予が旅のすがたを寫せりとかや。さればこそ三界流浪のもゝ尻、おちてあやまちすることなかれ。

芭蕉翁

馬ほく〱我を繪に見る夏野哉（水の友）

行脚掟（「雪の薄」「俳諧袋」）
（芭蕉のものにあらさるべしとの異説あれども、採錄したり。）

一、一宿なすとも、ゆへなき所に再宿すべからず。樹下石上に臥(ふす)とも、あたゝめたる莚とおもふべし。

一、腰に寸鐵たりとも帶すべからず。惣てもの〻命を取事なかれ。君父の仇ある所には、門外にも遊べからず。いたゞき、ふまぬ、忍びざる情あればなり。（一葉集「君父」以下を別項とす。）

一、衣類器財相應にすべし。過たるもよからず。足ざるもしからず。程あるべし。

一、魚鳥獸の肉を好で喰べからず。美食珍味にふける人は他事にふれ安きなり。菜根を咬で百事をなすべき語を思ふべし。

一、人の求なきに己が句を出すべからず。望を背くもしからず。

一、たとへ嶮岨の境たりとも所勞の念を起すべからず。おこらば中途より歸るべし。

一、ゆへなきに馬駕籠に乘事なかれ。一枝を己が痩脚とおもふべし。

一、好んで酒を呑むべからず。饗應により固辭しがたくば、微醺にして止むべし。亂に及ばずのいましめあり。祭にもろみを用るも、醉るを憎で也。酒に遠ざかるの訓あり。愼や。

一、船錢茶代を忘るべからず。

一、俳諧の外雜話すべからず。雜話出なば居眠して勞を養ふべし。

一、他の短を擧て己が長を顯す事なかれ。人を誘て己にほこる、甚いやしきなり。

一、女性の俳友にしたしむべからず。師にも弟子にもいらぬ事なり。此道に親炙せば、人を以て傳ふべし。惣じて男女の道は嗣を立るのみなり。流蕩すれば心懸一ならず。此道は主一無適にして成就す。己を省るべし。

一、主あるものは一枝一草たりとも取べからず。山川江河にも主あり。勤よや。

山川舊跡みだりに名をあらたに付る事なかれ。

一、一字の師恩たりとも忘るゝことなかれ。一句の理をだに解せず、人の師となる事なかれ。人におしゆるは己をなして後の事なり。

一、一宿一飯の主もおろそかに思ふべからず。さりとて又媚諂ふ事なかれ。如此の人は世の奴なり。此道の人は此道に遊人と交るべし。

一、夕べをおもひ旦を思ふべし。旦暮の行脚といふ事好ざる事なり。人に勞をかくる事なかれ。しば〳〵すれば疎んぜらるゝの言をおもふべし。將飢食たりともこのむべからず。

右の條々我門の行脚は可愼者也　桃青

祖翁口訣　（「雪の薄」）

（此「祖翁口訣」多少の疑問あれど、乙由の子麥浪の藏せる筆記を、其門人たる信濃の眠郞が寫し置きたりしを、「雪の薄」に收めしものなれば、其傳來に對して敬意を表して採錄したり。「一葉集」所載のものとは文字異同あり。）

一、格に入て格を出ざる時はせばく、格に入ざる時は邪路にはしる。格に入、格を出て、初て自在を得べし。

一、詩歌文章を味て、心を向上の一路に遊び、作を四海にめぐらすべし。

一、千歳不易。一時流行。

一、他門の句は彩色のごとし。我門の句は墨繪のごとくにすべし。折にふれては彩色なきにしもあらず。心他門にかわりて、さびしをりを第一とす。

一、名人は地をよく調しうへに、折にふれては危き處に妙有。上手はつよき所におもしろみあり。

一、等類作例第一に吟味すべし。

一、古書撰集に眼をさらすべし。

一、我門の風流を學輩は、先鶴の歩行の百韻・冬の日・春の日・瓢集・炭俵・猿蓑・あら野を熟覽すべし。發句は時代々々をわかつべし。

一、初心のうちは句數を好べし。それより姿情をわかち、大山を越て向の麓へ下りたる所を案ずべし。六尺を越んとほつするものは、まさに七尺を望べし。されど心高き時は邪路に入やすく、心ひくき時は古人の胸中を知る事あたはず。

一、俳諧は中より以下のものとあやまれるは、俗談平話とのみ覺へたるゆへなり。俗談平和をたゞさんがためなり。つたなき事ばかりいふが俳諧と覺得るは淺ましき也。俳諧は萬葉の意なり。されば上天子より下士民までも味ふ道なり。唐明すべて中華の豪傑にも恥る事なし。唯心のいやしきをはじとす。

一、手爾於葉專要たり。我國は手爾於葉の第一の國なれば、先哲の作を味ひ、一字も麁末なる事なかれ。

一、句の姿は青柳の小雨にたれたるごとくにして、折々微風にあやなすもあしからず。情は心裏の花をもたづね、眞如の月を觀ずべし。附心は薄月夜に梅の薫へるがごとくありたし。

末略。

補遺　終

紀行集

紀行集解説

行脚抖擻の困苦に堪へて、徐ろに其心を練りました芭蕉の紀行は實に尊むべきものであります。其筆致が紀行の一新境地を拓きました點ばかりでも、優に國文壇上に濶歩するの資格があるのであります。幸に其紀行の全部が傳はつてをります事は、芭蕉研究者にとりまして幸慶之至であります。

▽甲子吟行

貞享元年の秋から翌年四月までの紀行であります。これが板本になりましたのは「芭蕉翁道の紀」と題して、元祿十一年に風國が其『泊船集』卷之一に編入いたしたのを嚆矢といたします。明和五年には『野ざらし紀行』の名で上梓され、安永九年には芭蕉眞蹟本の臨寫本が永嘉亭波靜により、『甲子吟行』の名で上梓されました。其眞蹟本は曾良の手から木曾の贄川家に傳來したものださうであります。私は『泊船集』のものを採り、波靜のもの及び蝶夢編の『芭蕉翁文集』中のものを參考いたしました。

▽鹿　島　紀　行

貞享四年曾良宗波を伴ひまして鹿島に遊びました紀行でありまして、『鹿島紀行』『鹿島詣』などの名で二三の板本もあり、又蝶夢編の文集にも編入されてをるのであります。其中寶暦板のものにより、他書を以て校訂いたしました。

▽笈　の　小　文

貞享四年十月から翌元祿元年四月までの紀行であります。一に「卯辰紀行」と申し、又「芳野紀行」とも稱します。寶永六年乙州の上梓いたしましたものが、板本としての一番古いものであります。幸に其開板本を得まして校訂編入いたしました。

▽更　級　紀　行

元祿元年芭蕉が名古屋方面から江戸へ歸りますとき、信濃路を經て姨捨の月を賞しました記事で、前項の『笈の小文』に附載されてをるものであります。序ながら編者乙

州の略傳を記しませう。曰人の『蕉門諸生全傳』に

江州大津の人、智月尼の子也（弟後子トナル）父佐右衛門病死の後も問屋役をうけつぐ也。

と記し、其下に「孤峯來書」と附記してあります。川井氏、栰々庵と號してをりました。『それ〳〵草』の編著があります。正徳頃歿したのでありませうが、歿時享年共に不明であります。

▽奥の細道

元祿二年東北北越大旅行の時の紀行でありまして、其行文の妙、情懐の幽、共に秀でたるものとして推奬さるゝ所のものであります。芭蕉の心境に一轉機を劃しました此大旅行の紀行は、精讀味讀すべきものであります。芭蕉歿後京の井筒屋が、稿本原寸大の特殊型で出しましたものを桝形本と申します。明和七年に蝶夢法師は素龍の跋と去來の奥書とを加へて再刻いたしました。私は蝶夢の桝形本によりました。參考として井筒屋初板のときの奥書を記しませう。

此一書は芭蕉翁奥羽の紀行にして、素龍か筆也。書の縦五寸五歩、横四寸七歩、紙の重五十三、首尾に白紙を加ふ。外に素龍が跋有。今略之行成紙の表紙、紫の糸、外題は金の眞砂ちらしたる白地に、おくのほそ道と自筆に書て、随身し給ふ。遷化の後門人去來か許に有。又眞蹟の書門人野坡の許に有。草稿の書故、文章所ゝ相違す。今去來か本を以て、摸寫する者也。

▽嵯峨日記

元祿四年の初夏を、芭蕉は去來の落柿舍に籠居いたしました。其時の日記が即ち此『嵯峨日記』であります。寶暦三年に大和郡山の魯玉が上梓いたしたものがあるさうでありますが私は未だ寓目するを得ません。『一葉集』は何から採りましたのですか不明でありますが、只今一般には之を準據といたしてをるのであります。明治四十五年城田倒止氏が覆刻されました卷物の此書があります。城田氏は翁蕉の眞蹟と認められましたのでありますが、臨摸したものであらうとの說もあります。又勝峰晋風氏は先年それと殆んど同じ卷物を伊賀上野の友忠旅館で見たと申されます。大正十五年

雨田會（宇治水電會社關係ヵ）の柴田筍浦氏が發行されましたものは、伊賀國上野町の曾我忠兵衛氏所藏の眞筆嵯峨日記によつたものださうであります。勝峰氏の申す所のものと同一物のやうにもおもはれるのであります。此城田本は流布のものと多少の異同がありまして、おの〳〵一長一短でありますが、私はおもふ所がありまして此城田本を採錄いたしたのであります。日記を紀行集へ編入いたすのはいかゞかとも考へましたが、日記は旅行せぬ紀行、紀行は一種の日記とも考へられるのでありますから、此部門へ加へたのであります。

夏草や
兵共が
夢の跡
ばせを翁

甲子吟行

千里に旅立て路糧をつゝまず、三更月下無何入といひけん、むかしの人の杖にすがりて、貞享甲子秋八月、江上の破屋をいづる程、風の聲そゞろさむげなり。

野ざらしをこゝろに風のしむ身かな

秋十とせ却て江戸を指ス古郷

關こえる日は、雨降て山みな雲にかくれけり。

霧時雨不二を見ぬ日ぞおもしろき

何がしチリと云けるは、此たび道のたすけとなりて、萬いたはり心をつくし侍る。常に莫逆のまじはり深く、朋友に信有哉此人。

深川や芭蕉を不二にあづけゆく　チリ

不盡川のほとりをゆくに、三ばかりなる捨子のあはれげに泣あり。此川の早瀬にかけて、浮世の波をしのぐにたえず、露ばかりの命まつ間と捨置けん、小萩がもとの秋の風、こよひやちるらん、あすやしほれんと、袂よりくひ物なげて通るに、

猿を聞人捨子に秋の風いかに

いかにぞや、汝父に憎れたるか、母にうとまれたるか、父は汝を憎むにあらじ、母は汝をうとむにあらじ、只これ天にして、汝が性のつたなきをなけ。

大井川をこえる日は、終日雨ふりければ、

秋の日の雨江戸にゆび折ん大井川　チリ

眼前(一本「馬上の吟」とあり。)

道の邊の木槿は馬に喰れけり

廿日あまりの月かすかに見えて、山の根際いとくらきに、馬上に鞭をたれて、數里いまだ雞鳴ならず。杜牧が早行の殘夢、小夜の中山に至て忽驚く。

馬に寐て殘夢月遠し茶の烟

松葉屋風瀑が伊勢にありけるを尋ねおとづれて、十日ばかり足をとゞむ。腰間に寸鐵を帶ず、襟に一嚢をかけて、手に十八の珠をたづさふ。僧に似て塵あり、俗に似て髮なし。我僧にあらずといへども、髮なきものは浮屠の屬にたぐへて、神前に入ことをゆるさず。(「泊船集」は「腰間」よりこゝまでの一段を「三十日月なし」の句の次に記せり。) 暮て外宮に詣侍りけるに、一の鳥居のかげほのくらく、御燈處／＼に見えて、また上もなき峰の松風身にしむばかり、深き心をおこして、

三十日月なし千とせの杉を抱嵐。

西行谷の麓にながれあり。女どものいも洗ふを見るに、

芋あらふ女西行ならば歌よまん

其日の歸るさ、ある茶屋に立よりけるに、蝶と云ける女、あが名に發句せよといひて、しろき絹出しけるに書つけ侍る。

蘭の香や蝶のつばさに薫（タキモノ）す

閑人の茅舎を訪て、

蔦植て竹四五本の嵐かな

長月のはじめ、故郷に歸て、北堂の萱草も霜がれ果て、跡だになし。何事もむかしにかはりて、はらからの鬢白く眉皺よりて、只命有てとのみいひて、ことの葉もなきに、兄（コノカミ）の守袋をほどきて、母の白髪おがめよ、浦島が子の玉手箱、汝が眉もやゝ老たりとしばらく泣て、

手にとらば消ん涙ぞあつき秋の霜

大和國に行脚して、葛下郡竹の内と云所に至る。此所は例のちりが舊里なれば、日頃とゞまりて足を休む。

藪より奥に家有

綿弓や琵琶になぐさむ竹の奥

二上山當麻寺に詣て、庭上の松を見るに、およそ千とせも經たるならん、大さ牛を隠すとも云べけん。かれ非情といへども、佛縁にひかれて斧斤の罪をまぬかれたるぞ、幸にして尊し。

僧朝がほいく死かへる法の松

ひとり芳野のおくにたどりけるに、まことに山深く、白雲峰に重り、煙雨谷を埋て、山賤の家處〳〵にちひさく、西に木を伐音東にひゞき、院〳〵の鐘の聲は心の底にこたふ。昔より此山に入て世をわすれたる人の、おほくは詩にのがれ歌にかくる。いでや唐土の廬山といはんもまたむべならずや。

ある坊に一夜をかりて

砧打て我に聞せよや坊が妻

西上人の草の庵の跡は、おくの院より右の方二丁ばかりわけ入ほど、柴人のかよふ道のみわづかにありて、さかしき谷を隔たる、いと尊し。かのとく〳〵の淸水はむかしにかはらずと見えて、今もとく〳〵と雫落ける。

露とく〳〵こゝろみに浮世すゝがばや

もしこれ扶桑に伯夷あらば、必口をすゝがん。もし是許由に告ば、耳を洗ん。山をのぼり坂を下るに、秋の日既になゝめになれば、名ある處〳〵見殘して、先後醍醐帝の御陵を拜む。

御廟年を經てしのぶは何をしのぶ草

大和より山城を經て、近江路に入て、美濃に至る。います山中を過て、いにしへ常盤の墳あり。伊勢の守武が云ける、義朝殿に似たる秋風とは、いづれの處か似たりけむ。我もまた、

義朝のこゝろに似たりあきの風

不破

秋風や藪もはたけも不破の關

大垣に泊りける夜は、木因が家を主とす。むさし野を出る時、野ざらしを心に思ひて旅立ければ、

死もせぬ旅ねのはてよ秋のくれ

桑名本當寺にて、
　冬牡丹千鳥よ雪のほとゝぎす
草の枕に寢倦て、まだほのぐらき中に濱の方に出て、
　あけぼのやしら魚白き事一寸
熱田に詣づ。社頭大に破れ、築地はたふれて草むらにかくる。かしこに繩を張て小社の跡をしるし、こゝに石をすゑて其神と名のる。蓬しのぶ心のまゝに生たるぞ、なか／＼にめで度よりも心止りける。
　しのぶさへ枯て餅かふやどりかな
名護屋に入道のほど諷吟す。
　狂句木がらしの身は竹齋に似たる哉
　草枕犬もしぐるゝかよるの聲
雪見にありきて、
　市人よこの笠賣う雪の笠
旅人を見る。
　馬をさへながむる雪のあしたかな
海邊に日をくらして、
　海暮て鴨の聲ほのかに白し
こゝに草鞋をとき、かしこに杖を捨て、旅寢ながらに年の暮ければ、
　年くれぬ笠きて草鞋はきながら
といひ／＼も山家に年をこえて、
　誰聟ぞ齒朶に餅おふ丑のとし
奈良に出る道のほど、
　春なれや名もなき山の朝がすみ
二月堂に籠て、
　水取や氷の僧の沓のおと
京に上りて三井秋風が鳴瀧の山家を訪。
　梅林
　うめ白しきのふや鶴をぬすまれし
　樫の木の花にかまはぬすがたかな
伏見西岸寺任口上人に逢て、
　我衣に伏見の桃の雫せよ
大津に出る道、山路をこえて、
　山路來て何やらゆかしすみれ草
　湖水眺望
　からさきの松は花より朧にて
晝のやすらひとて旅店に腰をかけて、
　つゝじいけて其かげに干鱈さく女
　吟行
　菜ばたけに花見がほなるすゞめかな
水口にて廿年を經し古人に逢。
　命ふたつの中に活たる櫻かな
伊豆國蛭が小島の桑門、これも去年の秋より行脚しけるに、我名を聞て草の枕の道づれにもと、尾張國まで跡をしたひ來りければ、
　いざともに穗麥くらはん草枕
此僧我に告て云、圓覺寺の大顚和尙、ことしむ月のはじめ遷化し給ふよし。まことや夢の心地せらるゝに、まづ道より其角が方へ申つかはしける。
　梅戀て卯の花をがむなみだかな
　贈杜國

白げしに羽もぐ蝶のかたみ哉

こたび桐葉子が許にありて、今や吾妻に下らんとするに、

牡丹蘂深くわけ出る蜂の名殘哉

甲斐の山中に立よりて、

ゆく駒の麥になぐさむ舍りかな

卯月の末庵に歸り、旅の勞をはらすほどに、

夏衣いまだしらみを取盡さず

後へに處々酬和の句

素堂の跋あり。今畧之。

鹿島紀行

洛の貞室、須磨の浦の月見にゆきて、

松かげや月は三五夜中納言

と云けん、狂夫のむかしもなつかしきまゝに、此秋かしまの山の月見んと思ひ立ことあり。伴ふ人ふたり、浪客の士ひとり、一人は水雲の僧。々はからすのごとくなる墨の衣に、三衣の袋を衿に打かけ、出山の尊像を厨子にあがめ入てうしろにせおひ、柱杖引ならして無門の關もさはるものなく、あめつちに獨歩して出ぬ。今ひとりは僧にもあらず俗にもあらず、鳥鼠の間に名をかうぶりの鳥なき島にもわたりぬべく、門より舟にのりて行徳と云處に至る。舟をあがれば、馬にものらず細脛のちからをためさんと、かちよりぞゆく。甲斐國より或人のえさせたるひの木もてつくれる笠を、おの〳〵いたゞきよそひて、やはたと云里を過れば、かまかいが原と云ひろき野あり。秦甸の一千里とかや、目もはるかに見わたさるゝ。筑波山むかふに高く、二峰並び立り。かの唐土に双劍のみねありと聞えしは、盧山の一隅なり。

雪は申さずまづむらさきのつくば哉

と詠しは、我門人嵐雪が句なり。すべて此山は日本武尊のことばをつたへて、連歌する人のはじめにも名付たり。和歌なくば有べからず、句なくば過べからず。まことに愛すべき山のすがたなりけらし。萩は錦を地にしけらんやうにて、爲仲が長櫃に折入て、都のつとに持せたるも、風流にくからず。きちかう女郎花かるかや尾花みだれあひて、小男鹿のつまこひわたる、いとあはれ也。野の駒處えがほにむれありく、又あはれ也。日既に暮かゝるほどに、利根川のほとりふさと言處につく。此川にて鮭のあじろと云ものをたくみて、武江の市にひさぐものあり。宵のほど其漁家に入てやすらふ。よるのやどなまぐさし。月くまなくはれけるまゝに、夜ふねさし下して、鹿島に至る。ひるより雨しきりに降て、月見るべくもあらず。麓に根本寺のさきの和尚、今は世をのがれて、此處におはしけると云を聞て、尋ね入て臥ぬ。すこぶる人をして深省を發せしむと吟じけん、しばらく清淨の心をうるに似たり。曉の空いさゝかはれ間ありけるを、和尚おこし驚し侍れば、人〳〵起出ぬ。月の光、雨の音、只あはれなるけしきのみむねにみちて、いふべきことの葉もなし。はる〳〵と月見に來たるかひなきこそ、ほいなきわざなれ。かの何がしの女すら、時鳥の歌えよまで歸りわづらひしも、我ためにはよき荷擔の人ならんかし。

をり／＼にかはらぬ空の月かげも　和尚
ちゞのながめは雲のまに／＼
月はやし梢は雨を持ながら　桃青
寺にねてまことがほなる月見かな　〃
雨にねて竹おきかへる月見かな　ソラ
月さびし堂の軒端の雨しづく　宗波

神前

此松の實ばえせし代や神の秋　桃青
ぬぐはゞや石のおましの苔の露　宗波
膝折やかしこまりなく鹿の聲　ソラ

田家

かりかけし田面の鶴や里の秋　桃青
夜田かりに我やとはれん里の月　宗波
賤の子や稻すりかけて月をみる　桃青
芋の葉や月まつ里の燒ばたけ　〃

野

もゝひきや一花すりの萩ごろも　ソラ
花の秋草にくひあく野馬かな　〃
萩原や一夜はやどせ山の犬　桃青

歸路自準に宿す

塒せよわら干宿の友すゞめ　主人
秋をこめたるくねのさし杉　客
月見んと汐ひきのぼる舟とめて　ソラ
（文化板「主人」を「松江」、「客」を「桃青」に作る。）

貞享丁卯仲秋末五日

笈之小文序

風羅坊芭蕉菴桃青と聞えしは、今此道の達人なり。其門葉日々に茂り月〳〵に盛なり。門葉推て翁と耳(のみ)いへば、皆芭蕉翁なることを知れり。是江戸深川の庵室に閑居せしむる時、手づから芭蕉を植置れたりし故成べし。此翁上かた行脚せられし

時道すからの小記を集て、これをなづけて笈のこぶみといふ。積て漸浩瀚となる。晝夜に是を翫て、花に戯ては歌仙の色をまし、月にうつしては四十四百韻の色をます。爾来門葉多しといへども、唯乙州にのみ授見せしむ。乙劦其群弟と共にせざることをなげき、今

殺梓にちりばめて世傳を廣ふせんと欲して、物すといへども、俄に病に遇て息(やみ)ぬ。暫愈(しゆうゆ)日を俟といふなる。

江州大津松本之隱士觀桂堂砂石子
寶永四丁亥年春乙州之内懸求不得止染筆畢

笈の小文

風羅坊芭蕉

百骸九竅の中に物有。かりに名付て風羅坊といふ。誠にうすものゝかぜに破れやすからん事をいふにやあらむ。かれ狂句を好こと久し。終に生涯のはかりごとゝなす。ある時は倦て放擲せん事をおもひ、ある時はすゝむで人にかたむ事をほこり、是非胸中にたゝかふて、これが爲に身安からず。しばらく身を立む事をねがへども、これが爲にさへられ、暫ク學て愚を曉ン事をおもへども、是が爲に破られ、つゐに無能無藝にして、只此一筋に繋る。西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休が茶における、其貫道(通カ)する物は一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る處花にあらずといふ事なし。おもふ處月にあらずといふ事なし。像花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獸に類ス。夷狄を出、鳥獸を離れて、造化にしたがひ、造化にかへれとなり。

神無月の初、空定めなきけしき、身は風葉の行末なき心地して、

旅人と我名よばれん初しぐれ

また山茶花を宿〳〵にして

岩城の住、長太郎と云もの、此脇を付て其角亭におゐて關送りせんともてなす。

時は冬よしのをこめん旅のつと

此句は露沾公より下し給はらせ侍りけるを、はなむけの初として、舊友親疎門人等あるは詩歌文章をもて訪ひ、或は草鞋の料を包て志を見す。かの三月の糧を集に力を入ず。紙布綿小などいふもの、帽子したうづやうのもの、心〳〵に贈りつどひて、霜雪の寒苦をいとふに心なし。あるは小舟をうかべ、別墅にまうけし草庵に、酒肴携來りて行衛を祝し、名殘をおしみなどするこそ、故ある人の首途するにも似たりと、いと物めかしく覺えられけれ。

抑道の日記といふものは、紀氏長明阿佛の尼の、文をふるひ情を盡してより、餘は皆俤似かよひて、其糟粕を改る事あたはず。まして淺智短才の筆に及べくもあらず。其日は雨降晝より晴て、そこに松あり、かしこに何と云川流れたりなどいふ事、たれ〳〵もいふべく覺侍れども、黄奇蘇新のたぐひにあらずば云事なかれ。されども其處〳〵の風景心に殘り、山舘

野亭のくるしき愁も、且はなしの種となり、風雲の便りともおもひなして、わすれぬ處／＼、跡や先やと書集侍るぞ、猶醉ル者の猛語にひとしく、いねる人の譫言するたぐひに見なして、人又亡聴せよ。

鳴海にとまりて

星崎の闇を見よとや啼千鳥

飛鳥井雅章公の此宿にとまらせ給ひて、都も遠くなるみがたはるけき海を中にへだてゝ、と詠じ給ひけるを、みづからかゝせ給ひてたまはりけるよしをかたるに、

京まではまだ半空や雪の雲

三川の國保美といふ處に、杜國がしのびて有けるをとぶらはんと、まづ越人に消息して、鳴海より跡ざまに二十五里尋かへりて、其夜吉田に泊る。

寒けれど二人寐る夜ぞ頼もしき

あまつ縄手、田の中に細道ありて、海より吹上る風いと寒き處なり。

冬の日や馬上に氷る影法師

保美村より伊良古崎へ一里斗も有べし。三河の國の地つゞきにて、伊勢とは海へだてたる處なれども、いかなる故にか万葉集には、伊勢の名所の内に撰入られたり。此洲崎にて碁石を拾ふ。世にいらこ白といふとかや。骨山と云は、鷹を打處なり。南の海のはてにて、鷹のはじめて渡る所といへり。いらこ鷹など歌にもよめりけりとおもへば、猶あはれなる折ふし、

鷹一つ見付てうれしいらこ崎

熱田御修覆

磨なをす鏡も清し雪の花

蓬左の人々にむかひとられて、しばらく休息する程、

箱根こす人も有らし今朝の雪

有人の會

ためつけて雪見にまかるかみこ哉

いざ行む雪見にころぶ處まで

ある人興行

香を探る梅に蔵見る軒端哉

此間美濃大垣岐阜のすきものとぶらひ來りて、歌仙あるは一折など度々に及。師走十日餘、名ごやを出て舊里に入んとす。

旅寐してみしやうき世の煤はらひ

桑名よりくはで來ぬればと云日永の里より、馬かりて杖つき坂上るほど、荷鞍うちかへりて馬より落ぬ。

歩行ならば杖つき坂を落馬哉

と物うさのあまり云出侍れども、終に季ことばいらず。

舊里や臍の緒に泣としの暮

宵のとし空の名残おしまむと、酒のみ夜ふかして、元日寢わすれたれば、

二日にもぬかりはせじな花の春

初春

春立てまだ九日の野山哉

枯芝やや〻かげろふの一二寸

伊賀の國阿波の庄といふ所に、俊乘上人の舊跡有。護峰山新大佛寺とかや云。名ばかりは千歳の形見となりて、伽藍は破れて礎を殘し、坊舍は絕て田畑と名の替り、丈六の尊像は苔の綠に埋て、御ぐしのみ現前とおがまれさせ給ふに、聖人の御影はいまだ全くおはしまし侍るぞ、其代の名殘うたがふ處なく、泪こぼる〻計也。石の蓮臺獅子の坐などは、蓬葎の上に堆く、双林の枯たる跡も、まのあたりにこそ覺えられけれ。

丈六にかげろふ高し石の上

故主蟬吟公の庭にて、（原本此一行を脫す）

さま〴〵の事おもひ出す櫻哉

伊勢山田

何の木の花とはしらず匂哉

裸にはまだ衣更着の嵐哉

菩提山

此山のかなしさ告よ野老堀

龍尙舍

物の名を先とふ蘆のわか葉哉

網代民部雪堂に會

梅の木に猶やどり木や梅の花

草庵會

いも植て門は葎のわか葉哉

神垣のうちに梅一木もなし。いかに故有事にやと神司などに尋侍れば、只何とはなしをのづから梅一もともなくて、子良の舘の後に一もと侍るよしをかたりつたふ。

御子良子の一もとゆかし梅の花

神垣やおもひもかけずねはんぞう

彌生半過る程、そゞろにうき立心の花の、我を道引枝折となりて、よしの〻花におもひ立んとするに、かのいらこ崎にてちぎり置し人の、伊勢にて出むかひ、ともに旅寐のあはれをも見、且は我爲に童子となりて道の便りにもならんと、自万菊丸と名をいふ。まことにわらべらしき名のさまいと興有。いでや門出のたはぶれ事せんと、笠のうちに落書ス。

乾坤無住同行二人

よし野にて櫻見せふぞ檜の木笠

よし野にて我も見せふぞ檜の木笠　万菊丸

旅の具多きは道さはりなりと、物皆拂捨たれども、よるの料にと、かみこ一つ、合羽やうの物、硯筆かみ藥等晝笥なんど、物に包て後に背負たれば、いとゞすねよわく力なき身の、跡ざまにひかふるやうにて、道猶すゝまず、たゞ物うき事のみ多し。

草臥て宿かる頃や藤の花

初瀬

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅

足駄はく僧も見えたり花の雨　万菊

葛城山

猶みたし花に明行神の顔

三輪　多武峯

臍峠　多武峯より龍門へ越道也

雲雀より空にやすらふ峠哉

瀧門

瀧門の花や上戸の土産にせん

酒のみに語らんかゝる瀧の花

西河

ほろ／＼と山吹ちるか瀧の音

蜻蛉が瀧

布留の瀧は、布留の宮より二十五丁山の奥也。

津國幾田の川上に有
布引の瀧

大和
箕面の瀧
勝尾寺へ越る道に有

櫻

櫻がりきどくや日々に五里六里

日は花に暮てさびしやあすならう

扇にて酒くむかげやちる櫻

苔清水

春雨のこしたにつたふ清水哉

よしのゝ花に三日とゞまりて、曙黄昏のけしきにむかひ、有明の月の哀なるさまなど、心にせまり胸にみちて、あるは攝政公のながめにうばゝれ、西行の枝折にまよひ、かの貞室が是は／＼と打なぐりたるに、われいはん言葉もなくて、いたづらに口をとぢたるいと口をし。おもひ立たる風流、いかめしく侍れども、こゝに至りて無興の事なり。

高野

ちゝはゝのしきりにこひし雉の聲

ちる花にたぶさはづかし奥の院　万菊

和歌

行春にわかの浦にて追付たり

きみ井寺

跪はやぶれて西行にひとしく、天龍の渡しをおもひ、馬をかる時は、いきまきし聖の事心にうかぶ。山野海濱の美景に、造化の功を見、あるは無依の道者の跡をしたひ、風情の人の實をうかゞふ。猶栖をさりて器物のねがひなし。空手なれば途中の愁もなし。寛歩駕にかへ、晩食肉よりも甘し。泊るべき道にかぎりなく、立べき朝に時なし。只一日のねがひ二つのみ。こよひ能宿からん。草鞋のわが足によろしきを求んとばかりは、いさゝかのおもひなり。時々氣を轉じ、日々に情をあらたむ。もしわつかに風雅ある人に出あひたる、悦びかぎりなし。日頃は古めかしくかたくなゝりと、にくみ捨たる程の人も、邊土の道づれにかたりあひ、はにふむぐらのうちにて見出したるなど、瓦石のうちに玉を拾ひ、泥中にこがねを得たる心地して、物にも書付、人にもか

たらんとおもふぞ、又是旅のひとつなりかし。

衣更

一つぬひて後に負ぬ衣かへ

吉野出て布子賣たし衣がへ　万菊

（一本「賣をし」とあり）

灌佛の日は奈良にて爰かしこ詣侍るに、鹿の子をうむを見て、此日におゐておかしければ、

灌佛の日に生れあふ鹿の子哉

招提寺鑑眞和尚來朝の時、船中七十餘度の難をしのぎ給ひ、御目のうち汐風吹入て、終に御眼盲させ給ふ尊像を拜して、

若葉して御目の雫ぬぐはゞや

舊友に奈良にてわかる。

鹿の角まづ一ふしのわかれかな

大坂にてある人の許にて、

杜若語るも旅のひとつ哉

須磨

月はあれど留主のやうなり須磨の夏

月見ても物たらはずや須磨の夏

卯月中頃の空も朧に殘りて、はかなきみじか夜の月もいとゞ艶なるに、山はわか葉にくろみかゝりて、時鳥啼出づべき東雲も、海の方よりしらみそめたるに、上野とおぼしき所は、麥の穗なみあからみあひて、漁人の軒ちかきけしの花の、たえ〴〵に見わたさる。

海士の顏先みらるゝやけしの花

東須磨西須磨濱須磨と三處にわかれて、あながちに何わざするとも見えず。藻塩たれつゝなど歌にも聞え侍るも、今はかゝるわざするなども見えず。きすごといふ魚を網して、眞砂の上に干ちらしけるを烏の飛來りてつかみ去ル。これをにくみて弓をもておどすぞ、海士のわざとも見えず。もし古戰場の餘波をとゞめて、かゝる事をなすにやと、いとゞ罪深く、なを昔の戀しきまゝに、てつかひが峰にのぼらんとする。導びきする子のくるしがりて、とかくいひまぎらはすを、さま〴〵にすかして、麓の茶店にて物くらはすべきなどいひて、わりなき体に見えたり。かれは十六と云けん、里の童子よりは四つばかりも弟なるべきを、數百丈の先達として羊腸險岨の岩根をはひのぼれば、すべり落ぬべきことあまたゝびなりけるを、つゝじ根笹にとりつき、息をきらし汗をひたして、漸雲門に入こそ、心許なき導師の力なりけらし。

須磨の海士の矢先に啼やほとゝぎす

時鳥きえゆく方や島ひとつ

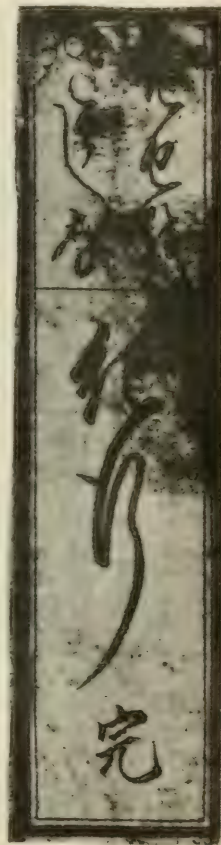
須磨寺やふかぬ笛きく木下闇

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

かゝる處の秋なりけりとかや、此浦の實は秋を宗とするなるべし。悲しさ淋しさ

いはんかたなく、秋なりせばいさゝか心のはしをも、云出べきものをとおもふぞ、我心匠の拙きをしらぬに似たり。淡路島手にとるやうに見えて、須磨明石の海左右にわかる。呉楚東南のながめも斯る處にや。物しれる人の見侍らば、さま／＼のさかひにも思ひなぞらふるべし。又うしろの方に山を隔てゝ、田井の畑と云處、松風村雨のふるさとゝいへり。尾上つゞき丹波路へかよふ道あり。鉢伏のぞき、逆落など、おそろしき名のみ残て、鐘掛松より見下すに、一の谷内裏やしき目の下に見ゆ。其代のみだれ、其時のさわぎ、さながら心にうかび、俤につどひて、二位の尼君皇子をいだきたてまつり、女院の御裳に御足もたれ、船屋形にまろび入らせ給ふみありさま、内侍局女嬬曹子のたぐひ、さま／＼の御調度もてあつかひ、琴琵琶なんどしとね蒲團にくるみて、船中になげ入、供御はこぼれてうろくづの餌となり、櫛笥はみだれて、海士の捨草となりつゝ、千歳のかなしび、此浦にとゞまり、素波の音にさへ愁おほく侍るぞや。

翁名古屋に滞留乃時行ニ
更科紀行。幸而災に次。

さらしなの里、姨捨山の月見んこと、しきりにすゝむる秋風の心に吹さわぎて、倶に風雲の情を狂すもの又ひとり、越人と云。木曾路は山深く道さかしく、旅寐の力も心もとなしと、荷兮子が奴僕をして送らす。おの／＼こゝろざし盡すといへども、驛旅の事心えぬさまにて、ともにおぼつかなく、物ごとのしどろに跡さきなるも、なか／＼におかしき事のみ多し。何〻と云處にて、六十ばかりの道心の僧、おもしろげもおかしげもあらず、只むつ／＼としたるが、腰たわむまで物おひ、息はせはしく、足はきざむやうにあゆみ來れるを、伴ひける人のあはれがりて、おの／＼肩にかけたる物ども、かの僧のおひね物と一にからみて、馬につけて我を其上にのす。高山奇峰頭の上におほひかさなりて、ひだりは大河なかれ、

岸下千尋のおもひをなし、尺地も平らかならざれば、鞍の上しづかならず。只あやふき煩ひのみやむ時なし。かけはし、ねざめなど過て、猿が馬場たち峠などは、四十八まがりとかや、九折かさなりて、雲路にたどる心地せらる。かちよりゆくものさへ、めくるめき、たましひしぼみて、足さだまらざりけるに、かのつれたる奴僕いともおそるゝけしき見えず、馬の上にてたゞねぶりに眠りて、落ぬべき事あまたたびなりけるを、跡より見あげて危き事かぎりなし。佛の御心に、衆生のうき世を見給ふも、かゝる事にやと、無常迅速のいそがはしきも、我身にかへり見られて、阿波の鳴戸は波風もなかりけり。夜は草の枕をもとめて、ひるのうち思ひまうけたるけしき、結び捨たる發句など、矢立取出て、燈のもとに目をとぢ頭をたゝきてうめきふせば、かの道心の坊、旅懐の心うくて物思ひするにやと推量し、我を慰んとす。わかき時拜みめぐりたる地、あみだの尊き數を盡し、おのがあやしと思ひし事ども、噺つゞくるぞ、風情のさはりと成て、何を云出ることもせず。とてもまぎれたる月影の、壁の破れより木間がくれにさし入て、引板の音、鹿おふ聲、處〱に聞えける。まことに悲しき秋のこゝろ、ここに盡せり。いでや月のあるじに酒ふるまはんといへば、盃持出たり。よのつねに一めぐりも大きに見えて、ふつゝかなる蒔繪をしたり。都の人は斯るものは風情なしとて、手にもふれざりけるに、思ひもかけぬ興に入て、𤭖琬玉巵の心地せらるゝも處がら也。

あの中に蒔繪書たし宿の月

かけはしやいのちをからむ蔦かづら

かけはしやまづおもひ出駒むかひ

霧はれて棧は目もふさがれず　越人

姨捨山は八幡と云里より一里ばかり南に、西南に横をれてすさまじく高くもあらず、かど〱しき岩なども見えず、只あはれ深き山のすがたなり。なぐさめかねしといひけんもことわりしられて、そゞろに悲しきに、何故にか老たる人を捨たらんと思ふに、いとゞ涙も落そひければ、(原本此一段なし。一本によりて補ひたり)

俤や姨ひとり泣月の友

いざよひもまだ更科の郡かな

更科や三よさの月見雲もなし　越人

ひよろ〱と猶露けしやをみなへし

身にしみて大根からし秋の風

木曾の橡うき世の人の土産かな

送られつ別れつはては木曾の秋

(「送られつ」を「おくりつ」をよしとす)

善光寺

月影や四門四宗も只ひとつ

吹飛す石は淺間の野分かな

此記行終て後、乙州以謂、猶翁之文かさね及ヒ鳥の賦、集〳〵に洩ぬることを惜み、後集を加ンとおもひ企ぬ。

江南桃々菴乙州梓之

宝永六年孟春慶旦

書林　二条通高倉東入町

平野屋佐兵衛開版

全

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず。海濱にさすらへ、去年の秋江上の破屋に蜘の古巣をはらひて、やゝ年も暮、春立る霞の空に白川の關こえんと、そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取もの手につかず、もゝ引の破をつゞり、笠の緒付かえて、三里に灸すゆるより、松嶋の月先心にかゝりて、住る方は人に讓り、杉風が別墅に移るに、

　草の戸も住み替る代ぞひなの家

面八句を庵の柱に懸置、彌生も末の七日、明ぼのゝ空朧々として、月は在明にて光おさまれる物から、不二の峯幽にみえて、上野谷中の花の梢、又いつかはと心ぼそし。むつまじきかぎりは、宵よりつどひて、舟に乗て送る。千じゆと云所にて船をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻のちまたに離別の泪をそゝぐ。

　行春や鳥啼き魚の目は泪

是を矢立の初として、行道なをすゝまず。人々は途中に立ならびて、後かげのみゆる迄はと見送なるべし。ことし元祿二とせにや、奥羽長途の行脚、只かりそめに思ひたちて、呉天に白髪の恨を重ぬといへ共、耳にふれていまだめに見ぬさかひ、若生て歸らばと、定なき頼の末をかけ、其日漸早加と云宿にたどり着にけり。痩骨の肩にかゝれる物、先くるしむ。只身すがらにと出立侍るを、帋子一衣は夜の防ぎ、ゆかた雨具墨筆のたぐひ、あるはさりがたき餞などしたるは、さすがに打捨がたくて、路次の煩となれるこそわりなけれ。

室の八嶋に詣す。同行曾良が曰。此神は木の花さくや姫の神と申て、富士一躰也。無戸室に入て燒給ふちかひのみ中に、火々出見のみこと生れ給ひしより、室の八嶋と申。又煙を讀習し侍もこの謂也。將このしろといふ魚を禁ず。縁記の旨世に傳ふ事も侍し。

卅日日光山の梺に泊る。あるじの云けるやう、我名を佛五左衛門と云。萬正直を旨とする故に、人かくは申侍まゝ、一夜の草の枕も打解て休み給へと云。いかなる佛の濁世塵土に示現して、かゝる桑門の乞食順礼ごときの人をたすけ給ふにやと、あるじのなす事に心をとゞめてみるに、唯無智無分別にして、正直偏固の者也。剛毅木訥の仁に近きたぐひ、氣稟の清質尤尊ぶべし。

卯月朔日、御山に詣拝す。往昔此御山を

二荒山と書しを、空海大師開基の時、日光と改給ふ。千歳未來をさとり給ふにや。今此御光、一天にかゞやきて、恩澤八荒にあふれ、四民安堵の栖穏なり。猶憚多くて筆をさし置ぬ。

あらたふと青葉若葉の日の光

黒髪山は霞かゝりて、雪いまだ白し。

剃捨て黒髪山に衣更　曾良

曾良は河合氏にして、惣五郎と云へり。芭蕉の下葉に軒をならべて、予が薪水の労をたすく。このたび松しま象潟の眺、共にせん事を悦び、且は羈旅の難をいたはらんと、旅立暁、髪を剃て、墨染にさまをかえ、惣五を改て宗悟とす。仍て墨(黒)髪山の句有。衣更の二字力ありてきこゆ。

廿餘丁山を登つて瀧有。岩洞の頂より飛流して、百尺千岩の碧潭に落たり。岩窟に身をひそめ入て、瀧の裏よりみれば、うらみの瀧と申傳え侍る也。

暫時は瀧に籠るや夏の初

那須の黒ばねと云所に、知人あれば、是より野越にかゝりて、直道をゆかんとす。遙に一村を見かけて行に、雨降日暮る。農夫の家に一夜をかりて、明れば又野中を行。そこに野飼の馬あり。草刈おのこになげきよれば、野夫といへども、さすがに情しらぬには非ず。いかゞすへきや。されども此野は縦横にわかれて、うゐうる敷旅人の道ふみたがえん、あやしう侍れば、此馬のとゞまる所にて馬を返し給へとかし侍ぬ。ちいさき者ふたり、馬の跡したひてはしる。獨は小姫にて名をかさねと云。聞なれぬ名のやさしかりければ、

かさねとは八重撫子の名成へし　曾良

頓て人里に至れば、あたひを鞍つぼに結付て、馬を返しぬ。

黒羽の館代、淨坊寺何がしの方に音信る。思ひがけぬあるじの悦び、日夜語つゞけて、其弟桃翠など云が、朝夕勤とぶらひ、自の家にも伴ひて、親屬の方にもまねかれ、日をふるまゝに、ひとひ郊外に逍遙して、犬追物の跡を一見し、那須の篠原をわけて、玉藻の前の古墳をとふ。それより八幡宮に詣、與市扇の的を射し時、別しては我國氏神正八まんとちかひしも、此神社にて侍と聞ば、感應殊しきりに覺えらる。暮れば桃翠宅に歸る。

修驗光明寺と云有。そこにまねかれて、行者堂を拜す。

夏山に足駄を拜む首途哉

當國雲岸寺のおくに、佛頂和尚山居跡あり。

竪横の五尺にたらぬ草の庵
むすぶもくやし雨なかりせば

と松の炭して岩に書付侍りと、いつぞや聞え給ふ。其跡みんと雲岸寺に杖を曳ば、

人ゝすゝんで共にいざなひ、若き人おほく、道のほど打さはぎて、おぼえず彼華に至る。山はおくあるけしきにて、谷道遙に、松杉黒く苔したゝりて、卯月の天今猶寒し。十景盡る所、橋をわたつて山門に入。

さてかの跡はいづくのほどにやと、後の山によぢのぼれば、石上の小庵岩窟にむすびかけたり。妙禪師の死關、法雲法師の石室をみるがごとし。

木啄も庵はやぶらず夏木立

と、とりあへぬ一句を柱に殘侍し。是より殺生石に行、館代より馬にて送らる。此口付のおのこ短冊得させよと乞。やさしき事を望侍るものかなと、

野を横に馬牽きむけよほとゝぎす

殺生石は溫泉の出る山陰にあり。石の毒氣いまだほろびず。蜂蝶のたぐひ眞砂の色の見えぬほどかさなり死す。又淸水ながるゝの柳は蘆野の里にありて、田の畔に殘る。此所の郡守戸部某の、此柳みせばやなど折〳〵にの給ひ聞え玉ふを、いづく(いつ〳〵カ)のほどにやと思ひしを、今日此柳のかげにこそ立より侍つれ。

田一枚植て立去る柳かな

心許なき日かず重るまゝに、白川の關にかゝりて旅心定りぬ。いかで都へと便求しも斷也。中にも此關は三關の一にして、風騷(騒)の人心をとゞむ。秋風を耳に殘し、紅葉を俤にして、青葉の梢猶あはれ也。卯の花の白妙に茨の花咲そひて、雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し衣裝を改し事など、淸輔の筆にもとゞめ置れしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴着哉　曾良

とかくして越行まゝに、あぶくま川を渡る。左に會津根高く、右に岩城相馬三春の庄、常陸下野の地をさかひて、山つらなる。かけ沼と云所を行に、今日は空曇て物影うつらず。すか川の驛に等窮(躬)といふものを尋て、四五日とゞめらる。先白河の關いかにこえつるやと問。長途のくるしみ、身心つかれ、且は風景に魂うばゝれ、懷舊に腸を斷て、はか〳〵しう思ひめぐらさず。

風流のはじめやおくの田植歌

無下にこえんもさすがにと語れば、脇第三とつゞけて三(一カ)卷となしぬ。此宿の傍に、大きなる栗の木陰をたのみて世をいとふ僧有。橡ひろふ太山もかくやと、閒に覺られて、ものに書付侍る。其詞、

栗といふ文字は、西の木と書て、西方淨土に便ありと、行基菩薩の一生、杖にも柱にも此木を用ひ給ふとかや。

世の人の見付けぬ花や軒の栗

等窮(躬)が宅を出て、五里斗檜皮の宿を

離れて、あさか山有。路より近し。此あたり沼多し。かつみ刈比もやゝ近うなれば、いづれの草を花がつみとは云ぞと、人々に尋侍れども、更知人なし。沼を尋、人にとひ、かつみ〱と尋ありきて、日は山の端にかゝりぬ。二本松より右にきれて、黒塚の岩屋一見し、福嶋に宿る。あくればしのぶもぢ摺の石を尋て、忍ぶの里に行。遥山陰の小里に、石半土に埋てあり。里の童部の來りて敎ける。昔は此山の上に侍しを、往來の人の麥草をあらして、此石を試侍をにくみて、此谷につき落せば、石の面下ざまにふしたりと云。さもあるべき事にや。

　早苗とる手もとやむかししのぶ摺

月の輪のわたしを越て、瀬の上と云宿に出づ。佐藤庄司が舊跡は、左の山際一里半斗に有。飯塚の里鯖野と聞て、尋〱行に、丸山と云に尋あたる。是庄司が舊館也。麓に大手の跡など人の敎ゆるにまかせて、泪を落し、又かたはらの古寺に一家の石碑を殘す。中にも二人の嫁がしるし先哀也。女なれども、かひ〲しき名の世に聞えつる物かなと袂をぬらしぬ。墮（隨）涙の石碑も遠きにあらず。寺に入て茶を乞へば、爰に義經の太刀、辨慶が笈をとゞめて什物とす。

　笈も太刀も五月にかざれ帋幟

五月朔日の事也。其夜飯塚に泊る。温泉あれば湯に入て宿をかるに、土坐に莚を敷て、あやしき貧家也。灯もなければ、ゐろりの火かげに寐所をまうけて臥す。夜に入て雷鳴、雨しきりに降て、臥る上よりもり、蚤蚊にせゝられて眠らず。持病さへおこりて、消入斗になん。短夜の空もやう〱明れば、又旅立ぬ。猶夜の餘波心すゝまず、馬かりて桑折の驛に出る。遥なる行末をかゝえて、斯る病覺束なしといへど、羇旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路にしなん是天の命なりと、氣力聊とり直し、路縱横に踏て、伊達の大木戸をこす。鐙摺白石の城を過、笠嶋の郡に入れば、藤中將實方の塚はいづくのほどならんと人にとへば、是より遥右に見ゆる山際の里を、みのわ笠嶋と云。道祖神の社、かた見の薄、今にありと敎ゆ。此比の五月雨に道いとあしく、身つかれ侍れば、よそながら眺やりて過るに、簑輪笠嶋も五月雨の折にふれたりと、

　笠嶋はいづこさ月のぬかり道

岩沼に宿る。
武隈の松にこそめ覺る心地はすれ。根は土際より二木にわかれて、昔の姿うしなはずとしらる。先能因法師思ひ出。往昔むつのかみにて下りし人、此木を伐て名取川の橋杭にせられたる事などあればにや、松は此たび跡もなしとは詠たり。代ゝ

あるは伐、あるひは植繼などせしと聞に、今將千歳のかたちとゝのほひて、めでたき松のけしきになん侍し。

武隈の松みせ申せ遲櫻　と擧白と云ものゝ餞別したりければ、

櫻より松は二木を三月越シ

名取川を渡て仙臺に入。あやめふく日也。旅宿をもとめて四五日逗留す。爰に畫工加右衞門と云ものあり。聊心ある者と聞て知る人になる。この者年比さだかならぬ名どころを考置侍ればとて一日案内す。宮城野の萩茂りあひて、秋の氣色思ひやらる。玉田、よこ野、つゝじが岡はあせび咲ころ也。日影ももらぬ松の林に入て、爰を木の下と云とぞ。昔もかく露ふかければこそ、みさぶらひ三かさとはよみたれ。藥師堂天神の御社など拜て、其日はくれぬ。猶松嶋塩がまの所ゝ畫に書て送る。且、紺の染緒つけたる草鞋二足餞す。されば こそ風流のしれもの、爰に至りて其實を顯す。

あやめ艸足に結ばん草鞋の緒

かの畫圖にまかせてたどり行ば、おくの細道の山際に十符の菅有。今も年々十符の菅菰を調て、國守に献ずと云り。

壺碑　市川村多賀城に有。

つぼの石ぶみは、高サ六尺餘、横三尺計歟。苔を穿て文字幽也。四維國界之數里をしるす。此城神龜元年（「歳次甲子」ヲ脫ス）按察使（「兼」ヲ脫ス）鎭守府（「府」ナシ）將軍（「從四位上勳四等」ヲ脫ス）大野朝臣東人之所里（置）也。天平寶字六年（「歳次壬寅」ヲ脫ス）參議東海東山節度使（「從四位上仁部省卿兼按察使鎭守」ヲ脫ス）同（「同」ナシ）將軍惠美朝臣獦（朝獵）修造而（「而」ナシ）。「天平寶字六年」ヲ脫ス）十二月朔（一）日と有。聖武皇帝の御時に當れり。むかしよりよみ置る哥枕、おほく語傳ふといへども、山崩川落て道あらたまり、石は埋て土にかくれ、木は老て若木にかはれば、時移り代變じて其跡たしかならぬ事のみを、爰に至りて疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を閲す。行脚の一德、存命の悅び、羇旅の勞をわすれて、泪も落るばかり也。

それより野田の玉川、沖の石を尋ぬ。末の松山は寺を造て、末松山といふ。松のあひ〳〵皆墓はらにて、はねをかはし枝をつらぬる契の末も、終はかくのごときと悲しさも增りて、塩がまの浦に入相のかねを聞。五月雨の空聊はれて、夕月夜幽に、籬が嶋もほど近し。蜑の小舟こぎつれて、肴わかつ聲〲に、つなでかなしもとよみけん心もしられて、いとゞ哀也。其夜目盲法師の琵琶をならして奥上るりと云ものをかたる。平家にもあらず、舞にもあらず、ひなびたる調子うち上て、

枕ちかうかしましけれど、さすがに邊土の遺風忘れざるものから、殊勝に覺らる。早朝塩がまの明神に詣。國守再興せられて宮柱ふとしく、彩椽きらびやかに、石の階九仭に重り、朝日あけの玉がきをかゞやかす。かゝる道の果、塵土の境まで、神靈あらたにましますこそ、吾國の風俗なれといと貴けれ。神前に古き寶燈有。かねの戸びらの面に、文治三年和泉三郎奇(寄)進と有。五百年來の俤、今目の前にうかびて、そゞろに珍し。渠は勇義忠孝の士也。佳命(名ガ)今に至りてしたはずといふ事なし。誠人の道を勤義を守べし。名もまた是にしたがふと云り。日既午にちかし。船をかりて松嶋にわたる。其間二里餘、雄嶋の磯につく。

抑ことふりにたれど、松嶋は扶桑第一の好風にして、凡洞庭西湖を恥ず。東南より海を入て、江の中三里、浙江の潮をたゝふ。嶋〳〵の數を盡して、欹ものは天を指、ふすものは波に匍匐、あるは二重にかさなり、三重に疊みて、左にわかれ右につらなる。負るあり、抱るあり。兒孫愛すがごとし。松の緑こまやかに枝葉、汐風に吹たはめて、屈曲をのづからためたるがごとし。其氣色窅然として、美人の顔を粧ふ。ちはや振神のむかし、大山ずみのなせるわざにや。造化の天工いづれの人か筆をふるひ、詞を盡さむ。

雄嶋が磯は地つゞきて、海に出たる嶋也。雲居禪師の別室の跡、坐禪石など有。將松の木陰に世をいとふ人も稀〳〵見え侍りて、落穗松笠など、打けぶりたる草の菴、閑に住なし、いかなる人とはしられずながら、先なつかしく立寄ほどに、月海にうつりて、晝のながめ又あらたむ。江上に歸りて宿を求れば、窓をひらき二階を作て風雲の中に旅寐するこそ、あやしきまで妙なる心地はせらるれ。

松嶋や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

予は口をとぢて眠らんとしていねられず。舊庵をわかるゝ時、素堂松嶋の詩あり。原安適松がうらしまの和哥を贈らる。袋を解てこよひの友とす。且杉風濁子が發句あり。

十一日、瑞岩寺に詣。當寺三十二世の昔、眞壁の平四郎出家して、入唐歸朝の後開山す。其後に雲居禪師の徳化に依て、七堂甍改りて、金壁莊嚴光を輝、佛土成就の大伽藍とはなれりける。彼見佛聖の寺はいづくにやとしたはる。

十二日平和(「和」ハ衍)泉と心ざし、あねはの松緒だえの橋など聞傳て、人跡稀に雉兎蒭蕘の往かふ道、そこともわかず。終に路ふみたがえて、石の巻といふ湊に出。こがね花咲とよみて奉たる金花山海上に見わたし、數百の廻船入江につどひ、

人家地をあらそひて竈の煙立つゞけたり。思ひがけず斯る所にも來れる哉と宿からんとすれど、更に宿かす人なし。漸まどしき小家に一夜をあかして、明れば又しらぬ道まよひ行、袖のわたり、尾ぶちの牧、まのゝ萱はらなど、よそめにみて、遥なる堤を行、心細き長沼にそふて、戸伊麻と云所に一宿して、平泉に到る。其間廿餘里ほどゝおぼゆ。

三代の榮耀一睡の中にして、大門の跡は一里こなたに有。秀衡が跡は田野に成て、金鷄山のみ形を殘す。先高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河也。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入。康衡等が舊跡は衣が關を隔て、南部口をさし堅め、夷をふせぐとみえたり。偖も義臣すぐつて此城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山河あり、城春にして草青みたりと笠打敷て、時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢のあと

卯の花に兼房みゆる白毛かな　曾良

兼て耳驚したる二堂開帳す。經堂は三將の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散うせて、珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽て、既頽廢空虚の叢と成べきを、四面新に圍て、甍を覆て風雨を凌、暫時千歳の記念とはなれり。

五月雨の降のこしてや光堂

南部道遥に見やりて、岩手の里に泊る。小黒崎みつの小嶋を過て、なるごの湯より尿前の關にかゝりて、出羽の國に超(越)んとす。此路旅人稀なる所なれば、關守にあやしめられて、漸として關をこす。大山をのぼつて日既暮ければ、封人の家を見かけて舍を求む。三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿する枕もと

あるじの云。是より出羽の國に、大山を隔て道さだかならざれば、道しるべの人を頼て超(越)べきよしを申。さらばと云て、人を頼侍れば、究竟の若者、反脇指をよこたえ、樫の杖を携て、我〳〵が先に立て行。けふこそ必あやうきめにもあふべき日なれと、辛き思ひをなして後に付て行。あるじの云にたがはず、高山森々として一鳥聲きかず、木の下闇茂りあひて夜る行ごとし。雲端につちふる心地して、篠の中踏分〳〵、水をわたり岩に蹶て、肌につめたき汗を流して、最上の庄に出づ。かの案内せしおのこの云やう、此みち必不用の事有。恙なうをくりまいらせて仕合したりと、よろこびてわかれぬ。跡に聞てさへ胸とゞろくのみ也。

尾花澤にて淸風と云者を尋ぬ。かれは富るものなれども志いやしからず。都にも

折々かよひて、さすがに旅の情をも知たれば、日比とゞめて、長途のいたはりさまぐ＼にもてなし侍る。

涼しさを我宿にしてねまる也

這出よかひやが下のひきの聲

まゆはきを俤にして紅粉の花

蠶飼する人は古代のすがた哉　曾良

山形領に立石寺と云山寺あり。慈覚大師の開基にて、殊清閑の地也。一見すべきよし人〻のすゝむるに依て、尾花澤よりとつて返し、其間七里ばかり也。日いまだ暮ず。梺の坊に宿かり置て、山上の堂にのぼる。岩に巖を重て山とし、松柏年舊、土石老て苔滑に、岩上の院〻扉を閉て物の音きこえず。岸をめぐり、岩を這て佛閣を拜し、佳景寂寞として、心すみ行のみおぼゆ。

閑さや岩にしみ入蟬の聲

最上川のらんと、大石田と云所に日和を待。爰に古き誹諧の種こぼれて、忘れぬ花のむかしをしたひ、芦角一聲の心をやはらげ、此道にさぐりあしゝて、新古ふた道にふみまよふといへども、みちしるべする人しなければと、わりなき一巻残しぬ。このたびの風流爰に至れり。

最上川はみちのくより出て、山形を水上とす。ごてん、はやぶさなど云おそろしき難所有。板敷山の北を流て、果は酒田の海に入。左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。是に稲つみたるをやいな船といふならし。白糸の瀧は青葉の隙〻に落て、仙人堂岸に臨て立。水みなぎつて舟あやうし。

五月雨をあつめて早し最上川

六月三日、羽黒山に登る。圖司左吉と云者を尋て、別當代會覚阿闍梨に謁す。南谷の別院に舍して、憐愍の情こまやかにあるじせらる。

四日本坊にをゐて誹諧興行。

有難や雪をかほらす南谷

五日、權現に詣。當山開闢能除大師はいづれの代の人と云事をしらず。延喜式に羽州里山の神社と有。書寫黒の字を里山となせるにや。羽州黒山を中略して羽黒山と云にや。出羽といへるも、鳥の毛羽を此國の貢に献る、と風土記に侍とやらん。月山湯殿を合て三山とす。當寺武江東叡に屬して、天台止觀の月明らかに、圓頓融通の法の灯かゝげそひて、僧坊棟をならべ、修驗行法を勵し、靈山靈地の驗效、人貴且恐る。繁榮長にして、めで度御山と謂つべし。

八日、月山にのぼる。木綿しめ身に引かけ、寶冠に頭を包、強力と云ものに道びかれて、雲霧山氣の中に、氷雪を踏てのぼる事八里。更に日月行道の雲關に入かとあやしまれ、息絶身こゞえて、頂上に臻れ

ば、日没て月顯る。笹を鋪、篠を枕として、臥て明るを待。日出で雲消れば、湯殿に下る。

谷の傍に鍛冶小屋と云有。此國の鍛冶、靈水を撰て、爰に潔斎して劔を打終、月山と銘を切て、世に賞せらる。かの龍泉に剣を淬とかや。干將莫耶のむかしをしたふ道に堪能の執、あさからぬ事しられたり。岩に腰かけてしばしやすらふほど、三尺ばかりなる櫻のつぼみ、半ばひらけるあり。ふり積雪の下に埋て、春を忘れぬ遲ざくらの花の心わりなし。炎天の梅花爰にかほるがごとし。行尊僧正の哥の哀も爰に思ひ出て、猶まさりて覺ゆ。惣而此山中の微細、行者の法式として他言する事を禁ず。仍て筆をとゞめて記さず。坊に歸れば阿闍梨の需に依て、三山順禮の句ゝ短冊に書。

涼しさやほの三か月の羽黒山

雲の峰幾つ崩れて月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

湯殿山錢ふむ道の泪かな　曾良

羽黒を立て、鶴が岡の城下、長山氏重行と云物のふの家にむかへられて、誹諧一巻有。左吉も共に送りぬ。川舟に乗て酒田の湊に下る。淵庵不玉と云醫師の許を宿とす。

あづみ山や吹浦かけて夕すゞみ

暑き日を海にいれたり最上川

江山水陸の風光、數を盡して今象潟に方寸を責。酒田の湊より東北の方、山を越、礒を傳ひ、いさごをふみて、其際十里、日影やゝかたぶく比、汐風眞砂を吹上、雨朦朧として鳥海の山かくる。闇中に莫作(摸索)して雨も又奇也とせば、雨後の晴色また賴母敷と、蜑の苫屋に膝をいれて、雨の晴を待。其朝天能霽て、朝日花やかにさし出る程に、象潟に舟をうかぶ。先能因嶋に舟をよせて、三年幽居の跡をとぶらひ、むかふの岸に舟をあがれば、花の上こぐとよまれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす。江上に御陵あり。神功后宮の御墓と云。寺を干滿珠寺と云。此所に行幸ありし事いまだ聞ず。いかなる事にや。此寺の方丈に座して簾を捲ば、風景一眼の中に盡て、南に鳥海天をさゝえ、其陰(影カ)うつりて江にあり。西はむや〳〵の關路をかぎり、東に堤を築て秋田にかよふ道、遙に海北にかまえて、浪打入る所を汐ごしと云。江の縱横一里ばかり、俤松嶋にかよひて又異なり。松嶋は笑ふが如く、象潟はうらむがごとし。寂しさに悲しみをくはえて、地勢魂をなやますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

祭禮

象潟や料理何くふ神祭　曾良

蜑の家や戸板を敷て夕涼　みのゝ國の商人　低耳

岩上に雎鳩の巣をみる

波こえぬ契ありてやみさごの巣　曾良

酒田の餘波日を重て、北陸道の雲に望、遙〻のおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百卅里と聞、鼠の關をこゆれば、越後の地に歩行を改て、越中(越後)の國一ぶりの關に到る。此間九日、暑濕の勞に神をなやまし、病おこりて事をしるさず。

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡によこたふ天河

今日は親しらず子しらず犬もどり駒返しなど云、北國一の難所を越てつかれ侍れば、枕引よせて寐たるに、一間隔て面の方に、若き女の聲二人斗ときこゆ。年老たるおのこの聲も交て物語するをきけば、越後の國新潟と云所の遊女成し。伊勢參宮するとて此關までおのこの送りて、あすは古郷にかへす文したゝめて、はかなき言傳などしやる也。白浪のよする汀に身をはふらかし、あまのこの世をあさましう下りて、定めなき契、日ゝの業因、いかにつたなしと物云をきく〳〵寐入て、あした旅立に、我〳〵にむかひて、行衛しらぬ旅路のうさ、あまり覺束なう悲しく侍れば、見えがくれにも御跡をしたひ侍ん。衣の上の御情に、大慈のめぐみをたれて、結緣せさせ給へと泪を落す。不便の事には侍れども、我〳〵は所ゝにてとゞまる方おほし。只人の行にまかせて行べし。神明の加護かならず恙なかるべしと、云捨て出つゝ、哀さしばらくやまざりけらし。

一家に遊女もねたり萩と月

曾良にかたれば書とゞめ侍る。くろべ四十八が瀬とかや、數しらぬ川をわたりて、那古と云浦に出。擔籠の藤浪は春ならずとも、初秋の哀とふべきものをと人に尋れば、是より五里いそ傳ひして、むかふの山陰にいり、蜑の苫ぶきかすかなれば、蘆の一夜の宿かすものあるまじといひをどされて、かゞの國に入。

わせの香や分け入る右は有磯海

卯の花山くりからが谷をこえて、金澤は七月中の五日也。爰に大坂よりかよふ商人何處と云者有。それが旅宿をともにす。一笑と云ものは此道にすける名の、ほの〴〵聞えて世に知人も侍しに、去年の冬早世したりとて、其兄追善を催すに、

塚も動け我泣く聲は秋の風

ある草庵にいざなはれて

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

途中唫

あか〳〵と日は難面も秋の風

小松と云所にて

しほらしき名や小松吹く萩すゝき

此所太田の神社に詣。眞(實)盛が甲(冑)錦の切あり。往昔源氏に属せし時、義朝公より給はらせ給とかや。げにも平士のものにあらず。目庇より吹返しまで、菊から草のほりもの金をちりばめ、龍頭に鍬形打たり。眞(實)盛討死の後、木曾義仲願状にそへて此社にこめられ侍よし、樋口の次郎が使せし事共、まのあたり縁記にみえたり。

むざんやな甲の下のきり〴〵す

山中の温泉に行ほど、白根が嶽跡にみなしてあゆむ。左の山際に観音堂あり。花山の法皇三十三所の順禮とげさせ給ひて後、大慈大悲の像を安置し給ひて、那谷と名付給ふと也。那智谷組の二字をわかち侍しとぞ。奇石さま〴〵に、古松植ならべて、萱ぶきの小堂、岩の上に造りかけて、殊勝の土地也。

石山の石より白し秋の風

温泉に浴す。其功有明(有馬カ)に次と云。

山中や菊はたおらぬ湯の匂

あるじとする物は久米之助とて、いまだ小童也。かれが父誹諧を好み、洛の貞室若輩のむかし爰に來りし比風雅に辱しめられて、洛に歸て、貞徳の門人となつて世にしらる。功名の後此一村、判詞の料を請ずと云。今更むかし語とはなりぬ。曾良は腹を病て、伊勢の國長嶋と云所にゆかりあれば先立て行に、

行き〳〵てたふれ伏すとも萩の原　曾良

と書置たり。行ものゝ悲しみ、殘ものゝうらみ、隻鳧(雙鳧ノ誤)のわかれて、雲にまよふがごとし。予もまた、

今日よりや書き付け消さん笠の露

大聖持(寺)の城外、全昌寺といふ寺にとまる。猶加賀の地也。曾良も前の夜此寺に泊て、

終宵秋風聞くやうらの山

と殘す。一夜の隔千里に同じ。吾も秋風を聞つゝ、衆寮に臥ば、明ぼのゝ空近う、讀經聲すむまゝに、鐘板鳴て食堂に入。けふは越前の國へと、心早卒にして堂下に下るを、若き僧ども紙硯をかゝえ、階のもとまで追來る。折節庭中の柳散れば、

庭掃て出るや寺に散柳

とりあへぬさまして、草鞋ながら書捨つ。

越前の境、吉崎の入江を舟に棹して、汐越の松を尋ぬ。

終宵嵐に波をはこばせて
月をたれたる汐越の松　西行

此一首にて數景盡たり。もし一辨を加るものは、無用の指を立るがごとし。

丸岡天龍寺の長老、古き因あれば尋ぬ。又金澤の北枝といふもの、かりそめに見送りて、此處までしたひ來る。所々の風景過さず思ひつゞけて、折節あはれなる

る作意など聞ゆ。今既別に望みて、
　物書て扇引さく余波哉
五十丁山に入て、永平寺を禮す。道元禪師の御寺也。邦機(畿)千里を避てかゝる山陰に跡をのこし給ふも、貴きゆへ有とかや。
福井は三里計なれば夕飯したゝめて出るに、たそがれの路たど〱し。爰に等裁と云古き隱士有。いづれの年にか、江戸に來りて予を尋。遙十とせ餘り也。いかに老さらぼひて有にや、將死けるにやと人に尋侍れば、いまだ存命してそこ〱と敎ゆ。市中ひそかに引入て、あやしの小家に夕皃へちまのはえかゝりて、鷄頭はゝ木ゞに戸ぼそをかくす。さては此うちにこそと門を扣ば、侘しげなる女の出て、いづくよりわたり給ふ道心の御坊にや。あるじは此あたりの何がしと云ものゝ方に行ぬ。もし用あらば尋給へといふ。かれが妻なるべしとしらる。むかし物がたりにこそかゝる風情は侍れと、やがて尋あひて、その家に二夜とまりて、名月はつるがのみなとにとたび立。等裁も共に送らんと裾おかしうからげて、路の枝折とうかれ立。漸白根が嶽かくれて、比那が嵩あらはる。あさむづの橋をわたりて、玉江の蘆は穗に出にけり。鶯の關を過て、湯尾峠を越れば燧が城、かへるやまに初鴈を聞て、十四日の夕ぐれつるがの津に宿をもとむ。その夜月殊晴たり。あすの夜もかくあるべきにやといへば、越路の習ひ、猶明夜の陰晴はかりがたしと、あるじに酒すゝめられて、けい(氣比)の明神に夜參す。仲哀天皇の御廟也。社頭神さびて、松の木の間に月のもり(れ)入たる、おまへの白砂霜を敷るがごとし。往昔遊行二世の上人、大願發起の事ありて、みづから草を刈、土石を荷ひ、泥渟(濘カ)をかはかせて、參詣往來の煩なし。古例今にたえず。神前に眞砂を荷ひ給ふ。これを遊行の砂持と申侍ると亭主の語りける。
　月淸し遊行のもてる砂の上
十五日、亭主の詞にたがはず、雨降。
　名月や北國日和定なき
十六日、空霽たれば、ますほの小貝ひろはんと種の濱に舟を走す。海上七里あり。天屋何某と云もの破籠小竹筒などこまやかにしたゝめさせ、僕あまた舟に取のせて、追風時の間に吹着ぬ。濱はわづかなる海士の小家にて、侘しき法花寺あり。爰に茶を飲、酒をあたゝめて、夕ぐれのさびしさ、感に堪たり。
　寂しさや須磨にかちたる濱の秋
　浪の間や小貝にまじる萩の塵
其日のあらまし、等裁に筆をとらせて寺に殘す。

露（略）通も此みなとまで出むかひて、みのゝ國へと伴ふ。駒にたすけられて、大垣の庄に入ば、曾良も伊勢より來り合、越人も馬をとばせて、如行が家に入集る。前川子荊口父子其外したしき人々、日夜とぶらひて、蘇生のものにあふがごとく、且悦び且いたはる。旅の物うさもいまだやまざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮おがまんと、又舟にのりて、

蛤のふたみにわかれ行秋ぞ

からびたるも、艶なるも、たくましきも、はかなげなるも、おくの細道みもて行に、おぼえずたちて手たゝき、伏て村肝を刻む。一般は蓑をきる／＼、かゝる旅せまほしと思ひ立、一たびは座してまのあたり奇景をあまんず。かくて百般の情に鮫人の玉を翰にしめしたり。旅なる哉。器なるかな。只なげかしきは、かうやうの人のいとかよはげにて、眉の霜の置そふこそ。

元祿七年初夏　　素龍書

此巻は古師芭蕉翁の紀行にして、素龍淸書す。書の長五寸五分、はゞ四寸七分、紙の重五十三、初終に白帋あり。行成の表帋、紫の糸を以てとぢ、外題は金の眞砂ちらしたる白地に、みづから奥の細道と書、年月頭陀の内にかくして、行先／＼に隨身し給ふ。元祿七年水無月、予が方に偶居まし／＼て、かつ／＼ほのめかし給ふを、書寫の事深く乞奉りけるに、同じ年の神無月、難波のあしのかりねに心地なやみ給ひぬと聞えぬれば、急ぎとぶらひまかりけるに、枕近う呼給ひて、けふ我やまひ頻なり。汝日ごろ此集の求ふかし。今將に足下に讓りなん。不思議にもながらふるためしもあらば、寫しとゞめて本の書を返すべし。書は兄の慰にとて古鄕に殘し置ぬれば、つと／＼に倡送るなるべしと聞え給ふ。かたじけなくも悲しくもかしこまり、やがて寫しとゞめて、めで度此巻は捧侍りなんと涙を落しぬ。かくて遷化の後、兄の許へ文して乞奉りけるに、今はかうやうのものをこそ、しばしとゞまるべき老のかたみともなぐさみ侍れば、いさゝか手をはなち侍らんも淺間しく覺られぬれど、遺言なれば送りやりぬ。且は奥羽の旅寐の夢の跡もなつかしく、且は門葉の人々の手跡もめづらしと見まほしければ、予に書寫して送り侍るべしと也。然ばふたゝび能書をゑらぶによしなく、やゝその製をたがへずといへども、なを誤字落字の多からん事を恐れ侍るのみ。

濡つ干つ旅やつもりて袖の露

元祿八乙亥年九月十二日

於嵯峨落柿舍書寫焉　門人去來拜

井筒屋が家に傳りし奥の細道板行のするに、素龍が跋あり今畧之とあり。としごろその文章のゆかしかりけるに、去年の冬伊賀の上野に掛錫の折ふし、古き反古の中に此細道の原本を得たり。見るに素龍の跋、去來の傳來の因縁を書たるものなり。見るにむかし忍ばしく、あらたに寫して此書の奥にくはふ。

明和七寅年十月翁忌の日

湖南義仲寺の廟前にて

蝶夢書之

奥細道拾遺　全一冊出來

奥細道菅菰抄　全二冊出来

同附録　全一冊追テ出來

寛政元年酉仲秋再板

諧仙堂　藏板

洛陽蕉門書林

井筒屋庄兵衛

橘屋治兵衛

浦井徳右衛門

書林

京都寺町通佛光寺　河内屋藤四郎
江戸日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛
同　貳丁目　山城屋佐兵衛
同　貳丁目　須原屋新兵衛
同　南傳馬町壹丁目　山城屋政吉
同　大傳馬町貳丁目　丁子屋平兵衛
同　芝神明前　岡田屋嘉七
同　和泉屋吉兵衛
大阪心齋橋筋本町角　河内屋藤兵衛
大阪心齋橋筋博勞町角　河内屋茂兵衛版

嵯峨日記

嵯峨日記

（原本は巻物にして標題なし。）

元禄四辛未卯月十八日、嵯峨にあそびて去來が落柿舍に到。凡兆共ニ來りて、暮に及て京ニ歸る。予は猶暫とゞむべき由にて、障子つゞくり（原本「はり替」とあるを消して「つゞくり」と改訂せり）葎引かなぐり、舍中の片隅一間なる處伏處ト定ム。机一、硯、文庫、白氏集（文の

字脱か）本朝一人一首、世繼物語、源氏物語、土佐日記、松葉集を置、并唐の蒔繪書たる五重の器にさまぐの菓子ヲ盛名酒一壺盃を添たり。夜るの衾調菜の物共、京ゟ持來りて乏しからず。我貧賤をわすれて淸閑ニ樂。

十九日　午半、臨川寺ニ詣。大井川前に流て、嵐山右ニ高く、松の尾里につゞけり。虛空藏に詣ル人往かひ多し。松尾の竹の中に小督屋敷と云有。都て上下の嵯峨ニ三所有。いづれか慥ならむ。彼仲國ガ駒を

[illegible]し 松尾の竹の中ニ
小督屋敷と云有。都テ
上下の嵯峨ニ三所有之
いづれか慥ならむ。彼仲國
駒をとめたる處とて
駒留の橋と云此あたりに
侍れハ暫是によるべき
にや墓ハ三間屋の隣
藪の内にありしるしニ
櫻を植たりかしこくも
錦繡綾羅の上ニ
起臥して終藪中の
塵あくたとなれり昭君
村の柳巫女廟の花

とめたる處とて、駒留の橋と云此あたりに侍れば、暫是によるべきにや。墓は三間屋の隣、藪の内にあり。しるしニ櫻を植たり。かしこくも錦繡綾羅の上に起臥して、終藪中の塵あくたとなれり。昭君村の柳、普（巫か）女廟の花の昔もおもひやらる。

うきふしや竹の子となる人の果

嵐山藪の茂りや風の筋

斜日に及て落舍（柹の字脱か）ニ歸ル。凡兆京より來

去來京ニ歸る。宵ゟ伏。

廿日　北嵯峨の祭見むと羽紅尼來ル。

昔もおもひやらる
うき節や竹の子となる人の果
嵐山藪の茂りや風の筋
斜日に及て落舎ニ
帰ル凡兆京より来
去来京ニ帰ル宵ヨリ
伏
廿日 北嵯峨の祭見んと
羽紅尼来ル
去来京より来ル途中
の吟とて語る
つかみあふ子共の長や麦畠

去來京より來ル。途中の吟とて語る。

つかみあふ子共の長(たけ)や麥畠

落柿舎ハ昔のあるじの作れるまゝにして、處々頽破ス。中々に作(つくり)みがゝれたる昔のさまより、今のあはれなるさまこそ心とゞまれ。彫せし梁、畫(ゑがけ)ル壁も風に破れ、雨にぬれて、奇石怪松も葎の下にかくれたるニ、竹縁の前に柚の木一もと、花芳しければ、

柚の花や昔しのばん料理の間

ほとゝぎす大竹藪をもる月夜

尼羽紅

又やこん覆盆子あからめさがの山

去來兄の室(『一葉集』等「方」とす) より。菓子調菜の物など送らる。

今宵は羽紅夫婦をとゞめて、蚊屋一はりに上下五人擧り伏たれば、夜もいねがたうて、夜半過ゟをの〳〵起出で、晝の菓子盃など取出て、曉ちかきまではなし明ス。去年の夏凡兆が宅に伏したるに、二疊の蚊屋に四國の人伏たり。おもふ事よつにして夢もまた四種。と書捨たる事共など云出してわらひぬ。

明れば羽紅凡兆京に歸る。去來猶とゞまる。

去来兄の室より弟子
何某の打とて送らる
今宵ハ羽紅夫婦をとゞめて
蚊屋一はりに上下五人挙り
伏たれハ夜もいねかたうて
夜半過よりをの／＼起出て
昼の菓子盃なと取出て
暁ちかきまではなし明ス
去年の夏凡兆か宅に
伏したるに二畳の蚊屋に
四国の人伏たり おもふ事
よつにして夢もまた
四くさと書捨たる事
なと云出してわらひぬ
明れハ羽紅凡兆京に帰る

廿一日

昨夜いねざりければ、心むづかしく、空のけしきもきのふに似ズ朝より打曇り、雨折〳〵音信れば、終日ねぶり伏たり。暮ニ及て去來京ニ歸る。今宵は人もなく、晝伏たれば夜も寢られぬまゝに、幻住庵にて書捨たる反古を尋出して慰。（原本「慰」の左傍に「清書」と小さく書せり。改訂の意ならん。）

廿二日　朝の間雨降。けふは人もなく、さびしきまゝにむだ書してあそぶ。其ことば、

喪に居る者は悲をあるじとし、酒を飲ものは樂

（をの字脱か）あるじとす。（原本「愁に住スル物は愁をあるじとし、喪に住スルものはもをあるじとス」とある左傍に、、、を記して抹消の意を示し、右傍に上記の如く書せり。『一葉集』等には、上記「喪」と「酒」との二項の次に、抹消したる「愁」の一句を加へ、尚「徒然に住するものはつれづれを主とす」の一句を添へたり。長き傳寫の間に錯誤を生ぜしならん。）さびしさなくばうからまし。と西上人のよみ侍るは、さびしさをあるじなるべし。又よめる、

山里にこは又誰をよぶこ鳥
獨すまむとおもひしものを

獨住ほどおもしろきはなし。長嘯隱士の曰。客は

人もなくさびしきまゝにむだ
書してあそぶ其ことば
こゝろえ
喪ニ居ル者ハ悲をあるじとし酒を飲ものハ樂をあるじとす
愁ニ住スル物ハ愁ヲあるじとし閑ニ住スル
あるじハ閑寂ニ住スル
ものは閑をもてあるじとす
さびしさなくばうからまし
と西上人のよみ侍るは
さびしさをあるじなるべし
又よめる
山里にこは又誰をよぶこ鳥
獨すまむとおもひしものを
獨住ほどおもしろきはなし
長嘯隱士の曰客は半日
の閑を得ればあるじは

半日の閑を得れば、あるじは半日の閑をうしなふと。素堂此言葉を常にあはれぶ。予も又、

うき我をさびしがらせよかんこどり

とはある寺に獨居て云し句なり。

暮方去來ゟ消息ス。

乙州ガ武江より歸り侍るとて舊友門人の消息共あまた届。其内曲水狀ニ、予ガ住捨し芭蕉庵の舊き跡尋て、宗波に逢由。

昔誰小鍋洗しすみれ艸

又いふ。

我が住所弓杖二長計にして楓一本より外は青き色を見ずと書て、

若楓茶色になるも一盛

嵐雪が文ニ、

狗脊の塵にえらるゝ蕨哉

出替りや稚ごゝろに物哀

其外の文共、哀なる事、なつかしき事のみ多し。

廿三日

手をうてば木魂に明る夏の月

（原本「夏の夜や木魂に明る下駄の音」とあるを消して、右傍にこの句を書せり。『一葉集』等二句併せ記す）

竹(の子)や稚時の繪のすさみ

一日〳〵麦あからみて啼雲雀

(原本「麦の穗や泪に染て啼雲雀」とある左傍に、小さく「一日〳〵麦あからみて啼」と記して「雲雀」につゞけたり。改訂ならん。『一葉集』等二句併せ記す)

能なしの寝たし我をぎやう〳〵し

題落柿舍　　凡兆

豆植る畑も木部屋も名所哉

(『一葉集』等には「題落柿舍」の前に「廿四日」と記せり。)

暮に及て去來京ゟ來ル。

膳所昌房ヨリ消息。

[illegible]

膳所 昌房ヨリ消息

大津尚白ヨリ消息有

凡兆来ル 堅田本福寺訪テ其泊

凡兆京ニ帰ル

廿五日

大津尚白ヨリ消息有。

凡兆來ル。堅田本福寺訪テ其泊。

凡兆京に歸ル。

（「一葉集」等には「堅田本福寺訪ふ春伯凡兆京に歸る」とす。）

廿五日

千那大津ニ歸。

史邦丈草被訪。

題落柿舍　丈艸

深對峨峯伴鳥魚（原本「深入」の「入」を消して右傍に「對」と書せり。）

就荒喜似野人居
枝頭今欠赤虬卵
青葉分頭堪學書（『一葉集』等「分」を「々」とす。）

尋小督墳　　仝

強攪怨情出深宮
一輪秋月野村風
昔年僅得求琴韻
何處孤墳竹樹中

芽出しより二葉に茂る柿の實　　史邦

途中吟　　文艸

何処孤墳竹樹中
史邦

芽出しより二葉に茂る柿の実

丈草

途中吟

杜宇啼や榎も梅桜

黄山谷之感句

杜門覔句陳無已対客

揮毫秦少游

乙州来りて武江の咄幷

燭五分俳諧一巻其内ニ

半俗の膏薬入ハ懐に

臼井の峠馬ぞかしこき　其角

腰の簀に狂ハする月

杜宇啼や榎も梅櫻

（『一華集』等「芽出し」の句を丈草、「杜宇」の句を史邦とす。）

黄山谷之感句

杜門覓句陳無已、對客揮毫秦少游。

乙州來りて武江の咄。幷燭五分俳諧一卷。其内ニ、

半俗の膏藥入は懷に

臼井の峠馬ぞかしこき　其角

腰の簀に狂はする月

野分より流人に渡ス小屋一　同

宇津の山女に夜着を借て寝る

偽せめてゆるす精進　同

申ノ時刻ヨリ風雨雷霆、雹降ル。雹ノ大イサ三分（衍か）匁有。

龍窑を過る時雹降。

（原本次行に「大ナルカラモ、ノコク（「ゴトク」ならん）少（小か）キハ柴栗ノゴトシ」と記して、「雹ノ大イサ」の雹字左下より、「大ナル」の大字上端に曲線を引きて、聯絡を示せり。「大イサ三匁有」を改訂したるならん。）

廿六日

芽出しより二葉に茂る梯ノ實　史邦

畠の塵にかゝる卯の花　蕉

蝸牛頼母しげなき角振て　去

人の汲間を釣瓶待也　丈

有明に三度飛脚の行哉らん　乙

（原本「飛脚や行ぬらん」とある右傍にかく改訂す。『一葉集』等「芽出し」の句を丈草とす。）

廿七日

人不來、終日得閑。

廿八日

夢に杜國が事をいひ出して、涕泣して覺ム。

里迄したひ來りて、夜は床を同じう起臥、行脚の勞を
ともにたすけて、百日が程かげのごとくにともなふ。
（原本「百日片時も離れず」とあるを、「片時」以下大字の左
傍に、、、を記して抹消の意を示し、「百日」の下に印を附
して、其右傍に小さく「が程」以下十三字を書せり。）ある
時はたはぶれ、ある時は悲しび、其志我心裏に染て、
忘るゝ事なければなるべし。覺て又袂をしぼる。

廿九日　一人一首奥州高館ノ詩ヲ見ル。

晦　日　高館聳天星似冑衣川通海月如弓。其地風景
聊以不叶。古人とイヘ共不至其地時は、不
叶。其景。（原本廿九日晦日の日附と其下の記

事と、墨痕濃淡の差あり。同時に記したるものにあらざるを知るべし。）

朔（五月朔なり）

江州平田明昌（照）寺李田（由）被問。

尚白千那消息有。

竹ノ子や喰残されし後の露　李由

頃日の肌着身に付卯月哉　尚白

□岐（原本上の一字、「遣」の字の「ｌ」を引忘れたるに似たり。『一葉集』等「還岐」とす。）

またれつる五月もちかし聟粽　同

二日

曾良來リテよし野ゝ花を尋て、熊野に詣侍るよし。

武江舊友門人のはな□（虫損）（「し」か）彼是取まぜて談ズ。

くまの路や分つゝ入は夏の海　曾良

（原本「大峯」とある左傍に、、を記して改訂の意を示せり。）

大峯やよしの（の）奥を花の果

夕陽にかゝりて、大井川に舟をうかべて、嵐山にそふて戸難瀬をのぼる。雨降り出て、暮ニ及て歸る。

一　三日

昨夜の雨降つゞきて終日終夜やまず。猶其武江の事

ども問語(とひかたる)、既に夜明(あく)。

一 四日

宵に寝ざりける草臥に終日臥。晝ゟ雨降止ム。

明日は落柿舎を出んと名殘をしかりければ、奥口の

一間〳〵を見廻りて、

五月雨や色帋へぎたる壁の跡

（原本この次に「猶去來が落柿舎の記有、爰にしるす。」
の文字あり。）

明治四十五年四月十八日上梓

城田倒止㊞

五月雨や色帋へぎたる　壁の跡

猶去來か落柿舎

の記有　爰にしるす

明治四十五年四月十八日上梓

城田倒止

書簡集

書簡集解説

書簡は多くの場合、不用意の間に筆を走らせるものでありますから、往々修辭的缺陷があり、又誤記などが見出されるのでありますが、それだけに其筆者の平常の姿が露呈されてをるのであります。近來全集には必ず書簡の一部門を設ける事であります。之は外國の事例に倣ひましたのでありませうが、我國にかきましても、偉人の書簡は尊重され來つたのであります。外國の意味の上に尙ほ筆蹟鑑賞と申す大なる意味が加はるのでありますから、我國の書簡に對する蒐集慾は甚だ强いのであります。此意味に於きまして芭蕉のものは其終焉直後から盛んにあさられ來つたやうであります。しかし之を取集めて一書となしたものはたゞ闌更の『芭蕉翁消息集』一種のみでありますが、芭蕉の書簡の數は其數倍に上つてをります。依て私は闌更のものを收錄すると共に、補遺を編して之に附ける事にいたしたのであります。

▽芭蕉翁消息集　　半紙本　一冊

天明六年の上梓であります。編者闌更の事は『俳文俳句集』解說に述べましたから

省略しませう。此書は闌更が寓目した書簡を輯めたものゝ由でありまして、たつた二十五通に過ぎません。

▽書簡集補遺

今回取集めましたのでありますが、其大部分は從來世に知られてをりましたものであります。たゞ多少の取捨を試みたのであります。少し說明を下しませう。

一、『新山家』など板本俳書の間に編入されてをりますものは、其原本を見るを得なかつたものを除きまして皆採錄いたしました。併し『笈日記』『蕉翁全傳』のものは外篇及附錄に其書全部を編入いたしてをりますから省きました。

二、松村桃鏡は芭蕉の甥猪兵衞の孫と申す事であります。其桃鏡が出しました所の『芭蕉翁眞跡集』は書簡十二通を收めてをります。が、私共が見ても芭蕉の筆蹟ではなからうとおもはれます書簡を收めてありますので、其史的價値に多少の割引を致さねばならないのであります。

三、重厚の『もとの水』は芭蕉の句を集めました間に、短い書簡を挿みましたものであ

りますが、其挿入のもの十二通を收錄いたしました。（此書の事は俳句集の部にも記してあります）

四、士朗の『枇杷園隨筆』に書簡が六通編入されてをります。其二三に就ては士朗は眞蹟を鑑賞し得たのであらうと考へられるのであります。

五、湖中の『一葉集』は其消息の部に六十八通の書簡を編入いたしてをるのでありますが、例によりまして其出自の明示がないのであります。今諸書と對校いたした上、十六通だけが其出自を明かに致し得られないのであります。依て此十六通を『一葉集』よりと致しました。此書にあります許六宛「神矢根」云々のものは、西村燕々氏の努力によりまして、其出自を知り、完全なるものを採錄する事を得ましたのは、俳壇の爲めに大に喜ぶべき事であります。『木葉漬』の一通が卽ちそれであります。玆に西村氏に對して感謝を表します。（此書簡中に「五ツ物」の詞があります。研究すべきものであります。）

六、白亥の『俳諧眞澄の鏡』は、上州館林の高山家に藏されてをります芭蕉や杉風の眞蹟などを板にいたしたものであります。其高山家は高山傳右衛門麋塒の後裔であります。書簡のあとに「本式俳諧之次第」其他傳書らしいものが附けてありますが、玆には

省略いたしました。

七、池永大蟲の『芭蕉翁眞蹟拾遺』は稿本のまゝ某氏の愛藏する所で、故沼波瓊音先生の『芭蕉全集』書簡集に編入いたしたのが世に出たはじめであります。茲に二十五通を採錄いたしました。大蟲は信濃の人、江戸へ出て兒島大梅に從ひました。藻魚庵と號しました。明治三年十二月十八日歿しましたが享年はわかりません。『芭蕉年譜』『晋子年譜』等の稿本があります。私は『晋子年譜』上卷の稿本を持つてをります。

八、諸家襲藏の眞蹟は多數に上るやうでありまして、只今公表されてをるものも相當あります。其中から二十一通を採錄いたしました。中にも中邑氏のものは貴重な文獻であります。

九、『十論爲辨抄』『芭蕉談』後篇『平安二十歌仙』序文『句選年考』等所載のものは採錄いたしませんでした。松岡大蟻の『翁反古』のものは全然問題にならないのであります。むしろ桃鏡のものでも又蘭更のものでも、不審を打てばいくらでも打てるのであります。むかし澤家のものに不審を打つたものがありましたので、澤家では最近迄他見を許さなかつたさうであります。それほど芭蕉の書翰には疑問が多いのであります。大に今後の研究に俟つ次第であります。大河寥々氏の出された『芭蕉翁雜考』は芭蕉書翰の研究に就ての好侶件であります。

芭蕉消息集

闌更先生なる者は滑稽者の流なり。自ら其道を以て一時に鳴る。其草を拂うて玄に參し、南方を經歷する五十三、古を好むに敏にして、其蘊奧を求め、細大捐てざる者なり。而も蕉翁の句語の紙苑に遺るは則ち片言隻字と雖、必ず拾うて之を錄し、既に案に堆し。其門下に遊ぶ者、請らて其什が一を得て、世に行はること尙し。猶望蜀の意あり。尺牘短簡を集め、之を木に上し、題するに消息集を以てす。抑ゝ翁の江湖に漂泊し、風塵を蟬脫し、肱を曲げて之を枕とし、悠々として消閑する、之を譬はゞ夢に於て胡蝶となりて、栩々然として逍遙自適する者のみ。芳野の弄花、姨山の嘯月、其遺す所の佳句を玩味すれば、則ち玉の如く金の如し。遂に一家の風流を作し千載に芳し。豈嘗に一時を風

靡するのみならんや。三尺の童子も其道の貴ぶべきを知る。今や句選を閲し、猶詳ならざる所あり。而して曰ふ後を俟つと。予竊に之を念ふ、後世此道に遊息する騒人、懸河の辯に任せ、隨意巧説時人を縢せんと欲するも亦知る可らず。翁の垂示、佶屈聱牙、自ら憤々悱々の徒の同時の機を啐啄するを待つに非ざるよりは、則ち其道存するが若く、亡きが若からん。蓋し其契を窺ふや難し。この一小冊子を一覽すれば、千古此道の疑闇忽焉として大悟せん。猶古を視る所あるを尙んで、之を藝苑に收むる未し。關更先生の世に公にして、廣く之を遠隔不朽の具に致さんと欲するか。

天明丙午夏六月也

志陽錦城外　東溪岩嘉玄識

南勢田康年書

芭蕉翁消息集

洛東　半化坊闌更輯

○江州辻村梅仙所持

一御俳諧よくぞやおもひ切て長〻敷物を點被仰越候。乍去餘感心見るも面白く、判詞不覺手の舞足の踏事をしらず候。か程上達存もよらず、凡天下の俳諧にて御座候間隨分御敬候て御はげみ可被成候。秋登り候はゞ一板行とすゝみ申候。處〻根深き句ども見へ申候て天晴御作、愚毫併耳投筆計に御座候。句評之事、點は相違有物にて御座候。其段常の事ながら其元にて佛ある事、愛元にては新敷、其地にて珍らしき句、此地にては類作有樣の事も御座候物に御座候へば、句評は心にたがふ事も可有御座候。和歌の三神前後の點數かぞへ見不申、いづれの勝負しらず候。此處におゐて指南一言も無御座候。只自是行先大切に御座候間能〻御心をめぐらし御工案御尤存候。句作に作をこしらへ句毎に景をのみ好候はゞ、頓て古く成べし。めづらし過候はゞ飽心出可申、こしやくに成候はゞ後句石で手をつめたるやうになるべし。俳諧地をよく御つゞけ被成、處〻風景句作ほのか成やうにあれかしと此後の事を被存るゝのみに御座候。此外申事無御座候へば不具。頓首。

三月十四日　　芭蕉庵　桃青

東藤子雅丈

桐葉子雅丈

○加賀城下宮竹屋伊右衛門所持

何處持参之芳翰落手、御無事之旨珍重存候。類火難に御のがれ候よし是又御仕合難申盡候。拙生いまだ漂泊やます、湖水のほとりに夏をいとひ候。猶こち風に身をまかすべきやと秋立頃を待かけ候。且兩御句珍重、中にもせりうりの十錢生涯かろき程、我が世間に似たれば感慨不少候。口質他に越ていよ〳〵風情可被懸御心。愚句、

京にても京なつかしやほとゝぎす　　はせを

季夏廿日

小春雅丈

十錢の得て芹うりの戻りけり　　小春

(此句は書簡中のものにあらず。闌更の追加したるものならん。)

○加賀龜屋茂休所持

逍遙遊

道に逍遙の二字ある事は、心に天遊あり

て世をおもしろからむといふ事也。天はこれを得て月清く地は是を得て花咲り。鳶と魚とはひらめきて遊ぶもの也、野馬は風にうかれて遊ぶものを、草くふ牛の飽てしづかなる、蚯はその尾にあそばむとすれば、うしのぬしはとまらせてうたん事を思ふ。はたとうたれてかなしからむは、遊ぶ時の心にかへよ。そのぬしの牛にはぢかれてふたつなき鼻のかけたるためしもあらむに、すべて遊ぶ事は先にしてくるしむとはのち也。誰か遊んでくるしまざらん。くるしまずして遊ぶ人は世にありて何人ぞや。世に實あり虚あり實にあそぶ人は虚にくるしむ。たれか實なく虚にすゝむ人は、ある時のあるにぞいとゞくるしむべき。虚に實有、實に虚あらば、虚實は虚にして自在なるべし。むかし莊周が胡蝶と遊びしも、観音の花によめ入せられしも、もとより虚をもて虚をとかねば、まして實をもて實をとかず。かゝる聖人の虚をさしていまの人もいふてあそばざらむや。此故に春になりては川狩にあそぶ。茸狩の時は浪人をあそばしめ鷹狩の時には大名を遊ばしむ。寔よく天の遊ぶものにして貴賤貧福は人のくるしむなり。

前略逍遙遊先書は反古に可被成候。書直し進候。我もこれに遊ぶものに候へばふかくくるしみも候はずゆへおもしろき事なく候。御やくそくの茶はいかゞに候や待申候。以上。

三月廿日　はせを

惟然丈

（逍遙遊一篇の文章芭蕉にあらざるべし。支考の『和漢文藻』に東花坊の名を以て「逍遙遊序」一篇あり。文章殆んど同じ。可考。）

○加賀左菊所持

月をわび身を侘、つたなきをわびてわぶとこたへんとすれど問ふ人もなし。猶わび／＼て、

わびてすめ月侘齋がなら茶歌

● はせを

と申候。以上。

九月十九日

去來様

○能登七尾寸行所持

明星やさくらさだめぬ山かつらと云し句山中の美景にけをされ、古き歌どもの信を感ぜし叙、明星の山かつらに明残るけしき、此句のうらやましく覺候也。

はせを

其角様

○越中ニアリ

御手翰辱拜見、夜前は得閑談珍重不少候。明日御立可被成之旨後刻書面御相談可仕候。追付御入來是にて御ねころび可被成候。像讃之義發句珍しからず難義仕候。ケ様之事にてもかき付可申や。

（庵の秋か）秋の色ぬかみそつぼもなかりけり

しづかさやゑかゝる壁のきり〲す

御用捨なく可被仰下候。同じくは御免。外に白紙に思ふ事書、進上申度候。以上

即　時　　　芭　蕉 卞

句空社兄
上る

○辻村梅仙所持

一石淸水瀧本坊法師の許へある在家よりなた大豆壹籠おくりければ其返事に、

辨慶が七道具のなた豆は
日本一のからのものかな

さて〲おもしろき狂歌中〻及がたき事に思ひ侍る。しかし我も一句をせんとて狂歌の心をもちて、

辨慶は夏もかみこの羽織かな

これ情一ぱいにて候。むかしの人の口心には叶ひがたく候。かしく。

はせを

一近日芳野行脚存立候間金子二歩御かし可給候。おしつけ貰ひ溜返濟可申候。されど我等事に候へば得たす閒鋪も候。以上

はせを

去來様

○美濃木因家ニアリ

當地ある人附句あり。此句江戸中聞人無御座候。予に極評望來候得共愚も此附方意味難辨、依之御内意頼候。貴丈御閑定之旨趣ひそかに御しらせ可被下候。東武にひろめて愚の手柄に仕度候。

其附句

蒜のませきに鳶をながめて
鳶のいる花の賤屋とよめりけり

二月上弦　　　はせを

木因様

其返書

華牒拜見、或人の付句貴丈御閑定無、依之愚評之義被仰越予猶考に落不申候故乍殘念及返進候。隨て十一日（「去」の誤寫か）頃在京之節古筆相求申候故京中定る人無御座候。依之貴丈之御内意賴進候。何之御宇の御撰集筆者等貴丈御定之旨趣ひそかに御しらせ可被下候。花洛にひそめて愚の手柄に仕度候。

其古筆　菜園集卷七春　俳諧歌

蒜のませきに鳶を眺て
鳶の居る花の賤屋の朝もよひ木をわる斧の音ぞ聞ふる

二月下弦　　　木　因

はせを様

稱美の詞

杭瀬川の翁こそ予がおもふ處にたがはず蔦の句の評感言、江戸衆聞人なしと申は聊いつはり、彼翁の心をはからん爲に委元にも同物つけたる人(マヽ)二方の道をないがしろにして、六ヶ敷事いはるゝなど嘲る野輩もたま〳〵有之、予が志しを了察の士も一兩人は在之候を、千里を隔て自慢書ちらしたるを、還て愚盲此道知たる人と定め置候へば、聊了簡引見んため書付遣し候處、愚案一毫の違無御座候。寔不淺候。以上。

自讃の詞　　はせを

古住達人花に櫻を付るに同意去を本意とせり。まして蔦に蔦を付て一物別意を附分ヶ、當時未來之作者に此句を似せさす古往今來未來一句の格いづれの時の秋風來て芭蕉の露もろく破れんとの一句、一生是のみ存ばかり候と書うち鼻たかくおごめき肩のあたり羽だゝする樣に覺へ候

飲酒一枚起請

もろこしわが朝にもろ〳〵の上戸達のさたし申さるゝさかもりにもあらず、又かちんをくひ茶をのみてのめる酒にもあらず、只往生極樂のためには南無阿彌陀佛とまうして、うたがひなく往生すると思ひとりて、一杯のむより外別のしさいは候はず。但三獻四種の肴など申事の候は酒宴も決定して珍らしき酒肴もとめたると思ふうちにこもり候なり。此外におくふかき大盃は、二尊の御あはれみにはづれ、本性をうしなひ候はんを愛せん人は、たとへ一代の法を學ずとも、一文不知愚鈍の身になして、下戸にも常にふるまはせて、唯一向に酒を吞べし。

右飲酒一枚起請は、尊朝親王御作のよし承候。尤さる人の許には、眞筆にて掛物にしてとこに掛り在之候。あまり〳〵面白き御作故、ちよと寫し來候。貴丈常々大酒をせられ候故、此御文句を寫して大酒は御無用に存候。仍一句、

朝がほに我は飯くふ男かな

いかゞ、委しき事は頓て御目にかゝり、萬々可申述候。以上。

十七日　　はせを

其角丈

貴墨辱拜見、御無事之由珍重に奉存候。其許滯留之内得閑談候而珍希(マヽ)申候。

一愚其元にての句、

から崎の松は花より朧にて　御覺可被下候

山路來て何やらゆかしすみれ草

其外五三句も候へども重而可申候。

一此秋此萩のあらそひ、右此道是非をあらそふも道のひとつにて御坐候へども、あながちに句論の好（恐らくは衍字）事愚意好しからず候間、兼而能ほどに御あらそひ御尤に候。

一其角へ御狀重而返狀可仕候。嵐雪他國へ罷候間不及貴報候。何やらかやらいまだ取込、舊友久〻咄どもさしつもり手透無御坐候。貴報賴存候。

一澁谷與茂作殿堅固に相見え、御手跡見覺候。以上。

五月十二日　芭蕉桃靑

千那貴僧

〇加賀ニアリ

乙州上津之節御細翰辱存候。其許大雪之由一尺斗は此方へ申請度候。愈御無事に御勤被成候哉、拙者持病／＼とのみ額しかめたる斗に御座候。歳旦等いかなる風流にて御座候や。此方年〻の事故當春は非番にいたし、たれせつく者も無御座候。是まで色〻の骨折さへくやしき事に覺候。貴樣集の事不埒成樣に御おもひ候半と氣の毒に奉存候。心緒句空僧まで申達候間御內談可被成候。何とぞ暮春の初は上京と存候。頃日寒氣故持病散〻、神以氣分重く御座候て早〻如此御座候。牧童へ可然御心得なされ可被下候。以上。

正月三日　芭　蕉

追而書

其元にて書申候物は御燒不被成候よし。米櫃はやけ可申と存候。此度一二枚は書進申候。急に書候て例之通見ぐるしく候。以上。

〇大津亘洲家珍

此處よりも愚墨進閲候處に、先よりも預音問御對顏之心地にて拝見仕、愈〻御堅固被成御座候旨千萬目出度存候。竹助殿御沙汰いづれの御狀にも不被仰下候。御成人わるさ日〻につのり可申と存候。歳旦三物の事先書に具さに申上候愚句、年／＼口にまかせ心にうかぶばかりに申捨候へども、是を歳旦の名殘にもやと存候へて精を出し候所御耳にとゞまり候へば、甲斐ある心地せられ悅びに不堪候。

一幻住庵上葺被仰付候由珍重存候。うき世のさた少〻遠きは此山の事と折〻のねざめ難忘候。露命に懸り候はゞふたゝび薄雲の瞬をと被存候。

一風雅の道筋大かた世上三等に相見へ候。點取に晝夜をつくし勝負に道を見ずしてはしり廻るもの有。彼等は風雅のうろたへものに似候得ども、點者の妻子をはごくみ店主の腹をふくらし候へば、ひが事せんにはまさりたるべし。又其身富貴にして、目にたつなぐさ

み世上をはゞかり、人事いはんにはしかじと日夜に二巻三巻點取、（勝の字脱カ）たるものもほこらず負たるものもしひていからず、又取かゝり線香五分の間に工夫をめぐらし終に卽點などゝ興ずる事ども、偏に少年のよみがるたにひとし。されども料理をとゝのへ酒をあくまでにして、貧なるものをたすけ點者をこやしむる事、是又道の建立の一筋なるべきか。又志をつとめ情をなぐさめ、あながちに他の是非をとらず、誠の道にも入べき器なりと、はるかに定家の骨を探り西行のすぢをたどり、樂天が腸を洗ひ杜子が方寸に入べきやから、はつかに指をかぞへ十をふさず。君も則此十の指たるべし。能々御愼御修行專一に存候。

一路通事は大坂にて還俗いたしたるとの事致推量候。其志三年以前より見え來る事に候へば驚にたらず候。とても西行能因の眞似は成まじく候へば平生の人にて候。常の人が常の事をなすに何の不審か御さあるべくや、拙者においては不通仕まじく候。俗になり候へてなりとも風雅のたすけになり候はんはむかしの乞食よりまさり可申候。

二月十八日　はせを

曲水樣

○金城義夕所持

洒堂より書狀こし此度返翰共に遣し申候。いまだ御見舞にも不參候由沙汰のかぎりと申遣し候。

一正秀が子規の句驚入申候。夏中物むづかしさに何方へも文通不仕候所、此比のこ何事さしはさみ候や書狀もくれ不申候。此方いたはりて書狀不越候哉、其器量に應じておもひ斗申候。

一竹介殿御成人お染女御無事承度候。

霜月一日　はせを

曲水樣

芳翰辱徐々拜見致候。御老母樣御内室むすめ子御無事之由めでたく存候。拙者持病も暖氣に隨ひ少しヅヽ快氣に候間可安心候。

一乙州江戶へ立候付、跡の事御情に可被入と乙州方よりも申越、鐵のたてをつきならべて、拙者も安堵よろこび難盡候。

一歌仙さて〳〵感心仕申候。かほどまで爲はたらき、大切の風雅驚入申候。則付墨いたし候。乍去こゝもとにても人々取付候て、此返事の内も同名が茅屋ほこりの中へ大勢入込候而、御報も批判もしみ〳〵ならず候。疎なる處は御免被成可被下候。

一同名方へ被掛御意候清茶一袋さかな一種被遣、さて〳〵忝御厚志難盡候。茶は拙者賞翫いたし候。

一粟津草庵の事先は御深切之至忝存候。兎角拙者浮雲無住之境界大望故、如此漂泊いたし候間、其心に叶ひ候様に御取持奉頼候。必是につながれ心をうつし過ざる様の事ならば、如何様とも御指圖可忝候。しばらく足のとゞまる所は蜘蛛のあみの風の間に間にと存候へば、足駄の藏も藏ならず候。さすがの御人ゝ申もくどく候へば打まかせ候。（『芙蓉文集』には此次に左の如く續きたり。）

風雅此頃盛に思召候よし尤さこそと被存候。凡俗の人さへもてあそび候ものを、隨分御精御出し可被成候。及肩老右之段御傳可被下候。一傳仕度候。何角取重候間先ゝ早筆申殘候。以上。

二月十七日　　芭蕉

正秀雅丈

昌房探子兩士へ御心得可被下候。去年中御心に被懸御厚情世上がましく候へば不申盡候。心底には難忘候。以上。

前略

ふるさとこのかみが園中に三草の種をもりて、

春雨やふた葉にもゆる茄子種

此たねとおもひとなさじとうがらし

芋種や花の盛りを賣ありく

口にいへるまゝに申つゞけ候。御秀作御ゆかしく存候。以上。

三月廿三日　　はせを

嵐雪丈

○加賀金澤如本所持

池魚の災承、我も甲斐の山里に引うつりさま〳〵苦勞いたし候へば、御難義のほど察し申。されども燒にけりの御秀作斯る時に望、大丈夫感心、去來丈草も御作驚申斗に御座候。名歌を命にかへたる古人も候へば、かゝる名句に御替被成候へば、さのみをしかるまじくと存候。知音たれ〳〵此度の難にまぬかれずや、連中たしかなる事不承候間短紙も不遣候。能御傳達可被下候。以上。

四月廿四日　　はせを

北枝丈

やけにけりされども花は散すまじ　北枝

○加賀金城布流所持

此君舍より白米五斗發句一句

一に俵ふまへて越よとしの坂

かくめぐみたまふに、只四壁なるかりのすまゐには過たるとしだきながら、寐ざめごゝろよくて、

元日や疊の上に米俵　北枝

翁文の中（以下卽芭蕉の書簡）

さて〳〵感心不斜、神代のこともおもはるゝと云ける句の下にたゝん事かたく候。神代の句は守武神主身分相應に　情の奇なる處御座候。米俵は其元相應に姿の妙なる處有之候。別而歳旦歳暮不相應なるは名句にても感慨なきものに候。今年天下第一の歳旦なるべしと京大津の作者も致稱美候。不備。

正月二十四日　芭蕉

北枝様

誰人か菰着ています花の春

何人かともいかゞ、御評まち入申候。

菰を着てたれ人いますとも。

○加賀金澤茶や三右衛門家寶

前後略

然ば御約束之水雞笛贈給忝珍重存候。此さとの人ゝ聞馴ず、女子共も集り我を藝者の様に申おかしく候。行脚先國所により一向音をしらぬ人御坐候間、吹て聞せ可申と悦び申候。鹿笛も木曾より貰ひ申候。時鳥笛も御坐候はゞほしき物に候。水雞笛作る人は作るべくと存候。御面倒ながら是も御聞可被下候。出來候はゞ御賴可被下賴入申候。何にても相應望の物細工人へ謝禮致すべく候。殺生の道具ながら水雞笛鹿笛も只ふくはおかしく候。初鴈の聲水雞たゝくなど歌にも發句にも作る人の、さし竿にてとり、網にかけなどいたし候は、口と心と相違にて名句吐候ともうそつきと云ものに候へば、まことの風人から見ればあはれなることにて、たとへ殺さずとても雲に飛地にはしり候鳥を、ちひさき籠に入たのしびとなすは牢番も同じ事にて候を心付ず、籠をならべこれは二兩の駒鳥也これは五兩の黄鳥なりと云て、摺餌に小袖の襟おしぬぎ、高祿の人にもあさましきさまする人武林連中には有ものに候。かの開籠放白鷳の詩意など教訓可被成候。伊賀の家中の人ゝにも御座候間土芳にも此事度ゝ申遣候。後略

うぐひすや餅に糞する緣の先

二月十六日　芭蕉庵

一笑様

又武士は殺生するものなりと云人御座候へ共、魚鳥を捕へ候が腕がためにも成申まじく候。只心のいやしき故に候。それ〳〵の獵師御座候間これよりかひもとめ料理候事はつみにあるまじく候。

○加賀左菊家珍

前後文通略

附合十七體別紙に記進候。初心には見せ申されまじく候。術の叶ぬうちに此味を

付んといたし、却て一句も調ず附意もしれぬ事に成ろものに候。又むづかしきもの也。かゝる味はとても叶まじと退く人も有ものにて候。術叶ひ候後に扱ひ候へば、一卷のはこび甚むづかしき處にて、人の付なづみたるを或は響或は情などにて起して付て、變化おもしろく成申候。さもなき人は打越三句をおそれて、つまる處はいつも〳〵逃句のみ致し候は初心に見え、功者おこして二三句も附たる上に無理に付るも、炎天に砂道をたどるごとくなるものに候。能々御考御扱被成候はど、鬼に鐵棒にて可有之、門人の中にも五七人ならで沙汰致し不申候。名高くても付合の術さほどになき人、却て迷ひ可申と存候故に候。かくし申にては無御座候。十七體を得たる上が千變萬化の術を得る事に候。只付と付ぬといふ事斗知て、付合は千變萬化と口にて云人御座候。おかしく候。十七體の法もしらずして何とて千變萬化の働が出來可申哉。百韻千句に及ても附心一二體を出不申候。知たるものは笑ひ候。小器ははやくみつる輩おほく、後には人々あげて通し相手にならず、只四五人同心の連中にて互に他をそしり高慢になり、陰にては俳諧氣違などゝ名を付られ候もあさましく候。御連中萬御しめし可被成候。

六月二十七日　はせを

結ぶよりまづ歯にひゞく淸水哉

北枝様

○加賀帖茶所持

名月も態御隙に被成御越可被成由。下りはまたいつとも難定候間名月過にも成事可有御座候。越人も如此發句いたし候。

稗の穗の馬にがしたる氣色哉

愚句

猪もともに吹るゝ野分かな

如何に候や、能と申にては無御座候、先慰御目候。加生越人挨拶、

男ぶり水のむ顏や秋の月

八月四日　はせを

千那様

○加賀ニアリ

隱士秋の坊閑居御吊珍しく得芳意大慶仕候。先以御細翰忝候。御無事に候旨珍重不過之候。去年頃日はさかりと其元に罷在候。一とせの變化夢のごとくにて一入御なつかしく被存候。大火の跡いまだ萬々御心も靜なるまじく候。されども頃日は乙州參り候而又々會なども少々御座候由、愈御はげみ可被成候。世間ともに古びにより少々愚案も工夫有之候而心を盡し申候。其段粗乙州も心得申候間御噺可被成候。拙者儀山庵秋至候ては雲霧に

痛ゆ而病氣に障りゆ故近日出庵いたし、名月過には何方へなりとも風にまかせ可申と存ゆ。去ながら去年遠路につかれゆて、下血など度〻はしり迷惑いたしゆ而、遠境羈旅不叶ゆ間、東の方近くへそろ〳〵とたどり可申共存ゆ。無常迅速の妙(例カ)も御座ゆはゞ又〻重て得御意ゆ事も可有御座ゆ。隨分御無事に御勤可被成ゆ。諸善諸惡皆生涯の事のみ、何事も〳〵御樂可被成ゆ。少にてもむづかしくゆて早〻及貴報ゆ。

十月十七日　はせを

牧童様

(日附「十月」は「七月」の誤ならん。)

○加賀吉良所持

今日宇治へ参ゆ。貴丈にも御出被成まじくゆ哉。此元仙水にも被參ゆ筈約束申ゆ。大哉よりうぢへ直に杉風なども被參ゆ様に申來ゆ。貴丈御出ゆへば件の方勝手よく御存故一入に存ゆ。愚老は此中上林三入老所にて一句申ゆ。

ほたる見や船頭醉ふておぼつかな

右の句にて御座ゆ。野坡丈へは貴丈より御申越可被下ゆ。此中は手しびれゆ故筆跡も麁末にしたゝめゆ段御免ゆ。以上。

卯月二十一日　はせを

去來丈

○大津宰陀ニアリ

一愚句被成御覽ゆ由、させる事も無御座ゆへども出申しゆは、無事の有處を知せん爲に板木に顯しゆ。又一ツは京の門人去來など云ふものにそゝなかされ可申出ゆ。五百年來のむかし西行の撰集抄におほくの乞食をあげられゆに、愚眼故よき人見付ざる悲しさに二度西上人と思ひかへしたるまでに御座ゆ。京のものどもは蕪かぶりを引付の卷頭に何事にやと申由、あさましくゆ。

『前後の文長じ』

卯月十日　はせを

此筋丈

千川丈

たれ人かこも着ています花の春

○加賀獅吹所持

一松岡茶店にての句物書て扇引さくわかれかなと直し申ゆ。脇てには留にてゆ。てには留は脇にては革にて、神祇追善祝儀本式俳諧貴人の挨拶、すべて我より上たる人の發句にはせぬ事にゆ。我も只今にては共許の師にゆ間挨拶の脇にてには留はよろしからずゆ。外より彼是申もの御座ゆ而は兩人ともに不束に見え申ゆ。山中問答にも三ツ物の事御尋なく、我も心付不申ゆ。此度委し

く三ツ物傳別紙にて申入候。是にて第三文字留草の事も能わかり申候。山中問答へ御書加へ可被成候。去來丈草凡兆正秀なども問答見たがり申候。脇付替り候はゞ第三四句め付て可進候。御望みの兩吟はじめ可申候。春は西國望み御座候間、冬中調へ申度候。されども伊賀へ用事も御座候間伊賀を先に可致も難計候。ちと親類内用にて捨がたき事に御座候。伊賀便り次第に心得可申候。西國へは何卒同行に致度候間其御心得頼入候。左樣に候へば兩吟いそぎ申事もなく候。二十六七年以前太宰府へ參詣いたし候。外連二人我と三人にて歩行候へども、智音もなく候て見物所ばかり尋歸候。宗房時分の事に候へば處々發句留候へどもをかしからず、とゝのはぬ事のみにて一句も咄事なく候間、此度は吟じ直し度存念に候。其許同行においては十人にもまさり力をえ候事に候間、決定の御返事まち入候。又々問答可致候。萬子牧童秋の坊句空小春などの英雄へも能々御達したのみ存候。不具。

十月十三日　　はせを

北枝樣

書簡集補遺

書簡集補遺

芭蕉書簡集の單行本としては前揭のもののみ。他は諸板本に混載せるもの及び諸家愛藏の眞蹟也。其中より選擇此補遺を編したり。(他石)

▽其角『新山家』　一通

草枕月をかさねて露命恙もなく、今ほど歸庵に赴き、尾陽熱田に足を休る間、ある人我に告て圓覺寺大巓和尚、ことし睦月のはじめ月まだほのぐらきほど、梅の匂ひに和して遷化し給ふよし、こまやかに聞え侍る。旅といひ無常といひかなしさいふかぎりなく、折節のたよりにまかせ先一翰投机右而已。

梅戀て卯の花拜むなみだかな

四月五日　　はせを

其角雅生

▽路通『勸進牒』　一通

路通が曲水を訪ひし時、膳所より來りし旨、路通は記せり。此時芭蕉は膳所にあり、曲水路通の二人は江戶にありし也。(他石)

いね〳〵と人にいはれても猶喰あらす旅のやどり、どこやら寒き居心を侘て、

住つかぬ旅のこゝろや置火燵

まだ埋火の消やらず、臘月末京都を退出、乙州が新宅に春を待て、

人に家をかはせて我はとし忘れ

三日口を閉て題正月四日

大津繪の筆のはじめは何佛

金平が分別のごとくことしは休に致ゆて、歲旦おもひもよらずゆへば如此御座ゆ。

正月五日　　はせを

曲水樣

▽既白『蕉門昔語』　一通

一憎鳥之文御見せ感吟いたしゆ。乍去文章くだ〳〵しき所御座ゆて、しまりかねゆ樣に相見えゆ間先々他見被成まじくゆ。ことのほかよろしき趣向にて御座ゆ間拙者に可被掛御意ゆ。御文章に增補いたし拙者文に可致ゆ。もし又是非と思召ゆはゞ拙者文御覽被成ゆて其上にて又御改可被成ゆ。文の落付所、何を底意に書たると申事無御座ゆては、おどりくどき早物語のたぐひに御座ゆ。古人の文章に御心可被付ゆ。此文にては鳥の傳記に成申ゆ間御工夫御

尤に存候。以上。

九月十三日　はせを

加生様

▽闌更『落葉考』　三通

一、名月前云々

『消息集』に收めしものと文字多少の相違あれど、同一のもの丶誤寫ならんと見て省略す。

二、信濃路云々

「翁文通のはしに」と記せり

信濃路は雪深き所にて野山も白たへとうつりかわり候へども、着物にはいまだつもり不申候。

雪ちるやほ屋の薄のかりのこし

此「雪ちるや」の句は『猿蓑』に編入せるものにして、此句入りの芭蕉書簡と稱するものは、

『一葉集』所載、信分宛「自尾州二十二日」云々

宇都宮市入野俊一郎氏藏、松月庵宛「一兩日は別て寒冷」云々

沼津市槇不言舍氏藏、智月尼宛「御紙面忝拜見」云々

紀伊二郷村長井甚三郎氏藏宛名なきものにして、「雲竹老人迄人遣し候」云々などありて甚だまぎらはしきもの也。『一葉集』のものを記す。

自尾州二十二日に御歸りの由被仰越條先御そく才にてめで度候道の記御認御遣し一覽候いづれも出來申條信濃路にて二三句は別而よろしく候

雪ちるや穗屋のすゝきの刈殘し

此句類なく候べし愚老句より貴樣の句上になり候委は面談とあなかしこ

廿日　はせを

信分丈

三、此ほどは加生老云々

おとめ殿　はせを

參る

此ほどは加生老去來御みまひ、御たいぎながらゆる〳〵と名殘をおしみ、よろこびかぎりなくぞんじ候〳〵。ふゆのうちは山ふかき方へかくれまいらせ候。春になりてまた〳〵御めにかゝり申べく候。なが〳〵の御なさけどもわすれがたきのみ申つくしがたく候。きるものどもよろしく御こしらへ、さむくも御さあるまじく候。御きづかひ被成まじく候。御ぶじに春を御まちなさるべく候。

よひ〳〵はかまたぎるらんね所のみつの枕もこひしかりけり

▽桃鏡『芭蕉翁眞跡集』　十二通

一、東都川村氏愼車藏

杉風樣　はせを

二月七日

昨日は御見舞候而御痛之事共直々に御物語承先安堵致候。

一此書狀加州金澤へ不叶用事申遣候。何

とぞ被入御念、上包貴樣御名を御書被成候而、御懇意之方へ御頼被遣返事參候樣に奉頼候。御家中之風俗居狀不居候よし、兼而承候間、貴樣上包に被成候而、成程慥に奉頼候。少〻急候間、能樣に被仰遣可被下候

發句も延引可致と存候へ共與風所望に逢候而如此申候。

日頃工夫之處にて御座候。

鶯 や 餅 に 糞 す る 縁 の 先

二、東都村田氏技貢藏

今日長次郎どの京へ被參候に付ちよと斗申入候。其後は御遠々敷存候。彌無故障御入候哉と押斗存候。愚身も無事に暮申候。さては內々御頼置候物どもはや此節出來可申哉と存候。急〻に御下したのみ入存候。先方にも見たがり被申候。何分はやく被遣可被下候。祭もだん／＼近よりし候故せくも尤に候。在邊之事故度〻言傳に申參候。かしこ又此間

網代民部の子息に逢て

梅の木に猶やどり木の梅の花

此句挨拶にいたし候故貴樣まで申入候。さて客來多取込早〻以上。

廿一日　　　　　桃　青

左　柳　丈

三、東都倉林氏以申藏

賓壽院と申僧今日上京候ニ付申上候。彌御別條無之候哉承度候。さては先頃御たのみ申上候額字出來候はゞ此僧に御渡し被下度候。委細は御噺可被申上候。猶〻御世話に奉存候。さて又內〻御たのみ申上候千字文、來月中に御出來被下候樣內〻御心がけ奉頼候。先樣より便の度每にせがみ遣候。此中口すさび申一句

ほとゝぎす啼音や古き硯箱

いかゞ思召候哉、おかしく被存候。近〻參候て可得御意候。以上。

十一日　　　　はせを

北向雲竹樣

四、東都溝口氏素丸藏

乙州下候間一簡致啓達候。愈御無事ニ御勤仕候哉久〻絕便候間御物遠罷過候。拙者持病がちにて暮候へ共、露命は猶難面候間可易御心候。俳諧いかゞ被成候哉定而去來折／＼御尋候半と存候。少〻歌仙にても御見せ可被成候。

五、駿府小西氏子來藏

尙〻四五日中に又〻委可申進候。先大阪へ出候を御しらせの爲、早〻申殘候。

夏より七月迄の御狀尤遅速御座候へ共段〻無相違相達申候。久〻伊賀に逗留故便りも不致候。無心元元被存候御無事に御勤御家內相替事無御座候哉承度存候。おしめ祝言當月中にて可有御座と推量申候。定而御取込可被成候。定而首尾能相

調可申と御左右待入候。
一拙者先は無事に長の夏を暮し漸〻秋立候而頃日夜寒の頃に移候。いかにも秋冬之間無恙暮し可申樣に覺候間少しも氣遣被成まじく候。追付參宮心がけ候故先大阪へむけ可出申、去る八日に伊賀を立候而重陽の日南都を立、則其暮大阪へ到候而酒堂方に旅宿假に足をとゞめ候。名月は伊賀にて見申候。發句は重而可懸御目候。

菊の香やならには古き佛達

菊の香やならは幾代の男ぶり

びいと啼尻聲悲し夜の鹿

いまだ句體難定候他見被成まじく候。追付爰元逗留の句共可懸御目候。早〻御狀御こし可被成候。其元兩替丁かするが町酒店にて稻寺や十兵衞と申もの、爰元伊丹屋長兵衞店にて候間早〻御左右承度候。子珊秋の集被催候哉。左候はゞ爰元の俳諧一卷下し可申候。上方筋別座鋪炭俵にて色めきわたり候。兩集共手柄を見せ候。少は桃隣にも師恩貴キすべをわきまへ候へと御申成候べく候。桃隣俳諧俄に替上候と專沙汰にて候。急便早〻。

九月十日　はせを

杉風樣

六、駿府比良氏都雁藏

此中は御待被下候處近在へ參候間御めにかゝらず殘念不少候。さては貴樣にも近〻田舍へ御下向之由段〻寒氣に赴候間御苦身千萬に存候。隨分御達者に頓而〻〻御上京まち被參候。然ば發句之事御申置候彼方へ御みやげに成候樣のよろしき句も無之候へ共御申置故此句申進候。

馬方はしらじ時雨の大井川

如此ニ御坐候。いかゞ候哉。猶あとより追〻可申承候。かしく。

十月廿二日　はせを

洞水丈

七、駿府力石氏耳得藏

保生佐太夫三吟に

老の名の有ともしらで四十雀

少將尼の歌の餘情に候。

素堂が菊園に遊びて

菊の香や庭にきれたる沓の底

野馬と云もの四吟に

金屛の松の古さよ冬籠り

猶廣く他見被成間敷候。追て俳諧抔可懸御目候。去ながら當冬は相手に可爲物無御座候へば俳諧も成申間敷候。廣き江戸に相手のなきも氣の毒に存候。當方無恙五句付點取、脾の臟を捫體に候。此脾の臟捫破たらん後初て俳諧はやり可申候。いづ方へも久〻絕書音、善膳(膳所)へ連狀一通此狀のみにて、大がき大坂へもいまだ初夏より返簡不致候。落字文章の前

後はゆづり候て御披覽可被下候。當年めきと草臥増り候。
上方邊納色紙いまだ調不申候由、重て可申遣候。將亦此度石摺大色紙四枚被懸御意辱、折ふし屏風入用にて別てよろこび申候。五老井のあづきも日やけにあひ可申候。煎茶可被下由遲くてもくるしからず候。能便宜少々可被懸御意候。頃日あべ茶にも給（たべ）あき申候。以上。

十月九日　はせを

許六雅丈

八、駿府大平氏雁奴藏

幸便啓上如何被成候哉と御懷敷而已に候。御老母樣御內御子達御息災に御入被成候哉承度奉存候。拙者舊冬甚寒殊之外痛候へ共頃日は又々常之通に居申候間定て當年中には懸御目候て可有御座候。何とぞ〳〵御堅固成樣に被成今一度再會御待可被下候。拙者も隨分保養致候て懸御目度存候。加右衞門殿無恙御勤被成候哉、北鯤子御兄弟無事に候哉承度奉存候。定世事御くろしみ可被成と是又心をいたましめ候。御心得成可被下候。
一膳所御親類中へも被仰遣候由、御知人に御成可被成よし被入念候へども去秋の頃より膳所へもしか〴〵不參、大津京邊に遊び居候處、いまだ不得御意、尤爲指用事も無御座候故其通にいたし候。若御袋樣などへの咄にも成可申候はゞ重而御目にかゝり下り可申候。以上。

二月十三日　芭蕉

嵐蘭雅丈

九、松村氏（桃鏡）藏。目次の脇に「前後文畧」とあり。

一當月十六日加茂へ參、平兵衞に一宿御袋樣源兵衞殿あねごなどへ逢申、御袋御無事に御入候。されども四年以前よりはよほどとしも御寄、耳も遠く被成候。あねごとふたり貴樣事のみくどくかへす〲逢申度よし被申難儀いたし候。則平兵衞源兵衞殿書狀相屆候。委く跡より可申進候。
十六日好齋老とならちやにて御出會候由御なつかしく候。好齋老へも此度狀數多く候間延引重而可申達候。御心得被成可被下候。深川の樣子具に重而御申越可被下候。
一二郎兵衞道中達者にて拙者苦勞にもなり不申、能つとめ申候。以上。

壬五月二十一日　はせを

猪兵衞樣

（「壬」は「閏」の略字也）

十、松村氏（桃鏡）藏。目次の脇に「前文略」とあり

一桃隣いかゞ相被勤候哉。暑氣の節短夜と云、會も心のまゝには成申まじく候。杉風子珊心にたがはさる樣に實を御つ

とめ候へと御申可被成候。京都俳諧師五句付之事に付閉門、俳諧さたひつしりと蛭に鹽かけたる樣に候。樣子段〻拙者口から申上せ候も氣のどく故不具候。ケ樣の處唯實を不勤故と合點を致、むさとしたる出合會等心持可有旨桃隣へ御物語可被成候。

一市之進殿御無事に候哉可然御意得賴存候。

一此方京大阪貧乏弟子共かけあつまり日〻宿を喰つぶし大笑ひ致くらし申候。

一理兵衞細工無之時分せめて煩不申樣に御氣を可被付候。右之通壽貞にも御申きかせ可被下候。おふう夏かけて無事に候哉樣子具に御申越可被下候。

一宗波老庄兵衞殿へも御心得可被成候。定て好齋老たえず御見舞可被下と存事に候。追て以書狀可得御意候。以上。

六月三日　　桃　靑

猪兵衞樣

十一、松村氏（桃鏡）藏。目次の脇に「前文略」とあり。

壽貞無仕合もの、まさおふう同じく不仕合、とかく難申盡候。好齋老へ別紙可申上候へ共急便に候間此書狀一所に御覽被下候樣に賴存候。萬事御肝煎御精御出しの段〻、先書にも申來扨〻辱、誠のふしぎの緣に候。此御人賴置候もケ樣に可有端と被存候。何事も〳〵夢まぼろしの世界、一言理屈は無之候。ともかくも能樣に御はからひ可被成候。理兵衞もうろたへ可申候間とくと氣をしづめさせ、取亂し不申樣に御しめし可被成候。以上。

六月八日　　桃　靑

猪兵衞樣

十二、松村氏（桃鏡）藏。目次には「遺狀」とあり、且つ「印あり除之、難波之病床より門人等送之。」と記せり。此書本文は誰やらの代筆なり。

一伊兵衞に申候。當年は壽貞事に付色〳〵（「還〳〵」とも見ゆ）御骨折、面談に御禮と存候處、無是非事に候。殘り候二人のものども十方をうしなひ、うろたへ可申候。好齋老など御相談被成、可然了簡可有候。

一好齋老よろづ御懇切、生前死後難忘候。

一榮順尼禪可坊情ふかき御人也。面上に御禮不申、殘念の事に存候。

一貴樣病起御養生隨分御勉可有候。

一桃隣へ申候。再會不叶可被力落候。彌杉風子瑚入草子よろづ御投かけ、兎も角も一日暮と可存候。

元祿七年十月

支考此度前働驚、深切實を被盡候。此段賴存候。庵の佛は則出家の事に候間遣し候。

　　はせを

▽重厚『もとの水』十二通

一、會の夜食

覺

一もち米　一升
一黑　豆　一升
一あられ見合

右今夕會の夜食ニ成申候間御いらせ、傳吉にもたせ御こし可被下候。茶は一森三井寺より澤山もらひ申候。貴様にも早〻御出まち入候。

十八日　はせを

喜八樣

二、脇御付

贈杜國

笠の緒に柳絹る旅出かな

脇御付可被成候。

三、火打ふくろ

山頭月挂雲門餠
屋後松煎趙州茶

佛法は障子のひきてみねの松
火打ふくろに鶯の聲

此心をもて俳諧の變化を知るべしと許六が去人に示候由。また惟然がたばこ呑ぬ傾城と菓子くはぬ俳諧師はすくなきものとはし書して

ちり塚や鶯あさる聲のひま

あまりをかしく書とめ懸御目申候。以上。

十六日　桃青

浪化樣

四、紙草履

口上

此頃の俳諧ことの外不出來に候得共任御望爲しん上致候。尤其角が無分別なる所中〳〵及べからずとみなみな驚申事に候。

廿二　はせを

仁平衞樣

暮遲き四谷過けり紙草履

五、追付參上

初かつを御振舞被下候由、かゝる隱居の似合しからず候得共、おもとどのゝ御志追付參上。

桃青

太右衞門樣

六、今四五枚

昨日は渡(唐カ)紙澤山御惠、辱存候。然處昨夜惟然一宿例のむだ書、剩(あまつさへ)筆の先棒になし困入申候間今四五枚申請度候。此人に御こし可被下候。以上。

七日　はせを

杉風丈

七、心法

二白俳諧御執心之由先は珍重、物しりにならんより心の俳諧肝要に御座候。句者は澤山御座候得共心法を守る人はまれ〳〵なるものにて候。一季よせの御不審御尤に候。愚老は此事

にうとくゆまゝ考へ跡より可申入ゆ。
増山井御用可等ゆ。

十九日　はせを

晩山様

八、曲水子の書狀

曲水子の書狀もたせ被下忝ゆ。是は去來が指圖と相聞申ゆ間只そのまゝにて可置ゆ。尤考（支考）が申處一理御座ゆ條愚老も同心仕ゆ。委は後刻。

九、ことの外朝寐

傘下駄御もたせ被下御世話忝存ゆ。蚊帳鼠に喰れ申ゆおまきに御縫せ可被下ゆ。燒跡蚤蚊多くことの外朝寐仕ゆ。

七日　はせを

三碩様

十、小遣錢二百文

新麥一斗等三本油のやうな酒五升といふは富貴の沙汰なり。蕎麥粉一重小遣錢二百文忝存爲參ゆ。

水油なくて寐る夜や窓の月

十一、糊少々

枕屛風むだ書いたし則御使へ相渡し申ゆ。糯半せんだく糊少々と御申付可被下ゆ。

杉風様　はせを

御ふくろ様

口上に書おとしけり土大根

十二、古瓦硯之銘

口上

此間御咄申置ゆ通勸學院古瓦硯之銘足下其角愚老三人との一軸に認ほしき由。一兩日中に御書可被下ゆ。且又京都上御靈神主小栗栖大炊頭七十之賀、是は御詩作賴來ゆ。兼て御存のごとく醍醐內大臣様御門弟にて、和歌も出來申ゆ。委は期拜顏ゆ。

廿四日　芭蕉庵

素堂先生

▽士朗『枇杷園隨筆』　六通

一、知多野雀にあり

坂本にて一宿、早苗に鹿を追ふ聲なつかしく覺え申ゆ。坂本の鹿いづれの秋にかと存る斗に御坐ゆ。罷歸ゆ得ば又いつ上り可申樣にも無御坐、一しほ御ゆかしさのみにゆ。

下向の頃桑名本當寺御會に

芭をきつて苫に茨けり

琵琶負て鹿聞にいる篠の隈

坂本を心の底に置ゆか

熱田會に

ひとり書を見る艸庵の內

二町ほど西に砧の聞ゆなり

重て委細に書付可進ゆ。

七月十八日　芭蕉

「右千那尙白靑鴉におくり給ふ文」と士郎は附記せり。

二、猿見藏

早春佛頂和尚へ御状被遣候を、則愚庵へ爲持御越、微細熟覽仕候處、木兎の角あるけしき先感心仕候うへ、病床に病と組て勝負を御あらそひ、終に大眼悟哲の勢ひ驚入奉存候。和尚の肝腸いまだしかと探られず候間重而評判可申進候。和尚にも舊臘は寒ぬるく候故、御持病もこゝろよく、愚庵まで手をひかれて一夕御入、大道の咄し止て俳諧にて到半夜候。

梅櫻みしも悔しや雪の花

と御申し候。感心致事に候。且又、正秀三ツ物、さて〳〵おどろき入、定て御ちからかり候ものと甘心仕候。褒美之旨正秀へ申遣候間除筆候。

三、三河都築和樂藏

越人よりも狀こし候よし。一段の御事に御座候。此方へもとゞき候、發句有之候。

思ひきる時うらやまし猫の戀

と申越し、よろしく候。

愚　句

不性さや抱起さるゝ春の雨

又こゝもと門人の句に

庭　興

梅が香や砂利敷流す谷の奥

今おもふ所に聊叶候へば書付進候。

二月二十二日　芭　蕉

珍　夕　樣

四、所藏者不明

折〳〵や雨戸にさはる荻の聲　雪　芝
放つ處に居らぬすゞ虫　はせを
荒〳〵て末は海行野分かな　猿　雖
鶴のかしらをあげる粟の穗　はせを

こゝもと折〳〵の會御坐候得どもいまだかるみに移りかね、しぶ〳〵の俳諧散々の句のみ出して迷惑いたし候。此中脇いたし候間御目にかけ候。

五、所藏者不明

一兩吟感心、拙者逗留の內は此筋見えかね無心元存候處、さて〳〵驚入候。五十三次前句とも透逸か、いづれも感心申候。其外珍重あまた、惣體かるみあらはれ大悦不少候。委細に御報申度候得どもいまだ氣分も不勝、何角取紛候間伊勢より便次第に以細翰可申上候。右之氣分故發句もしか〳〵得不仕候。

九日南都をたちける心を

菊に出て奈良と難波は宵月夜

秋　夜

秋の夜を打崩したる咄かな

秋　暮

この道を行人なしに秋の暮

廿三日　はせを判

意　專　樣

土　芳　樣

六、伊賀上野猪来蔵

三月十九日伊賀上野を出て三十四日、道
の程百三十里、此内船十三里、駕籠四十
里、歩行路七十七里、雨に逢ふ事十四日。
瀧の數　七ツ　龍門　西河　蜻蛉
蟬　布留　布引　箕面
古塚　十三　兼好塚　歌塚　乙女塚
忠度塚　清盛石塔　敦盛塚　人丸塚
松風村雨塚　通盛塚　越中前司盛俊
塚　河原太郎兄弟塚　良將楠塚　能
因法師塚
峠　六ツ　琴引　轉峠　野路小佛
峠　橿尾峠　クラカリ峠　當麻嵓屋
坂　七ツ　糀坂　西河上ちいか坂
うはかり坂　宇野坂　かふり坂　不
動坂　生田小野坂
山峯　六ツ　岡見山　安禰嶽　高對
山　てつかいが峰　勝尾寺の山　金
龍の山

此外橋の數川の數名もしらぬ山は書付に
もらし申候。
　　卯月廿五日　　萬　菊
　　　　　　　　　桃　青
　惣七樣

▽湖中『俳諧一葉集』　十六通

一、餞別一會

前日は寛々閑對不淺存候。然ば其角も一
雨中には東武歸國申候。左候はゞ今夕餞
別一會いたし遣し度候條、丈草など被仰
合暮前より御來駕まち入候。以上。
　　長月十一日　　はせを
　　　落柿舍主人
尚々今朝の吟御目にかけ申候。
　しら露もこぼさぬ萩のうねり哉
　古庵や寢せず起さず萩の花　其角
「芭蕉眞蹟拾遺」に殆んどこれと同一の
ものを錄し、日附を「八月廿八日」とし、
其角の句を「古庵や寢もせず起ず萩の
花」とせり。

二、たんざく御免し

追て申入まゐらせ候。其許に逗留中に淸
草御歸りに御約束申候短册此度遣し申度
存候へつれども、二三度ばかり認め申候
處さん／＼不出來見苦しく候故、其許へ
御出若御尋候はゞ、此段御申達可被下候。
何方へもたんざく御免し被下候樣申事に
候。我等手蹟にては及びがたく候。發句
は書入進申候。
　わすれ草菜飯に摘ん年のくれ
如此に御座候。能々御申可被下候。又重
而宜しく出來候はゞ其節進じ可申候。以
上。
　　廿二日　　はせを
　　　半月丈

三、行脚の春

追而申進候。日外御尋被成候其しき行脚
の春發句之事失念、「風斗存出し候旅年徒
引申進候。

草の家も住替る世はひなの家
ゆく春や鳥啼魚の目は泪
此兩句にて御座候。倦々延引之段如在之
儀に存候。御免可被下候。猶委は頓而々
々參候而萬々可申入候。以上。
卯月廿二日　はせを
風流丈

四、升の市

升かふて分別替る月見かな
右之句申入候。處々に參候へどもさして
是と申ほどの句も出來不申候。まだも此
句かと存候故申まゐらせ候。これより直
にはりま路に參候而來月末に歸り申候。
其許連中へもよろしき樣に御心得可給
候。旅宿故あら〳〵申入候。かしこ。
十八日　桃青
如行丈

五、酒二升御こし

只今田舎より僧達二三人參候。餓に出し
可申貯無之候。さぶく候故にうめんいた
し可申候。そうめんは澤山有之候。酒二
升御こし頼入候。さかなはつぶ納豆茶碗
に入貴樣御出候て世話頼入申候。其次手
に引合せ可申、はや〳〵御出まち入候。
以上。
二日　はせを
かふじや茂作樣

六、しみ〳〵とは出來不申

追而申入候。此度三度飛脚に申遣候事は、
京の勝手よく存候故指圖せられ候。から
す丸通りにていづれにても御謡御下し可
給候。文庫並革にて覆ともに頼入候。料
は書付御下し可被成候。又々飛脚に上可
申候。さて俳諧もはやり申候。何を申て
もけはしき處故しみ〳〵とは出來不申、
此ほど愛宕の下へ參申候。二三會も興行
有之、江戸衆も參り上手になられ悦び申
候。

給にけふは貴かつわか菜哉
右の句を元にして百韻いたし、其篇其角
なども參りおもしろく慰み申候。貴丈事
噂申出候。猶追々可申入候。
廿三日　はせを
秋風丈

鄙歌自得

おもふことふたつのけたる其あとは
花のみやこもゐなかなりけり
以上　はせを

七、尾張大根

尾之露川方より宮重もらひ申候。今夕御
出候而御料理なされべく候。此旨丈草へ
も御つたへ可被下候。
六日　はせを
三十里尾張大根のはなしかな
又
落葉してぬかみそ桶もなかりけり

味噌は御持參可被成候。以上。

八、散々草臥

度々預貴墨候へ共持病あまり氣むつかしく不能御報候。昨夜よりも出候名月散々草臥、發句もしか／＼案じ不申候。湖へもえ出不申候。木曾塚にてふせりながら人々に對面いたし候。各發句有之候。

月見する坐に美しき顔もなし

なき同前の仕合にて候。當河原涼の句其元にて出かゝり候を終に物にならず打捨候を又取出し候。御覽可被成候。

川風やうす柿着たる夕すゞみ

職人のでしこ感心仕候。落書もことの外御出かし被成候。少し氣むづかしく候故早々申上候。

十八日　　はせを

加生様

去來子より御左右無御座候。御病兒いかゞやと無心許被存候。

九、うしろつき

笹岡五郎右どの御上京に付ちよと申入候。愈御家内御替りも有まじくと押はかり申候。だん／＼暑に罷成候而愚老などしのぎかね申候。貴様には精分つよく、さほどにもあるまじくとうらやましく存候。何ぞ宜句出候哉うけ給り度候。然ば鶯齋背向像に一句

團もてあふがん人のうしろつき

此句致し遣候。寺町の秋田屋方へ表具を頼みに人遣申くれ候。貴様にも秋田屋事御近付に候間、今日の内に御出候而御尋可被下候。とかく樣子はやく見申度候。さて又貴樣方いつぞやの十二枚のまくりの繪にて其まゝにて御指置候哉、もし申樣御勝手に入不申候はゞ所望の人有之候間御下し可被成候。せたの人ほしがり申候。兩用共樣子御申越可被下候。取込早々以上。

十三日　　桃青

和休丈

十、庖丁か牛

尙々御老母樣可爲御堅固奉存候。とやかく申内曲水丈來を打越無御悦可被成候。幻住庵再興之時節も過候間、誠まぼろしの日數頓而入庵之節に成可申候。

貴翰忝拜見並半紙一束被懸賢慮、每々御厚情不淺、難筆端盡奉存候。御目まひ度々に及申候由、氣之毒奉存候。陽性上る時候故と存候間、養生主要用に存候。御公用被仰付候由珍重ながら、御持病の御爲如何と無心元存候。包丁が牛御手に可被入候南經齊物過半に至候由、連衆より申來大儀の處はかを御やり被成候而御手柄奉存候。隨分清眼微細に御開可被成候。且つ拙者持病も折／＼氣指候へ共、大痛も不仕舊友風情之罷せつき申候而よほどやかましく御座候間、來月出京可致と心

掛申候へども、いろ〱のがれぬ事ども仕出かし夏秋までも可留たくみいたし候。隨分拔出京邊貴境にて卯月末頃までは足を可留存候。後之事を思案致すまじきよし洒落が棒を送候へば吹風に可任候。返翰數多及早筆候。頓首。

二月廿二日　　　芭　蕉

奴誰雅伯

十一、御耳にさはるべき

尙〻今日は御入來可被成と相待候處近頃〱御殘多奉存候。かへす〲此度萬事御懇意忝難盡候。

爲御見舞三郎左衛門殿被遣、誠辱奉存候。今日はもし御出可被成かと御亭主ともに相待居候處、御殘多儀に御坐候。先以此度は緩〻滯留さま〲御懇情御馳走御禮難申盡候。はいかい急に風俗改候樣にと心せかれ、御耳にさはるべき事のみ御免被成可被下候。されども風俗そろ〱改り候はゞ猶露命しばらくの形見とも思召可被下候。などやよりも日〻便り被致候間、明日荷兮まで參可申候はんと存候。持病心氣さし候處又咳氣いたし藥給申候。なごやにても養生可成事に御坐候間明日頃なごやへと存候。

一先日笠寺まで御連中御送被成御厚志之こと可然御禮御意得奉賴候。如意寺樣猶又よろしくたのみ奉存候。追付發足山中より以書狀具可申上候。

二三日此かた兩吟いたし大かた出かし候。出來候はゞ被懸御目候樣に早〻。以上。

霜月廿四日　　　芭　蕉

寂照居士

十二、袋のうちの

追而申入候其許より出來參候はん袋、あまりそこね申候。今一つあたらしくいたし度候。大サ下地の通りにたのみ入候。則古袋飛脚へ登せ申候。いづれにもよろしく賴入候。御內樣御せはにて候へどもたのみ入候。依而一句、

物ほしや袋のうちの月と花

いかゞ思し候哉、當座間に合候間此句離にて御座候。くはしき事追〻可申入候。以上。

二十三日　　　はせを

杉風丈

十三、去來下やしき

處〻御一覽御歸宿被成候哉。もはや頃日はと推察申候。かみ樣よりも念頃忝存候。道中之風流亟の侘さて〱御物語承度候。宗五も折節上京留主にて手筈ちがひ候半と存候。先〻大義御願珍重〱御手柄に御座候。拙者相替候事無御座、頃日は嵯峨去來下やしきに居申候。養閑竹の子を給申候。大井川の舟遊び俗客にはあゆを振舞、嵐山朝暮の詠めにて御座候。

富士いかゞ〳〵。以上。

五月十日　　　　桃　青

意專様

十四、遺物覺

遺物覺

一三日月日記　　伊賀に有

一發句書本　　同　所

一埋　木　　半殘方に有

一新式書入

是は杉風へ可被遣候。落字等有之本寫にて可被考候。支考も可被寫候。

一文章反故等

右は杉風方に有之候。文章之草稿は支考可被爲點檢候。

はせを判

十五、么羽と翁との違

一羽州岸本氏之發句炭俵集に紛入候。么羽と翁との違にて可有之候。杉風より御斷頼入候。

一猿蓑の內座頭の句引直し。

一古今の序傳、百人一首秘聞抄、

是は支考へ可被遣候。

元祿七年十月　日　　はせを判

十六、御先に立候段

御先に立候段殘念に可被思召候。如何樣とも又右衞門便に被成、御年被寄御心靜に御臨終可被成候。こゝに至申上事無御座候。市兵衞、次右衞門殿、意專老をはじめ、不殘御心得奉頼候。中にも十左衞門殿、半左殿、右之通に候。はゝ樣、およし力落し可申候以上。

十月十日　　　　桃　青

松尾半左衞門樣

新藏は殊に骨被折忝候。

▽石介、擔郭『木葉漬』　一通

『一葉集』にある許六宛「神矢の根」云々の書簡は要領を得ざるものなりしが、岡山の西村燕々氏は池田男爵家所藏の本書により、完備せるものを『筑波』第十一號に發表せらる。乃ち燕々氏の承諾の下に玆に轉載したり。(他石)

上略

一神矢根蟻蓑乍少分御用に立滿足申候。各感心鬪の足輕頃合の寄作に候。過れば手帳の部に落候。世に鳴ものゝ三ツ物、惣て地句等皆々手帳の初は、三才兒童の作意ほとゝうこかず候。町ものゝ拵の俳諧にも、我黨五三人は見あき候へども、いまだ爰を專と句を拵候者共、歷く相見候。能句をうるさがる心ざし感心可有事にや。歲暮の大荒目をさましい。みなと紙の頭巾は人々空に覺へて笑候。

一愚門三ツ物京板にて御覽可被成候。江戶他家之事は評判無益と筆をとゞめ候。其角嵐雪の義は年々古狸よろしく鼓打はやし候半。

一桃隣が五ツ物は中は愚風に心をよせ、

所々點取口を交へはか〱敷も無御座候へども、渠猶口過を家とするゆへ堪忍の部の能方に定り候。

一保生沾圃が三ツ物に、力なき相撲のもの、手合を見事にしたる斗に候。され共力すまふのねぢ合には增り候半とおさめ候。

一野坡が三ツ物は去秋愚風に移り、いまだうゐ〱敷て、さぐり足にかゝり侍れども、年來の功少增り器量邪風に立越候故、見所多くして惣ての第三手帳の場を打なぐりたる一つの手柄故、是中の品の上の定に落付候。愚句は子供のけしきあれたる躰に見請候へば、一等鎭め候て目にたゝせず候。彼いせに知人音信てたより嬉しき、とよみ侍る便の一字を取つたへたる迄に候。

一みの如行が三ツ物はかるみを底に置たるなるべし。惣ての第三は手帳の部にありといへ共、世上に一分を出す風雅の罪ゆるし置候。

一膳所正秀が三ツ物三組こそ跡先見ずに乘放たれ。世の評詞にかゝらぬ志あらはれておかしく候。

彥根五ツ物いきほひにのつとり、世上の人をふみつぶすべき勇躰、あつぱれ風雅の武士の手業なるべし。

世間此三通りの外は手に取る迄もなきものに候。

二月廿五日　はせを

森川許六丈

御返事

▽井眉『華鳥文庫』　一通

庄屋殿へ出候而承候。今席は貴樣方にふぐ汁之會有之よし、めづらしき風雅にて御座候。我等見物に可參候。依之

　鰒汁やあはうになりとならばなれ

おかしや〱とかく出ほうだい火中

十一日　はせを

太郎兵衛殿

（是と同じ句入の書簡きし田甚右衛門宛のものあり。不審故省く。）

▽白亥『俳諧眞澄の鏡』　一通

五月十五日　松尾桃靑 書判

高山傳右衛門樣

貴墨忝致拜見先以御無爲被成御座候珍重奉存候。私無異儀罷在候。仍而御卷致拜吟候。尤感心不少候共古風之いきやう多く御座候而一句の風流おくれ候樣に覺申候段近頃御尤。先は久々爰元俳諧をも御聞不申哉、其上京大阪江戸共に俳諧殊之外古く成候而皆同じ事のみに成候。折ふし所々思入替候を、宗匠と申す者もいまだ三四年已前の俳諧になづみ、大かたは古めきたるやうに御座候。一日學者猶俳諧にまよひ、爰元にても多くは風情あしき作者共みえ申候。然る處に遠方御へ

だてにて此段御のみこみ無御座御尤至極に奉存候。玉句之内三四句も加筆仕候。句作のいきやうあらまし如此に御座候。

一一句前句に全體はまる事古風中興共可申哉

一俗語の遣ひやう風流なくて、又古風にまぎれ候事。

一一句細工に仕立候事不用之事

一古人の名を取出て何〻の白雲などゝ云捨たる事第一古風にて候事。

一文字あまり三四字五七字餘りにても、句のひゞき能候へば、一字にても口にたまり候を御吟味可有候事

子供等も自然の哀催すに
つばなと暮て覆盆子刈原　才丸
賤女とかゝる蓬生の戀　同
よこし摘あかさか園に垣間みて
今や都は鰒を喰ふらむ　其角
夕端月蕉は葉ごしに成にけり
といはれし所杉郭公　同
心野を心にわける幾ちまた
山里いやよのがるゝとても　町庵
鯛賣聲に酒の詩を賦す　愚句
葛西の院の住捨しあと
するきの戸蕗壺の間は霜をのみ　同

（此次に「本式俳諧之次第」等附載しあれど、それは書簡外のものなれば省略す）

▽大蟲『芭蕉翁眞蹟拾遺』稿本　廿五通

一、御前可然

御俳諧被遊候や。御發句など被遊候はゞ便に可被遣候。春は其角集あみ申候間入集可仕候。私は宿は橘町彦右衛門と申もの店にて桃青と御書付可被成候。書音も廣ク八六ケしく御座候故、所付をも外へは不申遣候之間、左様に御意得被成可被下候。

御前可然奉賴存候。恐惶頓首

霜月十八日　芭蕉桃青

中尾源左衛門様
濱　市右衛門様

二、花にうき世

追而申入候。内〻の事は如何被成候哉。是もすてはおかれまじくやうに存候。貴丈にも萬事氣のつく人に候へば、定而ぬかりはあるまじくと存候。ひよと我等も口を添候故心もとなく存候。ひきやく便に様子等こま〳〵御申越可被下候。夫に付此ほくいかゞ

花にうき世我酒白く食黒し

此發句のこゝろに身持可被成と存候。言水など共御出合之節は、よく〳〵御賴可然候。頓而之内に上京候て可申承候。

廿二日　はせを

任口丈

三、自慢たら〳〵

賓やくれなゐは園生にうゑてもかくれなし。名のらぬ先により政とも見ゆるほど

の徳あり。句を味ふ時はいづれの句にてもその相應にとりなして其德をあらはし、政公にもおとるまじやと、ひとり自慢たらく申もいとはづかしく候。

雪の朝ひとり干鮭をかみ得たり

海くれて鴨の聲ほのかに白し

此二句申入候。追ゝせいぼの句も貴様方に出來可申爲御聞可被成候。何事も跡よりに候。以上。

十二日　桃青

落水丈

四、長雨にふりこめられ

追て申入候。此中はふじに長ゝ逗留其上何角御世話に成候。[不明]別而御内方樣御世話に候。いそがはしき中にうかくいたし居候而きのどくに候。長雨にふりこめられ候事とかうに及がたく候。

行駒の麥に慰むやどり哉

いづれへもよろしく御まうし可被給候。くはしきは[不明]

十三日　桃青

空水丈

五、長崎へお下り

昨日は御出の處坂本へ參候而不得御意殘念に候。貴丈にも近ゝ長崎へ御下りの由御太儀存候。隨分御支度可成候。又ゝ大分御金まうけにて追付御歸り待入候。然ば此書狀萩へ御寄候はゞ文子方へ御とゞけ可給候。御逢候はゞ口上にも集物の儀御咄可被下候。出來次第下し可申候。又ゝ貴丈へ引當て

鶴の巣も見らるゝ花の葉越哉

右の句致候。猶頓而可申承候。以上。

廿二日　はせを

三志丈

六、同じ句入り

追て申入候日外其許にて御めにかゝり申候長州の西光寺御坊より書狀參候。尤六條より相居申候。是は御便之由申來候。右返事其許より長州へ御下し可給候。往來のかゝりものは此方へ御申こし可給候さて相撲のほ句は如此に候。

鶴の巣も見らるゝ花の葉越哉

以上

十七日　はせを

三志丈

七、吉野へ花を

其元御無事と見え候而歲旦伊勢にて一覽珍重に存候。拙者無事に越年いたし今程山田に居申候。二月四日參宮いたし、當月十八日親年忌御座候付、伊賀へかへり候て、暖氣に成次第吉野へ花を見に出立んと心がけ支度いたし候。尾張の杜國もよし野へ行脚せんと、伊勢迄來候而只今一所に居候。卯月末五月初に歸庵可致候。木曾路と心がけ候。深川大屋吉御逢候はゞ可然奉願候。よく御傳被成可被下候。

いまだ爰元にても發句も不致候。

参　宮

何の木の花とはしらず匂ひ哉

追啓二見淺熊へ参候。爰元方々へ馳走殘り所もなく候間萬氣遣ひ被成まじく候。一濁子丈御子達御奥方御堅固に被成御座候哉。拙者無事之旨御告可被下候。其元別條無御座候はゞ御狀不及候。若急に御しらせ事御座候はゞ、關の地藏にて笠屋彌兵衞と申者迄飛脚便御狀可被遣候。二月十八日より三月十四五日までは伊賀に居申候。以上。

はせを

杉風樣

八、貴樣御內通

痛入たる御音信忝奉存候。一兩日御物遠罷過候。昨日より嵐朝へ参一宿仕候。先以先夜民部殿へ被召寄候而御厚志之御馳走、貴樣御內通よろしき故と御亭主振感心忝奉存候。明日二見への心ざし御座候へ共、天氣如此御座候得ば先延引可仕候旨、今晩罷歸明日可得御意候。其內民部殿へ御逢候はゞ可然奉賴候猶貴面。以上。

二月十一日　　芭蕉

平庵樣

尙々御音信忝賞翫仕候。乍去御牢人の御心遣却而痛入申候。亭主且野人へ御傳申通候。以上。

九、人の氣や

口上

其後はひさしく御目にかゝらず御遠々しく罷過候。彌御替も無之哉うけ給たく存候。此方故無事に居申候。彌生の頃は誘引有候而よし野へ花見に参候。發句はいたし不申候。いろ／＼あんじ候而も貞室の句には及不申故句はいはぬ方がましと存候。其かはりにさくら川にて一句いたし候。

人の氣や花に乘行さくら川

漸々此句にて芳野をすまし申候。少御下り可被成候。寄合一會申度候。爲指事も無之候得共あまり／＼無音故如此候。以上。

廿一日　　はせを

石せ三之丞樣

十、わらじまで

先日は立寄さま／＼御馳走、殊にわらじまでもらひ忝存候。翌日倶利伽羅を越、金澤へ着申候。因緣も候はゞ再御目にかゝり可申候。以上。

七月二十三日　　はせを

宮永治兵衞樣

十一、書狀一通

追而申入候。貴丈御國本へ御下りの時分ちよと爲御知可被下候。書狀一通賴申度候。はや／＼認候而は日取の間違いかゞ

に候。夫故認置不申候。二三日の間違などはくるしからずと頼入候。さて發句は

さみだれにふり殘してやひかり堂

鍔口の銘には和泉の三郎忠衡と彫付鯉也

いかゞ候哉、隨分御仕合よく御歸京待入候。以上。

十三日　　はせを

落水丈

十二、ながく〳〵の旅路

以手紙申入候。久々御物遠に打過候へ共いよ〳〵御さゝはりもなくめでたく存候。さて又なか〳〵の旅路色々さま〴〵御咄申度事ども山々御ざ候。爰元に着いたしいては何の別條もなく不相替そく才に居申候。二見の句御目にかけ申候。

蛤のふたみに別れ行秋ぞ

尙々委細は先達曾良に御聞と存候。近々得御意可申承候。以上。

十三日　　はせを

清右衛門様

十三、屏風のおし繪

北向雲竹老へ内々御たのみ申候屛風のおし繪、何とぞ今月中頃迄に出來候樣貴樣より御たのみ可被下候。彼方法事も三月の末にはつとめ申さるゝやうに申來候。左候へば夫迄に屏風共に出來上り不申候ては間合不申、自是も度々申越候へ共とかく紺屋の挨拶にてとむと埒明不申。さては若州客來御たのみに付たんざくの儀御申被下候。とかく短冊は御免可被下候。其代りに句書付遣申候。

金屛に松のふるびや冬ごもり

とかく何方へも御理り申入候間、先様へ宜敷様に御傳置可被下候。取込早々以上。

二十八日　　桃青

蔦崎屋十右衛門様

十四、伊賀へお越

いかにしてか便も無御座候。若は渡海の船や打わすれむ、病變やふりわきけんなど方寸を碎而已候。されども名古屋の文に御無事之旨推量に見え申候。拙者も霜月末南都祭禮見物して膳所へ出越年。

歳旦京ちかき心

薦をきて誰人います花の春

冬

初時雨猿も小蓑をほしげ也

山中の子供と遊ぶ

初雪に兎の皮の髭つくれ

南都

雪悲しいつ大佛の瓦ぶき

京にて鉢たゝき聞て

長嘯の墓もめぐるか鉢たゝき

歳暮

何に此師走の市にゆく鴉

急使早々に候。正二月之間伊賀へ御越待

有候、宗七も御噂申斗に候。

正月十七日　はせを

萬菊丸様

十五、兩句申入候

以手紙申入候。其後は久〻不申通候所却而御狀被下候。御あとに成迷惑に候。彌御無爲目出度候事に候。此方御同前に居申候。然ば句

夕べにも朝にもつかず瓜の花

花と實と一度に瓜のさかり哉

右兩句申入候。猶追〻可申入候。以上。

二十三　はせを

□(不明)子丈

十六、風氣故

申進たき事は山〻に候得共、此間者風氣に候故ふせり罷在候。ほ句の事もそこ〳〵にして置候。近所の衆も寄集何角咄等も被致、夫にて風の神もなぐさみ居申候。ほ句

むかし聞秩父殿さへ角力取

是も風氣故この風[不明]句御笑ひ草迄。

以上。

十九　はせを

意水丈

十七、花の湖水

一林甫子兩吟さて〳〵甘心仕候。世上の俗諸みな〳〵ふるび果候處、かゝる新智珍らしく段〻とりわき評に不及、一巻一體病盲愚案の情見たがふ事無御座候。愈御はげみ被遊、膳所を花の湖水と可被成候。珍夕方まけじと情を出し候。

百とせの氣色を庭の落葉哉　はせを

十八、東麓庵西麓庵

一七月ごろいづ方やらの便りに御狀到來、愈御無事に御入被成候哉。卓袋が赤味噌のとろゝ汁もなつかしく罷成候。京屋如き味噌くはるゝ時節に罷成候。御客人御息災に御座候哉、御噂たのみ候。

一車坂屋山の方に草菴御結被成候に付號可申よし、則存寄候間書付申候。

東の方藪際の古家　東麓庵

新菴定而西の方に付可申ト是　西麓庵

そくたる様に覺申候。土芳に物ずき御究させ可被下候。御氣に不入候はゞ又改可申候。俳諧いかゞ被成候哉、土芳無油斷被勤と殊に御噂可承候。

聲かれて猿の齒白し峰の月　キ角

只今愚庵に承り候。

鷄や榾焚く夜の火のあかり　珍碩

鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の棚　愚句

取紛候間早筆。卓袋參り候はゞ御かたり可被下候。さても人にまぎらされこゝろ隙無御座候。以上。

極月三日　はせを

意專様

十九、兩足いたみ

此中は御文被下ながめまゐらせ候。彌御無爲御入よしめで度候。此許にても不替くらし居候。併過し頃より兩足いたみ遠方へは出不申候。唯近き在廻りばかりに暮居候。次第〳〵寒はつよく成候故、わらぶきの軒にて丸雪の音を聞て、

　雜水に琵琶きく軒のあられ哉

此一句申進候。其表の御連中へ其元より御傳可給候。さて〳〵手もふるひ見ぐるしき書面御免。以上。

霜月廿二日　はせを

祐子丈

二十、木曾路にて落馬

如行老御歸に付乍便申まゐらせ候。未餘寒强御座候得共、彌御無爲御暮の由珍重御事に候。さては先頃留守間に御手紙、歸庵にて拝披申候處、内々拔書の五冊相認候而此度進申候。御心靜に御寫候而いつにても御かへし可成候。さて又木曾路にて落馬之時發句申候事、

馬士に落さるゝ身は木の子哉

たわみては雪まつ竹の氣色哉

右の兩く御所望故書入懸御目候。尚又委細の儀は如行老御物語可成候。不能多筆候。かしこ

廿四日　はせを

一水丈

廿一、夏中は膳所

膳所の便致啓上候。其元相替無御座候哉承度候。拙者道中島田あたりまではつかへなども折々音づれ候得共、次第に達者に成候て道々二三里日により五里ばかりも養生の爲歩行、足場能所は馬にも乘旁致候て無恙上着致候。雨天大かた小雨にあひ候てさのみあつき程の事は無御座候。十五日島田へ着候て一夜留候處、其夜大雨風水出候て三日滯り留候て十九日立申候。いまだ高水にて馬のしりがひやう〳〵かくれぬほどの事に候得共、島田の宿は懇意の者共故、馬川越隨分念入一手ぎは高水をこさするを馳走に致候。島田より一通書狀賴置候相屆候哉。二十五日の狀曾良猪兵衛より參候。早〻伊賀にて相達候。名古屋へかけよりりて三宿二日逗留、佐屋へ廻り候處に荷兮例の連衆道にてぬけがけ待受候て、又佐屋半日一宿逗留、伊勢長島にとまり候而明る日久居まで參候て二十八日伊賀へ上着申候。同姓よろこび舊友ども日々かけ合候て、今月十六日迄伊賀に逗留致候て大和加茂猪兵衛在所一宿、十七日大津へ參十八日より膳所に罷在候。伊賀同名方あつく蚊も多候へば夏中は膳所、折〻京へ出候て去來とかたり、若は嵯峨去來屋敷に休足致事も可有御座候。いまだ草臥もしかとやますず候故、持病も指出不申候。次第〳〵暑にむかひ候得ばいかゞと存候へ共、前

前より薬給ひ、醫師なども不苦居申候間
此方の事御氣遣被成まじく候。
先月十八日深川へ子珊御同道の由申來
候。定而俳諧の御心指とは存候へども、
はか〳〵敷事も成申まじく候。十七日沾
圃會致候とて懷紙指越、桃隣發句にて御
座候。成程何レ出來候間、いがあたり先
江戸いきと寫し置申候。名古屋いかせ候
俳諧猶いまだ能所に尻をかけ居申候。其
元の風情存知もよらず候間、深節に御は
げませ可被成候。名古屋は深川集を手本
にわかき者共修業の由申候。惣て俳諧評
判の事など有之候得共他にあたり候事も
有之候得ばいかゞ故、書しるし不申候間
ほのかに筆のはしを御さとり候て最其元
御はげみ可被成候。
一同名此度は殊之外力を得よろこび候
て、拙者も別て大悅仕候。委細書付がた
く候間不具候。

一猪兵衛病氣杉隣無御油斷被仰付可被下
候。折〻深川へ御なぐさみに御出あれか
しと存候。され共壽貞病人の事に候へば、
しか〴〵茶をまゐるほどの事も得致まじ
くと存候。これらが事共などは必御事し
げき中、萬御苦勞に被成被下まじく候。
猪兵衛桃隣指圖にてともかくも留守相守
り、火の用心能仕候樣に被仰付可被下
候。此度所〻狀數有之候間、重て具に可
申進候。以上。

五月十一日　　はせを

杉風樣

荷兮方にて

世を旅に代(シロ)かく小田の行もどり

野水隱居所支度の折ふし

涼しさを飛騨の工がさしづかな

すゞしさの指圖にみゆる住居哉

句作二色の內越人相談候て住居の方をと
り申候。飛騨のたくみまさり可申候。其
外發句も不致候。伊賀にて歌仙一卷言捨
申候。

廿二、時鳥ばかりの集

御文被下忝存候。又當年も時鳥ばかりの
集の事被仰下、萬事御心添之程察入候。
倘席日出名の儀被仰越、いかゞにても可
然候間、御取斗被下度、大體に罷出候ま
ゝ、其御含にて賴入存候。御咄にてはか
く斗、

木がくれて茶摘も聞や時鳥

何も其內拜顏に可申候。右御報斗申入候。
早〻以上。

麥秋三日　　はせを

山月庵御坊

廿三、酒堂他出

御速翰殊麥一器。荊口老御手作、誠御厚
志賞翫可仕候。春に成候而御禮可申進候。
昨日風故參樣遲引得御意候間もすくなく
御殘多、乍去御馳走被下辱奉存候。酒堂

他出申候間歸候はゞ御手紙相わたし可申候。義大夫殿御發句判料被遣候に付御手紙被下候。桃隣へ相渡し可申候。昨日の御報にて御座候間再報に不及候間可然奉頼候。春可被召寄之由忝奉存候通御傳大舟丈御手前夜前の一器爲持被下候。是も前宵御禮申上候貴報右同前、左柳丈御傳言御心得可被下候。折節風故持病心に御座候故早ゝ及貴報候。以上。

二十三日　はせを

此筋様

千川様

廿四、歌仙一巻

御手紙着致拜見候。先ゝ無御別儀御入之由よろこび申候。此方何事なくくらし居申候。さては內ゝ御たのみ置候。塵土佐御こし被下慥受取申候。御世話の儀忝存候。先様にも婚禮もちかく成候故、せがまれやかましくきのどくに候處早々遣し可申候。一枚見申候が又名物の紙故見事に存候。はり立出來候はゞ猶見事に可有之、もはや安堵可被致、我も紙に付風與一句、

塵土佐の腰ばりへげて秋の暮

右句口すさび申候。其許には此句にワキ御付可被遣候。是に題して歌仙一卷につゞり申たく、折ふし取紛筆留候。以上。

二十一日　桃青

和休丈

廿五、名張越にて參宮

尙ゝはゝ樣およし御心得奉願候。

彼是仕未以書狀不申上候。愈御堅固被成御座候哉承度奉存候。頃日意事より便御座候而其元相替も無御座旨は被相傳候。私南都に一宿九日に大阪へ參着、道中に又右衛門かげにてさのみ苦勞も不仕、なぐさみがてらに參つき申候。大阪へ參候而十日の曉よりふるひ付申、每曉七つ時分夜五つまでさむけ熱頭痛參候而、もしはおこりに成可申かと藥給候へば、廿日頃よりすきとやみ申候。就者心むづかしく早ゝ御案內も不申上、漸かめや、はかたやへ今廿二日見舞、折節京屋被下候間啓上仕、いまだ逗留もしれ不申候へ共、長逗留は無益之様に奉存候間、二三日中にはせ名張越にて參宮可申と奉存候、相替事無御座候得共、爲御案內如此御座候。又右衛門方へ別紙に不及候間、乍慮外御心被遊可被下候。以上。

九月廿三日　桃青(カキハン)□

松尾半左衛門様

▽山崎氏『俳人芭蕉』一通

嬉しからぬ月日身につもりて、といふ題にしてヒナヤ立甫の句、

はなりし身をば何とて捨坊主

いづれにもおもしろき句に候。我も此心とりて、

阿彌陀も花に來にけり馬に鞍

いかゞあるべく候哉。此句風情おもく、立甫句かるくおもしろく候。とかく上手下手の違はづかしき物に候。

十五日　　　　はせを

三千丈

▽桑田氏『俳諧書簡集』　一通

御使被下殊に何寄之珍味送被下御厚志之程不淺忝存候。漸く一兩日此身手透に成り候。さて〳〵心外御無沙汰計、且又其御連歳旦集之御心掛、拙庵入句の事被仰聞、先ゝ此句を集に御書入賴入候。

伊勢に居て見るならいかに初日の出

委細は拜顏萬事可申上候。右御禮御報までに。御連へよろしく御傳へ可被下候。かしく。

二十一日　　　　はせを

松里君几下

▽諸家所藏眞蹟　二十一通

一、吳座太一氏藏　二通

其一

御ふみ被下忝候。雲のうへはありしむかしにかはらねど見し玉だれのうちぞゆかしき／心を引て、

むざんやな甲の下のきり〴〵す

此句は實盛の舘にていたし置候句にて候。いづれにも全部の居きたる中に存候。此間も山ゝの紅葉をながめひとりたのしみ申候。少ゝ御手透にも候はゞ御立寄まち入候。一兩輩寄合ロすさび申たく候。先は御尋の趣旁以如此に御座候。以上。

五日　　　　はせを

哥友丈

其二

昨日近在へ麥めしによばれ參候。さてさてとろゝ汁よく出來申候。取あへず一句

飯あふぐ嚊が馳走や夕すゞみ

てい主大きによろこび申さるゝ事に候。あほらしき句也。人中へは出しがたく候キ樣斗〳〵。以上。

六日　　　　はせを

曲水丈

（右二通は一軸に表裝し、淡々の極書を附しありと云。）

二、中邑翠濤氏藏　一通

▽發端行脚の事を云て幻住庵のうとき由難至極。陳而曰。蝸牛蓑虫の栖を離と云て、行衛なき方□(不明)方無住終に一庵を得る心なれば、前段行脚共に皆居所にかゝり候。長明方丈の記を讀に、方丈の事いはむとて新都の躁動火事地震の亂皆是栖の上をいはむとなり。愚作聊のがるゝ處有といへども幻住庵にかゝる所、はき〳〵となくて御一覽の所尤と同す。則前後の文章まぜ合如此につゞり候。猶御遠慮なく御評判可被成候。され共少ゝ草臥付申

候間、前後の文先是迄にとゞめられ、所ゝは御加筆くるしからず候間、能ゝ御覽被成候而他のそしりをまぬかれ候樣に可被成候。

▽空山孱顔心相違いかゞ可有御座候や。但し胸中の空山たるべく候間くるしかるまじくや。このかみの御ぬしへ御尋可被下候。誹文御存知なきと被仰候へ共、實文にたがひ候事は無念の事に候間、こむづかしながら御加筆被下候へと御申可被下候。

▽除老王翁が事は山谷の口の方に有之かと覺申候。一連の詩に二人の名をとる事無念に候。王翁が替り入替度候へども、手前一冊の書なし。尤無才にしてさがすべき便無御座候間、是等の方、御力を可被加候。

▽我が聞しらぬ咄に日をくらす朱文公の農談日西と云句の心にて書申候へ共、直に農談の二字を書改候。いかゞにや。

▽頓て立出てさりぬ。難至極。仍筆の一字書そへ候。

▽國分山に取付處いま少よろしく風流あるべく候。此處御工夫可被忝候。此度之文章少落付たる樣に愚意にも被存候。加生へも御見せ可被下候。何とはなしに此度惣躰不出來の由、被申候由氣の毒に存候。此人申狀も難捨候間又ゝ御よみきけ可被下候。曲水位署書一旦加生の指圖にもまかせ候へ共、又ゝ貴樣よりも被仰下、此段古人の□(不明)に候間、不用にあらず候へ共文のつよみ無御座故、又ゝ事くどく書申候。其段御傳可被忝候。

はせを

去來雅丈

三、桑名鈴木氏所藏　一通

先頃は愚庵へ御尋候處折ふしあはづへ參候て不得御意殘念に存候。さて我等雪見の發句御尋被成候。さのみなる發句にても無之候へ共與ゝ御申置候故無是非書付進申候。此間加州の門弟上京候て庵に尋被申候に付御報及延引候。さて〱何かといそがしき事ども御察可被下候。何樣近ゝの內上京方ゝ可申承候條、早ゝ及御報候。

いざさらば雪見にころぶ所まで

如斯候。

二月十一日　はせを

□水丈

四、槇村俊平氏所藏　一通

御文被下殊に何寄の一種送り被下御厚志之所察入候。

拙庵も近頃は他行も不致、御無音に罷過候。其角子も四五日以前に被歸申候。美濃路抔の咄も御座候。我等も近ゝ而上可申上候。右御禮斗り早ゝ。以上。

十月廿一日　はせを

和柳御坊え

五、五十嵐竹濵氏所藏　一通

夏花集豚筆書抜は御仰候へ共、名前次第之跡書直し可申と存候へ共、其儘と有之、いづれにも近日書添へ可仕候まゝ、まづ〳〵御まち可被下候。

一泰堂主に別書申上候まゝ是もきぬせつ下され、書寫之事被仰越候へば、ちかき内□（不明）又ゝ□（不明）此通に御坐候。

朝顔は酒盛知らぬさかり哉　　はせを

羅月様

六、澤市郎右衛門氏所藏　二通

其　一（元祿二年カ）

此度さま〳〵御馳走誠以忝奉存候。爰元御參詣被成候にやと心待存候いかゞ被成候哉、御沙汰も無御座御殘多、拙者も寛ゝ遷宮奉拜大悦に存候。此狀御屆被成可被下候。方〳〵かけまはり申候はゞ、又又美濃路へ出申候間、其節万ゝ可得御意候。此地へ江戸才丸京信德拙者門人共十年斗參詣、おびたゞしき連衆出合ながら、さはがしき折節には、會もしまり不申、神楽拜に一日寄合、さのみ笑ひて、ちり〳〵になり申候。以上。

九月十五日　　はせを

木因様

（澤家にては之を「伊賀之狀」と稱す。）

其　二（元祿七年カ）

なほ〳〵先日御狀御扣□□共遂一覽候。尤珍重の句共拜見申候。重而ながら便りに委可申進候。

熱田鷗白與風預御尋候て御噂承珍重被存候。先いつぞや佐夜の泊り殊の外に草臥取染候爲不得御意、思召殘念の至に被存候。愈風雅無間斷御勤被成候由感心申事に御座候。且又いつやらの便りも御連札並たばこ一箱被懸芳情、遠方御厚志不淺義忝被存候。拙者盆より舊里に逗留の處伊勢より支考が來を待居候。追付他□致□押造候て、越年に又舊里へ可歸覺悟に御座候。正月は貴様も在所へ御出可被成候。其節緩可得御意候。取あへず早ゝ不具。以上。

八月廿日

（此は露川宛のものにして、澤家にては之を「讓り狀」と稱す。）

七、四日市鈴木慶平氏所藏　一通

木因舟にて送り如行其外連衆舟に乘りて三里ばかりしたひ候。

秋の暮行先ゝの苫屋哉　木因
萩にねようか荻にねようか　はせを
霧晴ぬ暫く岸に立給へ　如行
蛤のふたみへ別行秋ぞ　愚句

二見

硯かと拾ふやくぼき石の露

先如此に候。以上。

九月廿二日　　はせを

八、堅田本福寺所藏　一通

九日十日も在庵しれ不申候。
長逗留御草臥のけしきもなく御厚志不淺
辱奉存候。先〱御俳諧筋目よろしく候
間深切之義被存候。繪澤山に御書成被下
珍鋪慰に覺申候。愚筆御ほめ被成候に力
を得申候。何か四色五色程覺へ置申度候。
此方御出被成候はゞ十四日十五日十六十
一日は御除可被成候。他出之義知不申
候。十八日十三日は慥に在宿可仕候。□
□申遣候ゆへ相違し候處、嵐子方へ三ッ
物相屆可申候。委細得貴意候。
且又同吟の俳諧もよほどおもしろく候。
前夕嵐蘭珍夕吟じ見申候。

八日

九、藤井垞居氏所藏　一通

先月十一日之御狀廿日過に相達拜見いた
し候。其許御替りも無之候由めで度存候。
愚老もぶじに不替くらし申候。ひさ〲
無音心外に存候。俳幾年無音致候も御互
に心にかゝる事はいさゝか無之候。貴様
俳諧あがり申候由影にて承申候。此方指
而めづらしき句も出不申候。此中去方に
て、

柚の花にむかしを忍ぶ料理の間

取あへず相拶迄に申捨候。いかゞに候や。
又ゝ重便之刻よろしきも出候はゞ可申入
候。此中御狀之御報ながら如此に候。以
上。

廿五日　　はせを

松風丈

十、加藤霞村氏所藏　二通

其一

御手紙被下候昨日は知人にさそはれて四
條の芝居見物にまゐり一日遊び申候。又
にして遊興斗がよく候。

口切に境の庭ぞなつかしき

茶のほ句は是より外に覺不申候。如此
に候。以上。

十二　　はせを

木子丈

其二

昨日は御はや〲と御慶に御出被下候。
餓につれ御座候て、せた馬風方へ同道に
て參り候故、不懸御目殘念に存候。さては
歲旦之句御たづね置候御書中拜見申候。
如此に候。

年々や猿に着せたる猿の面

をかしき句にて御座候。又ゝ永日懸御目
萬ゝ可承候。以上。

五日　　はせを

松風丈

十一　伊賀今中仁兵衛氏所藏　一通

尙々狀數取重候間追而腹一ぱいに書つ
どゝはちがひ、是にてはいかいもやめ

くし可申遣候。
百とせの半に一歩を踏出して、浅漬の歯にしみわたり、雜煮の餅のおもみを覺候こそ、年の名殘も近付候にやとこそおもひしられ侍れ。去年の春まだ片なりのときこえし梅のにほひも、今としは漸々色香しほしく存候。御慈愛のほど推察致候。久々便不仕無音、去年中は何角心うき事共多く取重候段同名方迄具に申遣し候間御聞可被成候。早々東麓庵の櫻の頃はと漸々旅心もうかれ初候。されどもいまだしかと心もさだまらず候へ共、都の空も何となくなつかしく候間、しばしのほど成とも參候而可懸御目と存候。定而歳旦承度候。愚句京板に出候。尙門人の引付ごとに書とられ候間いづれにて成共御覽可被成候。□便り一字慈鎭和尙より取傳へ候。

正月廿日　　はせを

意專老人

十二、池田稻束猛氏所藏　一通

追而申上爲參候。內々御約束のほ句さて〳〵每事忘申候。今日はゆびをくゝり居候處、先書にはつたり忘申候。追書に成候。最上にては、

行くすゑは誰肌ふれむ紅のはな

右の句にて可有之候。外には是はと申程の句も無之候。依而不申入候。おもひ出候はゞあとより急便に可申述候。加水丈よろしく句も可給候。何角役にたゝぬ事に隙無之。さて申兼候へ共早づきの麥一袋急に御のぼし可給候。四五日中に客一僧一兩輩來いたし候へば、間に合せたく□申上候。以上。

九日　　はせを

吟水丈

十三、伊賀田中善助氏所藏　四通

其一

御芳翰辱致拜見候。如來命久々にて得芳慮珍重奉存候。羽二重大根往々珍敷賞翫可仕候。每日御懇情不淺義存候。いまだ草臥候而遠方不罷出候間、御非番の節御入來仰所にて俳談可仕候。昨日も半殘子被見舞さま〴〵風情語合申たる事に御座候。以上。

壬五月五日

其二

炭取被懸芳情、竝挽炭雪の名殘三枝風情見物ありて一入辱感入仕候。薬の爐邊無念たるべく候。前宵緩々與御語被成大悅不淺奉存候。風麥子へ被遣被下候よし、是又忝、案のごとく客僧今日被□歸茅屋に滯留に候。猶客僧送り立候而可得御意候。ほこりの中も珍敷思召候はゞ隨分御出御かたり可被成候。以上。

十九日

其三

今朝自旦那様御肴頂戴仕難有奉存候。私宅にては女兄弟共打寄頂戴仕、又權右衞門方にて念頃之もの共寄合戴申候とて、今日は權右衞門方にて寄合罷有候。後程御禮に參上可仕候。以上。

其四

われらが事までは物着などとんぢやくいたすはずにても無御座候へ共、一はあねの御恩難有、二は大慈大悲の御心わすれがたく、色々心を碎候へども身不相應の事難調候。其身四十年餘寢てくらしたる段、各々樣能御存じにて御座候へば、兎も角も片付樣に相談ならでは調不申、さて／＼慮外計申上候。御免可被成候。

八日　桃青

半左衞門樣

十四、大河良一氏所見　一通

口上

今日作二郎どの御上京之由にて、此方へ爲御知に付一筆申入候。彌御無事に被入候由珍重に候。此方替儀無之候。然ば内々御賴置候からさもはや出來可申候と存候。御下し可給候。近々に信州へ罷越候。途中にては入不申候得共、行先にて不自由成所多、こまり申候。同じくは此作二郎どの便にほしく候。さて一句、

顔に似ぬほ句も出よ初さくら

此句去方之庭前にていたし候句なり。數々云ク有之候へ共、筆紙にはつくしがたく、キ面／＼。以上。

廿三日　はせを

意水丈

十五、星野麥人氏所見　一通

御當地永々罷在候而、色々預御芳志不殘難愚于後候。美濃路へ立越候而、再會近歲と被存候。堅田表平田妙昌（明照）寺へも一宿立寄可申候。

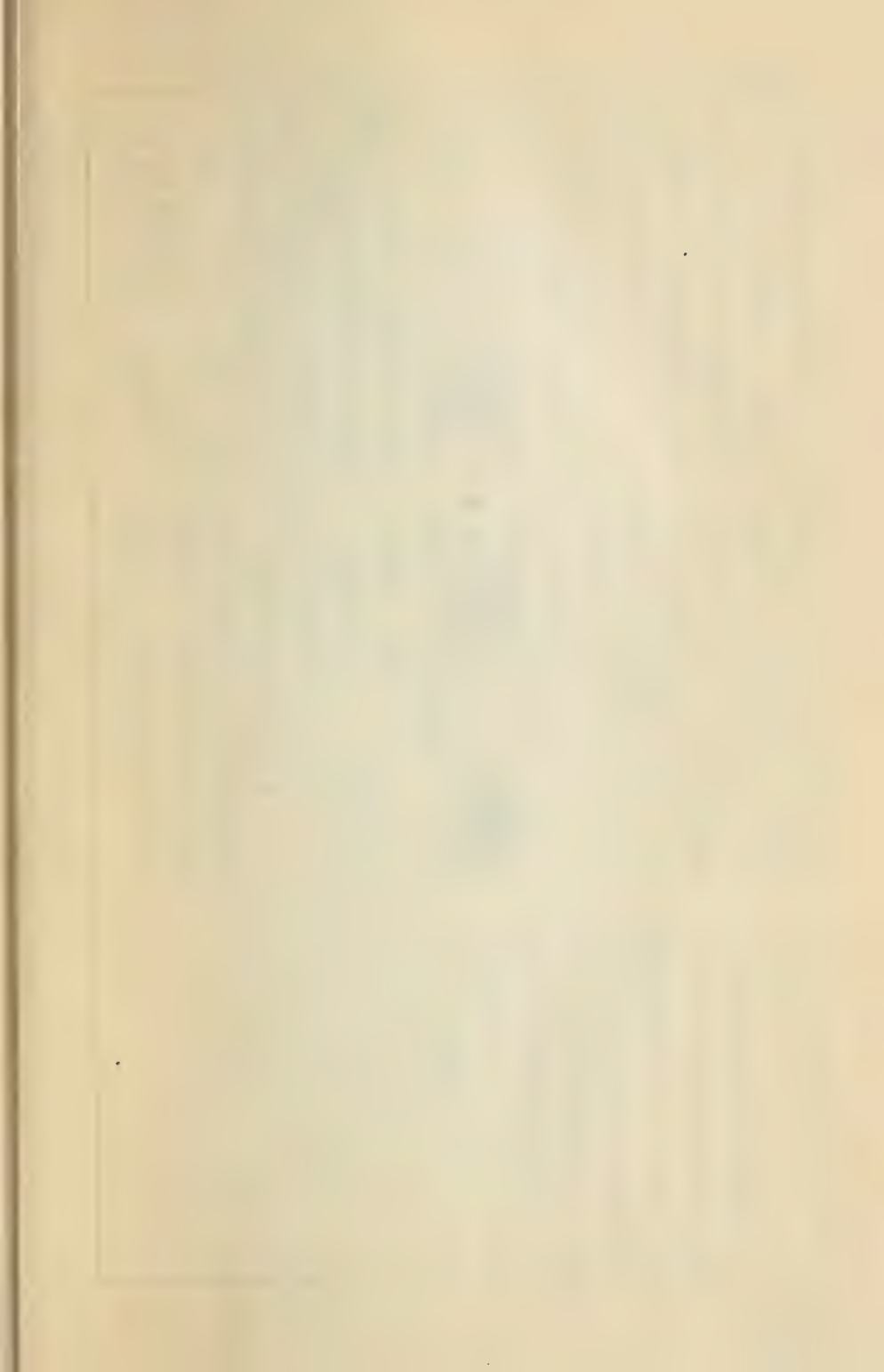
一尙白句集序文下書先可仕被遣候を考候處、集之序に難□候趣、下書なる程あら方したゝめ候。

尙白衆相談被成、前後此樣御用□つくろひ可仕候。書面御相談と存候へ共、御障無之趣殘念に存候。芭蕉門へ入と云處、尙白心入も候はゞ、御除可被成候。於拙者いかほど如在被致候而、一應無斷。和歌三神別うたかまへず候。

九月廿八日　はせを

千那樣

補遺終

評語集

評語集解説

芭蕉の所見を窺ふべきものとして、句合の判詞、連句の評註などを取集めまして、評語集の一部門を設けたのであります。語録集は主として一般的の説話でありますが、此評語集のものは特定的な場合の所説でありますから、同じく芭蕉の所見を窺ふに就きましても、それだけの區別を以て讀まねばならないとおもふのであります。例によりまして採錄書目に就て寸言を試みませう。

▽貝おほひ

芭蕉が自ら名を出しました編著はこれ一つであります。寛文十二年正月の序文がありまして、江戸で上梓いたしたのでありますが、其板本は中〱見付かりませんのであります。只今の所では柳亭種彦の寫本と申すものが權威あるものになつてをります。私は『一葉集』のものを底本とし、荻原蘿月氏が種彦本によつて校訂されました活字本を參酌いたしました。二十九歳の芭蕉の半面に、かうした遊戯氣分がありました

のであらうか、と考へますれば、不思議の感に打たれるのであります。

▽田舍の句合

其角が「ねりまの農夫」「かさいの野人」の二作者を假設いたし、句合をいたして芭蕉の判を求めたものであります。當時の板本は乏しくなりまして、安永四年に闌更が再刻いたしてをります。再刻本には左の跋文がありますから參考として記しませう。

あまさかるひなびたるとのはじめをも、とるべきはとりて、作りならべし其角叟が田舍句合といへるものあり。これに翁の判詞を添へたまへば、うちひさす都人も、月の如く華のごとく稱しけるが、ときうつり櫻木朽、おとこをんなの文字もわきがたければ、ふたゝびきざみつけて、世にひろむる事になりぬ。

安永四年未霜月　半化房

▽常盤屋の句合

杉風が八百屋の句を作りまして、之を左右に番へて芭蕉の判を求めましたもので、前

の其角のものと殆んど同時に成り、其體裁も相似てをります。 二人が申合せていたしたのかも知れません。 是亦安永に再刻されてをりますが、其再刻本を得られませんでしたから、小林風德の『芭蕉文集』中のものを以て『一葉集』のものを照校いたしました。

杉風の略傳を左に記しませう。

杉山氏市兵衛、江戸日本橋に住し鯉屋と稱して魚鳥を幕府に納むるを業とす。 世に之を「お納屋」と呼べり。 犬公方生類御憐愍の法度は、杉風の家業に大打撃を與へたるが如し。 芭蕉と舊あり、よく芭蕉を支持保護して、終始渝らず。 深川の最初の芭蕉庵は杉風が鈎を構へし所の小屋なりと云ふ。 杉風は採茶庵と號し、晩年衰杖といひ又一元とも稱せり。 晩年は深川に隱居す。 享保十七年六月十三日歿。 年七十六。

▽續の原

一柳軒不卜が才麿其角等と行ひました句合で、判者は春の部を素堂、夏の部を調和、秋の部を湖春、冬の部を桃青が當りましたものを、貞享四年に上梓いたしました。 其桃青

判なる冬の部だけを闌更が『落葉考』に編入いたしました。不卜は江戸の人で、岡村市郎右衛門と通稱いたし、石田未得門であります。『江戸廣小路』『向の岡』などの編著がありまして、其角を聯鎖として蕉門と接近いたしたのであります。元祿四年四月九日歿しましたが享年は不明であります。

▽初　懐　紙　評　註

貞享三年其角等の初文臺に賦しました百韻の前半に、芭蕉が評註を加へましたものと申されます所の此『初懐紙評註』は、寶曆十三年闌更が其編著『花の故事』に編入いたし、又明和八年の『落葉考』に再錄いたしたのでありますが、闌更は其傳來を明示いたしてをりませんので、先づ以て信賴を弱めるわけであります。其内容に就きましても、『冬の日』の後に於ける芭蕉の所說としては首肯しかぬる點もあるのでありますが、一般に芭蕉のものとして信ぜられてをるものでありますから、『落葉考』により校訂採錄いたしたのであります。

外に元祿六年酒田の不玉の獨吟歌仙を芭蕉の評したものを『秋の夜』と題しまして、

雪中庵完來が出したものがありますが、おもふ所がありまして除外いたしました。
尚延寶六年頃のもので「十八番發句合」と申すものゝ寫本が酒竹文庫にあるさうでありますが、それを見るを得ませんでしたから、乍遺憾採錄いたしませんでした。
要するに評語集は採錄の五種で十分足りるものと信ずるものであります。

杉風
曾良
曾良

貝おほひ

三十番俳諧合

松尾宗房撰

小六ついたる竹の杖、ふしぐ〱多き小歌にすがり、あるは、はやりこと葉のひとくせあるを種として、いひ捨られし句どもをあつめ、右と左にわかちて、つれぶしにうたはしめ、其かたはらに、みづからがみじかき筆のしんきばらしに、清濁高下を記して、三十番の發句合せを思ひ太刀折紙の、式作法も有べけれど、我まゝ氣まゝに書ちらしたれば、世に披露せんとにはあらず。名を貝おほひといふめるは、合せて勝負を見るものなれば也。又神樂の發句を卷軸に置ぬるは、歌にやはらぐ神心といへば、小うたにも予がこゝろざす所の、誠をてらし見玉ふらん事をあふぎて、當所あまみつ(天滿)おほん神の、みやしろのたぶけぐさとなしぬ。

寛文十二年正月廿五日　伊賀上野松尾氏宗房　釣月軒にしてみづから序す

一番

左 勝

にほひある聲や伽羅ぶしうたひ初　三 木

右

春の歌やふとく出申すうたひそめ　義 正

左の句は匂ひも高き伽羅ふしの、うどんげよりも、めづらかに覺侍る。右も又、春の歌はふとく大きにと云より、まことに大音のほどもしられ侍れども、一聲二ふしともいへば、猶匂ひある聲に心ときめき侍りて、仍左を爲レ勝。

二番

左 勝

紅梅のつぼみやあかいこんぶくろ　此男子

右

兄分に梅をたのむや兒さくら　虵 也

左の赤いこんぶくろは、大阪にはやる丸の菅笠とうたふ小歌なればなるべし。右、梅を兄分にたのむ兒櫻は尤たのもしき氣ざしにて侍れども、打まかせては、梅の發句と聞えず、兒櫻の發句と聞え侍るは、今こそあれ。われも昔は衆道ずきのひが耳にや。とかく左のこん袋は、趣向もよき分別袋と見えたれば、右

の衆道のうはき沙汰は先思ひと
まりて、左を以爲レ勝。

三　番

左

なく聲やげに伽羅のはし匂ひ鳥　露　節

右 勝

藪にすむうぐひすのうたやお竹ぶし　哉　也

左、伽羅の橋をかきょいのとあるを、匂ひ鳥のはしに取なされたるは、げによくさえづられたる口ばしなれども、右のおたけぶし、藪にすむといふより、言葉の茂りも深く、いくふしも籠て、是も百姓の納米のくだけたる所もなく、上々虫いらずとかや申侍らん。

四　番

左

さかる猫は氣の毒たんとまたゝびや　信乗母

右 勝

妻戀のおもひや猫もらうさいけ　和　正

猫にまたゝびを取つけられたる左の句、珍らしきふしをみ出られたるは、言葉の花がつを(松魚)ともいふべけれとも、きのどくと云葉、さのみいらぬ事なれば、少し難これ有て、きのどくに侍る。右また、猫のらうさいと云ふ歌を、つま戀に取合されたるは、よい作にゃきんにやうにゃ。かの柏木のいにしへ、ねう〳〵となきしわすれがたみ、又、源氏の宮を木丁(几帳)かのすきかげに見しも、いづれも猫の引綱の思ひ捨がたけれど、右の句、さしたる難もなければ爲レ勝。

五　番

左 勝

牛馬の糞ふみわけける雪間かな　貞　好

右

消殘る雪間や諸あしふんごんだ　一　友

左の句、雪間をふみわけしつめたさは、うき〳〵どつこい、うき世に住ば、うさこそまされとうたふは、しかあるべし、太山のがけ道へ引出されたる牛馬のふんこつ(粉骨)、げに珍重に覺侍る。右の句、雪にもろあしまでふみ込たるは、草履のうらもたまるまじく、足もとしらずの麁相ものと見へ侍れども、一足とんだる作意もをかしく、また雪に立したためしもなきにあらねば、持とさだめぬ。

六　番

左 勝

きゃん伽羅の香ににほへかし犬櫻　正　之

右

見にゆかんとつと山家のやまざくら　意　見

左の句、伽羅の香に匂へとは、一句もやさしく、手ざはりもむく／＼とむく犬の、尾もしろき作意なるに、右の句、さのみ言葉のたくみもみえず、とつと山家のいよ古狸とうたふ小歌なれば、秀逸物の犬櫻に、狸は喰ふせられ侍ん。

七　番

左　持

たぐりよせんから糸ならばいと櫻　簾　尼

右

春風になれそなられそ江戸櫻　信乗母

唐糸の句は、長太郎ぶしと聞えよく、いひかなへられて、此世のものとも覺えぬは、から糸なれはなるべし。右、またこむろぶしの、江戸衆になれそといふを、春風になれそと作り立られしは、花を惜む心ふかく、いづれも捨がたく持に定侍き。

八　番

左　勝

うたへるや晩鐘寺ぶしの暮の花　鋤　道

右

種ならばまかせておけろ花ばたけ　指盞子

左は山寺の春の夕暮も思ひ出られ、晩鐘寺の花の作意、げにおよびなき所なり。右の句、花の種をまかせが定なら、といて口説で、かたりて聞せ侍らん。種をまかるゝ花ずきの心も、優に聞ゆれど、浮世五十年、一寸もまだのびぬ花の枝、咲までのあい遠なれば、先日の前の晩鐘寺の、けふの花見こそたふとけれ。仍左を爲レ勝。

九　番

左　勝

鎌できる音やちよい／＼花のえだ　露　節

右

きても見よ甚べが羽折花ごろも　宗　房

左、花の枝をちよい／＼とほめたる作意は、誠に俳諧の親／＼とも、いはまほしきに、右の甚兵衛が羽折は　きて見て我おりやと云心なれど、一句の仕立もわろく、染出すこと葉の色も、よろしからずみゆるは、愚意の手づゝとも申べし。其上、左の鎌のはがねも堅さうなれば、甚べがあたまもあぶなくて、きけに定侍りき。

十　番

左　持

啼さわげにほんづゝみの無常鳥　政　定

右

ゆかしきや山の尾常はなきやるもの　和　久

左は、日本堤の無常の烟も、立のびたる句の姿は、子規のとりなりも、よく見え侍るに、右の句は、空なきさうなおつねの顔も、ずんといやな氣なれども、左にひつぴけ、うんのめとうたふ小歌なれば、お常のしやくも捨がたくて、いづれのかちまけをも、えさだめ侍らぬは、こゝろなき判者なめり。

十一番

左　勝

時鳥谷から峰からこんゑをせい　吉　之

右

黄鳥の玉子じやとおしやるほとゝぎす　一　意

左はきやりの音頭と聞えてくど く、と葉の中のつな、扨も見事によう揃ふた。右の句、鶯のかひこの中の時鳥と云心をふくみ、聲のふしをあらせて、醫者に見すれば、玉子じやとおしやるといふ小歌をかり加られ侍る。伊勢のおたまが事に出れば、玉の句といはんに難なかるべけれど、左の谷から峰から、こゝはちつくりこざかしくいひ出されし大持に、心はひかれ侍りき。

十二番

左　勝

小六方の木ざしや菖蒲がたなの身　義　子

右

菖蒲刀中や槍の木のあらけづり　雫　軒

これさ、爰許へ小六方とほざけ、だいたるでつちは、うるしいこんでは、あるではあるぞ。右の刀は、源五兵衛おとこの長脇差の、さやは三文、下緒は二文、しめて五文の錢うしなひの、やすものと見え侍る。左の六方は、いかさま口舌を菖蒲刀のよき出來ものにて侍れば、槍の木のあら削り、太刀打にも及べからず。

十三番

左

蚊やり火にわれも木賣が娘かな　適　意

右　勝

ふすべられたはん半夜の蚊遣哉　義　正

左の句、木賣がむすめとは、ふすべられたよと云を殘したるてにをは、一句の立すがたもしほらしく、山家のものとも見えねど、右の句、たはんはと云ふしを、こと葉にことわられたるは、かやの木ど、に思ひよられたり、

共上木賣のむすめにふすべられて、われもむかひ火つくらんもむづかしければ、ただ右の半夜のけぶり立まさり侍らんかし。

十四番

左 持

かゝばやな小舞あふぎの織どの繪　勝　云

右

扇もや折ふし風が吹て來た　甘　入

左は、かの孫三郎が織手をこめし織きぬの、いとしほらしき舞振也。右の句、折節かぜが吹てきたと云ふ小歌、扇にいひ叶られたれば、あなたのかたへはからころひやう、こなたの方へはからころひよつと、勝まけを定めかねしは、模稜の手をはなさぬ扇のかなめも、むくの葉、木賊のみがき骨とも云べければ、扇角力のかちまけなく、持に物さだめし侍る。

十五番

左 持

すだれごしの月やいよ此おもしろい　貞　好

右

半夜させやあ此宵の月のかげ　指盞子

左は、いよ、この、とうたふを伊豫にとりなされたるは、すだれのあみ目をおどろかし、何よりもつておもしろい。右もまた、いやひ踊の拍子と見えて、やあ、此さいた長刀をぬきんでたる作意は、さやロのきいたる處侍るまゝ、よき持と定めまゐらせたり。

十六番

左 勝

月の舟や今宵はどこがおとまりじや　信乗母

右

月の雲間よひ〳〵なんど出っ入っ　三　竿

左の句、はりまの國の書寫むしや寺がおとまりなれば、御法のふねにうたがひなく、月の光をはなつこと、光明遍照十方世界のまん中とは、此發句をや申べき。右もまた、よひ〳〵なんどゝ、をどるうちこそ佛なれとうたふ故にや、句作り殊勝に侍りて、有がたき作意なれど、地ごく踊の小歌なれば、精靈のおばゞを祭る盆の折から、かりにも鬼のさたをきらひて、にくさげなるつらつき、抹香くさく、皺面つくり批判して、以レ左爲レ勝

十七番

左

ちよいと乘たがるやたれも駒むかへ　吉　之

右　勝

むかふ駒の足をはねるやひんこひん　雫軒

左、伊勢のお玉はあぶみかくらかといへる小歌なれば、たれも乗たがるは、ことわりなるべし。右、ひんこひんとはね廻るは、まことにあら馬と見え侍れども、人くらひ馬にも、あひ口とかやにて、右の馬に思ひ付侍る。左のたれも乗たがる馬は、ちとかんよわ（疳弱）のうち氣ものとしられ侍れば、ふみ馬御免のあしもとをば早く引て、のがれゆへかし。

十八番

左

ほの上も大たばに出よ稲の束　適意

右

かぶけるは稲のほのじぞ京女﨟　城次

左の句、大たばと云を稲の束にゆひまはされし事、かなたこなたをかり集めて、鎌のえならぬ句作りには、わらの出べきやうもなし。又、右の京女郎にほのじは、たれもすきくわのかね〴〵望む事なれど、稲のとのを持たれば、我妻ならぬつまなりと、先此戀はさしおくて田の、ひつぢばへは其まゝにて、左りを勝とさだめ田。

十九番

左　持

はな息もむせてくんのむ新酒哉　此男子

右

温のめとあたゝめかゆる新酒哉　哉也

左右の新酒、味ひいづれかときいてみるに、鼻息もむせてくんのむ新酒は、から口とみえて、誠にあまけのさりたる句作り也。右の句、温のめと云ことばを、下にてあたためかゆるとことわられし事、風味のよきはさらにて、實あすをもしらぬ身なれば、よき亭主ぶりもうれしくて、いづれの勝まけをもえさだめ侍らぬは、判者もひとつなる口にや。

二十番

左　勝

鹿をしもうたばや小野が手鐵炮　正輝

右

女夫鹿や毛に毛が揃ふて毛むづかし　宗房

左の發句、小野と云より鹿とつゞけられ侍るは、かの紫のしなもの、ひかるお源の物語にも、小野に鹿のけしきを書つらね侍りしより、尤よくとり合されたるなるべし、其上おのがてでつ

ぼうと云を取なされたる鐵炮の
寸、口かしこく打出されたる玉
の句とも云べければ、火縄のひ
ごん(批言)を打べきやうもなし。
右の女夫鹿、委しく論をせんも、
毛むづかしければ、あぶなき筒
先、あしはやに迯のき侍りぬ。

二十一番

左

佐男鹿の妻の名もいとし萩の花　鼻　毛

右 勝

みそ萩やほそけれど長いぼんのもの　石　口

左、萩を鹿の妻といへるを、お
かしくうたひなされ侍れ共、み
そ萩のほそけれど長いと云處を
能考て、心のおくをついて見る
に、ほそ長き故にや。一句もす
らりと立のびて、なれ合たり。
左の發句には、はるかにこえた
やつさ、大いかい物とや申さん。

二十二番

左 勝

取やげばゝが右の手なりの紅葉哉　三　木

右

もみぢぬと來て見よかしの枝の露　蚊　足

左の句、紅葉のきめうの作意也。
右の句、よくいひ叶られ侍れど
も、もみぢぬかし(樫)を好るゝ
は、異風なる物ずきにて、色に
ふけらぬ人なるべし。左の婆々
が右の手の赤くなるは、いかさ
ま戀をすきものゝ、こと葉の品
も大むすこも、雲泥(うんでい)萬里のたが
ひあれば、かゝるめでたき折節
を、來てみよかしの木刀ならば、
一本かたげてのがれゆへ。

二十三番

左 勝

しつぽとやぬれかけ道者北時雨　餘　淋

右

しぐるおとやさつさやりたし蓑と笠　政　當

左のぬれかけ道者は、ぼつとり
ものゝしなものゝ、袖にしぐれ
の通りものとや申さん。右の句、
さつさやりたし、なんしゆんさ
まとうたへば、あつたものじや
ないは、さてといはまほしけれ
ど、とてもぬれよなら、なまな
かしぐれはいやよ。君がなみだ
の雨に、しつぽとぬれかけ道者
を例のかちとや定めん。

二十四番

左 勝

酒の酔やすぢりもぢりの千鳥足　餘　淋

右

から臼の代(ダイ)のちんどり足をふめ　三　竿

左の酒の酔は、まことに一盃過

たろと見えて、足もとはよろよろと弱く侍れども、一句たしかにいひ立られて、下戸ならぬこそ男はよけれともいへば、おもしろく侍るに、右のちんどり足、ごほ〱とふみならすから臼は、天(あま)の原をふみとゞろかす神鳴の、挟箱もちの器量にもすぐれて、骨ぐみつよく、足の筋骨もたくましければ、作者のちからも強さうにて、いづれも千鳥のあしき所はなければ爲レ持

二十五番

左

しやうことがたまらぬものはみぞれ哉　鼎　毛

右 勝

見ぞれ酒元來水じやとおぼしめせ　一　入

左の句、しやうことが、たまらぬといはれしは、みぞれのふる句とも見えず、われもおもしろくてたまらぬに、右は元來水じやと云小歌を、みぞれ酒に作られたるは、桶の底意深くいひ立られ、樽のかゞみともなるべき句なれば、かん鍋のふためとも見ず、かちのかちとさだめぬ。されど判者もひとつ過て、耳熱(あつ)し、目もちろ〱りのみぞれ酒、のみこみ違ひもありやせん。かやうにはほむるとも、さのみに勿体付さすな。

二十六番

左 持

わる音はかんからめける氷かな　勝　云

右

そこでさせ氷のしたの月のかげ　城　次

左の句、こがねのはしはかんからめくにと云小歌を、わつゝくどいつ、云立られたれば、氷のはり背にて、自慢せらるゝもことわりなるべし。右又、居合踊のそこでさせと云を、氷にとぢあはされたるは、げによく思ひ月影の、ひかつた句作とも申べければ、勝まけのわいだめをさだめん事、おろかなるさへのおぼつかなく、深き淵に臨むがごとく、うすき氷をふんでとりて、持ときはめ、世の人のそしりを、けふよりしてのち、われまぬかれん事をしんぬるかな。

二十七番

左

越後布か松の葉はんの雪のいろ　正　之

右 勝

降つもる雪やしら藤こふじ山　義　正

雪の色を越後布に見立られたる

左の句は、げにも手きゝのしは
ざにて、あさいとのよりも、よ
くかゝりたるにや、わらはれぬ
作意なれども、松のはゝんと云、
事、小歌のふしは尤ながら、一句
のはたらき見え侍らず。右は、
しら藤こふじを富士に取なされ
ゆと、まとに名高き不二には、
いかでか肩をならべ侍らんと、
左の越後布を安うりにまけさせ
たるは、さぞもとねになりかね
や侍らん。

二十八番

左 持

炭の荷や付てうるしいこんだ馬　吉　勝

右

炭がしらけぶるやずんといやな木じや　善　勝

左、炭をうると云かけられたる
は、げにうるしい、こんだ馬の
あしき處なく、一句もよくいひ
立（たて）がみの、けをされぬ作者也。
右の句、ずんといやなきとはあ
れど、氣のどくたんといひ叶ら
れたれば、今更けし炭となさん
ともおぼえず。勝負に世話をや
く炭がまの、ロ〳〵いづれも捨
がたくて、持と定侍き。

二十九番

左 勝

掃除して瓢簞たゝきや炭ほこり　不　屈

右

炭焼やおのが先祖はよくしつた　一　入

左、炭とりへうたんをたゝきて、
掃除したるは、手もまめなる處
あらはれて、奇麗なる發句也。
右は、野郎ざぶとく出申な、お
のが先祖はよく知たと云を、小
野炭に取なされたる事、尤炭頭
をかたぶけて、感じ入侍れども、
先祖をよくしられん事、わきま
へがたく、只左のへうたんの輕
口にまかせて、勝と定たるは、
をかしき忖とゆふがほの、ひよ
んな事にやあらんかし。

三十番

左 勝

犬の鈴やいきくびしやだんの神ゝ樂　此　男子

右

舞衣やをかみの出立神樂神子（みこ）　一　友

左の犬の鈴の句、まことに人作（じんさく）
の及ぶ所にあらね共、いきくび
社檀もうごき、御社のおやぢさ
まも、御感心淺からず。末社（まつしゃ）の
ほこらのこや〳〵までも、いき
くび、ごたいをかたぶけられん
事、うたがひなくおぼえられ侍
る。右のをかみの舞衣、ひとへ

に聞えて、手うすき作意なれば、
まけの上のまけたるべし。とか
く息災延命の神楽歌を舞のきに、
つき給へとぞ。

松尾氏宗房雅伯、爲余斷金之友。其性嗜滑稽、潛心誹諧者、幾換伏臘矣。今茲春正月閑暇之日、以童謠俚近之語、作狂句者總若干。采而韓之、分是於左右、以判斷其可否。誠錦心繡口、擊節嘆賞焉。編既成、請予爲後序。輙生素以切偲之情、不忍袖手旁觀。文雖衒羊豹、借一言以續于後云。

寛文壬子孟春日　伊陽城下　横月漫跋

芝三田二丁目
中野半兵衛
同　庄次郎
開板

桃翁、栩ゝ齋にゐまして、爲に俳諧無盡經をとく。東坡が風情、杜子がしやれ、山谷が氣色より初て、其躰、幽になどらか也。ねりまの山の花のもと、渭北の春の霞を思ひ、葛西の海の月の前、再(ふたゝび)江東の雲を見ると。螺子此語にはずんで、農夫と野人とを左右に別ち、詩の躰五十句をつゞる。章のふつゝかに、語路の巷のまがり曲れるをもつて、田舍とは名付たる成べし。仍以是に翁の判を獲たり。判詞、莊周が腹中を呑で、希逸が辯も口にふるす。遠くきく、大江の千里は、百首の詠を詩の題にならひ、近所の其角は俳諧に詩をのべたり。あゝ千里同腹中なる事を知ル。しるといへば、我是をしるに似たり。しらずして爰に筆をとる、又是しらざるなり。

嵐亭治助謹序

延寶八歳次　庚申仲秋日

田舍の句合

第一番

左 持　ねりまの　農夫

霞消て富士をはだかに雪肥たり

右　かさいの　野人

菜摘近し白魚を吉野川に放(ヘナ)いて見う

先、左の句は、巻頭の一句と見へて、豊にして長(たけ)高し。未だ初春の体、霞もやらであり〳〵と見えたる不二のけしき、雪肥たりと云所奇也。古人春雪瘦(ヤセ)タリなど〻作れる便(たより)多きにや。右の句菜摘と云より吉野川に白魚をわがひたる一興、尤妙なり。山の姿川の流見所多し。

第二番

左 勝　農夫

春の水やかろく能書の手を走らす

右　　　　　野人

引かへつ蕪をはたのに春の駒

岩間をとぢし苔の下水、さら〈〈と流出る波の文、羲之か石ずり。懐素が自叙帖の筆のわしれるがごとし。右の句論ずるにたらず。

第三

左　持　　　　農夫

宿の梅桜いかばかり青かつし

右　　　　　野人

青柳に蝙蝠つたふ夕ばへ也

左右の姿詞、此句に止り侍る。かの山谷が烟雨ニ青カツシガ已ニ黄ニナンヌト、作れる梅の詩に似たり。其躰つよくして優有。又、柳につたふかはほり、鶯よりも猶興あり。よは〈〈と見みて又つよし。左は唐繪、右は大和繪、墨繪にしやれて色繪にうるはし。法印も筆を捨、予も又筆をなげうつ。

第四番

左　　　　　農夫

歸雁米つきも古里やおもふ

右　勝　　　　野人

今案ズルニ寒食の家には白身番

越路にかへる雁がねに、米つき古郷をしたふ。哀深からぬにはあらざれども、寒食の白身番珍し。この日は火のさたを忌といへば、批言の批をも忌べき也。

第五番

左　持　　　　農夫

徳利狂人いたはしや花ゆへに社

右　　　　　野人

櫻狩けふは目黒のしるべせよ

徳利をいだいて花にたはぶるゝ狂人、深切也。又、目黒が原の遠のさくら尤やさし。上野谷中のさくらを見つくしたる躰、言葉の外にあらはれたり。兩句、幽玄差別なし。

第六番

左　　　　　農夫

俗にいふうぶめ成べしよぶこ鳥

右　勝　　　　野人

鳶に乗て春を送るに白雲や

喚子鳥、予先年、吟先生にまみえて、此事を尋侍れば、傳受の事、誹諧にせん事無用の由。又、うぶめ、李時珍が說に姑獲鳥とかけり。鳥と云字によせて、おもひ出られけにや。猶批判なりがたし。且、右の句の鳶にのつて無窮の空々たるに逍遙せん事、樂猶きはまりなかるべしや。

第七番

左　　農夫

今日にかはる淨瑠璃殿(デン)の青簾

右 勝　　野人

何と夏羽織縮緬は重し紗は輕し

青簾よく云叶(いひかなへ)侍れども、夏羽織重からず、輕からず、中庸の中を用ひて然るべきよし。兼才寺の入道前の關白とやらんのせりふにもかゝれたり。仍以、夏羽をり勝と定め侍る。

第八番

左 勝　　農夫

鉦(カネ)カン〳〵鷲破(ソヨヤ)郭公艸の戸に

右　　野人

ほとゝぎす家隆のうそや巷

草の庵の夜の念佛先殊勝(しゆしよう)、家隆のうそとは、「ほとゝぎす聲も絕にし垣根よりしのびねに鳴きり〳〵す哉」と讀る心にや。誰(た)まことより此うそを用ひんか。されどもかねの音のはるかに聞ゆるを、時鳥に心付たるありさま、猶可(か)ナランや。

第九番

左 持　　農夫

壁の麥律千年をわらふとかや

右　　野人

摺鉢の早苗穗に出る秋社あらめ

壁に生る麥は、朝菌(キン)の晦朔をしらず、冥靈大椿(メイレイタイチン)を論ずるに似たり。又摺鉢の早苗に秋おもふ事、かの「二葉ふくだに荻の上風」とよみ給ふ心もをのづから也。左は虛也、右は實。花實いづれをかとらん。

第十番

左　　農夫

藻の花や海老こす袖にさゞれ浪

右 勝　　野人

何を音にすぽん鳴らん五月雨闇

藻のはなのいさぎよきに、小ゑびの飛ちがふけしき、涼しくしほらし。右の句は「川越の遠の田中の夕闇に何ぞときけば龜ぞ鳴なる」と聞え侍る。小ゑびも捨べきにはあらねど、予は龜に乘てあそばむ。

第十一番

左 持　　農夫

むかし匂ふ花さへ實さへ陳皮(チンピ)さへ

右　　野人

蚊遣り火に夕顏(ゆふがほ)白しだい〳〵は

枝に霜をけと、よまれたる常盤木の綠青〳〵と、うるはしく仕立られたるに、右、又かやりの烟の中に朗〻(ホノ〴〵)見つるゆふがほの

白く咲て、軒に干れし橙の色をあらそふも、又おかしくこそ侍らめ。

第十二番

左　　農　夫

石の枕に鮓屋ありける今の茶屋

右 勝　　野　人

芝物の涼しき常夏の巻を見て思ふ

石の枕古歌明也。並木の茶屋の繁栄も、そのひとつやの名残とや。且、芝肴のとりまぜ、彼巻の鮎石ぶし、御前にて調じさせ給ふ折ふし、思ひやるさへ涼し。

第十三番

左 勝　　農　夫

袖の露も羽二重氣にはゐぬもの也

右　　野　人

夢となりし骸骨踊る荻の聲

羽二重の袖の露は、貴人の心に秋至らずと、作れる詩の心を思ひよせられたるにや。右、また骸骨の荻のこゑをかりたる、さもあるべき事ながら、左の感淺からず覺へ侍る。

第十四番

左 持　　農　夫

月のさそふ詩の舟か山市か川武か

右　　野　人

さゝで柴の戸泥坊にとがはなし月

公任卿歌の舟に乘て、秀歌よみ給ふよし。これは是、山一丸、川武の舟ばたを敲て、いかなる秀歌うたふにや。右はまた「眞木の板戸もさゝずねにけり」などゝよめる、月に忘れたる柴の戸のしりざし、咎なし。難なし。

第十五番

左 持　　農　夫

眺メ送る函谷やけふ驢馬迎

右　　野　人

霧汐烟行德かけて須磨の浦

函谷關の驢馬、行德の汐燒、眺望いづれも珍重なるべし。

第十六番

左 勝　　農　夫

分限者に成たくば秋の夕昏をも捨よ

右　　野　人

秋の心法師は俗の寐覺かな

先、左の句珍重。法師のねざめ俗にかへらん事、尤さもあるべきや。兩句辯じがたきに仍て、大福山金德寺の和尚にまみえて問フ。答フ。假にも無常を觀ずることなかれ。一錢を得たらんときは、神のごとく如レ君せよと。仍て右の句閉口ス。

第十七番

左　　　農夫

砧の町妻吼る犬あはれなり

右勝　　野人

芋をうへて雨を聞風のやどり哉

左の句、里の砧といはんはふるしとて砧の町と云、つま戀る鹿は不レ珍とて、妻吼る犬と云しは、猶作の中に作有て、聊作過たるにや。又、芋の葉に雨を聞んは、誠に冷しく淋しき躰、尤感心多し。これ孟叔異が雨の題にて、檐聲和レ月落ニ芭蕉ニと作れる氣色に似たり。右勝たるべし。

第十八番

左勝　　農夫

月日の栗鼠葡萄かつらの甘露有

右　　野人

紀路行山はみかんの吉野かな

鼠をりすと作意して、ふだう葛の甘露とつゞけり。右の句は信章子が句に

茶の花や利休が目にはよしの山

と作れるに、聊髣髴の似かよふにや。強て心を別たん時は、等類の難とも云がたく侍れど、甘露の一滴には、我も前後を忘れたる成べし。

第十九番

左　　農夫

時雨瘦松私の物干にと書り

右勝　　野人

凩となりぬ蝸牛の空貝

和歌三躰に、秋冬の歌は細くからびてと云り。瘦松の霽もさびしく、蝸牛のうつせ貝もさびたり。されどもかれが角の上にあらそはんときは、右いさゝかまさりなんや。

第二十番

左持　　のうふ

金藏のをのれとうなる也霜の聲

右　　や人

啼千鳥幾夜あしかの夢おどろく

豐山のかねぐら、己レとうなり、かよふ衛の鳴聲に、海鹿の夢もおどろくべしとや。兩句目さむる心地して蘧々然たり。

第廿一番

左持　　農夫

侘に絕て一爐の散茶氣味ふかし

右　　野人

火燵のうたゝねや夢に眞桑を枕にす

口切に一句、手づから鑵子を鳴し、茶袋を洗ふ。麁茶淡飯の樂はいかなる侘助にや。又、火燵のうたゝねの夢は、列子曰。陽氣壯則夢渉ニ大火ニ燔焫、又藉レ

帯寐則夢レ蛇云々。是を以てこれを思ふに、爐邊のあたゝか成に、瓜を夢見ん事さもありつべし。

第廿二番

左 持　農夫

雪おもしろ軒の掛菜にみそさゞい

右　野人

雪にとへばかれも蘇鐵の女なり

左の句は、おかしき所に風情を求めて風情あり。適山家のけしきを見るに、此鳥必軒近く啼て、雪の折ふしなどは、一入人家をはなれず。山里の淋しさ、誠におもひ合せたり。右も又雪中のそてつの詠餘情かぎりなく、雪と雪とのあらそひ、いづれも白し。

第廿三番

左 勝　農夫

詩人ゆるせ松江の河豚といはんに

右　野人

鯖にこりず鰹にこりず雪の鰒

金澤のあそび、たのしいかな。けふの薄暮に網をあげて、狀松江のかとんを得たり。むかしは鱸、今はふく、古風は鱸魚を愛して河豚を知らず。又、右の鰒數寄さばにあてられ、鰹にえひての上暫ク用捨有べし。

第廿四番

左 勝　農夫

題ニ山家之糠味噌ー

閑居の糠みそ浮世にくばる納豆はなど

右　野人

寄ニ貧家之冬夜ー

夢猶さむし隣家に蛤を炊ぐ音

葉生姜の森の木がらし吹あれて、枯々なる蓼の林にかくれ、ぬかみそ壺に入て、乾坤を忘れたる隱士世間寺無用房ヲ笑ふなるべし。右の句、貧家にして冬夜をわぶるの躰、寒苦をふせぐにたらず。尤、哀深きといへども、隣家の蛤より、當前のぬかみそを愛せんにはしかじ。

第廿五番

左　農夫

町神樂店前の日かげをかつらとし

右 勝　野人

流るゝ年の哀世につくも髮さへ漱捨つ

店前の日蔭を葛とせん事一句云がたし。流るゝ年のあはれ、誠に是を歎美すべし。

栩々齋主桃青漫採レ毫判

常盤屋の句合

鯛のなる木の櫻咲て、鮒は紅葉をあらそふといへども、青物の青々と、四時全き常盤の陰に、ひとり其味の淺く水くさきを愛す。

杉風子

常盤屋の句合

第一番

左　勝

草すでに八百屋の軒に芳し

右

今引も小松が原のはたな哉

左の芳草、八百屋の軒に梅をあらそひ、鶯菜にも初音まちたる心地するに、はた野の原の若菜にすがりて、子の日の松を引添たるもめでたく侍れども、先八百屋の草のかうばしきに、心とゞまり侍る。仍以レ左爲レ勝。

第二番

左

はやなりぬ干物の木目もにるに

右　勝

花よりも猶目うどの春の紅は

左、干物の木目も、春に若歸りたるけしき尤ながら、目うどの色のくれなゐ成に心付たる一作、まことに花よりも匂ひかうばし

第三番

左　持

芹とる翁碧潭に望んてこはいかに

右

防風ゆるく吹て。青酢漸く垂り

碧潭にのぞんで芹とる翁、薄氷をふむかとあやうきに、防風ゆるく吹て青酢の氷、とけ初たるものどけしや。左右のけぢめ、いづれかと筆をかざして、遙成むかふの岨道を見れば、髭むさ

〳〵と生たる老人、早蕨の杖にすがり、忽然と來たり、芹をあなどるべからず。ばうふうをすつべからず。我は是、此山にかくれ住野老先生と云もの也と云て、即失せぬ。

第四番

左 持

しほらしき物つくしちよろ木かいわりな

右

澤茸やくされ草鞋のちぎれより

左の句、しほらしき物の類を集たるは、もし是、新清少納言などが、筆のすさみにやとやさしく、右も又溷ちさの塵芥の中より生出たるけしきも、猶むつかしげならず。兩句共にしほらしくおぼえ侍る。

第五番

左 勝

青わさび蟹が爪木の斧の音

右

茗荷たけは生姜の上にたゝん事を

予、日外かた田舍の老夫の語りしを聞に、わさびうへ置かしこに、必蟹の來てこれを喰ふと。此作者は此事をしるや。しかも共作工にしてかにが爪木の丁々たるひゞき、山更幽也。右又茗荷、薑生姜の似たるを以、あらそふといへども、左のわさび感情多し。

第六番

左

櫻蒟蒻いかなる人の何を以櫻

右 勝

干大根よめ菜を戀るおとろへは

櫻にあらぬさくらごんにやく、予たはぶれに曰。かれは紅葉豆腐に増れるといはんか。且、一樽の霞の間より、顯れそむるのけしきかとおかしく侍れども、干大根のうき戀にやせほそりて、たとへ其身は一分刻に成とても、此よめ菜の君を社と戀つらめ。哀也。深切也。

第七番

左

蜈のり榮螺の洞に潜てけり

右 勝

獨活の千年能なし山の柚木かな

むかで苔の住所、さゞいの洞に求たるも珍らし。右はまた能なし山のうどの大木、千とせを經たるも奇也。此山いづれの所にや、山海經にも見えず。もし无何有之鄕、廣莫の野につゞきた

る名所か。彼大樽を捨さるのためしもおもひ出られて、うどの大木又愛すべし。

第八番

左

柚の花は香故に花と社いへれ花

右 勝

都人山桝を藤の若葉とて

花柚のかほり盞に落て、いかなる上戸の柚の匂ひぞとなつかしけれども、都人のみなれぬ木目、藤の若葉に見ちがへたる風流、優にやさし。

第九番

左

夕べかな雨杜鵑坐禪豆

右 勝

麥飯やさらば葎の宿ならで

左の句、雨の夕べの淋しさをいはんとて、坐禪豆といひ、郭公に慰たるさま、興有てきこえ侍れども、葎の宿ならぬ麥飯こそ猶珍らしけれ。

第十番

左 持

きり蓼の切れて己が命かな

右

夕影や色落すしその露おもみ

前栽國の傍にして蓼紫蘇の二もと色をあらそふあり。先、左蓼の曰。我はこれ、色翠に位いやしきといへ共、人をして利根になさしむるの徳あり。其上露命不貪、切れて己が命といふ所こそ命なれ。紫蘇答。我には天徳をゆるして紫衣をなす。多くの梅法師の中に紫衣上人とあがめられ、又五臓に入て病を治し、庭に有ては色落すしその露おもげなる風情、青蓼の青キにまさらんやと云論、しばらくにしてやまず。

第十一番

左 持

女とや茄子はがくれに打かたぶける姿

右

山賤の垣ほのさゝげともよめるや

己が葉がくれに打かたぶける茄子の君、むらさき式部が娘にや。わかむらさきのゆかりにや。いか成ものゝ妻となり、いづれの人のよめとやならん。なつかし。右の句も又「山賤の垣ほにはへる青さゝげ人は來れども言傳もなし」とよめるは、古今集寵どのゝ下女のよみたるうた成べし。いづれかおかしく、いづれか哀

ふかゝらん。

第十二番

左 勝

五月雨のよそに。蕗のはながら蓮の池

右

天蓼の枝折。老たる猫にはあられ共

たえまなき五月雨のそら、庭上忽池邊の思ひをたすに、彼遍昭が「何かは蕗を蓮とあざむく」とよめる心もおかし。又齊の管仲またたび山ゝに道をうしなひ、老たる猫を放て道しるべしたるも珍らしけれ共、只遍照の詠に心ひかるゝ也けり。

第十三番

左 勝

あへて此箒木のほろ／＼と成て只

右

影うらむや毛虫。かりきがうれの溜水

左、箒木のほろ／＼あへ、淡してやすし。右の句はかりきがうれのたまり水に、いぶせき毛虫の影をはぢんも、興ありながら、あまりに趣向を求め、たくみ過たるやうに覺え侍るは僻耳にや。只箒木のやすらかなる方こそやすらかなれ。

第十四番

左

古そばやあかでも人に夏大根

右 勝

朝顔の夏日陰待間のとうふ哉

「雫に濁るしぼり汁あかでも人に」とよめる古そば、めづらしからぬにはあらず。しかれ共松樹千年豆歎一日の榮と作れる、朝貌の詠、尤興あり。

第十五番

左

里芋の長也。畠中の庄司とやらんは

右 勝

薯は山をうばつて。金輪際に自然生

里芋、興有て實なし。右の山の薯、自然薯、蕷、生、の字用ひんこといかゞあるべきや。但シ自然石・自然木等の類にて、くるしるかるまじきか。其上、五文字力ありて、一句もつよくきこえ侍るまゝ、右勝たるべし。

第十六番

左 勝

茶僧月を見るに。梅干の影のごとくに來り

右

亂酒の僧見よやゆべしの責を受ん

左の五文字、先珍重なるに、現に見えし梅ぼしの情、誠にかすか也。かの土大根を食したる昔

も、此類成べしや。右の句、破(へ)戒(カイ)の僧をいましめて、未來柚べしのせめをうけ、焦熱(セウネツ)の苦しみには、柚味噌の釜うけにも成べしやとおそろしく、唯(タヾ)茶數奇の僧こそ殊勝におぼえ侍れ。

第十七番

左 勝

暮山の雨松茸のすごく〳〵と獨り

右

岩もる水木くらげの耳に寂(シク)

しよぼ〳〵と降(ふる)暮山の雨にぬれて、松茸のすご〳〵とたてるけしき、言葉の外に意味ふかし。右の句も一体なきにはあらざれ共、木くらげの耳にむなしく、岩もる水の雫さへ、聞もらし侍るにぞ。

第十八番

左 勝

だい〳〵を蜜柑と金柑の笑て曰

右

水又栗。[ゝを淸しといはんとすれば]

橙を蜜柑金かんの論は、作のうちに作有て、虚の中に實をふくめり。數句の中の秀逸、此句に於て荘周(ソウシウ)が心あらむ。尤玩味すべし。水復(マタ)栗の句は、栗また水を淸しと打返(シ)たる心、よく云殘し侍れ共、こゝろ餘りて言葉たらずなどゝ、難(ナン)ずる方も有べきや。只左の句ヲ以、類ひなき勝と定畢ぬ。

第十九番

左

賤が契は干瓢(かんぺう)のむすびもとめず

右 勝

かれ〳〵ナルやのべに冬瓜の獨ねる

ひさごがもとの賤が情、干瓢の結びもとめぬ仇なる契こそはかなけれ。されどもかんぴやうむくと云時は、六月の季に出たるを、秋の句に合せん事いかゞ。右は又うら枯わたる秋の野に、冬瓜ばかりとり殘されて、ひとりねに打こけて、あじきなきさましたる見立、新敷、感(かん)多し。

第二十番

左 持

霽浪(シグレ)の音。昆布の笘屋の夜すがらやな

右

山寺の冬納豆に四手(して)うつやあらし

左の句、蝦夷(エゾ)松前のあたりに、昆布を以、笘屋を覆(ヲホ)ふとかや、喘に聞傳たるを、時雨浪の音のさびしきまゝに、造成さかひ迄、おもひ出たる哀ふかし。右の句

は納豆に四手うつ山寺の嵐、まことにさむき景氣をよく云のべたれば、兩句持にてさしおきぬ。

第二十一番

左 勝

凩の風干葉は窓をうがつて去ん

右

霞やは芥子に牛房は埋木の

しづが軒端のほし葉さへ、凩の尋來て、おとするにやと茅屋の閑窓、おもひやるさへさぶし。牛房の埋木、花さくべしともおぼえず。

第二十二番

左 勝

はづかしや根深の。老の黛も白根がちに

右

あけぼのや霜にかぶなの哀なる

おさつきのみどりうるはしく、韮の若葉のたをやかなるも、いつしかねぶかの白根がちなる白髮の、老女に見立たるも新し。又霜下にしぼむかぶなの姿、けしきなきにはあらされ共、根深の前のいにしへこそ猶なまめかしけれ。

第二十三番

左 勝

麩といふもの有。性水を好で氷に遊ぶ

右

氷筋のごとしかんてんのかんは寒ィとよむ

麩ハ性ヲ註シ、カンテンハ文字ヲトク。增補獻立抄ニ曰ク、麩ハ風味ノ切、以レ酒煮、以レ油煎、則味愈厚シト云リ。此方賞翫タルベシ。

第二十四番

左 持

大根生る逆成がおかしいとや人〳〵

右

雪の冬菜男鍬ついて立りけり

左の句、賤がわら屋の軒に、生たる大根にや、面白し〳〵。雪の中の田園三徑うしなひたる体、又珍重。

第二十五番

左 持

雪の竹子。今は塩したが有ものを

右

臘月の青物。我常盤屋也とよばふ

晋の孟宗、雪の中の須田町は、尋問ざるやとおかし。右はまた、臘月の青物に、四時不變の國をおもひよせたるも奇特。左右わかちなし。

詩は漢より魏にいたるまで四百餘年、

此時をこひざらめかも冬瓜(カモフリ)

于レ時延寶八庚申季秋日　　華桃園

詞人才子、文體三たびかはるといへり。和歌の風流、代々にあらたまり、俳諧年々に變じ、月々に新也。今こゝに青物の種(くさ)々をあつめ、二十五番の句合となして、予に判をこふ。誠に句々たをやかに、作新敷、見るに幽也。思ふに玄也。是を今の風體(ふうたい)といはんか。且是に名付て、常盤屋といふは、時を祝し代をほめての名なるべし。倩(つらつら)、神田須田町のけしきを思ふに、千里の外の青草は、麒麟につけて、これをはこばせ、鳳の卵は籔(スカ)にうづみ、雪の中の茗荷、二月の西瓜、朝鮮の葉人參、綠もふかく、唐(から)のからしの紅(くれなゐ)なるも、今、此江戸にもてつどひ、風、たうきびの朶(エダ)をならさず。雨、土生姜をうごかさねば、青物の作意(さくい)時を得て、かいわり菜の二葉、松茸の千とせを祈(イノ)り、芋の葉の露ちりうせずして、さゝげのかづら長くつたはれらば、そらまめをあふぎて、今

續の原　四季之句合

一番　落葉

左持

落つかぬ木葉にあたる雫かな　風水

右

落葉とて富士のつゞきに塔ひとつ　松濤

左の句、景氣微細に心を付たり。右、又山もあらはなる不二の詠め、一句のたけもゆたかに聞え侍る。されども句中目に見えたる切字なし。五文字にて云殘したれば、きれ字を加へて見るべきにや。猶、分明ならざるを難じて、持に定侍るべきか。

二番　霜

左勝

親と子の霜夜をかこふ野馬かな　溪石

右

霜深し扇をかざすよるのふね　勇招

「ものいはぬよものけだものすらさへもあはれなるかなや親の子をおもふ」とよみ給ひしこのうたに便して、野馬の子をいとふさませつ也。右の句、さもあるべきながら、左の句、秀逸なればまけ侍らんかし。

三番　夜興

左

我笠に月夜わするゝ夜興かな　コ齋

右

いづれ狸得失覺て犬もなし　文鱗

ひだりの句、茂み深く分入狩人の形容、いぶかしき處あり。右の句も、すがたつよく、言葉もたくみに聞え侍れども、其得失、我もわきがたし。仍以持トス。

四番　枯野

左勝

松苗も枯野に目だつあらしかな　枳風

右

大橋を枯野にわたす入日哉　全峰

左の句、木枯の吹盡して、苗松のそよ〳〵とうごきたる風のやどり、めにたつべきもの也。寸松紅梁のすがたをふくみて、一句たけ高し。右も又、枯野の風景見捨がたく侍れども、苗松の

方や日に立侍らん。

五　番　網代

左 持

子を連て夜のあじろに蓑せはし　心水

右

あじろ木のゆるぎやみぬる氷かな　不角

あじろの床に、子を連たる作意めづらかにしてやさし。右又、あじろの杭の氷にとぢて、寒さいやましたるけしき、左右、感心わきがたし。

六　番　石蕗

左 勝

破れ葉のツハに顏出す鼬かな　調柳

右

つは咲や誰が引すてし雪車の跡　立些

左の句、いたちとかいふものゝ、わが方を見おこせたると云けん、をのゝ薄もおもひよせられてをかしく侍るに、引捨し雪車の句意しかときゝえず。仍以レ左爲レ勝。

七　番　鴨

左 勝

鈴鴨の聲ふりわたる月寒し　嵐雪

右

鴨くはで菜を干枯す鹽屋かな　魚兒

すゞかもの聲ふり立る秀句かぎりなし。一句安らかにして、嚴寒のけしき盡たり。かの妹がりの歌を吟ずれば、六月廿四日の日も寒しと書けん、さることにや。右の句も靈を飼ものゝ、きぬ着ぬためしも、あはれに侍れども、鈴がものすごの聲、句調たかしとやいはん。

八　番　氷柱

左

風に來て氷柱にさがる楓かな　一排

右 勝

門閉て閑居をじゆる氷柱哉　琴風

氷柱にさがる楓、ほのかなるけしき、ほそくからびて哀なるに、右はなほ烟り絶〳〵にして、葎の後は氷柱に門閉たる閑居の扉、感情まさりたるやうに覺侍る。

九　番　あられ

左 持

あかつきの霰は冬の信かな　李下

右

森深く野馬飛こむあられかな　仲風

烈風寒威、曉の寢覺、冬のまことゝいへるぞ、かくてはよにもあられ降哉と吟聲さびしきに、右は又、野馬のあられにおどろきたるさま、能云叶られたり。

閑所、見る處、師曠が耳をそばだて、離婁が目のさやをはづすといふとも、左右の是非、辨ずることあたはじ。

十　番　神樂

左勝

御神樂や火を燒(たく)衞士にあやからん　去來

右

鉢たゝきまじりて狂ふ神樂かな　孤屋

左りの句、させる難もなく、秀たる所も見えず。右は鉢たゝき、神樂に交るべき方いかゞ。右に難あるをもて、左がた勝たるべし。

十一番　頭巾

左勝

山里や頭巾とるべき人もなし　京 觀水

右

頭巾きぬ出家見らるゝ野中かな　鹿言

めにふれぬ山中の客、そゞろに愛せらるゝ楓林もあるか。右は目に立て猶すごき冬野の法師、人にはいかゞおもはるゝ心ばえもありなん。左まさるべし。

十二番　煤掃

左

何方に行てあそばん煤はらひ　擧白

右勝

煤とりて寺はめでたき佛かな　不卜

すゝはきの日の遊び處を侘たるも、優にして艶也。右は、寺の煤掃と思ひよりたる、先珍重にや。兩句、滑稽(こつけい)のまことをうしなはず。感心わきがたく侍れども、めでたき佛哉、といひし句のいきほひ、猶まさりて聞え侍れば爲(ス)レ勝(ト)。

一柳軒不卜のぬしは、身を塵境にしたがひせまりて、志は雲ゐる山の岩根をたどり、あるはよし野の花に笈を忍び、湖水の月に琵琶をうかべて、風雅の奴となること年有。是より先も集あらはすことふたゝびにおよぶといへども、春秋遠く、雲ゆき雨ほどこして、東籬の菊も名をさま〴〵に、唐朝の牡丹も花しべをことにす。梅のわび、さくらの興も、折にふれ時にしたがへば、句も又人をおどろかしむ、なほ其しげき林に入て、花の香の清きにつき、色こき木葉をひろひて、左右にわかちて積て四節となす。判士よたり(四人)に乞て、我も其一にしたがふ。まことや樂(がく)にえらるゝものゝ、笛をぬすむに似たりといはん。されども青鷺の目をぬひ、鸚鵡の口を戸ざゝんことあたはず。貞享卯のとし、筆を江上の潮にそゝぎて、終に、蕉庵雪夜の燈火に對す。

初懐紙評註

日の春をさすがに鶴の歩み哉　其角

　元朝の日花やかにさし出て、長閑に幽玄なる氣色を、鶴の歩にかけて云つらね侍る。祝(しう)言言外(げんげんぐわい)に顯(あらは)る。流石にといふ手には感多し。

砌に高き去年の桐の實　文鱗

　貞徳老人の云。脇体四道ありと立られ侍れども、當時は古く成て、景氣を言添たるを宜とす。梧桐遠く立てしかもこがらしのまゝにして、枯たる實の梢に殘りたる氣色、詞こまやかに桐の實といふは桐の木といはんも同じ事ながら、元朝に木末は冬めきて木枯の其まゝなれども、ほのかに霞、朝日にほひ出て、うるはしく見え侍る躰なるべし。但桐の實見付たる、新敷俳諧の本意かゝる所に侍る。

雪柳が柳見に行棹さして　枳風

第三の躰、長高く風流に句を作り侍る。發句の景と少し替りめあり。柳見に行くとあれば、未景不對也。雪村は畫の名筆也。柳を書べき時節、その柳を見て書んと自舟に棹さして出たる狂者の躰、珍重也。桐の木立詠やう奇特に侍る。付やう大切也。

酒の幌に入逢の月　コ齋

四句目なれば輕し。其道の樣体、酒屋といつもの能出し侍る。幌は暖簾など言ん爲也。尤夕の景色有べし。

秋の山手束の弓の鳥賣らん　芳里

狩の鳥を得て市に持出て賣躰さも有べし酒屋に便りたる珍重の付樣也。手束の弓は短き弓也。秋季を持たる鳥の名多く言はずして、秋の山と大樣に置たる大切の所也。看人心を翫味すべし。

炭竈こねて冬のこしらへ　杉風

前句ともに山家の躰に見なして付侍る。獵師は鳥を狩、山賤は炭竈を拵て冬を待躰、別條なき句といへども炭竈の句作、終に人のせぬ所を見付たる新敷句也。

里々の麥ほのかなるむらみどり　仙化

付やう別條なし。炭竈の句を初冬の末霜月頃抔の躰に請て、冬畑の有様能言述侍る。その場也。

我乗る駒に雨おほひせよ　李下

是等奇意也。何を付たるともなく、何を詠めたるともなし。里々の麥と言より旅躰を言出し、むら緑などうるはしきより雨を催し侍る景色、緒口筆頭に不掛。(一本「不盡」とあり)

朝まだき三島を拜む道なれば　挙白

是さしたる事なくて、作者の心に深く思ひこめたる成べし。尤旅躰也。箱根前にせまりて雨を侘たる心、深切に侍る。

念佛に狂ふ僧いづくより　朱紘

此句、僅に興をあらはしたる迄也。神社には佛者を忌む物也。参詣の僧も神前には狂僧也。三嶋は町中に有社なれば、道通りの僧もよるべきか。

あさましく連歌の興をさますらん　敦足

連歌の興をさます、付やう珍し。度ゝ我人の上にもある事にて、一入珍重に侍る。

敲よせ来るむら松の聲　チリ

聞えたる通別意なし。連歌に軍場を思ひ寄せたるなり。

有明の梨子打ゑぼし着たりける　芭蕉

付様別條なし。前句軍の噂にして、又一句さらに云立たり。軍に梨子打ゑぼしとあしらいたる付やう輕くてよし。一句の姿、道具、眼を付て見るべし。

うき世の露を宴の見おさめ　筆

前句を禁中にして付たる也。ゑぼしを着るといふにて、却て世を捨るといふ心を備たり。觀相なり。

にくまれし宿の木槿のちる度に　文鱗

実は只酒もりといふ心なれば、世のあぢきなきより、戀の句をおもひ備たり。木槿のはかなくしほるゝごとく、我が身のおもひしほるといふより、にくまれしと五文字置なり。戀の句作尤感情あり。

後住女きぬたうち／＼　其角

後住女は後添の妻といはん爲也。にくまれしといふにて後添の物ど和せざる味を籠めたり。礎打／＼と重たるにて、千萬の物思ひするやうに聞え侍る。愁思ある心にて、前句をのせたる也。翫味淺からず。

山ふかみ乳をのむ猿の聲悲し　コ齋

礒は里水邊濱浦等に多くよみ侍る。尤姨捨更級吉野など山類にも讀侍れば、礒を山類にてあしらひたる也。乳を吞猿と云にて、女といふ字をあしらひたる也。幽なかる意味、しかもよく通じたり。

命を甲斐の筏とも見よ　枳風

猿の聲悲しきより、山川のはげしく冷敷躰形容したる付やう。尤山類をあしらひたる也。

法(のり)の土我剃髪を埋み置む　杉風

筏のあやうく物冷じきを見て、身の無常を観じたる也。甲斐と云は、古人佛者の古跡等多く、自然に無常も思ひよりたれば也。剃髪埋み置作意、新敷哀をこめ侍る。

はづかしの記を閉(とづ)る艸の戸　芳里

別意なし。草庵隱者の躰也。さもあるべき風流なり。

咲日より車かぞゆる花の陰　杉風

前句、隱者の躰を斷たる也。尤官祿を辭して、かくれ住人のいかめしき花見車を日々にかぞへて居る躰也。只句毎に句作のやわらかにめづらしきに目を留むべし。

橋は小雨をもゆる陽炎　仙化

春の景氣也。季の遣ひ様、かろくやすらか成所を見るべし。花の閉目(とぢめ)抔は、易〱と輕く付るもの也。

殘雪殘る案山子の珍しく　朱紘

是又春の氣色也。付やうさせる事なし。野邊田畑のあたり、殘雪にやぶれたる案山子立たる姿哀也。景氣を見付たる也。秋のもの冬こめて春迄殘たるに、薄雪のかゝりたる躰、尤感情なるべし。

しづかに醉て蝶を取(とる)うた　峯白

句作の工なるを興じて出せる句也。蝶をとる〱歌て醉に興じたる躰、誠に面白し。

殿守がねぶたがりつる朝ぼらけ　チリ

此句、附所少シ骨を折たる句也。前句に蝶を現在にしたる句にあらず。蝶をとる〱哥といふを、諷物にして付たる也。殿守は禁中の下官の者也。蝶取哥と云ふ風流より、禁裏に思ひなして、夜すがら夜明し興ありて、殿守等があけて、猶ねぶたげに見ゆる躰也。

はげたる眉をかくすきぬ〴〵　芭蕉

朝ぼらけといふより、きぬ〴〵

常の事なり。はげたる眉といふは麻過して、しどけなき躰也。伊勢物語に夙に殿守づかさの見るになどいへるも、此句の餘情ならん。

罌子咲て情に見ゆる宿なれや　枳風

はげたる眉といへば老長たる人のおとろへて、賤の屋杯にひそかに住る躰也。罌子は哀なるものにて、上ツ方の庭には稀也。爰に取出して句を飾侍る。是等の句にて植物草花のあしらひ、所々に分別有べきなり。

葉わけの風よ矢篦切に入る　コ齋

矢篦切といふ言葉先新し。前句民家にして武士の若者共、與風珍敷物かげなど見付たる躰也。大形は物語などの躰をやつしたる句也。或は中將なる人の膺すへて小野に入、うき舟を見付たるなどのためし成ん。されども其故事をいふにはあらず。其餘情のこもり侍るを意味と申べきか。

かゝれとて下手の掛たる狐わな　其角

藪かげの有様あり〳〵と見え侍る。しかも句作風情をぬきて、只ありのまゝに云捨たる句續き心を付べし。

あられ月夜の曇る傘　文鱗

冬の夜の寒さ深き躰云のべ侍る。傘に霰ふる響いと興あり。然も月さへ〳〵と見ゆる尤面白し。狐わなといふに、細に付侍るはわろし。

石の戸樋鞍馬の坊に音すみて　擧白

霰は雪霜といふより、少し寒風冷じく聞ゆる物なるによりて、鞍馬と云所を思ひよせたり。昔は名所の出し樣、礒に須磨の浦十市の里吉野の里玉川など付て、證歌に便て付る。霰は那須の篠原、雪に不二、月に更級と付侍るを、當時は句の形容によりて名所を思ひよする。尤心得ある事也。

我三代の刀打つ鍛冶　李下

此句詠樣奇特也。鞍馬尤人々の云傳て、僧正が谷抔打ものに便る事也。石の戸樋などいふに鍛冶、近頃遠く思ひ寄たる、珍重也。淨き地、淸き水をゑらみ、銘劍を打べきとおもひしより、一句感情不ㇾ少。三代といふて猶粉骨鍛冶名人といはん爲なり。

永祿は金乏しく松の風　仙化

永禄は其時代を云はんため也。鍛冶名人多くは貧なるもの也。仍て金乏しといへる也。前句の噂のやうにて、一句しかも明らかに聞え侍る。是等よく心を付翫味すべし。

近江の田植美濃に恥らん　朱紘

只上代の躰の句也。金乏しきといふより昔をいふ句也。昔は物毎簡略にて、金も乏しき事人々云傳へ侍る。美濃近江は都近き所にて、田植などの風流も、遠き夷とはちがふ成べし。

とく起て聞勝にせんほとゝぎす　芳里

時節を云合せたる句也。美濃近江と二所いふにて、郭公をあらそふ心持有て、とく起て聞勝にせんとは申侍る也。

船に茶の湯の浦あはれなり　其角

時鳥、水邊川浦などにいふ事勿論也。船中にて茶の湯などしたる風流奇特也。思ひがけぬ所にて茶の湯出す。茶道の好士也。思ひよらぬ物を前句に思ひ寄たる、又俳諧の逸士也。

筑紫迄人の娘を召連て　李下

此句趣向句作付所各具足せり。舟中に風流人の娘など盗て、茶の湯などさせたる作意、戀に新し。感味すべし。松浦が御息女をうばひ、或は飛鳥井の君などを盗取たる心ばへも、おのづからつくし人の粧ひに便りて、餘情かぎりなし。

彌勒の堂におもひ打ふし　枳風

此句、尤やり句にて侍れども、邊土の哀をよく云捨たり。句々段々其理つまりたる時を見て、一句宜しく付捨たる逸句不レ勞。

待かひの鐘は墮たる草の中　芭蕉

彌勒の堂といふ時は、觀音堂釋迦堂など云様に、參詣繁昌にも聞えず。物淋しき躰を心に懸て、鐘の地に落て草の中に埋れ、龍頭縄に見えたる躰、見る心地せらる。五文字にて一句の味を付たり。注釋に及ばず。よく〳〵味ひ聞べし。

友呼ぶ蟆のものうきの聲　仙化

友呼蟆　ちか頃珍重に侍る。草むらの躰、物すごき有様、前句に云殘したる所を能請たり。うき聲といふにて、待便りなき戀をあひしらひたり。

雨さへぞいやしかりける鄙ぐもり　コ齋

蟆の聲といふより田舍の躰を云のべたる也。雨と付る事珍し

からずといへども、ひなぐもり珍し。しかも秋に云言葉にあらず。古き歌によみ侍る。惣じて句々、折〳〵古歌古詩等の言葉、所々にありといへども、しゐて名句にすがりたるにもあらず侍れば、さのみことぐ〵しく不記。

門は魚干す磯際の寺　擧白

部の躰あらは也。濱寺などの門前に、魚干網など打かけたる躰多し。磯と云に干スと附たる、都て、作者の器量おもひよるべし。

理不盡に物喰ふ武者等六七騎　芳里

此句秀逸也。海邊軍亂たる躰也。民屋寺中へ押込て狼藉したる有様、亂國のさま誠にかく有べし。世の中おだやかに、安樂の心ばへ、難有思ひ合せて句を見るべし。

あら野の牧の御召撰に　其角

前句の勢よく替りたり。野馬とりに出立たる武士の躰、尤面白し。三句のはなれ、句の替り様、句の新しき事、よく眼を止むべし。

鴫の一聲夕日を月にあらためて　文鱗

段々附やう、文句きびしく續きたる故に、よく云ひなし侍る。かやうの所功者の心可レ附義也。夕日さびしき鴫の一聲と長嘯のよめるに、西行の柴の戸に入日の影を改めて、とよめる月をとり合せて一句を仕立たる也。長嘯のうたを、本歌に用ゆるにはあらず侍れども、俳諧は童子の語をもよろしきは、借用侍れば、何にても當るを幸に、句の餘情に用る事先矩也。

糺の飴屋秋寒きなり　李下

洛外の景氣、尤やり句也。月夕日に其地を思ひはかりて見ゆ。

稲妻の木の間を花の心ばせ　擧白

秋といふ字を不レ捨に付侍る。巧者の（秋以下十五字一本によりて補ふ）働言語にのべがたし。糺あたりの道すがら森の木の間勿論也。木の間に稲妻尤面白し、眞に秋の夜の花ともいふべし。

つれなき聖野に笈をとく　枳風

此句の付やう一句又秀逸也。物すごき闇の夜、稲妻ぴか〳〵とする時節、聖、野に伏侘る躰、ちか頃新し。俳諧の眼是等にとゞまり侍らん。

人あまた年取物をかつぎ行　楊水

此句又秀逸也。聖の宿かりかねたる夜を大晦日の夜におもひつけたる也。先珍重。聖は野に侘伏たるに、世にある人は年取物かつぎはこぶ躰、近頃骨折也、前句の心を替る所、猶ゝ翫味すべし。

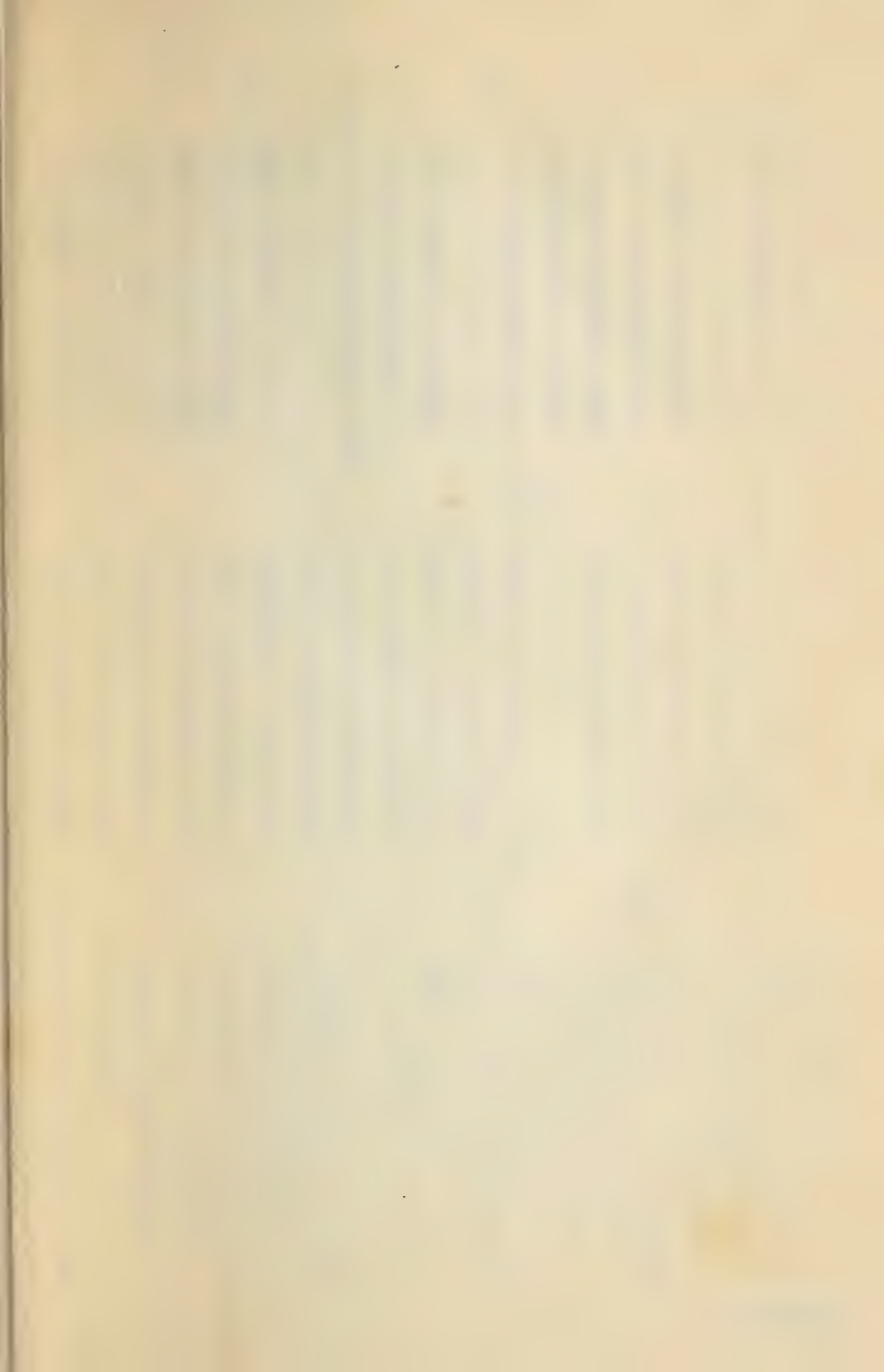
酒盛りいさむ金山が洞(ほら)　朱絃

金山は我朝の大盗也。前句よく請たり。註に不レ及、附やう明(あきらか)也。

當時の俳道意味心得がたし、願は句解したまはらんやと侍りければ、即興に加筆し給ふ。終日の席、はせを翁の持病心よからず、五十韻にして筆をたち給ふ。

貞享三丙寅年正月

語録集

語録集解說

『芭蕉全集』の一部として、芭蕉の詞を含む記述を有する所の俳書四種を選擇收錄することにいたしました。芭蕉と申す人は談理を好まなかつたのでありませう、其所見所說を自ら書き殘してをりません。のみならず其門下をしてもさういふ事を行はせてをらないのであります。が、俳席の折々、閑居のつれ〴〵には雜話もいたしましたらう。漫談もありましたらう。門下の人々はそれらの要領を記しとゞめたものもあります。それを取集めまして此「語錄集」を編したのであります。蝶夢は曾て『蕉門俳諧語錄』を編しました。『一葉集』には「遺語」の部がありまして、芭蕉の詞を輯めてあります。此「語錄集」と併せ見るならば、相映發するものがありませう。

▽葛の松原　　半紙本　一冊

元祿五年東北へ旅行しました支考は、其記念の意味で一書を編輯上梓いたしました。『葛の松原』がそれであります。隨筆的俳書であります。「野盤子支考述潜淵菴不玉撰」

と記してありますが、不玉は何もいたしてをらないやうであります。（不玉は酒田港の醫師であります）著者支考の略傳を左に記しませう。

支考は美濃國の人、各務氏、少時佛門に入り、鎭藏主と稱す。長じて寺を出で、伊勢の山田に仕し醫となる。見龍と改む。元祿三年芭蕉に從ひ學び、遂に俳諧を以て業とし、芭蕉の超越的俳諧を通俗化して、獅子門の一派を開く。（世に之を美濃派と呼べり）享保十六年二月七日歿、年六十七。盤子野盤子東華坊西華坊蓮二坊白狂梅花佛獅子庵等の諸號あり。時に應じ所に從つて之を用ゆ。或時は佯り死して以て世論の如何を見、且つ門人渡邊狂の名を以て、自ら讃し、又論敵と戰ふ。越人露川最も支考を怒る。編著凡四十種。

此『葛の松原』は支考が最初の編著でもあり、又芭蕉存生中のものでありますから、まじめに筆を運ばせてをるのでありまして、其記述には信が措かれるのであります。「旬」等の所説が現はれました第一の板本であらうと考へます。

▽去來抄　　　半紙本　三冊

安永四年曉臺が上梓いたしたものでありますが、成美が其『隨齋諧話』に記しました通り、「故實編」を缺いた不完全のものであります。（曉臺が省きました故實篇は、後に文曉によつて『俳諧芭蕉談』に編入されました。上卷二十三項がそれであります）私は幸に完備した寫本を藏してをりますので、之を底本といたし、且つ板本を參照いたして此校訂を了しました。

此書上梓と同じ安永四年に、野菊庵秋色女（二代目秋色女）黃華庵歡雷（のち第四世湖十となり、晉窓と號しました）の二人によつて上梓されました『俳諧華實集』乾の卷は、此『去來抄』と共通の内容を持つものでありまして、のちに武陵隱士の序文を加へ、單行本として刊行いたしましたのが卽ち『梯晉問答』であります。　それを比較いたしますに、

去來抄	先師評	四四項	（梯晉）一二項
同	同門評	四一	一三
同	故實篇	二三	一三
同	修行教	五六	四四
計		一六四	八二

丁度半數一致いたしますが、其記述の順位等は大に狂つてをります。 此二書は同一筆記が種子となりまして、一は其角系の手によりまして『柿晉問答』となり、他は去來系のもの（若くは支考系）によりまして『去來抄』となつたものであらうとおもふのであります。 標題の『去來抄』も曉臺が命じたのか、或は其前からありましたのか、判然いたしませんが、溝口素丸が寶曆五年に書きましたものには『去來實記』の名が見えてをります。元祿七年芭蕉送葬の後、其角去來等は屢會合し、其折々先師を追懷する話があつたと想像いたされます。 さういふ場合の談話筆記が此二書の種子であらうとおもふのであります。 長い間の傳寫で魯魚焉馬の誤りを生じましたのは申すまでもありません。錯簡竄入も多々ある事でありませう。『柿晉問答』に比しまして『去來抄』の方が、其缺點が多いやうに考へるのであります。 此『去來抄』はしかく缺點のあるものではありますが、忠實な去來の面目を見るべき記述が多々ありまして、芭蕉の所說を探ぐるには必要なものであります。

板本には左の序跋がありますから、參考として揭記いたしておきます。

去來抄敍

芭蕉の翁ひとたびこの道に斧ふりして、屈れるをうち、曲れるをおし、俳諧の眞ごゝろを傳へてより、風の草をおし均して、一派八隅にかゝり、支流湧がごとく、終に川木拾ふわらはも、茶摘女も、耳にふれ口に出るの時、風調はじめて泥土にくだり、意を横さまに穿て風體を折き、惑說十襲して、今時平地に波瀾を起す。其弊を撓むには、いそしき哉去來、うべなる哉此抄。淺く漁て呑舟の魚をもらす事なかれと也。

安永三甲午十月　　曉臺

□　□

去來抄跋

崑岡之璞、非人採之、則誰知璞之爲玉乎。一日先生與二三子游焉、得諸幽蘭之下。琢而磨之、皓々乎。世所謂玉鏡也。使對之者心在塵埃之外。則去來之功、至是可謂發輝千歲矣。吾徒愉快、其在於斯。

井上朗

○　□

板本の筆耕は一音法師で、板元は例の井筒屋と橘屋であります。

▽三冊子　半紙本　三冊

服部土芳は伊賀の人であります。通稱は半左衛門、名乘を保英と申し、蓑虫庵又些中庵と號しました。最初は蘆馬と號した旨竹人の『蕉翁全傳』に見えてをります。家は伊賀喰代村の鄕士でありましたが、土芳は上野藩主に仕へたのであります。同時に同し主人に仕へました間柄でありますから、土芳の芭蕉に對する感情は、師弟以上の濃かさがあつたのでありませう。芭蕉の大阪に病むと聞くや、卓袋と共に馳け附けました。其時は既に遺骸を粟津へ送つたあとでありました。土芳等は直に粟津へ赴きまして、漸く初七日の法會に間に合ひ、其追善俳諧に加はる事を得たのであります。そこで芭蕉の遺髪を奉じて上野に歸り、之を埋めて一堆の墳墓を築きました。即ち故鄕塚であります。其『蓑虫庵集』によりますれば土芳はたび〳〵芭蕉を夢みてをるのであります。深い追慕の現れであります。享保十五年一月十八日七十四歳で歿しました。(土芳は何故か妻を持たなかつたのであります)其土芳が芭蕉生前の談話を丹念に筆記い

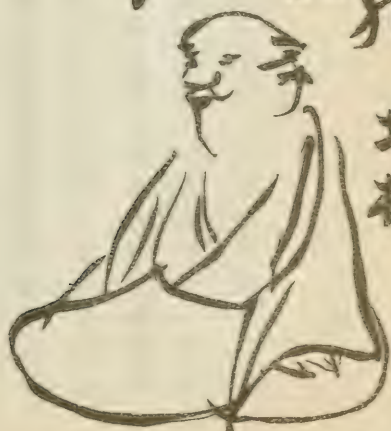
たしたのが此『三冊子』であります。「白双紙」「赤双紙」「黒双紙」の三部から成り立つものでありますから『三冊子』と命名いたしたのでありませう。安永五年闌更によつて上梓されましたのであります。芭蕉の所見を最もよく窺ひ得る蕉門の至寶であります。安永板は至つて乏しいので、享和再刻本を以て校訂編入いたしました。

▽山中問答　　半紙本　一冊

北枝が芭蕉の説話を基礎として述作いたした連句に關する小冊子であります。元祿二年の著作といふ事になつてをりますが、出板はいつであつたか不明であります。北枝は金澤の人、立花氏で、次郎右衛門と通稱し、夆題又趙子の別號があります。加賀藩の研師で、愛酒家であります。享保三年五月十二日歿しました。

土芳

北枝

葛の松原

野盤子　支考述
潜渕菴　不玉撰

○冬の雪の寒からむ事をしれる人も、あらかじめ水無月のきぬを重むとにはあらねど、網にかゝる鳥のたかく飛ざるをうらみ、鉤をふくむ魚のうゑをしのびざる事をかなしむ。そのまどひふかく、おもはざるの源ちかし。世の風雅に志をよする人も、万分が一もなかるべからず。是故に支考が随聞をしるして、東の人の記念にはつたへ侍る。

○芭蕉庵の叟、一日嗒焉トシテうれふ。曰ク。風雅の世に行はれたる、たとへば片雲の風に臨めるがごとし。一回は皂狗となり、一回は白衣となつて、共にとゞまれる處をしらず。かならず中間の一理あるべしとて、春を武江の北に閉給へば、雨静にして鳩の聲ふかく、風やはらかにして花の落る事おそし。彌生も名殘おしき頃にやありけむ。蛙の水に落る音しばしばならねば、言外の風情この筋にうかびて、「蛙飛こむ水の音」といへる七五は得給へりけり。晋子が傍に侍りて、山吹といふ五文字をかふむらしめむかと、をよづけ侍るに、唯古池とはさだまりぬ。しばらく論之、山吹といふ五文字は風流にしてはなやかなれど、古池といふ五文字は質素にして實也。實は古今の貫道なればならし。されど華實のふたつは、その時にのぞめる物ならし。柿本人丸のひとりかもねむと讀る歌は、かばかりにてやみなむちつたなし。定家の卿もこの筋にあそび給ふとは聞侍し也。しかるを山吹のうれしき五文字を捨てゝ、唯古池とたし給へる心こそあさからね。頓阿法師は風月の情に過たりとて、兼好浄弁のいさめ給へるとかや。誠に殊勝の友なり。

○そもそも風雅は、なにの爲にするといふ事ぞや。孔子の三百篇は、草木鳥獸のいぶかしき物をしらしめ、倭には三十一字をつらねて、上下の情にいたらしむ。その詩歌にもらしぬる草木鳥獸の名をさして、高下を形容せむものは、いまの風雅これなるべし。しかるに俳諧といふ文字は、史には不根の持論といへりければ、諸ノ言は吾しらず、この頃その名をあらためむ事を阿叟に申侍れば、古今集は已

に俳諧の名を立たり。いまの者これをせむ事よからず。是ｌ故に韓子が聾瘶も魯論はけづらず、華嚴の大ｌ瑠璃も、その奥にしるしたり。俳諧は世の變相にして、風雅は志の行ところなりと。吾がともがら是なからむや。

〇いにしへの俳諧は如來禪のごとく、その理一貫して線のごとし。いまの風雅は祖師禪のごとく、捺着すれば即轉ず。かならずしも理智にかゝはらねば、寸心かけずといへるたぐひなるべし。

〇俳諧に古人なしといふ事を、ばせを庵の叟、つねになげき申されしか。

〇世の風雅にあそぶ者も、月花とさへいへば、やさしとはおもふらめど、なにがしの卿の、「我が中はこもつちこしの一もじりもじりやすらむ逢ふかひもなし」とつらね給へるは、もじりやすらむといふ七文字にて、歌にはなり侍しと覺えしか。

老杜は呼テ兒問ニ煮魚ヲともいへり。古人の語意を用る事、一字半言もたやすからず。いかにおもしろきとて、鄙いやしく姿もくだ〱敷いひ出たらむは、貴介公子に罷せらるゝ辨利のものゝたぐへ(ひ)なるべし。

〇晋子も鐵炮といふ名のいひ難しとて、千々にこゝろはくだきける也。おなじ集に品かはるといふ戀の論は、微細のところ、かくぞ心をとゞめけむ、殊勝の心ざし、いとうらやまし。晋子が語ｌ路おほむね酒盃に渡れりといふ人あるに、宋ノ汨宅編には、白氏が二千八百言、飲ｌ酒の詩九百首なりと答へ侍るといへど、晋子が性、人にまぎれねば、樂天が飲酒はなをかぎり有けりとて、用の事かたづけ侍りぬ。

〇風雅の片はしを心得たるもの、たまたま名家の一まきを見て、始終の變ｌ作をかへりみず、此句はおかしからず、その句は味なしなどいふめれど、一まきをつらぬる事あながちに一句の上を不ﾚ論。一たびは雨となし、一たびは雲となして、中品の眼をとゞめむ事をおそる。轉換變化角(かくか)のごとし。誰か情實の中にあそばむ。

〇この頃一般の才人おそろしき詞をこのみ、針灸秘訣の諺をめづらしといひ出たるに、しらぬものはしらず、しるものはいかにあさましとはおもふらめ。たとへば田舎人の卒都婆を橋に渡せるがごとし。なき人の罪障懺ｌ悔なれば、その理はあしからねど、ふむ人うれしとやはおもふ。唐李之ｌ藩は夜ｌ深枕ニ髑髏ニといふ句をさへ、後には削り侍りしとかや。

〇いさゝかなる事にも心をとゞめねば、あやしきにや。人夜ｌ半にふして火をも消し、隣もしづまりけれど、なを寢いらで

居るとき、おのれが眼をひらきぬるや、閉ぬるやといふをしらず。これらはむづかしき事ならねど、心つきなき故なり。春草秋鳥の名字をも旅したる人にきゝつたへ、訓蒙圖彙にて見しりたらむ、いかばかりおはつかなし。小なぎ(水葱)さいたづま(虎杖)といふ物をうれしく聞侍ると、ある人は仰せられしぞかし。

○いづれの年の夏ならむ。「みな月はふくべうやみの暑かな」といふ句を、人の得しらざりけむは、源氏のまき／＼に心をとゞめねばさも有べし。山路に菫とつゞけ申されしを、ある人おぼつかなしと難じけるは、有(匡カ)房卿の、「はこねやま薄むらさきのつぼすみれ」といへる歌を不幸にして見ざりけむ人の心こそ、おぼつかなけれ。たま／＼の旅にも、あらぬまでに酒のみ、馬上にはねぶり行らむ。いとあさまし。

○一とせの秋、「蔦の葉は茶をのむ人をなぐさめて」といへる第三を、湖南の珍碩はいかにきくらんと、文して問ひ侍るに、花紅葉ならば酒をこそ飲べけれ、と答へたれば、さてはおのれも皮骨は得ぬるをと、阿叟もにくみ申されし也。支考が東行の頃、風雅はいかにし侍らんととふ人あれば、先この第三を明し給へといふに。よき人はよく、あしき人はかの叟の口僻にて、また寂寞をやられけるはと、平呑に逢ひたるはいとおし。

鎌倉を生て出けむ初鰹

五月雨にかくれぬ物や勢多のはし

梅若菜鞠子の宿のとろゝ汁

詩歌に名所を用る事たやすからじ。かまくらの初鰹は、支考が東より歸けるとき、かゝる事ありとて見せ申されしを、生て出るといふに鎌倉の五文字、又その外あるべくとも承はらずと申たれば、うれ敷きゝ侍るとて、阿叟もにくみ申されしが、みづからも僥幸にいひなしぬらむ。つら／＼おもへば、生死のさかひを以て出入せむに、かまくら六波羅の外殊に有べからず。しばらく風雅にあそぶ人も、いきて鎌くらを出し鰹の、いまは武江の薄じほとなりけるよと、世の觀相にのみ眼をとゞむる事、此句ばかりにもかぎるまじ。五月雨の增ぞまさぬぞといへる處、もろこしには五湖あり。倭には一二にも過べからず。しからば勢多といへるものは、古今の摸楷ともなるべし。むかしより文章には結前生後の詞といへる事は、今の若菜のはたらける物ならむか。天心をこゝになやまさんとにはあらねど、句をつくるの法、おほむね角のごとし。さるを未練の人は、始より深からしめんとして、果は一應の理もきこえずなりぬ。一生をこゝにあやまらざれや。

角文字やいせの野かひの花薄　其角

阿叟は、はじめて結前生後の詞を用ひ、晋子ははじめていの字の風流を盡す。古今俳諧のまくらならむと、よき人も申され侍しよし。

蚊柱に夢の浮はしかゝる也　同

定家の卿の夢のうき橋はとだへて、ひさしくなりぬればと、晋子も自讃申つるが、かゝる事人のいふべき口質にもあらず。天縱の風骨、念相の外に志を得たり。しかるを左右の趣をとらへ、世人の口意にさきだてる事は、芭蕉庵の叟なるべしと、よき人も仰せられしが、つねのこゝろ誠にかたし。

秬の葉や檜にかげろふ玉祭　珍碩

降雪に淡路は夢の心地也　支考

夢ともなく、うつゝともなき無心所着の觀相、かばしらのごとき物あらば、千載の莊子をまつといへるならむ。

○趣向は古き事がらを、附どころあたらしく、句づくりめづらしうしたらむぞ、不變の正道とは承りしを、めづらしき事のあしゝといふにはあらねど、人のこゝろはつねに變をこのむなれば、いかなる道にかたどよひ侍らむと、よき人はかなしみ給へり。

○毎々句めづらしき名目をこのむは、中分以下の作なるべし。何となくいひ出る句にも、いさゝかなるところにたのしみはある物を、風情のあらきものは、いかにし侍らむ。釣髭はいやしきさまなれば、句にはなり難きを、しらがの交るといへば、公達の後見などの物〳〵敷やうにきこゆと承しか。伽羅といふ名のいかにあさましきぞや。なにがしのおのこの、「葵の花のひらく石臺」とせしを、つぼむとなをし侍るが、いさゝかのたのしみならむか。

○月花にかぎらず、春秋の季を結ばむに、その季をさきに工夫せば、あたらしき趣向なかるべし。唯、平生の心にて、當季は後にくはへたるがよしと承し也。曲水、歳旦の第三には、「お葛籠に花の端綱のする振りて」といふは、葛籠より趣向は起りて、花は末後の一決ならし。鳥獸草木の用をいひつゞけたる、おほくはあさまし。

三味線や芳野の山を五月雨　曲水

此句は人のしるまじき風情なり。なにがしのおのこならむ、いとなまめかしきながら、なを戀にはおぼつかなくて、ひとり寢がちなる閨の中に、東坡が九相の圖など掛たらむぞ、五月雨の動ざる夕部なるべし。

○發句はなるべきと、なるまじきを見る事、第一の工夫なるべし。

辛崎の松は花よりおぼろにて

此句。錦をきてよる行人のごとし。好悪はその人ぞしり給ふらめ。たま〳〵起定轉合の四格をしれる人も、第三のとまりは、なに故に文字のさだまるといふ事をしらねば、一生を返魂の烟の中にかけろふ、かなしむべき風雅の罪人ならむ。此句花の字なからましかばしらず。

○洛の和及法師は罕人やといへる五文字にて、一生をあやまたれけれど、幾とし湖南の叟をしたひ、前の秋ならむ、心ざしをとげられしぞたふとき。かの法師のつねには申侍しとかや。世の風雅もあさましくなり行けば、流水飛禽の情にもいたらず、湖南の叟をつみせむ事、行脚の冥恩もいとおそろしと。むべなり西行上人の、「さかいに立る玉の小柳」とよめるはみづからこそ能はしり給ふらめ。

鳳来寺

夜着ひとつ祈り出して旅ねかな

草臥て宿かる頃やふじの花

かゝる有さまの人こそ、むかしもありしとは、おもひしらめ。

ほとゝぎす啼や五尺の菖草

鶯や餅に糞する椽のさき

かの僧の和及は、かゝる事きかずなりぬるぞ、今は戀しき人の數なり。

○杜國は心ざしのおのこなるよし、阿叟も忌日おぼえ申れし。

○今はあさましき世なりけらし。詩歌にはおのれが文字を用ひ、風雅には人の詞をぬすむ。前後のたがひ是非なし。

○集などはよのつねの文字を用べし。いくつも文字をおしまげたるなど、ちりばむる者もいかにくるしからむ。なにがしの文集には、古人の學びざる文字の形容あまた侍るやうに覺しか。荘子の蔕などの、尾につける心地せり。

○詞をつくらひ、やさしくせむとする人は、精進をいもいといひ、客人をまろうどゝいふ。その風流なきにしもあらねど、果は合類節用を見る心地ぞせめ。

○林下何曾見一人」といふ詩は、何曾の二字なを有べしと評せり。しかるに老杜が秋興の詩には、野航恰受兩三人とといへり。何曾のおろそかなる、恰受の不可思議なる、詩をも心得たき風雅なり。張籍が賈島に逢へる詩は、一二三の風情までは、和歌にもつらねけめど、馬蹄今去入誰家」といふ處までをいかで盗し侍らむ。されば文はとぼしからぬもの也。

○おの字はいやしき詞なるを、「どし緞の帶うつくしく脇とめて」「古き小判のいづるお屋敷」といへるたぐひ、「お僧の鉢を所望して見る」とも申侍りき。ての字をにごりて用る事は、歌にはあまた侍れど、外の言葉艶なれば、さのみ見ぐるしからず。

○この頃人々のおもひけむやうに、世にいはれぬといふ言葉はなけれど、麥門冬は中心をさらざれば人をなやまし、かい餅も飯とつゞけぬれば又なつかし。

○晋子が「宿札にかなづけしたるとはれ貌」といへるは、下の五文字にてよくしづめたりと、阿叟もつねに申され侍しか。

○出かはりといふ詞は、養父入にはおとりて、いやしかりしを、

出かはりや幼ごゝろに物あはれ　嵐雪

嵐雪が幼の一字にて、人に數行の涙をゆづりける也。たとへば馬上の敦盛を繪がきぬるに、甲の見入はたちばかりならむに、頰の程より纔にまへ髮のさきを見せぬれば、やがて二八の美少年とは見ゆる物を。こゝろへたきあいしらひ也。

○世に切字の發句といふ事あるべし。

酒のめばいとゞねられぬ夜の雪

○一句の姿たしかならぬは、趣向のなき事を口先にてまぎらかしたる故なりと、晋子が導き侍る。大切の事なり。おもへば、簾中に褄を蹴こむといふ句は、聲にとなへたるがおもしろし。一とせ堅田の會席に「みほそき太刀のそる方を見よ」「長椽に銀かはらけを打くだき」といへるは、銀の一字殊に奇特なるべし。

蜻蜓のゆきゝ隙なき薄かな　車庸

雉子啼宇治の茶木の覆哉　昌房

「あか〳〵と日はつれなくも秋の風」と無念相の間よりいつるは、三生の熏修なるべければ、朝暮のあらゝかならぬ形容、おの〳〵その地をさらず。

沙原に吹あげられし海鼠かな　如行

如行はよづかぬおのこなれば、かの魚のたゞよへるも、世の外ならずと見侍りけむ。

煤はらひいらざる物は打くだけ　枳風

煤はきやなにをひとつも捨られず　支考

おなじ年の暮ならむ、武洛の雲水をへだてゝ、かりそめの取捨はありけめど、志のかなふところ異ならず、黃連は苦しといへるを、あまからずと、あらそはむもこの道にをかば辨利なるべし。

帷子を洗はすにやる名殘かな　正秀

正秀が性はあらし。かゝる微細の風情にあまりて、曾良が大和路の歸路をとゞめかね、角とおくり申されしとかや。「猪に吹かへされしともしかな」といひ得て、肌たはまざるは、その人のいける風情なるを、「薪ともならで朽ぬる案山子かな」といへるは風雅の用處あさからずと、阿叟もうなづき申されしよし。

ばせを葉はなにゝなれとや秋の風　路通

一生の風雅をこの中にぞ、とゞめ申されけむ。一とせ、初雪に根太のいたむといふ事を結びたるに、卯の花の頃こそさも覺えぬべけれと、珍碩が申たれば、阿叟

もおかしがり申されしよし。物と我と此情有べし。

水無月や鯛はあれども鹽くじら

みな月のしほ鯨といふものは、清少納言もゑしらざりけむ。いとめづらし。風情の動ざるところは、みづからしり、みづから悟るの道ならむかし。

鐵炮の遠音に雲(曇)る卯月かな　野徑

かゝる時は、はり物の參差(シンシ)に目あぶなく、鋸の目立るに心せかれて、酒落堂が卯の花の根太もおかしとおほえ待れば、發句はおの〳〵そのところあるべし。

○住吉ノ神送

松ばらや神も名殘のきり〴〵す　大坂之道
屛(塀)こぼつ跡の寒や冬椿　游刀
姥どものあそび處や桐の花　ミノ荊口
板ぶきや秋の小鳥のありく音　亡人落梧
箏にをひぬかれたる榎木かな　探志
草刈の子は一握野菊かな　羽州不玉

藞草(カリヤス)を呼込頃やむら時雨　露川
かむこ鳥啼や蛙の目がり時　珍碩
出女やすこし時雨てぬり木履　同
桃の花や雛に似たる人も來ず　乙州

阿叟北國日和さだめなしといへる次の年ならむ。

八重葎一しめ寒しけふの月　羽黒呂丸
高灯籠晝はものうき柱かな　千那
夕立や川をひあぐる鰥むま　正秀
團栗やうさぎも共に畠崩　同
行秋の四五日よはる薄かな　丈艸

木曾塚に旅寢せし頃

木曾殿と背(セナカ)あはする夜寒かな　いせ又玄
散花や跡はあみだの爪はじき　楚江
夏菊や藥とならむ床のうへ　智月
振ほどく藁の明りや野邊の霜　ミノ闇如
謀はきや座右の銘はめくらずと　同夕可

風追善

草茂る石をいつまで蟬の聲　同均水

馬の耳すぼめて寒し梨の花　支考

風陽が小弟風雅に心ざしあるをよみし進學の解作りて

油斷してくゐなに扉たゝかるな　同
青柴や食(めし)の吹たつ冬籠　昌房
稻妻や蜆がら燒く野の匂ひ　臥高
柴船にこがれてとまる螢かな　キ角
蟬啼や木のぼりしたる團(うちは)賣　同
初秋や篠葉吹散るさばき髮　木枝
さびはてゝ鮎くたびれつ水の淀　如行
唐秬の葉をたぐり行月見哉　堅田成秀
菜の花や小屋よりいづる渡し守　史邦
ついて來て犬もつくばふ涼かな　竹戸
鯔ならぶはや初秋の朝日かな　野童
山吹や水にひたせるゑまし麥　素牛
一まはり待人をそきおどりかな　尚白
背おりや闇のさつきを行螢　屋東

○五文字の大へい又あるべしともおぼえず。作者も行の一字にて、螢火一點の

無明をのこされけむ、いといぶかし。

　青草や狙板にをく夏茗荷　臥高

かゝる風情は、しる人もあまた侍らねど、少年よりこの道にあそびて、「口おしく喰ひならひたる唐がらし」とまぐれ出たるひら句は、さかりの人の忍もすまじき發句ならむか。

　松笠にしがみつきたる日雀かな　臥鴒

なにがし寺の小僧なりしか、念誦禮讃にもいとまおしき身の、風雅にもこゝろあわたゞしく、かゝる目前の境界をいひ出たる胸中、そこばくの知解もあるまじ。

○附句は附と附ざるとを論ずといへども、「松葉のごみに煮ゆる鍋ぶた」といひ、「如意輪の像の頬杖もうき」といふ句は、なまじいなる前句をきかむより、此句ばかりがおもしろきぞかし。句ごとに季のなき發句をするとおもへと申されしかど、未練のともがらのあさはかに、おもひ侍らむか。

○世に景氣附こゝろ附といふ事は侍れど、

○走　敵よせ來るむら松の音

　有明のなしうちゑぼし着たりけり

○響　夜明の雉子は山か麓か

　五む十し何ならはしの春の風

○薫　稲の葉のびの力なき風

　發心の初に越る鈴鹿山

無所住心のところより附きたらば、百年の後、無心の道人あつて、誠によしといはむ。いとうれしからずや。

○一句のしたて結ぶはわるしと承れど、未熟のまどふべき事也。「月くらき麓は馬の口とりて」といふ第三を支考が申侍りたるに、くらきといふはむすびにて、一句のさま氣だかならずとて、有明にとはあらたまり侍りき。

こゝらのたのしみは、句ごとに有べき事也。

○麥からの家してやらむ雨蛙　智月

　態とさへ見に行旅や富士の雪　智月

大津の禪尼、その子乙州が東武の行を送れるとかや。人のをやのまどへるみなかみは深かりけめど、始は少をあはれびの恩愛にして、次は子をいましむるの義方なり。世の人おのれが子をそだつる時は、恩愛の道ふかければむづかしともおぼえじ。その人他家にあるとき、いとけなき子の起居に心くばりせしを見ては、おのれがをやもかゝりけむ物をと、母の故いとたふとまれぬべし。

○世はこれぞ齋はあすをたくはへず　己百

かゝる深長の處は、ひさしくとゞまるべき地にあらねば、いまはその人も、「薄〳〵と底のまるみや三日の月」といへる處にぞあそぶらむ。

○乳麪の下たきたつる夜寒哉

是は曲水亭にて、夜寒といへる題の發句也。さるを大和の國みわの麓に旅ねの頃、

此句申されしよし、都の方より吾妻路に聞ゆとて、人〴〵のもてはやしける也。さばかりのたがひは、此句ばかりにもかぎるまじければ、阿叟の名望をいやがり申されしは、金ノ源三が撰集はづれたるたぐひにはあらじを。

○白桃や雫もをちず水の色　桃隣

緋桃は火のごとくならねど、白桃はながるゝにちかゝるべし。ひさしく薪水の勞をたすけて、此句の入處(ニフ)あさからずと、阿叟もをきあがり申されしなり。

○此わすれながるゝ年の淀ならむ

名月や池をめぐりて夜もすがら

必(つひ)とする事なきは、素堂亭の年わすれにして、囮(に)とせざるは芭蕉庵の月見なるべし。

○風雅は一句のしたつる所、風流なるべし。たとへ意は害すべくとも、詞は破るべからず。いまやひくらむ望月の駒と讀メるは、まさしくそのたぐひなるにや。今の人この間をさとらず、飽まで姿のくだけぬるをさへ、一句の意味淺からずといふ。あさまし。

○かり寝せん味方が原の女郎花　史郎

馬上に槊(ホコ)を横て吟ずる人は、今の世にはあまた侍らじを、味方がはらのかり寝せんといへる、此郎の風流ならずや。阿叟もあしからずとゆるされ、左右十八につがひ申されしを、深く武具(モノヽグ)の櫃におさめける也。かの處に名をとゞめけむ草のゆかりにも、幾秋の手向とはならまし。

○木枯の地まで落さぬ時雨哉　去来

尾(び)の荷兮が「木がらしに二日の月のふきちるか」と申侍るは、今の時雨にはつのりけむ物をど、みづから耻申されしを、阿叟はさもおぼえず、他は二日の月に心をとゞめたれば、時雨は古今に變ぜざる姿ならむ。されど迄(マデ)といへる文字は未練の叮嚀なれば、唯地にも落さぬと有べきよし、いつやら申され侍しとかや。

○おとゝひはあの山越へつ花ざかり　同

此句。三四年もはやかるべしと、阿叟も申され侍しよし、今は四とせばかりにもなりぬらむ。なつかしき君子もあれや。吁(アヽ)

○風雅は世になきにしもあらねど、万分が中も唯師なし。聖人の桴(イカダ)にのらむと仰せられしも、天地の外にもあるまじければ、但歎息の餘音なるべしと申たれば、阿叟はいましめ申されき。

○よき人の風雅の沙汰仰せられむに、さかしきもの、おのれがいとなみの理にも、〳〵りなどなをし給はむに、聊こゝろゆかぬ所ありとて、又あらため給ふとき、句のあるじさしのぞきて、おのれも心得侍らざりしが、このたびはめでたくさぶらふといふは、はじめはいかにしのぶらん

と、よろづに心づかひせらるれ。
○さりぬべき人〴〵の會にも、句の所をあらそひ、月花の座をねらふ事、いかにあさましきや。人その位にあらましかば、などおのれが心にも叶ざるべきや。物はかならずおくれよと、古風の老子も申されしを、かゝる事風雅の上のみにもかぎらじ。
○今の人は所謂風月の情に過たれば、明暮のはなしにも、素言は聞もいれねば、あらぬ人の名によそへ、いさゝかのくまをあらせむとおもふは、つねの心をだやかならじ。さる人の交あわからねば、終に美食の病いえずなりぬ。
○居常の消息にも、妓童舞女の隱語をまじえたれば、おのれよく讀みあけたる、いとあさまし。さる文もやるべき所あるにぞありけれ。
○風雅は道の階梯なれば、内は肝膽の理にわたらず、外は人物の情に達すべけれど、おのれ風雅を墻にして、世の利要にをよがむとするものは、箇中の論にあづからじ。かゝる多口の是非など、阿叟はつねにいみ申されしかど、若あるまじくば吾ひとりつみせられて、阿鼻の口業にしづみなむと、於圖司之凋栢堂而絶筆。

元祿壬申五月十五日

東行餞別

此こゝろ推せよ花に五器一具　芭蕉

吾聞以財おくるものは、君子の人のしのびざる所なるを、今やわかれむさするさき、わすれず灸せよなどいへる人をさへうれしく覺ゆるものなり。しらず、この別こゝろいかむぞや。たゞへ推し得て十成なるも、奈古曾の關のなこそつらからめやは。

支考

モヽすぢりゆがみてふさむ花の陰

白河の關に見かへれいかのぼり　其角

片方はわが眼なり春霞　桃隣

聞支考、奥羽の間を經て、岩城にも行脚すべきよし聞へければ、

年經ても味をわするな岩城海苔　露沾

京寺町通二條上ル町
井筒屋庄兵衞板

去來抄

先師評　外人の評有といへども、先師言を攻けるものは爰に記ス。

蓬萊にきかばや伊勢のはつ便　芭蕉

深川よりの文に、此の句さまぐ\の評あり、汝いかゞ聞侍るやとなり。去來曰。都古郷の便とゝもあらず、伊勢と侍るは、元日の式の今やうならぬに、神代をおもひいでゝ、たより聞ばやと、道祖神の（はや）胸中をさはがし給ふとこそ承侍ると申。先師返事に、伊勢のしる人音信て便嬉しきと、慈鎭和尙のよみ侍る「便」の一字の出所にて、僻音（?）の心によらず。汝が聞く清淨のうるはしき神祇のかうがう敷あたりを蓬萊に對して結びたる也。汝が聞所珍重なり。

からさきの松は花より朧にて　芭蕉

伏見の作者にて留りの難あり。其角曰。「にて」は「哉」にかよふ。此故に「哉留」の發句に「にて」留の第三を嫌ふ。「哉」といへば句返しなれば（△雜談集「句に句なし」とあり）「にて」とは侍るなり。呂丸曰「にて留」の事は其角が解あり。又、是は第三の句なり、いかに發句とはなしたまふや。去來曰。是は卽興感偶にて、發句なる事疑なし。第三は句案に渡る。もし句案にわたらば第三等にくだらん。先師重て曰。其角去來が辨皆理屈なり。我はたゞ花より松の朧にて面白かりしのみなりと。

此句再吟スルニ、初テ發句ト第三トノ境ヲ思ヒアタリケリ

行春をあふみの人とをしみける　芭蕉

先師曰。尙白が難に、近江は難波にも、行春は行年にもなるべしといへり。汝いかゞ聞侍るや。去來曰。尙白が難あたらず、湖水朦朧として春ををしむに便有べし。殊に今日のうへに侍ると申。先師曰。しかり、古人も此國に春を愛する、おほく都におとらさるものを。去來此一言こゝろに徹す。行年を近江に居たまはゞ、いかでか此感のましまさん。行春難波にゐまさば、もとより此情うかぶまじ。風光の人を感動せしむる事眞なるかなと申。先師曰。汝はともに風雅をかたるべきものなりと、殊更よろこび給ひけり。

此木戶や鎖のさゝれて冬の月　其角

猿蓑撰の時に、此句書おくり、冬の月霜の月置わづらひ侍るよし聞ゆ。然るに初は文字つまりて柴の戶と讀たり。先師曰。角が冬霜に煩ふべき句にもあらずとて、冬の月に定め入集せり。其後、大津より先師の文に、柴の戶にあらず、此木戶なり。かゝる秀逸は一句も大切なれば、たとへ出板におよぶとも、いそぎ改むべしとなり。凡兆曰。此木戶柴の戶させる勝劣なし。去來曰。此月を柴の戶によせて見れば尋常の氣色なり。是を城門にうつ

して見侍れは、其風情あはれに物凄くいふばかりなし。實も角が冬霜にわづらへるもことはりなり。

うらやましおもひきる時猫の戀　越人

先師伊賀より此句を書贈て曰。心に風雅あるもの、一たび口に不レ出といふ事なし。かれが風流、是に至りて本情をあらはせりとなり。是より先に越人が名四方に高く、人のもてはやす發句多し。しかれども爰に至りてはじめて本性を顯すとはのたまひける。

こがらしに二日の月の吹ちるか　荷兮

凩の地にも落さぬしぐれ哉　去來

去來曰。二日の月といひ、吹ちると働たるあたり、予が句にはるかに勝れたりと覺ゆ。先師曰。荷兮が句は二日の月といふものにて作せり。其名目を除けばさせるとなし。汝が句は何をもて作したりとも見えず、全躰の好句なり。たゞ地までとかぎりたる、迄の字いやしとて直し給ひぬ。

春風にこかすな雛の駕籠の衆　荻子

先師此の句を評して曰。伊賀の作者あだなる處を作して尤なつかしとなり。丈艸曰。伊賀のあだなるを、先師はしらず顔なれど、そのあだなるは先師のあだならずや。

清瀧や波に塵なき夏の月　芭蕉

先師、難波の病床に予をめして曰。此頃園女が方にて「しら菊の目に立て見る塵もなし」と作す句に似たれば、清瀧の句を思ひかへたり。はじめの草稿野明が方に有べし、取て破るべしとなり。然ども、はや集にもれ出侍れば捨るに及ばず。名人の句に心を用るたまふ事しらるべし。

涼しくも野山にみつる念佛哉　去來

是は善光寺如來の落陽眞如堂に遷座在し時の吟也。はじめの冠は「ひいやりと」なり。先師曰。かゝる句は全体おとなしく仕立るものなり、五文字しかるべからずとて、「風薰る」と改め給ふ。後、猿蓑の時、再今の冠に直して入句ましく／＼たり。

面楫よあかしのとまり郭公　野水

猿蓑撰の時去來曰。此句は先師の野を橫に馬牽むけよと同前なり、入集すべからず。先師曰。明石のほとゝぎすはしらず、一句たゞ馬と舟とかへ侍るのみ、句主の手柄なし。先師曰。句の働においては一歩も働かず、明石をとりえにしていれば入なん。撰者の心なるべしとなり。終に是を除き侍る。

君が春蚊帳は萠黃に極りぬ　越人

先師予に語て曰。發句は落つかざれば眞の句にあらず。越人が句、既落着たりと見ゆれば、又おもみ出來れり。此句蚊帳は萠黃に極たるにてたれり。月影朝朗など置て蚊帳の發句となすべし。其上かは

らぬ色を若が代にかけて、歳旦となし侍故、心重く句奇麗ならず。汝が句も已に落付所においては氣遣はず、そこに尻を居べからずと也

振舞や下座に直る去年の雛　去來

此句は予おもふ處ありて作す。五文字、古烏帽子紙衣等はいひ過たり。景物は下心徹せず。あさましや口惜しやの類ひははかなしと、今の冠を置て伺ひければ、先師曰。五文字に心をこめておかば、信德が「人の世や」なるべし。十分ならずとも振舞にて堪忍すべしと也。

田のへりの豆つたひ行螢かな　万乎

此句初は先師の斧正ありし凡兆が句なり。猿蓑撰の時、凡兆曰。此句見る處なし、除べし。去來曰。田のへりの豆をつたひ行螢の光、闇夜の景色、風姿ありといふ。兆ゆるさず。先師曰。兆もし捨ば我拾はむ。幸伊賀の連中の句に是に似たるあり、夫を直し此句となさんとて、終に万乎が句と成けり。

大としをおもへば年の敵かな　凡兆

もとの五文字戀すてふと置て予が句也。去來曰。是は句に季なし。信德曰。戀さくらと置べし。花は騷人の思ふ事切なり。去來曰。物には相應あり。古人花を愛して明るを待、くるゝををしみ、人を恨、山野に行迷へども、いまだ身命のさたにおよばず。櫻と置かば、却て「年のかたき哉」といへる處あさまになりなむ、信德なほこゝろえず、重て先師に語る。先師曰。そこらは信德が知ところにあらずとなり。其後凡兆、大年をと冠す。先師曰。誠此一日、千年のかたきなり。いしくも置たるもの哉と大笑し給けり。

賽錢も用意顏なり花の森　去來

先師曰。花の森とは聞なれず、名處なるにや。古人も森の花とこそ申侍れ。詞を細工して、かゝる拙き事云べからずと也。

月雪や鉢たゝき名は甚之丞　越人

猿蓑撰の時頃日伊丹の句に、「彌兵衞とはしれど憐や鉢たゝき」と云あり。越人が句、入集いかゞ侍らむ。先師曰。月雪といへるあたり一句働見えて、しかも風姿あり。たゞ、「しれど憐や」といひくだせるとは格別也。されども鉢敲の俗体をもて趣句を立、俗名を以て句をかざり侍れば尤遠慮有べし、又重ては折もありなむとなり。

きられたる夢はまとか蚤の跡　其角

去來曰。其角は實に作者にて侍る。はつかに蚤のくひつきたる事、誰かかくはいひ盡さん。先師曰。しかり。かれは定家の卿なり。さしてもなき事を、と〴〵しくいひつらね侍るときこえし評、詳なるにゝたり。

をとゝ日はあの山越つ花ざかり　去來

是は猿蓑二三年前の吟なり。先師曰。此句いま聞人有まじ、一兩年を待べしとなり。其後杜國が徒と、よし野行脚し給ひける道よりの文に、或はよし野を花の山といひ、或は、これは〳〵とばかりと聞えしに魂を奪れ、又は其角が、櫻さだめぬといひしに氣色をとられて、よし野に發句もなかりき。たゞをとゝひはあの山越えつと日ゞ吟じ行侍るとなり。其後此句人もうけとりけり。いま一兩年はやかるべしとは、いかでか知給ひけん。予は夢にもしらざる事どもなり。

病鴈の夜寒に落て旅寐かな

海士の家は小海老にまじるいとゞ哉

猿蓑撰の時、此うち一句入集すべしとなり。凡兆曰。病鴈はさる事なれど、小海老にまじるいとゞは、句のかけり事あたらしく、誠に秀逸なりといふ。去來曰。小海老の句はめづらしといへど、其物を案じたる時は、予が口にもいでん。病鴈は格高く趣かすかにして、いかでか爰を案じつけんと論じ、終に兩句ともに乞て入集す。其後先師曰。病鴈を小海老などゝ同じごくに論じけるやと、笑ひ給ひけり。

岩鼻やこゝにもひとり月の客　去來

先師上洛のとき去來曰。洒堂は此句を月の猿とすべしと申侍れど、予は客勝りなんと申。先師曰。猿とは何事ぞ。汝此句をいかにおもひて作せるや。去來曰。明月に山野を吟歩し侍るに、岩頭亦一人の騷客を見付たると申。先師曰。是にもひとり月の客と己と名乘出たらんこそ、いくばくの風流ならめ。たゞ自稱の句となすべし。此句は我も珍重して笈の小文に書入けるとなん。予が趣向は一等くだり侍りけり。先師の意をもて見れば、少し狂者の感も有にや。退て考るに自稱の句となし見れば、狂者の樣もうかみて、はじめの句にまされる事十倍せり。誠に作者其心を知ざりけり。去來曰。笈の小文集は先師自撰の集なり。名を聞ていまだ書を見ず。草稿半にて遷化まし〳〵ける。此時申けるは、予が發句幾句か入集なし給へるやと伺ふ。先師曰。我門人笈の小文に入句三句持たるもの稀ならん、汝過分の事をいへりと也。

うづくまる藥の下のさむさ哉　丈艸

先師難波の病床に、人々に夜伽の句をすゝめて曰。今日より我が死後の句なり、一字の相談を加ふべからずと也。さま〳〵の吟ども多く侍りけれど、たゞ此句のみ、丈艸出來たりとのたまふ。かゝる時はかゝる情こそ動侍らめ。興を發し景をさぐるに豈いとまあらんや、と此時にこそ思知侍りけれ。

下京や雪つむうへの夜の雨　凡兆

此句初に冠なく、先師をはじめ、いろ〳〵

と置侍りて、此冠に極め給ふ。凡兆、あと答て、いまだ落着ず。先師曰、兆、汝手がらに此冠を置べし。若まさるものあらば、我二たび俳諧をいふべからずとなり。去來曰。此五文字のよきことは、誰〳〵もしり侍れど、是外にあるまじとは、いかで知侍らん。此事他門の人聞侍らば片腹いたく、いくつも冠置べし。其のよしとおかるゝ物は、又こなたにはをかしかりなんとおもひ侍る也。

猪の寐に行かたや明の月　去來

此句を伺ふに、先師しばらく吟じて兎角をのたまはず。予思ひ誤るは、先師といへども、歸り待つ夜興引の意を知給はさるやと、しか〴〵のよしを申。先師曰。其おもしろき所は古人もよく知ればこそ、「明ぬとて野邊より山に入るしか(鹿)のあと吹送る萩の上風」とはよみたり。和歌優美のうへにさへ、斯までかけり作したるを、俳諧自由のうへに、たゞ尋常の氣色を作せんは、更に手柄なかるべし。一句おもしろけなれば、暫案じぬれど、兎角に詮なかるべしとなり。其後おもふに、此句は郭公なきつるかた、といへる後德大寺の歌の同案にて、いよ〳〵手柄なきことを知れり。

蘿の葉の……　何ことやらん跡は忘れたり。尾張の人の句也。

此句は、蘿の葉の谷風に一すぢ峯まで裏吹かへさるゝと云句なるよし。予先師に此句を語に、先師曰。發句は斯のごとくくま〴〵まで、いひつくすものにあらずとなり。支考かたはらに聞て大に感動し、はじめて發句といふ物を知侍るとて、此頃ものがたり有。予は其時も等閑に聞なしけるにや、あとかたもなく打忘れ侍る、いと本意なし。都て句はいひ課せざるは未練なり。いひ過るは又病ひなり。いづれも句として見る所なし。或時「この頃や小春を宝に歸花」丈草、此句初上五文字を「山陰や「南邊やと置わづらふよし。尤小春の利に落ていひ過るの病也。下七五にて句意悉濟侍れば、たゞこゝろなき五文字を置べき也と今の冠に定侍る。

下臥(したぶし)につかみわけばやいとざくら

先師路上にて語給ふ。此頃其角が集に此句あり、いかに思てか入集しけむと。去來曰。いとざくらの十分に咲たる形容、よくいひおほせたるに侍らずや。先師曰。いひ課て何かある。予こゝにおいて肝に銘ずる事あり。はじめて發句になるべきこと、成まじき事とを知れり。

手をはなつ中に落けり朧月　去來

魯町に別るゝ時の句也。先師曰。此句惡しといふにはあらず。功者にてたゞいひまぎらかしたるなり。去來曰。いかさまさしてなき事を、句の上にてあやつりたる所あり。しかれどもいまだ十分に解

せず。予が心中に一物侍れども、句の上にあらはれずと見ゆ。いはゆる是は意到句不」到也。

泥龜や苗代水の畦うつり　史邦

猿蓑の撰に、予誤て畦づたひと書。先師曰。畦うつりと傳ひと形容風流格別なり。殊に、畦うつりして蛙啼なりともよめり。肝要の氣色をあやまる事、筆の罪のみにあらず。句を聞事のおろそかなる故なりとて、きけんあしかりけり。

じだらくに寐れば涼しき夕かな　宗次

さるみの撰の時、今一句の入集を願ひて、數句吟じ侍れど取べき句なし。一夕先師の傍に侍りけるに、いざくつろぎ給へ、我も臥しなんとおほせられければ、御ゆるしゅへ、じだらくに居れば涼しく侍ると申ければ、先師曰。是こそ發句なれとて、今の句に作りて入集せさせ給けり。

靈棚の奥なつかしや親の顔　去來

はじめは「面影のおぼろにゆかし魂祭」といふ句なり。此時添書に、祭時は神いますが如しとやらむ、靈棚の奥なつかしく覺侍るよしを申贈る。先師伊賀の文に曰。靈祭尤の意味ながら、此分にては古びに落申べくゅ、詮に靈棚の奥なつかしやと侍るを、何とて句になさゞるや、とおどろかし給ひけり。上五文字和らかなれば、下をけやけく親の顏と置かば句となるべしと也。其おもふ所直に句と成事をしらず、深くおもひ沈み、かへつて心おもく詞しぶり、或は心たしかならず、是等は初心の輩の覺悟有べき事なり。けやけく置てしかるべく侍らん、是則俳のまどひし成べきぞ。

夕すゞみ疝氣おこして歸けり　去來

予が初學の時、發句の仕やう伺けるに、先師曰。發句は句つよく俳意たしかに作すべしとなり。試に此句を賦して伺ければ、又是にてもなしと大笑し給ひけり。

つかみあふ子どものたけや麥畠　游刀

凡兆曰、此麥畠は麻畠にもふれんか。去來曰。麥、麻になりても、くるしからずと論ず。先師曰。又ふれ、ふれぬ、の論かしまし、無用なり。と制し給けり。見る人察せよ。

いそがしや沖のしぐれの眞帆片帆　去來

去來曰。猿蓑は新風の始なり。時雨は此集の美目なるに、此句仕そこなひ侍る。たゞ「有明や片帆にうけて一時雨」といはゞ、「いそがしや」よりも句のはりよく、心のねばりすくなからん。眞帆もそのうちにこもりてん。先師曰。沖の時雨といふも又一ふしにてよし、されど句ははるかにおとるとなり。

兄弟の顔見あはすやほとゝぎす　去來

去來曰。此句は五月廿八日雨の闇の夜曾我兄弟の互に顔見合ける頃、子規なども

うち啼けむかし。むかし光源氏の村雨の軒端にたゝずみ給ひしを、紫式部がおもひやりたる趣をかりて作す。先師曰。曾我とのばらとは聞ながら、一句いまだいひおほせず。其角が評も同前なりと、深川より評し給ふ。許六曰。此句は心餘りて詞たらず。去來曰。心餘りて詞たらずといはんははゞかりあり。たゞいひおほせぬとも評すべし。丈艸曰。今の作者はさかしくかけ廻りぬれば、是等は合點の内なるべしと共に笑けり。

につと朝日にむかふ横雲

青みたる松より花の咲こぼれ　去來

先には「すつぺりと花見の客をしまひけり」と付侍るが先師の顔つきをかしからざれば、又前を乞て此句を附なほす。先師曰。いかに思ふて附直し侍るや。予曰。朝雲ののどかに機嫌よかりしを見て、初に附侍れど、能見るに、此朝雲のきれいなるけしきいふばかりなし。これをのがしては詮なかるべしと思ひ、附直し侍るといへり。先師曰。やはり初の句ならば三十棒なるべし。猶陰高きを直すべしとて、今の五文字にはなりけり。

梅にすゞめの枝百なり　去來

是は歳旦の脇なり。先師深川にて聞て曰。此梅は二月の氣色なり。去來いかにおもひ誤て、歳旦の脇には用ゐけるとなむ。

船にわづらふ西國の馬　彦根の句也

許六こゝろみの點を乞ける時、此句に長をかけたり。先師曰。いまはかゝる手帳らしき句はきらひ侍る。是等は手帳なり、長あるべからず。重て上京の時、此句何ゆゑに手帳に侍るや。先師曰。船の中にて馬の煩ふ事はいふべし。西國の馬とまでは、よくこしらへたる物なりとなむ。

弓張の角さし出す月の雲　去來

去來問曰、此句も手帳なるべきや。先師曰。手帳ならず。雲も角も弓張月も、いはねば一句きこえず。

丁稚が擔ふ水こぼしたり　凡兆

初は糞なり。凡兆曰。尿糞の事も申べきか。先師曰。嫌べからず。されど百韻といふとも二句に過べからず、一句なくてもよからむ。凡兆水に改む。

妻よぶ雉子の身を細ふする　去來

初は雉子のうろたへて鳴。先師曰。去來、かくばかりの事をしらずや。凡句は姿といふものあり。同し事を成して、姿とはなる物をとなり。

ほんとぬけたる池の蓮の實

咲花にかき出す椽のかたぶきて　芭蕉

此前句出ける時、去來曰。かゝる前句をのがすべからずとて、數刻案じたれど皆〳〵なし。先師に附句を所望しければ、斯こそ附給へれ。

くろみて高き樫木の森

咲花に小き門を出つ入つ　芭蕉

此前句出ける時、去來曰。前句全躰臺木の事をいへり。その氣色を失はず、花を附る事むづかしかるべしと。先師の附句を乞ければ、斯付て見せ給ぬ。

綾の寐まきにうつる日の影

なく〳〵も小き草鞋もとめかね　去來

此句出て、座中しばらく附あぐみけり。先師曰。よき上臈の旅なるべしとぞ。きこれをきゝて、頓に此句を附侍りける。好春曰。上臈の旅ときゝて言下に句出たり。蕉門の徒の修練格別也と感ず。

二ツにわれし雲の秋風　正秀

中連子中きりあぐる月影に　去來

正秀亭の第三なり。はじめに、「竹格子影もまばらに月澄て」と付侍けるを、先師かくは斧正し給けり。其夜ともに曲翠亭に宿す。先師曰。今夜初て正秀亭に會す。珍客なれば發句は我なるべしと兼て覺悟すべき事也。其上發句と乞はゞ好悪をゑらばず、速く出すべき事也。一夜のはど幾ばくかある。汝が發句に時をうつさば、今宵の會むなしからむ。無風流の至りなり。餘り不興のいたりなれば我發句を出すべしとて、其夜は先師の發句なりし。正秀忽脇を賦す。二ツにわるゝと、はげしき雲の氣色なるを、かくのびやかなる第三附る事、前句の氣色を探らず、未錬の事なりと、夜すがらいかり給ひける。去來曰。其時に、「月影に手のひらたつる山見えて」と申一句侍りけるを、たゞ月の殊更にさやけき處いはんとのみなづみて、位をわすれ侍ると申き。先師曰。此句を出さばいくばくのましならん。此度の瞬所の恥を一度すゝがん事を思ふべしと也。

分別なしに戀をしかゝる　去來

淺茅生におもしろげつく伏見脇　芭蕉

先師、京より野坡方への文に、此句を書出し、此邊の作者いまだ此甘味をはなれず、そこもと隨分甞みをとり失ふべからずと也。

赤人の名はつかれたりはつ霞　史邦

先師曰、中の七文字よくおかれたり。發句の長高く意味すくなからずとなり。

駒牽の木曾やいづらん三日の月　去來

今や引らん望月の駒、といへるをふりかへて、木曾や出らん三日の月といへり。先師曰。此句は算用を合せたる句なりと、あざけり給へり。

同門評

凡篇中の略評を是とするに似たるは、未判者たき故なり。猶後賢か待侍る。

腫(はれ)ものに柳のさはるしなひ哉　芭蕉

浪化集に、さはる柳と出せり。是は予が誤傳ふるなり。かさねて史邦が小文庫に、「柳のさはる」と改出す。支考曰。さはる柳なり、いかで改侍るや。去來曰。「さは

る柳」とはいかに。支考曰。「柳のしなひ」は、はれものに障る如しと比喩せるもの也。去來曰。しからず、柳の直にさはりたるなり。「さはる柳」といへば兩様に聞え侍る故、かさねて予が誤をたゞす。支考曰。吾子の説は行過たり、只障る柳と聞べし。丈艸曰。詞のつゞきはしらず。趣向は支考がいへる如くならむ。去來曰。流石の兩士、こゝを聞給はざる口惜し。比喩にしては誰／＼もいはん。直にさはるとは、いかでか及ぶべき。格位も又格別なりと論ず。許六曰。先師の短尺に、「さはる柳」とあり。其上、「柳のさはる」とは首切れなり。去來曰。首切の事は、予が聞處に異也。今論におよばず。先師の文に、「柳のさはる」と慥にあり。許六曰。先師あとより直し給ふ句多し。眞跡も證としがたしとなり。三子皆ゝ障る柳の説なり、後賢猶判じたまへ。

去來曰。いかなる故にやありけん。翁、此句は汝に渡し置、かならず人に沙汰すべからず。と江府より書贈給ふ。其後大切の柳一本、去來にわたし置けるとは支考にも語たまふ。其頃となみ續猿兩集にも除れけるに、浪化集撰の年に先師迁化ありしかば、此句のむなしく殘らん事を恨て、其入集にはまるらせける。

雪の日に兎の皮の髭つくれ　芭蕉

魯町曰。此句意いかゞ。去來曰。前書に「子どもと遊び」てとあれば、子どもの業と思はるべし。强て理會すべからず。機發を踏破して知べし。先師此句を語給ふに予甚感動す。先師曰。是を悅ばん者、越人と汝のみならむと思ひしに、はたしてしかりとて殊さらの機嫌なりし。去來曰。此說の古事、神代卷に出たり。或曰兎の皮の髭作るは雪中の寒ければなりなど、いろ／＼理屈をつけて見るこそかた腹いたし。斯のごく解さば、「暑き日に猿わか髭をはやしけり」の類なるべし。いと淺間し。

山路來て何やらゆかし菫艸　芭蕉

湖春曰。菫は山によまず。芭蕉俳諧に巧なりといへども、歌學なきの過なり。去來曰。山路にすみれを詠たる證歌多し。湖春は地下の歌道者なり、いかで斯は難じられけん、いとおぼつかなし。

笠提て墓をめぐるや初時雨　北枝

先師の墓に詣ての句也。許六曰。是は脇よりいふ句也。自何疑有て「や」とはいはん。去來曰。「や」は「治定嘆息のや」也。常に人を訪ふには、笠を提て門戸にこそ入れ。是は思ひの外に墓をめぐる事かなやといへる事也。凡發句は一句をもて聞べし。「笠提て門に這入るや」といはゞ、疑なく外人の事なるべし。

春の野をたゞ一のみや雉子の聲　野明

はじめは、「春風や廣野にうてぬ雉子の聲」なり。去來曰。うてる、うてぬ、はあたり合てやかまし。「廣き野をたゞ一のみや」といはんかたやまさらん。丈艸曰。廣の字猶いやし、春の野とあらむか。去來心服す。

馬の耳すぼめて寒し梨子の花　支考

去來曰。「馬の耳すぼめて寒し」とは我もいはん、梨子の花とよせられし事妙なり。支考曰。何のかたき事か有らん。吾子の如く、かしらより一すぢにいひくださむこそ難き事なれと論ず。曲翠曰。二子互にえたる處を易とし、得ざる所を難しとす。其論ともに尤なり。しかれども惣体をいはゞ、一すぢにいひ下さんはかたかるべし。去來曰。翠、亦えられざる故なり。凡修行は我が得たる處をやしなひ。いまだえざる處を學ばゞ次第にすゝみなん。おのれ纔に得たる所になづみて、他の勝りたるをうらやまずば、功をなす事終にあるべからず。

白水のながれも寒き落葉哉　木導

其角曰。「も」はいま一ッあるの詞なり。去來曰。角はこれを「又も」とおもへるにや。是等は「力も」なるべし、寒きは冬の惣体也。

うの花に月毛の駒の夜明かな　許六

去來曰。予此趣向ありき。句は「有明の花に乘込」といひて、月毛駒芦毛馬とは詞つまれり。「の」文字を入れば口にたまれり。鮫馬は雅ならず。紅梅鴇月毛川原毛などおもひめぐらして首尾せざりしが、其後許六が句を見て不才を嘆ず。こゝに畠山左衛門佐といへば大名の名と成、山畠佐左衛門といへば一字をかへず庄屋の名なり。先師曰。句とゝのはずんば舌頭に千轉せよ、とありしも此事也。

起ざまにまそつと長し鹿の足　杜若

乾鮭と鳴〱行や油つゝ　雲也

うぐひすの啼て見たればなかれけり　作者しらず

去來曰。伊賀の連衆にあだなる風あり。是則先師の一躰也。遷化の後ます〱多し。斯のごとくの類なり。其愚なるには及がたし。支考曰。伊賀の句はさせるとなきもあれどいやみなし。伊賀の連衆は上手なり。

鶯の舌に乘てや花の露　半殘

去來曰。乘らすやといはゞ風情あらじ。乘けりといひては句になるまじ。「てや」の文字千金なり。半殘は實に手だれ者也。丈艸曰。「てや」といへるあたり、上手のこま廻しを見るがごとし。

うぐひすの身をさかさまに初音哉　其角

鶯の岩にすがりて初音かな　素行

去來曰。角が句は暮春の亂鶯也。初鶯に身を逆にする曲なし。初の字心得がたし。

行が句は雎鳩の姿にあらず。岩にすがるはものにおそはれて飛かゝりたるすがた、或は餌拾ふ時、又はこゝよりかしこへ飛うつらんとするさまなり。凡ものを作するに、先其本情を知べき也。しらざる時は珍物奇言に魂をうばゝれて、其本情を失ふ事有べし。角が功者すら時にとりて過てる事多し。初學の人愼まずんばあるべからず。

　桐の木の風にかまはぬ落葉哉　凡兆

其角曰。是先師の樫の木の等類なり。兆曰。しからず。詞つゞきの似たるのみにて、こゝろ大にかはれり。去來曰。等類とはいひがたし。同巣の句なり。同巣を以て作せば、予が「一風の地にも落さぬ時雨かな」といふ巣をかりて、「瀧川の底へふりぬく霰哉」と言出て、いさゝか作者の手柄なし。されど兄より生れ勝さらんは又格別なり。

　駒買に出迎ふ野邊の芒哉　野明

去來曰。駒買に人の出迎ふたる野邊の薄にや、又は直に芒の風情にや。野明曰。薄の上なり。去來曰。はじめよりさは聞侍れど、吾子の俳諧の斯上達せんとは思はざりし故、たゞおどろき入侍るのみ。支考曰。句の秀拙はともかくも、野明此場をしらるゝ事いと不審也と感吟す。予此人を教る事年あり。會て通ぜず。一とせ先師廿日ばかりの旅寐に供せられしより拔群上達せり。常に俳友なく修業むなし。然れども先師をはじめ　丈艸支考など折ふし會吟して外のわる功をしられぬ故、おのづからかゝる句も出來めり。誠に手筋を尊むべし。只平生作意の弱きを難とす。

　あらし山猿のつらうつ栗の毬　小五郎

　花散て二日居れぬ野原かな

正秀曰。嵐山は少年の句にして、しかも風情あり。落花は惡功の入たる所見えて、少年の句といひがたし。去來曰。二日をられぬといへるあたり、他流の悦ぶ處にして、蕉門の大に嫌ふ處なり。

　散時の心安さよけしの花　越人

其角許六ともに云。此句はいひおほせざる故に、僧に別るとて、といへる前書あり。去來曰、罌粟一体の句としていひおほせたり。餞別となして猶見處あり。

　電のかきまぜて行闇夜かな　去來

去來支考ともに曰。下の五文字過たり。「田づら哉」とも有たし。去來曰。物を擡べからず、たゞ闇夜なり。雨士曰。尤の句にして拙しと論ず。其後丈艸に語て曰。退て思ふに、雨士は電の句と見らるゝならん。只電の後の闇夜の句也。故に行くとは申侍る。丈艸曰。さばかりはえ聞ざりき、いかゞ侍らん。

　ほとゝぎす帆裏になるや夕まぐれ　先放

はじめは下を明石潟といへり、渡鳥集にあらため出せり。可南曰。いかなる故にや。去來曰。「時鳥帆裏になるや」といふにて景情たれり。此うへに明石潟をもとむるは、こゝろのねばりならんか。可南曰。同集に卯七が子規も明石也、いかゞかはり侍るや。去來曰。卯七が發句はあかしといはねば、ずらしけりといふ本意たらず。（時鳥當た明石もずらしけり　卯七）發句は趣向を二ツ三ツとりかさねて作するものにあらず。又下意を持せて作するとは格別なり。

とられずば名もなかるらん紅葉鮒　玄梅

許六曰。是を說經ばねと云。感ぜん者こそなかりけりの類也。又曰。人あり、路上にて人にあひて、上へや行べし、下へや行べしと道を問ふがごとし。てにをはあはず。去來曰。上へや行べしといふは、上を疑ひて下を決したるゆゑ語路不通なり。又疑ひて決するといふてにはにもあらず。此紅葉鮒は上に疑ひありて、下をはねたればくるしからず。又「らん」は「らし」にかよふ也。許六曰。あながちにはねたるをいはず。惣体てにはあしきと也。

鞍壺に小坊主のるや大根引　芭蕉

風國曰。此句いかなる處か面白き。去來曰。吾子いま解しがたからん、只圖してしらるべし。たとへば花を圖するに、嵜山幽谷靈社古寺禁闕等によらば其圖よからん。よきゆゑに古來多し。斯のごとくの類は圖のあしきにはあらず、珍しからざればとりはやさず。又圖となしてかたちこのましからぬものあらむ。是等はもとより圖のあしきとて用ゐられず。今珍しく本情の儘なる圖あらば、是を畫となしてもよからむ、句となしてもよからん。されば大根引の傍に、草はむ馬の首うちさげたらむ鞍つぼに、小坊主のちよつこりと乘たる圖、あらば古からんや、拙からむや。察し見らるべし。國が兒何某、却て國よりも感動す。かれは俳諧をしらずといへども、畫をよくする故也。畫師尙景が弟子なり。

夕ぐれは鐘をちからや寺の秋　風國

此句、はじめは晩鐘のさびしからぬといふ句也。句は忘れたり。風國曰。此頃山寺に晩鐘をきくに曾てさびしからず、依て作す。去來曰。是殺風景也。山寺といひ、秋のゆふべといひ、晩鐘といひ、寂しき事の頂上なり。しかるを一端游興騷動の内に聞、さびしからずといふは、一己の私なり。風國曰。此時此情あらば、いかに情有とも作すまじきや。去來曰。若情あらば斯のごとくにも作せんか、と今の句に直せり。勿論句勝れずといへども、本意を失ふ事はあらじ。

應〳〵といへど敲くや雪の門　去來

丈艸曰。此句不易にして流行のたゞ中を得たり。支考曰。いかにして斯安き筋よりは入たるや。正秀曰。たゞ先師の聞給はざるを恨るのみ。曲翠曰。句の善惡をいはず、當時作せん人を覺えずといへり。其角曰。眞の雪の門也。許六曰。尤佳句也、いまだ十分ならず。露川曰。五文字妙也。去來曰、人〳〵の評亦おの〳〵其位より出づ。此句は先師遷化の冬の句なり。其頃同門の人々も難しとおもへり。今は自他ともに此場にとゞまらず。

幾年の白髪や神の光かな　去來

太宰府奉納の句なり。許六曰。發句に切字二ツ用うるは法あり。此句、切字二ツの病あり。去來曰。予曾て切字二ツあるにこゝろなし。ふたつ有ともこれを切字に用ひずんば苦しからじ。

白雨や戸板おさゆる山の中　助童

去來曰。此句、初學の工案ながら何体風姿あり、語路滯らず、情ねばりなく事あたらし。最當時流行のたゞ中也。世上の句おほくは、兎する故に角こそあれと、句中にあたりあひ、或は目前をいふとて、ずんど切の竹にとまりし燕、暖簾の下くゞるなどのみなり。此兒、此下地ありてよき師に學ばゞ、いかばかりの作者にか至らむ。第一いまだ心中に理屈なき故なり。もし惡功の出來たるにおよんでは、又いかばかりの無理いひにもなりなん。怖るべし。

さびしさや尻から見たる鹿の形　木導

許六曰。此句は、入鹿のあと吹おくる萩の上風、といへる等類也。去來曰。吹送るの歌は、朝鹿の山に歸る氣色をいへり。これは鹿一体のさびしさをいへり。趣意格別なり。等類になるまじ。

唐黍にかげろふ軒や靈まつり　洒堂

路通曰。唐黍は粟にも稗にもなるべし、發句となしがたしと也。去來曰。路通いまだ句の花實をしらざる故也。此句は軒の草葉に火影のもれたる賤が魂祭を賦したる也。一句の實こゝにあり。其草葉は唐黍にても、粟稗にても其場に叶たる物を用うべし。是は一句の花也。實は魂祭にて動べからず、動けば外の句也。花はいくつも有べし、其内雅なるを撰び用ゆるのみ。

靈祭うまれぬさきの父戀し　甘泉

去來曰。吾子は出生已前に父を喪し給ふや。甘泉いはく。去々年送葬し侍る。去來曰。然ればこれは他人の句也。吾子に對してをかしからず。凡發句を吟ずるに、意は聖賢佛神の境にも遊ぶべし、處は禁裏仙洞のうはさも申べし、乞食桑門の上にもおよぶべし。句においては身上を出べからず。身外を吟ぜばあしき害を求め

侍らん。

　御命講やあたまの青き新比丘尼　許六

去來曰。七字斯いひくださんはいかゞ。是を直さば一句しをり出來らん。許六曰。しをりは自然の事也、求て作すべからず。是は七字を以て發句となる也。其角もさこそと評し侍ると也。

　門口や牛王めくれて初しぐれ　作者不知

去來曰。此句彥根より見せられたるに、其角が弱法師の門札の句と等類と評す。予甚誤なり。其頭は少し似たる事も、けはしく嫌ひ除て一句の惣体をしらず。門といひ札といふにて、はや等類の評をなせり。いと淺間し。

　猪の鼻ぐすつかす西瓜哉　卯七

去來曰。させる事なし。三四分の句なり。正秀曰。猪なればこそ鼻はぐすつかしけん、と甚悅びたり。其後先師も一興ありとなり。去來曰。退て思ふに、此頃いまだ上方には西瓜めづらしければ、正秀もさおもふ心より、猪のあやしみたるとは風情聞出せり。予は西國うまれにて、西瓜も瓜茄子のごとく、さしてめづらしともおもはざりければ、會てこゝろゆかざりけり。惣て人の句をきくに、我がしる場としらざる場とにたがひ有べし。虎の齒を聞て追れたる人の汗をながしたりといへる類也。

　饅頭で人を尋ねよやまざくら　其角

許六曰。是は謎といふ句也。去來曰。是はなぞにもせよ、いひおほせざる句也。たとへば、提燈で人を尋よといへるは、直に提燈もてたづねよ也。これはまんぢうをとらせんほどに、人をたづねよといふ事を、我ひとり合點していへるもの也。むかし聞句といふ物あり。それは句の切様、或はてにをはのあやをもて聞く句也。此句は其類にもあらず。

　あさがほに簾うちしく男哉　凰毛

魯町曰。此句或人の長點也、いかゞ。去來曰。發句といはゞいはれんのみ。杜年曰。先師の「蕣の蕣に我はめしくふ男哉」とはいかなる所に秀拙ありや。去來曰。先師の句は其角が蓼くふ螢といへるにて、飽まで巧たる句の答也。句上に事なし、答る所に趣あり。凰毛が句は前後表裏一の見るべき所なし。斯のごとき句は口をひらけば出るものなり。こゝろみに作て見せん、何なと題を出されよ。魯町則露の句を乞。「露落て襟こそばゆき木陰哉」。又菊の題にて「菊咲て家根のかざりや山畠」と十題十句、言下に賦したり。若はらみ句の疑もあらん、一題に十句せんといふ。魯町則砧の題を出す。「娵より嫁の音よはき砧哉」「乘掛の眠をさます礁哉」といふをはじめ、十句筆をおかせず。予は蕉門遅吟第一の名ありてすら

斯のごし。況や集にも出たる先師の句なれば、格別の所ありと知らるべし。去來曰。此言自らてらふに似たり。しかれども當時世間の作者、翁の葬の句、あるは道ばたの木槿などの句体にまよひ、あさましき句を吐出し、芭蕉流とおほえたる族おほし。其輩にしらせんためこれを記すもの也。

年立や家中の禮は星月夜　其角

元日や土つかふだる顔もせず　去來

許六曰。當時元日といふ冠、用うまじき難あり。去來曰。元日は嫌ふべき言にあらず。「や」の字平懐にきこゆ。此難なるべし。此句元日といはん外なし、「や」は嘆美したる詞也。許六曰。其角此句を吟じ、春立といへば歳旦にあらず、元日はいひ古びたりと伺ふ。先師曰。さばかりの作者の今日元日といはんは拙かるべしとて、年立やとは置給へり。又「や」の字の「嘆賞のや」といふはなし。「五ッのや」は「疑のや」とは習侍る。　去來曰。其角が句においては先師かくのたまふべし。予が句においてはさはのたまはじ。作者の甲乙をもて云にはあらず、己〱が志す處に違あり。予は珍物新詞をもて常に第二等に置侍る。そこは先師も能見ゆるし給へり。又「嘆美のや」は名目にはなし。名目を以ていはゞ「治定のや」也。治定にも嘆息嘆美あり。世話にもすいたりや虎御前、切たりやむさし坊などいふ。皆治定嘆美也と論ず。猶後賢判じ給へ。

鳳國曰。彥根の發句、一句に季節を二ッ入る手くせあり。難ずべきや。去來曰。一句に季節二三有とも難なかるべし。もとより好む事にもあらず。許六曰、一句に季節を二ッ用る事初心のなりがたき事也。季と季のかよふ處あり。去來曰。一句に季を二ッ用る事は、功者初心によるべからず。されど許六の季の通ふ處に習ありといへるは、予がいまだ知ざる事也。

牽牛花の裏を見せけり風の秋　許六

一說、此句先師の、「葛の葉の面見せけり」と等類なりと。許六曰。等類にあらず。見せけりとは詞のむすびまで也、趣向かはれり。去來曰。等類といひがたし、同巣の句なるべし。たとへば和哥には、花さかぬ常盤の山の鶯はおのれ啼てや春を知らん、と云に、紅葉せぬ常盤の山の小男鹿はおのれなきてや秋をしるらむ、とよみても等類にはならずとよ。俳諧には遠慮あるべき事也。

盲より啞のかはゆき月見かな　去來

去來曰。此句は十七八年前の句なり。其頃は先師にも賞せられ、世上にも聞えありし句也。尤事新しうして感深しといへ

ども、句位を論ずるに至ては甚下品也。いま蕉門の俳友中〻此場にをらず。この頃或連歌師の曰。花のもとにて此句の評あり、俳諧もかゝる感情の句あればあなづりがたしとなり。是を賞せらるゝと聞て、却て今日の連歌師たのもしからずおもひ侍る也。

しぐるゝや紅の小袖を吹かへし　去來

正秀曰。いとによるものならなくに、の類にて、去來一生の句屑也。去來曰。正秀が評いまだ解し得ず。予はたゞしぐれもて來る嵐の路上に、紅の小袖吹かへしたるけしきは、紅葉吹おろす山おろしの風、と詠たるうへの俳諧なるべしと作し侍るまでなり。

はつのゐのこに丁どしぐるゝ

生鯛のぴち〳〵するを臺にのせ

どこへ行やらうらの三助

去來曰。此附句、臺に載せといへる所、いのこの祝儀と極て、此分過たり。やはり「ぴち〳〵としてはねかへり」などあらまほし。しからば次の附句までもよからむ。かゝる處より句体重くなるなり。惣て一句にいひ盡したるは、あと〳〵付がたきものなり。

梅の花赤いは〳〵あかいかな　惟然

去來曰。惟然坊が今の風大かた此類なり。發句にはあらず。先師遷化の歳の夏、惟然坊が誹諧を導給ふに、其得たる口質の處よりすゝめて「磯際にざぶり〳〵と浪うちて」或は、「杉の木にすら〳〵と風の吹わたり」などゝいふを賞し給ふ。又俳諧は氣鋒にて無分別に作すべしとのたまひ、亦此後いよ〳〵風体かろからんなどのたまひたる事を聞まよひ、我が得手に引かけて、自の集の歌仙に侍る、「妻よぶ雉子」「あくるがどくの雪」の句など、先師評し給へる句勢句姿などゝいふとの物がたり共は、みな〳〵忘却せらるゝと見えたり。

行ずして見五湖烹蠣の音を聞　素堂

なき人の小袖もいまや土用ぼし　芭蕉

素堂子の句は深川芭蕉菴におくり給ふ句なり。先師の句は、予が妹が身まかりける頃、美濃の國より贈給ふ句なり。ともに其事をいとなむたゞ中に來れり。此頃古藏集を見るに、先師の事ども書ちらしたるかたはしに、素堂子の句をあげ、いり蠣のたゞ中に來るとをもて、名人達人と譽られたり。それをもて名人といはゞ、其そしらるゝ先師の句もかくのごとし、皆人の知たる事也。それのみならず、世話にも、人事いはゞめしろおけ、といへり。一氣の感通自然の妙應、かゝる事もあるものとしるべし。誠に痴人面前夢を說べからずとなり。

梅白しきのふや鶴を盗まれし　芭蕉

去來曰。古藪巣に此句をあげて、先師の事をなぢり、此句へつらへりといへり。是等は物の心を辨へずして評せり。秋風は洛陽の富家に生れて市中を去、山家に閑居して詩歌をたのしみ、騷人を愛すと聞て、かれに迎へられ、實にかれを風騷隱居の人とおもひ給へるにより此作あり。先師のこゝろに佞諂なし、評者の心に佞諂あり。其後招けども行給はず。今や此評を見るに、かれが佞諂なる事を知れり。誠に歎くべし、しゆべからず。

うぐひすの海向てなく須磨の浦　卯七

初は鶯も海むひて鳴なり。野坡曰。鶯もとあらんは面白かるまじ、やはり鶯のといはん。去來、尤也と同じて改む。丈草曰。もといひて風情侍れど、やはりたしかに鶯のといはんかたまさるべしと也。

故實

予初學のときより、俳諧の法をしる事を穴勝にせず。去嫌季節等も不覺悟にして、其外の事さ云ふに及ばず。然れども此覺は先師の物語ありし事ども、わづかに覺え侍るをしるす。

卯七曰。先師は俳諧の法を用ひ給はずや。去來曰。是を成るほど用ひてなづみ給はず。思ふ所ある時は、古式を破り給ふ事もあり。されど私に破らるゝは稀なり。第一、先師の俳諧は長頭丸以後のはいかいを以て、元成(もとなり)とし給はず。唯世々の俳諧躰にもとづき給へり。凡、俳諧の付句は已に久しといへども、連俳と成るは長頭丸以來にして未(いまだ)法式なし。仍(よつて)連歌の式をかり用ひらる。重ねて俳諧の法式を改(あらため)作(つくり)あらはすにもおよばず、また上より定たる法式にもあらず。もし其人あらばこれを損益あるとも罪あるまじ。其ときの宗匠たちはみな元來連歌師たる故、連歌の法式をかり用ひらるゝ也。退ておもふに、今日の先師、もし其時にいまさば連歌に寄(依)らず、俳諧の式は別に立べし。世の人は俳諧を連歌の奴僕のやうにおもへり。先師の沙汰は格別也。

卯七曰。蕉門に手に葉留の脇、字留の第三、用る事はいかに。去來曰。發句の脇は歌の上ミ下モ也。是を連るを連歌といふと云。一句／＼に切るは長くつらねんが爲なり。歌の下句に字留と云事なし。文字留と定るは連歌の法なり。是等は連歌の法によらず、歌の下の句の心も、むかしの俳諧の格なるべし。むかしの句に、

守山のいちこさかしく成にけり
うばらもさぞた嬉しかるらん

まりこ川蹴ればぞ浪はあがりける
かゝりあしくや人の見るらん

是等、手に葉の脇の證句なり。第三も同じ。

卯七曰。蕉門に無季の句興行侍るや。去來曰。無季の句は折ゝあり。興行はい

まだ聞ず。先師の發句も四季のみならず。戀、旅、名所、離、別、等無季の句有たき物也。されどいかなる故有て、四季のみとはさだめ置れけん、其事をしらざれば、しばらく默止侍ると也。其無季といふに二ツあり。一ツは前後、表裏、季と見るべき物なし。落馬の即興に、

歩行ならば杖つき坂を落馬かな　はせを

何となく柴吹風もあはれたり　杉風

又詞に季なしといへども、句に季と見るところ有て、あるひは歳旦とも、名月とも定るなり。

年〳〵や猿にきせたる猿の面　はせを

如レ斯なり。

卯七曰。發句に切字を入る事は如何。

去來曰。故あり。先師曰。汝切字をしるや。去來曰。いまだ傳授なし、自分覺語し侍る。先師曰。いかに。去來曰。たとへば發句は一本木のごとしといへども梢根あり。付句は枝のごとし。大いなりといへども全からず。梢根ある句は切字の有無によらず、發句の躰なり。先師曰。しかり。然れどもそれは而影をしりたるなり。是を傳授すべし。切字のヿは連俳ともに深く祕す、猥に人にかたるべからず。惣て先師に承る事多しといへども、祕すべしと有しは是のみなれば、其事はしばらく遠慮し侍る。第一は切字を入る句は句を切ため也。切れたる句は字を以て切に及ばず。いまだ句の切れる、切れざるを知らざる作者のため、先達切字の數を定られたり。此字を入るときは十に七八は句切る也。殘二三は入てきれざる句あり、又入れずしてきれる句あり。此故に或はこのやは、口あいのや、このしは、過去のしにてきれず。或は是は三段切、是は何ぎれなどゝて、名目して傳授事なり。又丈草に向て先師曰、歌は三十一字にて切れ、發句は十七字にて切る。丈草撰（拶）入あり。又或人曰。先師曰。きれ字に用る時は、四十八字皆切字なり。用ざる時は一字もきれ字なしとなり。是等は皆〻こゝをしれと障子ひとへをおしへ給ふなり。去來曰。此事を記す、同門にもみだり成りと思ふ人有らん。愚意は格別也。此事あながち先師の祕し給ふべき事にもあらず。たゞ先師の傳授のとき断ありし故なるべし。予も祕せよとありけるは書せず、唯此あたりを記して人も推せよとおもひ侍るなり。

卯七曰。花に定座ありや。

去來曰。定座なし。花の句はたがひに大切と讓り合侍る故、裏十一句十三句にて出す。十句八句は短句なり。十三句目おのづから花の句となり侍る也。當流には此説を用ゆ。

卯七曰。花を引上て作るはいかに。

去來曰。花を引上るは二品有り。一ッは一座に賞翫すべき人ありて、其人に花をと思ふ時、其句前にいたりて、前句より春季を出して望む也。是を呼出しの花と云。又一ッは一座の貴人功者抔は他に讓るべき人もあらねば、よき寄來る時は、呼出しを待たず花をなす。又兩吟の時は互に一本宛の句主なれば、謙退に及ばず。何方にてもひき上て作する也。扨故もなく花を呼出すは、呼出すものゝ過にして、花主の罪にあらず。また故もなくみづから引上るは、くわんたいの作者なり。是等の事は隔心の會の式なり。常の稽古には兎も角も有べし。人にふりかゆる花あり。これは花一句と思ふ人の句所あしきときは、我句を前にふりかへて花をわたす也。

卯七曰。猿みの集に、花をさくらにかへらるゝはいかに。

去來曰。此時。予花をさくらにかへんと云。先師曰。故いかに。去來曰。凡花はさくらにあらずといへる、一通りはする事にして花聟茶の出花なども、はなやかなるによる。花やかなりといふもよる所有。必竟花はさくらをのがるまじと思ひ侍る也。先師曰、さればよ。古へは四本の内一本は櫻なり。汝が云ところも故なきにあらず、兎角作すべし。されど尋常の櫻にては、かわりたる詮なからんとなり。予「糸ざくらはら一ぱいに咲にけり」と吟しければ、句我まゝなりとわらひ給ひけり。

卯七野明曰。蕉門に戀を一句にて捨るはいかゞ。

去來曰。予此事を伺ふ。先師曰、古は戀の句數定らず。勅已後、二句以上五句となる。これ禮式の法なり。一句にて捨ざるは、大切の戀句に挨拶なからんはいかゞとなり。一說に戀は陰陽和合の句なれば、一句にて捨べからずともいへり、皆大切に思ふ故なり。予が一句にても捨よといふも、いよ／＼大切におもふ故なり。汝は知まじ、昔は戀句出れば相手の作者は、戀をしかけられたりと挨拶せり。また五十員百員といへども戀句なければ一卷とはいはず、はした物とす。斯ばかり大切なる故、皆戀句になづみ、わづか二句一所に出れば幸とし、かへつて卷中戀句まれなり。又多くは戀句より句しぶり吟おもく、一卷不出來になれり。この故に戀句出て付よからんときは、二句が五句もすべし。付がたからんときは、しばらく付ずとも、一句にても捨よと云へり。かくいふも何とぞ卷づらをよく、戀句も度／＼出よかしと思ふ故なり。勅の上を斯く云は恐るゝ所有に似たれども、それは連歌の事にて、俳諧の上にあらねば奉背にもあらず、然れども我古人の罪人た

る事をまぬかれず。惟後學の作しよからん故をおもひ侍るのみなり。

卯七曰。蕉門に宵闇を月に用ひ侍るや。去來曰。此事あり。酒堂曰。深川の會に宵闇の句出たり。先師曰。宵闇は句中に月あれば、外に月の句作せんは拙なかるべしと、直ちに月にもちひ、さて表に月を見せざらむもいかゞと、月次の月の字を入らるゝといへり。さもあるべきとゝおもへり。其後風國が會に宵闇の句いづる。予曰。先師已に此式を立らるゝ上は、いざ其法にならはんと、是を月に用ひ侍りぬ。この頃許六の書を見るに　先師の宵闇を月にし給ふは故有との事也。然るを何の故もなく月に用るは淺ましとなり。此ことばを聞て恥るにたへず、許六は其時深川の會の徒なり、いか樣子細あるべし。

野坡曰。東武の會に盆を釋教とせず。嵐雪是を難ず。先師曰。盆を釋教といはゞ、正月は神祇になるかと也。予兎角をいはず。退て思ふに此事はいか樣故あらん。一句に釋教なしといふとも、已に盆と呼はゞ釋教ならんか。中元といふ類にはあらずと、いとふしんなり。

去來曰。許六と名月の明の字を論ず。予は第一、八月十五日夜婁宿なり。淸明を用る。第二、和歌にも今宵淸明をよめり。第三、詩にも淸明の字あり。第四、本朝のならひ字儀叶ふを假用る故有。富士を不二、吉野を芳野と云が如し。第五、先達明の字書れたる多し。明の字書て苦しからじと云也。許六は明月と八月十五夜とは和歌の題格別也。名月は良夜の日の事也。名月に明の字書は未練といへり。是論至極せり。もし明月の題を得て、中秋の月を作せば放題ならん。名月も明の字書まじき事必せり。

許六曰。むらさめは季なし。季を結ぶに習あり。熊野(ゆや)の謠に、のう／＼村雨のして花を散しゝと云は、歌道を知らぬものゝ作となり。

去來曰。村雨多は夏の初、秋の半に詠み侍る。歌人に問ふに、花にも月にも結ぶ也。春の末、夏のはじめ、遲櫻などに結び侍る事にや。いまだ證歌は覺悟せず。退ておもふに急雨など書て、必竟一降雨なれば、その風情をうつし得ば、いつをかぎるまじ。無季なるもかゝる故にや。

去來曰。手爾葉は天下一まいのてにはにて、確も知るものなり。一字も違ぬればかならず通せず。又傳授ある手にはといふに至ては、天下に知人少し。堂上にも傳授の人多くましまさずとなり。是よりはじめて人の歌も直し給ふとかや。又地下に傳授のひとすじあり。紹巴貞德も此傳なり。先師も此傳と承る。我輩のみだりにいふ事にあらず、

許六曰。古事古歌を取るには、作をならべて己が心を盡す。たとへば、

名將の橋の反見る扇かな

といへるは、名將の作にして句主の作にあらず。

去來曰。古事古歌を取には、本歌を一段すり上て作すべし。譬へば蛤より石花をうれかしと云、西行の歌を取て、

かきよりは海苔をば老の賣もせで

と先師の作あり。本歌は同じ生物をうるともかきをうれ。石花はかんきんの二字にかなふといふを、先師は生物を賣らんよりは海苔を賣れ。のりは法に叶ふと、一段すり上て作り給ふなり。老の字力らり。大概かくのごとし。

先師曰。世上のはいかいの文章を見るに、或は漢文を假名に和らげ、或は和歌の文章に漢字を入れ、詞あしく賤しく云なし、或は人情を云とても今日のさわがしきくま〱を探りもとめ、西鶴が淺ましく下れる姿あり。我徒の文章はたしかに作意をたてゝ、文字はたとひ漢字をかるとも、なだらかに云つゞけ、事は鄙語の上に及とも、懐しく云とるべしと也。

先師曰。凡賛名所の發句は、其賛其所の發句と見ゆるやうに作るべし。西行の賛を定家の繪にも書、明石の發句を松嶋にも用ひ侍らんは拙き事なるべし。

先師曰。俳名は穴勝熟字によらず、唯となへ清く調ひ、字形の風流なるを用ゆべし。短冊など書て猶見る所あり。片名書侍るにこと〱しき字形は苦しかるべし。はせをは假名に書ての自慢なりとなり。又野明が名をはじめ鳳仭と云けるを、鈒凡の有る字は名に用ゆべからずとて、先師の野明とは改め給ひけり。

去來曰。俳諧の集の模様は、やはり俳諧の集の内にて作すべし。後あら野集献立を見て、先師も我を折給ひき。かの徒然草はあつめ書の部に成て、歌書のうちに入ずとかや。思べし。

去來曰。外題の寸法あり。竪は表紙の三分二を取り、横五分が一を取とやらん。猿蓑のとき先師の給ひけり。たしかに覺えず。

魯町曰。竹植る日は古來より季にや。去來曰。不ㇾ覺悟ㇾ。先師の句にてはじめて見侍る。古來の季ならずとも、季にしかるべき物あらば撰び用ゆべし。先師曰。季節のひとつも探し出したらんは後世によき賜となり。鹽かきの夜も古來の季節かしらずといへども、五月三十日なれば夏季に定る。可南が句に沙汰し侍る。（燒かきの夜は聲ちかし時鳥　可南。『己ヶ光』にあり。勝峰氏示教。）

卯七曰。先師に二見形と云ふ文臺侍るよし。いかゞ。去來曰。しかり。史邦是をよくうつさる。

先師の差圖、寸法を直に聞侍れども忘却せり。本より文臺も所持せず。其後門人寫し侍る人多し。

去來曰。先師曰。俳諧の書の名は、和歌詩文史錄等とたがひ、俳言あるべしと也。されば先師名づけ給ふを見るに、みなし栗、三ヶ月日記、冬の日、ひさご、猿蓑、葛松原、笈の小文皆其趣なり。去來、浪化集の時上下を有磯海、となみ山と號す。先師曰。みな和歌の名所なればまぎらはし、浪化集と呼べしとなり。

魯町曰。浪化集にては、俳書の名は詩歌史文を分つべからず。

去來曰。されば浪化、詩人ならば詩集成べし。俳諧者なれば見るより俳諧書と云事あきらけし。

修業教　異本（不易流行）

去來曰。蕉門に千歳不易の句、一時流行の句といふあり。是を二つにわけて教給へども、其元は一なり。不易をしらざれば基立がたく、流行をしらざれば風新たならず。不易は古に宜しく、後に叶ふ句なる故に、千歳不易といふ。流行は一時〳〵の變にして、きのふの風は今日宜からず、今日の風は翌日に用ゐがたきゆゑ、一時流行とは、はやることをいふなり。

魯町曰。俳諧の基とはいかに。去來曰。詞にいひがたし。凡吟詠するもの品あり。歌は其一なり。其中に品あり。はいかいは其一なり。其品〳〵をわかちしらるゝ時は、俳諧連歌はかくのごときものなりと、おのづからしらるべし。それをしらざる宗匠達はいかいをするとて、詩やら歌やら、旋頭、混本歌やら知れぬ事をいへり。是等は俳諧に迷ひて俳諧連歌といふ事を忘れたり。俳諧をもて文を書ば俳諧文なり。歌をよまば俳諧歌なり。身に行はゞ俳諧の人なり。唯いたづらに見を高くし、古をやぶり、人に違ふを手がらがほに、あだ言いひちらしたるいと見苦し。かくばかり器量自慢あらば、はいかい連歌の名目をからず、はいかい鐵砲となりとも亂聲となりとも、一家の風を立らるべし。

魯町曰。不易の句はいかに。去來曰。不易の句は俳諧の躰にして、いまだ一の物數寄なき句なり。一時の物數寄なき故に古今に叶へり。たとへば、

月に柄をさしたらばよき團かな　宗鑑

これは〳〵とばかり花のよし野山　貞室

秋の風伊勢の墓原猶すごし　芭蕉

是等の類也。魯町曰。月を團に見立たるも物數寄ならずや。去來曰。賦比興は俳

諧のみにかぎらず、吟詠の自然なり。凡吟にあらはるゝもの、此三つをはなるゝ事なし。物數寄とはいひがたし。

魯町曰。流行の句はいかに。去來曰。流行の句は、おのれに一ッの物數寄ありてはやる也。形容、衣裝、器物等にいたるまで、時〻のはやりあるがごとし。たとへば、

むすやらに夏にとしき(甑)の暑さかな

此躰久しく流行す。

あれは松にてこそゆへ枝の雪　松下

海老肥て野老(ところ)瘦たるも友ならむ　常矩

或は手をこめ、あるひは歌書の詞づかひ、又は謠の詞とりなどを物數寄したるあり。是等も一時に流行し侍れど、今日は取上る人なし。魯町曰。むすやうこ夏にこしきといふは緣にあらずや。去來曰。緣は歌の一事にして、物數寄にはあらず。手を込ると緣とはかはりあり。

魯町曰。不易流行其元一なりとはいかに。去來曰。此事辨じがたし。有增(あらまし)人体にたとへていはゞ、不易は無爲の時、流行は坐臥行住屈伸伏(俯)仰の形同じからざるがごとし。一時〳〵の變風是也。其姿は時に替るといへども、無爲も有爲も、もとは同じ人也。

魯町曰。風を變るには其人ありとはいかこ。去來曰。本をしらずして末を變る時は、或は變レ風、其變風俳諧をはなれ、或は離れずといへどもつたなし。

魯町曰。基より出ると出ざるとはいかに。去來曰。基をしらずしては解しがたからむ。先あらはに知れる物一ッふたつをあげて物がたりす。たとへば先師の風といへども、

貞固が松けさ門に有女どもきほひ

瀧あり蓮の葉にしばらく雨をいだきしか　素堂

これらは詩か語か。又文字の數合たるにも、

散花にたゝらうらめしくれの聲　幽山

此句は謎なり。魯町曰。誹諧歌に謎の躰も有事にや。去來曰。是等はみな俳諧歌体よりはいでず。察し見らるべし。

魯町曰。先師も基より出ざる風侍るにや。去來曰。奧州行脚の前はまゝあり。此行脚のうちにも「あなむざんやな甲の下のきり〴〵す」といふ句あり。後にあなの二字を捨られたり。是のみにあらず、異体の句などもはぶき捨給ふもの多し。此年の冬、はじめて不易流行の敎を說給へり。

魯町曰。不易流行の事は古說にや、先師の發明にや。去來曰。不易流行は萬事に渡る也。しかれども、はいかいの先達是をいふ人なし。長頭丸已來手を込る一躰久しく流行し、「一角樽や傾けのまふ丑のとし」「花に水あけて咲せよ天龍寺」といへる

までに吟じたり。世の人はいかいは斯のごとき物とのみ心得つめぬれば、其風を變ずる事をしらず。、因師一度其こりかたまりたるを打破り、新風を天下に流行し侍れど、いまだ此教なし。しかりしよりこのかた、都鄙の宗匠達古風を用ず、一旦流〳〵を起せりといへども、又其風を長くおのが物として、時〳〵變ずべき道をしらず。先師はじめて誹諧の本体を見つけ、不易の句を立、また風は時〳〵變ある事をしり、流行の變ある事を分ち教給ふ。然れども先師常に曰。宗因なくんば我〳〵が誹諧今以貞徳の涎をねぶるべし。宗因は此道、中興開山なりといへり。

丈艸曰。不易の句も、當時其体を好みてはやらば、是も又流行の句といふべき也。

先師遷化の時、正秀曰。此より後は定て變化あらん。其風好なし。唯不易の句をたのしまん。

去來曰。蕉門に不易流行の説〳〵あり、或は今日一句〳〵の上を云說あり。是も流行にあらずといひがたし。然ども不易流行の教といふは、はいかいの本体、一時〳〵の變風との事也。

去來曰。俳諧を修行せんと思はゞ、むかしより時代の〳〵の風、宗匠〳〵の體を、能〳〵考知盡べし。是をしる時は新古おのづから分る物なり。

去來曰。俳諧の修行者は、おのが好たる風の先達の句を一すぢに尊み學びて、一句〳〵に不審をおこし、難を構ふべからず。若解がたき句あらば、いかさま故あらんと工夫し、或は功者に尋明むべし。我が誹諧の上達するにしたがひ人の句も聞(きこゆ)るもの也。始より一句〳〵をとがめがちなる作者は、吟味のうちに月日かさなりて、終に功の成たるを見ず。先師曰。今の俳諧は日頃に工夫をつけて、席にのぞんでは氣鋒を以て吐べし。心頭に落すべからずと也。

支考曰。むかしの誹諧は如來禪のごとし。今のはいかいは祖師禪のごとし、捺著すれば卽轉す。

去來曰。先師は門人に教給ふに、其ことば極(きはまり)なし。予に示し給ふには、句毎〳〵にさのみ念を入る物にあらず。又句は手づよく、俳意たしかに作べしと也。凡兆には一句わづかに十七字なり、一字もおろそかに置べからず。誹諧もさすがに和歌の一体なり。句にしをりの有やうに作るべしとなり。是は作者の氣性と口質によりてなり。あしく心得る輩は迷ふべきすぢなり。同門の中にも、こゝに迷をとる人多し。先師曰。發句は頭よりすら〳〵といひくだし來るを上品とす。

酒堂曰。先師曰。發句は汝がごとく、物二ッ三ッとりあつめて作るものにあらず、こ

がねを打のべたるやうにありたしとなり。先師曰。發句は物をとり合すれば出來る物也。夫をよく取合するを上手といひ、あしきを下手といふなり。

許六曰。發句はとり合物なり。先師曰。是ほど仕能き事の有を人は知らずや。

去來曰。取合せて作る時は句多吟速なり。初學の人是を思ふべし。功者に成に及では取合不取合の論にはあらず。

許六曰。發句は題の曲輪を飛出て作るべし。廓のうちにはなきもの也。自然曲輪の中に有は、天然にして稀也。

去來曰。發句は曲輪の內になきものにあらず。殊に卽興感偶する物は多くは內なり。然ども常に案るに、內はすくなく、多くは古人の糟粕なり。千里にかけ出て吟ずる時は、句おほきのみならず、第一等類をのがる。初學の尤思べき處也。功なるに及では、又內外の論にはあらず。鳳國が誹諧、句毎曲輪の內なり。予此事を示せば「雹に德利さげて通けり」と云を「德利さげて行かゝり」と直す。「名月に皆さかやきを剃にけり」といふを、「さかやきを皆そりたてゝ駒迎」と直しぬ。

去來曰。他門と蕉門と第一案じ處に違ひありと見ゆ。蕉門は景情ともに其有處を吟ず。他流は心中に巧まるゝと見えたり。たとへば「御蓬萊夜はうすものをきせつべし」「元日の空は靑きに出舟哉」「鴨川や二度目の網に鮎一ッ」といへるごとし。禁闕に蓬萊なし。洛陽に出舟なし、鮎ひとつは少き事にや。皆是細工せらるゝなり。

去來曰。蕉門の發句は一字不通の田夫、十歲以下の小兒も、時によりてよき句あり。却而他門の功者といへる人は覺束なし。他流は其流の功者ならざれば、其流のよき句はなしがたしと見えたり。

去來曰。誹諧は新意を專にすといへども、物の本情を違ていふものにはあらず。若其事をうち返していふには品あり。たとへば、感時花灑涙、惜別鳥驚心、或は「櫻花ちらばちらなん散らずとて大宮人の來ても見なくに」といへるたぐひなり。感時惜別、大宮人の見ざる、是等一首の眼也。

去來曰。俳諧は火をも水にいひなすと淸輔がいへるに迷ひて、「雪の降る日は汗をかきけり」といふてもくるしからずといふ人あり。夫は「火を水」とばかりこゝろへ「いひなす」といふ處に、心のつかざる故なり。雪の日に汗かくやうに、一句を能いひなさばさもあらむ。「咲かへて盛ひさしき朝貌をあだなるはなとたれかいひけむ」の類也。

去來曰。句案に二品あり。趣向より入る

と、又詞・道具より入るとなり。詞・道具より入る人は、多は頓作多句也。趣向より入る人は遅吟寡句也。されど案じかたの位を論る時は、趣向より入るをよしとす。詞・道具より入る事は、和歌者流には嫌ふと見えたり。誹諧にはあながちにきらはず。

去來曰。蕉門に同巣同竈と云事あり。是は前吟の鑄形に入て作する句也。たとへは竿が長くて物につかへる、といふ句を、刀の鐺(こじり)が障子にさはる、或は杖がみじかくて地にとゞかぬ、と吟じかゆる也。同竈の句は手がらなし、されど、兄より生れましたらんは又手柄なり。

去來曰。句に句勢といふ事あり。文に文勢、語に語勢あるがごとし。たとへば、

　ふるふがごとく小鍬雪降る　去來

先師曰。これまた勢なり。など打あくるごとと作せずや。去來曰。言葉つまりたるやう也。先師曰。古人も我も物やおもふらんとはいはずとやなり。

去來曰。句に姿と云あり。たとへば、

　妻よぶ雉子の身をほそうする　去來

初は此句「つまよぶ雉子のうろたへて啼」と作りたるを、先師曰。去來、汝いまだ句の姿をしらずや。同じ事も斯いへば姿ありとて直し給へるなり。支考が風姿といへるもこれ也。風情といひきたるを、支考は風姿風情と二つにわけて教らるゝ。尤さとし安し。

去來曰。句に語路といふものあり。句はしりの事也。語路は盤上を玉のはしるがごとく、滯なきをよしとす。又青柳の風に亂るゝがごとく、便を取たるもおもしろからん。溝川に泥土のながるゝやうに行あたり〱、なづみたるはわろし。其外卷中一句二句は曲をなせるもあるべし。夫とても語路の滯たるは嫌ふ也。

先師曰。發句は昔より様々替り侍れど、句は三變にとゞまれり。むかしは附物(つけもの)を專とす。中頃は心附(こゝろづけ)を專とす。今は移り・響(ひゞき)・にほひ・位を以て附るをよしとす。

牡年曰。いかなるを響・匂ひ・移りといへるにや。

去來曰。支考等あらましを書出せり。(支考等云々は竄入ならん)是を手にとりたるごとくにはいひがたし。いま先師の評をあけてさとさん。他はおしてしらるべし。

　赤人の名はつかれけりはつ霞　史邦
　　鳥もさへづる合點なるべし　去來

先師曰。うつりといひ、匂ひといひ、實は去年中三十棒をうけられたるしるしなりと悦び給ひけり。爰におもへば、匂ひといふも、移といふも、わづかに句作のあやにして、のると乗らぬとの境なれば、

冷暖自知の時ならでは悟し明らむる事あるまじ。此句もし「赤人の名もおもしろや」とあらば、「鳥も囀るけしきなりけり」とも作るべきを、「名はつかれたり」といへるより、「合點なるべし」と相うつり行くところ、味ひ見らるべし。響はうてばひゞくがごし。たとへば

くれ緣に銀かはらけを打くだき
身細き太刀のそるかたを見よ
（此附句は前後せり。錯簡ならん。）

先師、此句を引て敎るとて、右の手にて土器を打つけ、左の手にて太刀にそりかくる眞似をして語り給ける。一句〳〵に趣のかはる事なれば、言語に盡しがたきところ看破せらるべし。

杜年曰。句の位とはいかなる事にや。去來曰。前句の位を知て附る事なり。たとへよき句ありとも、位應ぜざればのらず。先師の戀の句をあげて語る。

上置の干菜きざむもうはのそら
馬に出ぬ日は内でこひする

前句は人の妻にもあらず、武家町人の下女にもあらず、宿屋問屋の下女なりと見て、位を定めたるもの也。

細き目に花見る人の頰はれて
なたね色なる袖の輪ちがひ

前句古代の人のありさまなり。

白粉をぬれども下地くろい顏
役者もやうの袖のたきもの

前句のさま、今やうの女と見ゆ。

尼になるべき宵のきぬ〴〵
月影に鐺とやらん見すかして

前句いかにも可ㇾ然ものゝふの妻と見ゆ。

ふすまつかんで洗ふあぶら手
懸乞に戀のこゝろを持せばや

前句町家のこしもとなどいふべきか、是をもて他はなずらへてしらるべし。

杜年曰。面影にて附ると云はいかゞ。去來曰。うつり・ひゞき・匂ひは附樣の鹽梅也。おもかげは附やうの事也。むかしはおほくは其事を直に附たり。それを面影にて附るといふは、

草菴にしばらく居ては打やぶり
いのちうれしき撰集の沙汰

初は、「和歌の奧儀はしらずゆ」と附たり。

先師曰。前を西行能因などの境界と見たるがよし。されど直に西行と附けんは手づゝならむ。たゞ面影にて附べしとてかく直し給ひぬ。いかさま西行能因の面影ならむとなり。又人を定ていふのみにもあらず。たとへば、

發心のはじめにこゆるすゞか山　猿みの　はせを
內藏の頭かと呼聲はたれ　乙州

先師曰。いかさま誰そがおもかげならんとなり。面影の事支考も書置たり。參考せらるべし。

支考曰。附句は一句に一句也。前句附な

どはいくつも有べし。連俳にいたりては、其場其人其時節等、前後の見合ありて、一句に多はなき物也。

去來曰。附句は一句に千万也。故に俳諧變化極なし。支考が一句に一句といへるは、附る場の事なるべし。附る場は多くなき物也。句は一場の内にもいくつも有べし。

先師曰。氣色はいかほどつゞけてもよし。天象、地形、人事、草木、魚虫、鳥獸のあそべる其形容みな〳〵氣色也。

支考曰。附句は附る物なり。今の俳諧はつかざるをよしとす。先師の句、一句もつかざるはなし。

去來曰。附句は附ざれば附句にあらず、附過るは病なり。今の作者、附る事を初心の業の様におぼえて、かつて附ざる句多し。聞人も又聞得ずと人のいはむ事を耻て、附ざる句を咎めず、却てよく附たる句を笑ふやから多し。我が聞るとは格別なり。

去來曰。附物にてつけ、又心附にて附るは、其附たる道筋しれり。附物をはなれ、情をひかず附んには、前句のうつり、匂ひ、響なくしては、いづれの處にてか附んや。心得べき事也。

去來曰。蕉門の附句は前句の情を引來るを嫌ふ。たゞ前句は是いかなる場、いかなる人と、其事其位をよく見定め、前句をつきはなして附べし。

先師曰、附物にて附る事、當時好ずといへども、附物にて附がたからむを、さつぱりと附物にて付たらむは又手柄なるべし。

宇鹿曰。先師、十七の附かた路通に傳授し侍るや。去來曰。遠境の門人の願に依て、附方を書出し給ふ。されど、後〳〵はせをが附方は、是にかぎりたりと人の迷ひとならんとこれを捨られしと也。其書出し給ふ分十七ヶ條とやらん聞えたり。是を傳受したまふ事をしらず。大津にての事とやらむなれば、路通もし其反古を拾ひとりて人に敎るにや。許六曰。此事をねがひたるは千那法師なり。

去來曰。附句は何事なくさら〳〵と聞ゆるをよしとす。卷をよむに思案工夫して附句を聞むは苦しき事也。

去來曰。風は千變万化すといふとも、句体は「新き「淸き「輕き「慥に「正き「厚き「閑なる「和なる「剛き「解たる「なつかしき「速なる、如レ此はよし。「鈍き「濁り「弱き「重き「薄き「澁たる「しだるき「堅き「騷しき「古き、かくのごきは悪し。但し「堅き句と「にぶき句には善惡あるべし。

支考曰。附句は句に新古なし。附る場に新古あり。

去來曰。古風の句を用るにも場によりて

よし。されど古風のまゝにはいかゞ、古体のうちに今やう有べし。

先師曰。一巻表より名残迄一躰ならんは見ぐるしかるべし。去來曰。一巻、面は無事に作るべし。初折の裏よりなごり表まてに、物數寄も曲も有べし。半より名残の裏にかけては、さら〳〵と骨折ぬやうに作るべし。末に至ては互に退屈いできたれる物也。猶よき句あらんとすれば、却て句しぶりて不出來になるものなり。されど末〳〵まで吟席いさみありて、好き句出來らんを無理に止るにはあらず。好句を思ふべからずといふ事也。

其角曰。一巻に我句九句十句有とも一二句も好句あらばよし。殘らず好句をせんとおもふは、却て不出來なるものなり。いまだ好句なからむうちは、隨分好句を思ふべし。

去來曰。附物にて附る事當時嫌ひ侍れど、其あたりを見合一巻に一句二句あらんは又風流なるべし。

浪化曰。今の誹諧、物語等を用ゆる事いかゞ。去來曰。同じくは一巻に一二句あらまほし。猿蓑の中に、「待人いりし小御門の鎰　も門守の翁なり。此集撰む時、物がたり等の句すくなしとて、粽結ふの句を作して入給へり。

去來曰。凡吟ある時は風あり、風は必變ず、是自然の事也。先師是をよく見取て、一風に長くとゞまるまじき事を示し給へり。たとひ先師の風なりとも、一風になづんで變化をしらざるは、却て先師のこゝろにたがへり。

杜年曰。發句の善惡はいかに。去來曰。發句は人のもつともと感ずるがよし。さもあるべしと云は其次也。さも有べきやといふは又其次也。さはあらじといふは下也。

杜年曰。發句と附句の境はいかに。去來曰。七情万景こゝろに留る處に發句あり。附句は常なり。たとへば、鶯の梅にとまりて啼といふは發句にならず、鶯の身を逆に啼といふは發句也。杜年曰。心に留る所は皆發句なるべきか。去來曰。此うち發句になると、成らぬとあり。たとへば

　　つき出すや樋のつまりのひきかへる　好春

此句を先師の古池の蛙と同じやうにおもへるとなん。事めづらしく等類なし。さぞ心にもとゞまり興もあらむ。されど發句にはなしがたし。

野明曰。句のさびはいかなる物にや。去來曰。さびは句の色也。閑寂なる句をいふにあらず。たとへば、老人の甲冑を帶し戰場に働き、錦繡をかざり御宴に侍りても、老の姿有がごとし。賑かなる句にも、靜なる句にも有ものなり。たとへば、

　　花守や白きかしらをつきあはせ

先師曰。さび色よくあらはれたり。
野明曰。句の位とはいかなるものにや。
去來曰。これも又一句をあぐ。
　卯の花のたえ間たゝかむ闇の門
先師曰。句の位尋常ならずとなり。去來
曰。畢竟句位は格の高きにあり。句中に
理屈をいひ、或は物をたくらべ、或はあ
たり合たる發句は位くだるもの也。
野明曰。句のしをり、細みとはいかなる
ものにや。去來曰。しをりは哀なる句に
あらず。細みはたよりなき句にあらず。
しをりは句の姿にあり、細みは句のこゝ
ろにあり。是も證句をあけていはゞ、
　十團子も小粒にならぬ秋の風
先師曰。此句しをりあり。
　鳥どもも寐入てゐるか余吾の海
先師曰。此句細みありと評し給ひしと也。
去來曰。惣じてさび・位・細み・しをりの事
は以心傳心なれば、唯先師の評をあけて

致るのみ、他はおして明むべし。先師遷
化の年、深川を出給ふとき、野坡問曰。は
いかいやはり今のごく作し侍らむや。先
師曰。しばらく今の風なるべし。五七年
も過はべらば又一變あらむとなり。
今年素堂子、洛の人に傳へて曰。蕉翁の遺
風天下に滿て漸又變ずべき時いたれり。
吾子こゝろざしを同じうして、我と吟會
して、一ッの新風を興行せんとなり。去
來答云。先生の言かたじけなく悦び侍る。
予も兼て此思ひなきにもあらず。幸に先
生をうしろだてとし、二三の新風を起さ
は、おそらくは一度天下の俳人をおどろ
かせん。しかれども、世波・老の波、日ゝ
にうちかさなり、今は風雅に遊ぶべきい
とまもなければ、唯御殘多おもひ侍るの
みと申。素堂子は先師の古友にして博覽
賢才の人なり。元より世に俳名高し。近

來此道うちすて給ふといへども、又いか
なる風流を吐出されんものをと、いと本
意なき事なり。

三冊子

三冊子序

天地人の三才より、和歌に三鳥の名にたちて、連誹に三物の祝ひ、ともめでたき御代のためしなれば、三都はいふもさらにして、いかなる鄙のすみかにも、家三ッあれば風人なきといふ事なし。されば、此三草紙も伊賀の土芳叟が随聞記なるを、翁滅後三十年はいさしらず、牛三十年は忘れ水の別名のごとく、後三十年は蠹のために朽ぬ。ちか頃たま〳〵此書を得る輩は、玉のごとくこがねのごとく、函底にかくすのみにして、道の爲にはならざりければ、今年梓にちりばむるに、もとより乙文の才なければ、五車韵瑞のほまれもなく、鄰隆が腹中にもあらざれば、日に曬(さらす)のたかぶりもなし。筆をとるにいとものうければ、三伏の夏すぎ、初秋の凉しき頃、おもむき而已(のみ)をかく述るものなりけらし。

安永五丙申　　牛化房

闌　更

しろさうし

俳諧は歌也。歌は天地開闢の時より有。陰神、陽神磤馭盧島に天下りて、まづめがみ、喜哉遇㆓可美少男㆒との給ふ。陽神は、喜哉遇㆓可美少女㆒ととなへ給へり。是は歌としもなけれども、心に思ふ事詞に出る所則歌也。故に是を歌の始とすると也。神代には文字定まらず、人の世と成てすさのをの尊よりぞ三十一字となれる。

　八雲たつ出雲八重垣つまごめに
　　やへがきつくるその八重垣を

此歌より定れると也。和國の風なれば和歌と云。和歌に連歌あり。俳諧あり。連歌は白川の法皇の御代に連歌の名有。此號の先は續歌と云。其句の數もさだまらず。日本武尊、東夷せいばつの下向、吾妻の筑波（甲斐の酒折宮也）にて、

　新はりつくばをこへて幾夜かへぬる

と仰られければ、

　かゞなべて夜には九夜日には十日よ（を）

と、火燈しの童の次侍る。是連歌の起とすといへり。業平いせの國かり（狩）の使の時に、齋宮、歩行人のわたれどぬれぬえにしあれば　と云上に、又逢坂の關は越なん　その盃の皿のついまつ（續松）のすみして、歌の末を書付とあり。

後鳥羽の院時、禪阿彌法師小林と云、連歌差合其外の句法式の書作れり。是本式なり。聯句法立也。是より新式あり。俳諧と云は黄門定家卿の云、利口也。物をあざむきたる心なるべし。心なきものに心を付、物いはぬものに物いはせ、利口したる躰也。

韻學大成に、鄭綮詩語多㆓俳諧㆒。俳は戯也、諧は和也。唐にたはむれて作れる詩を俳諧と云。又滑稽と云有。滑稽は管仲楚人答る也。本朝に一休和尚あり。是等は人に相當る答の辨の上にありて、いはゆる利口也。古今集にざれ歌を俳諧歌と定む。是になぞらへて連歌のたゞことを、世に俳諧の連歌といふ。

夫俳諧といふ事はじまりて、代々利口のみにたはむれ、先達終に誠を知らず。中頃難波の梅翁、自由をふるひて、世上に廣しといへども、中分いか（以下カ）にして、いまだ詞を以てかしこき名也。しかるに亡師芭蕉翁、此道に出て三十余年、俳諧初て實を得たり。師の俳諧は名むかしの名にしてむかしの俳諧に非ず。誠の俳諧也。されば俳諧の名有て其物に誠無が如く、代々むなしく押移る事いかにぞや。師も此道に古人なしと云り。又故人の筋を見れば求るにやすし。今おもふ處

の境も、此後何もの出て是を見ん。我是たゞ来者を恐ると返〳〵詞有。むかしより詩歌に名ある人多し。皆その誠より出て誠をたどるなり。我師は誠なきものに誠を備へ、永く世の先達となる。誠に代〻久しく過て此時俳諧に誠を得る事、天正に此人の腹（出カ）を待る也。師はいかなる人ぞ。連俳直一也。心詞共に連歌有。俳諧有。心は連俳に渡れども、詞は連俳別て、むかしより沙汰仕をける事共有。俳無言と云書に、聲に云詞都而俳言也。連歌に出る聲のものあれども俳言の方也。屏風、几帳、拍子、律の調子、例ならぬ、胡蝶など云類也。千句連歌に出る鬼女龍虎その外千句のものゝ詞俳言也。連歌に嫌ふ詞の櫻木、飛梅、雲の峯、霧雨、小雨、門出、浦人、賤女などの詞、無言抄にも紹巴の聞書等にも數多みえ侍る。か様の類みな俳言也。

名にめでゝおれるばかりぞ女郎花
　　我落にきと人にかたるな

此歌僧正遍昭さが野の落馬の時よめる也。俳諧の手本なり。詞いやしからず、心ざれたるを上句とし、詞いやしう、心のざれざるを下の句とする也。先師のいはく。いにしへの俳諧歌雑躰あまたなれども、まめやかに思ひ入たる躰、

おもふてふ人の心のくまごとに
　　立かくれッゝ見るよしもがな
冬ながらはるの隣のちかければ
　　なか垣よりぞ花は咲ける

又いはく。春雨の柳は全躰連歌也。田にし取鳥は全く俳諧也。五月雨に鳰の浮巣を見に行くといふ句は、詞にはいかいなし。浮巣を見にゆかんと云所俳也。又、霜月や鴻（鶴）のつく〳〵双居て　と云發句に、冬の朝日のあはれ也けり　といふ脇は、心詞ともに俳なし。ほ句をうけて一首のごく仕なしたる處俳諧なり。詞に有んに有。其外この句の類作意に有信所。一筋に思ふべからずと也。

詩歌連俳はともに風雅也。上三のものは餘す所も（有カ）、その餘す所迄俳はいたらずと云所なし。花に鳴鶯も、餅に糞する椽先と、まだ正月もおかしきこの頃を見とめ、又水に住む蛙も、古池にとび込水の音といひはなして、草にあれたる中より蛙のはいる響に、俳諧を聞付たり。見るに有。聞に有。作者感るや句と成る所は、則俳諧の誠也。

俳諧の式の事は連歌の式より習て、先達の沙汰しける也。連歌に新式有。追加ともに二條良基攝政作レ之。今案は一條禪閤の作。この三ッを一部としたるは肖柏の作と也。連に三と數ある物は四とし、七句去ものは五句となし、万俳諧なれば事をやすく沙汰しけると也。今案の追加

に漢和の法有。是を大様俳諧の法とむかしよりする也。貞德の差合の書その外その書世に多し。その事をとへば、師信用しがたしと云り。その中に俳無言といふ有。大様よろしと云り。差合の事もなくては調(ととのへ)がたし。師の門にその一書あれかしといへば、甚つゝむ（つゝしむカ）所也。法を置と云事は重き所也。されども花のもとなどいはるゝ名あれば、其法たてずしては其名の詮なし。代々あまた出侍れど、人用ひざれば何ｿが爲ぞや。法を出して私に是を守れとは耻かしき所也。差合の事は時宜にもよるべし。先は大かたにして宜と也。たゞこゝろざしある門弟は、直に談じて信用して書留るもの、密にわが門の法ともなさばなすべし。

戀の事を先師云々。むかしより二句結ざれば不用也。むかしの句は戀の詞を兼而集メ置、その詞をつゞり句となして、心の戀の誠を思はざる也。いま思ふ所は戀別而大切の事也。なすにやすからず。そのかみ宗砌宗祇の頃迄、一句にて止事例なきにもあらず。此後所々門人とも談じて、一句にても置べき事もあらんかと也。又ある時云々。前句戀とも戀ならずとも片付がたき句ある時は、必戀の句を付て、前句ともに戀になすべしと也。是には此句のみにて、つゞいて戀にも及べからず。新式にも此沙汰あるよし也。然れども戀の事は分て其座の宗匠に任すべしと也。

旅の事、ある俳書に師の曰。連歌に旅の句三句つゞき、二句にてするよし。多くゆるすは神祇釋教戀無常の句、旅にてはなるゝ所多し。今旅戀、難所にして、又一ふし此所にある。旅躰の句はたとひ田舎にてするとも、心を都にして、相坂を越へ、淀の川舟にのる心持、都の便(たより)求る心など本意とすべしとは連の教也とあり。又旅、東海道の一筋もしらぬ人、風雅に覺束なしとも云へりと有。

本歌を用る事、新式に云々。新古今已來の作者を用べからずと也。八代集は古今、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載、新古今是也。後土御門依レ勅、新勅撰續後撰二代を加へて十代集を本歌に取る。又堀川兩度の作者迄の歌は、十代の外の集たりとも、たとひ集にいらぬ歌也とも、作者の吟味有レ之かと云也。

又新式にいはく。人のあまねくしらざる歌をば、付合に是を好むべからず。事により證歌には引用ゆべしと也。

本歌と證歌と差別あり。本歌取といふは古歌の詞を取合て付るをいふ。證歌とは聊違有。或は一句餘情、又名所續合たる物を付るをいふ也。證歌はいづれの集にても可有事也。

輪廻の事、新式に薫(タキモノ)といふ句にこがるゝ

と付て、また紅葉を付べからず。舟にて付べし。こがるゝといふ字かはる故也。夢といふ句に面影と付て、月花を付る事、面影ものと云て近代不付之、更無其理。曾以不嫌之。又たとへば花といふ句に、風とも霞とも付て、又不可付也。數句をへだつといふとも、一座に可嫌之。他准之。又竹と云句に世と付て、又竹出る時夜の字不付也。如此の類、遠輪廻也。あらしと云に山と付、次に富士など付ば、取なして打越へ歸るなり。是を嫌。他准之。一巻の内似たる句嫌之なり。是遠輪廻也。

等類の事おろそかにすべからず。師のいはく。他の句より先我が句に我が句等類する事をしらぬもの也。よく思ひ別て味べし。若わが句に障る他の句ある時は、必わが句を引べし。趣向に表と裏の事あり。句にもよるべしとは言ながら、大様のがして等類になさず取べし。ふるき連歌に、思はぬ方にちらす玉章　と云前句に、山風や枝なき花を送るらん　と有。この句山風の枝なき花を送るこそ全ちりたる躰、前句同意の連歌と沙汰しけるよし有。又いはく、

都をば霞とともに出しかど
秋風ぞふく白河のせき

都にはまだ青葉にて見しかども
もみぢちりしく白川の關

此歌の事、師のいはく。いにしへより色をわかちたる作意によりて、等類のがれたると云來る也。さもあるべし。今師の思ふ所、後のうた、卯月頃都を出て十月に及び白川に至り、紅葉のちり敷たるを見て、前の能因法師の歌を思ひ出し、彌その歌の妙所を感德(得)したり、と云心より詠る歌なるべし。是にて等類よくのがるゝと云り。

切字の事師のいはく。むかしより用ひ來る文字ども用べし。連俳の書に委くある事也。切字なくてはほ句の姿にあらず、付句の躰也。切字を加へても付句の姿ある句あり。誠に切たる句にあらず。又切字なくても切る句有。其分別切字の第一也。その位は自然としらざればしりがたし。猶口傳あり。師常に道を大切にして示されし也。あこくその心はしらず梅の花　と云句をして切字を入る事を案じられし傍にありて、此句は切字なくて切るやうに侍ると云ば、切る也。されども切字はたしかに入たる(が脱カ)よし。初心の人の道のまどひに成てあしゝ。つねにつゝしむべし。ましてさせる事もなき句は、句を思ひやむとも、常にたしなむべしと示されし也。

文章の事、師のいはく。惣名を文章といふ也。序に由序來序內序といふ三躰あり。

由は起るよしを書、來は是より先の事を書、內はその書の內の事を書也。此三躰をひとつにして序一ッにも書る也。跋はふみとゞまる也。序あつて跋あり。序も跋もその云所同じ。跋は序を猶委しく云たる物也。ふみとまりて委しくするの心也。序跋ともに年號月を書。五字七字書は長歌の格也。七五三などゝ地の詞亂に書。あるひは對ある時は必對を置く。古事を置時は古事の對、野山水邊生類等おの〳〵對、同前也。詞書その書樣和にならひなし。漢には其綾もある事と也。記は其物を記すの心也。格は序跋に同じ。意の迹のみ。銘は前に同じ。意の迹のみ。贊はほむるの心也。卽山吹に句をする時は山吹をほめて贊也、山吹を褒美の義理也。惣文章に書時、四五字〳〵に書、大かたの格也。

句合判の事、衆議（議）判と云は、連中の打寄評儀（議）批判するを云也。蛙合は衆議判の格也。別に判者もしかとなし。ほん判といふ時は、判者奥に跋にても又序にても書なり。句引までも付る也。歌に歌合有。卽座の判、兼而の判もあり。卽座の判は左右に文臺を立て判者あり。難陳(ナンチン)あつて判者是を聞。それにもかゝはらず判を書也。卷頭は多くは持のもの也。

懷紙の事は百韻本式也。五十韻歌仙みな略の物也。連歌の古式は表十句、名殘の裏六句、月七句去、花裏表に一本宛、表の內名所必一有。今も淸水連歌は此如しとなり。師のいはく。古法表十句の例を守て、八句の後二句過る迄、表に嫌ふものゝ類連歌に今にせず、俳にはくるしからず。連歌に龍虎鬼女さし出たる類、表の內嫌。俳諧にも鬼女はなりがたし。龍虎はくるしからず。その外人を殺す切るしばるなどの類は用捨すべし。百韻一所に過べからずと師の云也。又戀の詞述懷の類祝言に云たる句は表の內いかゞ侍らんとたづねる時、師のいはく。句によるべし。文字はくるしからず。祝言にいひなすとても、人のうへに云(いへ)ばいよ〳〵述懷也。「花のさびしき」の類はくるしからず。「崩(くづ)し壁に下(さが)る夕顏」などゝ至の貧家を移す句は用捨すべし。他人の句はとがむまじと也。又戀無常其外嫌ふ古事本祝（說カ）を下心にして表にあらはさず。又他物のうへにかり用ひたるなどの句の類いかゞ侍らんと云ば、師のいはく。大形は表に嫌ふべし。事にもよるべき事ながらいづれとても心嫌也。詞に出さずして心の下に嫌ふ事を持たるは作者淸からず。心きたなし。一向にうち出て云たるかた然るべし。されども表の躰にあらざれば常にくるしからず、うち出せといふにはあらずと云り。又古今の人の名、表に出す事

いかゞ侍らんとたづねしに、師の云。今の人の名はつゝしむべし。古人の名は物によりてくるしかるまじ。されども好がたし。心嫌也と云り。懐紙に戀をなくていかゞしく、むかしより沙汰し來る。なくてかなはざる事か。好む心はいかゞにと云ば。此事は知(至カ)て大切の事也。懐紙に戀を目立る事、神代より日本はじまるの例也。戀なくては詮なき事也。つゝしむべしと也。

師のいはく。たとへば歌仙は三十六歩也。一歩もあとに歸る心なし。行にしたがひ心の改(あらたまる)は、たゞ先へ行心なれば也。

發句の事は一座、巻の頭なれば初心の遠慮すべし。八雲御抄にも其沙汰有。句姿も高く位よろしきをすべしとむかしより云侍る。先師は懐紙のほ句かろきを好れし也。時代にもよるべき事にや侍らん。又古來より新宅の會に「燃る」「焼」など火の噂、追悼に「くらき道」「迷ふ」「罪」「とが」、船中に「歸る」「しづむ」「浪風」等の類いむべき心遣ひと也。五躰不具の噂、一座に差合事思ひめぐらすべし。ほ句のみに不レ限其心得あるべし。

脇は亭主のなす事むかしより云。しかれども首尾にもよるべし。客ほ句とて、むかしは必客より挨拶第一にほ句をなす。脇も答るごとくにうけて挨拶を付侍る也。師のいはく。脇、亭主の句を云る所即挨拶也。雪月花の事のみ云たる句にても、あいさつの心也との教也。ほ句に三月に渡る景物出る時は、わきにて當季を定むべし。是は連歌の習也。俳にも其心遣ひ也。師のいはく。ほ句に神祇釋教其外一事ある時は應じて脇すべし。たとへ詞に出さずとも心にはあるべし。但水祝などの季一通りにして云句は、脇に戀なくてもあるべし。たゞほ句に依べし。「對付」「違付」「うち添」「頃留」の類むかしより云習所也。師云。第一ほ句をうけて、つりあひ専に、うち添て付るよし。句中に作を好む事あるべし。留りは文字すはり宜すべし。「かな留メ」自然にある心得、口決あり。第一應對合体の心とおもふべし。作者心得べきは、先ほ句出ると、よく聞しめ、させる事見えずとも、作者より句意をあらはすやうに挨拶して、よく聞ふせて脇すべし。心とゞかざれば、無禮にして無下成事也。たとへば連歌のほ句は聯句の唱句也。脇は對也。此格を以て「文字留」也。詩聯句に習て韵といふ也。

第三は師の曰。大付にても轉じて長高くすべしとなり。或書に、留りの事むかし沙汰なし。宗祇よりの格式也。常用る涵りなり。疑の切字のほ句の時は、第三「はね字」にとめずと古來云り。うたがひの

句二句去故也。「覽」はうたがひのはね字なり。句中に押へ字あり。「や」「か」「いつ」「何」などの類也。又句によりて押字なくてはねるあり。一字はね也。「をらん」「ちらん」の類也。「哉留り」のほ句の第三「にて留メ」せずとむかしより云り。是治定の哉故にせずと也。「花のさかり哉」「月の光哉」の類也。「盛りにて」「ひかりにて」といふにかよふ也。先師のいはく。「にて」になる「に留メ」くるしからず。「にて留」は嫌ふべしとなり。「文字留」「手爾葉留」自然にあり。古法口傳有事也。一說古書にあるは、脇の句「韵字留ッ」ゆへ、懷紙に「文字留り」ならばざるやうに留也。若、脇、手爾葉にて留メば第三文字留にて留るとも云り。かくの事は達人に有。常の留をよしとす。是此道の習也。第三は轉ずるを專とすれども脇の句によるべし。「違付」「取なし付」等の句の時は、第三にて轉ずるにおよばざる事なり。ほ句、戀神祇等のものにて脇是に應ずる時、第三に至り必是を轉じ、はなれてすべし。師の說也。

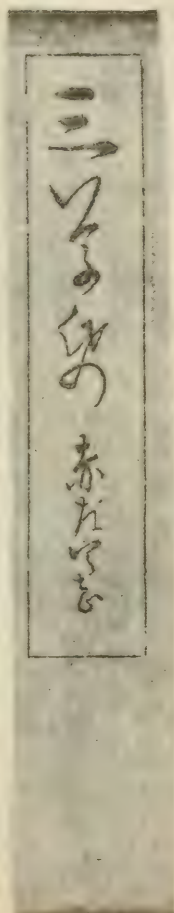
四句めはむかしより四句めぶりなど云て、やすかるきをよしとす。師のいはく。重きは四句目の体にあらず、脇にひとし。句中に作をせずと也。古事本說など嫌ふ事也。春秋の季つゞき、四句目にて花月の句をする事必あるまじとの師說也。

五句め七句めの事、「三て五覽」などゝ古說あり。七句めも同じ心得也。

第三の後一順、上の句を賞とす。中にも月の座は名ある所也。老分に當べし。同字を表に嫌ふも懷紙をたしなむ所也。「て留」「はね字留」は句の一体表道具と也。裏に成て「四春八木」と連歌に古說あり。四句め春をせず、八句めに高うへ(植)物せず。花につかゆる遠慮也。俳諧も其心得也。他の句を返すには不レ及。春出ば花を付べし。是呼出しの花となり。花の前句に秋の字用捨すべし。戀の花はむつかしきわざと連歌に祕して、前句よりつゝしむと也。俳其沙汰なし。

月の定座をこぼす事、師のいはく。五十句より內にはあるべからず。奥に至つては少の興にも成るものなり。歌仙はくるしかるまじ、略の物故也。月の座、月の字有時も差合たる時は異名にてすべし。異名の仕かた人〻の作意にあるべしと師の詞也。又師のいはく。月は上句勝たるべし。落月無月の句つゝしむべし。時によるべし。法にあらずと也。星月夜は秋にて賞の月にはあらず。もしほ句に出る時はす(素)秋にし、他季にて有明などする也。月といふ字に五句隔と新式にあり。師の曰。表に月二ッ稀に有。此時は月數八ッ也。名の裏はまれにも月なしと也。

花の事は、花四本の内下の句は一句ばかり、定座まれにもこぼす事なしと也。賞花の句、前句への付心か。又その一句の心か。實は梅菊牡丹など下心にして仕立、正花になしたる句、その木草にしたがひ季を持たすべきか。或は正月に花を見る、また九月に花咲など云句いかゞと云ば、師の曰。九月に花咲などいふ句は非言也。なき事也。たとへ名木を隱して花と計云とも正花也。花といふは櫻の事ながら、都而春花をいふ是等を正花にせずしては、花の句多く出る。賞輕しと也。宗祇の時代迄百韵花三本也、雨一ッ也。宗長の時にいたり、匂ひの花一本雨一ッ勅許を蒙り度旨奏聞せられて、花四本雨二ッには究り侍る。連歌の式と師の詞也。

裏一順の事も初のごとくかろ〴〵とあるべし。句なみを追ふにも不ゝ及と也。揚句は付ざるよしと古説有。今一句に成て一座興覺る故也。また兼て案じ置とも云り。ほ句主幷に亭主のする所にあらず。初の一順に執筆の句なくば揚句を筆にすべし。ほ句にある文字をつゝしむと也。にほひの花にて春季五句に至るとも揚句に季をはなす（離）べからず。たとへ季六句に及てもすべしと也。いづれの季戀にても揚句此心得なり。句ぶり心得あるべし。

あかさうし

師の風雅に万代不易有。一時の變化あり。この二ッに究り、其本一なり。その一といふは風雅の誠也。不易をしらざれば實に知れるにあらず。不易といふは新古によらず、變化流行にかゝわらず、誠によく立たる姿也。代ゝの歌人の歌を見るに、代ゝその變化あり。又新古にもわたらず、今見る所むかし見しにかはらず、あはれなる歌多し。是先不易と心得べし。また千變万化するものは自然の理なり。變化にうつらざれば風あらたまらず。是に押移らずと云は、一端の流行に口質時を得たる斗にて、その誠をせめざる故也。せめず心をこらさゞるもの、誠の變化を知ると斗（斗字衍カ）云事なし。唯人にあやかりて行のみ也。せむるものはその地

に足をすへがたく、一歩自然に進む理也。行末いく千變万化するとも、誠の變化は皆師の俳諧也。かりにも古人の涎をなむる事なかれ。四時の押移如く物あらたまる。皆かくのごとしとも云り。

師末期の枕に門人此後の風雅をとふ。師の曰。此道のこゝに出て百變百化す。しかれどもその境、眞草行の三ッをはなれず。その三ッが中にいまだ一二をも不ㇾ盡と也。生前折〳〵のたはむれに、俳諧いまだ俵口をとかずとも云出られし事度ゝ也。高くこゝろをさとりて俗に歸るべしとの敎なり。常に風雅の誠をせめたどりて、今なす處俳諧に歸るべしと云也。常(に)風雅にいるものは、思ふ心の色、物となりて、句姿定るものなれば、取物自然にして子細なし。心のいろうるはしからざれば、外に詞をたくむ。是則常に誠を勤ざる心の俗也。誠を勤るといふは、風雅に古人の心を探り、近くは師の心よく知べし。其心をしらざれば、たどるに誠の道なし。その心を知るは、師の詠草の跡を追ひ、よく見知て即我心の筋押直し、爰に趣(赴)て自得するやうにせめる事を、誠を勤るとは云べし。師のおもふ筋に我心をひとつになさずして、私意に師の道をよろこびて、その門を行と心得がほにして、私の道を行事あり。門人よく已を押直すべき所也。松の事は松に習へ竹の事は竹に習へと、師の詞のありしも私意をはなれよといふ事也。この習へといふ所をおのがまゝにとりて終に習はざる也。習へと云は物に入てその微の顯て情感(ず)るや、句となる所也。たとへ物あらはに云出ても、そのものより自然に出る情にあらざれば、物と我二ッになりて、其情誠にいたらず。私意のなす作意也。唯師の心をわりなくさぐれば、そのいろ香我心の匂ひとなり移る也。詮議せざれば探るに又私意あり。せんぎ穿鑿せむるものは、しばらくも私意になるゝ道あり。たゞおこたらずせんぎ穿さくすべし。是を専用の事として、名を地ごしらへと云。風友の中の名目とす。

功者に病あり。師の詞にも俳諧は三尺の童にさせよ、初心の句こそたのもしけれなど、たび〳〵云ひ出れしも、皆功者の病を示されし也。實に入に、氣を養ふと、ころすあり。氣先をころせば、句氣にのらず。先師も俳諧は氣にのせてすべしと有。相槌あしく拍子をそこなふともいへり。氣をそこなひころす事也。又ある時は我が氣をだまして句をしたるよしともいへり。みな氣をすかし生て養の敎也。門人功者にはまりて、たゞ能句せんと私意を立て、分別門に口を閉て案じ草臥る也。おのが習氣をしらず、心のおろ

かゝる所也。多年俳諧好たる人より、外藝に逹したる人、はやく俳諧に入るとも師の云るよし、ある俳書にもみへたり。

師のいはく。學ぶ事はつねに有。席に望て文臺と我と間に髪をいれず。思ふ事速に云出て、爰に至て迷ふ念なし。文臺引おろせば卽反古也、ときびしく示さるゝ詞もあり。或時は大木倒すごとし。鍔本に切込意得。西瓜切る如し。梨子くふ口つき。三十六句皆やり句などゝ、いろいろにせめられ侍るも、皆功者の私意を思ひやぶらせんとの詞也。師の心をよく執行し、つねに勤て事にのぞみて案じころす事なかれ。案ずるばかりにて出る筋にあるべからず。常勤て心の位を得て感るもの、動くやいなや句となるべし。氣をころしては心轉ぜず、則轉る心細くなりては、貫之がいと筋の幽なるものふとく、轉じては傳敎大師の三みやく三の丈夫心不ㇾ成と云事有まじ。皆いきて轉ずるに顯はるゝ筋なるべし。

新みは俳諧の花也。ふるきは花なくて木立ものふりたる心地せらる。亡師常に願にやせ給ふも新みの匂ひ也。その端を見しれる人を悦て、我も人もせめられし所也。せめて流行せざれば新みなし。新みは常にせむるがゆへに、一歩自然にすゝむ地より顯るゝ也。名月に麓の霧や田のくもり　と云は姿不易なり。花かと見えて綿畠　とありしは新み也。

師の曰。乾坤の變は風雅のたね也といへり。静なるものは不變の姿也。動るものは變也。時としてとめざればとゞまらず。止るといふは見とめ聞とむる也。飛花落葉の散亂るも、その中にして見とめ聞とめざればおさまるとなし。その活たる物だに消て跡なし。又句作りに師の詞有。物の見えたるひかり、いまだ心にきえざる中にいひとむべし。又趣向を句のふりに振出すといふ事あり。是その境に入て物のさめざるうちに取て姿を容る敎也。句作になると、するとあり。內をつねに勤て物に應ずれば、その心のいろ句となる。內をつね勤ざるものは、ならざる故に私意にかけてする也。

師のいはく。体格は先優美にして一曲有は上品也。又たくみを取、珍しき物によるはその次也。中品にして多は地句也。師の句をあげて、そのより所をいさゝか顯す。

何の木の花とはしらず匂ひかな

此句は本歌(取)也。西行。何事のおはしますとはしらねどもかたじけなさの涙こぼるゝ　とあるを俤にして云出せる句なるべし。

有明の三十日にちかしもちの音

此句は衆好。有とだに人にしられぬ身の

ほどやみそかにちかき有明の月　とある本歌を余情にしての作なるべし。

　高水に星も旅寐や岩のうへ

此句は小町が、石の上に旅寐をすればいとさむし苔の衣を我にかさなん　と云心を取ての句なるべし。

　ほとゝぎすなくや五尺のあやめぐさ

此句は、ほとゝぎすなくや五月のあやめ草　といふ歌の意を取ての句なるべし。

　花のうへこぐさよみ給ひける古きさくらも、いまだ蚶満寺のしりへに殘りて、影浪を浸せる夕ばへいと涼しければ

　夕ばれやさくらに涼む浪の華

此句は古歌を前書にして、其心を見せる作なるべし。

　ほとゝぎす聲横たふや水の上

此句はさせる事もなけれども、白露横といふ奇文を味合たると也。一たびは聲や横たふとも、一聲の江に横たふやとも句作有。人にも判させて後、江の字抜て水の上とくつろげて、句の匂ひよろしき方定る。水光接レ天白露横レ江の横（字）、句眼なるべしと也。

　廿日あまりの月かすかに、山の根ぎはいとくらく、駒の蹄もたど／＼しくて、落ぬべきあまたゝびなりけるに、數里未だ鷄明ならず。杜牧が早行の殘夢、小夜の中山にておどろく。

　馬に寐て殘夢月遠し茶の煙

此句。古人の詞を前書になして風情を照す也。初は、馬上眠からんとして殘夢殘月茶の煙　と有を、一たび、馬に寐てと初五文字をしかへ、後又句に拍子有てよからずとて、月遠し茶の煙　と直されし也。

　ちる花や鳥もおどろく琴の塵

この（句）。若葉の卷によりて、詞を用ひられし句なるべし。

　粽結ふ片手にはさむ額がみ

此句。去來集撰の時、物がたりの躰と也。先師の方より云送られしは、物がたりの姿も一集にはあるべきものとて送ると也。

　此境はひわたるほどゝいへるもこゝの事にや。

　かたつむり角ふりわけよ須磨明石

此句は須（磨）の卷の詞を前書にしての句なり。

　觀音のいらか見やりつはなの雲

此句の事。或集にキ角云。鐘は上野か淺草か　と聞えし前のとしの吟也。尤病起の眺望成べし。一聯二句の格也。句を呼て句とすとあり。さもあるべし。

　朝貌や晝は錠おろす門の垣

　礒うちて我に聞かせよ坊が妻

　枯枝に烏のとまりけり秋の暮

此句ども字餘り也。字餘りの句作の味ひ

は、その境にいらざればいひがたしと也。かの、人は初瀬の山おろしよ　と有（る）文字餘の事など云出て、なくてなりがたき所を工夫して味ふべしと也。

初雪にうさぎの皮の髭つくれ

此句。山中に子どもと遊びてと前書あり。初雪の興也。ざれたる句は作者によるべし。先は實体也。猶あるべし。

節季候のくれば風雅の師走哉

此句。風雅も師走哉　と俗とひとつに云ひ侍る。是先師の心（脱字あらん）の人の句に藏やけて　と云句有。とぶ蝶の羽音やかまし　といふ句あり。高くいひて甚心俗也。味べし。

早稲の香やわけ入右はありそ海

一おねは時雨るゝ雲か雪の不二

この句。師のいはく。若大國に入て句をいふ時は、その心得あり。都に名ある人かゝの國に行て、くんぜ川とかいふ川にて、ごりふむと云句あり。たとへ佳句とても其信をしらざれば也。有そもその心・遣ひを見るべし。又不二の句も山の姿是程の氣に（氣品カ）もなくては、異山とひとつに成べし。

梅若菜まり子の宿のとろゝ汁

この句。師のいはく。たくみにて云る句にあらず。ふと云てよろしと跡にてしりたる句也。かくのごとくの句は、又せんとは云がたしと也。東武におもむく人に對しての吟也。梅若なと興じて、まり子の宿にはといひはなして當たる一躰なり。

二日にもぬかりはせじな花の春

この句は、元日ひるまでいねてもちくひはづしたりと前書あり。此句の時師の曰。等類氣遣ひなき趣向を得たり。此手爾波は二日にはといふを、にもとは仕たる也。にはといひては、あまり平目に當りて聞なくいやしと也。其角。たびうりにあふうつの山　といふも、あはんといふ所をあふとは云るゝ。喜撰が、人はいふ也の類なるべし。

せりやきや緣輪の田井の薄氷

この句。師のいはく。たゞおもひやりたる句也と也。芹やきに名所なつかしく思ひやりたるなるべし。

御子良子の一本ゆかし梅の華

此句は一とせいせに詣て、老師梅の事をたづねしに、子良の舘のあたりに漸一本ふるき梅あり。その外に會てなしと社人の告けるを、則句としてとあられし也。師のいはく。むかしより此所に連俳の達人多く句をとゞむに、終に此梅のとをしらず、と悦ばしく聞出ける也。風雅の心がけより此事とゞまるを思ひしれば、やすからぬ所也。

とぎ直す鏡も淸し雪の花

梅こひて卯の花拜むなみだ哉

此雪の句は熱田造営の時の唫也。とぎ直すと云て其心をやすく云顯し、其位をよくする。梅は圓覺寺大顚和尚遷化の時の句也。その人を梅に比して、爰に卯の花拝むとの心也。物によりて思ふ心を明す。そのものに位を取。

稲妻を手に取るやみの紙燭かな

この句。師のいはく。門人この道にあやしき所を得たるものにいひて遣す句也となり。そのあやしきをいはんと、取物かくのごとし。万心遣ひして思ふ所を明すべし。

旅人とわが名呼れん初しぐれ

此句は師武江に旅出の日の吟也。心のいさましきを句のふりにふり出して、よばれん初しぐれ　とは云しと也。いさましき心を顯す所、謡のはしを前書にして書のごとく章さして、門人に送られし也。一風情あるもの也。この珍らしき作意に出る師の心の出所を味べし。

何に此師走の市に行烏

此句。師のいはく。五文字のいきごみに有となり。

ほとゝぎす正月は梅の花さかり

此句はほとゝぎすの初夏に、正月に梅咲るとをいひはなして、卯月なるか、ほとゝぎすの聲はと願ふ心をあましたる一体也。

鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の棚

此句。師のいはく。心遣はずと句になるもの自賛にたらずと也。鎌倉を生て出けん初鰹　といふこそ、心のほね折、人のしらぬ所也。又いはく。猿のは白し峯の月　といふは其角也。塩鯛の齒ぐきは我老吟也。下を魚の棚とたゞ言たるも自句也といへり。

春立や新年ふるき米五升

此句。師の曰。似合しやとはじめ五文字あり。口惜事也といへり。其後は、春立や　と直りて短冊にも殘り侍る也。

はせを野分盥に雨を聞夜かな

いざゝらば雪見にころぶところまで

木がらしに身は竹齋に似たるかな

山路來て何やら床しすみれ草

家はみな杖に白髪のはか參り

灌佛や皺手合る珠數の音

此野分。はじめは野分して　と二字餘り也。雪見。はじめはいざゆかんと五文字有。木枯。初は狂句木がらしのと餘して云へり。すみれ草は、初は何となく何やら床しと有。家はみな。一家みなと有。灌佛も初は、ねはん會と聞へし。後なしかへられ侍るか。此類猶あるべし。皆師の心のうごき也。味ふべし。

猪の床にも入るやきり〳〵す

この句。自筆に有。初は、床に來て鼾に入るやきり〳〵す　といふ句あり。なし

かへられ侍るか。

草臥て宿かる頃や藤のはな

此句。始は、ほとゝぎすやどかる頃やと有。後直る也。

風色やしどろに植し庭の萩

此句。ある方の庭を見ての句也。風吹とも一たび有。風色やとも云り。度〻吟じていはく、色といふ字も過たるやうなれども、色といふ方に先すべしと也。

こんにやくにけふはうりかつ若な哉

この句。はじめは蛤になどゝ五文字有。再吟して後こんにやくになり侍ると也。

鞍つぼに小坊主のるや大根引

此句。師のいはく。のるや大根引と、小坊主のよく目に立つ處句作ありとなり。

六月や峯に雲おくあらし山

この句。落柿舎の句也。雲置嵐山といふ句作。骨折たる處といへり。

川風やうす柹着たる夕涼み

此句。すゞみのいひ様、少心得て仕たりと也。

雲雀鳴中の拍子や雉子の聲

此句。ひばりの鳴つゞけたる中に、雉子折〱鳴入るけしきをいひて、長閑なる味をとらんといろ〱して是を究。

からさけも空也の痩も寒の内

この句。師のいはく。心の味を云とらんと、數日はらわたをしぼると也。ほね折たる句と見え侍る也。

蛇くふときけばおそろし雉子の聲

此の句。師のいはく。うつくしき貌かく雉子の蹴爪かな　といふは其角が句也。蛇くふといふは老吟也と也。

木のもとは汁も鱠のさくら哉

この句の時、師のいはく。花見の句のかゝりを少し得て、かるみをしたりと也。

たが聟ぞしだに餅負ふ牛の年

此句は丑の日のとしの歳旦也。此古躰に人のしらぬ悦ありと也。

七夕や秋を定むるはじめの夜

此句。夜のはじめ、はじめの秋、此二に心をとゞめて折〱吟じしらべて、數日の後に、夜のはじめとは究り侍る也。

丈六のかげろふ高し石の上

かげろふに俤つくれ石のうへ

此句。當國大佛の句也。人にも吟じ聞せて、自も再吟有て、丈六の方に定る也。

明ぼのや白魚白きこと一寸

この句。はじめ、雪薄しと五文字あるよし、無念の事也といへり。

とし〴〵や猿にきせたる猿の面

此歳旦。師のいはく。人同じ處に止て、同じ處にをらで落入る事を、悔ていひ捨たるとなり。

牛部屋に蚊の聲くらき殘暑哉

此句。蚊の聲よはし秋の風　と聞へし也。後直りて自筆に、殘暑かな　とあり。

梅が香にのつと日の出る山路哉
なまぐさし小なぎが上の鮠の腸
此二句。ある俳書に、梅は餘寒、鮠の腸は殘暑也。是を二体の趣意といはんと門人のいへば、師、尤とこたへられ侍ると也。
ひやひやと壁をふまへて晝寐哉
是も殘暑と、かの門人いへば、師、宜と也。
秋風の吹ども青し栗のいが
此句。いがの青をおかしとて句にしたる也。吹ども青しと云ふ所にて、句とはなして置たりと也。
馬ほくほく我を繪に見る夏野哉
此句。はじめは、夏馬ほくほく我を繪に見る心かな　と有。後直る也。
金屏に松のふるびや冬籠り
此句。はじめは、山を繪書て冬籠り　也。後直し也。
秋風や桐に動てつたの霜
此句。梢うごく秋の終りや蔦の霜　とはじめは聞侍る。後直りて此秋風也。
團扇とつてあふがん人の後ロむき
此句。集ども、うちわもてと五文字して下の五文字、後むき、せなかつきと有。後改るか。この句盤齋の後むきの像の賛也。
窓形に晝ねのござや簟
此句。淵明をうらやむと前書あり。はじめは、晝寐の臺や　と中の七あり。
一とせに一度つまるゝ若菜哉
此句。その春文通に聞え侍る。その後直にたづね侍れば、師の曰。其頃はよく思ひ侍るが、あまりよからず、うち捨しと也。

旅懐

此秋は何でとしよる雲の鳥
此句。難波にての句也。此日朝より心にこめて、下の五文字に寸々の腸をさかれし也。
明月や座にうつくしき貌もなし
此句。湖水の名月也。名月や兒達双ぶ堂の緣　としていまだならず。名月や海にむかへば七小町　にもあらで、座にうつくしきといふに定る。
蘭の香や蝶の翅に薫す
此句は、ある茶店の片はらに道やすらひしてたゝずみありしを、老翁を見知り侍るにや、内に請じ、家女料紙持出て句を願ふ。其女のいはく。我は此家の遊女なりしを、今はあるじの妻となし侍る也。先のあるじも鶴といふ遊女を妻とし、其頃　難波の宗因此處にわたり給ふを見かけて、句をねがひ請たると也。例おかしき事までいひ出て、しきりにのぞみ侍れば、いなみがたくて、かの難波の老人の句に、葛の葉のおつるの恨夜の霜　とかいふ句を前書にして、この句遣し侍るとの物がたり也。其名をてうといへば、かく

いひ侍ると也。老人の例にまかせて書捨たり。さのこと侍らざればなしがたき事也と云り。

秋もはやはらつく雨に月の形り

此句。はじめは、昨日からちよつ／＼と秋も時雨哉　と句作り有。いかにおもひ給ひ侍るにや、いろ／＼句作りして心見(試)らるゝ反故の筆すさみ有。終に月の形と自筆の物にも殘しをかれ侍る也。

貌に似ぬ發句も出よはつ櫻

此句は下のさくらいろ／＼置かへ侍りて、風與(ふと)初ざくらに當り、是初の字の位よろしとて究る也。

朝露によごれて涼し瓜の泥

此句は、瓜の土　とはじめあり。涼しきといふに活たる所を見て、泥とはなしかへられ侍るか。

人聲や此道かへる秋のくれ

此道や行人なしに秋の暮

此二句。いづれかと人にもいひ侍り。後、行人なしといふ方に究り、所思といふ題をつけて出たり。

清瀧や浪にちり込青松葉

此(句)。はじめは、大井川浪にちりなし夏の月　と有。その女が方にての白菊のちりにまぎらはしとて、なしかへられ侍る也。

桐の木に鶉なくなる塀の内

この句いかゞ聞侍るやとたづねられしに、何とやら一さまある事に思ふよし答へ侍れば、いさゝか思ふ處ありて歩みはじめたると也。

旅に病て夢は枯野をかけ廻る

此句病中の吟にて句の終り也。猶かけ廻る夢心　といふ句作有。いかに思ひ侍るやと人にもいひて、後此句に定ると也。枯尾花に其角がかける、かれ野を廻る夢心　ともせばやといへるとあり。笈日記に、猶かけ廻るとあり。

朝よさを誰松しまの片心

此句は季なし。師の詞にも名所のみ、雑の句にもありたし。季をとりあはせ、歌枕を用ゐ、十七文字にはいさゝか心ざし述がたしといへる事も侍る也。さの心にてこの句もありけるか。猶杖つき坂の句有。

門人の句に、元日や家中の禮は星月夜といふ有。たゞ門松に星月夜と斗する句也。味ふべしと也。

同。松風に新酒を澄す山路哉　といふ句有。山路を夜寒にすべしといへり。その夜の道の戻りに、集などに若出す時は、はじめの山路しかるべしと也。

同。花鳥の雲に急ぐやいかのぼり　といふ句有。(或)人のいへる。この句聞がたし。よく聞ゆる句になし侍れば句おかしからず、いかにといへば、師の曰。いかのぼ

りの句にしてしかるべしと也。聞の事は何とやらおかしき所有を宜とす。此類の事はある事なり。むかしの歌にも、小男鹿のいるのゝ薄初尾花いつしか君がたまくらにせん　と云もその類也。聞とけざれどもあはれなる歌也といひならはしたるとなり。

同。都にはぶり〳〵すらん玉の春　といふ句有。これは玉の字分別あり。かくすも無念なるわざとて、結句いひ顯したる句といへり。

同。ぬしやたれふたり時雨に笠さして　といふ句あり。是は初五理屈也、なしかゆべしと有。後、跡に月とはいかゞと云ば、宜と也。

同。時なる哉柊旅客は笠の端にさゝん　といふ句あり。初の詞過たり。柊をと斗すべしと也。

同。鶯に橘見する羽ぶき哉　といふ句あり。下の五文字、師の手筋よく思ひ知たるはと也。四ッ五器のそろはぬ花見心かな　と云も爰なるべしと也。

同。春風や麦の中行水の音　といふ句あり。景氣の句なり。景色は大事の物也。連歌に景曲といひ、いにしへの宗匠ふかくつゝしみ、一代一兩句に不レ過、初心まねよき故にいましめたり。俳には連歌ほどにはいまず。惣而景氣の句はふるびやすしとて、つよくいましめ有也。此春風。景曲第一也とて、かげろふいさむ花の糸口　といふ脇して送られ侍ると也。歌に景曲は見樣躰に屬すと定家卿もの給ふと也。寂蓮の急雨、定頼卿の宇治の網代木、是見樣躰の歌とある俳書にあり。

師の曰。俳諧之連歌といふは、よく付といふ字意也。心敬僧都の私語にも、前句に心のかよはざるは、たゞむなしき人の、いつくしくさうぞきてならびゐたるなるべしと、ある俳書ニ有。又付の事は千變万化すといへども、せんずる所只俤と思ひなし、景氣此三に究り侍るよし、師のいへるとも有。又ある時師の詞に、躰はさま〳〵有といへども、世上二三躰に過ず。今思ふ所十二躰には見へ侍る也。物にも書留んや。此後こゝに究め侍るやうに人こゝに留らんか。しかれば書留るにもいたらずとて事やみ侍る也。師の曰。付といふ筋は、匂、響、俤、移り、推量などゝ形なきより起る所也。こゝろ通ぜざれば及がたき所なり。師の句を以て其筋のあらましをいはゞ、

あれ〳〵て末は海行野分かな
鶴のかしらをあぐる粟の穗

鶯の羽もかいつくろはぬ初しぐれ
一吹風の木の葉しづまる

此脇ニは、前後付一躰の句也。鶴の句は、野分冷じくあれ、漸おさまりて後をいふ

句なり。靜なる体を脇とす。木のはの句はほ句の前をいふ句也。脇に一あらし落葉を亂し、納りて後の嶌のけしきと見込て、發句の前の事をいふ也。ともにけしき句也。

寒菊の隣もありやいけ大根
冬さし籠る北窓の煤

此脇、同じ家の事を直に付たる也。內と外の樣子也。煤の字有て句とす。

しるべして見せばやみのゝ田植うた
笠あらためん不破の五月雨

此脇、名所を以て付たる句也。心は不破を越る風流を句としたる也。

秋の暮行先〳〵の苫屋かな
荻にねようか萩に寐ようか

此脇、發句の心の末を直に付たる句なり。

菜種干ス莚の端や夕涼み
螢迯行あぢさいのはな

此脇、發句の位を見しめて事もなく付る句也。同前裁共あたりの似合敷物を寄。

霜寒き旅寐に蚊屋を着せ申
古人かやうの夜の木がらし

此脇、風のさびしき夜、古へかやうの夜あるべしといふ句也。付心はその旅寐心高く見て、心を以て付たる句也。

おくそこもなくて冬木の梢哉
小春に首の動くみのむし

この脇、あたゝかなる日のみの虫なり。あるじの貌に客悅のいろを見せたるはたらきを付たる句也。

市中は物の匂ひや夏の月
あつし〳〵と門〻の聲

此脇、匂ひや夏の月と有を見込て、極暑を顯して見込の心を照す。

いろ〳〵の名もまぎらはし春の草
うたれて蝶の目をさましぬる

此脇は、まぎらはしといふ心の句に、しきりに蝶のちり亂るゝ樣思ひ入て、けしきを付たる句也。

折〳〵や雨戸にさはる萩の聲
はなす所におらぬ松むし

この脇、發句の位を思ひしめて、句よろしく事もなく付たる句也。

緣の草履の打しめる春
石ふしにおそき小鮎をより分て

此句、氣色を付とす。一句床夏の卷の俤也。うちしめるといふに寄る。

夕貌おもく貧居ひしける
桃の木にせみ啼頃は外に寐ん

一句、付ともに古代にして、其匂ひ萬葉などの俤なり。

笹の葉に徑埋て面白き
頭うつなと門の書付

これ一句隱者の俤也。前句のけしきに其所を寄せ、句意新みあり。

龜山やあらしの山やこの山や
馬上に醉てかゝえられツヽ

前句のやの字響き、ともに醉てそゞろなる躰を付顯す。一句風狂人の俤也。

　野松に蟬の啼立る聲

　歩行荷持手ぶりの人と噺して

前句のなき立る聲といひはなしたるひゞきに、勢ひを思ひ入てうち急ぐ道行人のふり、事なく付たる匂ひ立し。

　青天に有明月の朝ぼらけ

　湖水の秋の比良のはつ霜

前句の初五の響に心を起し、湖水の秋比良の初霜と、淸く冷じく大成る風景を寄。

　僧やゝ寒く寺に歸るか

　猿引の猿と世を經る秋の月

この二句別に立たる格也。人の有樣を一句として、世のありさまを付とす。

　こそ／＼と草鞋を作る月夜さし

　蚤をふるひに起るはつ秋

こそ／＼といふ詞に夜の更て淋しき樣を見込。人一寐迄夜なべするものと思ひ取て、妹など寐覺して起たるさま、別人を立て見込心を、二句の間に顯す也。

　夜着たゝみをく長持のうへ

　灯の影珍しき甲待て

前句の置の字の氣味に、せばき寐所、漸一間の住居、もの取片付て掃淸めたる所と見込、わびしき甲待の躰を付たる也。珍の字ひかりあり。

　酒にはげたる頭なるらん

　双六の目を覗までくれかゝり

氣味の句也。終日双六に長ずる情以て、酒にはげぬべき人の氣味を付たる也。

　そつと覗けば酒の最中

　寐所にたれも寐て居ぬ宵の月

前句のそつとゝいふ所に見込て、宵からねる躰してのしのび酒、覗出したる上戸のおかしき情を付たる句也。

　煤掃の道具大かた取出し

　むかひの人と中直りけり

推量の句也。事せはしき中に取まぜて、かやうの事もある事也とすいりやうして、中直りけりとありさまを付たる也。

　冬空のあれに成たる北颪

　旅の馳走に有明し置

馳走の字さび有。あれに成たると、心のしほりに旅亭のさびを付て寄る也。

　のり出て朧（腕）に餘るはるの駒

　摩耶が高根に雲のかゝれる

まへ句の春駒といさみかけたる心の餘、まやがみねと移りて雲のかゝれるとすゝみかけて、前句にいひかけて付たる句也。

　敵よせ來る村松の聲

　有明のなし打烏帽子着たりけり

前句の事をうけて、其句の勢ひに移りて付たる句也。

　月見よと引起されて恥しき

　髮あふがする羅の露

前句の樣躰の移りを以て付たる也。句は

宮女の躰になしたる也。

　牡丹おり／＼涙こぼるゝ
　耳うとく妹に告たる郭公

心を以て付たる句也。

　あき風の舟をこはがる浪の音
　雁行方や白子若松

前句の心の餘りを取て、氣色に顯し付たる也。

　鼬の聲の棚もとの先
　箒木はまかぬに生て茂るなり

前句に言外に侘たる句ほのかに聞及て、まかぬに茂る箒木と、あれたる宿を付顯す也。

　能登の七尾の冬は住うき
　魚の骨しはぶる迄の老を見て

前句の所に位を見込、さもあるべきと思ひなして人の躰を付たる也。

　中〻に土間にすはれば蚤もなし
　わが名は里のなぶり物也

同じ付樣也。

　抱込て松山廣き有明に
　あふ人毎に魚くさきなり

同じ付也。漁村あるべき地と見込、その所をいはず、人の躰に思ひなして付顯す也。

　四五人通る僧長閑也
　薪過町の子共の稽古能

前句の外通る躰に、内の躰以て付る也。前句の位を思ひなして、奈良の事にはつけなし侍る也。

　頃日の上下の衆の戻らるゝ
　腰に杖さす宿の氣違ひ

前句を氣違ひ狂ひなす詞と取なして付たる也。衆の字ぬからず聞ゆ。

　御局の里下りしては涙ぐみ
　ぬつた宮より物の出し入

さもありつべき事を、直に事もなく付たる句なり。思ひ亂るゝに其わざ、さもあるべきとをいへり。

　隣へもしらさず嫁をつれて來て
　屏風の陰に見ゆる菓子盆

同じ付也。盆の目に立、味ふ事もなくして付たる句也。心の付なし新みあり。

　入込に諏訪の涌湯の夕まぐれ
　中にもせいの高い山ぶし

前句にはまりて付たる句也。其中の事を目に立ていひたる句なり。

　人聲の沖には何を呼やらん
　鼠は舟をきしるあかつき

この句。はじめは、須磨の鼠の舟きしるをと・といひ出られ侍るに、前句の聲といふ字差合て付かへられし句也。暁の字骨折あり。人のいはく。須磨の鼠新きものに侍れども、舟きしるをとゝいひては、下の七大におくれたるかといへり。師聞て、宜といへり。

　榎の木からしの豆がらを吹

寒き爐に住持はひとり柿むきて

此句。はじめは、住持さびしく となして、後淋の字除かれし也。

桐の木高く月さゆる也

門しめてだまつて寐たる面白さ

この事先師のいはく。すみ俵は門しめての一句に腹をすへたり。試に方〻門人にとへば皆、泣事のひそかに出來しあさ芽(チ)生(フ) といふ句によれり。老師の思ふ所に非ずと也。

もらぬほどけふは時雨よ草のやね

火をうつ音に冬のうぐひす

一年の仕事は麥(ムギ)におさまりて

此第三は、みのにての句也。十余句斗吟じかへてのち、是に決せられしと也。

市人にいで是うらん雪の笠

酒の戸たゝく鞭のかれ梅

朝がほに先だつ母衣を引づりて

此第三は門人杜國が句也。此第三せんと人〻さま〴〵いひ出侍るに、師のいはく。此第三の附かたあまたあるべからず。鞭にて酒屋をたゝくといふものは、風狂の詩人ならずばさもあるまじ。枯梅の風流に思ひ入ては、武者の外に此第三あるべからずと也。

歩行ならば杖つき坂を落馬哉

發句の事は行て歸る心の味也。たとへば、山里は万歳おそし梅の花 といふ類なり。山里は萬歳おそしといひはなして、むめは咲るといふ心のごとくに、行て歸るの心、發句也。山里は万歳の遲(し)、といふ斗のひとへは、平句の位なり。先師も發句

角のとがらぬ牛もあるもの

此句は門人土芳が句也。先師此句を風與(ふと)仕たり。季なし。皆脇して見るべしとあり。おの〴〵さま〴〵つけて見侍れども、こゝろにのらずしてふと此句を見せ侍れば、よろしとてその儘取て付られ侍る。

師の心味ふべし。

は取合ものと知るべしと云侍るよし、ある俳書にも侍る也。題の中より出る事はすくなき也。もし出ても大樣ふるしと也。師の云。發句の物、脇の物、第三のもの、平句の物と其位ある事也。ことごとにかく云にはあらず、其位を見知るべしとい

へり。又いはく。季をとり合するに、句のふるびやすき煩有。とありし時も侍る也。門人つねに心得べき詞なり。

又いはく。人の方に行に、發句心に持行事あり。趣向季のとり合障りなき事を考べし。句作りはのこすべし。予句出たるは出る品うるはしからずと也。

としの松、年の何、などゝ近年歳旦に用る事あり。いかゞとたづね侍れば、師のいはく。達人のわざにあらず、論に不レ及と也。去年今年春季也。當年といふ事も季に心をなさば成べしと也。

師のいはく。手のうちに蟬をにぎりて鳴する事を、宜ものと句にしばらくとりなやみ侍る也。古みをとらんとせしと、おそろしきものにあひたるやうに語出られし也。(此一節恐くは錯簡あらん)

手爾葉留の發句の事。けり、や等の云結たるはつねにもすべし。覽、て、に、その外いひ殘たる留りは、一代二三句は過分の事成べし。けり留りは至て詞强し。かりそめにいひ出すにあらず。ふりつみし高根のみゆきとけにけり　といふも至てつよくいひはなして、その響に應じて、淸瀧川の鳴りあがる(五字衍カ)水のしら浪といひかけて、けしきを顯す也。覽とはねべき所を、やといひ捨るもあり。也といふべきを、覽といひてはゞを取事なども古歌などにも多し。皆句作の所なるべしと師の敎也。

師のいはく。下句上句ともに二字三字の間にあり。またその二三字に甚ぬかり落る句あり。骨折べき所也。

師のいはく。持て來る詞といふあり。とに人の名などにある事也とぞ。

師のいはく。素秋の事。せぬ方先よろし。するに習ひなし、時によるべし。

同いはく。花によし野付ぬ事は、しゐて事もなし。たゞ法度のみ也。

同いはく。俳諧は敎てならざる所あり。よく通るにあり。或人のはいかいは曾て通ぜず、たゞ物をかぞへて、覺るやうにして通る物なしと也。師のいはく。或人の句は艶をいはんとするに依て句艶にあらず。艶は艶いふにあらず。又或人の句はしほりなし。しほらんずるが故にしほりなし。又或人の句は作に過て心の直を失ふ也。心の作はよし、詞の作好べからずと也。

又いはく。格は句よりはなるゝ也。はなるゝにならひなし。鳶に鳶を付、隱士の打越に隱士を出す類ィ、爰に至てせん儀(議)なし。一たびはくるしからず、後の隱士は過てあやまち也。必うらやむ所にあらずと也。

發句は門人にも作者あり。附合は老吟のほねといひ給ひける、と或俳書にあり。

句のすがた、さのみかはるにもあらで、人〻の膓をしぼる所、聞ものゝ好、すかざるによりて、言下に心のとく聞なし侍らんは本意なし、と師のいへるよしあり。

師のいはく。わが句ども多くの集に書誤り多し。是をみづから書本とし、門人の志を以て二三句ほどづゝ書添て、所〻の歌仙一折宛、是もいがの門人を初として、志を以て書留むべし。號を笈の小文とせん。又小文と斗やすべき。此號は或方にて能見侍るに、太刀とかいふ謡に此事あり。宜集の名と思ひ留たる也。書號によろしきものなど常に見置べし。拙號はあさましき物也。万に心遣ひ有事也。

師。ある俳諧の時、宵やみといふ句に月成まじ、是を月にすべしとて秋を付出し、八月と云月次を出せり。月秋の堪(場カ)所によひやみ出合たればこそ、ふしぎの働出たり、と俳書に有。

牡丹に芍薬を付る事はあるまじ。是は心の好所にて差合にはあらず。付らるゝ働あらば付て猶よろしかるべし、と師の詞也。万に此類あるべし。門人心得てすべき事也。師のいはく。相似たる句は、集に出す時外に置て、まぎらはしくせざるよし。後猿蓑に師の蕎麦の花の句、猿雖が蕎麦の花、一所にわざと置侍ると也。

付句の心得いろ〱いひ出られし時に、前句を添て、付心の顯るゝ事などなら(しカ)で見るべし、とさま〲句をさせて見侍られし事もあり。

又猿蓑に脇三を三躰に仕わけてなし置たり。心付て見るべしと也。身はぬれ紙のとり所なき　といふ句を云出侍れば、師の曰。是一体新に見へ侍る也。体格は定がたし。心がけて勤るに猶あるべし。又琴三味線の類、句ふるびて世上あつかひかねたり。心見に句して見よ、といろ〱句作りを見られし時もあり。道にすゝむ者の勤る所、かくの事もあるべき示し也。

或二三子俳諧にしほこりて、歌仙二三巻老翁に點を乞ふ。師是をうけず。再三の後その人に對していはく。皆秀作也。しかれども我おもふ所に非ず。しゐてとらんとせば、是彼の内、此二三やり句と捨られし物や取侍らんと也。その人猶思ひやまずして、終に老師の門に入となり。

師の曰。句は天下の人にかなへる事はやすし。一人二人にかなゆる事かたし。人のためになす事に侍らばなしよからん、とたはれの詞なり。

師のいはく。俳諧におもふ所あり。能書の物書るやうに行むとすれば、初心道をそこなふ所ありといへり。いかなる所ぞとゝへども、しか〱ともこたへ給はず。其後句を心得見るに、くつろぎ一位有。

高く位に乘じて自由をふるはんと根ざしたる詞ならんか。末弟の迷ひて道をおろそかにせん事を、なにかに付て心にこめてつゝしみのことば也。

師の曰。其角は同席に連るに、一座の興にいる句をいひ出て、人〻いつとても感ず。師は一座その事なし。後に人のいへる句はある事も有と也。さあるべき事也。云く(云々カ)。座によりて、一座の人にとれて(誘導の意カ)句をそこなふ事あり。門人常に心得べし。其角は生質としてこゝに居らずと也。

又いはく。一とせ對面の始いひ出られ侍るは、俳諧能過たり。棊ならば二三目跡へ戻してすべしと示されし也。面白教也。ある時心見(試)に歌仙一巻四唫して返侍れば、我おもふ所よく見知侍る也。此上いふ所なし。猶秀物は時の仕合、機嫌をうかゞひ、千變万化ロの外より感ずべし。氣變に任すべしと也。諸集のうち聞がたき句あるよしをたづね侍れば、師のいはく。故ある句は格別の事也。さもなくて聞得ざると有は、聞へぬ句と思ふべし。聞えぬ句多しと也。

師、句作り示されし時、腹に戰ものいまだ有と也。感心の趣也。是師の思ふ筋にうとく、私意を作る所也。元を勤ざれば成るといふ事なく、只私意を作る也。工夫して私意やぶる道有べし。

師、ある時士芳にはなしの次手に云。いつにても機嫌をはかり、誠の俳諧してと有。後あるじの云。翁の詞、その誠の俳諧と云事は、いかなる事にかとたづねらる。師の心しらず、思ふに余念なき俳諧の事なるべし。師も氣にのらざれば、餘念なき俳諧はいつぞは〳〵などいはれし也。

師の句にても再三吟じて、猶心得がたくや思はれ侍りけん。その句書付よ、人にも聞かせ見ん、と聞えける事もおり〳〵あり。おろそかならざる所、門人としてわすれまじき所也。

人の句前にて句の趣向いろ〳〵沙汰する事つゝしむ所也。或月次の座にて、其事を門人に示されし事あり。

師のいはく。俳諧を嫌ひ、俳諧をいやしむ人あり。ひとかた有ものゝうへにも、道をしらざる事にはかゝるあやまちもある事也。その品なにゝもせよ。俳諧ならざる事更なし。其人、甚俳諧をして、事をさばき事をたのしむと也。

師の神樂堂と云句を難ずるもの有。師のいはく。俳諧は平話を用ゆ。つねに神樂堂といひならはし侍れば、ふかき事は知らずと也。其後此事をたづねたる人あり。師の曰。唯一の神道には神樂殿、兩部には神樂堂といふ。むづかしくいひ分して

益なし。たゞ俳諧には神楽殿おかしからずと或俳書にあり。季にて戀の句をつゝむと、戀の句にて季の句をつゝむと、むかしは嫌へども今はくるしからずと也。

師のいはく。絶景にむかふ時は、うばはれて不ㇾ叶、物を見て取所を心に留メて不ㇾ消、書寫して靜に句すべし。うばはれぬ心得もある事也。そのおもふ所しきりにして、猶かなはざる時は書うつす也、あぐむべからずと也。師、松島にて句なし。大切の事也。

師のいはく。俳諧の益は俗語を正す也。つねに物をおろそかにすべからず。此事は人のしらぬ所也。大切の所也と傳へられ侍る也。

師のいはく。結び題の發句などの時に、たとへば五句ある時は秀作三句は過る也。當座の題は猶其心得あり。歌の題の事もかやうの事とやら聞へ侍るとなり。

師のいはく。撰集懐紙短尺書習ふべし。書やうはいろ〳〵有べし。たゞさはがしからぬ心遣ひありたしと也。猿みの能筆也。されども今少大也。作者の名大にていやしく見へ侍ると也。

能書の物かけるには、歌の詞・手爾葉など違ふ事必あり。ふしぎに思ふべからず。かなゝどのつゞき、時の拍子、又書ざま見ぐるしき所、書違へたる事多しと也。

師常に我をわすれず、心遣ひあると也。或方にて貴人師を座上に請待せらるゝ事しきり也。師の曰。此所似合の所と落着申也。席過侍れば心しづかならず、俳諧の障に成侍るの間心まゝにと願ふ也。尤の事也。又ある旅行の時、門人二三子伴ひ出られしに、難波のすこしこなたより駕おりて、雨の薦に身をなして入り申さるゝと也。その後此事をとへば、かゝる都の地にては、乞食行脚の身を忘れて成がたしと也。駕をかるに價を人のいふごとくに毎も成し侍る也。

師ある方に客に行て、食の後、蠟燭をはや取べしといへり。夜の更る事眼に見えて心せはしきと也。かく物の見ゆる所、その自心の趣俳諧也。つゞいていはく。いのちも又かくのごとしと也。無常の觀、猶亡師の心なり。

あるとしの旅行、道の記すこし書るよし物がたりあり。是をこひて見むとすれば、師のいはく。さのみ見る所なし。死で後見侍らば、是とても又あはれにて見る所もあるべしと也。感心なる詞也。見ざれどもあはれふかし。

師一とせ岐阜鵜飼見の時、鵜尉(じよう)一人に十二羽宛、舟に篝して、其ひかりにこれを遣ふ。十二筋の繩たて横にもぢれて、さばきむづかしき事を、やすく是をなす。鵜尉に此事を尋ね侍れば、先もぢれぬよ

りさばきて、なまもぢれ成るものを又さばく、むづかしくもぢれたるものひとりほどけ、さばくるといへり。万に此心はあるべしとなり。

ある門人の事をいひて、かれかならず此道にはなれず、取付侍るやうにすべし。たゞ世情はいかいはなくてもあるべし。たゞ世情に和せず人情通ぜざれば人不レ調。ましてよき宜友なくてはなりがたしと也。又いはく。人是非に立る筋多し。今其地にあるべからず、と恨あるべき人の方にも行かよひ、老後には心のさはりもなく見え侍る事あり。

一とせ大和の法隆寺に太子の開帳有。その頃太子の冠見おとし侍るとて、後の開帳に又趣(赴)れし也。かゝる古代のものを心にかけて、旅立れし師の心のほど思ひやるべし。ある禅僧、詩の事をたづねられしに、師の曰。詩の事は隠士素堂といふもの、此道にふかき好ものにて、人も名をしれる也。かれつねに云。詩は隠者の詩、風雅にて宜と云と也。

師のいはく。定家卿五首の秘歌に、こぬ人を入るといふ説あり。この秘といふはたゞ難なき歌を出したる所をいふと也。撰者の身として、すぐれたる歌もおとなしかるまじとの心遣ひ也。難ある歌も猶いかゞ也。この心得を秘といふとなり。能見せしめ也と師もいへるなり。

伊勢が歌のとしをへて花の鏡となる水は、とある此五文字なくても、下ばかりにて歌よく聞へたり。此五文字、年〳〵水清くすみて水のかはらざるに、花のちりかゝるを曇といへる也。五文字紛(粉)骨の歌なりと師のいへる也。

涙川たえずながるゝうき瀬にもうたかた人にあはで消めや　この歌のうたかたはむしろといふ字、何ぞといふ字、一二説あり。義理は何ンぞ也。なんぞ人にあはできへんと也。されども定家卿の云。何ンぞといやしき

義理を結(詰)て見るべからず、いやしき也。うたかたはたゞ水のとにいはんと思ひていへる斗と聞べしと也。亡師も義理を詰るはいやしといへる、おもしろしと也。

古今の序に歌人のうたざまを、おの〳〵難じたるやうに貫之の書なせる也。師のいはく。難じたるにあらず、その人ゝの紛(粉)骨の所を見顕し賞したる所也。喜撰法師の暁の雲の事、我庵はの歌のすへ、人はいふ也とあるあたり也(衍カ)いくたびも可レ味と也。

かさゝぎの歌は、夜をうば玉といふより、かさゝぎの橋と夜るくらき空の事をよめる也。空の事を天のうきはしなど橋にいひたると多し。たゞ夜のくらき空を(云)たる趣向、此うたばかり也。趣向の本所、

かはりたるをほめたる儀也。
濱庇は高眞砂の崩かゝりたるが、ひさしのごくなるとなり。又濱にある家苫屋の類ともいへり。定家卿歌に、後鳥羽の院熊野へ行幸の供奉に新宮へ三首の歌あり。題庭上冬菊といふにて、霜おかぬ南の海のはまびさし久しく殘る秋のしら菊と讀り。此歌は濱家のひさし也。しからねば庭の字落題也。浪間より見ゆるおじまのはまびさし久しくなりぬ君にあひみて 是は久しきといはん枕詞也。序歌也。

清濁。にごるを清は難なし。清ヽを濁るは耻也。かり衣、から衣、この二は淸也。此類皆下を濁る也。旅衣の類也。はしひめ、さよひめ、さ保姬、此三淸て、外は下を濁る也。濁るは二ッ物をつゞくるには必あり。酒も大酒といへば、ざけとにごる類也。濁るは和らぐ道理也。清ヽは陽、濁るは陰也。ヽは陽、すむ也。いは陰、濁る也。數一は陽、二は陰也。

呼子鳥の事。師のいはく。季吟老人に對面の時、御傘に春の夕ぐれ梢高くきて鳴鳥と思ひて句をすべしと有。貞德の心いかにとたづねられしに、老人のいはく。貞德も古今傳受の人とは見えず、全句(誤アルカ)をせざる事也といへるよし、師のはなしあり。

いせの濱荻、蘆にあらず。荻に似たる物にて別也。いせに限也。角組とき葉一卷也。祭主祐親娘、濱荻と名付られしと也。

伊せの海、するがの海、石見の海等、國の名なれども、名所に取る。景をほめていへる故の事也。

春雨はをやみなく、いつまでもふりつゞくやうにする、三月をいふ。二月末よりも用る也。正月二月はじめを春の雨と也。五月を五月雨と云、晴間なきやうに云もの也。六月夕立、七月にもかゝるべし。九月露時雨也。十月時雨。其後を霎みぞれなどいひ來る也。急雨は三四月、七八月の間に有こゝろへ也。

東風、春風也。東風開ㇾ凍と書文有。夏は南風、秋は西風、冬は北風と漢に用る也。和にさのみその沙汰なし。されどもその心遣ひはあるべきか。夏は嵐なきやうにする也。春は少の風も花をいとひて、嵐と和にもいふ也。秋の初風、はつ嵐と云。中秋にはあらき風を野分と云。初冬の風を木がらしと云。末の冬に至ては、嵐は却て似ざるやうに連歌に用る也。

螢。四五月より秋迄も用る。蟬。六月專に暑の甚しき時を用る。秋までもかゝるべし。日ぐらし。せみのやうに鳴て夜もなく。初秋に啼、日中には不ㇾ鳴、曇りにはなく。夕立は夕時分といふにはあらねども、晝より後にあるやうに連歌云。

順の峯入、逆の峯入、とも夏也。むかし紀の國路よりみねに入て是を順といふ。今はよし野路よりいりて是を逆と云。今の峯入は逆也。諸ともの歌、順逆ともに夏故に感ふかしと師の云也。

和歌には、はねる字を、にとよむ也。緣をえにと云、難波(ナンバ)をなにはといひ、蘭(ラン)をらにと云。

心の駒は心のさはがしきを云。ひまの駒、光陰(くわういん)の去やすきをいふなり。心の松は不變の心也、みさほなる心也。待事にもよそへる也。心の杉、是も不變の心也、又直成る心也。しるしの事をも云。

鹿に鹿聞なれす草ふし立とはあるといへり。(此一節恐くは錯簡あらん)

鳴子は田か畑か植物か、結びてする也。

田鶴は水邊か、里ちかく鳴樣にするなり。

朝の月は十七日より廿八日まで也。

貌よ鳥、春されば野べに先なく貌よ鳥聲に見へッ、忘られなくに　といふは雉子をよめり。又鶯をもよめり。霜氷る岩根につるゝ貌よ鳥浪の枕やわびてぬるらん

是は鶯也。定家卿の云。貌よ鳥、春の鳥也となり。師の曰。說ゝあれども、たゞ春の小鳥のいつくしきをいふと知るべしと也。

殘雁。說あり。歌の題には冬也。連俳には秋に用る也。

つぼすみれといふは、舊園のすみれ也。つぼの內のすみれといふ事也。一たびよみて詞やさしき、依てすみれの名になして山野にもよめる也。師のいはく。此類の事どもみなある事とぞ。

いな妻は宵の內ばかりのものゝやうに連歌には云也。

苗代の代といふは、かはるといふ義理也。去年の苗代地を不ㇾ用して、新に作る所を好む義理也といへり。

夕さりの事。さり〱て夕の間を云。冬さり、秋さり、みな初の秋冬にはいひがたき詞也といへり。

夕まぐれといふ事。間は休め字也。暮てたそがれ迄の間をいふ。しばしの間、人の見ゆるか見えざるかの程を、たそがれといふ。誰かれといふ義理也。むかしは人倫にする。いまはそのさたなし。

はたれ雪。帷子雪、みな大びら雪の事をいふと也。

すぐろの薄。やけ野に燒殘より芽の出るをいふと也。

かつこ鳥、かんこ鳥。一鳥同じ鳥の事也。

氷の衣といふ事は、氷のうちにかいこ有て糸をなす、と無き事を佛道にいひたるより出たる也といへり。

侘と云は、至極也。理に盡たる物也と云。

若な(菜)の發句は、初春七日の跡先三日の內也。平句には初春の內にはくるしか

らずと連歌にいひ来るとあり。
霞は夜と晝は似ぬもの也。夜の朧といふ事なし。月星に結びてするよし、連歌にあり。
月の影と上の句下の句に留らずと連ニ有。（錯簡あるか）
いざよふ月。又月に不レ限、日ぞいざよふなど、云は、聳物（そびきもの）に日の影へだちたる也。聳物なくては云がたし。又人をいざよふ倡（イザナフ）也。雲や浪をもいふと連書（連歌の書）にあり。
師のいはく。大方の露には何のなりぬらんたもとにおくは涙也けり　此うたは鴫立澤に勝ッ歌也。面白しと也。
あるひは師宗匠などの方へ句の直しを願ふ時、書て出す法あり。たとへば一順廻りし時、書翰を以てうかゞふ。二句書て自賛と思ふ方を口に書べし。本懐紙に書事あるべからず。別紙に書て宗匠の方にて添削のうへ留る様にすべし。その書様はたとへば、

　とま打かけて――

　大聲の喧嘩仕出す濱の方

　濱の風大あみ笠を吹取て

　宜御引直し奉頼候　蘭風

　　芭蕉先生

又云く

慈斤

何――

何氏　蘭風

人の方へ句を送るに折紙に認様

牛殘子旅立送る
何丶丶丶
年號月日　　芭蕉稿

或は牛殘公、老翁、人に依て尊卑あるべし。人によりて貴丈などゝも書。書留も、旅を送り奉るとも書也。紙四ッ折一ノ折ニ先の名、氏號を書、如レ圖付紙を張ス。付紙有（はカ）、赤きを用ゆ。
悼に青紙を用ゆ。
外包は紙袋を用ゆ。略して上包にても用ゆ。
拜机　合爪
なごゝ書。尊卑によるべし。

名を送る時折紙認様

山岸氏
宜爲車來候
年號月日　　芭蕉判

又何氏何右衞門殿とも書。

宜爲何兵衞候

自分名判

、、、
、、

花の短冊、其外物に付る時は、水引にて付る。一筋也。付やう、水引さし込、ひとつに取て、一むすびして付る也。水引穴紙のうへ四角に取、其眞中に穴を付る圖のごとし。

題
、、、、、
、、、、、
名　　名

名の書様常の通。若庵號など書つゞける時は、蓑虫庵服部土芳庵主とも書也。蓑虫軒　服部土芳子　服部氏とも書べしとなり。

色紙短冊の事

紙の上下の事、常は青雲の方上也。
悼の時は紫雲上也。

何、、、、、
、、、、、
名

、、、、、
、、、、、
名

何々、、、、
名

名ハ脇へ寄ル。卑下也。

三折一、下テ書。題ヲ書時也。題のなき時は一字半上テ書。題あるとも下つまる時は一字も上る。

歌に點するは八分也、

、、、、
、、、、

歌折紙二行七字

[illegible]

いづる日に向ふあら
しの岩はれて時雨里
こくもら雲の空

紙の折や
うつれの
料紙のご
し

三行三字

ひろ澤のいけのつゝ
みのやなぎかげみど
りもふかく春さめ
ぞふる

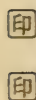
世之事技藝者。樹黨遂非。作勢護短。囮誘門下者。噫可歎矣哉。諸歌者流亦往々病諸。夫人病熱。則譫語掌壓心而睡必魘。或陥溝壑。或没波濤。蛇追鬼捕。諸般苦辛。一爲傍人所喚醒。諸苦如洗。蓋樹黨護短者。熱未解。魘未覺焉耳。斯書也。蕉翁之遺言。而土芳所筆記。闌更梓以公于世。後爲祝融氏所奪。今茲新剞劂功成焉。其言叮嚀精詣。實可彼喚醒病熱與魘者。而能洗諸苦也矣

享和改元之春

生々庵瑞馬撰書

世の技藝を事とする者。黨を樹てゝ非を遂げ。勢を作して短を護し。門下を囮誘する者は噫歎ず可き哉。諸歌者流亦往々諸を病めり。夫れ人熱を病むときは則ち譫語す。掌心を壓して睡は必ず魘はる。或は溝壑に陷り。或は波濤に沒す。蛇追鬼捕。諸般の辛苦。一たび傍人の爲に喚醒せられて。諸苦洗ふが如し。蓋し黨を樹て短を護する者は。熱未だ解せず。魘未だ覺めざるのみ。この書や。蕉翁の遺言にして。土芳が筆記に係る。闌更梓して世に公けにす。後祝融氏の爲に奪はる。今茲新に剞劂功成る。其言叮嚀精詣。實にかの熱と魘とを病む者を喚醒して。能く諸苦を洗ふ可し矣。

享和改元之春

生々庵瑞馬撰書

印　印

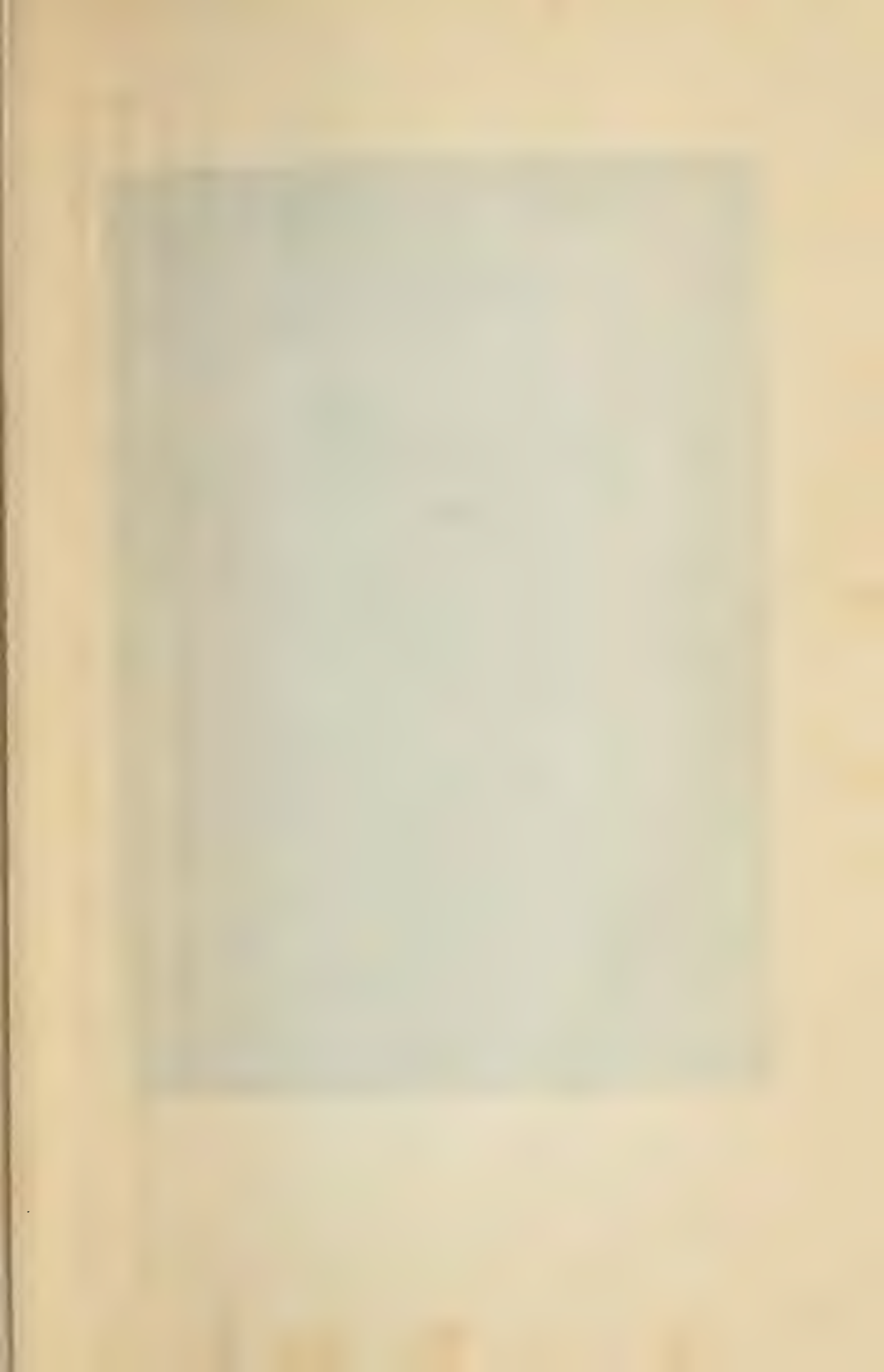
享和元辛酉春再刻

蕉門書林

大坂心斎橋筋
奈良屋長兵衛

京寺町押小路上ル
播磨屋治兵衛　合

井筒屋庄兵衛　梓

同三条寺町西江入
菊舎太兵衛

山中問答

貴書辱拝誦、清和之節愈御多祥珍重〻〻。拙無異。例之物草いづ方へも一向御不音のみ。偖今般山中問答上梓御思召立之由、此義は先年、也同老より粗承候。實に蕉門壁中の書にして、此道の至寶申迄もなし。天晴之御盛擧、鼓舞雷同不過之候。就者小序御申越、致熟思候處、此に一言を加へ候はゞ、泥をもて玉に彩るがごとく、返て古人を穢候罪を不免候へば、任愚意兼候。猶當時名家に御求候はゞいか程も可有之候へ共、矢張無之方璧を全すると可申哉。斯申も道をいやしめざるの本意迄に候へば、能〻御了簡有度候。委曲は也同老へ申入候間、可然御談し可被成候。先は貴答迄。匆〻不一。

卯月十五日　　　　乙　也

秋江雅兄

鶯村雅兄

山中問答

俳諧大意

正風の俳道に志あらん人は、世上の得失是非に惑はず、烏鷺馬鹿の言語に泥むべからず。天地を右にして、萬物山川草木人倫の本情を忘れず、落花散葉の姿にあそぶべし。其すがたにあそぶ時は、道古今に通じ、不易の理を失はずして流行の變にわたる。然る時は、こゝろざし寛大にして物にさはらず、けふの變化を自在にし、世上に和し、人情に達すべしと、翁申たまひき。

一　正風俳諧のこゝろは萬物の道よろづの業にも通ひて、一端にとゞまるべからず。世に俳諧の文字を說て、誹は非の音とて俳の字然るべしといへる人もあり。或は史記の滑稽をひきて穿鑿の沙汰に及ぶものもあり。しかれども吾門には俳諧に古人なしと看破する眼より、言語にあそぶといへる道理に任せて、誹俳の二字とも用ひて捨ず。他門に對して論ずることなかれと、翁申給ひき。

道理と理屈との二種ある事

一　俳諧の理道に遊ぶ人は俳諧を轉ず。はいかいの理屈に迷ふ人は轉ぜらる。世に上手下手の論のみして、俳諧といふ道の所以をしらず。蕉翁は正風虛實に志ふかき人を、吾門の高弟なりと譽給ひき。

一　虛實に文章あり、世智辨あり、仁義禮智あり。虛に實あるを文章といひ、禮智といふ。虛に虛あるものは稀にして、正風傳授の人とするとて翁笑ひ給ひき。

　私曰。虛に虛なるものとは、儒に莊子、釋に達磨なるべし。

一　いにしへより詩といひ、歌といひ、道の外に求るにあらず。然るによのつね俳諧の文字にまよひて、和歌に對したる名の道理を辨へず。頓作當話の俚俗に落て、狂言綺語とのみおぼえたる人もあるべし。これあさましきことなり。

一　はいかいは道草の花とみて、智を捨て愚にあそぶべしとぞ。

一　俳諧のすがたは俗談平話ながら、俗にして俗にあらず、平話にして平話にあらず、そのさかひをしるべし。此境は初心に及ばずとぞ。

一　世人俳諧に苦しみて俳諧のたのしみを知らず。附句の案じやう趣向をさだむるに心得あり。

一　工夫は平生にあり。席に臨ては無分別なるべし。

一　初學の人切字に惑へり。發句治定の

時は切字おのづから有べし。
一　面八句并四折に曲節地の配りある事。
一　發句は發句の姿あり平句は平句の姿あり。發句は大將の位なくしては卷頭にたらず、平句は士卒の働なくしては鈍にして役にたゝず。先このこゝろ得第一也。
一　脇の句は發句と一体の物なり。別に趣向奇語をもとむべからず。唯發句の余情をいひあらはして發句の光をかゝぐる也。脇に五ツの附方あれども、これみな附やうの差別にして、外に趣向を覓るにあらず。
一　第三は或は半節半曲なり。次の句へ及すこゝろ、第三の姿情なり。て留は何の爲ぞと工夫すべし。て留をはぶき(『三四考』に「捌き」とあり)ぬれば何留にてもよきぞとなり。俳諧一韵にて(『三四考』に別項とし、「俳諧百韻は」とあり)、四折八面にして表裏の句あり。歌仙にていはゞ、名殘の表はあそび處としるべし。
一　初折は地の句を専らにして奇語怪言をこのまず、直なるべし。戀の句などそのこゝろ得あるべし。
一　二の表(『三四考』に「折」とあり)に至ては半地半節也初折の禮法をすこしゆるめたる心なり。禮の用は和といへるがごとし。
一　三の折は俳諧のあそび處也。もつぱら花やかなる句を求め、をかしみを案ずべし。されど和して禮を忘れずとは、正風の姿情とこゝろ得べし。
一　名殘の折は一卷の首尾なれば、その坐を屈せぬやうにすべし。匂ひの花擧句にいたつて、高貴の人をまたせぬるは不禮也。俳諧は言語の遊びにして、信をもつて交る道なり。妙句に一坐を屈しさせんよりは、麁句にその坐の興を調へよとなり。一卷の變化を第一にして滯らず、あたらしみを心懸べし。好句の古きより、惡き句の新しきを俳諧の第一とす。
一　句文に風雅といふことを忘るべからず。さび、しほり、細き、しほらしき、といふは風雅なり。此こゝろがけなければ、或は平話の句はたゞごとになり、或は無骨或は野鄙に心いやしく、又道理に落て、俳諧連歌の本意を失ふこと、道に於て甚太切のことなり。
一　俳諧は謠ひものなること、こゝろえべし。
名聞の爲に風流をおとし、物好みして德をうしなふと、常にいましめ教へ給いき。

山中や菊は手折じ湯の匂ひ　翁

山中溫泉にして翁の物がたり給へることども、あら／＼書とゞめ侍る。

元祿二年己巳秋

金城　北枝　誌

附録北枝叟考

附方八方自他傳

硯にむかひすだれ揚つゝ　自
梨の花さき揃ふたる夕小雨　場
雉子におどろく女ひとむれ　他

箇樣に中の句人情なき時は、自他をふりわけて句作すべし。いか樣に轉じても中の句を兩方にてみるなり。

おくり火に尼がなみだやかゝるらん　他
まつ風遠く水のゆくすゑ　場
さつぱりと醉のさめたる明屋しき　自

これも自他をふりわけたるなり。但し面(おもて)に句つゞき、四五句も人情なき句附たるときは、今一句のばして附るは常のことなり。

落瓦あらしは松に鎭りて　場
みたわすれたる明がたの夢　自
抱籠の手ざはりもはや秋ちかき　自

又

看病の粥ふきさます小くらがり　他

ケ様に人情なき句へ自の句附たる時は、その人の自の句を附るとも、別に人を出して自の句よりみせるか、物いはせるか、思ひやらせる歟に句作すべし。此外附方なし。

並木あらはに松の露ちる　場
入月に痩子抱たる物もらひ　他
わきひらもみぬ鍛冶が勢ひ　〃

かやうに他の句に他の句をむかはせて附たる時は、見て居る人は別にありて、二句ともに見手とつくるべし。尤人倫人情の差別はなし。よく／＼前句の他（「三四考」に「前句の自他」とあり）を辨へて附べし。

顔にみだるゝ髪の赤がれ　他ノアシラヒ

是はその人のあしらひなり。とても物もらひの自他は（「三四考」に「自にては」とあり）附ぬものゆゑ、これも見て居る人は別にありとしるべし。又

聖靈おくる朝のせはしき　自

是は物もらひをみてゐる人の自の句なり。是を自向ひといふ。此外附方なし。

あたらしき草鞋に布施のあたゝまり　自
（「三四考」に「布施」を「脚」とす）
いのちなりけり洛外の春　〃
見よがしにさくらがもとの女房達　他

ケ様に自の句に自の句附たる時は、その自の句の人に見せるか、物いはせるか、思ひやらせるか、如ㇾ此別の人を出すべし。是も自より他へうつる句法也。能々考ふべし。この外附かたなし。

薬のなづむ假(本ノマヽ)つれなき　自
（「三四考」に「彌生つれなき」とあり）
一言もいはで日中の御垣もり　他
こぼれ松葉を手まさぐりいる　〃アシラヒ

又

ちらり／＼と屋根ふきの塵　他

かやうに自の句に他を向はせ。またその句に他の句をむかはせるはなし。能〻打越しへもどらぬやうに工夫せねば、轉じがたきもの也。尤二句の間よく〳〵向ふやうに句作すべきなり。此外附方なし。

ひとつづゝ手本もらふて粽結　他
叱る局にわらふつぼねに　他
よろ〳〵と裾にむしろの向下道　、

かくのごとく他の句に他の句むかひたる時(アシラヒ)は、又他のあしらひを附るなり。あしらひなればくるしからず。三句共に見てゐる人は別にありとしるべし。又

染ぬきをおもひのまゝにうり課(よほ)せ　自

ケ様に自の句を向はせてもよし。此外附方なし。

くじら突一二の銛をあらそふて　他
無分別なる顔に雪ふる　、
あのやうな小庵がなとおもふまで　(アシラヒ)自

ケ様に他の句へ他のあしらひ附たるときは、あしらひの句を何ものと見出して、自の句を向はせるなり。見出さねば二句がらみになるなり。是をからみ(『三四考』に「からみ」を「見出しの」とす)自向ひとはいふなり。

襷ながらに嫁のすり臼　他
櫛いれぬ髪にも艶は生つき　(アシラヒ)他
おはりに成て公事が嘵ぬ　自

(『三四考』に「おはり」を「あはれ」とす)

如レ此中の句を公事人とみて(『三四考』に「みて」を「見出して、奉行の」とす)自の句附たるあり(『三四考』に「なり」とあり)よく〳〵考ふべし。此外附方なし。

花守に花のたにざく(短冊)のぞまれて　自他半
さてものどかにさても黄鳥　時節
水上は懺悔〳〵とぬるませる　他

かやうに自の句も附がたく、さりとて花鳥も出たれども、(『三四考』に「ども」を「ば」とす)そこに居る他の句をも附たると心得べし。

身は雲水のさま〴〵の秋　自
笘ぶねに寐られもやらぬ闇深き　、
女の聲でまよひ子をよぶ　他

ケ様に付たるを舟と見て、ふねの句附たる時は、陸人を向はせ附べし。左なくては三句船中にありて、いか様に作りても轉ぜぬなり。

編笠に凌げどゆふ日かゞはゆき　自
おくれしつれに心ひかるゝ　、
たばこの火くれて内儀はもとの機　他

かやうに連といふて、そこに居ぬ人はやはり自の句にして、他の句を向はすべし。

此書此外附方なしとあるは、人情にて附込する事なきといふ附かたをいふなり。句作廻らぬ時の事也。幾句も人情つゞきたる時は、其場のあしらひ、時分、天相など見合せ附べし。附こむ事をしりての

ばすはよし。つけられぬとて遁句するは、返々未練也と翁仰られたり。穴賢。右三年之工夫を以て蕉翁に爲レ見申ゆ處の一法也。假初に他見をゆるさず、執心の人に相傳すべし。多分は祕すべしく。

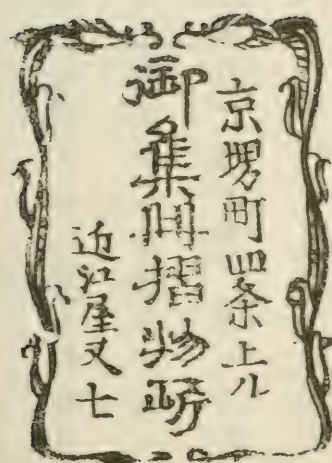
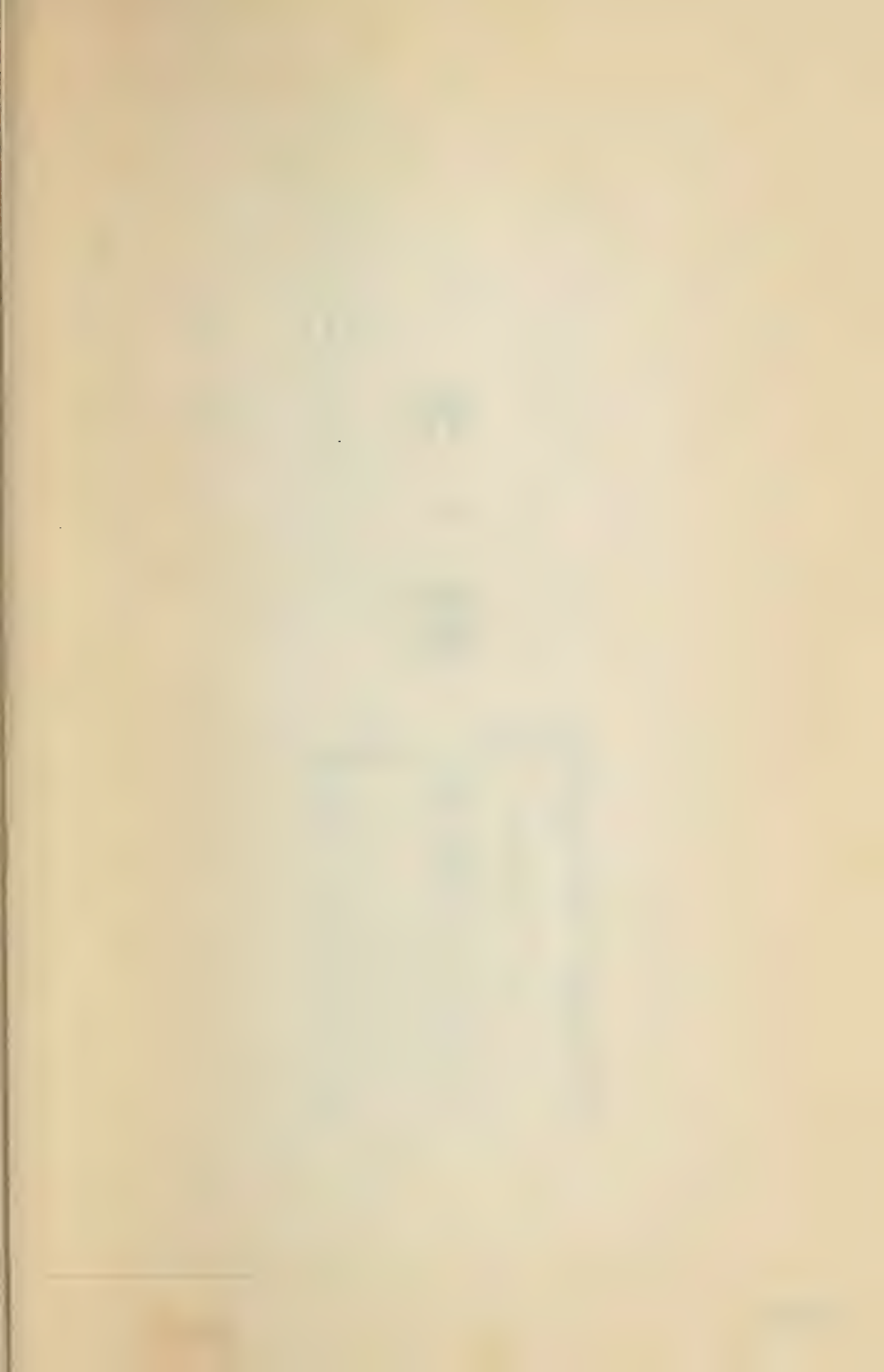
元祿五年春　　　翠臺北枝

此山中問答の一書は、おのれ壯年の頃、ある人のもてるを寫し得てより几上を放さず。一日秋江鶯村など來り、つく〴〵うかゞひ見ていふ、祖翁の餘澤世に溢れて、殘墨寸語といへども刊行せざるもの稀なる中に、かゝる金玉の教へをもらせる事惜むに堪たり。我〻に與へなば、とみに木にのぼせて、普く世にその光りをかゞやかせんと、兩子が乞ふにまかすとゝはなりぬ。

也同

京堺町四条上ル
御集用摺物所
近江屋又七

外篇

外篇解說

芭蕉の作品を集めましたものに對して外篇を附けますのは、要するに芭蕉の研究は其作品ばかりでは十分でない、其周圍の人達のも併せ見る必要があると考へたからであります。芭蕉中心の俳書は多數ありますが、其中から必要不可缺と認めます十五種を選擇いたしたのであります。其書目に就て簡單なる解說をいたしませう。

▽虚栗　半紙本　二冊

天和三年の上梓でありまして、編者は其角であります。其角の事蹟は『俳文俳句集』の解說に述べましたから、こゝには省略いたしますが、此時其角は二十三歳、芭蕉は四十歳でありまして、三年前の延寶八年には『桃青二十歌仙』が出、二年前の天和元年には『次韻』や池西言水の『東日記』が出、前年の天和二年には大原千春の『武藏曲』が出まして、貞門を凌駕しました談林も亦一變せんとする氣運が閃き來つた矢先に、此『虚栗』が出たのでありまして、芭蕉の跋の中にも「寶の鼎に句を煉て龍の泉に文字を冶ふ」と記されま

したやうに、漢詩文から得た趣致と修辭とによりまして新風を擧揚いたしたのであります。後の所謂蕉風といふものとは大分距離はありますが、徒らに滑稽機智を弄するものとは大に其面目を異にしてをるのであります。此漢詩文趣致は蕉門俳諧に至大の影響を與へましたもので、芭蕉を研究する上に於て見逃してはならないものでありませう。それが濃厚に出てをりますのが(寧ろ不消化のまゝ)此『虚栗』であります。貞享時代に入る第一歩とも見るべきものでありますから、芭蕉研究には是非一讀せなければならぬものであります。後の天明復興期に於いて、加賀の堀田麥水は大に此書を推奬いたし『新虚栗』の一書を編しました。以て此書の價値を知るべしであります。(此書は『其角七部集』の一として編入されてをります)

▽冬の日　　半紙本　一冊

貞享元年の上梓でありまして、編者は名古屋の山本荷兮であります。荷兮は橿本堂と號しまして醫者だといふ事であります。熱田が出生地で名古屋に住んでをつたと考へられます。晩年の事蹟や、歿時享年共に不明なので、芭蕉から破門されたなど申さ

れますが、元祿七年芭蕉最終の旅行の際にも荷兮の所に立寄つてをりまして、荷兮は芭蕉の

　世を旅に代かく小田の行戻り

といふ句に

　水雞の道にわたすこば板

といふ脇を附けてをりますから、破門說は誤傳であります。いつごろ歿したのか不明でありますが、少なくとも元祿の末年頃までは存命であつたやうに考へられるのであります。

芭蕉が貞享元年八月江戸を立つて郷里に歸り、大和山城近江美濃から伊勢の桑名を經て熱田に渡り、林桐葉等と連句を試みましたのは十一二月の交でありました。それから名古屋へ出て荷兮等と五卷の歌仙を賦しました。それと表合一ッとを編輯上梓しましたのが即ち『冬の日』でありまして、一に『尾張五歌仙』とも申します。芭蕉が煉りに煉つた新風を、十年の交遊があり、芭蕉を敬慕する門人の多い江戸で試みずに、此名古屋の人々而も初對面であらうと考へらるゝ人々と試みましたのを、私は不審として

をるのであります。或は此旅中に於て、秋寂の吉野を辿つたといふやうな此旅中に於て、深く工風する所があつて、それをこゝで試みたものでありませう。此新風を吹込みました芭蕉の感化力の偉大なのは申すまでもありませんが、熱田の桐葉等にしても、名古屋の荷兮等にしても、よく芭蕉の氣分に融合し得た點は、嘆美の辞を捧げずにはおかれません。蕉風の基礎玆に確立いたしたものとして此『冬の日』は蕉門俳書中の寶珠であります。芭蕉關係の俳書七種をまとめて『俳諧七部集』と稱する其第一卷は此『冬の日』であります。本書は蕉風連句の第一經典として俳人の尊重大なるものがありまして、之が註解書も十數種に上つてをります。近來出ましたものでは幸田露伴博士の『冬の日抄』と、樋口功氏の『芭蕉の連句』中の『冬の日私考』の二ツは一讀すべきものであります。

▽蛙合　半紙本　一冊

青蛙堂仙化の編で、貞享三年の上梓であります。仙化の經歷は全くわかりませんが、ただ江戸の人といふ事が知れてをるのみであります。和歌の歌合に倣ひまして俳諧に

も發句合と申す事があります。左右に句を番へて之が優劣を判するのでありまして、其判の致し方に特定の判者を立てますのと、之を衆議に附するとの二タ通りあるのであります。此『蛙合』は衆議判であります。芭蕉の發句のうちで、いろ〳〵の意味から名高くなつてをります「古池や」の句が、此書第一番の左にあります。江戸に於ける芭蕉門下の主なる人々の外、素堂なども加はつてをり、又京の去來が加はつてをります。去來が貞享三年の春江戸に在つた事を知るべきよき資料であります。これらの關係から此書を編入したのであります。

▽春の日　半紙本　一冊

貞享三年仲秋の上梓でありまして、編者は山本荷兮であらうと申されてをります。『俳諧七部集』の第二であります。其當時から『冬の日』同樣に重視されてをるものでありますが、編入の連句三卷は『冬の日』のものに比して大に劣るとの說もあります。芭蕉の删正を經たものでありませうが、連句の生命とする一卷の「匂ひ」が稀薄であります。芭蕉の如き偉大なる詩人が其席に在り、中心となつて附句を運ばなければ、よい

連句は得られないといふ事を痛切に感ずるのであります。「古池」の句は此書にもあります。此書は連句の外に發句を編次してあります。『冬の日』とは亦趣を異にするものであります。

▽曠　　野　　　　半紙本　三　冊

是亦『俳諧七部集』の一でありまして山本荷兮の編元祿二年の刊行であります。此書は蕉門俳書として所謂撰集の体裁を具備したものであります。卷之一から卷之八までに各種類の發句を編纂し、員外として連句を收錄してあります。發句には貞室季吟櫻井元輔玄旨法印宗祇守武などの名が見えてをります。おぼろげながら荷兮の俳歷と傾向を語るやうにも考へられるのであります。

▽其　　袋　　　　半紙本　二　冊

元祿三年の上梓でありまして、服部嵐雪の編であります。嵐雪の事は『俳文俳句集』解說中に述べましたから、こゝには省略いたしますが、私は『風の上』及『風の末』により

まして、嵐雪を江戸の人と記して置きました。然るに其五十回忌に『一葉塚』といふ追善集を淡路から出したものがありまして、嵐雪の甥だと稱してをるのであります。其子孫は連綿として只今も榮へてをるといふ事であります。即ち嵐雪の生國を淡路とする一說がありまして、相當根強く主張されてをるといふ事を追記して置きたいのであります。此『其袋』の出ました頃は蕉風甚だ盛んでありまして、芭蕉は全國的敬慕の的となつたのであります。其門下の双璧と目されてをる其角と嵐雪とは、おの〳〵其境遇の相違から、若くは其性格の相違から、一は進取的、他は退嬰的でありまして、嵐雪の編著は至つて乏しいのであります。其嵐雪が蕉風旺盛の元祿三年における編著は、芭蕉研究上逸すべからざるものであります。此時芭蕉は『ひさご』『猿蓑』の域に進みましたのでありますが、江戸の門下は『花摘』や『其袋』の程度である事を知るのも、研究上是亦必要の事でありませう。此書は享和二年に刊行されました『俳諧七部拾遺』の中に編入されてをります。

▽ひさこ　半紙本　一冊

元祿三年近江膳所の濱田珍碩が編纂上梓いたしたもので、連句のみのものでありますが、其「花見」の一巻は、芭蕉が『奧の細道』の大旅行を經た後の心境が窺はれるものとして重視されるものであります。『俳諧七部集』の第四であります。編者の珍碩(又珍夕とも書く)は醫を業として膳所にをりました。醫の方では道夕と稱したさうであります。芭蕉が珍碩の爲めに書きました「洒落堂記」は多分此「花見」の巻を賦した時でありませう。珍碩を洒堂と改めましたのも此記からであります。元祿五年には江戸に下り、深川芭蕉庵の客となりまして『深川集』を編しました。六年二月膳所へ歸り共夏難波に移りました。七年の秋の頃共記念集とも申すべき『市の庵』を出してをります。が、其十月芭蕉が大阪で病にかゝり遂に歿した蕉門の一大事變に際して、洒堂が顔を見せないのは不可思議千萬であります。恐くは此時大阪に居らなかつたのでありませう。のち膳所へ戻つて藩主本多侯に仕へました。元祿十五年には水田正秀と共編で『白馬集』を出してをります。歿時享年共に不明でありますが、大西一外氏は元文二年歿したと共『新選俳諧年表』に記されてをります。

▽猿　蓑　　　半紙本　　二冊

元祿四年の上梓でありまして、編者は向井去來野澤凡兆の二人であります。去來に就ては『俳文俳句集』解說中に述べましたから省略いたしませう。凡兆は加賀金澤の人で、京に出て醫を業としてをりました。『猿蓑』編輯の頃は京の二條通小川さはら木町上ルに住んでをつたのであります。のち拔荷買の事に連坐しまして縲絏の身となつたと傳へられてをります。元祿末年には大阪にをりまして、正德四年そこで歿した事は、服部土芳の『蓑虫庵集』（土芳の發句集）によつて明かになりました。又『野坡吟草』に、

　　凡兆阿圭子を悼

　行春や知らば斷べき琴の糸

と申す一句がありますので、其歿したのは晩春であつたらうと考へられるのであります。と共に「阿圭子」と申す別號があつた事をも知つたのであります。『曠野』にある「加生」は凡兆の前名であると一般に信じられてをりますが、確證はまだ見付からない

やうであります。凡兆の妻は羽紅尼と申しました。「加生妻とめ」が羽紅尼であるかないかも、加生凡兆問題が解決すれば從つて解決いたすわけであります。羽紅尼は享保七年頃までは存命でありましたが、歿時享年共に不明であります。

此『猿蓑』は芭蕉の心境が老熟圓融の極處に達した時のものであると申す理由で、蕉風研究に最も重要なものとされてをります。其編纂に當りましても、一句〳〵に討議して採否を決した狀況は『去來抄』によつて明かであります。『俳諧七部集』の第五に列してをります。此書の註解書も種々ありますが、古人のものでは空然(儒醫松本元順、俳諧では東杵庵揮柯)の『猿蓑さがし』が親切であります。現代のものでは樋口氏の『芭蕉の連句』中の「猿蓑連句私抄」が連句のみではありますが、佳書であります。

▽深　川　集　　　半紙本　一冊

洒堂の編で、元祿五年の上梓である事などは、『ひさご』の條下に述べて置きました。此書は享和二年『卯辰集』『韻塞』『刀奈美山』『有磯海』『小文庫』及『千鳥掛』の六書と共に『續七部集』の名で、一とまとめにして飜刻されましたので、割合に普及してをりますが、

元祿の板木が火事で燒失いたしたので、平山梅人によつて寛政二年に再刻されました。寛政板には册尾にある餘興と題した第三までのものを、梅人外六人で次いで一卷の歌仙とし、尙四季の發句七十餘句を附載してあります。再刻の場合からいふ贅瘤を付ける事は當時俳壇の宣傳手段であつたと見えまして、他にも同一事例があるのでありま す。此書に收むる連句は『韻塞』「初時雨」の卷と共に、芭蕉が亦少し動かんとする徵候を示すものでありますから是非一讀を要しまする。

再刻本には序文がありますが省きました。

▽炭　俵　　半紙本　二册

志田野坡小泉孤屋池田利牛三人の共編でありまして、元祿七年夏の上梓であります。芭蕉は元祿の五年六年を主として內省に送りました。勿論人にも接し門下をも導いたのでありますが、其心持ちは「閉關說」で味ひ得る通り、ひたすら孤獨を樂しみ思索に耽つたのであります。「かるみ」と申すものは此間に自得したのでありませう。野坡達三人を督して編しました此『炭俵』には、其「かるみ」が著しいのであります。

野坡は越前福井の人であります。家は商賈で京に出店があつたさうです。江戸へ出て何をいたしてをりましたかは明かでありません。『續みなし栗』に見ゆる野馬は野坡の前名であらうと考へられます。淺生庵の別號がありました。晩年には大阪にをりまして樗木社を結び、例の「かるみ」を鼓吹したのであります。高津野の草庵に、木曾塚の「無名庵」の名を冠らしめて「無名庵高津野の翁」と稱してをりました。關西九州方面が其勢圏でありまして、岡山の風律は其高足弟子でありました。元文五年一月三日に七十八歳を以て歿しました。利牛および孤屋の二人は江戸の人と申す外は不明であります。許六は此三人を江戸越後屋の手代だと其『歴代滑稽傳』に記してをりますが、此書の記述には往々錯誤がありますから直に信ずるわけにも參りません。

此『炭俵』は『俳諧七部集』の第六に位してをりまして、芭蕉晩年の俳風を知るには『別座鋪』と共に缺くべからざるものであります。

▽別　座　鋪　　半紙本　一冊

是亦元祿七年の上梓で、芭蕉送別の記念集であります。子珊等が送別の小會を催し

たときの歌仙一卷と、送別の句や文章などに、他の連句發句をまじへ編したもので、「伊賀の山家のつれ〳〵に送り侍る」と子珊が序文に述べてをる通り、まことに片々たる小冊子ではありますが、『炭俵』と共に「かるみ」を味ふべきものであります。此書の元祿板は至つて乏しく、寶暦二年の再刻本もあまり普及してをらないやうであります。文政十一年の『俳諧新七部集』に編入されてから一般的になつたやうであります。編者子珊は江戸の人で、深川の芭蕉庵の近所に住まつてをつたと考へられますが、其外の事は少しもわからないものであります。

▽笈日記　　半紙本　三冊

機敏なる支考は、芭蕉の歿後逸早く近畿附近に於ける芭蕉の遊蹤を歷訪しまして、其遺聞を問ひ、其遺句を拾つたのであります。『笈日記』三卷は其記錄で元祿八年の刊行であります。芭蕉研究には是非讀まねばならぬものであります。其難波部に於ける芭蕉發病及終焉の前後の日記は、實に唯一の資料であります。(『花屋日記』は不審のものですから)支考の事は「語錄集」解說に述べましたから省略いたします。支考も此書

を編する頃は、自己宣傳の臭味は相當强いものあるにしましても、芭蕉に對する忠實は失はなかつたのであります。

▽小　文　庫　　半紙本　一冊

五雨亭史邦の編著で、元祿九年の上梓であります。芭蕉三年忌追福の意を以て芭蕉の句や文章に、自分の句や交友の句を加へて一冊子となしたもので、史邦の見た芭蕉を窺ふべきものであります。山店が送別の句を立てた芭蕉との兩吟一卷が收錄されてをります。編者史邦は犬山の人で、其通稱は中村春庵又根津宿之助の二說あります。醫を以て藩の一公子に仕へました。丈草の內藤林之助も同時に仕へてをつたのであります。其公子が歿したので、致仕して京へ出ました。京では仙洞御所に仕へました。(『俳諧猿舞師』に「仙洞忠勤のむかし云々」の詞があります)芭蕉に親炙したのも此頃であります。のち致仕して江戶へ下りましたが、安住の地を得ず再び京へ歸つたのであります。浪々中困苦したらしい發句が『俳諧猿舞師』に屢見えてをります。其歿時享年共に不明であります。

▽韻塞　　半紙本　二冊

同じく元祿九年の上梓でありまして、森川許六河野李由二人の共編になつてをりますが、事實は許六一人の纂輯でありませう。許六の事は『俳文俳句集』解說に述べましたから省略いたします。李由は近江國平田の明照寺第十四世で、亮隅上人と申し、買年と字しました。四梅廬は其閑室の名であります。元祿四年の冬東歸の際芭蕉も一遊したのであります。「尊がる涙」「百年のけしき」の二句は此時の吟であります。許六と深く交りまして、此書の外に『宇陀法師』をも共に編したのであります。寶永二年六月二十二日歿し、享年四十四でありました。元祿五年許六がはじめて江戸で芭蕉に相見してのち、芭蕉を其勤番小屋に請じて賦した連句が收錄されてをります。許六のお小屋の客間の柱は其時芭蕉がもたれつゝ句案した柱であるといふので、大切に保存されてあつたが、ある年の火事に類燒してしまつたのを彥根の殿様は深く惜まれたと申す逸話があります。かやうな小逸話にも芭蕉の德化がほの見ゆるのであります。

▽續猿蓑　　半紙本　二冊

元祿十一年五月京の井筒屋庄兵衛によつて刊行された此『續蓑猿』は、其編者の不明なるが爲めに種々の不審を生ずるのであります。越人などは支考の僞書なりとまでに極言いたしてをるのでありますが、書中の發句や連句を見ますれば、芭蕉の匂ひが濃かであります。たゞし多少不純の臭味もいたします。畢竟芭蕉の編みさしたものに、支考か誰かが追加增訂を加へたものであらうと解するが妥當でありませう。書名の頭の「續」も或ははじめは「後」であつたのではないかとも考へられるのであります。土芳の『三冊子』許六の『宇陀法師』『自讃之文』などには『後猿蓑』と明記してをるのであります。又板本の標題を熟視いたしますに、「續」の字と「猿蓑」の字のつゞき工合が甚だ不自然でありまして、埋め木をして彫り直したのではないかとの疑が生ずるのであります。しかし確實な證據を見ないのでありますから斷言は差控へて置きませう。

以上十五種の俳書によりまして、大要其時代と其環境とを呑み込み、以て芭蕉の心の進み工合を知るよすがとなし得らるゝ事と信じます。慾を申せば尚數種のものを編入いたしたかつたのでありますが、紙數の關係上割愛いたしました。好學の士の爲め『俳諧七部集』の第七に列してをりまして、一讀に値ひするものであります。

に其書目編著者並に上梓年次を記して置きませう。

熱田三歌仙（桐葉）　貞享二年（?）（安永四年曉臺上梓）
續みなし栗（其角）　貞享四年　　句餞別　元祿元年
いつを昔（其角）　元祿三年　　花つみ（其角）　元祿三年
あめこ（之道）　元祿三年　　勸進牒（路通）　元祿四年
卯辰集（北枝）　元祿四年　　巳か光（車庸）　元祿五年
曠野後集（荷兮）　元祿六年　　句兄弟（其角）　元祿七年
藤の實（素牛）　元祿七年　　刀奈美山（浪化）　元祿八年
有磯海（浪化）　元祿八年　　翁　草（里圃）　元祿九年
陸奥衛（桃隣）　元祿十年　　菊の香（風國）　元祿十年
荒小田（舍羅）　元祿十二年　　千鳥掛（知足）　正德二年
雪丸け（曾良）　元文二年

是等の俳書は皆側面若くは裏面から芭蕉を見るべき好資料であります。一讀をおすすめして此解說の筆を擱きます。

（附記）私は屢々各種の七部集の名を擧げましたが、此七部集類に關する考證は伊藤松宇先生の『類題芭蕉七部集』に附載しました「七部集概論」に詳かであります。一讀をおすゝめします。

李由

凡兆

野坡
酒堂

支考
猿雖

嘯テ二古人貧交行之詩ヲ一吐テ而戯序ス

翻セバレ手ヲ作リレ雲ト覆ヘバレ手ヲ雨

紛々タル俳句何ゾ須ヒンレ數ヲ

世不レ見ヤ宗鑑ガ貧ノ時ノ交リ

此ノ道今ノ人棄ツルコトレ如シレ土ノ

凩よ世に拾はれぬみなし栗

晋其角敬

虚栗集

改正

讀者敲レ門ヲしだくらく花明か也　幻吁
賤よ春餅に蔦はふ宿ならん　三峯
初えぼしかざりの床やむら烏　玉尺
先仵に太山おろしや門の松　殘詞
春柴ニ負レ葩ヲ木深き宿を山路哉　翠紅
餅ヲ焼て富を知ル日の轉士哉　麋塒
句ひねたり今年廿五ノ翁　文排
髭艶るやと襟にかざす藪柑子　杉風
いざや春地なし小袖のかいどりせる　信徳
月は更科もあれ我蓬萊の朝日守　友静
釋迦逃て彌勒進まず國の春　春澄
山僞やうらの藪より今朝の春　千之
六尺袴着て塵見歸らじ松の門　千春
春どに松は食くふて年ふるや　卜尺
春得たり人たり殊に男たり　楊水

春ヲ何と風のごまめ時雨の海老　嵐蘭
餅の室根深を蘭の薫り哉　嵐竹
海老臥龍餅をうがつに玉あらん　北鯤
屠蘇ふらば傘すてん若時雨　楓興
朝明のはつねの闢や竈守　李下
餅の島ごまめの白蛇眠りけり　洗口
初禮や富士をかさねて扇狩　枳風
代ヲ樣ス銀-池に鴻の搖鈍し　仙化
民の戸や松に餅さく百代　柳興
初なぎやしらけの鵆の空セ榧　嵜山
花串せ吉野三味線圜-栖蔽　才丸

烟の中に年の暮けるを

霞むらん火ゝ出見の世の朝渚　似春

天和三年

試筆

鶴さもあれ顏淵生て千ゝの春　其角
身の正月ヲ屈原が醉　嵐雪
花に行秋はさびしき男にて　藤匂

其二

浦島をあやまるや世の若戎　同
鹽-鯛は死ヲもつて祝はれ　其角
芹炊ぐ盞は夢の器　嵐雪

其三

今朝春の奥(惑もあり／迷もあり)胡ヲ富　同
杖こゝろむる梅のかけはし　藤匂
三線の及第蝶の冠して　其角
とゝはやす女は醉若しなつみ歌　嵐雪
芋室の雪間や寒き下若菜　言籬
玉うどのうつくし苣の早苗の薄綠　杉風
情うるや都は雪のはつよめ菜　勝延

何故溪-邊双-白-鷺
无レ憂頭-上亦垂レ糸ヲ

髮あらふ鷺芹とかす澤邊哉　其角
小袖着せて佛匂へ梅がつま　同
追鳥や梅枝に息をたすけたる　千春
うぐひすのよぶかあやしの藪賣　翠紅

鵠日不レ浴白
烏日不レ黔黒

川烏白うを浴せずして白し　楓興
漁消てしらぬひの佃魚白し　全琴
淡ヲ燒かと白魚星の遠津瀉　嚢塒
雪を染て白うを流せ冬菜川　嵐朝
白魚は鷺にて海雲を晴ル丶篝哉　柔紅
しら魚の昔汀の鷺の消かへり　心棘
梟朽て釘の角ぐむ蘆べ哉　黄吻
蘆のあやしく蝸牛を角のかきほ哉　忘水

在原寺にて

美男村の柳はむかしを泣せけり　皷角
うぐひすを魂にねむるか嬌柳　芭蕉
假に風-女褆かさうか雨柳　杉風
昭君の柳をさんや塘かな　才丸
柳たれてあらしに猫ヲ釣ル夜哉　木因
むらつばめ柳におつる柱かな　四友
川風に夕日やすかすつばめ網　藤匂
柳にはふかでおのれあらしの夕燕　嵐雪
傘にねぐらかさうやぬれ燕　其角
袖つばめ舞たり蓮の小盞　曉雲

聲北におもかげのみか白鷺　羊角
行雁や見のこす麥の花盛　在惫
友斷ふ駒の勞やすらん雲雀笛　野笛

女にかはりて

なれも戀猫に伽羅燒てうかれけり　嵐雪
愛あまる猫は傾-婦の絹ヲ假　才丸
戀守や猫こさじとは箱根山　東順

不生不滅の心を

海棠の鼾ヲ悟れねはん像　其角
莖立ヲ折てさとるに早し涅槃粥　言水

寒食

木食も香爐に烟なき日なり　皷角
寒食の日旅人たばこに飢つらん　藤匂
寒食や竈下に猫の月を怪しむ　キ角
佛か貴-妃のなやめる朧月　四友

春雨偶興

春の餅かびて嵯峨のゝ秋と誰レ　其流
烏賊のぼり反て野守の鏡かな　工迪

三　陽

醴に桃-裏の詩人髭白し　其角
薪ヲ匂ふ山吹の粥　李下
榮-泉の鮓小判に身をよせて　柳興

其　二

けふぞ背子土圭の舟に花かづら　同
さゝ波うたふ蝶の釣竿　其角
風-心扇つばめやくるふらん　李下

其　三

僧の謂シうどは廬山の桃の時　同
蕨は筆を握ルつれ〴〵　柳興
春雨を三とせ敵に囚はれて　其角

雛ヲ抱てうたゝね桃に契りけり　其流
宵月の花のかゞりや夜遊雛　藤匂
桃園の猫かひさらせひな車　露章
ひなに戀て胡葱のうら亂した　松濤
雛若は桃壺の腹にやどりてか　學白
龍田姫そめけん雛のから錦　子堂
雛丸が夫婦や桃の露不老園　羊角

汐干潟海鹿の野馬見て行ん　ト尺
汐干くれて蟹が裾引なごり哉　嵐雪
漁夫出て三ケ月ひろふ汐干哉　立志
夕ばえや金をなげて蜆蜑　以貞

花にうき世我酒白く食黒し　芭蕉

憂方知酒聖
貧始覺錢神

眠ヲ盡ス陽炎の痩　一晶
鶴啼て青鷺夏を隣るらん　嵐雪
童子礫を手折ル唐梅　其角
月ヲ濁す汀の蓼ヲ蘆刈て　嵐蘭
浪のさゞれにたなご釣影　筆
琵琶洗ふ雨よし朝の時雨よし　一晶
朝にえぼしをふるふ紙衣　芭蕉
浪人の戀するを詣おぼしめす　嵐雪
やゝ㒵の一夜に入ルかひぞなき　嵐蘭
散さゝら同じ宗旨ヲ誓ひける　キ角
蔦は退之が肝魂ヲ奪　一晶
雷鳥のはつねは猜ヲ鳴ならん　芭蕉
汐てる海に鰹孕る　嵐雪
傾城の鏡を捨し神代ヨリ　一晶
羽をりに角をかくす風流　其角
化しのゝ棺ヲ出て草の月　嵐蘭

破蕉誤ツテ詩の上を次グ　嵐雪

朝鮮に西瓜ヲ贈る遙ナリ　芭蕉
つくししらぬひの松浦片撥　一晶
めづら見るあげや〳〵の萱庇　嵐雪
蚕は私の盞をのむ　嵐蘭
櫛入レぬ影は六十の荊にて　其角
御所に胡座かく世ヲ夷也　芭蕉
人の怪異穂長の宵の熨子黒ケ　一晶
松田くびなき雪の曙　嵐雪
きたなしや陣中に似せ鮓かく　キ角
山ㇱ野に飢て餅を貪ル　嵐蘭
盗ミ井の月に伯夷が足あらふ　芭蕉
とくさは武士の憤草　キ角
見ぐるしき艶書をやくや柴袍　嵐蘭
笑ひさんやに歸ル魂　一晶
曉の寐言を母にさまされて　嵐雪
つゐに發心ならず也けり　芭蕉
花に栖廬山の列をはねたらん　其角
柳にすねて瀑布ヲ酒呑　嵐蘭

詠懐

花に今額政が歌を知ル身哉　露沾
我杖に秣かふべし花の山　幻吁
身は里に麥待花の日数かな　似春
雨花ヲ喫て枳殼の怒ル心あり　槊塒
伽羅は鈍し浴堂の花に干鬘　露章
花醉鳥故山にねぐら忘けり　云笑
にくしとて瑟を筏の峰の花　四友
余所に男薄暮に花をみる男　杉風
あみ笠刀うき世つたふか花見猿　嵐蘭
狂といへ花人が合羽日照傘　千春

吉野藏王堂にて

片足は花の塵いとひ給ひけり　千之

雨

廬山の夜上野は花の晝ならん　楊水

山はゑむ上野東の美人ならん　才丸
落花雨美人の化粧流し也　一東
花は楚地雨のなごりや腐足袋　洪口

七賢の自畫に

花と世を竹にそげたる翁かな　樵花

雖不花死不休矣

於戻花と流るゝかばね哉　嵐蘭
萎着たる樵子いつの花の虹　露宿

惜花不掃地

我僕落花に朝寐ゆるしけり　其角

代樵

彫笛縫袋花に晴せんうき世哉　其角

小町の像讃

おことこそ風狂亂の姥さくら　宗因
美をにくむ心のさくら若衆哉　文排
就中女に戀そゝのかすさくら哉　藤匂
いはゞ云べく問人に須磨の櫻蘂　露章
匂ふらんけふ去人と山ざくら　枳嵐
毀は狩ッ妾餅うろ櫻茶屋　嵐雪
晝の君うつゝと唉り夢櫻　杉風

橙のときはにくしや山さくら　利久
遊人去て晝のさくらを舞狐　子堂

目黒松隣堂にて

うき世木をふもとに咲ぬ山櫻　其角
梨花さらに柿のはに蝶すだくらん　嵐蘭
海棠やうき世美人の空ねいり　樵花
たんぽゝよ口おしの花の和物や　九十
たんぽゝや春とはぬ宿の忘れ菊　山店

さんや吟行

詩を加賀にやはらぐ蛙かな　楓興
角田川哀は田にしつむ野かな　文排
麥食に野守菴かせ田にし狩　寸鯨
田にしふむ影生憎ややもめ鳥　拾螢

御局の春興

下仕して夜をおぼろげの豆腐召ス　雪叢
さすかかりきみがきもやらで夕月夜　四友
菜の花の盛や水司が袖のかはく程　柳興
蝶ちりて菜の花や入あひの鐘　翠紅
小雨けり蕗をしとゞのかくれ傘　露章

あさつきよ香を懐しみ妹が里　紫楢
仙家にはわさび摺らんそてつ原　鳳尾
山吹や先言禪師のすて衣　藤匂子
腕を薪の飢の早蕨　其角
子路が廟夕べや秋とかすむらん　同
其きらさぎの十六日の文　匂子
花鮎の鮎のさかりを惜む哉　同
樽伐なりとひゞく袖川　角
金減す我世の外にうかれてや　仝
褞袍さむく伯母夢にみゆ　匂子
ひだるさは高野と聞しかねの聲　同
心ノ鼠は晝の灯をのむ　角
あさましき文字の賊衣魚と成　同
小袖をさらす涼店の風　匂子
夕闌て宮女の相撲めし給ふ　同
天盞七ツ星をちかひし　角
月令月令西瓜に劍ヲ曲ケル　同
弓張角豆野に芋ヲ射ル　匂子

里がくれおのれ紙子のかゝしにて　同
なじみは離ぬ雪の吉原　角
米の禮暮待文にいはせけり　同
初木がらしを髣ルしだ寺　句子
暁の閼伽の若水おとかへて　仝
鼡も餅はかびけりの森　角
獵師をいざなふ女あとふかく　角
なみださがしや首なしの池　句子
ぬれ具足蘆刈やつに剝れけん　同
婆-甜にわたる島おろし舟　角
鳥羽にけふある明日の身ぞつらき　同
寐さめ語りをきらふ上-﨟　句子
殘る月戸にきぬ〴〵の歌ヲ書　同
葬の朝粧ひ髮ゆふてやる　角
蜩の虛勞すゞしく成にけり　仝
雨母親の留主を慰む　句子
烱らせて男の立テ茶水くさし　同
入あひ迄を借ス座敷かな　角
蝶-居-士が花の衾に夢ちりて　仝
佛にけがす藜立の露　句子

改　夏

ほとゝぎす正-月は梅の花咲り　芭蕉
待わびて古今夏之部みる夜哉　四友
山彥と啼ク子規夢ヲ切ル斧　素堂
ほとゝぎす春朴の葉に隱しや　嵐蘭
忍び音や連歌ぬす人子規　秊紅
ほとゝぎす敷寐や淀の寳舟　千之
半日の下戶。閑居にたえず子規　千春
錦帳の鶉世を草の戶や郭公　嵐雪
誰か謂し南天の花の時郭公　信德
枸杞莚幾日干らんほとゝぎす　藤匂
身は筏月郭公忘レ竿　杉風
子規芋まだ靑き月夜かな　李下
郭公はるかに蜀の新茶哉　才丸
錦その涙に洗ふべし郭公　才滴
ほとゝぎす瓜くはぬ里に習ひけん　一蜂
暁の釣瓶やすめよほとゝぎす　濁子
冥途には秋や待らん郭公　中村如菴
夏桃や伏見ときけば郭公　東順
郭公羅紗の毛衣かへしけん　松綠
雨ヲ聞夜月化けらんほとゝぎす　勝延
花めでたく柳は〳〵郭公　四友
子規木がくれなりぬうどの杜　調杷
鼻毛刈人にきけとや子規　其流
淸く聞ン耳に香燒て郭公　芭蕉
點滴ヲ硯に奇也ほとゝぎす　キ角
我句人しらず我ヲ啼クものは子規　同
姿日夕て卯花に文ヲよむ女　言水
晝ばかり卯花さかぬかきほ哉　才丸
蟾ヲをふんで夜ル卯の花ヲ憎けり　其角

四月十八日卽興

僞レル卯花に樽を畜きけり　千之
鰹をのぞむ樓の上の月　其角
この頃の裸をにくむ秋の風　同

さゝ立波に鹿渠もる露　之
藏庇菊を南に見え晴て　同
薬越はあらぬ蘇鐵一かぶ　角
侘ゝて笠に詩ヲ着ル朝時雨　之
呉の旅衣酒をかたしく　角
水糯西施が影をこぼすらん　之
蘭にふれたる紫の汗　角
寐語の小杉音なく宵過て　之
さみだれ座敷蛙這來ル　角
住ム人も志賀の古城やよむかし　之
石山の秋ノ月三井の晩鐘　角
尺八に棹さす露の丸木舟　之
遊子おどりの國ヲ尋ヌル　角
花日ゝに老は娘の手を引て　之
松ある隣リ羽かひに行　角
百千鳥轡が仕着せ綺羅やかに　同
雨なかだちて燕ヲ假ル　之
年咄し今宵盧山の夜に似タリ　角
毛ー吹崑ー山に名を晒スラン　之

木がらしに浪士の市の彳　角
囘火消の霜さやぐ松　之
經よはる御魂屋のきり〳〵す　角
夕べは秋の後鳥羽さびしき　之
秬の葉に涙をあまる夷衣　角
まゝ子鳥の寐に迷ふ月　之
盜人をとがむる鍋の音ふけて　角
胴の間寒き波の夜嵐　之
年と日と賤のつま薪よみ盡ス　同
うさきを荷ふ越の山業　角
劍術を虚谷に習ふ時は　之
有下朋自二遠ー方ー來上　同
花に粮空囊に錢をはたくらん　角
蛤處ーゝのやまぶきヲ燒　同

麥刈娘に物いひて

若麥やむぐらのために亂けん　白悅
忘るなよ麥の穗風の初うづら　卜尺
青さしや草餅の穗に出つらん　芭蕉

麥莚なびきていつか賤のつま　藤匂
ゆふかけて青麥白し氷雨祭　嵐朝
麥にかなし薄に月ヲ見んまでの秋　キ角

贈ニ一鐵ニ

亦や鰹命あらば我も魴　藤匂
頂し雪の河鯱を弔ひけり鰹　雷虫
こひしきや蓼をむぐらの鹽鰹　嵐竹
妻鰹の卵の中のめぢか哉　其角

水あり驛にとへば
しのはすが池

菖ナル左我その去年の鯽やらん　一晶
香ヲ折ルの坐頭や杜若あやめ　擧白
誰世にか冶郎身投しかきつばた　露沾

重伍　二十五句

菖把に競ー曲中を乘ルならん　擧白
粽をしばる鬼の尸　其角
龍ヲよぶ白雨乞ヒの跡荒て　松濤
御歩みかろき雲の山橋　白
錦干ス木の間の月のすて胄　角

葛の茵に猿蹠ヲ吸　濤
露をへて鵜舊都に歎きけり　白
漁笛はあれど瑟しらぬ蜑　角
忘れ松娘がうはさ云出て　濤
馴ぬふくさを敷て旅寐し　白
情ある不破の關屋の小歌哉　角
むかしを江戸にかへす道心　濤
藤柄の鉦木をとても重からぬ　白
破蕉老たる化ものゝ寺　角
螺ひとり月ヲ穿ッの淋しげに　濤
詩人の餌の鱸魚ヲ憎シト　白
花ヲ啼美女盞を江に投て　角
なびくか否か柳もどかし　濤
世は蝶と遁心思ひ定めける　白
骨牌ヲ飛鳥川に流しつ　角
三線ヲ十市の里に聞明ス夜ャ　濤
あらしな裂そ夫尋ね笠　白
祖母はせく樵は流石哀あり　角
德利ヲ殺す是雪の咎　濤

春ヲ盗ム梅は破戒の其一ッ　罔両

鈴虫をのぼりに付て寐ぬ夜哉　藤匂
菖刈鵜のうき巣や坐雨　樵花
軒ばふく鶉の床草鎌ふかし　云笑
しら雲や富士の峡より江戸幟　長吁
ちりめんを蓑のけしきか菖妻　才紫
世のあやめ見すや孤の髑髏　嵐雪
粽かはん驛にとめて鈴のぼり　其角

片田のうらのやすさらし
川岸に臼のならびたるを見て

うき桶や行〱て波の晒臼　自悦

時鳥の二聲三聲
おとづれければ

五月雨の端居古き平家ヲうなりけり　嵐雪
五月雨けりな小田に鯉とるむら童　藤匂
瀟湘の夜や夜鰹の五月雨　柳興
覆盆子折レ田歌のかさし五月蓑　露章
いちご折娘いつ山吹の香に馴し　言弓

亡母ヲ夢ミル

左月音に我蓑虫や母戀し　嵐雪
蚤莚音なしの里にくはれけり　露章
蚊の帳をさゞ波疊む四ッ手哉　洗口
蚊のどし竹枝のやどり晋の七　子堂
蚊ずまふに番の團亦おかし　翠紅
夢やつれけり草葉の舎り蚊遣馬　藤匂
蚊をやくや褒ー姒が閨の私語　其角
蚊のふるはいとゞ小雨の夕べ哉　才若
夏の夜はせはしなき秋の旅ね哉　杉風
茸かへて不破のたびねの紙帳哉　皷角

和ニ古詩ー

瑟ヲ焼て水鶏を煮ル夜酒淋し　其角
谷木の鬼なおそれそともし笛　同
うはゞみに鼾やかはすともし山　露宿
みな人は螢を火じゃと云れけり　春澄
草の戸に我は蓼くふほたる哉　其角
うすものゝ羽織絹うつほたる哉　暁雲
岩巻柏を宿あり顔の螢哉　言離

あさがふや地藏の闇を開帳　鼓角
女髪けり螢をもゆる毛虫かと　藤匂
眞瓜火や螢にたえて橋涼　李下
たが告し夕蝙蝠に涼み風　子英
うば玉の涼みや幾千女後にて　才丸

薩登ニ二輔一

酒ノ淨有冷華ノ九天ヨリ降ナラン　其角
雪の鮭左曽水無月の鹽　芭蕉

宿の鐘聲の
あかつきをさめて

禪定や珠數ヲ離の雪の床　文排
山茱萸のかざしや重きふじ颪　嵐雪

田家納涼

芋の葉に命を包むし水雨　キ角
堀かねはかつをに濁すし水哉　長吁
蛛の巣のうきに濁すな山し水　自悦
樋はしや瓜くゞらせて月清水　露章
むら雨の木陰なりせばところてん　拾螢
槿や花なき蝶の世すて酒　芭蕉

なでしこの翅を蝶の娘かな　一晶

竹婦はなれて抱よけれ共
三人やねたまん
涼しくてひとりねんには

汗に朽ば風すゝぐべし竹襦袢　嵐雪
夕風がむすめとよばん添寐籠　杉風
東路や追踏かすなる夕立の雨　松濤
水精て蝉ヲ不断の瀧の聲　幻吁
木さらしや蝉のもぬけの薄衣　殘詞
夜の蝉葬のさく日向かな　鱗足

一晶の宿坊にて

日蓮よ梢に蝉の鳴時は　其角

我身

乞食かな天地ヲ着たる夏衣　同
扇こそ晩がふせ屋の夏襟　羽白
唐扇はすねたり和扇は艶也渋團　鼓角
團扇いづれを法師俗の風　嵐朝

破屋なれども
傘を用ひず

夕顔の雨もりさせぬ荒屋かな　東順

藏立て夕貌は世にあかれけり　一晶
夕貌はすゝけぬ富士の枝折哉　藤匂
優婆塞が不動白しや夕貌の花　長吁

荷興　十唱

浮葉巻葉此蓮風情過たらん　素堂
鳥うたがふ風蓮露を飜けり
そよかさす蓮雨に魚の兒躍
荷たれて母にそふ鴨の枕蚊屋
青蜻花のはちすの胡蝶かな
おのれつぼみ己レ畫てはちすらん
花芙蓉美女湯あがりて立りけり
荷ヲうつて霰ちる音みずや村雨
蓮世界翠の不二を沉むらく
哀ハ唐茶ニ醉ひたまふ蓮の粮

一むら薄まれ人を
まねいて

武さし野を我屋也けり涼み筵　翠紅

切麦さらすさら〳〵の里　才丸
皀莢に草鞋ヲいたく径アリて　一晶
つばめをつかむ雨の汚レ子　其角
月出て日の牛遅を夕歩み　岡雨
丸ぼしを備る御所やうの松　紅
鎮歎時の斧取串ける　丸
八十万貫の鍬とあらぶる　晶
生華葉をかざしにさせる市女笠　角
関守浮ス二五夜の曲　丸
雁の衣ルいで禍弓を競ふらん　紅
冶郎にくゝだす叢の鶺　岡雨
金谷ノ泪ヲかたびらにそゝぐ　晶
荒しや娼歓の風呂薹に入　角
亂往昔古府つるべよりたる　丸
主人の鳴を告し初鶏　紅
花の頃都へ連歌買にやる　角
櫻まだみぬ鶴原につよし　晶
地女の抉みじかき染の帯　紅
小六に祈る郎よかれと　丸

御手洗や南國橋の生れぬ昔　晶
垂樹淺レ江ア松九本あり　角
蒭蕉て香屋は雷に霈らん　丸
もろに書ヲ葺閉窓の夜　岡雨
大わなにかゝるは廓の翁にて　角
婿等に聟よ名を反す戀　紅
早稲は實が入晩稲は身稲つはり　晶
袖そよ寒しスバル滿ン時　丸
水飲に起て窗下に月をふむ　紅

改秋

初秋の風かたへは白し青西瓜　東順
初風に瓜守が巷もあれにけり　濁子

梶の葉に
小うたかくとて

闇しろ葉の简うき立　晶
早桶の行に哀はとゞめずて　角
我身をてかけ草のいつ迄　紅
花は世に伊達せぬ山の淺黄陰　丸
心に寸ッの劍なき廬　角
灯前の夜話酒を好ニス　晶
あらしに歸る岡の岡雨
年の輪の牛をくゞる行雄哉　翠紅

我や来ぬひと夜よし原天川　嵐雪
名とりの衣のおもて見よ葛　其角
顔しらぬ契は草のしのぶにて　同
冶郎打かたぶける夕露　雪
坐月にはぞつる舟の遠恨み　雪

河そひ泪檜木つむ聲　角
寐を獨り乞食うき巣をゆられけん　雪
しきみ一把を戀の捨草　角
人待や人うれふるや赤椿　雪
蝶女うかれて蜘目さめけり　角
こち〳〵と閨啄鳥の匂よけに　雪
敵にほれて籠のかひま見　角
いはで思ふ陸の怒と聞えしは　雪
色このむ京に初蕣の奏　角
野分とふ朝な〳〵の文くばり　雪
家〻の月見あねに琴借ル　角
ねたしとて花によせ來る小袖武者　雪
美ｰ山ンの笑ひ茶旗の風流　角
鸚鵡能歸りをほむる辻霞　同
叶はぬ戀をいのる淸水　雪
山城の吉彌むすびに松もこそ　角
菱川やうの吾妻俤　雪
狂歌堂古き枕をおかれける　角
はだへは酒に凋む水仙　雪

蓑を燒てみぞれくむ君哀しれ　角
身は孤舟女房定めぬ　雪
萱金かくしうへけん背に　角
松虫またず住あれの宮　雪
露は袖衣裄に蔦のかゝる迄　角
蓁姫月にならんとすらん　雪
若衆と私あかしのほとゝぎす　同
つれなき枕蚊屋越ヲ切ル　角
紅の脚布晳妾むごかりし　雪
五十の內侍耻しらぬかも　同
花の宴に御密夫の聞えあり　角
やぶ入ル空の雨を懶ク　同

效ニ白氏之僻女題一

二星私憾ムとなりの娘年十五　其角
空彥もねよけん糸と竹との諸調　嵐朝
露くだる星の朝寐や角豆原　藤匂
後家耻ぬ嫁ｰ星に寐衣かさん事　蕪角
世〻の阿房こよひの空や汚レ川　楊水

妹寐こいかも意更て鍬ｰ漢白シ　松濤
夕かも星あひそめぬ色紙妻　雨椿
誰手向して蜻やとる捨つるべ　拾螢
鼠尾艸や稻妻をやく世の手向　藤匂
おくり火や定家の烱十文字　其角
玉祭ル里や樒刈男香爐たく女　松濤
貧せこか初露寒し葛羽織　露章

臨ニ素堂秋ｰ池一

鳳秋の荷葉一扇をくゝる也　其角

和ニ角蓼螢句一

あさがほに我は食くふおとこ哉　芭蕉
あさがほの露と身をやく蛃かな　藤匂
朝貌の曉花もる犬の聲憎し　樵花
あさがほに傘干ていく程ぞ　曉雲
蕣をなげかん友とうづら好　黃吻
荻の音は變化咄しのとだえ哉　暮角

朝な〳〵に咲かへて
さかり久しきとある
御歌を感じて

あさがほは仙洞様を命かな　其角

破茅

風妖て薄に夜の雨すごし　李下

猫狩やうらみをかへす眞葛原　東順

芭蕉の女ねたしそてつに釘打　小山玄更

露萩や野中に立る捨美人　其流

萩な刈そ西瓜に枕かす男　其角

身を庭前の朴の木によせて

渠(カレ)何を人目にうらみ朴ぞ　嵐蘭

三夕

西行

秋は此法師すがたの夕哉　宗因

定家

舟炙(アフ)るとま屋の秋の夕哉　嵐雪

寂蓮

和歌の骨(コツ)槇たつ山の夕哉　其角

きびしさは秋向ふから來ル我姿　自悦

人は寐て心ぞ夜ルを秋の昏　槩塢

田婦子を負(オウ)て畚のうかれ心哉　卜尺

我立り畚飛野の犬かくれ　杉風

いなごとる〱いつ袖の時雨たりけん　子英

猫にくはれしを蟋(カウロギ)の妻はすだくらん　其角

三ケ月や朝貌の夕べつぼむらん　芭蕉

謫居

象潟(キサガタ)の月や流人のたすけ舟　琢菴

月に飢て旅人古郷の諺ヲ腹(アキハツ)　鼓角

月ひとり家婦が情のちきり哉　杉風

晝の月ぬるさ尋ん三輪の森　東順

月を語レ越路の小者木曾の舟　其角

たらひ迄日頃の月ノ寐衣(ネマキ)哉　西友

牛吼て山路(サンロ)が斬月高し　柳興

何配所こゝも罪なき闇の月　池原玄齋

富士の月我(テン)には見せじ遠目鏡　疎言

故寺月なし狼宿をおくりける　北鯤

月に親く天帝の婿(ムコ)に成たしな　才丸

舟中吟

月見女舟や木の間を棹ぬらん　杉風

芋くへば尻にこさふく今宵哉　三峯

さらしなの月は四角にもなかりけり　友吉

芋付て蓑鞭(スイベン)月もやせつらん　云笑

やき米を引ツク里の椎かな　翠紅

四ツ手舟はぜ買よらん月見川　藤匂

芋を抱て酒に身なげんけふの淵　桐橋

誰ガ家の思婦ぞ月に諷ふて粉(コナ)引は　雪叢

土船ニ諷ツ棹ヲ月はすめ身は濁レとや　楓興

浮生(フセイ)ははぜを放す盞　其角

興(ケフ)そげて西瓜に着(キ)スル烏角巾　柳興

萩すり園風みだるらん　長吁

蓬生のうづらは蚊屋の中に鳴　角

鼬のたゝく門ほそめ也　楓

ぬす人を矢に待嵐窓ヲ射(イ)る　吁

下女が鏡にしらぬ俤　柳

泪とも直衣のつまを切(フクサ)褐　楓

むかし雨夜の文枕とく　角

名をかへて緣が丁鬟長シク　柳
うきを盛の酒-中-花の時　吁
發句彫ル櫻は枝を痛むらん　角
かへり見霞む落城の月　楓
笠輕く鞋に壹分をはきしめて　吁
踊もる所佐渡の中山　柳
柴荷ふ妙の僕となりにけり　楓
老母ヲ牛にのせて吟ふ　角
うき雲の聟をたづねて問嵐　柳
乞食の筋をいのる野社　吁
水へだつ傾-里は垣のひとへにて　角
心を伽羅に染ぬゆふがほ　楓
つれ〴〵の螢を髭にすだくらん　吁
羇行のなみだ下-官歌よむ　柳
げに五子美湯-治山-中一夜ノ雨　楓
肴なき爐に三線ヲ煮ル　角
朽坊に化物がたり申すなり　柳
夫をためす獨リ野の月　吁
穗に川て業平かくす薄-陰　角
夕べを契る蜻蛉の木偶　楓
進めする錦木供養立ながら　吁
地蔵に粧ふ霜の白粉　柳
三七日は亂壞の相を啼ク鳥　角
食腥く出る野のはら　楓
舊惡の都は花の色苦し　柳
毛虫は蜂のねぐら爭ふ　吁

稻磨歌妹乎鷄冠乃羽
多多幾晨奴良牟加毛　秋風

松風の里は籾するしぐれ哉　嵐雪

芭蕉庵ノ夜

墨染を鉦皷に隣る砧かな　其角
亦此里賤が夜寒の火打かな　其流
物數奇の世捨きぬたや葎菴　黃吻
石菖をいつの薄にうづら籠　永原愚心
うづらふんで艸刈鎌を迯しけん　藤匂
鮲化してそよ飛ブ鴫の夕べ哉　瓠落
傳に曰稻負鳥はふくべなり　四友
萎うち着てますほの胡芋刈男哉　子堂
胡芋干宿よ夕顔の夕べさもあらばあれ　嵐蘭
行くれて山賤すごし案山子影　子英

重陽三-句句菊

○風-菊ノ盞-笠冠止　嵐朝
○有ニ蘭-草ノ菊ノ宜止　芭蕉
○俳-門ノ有ニ芳-菊ノ止　嵐雪

賀をつぐの春や引らん小菊原　擧白
籬-外の覗菊もあるじや芳しき　翠紅
菊は山路みかんの霜を契りけん　暮角
傾-蘭のひとりねゆかし床の菊　枳風

千家の騷人

白菊の余情

菊うりや菊に詩人の質を賣ル　其角
松の香は花とふく也さくら茸　同
座敷寺松茸見付たるうれし　信徳
小上戸熟-柿の林かくれきや　一蜂
こや汐木賤が柚味噌の夕畑　拾螢

落椎か雨かましら答えよ木葉菴　蒼席

栗柿は塵壺を秋の行衛かな　仙風

焼栗や居レ蔡ッ月の雨　幻吁

栂虫の身を栗に啼こよひかな　其角

栗のから藻の中のハぜかぞへつべし　ト尺

はぜつるや水村山郭酒旗風　嵐雪

傘合羽はぜつり時雨顔なるや　皷角

釣人歸ルあらしをはぜの命哉　露章

はぜの地をいかにおしまん佛の日　露宿

こがれきや澪木の枝折はぜ小舟　蒼席

さび鮎やいつを桀の蓼の花　長柄寛瀾

哀且市たつ鮎の暮のさび　杉風

カジカ此夕べ愁人は猵の聲を釣ル　其角

遊ニ心寺ノ高雄ガ廟

哀しる霜に石ヲ粧ふ蔦の梲　才丸

榎ふりて蔦を鱗の龍紅キ　羊角

緋のふとん綻白し瀑布の水　四友

憶ニ老ー杜ヲ

髭風ヲ吹て暮ー秋歎ズルハ誰ガ子ゾ　芭蕉

九月盡

ねぬ夜松風身のうき秋を師走哉　其角

上冬

僧うかれけり松はひとりに里時雨　杉風

手づから雨のわび笠をはりて

世にふるもさらに宗祇のやどり哉　芭蕉

しぐれするかけ菜を軒の僧都哉　藤匂

夢よりか見はてぬ芝居村時雨　其角

君火燵うき身時雨の小袖かな　枳風

柴の暮山に紅のしぐれ哉　子堂

薬柏や風と時雨し數寄屋道　露章

赴ニ泊ー船堂ニ途中感

波道黒し夕日や埋む水小舟　楊水

夕かくすらん虹の假橋つくば山　仝

端山木の風からんかへり茸　其流

冬野見よ刈とはなきに霜の鎌　露章

冬枯の道のしるべや牛の屎　ト尺

十月ノ蟋

きり／＼す鼠の巣にて鳴終リヌ　嵐雪

畚枯て寒ー徑霜をいだく哉　子堂

氷るらん日陰の胡蝶日なた魚　藤匂

落葉見にたが蹄せし霜馬峯　擧白

落葉をくだくや納豆打ッ寒夜　才丸

霜白し枯野のそばの花月夜　翠紅

夢ヲ吹て肝埋む夜の木葉哉　烏巾

枯榎おのが實ならで烏瓜　青扇

茶の花や上戸の弟梅の兄　藤匂

笹窓の更り短檠の下に釜睡ル　杉風

貧ー山の釜霜に啼聲寒し　芭蕉

松風や爐に富士をやく西屋形　其角

眞炭刻ル火ー箸を斧の幽か也　同

犬引てとうふ狩得たり里夜興　同

宗千富るならん山里冬のさび馴ず　柳興

世に若く行人うとし栲住ひ　露鶴

斧朽て七世の栲に逢りけり　露章

老尼が簔の緒やすし夜ルの栲　露宿

雪夜

佛たく夜はさぞあらんそば湯哉　幻吁

夜着は重し呉天に雪を見るあらん　芭蕉

花を心地狸に醉る雪のくれ　欒堺

僕が雪夜犬を袵のはし寐哉　杉風

でんがくに寄ス狂句の法師雪の皃　李下

雪ヲ吐て鏡投けり化粧姫　皷角

富峯

駒やむに藥もとめん千重の雪　千之

不二に目鼻混沌の玉死シテより　皷角

大回リ磁石おさめんふじの雪　狩野 空鬼

富士うつす麥田は雪の早苗かな　其角

ふじは富士木綿が原のけしき哉　鳳尾

世はさぞな香煎雪にそゝぐ也　九十

帋たれて雪を有明と寐過にし　擧白

幽戸推て雪を花壇の艶哉　言色

荊折て雪の女の角にせし　紅友

白雪に五位鷺濁るあした哉　蘭山

くだかけや背寐をいそぐ雪の下女　利久

雪ヲ織てびろうど白し太山嫗　峡水

皀莢の實は音さびし雪の窓　露宿

雪の奥炭負こぼすたつぎ哉　才滴

會者定離笹にあられや松の雪　ゆき

旅行

城見えて合羽は重し雪の昏　信德

松原は飛脚ちいさし雪の昏　一晶

雪の薪牛追物に暮つらむ　文排

雪の犬帶になくや姨捨山　四友

憶ニ李白一ヲ

月ヲ見て東坡は雪に身投けん　才丸

河-鮑に貴-妃の佛を戀　子堂

遊の代の小歌を琴に閑思君て　其角

早苗車を喜雨臺に引　丸

カルの子に感あり柿の花盛　堂

餡すくひが濁す日の陰　角

秋風を名殘ンか待乳山凉み　丸

膈人出レ家ヲ露夕べ也　堂

稲妻のぬき刄に夢の身をやどす　角

魔境の月を睨かへして　丸

山彦と碁をうつ風の古寺に　堂

茶僧の首烏豆ヲ啼　角

顔淵が麥食愛のひとつにて　丸

蓼も藜も露ふかき庭　堂

住ばすむ紙工ばかり清水かな　角

吉原の郡よしはらの里　丸

花に染ミ愚は摩賢はぼつとりと　堂

菫をさして和歌の撰聟　角

永き日も狭布の上下胸あはず　丸

はなわに埋む儒の尸　堂

今哉角天地を樽とのみ破る　角

斬に駕して睡-洞に入　丸

葉嵐や狐離レて覺えける　堂

名城松に荒をなす月　角

金堂むかしの夕べさやかにも　丸

伶女すがれて玉虫を舞　堂

とくさ刈なり平山にほれつらん　角

文幣うけよ穂屋の花垣　丸

絶かねて鳩の肩ぬく卜正に　堂

さつ男の奴たをや若衆　角

誠より時雨もちくなぶんぬきそ　丸

吹雪を見する炭負せ馬　堂

花さかば告よ尾上のふごおろし　角

やすらひ鼓後の葉ざくら　丸

春惜ム神すゞしめか氣違か　堂

俳諧童友くるふ里　角

鈍是レ破戒殺生
飲酒はもとよりの事

妄語

魨を煮てふぐに賣世の辛き哉　一晶

偸盗

賊心や河魨に迷ひの代ころも　李下

邪淫

妻ならぬふぐな憎みそ小夜衣　其角

ふぐ干や枯なん葱のうらみ貌　子英

腰ぬけや三とせに成ぬ釣の魨　野笛

捨られてふぐを湯婆の恨み哉　全琴

人何ヲカ土肉の無爲ナル貌　楊水

師ばかり霙にそばへたる重し　擧白

鶯啼て淺漬氷る丸屋かな　雷虫

夜學ノ感

鶯氷ル夜ヤ蜉蝣灯盞に羽を閉て　其角

酒氷ル寒菊よ我一命　樵花

茅舎買レ水

氷苦く偃鼠が咽をうるほせり　芭蕉

蕣にありしまがきの氷柱哉　虎吟

閑シ春ルをぬす人くさし雪の梅　其流

軒の柊梅を探るにおぼつかなし　嵐雪

馬戻ヨリ水仙の香は己れかな　藤匂

雪に和して水仙の勇耻しき　四友

師走の月を

冬がれは白髪遊女の閨の月　嵐朝

寒苦鳥孤婦がね覺を鳴音哉　李下

ねさせぬ夜身ヲ鳴鳥の寒苦僧　才丸

貧苦鳥明日餅つこうとぞ鳴ケル　其角

入相のかねにしだ刈る命かな　瓠落

鷹反て餓神樂や里の森　云笑

神樂舟澪の灯の御火白くたけ　嵐雪

行年や火燵に髭の白キをやく　柳興

三十日引芋恨み也雪の駒　角止

一年三百六十日
開レ口笑無レ三日

飽やことし心と臼の轟と　李下

世は白波に大根こぐ舟　其角

月雪を芋のあみ戸や枯つらん　同

からろぎは書ヲよみ明ス聲　下

百ヲふる狐と秋を慰めし　同

傾婦を蘭の肆にうる　角

敵ある泪の色をいはす草　下

然れば天下一番の貌　角

文盲な金持は金ヲ以テ鳴ル　下

にわとり豚はつち養ふ　角

其池を忍はずといふかび屋敷　下

士峯の雲を望む加賀殿　角

袖めして國に千曳の鏡剗 下
名にたつかざし黒木串柹 角
髭あらの花みる男内ゆかし 下
春ゝ宵ゝとはりあひのなき 角
月に鳴ク生憎のうかれ上戸や 下
薄も白くたぶさ刈る鎌 角
朝顔は道歌の種をうへたらん 同
院の後家のあるかなき宿 下
都近き島原小野をおもひ出る 角
仕組をくだす八重のとぢ文 下
墨染に女房ふたりを頼む哉 角
ねみだれかもじ虵と成夢 下
笛による骸骨何をその情 角
風そよ夕べ切籠灯の記 下
酔はらふ冷茶は秋のむかしにて 角
こぬ夜の格子鳴を憐レム 下
名月の前は泪にくもりつゝ 角
金橙徑に粕がみを思ふ 下
葉生姜を世捨ぬやつにたとへけん 同

擂鉢かぶる暉堂の霜 角
寸ゞ法師切レの衣のみじかきに 芭蕉
昔を力ム率都婆大小 下
俤の多門を見せよ花の雲 角
凡夫三百人のはる風 同

酒債尋常往ク處ニ有
人生七十古來稀ナリ

待あきんど年を貪ル酒債哉 其角
冬湖日暮て駕レ馬ニ鯉 芭蕉
干鈍き夷に關をゆるすらん 同
三線○人の鬼を泣しむ 角
月は袖からろぎ睡る隊のうへに 同
鴫の羽しばる夜深き也 蕉
耻しらぬ僧を笑ふか草薄 同
しぐれ山崎傘を舞 角
笹竹のどてらを藍に染なして 蕉
狩場の雲に若殿を戀 角
一の姫里の庄家に養はれ 蕉

新名にたつと云題を責けり 角
ほとゝぎす怨の靈と啼かへり 蕉
うき世に泥む寒食の瘦 角
沓は花貧重し笠はさん俵 蕉
芭蕉あるじの蝶丁見よ 角
腐レたる俳諧犬もくらはずや 蕉
鰥ゝとして寐ぬ夜ねぬ月 角
聟入の近づくまゝに初砧 同
たゝかひうんで葛うらみなし 蕉
嘲りそ黄金は鑄ル小紫ヲ 角
黒鯛くろしおとく女が乳 蕉
枯藻髮栄螺の角を卷折らん 角
魔神を使トス荒海の崎 蕉
鐵の弓取猛き世に出よ 角
虎懐に姙るあかつき 蕉
山寒く四睡の床をふくあらし 角
うづみ火消て指の灯 蕉
下司后朝をねたみ月を閉 角
西瓜を綾に包ムあやにく 同

哀いかに宮城野のぼた吹凋（シホ）るらん　蕉

みちのくの夷（エゾ）しらぬ石臼　角

武士の鎧の丸寐まくらかす　蕉

八聲の駒の雪を告つゝ　角

詩あきんど花を貪ル酒債哉　同

春‐湖日暮て駕（ノル）レ興ニ吟　蕉

栗とよぶ一書其味四
あり。
李杜が心-酒を嘗(ナメ)て、
寒山が法-粥を啜(スヽ)る。
これに仍而其句見る
に遙にして聞に遠し。
侘と風雅のその生(ツネ)に
あらぬは、西行の山
家をたづねて、人の

拾はぬ蝕栗也。

戀の情つくし得たり。

昔は西施がふり袖の

顔、黄金は鑄ニ小紫ヲ、

上陽人の閨の中には、

衣桁に蔦のかゝるま

で也。

下の品には眉ごもり、

親ぞひの娵、娶、姑

のたけき爭ひをあつかふ。寺の兒、歌舞の若衆の情をも捨ず。白氏が歌を假名にやつして、初心を救ふたよりならんとす。其ノ如震動虚實をわかたず、寶の鼎に句を煉て、龍の泉に文

字を治(キタ)ふ。是必他の
たからにあらず、汝
が寳にして後の盗人ヲ
待。
元和三癸亥年仲夏日
芭蕉洞桃青鼓舞書

寳の鍇に句を鏤て龍の
字を治(キタ)ふ是必他の
たからにあらす汝
か寳にして後の盗人ヲ
待
天和三癸亥年仲夏日
芭蕉洞桃青鼓舞書

蕉門俳書目錄

みなし栗	其角輯	二冊
續みなし栗	同 輯	二冊
花摘	同 輯	二冊
續虚栗	湖十輯	二冊
枝乃ぬく語	嵐雪撰	二冊
かはつ合	こせ代き角 桑雀仙化撰	一冊
皮籠摺	凉菟輯	二冊

載文堂藏板

新二百韻	其角輯	一冊
新三百韻	同 撰	一冊
丙寅紀行	風瀑集	一冊
新山家	其角撰	一冊
春乃日	越人	一冊
桃莚	宗瑞 咫尺	一冊
苦樂子句	丈石	一冊

千載堂百歌仙集　五冊

小傘　惣之仕かた 調合発集記　一冊

七部集小本　春の日 猿蓑 ひさご 冬の日 続猿蓑 炭俵 あら野 員外　二冊　但し唐紙 摺の尾は

貞徳掟　貞徳 之ろ栗評注　一冊

山路の露　一冊

下郷集　一冊

毛吹くさ　五冊

同追加　追刻三冊

誹諧書籍目録　三冊

をとせし道　二冊

祇園拾遺　二冊

三月物　京宗近會　一冊

關相撲　三冊

京都堀川錦小路上ル町
西村市郎右衛門梓

冬の日
尾張五哥仙
全

笠は長途の雨にほころび、紙衣はとまり〳〵の嵐にもめたり。侘盡したるわび人、我さへあはれに覺えける。むかし狂歌の才士、此國にたどりし事を、不圖おもひ出て申侍る。

狂句こがらしの身は竹齋に似たる哉　芭蕉
たそやとばしる笠の山茶花　野水
有明の主水に酒屋つくらせて　荷兮
かしらの露をふるふあかむま　重五
朝鮮のほそりすゝきのにほひなき　杜國
日のちり〳〵に野に米を刈　正平
わがいほは鷺にやどかすあたりにて　野水
髮はやすまをしのぶ身のほど　芭蕉
いつはりのつらしと乳をしぼりすて　重五
きえぬそとばにすご〳〵となく　荷兮
影法(カゲボウ)のあかつきさむく火を燒(にき)て　芭蕉
あるじは貧にたへし虛家(カライエ)　杜國
田中なるこまんが柳落るころ　荷兮
霧にふね引人はちんばか　野水

たそがれを横にながむる月ほそし　杜國
となりさかしき町に下り居る　重五
二の尼に近衞の花のさかりきく　野水
蝶はむぐらにとばかり鼻かむ　芭蕉
のり物に簾透(すく)顏おぼろなる　重五
いまぞ恨の矢をはなつ聲　荷兮
ぬす人の記念(かたみ)の松の吹おれて　芭蕉
しばし宗祇の名を付し水　杜國
笠ぬぎて無理にもぬるゝ北時雨　荷兮
冬がれわけてひとり唐苣(たうちさ)　野水
しら〳〵と碎けしは人の骨か何　杜國
烏賊はゑびすの國のうらかた　重五
あはれさの謎にもとけじ郭公　野水
秋水一斗もりつくす夜ぞ　芭蕉
日東の李白が坊に月を見て　重五
巾(きん)に木槿をはさむ琵琶打　荷兮
うしの跡とぶらふ草の夕ぐれに　芭蕉
箕に鮗(このしろ)の魚をいたゞき　杜國
わがいのりあけがたの星孕むべく　荷兮

けふはいもとのまゆかきにゆき　野水
綾ひとへ居湯(ヲリユ)に志賀の花漉(こし)て　杜國
廊下は藤の影つたふ也　重五

おもへども壯年
いまだころもを振はず

はつ雪のことしも袴きてかへる　野水
霜にまだ見る蕣の食(めし)　杜國
野菊までたづぬる蝶の羽おれて　芭蕉
うづらふけれとくるまひきけり　荷兮
麻呂が月袖に鞨鼓をならすらん　重五
桃花をたをる貞德の富　正平
雨こゆる淺香の田螺ほりうへて　杜國
奧のきさらぎを只なきになく　野水
床ふけて語ればいとこなる男　荷兮
緣さまたげの恨みのこりし　はせを
口おしと瘤(フスベ)をちぎるちからなき　野水
明日はかたきにくび送りせん　重五

小三太に盃とらせひとつうたひ　芭蕉
月は遲かれ牡丹ぬす人　杜國
縄あみのかゞりはやぶれ壁落て　重五
こつ〳〵とのみ地藏切町　荷兮
初はなの世とや嫁のいかめしく　杜國
かぶろいくらの春ぞかはゆき　野水
櫛ばこに餅すゆるねやほのかなる　かけい
うぐひす起よ紙燭とぼして　芭蕉
篠ふかく梢は柿の蔕さびし　野水
三線からん不破のせき人　重五
道すがら美濃で打ける碁を忘る　芭蕉
ねざめ〳〵のさても七十　杜國
奉加めす御堂に金うちになひ　重五
ひとつの傘の下擧りさす　荷兮
蓮池に鷺の子遊ぶ夕ま暮　杜國
まどに手づから薄樣をすき　野水
月にたてる唐輪の髮の赤枯て　荷兮
戀せぬきぬた臨濟をまつ　はせを
秋蟬の虚に聲きくしづかさは　野水

藤の實つたふ雫ほつちり　重五
袂より硯をひらき山かげに　芭蕉
ひとりは典侍の局か内侍か　杜國
三ヶの花鸚鵡尾ながの鳥いくさ　重五
しらかみいさむ越の獨活刈　荷兮

杖をひく事僅に十歩　杜國

つゝみかねて月とり落す霽哉
こほりふみ行水のいなづま　重五
歯朶の葉を初狩人の矢に負て　野水
北の御門をおしあけのはる　芭蕉
馬糞搔あふぎに風の打かすみ　荷兮
茶の湯者おしむ野べの蒲公英　正平
らうたげに物よむ娘かしづきて　重五
灯籠ふたつになさけくらぶる　杜國
つゆ秋のすまふ力を撰ばれず　芭蕉
蕎麥さへ青し滋賀樂の坊　野水

朝月夜双六うちの旅ねして　杜國
紅花買みちにほとゝぎすきく　荷兮
しのぶまのわざとて雛を作り居る　野水
命婦の君より米なんどこす　重五
まがきまで津浪の水にくづれ行　荷兮
佛喰たる魚解きけり　芭蕉
縣ふる花見次郎と仰がれて　重五
五形菫の畠六反　とこく
うれしげに囀る雲雀ちり〳〵と　芭蕉
眞晝の馬のねぶたがほ也　野水
おかざきや矢矧の橋のながきかな　杜國
庄屋の松をよみて送りぬ　荷兮
晦日をさむく刀賣る年　重五
捨し子は柴刈長にのびつらん　野水
雪の狂呉の國の笠めづらしき　荷兮
襟に高雄が片袖をとく　はせを
あだ人と樽を棺に呑ほさん　重五
芥子のひとへに名をこぼす禪　杜國
三ケ月の東は暗く鐘の聲　芭蕉

秋湖かすかに琴かへす者　野水
煮（に）る事をゆるしてはぜを放ける　杜國
聲よき念佛藪をへだつる　荷兮
影うすき行燈けしに起侘て　野水
おもひかねつも夜るの帶引　重五
こがれ飛（とぶ）たましゐ花のかげに入　荷兮
その望の日を我もおなじく　はせを

なには津にあし火燒家は
すゝけたれど　重五

炭賣のおのがつまこそ黑からめ
ひとの粧ひを鏡磨（トギ）寒（サム）　荷兮
花蘇馬骨の霜に咲かへり　杜國
鶴見るまどの月かすかなり　野水
かぜ吹ぬ秋の日瓶に酒なき日　芭蕉
荻織るかさを市に振（ふら）する　羽笠
加茂川や胡麻千代祭り微近み　荷兮
いはくらの聟なつかしのころ　重五

おもふ事布搗歌にわらはれて　野水
うきははたちを越る三平（マルガホ）　杜國
捨られてくねるか鴛の離れ鳥　羽笠
火をかぬ火燵なき人を見ん　芭蕉
門守の翁に紙子かりて寢る　重五
血刀かくす月の暗きに　荷兮
霧下りて本郷の鐘七つきく　杜國
ふゆまつ納豆たゝくなるべし　野水
はなに泣櫻の黴（かび）とすてにける　芭蕉
僧ものいはず欵冬を呑（ノム）　羽笠
白燕濁らぬ水に羽を洗ひ　荷兮
宣旨かしこく釵を鑄る　重五
八十年を三つ見る童母（ワラヘ）もちて　野水
なかだちそむる七夕のつま　杜國
西南に桂のはなのつぼむとき　羽笠
蘭のあぶらに卜木（しめぎ）うつ音　芭蕉
賤の家に賢なる女見てかへる　重五
釣瓶に粟をあらふ日のくれ　荷兮
はやり來て撫子かざる正月に　杜國

つゞみ手向る辨慶の宮　野水
寅の日の旦（あした）を鍛冶の急起（とく）て　芭蕉
雲かうばしき南京の地（ツチ）　羽笠
いがきして誰ともしらぬ人の像　荷兮
泥にこゝろのきよき芹の根　重五
粥すゝるあかつき花にかしこまり　やすい
狩衣の下に鎧ふ春風　芭蕉
北のかたなく〳〵簾おしやりて　羽笠
ねられぬ夢を責るむら雨　杜國

田家眺望

霜月や鸛（コウ）の彳々（ツクツク）ならびゐて　荷兮
冬の朝日のあはれなりけり　芭蕉
樫檜山家の体を木の葉降　重五
ひきずるうしの鹽こぼれつゝ　杜國
音もなき具足に月のうす〳〵と　羽笠
酌とる童（ワッパ）蘭切（きり）にいで　野水

秋のころ旅の御連歌いとかりに　芭蕉
漸くはれて富士みゆる寺　荷兮
寂として椿の花の落る音　杜國
茶に糸遊をそむる風の香　重五
雉追に烏帽子の女五三十　野水
庭に木曾作る戀の薄衣　羽笠
なつふかき山橘にさくら見ん　荷兮
麻かりといふ歌の集あむ　芭蕉
江を近く獨樂庵と世を捨て　重五
我月出よ身はおぼろなる　杜國
たび衣笛に落花を打拂　羽笠
籠輿ゆるす木瓜の山あひ　野水
骨を見て坐に泪ぐみうちかへり　芭蕉
乞食の蓑をもらふしのゝめ　荷兮
泥のうへに尾を引鯉を拾ひ得て　杜國
御幸に進む水のみくすり　重五
とにてる年の小角豆の花もろし　野水
萱屋まばらに炭團つく臼　羽笠
芥子あまの小坊交りに打むれて　荷兮
おるゝはすのみたてる蓮の實　芭蕉
しづかさに飯臺のぞく月の前　重五
露をくきつね風やかなしき　杜國
釣柿に屋根ふかれたる片庇　羽笠
豆腐つくりて母の喪に入　野水
元政の草の袂も破ぬべし　芭蕉
伏見木幡の鐘花をうつ　かけゐ
いろふかき男猫ひとつを捨かねて　杜國
春のしらすの雪はきをよぶ　重五
水干を秀句の聖わかやかに　野水
山茶花匂ふ笠のこがらし　うりつ

追加

いかに見よと難面うしをうつ霰　羽笠
樽火にあぶるかれはらの松　荷兮
とくさ苅下着に髮をちやせんして　重五
檜笠に宮をやつす朝露　杜國
銀に蛤かはん月は海　芭蕉
ひだりに橋をすかす岐阜山　野水

貞享甲子歳
京寺町二条上ル町
井筒屋庄兵衛板

可般圖

一番

左

古池や蛙飛こむ水のおと　　芭蕉

右

いたいけに蝦つくばふ浮葉哉　　仙化

此ふたかはづを何となく設たるに、四となり六と成て一巻にみちぬ。かみにたち下におくの品、をのをのあらそふ事なかるべし。

第二番

左勝

雨の蛙聲高になるも哀也　　素堂

右

泥龜と門をならぶる蛙哉　　文鱗

小田の蝦の夕ぐれの聲とよみけるに、雨のかはづも聲高也。右。淤泥の中に身をよごして、不才の才を楽しみ侍る龜の隣のかはづならん。門を並ぶると云たる。尤手きゝのしはざなれども、左の蛙の聲高には驚れ侍る。

第三番

左勝

きろきろと我頬守る蝦哉　　嵐蘭

右

人あしを聞しり顔の蛙哉　　孤屋

左。中の七文字の强きを以て、五文字置得て妙なり。かなと留りたる句ゝ多き中にも、此句にかぎりて哉といはずして、いづれの文字をかをかん。誠にきびしく云下したる、鬼拉一躰、これらの句にや侍らん。右。足音をとがめて、しばし鳴やみたる、面白く侍りけれ共、左の方勝れて聞侍り。

第四番

左持

木のもとの氈に敷るゝ蛙哉　　翠紅

右

妻負て艸にかくるゝ蛙哉　　濁子

飛かふ蛙、芝生の露を頼むだにはかなく、花みる人の心なきさま、得てしれることにや。つまおふかはづ艸がくれして、いか成人にかさがされつらんとおかし。持。

第五番

左

蓑うりが去年より見たる蛙哉　　李下

右勝

一畦はしばし鳴やむ蛙哉　　去來

左の句。去年より見たる水鷄か

なと申さまほし。早苗の頃の雨をたのみて、蓑うりの風情術たくみにや侍るべき。右。田ー畦をへだつる作ー意濃也。閑ーゝ(原本「コウ」と振假名あり)蛙ー聲などいふ句もたよりあるにや。長是群ー蛙苦相混。有時也作不平鳴。といふ句を得て以て力とし、勝。

第六番

左持　友五

鈴たえてかはづに休む驛哉

右　琪樹

足ありと牛にふまれぬ蛙哉

春の夜のみじかき程、鈴のたへまの蛙心にこりて、物うきねざめならんと感太し。右。かたつぶり角ありとても身をなたのみそとよめるを、やさしく云叶へられたり。野ー徑のかはづ眼前也。可爲持。

第七番

左　朱絃

僧いづく入相のかはづ亦淋し

右勝　紅林

ほそ道やいづれの艸に入蛙

雨の後の入相を聞て僧寺にかへるけしき、さながらに寂しく聞え侍れども、何れの艸に入かはづ、と心とめたる玉鉾の右を以て、左の方には心よせがたし。

第八番

左　芳重

夕影や筑ばに雲をよぶ蛙

右勝　扇雪

曙の念佛はじむるかはづ哉

左。田どのかはづ、つくば山にかけて雨を乞ふ夕べ、句がら大きに、氣色さもあるべし。右。思ひたへたる曉を、せめて念佛はじむる草菴の中、尤殊勝にこそ。

第九番

左勝　琴風

夕月夜畦に身を干す蝦哉

右　水友

飛かはづ猫や追行小野ゝ奥

身をほす蛙、夕月夜よく叶ひ侍り。右のかはづは、當時付句などに云ふれたるにや。小のゝおく取合侍れど、是また求め過たる名所とや申さん。閑ー寥の地をさしていひ出すは、一句たよりなかるべきか。たゞに工案の強弱をとらば、左かちぬべし。

第十番

左　徒南

あまだれの音も煩らふ蛙哉

右 勝　　　　枳風

哀にも蝌のつたふ筧かな

半檐疎雨作愁媒。鳴蛙似与幽人語。などゝも聞得たらましかば、よき荷擔なるべけれども、一句ふところせばく、言葉かなはず思はれ侍り。かへる子五文字よりの云流し、慈鎮西行の口質にならへるか。躬かしこければ右為勝。

第十一番

左　　　　全峰

飛かはづ鷺をうらやむ心哉

右 勝　　　　流水

藻がくれに浮世を覗く蛙哉

鷺来つて幽地にたてり。蛙問て曰。一足獨擧、靜にして寒葦に睡る。公、楽しい哉。鷺答へて曰。予人に向つて潔白にほこる事を要せず。只魚をうらやむ心有と。此争ひや、身閑に意くるしむ人を云か。藻がくれの蛙は志高遠にはせて、いはずこたへずといへども、見解おさ〳〵まさり侍べし。

第十二番

左 持　　　　嵐雪

よしなしやさでの芥とゆく蛙

右　　　　破笠

竹の奥蛙やしなふよしありや

左右よしありや、

よしなしや。

第十三番

左 持　　　　北鯤

ゆら〳〵と蛙ゆらるゝ柳哉

右　　　　コ斎

手をかけて柳にのぼる蛙哉

一ヶ木の柳なびきあひて、緑の色もわきがたきに、先一木の蛙は、花の枝末に手をかけて、とよめる歌のこと葉をわづかにとりて、遥なる木末にのぞみ、既のぼらんとしていまだのぼらざるけしき、しほらしく哀なるに、左の蛙は樹上にのぼり得て、ゆら〳〵と風にうごきて落ぬべきおもひ、玉篠の霰、萩のうへの露ともいはむ。左右しゐてわかたんには、數奇により、好むに隨ひて、けぢめあるまじきにもあらず侍れども、一巻のかざり、古今の姿、只そのまゝに筆をさしをきて、後みん人の心〳〵にわかち侍れかし。

第十四番

左 持　　　　ちり

手をひろげ水に浮ねの蛙哉

右　山居

露もなき晝の蓬に鳴かはづ

うき麻の蛙、流に枕して孫-楚が辨のあやまりを正すか。よもぎがもとのかはづの心、句も又むねせばく侍り。左右ともに勝負ことはりがたし。

第十五番

左　橘襄

蓑捨し雫にやどる蛙哉

右勝　蕉雫

若蘆にかはづ折ふす流哉

左。事可(キ)レ然躰(ル)にきこゆ。雫ほすみのに宿かると侍らば、ゆゝしき姿なるべきにや。捨るといふ字心弱くや侍らん。右。流れに添てすだく蛙、言葉たをやか也。可爲勝か。

第十六番

左　擧白

這出て艸に背をする蛙哉

右勝　卜宅

萍に我子とあそぶ蛙哉

艸に背をする蛙、そのけしきなきにはあらざれども、我子とあそぶ父母のかはづ、魚にあらずして其樂をしるか。雛鳧(スウフ)は母にそふて睡り、乳-燕哺(ホ)-烏その樂しみをみる所なり。風流の外に見る處實あり。尤勝たるべし。

第十七番

左持　宗派(波)

ちる花をかつぎ上たる蛙哉

右　嵐竹

朝草や馬につけたる蛙哉

飛花を追ふ池上のかはづ、閑人の見るに叶へるもの歟。朝-草に刈こめられて行衛しられぬ蛙、幾行の鳴をかよすらん。又捨がたし。

第十八番

左持　杉風

山井や墨のたもとに汲蛙

右　蚊足

尾は落てまだ鳴あへぬ蛙哉

山の井の蛙、墨のたもとにくまれたる心とば、幽玄にして哀ふかし。水汲僧のすがた、山井のありさま、岩などのたゝずまひ、も冷じからず。花もなき藤のちいさきが、松にかゝりて淸水のうへにさしおほひたらんなどゝ、さながら見る心地せらるゝぞ、詞の外に心あふれたる所ならん。右。日影あたゝかに、小田の水ぬるく、芹なづなやうの草も立のびて、蝶なんど飛かふ

あたり、かへる子のやゝ大きになりたるけしき、時に叶ひたらん風俗を以、爲持。

第十九番

左　勝　　　卜宅

堀を出て人待くらす蛙哉

右　　　　峡水

釣得てもおもしろからぬ蛙哉

此番は、判者執筆ともに遲き日を倦で、我を忘るゝにひとし。仍而以判詞不レ審。左かちぬべし。

第廿番

左　　　　そら

うき時は蟇の遠音も雨夜哉

右　　　　キ角

こゝかしこ蛙鳴ク江の星の數

うき時はと云出して、蟾の遠ねをわづらふ艸の菴の夜の雨に、涙を添て哀ふかし。わづかの文字をつんで、かぎりなき情を盡す。此道の妙也。右は、まだきさらぎの廿日餘り、月なき江の邊り風いまだ寒く、星の影ひか〳〵として、聲〻に蛙の鳴出たる、艶なるやうにて物すごし。靑艸池塘處〻蛙。約あつてきたらず半夜を過。と云ける夜の氣色も其儘にて、看所おもふ所、九重の塔の上に亦一雙加へたるならんかし。

追加

鹿島に詣侍る頃
眞間の繼はしにて

繼橋の案内顔也飛蛙　不卜

頃日深川芭蕉菴に會し、群蛙鳴句す。衆議判を以て禿筆を馳す。青蟾堂仙化子これを撰す。 印印

貞享三丙寅歳閏三月日

新革屋町　西村梅風軒彫刻

十二
頃日會深川芭蕉菴而
群蛙鳴句以衆議判之
馳禿筆青蟾堂仙化子
撰焉耳
貞享三丙寅歳閏三月日
新革屋町　西村梅風軒彫刻

芭蕉翁門俳書目録

みなし栗　其角輯　二冊

續みなし栗　同輯　二冊

花摘　同輯　二冊

其袋　嵐雪輯　二冊

蛙あはせ　芭蕉其角 素堂仙化輯　一冊

新二百韻　其角輯　一冊

皮籠摺　凉菟輯　二冊

俳諧小傘　初心之仕様 調宝拾ヶ条集化　一冊

丙寅紀行　風瀑集　一冊

新山家　其角輯　一冊

續花摘　湖十輯　二冊

春の日　越人　一冊

柿莚　宗瑞 呂尺　一冊

長楽寺千句　丈石　一冊

千載堂百歌仙集　丈石　五冊

誹諧書籍目録　三冊

波留濃日　全

一本紺表紙、外題如斯　コレゾ貞享ノ元版ナルベシ

一本表紙紺唐草模様、鏡形外題　松宇文庫本ト同一　共ニ樋口氏蔵

但版下孰レモ同筆

春乃日

松宇文庫

曙見んと、人〴〵の戸扣きあひて、熱田のかたにゆきぬ。渡し舟さはがしくなりゆく頃、並松のかたも見えわたりて、いとのどかなり。重五が枝折をける竹墻、ほどちかきにたちより、けさのけしきをおもひ出侍る。

二月十八日

春めくや人さまざまの伊勢まいり　荷兮
櫻ちる中馬ながく連　重五
山霞む月一時に館立て　雨桐
鐙ながらの火にあたる也　李風
しほ風によくよく闇(きけ)ば鵰なく　昌圭
くもりに沖の岩黒く見え　執筆
須磨寺に汗の帷子脫かへむ　重五
をのをのなみだ笛を戴く　荷兮
文王のはやしにけふも土つ(ほか)りて　李風
雨の雫の角のなき草　雨桐
肌寒み一度は骨をほどく世に　荷兮
傾城乳をかくす晨明　昌圭
霧はらふ鏡に人の影移り　雨桐
わやわやとのみ御輿かく里　重五
鳥居より半道奥の砂行て　昌圭
花に長男の紙鳶あぐる頃　李風
柳よき陰ぞこゝらに鞠なきや　重五
入かゝる日に蝶いそぐなり　荷兮

二

うつかりと麥なぐる家に連待て　李風
かほ懐に梓きゝゐる　雨桐
黒髪をたばぬるほどに切殘し　荷兮
いともかしこき五位の針立　昌圭
松の木に宮司が門はうつぶきて　雨桐
はだしの跡も見えぬ時雨ぞ　重五
朝朗豆腐を鳶にとられける　昌圭
念佛さぶげに秋あはれ也　李風
穗蓼生ふ藏を住ゐに侘なして　重五
我名を橋の名によばる月　荷兮
傘の内近付になる雨の昏に　李風
朝熊おるゝ出家ぼくぼく　雨桐
ほととぎす西行ならば歌よまん　荷兮
釣瓶ひとつを二人してわけ　昌圭
世にあはぬ局涙に年とりて　雨桐
記念にもらふ嵯峨の苣畑　重五
いく春を花と竹とにいそがしく　昌圭
弟も兄も鳥とりにゆく　李風

三月六日野水亭にて

なら坂や畑うつ山の八重ざくら　旦藁
おもしろふ霞むかたがたの鐘　野水
春の旅節供なるらん袴着て　荷兮
口すゝぐべき清水ながるゝ　越人
松風にたをれぬ程の酒の醉　羽笠
賣殘したる虫はなつ月　執筆
笠白き太秦祭過にけり　野水
菊ある垣によい子見てをく　旦藁
表町ゆづりて二人髪剃ん　越人
曉いかに車ゆくすじ　荷兮
鑓負ふて大津の濱に入にけり　旦藁
何やら聞ん我國の聲　越人
旅衣あたまばかりを蚊屋かりて　羽笠
萩ふみたをす万日のはら　野水

里人に薦を施す秋の雨　越人
月なき浪に重石をく橋　羽笠
ころびたる木の根に花の鮎とらん　野水
諷盡せる春の湯の山　旦藁
二
のどけしや筑紫の袂伊勢の帯　越人
内侍のえらぶ代々の眉の圖　荷兮
物おもふ軍の中は片わきに　羽笠
名もかち栗とぢゝ申上ゲ　野水
大年は念佛となふる惠美須棚　旦藁
ものごと無我によき隣也　越人
朝夕の若葉のために枸杞うへて　荷兮
宮古に廿日はやき麥の粉　羽笠
一夜かる宿は馬かふ寺なれや　野水
こは魂まつるきさらぎの月　旦藁
陽炎のもえ殘りたる夫婦にて　越人
春雨袖に御歌いたゞく　荷兮
ウ
田を持て花みる里に生れけり　羽笠
力の筋をつぎし中の子　野水
漣や三井の末寺の跡とりに　旦藁
高びくのみぞ雪の山〳〵　越人
見つけたり廿九日の月さむき　荷兮
君のつとめに氷ふみわけ　羽笠

（此卷は歌仙四月の一例なり＝虵石）

三月十六日旦藁が田家にとまりて

野水

蛙のみきゝてゆゝしき寐覺かな
額にあたるはる雨のもり　旦藁
蕨烹る岩木の臭き宿かりて　越人
まじ〳〵人をみたる馬の子　荷兮
立てのる渡しの舟の月影に　冬文
蘆の穂を摺る傘の端　執筆
ウ
磯ぎはに施餓鬼の僧の集りて　旦藁
岩のあひより藏みゆる里　野水
雨の日も瓶燒やらん煙たつ　荷兮
ひだるき事も旅の一つに　越人
尋よる坊主は住まず錠おりて　野水
解てやをかん枝むすぶ松　冬文

今宵は更けたりとてやみぬ。同十九日荷兮室にて

咲わけの菊にはおしき白露ぞ　越人
秋の和名にかゝる順　旦藁
初雁の聲にみづから火を打ぬ　冬文
別の月になみだあらはせ　荷兮
跡ぞ花四の宮よりは唐輪にて　旦藁
春ゆく道の笠もむつかし　野水
二
永き日や今朝を昨日に忘るらん　荷兮
簀の子茸生ふる五月雨の中　越人
紹鷗が瓢はありて米はなく　野水
連歌のもとにあたるいそがし　冬文
瀧壺に柴押まげて音とめん　越人
岩苔とりの籠にさげられ　旦藁
むさぼりに帛着てありく世の中は　冬文
莚一枚もひろき我庵　越人
朝毎の露あはれさに麥作ル　旦藁

暮うちを送るきぬ〴〵の月　野水
風のなき秋の日舟に網入よ　荷兮
鳥羽の湊のおどり笑ひに　冬文
あらましのざこね筑摩も見て過ぬ　野水
つら〳〵一期聟の名もなし　荷兮
我春の若水汲に晝起て　越人
餅を喰つゝいはふ君が代　旦藁
山は花所のこらず遊ぶ日に　冬文
くもらずてらず雲雀鳴也　荷兮

追加

三月十九日舟泉亭

山吹のあぶなき岨のくづれ哉　越人
蝶水のみにおるゝ岩はし　舟泉
きさらぎや餅酒すべき雪ありて　聴雪
行幸のために洗ふ土器　釜髭

朝日を鷹もつ鍛冶のいかめしく　荷兮
月なき空の門はやくあけ　執筆

春

昌陸の松とは盡ぬ御代の春　利重
元日の木の間の競馬足ゆるし　重五
初春の遠里牛のなき日哉　昌圭
けさの春海はほどあり麥の原　雨桐
門は松芍藥園の雪さむし　舟泉
鯉の音水ほの闇く梅白し　羽笠
舟〳〵の小松に雪の殘りけり　旦藁
曙の人顔牡丹霞にひらきけり　杜國
腰てらす元日里の睡りかな　犀夕
星はら〳〵かすまぬ先の四方の色　呑霞
けふとても小松負ふらん牛の夢　聴雪
朝日二分柳の動く匂ひかな　荷兮
先明て野の末ひくき霞哉　同
芹摘とてこけて酒なき瓢哉　旦藁

のがれたる人の許へ行とて

みかへれば白壁いやし夕がすみ　越人
古池や蛙飛こむ水のをと　芭蕉
傘張の睡り胡蝶のやどり哉　重五
山や花垣根〳〵の酒ばやし　龜洞
花にうづもれて夢より直に死んかな　越人

春野吟

足跡に櫻を曲る庵二つ　杜國
麓寺かくれぬものはさくらかな　李風
榎木まで櫻の遅きながめかな　荷兮

餞別

藤の花たゞうつぶいて別哉　越人
山畑の茶摘をかさす夕日かな　重五
蚊ひとつに寐られぬ夜半ぞ春のくれ　同

夏

ほとゝぎすその山鳥の尾は長し　九白

郭公さゆのみ焼てぬる夜哉　李風
かつこ鳥板屋の背戸の一里塚　越人
うれしさは葉がくれ梅の一つ哉　杜國
若竹のうらふみたそゝ雀かな　龜洞
傘をたゝまで螢みる夜かな　舟泉

武藏坊をとぶらふ

すゞかけやしてゆく空の衣川　商露

逢坂の夜は笠見ゆるほどに明て

馬かへておくれたりけり夏の月　聽雪

考聯曰知足之足常足

夕がほに雜炊あつき藁屋哉　越人
箒木の微雨こぼれて鳴蚊哉　柳雨
はゝき木はながむる中に昏（くれ）にけり　塵交
萱草は隨分暑き花の色　荷兮
蓮池のふかさわするゝ浮葉かな　同
曉の夏陰茶屋の遲きかな　昌圭
夏川の音に宿かる木曾路哉　重五

譬喩品の三界無安猶如火宅といへる心を

六月の汗ぬぐひ居る臺哉　越人

秋

背戸の畑なすび黄ばみてきり／＼す　且藁

貧家の玉祭

魂まつり柱にむかふ夕かな　越人
雁きゝてまた一寐入する夜哉　雨桐
雲折／＼人を休むる月見哉　芭蕉
山寺に米つくほどの月夜哉　越人
瓦ふく家も面白や秋の月　野水

八島をかける屛風の繪を見て

具足着た顏のみ多し月見舟　同

待戀

こぬ殿を唐黍高し見おろさん　荷兮

閑居增戀

秋ひとり琴柱はづれて寐ぬ夜かな　荷兮
朝貌は末一りんに成にけり　舟泉

冬

馬はぬれ牛は夕日の村しぐれ　杜國

芭蕉翁を宿し侍りて

霜寒き旅寐に蚊屋を着せ申　大垣住　如行
雪のはら薺の子の薄かな　昌碧
馬をさへながむる雪のあした哉　芭蕉
行燈の煤けぞ寒き雪のくれ　越人

芭蕉翁をおくりてかへる時

此頃の氷ふみわる名殘かな　杜國

隱士にかりなる室をもうけて

あたらしき茶袋一つ冬籠　荷兮

貞享三丙寅年仲秋下浣

書林　京堀川通錦小路上町　西村市郎右衛門

八 芭蕉翁門俳書目録

みなし栗 其角輯 二冊

續みなし栗 同輯 二冊

花摘 同輯 二冊

其袋 嵐雪輯 二冊

蛙あはせ 芭蕉其角 素堂仙化輯 一冊

新二百韻 其角輯 一冊

皮籠摺 涼菟輯 二冊

俳諧小傘 初心之仕様 調宝ねゝ集也 一冊

丙寅紀行 凡濤集 一冊

新山家 其角輯 一冊

續花摘 湖十輯 一冊

春乃日 越人 一冊

柿蔕 宗瑞 咫尺 一冊

長楽寺千句 丈石 一冊

千載堂百家仙集 丈石 五冊

俳諧書籍目録 三冊

阿羅野　上

杉宇文庫

尾陽蓬左、橿木堂主人荷兮子、集を編て名をあらのといふ。何故に此名有事をしらず。予はるかにおもひやるに、ひとゝせ此郷に旅寐せしおり〳〵の言捨、あつめて冬の日といふ。其日かげ相續きて春の日また世にかゞやかす。げにや衣更着やよひの空のけしき、柳櫻の錦を爭ひ、てふ鳥のをのがさま〴〵なる風情につきて、いさゝか實をそ

こなふものもあればにや、いといふのいとかすかなる心のはしの有かなきかにたどりて、姫ゆりのなにゝもつかず。雲雀の大空にはなれて、無景のきはまりなき、道芝のみちしるべせむと、此野の原の野守とはなれるべらし。

元祿二年彌生

芭蕉桃青

荒野集目録

卷之五

初冬 仲冬 歳暮

卷之六

雜

卷之七

名所 旅 述懐 恋 無常

卷之八

釋教 神祇 祝

員外

曠野集巻之一

花三十句

よしのにて

これはこれはとばかり花の芳野山　貞室

歌まくらいまだ見る花のあるじ尓　路通

芳野白雲つきけるものくま肌猶林の肌　信徳

まよひちやのどことし遙へくものくまゝ　最闇

吉湖し花乃後よら見乃　交五

山里に喰ものしゐる花見かな　尙白
何事ぞ花みる人の長刀　去來
みねの雲すこしは花もまじるべし　野水
花のなか下戸引て來るかいな哉　龜洞
下ゝの下の客といはれん花の宿　越人
はなの山常折くぶる枝もなし　一井
見あげしがふもとに成ぬ花の瀧　（津島）俊似
兄弟のいろはあげゝり花のとき　鼠彈
ちるはなは酒ぬす人よく〳〵　舟泉
冷汁に散てもよしや花の陰　胡及
はつ花に誰が傘ぞいまいまし　長虹
柴舟の花咲にけり宵の雨　（津島）卜枝
おるときになりて迯けり花の枝　（岐阜）鷗歩
連だつや従弟はおうし花の時　荷兮
草箱の跡また見ゆるはた見哉　傘下
あらけなや風車賣（うる）花のとき　藩芝
花にきてうつくしく成（なる）心哉　たつ
山あひのはなを夕日に見出したり　心苗
おもしろや理窟はなしに花の雲　越人

なりあひやはつ花よりの物わすれ　野水
獨來て友選びけり花のやま　冬松
花鳥とこけら葺ゐる尾上かな　冬文
首出して岡の花見よ蚫とり　荷兮

酒のみ居たる人の繪に

月花もなくて酒のむひとり哉　芭蕉

ある人の山家にいたりて

櫃の木のはなにかまはぬすがた哉　同

杜宇二十句（原書一句を缺けり）

ほとゝぎすを飼をくもみに
求得て放やるときに

鳥籠の憂目見つらん郭公　季吟
日には青葉山ほとゝぎす初がつほ　素堂
いそがしきなかに聞けり蜀魄　釣雪
蠟燭のひかりにくしやほとゝぎす　越人
おひし子の口まねするや時鳥　（津島）桂下
跡や先氣のつく野邊の郭公　重五
ほとゝぎすどれからきかむ野の露き　柳風

ある人のもとにて發句せよ
と有ければ

ほとゝぎすはゞかりもなき鳥かな　鼠彈
晴ちぎる空鳴行やほとゝぎす　落梧
蚊屋臭き簾覺うつゝや時鳥　一髮
三聲ほど跡のおかしや郭公　同

淀にて

ほとゝぎす十日もはやき夜舟哉　風泉
嬉しさや寐入らぬ先のほとゝぎす　（岐阜）杏雨
あぶなしや今起て聞郭公　傘下
くらがりや力がましきほとゝぎす　同
馬と馬よばりあひけり郭公　鈍可

たゞありあけの月ぞのこれ
ると吟じられしに

歌がるたにくき人かなほとゝぎす　（大津）智月
うつかりとうつむきたり時鳥　李桃
うつかりと春の心ぞほとゝぎす　市山

月三十句

かる〳〵と笹のうへゆく月夜哉　（十二歳）梅舌
これがしも月見る中の獨かな　清水

月ひとつばひとりがちの今宵哉　一雪
雨の月どこともなしの薄あかり　越人
けうとさに歩脇むく月夜哉　昌碧
屋わたりの宵はさびしや月の影　津島 市柳
おかしげにほめて詠る月夜哉　一髪
どこまでも見とをすの野中哉　長虹
峠迄硯抱て月見かな　任他
一つ屋やいかいこ見るけふのつき　龜洞
名月は夜明るきはもなかりけり　越人
名月やとしに十二は有ながら　文鱗
名月やかいつきたてゝつなぐ舟　昌碧
めいげつやはだしでありく草の中　傘下
名月や皷の聲と犬のこゑ　二水
見るものと覺えて人の月見哉　野水

名月の心いそぎに

むつかしと月を見る日は火も燒かじ　荷兮
いつの月もあとを忘れて哀也　同
名月や海もおもはず山も見ず　去來
めいげつや下戸と下戸とのむつまじき　胡及
めいげつはありきもたらぬ林かな　釣雪
宵に見し橋はさびしや月の影　一髪

十三夜

影ふた夜たらぬ程見る月夜哉　杉風

朔日

暮いかに月の氣もなし海の果　荷兮

二日

見る人もたしなき月の夕かな　仝

三日

何事の見たてにも似ず三かの月　芭蕉

四日

夕月夜あんどんけしてしばしみむ　卜枝

五日

何日とも見さだめがたや宵の月　伊豫 一泉

六日

銀川(あまのかは)見習ふ頃や月のそら　岡崎 鶴聲

七日

能ほどにはなして歸る月夜哉　岐阜 一髪

雪二十句

大津にて

雪の日や船頭どのゝ顔の色　其角
いざゆかむ雪見にころぶ所まで　芭蕉
竹の雪落て夜るなく雀かな　塵交
かさなるや雪のある山只の山　京 加生
車道雪なき冬のあしたかな　加賀 小春
はつ雪を見てから顔を洗けり　越人
はつ雪に戸明ぬ留主の菴哉　是幸
ものかげのふらぬも雪の一つ哉　松芳
くらき夜に物陰見たり雪の隈　二水
雪降て馬屋にはいる雀かな　舃仙
夜の雪おとさぬやうに枝折らん　岐阜 除風
ゆきの日や川筋ばかりほそ〴〵と　鷺汀
初雪やおしにぎる手の奇麗也　傘下
雪の江の大舟よりは小舟かな　芳川
雪の朝から鮭わくる聲高し　冬文
雪の暮猶さやけしや鷹の聲　桂夕

ちら〳〵や淡雪かゝる酒強飯　荷兮
はつ雪や先草履にて隣まで　路通
はかられし雪の見所有り所　野水
舟かけていくかふれども海の雪　芳川

曠野集巻之二

歳旦

二日にもぬかりはせじな花の春　芭蕉
たれ人の手がらもからじ花の春　羽 古梵
わか水や凡千年のつるべ縄　風鈴軒
松かざり伊勢が家買人は誰　其角
うたか否連歌にあらずにし肴　文鱗
月雪のためにもしたし門の松　去來
かざり木にならで年ふる柏哉　一晶
元朝や何となけれど遅ざくら　路通
元日は明すましたるかすみ哉　加賀 一笑
歯固に梅の花かむにほひかな　大垣 如行

ふたつ社老にはたらねとしの春　岐阜 落梧
若水をうちかけて見よ雪の梅　龜洞
伊勢浦や御木引休む今朝の春　同
とぶきの名をつけて見む宿の梅　昌碧
去年の春ちいさかりしが芋頭　元廣
小柑子栗やひろはむまつのかど　舟泉
とし男千秋楽をならひけり　同
山柴にうら白まじる竈かな　重五
松高し引馬つるゝ年おとこ　釣雪
月花の初は琵琶の木どり哉　同
連てきて子にまはせけり万歳楽　一井
うら白もはみちる神の馬屋哉　胡及
見おぼえむこや新玉の年の海　長虹
今朝と起て縄ぶしほどく柳哉　鼠彈
さほ姫やふかいの面いかならむ　同
蓬萊や舟の匠のかんなくず　湍水
佛より神ぞたうとき今朝の春　京 とめ
のゝ宮やとしの旦はいかならん　朴什
かざりにとたが思ひだすたはら物　冬文

正月の魚のかしらや炭だはら　傘下
けさの春寂しからざる閑かな　冬松
あい〳〵に松なき門もおもしろや　柳風
大服は去年の青葉の匂哉　防川
鶯の聲聞まいれ年おとこ　犬山 昌勝
傘に歯朶かゝりけりえ方だな　夕道
袖すりて松の葉契る今朝の春　梅舌
たてゝ見む霞やうつる大かゞみ　野水
曙は春の初やだうぶくら　同
はつ春のめでたき名なり賢魚ゝ　越人
（賢は堅の誤にて「かつを〳〵」とよむならん）
初夢や濱名の橋の今のさま　同
しづやしづ御階にけふの麥厚し　荷兮
萬歳のやどを隣に明にけり　同
巳のとしやむかしの春のおぼつかな　同
我は春目かどに立るまつ毛哉　僧 船齋
我等式が宿にも來るや今朝の春　貞室

初春

若菜つむ跡は木を割畑哉　越人
精出して摘とも見えぬ若菜哉　野水
七草をたゝきたがりて泣子かな　津島 俊似
女出て鶴たつあとの若菜哉　加賀 小春
側濡て袂のおもき薺菜かな　藤羅
吾うらも殘してをかぬ若菜哉　岐阜 素秋
石釣てつぼみたる梅折しけり　玄察
隱居て折にもどかし梅の花　鷗歩
むめの花もの氣にいらぬけしき哉　越人
藪見しれもどりに折らん梅の花　落梧
梅折てあたり見廻す野中かな　一髪
華もなきむめのずはいぞ頼母しき　冬松
みのむしとしれつる梅のさかり哉　蕉笠

網代民部の息に逢て

梅の木になをやどり木や梅の花　芭蕉
うぐひすの鳴そこなへる嵐かな　長良 若風
鶯の鳴や餌ひろふ片手にも　去來
あけぼのや鶯とまるはね釣瓶　伊賀 一桐
鶯にちいさき藪も捨られし　津島 一笑

うぐひすの聲に脱たる頭巾哉　同 市柳
鶯になじみもなきや新屋敷　同 夢々
うぐひすに水汲こぼすあした哉　梅舌
さとかすむ夕をまつの盛かな　野水
行〳〵て程のかはらぬ霞哉　塵交
行人の蓑をはなれぬ霞かな　冬文
かれ芝やまだかげろふの一二寸　芭蕉
かげろふや馬の眼のとろ〳〵と　傘下
水仙の見る間を春に得たりけり　路通
蝶鳥を待るけしきやものゝ枝　荷兮

當座題

さし木

つきたかと兒のぬき見るさし木哉　舟泉

接木

つまの下かくしかねたる繼穗かな　傘下

椿

曉の釣瓶にあがるつばきかな　荷兮

同

藪深く蝶氣のつかぬつばき哉　卜枝

春雨

はる雨はいせの望一がこより哉　湍水

同

春の雨弟どもを呼でこよ　鼠彈

白尾鷹

はやぶさの尻つまげたる白尾哉　野水
蛛のゐに春雨かゝる雫かな　奇生
立臼に若草見たる明屋哉　十一歳 龜助
すこ〳〵と親子摘けりつく〳〵し　舟泉
すこ〳〵と摘やつまずや土筆　其角
すこ〳〵と案山子のけけり土筆　蕉笠
土橋やよこにはへたるつく〳〵し　塩車
川舟や手をのべてつむ土筆　冬文
つく〳〵し頭巾にたまるひとつより　靑江

蘭亭の主人池に鵞を愛せられしは筆意有故也

池に鵞なし假名書習ふ柳陰　素堂
風の吹方を後のやなぎ哉　野水
何事もなしと過行柳哉　越人

さし柳たゞ直なるもおもしろし　一笑
尺ばかりはやたはみぬる柳哉　小春
すがれ〳〵柳は風にとりつかむ　一笑
とりつきて筏をとむる柳哉　昌碧
さはれども髪のゆがまぬ柳哉　杏雨
みじかくて垣にのがるゝ柳哉　此橋
ふくかぜに牛のわきむく柳哉　杏雨
吹風に鷹かたよするやなぎ哉　松芳
かぜふかぬ日はわがなりの柳哉　校遊
いそがしき野鍛冶をしらぬ柳哉　荷兮
蝙蝠にみだるゝ月の柳哉　仝
青柳にもたれて通す車哉　素秋
引いきに後へころぶ柳かな　鴎歩
菊の名は忘れたれども植にけり　生林

仲春

麦の葉に菜のはなかゝる嵐哉　不悔
菜の花や杉菜の土手のあい〳〵に　長虹
なの花の座敷にうつる日影哉　傘下
菜の花の畦うち残すながめ哉　清洞
うごくとも見えで畑うつ麓かな　去來
万歳を仕舞ふてうてる春田哉　昌碧
つばきまで折そへらるゝさくらかな　越人
廣庭に一本植しさくら哉　笑艸
とき〳〵は蓑干(ほす)さくら咲にけり　除風
手のとゞくほどはおらるゝ櫻哉　一橋
うしろより見られぬ岨の櫻哉　冬松
すこ〳〵と山やくれけむ遅ざくら　一髪
はる風にちからくらぶる雲雀哉　野水
あふのきに寐てみむ野邊の雲雀哉　除風
高聲につらをあかむる雉子かな　一雪
行かゝり輪縄解てやる雉子哉　鹽車
手をついて歌申あぐる蛙かな　山崎 宗鑑
鳴立ていりあひ聞ぬかはづかな　落梧
あかつきをむづかしさうに鳴蛙　越人
いくすべり骨おる岸のかはづ哉　去來
飛入てしばし水ゆく蛙かな　落梧
不圖と飛で後に居なをる蛙哉　津嶋 松下
ゆふやみの唐網(たうあみ)にいる蛙かな　一井
はつ蝶を兒(ちご)の見出す笑ひ哉　柳風
椶櫚の葉にとまらで過る胡蝶哉　梅餌
かやはらの中を出かぬるこてふかな　炊玉
かれ芝や若葉たづねて行胡蝶　百歳

暮春

何の氣もつかぬに土手の菫哉　忠知
ねぶたしと馬には乘らぬ菫草　荷兮
ほうろくの土とる跡は菫かな　野水
晝ばかり日のさす洞の菫哉　舟泉
草刈て菫選出す童かな　鴎歩
行蝶のとまり残さぬあざみ哉　燭遊
麦畑の人見るはるの塘かな　杜國
はげ山や朧の月のすみ所　大坂 式之
ほろ〳〵と山吹ちるか瀧の音　芭蕉
松明にやま吹うすし夜のいろ　野水
山吹とてふのまぎれぬあらし哉　卜枝
一重かと山吹のぞくゆふべかな　岐阜 襟雪
とりつきてやまぶきのぞくいはね哉　同 蓬雨
あそぶともゆくともしらぬ燕かな　去來

去年の巢の土ぬり直す燕かな　俊似
いまきたといはぬばかりの燕かな　長之
燕の巢を覗行すゞめかな　長虹
黃昏にたてだされたる燕哉　鼠彈
友減て鳴音かいなや夜の鴈　旦藁
角落てやすくも見ゆる小鹿哉　蕉笠
なら漬に親よぶ浦の鹽(汐)干哉　越人
おやも子も同し飲手や桃の酒　傘下
人霞む舟と陸との鹽(汐)干かな　三輪 友重
山まゆに花咲かぬる躑躅かな　荷兮
朧夜やながくてしろき藤の花　兼正
篝火に藤のすゝけぬ鵜舟かな　龜洞
永き日や鐘突跡もくれぬ也　卜枝
永き日や油しめ木のよはる音　野水
行春のあみ鹽からを殘しけり　同

曠野集卷之三

初夏

ころもがへや白きは物に手のつかず　路通
更衣襟もおらずやだゞくさに　傘下
ころもがへ刀もさして見たき哉　釋 鼠彈

背柏老人のもちたまひしあらし山といふ香を、馬のはなむけに文鱗がくれけるとて、雪の朝越人が持きたるを忘れがたく、明るわか葉の頃、文鱗に申つかはしける。

髭に焼香もあるべしころもがへ　荷兮

山路にて

なつ來てもたゞひとつ葉の一つ哉　芭蕉
いちはつはおとこなるらんかきつばた　一非
柿の木のいたり過たる若葉哉　越人
切かぶのわか葉を見れば櫻哉　岐阜 不交
若葉からすぐにながめの冬木哉　同 藤蘿
わけもなくその木〱の若葉哉　龜洞
ひら〱とわか葉にとまる故(胡)蝶哉　竹洞
ゆあびして若葉見に行夕かな　鈍可
はげ山や下行水の澤卯木　夢々
上ゲ土にいつの種とて麥一穗　玄寮
枯色は麥ばかり見る夏の哉　生林
麥かりて桑の木ばかり殘りけり　作者 不知
むぎがらにしがるゝ里の葵かな　鈍可
しら芥子にはかなや蝶の鼠いろ　嵐蘭
烏飛てあぶなきけしの一重哉　落梧
けし散て直に實を見る夕哉　岐阜 李桃
大粒な雨にこたえし芥子の花　東巡
散たびに見ぞ拾ひぬ芥子の花　吉次

深川の庵にて

庵の夜もみじかくなりぬすこしづゝ　嵐雪
さびしさの色はおぼえずかつこ鳥　野水

仲夏

宵の間は笹にみだるゝ螢かな　櫻井 元輔
刈草の馬屋に光るほたるかな　一髮
窓くらき障子をのぼる螢哉　不交

闇きよりくらき人呼螢かな　風笛
道細く追はれぬ澤の螢かな　青江
あめの夜は下ばかり行螢かな　含呫
くさかりの袖より出るほたる哉　卜枝
水汲て濡たる袖のほたるかな　鷗歩

はじめて葎室をとぶらはれる頃

こゝらかとのぞくあやめの軒端哉　秋芳
蚊のむれて栂の一木の曇けり　小春
かやり火に寐所せまくなりにけり　杏雨
雨のくれ傘のぐるりに鳴蚊かな　二水
蚊の痩て鎧のうへにとまりけり　一笑
藻の花をかづける蜑の髪かな　胡及
鹽引て藻の花しぼむ暑さかな　兒竹
足伸べて姫百合(ゆり)[illegible]折らす晝ね哉　此橋
竹の子に行燈さげてまはりけり　長虹
笋の時よりしるし弓の竹　去來
聞おればたゝくでもなき水鷄哉　野水
五月雨に柳きはまる汀かな　大津 一龍

この頃は小粒になりぬ五月雨　尙白
五月雨は傘に音なきを雨間哉　龜洞

岐阜にて

おもしろうさうしさばくる鵜繩哉　貞室

おなじ所にて

おもしろうてやがてかなしき鵜舟哉　芭蕉

おなじく

鵜のつらに篝こぼれて憐也　荷兮

同

聲あらば鮎も鳴らん鵜飼舟　越人
先ぶねの親もかまはぬ鵜舟哉　大津 淳兒
曲江に篝の見えぬうぶねかな　梅餌
鳰の巣の見えたりあるはかくれたり　路通
松笠の緑を見たる夏野哉　卜枝
虹の根をかくす野中の樗哉　鈍可
蘭の花や泥によごるゝ宵の雨　同
撫子や蒔繪書人をうらむらん　越人
冷(すさま)じや灯(ともしび)のこる夏のあさ　藤羅
夏の夜やたき火に簾見ゆる里　旦藁

菴の留主に

すびつさへすごきに夏の炭俵　其角
夕がほや秋はいろ／＼の瓢かな　芭蕉
ゆふがほのしぼむは人のしらぬ也　野水
夕貌は蚊の鳴ほどのくらさ哉　偕雪
山路來て夕がほみたるのなか哉　津島 市柳
名はへちまゆふがほに似て哀也　長虹

暮夏

楠も動くやう也蟬の聲　昌碧
雲の峯腰かけ所たくむなり　野水
夕立に干傘ぬるゝ垣穗かな　傘下
すゞしさに榎もやらぬ木陰哉　玄旨法印
（「榎」と「得退き」との秀句なり）
涼しさよ白雨ながら入日影　去來
簾して涼しや宿のはいりくち　荷兮
はき庭の砂あつからぬ曇哉　同
おもはずの人に逢けり夕涼み　鳴海 如風
飛石の石龍(とかげ)や草の下涼み　津島 俊似
涼しさや樓の下ゆく水の音　仝

挑燈のどこやらゆかし涼み舟　卜枝
すゞしさをわすれてもどる川邊哉　未學
吹ちりて水のうへゆく蓮かな　岐阜 秀正
蓮みむ日にさかやきはわるゝとも　松坂 晨風
笠を着てみな／＼蓮に暮にけり　古梵
河骨に水のわれ行ながれ哉　芙水
はら／＼としみづに松の古葉哉　長虹
すみきりて鹽(汐)干の沖の清水哉　俊似
漣あまた待せて結ぶし水哉　文瀾
引立て馬にのまするし水かな　涼月
かたびらは淺黄着て行清水哉　尚白
直垂をぬがずに結ぶしみづかな　一髪
虫ぼしや幕をふるえばさくら花　卜枝
麻の露皆こぼれけり馬の路　岐阜 李晨
釣鐘草後に付たる名なるべし　越人
綿の花たま／＼蘭に似るかな　素堂

曠野集卷之四

初秋

ちからなや麻刈あとの秋の風　越人
梧の葉やひとつかぶらん秋の風　圓解

松嶋雲居の寺にて

一葉散音かしましきばかり也　仙化
かたびらのちゞむや秋の夕げしき　津島 方生
男くさき羽織を星の手向哉　杏雨
朝貌は酒盛しらぬさかりかな　芭蕉
蕣や垣ほのまゝのじだらくさ　文鱗
あさがほの白きは露も見えぬ也　荷兮

子を守るものにいひし詞の句になりて

朝顔をその子にやるなくらふもの　同
隣なるあさがほ竹にうつしけり　鴎歩
あさがほやひくみの水に殘る月　胡及
葉より葉にものいふやうや露の音　鼠彈
秋風やしら木の弓に弦はらん　去來
涼しさは座敷より釣鱸かな　昌長
畦道に乗物すゆるいたばかな　鷺汀
まつむしは通る跡より鳴にけり　一髪
きり／＼す燈臺消て鳴にけり　素秋
あの雲は稻妻を待たより哉　芭蕉
いなづまやきのふは東けふは西　其角
ふまれてもなをうつくしや萩の花　舟泉
ひよろ／＼と猶露けしや女郎花　芭蕉
棚作ルはじめさびしき葡萄哉　作者 不知
草ぼう／＼からぬも荷ふ花野哉　伏見 任口
もえきれて紙燭をなぐる薄哉　荷兮
行人や堀にはまらんむら薄　胡及

宗祇法師のこと葉によりて

名もしらぬ小草花咲野菊哉　素堂
とし／＼のふる根に高き薄哉　俊似

仲秋

かれ朶に烏のとまりけり秋の暮　芭蕉
つく／＼と繪を見る秋の扇哉　加賀 小春
谷川や茶袋そゝぐ秋のくれ　津島 益音
石切の音も聞けり秋の暮　傘下

斧のねや蝙蝠出る秋のくれ　卜枝
鹿の音に人の貌見る夕べ哉　一髪
田と畑を獨りにたのむ案山子かな　伊豫 一泉
山賤が鹿驚作りて笑ひけり　重五
紅葉にはたがをしへける酒の間（かん）　其角
しらぬ人と物いひて見る紅葉哉　東順
藪の中に紅葉みじかき立枝哉　林斧
どことなく地をはふ蔦の哀也　越水
わが宿はどこやら秋の草葉哉　宗和

わが草庵にたづねられし頃

耻もせず我なり秋とおごりけり　北枝

素堂へまかりて

はすの實のぬけつくしたる蓮のみか　越人
一本の蘆の穗瘦しるせき哉　防川
松の木に吹あてられな秋の蝶　舟泉
はつとして寐られぬ蚊屋のわかれ哉　胡及
心にもかゝらぬ市のきぬたかな　曉鼯

關の素牛にあひて

さぞ砧孫六やしき志津屋敷　其角

よしのにて

きぬたうちて我にきかせよ坊がつま　芭蕉
いそがしや野分の空の夜這星　加賀 一笑

暮秋

なにとなく植しか菊の白き哉　巴丈
しら菊のちらぬぞ少口おしき　昌碧
山路のきく野菊とも又ちがひけり　越人
一色や作らぬ菊のはなざかり　曉鼯

荷兮が室に旅ねする夜、草臥なをせとて、箔つけたる土器出されければ、

かはらけの手ぎは見せばや菊の花　其角
菊のつゆ凋（しをる）る人や髮帽子　同
けふになりて菊作ふとおもひけり　二水
かなぐりて蔦さへ霜の鹽木哉　伊豫 千閣
淋しさは欅の實落るね覺哉　濃州 蘆夕
殘る葉ものこらずちれや梅もどき　加生
蘆の穗やまねく哀れよりちるあはれ　路通

曠野集巻之五

初冬

あめつちのはなしとだゆる時雨哉　湖春

京なる人に申遣しける

一夜きて三井寺うたへ初しぐれ　尙白
はつしぐれ何おもひ出すこの夕　湍水

万句興行に

見しり逢ふ人のやどりの時雨哉　荷兮

人を待らくる日に

今朝は翁そらばかり見るしぐれ哉　落梧
釣がねの下降のこすしぐれかな　炊玉
渡し守ばかり蓑着るしぐれ哉　傘下
こがらしに二日の月のふきちるか　荷兮
一葉づゝ柿の葉みなに成にけり　一髪
このはたく跡は淋しき囲爐裏哉　同
枇杷の花人のわするゝ木陰かな　同
茶の花はものゝついでに見たる哉　李晨

梨の花しぐれにぬれて猶淋し　野水
蓑虫のいつから見るや歸花　昌碧
麥まきて奇麗に成し庵哉　仝
のどけしや麥まく頃の衣がへ　一井
縫ものをたゝみてあたる火燵哉　落梧
石臼の破ておかしやつはの花　胡及
青くともとくさは冬の見物哉　文鱗
あたらしき釣瓶にかゝる葱(葱)かな　卜枝
冬枯に風の休みもなき野哉　洞雪
蓮池のかたちは見ゆる枯葉哉　一髪
鷹居て石けつまづくかれ野哉　松芳
こがらしに吹とられけり鷹の巾　杏雨
鷹狩の路にひきたる蕪哉　蕉笠

寒　月

爐を出て度〳〵月ぞ面白き　野水
あさ漬の大根あろふ月夜哉　俊似

仲　冬

おろしをく鐘しづかなる霰哉　津島 勝吉
しら浪とつれてたばしる霰哉　津島 重治
霍よする馬糞にまじるあられ哉　林斧
柴の戸をほどく間にやむ霰哉　杏雨
いたどける柴をおろせば霰かな　宗之
霜の朝せんだんの實のこぼれけり　杜國
水棚の菜の葉に見たる氷かな　勝吉
深き池氷のときに覗きけり　俊似
つきはりてまつ葉かきけり薄氷　除風
打おりて何ぞにしたき氷柱哉　夜舟

兼題　雪舟

峠より雪舟乘をろす鹽木哉　鼠彈
ぬつくりと雪舟に乘たるにくさ哉　荷兮
夜をこめて雪舟に乘たるよめり哉　長虹
馬屋より雪舟引出す朝かな　一井
雪舟引や休むも直に立てゐる　龜洞
つけかへておくるゝ雪舟のはや構哉　含呫
靑海や羽白黒鴨赤がしら　白炭ノ 忠知
舟にたく火に聲たつる衛哉　龜洞
朝鮮を見たもあるらん友千鳥　村俊

井を堀る者は六月寒く、米つくおとこは冬裸かなり。

汗出して谷に突こむ氷室哉　冬松
海鼠腸の壺埋めたき氷室哉　利重
炭竈の穴ふさぐやら薄けぶり　龜洞
膝節をつゝめど出るさむさ哉　鹽車
火とぼして幾日になりぬ冬椿　加賀 一笑
いつこけし庇起せば冬つばき　龜洞
冬籠りまたよりそはん此はしら　芭蕉

歳　暮

餅つきや内にもおらず酒くらひ　李下
吾書てよめぬもの有り年の暮　尚白
もち花の後はすゝけてちりぬべし　野水
はる近く榾つみかゆる菜畑哉　龜洞
煤はらひ梅にさげたる瓢かな　一髪

木曾の月みてくる人の、みやげにとて杼の實ひとつおくらる。年の暮までうしなはず、かざりにやせむとて、

としのくれ杼の實一つころ〳〵と　荷兮
門松をうりて蛤一荷ひ　内習
田作に鼠追ふよの寒さ哉　龜洞

上　野驍

荒野集巻之六

雑

年中行事内十二句　　荷兮

供居蘇白散

いはけなやとそなめ初る人次第

春日祭

としどに鳥居の藤のつぼみ哉

石清水臨時祭

沓音もしづかにかざすさくら哉

灌佛

けふの日やついでに洗ふ佛達

端午

おも痩て葵付たる髪薄し

施米

うち明てほどこす米ぞ虫臭き

乞巧奠(奠)

わか菜より七夕草ぞ覺えよき

駒迎

爪髪も旅のすがたやこまむかへ

撰虫

草の葉や足のおれたるきりぎりす

十月更衣

玉しきの衣かへよとかへり花

五節

舞姫に幾たび指を折にけり

追儺(儺)

おはれてや脇にはづるゝ鬼の面

詩題十六句　　野水

今日不知誰計會
春風春水一時來

氷ゐし添水またなる春の風

白片落梅浮澗水

水鳥のはしに付たる梅白し

春來無伴閑遊少

花賣に留主たのまるゝ隣哉

花下忘歸因美景

寐入なばもの引きせよ花の下

留春春不留(住)
春歸人寂寞

行春もこゝろへがほの野寺かな

微風吹袂衣
不寒復不熱

綿脱(わたぬき)は松かぜ聞(きゝ)に行(ゆく)ころか

池晩蓮芳謝

蓮の香も行水したる氣色哉

暑月貧家何處有客
來唯贈北窓風

涼めとて切ぬきにけり北のまど

大底(抵)四時心惣苦就中斷
腸是秋天

雪の旅それらではたなし秋の空

夜來風雨後　秋氣颯然新

秋の雨はれて瓜よぶ人もなし

遲々鐘漏(鼓)初長夜
耿々星河欲曙天

ひとしきりひだるうなりて夜ぞ長き

殘燈影閃墻斜月光穿牖(諸本殘燈影閃墻斜月光穿牖ト誤ル)

獨り寐や泣たる貌にまどの月

万物秋霜能懷(壞)色

白菊や素顏で見むを秋の霜

十月江南天氣好
可憐冬景似春美(華)

こがらしもしばし息つぐ小春哉

寂寞深村夜殘雁雪中聞

鉢たゝき出もこぬむらや雪のかり

白頭夜禮佛名經

佛名の禮に腰懷く白髮哉

禪閤の撰びのこし給ひしも、
さすがにおかしくて、

鍋鏽目立

かげろふの夕日にいたきつぶり哉

舟泉

付木突

五月闇水鶏ではなし人の家

銚瓶繩打

かへるさや酒のみによる秋の里

糊賣

あさ露のぎぼう折けむつくもがみ

馬糞搔

こがらしの松の葉かきとつれ立て

越人

李夫人

魂在何許香煙引到焚香(諸本香煙)處

かげろふの抱つけばわがころも哉

楊貴妃

雲髻半偏新睡覺花
冠不整下堂來(諸本)

はる風に帶ゆるみたる寐貌哉

昭(上)陽人

小頭鞋履窄衣裳青黛點眉々
細長外人不見々應笑

もの數寄やむかしの春の儘ならん

西施

宮中拾得娥眉斧不獻吾君是
愛君

花ながら植かへらるゝ牡丹かな

王昭君

玉貌風沙滕(勝)畫圖

よの木にもまぎれぬ冬の柳哉

一日留主をする事侍りて

釣雪

卯

寐やの蚊や御佛供燒火に出て行

辰

杜若生ん繪書の來る日哉

巳

講釋の眠りにつかふ扇哉

午

水あびよ藍干上を踏ずとも

未

蟬の音に武家の夕食過にけり

申

五月雨や鵜とまるはね作り

所にありて生をたつ事是非
なし

山　獣

鹿笛の上手を盡すあはれさよ　樹水

野　鳥

鴫突の行影長き日あし哉　兒竹

里　虫

枝ながら虫うりに行蜀漆(ゆくくさぎ)かな　舎呫

海　魚

おもしろと鰯引けり盆の月　仝

川　魚

秋の昏鵜川〳〵の火ぶり哉　舎呫

牛馬四足是謂天落馬首穿牛
鼻是謂人

一方は梅さく桃の纖木かな　越人

藏舟於壑、藏山於澤、謂之
固矣。然而夜半有力者、負
之而走。(原本　固ノ下矣ヲ脱シ、有ノ下々ヲ加フ。矣ニ誤ナリ)

からながら師走の市にうるさゞい

絶聖棄知、大盗乃止。

七夕よ物かすともなきむかし

鈍者夭

散はてゝ跡なきものは花火哉　桂夕

鈍者壽

鶏頭の雪になる迄紅(あかき)かな　市山

藤　房

ほとゝぎす鳴やむ時をしりにけり　一非

師　直

うつくしく人にみらるゝ荊哉　長虹

一　休

いろ〳〵のかたちおかしや月の雲　湍水

法　然

鳴聲のつくろひもなきうづら哉　鼠彈

山　岩

おくやまは霰に減るか岩の角　湍水

海　岩

苔(つり)とりし跡には土もなかりけり　仝

曠野集巻之七

名所

八重がすみ奥迄見たる龍田哉　杜國

しら魚の骨や式部が大江山　荷兮

から崎の松は花より朧にて　芭蕉

薬一把かりて花見る阿波手哉　湍水

嵯峨までは見事あゆみぬ花盛　荷兮

琵琶橋眺望

雪残る鬼嶽(獄)さむき彌生かな　舎呫

關こえて爰も藤しろみさか哉　宗祇法師

美濃國關といふ所の山寺に、藤の咲たるを見て吟じ給ふと也。

芳野出て布子賣おし更衣　杜國

麥うつや内外もなき志賀のさと　重五

五月雨にかくれぬものや瀬田の橋　芭蕉

湖の水まさりけり五月雨　去來

牛もなし烏羽のあたりの五月雨　一髪

角田川にて

いざのぼれ嵯峨の鮎食ひに都鳥　貞室

みよしのはいかに秋たつ貝の音　破笠
いざよひもまださらしなの郡哉　芭蕉
夕月や杖に水なぶる角田川　越人

九月十三夜

唐土に富士あらばけふの月もみよ　素堂
鴫突の馬やり過す鳥羽田哉　胡及
鴫突は萱津のあまのむまご哉　淵支
武蔵野やいく所にも見る時雨　舟泉
湖を屋ねから見せん村しぐれ　尚白
から崎やとまりあはせて初しぐれ　伊豫 随友
むさしのとおもへど冬の日あし哉　洗悪
めづちしと生海鼠を焼や小のゝ奥　俊似
冬されの獨轆轤やをのゝおく　津島 一笑
雪の富士藁屋一つにかくれけり　湍水
よし野山も唯大雪の夕哉　野水
星崎のやみを見よとや鳴千鳥　芭蕉
夜るの日や不破の小家の煤はらひ　如行

旅

雲雀より上にやすろふ峠かな　芭蕉

大和國草尾村にて

花の陰謡に似たる旅ねかな　仝
櫻咲里を眠りて通りけり　夕楓
日の入や舟に見て行桃の花　一髪
のどけしや湊の昼の生ざかな　荷兮
ひとつ脱て後におひぬ衣がへ　芭蕉

ある人の餞別に

ほとゝぎすなみだおさへて笑けり　除風
寐いらぬに食焼(めしたく)宿ぞ明やすき　冬松
蚊をころすうちに夜明る旅ね哉　昌碧
五月雨や柱目(芽)を出す市の家　松芳
夕立にどの大名か一しぼり　傘下

芭蕉士を送る

稲妻にはしりつきたる別かな　釣雪
なき〳〵て袂にすがる秋の蟬　一井
あき風に申かねたるわかれ哉　野水
物いはじたゞさへ秋のかなしさよ　舟泉
霧はれよすがたを松に見えぬ迄　鼠彈

さらしなに行人〳〵にむかひて

更級の月は二人に見られけり　荷兮

越人旅立けるよしを聞て京より申つかはす

月に行脇差つめよ馬のうへ　野水
おくられつおくりつはては木曾の秋　芭蕉
蜘の巣の是も散行秋のいほ　路通

狩野桶といふ物其角のはなむけにおくるとて

狩野桶に鹿をなづけよ秋の山　荷兮
とまり〳〵稲すり歌も替けり　京 ちね
入月に今しばし行とまり哉　玄寮
能(よく)きけば親舟に打碪かな　一井

品川にて人にわかるゝとて

澤菴の墓をわかれの秋の暮　文鱗
草枕犬もしぐるゝか夜るの聲　芭蕉
旅なれぬ刀うたてや村しぐれ　津島 常秀

鳴海にて芭蕉子に逢ふて

いく落葉それほど袖もほころびず　荷兮
夢に見し羽織は綿の入にけり　野水

其角にわかるゝとき

あゝたつたひとりたつたる冬の宿　荷兮
天龍でたゝかれたまへ雪の暮　越人
から尻の馬にみてゆく千鳥哉　傘下
里人のわたりゆかはしの霜　宗因

越人と吉田の驛にて
寒けれど二人旅ねぞたのもしき　芭蕉
旅寐して見しや浮世の煤拂　同

述懐

艸庵を捨て出る時
きゆる時は氷もきえてはしる也　路通
子を獨守りて田を打孀かな　快宣
餘所の田の蛙入(いれ)ぬも浮世かな　落梧

高野にて
散花にたぶさ耻けり奥の院　杜國
櫻見て行あたりたる乞食哉　梅舌

高野にて
父母のしきりに戀し雉子の聲　芭蕉
あやめさす軒さへよそのついで哉　荷兮
さうぶ入湯をもらひけり一盤(盥)　同

一本のなすびもあまる住ゐかな　杏雨
肩衣は戾子(もぢ)にてゆるせ老の夏　杉風
似(合)しや白髪にかづく麻木(をがら)賣　龜洞

九月十日素堂の亭にて
かくれ家やよめ菜の中に殘る菊　嵐雪
かり家を貪るきくの垣穗かな　曉鼯

人のいほりをたづねて
さればこそあれたきまゝの霜の宿　芭蕉

舊里の人に云つかはす
こがらしの落葉にやぶる小ゆび哉　杜國

鎌倉建長寺にまふでゝ
落ばかく身はつぶね共ならばやな　越人

ある人のもとより見よやとて
落葉を一籠おくられて
あはれなる落葉に燒や鳴さより　荷兮

古鄕の事思ひ出る曉に
たらちめの暖甫(たんぽ)や冷ん鐘の聲　鼠彈
榾の火に親子足さす侘ね哉　去來
目や遠う耳やちかよるとしのくれ　西武
ふるさとや臍の緒に泣年の暮　芭蕉

さま〲の過しをおもふ年のくれ　除風

老をまたずして鬢先におと
ろふ
行年や親にしらがをかくしけり　越人

戀

春の野に心ある人の素貌哉　伊勢 一有妻
きぬ〲や余のことよりも時鳥　除風
蚊屋出て寐がほまたみる別かな　長虹
むし干の目に立枕ふたつかな　文瀾
虫干に小袖着て見る女かな　冬文
さゝげめし妹が垣ねは荒にけり　心棘

六宮粉黛無顏色
宵闇の稻妻消すや月の顏　長虹
一めぐり人待かぬるをどりかな　尙白

さびしき折に
つまなしと家主やくれし女郎花　荷兮
しりながら薄に明るつまどかな　小春
妻の名のあらばけし給へ神送り　越人
松の中時雨ゝ旅のよめり哉　俊似

物おもひ火燵を明ていかならむ　舟泉
うたゝねに火燵消たる別れ哉　嵐蓑
山畑にもの思はゞや蕪引　松芳
きぬ／＼を霰見よとて戻りけり　冬松
おそろしやきぬ／＼の頃鉢敲き　昌碧

無常

末期に
散る花を南無阿彌陀佛と夕哉　守武
無常迅速
咲つ散つひまなきけしの畠哉　傘下
末期に
南無や空たゞ有明のほとゝぎす　(堺)元順
松坂の浮瓢といふ人の身まかりたるにいひやりける
橘のかほり顔見ぬばかり也　荷兮
いもうとの追善に
手のうへにかなしく消る螢かな　(京)去來
ある人子うしなはれける時申遣す
あだ花の小瓜と見ゆるちぎりかな　荷兮
世をはやく妻の身まかりける頃
水無月の桐の一葉と思ふべし　野水
辭世
あはれ也燈籠一つに主コ齋
子にをくれける頃
似た顔のあらば出てみん一躍り　落梧
一(市)原野にて
をく露や小町がほねの見事さよ　釣雪
妻の追善に
をみなへししての里人それたのむ　自悦
李下が妻のみまかりしをいたみて
ねられずやかたへひえゆく北おろし　去來
コ齋身まかりし後
その人の鼾さへなし秋のくれ　其角
母におくれける子の哀れを
おさな子やひとり食くふ秋の暮　尚白
ある人の追善に
埋火もきゆやなみだの烹る音　芭蕉
旅にてみまかりける人を
あは雪のとゞかぬうちに消にけり　鼠彈
鳥邊野ゝかたや念佛の冬の月　(加賀)小春

曠野集卷之八

釋敎

伊勢にて
神垣やおもひもかけず涅槃像　芭蕉
屓て來る母おろしけりねはんぞう　鼠彈
西行上人五百歳忌に
はつきりと有明殘る櫻かな　荷兮
おなじ遠忌に
連翹やその望の日としほれけり　胡及
うで首に蜂の巣かくる二王哉　松芳
木履はく僧も有けり雨の花　杜國
つりがねを扇で敲く花の寺　冬松
花に酒僧ども侘ん鹽ざかな　其角

貞享つちのへ辰の彌生一日、東照宮の別當僧正の御房に、慈惠大師迁座執事法華八講の侍るよし、尊き事なれば聽聞にまかりて、序品のこゝろを、

散花(ちる)の間はむかしばなし哉　越人

女房の聽聞所と覺て、御簾たれおく暗き所あり。龍女成佛の所に至りて、しのびあへず、鼻かむ聲のしければ、

ほろ〳〵と落るなみだやへびの玉　同

觀音の尾上のさくら咲にけり　俊似

古寺やつるさぬかねの菫草　一井

八島にて

海士の家聖よびこむやよひ哉　伊豫 千閣

咲にけりぶへんな寺の紅牡丹　一井

夏山や木陰〳〵の江湖(こうこ)部屋　蕪葉

奈良にて

灌佛の日に生れ逢ふ鹿の子哉　芭蕉

灌佛の其頃淸ししらがさね　尙白

高野にて

腰のあふぎ證義ばかりの御山哉　一雪

齋に來て菴一日の淸水哉　加賀 一笑

十如是

おもふ事ながれて通るしみづ哉　荷兮

卽身卽佛

夏陰の晝寐はほんの佛哉　愚益

ほころびや僧の縫おる夏衣　鼠彈

おどろくや門もてありく施餓鬼棚　荷兮

折かけの火をとるむしのかなしさよ　探丸

石籠(いしかご)に施餓鬼の棚のくづれ哉　文里

魂祭舟より酒を手向けり　龜洞

たままつり道ふみあくる野菊哉　卜枝

攝待のはしら見たてん松の陰　釣雪

平等施一切

攝待にたゞ行人をとゞめけり　俊似

稻妻に大佛おがむ野中哉　荷兮

垣越に引導覗くばせを哉　卜枝

ある人四時の景物なりとて、水雞と鶉とを不食。不圖其心を感じて、我も鴈をくらはず。

鴈くはぬ心佛にならはぬぞ　荷兮

ある寺の興行に

燕も御寺の鼓かへりうて　其角

進み出て坊主をかしや月の舟　一井

鉢の子に木綿をうくる法師哉　卜枝

人のもとにありてたち出むとしけるに、またしぐれければ、

衣着て又はなしけり一時雨　鼠彈

鎌倉の安國論寺にて

たうとさの淚や直に氷るらん　越人

古寺の雪

曙や伽監(藍)〳〵の雪見廻ひ　荷兮

同

雪折やかゝる二王の片腕　俊似

つくり置てこはされもせじ雪佛　一井

朝寐する人のさはりや鉢鼓(たゝき)　文潤

千觀が馬もかせばし年のくれ　其角

薬王品七句

如寒者得火

まつ白にむめの咲たつみなみ哉　胡及

如裸者得衣

雪の日や酒樽拾ふあまの家

如商人得主

双六のあひてよびこむづいり哉

如子得母

竹たてゝをけば取つくさゝげかな

如渡得船

月の頃隣の榎木きりにけり

如病得醫

かはくとき清水見付る山邊哉

如暗得燈

秋のよやおびゆるときに起さるゝ

神祇

古宮や雪じるかゝる獅子頭　釣雪

二月廿五日奉納に

きさらぎや廿四日の月の梅　荷兮

しんしんと梅散かゝる庭火哉　同

鶯も水あびてこよ神の梅　亀洞

上下のさはらぬやうに神の梅　昌碧

灯のかすかなりけり梅の中　釣雪

何とやらおかめば寒し梅の花　越人

覺えなくあたまぞさがる神の梅　舟泉

月代もしみるほど也梅の露　雨桐

門あかで梅の瑞籬おがみけり　重五

繪馬見る人の後のさくら哉　玄察

花に來て齒朶かざり見る社哉　鈍可

宮の後川渡り見るさくら哉　李桃

御手洗の木の葉の中の蛙哉　好葉

ほとゝぎす神樂の中を通りけり　玄察

宮守の灯をわくる火串かな　亀洞

破扇一度にながす御祓かな　未學

川原迄瘧まぎれに御祓哉　荷兮

こがらしや里の子覗く神輿部屋　尙白

此月の恵比須はこちにゐます哉　松芳

冬ざれや禰宜のさげたる油筒　落梧

若宮奉納

きゝしらぬ歌も妙也神々樂　利重

跡の方と寐なをす夜の神樂哉　野水

鈴鹿川夜明の旅の神樂哉　昌碧

かつらぎの神にはふとき庭火哉　村俊

橋杭や御祓かゝる煤はらひ　卜枝

祝

肩付はいくよになりぬ長閑也　多文

荷兮が四十の春に

幾春も竹其儘に見ゆる哉　重五

君が代やみがくことなき玉つばき　越人

青苔は何ほどもとれ沖の石　傘下

いきみたま疊の上に杖つかん　亀洞

千代の秋にほひにしるしことし米　同

しばしかくれゐける人に申遣す

先祝へ梅を心の冬籠り　芭蕉

しをりについて瀧の鳴る音　水
袋より經とり出す草のうへ　兮
づぶと降られて過るむら雨　人
立かへり松明直ぎる道の端　水
千句いとなむ北山のてら　兮
姥ざくら一重櫻も咲殘り　人
あてともなき夕月夜かな　水
露の身は泥のやうなる物思ひ　兮
秋をなをなく盗人の妻　人
明るやら西も東も鐘の聲　水
さぶうなりたる利根の川舟　兮
冬の日のてかくとしてかき曇　人
家子(かこ)に行と羽織うち着て　水
ふらくときのふの市の塩いなだ　兮
狐つきとや人の見るらむ　人
柏木の脚氣の頃のつくぐと　水
さゝやくとのみな聞えつる　兮
月の影より合にけり辻相撲　人
秋になるより里の酒桶　水

曠野集員外

誰か華をおもはざらむ。たれか市中にありて朝のけしきを見む。我東四明の麓に有て、花のこゝろはこれを心とす。よつて佐川田喜六のよしの山あさなくといへる歌を實にかんず。又

麥喰し鴈と思へどわかれ哉

此句尾陽の野水子の作とて、芭蕉翁の傳へしをなをざりに聞しに、さいつ頃田野へ居をうつして、實に此句を感ず。むかしあまた有ける人の中に、虎の物語せしに、さらに迫はれたる人ありて、獨色を變じたるよし。誠のおほふべからざる事左のごとし。猿を聞て實に下る三聲のなみだといへるも、實の字、老杜のこゝろなるをや。猶鴈の句をしたひて、

麥をわすれ華におぼれぬ鴈ならし　素堂

この文、人の事づかりてとゞけられしを、三人開き、幾度も吟じて、

手をさしかざす峯のかげろふ　野水
橇の路もしどろに春の來て　荷兮
ものしづかなるおこし米うり　越人
門の石月待闇のやすらひに　水
風の目利(めきゝ)を初秋の雲　兮
武士の鷹うつ山もほど近し　人

露しぐれ歩鵆に出る暮かけて　兮
うれしとしのぶ不破の萬作　人
かしこまる諫に涙こぼすらし　水
火箸のはねて手のあつき也　兮
かくすもの見せよと人の立かゝり　人
水せきとめて池のかへどり　水
花さかり都もいまだ定らず　兮
捨て春ふる奉加帳なり　人
墨ぞめは正月どこにわすれつゝ　水
大根きざみて干にいそがし　兮

龜洞

遠淺や浪にしめさす蜊とり
はるの舟間に酒のなき里　荷兮
のどけしや早き泊に荷を解て　昌碧
百足の懼る藥たきけり　野水
夕月の雲の白さをうち詠　舟泉
夜寒の簑を裾に引きせ　釣雪
荻の聲どこともしらぬ所ぞや　筆
一駄過して是も古綿　龜洞
道の邊に立暮したる宜禰が麻　荷兮
樂する頃とおもふ年寄　昌碧
いくつともなくてめつたに蔵造　釣雪
湯殿まゐりのもめむたつ也　舟泉
凉しやと莚もてくる川の端　野水
たらかされしやイる月　荷兮
秋風に女車の髭おとこ　龜洞
袖ぞ露けき嵯峨の法輪　釣雪
時〳〵にものさへくはぬ花の春　昌碧
八重山吹ははたちなるべし　野水
日のいでやけふは何せん暖に　舟泉
心やすげに土もらふなり　龜洞
向まで突やるほどの小ふねにて　荷兮
垢離かく人の着ものの番　昌碧
配所にて干魚の加減覺えつゝ　釣雪
歌うたふたる聲のほそ〳〵　舟泉
むく起に物いひつけて亦睡り　野水
門を過行茄子よびこむ　荷兮
いりこみて足輕町の藪深し　龜洞
おもひ逢たりどれも高田派　釣雪
盃もわするばかりの下戸の月　昌碧
やゝはつ秋のやみあがりなる　野水
つばくらもおほかたかへる寮の窓　舟泉
水しほはゆき安房の小湊　龜洞
夏の日や見る間に泥の照付て　荷兮
桶のかつらを入しまひけり　昌碧
人なみに脇差さして花に行　釣雪
ついたつくりに落る精進　野水

舟泉

美しき鮗うきけり春の水
柳のうらのかまきりの卵　松芳
夕霞染物とりてかへるらん　冬文
けぶたきやうに見ゆる月影　荷兮
秋草のとてもなき程咲みだれ　松芳

弓ひきたぐる勝相撲とて　舟泉
けふも亦もの拾はんとたち出る　荷兮
たま〳〵砂の中の木のはし　冬文
火鼠の皮の衣を尋きて　舟泉
涙見せじとうち笑ひつゝ　松芳
高みより踏はづしてぞ落にける　冬文
酒の半に膳もちてたつ　荷兮
幾年を順禮もせず口おしき　松芳
よまで双帋の繪を先にみる　舟泉
なに事もうちしめりたる花の貌　荷兮
月のおぼろや飛鳥井の君　冬文
灯に手をおほひつゝ春の風　舟泉
數珠くりかけて脇息のうへ　松芳
隆辰(達)も入歯に聲のしはがるゝ　冬文
十日のきくのおしき事也　荷兮
山里の秋めづらしと生鰯　松芳
長持かふてかへるやゝさむ　舟泉
ざぶ〳〵とながれを渡る月の影　荷兮
馬のとをれば馬のいなゝく　冬文

さびしさは垂井の宿の冬の雨　舟泉
莚ふまへて蕎麥あふつみゆ　松芳
つく〳〵と錦着る身のうとましく　冬文
曉ふかく提婆品よむ　荷兮
けしの花とりなをす間に散にけり　松芳
味噌するをとの隣さはがし　舟泉
黄昏の門さまたげに薪分　荷兮
次第〳〵にあたゝかになる　冬文
春の朝赤貝はきてありく兒　舟泉
顔見にもどる花の旅たち　松芳
きさらぎや瀑(曝布《さらし》)をかひに夜をこめて　冬文
そら面白き山口の家　荷兮
ほとゝぎす待《また》ぬ心の折もあり　荷兮
雨のわか葉にたてる戸の口　野水
引捨し車は琵琶のかたぎにて　同
あらさがなくも人のからかひ　荷兮

月の秋旅のしたさに出る也　同
一荷になひし露のきくらけ　野水
初あらしはつせの寮の坊主共　水
菜畑ふむなとよばりかけたり　兮
土肥を夕〳〵にかきよせて　仝
印判おとす袖ぞ物うき　水
通路のついばりこけて迯かへり　仝
六位にありし戀のうはきさ　兮
代まいりたゞやす〳〵と請おひて　仝
錢一貫に鰹一節　水
月の朝鶯つけにいそぐらむ　仝
花咲けりと心まめなり　兮
天仙蓼に冷食あさし春の暮　仝
かけがねかけよ看經の中　水
たゞ人となりて着物うちはをり　仝
夕せはしき酒ついでやる　兮
駒のやど昨日は信濃けふは甲斐　水
秋のあらしに昔浄瑠璃　兮
めでたくもよばれにけらし生身䰟　水

外員　野曦

八日の月のすきといそまで　兮
山の端に松と椴とのかすかなる　水
きつきたばこにくら〳〵とする　兮
暑き日や腹かけばかり引結び　全
太皷たゝきに階子のぼるか　水
ころ〳〵と寐たる木賃の艸枕　兮
氣たてのよきと聟にほしがる　水
忍ぶともしらぬ顏にて一二年　仝
庇をつけて住居かはりぬ　兮
三方の數むづかしと火にくぶる　全
供奉の艸鞋を谷へはきこみ　水
段〳〵や小塩大原嵯峨の花　全
人おひに行はるの川岸　筆

月さしのぼる氣色は、晝の暑さもなくなるおもしろさに、柄をさしたらばよき團。と宗鑑法師の句をずむじ出すに、夏の夜の疵といふ、なをも其跡もやまずつゞきぬ。

月に柄をさしたらばよき團哉
蚊のおるばかり夏の夜の疵　越人
とつくりを誰が置かへてころぶらん傘　下
おもひがけなきかぜふきのそら　同
眞木柱つかへおさへてよりかゝり　人
使の者に返事またする　同
あれこれと猫の子を選るさま〴〵に　筆
としたくるまであはう也けり　下
どこでやら手の筋見せて物思ひ　同
まみおもたげに泣はらすかほ　人
大勢の人に法華をこなされて　同
月の夕に釣瓶縄うつ　下
喰ふ柿も又くふかきも皆澁し　同
秋のけしきの畑みる客　人
わがまゝにいつか此世を背くべき　同
寐ながら書か文字のゆがむ戸　下
花の賀にこらへかねたる涙落つ　同

着ものゝ糊のこはき春かぜ　人
うち群て浦の苫屋の塩干見よ　同
内へはいりてなをほゆる犬　下
醉ざめの水の飲たき頃なれや　同
たゞしづかなる雨の降出し　人
歌あはせ獨古(鈷)鎌首まいらるゝ　同
また獻立のみなちがひけり　下
灯臺の油こぼして押かくし　同
臼をおこせばきり〴〵す飛　人
ふく風に𦾔のころぐさのふら〳〵と　同
牟はこはす筑(築)やまの秋　下
むつ〳〵とりみる額の親に似て　同
人の請にはたつともなし　人
にぎはしく瓜や茄やを荷ひ込　下
干せる疊のころぶ町中　人
おろ〳〵と小諸の宿の晝時分　下
皆同音に申念佛　人
百万もくるひ所よ花の春　下
田樂きれてさくら淋しき　人

深川の夜

鳫がねもしづかに聞はからびずや　越人
酒しゐならふこの頃の月　芭蕉
藤ばかま誰窮屈にめでつらん　同
理をはなれたる秋の夕ぐれ　越人
瓢簞の大きさ五石ばかり也　仝
風にふかれて歸る市人　芭蕉
なに事も長安は是名利の地　仝
醫のおほきこそ目ぐるほしけれ　越人
いそがしと師走の空に立出て　芭蕉
ひとり世話やく寺の跡とり　越人
此里に古き玄蕃の名をつたへ　芭蕉
足駄はかせぬ雨のあけぼの　越人
きぬ〴〵やあまりかぼそくあてやかに　芭蕉
かぜひきたまふ聲のうつくし　越人
手もつかず晝の御膳もすべりきぬ　芭蕉
物いそくさき舟路なりけり　越人
月と花比良の高ねを北にして　芭蕉
雲雀さえづるころの肌ぬぎ　越人
破れ戸の釘うち付る春の末　仝
見せはさびしき麥のひきはり　蕉
家なくて服紗につゝむ十寸鏡　人
ものおもひゐる神子のものいひ　蕉
人去ていまだ御坐の匂ひける　人
初瀬に籠る堂の片隅　蕉
ほとゝぎす鼠のあるゝ最中に　人
垣穂のさゝげ露はこぼれて　蕉
あやにくに煩ふ妹が夕ながめ　人
あの雲はたがなみだつゝむぞ　蕉
行月のうはの空にて消さうに　人
砧も遠く鞍にいねぶり　蕉
秋の田をからせぬ公事の長びきて　人
さい〳〵ながら文字問にくる　蕉
いかめしく瓦庇の木薬屋　人
馳走する子の痩てかひなき　蕉
花の頃談義参もうらやまし　人
田にしをくふて腥きくち　蕉

翁に伴なはれて來る人の
めづらしきに

落着に荷兮の文や天津厂　其角
三夜さの月見雲なかりけり　越人
菊萩の庭に疊を引づりて　仝
飲でわするゝ茶は水になる　角
誰か來て裾にかけたる夏衣　仝
歯ぎしりにさへあかつきのかね　人
恨たる泪まぶたにとゞまりて　人
靜御前に舞をすゝむる　角
空蟬の離魂の煩のおそろしき　仝
あとなかりける金二万兩　人
いとをしき子を他人とも名付けたり　仝
やけどなをして見しつらさかな　角
酒熱き耳につきたるさゝめごと　仝

魚をもつらぬ月の江の舟　人
そめいろの富士は淺黄に秋のくれ　仝
花とさしたる草の一瓶　角
饅頭をうれしき袖に包みける　仝
うき世につけて死ぬ人は損　人
西王母東方朔も目には見ず　仝
よしや鸚鵡の舌のみじかき　角
あぢきなや戸にはさまるゝ衣の妻　仝
戀の親とも逢ふ夜たのまん　人
やゝおもひ寐もしねられずうち臥て　仝
米つく音は師走なりけり　角
夕鴉宿の長さに腹のたつ　仝
いくつの笠を荷ふ強力（がうりき）　人
穴いちに塵うちはらひ草枕　仝
ひいなかざりて伊勢の八朔　角
滿月に不斷櫻を詠めばや　仝
念者法師は秋のあきかぜ　人
夕まぐれまたうらめしき帋子夜着　仝
弓すゝびたる突あげのまど　角
道ばたに乞食の鎮守垣ゆひて　仝
ものきゝわかぬ馬士の閙どり　人
花の香にあさつき膾みどり也　仝
むしろ敷べき喚續の春　仝

嵐雪

我もらじ新酒は人の醒やすき
秋うそ寒しいつも湯嫌　越人
月の宿書を引ちらす中にねて　仝
外面薬の草わけに行　雪
はねあひて牧にまじらぬ里の馬　仝
川越くれば城下のみち　人
痘（いも）瘡良（がほ）の透（すき）とをるほど歯のしろき　人
唱歌はしらず聲ほそりやる　雪
なみだみるはなれ〴〵のうき雲に　仝
後ぞひよべといふがは(わ)りなき　越
今朝よりも油あげする玉だすき　人
行燈はりてかへる浪人　嵐
着物を碪にうてと一つ脱　雪
明日は髪そる宵の月影　越
しら露の群て泣ゐる女客　人
つれなの醫者の後姿や　雪
ちる花に日はくるれども長咄　越
よぶこ鳥とは何をいふらん　人

野水

初雪やことしのびたる桐の木に
日のみじかきと冬の朝起　落梧
山川や鵜の喰ものをさがすらん　仝
賤を遠から見るべかりけり　野水
おもふさま押合月に草臥つ　仝
あらこと〳〵し長櫃の萩　落梧
川越の歩（ぶ）にさゝれ行穐の雨　水
ねぶと痛がる顔のきたなき　梧
わがせこをわりなくかくす緣の下　水
すがゝき習ふ頃のうきこひ　梧
更る夜の湯はむづかしと水飲て　水

こそぐり起す相住の僧　梧
峯の松あぢなあたりを見出たり　水
旅するうちの心奇麗さ　梧
烹た玉子なまのたまごも一文に　水
下戸は皆いく月のおぼろげ　梧
耳や歯やようても花の数ならず　水
具足めさせにけふの初午　梧
いつやらも鶯聞ぬ此おくに　同
山伏住て人しかるなり　水
ぐわら〳〵とくさびぬけたる米車　梧
挑灯過て跡闇(くら)きくれ　水
何事を泣けん髪を振(ふり)おほひ　梧
しか〳〵物もいはぬつれなき　水
はづかしといやがる馬にかきのせて　梧
かゝる府中を飴ねぶり行　水
雨やみて雲のちぎるゝ面白や　梧
柳ちるかと例の莚道(えんだう)　水
軒ながく月こそさはれ五十間　同
寂しき秋を女夫居りけり　梧

占を上手にめさるうらやまし　水
黍もてはやすいにしへの酒　同
朝どの干魚備るみづ垣に　梧
誰より花を先へ見てとる　同
春雨のくらがり峠こえすまし　水
ねぶりころべと雲雀鳴也　梧

一井

一里の炭竈はいつ冬籠り
かけひの先の瓶氷る朝　鼠弾
さゝくさや正木を引に誘ふらん　胡及
肩きぬはづれ酒によふ人　長虹
夕月の入きは早き塘ぎは　鼠弾
たはらに鯽をつかみこむ秋　一井
里深く踊教に二三日　長虹
宮司か妻にほれられて憂　胡及
問はれても涙に物の云にくき　一井
葛籠とゞきて切ほどく文　鼠弾

うと〳〵と寐起ながらに湯をわかす　胡及
寒(さえ)ゆく夜半の越の雪鋤　長虹
なに事かよばりあひてはうち笑ひ　鼠弾
蛤とりは皆女中也　一井
浦風に脛吹まくる月涼し　長虹
みるもかしこき紀伊の御魂屋　胡及
若者のさし矢射ておる花の陰　一井
蒜くらふ香に遠ざかりけり　鼠弾
はるのくれありき〳〵も睡るらん　胡及
帋子の綿の裾に落つく　長虹
はなしする内もさい〳〵手を洗　鼠弾
座敷ほどある蚊屋を釣けり　一井
木ばさみにあかるうなりし松の枝　長虹
秤にかゝる人〳〵の興　胡及
此年になりて灸の跡もなき　一井
まくらもせずについ寐入月　鼠弾
暮過て障子の陰のうそ寒き　胡及
こきたるやうにしぼむ萩のは　長虹
御有様入道の宮のはかなげに　鼠弾

衣引かぶる人の足音　一井
毒なりと瓜一きれも喰ぬ也　長虹
片風たちて過る白雨（ゆふだち）　胡及
板へぎて踏所なき庭の内　一井
はねのぬけたる黒き唐丸（たうまる）　鼠彈
ぬく〳〵と日足のしれぬ花曇　長虹
見わたすほどはみなつゝじ也　胡及

京寺町通二條上ル町井筒屋
筒井庄兵衛板

なにくれとして天の袋あり。あらゆる是が入物なり。人におふくろといふ。母の稱也。筆とらず物見ずとて、父に追れておそろしきこらしぶくろのからきめみしも、いつにわすれて、底なし袋口もむすばすぞなりすたれにたる。空言袋、淸輔の名立るにはあらず、我ぞつきありきぬ。士に番袋有。職に火袋有。くびにかけたるふくろには、いかなるものを入たるぞ。詩の袋、春山暮月李賀がふくろにおもし。歌の袋、光廣のひきずり袋、それもおもかりけん。爲憲がふくろをかぶら

んとすれば、息くゞもりてむつかし。其袋や花のしぼみたる、月のかけたる、かつ〲ひろひえて、括て我家の秘藏ぶくろとす。蘭にもきせず、猫もかぶらず、元ろく三年、かのえむまみな月吉辰嵐雪自序。

其袋春之部

改正

おれにいはしや先御代をこそ千々の春　季吟

　都ちかき所にとしをとりて

薦(こも)を着て誰人います花のはる　芭蕉

月花のかます作らん餅むしろ　擧白

餅のうへにけふしちぎりぬかゞみ草　山夕

元日や晴てすゞめのものがたり　嵐雪

　人日

うかれきて薺はやせや神樂打　舟竹

一年のこゝろ拍子はなづなかな　無倫

　睦月はじめのめおといさかひを人々に笑はれ侍りて

よろこぶを見よやはつねの玉はゝ木　嵐雪

　若菜

若菜摘跡は木を割ばはたけ哉　越人

薺たちや五條あたりは妾もの　百里

つちくれに花の咲たつ菜屑かな　冬文

野にいでゝ小鍋やほしき鶯菜　東流

　鶯

鶯や手ならひの窓おもしろき　十一歳 調武子

うぐひすの宿とこそみれ小摺鉢　嵐雪

梅壺や鶯毎に御消息　山川

鶯の音やつゝまるゝ雪の綿　桐雨

弱焼鄰(イワシヤクトナリ)にくしやまどのうめ　秀和

梅の花沉ンや麝香はもたねども　才麿

梅さきて編笠やよき媒び頃　仙花

笨垣の梅にうれしき崩れ哉　卜乙

梅が香はいかに工(タクム)ぞ庭作り　沾荷

　霞

破レ鐘をまぎらかしたるかすみ哉　子英

浦々の家に帆かくるかすみ哉　風洗

　雲跡を埋といふ事を

我宿もよそより見れば霞かな　月下

夕霞暮ておぼろと申けり　鼠(みの)弾

　柳

ゆく水のやますながるゝ柳哉　山川

柳の芽毛のはへたるも美(ウツクシ)し　氷花

詠るに目のくたびれぬ柳哉　月下

　春水滿四澤

こほり解て熱泡(ドセウアヘ)吹澤邊哉　素竹

　春水春風一時來（春風春水一時來を正しとす。）

氷消て風におくれそ水車　伊勢一有妻 その

　椄

見たいもの花もみぢより穗積哉　嵐雪

哀さや椄(つぎき)の花の咲おくれ　衛門

　涅槃會

天人も泣顔わろしねはん像　己百

　燕　愛宕山にて

かはらけも下行雲のつばめ哉　桐雨

舟綱にゆらるゝ沖のつばめ哉　吉田氏 巴山

　燕休岸

土車引(キ)手も休むつばめかな　舟竹

　花　上野にて

花の雪しつかい伏見常盤(トキハ)哉　立志

女中方尼前は花の先達歟　嵐雪
花もしやよそへ出るにも玉くしげ　才麿
友猿のともゑらびすれ花衣　其角
待花におり／＼うごく缸かな　調柳

清水にて

めくら石いたくも花に行あたれ　青女
花の跡なれや鳥はいつもなく　鋤立
花にめさば竹馬にても参べし　同
花にまた都を二つ見初けり　沾蓬
花に來てあはせばをりの盛哉　曉雲

膳所にて

花や波軒の下まで鳰の海　桐雨
退ば雨よれば花踏木陰かな　好柳
はなちらばまて懺悔せん罪一ッ　風子

都ちかく遊びて

花の雪大津雪踏にそべりけり　月下

鳥追んために鳴子付タルヲ

花鳥やちらば鳴子の獨ぼし　菊峯
菅笠や男若弱たる花の山　百里

思夜櫻

夜あらしや大閤様の櫻狩　その
下戸めくやかくれ所のやまざくら　孤屋
葉ばかりちりのこりても櫻哉　沾荷

あふみにて

雲櫻あふみのふじやみかみ山　桐雨
汲かへる小鮎おもたき櫻かな　同
とく散て見る人歸せ山櫻　一有
武藏野に人ゆきあたる櫻哉　立吟
我影のさくらにのぼる夕日哉　琴蔵

輪門様薨御をおそれいたみ奉りて

物いはぬ心になかんやまさくら　不角

櫻川はほそくながれて、青柳の里一かまへ、うちかすめり

膝木よる長女いやしやいと櫻　嵐雪
人のものを是程おしき櫻哉　專跡

紙鳶

夕ぐれのものうき雲やいかのぼり　才麿

數足が聲かへたりけるに申つかはしける

此夕軒端隔ちぬいかのぼり　嵐雪
いかのぼり雨の足みる霞かな　同

漁郭

蜑の子や竹に付たるいかのぼり　風流

遊絲

かげろふにさし矢の沉む野中哉　山川
いとゆふにうごくや去年の古薄　亂絲
糸ゆふや口を明たる糀むろ　氷花

病中

つく／＼と糸ゆふや氣のむすぼゝれ　才麿
糸ゆふや左へめぐる酒の間　鋤立
かげろふの跡をおさへし小猫哉　舟雪
陽炎にうきしづみ行帆かけ哉　湖舟
いとゆふやけぶりてかはく屋ねの上　立志
陽炎の晝は爐中の寒さ哉　達暑

若鮎 附白魚鮠

若銀口魚は鵜の一觜にたらぬ也　才麿
しぶうるか持とも見へぬ小鮎哉　濁子

白魚も孕(はらむ)すがたぞ浅ましき　東雲
春の水に秋の木の葉を柳鮠(はへ)　嵐雪

雉

一聲も三聲もなかぬ雉子哉　衞門
うつくしき顔かく雉子の距(ケヅメ)かな　其角
一しほの聲さぞあらん南部雉　嵐雪

海苔

ゆく水や何にとゞまる苔(のり)の味　其角
海老喰て海苔の味しる蜆子(ケン)哉　左柢
和田の海所さだめぬ海雲(もづく)哉　菊鈴
しほ染(シミ)て心もかろし海雲賣　笠凸

寒食

寒食や揚屋より火を焼初る　擧白
寒食やその日にあたる佛達　立吟
胸の火も寒食の日に腹たてそ　冰花
寒食や旅人の雪の跡きへず　月下
寒食は霞一重のこぶしかな　言龜
寒食やいはけなき子にすねらるゝ　琴風

鞦韆

鞦韆(ブランコ)のたはぶれはやせ猿廻シ　（しにし）

青精飯

桐柳民(タミコヤナギ)濃に菜飯しかな　嵐雪

猫戀

猫の戀鼠もとらずあはれなり　琴風
老猫の尾もなし戀の立すがた　百里
から猫の三毛にもかはる契り哉　枳風
猫の五器あはびの貝や片おもひ　秀和

猫ぬすまれて

猫の妻いかなる君のうばい行　嵐雪妻

雲雀

杉の木を定規にのぼる雲雀哉　冰花
黒きものひとつは空の雲雀哉　近江李由
羽にうけて幾重の雲に鳴雲雀　渭橋

上巳

綿とりてねびまさりけり雛の貌　其角
誰國も彌生の海の道千筋　露沾
鄰〱雛見廻るゝ小家かな　嵐雪
嬉しいなけふは物いへはだか雛　専跡
うごかぬを物おもひなりけふの雛　霜白

犬あり、一條の院の御猫に習て犬丸と名付。まことや清少納言のおもひいためけるふしをしのびて、

犬丸に鬘(かつら)せさせよ桃の宴　卜と
山崎の櫃買てこよ雛遊び　仝

妻におくれて悲しみの内娘の雛を愛して

夫婦雛娘のとはゞいかゞせん　達暑
眉ふりて虫喰雛の惡女哉　一ロ
雛の座を追出されたる弟哉　東雲

四日

朝寐して櫻にとまれ四日の雛　曉雲
彌生にも中よき鷄のあそび哉　笠下

辛夷

夕ぐれの烏に曇るこぶし哉　梅車

蝶

蝶かろし頃はきるもの一つ哉　湖春
鳶尾艸(イチハツ)やはかなき蝶の鼠色　嵐蘭

上のより歸り侍るとて
酒くさき人にからまるこてふ哉　嵐雪
沖の蝶汐さすまでをねぶり哉　才麿

苗代

なはしろにいそがぬ水のすがた哉　子英
迷ふらんなはしろ頃の田の鼠　冰花
うらゝさや田の中けぶる溜水　伊勢 一有

耕牛無宿食倉鼠有餘糧
たがやすも鼠のためか牛つかひ　笠凸
うごくとも見へで畑打男哉　去來

蛙

玄賓のこゝろしらすや鳴かはづ　野水

淺草の觀音堂にて
聞わけん蛙に交る鷺の聲　冰花

三十三間にて
乞食にも物くれて聞蛙かな　富士大宮 六花
二階にて蛙きく夜をまろ寐哉　湄橋
蜂呑て己となやむかはづ哉　和賤

蝦蟆溫とかやいへるもの久しくやみて、顏は蟾のやうにたどはれにはれ、なやみぬれば、此度のゑらびにももれ侍らんと本意なく覺え侍て、病中のくるしさをやう〳〵に申侍る。
くるしさは鏡にむかふ蛙かな　銀鉤

春雨

春雨やかぞゆるばかりしづごゝろ　紅雪

歸雁

何事を田螺にいひて歸る鴈　子英
歸るかり富士の裾田の砂ふるへ　長雅

藤

風なくてしづか過たり藤の花　杉風
とても世を藤に染たし墨衣　釋 宗派
山藤やまき上らるゝつむじ風　月下
藤がえやいばらなけれどむづかしき　風瀑

小奴吉齋に花をみせて
小坊主よ足なげかけん松に藤　嵐雪

春艸

いろ〳〵の草鞋で見るやけ野哉　紅雪
木瓜あざみ旅して見たく野は成ぬ　山店
おもたげに松の葉かつぐ菫かな　夜章
女郎花くねらぬさきよさいた妻　卅竹
烏芋堀男だすきよあら〳〵し　杜央
たんぽゝの物いみの日ぞ佛の座　衞門

椿見にまかりけるにちりければ
もぎどうにとてもちるなら椿哉　伊勢 柳玉

觀水

物ゆるし魚の兒見る春の水　沾德

野游　人あまた伴ひ侍りて
一筆や矢立におふるつく〳〵し　沾荷

三月盡

連胤が筆の歩や春の暮　立吟
ゆく春やおしさうにつく鐘の聲　山川

袋の底を拂ひ侍れば、猶句ども有るをひろひかさねて、數の外の部をみだりに並べ侍る。

神祇

うす井權現にて
稻妻にけしからぬ神子が目ざしやな　嵐雪
迁宮や西行よりは五百年　立吟

豊國や鳥の巣を守ル古づゝみ　樗雲
舍殿の梅清淨し神の靈

八句

科戸の風の吹放つことのごとく

見るうちの罪もとまらぬ競馬哉　孤屋
菖垣葉も神勅を聞ク　嵐雪
犬人に公尋の門を守らせて　同
屋根に鉦矢打珍重の聲　孤屋
なます盛三角柏の大鼎　同
荒振鼠鶏に和メン　嵐雪
置座に文ひろげたる初月夜　同
稲も子を持天の益人　孤屋

齋宮繪馬

繪馬かけて明日の年みん稲の神

住吉奉納千句卷軸

ふるかれや神樂拍子に神樂聲　路通

霜朝の禰宜のしはぶき神さびぬ　百里

社頭時鳥

手を打て神靈覺しぬ子規　凉菟
おがむ間に蛙飛出る小祠哉　景道
燒鉢の鈸鐃も穂屋の助ヶ哉　月下
一道は麥蒔殘すいなり哉　山川
宮人の顏見て歸る枯野哉　斧鉞

爲慮在雲

竹の子をぬけば音あり神慮　舟竹

雪の下の旅籠ル宿は若宮の社人なりければ

鎌とくら萩負かへる社人哉　桐雨

芳野へ行人にことづてして

祝子も花の名申せ神の場

在稲天神奉納

こぼれ梅かたじけなさのなみだ哉　嵐雪

釋教　附哀傷

ちりかゝる花より撰ン六の塵　東眺

六十萬人決定往生

胝やあはれ遊行の旅衣　冰花

我等今日聞佛音敎歡喜踊躍と讀誦したてまつりて

嬉しいか念佛おどりの柄杓ふり　嵐雪

受持佛語作禮而已

もらひ來る實ばへ嬉しや法の花　山川

塵點本のこゝろを

うどの香やさしも芥の底ながら　同

摩訶止觀
一目之羅不能得鳥得鳥之羅唯是一目　此文のこゝろを

鳥雲に餌さし獨の行衛哉　其角

ふか草にて

座禪堂つら〳〵椿咲にけり　雷笠
鮨作りつみ深草や石ぼとけ　月下

讀維摩

蝶とまる芥子は維摩の座敷哉　翠紅

應無所住而生己心

けしの實の大ク見ゆる座禪哉　鋤立
鶴の巣や行もとまるも水のまゝ

木食の蕎麥喰けるに

新蕎麥の新の字に着心かな　百里
盂蘭盆やふだらく走り老の波　桐雨

如薪盡火滅

身の後や灰汁にもならぬ秋の暮　素行

殺生戒

寒念佛弟子に傳る法(のり)はなし　草加 水山

邪婬戒

いかほどの虫の命をわた作り　トこ

偸盗戒

狐よぶ妻猫にくしやのらごゝろ

妄語戒

ひろはじなぬしなき風も椎のから

飲酒戒

なりはひのからき世をしれ夷講(えびす)

曉觀佛

竹の葉のみだれやすしや雪の暮

夕聞經

醉覺ぬ腹も立やむ胸の月　百里

夜尋僧

唐音(タウイン)の施餓鬼身にしむ夕哉

稻妻の紙燭消けり影法師

三句 道善

うたてやな櫻をみれば咲にけり　鬼貫

月のおぼろは物たらぬいろ　才麿

母を夢みて

酒盛の跡も春なきゆふべにて　來山

蓮の實をふくむに夢の乳房哉　風洗

讀九相詩

櫛紅粉や寺の湯殿は蔦もみぢ　年弓

十歳に成ける童の身まかりけるに

駒どりのもとの雫や末の露　嵐雪

戀

藤やたゞ君にふれたるむすぼゝれ　その

約束は淸水(きよみづ)にてのやなぎかな　百花

枕草紙に

思ふ人を待あかして、あかつきがたいさゝか寐いりたるに、からすのいとちかく鳴に見あげたれば、晝になりたる、いとあさまし。

みじか夜や烏のこうと待ぼうけ　山川

逢恨戀

我戀や口もすはれぬ青鬼灯(ホヲヅキ)　嵐雪

子規おほよそ鳥と夜ゝつれよ　菊鈴

舌去リテ鵺(ヌエ)に愛あり戀の友　不障

戀艸の罪懺悔せよふかみぐさ　紅雪

後朝

はやかなしよし原いでゝ麥畠　冰花

あらぬ事にかこつけてもわすれがたさよ

柚(ゆ)の釜のせめてもこひし姫くるみ　笠扇

山ふかみそれにうき名よ姫くるみ　その

うき人を又くどきみん秋のくれ　去來

こひ死なばちぎりたがへじまんじゆさげ　寸木

若菜を待

獻立に鴨とかく筆物ぞおもふ　百里

君が手よ末摘花のいたいけさ　巴洗

四睡

海棠に女郎と猫とかぶろ哉　卜宅

戀せずば双六しらじ秋の暮　不障

腮(ホウ)摺やたがひにつらきひとひげ　琴風

もろこしまでもゆくものはあきのねざめのこゝろなり

秋の夜や定めぬ妻の物案じ　山川
昔今の戀に手傳ふ葱かな　同
戀衣紙子似合しよし野哉　鋤立
ながき夜を我は戀して覺けり　同
よすがなき戀にしねとや神無月　杜格
我戀は鰒もくはれぬ命かな　嵐夕
岡見すと妹つくろひぬこへ(小家)の門　嵐雪

述懐

万句興行に

肩衣は房子にてゆるせ老の夏　杉風
捨人やあたゝかさうに冬野ゆく　其角
炭やきも黒まぬ老の白髪哉　渭橋
百年の後なき人や冬の蝿　黜山
此伽羅におもひ出しけり古紙小(衣)　普船
年の市とぼしき業や白朮(朮)賣　（ひと）

慰女房

三盃子ことたらはすや年の暮　嵐雪

撩嵐雪

年の暮かねさぐらせて歸りけり　月下

游冰花

年の市蕎麥うたぬこそ本意なけれ　同

其袋　夏之部

更衣

名聞をはなれずもあり更衣　露沾
帶ふるしいまだ旅なるころもがへ　伊勢 一有
ころもがへかたびらきたるをんな哉　鋤立
ほころびもあやなきものよ袷縫　三翁
老も來でつまさがりたるあはせ哉　舟竹
帶ふときかとり乙女やころもがへ　卜宅
衣がへまた傾城のそよ寒し　月下
初風やおかしあはせのかたひづみ　當歌

青簾

五位六位色こきまぜよ青簾　嵐雪
けふ更に青きはなきか簾賣　月下
室焼にすゝけやそめん青簾　紅葉
水の日の稲妻見せよあを簾　才治

江上新樹

柴船の漕こそのこせ夏木だち　才麿
一葉づゝ蛛蜘のいになる若葉哉　沾荷

呼鳩

銃や稽古のあとのかんこどり　氷花
我須磨の關守ならんかんこどり　調柳
植捨る山田は青しかんこどり　舟竹
書貌にばけ〳〵しさよかんこどり　稲花
かんこどり煙草荒つゞく畠かな　楸下

鰹

小聲にはよばれぬものか鰹うり　風吟

庖丁がうしはいかに解けん

窮屈に鰹をたゝむあるじ哉　百里

子規

ほとゝぎす新茶より濃聲の色　才麿
時鳥何を古井の水のいろ　露沾

待乳山の社頭に雨を凌て

室は墨に畫龍覗きぬほとゝぎす　嵐雪
淀舟や喧嘩にまじるほとゝぎす　立志

夏痩は夜を寐ぬゆへぞ子規　秀和
杜鵑はまだ鄰ではつねかな　美濃 梅川
島原にて
君たちの日がさにぬれよ蜀魂　桐雨
主將之法務攬英雄之心
歌人には歌よませけりほとゝぎす　卜宅
松に休む雁がねいづちほとゝぎす　立霞
新秋ものいふしほやほとゝぎす　氷花
二四八は誰が魂の數黃鸝　衞門
淀舟の鯉とる鷹かほとゝぎす　峯紅
ほとゝぎす鐘撞かたへ鳴音哉　湖水
おさなひに灸すゆるとて
いたくなけなかばきこうぞ子規　夕口
吃(ドモリ)てはほとゝぎすとも申されず　百里
ほとゝぎす待にぞ見ける夏暦　杜英
灌佛
見る事の新茶にすゝぐまよひ哉　青女
灌佛やはや入相の大佛　百里
灌佛や餓鬼に增賀の衣とらせ
短夜　ばせを庵にて
庵(アン)の夜もみじかく成ぬすこしづゝ　嵐雪
蟬
あなかなし鳶にとらるゝ蟬の聲　嵐雪
手にとりてふりいだされしせみのこゑ　當歌
かいすくみ鳴ねば見えぬ小蟬哉　不一
蚊到明
蚊の聲のしらむに寂し軒の雨　沾徳
魚の骨火鉢にくさき蚊やり哉　風洗
うちなげく事侍りて
あはれとより外には見えぬ蚊やり哉　嵐雪
鐵(クロガネ)のうしにとりつく藪蚊かな　孤屋
蚊の聲もまだ力なし衣一重　兆風
蚤の子の蚊をよび歩く川邊哉　大柳
蚊やり火に娵(よも)いでゝゆく軒端哉　笑種
寐はれたる顏いたいけや枕がや　青女
なきものゝ蚊帳ふるひて
化夜(アダシ)の蚊にむせかへるなみだ哉　桐雨
城外吟
朝〳〵の蚊に髣髴(サモニタリ)市の聲　友五
寐ぬ夜更(サラ)蚊屋に入タル鼠かな　富士大宮 白盆
螢
草もなくこがるゝ石のほたる哉　渭橋
ほたる火や晝のあつさの息づかひ　月下
奪(バヒ)あふてふみころしたるほたる哉　みの 己百
漁父
蓑干て朝〳〵ふるふ螢かな　嵐雪
腐艸螢となる
枯草の又もえ出るほたるかな　卜宅
はやき瀨を何としづかに飛螢　立志
とぶまゝのこゝろを幣にほたる哉　冬蟬
杜若
咲中に紫ばかりかきつばた　來山
卑沼のくさゝ忘れつかきつばた　加賀 一泉
しのゝめをよびかへせとやかきつばた　一徳
鵜　附川獵
かゞり火に見ゆや鵜匠の貌ばかり　琴風
鵜づかひは夢にも鵜をやつかふらん　氷花
かづき上星のむ闇の鵜川哉　湖舟

糧鮇よぶかたへながれけり　舟竹

照射

弓杖に歌よみ顔のともし哉　嵐雪

端午

蘭の香にあふや湯殿の古へちま　立志

傘ばかり葺のこしたる菖かな　青女

左右左に横雲渡るのぼり哉　百里

人立やかゝしをすくに菖葺　湖水

銅の樋に色ますあやめかな　笠下

伏見殿とて世にもてなさるゝ御秣よ

蔣草めせ淀のゝ草も持てさう　卜こ

印地

おもふ人にあたれ印地のそら礫　嵐雪

なでしこの嵐は印地がはらかな　立志

競馬

毛の色や馬の競に見さだめす　冰花

人の世もかう暮しけり競馬　山川

瓜

水飯にかはかぬ瓜のしづく哉　其角

初瓜と妹にいはせん親ひとり　巴風

五月雨 付 五月闇

さみだれの最中や鐘の濁りやう　立吟

さみだれや浮木にすがる蛇のかず　冰花

たれこめて蝸うつのみぞ五月雨　渭橋

さみだれや晝鷄の聲くらし　調柳

五月雨に壁落のこす葎かな　山川

書見れば身の垢かゆし五月雨　卜千

五月闇桃の虫をもたうべけり　樹下

溽暑

妻も有り子もある家の暑さ哉　冰花

日の晝は水のまけたる暑さ哉　京 信徳

寐ぐるしう枕をかへす暑さ哉　細石

水無月や朝日夕日もうるし搔　雪江

夏の日に爛き飴のもやし哉　嵐雪

水無月や暑さを探る猫の鼻　富士大宮 銀雨

納涼

しばしとて石あたゝむるすゞみ哉　立志

魚折ゝ光すゞしや水の色　夕口

玉川にうぶめきゝ出す涼哉　紅雪

花双紙
とくさといふものは、風にふかれたらん音こそいかならん、とおもひやられておかし。

友ずれに木賊すゞしや風の音　山川

誓願寺にて

四條へのぬけ道すゞし梅の風　大つ 尙白

帷子のせなかふくるゝすゞみ哉　衞門

豚なでゝすゞむおかしや屋敷守り　笠凸

浴

湯をかけて涼しく成ぬ壁の草　立志

ねぶたげのつくまで涼むいほり哉　調柳

垣越の咄ししみけり夕すゞみ　[illegible]翁

犬に逃犬を追夜のすゞみ哉　嵐雪

角田川を下りに

音曲は一重羽織の歸帆哉　其水

清水 附 心太

かたびらは淺黄着て行清水哉　大津 尙白

あはや清水おもひもよらぬ後より　舟竹

長嘯のしみづにひやせこゝろぶと　〃
水の車のしづくをうけて
すゞしさや心てへとる水のいろ　嵐雪
扇　附團扇
みちのくの三絃きけばあふぎ哉　鋤立
繪もなくて心あやなし素扇　一詞
さる人の紋見付たるあふぎ哉　尙白
小夜更て肌のつめたきあふぎ哉　衞門
かつぎより男見るまのうちは哉　立吟
蠅
うつくしき繻子の顏の蠅うたん　紅雪
拔劍逐蠅
蠅はぢき怒る心よ手束弓　嵐雪
祇園會
屋根洗ふものどさめきや祇園ノ會　百里
七日
鉾に乘る人のきほひも都哉　其角
十四日
山は行松はしらずや祇園の會　紀州 一三
雲峯
雲の峰空に心のもやつきぬ　桐雨

佃島にて
雲のみねうねり上せよ土用波　百里
夕立
ゆふだちに呼いださるゝ拍哉　その
夕だちや坂行駕籠の片簾　山川
夕だちのまたやいづくに下駄はかん　鬼貫
夕だちに追れて來るかむら烏　隨友
夕だちや池のすがたのあたらしき　衞門
むさしのにて
夕だちやうしの下腹我やどり　甲府 梅庚
蓮
はづかしや蓮に見られて居ル心　湖春
白鷺不禁塵土泥
白鷺やにごれる池のはちす陰　菊離
素堂の蓮見にまかりて
田畠の辛苦もなきはちす哉　己百
麻
櫻麻さくら夕もおもひ出つ　桐雨
いかにして紡錘によるらん櫻麻　杜格

物得たり麻刈ル跡のあさ地酒　月下
蝸牛
かたつぶり石に落たる音ぞうき　氷花
姸かたち女の鬼かかたつぶり　百里
かたつぶりてりからさるゝ靑葉哉　月下
夏衣
帷子の重ね着は何のたすけぞや　氷花
はせをの別に
夏衣妹笠ぬふてまいらせよ　大津 尙白
夏草
やまぶきの實に成ルころのいちご哉　虛洞
怠らで咲て上りしあふひ哉　才麿
やさしさや龍卷のこす花あやめ　尾花澤 清風
厩守其艸をかれ馬齒莧　笠扇
善光寺にてみる喰尼に
みる房やかゝれとてしも寺の尼　嵐雪
晝顏の花や昨日の今時分　鋤立
夕顏よふくべの名さへなつかしき　〃
道づれの女見かくす麥野かな　素親

さかさまに撫子すがる高根かな　爲睦

光廣もしろしめせばぞ蓼摺木　年弓

一房【フサ】を手にあまりたる牡丹哉　湖水

咲ときの牡丹にせまし園の色　遠水

東叡山の若葉の下に、耋寐亭をかまへ侍りて、

雪見草花のふる夜は寐覺しか　絲絲

池上にて

山水に濁り散さじ香需散【かうじゆさん】　卅竹

男をんな打まじりてすゞみ歩ッみて

夏痩を戀ゑル人と見らればや　風子

その白キ塩に染しか茄子漬　魚兒

若竹の一まつ高し月の隈　菩黍

聲たてぬおもひよ鹿の袋角　卜乙

足音の間をたゝく水鶏かな　李下

水札【けり】鳴て日影ちろつく流哉　加賀　一泉

富士を見て身をもだへけり羽抜鳥　菊匂

みな月になきもの見せん富士の雪　涼葉

しらすかの宿をとをりたれば、中鰺【あぢ】とよばひ賣けり。此魚らりのその中をとりけるもおかしくて、其らをゝ呼て見たれば、げにも大小の中にはんべるをさかなにして、

よの中をしらすかしこし小鰺賣　其角

妻蘆詣【めぐろ】

夏は又冬がましじやといはれけり　鬼貫

行程二里余の旅すがたこと〳〵しう、足袋はゞきして、卯の花月夜明やらぬほどに出ぬ。

首途

荊【バラ】の花裾【もすそ】きらしや旅ごろも　嵐雪

日本橋右に御本丸見ゆる。東叡山は跡に雲かゝりて見えず。雨のふたつみつ額に落くるをきづかはしきに、先達の坊いへるは、かさはならで常にあることぞとて、旅行猶しづかなり。

雨雲やばら〳〵あふぎ旅の笠　當歌

神明にて夜明ぬ。

鶏のこしやむ聲か夏木だち　仝

増上寺をおがむに、まことや此塔に風雲のかゝるを、一尺ほうとかやいふ。けふは空晴て雲なし。

よき馬に乗あたりけり麥嵐　青女

東海寺の慈雲菴へ先導行て、万年石を見る。

萬代やとくさのしげり石の苔　仝

瑞聖寺

わくらばに土くさきなりうしろ堂　當歌

めぐろの瀧も人のまふでぬ日

底清水心の塵もしづみつく　嵐雪

句の序【ついで】よくて、くだんの袋の底の旅の句をならぶ。

桐雨ぬし京うち參りとていでぬ。行かたの覺束なく、しる人はそこ〳〵に道のほどはから〳〵といひふくめ出したてつ。

卯の花の雪消五月雨のくもらぬほどに歸り來べきなれど、

いと名殘をしくて、

梅にさむる朝けわするな辛(カラキ)もの　嵐雪

駕籠かきの、旦那〳〵といふ
に聞きあき侍りて、

馬士(ムマカタ)に貧きはなし雪の宿　其角

馬はみんな闇のつゝじのうつの山　子英

海川に錢をしみそ花の波　鋤立

木の形(ナリ)よ愣にくき馬士が顔　調柳

春ハ三月(ミツキ)團子ぬくらんうつの山　路通

秋の空富士を色〳〵に捺(ナブリ)けり　卜尺

月の照いづくに富士のかげぼうし　氷花

富士の煙雪やむかしの消殘り　(さの)松子

によつぼりと秋の空なるふじの山　鬼貫

雪の日は物見の松もよられけり　秀和

池鯉鮒(チリフ)(鳴海)なるみ晝も淋しき碪哉　風瀑

首途

よくさきて人に見られよ宿の菊　巴風

くさまくらもののゝ問たき案山子哉　舟竹

木の葉かきて礎(イシズヘ)見せよ不破の關　李下

辻堂や寒さもしらぬ樂(らく)あみだ　笠凸

春雨や粟津が原に二ところ　(膳所)件自

短夜の聲なま長し馬やらふ　衛門

くさまくら飯にものこるあつさ哉　青女

旅人の足跡よぎる清水かな　仙化

大かたの秋の別やすゞのもり　百里

瀬戸染飯

寒食の里侘しらに染飯(そめひ)かな　桐雨

宇津谷ノ十團子

その露を柳にかけよ十團子(とをだんご)　仝

草津姥ガ餅

姫が餅姥はさくらの名なりけり　仝

大和見にまかでさぶらふと
て、つばくらにしばしあづか
るやどり哉　といへるに、我
も猫に別おしみて、

ちぎり置つばめとあそべ庭の猫　(伊勢)園女

宮川のわたりまだ夜ふかう

色あひもわづかに春の夜明哉　明野

咲ぬまも物にまぎれぬ菫かな

同じ野中より駕籠にかきのせ
られて

手を延て折行春の草木哉

伊奈木川

手ぐり船風は柳にふかせけり

伊賀越

山松の間〳〵やはなの雲

駒どりの聲ころびけり岩の上

花の前に顔はづかしやたび衣

朝ふかくやどりたつとて

ねぶたがる人にな見えそ朝櫻

同じ曙

おもしろや水の春とはひたの音

なつみを行過て

まねくやと跡になつみの川柳

卯月朔日、當麻にまふでゝ、
まんだらをおがみ侍りて、

衣更みづから織らぬつみふかし

おなじ日香久山にまかりて

あら美し卯の花は誰が衣更

さる澤にて

水若葉かつぎ着て來し人の影

そでかけておらさじ鹿の袋角

法隆寺

二王にもよりそふ蔦のしげり哉

北國何トヤラいふ崎にとまりて、所の海もおし入て、句をのぞみけるに、

文月や六日も常の夜には似ず

その夜北の海原にむかひて

あらうみや佐渡に横ふ天川　はせを

名月は敦賀に有て

名月や北國日和さだめなき

氣比の宮べは遊行上人の白砂を敷ける古例ありて、この頃もさる事有しといへば、

月清し遊行のもてる砂の露

淺水のはしを渡る時、俗あさうづといふ。清少納言の橋はと有、一條あさむつのとかける所也。

あさむつや月見の旅の明ばなれ

濵田にて

我駒の脊あらためん橋の雪　湖春

初秋

今朝よりは編笠はるゝ一葉哉　幽山

初秋の風のよはさやいとすゝき　三翁

盆前は大あらましや秋の風　帆雪

七夕

浮草のうかれありくや女七夕　才麿

星合やいかに痩地の瓜つくり　共角

ほし合に我妹かさん待女郎　嵐雪

桐

落かゝる桐の葉かろしひとへ物　山川

葬

朝顔に置とは露のつよみかな　大坂 來山

朝がほに二度泣今朝の別哉　秀和

朝顔や片庇なる玄關まへ　百里

朝がほは繪に寫す間にしほれけり　破笠

褌着て葬にその恥はなし　杜格

朝顔や誰が文にもうらみられ　月下

魂祭

たま棚は露も泪もあぶら哉　嵐雪

魂まつり味なき山のこのみ哉　湖水

魂棚は面白おかしきにほひ哉　百里

盆の十五日ぞ、さかな物せよと、います母のことぶき給ふもいと有難きに、

このうをゝ親に上(あげ)たやたまゝつり　冰花

魂まつる宿や入相つねならず　調柳

施餓鬼棚我影ぼしも哀也　甲府 一映

盂蘭盆や生るをつなぐ雀賣　渭橋

月 附駒迎

北殿よ月にとふべき渡世なし　沾徳

江の月やふかみ淺みの蜊(あさり)がら　鋤立

名月や歌人に髭のなきがごと　嵐雪

二所に月見る人のとがいかに　擧白

紘(フナバタ)をきざまん月の落所　衛門

菅笠やことに目に立駒迎　秀風

菊花　九唱

其一　九日

菊もまだつゆ／＼つぼむ九月哉　嵐雪

其二　素堂亭にて人／＼十日のきく見られけるに

かくれ家やよめ菜の中に交(まじ)ル菊

其三　百菊を揃けるに

黄(キ)菊白(シラ)菊其外の名はなくも哉

其四　名所の菊

白菊の鎌倉やすまば扇が谷(ヤツ)

其五　莖のたけのみやびやかなるは歌のすがた也けらし。菊をみて句をまふく。

鶴の聲菊七尺のながめかな

其六　琴

琴は語る菊はうなづく籬(まがき)かな

其七　棊

菊買(カフ)は又棊にまけし人やらん

其八　書

書を抽(ニギル)芭蕉にねぶれ菊の皃

其九　畫

菊さけり蝶來て遊べ繪の具皿

鹿

ねらはれて道なき鹿の眞向哉　不障

田家

鹿よりや哀鹿追ッ翁聾　桐雨

己巳九月十三夜游園中　十三唱

其一

ことしや中秋の月は心よからず。此夕はきりのさはりもなく、遠き山もうしろの園に動き出ルやうにて、さきの月のうらみもはれぬ。

富士筑波二夜の月を一夜哉

其二　寄菊

たのしさや二夜の月に菊そへて

其三　寄茶

江を汲て唐茶に月の湧(ワク)夜哉

其四

旨(ムマ)すぎぬこゝろや月の十三夜

其五　寄蕎麥

月に蕎麥を占こと、ふるき文に見えたり。我そばゝうらなふによしなし。

月九分あれのゝ蕎麥よ花一つ

其六

畠中ニ霜を待瓜あり。試に筆

をたてゝ、
冬瓜におもふ事かく月み哉

其七
同類相求といふ心を
むくの木のむく鳥ならし月と我

其八 寄薄
蘇鐵にはやどらぬ月の薄かな

其九 寄蘿
遠とも月に這かゝれ野邊の蘿(つた)
松にあはぬも時ならんかし

其十
一水一月千水千月といふ古ご
とにすがりて、我身ひとつの
月を問。
袖につまに露分衣月幾(ク)つ

其十一 苔
月一ツ柳ちり残る木の間より

其十二 寄芭蕉翁
こぞのこよひは、彼庵に月を
もてあそびて、こしの人あり
つくしの僧あり。あるじもさ
らしなの月より歸て、木曾の
痩もまだなをらぬに、など詠
じけらし。ことしも又月のた
めとて庵を出ぬ。松しま、き
さがたをはじめ、さるべき月
の所／＼をつくして、隠のお
もひ出にせんと成べし。
此たびは月に肥てやかへりなん

其十三
園より歸ル。
われをつれて我影歸る月夜かな

砧
衣巻や粘(ノリ)すりおけの鳥淋し　菊鈴
砧打人も裸でうまれけり　鋤立
蘆の屋の灯ゆりこむきぬた哉　立志
槌音も隣はづかし破れぎぬ　山川
有つべきものは砧の小歌哉　冰花
我馬に拍子しらするきぬた哉　巴風
鼓やら砧やらたゞあめの音　仙化

野分
小はらめや野分にむかふかゝへ帶　その

湯けぶりの土を這(へ)行のわき哉　東籬
手にたらぬちり／＼草の暴風(のわき)哉　立志
いそがしや野分の跡のよばひ星　加賀 一笑

紅葉 附蔦
小男にかたじけなしや下もみぢ　秀和
水底の紅葉見て来るかつぎ哉　八木
片枝は霧こめ／＼のもみぢ哉　百花
嵯峨の歸に
おもたさに紅葉はなげつ二月橋　遠水
蔦(つた)の手にやがてにぎれる小石哉　嵐蕙

薄
はづれ／＼栗にも似ざる薄哉　その
蘭の香としらで風見る薄かな　大坂 件自
伊勢の國に修行しける頃、關
の地藏とかやにとまりたる
に、宿に橘のさかりなりけれ
ば、宗長法師
橘のかにせゝられて寐ぬよかな
これらも猶俳諧のまくらには
あらずかし。豊國野を過ける
頃、

角もじやいせの野飼の花薄　其角

おなじくいせの國出るとて(「奥の細道」末段「長月六日になれば、伊勢の遷宮拜んと又舟にのりて」として此句あり。)

はまぐりの二見へわかれゆく秋ぞ　芭蕉

虫

秋の部に入てなかばや裸むし　琴風

かまきりや盧火にうごく灰の中　舟竹

はたをりよ何を業に鳴はせで　山川

露明ぬ蜉蝣とまる水のうへ　冰花

繼しきはひつぢ(穭)にそだついなご哉　紅雪

穭田にあかく成たるいなごかな　風子

稻すり歌の聞ふるびたるは、そなた百迄とぞうたふ。

百年に一定たらぬいなごかな　衛門

日ぐらしの聲ぞなみだの親の里　少年 彌五郎

一日二日よそいきして、宿心つきて、親里のかたを詠ていへりけらし。

夕照

蜻蛉の壁を抱ゆる西日かな　沾荷

潮落かゝる蘆の穗のうへ　芭蕉

霧の外の鐘を隔つる松こみて　露沾

沓にはさまる石原の露　沾荷

入月の薄粧たる武者ひとり　芭蕉

柴の筧に笙をあやどる　露沾

山寺は晝も狐のさまかへて　沾荷

花とひ來やと酒造るらし　芭蕉

夕霞日〻に重なる鞠の音　露沾

白き胡蝶の垣を飛越す　沾荷

絹ばりを欄の柱にすぢかひて　芭蕉

亂れし髮をなをすかんざし　露沾

調なき形見の鼓音も出ず　沾荷

何も燒火に皆畫しけり　芭蕉

棒の月一の窓に僧痩て　露沾

誰つき染し裏の藪かげ　沾荷

みゝづくの己が砧や鳴ぬらん　芭蕉

四十雀こそ風も身にしめ　嵐雪

稻妻

古すだれ稻妻とまる綻かな　立吟

いなづまは稻に契りの閒あるか　鋤立

稻妻の笹に音ある狐かな　伴叔

相撲

すまひとり傾城の名にまぎれけり　冰花

兄弟も勝ことおもふすまひ哉　花蝶

投られて禮して這人すまひ哉　立吟

病後

すまふとる心になりぬ秋のくれ　倘白

踊　祇園にて

舞子更て踊烏の聲白し　京 千之

稻妻に踊くづれて泣子哉　月下

案山子

かゞしみて乘馬きるゝ徑かな　調柳

まじ〳〵と日にてらさるゝかゞし哉　京 原水

見わたせば出來不出來あるかゞし哉　呂洞

みのむしは千種の花のかゞし哉　鋤立

秋暮

癖に成て淋しや秋の今時分　京 千春
立いでゝうしろ歩や秋のくれ　嵐雪
秋のくれ女房のほくろ見付けり　氷花
生て居ル人見て秋のあはれ哉　鋤立
七夕の獨あそびや秋のくれ　鼠尾
秋のくれくつ〱おかし羅漢堂　月下

九月十日菊のかへりとて、集のふくろからげて、立よられけるに、

秋のくれ井手の蛙のからをみん　舟竹

といひて、土産ねだられけるに、人丸の柿ノ實、山ノ邊の栗のから、今日の得ものゝあまりなりと、笑ひ興じて、

榧のからよしのゝ山の木の實見よ　嵐雪

蕎麥　讃中陽家臣

あらそばのしなのゝ武士はまぶし哉　京 去來

茴香

實のおぼろ葉の朝露やくれのおも　桐雨

閑　敬忠のかねの姥は、今もうち付におもひ出られ侍る。

我宿は何をしのぶの摺火うち　卜宅
ありの實よ人の問こば山の奥　草加 水山
梨ばかり夕日に醉ぬ山路かな　臥葛

山家に遊ぶ事侍しに

いざともに糧くさぎらん秋の庵　湖水

猶さまよひて

里の子と鼻たらし居ル木わた哉　同
蕎麥はたく男にもろし女郎花　東雲

貧郁

手繰繩のくるしや賤が芋のから　百里

けふも俳諧明日も月次とて

四鄰をかぞへ歩や庭たゝき　百花
落鮎の水にあかるゝうき世哉　勇招
川音につれて鳴出すかじか哉　園友
鳴網は風の足見るゆふべかな　湖舟
そよぐたびとりならびけりすまふ艸　三翁

其袋　冬の部

老しらぬ今朝しもなどか桐火桶　露言

讃大黒

神の留守能女房を守べし　嵐雪
おもげなるとのゐ袋やかみな月　山川
淺ましやまだ十月の暦うり　大坂 來山

時雨

鳴松はわざ〱ぬるゝ時雨かな　立志
草履とりしかり〱ぞゆく時雨　薬水
茶を煎て時雨あまたに聞なさん　嵐雪

京へまかりて

時雨ふり黑木になるは何〱ぞ　才麿
桑名には笘干宮のしぐれかな　山川

江口にて

からかさのゑぐちにかさぬ時雨哉　京 千之

爐

爐の友や額にかけたる翁面　月下
いつとなく我座さだまる火燵哉　孚先

中よしやごとくの足の冬籠り　衛門
埋火やきゝ耳たつる鼠弶(わな)　百里
小野といふ名にめされけり炭俵　和賤

足袋

足袋はきて寝る夜隔そ女房共　嵐雪
革足袋やあらたなる程りちぎなる　鼠尾

木枯

こがらしに吹倒(クタ)されし座頭哉　疎木
一すじに風や世のこゝろばせ　伊勢 一有
こがらしに腹立鴇(トキ)のひかり哉　桐雨
木枯に咎おほせたる木の名哉　士鮮
日あたりもこゝろに寒き枯野哉　湖風
うたふてもまふても冬の山路哉　京 原水

十日雁

こがらしの高くもなるか雁の聲　百里
十月の風いろ／＼にきく夜哉　言瀧

落葉

藪川の水に落葉の色ぞなき　三翁
枳(からたち)に落葉つらぬく山路かな　東石
落葉朽葉皆拾はるゝ銀杏哉　北鯤
炭屑にいやしからざる木のは哉　其角
落□て風もすくなき木葉哉　吟水
(雀志校訂『嵐雪全集』に「落わびて」とあり。)
落葉たく色／＼の木の煙かな　釋 宗派
狼の吠からしたか冬のやま　冰花
支離(カタヘ)馬すてしかれのゝ哀哉　風洗
塚一つ枯残りたる野中哉　和賤
たうとしやいためぬ梨の冬木立　山川

歸花

物すごやあらおもしろのかへり花　鬼貫
松風はうしろの山よかへりばな　卅竹
やどり木の餅(フタマ)よ若しかへり花　樗雲
深草の櫻は白しかへり花　秀和

雪

初雪や皆やごとなき沓のあと　山川
門の雪臼とたらいのすがた哉　嵐雪
常／＼はしらぬ榎よ今朝の雪　調柳
だゝくさに木立もれたる雪の形(ザマ)　衛門
旦夕(たそがれ)も過るか雪のたまる音　孤屋
白雪は溝の端のも喰れけり　月下
つめたさを雪にまぎれてあるきけり　湖水
一嵐鐘の音(ね)落せ竹の雪　兆風
初雪の白きにこりぬ目病哉　峡水
初雪も別(ベツ)にあまみはなかりけり　止行

霜降至堅氷(履霜堅氷至を正しとす)

初雪は鹿の角にもたまれかし　紅雪
色ごとに香こそ有けれ柚子の雪　宇門

病中

初雪の半蔀(はじとみ)ゆるせ風の神　竹井

霰

あられにはおもひ忘よはちかつぎ　擧白

霜

霜の夜や蟻の音きく古柱　風子
日の朝や待て霜田の堀鰌　遠曙

とし毎の初茄子は駿州江尻の莊より來る

霜枯に一花咲るなすび哉　呂洞

凍

田にそひて益なきほどを氷哉　沾徳

五器一つ氷の上のあはれかな　伊丹住 青人

風歸ス氷は水のいかりかな　立吟

玉章に薄墨がちのこほり哉　作者不知

水の隈いろ〳〵なれや初ごほり　花蝶

古池の波たつるなよ薄氷　衛門

濁江も凍ば白し水の花　一口

はり〳〵と氷のり越小船かな　衛門

海鼠

むくつけき海鼠ぞうごく朝渚　露沾

海鼠喰はきたないものかお僧達　嵐雪

蠣を得て返事に

給は石花にかしこしひねり文　同

鰒

河豚ほど鰒によう似た物はなし　伊丹住 鬼貫

米にかへたる銅にはあらで

舟君のさうしや落る雪の鰒　山川

今更につられて鳴か鰒の聲　冰花

半醉半醒

祐成鰒を喰時は　幽水

ときむねはくはざりけり

鱟鰒のひろはれにゆく霰哉　立吟

鮟鱇やめなみ男波の水ぶくれ　菊匂

鵆

鳴門なる渦にまかれそ浦ちどり　冰花

雲の千鳥寒うて鳴か嬉しいか　桐雨

息つけよ足高山に飛ちどり　菊匂

はら〳〵や風の吹きる村ちどり　幽亭

水鳥

水鳥のあゆみ短かき山田かな　潮風

たはぶれや呑あふ鴛の水鏡　山川

鴛の來て物潜なる小池哉　大津 尙白

麥を蒔人にはおゝし赤がしら　秀泉

水月

晴過て物皆黑し冬の月　樗雲

つれもなく野に捨られし冬の月　露尺

鷹　附追鳥

覗れてものうき鷹の夜居哉　子英

珍しき鷹わたらぬか對馬船　其角

魚賣を蹴て行鷹やみさご腹　桐雨

追鳥の一羽逃行入日かな　一蜂

夜興

ほめられて夜行の犬のきほひ哉　冰花

葱

ひともじや一字の題の忘れ草　百花

臘八

猿は飢牛は胡麻喰霜夜哉　紅雪

冬の日客をもてなす

君見よや我手いるゝぞ莖の桶　嵐雪

煤掃

武藏野や煤はきなれど富士の山　東順

すゝはきはあたゝかなるを家例哉　調柳

すゝ竹の世々を戸ざゝぬ町家哉　菊峯

煤はきて何やらたらす家の内　月下

鉢扣

身を捨よ下駄はく雨の鉢たゝき　冰花

鉢たゝき君子の閨を遠ざけよ　衛門

節季候

せきぞろやまづ天王寺御墓山　ゟ

衣配

衣くばり四町へ色をわかちけり　同

歳暮

年の急ちいさき足袋ぞ心せく　月下

米虫の石臼めぐる歳暮哉　楸下

古暦ほしき人には参らせん　嵐雪

世話

二月十七日神路山を出るとて

徳

はだかにはまだ衣更着のあらし哉　芭蕉

龍樹菩薩の禪陀伽王に對して貪欲をしめし給ふに、たとへば有瘡人近猛熖、始雖悦後増苦。の文のこゝろを、

欲

雁瘡のいゆる時得し御法哉　其角

逍遙鷗鷺之間出入是非之境

彼是

はなの夢此身をるすに置けるか　嵐雪

りつぎ

彼艸にから名はなきか茗荷賣　百花

ものぐさ

寒苦鳥明なば紙小縒はん　舟竹

むひつ

書ぞめや柄杪の底の十文字　衛門

だんぎ

おそ櫻禪のならひに切くべん　琴風

うそつき

枯蓮のからかさかろし辻談義　笠凸

せはし

覗くふ朝飯もはてぬ春のくれ　幽亭

そさう

花の木やかならず走る下り坂　菊峯

きれゐずき

硯墨蝿の喰ものなかりけり　百里

いぶり

いもむしは何にいぶりの名にはたつ　月下

ひがみ

十月や余所へもゆかず人も來ず　尚白

みちぺた

寺〳〵の談儀(義)過たかほとゝぎす　桐雨

よひまどひ

よひ〳〵は小坊主たゝく水鶏哉　當歟

あさね

雪かゝて御格子まいれ四つ目ざし　山川

せち

蚤ひろふ手わざもにくし猿の智恵　青女

しんく

一升はからき海よりしゞみかな　其角

ふきよう

相槌の笑て明るきぬたかな　山川

物名

槻　卯木　松　桐　椎　桃　梨

月うつぎまつとちぎりし妹もなし　卜宅

賀茂　鳥羽　糺　八瀬　水野　淀

鴨飛でたゞ巣に瘦し水のよど　立吟

蚕津岸瀬溝齋鴨渕

井筒波

雨つきし蝉ご身を干ス　いとまなみ　琴風

鶺鴒鷺鳩鷗鶯雀鴫雁

うつろらん時日(ときひ)は惜と鹿尾草(ヒジキ)刈　菊峯

敦盛

頬当(ホウアテ)にえくぼあるかな花軍　舟竹

斉安仁

盃に蝶をとむる花柚かな　同

檜垣女

水かゞみ脊中(セナカ)に雫をおひにけり　同

七福神

寄辨才天鎰

家子ともに引出物せん蔵開キ　琴風

寄恵比寿鯛

櫻鯛笑はゞたゞにくれつべし　同

寄大黒鼠

亭(テイ)の顔のどかに黒し白ねずみ　同

寄壽老人鹿

角落て犬と見ましや庭の鹿　同

寄福祿壽杖

ふるびやうかの遍照が卯杖哉　同

寄布袋蝶

いさや蝶おもき身すらも舞の袖　同

寄毘沙門鉾

糸あそび甲(カブト)の星か鉾の影　同

七小町

山本

あは雪は女のなやむけはひ哉　もと

草紙洗

うき草や枯て見しもの墨ながし　同

通

おもひある心おもげや雪の笠　同

卒都婆

霜けぶりそとばに寄ルはくるしいか　同

関寺

七かへし小まちをかへせ神楽舞　同

鸚鵡

行としや肌にとまる梨の皺　同

清水

年籠リ小町が若世尋けり　同

少将のつらき夜ごろをかぞへてとて、まづかちよりかよひけんあはれさよ。

足の血や木瓜(ボケ)に裂(サケ)けん木幡(こはた)越　山川

月の夜

さし足も月に目あらば恥かしや　同

闇

年の夜の細工わりなし欄(しら)の割　同

雨の夜

蓑に焼(タク)香なとがめそ櫻守　同

風の夜

風もあはれとはふけ顔の眂　同

時雨

足すます帯刀(たてはき)もなし小夜時雨　同

雪のくれ

つとめての雪の足跡君も見よ　同

通文

松の木の雪やはや消ュ軒の妻　卜宅
ながしつゝ浪しろしみなつゝじ哉　冰花

味酒に苦き物あり松と花　立志
山椒の芽を探るおぼろげ　嵐雪
風通ふ氷室の外はあたゝかに　鋤立
床よりはこぶ猪のひとつ子　立志
照月は雪の柏木笹の霜　嵐雪
檜笠ばかりうらおもてなき　鋤立
逢ぬ戀練の袷の袖のゆき　立志
黒ィおとことわらはるゝ色　嵐雪
汐の日を風呂やの猿の名にたてそ　鋤立
又乙雪をちぎる別路　立志
外に寐て尤ぬ犬をまたぎ越　嵐雪
かま(竈)のはらひの獅子鳴し來ん　鋤立
振舞に齋の急ぎのまがひけり　立志
疊寄迯もなくて秋ふる　嵐雪
軒の惹天上したる龍の跡　鋤立
夜はしづまる溫泉の底の月　立志
なるときく向の後家の涼みゐて　嵐雪
月戸の聲も我おもひから　鋤立
癆瘵の藥親ふ障子越　立志
おこゝろしりの是の十人　嵐雪
紺かきが染そこなひし衣佗て　鋤立
足利殿の公事未細也　立志
長明とうき世噺ん山の奥　嵐雪
松風の音地震又ゆる　鋤立
闇きより心の底凝定の內　立志
めぼしの花のいづこ三芳野　嵐雪
春の月己は盗はなるまひぞ　鋤立
雁歸ルまで妾番せよ　立志
千束なる切紙がみも纔佗ぬ　嵐雪
ひたものけふは眉ねかゆくて　鋤立
よしなしの煙草をたてば何とやら　立志
とりしまらざる氣は廿年頃　嵐雪
そこ〳〵に代脉はあな賴がた　鋤立
見ても汗こきあみ笠の跡　立志
袖にして櫻橘沉ン麝香　嵐雪
文ひろげいづ水無月の月　鋤立

笠うち越せば恨の瀧を柳哉　學白
大葉の茶摘小葉もゆべく　嵐雪
くるへ蝶翅を己が聲にして　李下
ねり干す絹は風の一染　冰花
釣瓶井のくらか〳〵と月の秋　嵐雪
人の刈頃青き我稻　學白
蒲の穗のほくそもつかず有佗て　冰花
猪ふるまふ心くるしき　李下
年をしてうつたる舞はゆるさしめ　學白
寄衆も勇者城もしれもの　嵐雪
百谷の雪くづれ來ん筑摩川　李下
芽もたちあへず大割の材　冰花
華に來て牛も涎を流也　嵐雪

その日に成て悔る入定　擧白
星に積ム錢を篩にふるふとも　冰花
養ひ合せ人も知ル緣　李下
糸屑に思ひを捨よ組屋敷　擧白
月もきこゆる水戸の下町　嵐雪
大魚の網引踊ル舟競ひ　李下
上にしたがふ荒ずまふども　冰花
つり替に女はしづむ金秤　嵐雪
情にとてはなめぬ石癬　擧白
胸を割かしらをうつも酒の罪　冰花
狂言作る夜の蚊の責　李下
おとゝひも昨日も人の涼みにて　擧白
からかさかした君も問來ず　嵐雪
うきふしを又ゆり起ス渡し舟　李下
日なたくさゝもふり醒ス袖　冰花
石菖に油煙すへしのけふの月　嵐雪
蝗蚱も羽をおさむ戸袋　擧白
秋風に眞弓とる手も肩ヲ着て　冰花
三世のむすびに立ル擲待　李下

さからはで車も通せ腐橋　擧白
星霜照か諸社の贈官　嵐雪
花笠はかゞの番匠筑波萱　李下
藤やまぶきの國ー風を讀　冰花
瓜むきや男竪割輪は女　立吟
雪のすゞめと扇もてなす　嵐雪
かうばしき硯明れば筆取て　同
あるじの心植木なき庭　立吟
鑓䉼共道みがく秋の月　同
年貢はからぬ己が除地　嵐雪
藤原の十枝の裔もみぢして　同
頭數なる鎌倉の穢多　立吟
仙臺の米つゞけくる恒の産　嵐雪
近き雲居は禪の魂　立吟
盗なりと鼠をいたく逆剃に　嵐雪
仕合なをす暮の貧乏　立吟
けはひ見て子持が母もさらず也　嵐雪

また寐朝寒ム御油の馬士　立吟
さまぐ\のきぬぐ\かたれ軒の月　嵐雪
露拾はする玄宗の馬鹿　立吟
花にいづ貝摺錢をつなぐらん　嵐雪
春面白き酒の呑じに　立吟
盗も頭の家はかざりして　同
いづくの僧ぞ札くばり行　嵐雪
渡しさす舟守ともにうち返し　立吟
すまふの意趣をとぐる一村　嵐雪
小新發意勢は秋葉の二三尺　立吟
椽ふるしぐれ竹笠を打　嵐雪
鹽車月夜のよさに引侘て　立吟
市の座につく召の昆布賣　嵐雪
懸聲も不肖ゞゝの鼓うち　立吟
翠簾を尻目の心しりきや　嵐雪
蛆蝿は誰ガ黒髪をなめに行　立吟
明日の精進や戀のさまたげ　嵐雪
はりあひもなき傾城の氣ぬけ哉　立吟
頼義殿といひさうな顔　同

狐矢に荒木の弓を素引して　嵐雪
七日〳〵の戸見に行　同
外科の子の手水し習ふ花の水　立吟
梅山吹の光ルわきざし　嵐雪

名によりて數遣になれよ伏見艸　百花
あふぎのつまし塵取に折ル　菊峯
切箔にちらせばかろき金にて　笠凸
圏のうづらに目を耽かす　嵐雪
鼠槍鼬矢削ル藪の月　菊峯
田庵さびしき風の連枷　百花
機嫌よく熊野のお寮入おはせ　嵐雪
帶の祝も明日の雜餉　笠凸
夏の夜を背き〳〵の寐ぞつらき　百花
瓜嫌ひなる中の移り香　菊峯
病ぬきてみれば涼しき草の上　笠凸
とはゞや所化の衣すます宿　嵐雪
物盗人の心の掛子箱　菊峯

客に扈從のみやびやかさは　百花
新風呂を入和げよ花の肌　嵐雪
柳の窓を上ル尺はち　笠凸
桂男もうごくやうなる春の月　百花
舟責下ルかすりおもしろ　菊峯
捨石に胡座かく僧佛なり　笠凸
狐つかれの晝寐しに來る　嵐雪
ほれたとや白粉の花紅の花　菊峯
うき名の露よ番匠の妻　百花
月にみん足に疵もつよそあるき　嵐雪
稲喰色はしるゝ木食　笠凸
蠶きてうつふし染の捨衣　百花
灸こらゆる顏わらはゞや　菊峯
さて懲よ妬さ憎さの妍敵　笠凸
乞も情かお姫樣金　嵐雪
旦那寺垣の後にぬかづきて　百花
鳥叫三度肝に入聲　笠凸
芹の香に雪の兎の澤渡り　嵐雪
機布ちゞむ越の海西　菊峯

水むしに妹が手の裏あれにけり　百花
桃の葉しぼる湯肌うつくし　笠凸
花の種けふや祇園のお目ざまし　菊峯
菖の鉾に螢火をきる　嵐雪

菊の香や瓶より餘る水に迄　其角
蔦も便をかこふ小座敷　百里
幾重にも月さゝせんと向をみて　嵐雪
中酒にえめる雪の朝飯　其角
覺なく肌の痺も冷渡り　百里
拭ふ上さへ猶ぬぐひ板　嵐雪
四幅對四の常盤に詠けル　キ角
小田の原なる宗(早)雲の寺　百里
漱透の頂香にたき　嵐雪
下帶洗ふ夏闇にけり　キ角
人きらぬ大小さます夕月夜　百里
やり水淺く蓼紫蘇のとう　嵐雪
鰍とは是が鳴らん生洲町　キ角
餞うたふ戀の首尾あれ　百里

女文字史の筆のふとりやう　嵐雪
腸黒き弓取の國　キ角
裝束の百馬揃ゆる花の山　百里
さかふる藤の門の客人　嵐雪
二
感じては鬼が詩を次春の雨　キ角
緣の返事はふつとならぬか　百里
座を打て母のたけりも我泪　嵐雪
しばられて居ぬすびとの顏　キ角
大年や戸明ル音のあぢきなし　百里
塩よと呼て一舛の雪　嵐雪
うなひ等がとさかを拾ふ磯遊　キ角
沖の子日に海松を引　百里
玉づくり難波は霞む古ル都　嵐雪
蟻のちからも廻す輪藏　キ角
老僧の若衆つれたる春の月　百里
櫛買ふ店に袖ひかれたる　嵐雪
船に醉鞍に睡ル世のうつゝ　キ角
骨の供して御國迄行　百里
遷宮にあはぬ泪もかゝる哉　嵐雪

芳野の暦月日わりなき　キ角
餅花もやゝと煤てけふの春　嵐雪
羽箒にうつ雉子なく也　百里

炭がしらけぶたき妹が泪哉　秀和
たくみに雪の積る門立　舟竹
臘月の梅花は觧ず中〳〵に　嵐雪
夜行の砂腹にいそがし　秀和
しら〳〵と嫦娥や醉を盗らん　舟竹
今朝も薄の手品してみる　嵐雪
桔梗なるあふみの笠は形がよし　秀和
親しらずとて旅に泣める　舟竹
人の垢よる〳〵かはる一夜妻　嵐雪
目疣をさすれ君の髪櫛　秀和
灌佛を手に提て來ル卯の花に　舟竹
蓬がもとのこゝろ朝起　嵐雪
硯石窪しと人にみられては　秀和
髻の鶴を長生の德　舟竹

三ケ國我流にかなで治けり　嵐雪
薯蕷麪すゆる月夜雪の夜　秀和
花の歌醒が井餅に書黒め　舟竹
けふぞ唐人天穿の晴　嵐雪
二
衣更着や肉陣風に立つらね　秀和
賭双六は宿にぞ打ツ　舟竹
腰支を星に借ス夜か後向　嵐雪
このてがしはの人みしりして　秀和
形尾の鵰のとはへや水かゞみ　舟和
軾せばむさかづきのくれ　嵐雪
壹参伍も弓は流れたり　秀和
跡なる男先の小男　舟竹
いづかたへはかなく醫者の急らん　嵐雪
ゐ串さす夜は雪の黒鬼　秀和
節季ゐの頭の艸の生るまで　舟竹
膳扣居て老を嚙哉　嵐雪
銀のはなし目貫を佩ながら　秀和
ならはし歌を人の世中　舟竹
猫好のこゝろ程身の有安し　嵐雪

水汲時は數珠耳にかけ　秀和
神無月十三日を花盛　嵐雪
空冷じの冬の澁柹　舟竹
煤はきて何やらさがす家の内　耒陽堂 月下
師走の門の子賣子買　嵐雪
冬籠ン御厠人が鄰居て　桐雨
雪竿はかる旦夕の月　月下
賞翫は鱈の雲腸打おかす　嵐雪
杉のからさもうすき盃　桐雨
本陣は結構あれど草枕　月下
添髮削ン匂ひ暑くれ　嵐雪
帷子の首筋よれて胸あはず　桐雨
麥粉くふには言の葉もなし　月下
おもしろふ順禮うたふ芝の上　嵐雪
曇りさだめぬ諏訪の湯煙　桐雨
稲妻に人よびあるく神かくし　月下
さゝらへ男うつゝ孕ふだ　嵐雪
落にきとうき名山田の鮎の魚　桐雨
何にあんにやの家にふれけん　月下
花の床曉笑ひ晝ねぶり　嵐雪
子かはゆがりの雉子もほろ〳〵　桐雨
鳶も譬喩品とこそ說にけれ　月下
佛頂顏よあられふる空　嵐雪
塗垂の戸たてに行か畠守　桐雨
我一代を盡す書本　月下
白川のそこらともなき住所　嵐雪
黒谷よりは鄰なるらん　桐雨
松杉の曇りもはてず日でり雨　月下
小うたで歸ン五月早女房　嵐雪
こいよ君待ぞよどのに薦しゐて　桐雨
裾ぬひくるむ死跡の恥　月下
十六夜の光に寺の米無盡　嵐雪
竹の子どしを秋風ぞ吹　桐雨
城下の田町や霧に望らん　月下
浴歸りと見ゆる足輕　嵐雪
葱に首つながるゝ龜かはん　桐雨
夢の錦は花の鴛どり　月下
春の夜を媒氏の官に酌とらせ　嵐雪
恨うれしき衣更着の衣　桐雨

皇都書林　京堀川通錦小路上町　西村市郎右衛門藏版

蕉門俳書目録

- みなし栗　其角撰　二冊
- 續みなし栗　同撰　二冊
- 花摘　同撰　二冊
- 續花つミ　湖十撰　二冊
- 枝〻乃ぬく路　嵐雪撰　二冊
- かはつ合　[illegible]　仙化撰　一冊
- 皮籠摺　凉菟撰　二冊

載文堂藏板

- 新二百韻　其角撰　一冊
- 新三百韻　同撰　一冊
- 丙寅紀行　風瀑集　一冊
- 新山家　其角撰　一冊
- 春乃日　越人　一冊
- 樗莚　宗瑞　沾尺　一冊
- 老樂ち子句　丈石　一冊

- 千載堂百歌仙集　五冊
- 小傘　[illegible]　一冊
- 七部集小本　冬の日　ひさご　春の日　炭俵　猿蓑　続猿蓑　あら野　二冊
- 貞徳植　貞徳　[illegible]注　一冊
- 山路の露　一冊
- 丁卯集　一冊
- 毛吹くさ　五冊
- 同追加　近刻三冊

- 誹諧書籍目録　三冊
- ことはし道　二冊
- 祇園拾遺　二冊
- 三月物　京宗匠會　一冊
- 鬮相撲　三冊

京都堀川錦小路上ル町
西村市郎右衛門梓

江南の珍硯、我にひさごを送レり。これは是水漿をもり、酒をたしなむ器にもあらず。或は大樽に造りて江湖をわたれといへるふくべにも異なり。吾また後の恵子にして、用るとをしらず。つら〳〵そのほとりに睡り、あやまりて此うちに陥る。醒てみるに、日月陽秋きらゝかにして、雪のあけぼの闇

の郭公もかけたるとなく、なを吾知人ども見えきたりて、皆風雅の藻思をいへり。しらず是はいづれのところにして、乾坤の外なることを。出てそのことを云て、毎日此内にをどり入。

元祿三六月

越智越人

花見

木のもとに汁も鱠も櫻かな　翁
西日のどかによき天氣なり　珍碩
旅人の虱かき行春暮て　曲水
はきも習はぬ太刀の鞘(ヒキハダ)　翁
月待て假の内裏の司召　碩
籾臼つくる杣かはやわざ　水
鞍置る三歳駒に秋の來て　翁
名はさま〳〵に降替る雨　碩
入込に諏訪の涌湯の夕ま暮　水
中にもせいの高き山伏　翁
いふ事を唯一方へ落しけり　碩
ほそき筋より戀つのりつゝ　水
物おもふ身に物喰へとせつかれて　翁
月見る顔の袖おもき露　碩
秋風の船をこはがる波の音　水
雁ゆくかたや白子若松　翁
千部讀(よむ)花の盛りの一身田(いしんでん)　碩
巡禮死ぬる道のかげろふ　水
何よりも蝶の現ぞあはれなる　翁
文書ほどの力さへなき　碩
羅(うすもの)に日をいとはるゝ御かたち　水
熊野見たきと泣給ひけり　翁
手束弓紀の關守が頑に　碩
酒ではげたるあたま成覽　水
双六の目をのぞくまで暮かゝり　翁
假の持佛にむかふ念佛　碩
中〳〵に土間に居(すわ)れば蚤もなし　水
我名は里のなぶりもの也　翁
憎れていらぬ躍の肝を煎　碩
月夜〳〵に明渡る月　水
花薄あまりまねけばうら枯て　翁
唯四方なる草庵の露　碩
一貫の錢むづかしと返しけり　水
醫者の藥は飲(つま)ぬ分別(駈)　翁
花咲けば芳野あたりを欠廻　水
虻にさゝるゝ春の山中　碩

翁　十二　珍碩　十二　曲水　十二

いろ〳〵の名もまぎらはし春の草　珍碩
うたれて蝶の目をさましぬる　翁
蝙蝠ののどかにつらをさし出て　路通
駕籠のとをらぬ峠越たり　同
紫蘇の實をかますに入るゝ夕ま暮　碩
親子ならびて月に物くふ　同
秋の色宮ものぞかせ給ひけり　通
こそぐられてはわらふ俤　同
うつり香の羽織を首にひきまきて　碩
小六うたひし市のかへるさ　同
鮠釣のちひさく見ゆる川の端　通
念佛申ておがむみづかき　同
こしらえし藥もうれず年の暮　碩
庄野の里の犬におどされ　同

旅姿稚き人の嫗つれて　通
花はあかいよ月は朧夜　同
しほのさす縁の下迄和日なり　碩
生鯛あがる浦の春哉　同
此村の廣きに醫者のなかりけり　荷兮
そろばんおけはものしりといふ　越人
かはらざる世を退屈もせずに過　兮
また泣出す酒のさめぎは　人
ながめやる秋の夕ぞだゞびろき　兮
蕎麥眞白に山の胴中　人
うどんうつ里のはづれの月の影　兮
すもゝもつ子の皆裸むし　人
めづらしやまゆ烹也と立どまり　兮
文珠の智惠も槃特が愚癡　人
なれ加減又とは出來ッひしほ味噌　兮
何ともせぬに落る釣棚　人
しのぶ夜のおかしうなりて笑出ス　兮
逢ふより顏を見ぬ別して　同
汗の香をかゝえて衣をとり殘し　人
しきりに雨はうちあけてふる　同
花ざかり又百人の膳立に　兮
春は旅ともおもはざる旅　同

珍碩　九
翁　一
路通　八
荷兮　十
越人　八

城下　野徑

鐵炮の遠音に曇る卯月哉　野徑
砂の小麥の痩てはら〳〵　里東
西風にますほの小貝拾はせて　泥土
なまぬる一つ餔ひかねたり　乙州
碁いさかひ二人しらける有明に　怒誰
秋の夜番の物もうの聲　珍碩
女郎花心細氣におそはれて　筆
目の中おもく見遣がちなる　野徑
けふも又川原咄しをよく覺へ　里東
顏のおかしき生つき也　泥土
馬に召神主殿をうらやみて　乙州
一里こぞり山の下刈　怒誰
見知られて岩屋に足も留られず　泥土
それ世は泪雨としぐれと　里東
雫舟に乘越の遊女の寒さうに　野徑
壹歩につなぐ丁百の錢　乙州
月花に庄屋をよつて高ぶらせ　珍碩
煮しめの塩のからき早蕨　怒誰
くる春に付ても都わすられず　里東
半氣違の坊主泣出す　珍碩
のみに行居酒の荒の一課　乙州
古きばくちのこる鎌倉　野徑
時〳〵は百姓までも烏帽子にて　怒誰
配所を見廻ふ供御の蛤　泥土
たそがれは船幽靈の泣やらん　珍碩
連も力も皆坐頭也　里東

から風の大岡寺繩手吹透し　野徑
蟲のこはるに用叶へたき　乙州
糊剛き夜着にちいさき御座敷て　泥土
夕邊の月に菜食嗅出す　怒誰
看經の嗽にまぎるゝ咳氣聲　里東
四十は老のうつくしき際　珍碩
髪くせに枕の跡を寐直して　乙州
醉を細めにあけて吹るゝ　野徑
杉村の花は若葉に雨氣づき　怒誰
田の片隅に苗のとりさし　泥土

野徑　六
里東　六
泥土　六
乙州　六
怒誰　六
珍碩　五
筆　一

雜

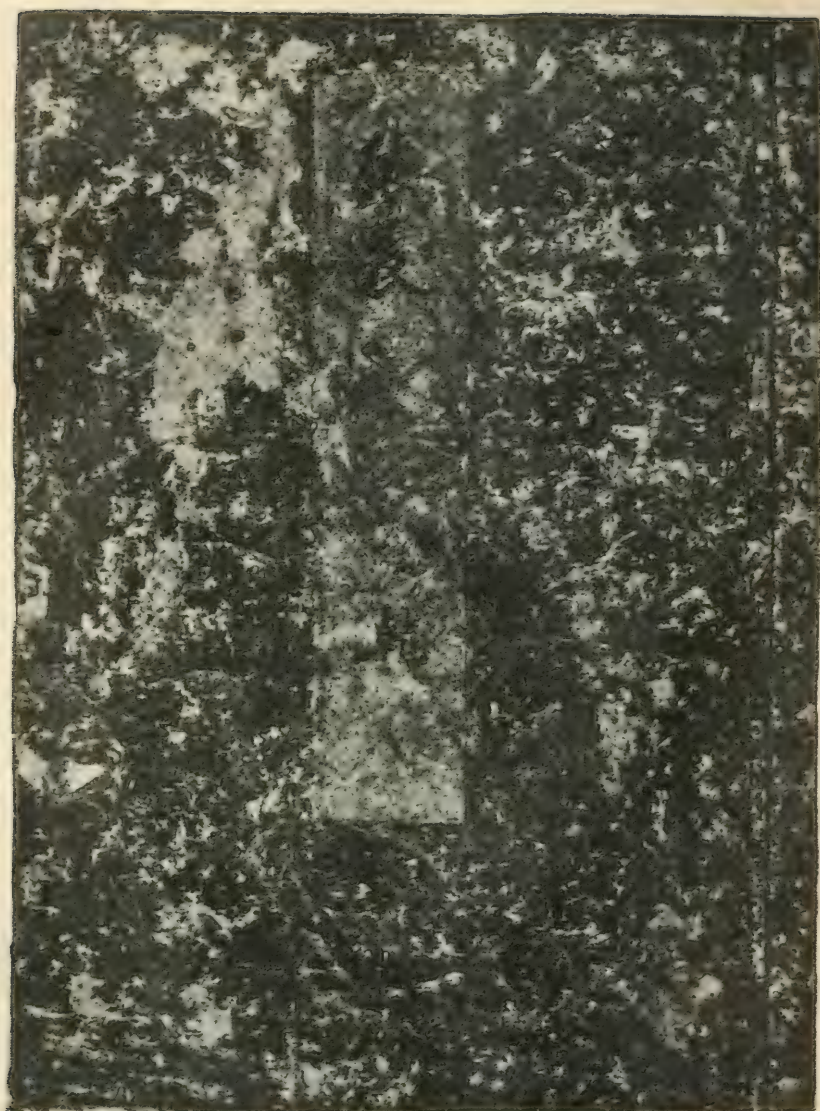
龜の甲烹らるゝ時は鳴もせず　乙州
唯牛糞に風のふく音　珍碩
百姓の木綿仕まへば冬のきて　里東
小歌そろゆるからうすの繩　探志
獨寐て奥の間ひろき旅の月　昌房
蟷螂落てきゆる行燈　正秀
秋萩の御前にちかき坊主衆　及肩
風呂の加減のしづか成けり　野徑
鶯の寒き聲にて鳴出し　二嘯
雪のやうなるかますごの塵　乙州
初花に雛の卷樽居ならべ　珍碩
心の底に戀ぞありける　里東
御簾の香に吹そこなひし笛の役　探志
寐どに起て聞ば鳥啼　昌房
錢入の巾着下て月に行　正秀
まだ上京も見ゆるやゝさむ　及肩
盞に盛鳥羽の町屋の今年米　野徑
雀を荷ふ籠のぢゝめき　二嘯
うす曇る日はどんみりと霜おれて　乙州
鉢いひならふ聲の出かぬる　珍碩
染て憂木綿袷のねずみ色　里東
撰あまされて寒きあけぼの　探志
暗がりに藥鑵の下をもやし付　昌房
轉(傳)馬を呼る我まわり口　正秀
いきりたる鎗一筋に挾箱　及肩
水汲かゆる鯉棚の秋　野徑
さは〳〵と切籠の紙手に風吹て　二嘯
奉加の序にもほのか成月　乙州
喰物に味のつくこそ嬉しけれ　珍碩
煤掃うちは次に居替る　里東
目をぬらす禿のうそにとりあげて　探志
こひにはかたき最上侍　昌房
手みじかに手拭ねぢて腰にさげ　正秀
繩を集る寺の上茨　及肩
花の頃蕢の日待に餝ご着て　野徑
さゝらに狂ふ獅子の春風　二嘯

乙州　四
珍碩　同
里東　四
探志　同
昌房　同
正秀　同
及肩　同
野徑　同
二嘯　同

田野　　正秀

畦道や苗代時の角大師　　正秀
明れば霞む野鼠の顔　　珍碩
觜ぶとのわやくに鳴し春の空　　同
かまゑおかしき門口の文字　　秀
月影に利休の家を鼻に懸　　同
度〳〵芋をもらはるゝなり　　碩
虫は皆つゞれ〳〵と鳴やらむ　　秀
片足〳〵の木履たづぬる　　碩
誓文を百もたてたる別路に　　秀
なみだぐみけり供の侍　　碩
須磨はまだ物不自由なる臺所　　秀
狐の恐る弓かりにやる　　碩
月氷る師走の空の銀河　　秀
無理に居たる膳も進まず　　碩
いらぬとて大脇指も打くれて　　秀
獨ある子も矮鶏に替ける　　碩
江戸酒を花咲度に戀しがり　　秀
あいの山彈はるの入逢　　同
雲雀鳴里は厩糞かき散し　　碩
火を吹て居る禪門の祖父　　秀
本堂はまだ荒壁のはしら組　　碩
羅綾の袂しぼり給ひぬ　　秀
歯を痛人の姿を繪に書て　　碩
薄雪たはむすゝき痩たり　　秀
藤垣の窓に紙燭を挟をき　　碩
口上果ぬいにざまの時宜　　秀
たふとげに小判かぞふる革袴　　碩
秋入初る肥後の隈本　　秀
幾日路も苦て月見る役者船　　碩
寸布子ひとつ夜寒也けり　　秀
澤山に兀め〳〵と叱られて　　碩
呼ありけども猫は歸らず　　秀
子規御小人町の雨あがり　　碩
やしほの楓木の芽萠立　　秀
散花に雪踏挽づる音ありて　　碩
北野の馬場にもゆるかげろふ　　秀

正秀　十九
珍碩　十七

寺町二條上ル町
井筒屋庄兵衛板

晋其角序

誹諧の集つくる事、古今にわたりて、此道のおもて起(おこす)べき時なれや。幻術の第一として、その句に魂の入ざれば、ゆめにゆめみるに似たるべし。久しく世にとゞまり、長く人にうつりて、不變の變をしら

松宇文庫

しむ。五徳はいふに及ばず、心をこらすべきたしなみなり。彼西行上人の、骨にて人を作りたてゝ、聲はわれたる笛を吹やうになん侍る。と申されける。人には成て侍れども、五の聲のわかれざるは、反魂の法のをろそ

かに侍にや。さればたましゐの入たらば、アイウエヲよくひゞきて、いかならん吟聲も出ぬべし。只誹諧に魂の入たらむにこそとて我翁行脚のころ、伊賀越しける山中にて、猿に小蓑を着せて、誹諧の神を入たまひけ

猿蓑

れば、たちまち斷腸のおもひを叫びけむ。あだに懼るべき幻術なり。これを元として、此集をつくりたて、猿みのどは名付申されける。是が序もその心をとり、魂を合せて、去來凡兆のほしげなるにまかせて書。

元禄辛未歳五月下弦

雲竹書

猿蓑集巻之一

冬

初しぐれ猿も小簑をほしげ也　芭蕉

あれ聞けと時雨來る夜の鐘の聲　其角

時雨きや並びかねたる魦ぶね　千那

幾人かしぐれかけぬく勢田の橋　僧 丈艸

鑓持の猶振たつるしぐれ哉　膳所 正秀

廣澤やひとりしぐるゝ沼太郎　史邦

舟人にぬかれて乘し時雨かな　尚白

伊賀の境に入て

なつかしや奈良の隣の一時雨　曾良

時雨るゝや黒木つむ屋の窓あかり　凡兆

馬かりて竹田の里や行しぐれ　大津 乙州

だまされし星の光や小夜時雨　羽紅

新田に稗殻煙るしぐれ哉　膳所 昌房

いそがしや沖の時雨の眞帆片帆　去來

初霜に行や北斗の星の前　伊賀 百歲

一いろも動くものなき霜夜かな　野水

湖にて

はつしもに何とおよるぞ船の中　其角

歸花それにも敷ん莚切レ　同

禪寺の松の落葉や神無月　凡兆

百舌鳥のゐる野中の杭よ十月（かみなづき）　嵐蘭

こがらしや頰腫いたむ人の顏　芭蕉

砂よけや蜑のかたへの冬木立　凡兆

ならにて

棹鹿のかさなり臥る枯野かな　伊賀 土芳

澁柿をながめて通る十夜哉　膳所 裾道

ちやの花やほるゝ人なき靈聖女　越人

みのむしの茶の花ゆへに折れける　伊賀 猿雖

古寺の簀子も靑し冬かまへ　凡兆

翁の堅田に閑居を聞て

雜水の名どころならば冬ごもり　其角

この寒さ牡丹の花のまつ裸　伊賀 車來

草津

晦日も過行うばがゐのこかな　尚白

神迎水口だちか馬の鈴　珍碩

霜月朔日

膳まはり外にものなし赤柏　伊賀 良品

水無月の水を種にや水仙花　羽州坂田 不玉

今は世をたのむけしきや冬の蜂　尾張 旦藁

尾頭のこゝろもとなき海鼠哉　去來

一夜〳〵さむき姿や釣干菜　伊賀 探丸

みちばたに多賀の鳥居の寒さ哉　尚白

茶湯（ちやのゆ）とてつめたき日にも稽古哉　江戸 龜翁

炭竈に手負の猪の倒れけり　凡兆

住つかぬ旅のこゝろや置火燵　芭蕉

寢ごゝろや火燵蒲團のさめぬ内　其角

門前の小家もあそぶ冬至かな　凡兆

木兎やおもひ切たる晝の面（ツラ）　尾張 芥境

みゝづくは眠る處をさゝれけり　伊賀 半殘

貧交

まじはりは紙衣の切を讓りけり　丈艸

浦風や巴をくづすむら鵆　曾良

あら磯やはしり馴たる友鵆　去來
狼のあと踏消すや濱千鳥　史邦
背門口の入江にのぼる千鳥かな　丈艸
いつ迄か雪にまぶれて鳴千鳥　千那
矢田の野や浦のなぐれに鳴千鳥　凡兆
筏士の見かへる跡や鴛の中　木節
水底を見て來た顔の小鴨哉　丈艸
鳥共も寢入てゐるか余吾の海　路通
死(しぬる)まで操なるらん鷹のかほ　旦藁
襟巻に首引入て冬の月　杉風
この木戸や鎖のさゝれて冬の月　其角
からしりの蒲團ばかりや冬の旅　長崎 暮年

翁行脚のふるき衾をあたへらる記あり。略之。

見やるさへ旅人さむし石部山　大津尼 智月
首出して初雪見ばや此衾　美濃 竹戸

題竹戸之衾

疊(たゝみ)め(目)は我手のあとぞ紙衾　曾良
魚のかげ鵜のやるせなき氷哉　探丸
しづかさを數珠もおもはず網代守　丈艸

御白砂に候す

膝つきにかしこまり居る霰かな　史邦
椶櫚の葉の霰に狂ふあらし哉　野童
鵲の橋よりこぼす霰かな　伊賀 示蜂
呼かへす鮒賣見えぬあられ哉　凡兆
みぞれ降音や朝飯の出來る迄　膳所 畫好
はつ雪や内に居さうな人は誰　其角
初雪に鷹部屋のぞく朝朗　史邦
霜やけの手を吹てやる雪まろげ　羽紅
わきも子が爪紅粉のこす雪まろげ　探丸
下京や雪つむ上の夜の雨　凡兆
なが〳〵と川一筋や雪の原　同

信濃路を過るに

雪ちるや穂屋の芒の刈殘し　芭蕉

草庵の留守をとひて

衰老は簾もあげず庵の雪　其角
雪の日は竹の子笠ぞまさりける　尾張 羽笠
誰とても健ならば雪の旅　長崎 卯七
ひつかけて行や雪吹のてしまござ　去來

青亞追悼

乳のみ子に世を渡したる師走哉　尚白
から鮭も空也の痩も寒の内　芭蕉
鉢たゝき憐は顔に似ぬものか　乙州
一月は我に米かせはちたゝき　丈艸

住吉奉納

夜神樂や鼻息白し面の内　其角
節季候に又のぞむべき事もなし　伊賀 順琢
家〳〵やかたちいやしきすゝ拂ひ　同 祐甫

乙州か新宅にて

人に家をかはせて我は年忘　芭蕉
弱(よろ)法師我門ゆるせ餅の札　其角
歳の夜や曾祖父を聞けば小手枕　長和
うす壁の一重は何かとしの宿　去來
くれて行年のまうけや伊勢くまの　同
大としや手のおかれたる人ごゝろ　羽紅
やりくれて又やさむしろ歳の暮　其角
いね〳〵と人にいはれつ年の暮　路通
年のくれ破れ袴の幾くだり　杉風

猿蓑集巻之二

夏

有明の面おこすやほとゝぎす　其角

夏がすみ曇り行衛や時鳥　木節

野を横に馬引むけよほとゝぎす　芭蕉

時鳥けふに限りて誰もなし　尚白

ほとゝぎす何もなき野ゝ門ン構　凡兆

ひる迄はさのみいそがず時鳥　智月

蜀魂なくや木の間の角櫓　史邦

入相のひゞきの中やほとゝぎす　羽紅

時鳥瀧よりかみのわたりかな　丈艸

心なき代官殿やほとゝぎす　去來

戀死なば我塚でなけほとゝぎす　遊女 奧刕

松嶋一見の時千鳥もかるや
鶴の毛衣とよめりければ

松嶋や鶴に身をかれほとゝぎす　曾良

うき我をさびしがらせよかんこ鳥　芭蕉

旅館庭せまく庭草を見ず

若楓茶いろに成も一さかり　膳所 曲水

四月八日詣慈母墓

花水にうつしかへたる茂りかな　其角

葉がくれぬ花を牡丹の姿かな　江戸 全峯

別僧

ちるときの心やすさよ米嚢花（ケシノハナ）　越人

智恵の有る人には見せじけしの花　珍碩

翁に供せられてすまあかし
にわたりて

似合しきけしの一重や須磨の里　亡人 杜國

青くさき匂ひもゆかしけしの花　嵐蘭

井のすゑに淺〳〵淸し杜若　半殘

起出て物にまぎれぬ朝の間
の

起〳〵の心うごかすかきつばた　仙化

題去來之嵯峨落柿舍 二句

豆植る畑も木べ屋も名所哉　凡兆

破垣やわざと鹿の子のかよひ道　曾良

南都旅店

誰のぞくならの都の閨の桐　千那

洗濯やきぬにもみ込柿の花　尼坂 薄芝

豐國にて

竹の子の力を誰にたとふべき　凡兆

竹の子や畠隣に惡太郎　去來

たけの子や稚き時の繪のすさび　芭蕉

猪に吹かへさるゝともしかな　正秀

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月　芭蕉

五月三日

君か代や筑摩祭も鍋一ツ　越人

わたましせる家にて

屋ね葺と並でふける菖蒲哉　其角

粽結ふ片手にはさむ額髪　芭蕉

隈篠の廣葉うるはし餅粽　江戸 岩翁

淋しさに客人やとふまつり哉　尚白

五月六日大坂討死の
遠忌を弔ひて

大坂や見ぬ世の夏の五十年　伊賀 蟬吟

奧刕高館にて

夏草や兵共がゆめの跡　芭蕉

這出よかひ屋が下の蟾の聲　同

此境はひわたるほどといへるもこゝの事にや

かたつぶり角ふりわけよ須磨明石　同

五月雨に家ふり捨てなめくじり　凡兆

ひね麦の味なき空や五月雨　木節

馬士の謂次第なりさつき雨　史邦

奥州名取の郡に入て、中將實方の塚はいづくにやと尋侍れば、道より一里ばかり左の方、笠嶋といふ處に有とをしゆ。ふりつゞきたる五月雨、いとわりなく打過るに、

笠島やいづこ五月のぬかり道　芭蕉

大和紀伊の境はてなし坂にて、往來の順禮をとゞめて奉加すゝめければ、料足つゝみたる紙のはしに書つけ侍る。

つゞくりもはてなし坂や五月雨　去來

髪剃や一夜に金情(さび)て五月雨　凡兆

日の道や葵傾くさ月あめ　芭蕉

縫物や着もせでよごす五月雨　羽紅

七十餘の老醫みまかりけるに、弟子共こぞりてなくまゝ、予にいたみの句乞ける。その老醫いまそかりし時も、さらに見しれる人にあらざりければ、哀にも思ひよらずして、古來まれなる年にこそといへど、とかくゆるさゞりければ、

六尺も力おとしや五月あめ　其角

百姓も麥にとりつく茶摘歌　去來

しがらきや茶山しに行夫婦づれ　正秀

つかみ合子供のたけや麥畑　膳所 游刀

孫を愛して

麥藁の家してやらん雨蛙　智月

麥出來て鰹迄喰ふ山家哉　江戸 花紅

しら川の關こえて

風流のはじめや奥の田植うた　芭蕉

出羽の最上を過て

眉掃を面影にして紅粉の花　同

法隆寺開帳

南無佛の太子を拜す

御袴のはづれなつかし紅粉の花　千那

田の畝の豆つたひ行螢かな　伊賀 万乎

膳所曲水之樓にて

螢火や吹とばされて鳰のやみ　去來

勢田の螢見　二句

闇の夜や子共泣出す螢ぶね　凡兆

ほたる見や船頭醉ておぼつかな　芭蕉

三熊野へ詣ける時

螢火やこゝおそろしき八鬼尾谷　長崎 田上尼

あながちに鵜とせりあはぬかもめ哉　尚白

草むらや百合は中〻花の貌　半殘

病後

空(そら)つりやかしらふらつく百合の花　大坂 何處

すゞ風や我より先に百合の花　乙州

燒蚊辭を作りて

子やなかん其子の母も蚊の喰ン　嵐蘭

餞別

立さまや蚊屋もはづさぬ宿の旅　膳所 里東

うとく成人につれて、參宮する從者にはなむけして

みじか夜を吉次が冠者に名殘哉　其角

隙明や蚤の出て行耳の穴　丈艸

下闇や地虫ながらの蟬の聲　嵐雪

客ぶりや居所かゆる蟬の聲　膳所 探志

頓て死ぬけしきは見えず蟬の聲　芭蕉

哀さや盲麻刈る露の玉　伊賀 槐市

渡り懸て藻の花のぞく流哉　凡兆

舟引の妻の唱歌か合歡の花　千那

白雨や鐘きゝはづす日の夕　史邦

素堂之蓮池邊

白雨や蓮一枚の捨あたま　嵐蘭

日焼田や時〳〵つらく鳴く蛙　乙州

日の暑さ盥の底の蟟(ウンカ)かな　凡兆

水無月も鼻つきあはす數寄屋哉　同

日の岡やこがれて暑き牛の舌　正秀

たゞ暑し籬によれば髮の落(おち)　木節

じねんこの藪吹風ぞあつかりし　野童

夕がほによばれてつらき暑さ哉　羽紅

青草は湯入ながめんあつさ哉　江戸 巴山

千子が身まかりけるをきゝて、みのゝ國より去來がもとへ、申つかはし侍ける。

無き人の小袖も今や土用干　芭蕉

水無月や朝めしくはぬ夕すゞみ　嵐蘭

じだらくにねれば涼しき夕べかな　宗次

すゞしさや朝草門ンに荷ひ込　凡兆

唇に墨つく兒のすゞみかな　千那

月鉾や兒の額の薄粧(うすげはひ)　曾良

夕ぐれや屼(はげ)並びたる雲のみね　去來

はじめて洛に入て

雲のみね今のは比叡に似た物か　大坂 之道

猿蓑集卷之三

秋

穐風や蓮をちからに花一ツ　不知讀人

此句東武よりきこゆ。もし素堂か。

がつくりとぬけ初る歯や秋の風　杉風

芭蕉葉は何になれとや秋の風　路通

人に似て猿も手を組秋のかぜ　珍碩

加賀の全昌寺に宿す

終夜秋風きくや裏の山　曾良

蘆原や鷺の寢ぬ夜を秋の風　江戸 山川

あさ露や鬱金畠の秋の風　凡兆

はつ露や猪の臥芝の起あがり　去來

大比叡やはこぶ野菜の露しげし　野童

三葉ちりて跡は枯木や桐の苗　凡兆

文月や六日も常の夜には似ず　芭蕉

合歡の木の葉ごしもいとへ星のかげ　同

七夕や餘りいそがばころぶべし　伊賀少年 杜若

みやこにも住まじりけり相撲取　去來

朝がほは鶴眠る間のさかりかな　伊賀 風麥

蕣やぬかごの蔓のほどかれず　膳所 及肩

笑(わらふ)にも泣にもにざる木槿かな　嵐蘭

手を懸ておらで過行木槿哉　杉風

高燈籠晝は物うき柱かな　千那

はてもなく瀬のなる音や秋黴雨　史邦

そよ〳〵や藪の内より初あらし　且藁

秋風やとても薄はうごくはず　三川 子尹

迷ひ子の親のこゝろやすゝき原　羽紅

八瀬おはらに遊吟して、柴うりの文書る序手に、

まねき〳〵枴の先の薄かな　凡兆

つくしよりかへりけるに、ひみといふ山にて、卯七に別て、

君が手もまじる成べしはな薄　去來

草刈よそれが思ひか萩の露　平田 李由

元祿二年翁に供せられて、みちのくより三越路にかゝり行脚しけるに、かゞの國にていたはり侍りて、いせまで先達けるとて、

いづくにかたふれ臥とも萩の原　曾良

桐の木にうづら鳴なる塀の内　芭蕉

百舌鳥鳴や入日さし込女松原　凡兆

初鴈に行燈とるなまくらもと　亡人 落梧

堅田にて

病鴈の夜さむに落て旅ね哉　芭蕉

海士の家は小海老にまじるいとゞ哉　同

加賀の小松と云處、多田の神社の寶物として、實盛が菊から草のかぶと、同じく錦のきれ有。遠き事ながら、まのあたり憐におぼえて、

むざんやな甲の下のきり〴〵す　芭蕉

茶畑や二葉の中のむしの聲　尚白

はたおりや壁に來て鳴夜は月よ　風麥

いせにまうでける時

葉月や矢橋に渡る人とめん　亡人 千子

三ケ月に鯊(フカ)のあたまをかくしけり　之道

粟稗と目出度なりぬはつ月よ　半殘

月見せん伏見の城の捨郭(くるわ)　去來

翁を茅舍に宿して

おもしろう松笠もえよ薄月夜　伊賀 土芳

賀茂に詣

しでに涙のかゝる哉と、かの上人の、たなごのやしろの神垣に、取つきてよみしと也。

月影や拍手(かしはで)もるゝ膝の上　史邦

友達の、六條にかみそりいたゞくとて、まかりけるに、

影ぼうしたぶさ見送る朝月夜　伊賀 卓袋

ばせを葉や打かへし行月の影　乙州

京筑紫去年の月とふ僧中間　丈艸

吹風の相手や空に月一つ　凡兆

ふりかねてこよひになりぬ月の雨　尚白

向の能き宿も月見る契かな　曾良

元祿二年つるがの湊に月を見て、氣比の明神に詣、遊行上人の古例をきゝて、

月淸し遊行のもてる砂の上　芭蕉

仲秋の望、猶子を送葬して、

かゝる夜の月も見にけり野邊送　去來
明月や處は寺の茶の木ばら　膳所 昌房
月見れば人の砧にいそがはし　羽紅
僧正のいもとの小屋のきぬたかな　尚白
初潮や鳴門の浪の飛脚舟　凡兆
一戸(いちのへ)や衣もやぶるゝこまむかへ　去來
稗の穂の馬迯したる氣色哉　越人
澁糟やからすも喰はず荒畠　正秀
あやまりてぎゝうおさゆる鰍(かじか)哉　嵐蘭

一鳥不鳴山更幽

物の音ひとりたふるゝ案山子哉　凡兆
むづかしき拍子も見えず里神樂　曾良
旅枕鹿のつき合軒の下　江戸 千里
鳩ふくや澁柿原の蕎麥畠　珍碩
上行と下くる雲や穐の天　凡兆
鮬釣(セイコつろ)頃も有(ある)らし鱸つり　半殘
ゐなか間のうすべり寒し菊の宿　尚白
菊を切る跡まばらにもなかりけり　其角
高土手に鶸(ひへ)の鳴日や雲ちぎれ　珍碩

この頃のおもはるゝ哉稲の秋　土芳
稲かつぐ母に出迎ふうなひ哉　凡兆

自題落柿舎

柿ぬしや梢はちかきあらし山　去來
しら浪やゆらつく橋の下紅葉　加州小松 塵生
肌寒し竹切山のうす紅葉　凡兆

神田祭

さればこそひなの拍子のあ
なる哉神田祭の皷うつ音　敎足
拍子さへあづまなりとや。

花すゝき大名衆をまつり哉。　嵐雪
行秋の四五日弱るすゝき哉。　丈艸
立出る秋の夕や風ほろし　凡兆
世の中は鶺鴒の尾のひまもなし　同
塩魚の歯にはさかふや秋の暮　荷兮

猿蓑集巻之四

春

梅咲て人の怒の悔もあり　露沾

上﨟の山荘にまし／＼けるに候し奉りて、

梅が香や山路獵入ル犬のまね　去來
梅が香や分入里は牛の角　加賀 句空

庭興

梅が香や砂利敷流す谷の奥　土芳
初蝶や骨なき身にも梅の花　半殘
梅が香や酒のかよひのあたらしき　膳所 蟬鼠
むめの木や此一筋を蕗のたう　其角

子良館の後に梅有といへば

御子良子の一もと床し梅の花　芭蕉
痩藪や作りたふれの軒の梅　千那
灰捨て白梅うるむ垣ねかな　凡兆
日當りの梅咲ころや屑牛房　膳所 支幽

暗香浮動月黄昏

入相の梅になり込ひゞきかな　風麦

武江におもむく旅亭の
殘夢

寢ぐるしき窓の細目や闇の梅　乙州

辛未のとし彌生のはじめつかた、よしのゝ山に日くれて梅のにほひしきりなりければ、舊友嵐窓が見ぬ方の花や匂ひを案内者といふ句を、日ごろはふるき事のやうにおもひ侍れども、折にふれて感動身にしみわたり、涙もおとすばかりなれば、その夜の夢に正しくまみえて悦るけしき有。亡人いまだ風雅を忘れざるや。

夢さつて又一匂ひ宵の梅　嵐蘭

百八のかねて迷ひや闇のむめ　其角

ひとり寢も能宿とらん初子日　去來

野畠や雁追のけて摘若菜　史邦

はつ市や雪に漕來る若菜船　嵐蘭

宵の月西になづなのきこゆ也　如行

憶翁之客中

裾折て菜をつみしらん草枕　嵐雪

つみすてゝ踏付がたき若な哉　路通

七種や跡にうかるゝ朝がらす　其角

我事と鰌のにげし根芹哉　丈艸

うすらひやわづかに咲る芹の花　其角

朧とは松のくろさに月夜かな　同

鉢たゝき來ぬ夜となれば朧なり　去來

鶯の雪踏落す垣穂かな　伊賀 一桐

鶯やはや一聲のしたりがほ　江戸 溪石

うぐひすや遠路ながら禮がへし　其角

鶯や下駄の齒につく小田の土　凡兆

鶯や窓に灸をすえながら　伊賀 魚日

やぶの雪柳ばかりはすがた哉　探丸

此癘はさるの持べき柳かな　江戸 卜宅

垣ごしにとらへてはなす柳哉　同 遠水

よこた川植處なき柳かな　尚白

青柳のしだれや鯉の住處　伊賀 一唊

雪汁や蛤いかす場(には)のすみ　同 木白

待中の正月もはやくだり月　揚水

田家に有て

麥飯にやつるゝ戀か猫の妻　芭蕉

うらやましおもひ切時猫の戀　越人

うき友にかまれてねこの空ながめ　去來

露沾公にて餘寒の當座

春風にぬぎもさだめぬ羽織かな　龜翁

野の梅のちりしほ寒き二月哉　尚白

出かはりや櫃にあまれるござの丈　龜翁

出替や幼ごゝろに物あはれ　嵐雪

骨柴の刈られながらも木の芽かな　凡兆

白魚や海苔は下部のかい合せ　其角

人の手にとられて後や櫻海苔　尾張 杉峰

春雨にたゝき出したりつくづくし　元志

陽炎やとりつき兼る雪の上　荷兮

かげろふや土もこなさぬあらおこし　百歳

かげろふやほろほろ落る岸の砂　土芳

いとゆふのいとあそぶ也虚(から)木立　伊賀 氷固

野馬(かげろふ)に子共あそばす狐哉　凡兆

かげろふや柴胡の原の薄曇　芭蕉
いとゆふに貌引のばせ作り獨活　伊賀 配力
狗脊の塵にえらるゝわらびかな　嵐雪
彼岸まへさむさも一夜二夜哉　路通
みのむしや常のなりにて涅槃像　野水
藏並ぶ裏は燕のかよひ道　凡兆
立さわぐ今や紀の厂伊勢の鴈　伊賀 澤雉
春雨や屋ねの小草に花咲ぬ　嵐虎

高山に臥て

春雨や山より出る雲の門　猿雖
不性さやかき起されし春の雨　芭蕉
春雨や田蓑のしまの鮲賣　史邦
はるさめのあがるや軒になく雀　羽紅
泥龜や苗代水の畦づたひ　史邦
蜂とまる木舞の竹や虫の糞　昌房
振舞や下座になをる去年の雛　去來
春風にこかすな雛の駕籠の衆　伊賀 荻子
桃柳配りありくやをんなの子　羽紅
もゝの花境しまらぬかきね哉　三川 烏巣

里人の臍落したる田螺かな　嵐推
蝶の來て一夜寢にけり葱のぎぼ　半殘
昏蔦切て白根が嶽を行衞哉　加賀山中 桃妖
いかのぼり爰にもすむや潦　伊賀 園風
日の影やごもくの上の親すゞめ　珍碩
荷鞍ふむ春のすゞめや縁の先　土芳
闇の夜や巣をまどはしてなく鵆　芭蕉

越より飛彈へ行とて、籠の渡りのあやうきところ〳〵、道もなき山路にさまよひて、

鷲の巣の樟の枯枝に日は入ぬ　凡兆
かすみより見えくる雲のかしら哉　伊賀 石口
子や待ん　あまり雲雀の　高あがり　杉風
ひばりなく中の拍子や雉子の聲　芭蕉

芭蕉庵のふるきを訪

菫草小鍋洗ひしあとやこれ　曲水
木瓜　薊旅して見たく野はなりぬ　江戸 山店

畫讃

山吹や宇治の焙爐の匂ふ時　芭蕉

白玉の露にきはづく椿かな　車來

わがみかよはく、やまひがちなりければ、髪けづらんも物むづかしと、此春さまをかへて、

笄も櫛も昔やちり椿　羽紅
蝸牛打かぶせたるつばき哉　津國山本 坂上氏
うぐひすの笠おとしたる椿哉　芭蕉
はつざくらまた追ゝにさけばこそ　伊賀 利雪

東叡山にあそぶ

小坊主や松にかくれて山ざくら　其角
一枝はおらぬもわろし山ざくら　尚白
雉の聲もきこゆる山櫻　凡兆
眞先に見し枝ならんちる櫻　丈艸
有明のはつ〳〵に咲く遲ざくら　史邦
常齋(じやうとき)にはづれてけふは花の鳥　千那

葛城のふもとを過る

猶見たし花に明行神の顔　芭蕉

いがの國花垣の庄は、そのかみ奈良の八重櫻の料に、

附られけると、云傳えはんべれば、

一里はみな花守の子孫かや　同

亡父の墓、東武谷中に有しに三歳にて別れ、廿年の後かの地にくだりぬ。墓の前に櫻植置侍るよし、かねがね母の物がたりつたへて、その櫻をたづね侘けるに、他の墓猶さくら咲みだれ侍れば、

まがはしや花吸ふ蜂の往還り　園風

知人にあはじあはじと花見かな　去來

ある僧の嫌ひし花の都哉　凡兆

浪人のやどにて

鼠共春の夜あれそ花靱　半殘

腥きはな最中のゆふべ哉　伊賀 長眉

花も奥有とや、よしのに深く吟じ入て、

大峰やよしのゝ奥の花の果　曾良

道灌山にのぼる

道灌や花はその代を嵐かな　嵐蘭

源氏の繪を見て

欄干に夜ちる花の立すがた　羽紅

庚午の歳家を焼て

焼にけりされども花はちりすまし　加賀 北枝

はなちるや伽藍の樞(くるゝ)おとし行　凡兆

海棠のはなは滿たり夜の月　江戸 普船

大和行脚のとき

草臥て宿かるころや藤の花　芭蕉

山鳥や躑躅よけ行尾のひねり　探丸

山つゝじ海に見よとや夕日影　智月

兎角して卯の花つぼむ彌生哉　山川

鶯の哢きゝそめてより山路かな　伊賀 式之

木曾塚

其春の石ともならず木曾の馬　乙州

春の夜はたれか初瀬の堂籠　曾良

望湖水惜春

行春を近江の人とおしみける　芭蕉

猿蓑集巻之五

鳶の羽も刷(カイツクロヒ)ぬはつしぐれ　去來

一ふき風の木の葉しづまる　芭蕉

股引の朝からぬるゝ川こえて　凡兆

たぬきをおどす篠張の弓　史邦

まいら戸に蔦這かゝる宵の月　芭蕉

人にもくれず名物の梨　去來

かきなぐる墨繪おかしく秋暮て　史邦

はきごゝろよきめりやすの足袋　凡兆

何事も無言の内はしづかなり　來
里見え初て午の貝ふく　兆
ほつれたる去年のねござのしたたるく　兆
芙蓉の花のはら／＼とちる　邦
吸ものは先出來されしすいぜんし　蕉
三里あまりの道かゝえける　來
此春も盧同が男居なりにて　邦
さし木つぎたる月の朧夜　兆
苔ながら花に並ぶる手水鉢　蕉
ひとり直し今朝の腹だち　來
いちどきに二日の物も喰て置　兆
雪げに寒き嶋の北風　邦
火ともしに暮れば登る峰の寺　來
ほとゝぎす皆鳴仕舞たり　蕉
痩骨のまだ起直る力なき　邦
隣をかりて車引こむ　兆
うき人を枳殻垣よりくゞらせん　蕉
いまや別れの刀さし出す　來
せはしげに櫛でかしらをかきちらし　兆

おもひ切たる死ぐるひ見よ　邦
青天に有明月の朝ぼらけ　來
湖水の秋の比良のはつ霜　蕉
柴の戸や蕎麦ぬすまれて歌をよむ　邦
ぬのこ着習ふ風の夕ぐれ　兆
押合て寝ては又立つかりまくら　蕉
たゝらの雲のまだ赤き空　來
一構鞦つくる窓のはな　兆
枇杷の古葉に木の芽もえたつ　邦

去來　九
芭蕉　九
凡兆　九
史邦　九

市中は物のにほひや夏の月　凡兆
あつし／＼と門／＼の聲　芭蕉
二番草取も果さず穂に出て　去來

灰うちたゝくうるめ一枚　兆
此筋は銀も見しらず不自由さよ　蕉
たゞどひようしに長き脇指　來
草村に蛙こはがる夕まぐれ　兆
蕗の芽とりに行燈ゆりけす　蕉
道心のおこりは花のつぼむ時　來
能登の七尾の冬は住うき　兆
魚の骨しわぶる迄の老を見て　蕉
待人入し小御門の鎰　來
立かゝり屏風を倒す女子共　兆
湯殿は竹の簀子侘しき　蕉
茴香の實を吹落す夕嵐　來
僧やゝさむく寺にかへるか　兆
さる引の猿と世を經る秋の月　蕉
年に一斗の地子はかる也　來
五六本生木つけたる瀦　兆
足袋ふみよごす黒ぼこの道　蕉
追たてゝ早き御馬の刀持　來
でつちが荷ふ水こぼしたり　兆

戸障子もむしろがこひの賣屋敷　蕉
てんじやうまもりいつか色づく　來
こそ〳〵と草鞋を作る月夜ざし　兆
蚤をふるひに起し初秋　蕉
そのまゝにころび落たる升落　來
ゆがみて蓋のあはぬ半櫃　兆
草庵にしばらく居ては打やぶり　蕉
いのち嬉しき撰集のさた　來
さま〴〵に品かはりたる戀をして　兆
浮世の果は皆小町なり　蕉
何故ぞ粥すゝるにも涙ぐみ　來
御留守となれば廣き板敷　兆
手のひらに虱這はする花のかげ　蕉
かすみうごかぬ晝のねむたさ　來

凡兆　十二
芭蕉　十二
去來　十二

灰汁桶の雫やみけりきり〴〵す　凡兆
あぶらかすりて宵寝する秋　芭蕉
新疊敷ならしたる月かげに　野水
ならべて嬉し十の盃　去來
千代經べき物を樣〴〵子日して　蕉
鶯の音にたびら雪降る　兆
乗出して肱に餘る春の駒　來
摩耶が高根に雲のかゝれる　水
ゆふめしにかますご喰へば風薫（かをる）　兆
蛭の口處（くちど）をかきて氣味よき　蕉
ものおもひけふは忘れて休む日に　水
迎せはしき殿よりのふみ　來
金鍔と人によばるゝ身のやすさ　蕉
あつ風呂ずきの宵〳〵の月　兆
町内の秋も更行明やしき　來
何を見るにも露ばかり也　水
花とちる身は西念が衣着て　蕉
木曾の酢莖に春もくれつゝ　兆

かへるやら山陰傳ふ四十から　水
柴さす家のむねをからげる　來
冬空のあれに成たる北颪　兆
旅の馳走に有明しをく　蕉
すさまじき女の智恵もはかなくて　來
何おもひ草狼のなく　水
夕月夜岡の萱ねの御廟守る　蕉
人もわすれしあかそぶの水　兆
うそつきに自慢いはせて遊ぶらん　水
又も大事の酢をとり出す　來
堤より田の青やぎていさぎよき　兆
加茂の社は能き社なり　蕉
物うりの尻聲高く名乗すて　來
雨のやどりの無常迅速　水
晝ねぶる青鷺の身のたふとさよ　蕉
しよろ〳〵水に藺のそよぐらん　兆
糸櫻腹一ぱいに咲にけり　來
春は三月曙のそら　水

凡兆　九
芭蕉　九
野水　九
去來　九

餞乙州東武行

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁　芭蕉
笠あたらしき春の曙　乙州
雲雀なく小田に土持ころなれや　珍碩
しとぎ祝ふて下されにけり　素男
片隅に虫歯かゝえて暮の月　乙州
二階の客はたゝれたるあき　蕉
放やるうづらの跡は見えもせず　男
稲の葉延のちからなきかぜ　碩
ほつしんの初にこゆる鈴鹿山　蕉
內藏頭かと呼聲はたれ　州
卯の刻の箕手(きのて)に並ぶ小西方　碩
すみきる松のしづかなりけり　男
萩の札すゝきの札によみなして　州
雀かたよる百舌鳥の一聲　智月
懐に手をあたゝむる秋の月　凡兆
汐さだまらぬ外の海づら　州
鑓の柄に立すがりたる花の暮　去來
灰蒔ちらすからし菜の跡　兆
名 春の日に仕舞てかへる經机　正秀
店屋ものくふ供の手がはり　來
汗ぬぐひ端のしるしの紺の糸　半殘
わかれせはしき雞の下　土芳
大膽におもひくづれぬ戀をして　殘
身はぬれ紙の取所なき　芳
小刀の蛤刃なる細工ばこ　殘
棚に火ともす大年の夜　園風
爰もとはおもふ便も須磨の浦　猿雖
むね打合せ着たるかたぎぬ　殘
此夏もかなめをくゝる破扇　風
醬油ねさせてしばし月見る　雖
ウ 咳聲の隣はちかき縁づたひ　芳
添へばそふほどこくめんな顔　風
形なき繪を習ひたる會津盆　嵐蘭
うす雪かゝる竹の割下駄　史邦
花に又ことしのつれも定らず　野水
雛の袂を染る春かぜ　羽紅

芭蕉　三　　土芳　三
乙州　五　　園風　三
珍碩　三　　猿雖　二
素男　三　　嵐蘭　一
智月　一　　史邦　一
凡兆　二　　野水　一
去來　二　　羽紅　一
正秀　一
半殘　四

猿蓑集巻之六

幻住庵記

芭蕉

石山の奥、岩間のうしろに山有。國分山と云。そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登る事三曲二百歩にして、八幡宮たゝせたまふ。神體は彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚忌なる事を、兩部光を和げ、利益の塵を同うしたまふも。又貴し。日比け人の詣ざりければ、いとゞ神さび物しづかなる傍に、住捨し草の戸有。よもぎ根笹軒をかこみ、屋ねもり壁落て、狐狸ふしどを得たり。幻住菴と云。あるじの僧何がしは、勇士菅沼氏曲水子の伯父になん侍りしを、今は八年斗むかしに成て、正に幻住老人の名をのみ殘せり。予又市中をさる事十年斗にして、五十年やゝ近き身は、蓑虫のみのを失ひ、蝸牛家を離て、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高すなごあゆみくるしき北海の荒磯にきびすを破りて、今歳湖水の波に漂。鳰の浮巣の流とゞまるべき、芦の一本の陰たのもしく、軒端茨あらため、垣ね結添などして、卯月の初いとかりそめに入し山の、やがて出じとさへおもひそみぬ。さすがに春の名殘も遠からず、つゝじ咲殘り、山藤松に懸て、時鳥しば〳〵過る程、宿かし鳥の便さへ有を、木つゝきのつゝくともいとはじなど、そゞろに興じて、魂呉楚東南にはしり、身は瀟湘洞庭に立つ。山は未申にそばだち、人家よきほどに隔り、南薫峰よりおろし、北風海を浸して涼し。日枝の山、比良の高根より、辛崎の松は霞こめて、城有、橋有、釣たるゝ舟有。笠とりにかよふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる哥、螢飛かふ夕闇の空に、水雞の扣音、美景物としてたらずと云事なし。中にも三上山は士峰の俤にかよひて、武藏野の古き栖もおもひいでられ、田上山に古人をかぞふ。さゝほが嶽、千丈が峰、袴腰といふ山有、黒津の里はいとくろう茂りて、網代守ルにぞとよみけん萬葉集の姿なりけり。猶眺望くまなからむと、後の峰に這のぼり、松の棚作、藁の圓座を敷て、猿の腰掛と名付。彼海棠に巣をいとなび、主簿峰に菴を結べる、王翁徐佺が徒にはあらず。唯睡癖山民と成て、孱顔に足をなげ出し、空山に虱を捫て座ス。たま〳〵心まめなる時は、谷の清水を汲て自ら炊て、とく〳〵の雫を侘て、一爐の備へいとかろし。はた昔住けん人の、殊に心高く住なし侍りて、たくみ置る物ずきもなし。持佛一間を隔て、夜の物おさむべき處など、いさゝかしつらへり。さるを筑紫高良山の僧

正は、加茂の甲斐何がしが厳子にて、此たび洛にのぼりいまそかりけるを、ある人をして額を乞。いとやすく〳〵と筆を染て、幻住庵の三字を送らる。頓て草菴の記念となしぬ。すべて山居といひ、旅寝と云、さる器たくはふべくもなし、木曾の檜笠、越の菅蓑斗、枕の上の柱に懸たり。晝は稀〳〵とぶらふ人〻に心を動し、あるは宮守の翁、里のをのこ共入來りて、ゐのしゝの稲くひあらし、兎の豆畑にかよふなど、我聞しらぬ農談、日既に山の端にかゝれば、夜座靜に月を待ては影を伴ひ、燈を取ては罔兩に是非をこらす。かくいへばとてひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさむとにはあらず。やゝ病身人に倦て世をいとひし人に似たり。倩年月の移こし、拙き身の科をおもふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛籬祖室の扉に入らむとせしも、たどりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫く生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして、此一筋につながる。樂天は五臟之神をやぶり、老杜は痩たり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖ならずや、とおもひ捨てふしぬ。

先たのむ椎の木も有夏木立

題芭蕉翁國分山
幻住菴記之後

何世無隱士。以心隱爲賢也。何處無山川。風景因人美也。間讀芭蕉翁幻住菴記、乃識其賢、且知山川得其人而益美矣。可謂人與山川共相得焉。迺作鄙章一篇歌之。曰。

琵湖南兮國分嶺　古松鬱兮綠陰淸
茅屋竹椽纔數間　內有佳人獨養生
滿口錦繡輝山川　風景依稀入誹城
此地自古富勝覽　今日因君尙益榮

元祿庚午仲秋日　震軒具草

几右日記

時鳥背中見てやる麓かな　曲水
くつさめのあとしづか也なつの山　野水
鷄もはら〳〵時か水鷄なく　去來
海山に五月雨そふや一くらみ　凡兆
軒ちかき岩梨おるな猿のあし　千那
細脛のやすめ處や夏の山　珍碩

贈紙張

おもふ事紙帳にかけと送りけり　野徑
いつたきて蕗の葉にもるおぶくぞも　里東
螢飛疊の上もこけの露　乙劦
顔(かんばせ)や葎の中の花うつぎ　膳所　怒誰
たど〳〵し峰に下駄はく五月闇　探志
五羽六羽庵とりまはすかんこ鳥　元志
木つゝきにわたして明る水雞哉　膳所　泥土
笠あふつ柱すゞしや風の色　史邦

月待や海を尻目に夕すゞみ　正秀

しづかさは栗の葉沈む清水哉　亡人 柳陰

涼しさやともに米かむ椎が本　如行

訪に留守なり

椎の木をだかへて啼や蟬の聲　膳所 朴水

目の下や手洗ふ程に海涼し　美濃垂井 市隱

文に云こす

膳所米や早苗のたけに夕涼　牛殘

麥の粉を土產す

一袋これや鳥羽田のことし麥　之道

舊音

一夏(げ)入る山さばかりや旅ねずき　長崎 魯町

夕立や檜木の臭(かざ)の一しきり　及肩

昇猿屛掛

穐風や田の上山のくぼみより　尙白

贈蓑

しら露もまだあらみのゝ行衞哉　北枝

木履ぬく傍に生けり蓼の花　木節

包紙に書

縫にこす藥袋や萩の露　膳所 扇

稻の花これを佛の土產哉　智月

石山や行かで果(はた)せし秋の風　羽紅

桶の輪やきれて鳴やむきりぎりす　昌房

里は今夕めしどきのあつさ哉　何處

啼やいとゞ塩にほこりのたまる迄　越人

越人と同じく訪合て

蓮の實の供に飛入菴かな　等哉

明年彌生尋舊菴

春雨やあらしも果ず戸のひづみ　嵐蘭

同夏

涼しさや此庵をさへ住捨し　曾良

跋

猿蓑は芭蕉翁が滑稽の首諝なり。かの山寺に衣を偸み、朝市に冠を頂く笑に比するに非ず。只心の物に感じ、興を寫すに任するのみ。洛下の逸人、凡兆去來、翁に隨つて遊學す。棋館竹窓、等を躐へ、節を凌ぐ、斯に歳あり。屬此集を撰して玩弄已む事なし。自ら謂らく。狐腋の白裘に絶超するものなりと。是に於て、四方の唫友、憧々として往

跋

猿蓑者芭蕉翁滑稽之首諝也非比彼山寺偸衣朝市頂冠笑只任心感物寫興而已矣洛下逸人凡兆去來隨翁遊學棋館竹窓躐等凌節斯有歳屬撰此集玩弄無已自謂絶超狐腋白裘者也於是四方唫友憧々往

來し、或は千里に書を寄せて、書中皆佳句あり。日に蘊り、月に隆んにして、各文章を程にす。然れども、昆中の騷士、集錄せざる者あらば、索居竄栖、信を通じ難き爲なり。且、旎倪婦人の琢磨せざる者あらば、麁言細語、志を同うすることを喜するが爲なり。其域に至る無しと雖も、何ぞ其人を棄んや。果して四序を分ちて、六卷となす。故に廣く他家の文林を捜るに遑あら

來或千里寄書中皆有佳句日蘊月隆各程文章然有昆仲騷士不集録者索居竄栖爲難通信且有旎倪婦人不琢磨者麁言細語爲喜同志雖無至其域何棄其人乎哉果分四序作六卷故不遑廣捜他家文林也雖貽元祿四稔辛未仲冬余掛

ざるなり。維(これ)旹元祿四稔辛未仲夏、余錫を洛陽の旅亭に掛けて、偶(たま〳〵)兆來の吟席に會す。此事を記して書尾に題せんことを需めらる。卒に毫を援(ひ)いて拙を揣(はか)らず。庶幾くは一蓑高く張りて、詞海の漁人に補あらんと云。

風狂野衲

丈艸漢書

正竹書之

京寺町二條上ル丁

井筒屋庄兵衛板

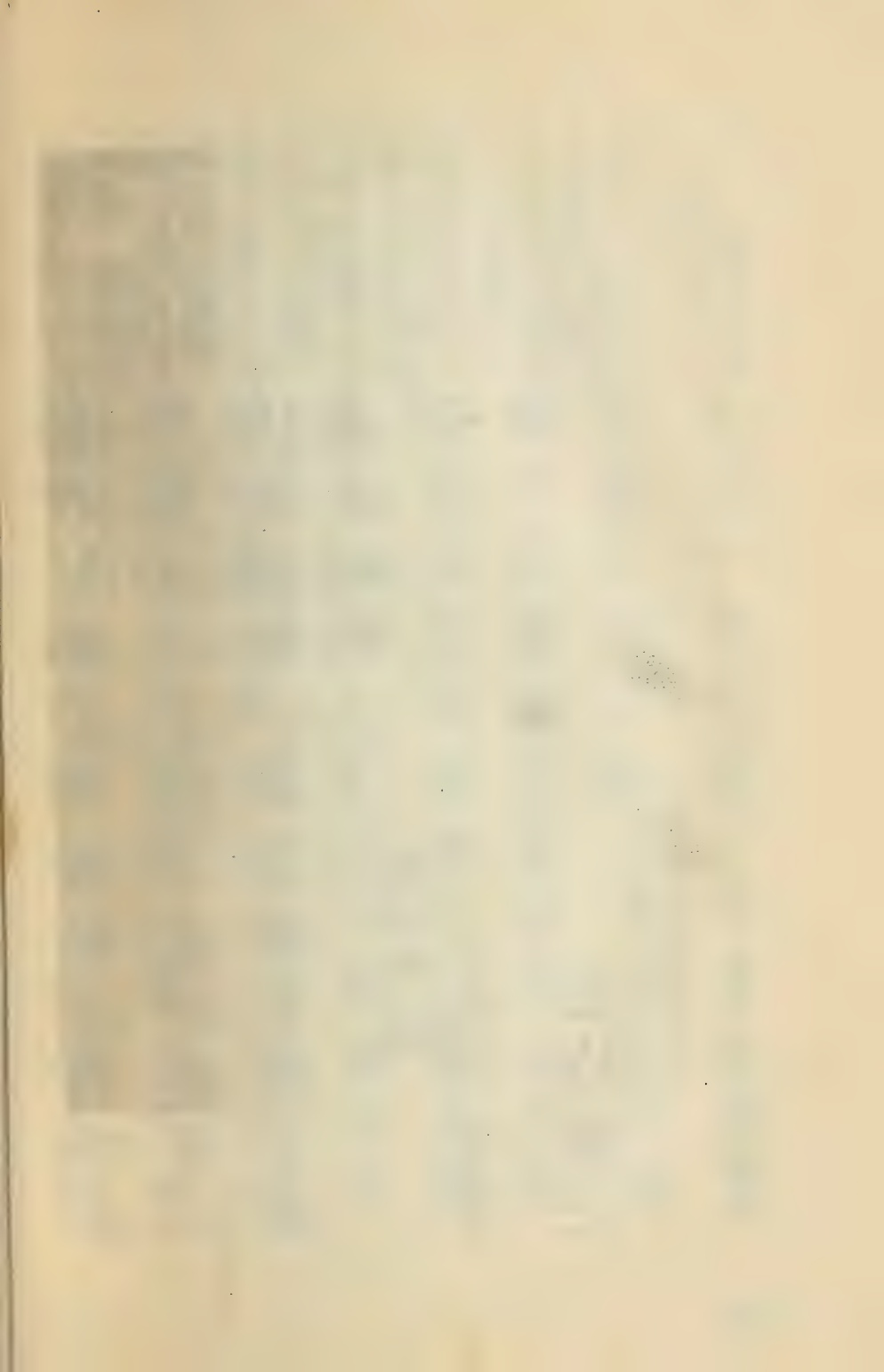
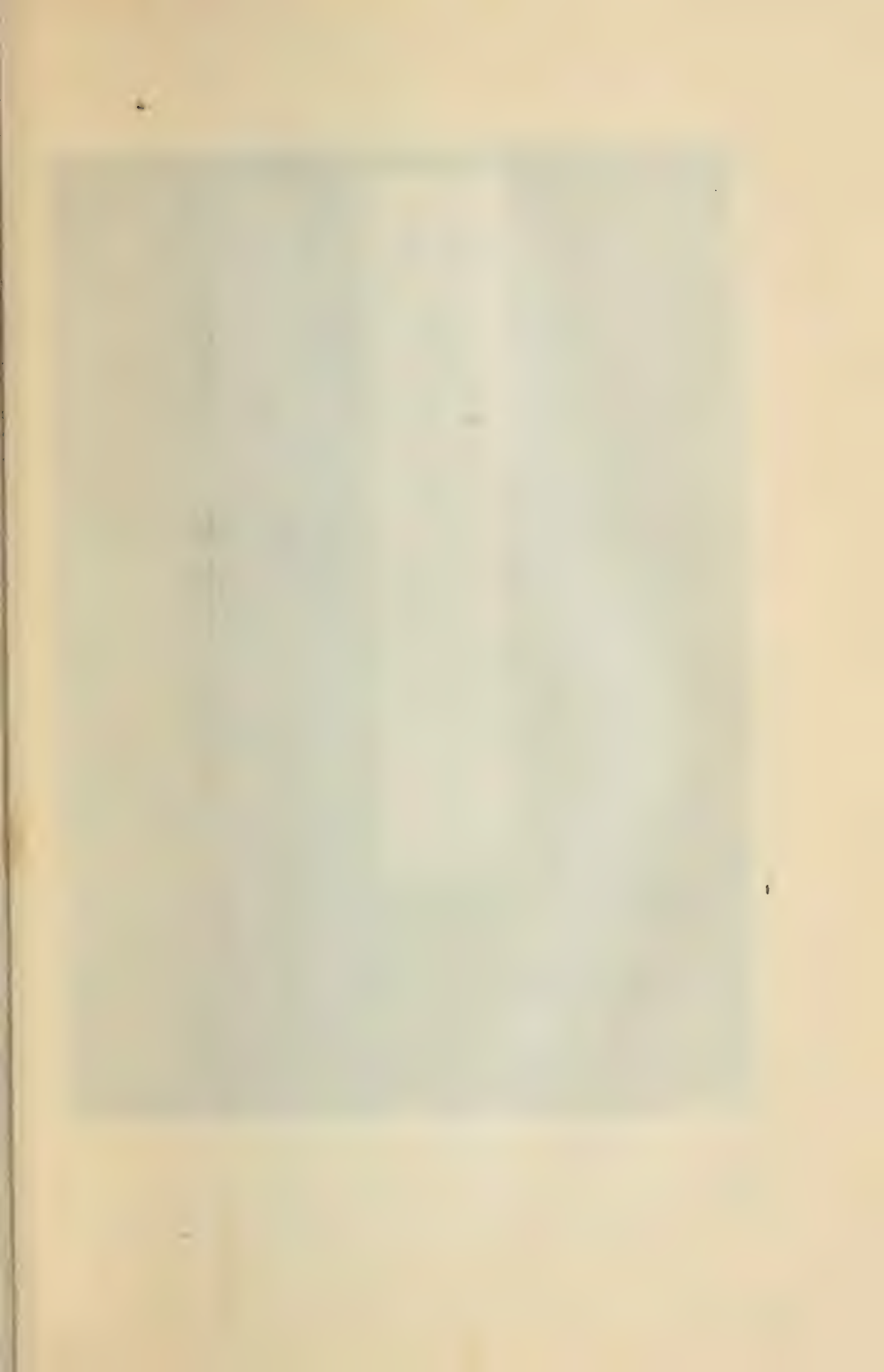
錫於洛陽旅亭偶會兆来吟席見需記此事題書尾卒援毫不揣拙庶幾一蓑高張有補于詞海漁人云

風狂野衲

丈艸漢書

正竹書之

京寺町二条上ル丁

井筒屋庄兵衛板

俳諧
深川

壬申九月に江戸
へくだり、芭蕉
庵に越年して、
ことしきさらぎ
のはしめ洛にの
ぼりて
　ふろしきをとく
酒　堂

深川夜遊

青くても有べきものを唐辛子　芭蕉
提ておもたき秋の新ッ鍬　洒堂
暮の月槻(ケヤキ)のこつぱかたよせて　嵐蘭
坊主がしらの先にたゝるゝ　岱水
松山の腰は躑躅の咲わたり　堂
焙爐の炭をくだす川舟　蕉
ウ祝ひ日の冴(サヘ)かへりたる小豆粥　水
ふすま掴(ツカ)むで洗ふ油手　蘭
掛ヶ乞に戀のこゝろを持せばや　蕉
翠簾にみぞるゝ下賀茂の社家　堂
寒徹(トヲ)す山雀籠の中返り　蘭
正氣散のむ風のかるさよ　水
目の張に先づ千石はしてやりて　堂
きゆる斗に鐙おさふる　蕉
踏まよふ落花の雪の朝月夜　水
那智の御山の春遲き空　蘭
弓はじめすぐり立たるむす子共　蕉
荷とりに馬士の海へ飛びこむ　堂

名町中(ナカ)の鳥居は赤くきよんとして　蘭
吹もしこらず野分しづまる　水
革足袋に地雪踏重き秋の霜　堂
伏見あたりの古手屋の月　蕉
玉水の早苗ときけば懐しや　水
我が跡からも鉦鼓うち來る　蘭
山伏を切ッてかけたる關の前　蕉
鐙もたねばならぬよの中　堂
付合は皆上戸にて呑あかし　蘭
さらり／＼と霰降也　水
乘物で和尚は禮にあるかるゝ　堂
たてこめてある道の大日　蕉
ウ挨(ウヘゴ)揚ヶて水田も暮る人の聲　水
莚片荷に鯨さげゆく　蘭
不斷たつ池鯉鮒(ちりふ)の宿の木綿市　蕉
ごを抱へこむ土間のへつゝひ　堂
米五升人がくれたる花見せむ　蘭
雉子のほろゝにきほふ若草　水

草庵の留主

冴(サヘ)そむる鐘ぞ十夜の場(にわ)の月　杉風
しのび返しにのこる橙(タイ〳〵)　洒堂
馬取の卸脊(ハダセ)乘行霜ふみて　曾良
朝のいとまの提たばこうる　石菊
人聲も御藏出る日の賑ャかに　桃隣
えだ垂(タレ)さがる松は久しき　宗波
ウ中形の半着ものも旅馴て　筆
其まゝつくる鱠一皿　風
蓮の葉はちいさき岸の杜若　堂
地を掃ばかり駕籠の振袖　良
五六人天臺(合)坊主いろめきて　菊
太刀なぎなたの光る塀ごし　隣
月出て八つの太鼓を打仕廻　波
蒲團の時宜のあはれ秋の夜　堂
玉子吸顔もおかしき濁り酒　風
壹歩いれたる細布(サイフ)はなさぬ　菊
花の春小田原陣の前の年　隣

陽炎もゑてかはる川筋　波
能因が身は留まらぬ雁の聲　良
釋迦に讃する壁の掛もの　風
眞木一駄なくても年は取れけり　堂
節季ゆさむき雪の編笠　良
出かゝりて茶の湯の客を誘と合　菊
畠をへだつ吉田岡﨑　隣
雨がたき空に月澄鰯雲　波
迎へかねたる駒のくたびれ　堂
ひやゝかに中稲の花を吹おとし　風
山の内裏の歌もしまさる　菊
糸の塵ほそき指にて撰分る　良
下着の紅に顔のかゞやく　波
祭見る向ふの見世の竹すだれ　隣
皆ばら／＼とひらく傘　風
あの男やらじと路をたてふさぎ　堂
駿河の田植ゆり輪いたゞく　良
長持に注連ひらめかす花の旅　菊
雲雀鳴きたつ聲も濁らず　波

二日とまりし宗鑑が客、煎茶一斗米五升、下戸は亭主の仕合なるべし。

洗足に客と名の付寒さ哉　洒堂
綿舘双ぶ冬むきの里　許六
鶺鴒階子の鎰を傳ひ來て　芭蕉
春は其まゝなゝくさも立ッ　嵐蘭
月の色氷ものこる小鮒賣　六
築地のどかに典藥の駕　堂
相國寺牡丹の花のさかりにて　蘭
椀の蓋とる蕗に竹の子　蕉
西衆の若黨つるゝ草まくら　堂
むかし咄に野郎泣する　六
きぬ／＼は宵の踊に箔を着て　蕉
東追手の月ぞ澄きる　蘭
青鷺の梗に宿す露の音　六
ふたりの杜杖あと先につく　堂
乗掛の挑灯しめす朝嵐　蘭

汐さしかゝる星川の橋　蕉
村は花田づらの草の青みたち　六
塚のわらびのもゆる石原　堂
薦僧の師に廻りあふ春の末　蕉
今は敗れし今川の家　蘭
うつり行後撰の風を讀興し　六
又まねかるゝ四國ゆかしき　堂
朝露に濡わたりたる藍の花　蘭
よごれしむねにかゝる麥の粉　蕉
馬方を待戀つらき井戸の端　堂
月夜に髪をあらふ揉出し　六
火とぼして砧あてがふ子共達　蕉
先積かくるとしの物成　蘭
うつすりと門の瓦に雪降て　六
高観音にから崎を見る　堂
今はやる單羽織を着つれ立チ　蘭
奉行の鑓に誰もかくるゝ　蕉
葭垣に木やり聞ゆる堀の内　堂
日はあかう出る二月朔日　六

初花に伊勢の鮑のとれそめて　蕉
釣樟若やぐ宮川の上ミ　蘭

支梁亭口切

口切に境の庭ぞなつかしき　芭蕉
笋見たき藪のはつ霜　支梁
山雀の笠に縫べき草もなし　嵐蘭
秋の野馬のさま〳〵の形　利合
旅人の咄しに月の明わたり　洒堂
大戸をあげに出る裸身　岱水
雛のたま子の數を產そろへ　桐奚
あらたに橋をふみそむる也　也竹
絲さす六田の柳掘植て　梁
掛菜春めく打大豆の汁　蕉
細なる雨にもしぼる蝶のはね　合
鐘かなぐる空坊の椽ン　堂
ばら〳〵と錢落したる石のうへ　水
酒で乞食の成やすき月　蘭
行雲の長門の國を秋たちて　堂
露に朽けん一腰の錆　梁
西日入ル花は庵の間半床　竹
萱の二葉のもえてほのめく　奚
名
みやこをば去年の行脚に思れて　合
兒にまたるゝ釋迦堂のくれ　堂
咲初て忍ぶたよりも猿すべり　蕉
鳥のなみだか枇杷のうすいろ　蘭
凡卑して鎖すともなき旅の宿　奚
淸げに注連をはゆる社家町　竹
日盛に鯔賣聲を夢ごゝろ　堂
みよしの房の双ぶ川口　梁
水つきの稲のしづくに肩重し　合
はゝ黄みたる門前の坂　蘭
皮剝の物煮て喰ふ宵の月　蕉
上毛吹るゝしろぼろの鷲　奚
谷つたひ流しかけたる竹筏　竹
太刀持ばかりふたごゝろなき　堂
物音も簾靜におろしこめ　蘭
盆に算ゆる丸藥の數　梁
花盛御室の路の人通り　奚
麥と菜種の野は錦也　合

九月廿日あまり、翁に供せられて、淺草の末嵐竹亭を訪ひて、卒に十句を吟ず。興のたえん事をおしみて、洛の舊友をもよほし、そのあとをつぐ。

刈かぶや水田の上の秋の雲　洒堂
暮かゝる日に城かゆる雁　嵐竹
衣うつ麓は馬の寒がりて　芭蕉
糞草けぶる道の霧雨　北鯤
古戰場月も靜に澄わたり　嵐蘭
しばし見送る我客の笠　堂
さし汐の門の柱に打よせて　竹
窓を明れば壁に入虹　蕉
巻藁に肩休まするはづし弓　鯤

水仙得たる房州の儛手　蘭
餅つきの釜まはし出ス雪の上　膳所 昌房
場にかさなる鰤の桶漬　正秀
小作りた内儀かしこき初あらし　臥高
鶏も鳴なと月待の戀　探志
懐にこぼす泪のやゝ寒き　游刀
とつていたゞく三方の熨斗　野徑
花の影(陰)射來す鏑防ぐらん　京 去來
鐙にはねのあがる春雨　仝
暖に遊ぶ狐の耳かきて　野童
池の小隅に芹の水音　仝
焼付る蛤茶屋の朝の月　史邦
風に實のいる賤が破れ戸　仝
老佾の帽子つれたる秋の昏　景桃
太鼓聞こゆる源太夫の宮　仝
六月は綿の二葉に麥刈て　素牛
たばこ飲子の北座淋しき　仝
操をりの腰にさげたる操の總　大坂 之道
時雨に馬を下りる冬の日　仝

枝作る松に階子をさしかけて　車庸
二軒並で家のあたらし　仝
聞へよき加賀の藏本ゆるさぞゝ　探志
女夫かたぶく木庵の禪　游刀
鎌入れぬ山は公事なき花の春　正秀
長芋の芽のもゆる赤土　臥高
里裏のすゞみ起せば去年の雪　野徑
かすむ夕べの鼠とる犬　昌房

松の中　曲翠

梟の鳴やむ岨の若菜かな
おぼろの月の椿つらノ＼　洒堂
新簀子先二疊敷く彌生來て　同
赤手すりたる馬士の詫言　翆
晴かゝる節句の朝の天氣相　同
餌ふごの鮎をあぐる染付　堂
深艸はをなごばかりの下屋敷　同
伏見の戀を晩鐘にきく　翆

錢の利をしめて百づゝならべ置　同
母とむすこがてゝをあなづる　堂
春先に田の荒仕事除明て　同
鼠の穴をふさぐ二ン月　翆
花吸ふと鳴鶫のひよノ＼と　同
晝は衣をつゝむ風呂敷　堂
侘しさや甲斐の夕氣の小麥餅　同
しどろに生へて赤き雞頭　翆
頬當をはづして月を打詠め　同
惡七兵衞かげきよが秋　堂
世の中は手間もいらずに年寄て　同
さまノ＼かはる月額の形り　翆
通天の紅葉もちらず初時雨　同
筏に切し大根の湯煮　堂
追おろす犬も壘の上に寢て　同
山雀籠のかゝる折釘　翆
菊やりて若衆ノ＼となぶらるゝ　同
戀もがさつに城下の月　堂
まだ暮ぬうちより藥師押合て　同

ところてん喰こはり立じま（小島） 翠
笠縫（スイ）の里とみえたる竹の皮 同
何を心に行々子鳥鳴 堂
待宵（ウ）の身をもだえたる四ッの鐘 同
ほして干かねる絹の下帯 翠
逗留の内をあかれて口おしき 同
門に立添ふたそがれの空 堂
森の花甍（イラカ）見えたる増上寺 同
塩（潮）に音なき鳥の囀り 翠

忘年書懐　素堂亭

節季候

節季候を雀のわらふ出立かな　芭蕉

餅舂

餅つきやあがりかねたる鶏の泊屋（トヤ）　嵐蘭

衣配

文箱の先模様（モヤウ）見る衣くばり　曾良

佛名

佛名や饅頭は香の薄けぶり　洒堂

歳昏（暮カ）

腹中の反古見はけ（分シ）ん年のくれ　素堂

餘興

としわすれ盃に桃の花書ン　洒堂
膝にのせたる琵琶のこがらし　素堂
宵の月よく寝る客に宿かして　芭蕉

俳諧深川集終

京寺町二条上ル町
井筒屋庄兵衛板

すみだ川

炭俵序

此集を撰める孤屋野坡利牛らは常に芭蕉の軒に行かよひ、瓦の窓をひらき、心の泉をくみしりて、十あまりなゝの文字の、野風をはげみあへる輩也。霜凍り冬どのゝあれませる夜、この二三子庵に侍て、火桶にけし炭をおこす。庵主これに口をほどけ、宋人の手龜(カマ)らずといへる藥是ならん、としのゝ折箸に熁(オキ)のさゝやかなるを、竪にをき

横になほしつゝ、金屏の松の古さよ冬籠と舌よりまろびいづる聲の、みたりが耳に入。さとくもうつるうのめ鷹のめどもの、是に魂のすはりたるけにや、これを思ひ立はるの日のゝつと出しより、秋の月にかしらかたむけつゝ、やゝ吟終り篇なりて、竟にあめつちの二まきにわかつとなん。是をひらきみるに、有聲の繪をあやとりおさむれげ、又くぬぎ炭の筋みえたり。けだしくも題號をかく

付侍る事は、詩の正義にいへる五ツのしな、あるはやまとの卷〱のたぐひにはあらねど、例の口に任せたるにもあらず。竊によりところありつる事ならし。ひと日芭蕉旅行の首途に、やつかれか手を携えて再會の期を契り、かつ此等の集の事に及で、かの冬籠の夜きり火桶のもとにより、くぬぎ炭のふる歌をうちずしつるらつりに、炭だはらといへるは誹也けり、と獨ごちたるを、小子聞をりて

よしとおもひうるとや、此しうをえらぶ媒と成にたり。この心をて宜しう序書てよと云。捨てわかれぬ。今此事をかうがへ、其初をおもふに、題號おのづからひゞけり。さらに辨をつくる境にはあらじかし、とくちをつぐむ。

元祿七の年
夏閏さつき
初三の日
素龍書

誹諧炭俵集上巻

むめがかにのつと日の出る山路かな　芭蕉
處〴〵に雉子の啼たつ　野坡
家普請を春のてすきにとり付て　同
上のたよりにあがる米の直　芭蕉
宵の内はら〳〵とせし月の雲　同
藪越しはなす秋のさびしき　野坡
御頭へ菊もらはるるめいわくさ　野坡
娘を堅う人にあはせぬ　芭蕉
奈良かよひおなじつらなる細基手　野坡
ことしは雨のふらぬ六月　芭蕉
預けたるみそとりにやる向河岸　野坡
ひたといひ出すお袋の事　芭蕉
終宵尼の持病を押へける　野坡
こんにやくばかりのこる名月　芭蕉
はつ雁に乘懸下地敷て見る　野坡
露を相手に居合ひとぬき　芭蕉
町衆のづらりと醉て花の陰　野坡
門で押るゝ壬生の念佛　芭蕉
東風々に糞のいきれを吹まはし　同
たゞ居るまゝに肱わづらふ　野坡
江戸の左右むかひの亭主登られて　芭蕉
こちにもいれどから臼をかす　野坡
方〳〵に十夜の内のかねの音　芭蕉
桐の木高く月さゆる也　野坡
門しめてだまつてねたる面白さ　芭蕉
ひらふた金で表がへする　野坡
はつ午に女房のおやこ振舞て　芭蕉
又このはるも濟ぬ牢人　野坡
法印の湯治を送る花ざかり　芭蕉
なは手を下りて靑麥の出來　野坡
どの家も東の方に窓をあけ　野坡
魚に喰あくはまの雜炊　芭蕉
千鳥啼一夜〳〵に寒うなり　野坡
未進の高のはてぬ算用　芭蕉
隣へも知らせず嫁をつれて來て　野坡
屛風の陰に見ゆるくはし盆　芭蕉

三吟

兼好も莚織けり花ざかり　嵐雪
あさみや芒に雀鮨もる　利牛
片道は春の小坂のかたまりて　野坡
外をざまくに圍ふ相撲場　嵐雪
細〴〵と朔日ごろの宵の月　利牛
早稲も晩稲も相生に出る　野坡
泥染を長き流にのばすらん　嵐雪
あちこちすれば晝のかねうつ　利牛
隣から節々嫁を呼に來る　野坡
てふ〳〵しくも譽るかいわり　嵐雪
黑谷のくちは岡崎聖護院　利牛
五百のかけを二度に取けり　野坡
桐ぬきのいぼの跡ある雪のうへ　嵐雪
人のさはらぬ松黒む也　利牛

雑役の鞍を下せば日がくれて　野坡
飯の中なる芋をほる月　嵐雪
漸と雨降やみてあきの風　利牛
鶏頭見てはまた鼾かく　野坡
名 奉公のくるしき顔に墨ぬりて　嵐雪
抱揚る子の小便をする　利牛
ぐはた／＼と河内の荷物送り懸　野坡
心みらるゝ箸のせんだく　嵐雪
婿が來て娘の世とは成にけり　利牛
ことしのくれは何も曝(もら)はぬ　野坡
金佛の細き御足をさするらん　嵐雪
此かいわいの小鳥皆よる　利牛
黍の穂は殘らず風に吹倒れ　野坡
馬場の喧嘩の跡にすむ月　嵐雪
弟はとう／＼江戸で人になる　利牛
今に庄屋の口はほどけず　野坡
ウ 賣手からうつてみせたるたゝき鉦　嵐雪
ひらり／＼とゆきのふり出し　利牛
鎌倉の便聞せに走らする　野坡
かした處のしれぬ細引　嵐雪
獨ある母をすゝめて花の陰　利牛
まだかびのこる正月の餅　野坡

ふか川にまかりて

空豆の花さきにけり麥の緣　孤屋
晝の水鶏のはしる溝川　芭蕉
上張を通さぬほどの雨降て　岱水
そつとのぞけば酒の最中　利牛
寢處に誰もねて居ぬ宵の月　芭蕉
どたりと塀のころぶあきかぜ　孤屋
ウ きり／＼す薪(マキ)の下より鳴出して　利牛
晩の仕事の工夫するなり　岱水
妹をよい處からもらはるゝ　孤屋
僧都のもとへまづ文をやる　芭蕉
風細う夜明がらすの啼わたり　岱水
家のながれたあとを見に行　利牛
鯲汁わかい者よりよくなりて　芭蕉
茶の買置をさげて賣出す　孤屋
この春はどうやら花の靜なる　利牛
かれし柳を今におしみて　岱水
雪の跡吹はがしたる朧月　孤屋
ふとん丸けてものおもひ居る　芭蕉
名 不届な隣と中のわるうなり　岱水
はつち坊主を上へあがらす　利牛
泣事(なきごと)のひそかに出來し淺ぢふに　芭蕉
置わすれたるかねを尋る　孤屋
着のまゝにすくんでねれば汗をかき　利牛
客を送りて提る燭臺　岱水
今のまに雪の厚さを指てみる　孤屋
年貢すんだとほめられにけり　芭蕉
息災に祖父のしらがのめでたさよ　岱水
堪忍ならぬ七夕の照り　利牛
名月の間に合せ度芋畑　芭蕉
すた／＼いふて荷ふ落鮎　孤屋

このごろは宿の通りもうすらぎし　利牛
山の根際の鉦かすか也　岱水
よこ雲にそよ／＼風の吹出す　孤屋
晒の上にひばり囀る　利牛
花見にと女子ばかりがつれ立て　芭蕉
余のくさなしに菫たんぽゝ　岱水

芭蕉
孤屋
岱水
利牛
各九句

百韻

子は裸父はてゝれで早苗舟　利牛
岸のいばらの眞白に咲　野坡
雨あがり珠數懸鳩の鳴出して　孤屋
與力町よりむかふ西かぜ　利牛
竿竹に茶色の紬たぐりよせ　野坡
馬が離れてわめく人聲　孤屋
暮の月干葉の茹汁わるくさし　利牛
掃ば跡から檀ちる也　野坡
ぢゝめきの中でより出する青あかゞ　孤屋
坊主になれどやはり仁平次　利牛
松坂や矢川へはいるうら通り　野坡
吹るゝ鮓もつらき闇の夜　孤屋
十二三辨の衣裳の打そろひ　利牛
本堂はしる音はどろ／＼　野坡
日のあたる方はあからむ竹の色　孤屋
只奇麗さに口すゝぐ水　利牛
近江路のうらの詞を聞初て　野坡
天氣の相よ三か月の照　孤屋
生ながら直に打込ひしこ漬　利牛
椋の實落る屋ねくさる也　野坡
帶買の戻り連立花ぐもり　孤屋
御影供ごろの人のそはつく　利牛
ほか／＼と二日灸のいぼひ出　野坡
ほろ／＼あへの膳にこぼるゝ　孤屋
ない袖を振てみするも物おもひ　利牛
舞羽の糸も手につかず繰　野坡
段／＼に西國武士の荷のつどひ　孤屋
尚きのふよりけふは大旱　利牛
切蟲の喰倒したる植たばこ　野坡
くばり納豆を仕込廣庭　孤屋
瘧日をまぎらかさども侍ごゝろ　利牛
藤ですげたる下駄の重たき　野坡
つれあひの名をいやしげに呼まはり　孤屋
となりの裏の遠き井の本　利牛
くれの月横に負來る古柱　野坡
すいきの長のあまるこつてい　孤屋
ひつそりと盆は過たる浄土寺　利牛
戸でからくみし水風呂の屋ね　野坡
伐透す樅と檜のすれあひて　孤屋
赤い小宮はあたらしき内　利牛
濱迄は宿の男の荷をかゝえ　野坡

師走比丘尼の諷(ウタ)の寒さよ　孤屋
餅搗の臼を年〳〵買かえて　利牛
天満の状を又忘れけり　野坡
廣袖をうへにひつぱる船の者　孤屋
むく起にして参る観音　利牛
燃しさる薪(マキ)を尻手に指くべて　野坡
十四五両のふりまはしする　孤屋
月花にかきあげ城の跡ばかり　利牛
弦打颪海雲とる桶　孤屋
二 機嫌能(よく)かいこは庭に起かゝり　野坡
小昼のころの空静也　利牛
椽端(ヘナ)に腫たる足をなげ出して　孤屋
鍋の鋳かけを念入てみる　野坡
麦畑の替地に渡る傍示杭　利牛
貢手もしらず頼政の筆　孤屋
物毎も子持になればだゞくさに　野坡
又御局の古着いたゞく　利牛
妓王寺のうへに上れば二尊院　孤屋
けふはけんかく寂しかりけり　野坡

薄雪のこまかに初手を降出し　利牛
一つゞくなりに鱈の雲腸(くもわた)　孤屋
銭さしに菰引ちぎる朝の月　野坡
なめすゝきとる裏の塀(ヒ)あはひ　利牛
三ウ めを縫て無理に鳴する鶏の聲　孤屋
又だのみして美濃だよりきく　野坡
かゝさずに中の巳の日をまつる也　利牛
入来る人に味噌豆を出す　孤屋
すゞかひに木綿袷の龍田川　野坡
御茶屋の見ゆる宿の取つき　利牛
ほや〳〵とどんどほこらす雲ちぎれ　孤屋
水菜に鯨まじる惣汁　野坡
花の内引越て居る樫原(カタギ)　利牛
尻輕にする返事聞よく　孤屋
おちかゝるうそ〳〵時の雨の音　野坡
入舟つゞく月の六月　利牛
拭(フキ)立て御上(ウヘ)の敷居ひからする　孤屋
尚云つのる詞からかひ　野坡
名 大水のあげくに畑の砂のけて　利牛

何年菩提しれぬ栃(とち)の木　孤屋
敷金に弓同心のあとを継　野坡
丸九十日濕をわづらふ　利牛
投打も腹立まゝにめつた也　孤屋
足なし碁盤(盤)よう借に来る　野坡
里離れ順禮引のぶらつきて　利牛
やはらかものを嫁の襟もと　孤屋
氣にかゝる朔日しまの精進箸(いもいばし)　野坡
うんち(じ)果たる八専の空　利牛
丁寧に仙臺俵の口かゞり　孤屋
訴訟が済て土手になる筋　野坡
夕月に醫者の名字を聞はつり　利牛
包で戻る鮭のやきもの　孤屋
名ウ 定免を今年の風に欲ぼりて　野坡
もはや仕事もならぬおとろへ　利牛
暑病(ヤミ)の殊(ことに)土用をうるさがり　孤屋
幾月ぶりでこゆる逢坂　野坡
減(ヘリ)もせぬ鍛冶屋の見世の店ざらし　利牛
門(ン)建直す町の相談　孤屋

彼岸過一重の花の咲立て　野坡
三人ながらおもしろき春　執筆

春の部發句

立春

蓬莱に聞ばや伊勢の初便　芭蕉
東雲やまいら戸はづすかざり松　濁子
みちのくのけふ關越ん箱の海老　杉風
春や祝ふ丹波の鹿も歸とて　京 去來
刀さす供もつれたし今朝の春　膳所 正秀
いそがしき春を雀のかきばかま　大坂 洒堂
喰つみや木曾のにほひの檜物　岱水
猶いきれ門徒坊主の水祝ひ　沾圃
目下にも中の詞や年の時宜　孤屋
初日影我葉立とつまればや　利牛
長松が親の名で來る御慶哉　野坡

梅

梅一木つれづれ草の姿かな　露沾
うめ咲や臼の挽木のよきまがり　曲翠
梅が香の筋に立よるはつ日哉　支考

窓のうちを見こみて

むめちるや糸の光の日の匂ひ　伊賀 土芳
梅さきて湯殿の崩れなをしけり　利牛
赤みその口を明けりむめの花　游刀
みなみなに咲そろはねど梅の花　野坡
紅梅は娘すまする妻戸哉　杉風

おなごどもの七くさはやすをみて

とばしるも顏に匂へる薺かな　其角
七草や粧ひしかけて切刻み　野坡
うちむれてわかな摘野に脛かゆし　仙杖

洛よりの文のはしに

朧月一足づゝもわかれかな　去來
大原や蝶の出てまふ朧月　丈艸
おぼろ月まだはなされぬ頭巾かな　仙花

深川の會に

長閑さや寒の殘りも三ケ一　利牛
十五日立や睦月の古手賣　大坂 之道
猫の戀初手から鳴て哀也　野坡
ねこの子のくんづほぐれつ胡蝶哉　其角

鶯

うぐひすにほうと息する朝哉　嵐雪
鶯に藥をしへん聲の文　其角
うぐひすの聲に起行雀かな　桃隣
うぐひすや門はたまたま豆麩賣　野坡
鶯の一聲も念を入にけり　利牛

柳

これりをもへらして植し柳かな　湖春
障子ごし月のなびかす柳かな　素龍
五人ぶちとりてしだるゝ柳かな　野坡
せきれいの尾は見付ざる柳哉　一風
町なかへしだるゝ宿の柳かな　利牛
傘に押わけみたる柳かな　芭蕉

椿

土はこぶ簣(ふご)にちり込椿かな　孤屋

枝長く伐らぬ習を椿かな　湖春
念入て冬からつぼむ椿かな　曲翠
鋸にからきめみせて花つばき　嵐雪
鳥のねも絶す家陰の赤椿　支考
はき掃除してから椿散にけり　野坡

花

うへの〻花見にまかり侍りしに、人〴〵幕打さはぎ、もの〻音、小うたの聲、さま〴〵なりける。かたはらの松かげをたのみて、

四ツごきのそろはぬ花見心哉　芭蕉
めづらしや内で花見のはつめじか　杉風
うか〳〵と來ては花見の留守居哉　丈艸

何がしのかうの殿の花見に侍りて

中下もそれ相應の花見かな　素龍
花守や白きかしらを突あはせ　去來
朝めしの湯を片膝や庭の花　孤屋
あすと云花見の宵のくらざ哉　荊口

だかれてもをのこゞいきる花見哉　斜嶺
柹の袈裟ゆすり直すや花の中　北枝
牡丹すく人もや花見とはさくら　湖春
あだなりと花に五戒の櫻かな　其角
花はよも毛虫にならじ家櫻　嵐雪
山ざくらちるや小川の水車　（大津あま）智月
老僧も袈裟かづきたる花見哉　（大坂）之道
誰母ぞ花に珠數くる遲ざくら　﨟甫
山櫻小川飛こすおなご哉　（越前福井）普全
昆布だしや花に氣のつく庫裏坊主　利牛
おちつきは魚屋まかせや櫻がり　同
折かへる櫻でふくや臺所　孤屋
祭まであそぶ日なくて花見哉　野坡
食の時みなあつまるや山ざくら　同

上巳

帶ほどに川のながる〻鹽（汐）干哉　沾德
畫舟に乘るやふしみの桃の花　桃隣
かつらぎの神はいづれぞ夜の雛　其角
鬼の子に餅を居るもひゐな哉　（ミノ）如行

日半路をてられて來るや桃の花　野坡
麻の種毎年踏る桃の華　利牛
藪垣や馬の貌かくも〻の花　孤屋
青柳の泥にしだる〻鹽（汐）干哉　芭蕉

題しらず

瀧つぼに命打こむ小あゆ哉　（嵯峨田夫）爲有
春雨や蜂の巣つたふ屋ねの漏　芭蕉
散殘るつ〻じの蘂や二三本　子珊
ほそ〴〵とごみ燒門のつばめ哉　怒誰
鳥の行やけの〻隈や風の末　（伊賀）猿雖
氣相よき青葉の麥の嵐かな　仙華

旅行にて

法度場の垣より内はすみれ哉　野坡

此集いまだ半なる頃孤屋旅立事ありけるに、品川までみ送りて、

雲霞どこ迄行もおなじ事　野坡
梅さくらふた月ばかり別れけり　利牛

夏の部發句

首夏

鱈うをの裏ほす日也衣がへ　嵐雪
衣がへ十日はやくば花ざかり　野坡
綿をぬく旅ねはせはし衣更　九節
雀よりやすき姿や衣がへ　雪芝
花の賭けさはよほどの殘りかな　子珊
扇屋の暖簾白し衣がへ　利牛

うの花

卯の花やくらき柳の及ごし　芭蕉
うのはなの絶間たゝかん闇の門　去來

旅行に

うの花に蘆毛の馬の夜明哉　許六
卯の花に叩ありくやかづらかけ　支考

題しらず

棹の歌はやうら涼しめじか舟　潤春
髭宗祇池に蓮ある心かな　素堂
うぐひすや竹の子藪に老を鳴　芭蕉

郭公

聞までは二階にねたりほとゝぎす　桃隣
ほとゝぎす一二の橋の夜明かな　其角
行燈を月の夜にせんほとゝぎす　嵐雪
挑灯の空に詮なしほとゝぎす　杉風
木がくれて茶摘も聞やほとゝぎす　芭蕉
青雲や舟ながしやる子規　素龍
時鳥啼〳〵風が雨になる　利牛
子規顏の出されぬ格子哉　野坡

麥

柿寺に麥穗いやしや作どり　荊口（みの）
麥の穗と共にそよぐや筑波山　千川
麥跡の田植や遲き螢どき　許六

翁の旅行を川さきまで送りて

刈こみし麥の匂ひや宿の内　利牛

おなじ時に

麥畑や出ぬけても猶麥の中　野坡

おなじこゝろを

浦風やむらがる蠅のはなれぎは　岱水

端午

五月雨や傘に付たる小人形　其角
さうぶ懸て見ばやさつきの風の色　洒堂（大坂）
五日迄水すみかぬるあやめかな　桃隣
文もなく口上もなし粽五把　嵐雪
みをのやは首の骨こそ甲なれ（やまと）　仙花
帷子の下ぬぎ懸る袷かな　素龍

夏旅

並松をみかけて町のあつさかな　臥高
柿柴に昔貌あつし足のまめ　斜嶺
二三番鷄は鳴どもあつさ哉（とり・なけ）　魯町（長崎）
はげ山の力及ばぬあつさかな　猿雖
するが地や花橘も茶の匂ひ　芭蕉
此句は嶋田よりの便に

五月雨

さみだれやとなりへ懸る丸木橋　素龍
五月雨の色やよど川大和川　桃隣
さみだれに小鮒をにぎる子共哉　野坡
五月雨や露の葉にもる蘿蔔（ヤマゴボウ）　嵐蘭
此句は桃隣より書てこしぬ

五月雨や蠶も枕もものゝ本　　傍水

涼

川中の根木によろこぶすゞみ哉　　芭蕉
（此句は出羽の仏羽の句を誤りしなりと）

月影にうごく夏木や葉の光り　　可南(女)

涼しさよ塀にまたがる竹の枝　　卯七(長崎)

行燈をしいてとらするすゞみかな　　探芝

崎風はすぐれて涼し五位の聲　　智月

すゞしさをしれと杓(ヒサク)の雫かな　　兀峰(備前)

すゞじさや浮洲のうへのざこくらべ　　去來

夕すゞみあぶなき石にのぼりけり　　野坡

三日月の隱にてすゞむ哀かな　　素堂

題しらず

橘や定家机のありどころ　　杉風

熨斗むくや礒菜すゞしき嶋がまへ　　正秀

世の中や年貢畠のけしの花　　里東

早乙女にかへてとりたる菜飯哉　　嵐雪

木曾路にて

やまぶきも巴も出る田うへかな　　許六

ひるがほや雨降たらぬ花の貌　　智月

はへ山や人もすさめぬ生くるみ　　北鯤

曉のめをさまさせよはすの花　　乙州

雨乞の雨氣(きけ)こはがるかり着哉　　丈艸

螢見し雨の夕や水葵　　仙花

一いきれ蝶もうろつく若葉哉　　楚舟

なりかゝる蟬がら落す李かな　　曉(あ)香

猪の牙にもげたる茄子かな　　筏(きお)有

團(うちわ)賣侍町のあつさかな　　怒風

けうときは鷺の栖や雲の峰　　祐甫

一枝はすげなき竹のえかば哉　　仙花

竹の子や兒の齒ぐきのうつくしき　　嵐雪

さるべき人、僕が酒をたしなむ事を、かたく戒め給ひて誹せしむ。しかるにある會にそれをよく知て、あらき、あはもりなど、名あるかぎりを取出て、あるじせられければ、汗をかきて、

改て酒に名のつくあつさ哉　　利牛

ある人の別墅にいざなはれ、盡日打和ぎて物がたりし、其夕つかた外のかたをながめ出して、

行雲をねてゐて見るや夏座敷　　野坡

誹諧炭俵下巻

秋之部

秋のあはれいづれかくの中に、月を捨て、誹諧の序をえらばず。

名月

名月や見つめても居ぬ夜一よさ　　湖春

名月や椽(エン)とりまはす黍の虛(カラ)　　去來

家貰てことし見初る月夜哉　荷兮
名月や誰吹起す森の鳩　洒堂
松陰や生船(イケ)揚に江の月見　里東
もち汐の橋のひくさよけふの月　利牛
家こぼつ木立も寒し後の月　其角
むさしの仲秋の月はじめて見侍て、望峯ノ不盡筑波を、
明月や不二みゆるかとするが町　素龍

七夕

笹のはに枕付てやほしむかへ　其角
星合にもえたつ紅や蚊屋の縁(ヘリ)　孤屋
七夕やふりかはりたる天の川　嵐雪

盂蘭盆

たうきびにかげろふ軒や玉まつり　洒堂
踊るべき程には酔て盆の月　江州 李由
盆の月ねたかと門をたゝきけり　野坡

朝顔

閉関
朝顔や晝は錠おろす門の垣　芭蕉
朝顔や日傭出て行跡の垣　利合
てしかなと朝貌ははす柳かな　湖春

秋虫

年よれば聲はかるゝきりぎりす　大津 智月
悔いふ人のとぎれやきりぎりす　丈艸
蟷螂にくんで落たるぬかご哉　爲有
こほろぎや箸で追やる膳の上　孤屋

鹿

友鹿の啼を見かへる小鹿かな　車來
人のもとめによりて
鹿のふむ跡や硯の躬恒形(ガタ)　素龍
旅行のとき
近江路やすがひに立る鹿の長　土芳

草花

宮城野の萩や夏より秋の花　桃隣
花すゝきとらへぢからや村すゞめ　野童
片岡の萩や刈ほす稲の端　猿雖
蘆の穂や貌撫揚る夢ごゝろ　丈草
なには津にて
蘆のほに箸うつかたや客の膳　去來
女中の茸狩をみて
茸狩や鼻のさきなる歌がるた　其角

菊

菊畑おくある霧のくもり哉　杉風
紺菊も色に呼出す九日哉　桃隣

秋植物

柿のなる本を子供の寄どころ　利牛
落栗や谷にながるゝ蟹の甲　祐甫
秋風や茄子の數のあらはるゝ　木白
箕(ミ)に干て窓にとちふく綿の桃　孤屋
たうがらしの名を南蠻がらしといへるは、かれが治世南ばんにてひさしかりしゆへにや。未詳。ほうづき、天のぞき、そら見、八つなりなどいへるは、をのがかたちをこのめる人々の、もてあそびて付たる成べし。みなやさしからぬ名目(モク)は、汝がむまれ付のふつゝかなれば、天資自然の理、さらさら恨むべからず。かれが

愛をうくるや、石臺にのせられて、竹椽のはしのかたにあるは、上々の仕合なり。ともすればすりばちのわれ、そこぬけのつるべに土かはれて、やねのはづれ、二階のつま、物ほしのひがけをたのめるなど、あやふくみえ侍るを、朝貌のはかなきたぐひには、たれも／＼おもはず。大かたはかつら髭つり鬚の、ますらほにかしづかれて、びんぼ樽の口を、うつすみさかなとなり、不食不菜のとき、ふと取出され、多くはやつこ豆腐の頃、紅葉の色をみするを榮花の頂上とせり。かくはいへど、ある人北野まうでの歸さに、みちのほとりの小童に、こがね一兩くれて、なんぢが青／＼とひとつみのりしを所望せし事ありといへば、いやしめらるべきにもあらず。しかしいまはその人／＼も此世をさりつれば、いよ／＼愛をもたのむべからず、からきめもみすべからず、と小序をしかいふ。

石臺を終にねこぎや唐がらし　野坡

題しらず

相撲取ならぶや秋のからにしき　嵐雪

水風呂の下や案山子の身の終　丈草

礒ひとりよき染物の匂ひかな　洒堂

秋のくれいよ／＼かるくなる身かな　荷兮

茸狩や黄葦(イクチ)も兒は嬉し貌　利合

夕貌の汁は秋しる夜寒かな　支考

くる秋は風ばかりでもなかりけり　北枝

秋風に蝶やあぶなき池の上　(僧)依々

庖丁の片袖くらし月の雲　其角

冬之部

初冬

凩や沖よりさむき山のきれ　其角

市中や木の葉も落(ヲチ)ずふじ颪　桃隣

冬枯の礒に今朝みるとさか哉　芭蕉
(此句は出羽の公羽の句を誤りしなりと)

櫻木や菰張まはす冬がまへ　支梁

蜘の巣のきれ行冬や小松原　斜嶺

刈蕎麥の跡の霜ふむすゞめ哉　桐奚

凩の藪にとゞまる小家かな　殘香

初霜や猫の毛も立臺所　楚舟

凩や眄(マタヽキ)しげき猫の面(ツラ)　八桑

南宮山に詣て

木枯の根にすがり付檜皮(ひはだ)かな　桃隣

等目に霜の蘇鐵のさむさ哉　游刀

時雨

芋喰の腹へらしけり初時雨　荊口

黑みけり沖の時雨の行(ゆき)どころ　丈艸

芭蕉翁を
わが茅屋にまねきて
もらぬほど今日は時雨よ草の庵　斜嶺
有明となれば度々しぐれかな　許六
旅寢のころ
小夜寒となりの臼は挽やみぬ　野坡
大根引といふ事を
鞍壺に小坊主乘るや大根引　芭蕉
鉢まきをとれば若衆ぞ大根引　野坡
神送り荒たる宵の土大根　洒堂
さむさ　を下の五文字にすへて
人聲の夜半を過る寒さ哉　野坡
この頃は先挨拶もさむさ哉　示峰
蕎麥切に吸物もなき寒さ哉　利牛
足もともしらけて寒し冬の月　我眉
魚店や蹉うち上て冬の月　里東
右の二句はふか川の庵へをとづれし頃、他國よりの狀のはしに有つるをみて今爰に出しぬ。

雪

はつ雪にとなりを顔で教けり　野坡
初雪の見事や馬の鼻ばしら　利牛
はつ雪や塀の崩れの蔦の上　買山
雪の日に庵借(カサツ)ぞ鷦鷯(ミソサザイ)　依々
雪の日や薄やうくもるうつし物　猿雖
冬の夜眞道寺にて
杉のはの雪朧なり夜の鶴　支考
朱の鞍や佐野へわたりの雪の駒　北枝
はつ雪や先馬やから消そむる　許六
炭賣の横町さがる雪吹哉　湖夕
海山の鳥啼立る雪吹かな　乙州
江の舟や曲突(ヘツイ)にとまる雪の鷺　素龍
題不知
かなしさの胸に折レこむ枯野哉　羽黒亡人 呂丸
寒菊や粉糠(スカ)のかゝる臼の端　芭蕉
禪門の革足袋おろす十夜哉　許六
御火燒(おほたき)の盆(盛カ)物とるな村がらす　智月
白うをのしろき匂ひや杉の箸　之道
（此時代白魚は冬春の兩季に屬せり）
榾の火やあかつき方の五六尺　丈艸
庚申やことに火燵ある座敷　殘香
誰と誰が緣組すんでさと神樂　其角
海へ降霰や雲に波の音　同
すゝはき
煤はきは己が棚つる大工かな　芭蕉
煤拂せうじをはくは手代かな　万乎
餅つきや元服さする草履取　野坡
山臥の見事に出立(でたつ)師走哉　嵐雪
待春や氷にまじるちりあくた　智月
歳暮
このくれも又くり返し同じ事　杉風
はかまきぬ聟入もあり年のくれ　李由
なじませて鶯一羽としのくれ　智月
鍋ぶたのけばけばしさよ年のくれ　孤屋
としの夜は豆はしらかす俵かな　猿雖
年のくれ互にこすき錢づかひ　野坡
芭蕉よりの文に、くれの事いかゞなど在し、其かへり事に、
爪(ツメ)取て心やさしや年ごもり　素龍

岸 俟 顧

行年よ京へとならば狀ひとつ　湖春

鈴縄に鮭のさはればひゞく也　孤屋
雁の下たる筏ながるゝ　其角
貫之の梅津桂の花もみぢ　孤屋
むかしの子ありしのばせて置　其角
いざ心跡なき金のつかひ道　同
宮の縮のあたらしき内　孤屋
夏草のぶとにさゝれてやつれけり　其角
あばたといへば小僧いやがる　孤屋
年の豆蜜柑の核も落ちりて　其角
帶ときながら水風呂をまつ　孤屋
君來ねばこはれ次第の家となり　其角
稗と塩との片荷つる籠　孤屋
辛崎へ雀のこもる秋のくれ　其角
北より冷る月の雲行キ　孤屋
紙燭して尋て來たり酒の殘(さん)　其角
上塗なしに張ておく壁　孤屋
名ウ 小栗讀む片言まぜて哀なり　其角
けふもだらつく浮前のふね　孤屋

孤屋旅立事出來て、洛へのぼりけるゆへに、今四句未滿にして吟終りぬ。

其角
孤屋　各十六句

誹諧秋之部

秋の空尾上の杉に離れたり　其角
おくれて一羽海わたる鷹　孤屋
朝霧に日傭揃る貝吹て　同
月の隱るゝ四扉の門　其角
祖父が手の火桶も落すばかり也　同
つたひ道には丸太ころばす　孤屋
下京は宇治の糞船さしつれて　同
坊主の着たる蓑はおかしき　其角
足輕の子守して居る八ツ下り　孤屋
息吹かへす霍亂の針　其角
田の畔に早苗把(たばね)て投て置　孤屋
道者のはさむ編笠の節　其角
行燈の引出(ダシ)さがすはした錢　孤屋
顔に物着てうたゝねの月　其角

天野氏興行

道くだり拾ひあつめて案山子かな　桃隣
どんどゝ水の落る秋風　野坡
入月に夜はほんのりと打明て　利牛
塀の外まで桐のひろがる　桃隣
銅壺よりなまぬる湯でつかふ也　野坡
つよう降たる雨のつひやむ　利牛
瓜の花是からなんぼ手にかゝる　桃隣
近くに居れど長谷をまだみぬ　野坡
年よりたものを常住ねめまはし　利牛
いつより寒い十月のそら　桃隣

臺所けふは奇麗にはき立て　野坡
分にならるゝ嫁の仕合　利牛
はんなりと細工に染まる紅うこん　桃隣
鑓持ばかりもどる夕月　野坡
時ならず念佛きこゆる盆の内　利牛
鴫まつ黒にきてあそぶ也　桃隣
人の物負ねば樂な花ごゝろ　野坡
もはや彌生も十五日たつ　利牛
より平の機に火桶はとり置て　桃隣
むかひの小言たれも見廻す　野坡
買込だ米で身躰たゝまるゝ　利牛
歸るけしきか燕ざはつく　桃隣
此度の薬はきゝし秋の露　野坡
杉の木末に月かたぐ也　利牛
同じ事老の咄しのあくどくて　桃隣
だまされて又薪部屋に待　野坡
よいやうに我手に占を置てみる　利牛
しやうじんこれはあはぬ商ヒ　桃隣
帷子も肩にかゝらぬ暑さにて　野坡
京は惣別家に念入　利牛
焼物に組合たる富田鰯　桃隣
隙を盗んで今日もねてくる　利牛
髪置は雪踏とらする思案にて　野坡
先沖までは見ゆる入舟　桃隣
内でより菜がなうても花の陰　利牛
ちつとも風のふかぬ長閑さ　野坡

神無月廿日
ふか川にて即興

振賣の鴈あはれ也ゑびす講　芭蕉
降てはやすみ時雨する軒　野坡
番匠が椴の小節を引かねて　孤屋
片はげ山に月を見るかな　利牛
好物の餅を絶さぬあきの風　野坡
割木の安き國の露霜　芭蕉
網のもの近づき舟に聲かけて　利牛
星さへ見えず二十八日　孤屋
ひだるきは殊軍の大事也　芭蕉
淡氣の雪に雜談もせぬ　野坡
明しらむ籠挑灯を吹消して　孤屋
肩癖にはる湯屋の膏薬　利牛
上をきの干菜刻もうはの空　野坡
馬に出ぬ日は内で戀する　芭蕉
絈買の七ツさがりを音づれて　利牛
塀に門ある五十石取　孤屋
此島の餓鬼も手を摺月と花　芭蕉
砂に暖のうつる青草　野坡
新畠の糞もおちつく雪の上　孤屋
吹とられたる笠とりに行　利牛
川越の帶しの水をあぶながり　野坡
平地の寺のうすき藪垣　芭蕉
干物を日向の方へいざらせて　利牛
塩出す鴨の苞ほどくなり　孤屋
算用に浮世を立る京ずまひ　芭蕉
又沙汰なしにむすめ産　野坡

とたくたと大晦日も四ツのかね　孤屋
無筆のこのむ狀の跡さき　利牛
中よくて傍輩合の借りいらゐ　野坡
壁をたゝきて寐せぬ夕月　芭蕉
ウ風やみて秋の鷗の尻さがり　利牛
鯉の鳴子の綱をひかゆる　孤屋
ちらはらと米の揚場の行戻り　芭蕉
目黒まいりのつれのねちみやく　野坡
どこもかも花の三月中時分　孤屋
輪炭のちりをはらふ春風　利牛

芭蕉
野坡
孤屋
利牛
各九句

雪の松おれ口みれば尙寒し　杉風
日の出るまへの赤きふゆ空　孤屋
下肴を一舟濱に打明て　芭蕉
あひだとぎるゝ大名の供　子珊
身にあたる風もふは〳〵薄月夜　桃隣
粟をかられて廣き畠地　利牛
ウ熊谷の堤きれたる秋の水　岱水
箱こしらえて鰹節賣る　野坡
二三疊寐所もらふ門の脇　子珊
馬の荷物のさはる干もの　沾圃
竹の皮雪踏に替へる夏の來て　石菊
稻に子のさす雨のはら〳〵　杉風
手前者の一人もみえぬ浦の秋　野坡
めつたに風のはやる盆過　利合
宵〳〵の月をかこちて旅大工　依々
背中へのぼる兒をかはゆがる　桃隣
茶むしろのきはづく上に花ちりて　子珊
川からすぐに小鮎いらする　石菊

名朝曇はれて氣味よき雉子の聲　杉風
背戸へ廻れば山へ行みち　岱水
物おもひ只鬱〳〵と親がゝり　孤屋
取集めてはおほき精進日　曾良
餅米を搗て俵へはかりこみ　桃隣
わざ〳〵わせて藥代の禮　依々
雪舟でなくばと自慢こきちらし　沾圃
となりへ行て火をとりて來る　子珊
又けさも佛の食で埒を明　利牛
損ばかりして賢こがほ也　杉風
大坂の人にすれたる冬の月　利合
酒をとまれば祖母の氣に入　野坡
すゝけぬる御前の箔のはげかゝり　子珊
約束にかゞみて居れば蚊に喰れ　利牛
次の小部屋でつにむせる聲　曾良
七ツのかねに駕籠呼に來る　杉風
花の雨あらそふ内に降出して　桃隣
男まじりに蓬そろゆる　岱水

杉風　五

孤屋　二

芭蕉　一

子珊　五

桃隣　四

利牛　三

岱水　三

野坡　三

沾圃　二

石菊　二

利合　二

依々　二

曾良　二

撰者芭蕉門人
志太氏　野坡
小泉氏　孤屋
池田氏　利牛

元禄七歳次甲戌
六月廿八日

誹諧炭俵下巻之終

京寺町通　井筒屋庄兵衛

江戸白銀町　本屋藤助

別座鋪

麻の生平のひとへに衣打かけ、身がるく成行ほど、翁ちかく旅行思ひ立給へば、別屋に伴ひ、春は歸庵の事を打なげき、扨誹諧を尋けるに、翁今思ふ體は、淺き砂川をみるごとく、句の形付心ともにかろき也。其所に至りて意味有と侍る。いづれも感入て、及ずも此ながれをしとふ折ふし、庭夏草に發句を乞て、咄しながら歌仙終ぬ。是を卷頭として有合たる卷〱、夏の句の云捨たるを取集、門人の餞別をむすびて、伊賀の山家のつれ〲に送り侍る。

子珊

紫陽草や藪を小庭の別坐鋪　芭蕉
よき雨あひに作る茶俵　子珊
朔日に鯛の子賣の聲聞て　杉風
出駕籠の相手揃ふ起〳〵　桃隣
かん〳〵と有明寒き霜ばしら　八桑
榾堀かけてけふも亦來る　蕉
住憂て住持こたへぬ破れ寺　珊
どう〳〵と鳴濱風の音　風
若黨に羽織ぬがせて假枕　隣
ちいさき顔の身嗜よき　桑
商もゆるりと内の納りて　蕉
山のかぶさる下市の里　珊
草臥のつゐては旅の氣むづかし　風
四日の月もまだ細き影　隣
秋來ても畑の土のひゞわれて　桑
雲雀の羽のはえ揃ふ聲　蕉
へら〳〵と足のよだるき花盛　珊
ひゝらたい山に霞立なり　風
名 正月の末より鍛冶の人雇　隣

濡たる俵をこかす分ヶ取　桑
晝の酒寐てから酔のほかつきて　蕉
五つがなれば歸ル女房　珊
此際を利上ゲばかりに云延し　風
まんまと今朝は艫を乗川す　隣
結構な肴を汁に切入レて　桑
見世より奥に家はひつ込　蕉
取分て今年は晴ル盆の月　珊
まだ花もなき蕎麥の遲蒔　風
柴栗の薬もうつすりと染なして　隣
國から來たる人に物いふ　桑
ウ 閑しう一臼搗て供支度　蕉
糞汲にほひ隣さうなり　珊
今の間にしるう成程降時雨　風
日用の五器を籠に取込ム　桑
扈從衆御茶屋の花にざゞめきて　隣
小船を廻す池の山吹　筆
取あげてそつと戻すや鶉の巣　桃隣

休む田植の尻にしく簑　杉風
高低に崎なる家のしぐろふて　子珊
沖細魚の塩のきかぬ南風　李里
木綿物預ケて歸る昏の月　八桑
脇より爰は赤ひ蔦の葉　子祐
ウ 仕舞には藻井へ上ゲたる芋の蔓　太大
一里こちから泊り見にやる　龜水
腹癖にきり〳〵痛む節替り　楚舟
逢ひ所へ木の葉吹込　珊
昔より稲荷の前の挽細工　風
唯着のまゝで娘ほしがる　隣
有明の踊の果は戀になり　里
池田伊丹の秋の出替り　大
冷て來る川に江鮒のとれ盛　祐
てら〳〵として雨のこぼるゝ　桑
宮は花草に成たる古畠　水
綿弓提ゲて春も旅がけ　舟
名 十五日節が過ればひつそりと　大
てんでに鍬のさき懸に遣ル　里

城下は横から讃え町ふえて　[illegible]
■の■近沙の■■ら　祐
細竹のなくても食は進ムなり　隣
かゝるほど成る事に利が有　風
なだみせぬ師走の雪のだらり鐘　珊
隣の船と物を借りあふ　水
鹿島松枝まで太クつッ込ンで　桑
朝きつかりと冷しき月　大
露霜に表を轉ス臼の音　祐
一口茄子漬む穐かぜ　舟
ウ
二三日夜着は出しても足もたせ　風
降たうちほど仕事追はるゝ　珊
猫の子の百日になれば盗まれて　里
うそ〱暮にはづす衣張　隣
花蓬乳母が男の舟便り　桑
ぬるみて今は自由成る川　水
若竹の肌見せにけり五月雨　八桑
くさみ付たる片搗の麥　楚舟

■の三■下■■■て　[illegible]
戸板に鶺をふせる夕影　子珊
有明の船に召れて糾纏なれ　杉風
どこらの畑か鹿を追ふ聲　■水
ウ
穐の暮木鉢からげて打轉ス　李里
低ひ出し家は屋根斗なり　大大
たつたもの今降雪も元ゝの上　子祐
持こらえたる新の穂俵　桑
さし繩はちいさい時も利口にて　舟
山から里へ住替りけり　隣
六月に一日ふれば雨祝ひ　珊
はなえ立たる新しき網　風
聟とりてにっこりとなる表つき　水
いつもの通伊勢よりの状　里
月の秋とやかくすれば花の春　大
おろし時分と種かつぎ出ス　祐
名
雉子鳴やけふは二つは暑からふ　桑
祖父の病に小言八百　舟
雨角を押廻したる鼠壁　隣

節句の朝日寛なりけり　珊
惣じてが物を苦にせぬ生つき　風
客挨拶に内儀汗かく　水
村雨の直降に成て暮る迄　里
葉に葉重る麻の膝たけ　大
夏の月衣を提て歸らるゝ　祐
合點させたる絲の下内キ　桑
世の中を穿鑿すればみんな戀　舟
寒ひ雪をも待習ひあり　隣
よう乾たころ木一はえ平で買　水
日の横影に鶏おり居ル　風
言傳を顔知人に旅の先キ　大
桑紙出せば風の吹とる　里
花白く裏の門迄咲わたり　珊
刈し跡から杉菜若やぐ　祐

贈去秋芭蕉菴

曉鐘を思えば秋の芭蕉かな　子珊
臼の跡つく庭の露草　杉風

こぢ直す野分の空に月出て　全
すくなき鮎を追廻しけり　瑞
炭俵背負て下る山の峡　全
潤のあればまだ降ぬ雪　風
ウ
此寺の味噌の仕込を喰切て　瑞
合せかけたる藥捨おく　風
我顔の青きを戀となぶらるゝ　瑞
二番手代の身持つれなき　風
朝やけに北國米を積あげて　瑞
毎年秋は配る鉀蔽　風
月夜影片足はまる渡し船　瑞
ならべたてたる桶の土芋　風
西行の錢はなくても旅なれて　瑞
冬は潮のあたゝかな濱　風
こんもりと鳥居隱るゝ花の中　瑞
醫者の夫婦の長閑成日に　風
名
思ひやる去年は越後の雪つらし　全
春も田づらは眞鴨がち也　瑞
念佛の太鼓の役にさゝれ行　風

しらみ渡ればあくる店の戸　瑞
蒜をちいさくはやし水で呑　風
御乳の手ばやくかくる腹がけ　瑞
痞て明日の祭をねつて見る　風
酔ほどふつてあがりきる月　瑞
川渡り股に付たる蕎麥の花　風
つきぬくやうに跡の鹿笛　瑞
片そぎの末社は横にこけたまふ　風
木に馬つなぎ沓をすげぬる　瑞
ウ
大袖の若衆連たる讃岐衆　全
うき寢を起す鯛の濱燒　風
底寒く打しほれける神無月　瑞
居ながら物をねぎる袴や　全
花持て針立殿を尋來る　風
糸の袋に五加木入つゝ　全

採茶庵月與

有明や袷巻たる老の腰　涼波
[illegible]の露もかもくから風　杉風

賣に出す栗のあまりをいけさせて　全
いつも今ころ糀やをまつ　波
うち續き空に根のなき日和雲　全
外に涼しく糸通す窓　風
ウ
我夫は宮を作りに下總へ　全
霖雨つらく指折て見る　波
塩ものや豆腐の料理仕盡て　全
熱のさむればよらぬ同行　風
いかつくも貝吹つらのにくき也　全
鎌鍬とらぬ八朔の朝　波
穂の水籠に鮠を引揚て　全
梯に虹の殘るゆふ月　風
艸庵へ侍に音なふ提油　全
藤で柄まく桐口の捺　波
奥山の五器に茶を汲花曇　全
財布預けて布を買春　風
名
日は永し板で將棊の駒作　全
巣立の雀風に落來る　波

餅草に菊の萌葉を摘まがへ　波
しほり戸たゝきござれ坊様　風
小束なる枝木斗のはした薪　仝
けふもへと寝たる五月雨　波
鵜は若い時から嫁にて　仝
國隣なる伊勢の初秋　風
穀物のあがり下りは月の頃　仝
すばしりとれて鰌丸焼　波
どこにても親父は下駄に杖を指　仝
夏百の所化のほどく渋帋　風
明暮に竹の屏風の骨を組　仝
具足櫃をば米の入物　波
公通が郎下も古き宇佐の花　風
干鰯の上をもゆる陽炎　波
月額を剃つそられつ春の暮　仝
荷物は先へ去年の冬中　風

贈桃隣新宅自畫自讃

芭蕉翁圖　二酉写之

寒からぬ露や牡丹の花の蜜　芭蕉
田植まで水茶屋するか角田川　其角

竹の子や兒の齦の美しき　嵐雪
鹿の子のあどなひ顔や山畠　桃隣

郭公

挑灯の空に詮なしほとゝぎす　杉風
時鳥待夜の伽や小鯵賣　子珊
新田や隣もなくてほとゝぎす　八桑
明方や水買に出て郭公　渚波
聞迄は二階に寐たり子規　桃隣

卯花

卯の花の内らや菴の菜支度　子珊
卯の花に忘るゝ宵の明衣哉　桃隣
卯の花にあたらしくなるあたり哉　八桑
卯の華や雨のあがりの沓のはね　楚舟
卯の花にばつとまばゆき寝起哉　杉風
卯の花にもてなされたる坊主哉　仝
卯の華のうるみは露の朝日哉　仝

牡丹

ぼたん見にうつすりとよき唐茶哉　桃隣
僧正の牡丹動かぬ朝日かな　子珊

蕣つ艳つぼたんの蕾ひらく迄　瀟波

杜若

うめのこ埋残せさら地の池のかきつばた　八桑
降ほどを花に見せけりかきつばた　子珊
かはせみ翡翠のまぎれて住かかきつばた　桃隣
おもだか澤瀉は取残されしかきつばた　杉風

卯月朔日興行

花の跡今朝はよほどの茂哉　子珊
散残る躑躅の蘂や二三本　仝
足木にこぼれて知や椎の花　李里
イキレ一炎蝶もうろつく青葉かな　楚舟

端午

五日迄水すみかねるあやめ哉　桃隣
えび落水や菖にすがる手長鰕　白之
葺茂る菖蒲の露や蝸牛　李里
片折のあやめは雨に直りけり　子珊

水鶏

鳥見ては聲の似合ぬ水鶏哉　楚舟

子珊亭

あまがへる若竹に聲や響かす蛙䵷　桃隣

晝顔やともに苅るゝ麥ばたけ　仝
藻の花のとぎれ／＼や泡の上　仝
鵜縄引水や淡たつ一通り　子珊
紫蘇蓼の中に紛れぬ華菖　八桑
土手芝や岸よりつゞく菱の花　仝

五月雨

さみだれに蛙のおよぐ戸口かな　杉風
五月雨や互にとはぬ壁隣　楚舟
さみだれの色や淀川大和川　桃隣
張弓の膠くつろぐや五月雨　岸露
もゝだち五月雨や股立とりし馬の上　盧程
爐路下駄の浮てあるくや五月雨　呂國

笋　道中より聞ゆ

鶯や竹の子藪に老を鳴　芭蕉

橘　前におなじ

駿河路や華橘も茶の匂ひ　芭蕉
橘や下に落たる鳥の糞　桃隣
立花やさすがに社家の名ぞ久し　子珊
橘や定家机の有ところ　杉風

蚊遣

人や住蚊遣ふすぼるひしげ屋根　李里
蚊遣火に干ス唐網のけぶる哉　太大

深川にて

菴の留守藪蚊に覺る晝寢哉　楚舟

白雨

ゆふ立やばらつく中に梟の聲　只國
夕立の跡見て廻る山田かな　子祐
ゆふだちや腰迄ぬるゝ寺の門　亀水
白雨に見よ桐の葉の莖强し　楚舟

瞿麥

撫子の株はしつこし草の中　子祐
撫子やちいさき花のけだかさよ　白之

風前螢

すつと來て袖に入たる螢哉　杉風

雨後螢

ひつかりと雨の雫を行螢　仝
遣水の拍子に落す螢哉　亀水
夜鰹にほたるの見度斗也　子珊

立よりて覗けば井戸に螢哉　盧程

蓮

はす折に帶とかするや草履取　仝

百合

くわん〳〵と照日に白し百合の露　子珊

朝凉なを目の覺ルゆりの花　盧程

蟬

聲ばかりぬけていのふぞ木ゝの蟬　八桑

蟬の音やおさへて通る山颪　杉風

夕顏

ゆふがほやあたりをみれば灰俵　仝

夕顏や蛇の輪を組蔓の下　子祐

ゆふがほに立よる脊戸や道じるき　呂國

夏月

耄（タワレ）たる酒も醒けり夏の月　桃隣

凌茶菴夏

月の頃は寐に行夏の川邊哉　杉風

凉風や月よりおくる黒格子　子珊

山家凉

這ふ子迄皆裸なる木陰哉　太大

畔大豆（くろまめ）もともに潤ふ青田哉　楚舟

間を替て裾廻し立あつさ哉　子珊

行馬の跡さへ暑きほこり哉　杉風

水無月や木末斗の風ゆるき　仝

東雲（しのゝめ）に牛や凉鋪（しき）吉野川　李里

蝙蝠に顏かゝれなよ橋の上　桃隣

餞別

五月雨や草鞋の緒迄わらび繩　濁子

落着の古郷やてうど麥時分　杉風

組笠に漏る日を包め夏木立　子珊

行ク水の跡や片寄菱の花　桃隣

夏山の右に見てゆけ我在所　八桑

寒きほど案じぬ夏の別れ哉　野坡

野はづれや扇かざして立どまる　利牛

一頻（ひとしきり）日は蔭（かけれ）かし夏の坂　岱水

五月雨も一月延ビよ閏月　夕菊

新茶ぞと笈の懸子（かけご）に一袋　濱波

送らばや一つ蚊屋にて一泊り　利合

片皿に竹の子續く日和哉　太大

青空に何の氣もなき五月哉　龜水

卯の花に腰押のぼす峠哉　子祐

駕籠に付ク哺の末やかんこ鳥　桃川

一休み樗の花や晝の辻　杏村

見送も夏は日陰や一里塚　李下

幸や桑名をのらで美濃眞桑（まくは）　李里

鳴蟬に汗の入べし箱根山　風弦

名殘かな樅（もみ）の茂りの肱曲り　楚舟

箱根迄送りて

ふつと出て關より歸る五月雨　曾良

深川の邊に淨求といへる道心有。愚智文盲にして、正直一扁の者也。常に翁につかへて、ちいさき草の戸を得たり。朝夕芭蕉庵の茶を煮ル事妙也。門人餞別の句を綴を聞居て、愚も一句せんと云て、指折文字を算て、斯と言。各矢ひあへる事やまず。されば共愚成者の心を盡

書てしるし侍る。

はなむけや粽やさらば柏餅　浮　求

贈二芭叟一餞別辭

素龍齋全故

風曉夢を破て、遊士關を越んと、ひしげたる笠、なゝめなるわら鞋にて、立出る旅の衣をひかえて、とみに物もいはず、さくりもよゝと、まなこ乾て、はなをすゝるは吾心の弱さのみならんや。其上を舌どにいゝつゞけ侍らん。まづはおとゝしの冬、すみだ川を尋しより、水鳥の跡さきに伴ひ、風雅のみぎりひだりに誘れて、孤館の幽情をのべ、亦まめなる所も、花薄ほに出がたき事迄、立寄木陰のおなじ雫になど、かずまへられ侍を、哀いはぬにまさる詞もがな。次には雨の芭蕉見にまかりし時、蓑なし、笠もなし、下駄なし、杖もなしと、こは作れば、内よりそれに雨降さつき哉と、聞ゆる菴主也けり。二なくいひかはし、かたみに物あらがひて、又うちうなづき、すみ、にごり、ひとしきは、同じ流を汲ば成るべし。君子のまことに窮すと宣ひし道、あるは佛のさとりなどはさる物にて、侘鋪を面白がるは、やさしき道に入たるかひなりけらしと、あるじの打ほころびていへるぞ、たのもしき取所なる　かくてしの簾まき上れば、野路の夕暮綠也。やゝ空は墨にくろみ行ほど、折懸垣藪の葉かげより、斑なる蚊の聲はせぬ物から、股のあたりさせり。利觜のたへがたきに、いざたまへ。夜遊に螢うたんと連立て、露分衣しめやかに、すなはち身も涼しくて其夜もやどりぬ。夜半鐘聲まぢかく、蚊やと帋のとばりにさうじを隔て、窓間に臥り。日たけて起侍るに、かゆは煮すぐしたれば、杉のはしかた〳〵づゝにてすゝりぬ。今年倘、後のさつきを郭公知ておこたる夜頃にや。初音聞侍ずとかこちて、此ころの愚詠を

村雨やかゝる蓬のまろねにも
たへて待るゝほとゝぎすかな

と吟じつれば、折のよきにや、めでくつがへりて。ぬしも今宵句をさぐり得たりと、

木隱て茶摘も聞や郭公

これなん佳境に遊びて、奇正の間をあゆめる作とはしられけり。予も

青雲や舟ながしやるほとゝぎす

からも有べきやなど、誹諧にくらす日もありけり。また、

卯の花やくらき柳の及ごし

の佳句は、柳暗花明なりといへる碧巖に似かよひ侍るを、夏の小雨をいそぐ澤蟹と、卒爾に脇をさへづる折も有つゝ、い

つか十日も泊り侍りけるも、今から旅と〳〵に袖をはなれ、遠岸蒼々たる川のほとりに獨たてり。雲なるや、いしなるや、いひしらず。さぞな驛馬の夜山を過ん、其寢覺に思ひをこせよ。いとゞ戀しき都に、羨しき鈴の音、遠ざかりなば何心地かせん。たゞ泪むねに沸て、肝を煎たるゆへに、猶ことみじかなり。よろしうくみ知たまはん事をねがふのみ。

　思ふぞよいくせのたびにゆく人の
　　とまるも袖はおなじ雫に

不二を思ひやりて　萬葉をさがす

世の海のこほりや落る夏の月

元祿七の年仲夏初の八日

寶曆二壬申歲九月

東都　書林　鶴本平藏

日記
上

笈日記之序

笈の小文は、先師ばせを庵の生前におもひをける集の名也。是は人〲のふみの端にほつ句あり、文章あるものをあつめて、行脚の形見となすべきよし、かねておもひたち申されし也。しかるにその人はおはせずなりて、この心ざしのむなしからん事をおしむに、はた吾ちからの小文集にたへざらんとすや、たゞに舊遊の地をたづねて、その時のありさまを思ひあはせ、一夜二夜にちぎり捨し所〲も、その面影をうつし出し侍るに、おほむね十ところ十部ばかりも侍らむ。その外、奥羽の風流は、奥の細道にみづからかきて、洛

の去來に殘し侍り、潜淵庵が繼尾集にも
こも〲出し侍るかし。越路の遺草は、あ
りそ海となみ山の二興にとゞめられて、
ちか頃にもてなし侍れば。その間にもら
しぬるもの、わづかに百餘草に過ざらま
し。是に病前死後の兩篇をくはへて、前後
日記ともいひ、笈日記とも申侍る也。誠に
おしむべし。此叟の風雅にやつれたる事、
五十にして頽年のしら髪をいたゞく。生
涯は風前の一葉にまかせたれば、とゞむ
べき住家もあらず。衣食は明暮をそなえ
ねば、むさぼるべきあたひもなかりけり。
たゞ世の人の是非にたてる事のめさま
しうおぼゆるとて、老後には、恨をふくめ

る人のもとにもひたすら行かよひて、まどかになし給へるは、是をも風雅の上にあらんと、殊さらにたふとかりける。されば世に風雅〳〵といへるものも、其さま身にをはざる時は、終にあらそひの媒となりなむ。いとむづかし。その問にあそべるものゝ、その膚たゆまずといへる、世にはいくばくも侍らじを、此叟ひとり風雅の上にわすれぬるかな。

元祿乙亥の秋七月十五日

支考自序

笈日記　上巻

伊賀部

貞享五年の春、何月幾日芭蕉老人よし野山の花見むとて、伊賀の國より旅立申されしに、尾の杜國も是に供せられて、ともに笠をとつて檜の木笠の裏に狂ぜしと也。

乾坤　無住

芳野にてさくら見せうぞ檜の木笠　風羅坊

よしのにておれも見せうぞひの木がさ　万菊丸

おなじ年の春にや侍らむ、故主君蟬吟公の庭前にて、

さまざまの事おもひ出す櫻かな　芭蕉

そのとし阿波といふ所の大佛に詣して、

丈六のかげろふ高し石の上　仝

紀行

さやの舟まはりしに、有明の月入はてゝ、みのぢあふみ路の山々雪降かゝりていとおかしきに、おそろしく髭生たるものゝふの下部などいふものゝ、やゝもすれば舟人をねめいかるぞ、興うしなふ心地せらる。桑名より處々馬に乘て、杖つき坂引のぼすとて、荷鞍うちかへりて馬より落ぬ。ものゝ便(びん)なきひとり旅さへあるを、まさなの乘〔人〕てやと、馬子にはしかられながら、

かちならば杖つき坂を落馬哉

といひけれども季の言葉なし。雜(ざふ)の句といはんもあしからじ。　はせを

そのゝちいがの人々に此句の脇して見るべきよし申されしを、

角のとがらぬ牛もあるもの　土芳

去年元祿七年、後のさみだれに、武江より舊里にわたりて、洛の桃花坊にあそび、湖の木そ塚に納涼して、文月のはじめふたゝび伊賀に歸て、したしき人々の魂など祭りて、九月の始又難波津の方に旅だつ。この秋此別ありとしらば、たのむべく、なすべき事もおほかるべきに。

七月十五日

家はみな杖にしら髮の墓まいり　翁

八月十五日

今宵誰よし野の月も十六里

名月の佳章は三句侍りけるに、外の二章は評をくはへて後猿蓑に入集す。爰には記し侍らず。

今宵の前後にや有けむ、猿雖亭にあそぶとて、

あれあれて末は海行野分哉　猿雖

鶴の頭をあぐる粟の穗　翁

九月二日

支考はいせの國より斗從をいざなひて、伊賀の山中におもむく。是は難波津の抖擻の後、かならず伊勢にもむかへむと也。三日の夜かしこにいたる。草庵のもうけも、いとゞこゝろさびて、

蕎麥はまだ花でもてなす山路哉　翁

松茸やしらぬ木の葉のへばり付　仝

この松茸をその夜の卷頭に乞うけて、一歌仙侍り。爰に記さず。次の夜なにがしが亭に會して、

松茸や宮古にちかき山の形(なり)　惟然

松風に新酒を澄す山路かな　支考

此句は山路を夜寒にすべきよしにて、その會みちて歸るとて、集などに出すべくば、もとの山路しかるべしといへり。いかなるさかひにか申されけむ。

行秋や手をひろげたる栗のいが　翁

九月八日

難波津の旅行、この日にさだまる事は、奈良の舊都の重陽をかけんとなり。人々のおくりむかへいとむづかしとて、朝霧をこめて旅立出るに、阿叟のこのかみもおくりみ給ひて、かねて引わかれたる身の、此後はあはじ／＼とこそあきらめつるに、たがひにおとろへ行程は、鳥もあさましうおぼゆるとて、供せられつるもの共に、介抱の事などかへす／＼たのみて、背影(うしろかげ)の見ゆるかぎりはゐ給ひぬ。その日はかならず奈良までといそぎて、笠置より河舟にのりて鐘司(テス)といふ所を過るに、山の麓すへて蜜柑の畑なり。されば先の夜ならん。

山はみな蜜柑の色の黄になりて　翁

と承し句は、まさしく此所にこそいへと申ければ、あはれ吾儕も見せけるよとて、阿叟も見つゝわらい申されし。是は老杜が詩に、青は峯巒の過たるをおしみ、黄は橘柚の來るを見る、といへる和漢の風情さらに殊ならねば、かさぎの峯は誠におしむべき秋の名殘なり。船をあがりて、一二里がほどに日をくらして、さる澤のほとりに宿をさだむるに、はい入て宵のほどをまどろむ。されば曲翠子の大和路の行にいざなふべきよし、しゐて申されしが、かゝる衰老のむづかしさを、途にてしり給はぬゆへなるべしと、みづからも口おしきやうに申されしが、まして今年は殊の外によはりたまへり。その夜はすぐれて月もあきらかに、鹿も聲々にみだれてあはれなれば、月の三更なる頃、かの池のほとりに吟行す。

ひいと啼尻聲かなし夜の鹿　翁

鹿の音の糸引はえて月夜哉　支考

九月九日

菊の香やならには古き佛達　翁

霜をかぬ三笠のかげや神の菊　支考

錢百のちかひが出來たならの菊　惟然

幾年斗先(ばかりさき)にや侍らん、この宮古の西大寺に詣して、

青葉して御目の雫拭ばや　翁

中頃元祿己の冬

大佛策興をよろこびて

初雪やいつ大佛の柱立　仝

四季

春

山櫻世はむづかしき接穂かな　猿雖

庭掃も慰になるさくらかな　尾頭

ほれられて顔の出されぬ花見哉　万乎

花といへ最ひとついへやちいさい子　羅香

啼鳥花の雪吹や尾も頭　射江

頓て〳〵す（酸）らもあか（赤）らむ梅の花　荻子

戸を明るあたりやくはつとむめの花　望翠

さびしさに雪打おとす柳哉　楓聲

蛇つりの笠きてあがる柳かな　長年

鶯に底のぬけたるこゝろ哉　土芳

顔見せよ鶯くゞる垣の隙　卓袋

奴の居ぬほど手づから
鍋の下を焼て

白魚やたまか細工にみその汁　荻子

白うをの舛たゝかする斗かな　氷固

春雨や格子より出す童の手　車來

麻蒔や俵の口とく宇和島　示蜂

壬生念佛茶屋の夜溜は宴也　陽和

一花おりに
かゝりければ

山吹に頭あげたり柿頭巾　配力

山ぶきや日をかゝえ出る鶯籠の内　吹衣

松の葉を振ふて見たるつゝじ哉　苔蘇

夏

ほとゝぎす田舎様なる曇哉　一嗣

摺付て啼や二階のほとゝぎす　蕗雨

しら髪の必竟はあふひかな　万乎

老僧の眞向に見るや紅牡丹　陽和

頭そる袖うそくらきぼたんかな　猿雖

雪芝亭

涼しさや直に野松の枝の形　翁

若竹に涼しき聲や七ツ鍋　車來

蚊屋を出てもう一度涼む戸口哉　土芳

秋

渡るほど田の水鳴や宵月夜　土芳

隣より破風の影來る月夜哉　仙杖

旅行

月出ると寐耳に入し名所哉　風睡

日あたりに直る晩稲のいなご哉　猿雖

片蛆の秋のやつれや茄子畑　仝

垣越や竿にて貰ふ菊の花　我峯

冬

小坊主も旅人なれや枯薄　配力

おそろしうなりて入日や枯尾花　魚日

木枯やさかなをさがす梨の核　氷固

手間いれて寄る木の葉や藪の中　雪芝

足皮ぬぐや机の間の手習子　望翠

物かくに少はたかき火燵かな　猿雖

老の頭巾初雪迄に仕立たり　仙杖

乞食さへ雪に出立やみのと笠　丸節

草庵をとぶらへる
人に對して

君火たけよき物みせむ雪丸け　翁

庭寒し二度めは雪のてか〳〵と　卓袋

歌仙

筝の力づき行しはりかな　猿雖
きらりとあがる夜の夕立　支考
肰箱に大キな者が二人出て　土芳
町はばた〳〵煤掃の音　万乎
門しめてはいれば寒き松の月　卓袋
喰ひさがしたる膳のかさなる　雖
姉が來て髪の埒明おとゝ共　考
屛風に醫者の出たり入たり　芳
むら〳〵ととまり雀の啼崩れ　乎
むかひの畑に押渡す水　袋
隙さらに寺のお坊ののらつきて　雖
皿一束の直をきばる也　考
道明て籾ほす門の秋日和　芳
下向の衆も八朔の頃　乎
草臥て晝は寐たがる相撲取　袋
月夜〳〵の番場醒井　雖
しらせずにつとめて見たる花の奥　考
春の小鳥のみなに成けり　芳
商人の荷にやとはれて日ぞ永き　乎
祝事やら餅のちらばふ　袋
江戸の留守くどり斗を明て置　雖
犬の取たる猫の侘言　考
とろ〳〵と寐入かゝりの面白さ　芳
見ずに幾つも傾城の文　乎
身代を葛籠ひとつに仕舞込　袋
盆のあまりをひやす素麺　雖
宵の間は樫にかゝりて月くらく　考
だまつて來ては喰ふ秋の蚊　芳
焼付てまづ茶をわかす生いろり　乎
塩出すやうな見世のつき也　袋
高薮の総あちらには御門跡　雖
喧嘩のさたをとり〳〵にする　考
ずか〳〵と道のはか行ひとり旅　芳
節供の宵の宿の結構　乎
咲立て花は西にも東にも　袋
一里四方の湖のどか也　執筆

右一集はことし元祿乙亥の夏四月廿九日猿雖亭におゐて記焉。

連衆廿五人

難波部　前後日記

去年元祿の秋九月九日、奈良より難波津にわたる。生玉の邊より日を暮して、

菊に出て奈良と難波は宵月夜　翁

今宵は十三夜の月をかけて、すみよしの市に詣けるに、晝のほどより雨ふりて、吟行しづかならず。殊に暮〳〵は惡寒になやみ申されしが、その日もわづらはしとて、かいくれ歸りける也。

次の夜はいと心地よしとて、畦止亭に行て、前夜の月の名殘をつぐなふ。住吉の市に立てといへる前書ありて、

升買て分別かはる月見かな　翁

十六日の夜、去來、正秀が文をひらくに、奈良の鹿殊の外に感じて、その奥に人〳〵の句あり。

北嵯峨や町を打越す鹿の聲　丈草

露草や朝日にひかる鹿の角　野明

猿の後聞出しけりしかの聲　荒雀

棹鹿の爪に紅さすもみぢかな　爲有

振わけて尾花に見せよ鹿の角　風國

啼鹿を椎の木間に見付たり　去來

南大門たてこまれてや鹿の聲　正秀

冬の鹿

鹿の影とがつて寒き月夜哉　洒堂

きよつとして霰に立や鹿の角　支考

川越て身ぶるひすごし雪の鹿　臥高

其柳亭

秋もはやはらつく雨に月の形　翁

此句の先へ昨日（きのふ）からちよつ〳〵と秋も時雨かな　といふ句なりけるに、いかにおもはれけむ、月の形にはなしかえ申されし。廿一日二日の夜は雨もそぼ降りて靜なれば、

秋の夜を打崩したる咄かな

此句は寂寞枯槁の場を、ふみやぶりたる老後の活計、なにものかおよびは半（はん）とおの〳〵感じ申あひぬ。

車庸亭

面白き秋の朝寐や亭主ぶり　翁

廿六日は清水の茶店に遊吟して、泥足が集の俳諧あり。連衆十二人。

人聲や此道かへる秋のくれ

此道や行人なしに秋の暮

此二句の間いづれをかと申されしに、この道や行ひとなしにと獨歩したる所、誰かその後にしたがひ半とて、そこに所思といふ題をつけて、半歌仙侍り。爰にしるさず。

松風や軒をめぐつて秋暮ぬ

是はあるじの男の深くのぞみけるより、かきてとゞめ申されし。

旅懐

此秋は何で年よる雲に鳥

此句はその朝より心に籠てねんじ申されしに、下の五文字、寸々の腸をさかれける也。是はやむ事なき世に、何をして身のいたづらに老ぬらんと、切におもひわびられけるが、されば此秋はいかなる事の心にかなはざるにかあらん。伊賀を出て後は、明暮になやみ申されしが、京大津の間をへて、伊勢の方におもむくべきか、それも人〳〵のふさがりてとゞめなば、わりなき心も出きぬや。とかくしてちからつきなば、ひたぶるの長谷（はせ）越すべきよし、しのびたる時はふ

くゆられしに、たゞ羽をのみかいつくろひて、立日もなくなり給へるくやしさ、いとゞいはむ方なし。

白菊の目にたてゝ見る塵もなし　翁

是は園女が風雅の美をいへる一章なるべし。此日の一會を生前の名殘とおもへば、その時の面影も見るやうにおもはるゝ也。

經上亭

今宵は九月廿八日の夜なれば、秋の名殘をおしむとて、七種の戀を結題にして、おの〳〵ほつ句あり。是は泥足が其便集に出し侍れば、爰にしるさず。

明日の夜は、芝栢が方にまねきおもふよしにてほつ句つかはし申されし。

秋深き隣は何をする人ぞ　翁

廿九日

此夜より泄痢のいたはりありて、神無月一日の朝にいたる。しかるを此叟は、よのつね腹の心地悪しかりければ、是もそのまゝにてやみなんと思ひいけるに、二日三日の頃よりやゝつのりて、終に此悲とはなしける也。されば病中の間は、晋子が終焉記にくはしければ、但よのつねの上、わづかにかきもらしぬる事を、支考が見聞には記し侍る。

十月五日

此朝南の御堂の前しづかなる方に病床をうつして、膳所大津の間伊勢尾張のしたしき人〳〵に、文したゝめつかはす。その暮支考をめして、殊の外に心の安否(堵カ)したるよし申されしを、さばかりの知識達も生死は天命とこそおぼしゆへ、たゞ心のやすからんはありがたう侍ると申して、介抱のものも心とけぬ。

六　日

きのふの暮より、なにがしが葉にいとこゝちよしとて、みづから起かへりて白髮のけしきなど見せ申されしに、影もなく、おとろへはて、枯木の寒岩にそへるやうにおぼえて、今もまぼろしには思はるれ。

此朝湖南の正秀、夜船より來る。道に枕のほとりにめされて、何ともいふ事はなくて、泪をおとし給へりけるが、いかなる心かおはしけむ、しらず。その程も過ざるに、洛の去來きたる。その暮つかた、乙州木節丈艸おの〳〵來りつどふ。平田の李由きたる。

洛の去來はしばらくも病家をはなれず。いかなるゆへにかと申に、此夏阿叟の我方にいまして、誰れ〳〵の人は吾を親のごとくし侍るに、吾老て子の

ごとくする事侍らずと、仰せられしを、いさしらず、去來は世務にひかれてさるべき孝道もなきに、かゝる事承る事の肝に銘じおぼえければ、せめて此度ははなれじとこそおもひゆへと申されし也。

八日

之道、すみよしの四所に詣して此度の延年をいのる。所願の句あり。しるさず。此夜深更におよびて介抱に侍りける呑舟をめされて、硯の音のから／＼と聞えければ、いかなる消息にやとおもふに、

　病中吟

　旅に病で夢は枯野をかけ廻る　翁

その後支考をめして、なをかけ廻る夢心　といふ句づくりあり。いづれをかと申されしに、その五文字はいかに承りゆ牛と申は、いとむづかしき事に侍らんと思ひて、此句なにゝかおとりゆ牛と荅へける也。いかなる不思議の五文字か侍らん、今はほいなし。みづから申されけるは、はた生死の轉變を前にをきながら、ほつ句すべきわざにもあらねど、よのつね此道を心に籠て、年もやゝ半百に過たれば、いねては朝雲暮烟の間をかけり、さめては山水野鳥の聲におどろく。是を佛の妄執といましめ給へる、たゞちは今の身の上におぼえ侍る也。此後はたゞ生前の俳諧をわすれむとのみおもふはと、かへす／＼くやみ申されし也。さばかりの叟の辭世は、などなかりけると思ふ人も世にあるべし。

九日

服用の後、支考にむきて、此事は去來にもかたりをきけるが、此度嵯峨にてし侍る、大井川のほつ句おぼえ侍る歟と申されしを、あと荅へて、

　大井川浪に塵なし夏の月

と吟じ申ければ、その句園女が白菊の塵にまぎらはし。是もなき跡の妄執とおもへば、なしかへ侍るとて、

　清瀧や波にちり込青松葉　翁

十日

此暮より身ほとをりてつねにあらず。人／＼殊の外におどろく。夜に入て去來をめして良談す。その後支考をめして、遺書三通をしたゝめしむ。外に一通はみづからかきて伊賀の兄の名殘におくらる。その後は正秀あづかりて、木曽塚の舊草にかへる。

是より後、十六日の夜曲翠亭に會して、おの／＼ひらき見るに、伊賀への文はたゞ何事もなくて、先だち給へる事のあさましうおぼゆるよし、かへす／＼申殘されしなり。

外の三通には、思ひをける形見の品〲、おほくは反故文章等の有所、なつかしき人〲への永き別をおしめるなりけり。

一　新式　埋木　二傳

一　古今ノ序註　百人一首　兩部

一　三日月日記　奥の細道

一　披風　銅鉢

その外ばせを庵に安置申されし出山の尊像は、支考が方につたへ侍る。是は行脚の形見なるべし。

夜ふけ人いねて後、誰かれの人〲枕の左右に侍りて、此後の風雅はいかになり行侍らんとたづねけるに、されば此道の吾に出て後三十餘年にして百變百化す。しかれどもそのさかひ眞草行の三をはなれず。その三が中にいまだ一二をもつくさゞるよし、唇を打うるほし〲やゝ談じ申されければ、やすからぬ道の神なりと思はれて、袖をぬらす人殊におぼし。

十一日

此暮相(くれあひ)に晋子、幸に來りて今夜の伽にくはゝりけるも、いとちぎり深き事なるべし。その夜も明るほどに木節をさとして申されけるは、吾生死も明暮にせまりぬとおぼゆれば、もとより水宿雲棲の身の、この藥かの藥とてあさましう、あがきはつべきにもあらず。たゞねがはくは、老子が藥にて最期までの唇をぬらしゆ半と、ふかくたのみをきて、此後は左右の人をしりぞけて、不淨を浴し、香を燒て後安臥してものいはず。

十二日

されば此叟のやみつき申されしより飲食は明暮をたがへ給はぬに、きのふ十一日の朝より今宵をかけてかきたえぬれば、名殘も此日かぎりならんと、人〲は次の間にいなみて(居並)、なにとわきまへたる事も侍らず也。午の時ばかりに、目のさめたるやうに見渡し給へるを、心得て粥の事すゝめければ、たすけおこされて、唇をぬらし給へり。その日は小春の空の立歸りてあたゝかなれば、障子に蠅のあつまりいける(居)をにくみて、鳥もちを竹にぬりてかりありくに、上手と下手のあるを見て、おかしがり申されしが、その後はたゞ何事もいはずなりて、臨終申されけるに、誰も〲茫然として終(つひ)の別とは今だに思はぬ也。此夜河舟にてしつらひのぼる。明れば十三日の朝、伏見より木曾塚の舊草に入れ奉りて、茶菓のまうけ、います時にかはらず。埋葬は十四日の夜なりけるが、門葉燒香の外に、・・餘哀の者も三百人も侍るべし。

十八日

所願忌

湖南江北の門人おの／＼義仲寺に會して、無縫塔を造立す。面には芭蕉翁の三字をしるし、背には年月日時なり。塚の東隅に芭蕉一本を植て、世の人に冬夏の盛衰をしめすとなり。此日百韵あり。略之。

なきがらを笠にかくすや枯尾花　其角
溫石さめてみな氷る聲　支考
行燈の外よりしらむ海山に　丈草

乃至

霜月三十日　此時は伊勢の國にありて、我草の庵にこの日の供養をまうけ侍る。

大練忌

葉落て山つきぬれば、曉の雲の歸るべきたよりもなく、日暮て道遠ければ夜の鶴のうらむべき方もなし。されば此叟の宿世(すくせ)いくばく人にかちぎりをきける。生前の九十日はしらぬ事のくやしさをかなしみ、死後の四十九日はかへらぬ事のかなしさをくやむ。すべての明暮は誰がためにかかなしみ、誰がためにかくやめるならむ。　支考

節(ぶし)／＼のおもひや竹に積るゆき

右は去年の冬季歸鳥庵におゐて記焉。

京都　附嵯峨

去年の夏なるべし
去來別墅にありて

朝露によごれて涼し瓜の泥　翁

人／＼つどひゐて、瓜の名所なむ、あまたいひ出たる中に、

瓜の皮むいたところや蓮臺野　仝

文通

その頃支考は下の京に侍りて、文つかはしける返事に、

され(脫字あらん)與風(ふと)此間存知出したる、二種被レ懸ニ御芳情一旅店の一德珍重。去歲、武府脚半わすれ候。不レ淺賞翫申候。今日去來きせるの脚半の方ニ而、季を掃除、去來一世の初たる故、きせるの定可申候也。掃除、壬(閏の略字)五月と季を定申候。折節ニ貴僧初音信、是亦壬五月の季を定候間、向後左樣ニ御覺可レ被レ成候。晚方御入來所レ仰候。　はせを

廿三日

かゝる夢うつゝもかへらずなりて、へさみだれも後の五月の小文哉　とおもひやるばかりはかなし。

賛

雲竹自畫像

こちらむけ我もさびしき秋の暮　翁

是は湖南の幻住庵におはす時の作也。君は六十、我は五十といへる老星一聚の前書侍りけるがあやまりておぼえ侍らず。

茄子齋

見せばやな茄子をちぎる軒の畑　惟然

その葉をかさねおらむ夕顔　翁

是は惟然、みのに有し時の事なるべし。

嵯峨　五句

ほとゝぎす大竹原を漏る月夜　翁

落柿舍

五月雨や色紙まくれし壁の跡

野明亭

清瀧の水汲よせてところてん

小倉ノ山院

松杉をほめてや風のかほる音

嵐山

六月や峯に雲置あらし山

清瀧

雜波の部にほつ句あり。爰に出さず。

いづれの時の秋にや、去來千子が伊勢まうでの頃、道の記かきて深川に送りけるに、奥書の褒美ありて、

西東あはれさおなじ秋の風　翁

島部山

玉祭けふも燒場のけぶり哉　仝

是もいづれの秋にか侍らん。人間たゞ一日、朝暮鐘聲をへだつといへる、世の觀相なるべし。

去來文通

囀るもかへりがけなる小鳥かな　浪化

三月十二日大津義仲寺、古翁のつかにまうでゝ、

かげろうや苔につきそふ墓めぐり　仝

二三日蚊屋のにほひや五月闇　仝

菜の花や戸口見つけてまはり道　越中 嵐青

俵物を小だてにとるや冬ごもり　仝

早稻の香に蚊帳の動く夜明哉　同 呂風

呼にやる人もどらずおぼろ月　かゞ 北枝

蝸牛目やさますらん秋の風　仝

打綿の篩背負ふたるさむさかな　か 句空

此夏賀茂祭りにまうでゝ

剃さげのあふひをはさむ烏帽子哉　長崎 魯町

風口に來てはねころぶ凉みかな　同 卯七

ひとり寐はどちらむきても寒かな　同 野青

此冬の寒さもしらで秋の暮　惟然

谷間に橋も見えけり雲の峯　野明

万歲やけふ來て御所の菖葺　野童

素袍はかま着しゝ老人はちがひけ（老字尤とも讀み得）

百八の馬も通るや鉢たゝき　風國

初花をふれてありくや肴うり　仝

ほとゝぎす船は追手に走る也　壺中

落柿舍

放すかと問るゝ家や冬ごもり　去來

名月

岩はなやこゝにもひとり月の客　仝

此夏四國の時、みのにて申侍る。

夏かけて眞瓜も見えずあつさ哉　仝

此句はみのへつかはしけへども

懸ニ御目ニ候。先申捨にて候。

七月八日

歌仙

猫の子の巾着なぶる凉みかな　去來
蒹のかはりにたつる若竹　文考
折角とちか道來ればふみ込て　風國
旦那とおれが蕎麥のあつらへ　來
薄綿の羽織も後の十三夜　考
此秋畑のやまい氣もなし　國
御遷宮松坂までは用もあり　來
一門中(ナカ)に齋(とき)のやくそく　考
どうよくに闇きさ月の廿日過　國
下の村から牛の放るゝ　來
笠着せて先へたてたる乙むすこ　考
見えた通は伯母むこの山　國
雨も片手わざなる狀便宜　來
十六日は盆の草臥　考
食喰(おこし)ふてその儘戻る宵の月　國
時雨も露も北山の庵　來
花の時東寺の塔を橫に見て　考
走穂わたる麥の春風　國
鶯の啼日は旅のおもはるゝ　來
壁うちはなす二枚戸の間　考
あほうめを使にやりて案じゐる　國
から神鳴のいとゞ赤照　來
莖がほの花這ひかゝる砂畠　考
簗瀨の下を渡る淺川　國
鞍ぐるみ浦團しきたる迎ひ馬　來
酒とあぶらの所帶半分　考
よい時に上方筋を見て仕舞　國
今年の雪のどつかりと降　來
月寒くねられぬ宵の放下僧　考
隣の井口はちつと迷惑　國
門に出て聞合せたる肴賣　來
土用の風のきのふけふ吹　考
木曾川のゐせきにかゝる十五村　國
若宮殿に時の鐘つく　考
朝起の花まださむきひらきやう　來
廣い屋敷の柳しだるゝ　國

今年元祿乙亥の夏四月二十五日、桃花坊ニおゐて記焉。

湖南部

元祿三年の秋ならん、木曾塚の舊草にありて、敲戸の人〳〵に對す。

草の戸をしれや穂蓼に唐がらし　翁

稲すゞめ茶の木畠や逃どころ

そのゝちは武の深川に有しが、去年の秋文月の始、ふたゝび舊草に歸りて、

道ほそし相撲とり草の花の露
木つゝきの入まはりけり藪の松　丈草

蕎麦の花まちてやたてる岡の松　支考

此二句も木そ塚の前境なるが、數の松、岡の松とて阿叟もおかしがり申されしに、それも耳底の名殘とおもへば、爰には記し侍る也。

三夜の月

是もむかしの秋なりけるが、今年は月の本すゑを見侍らんとて、待宵は楚江亭にあそび、十五夜は木そ塚にあつまる。いざよひは船を浮て、さゞ浪やかた田にかへるとよめる、その浦の月をなん見侍りける。路通がまつ宵に月をさだむる文あり、支考が名月の泛湖の賦あり。阿叟は十六夜の辨をかきて竹内氏の所にとゞむ。此三夜を月の本末と名づけて、成秀楚江が二亭に侍り。文しげゝれば爰にしるさず。

十四夜

うかるなよ跡に月まつ宵の興　路通

まつ宵はまだいそがしき月見哉　支考

十五夜

來くるゝ友を今宵の月の客　翁

五器たらで夜食の内の月見哉　支考

十六夜　三句

やす／＼と出ていざよふ月の雲　翁

十六夜や海老煎る程の宵の闇

その夜浮見堂に吟行して

鎖あけて月さし入よ浮み堂

おなじ年九月九日、乙州が一樽をたづさへ來りけるに、

草の戸や日暮てくれし菊の酒　翁

蜘手にのする水桶の月　乙州

正秀亭初會興行の時

月しろや膝に手を置宵の宿　翁

秋しらけたるひじり行燈　正秀

去年の夏、又此ほとりに遊吟して、游刀亭にあそぶとて、

納涼　二句

さゞ波や風の薫の相拍子　翁

湖やあつさをおしむ雲のみね

湖水田植

捗／＼と尻ならべたる田植哉　仝

（風國の「泊船集」に「伊丹の句にて翁の句にはあらず」と記せり。）

曲翠亭にあそぶとて、田家といへる題を置て、

飯あふぐかゝが馳走や夕涼　翁

夏の夜や崩て明しひやし物　仝

是に今宵の賦をくはへて、後猿みのに入集す。爰にしるさず。

菜種ほすむしろの端（はし）や夕涼み　曲翠

螢逃行あぢさゐの花　翁

本間氏主馬が亭にまねかれしに、太夫が家名を稱して、吟草二句、

ひら／＼とあぐる扇や雲の峯

蓮の香に目をかよはすや面（めん）の鼻

おなじ津なりける湖仙亭に行て

此宿は水鶏もしらぬ扉（とぼそ）かな　翁

春

片岨や麦にふり込はなの枝　曲翠

山ざくら散るや小河の水車　智月

盥の泡吹て入日のさくら哉　臥高

鶯の手をくだきたる日和かな　游刀

伏見にて

大名の字(アザナ)を嘆のはたけかな　正秀

あさつきのむすびやすさよ雀の巣　吐龍

春雨やぬけ出たまゝの夜着の穴　丈草

鼠色になる迄梅のにほひ哉　(木曽)丹野

白雲を瀧にけおとす雲雀かな　(女)万里

夏

ひだるさよ竹の子風の窓の中　木節

月代に夢見て晝か蟬の聲　正秀

日のあつさきはまる頃や百合の花　探芝

涼しさやうかうか行(ゆけ)ば行(ゆき)どまり　里東

いそがしき中をぬけたる涼み哉　游刀

馬柄杓を岩にわり込清水哉　野徑

くだり坂馬もあふのけほとゝぎす　(木間)安世

つらなりて鵜の巣にすがる螢かな　吐龍

螢火や葉かげに光る瓜の肌　臥高

蝸牛土もつかずに垣ねかな　楚江

白牡丹子は幾たりも持けれど　知月

秋

稲づまや池にこぼるゝ宵のやみ　臥高

稲妻に庵を渡してや消る虹　正秀

頼みたる竹にはなるゝむかご哉　野徑

別墅

いざよひの雲やしくらむ蓼の花　曲翠

名月や森藪をのぞく勝手方　昌房

椀の實に書込められしいなご哉　仝

堂頭の新そばに出る麓かな　丈草

秋さびしいづこをさして無分別　木節

冬

夜あらしや鴨の腹する長等越(ながら)　正秀

それ鷹の餌袋まはるみぞれ哉　仝

一僕のもつものおほき時雨かな　安世

から船の黒津に戻る時雨かな　探芝

初雪のあとに氣の付やなぎ哉　里東

難波

四つ橋の角立けるぞ冬の月　乙州

宵月のしかしかとてるさむさ哉　臥高

奈良の御祭に

雪の日やにぎりつめたる舞扇　丹野

牛の尾にくるふ雀や雪の上　臥高

寒る夜や海に落込む瀧の音　曲翠

一よさに猫も紙子をやけど哉　丈草

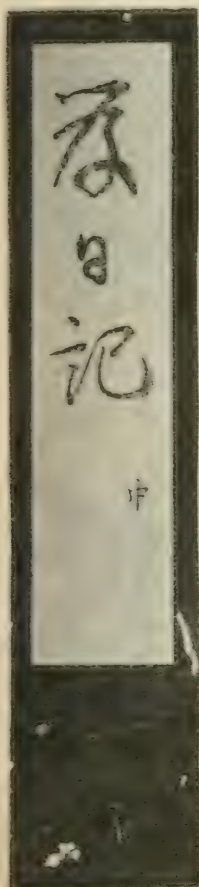
歌仙

へたへたと雲のしろみや郭公　臥高

もみ茶こぼるゝ芝原の上　支考

草臥た脚をちよつ〳〵と折まげて　正秀
秋の節供はあそぶ空なき　高
其儘に雨は晴たる宵の月　考
うまいところを起す肌寒　秀
葺のつゝんだ物をうれしがり　高
本屋崩して普請はたつく　考
隣からもらひに來たる馬の水　秀
祭のはなし見いてくやしき　高
帷子の訴訟を姉に談合する　考
ひつさに待し裏むきの用　秀
ちらりとも動かぬ萩に月の影　高
あつたら秋を連の無風雅　考
濁り酒鼻も醉はずに寒がりて　秀
狀の返事を立かゝりよむ　高
何方も今年の花は十日過　考
茶種の中の雲雀出て啼　秀
在郷から音信したる獨活一把　高
よんだ女房を寄合てとぶ　考
めつそうに白子の濱の年じまひ　秀
扨もふつたる雪の明ぼの　高
手もあやに文箱の深紅かゞやきて　考
ついしか戀のけぶらいもせず　秀
草履をばけふのもうけに破らかし　高
蚊屋のそばにて茶漬喰也　考
商の工夫に落ぬ盆の前　秀
月夜はとかく十五十六　高
椎柴のちいさい庵に門立て　考
どんな男が木を割て居る　秀
とろ〳〵と油のやうな天氣相　高
馬糞の上に蝶の飛ちる　考
千石の高屏越に華を見て　秀
三月鯖を出來されたげな　高
顏つきの猿に似たるは淋しさよ　秀
客にわせても誰もかまはぬ　秀

右一集はことし元祿乙亥の夏、四月十二日木曾塚の舊草におゐて記焉。

連衆十五人

彦根部

元祿五(四の誤)年神な月のはじめつかたたらん、月の澤ときこえ侍る、

明照寺に羇旅の心を澄して

たふとかる涙やそめてちる紅葉　翁

一夜静るはり笠の霜　李由

僧の李由は風雅の心ざし深くして、阿叟の病中にも難波にくだり、そのゝち木曾塚の埋葬の夜をも見はてゝ、ふかく生前の形見をのぞまれしに、渋笠をおくりつかはしける也。此笠は洛の野童子が阿叟の生前に約しをきたるに、その事ならずして此變にあへる事をかなしみ、七日の〔忌〕日に塚の前にそなへける笠也。まことにもろこしの季札が、つるぎをかけたるたぐへ(ひ)のみならんや。かの一夜とちぎり捨しはり笠の霜も、幾年の記念にか、とりつたふべき也。されば埋葬の夜にて侍らん、李由申されしは、此叟のめでたくおはすならば、伊勢の行脚の後は、かならず吾が月の澤にもとちぎりをきし事の、雨となり雲となりて、万里の幽冥にへだゝり行給へる事の、いかなる不幸にか侍らんとて、袂もぬるゝ斗きこへ侍るに、いざや君にさきだちて、いせへとちぎりをきしものは、いかになし侍らんとてともに泣ける也。

そのころ、そのほとりの田家に宿して、

稲こきの姥もめでたし菊の花　翁

是もおなじ時に供せられて

打過て又秋もよし梅紅葉　桃隣

次の年ならん、神な月三日の夜許六亭にて歌仙あり。愛にしるさず。

けふばかり人も年よれ初しぐれ　翁

浄川の草庵をとぶらひて

寒菊の隣もありやいけ大根　許六

冬さし籠る北窻の煤　翁

月もなき宵から馬をつれて來て　嵐蘭

是は嵐蘭が身まかりしあとのなつかしさに、此三句を出し侍る。

春風や麥の中行水の音　木導

かげろふいさむ花の糸口　翁

春

正月も四日五日や茶椀賣　馬佛

春雨に大工づかひや北の院　汶村

藤かざす人や大津の繪の姿　許六

行春にきのふもけふも茶漬哉　李由

夏

石竹や紙燭して見る露の玉　許六

田仕事の中にも清き早苗哉　李由

傾城のかはゆがりけり團賣　木導

煎たつる醬油麥や蟬の聲　朱廸

秋

秋風に吹かれがほ也市女笠　汶村

山伏の貝すさまじや生身魂　朱廸

峯入の笠もとらるゝ野分哉　許六

さし櫛の蒔繪うつくし相撲取　木導

冬

夕露の何となりたる今朝の霜　老人 如元

木がらしや宿にとりつく暖まり　汶村

留別

深川の草庵をいづるとて

木枯やあとにひかゆるふじの山　許六

田ノ上や名字もつたる網代守　朱䰗

しみ〲と餅腹さむきいのこかな　徐寅

蠟燭に鷹の眼の光かな　木導

歌仙

卯の花に祈り過たる曇り哉　支考
雉子啼あとの豆のむら生　許六
溝川に晝食くひの鍬つけて　李由
茶賣の影をむすめ出て見る　汶村
余所よりは夜明のはやき山の月　木導
牛ふみ分るくま笹の露　考
初秋やみのぢに入れば米の味　六
野郎まはしの宿のつれ〴〵　由
浪人の女房衆をこゝろがけ　村
さい〴〵涼む藪の片側　導
湯をわかす釜のあたりを掃くべて　考
在所のものゝ呼出しに來る　六
五十日寐て居たうちの小借錢　由
雀しらずの色む粗畑　村
引つれて馬衣も寒き山颪　導
道者わかるゝ闕川の月　考
二三軒家の後(うしろ)の花盛　六
大キな蟻のあたゝかに出る　由
閉帳を延して見たる日の永き　村
なんにもかゝぬ屛風一双　導
月雪に飛彈の金森家ふりて　考
住持に化た狸煎(に)て喰ふ　六
雁人の半分閉てはや合點　由
ちぎつて捨る褓の瓔珞(やうらく)　村
吹まくる雪隱薦(こも)をつかまへて　導
こちの蘆毛ももう戻ルころ　考
泣やうな日和もようはこたへたり　六
千石岩の松の靜さ　由
うろ〴〵と扶持に離し鷹の影　村
上をふさいで普請落つく　導
うそついて晝からあがる手習子　考
祖父をのぞけば目を明て居る　六
もらふたるあかの強飯(こはひ)のやんはりと　由
用にもたゝぬ口たゝく也　村
幾筋も道の付たる花のかげ　導
とつとの空に雲雀まばゆき　筆

元祿乙亥の今年四月二十日五老井におゐて記焉。

連衆九人

大垣部

貞享元年の冬、如行が舊第に旅寐せし時、

霜寒き旅寐に蚊屋を着せ申　如行
古人かやうの夜の木がらし　翁

此時世をいかにおもひ捨給へるならん、へ薄を霜の髭四十一と申され侍しも、此所にてあなるよし。すでに初老にてはありけるかし。

千川亭

折〴〵に伊吹を見てや冬籠　翁

斜嶺亭

戸をひらけば、にしに山あり。伊吹といふ。花にもよらず、雪にもよらず、只これ孤山の德あり。

其まゝに月もたのまじいぶき山

左柳亭

はやくさけ九日もちかし菊の花

畫讃

西行の草鞋もかゝれ松の露

菊　如行亭

痩ながらわりなき菊のつぼみ哉

竹　木因亭

降ずとも竹植る日は蓑と笠

是は五月の節をいへるにや、いと珍し。

木因亭

かくれ家や月と菊とに田三反　翁

おなじ頃、

舟にて送るとて、

秋の暮行先〳〵の苫(とま)屋かな　木因

荻にねようか萩に寐うか　翁

文通

何某新八去年の春みまかりけるを、ちゝ梅丸子もとへ申つかはし侍る。

梅が香に昔の一字あはれ也

武陵芭蕉

一歳の夢のごとくにして、猶佛立さらぬ歎のほど、おもひやりける斗にゆ。

二月十三日

梅丸老人

時鳥聲横ふや水の上　聲や横ふか　一聲の江に横ふやほとゝぎす　水光接レ天白露横レ江の字擴(横字カ)句眼なるべしや。ふたつの作いづれにやと推稿(歟)難レ定所、水沼(間)氏沾德と云もの訪來れるに、かれ物定(ものさため)のはかせとなれと、兩句評を乞。沾曰、横江の句文ニ對ノ考レ之時は、句量尤いみじかるべければ、江の字抜レ之、水の上とくつろげたる句のにほひ、よろしき方に思ひつゞくべきの條申出ゆ。とかくする内に、山口素堂原安適など詩歌のすきもの共入來りて、水上の聲よろしきに定りて事やみぬ。させる事なき句ながら、白露横といふ奇文を味合と御覽可レ被レ下ゆ。

はせを

荊口文

春

玉椿扇にをきてさかりかな　如行

絹ばりに一方(ひとへ)たのまうさくらかな　斜嶺

のんどりと山は日の出るさくらかな　水莫

むつ〳〵とにほふでもなし桃の花　木因

三日月にけしき過たる朧かな　前川

かげろふのきほひかゝるや菜園(さえん)もの　仝

その傍の岩までほしきつゝじ哉　柊角
大夜着の裾きて寐るや春の雨　吳竹

夏

枕蚊屋子共にかりて晝寐哉　斜嶺
蒲團きてあたま斗や蚊屋の内　水魚

蚊屋釣そめて

蚊の聲を隣のやうに聞夜哉　吳竹
わづかなる宵雲ゆかし五月雨　如風
川端やくゞり明れば入ほたる　仝

江のほとり

足高に涼しき蟹のあゆみ哉　木因
家主(イヘラシ)の寐てゐるもよし杜若　如行

四十二賀

二親とすゞむ心の自慢かな　斜嶺

順禮を迎て

肩(脛)摺をぬがば出さん鮎のすし　如川

秋

旅人や通りあはせし不破の月　木因
名月にあからみそめよ櫨楓　文鳥
夕顏の蔓仕舞ばやけふの月　怒風
月や空橋の下行帆かけぶね　吳竹
顏のしゝ落て年よる月見かな　斜嶺
蜻蛉のつゝとぬけたる廊下哉　仝

玉祭

棚經や手まはしばや(早)にはさみ箱　如行
立かはり茶の下燃す夜寒かな　水魚

冬

炭の火の針ほど殘る寒さ哉　文鳥
薬の食は女房の喰ふ寒さかな　如行
初雪や片鬢剃てさしのぞき　仝
朝風やひれ反かへる魚の凍　水魚
水仙のほつれかゝるや朝あらし　斜嶺
高網に鴨もぬからぬ羽音かな　怒風
だゝ廣ふ宇治の茶の木や冬籠　木因

元祿乙亥今年四月十六日、如行亭におゐて記焉。

連衆十二人

岐阜部

畫讃

ところ〳〵見めぐりて、洛に暫く旅ねせしほど、みのゝ國よりたび〳〵消息有て、桑門己百のぬしみちしるべせむとて、とぶらひ來侍りて、

しるべして見せばやみのゝ田植歌　己百
笠あらためむ不破のさみだれ　はせを

其草庵に日頃ありて

やどりせむあかざの杖になる日まで

貞享五年夏日

名にしあへる鵜飼といふものを見侍らむとて、暮かけていざなひ申されしに、人〳〵稲葉山の木かげに席を

まうけ、盃をあげて、

又やたぐひ長良(ナガラ)の川の鮎なます(膾)　翁

夏來てもたゞひとつ葉の一葉哉　仝

鵜舟も通り過る程に歸ると
て

面白てやがてかなしき鵜ぶね哉　仝

落梧亭

蔵のかげかたばみの花めづらしや　荷兮

折てやはかむ庭の箒木　落梧

たなばたの八日は物のさびしくて　翁

その比ならん、落梧(らくご)のぬし
おさなき者を失へる事をい
たみて、

もろき人にたとへむ花も夏野哉　翁

似たかほのあらば出て見ん一おどり　落梧

されば夏野の花をはかなしと見
たる叟、かつみられて、はかな
しとおもふ親の心も、ともにと
ゞまるべからねば、落梧は四と
せ斗先に身まかり、阿叟は去年
の冬世をさり給へり。かくいふ
人も、又はいつか人にいはれん
とおもへば、なにゝさだむべき
世のかぎりぞや。

稲葉山

撞鐘もひゞくやうなり蟬の聲　翁

十八樓ノ記

みのゝ國ながら川に望て水樓あり。あるじを賀嶋氏といふ。いなば山後にたかく、亂山西に重りてちかゝらず遠からず。たなかの寺は杉の一村にかくれ、きしにそふ民家は竹のかこみのみどりも深し。さらし布所〳〵に引はえて、右にわたし舟うかぶ。里人の行かひしげく、漁村軒をならべて網をひき、釣をたるゝをのがさま〳〵も、たゞ此樓をもてなすに似たり。暮がたき夏の日もわするゝ斗、入日の影も月にかはりて、波にむすぼりしかゞり火の影もやゝちかく、高欄のもとに鵜飼するなど、誠にめざましき見もの也けらし。かの瀟湘の八のながめ、西湖の十のさかひも、涼風一味のうちに思ひためたり。若(もし)、此樓に名をいはむとならば、十八樓ともいはまほしや。

此あたり目に見ゆるものは皆涼し　はせを

貞享五仲夏

その年の秋ならん、この國
より旅立て、更科の月みん
とて、

留別　四句

送られつおくりつ果は木曾の秋　翁

草いろ〳〵おの〳〵花の手柄かな

人々郊外に送り出て、三
盃を傾侍るに、

朝がほは酒盛しらぬさかり哉

ひよろ〳〵とこけて露けし女郎花

春

借をとゞむる一興

一よさは盗人なりと花に借　己百
穴熊や日裏の山の遅ざくら　僧一露
草の戸に薺斗は手のものぞ　蓬雨
若草はねぶる斗ぞ牛の舌　己百
虵の髭になを静也春の雨　白蘋
何になる虫やらひとつ春の雨　長良泊楓
水鳥のあとも濁るか朝がすみ　仝
山ひとつ拾ふた風のかすみ哉　低耳
立ながら乗物かきや雛の膳　仝
蜂の巣の親は幾つもあるものか　蓬雨
たつ蝶に随て行こゝろかな　一水

夏

くらけれどきらぬ榎ぞほとゝぎす　泊楓
鴉子のあぶなげもなき生立哉　白蘋
熊蟬に針などあらばたまるまじ　一水
廣き野や蛇のをらずば夕涼　一露
門涼み内には猫の棚さがし　己百
夏草やその長〳〵に風涼し　仝

風の柳うはの空なる涼かな　蓬雨
下さまは初物はやし柏粽　仝

越前
伊呂の濱

蟹の子に髭ぬかせけり五月雨　低耳

秋

朴木の葉ほどは秋の色もなし　一露
桐の木の思ひきつたる一葉かな　泊楓
吹ふかぬ風の目利や早稲の花　己百
朝がほを又見なをせば哀也　低耳
念佛者は秋のさびしき顔もなし　一水
酒の菊どれをちぎらん咲かゝり　白蘋
柴栗も節供なりけり座敷つき　蓬雨

冬

夢うつゝ冬神鳴を夜着の中　白蘋
眞白に月を見透す時雨かな　一水
夜時雨や一言ぬしの出雲立　一露
うれしさや五十になれど雪丸け　己百
はづみたるあんこ（鮟鱇）の腹や薄氷　仝

馬上囘ㇾ頭

石山の鐘も音なき師走哉　蓬雨

瓜畠集

是は落梧のぬし、かねて撰集の事思ひたゝれけるに、その志ならずして、すたれむ事をおしみて、その方の人〳〵此部の末に撰出し侍る。

夏之部

落梧なにがしのまねきに應じて、稲葉山の松の下涼みして、長途の愁をなぐさむほどに、　はせを

山かげや身をやしなはむ瓜畠

若鳥のあやなき音にも郭公　其角
あまつさへくだり坂也ほとゝぎす　蕉笠
竹賓てはづかしの世やほとゝぎす　梅餌

苗の色は早稲も中稲もひとつかな　落梧
さみだれや空まちの田の淺緑　杏雨
五月雨や晩にはすこし晴て見る　一髮

露沾公に申侍る

五月雨に鳰の浮巣を見に行む　翁
髮生て容顏青し五月雨　仝
をもだかも田草の數にとられけり　如行
取出してまた上に着る袷かな　李晨
神鳴のひゞきにちるかけしの花　蕉笠

岐阜山にて

城あとや古井の清水先問む　翁
山清水とかしたなさを命かな　落梧
蚊に聲のあればこそあれ夕涼　令木
笛さして川邊を行や夕涼み　鷗歩

山中泊

蚊のをらぬかはりに落る百足かな　一髮
夏草もまだ生出の男鹿哉　杏雨

晩涼

かゞり火に見れば知たる鵜匠かな　落梧

秋之部

いはふても心ぼそさよ蓮の食　一髮
よめぶりの動き出けり今朝の秋　落梧

加賀の國を過とて

熊坂がゆかりやいつの玉まつり　翁

秋野

名もしらぬ小草花さく野菊哉　素堂
（名）なを聞てまた見直すや草の花　低耳
叩かれて駒のかぎ行花野かな　炊玉
くねるとは萩もいはせよ女郎花　一髮
片かげや茗荷の花のうすよごれ　梅餌
蜻蜓やとりつきかねし草の上　翁
白菊やさすがしらぐくる星月夜　杏雨
人聲やひとり坊主の菊ばたけ　嵐蓑

末のおくれたまへる事はわるき事也、と世繼の翁の物語にいへり。

その柞實はどんぐりと申也　杏雨
薄色に南やあさき天の河　仝

或夜

翁の事を思ひて

稻妻の物にとまらぬすがた哉　落梧
秋の夜やかへりさうなる人の膝　一髮
なた豆に置ほどもなし秋の霜　蕉笠
かきちらす鷄にくし秋の霜　李晨

たのむ事ありて、人のがり（許）文やりけれど、よすがなければ、

我が文はいつ松茸のつゝみ燒　杏雨

名月

蝙蝠の飛（隈）をくまなる月見哉　落梧
此月見今年の米のにほひかな　蕉笠

十六夜

いざよひのいづれか今朝に殘る菊　翁

十七夜

月の名もまだあるうちぞたのもしき　落梧

九月十三夜

後の月又めづらしや秋茄子　杏雨

冬之部

そのゝちは虫の音もなし神な月　一髪

空しみて時雨もやらず神無月　李晨

盗人のあとおそろしき時雨哉　嵐蓑

時雨せぬ前とはちがふ紅葉哉　鴎歩

初雪や夜着からのぞく懶(ナマカヘ)さ　落梧

はつ雪のたらぬほど降柳かな　蕉笠

雪の日や疊ぬくとき人のあと　梅餌

大雪や笘屋の内の咳ばらひ　一髪

酒のなるはもてなしやすし雪の暮　杏雨

如意輪は人の心をおぼしわづらひて、つら杖をつきてをはす。

ぬすゝともしらでかき来る落葉哉　一髪

鶏の蹴爪にかゝる落葉かな　梅餌

鼾かく衛士やつみなき御佛名　落梧

お火焼(たき)やたま〳〵鍜冶が顔白し　李晨

少年を失へる人の心を思ひやりて

埋火もきゆや泪の煎(にゆ)る音　翁

此聲や宵に通りし鉢たゝき　炊玉

豆腐(我)ひく寒さくらべよ鉢たゝき　落梧

春之部

山伏も花見にまじる木かげかな　蕉笠

花に暮て反畝にはまるさくら哉　杏雨

蜂の髭ににほふらん花の蘂(しべ)　落梧

やまざくら瓦ふくもの先(まづ)ふたつ　翁

山里は万歳おそし梅の花　仝

無懺愧

ねはん像銭かきよする僧いかに　落梧

をりざまに吹たてられし草の蝶　蕉笠

囀りや少はちがふはますゞめ　仝

春たつや今朝の雀の額つき　一髪

雲雀たつ川原柴胡や笹つばな　仝

歌仙

さつぱりと人なき暮のさくら哉　落梧

からす水のむ土堤のたんぼゝ　蕉笠

筍(スクイダマ)うちかたげ行春雨に　一髪

苞(つと)ことづかる里の明ぼの　杏雨

月影に皂角(さいかち)の實のから〳〵と　李晨

秋たつ空の日和見に出る　梧

初鮭(ひカ)にろとりも客の隙いらず　笠

女房はたゞ奥にのみ居る　髪

しほ〳〵とむし歯おさゆる眉のきは　雨

結縁(けちえん)経のよみをはるまで　晨

あはれさは無言の頃のほとゝぎす　梧

食(めし)(居気臭し)ねくさしや夏の夕月　笠

舟底の高低ありて薬むしろ　髪

草臥たるか夢の見つゞけ　雨

講釋もきかでおこたる五六日　晨

いろりふさげば廣き住ゐや　梧

花に行顔知人もたづね寄り　笠

雛の調度を取ひろげたり　髪

春の朝嵯峨の佛餉まいらする　雨

大黒棚のとぼし消ぬか　晨

何事も心にもたでかいころび　梧

あまり暑しと水あびに來ル　笠
むら〳〵と李ばかりに市たてゝ　髪
寐起のまゝのあたまつき也　雨
ばち〳〵と竹さしくべてあたりいる(居)　晨
粥うちあくる門の槽(ユマヲケ)　梧
徹書記が來むと告こす初雪に　笠
冬のぼたんのいとゞ唐めき　髪
更る月そら醉をして立出る　雨
秋風さむく待てゐるらむ　晨
遊君の衣かゝえ行露しぐれ　梧
おほちやくになる旅のやすらひ　笠
汗ふけと肥たる背(せなか)さしむけて　髪
まだ年わかき驗者(げんじや)成けり　雨
座つきにはまづ餅をつく花の書　晨
上下ゆるす宿の梅がえ　執筆

元祿乙亥のことし四月十二日
岐山の草々庵におゐて記焉。
連衆十八人

尾張部

去年元祿七年前の五月なるべし。尾張の國に入て、舊交の人〳〵に對す。

世を旅にしろかく小田の行戻り　翁

閑居をおもひ立ける人のもとに行て、

涼しさはさし圖に見ゆる住居哉　仝

元祿三(四の誤)年の冬神な月廿日ばかりならん、あつた梅人亭に宿して、塵寰の閑を思ひよせられけむ、九霄齋といへる名を殘して、

水仙や白き障子のとも移り　仝

おなじ冬の行脚なるべし。はじめて此叟に逢へるとて

奥底もなくて冬木の梢かな　露川
小春に首の動くみのむし　翁

抱月亭

市人にいで是うらん笠の雪　翁
酒の戸たゝく鞭の枯梅　抱月

是は貞享のむかし抱月亭の雪見なり。おの〳〵此第三すべきよしにして、幾たびも吟じあげたるに、阿叟も轉吟して、此第三の附方あまたあるべからずと申されしに、杜國もそこにありて、下官(やつがれ)もさる事におもひ侍るとて

朝がほに先だつ母衣(ほろ)を引づりて　杜國

と申侍しと也。されば鞭にて酒屋をたゝくといへるものは、風狂の詩人ならばさも有べし。枯梅の風流に思ひ入らば、武者の外に此第三有べからず。しからば此一座の興はなつかしき事なと、今さらにおもはるゝ也。

ためつけて雪見にまかる紙子哉　翁
面白し雪にやならん冬の雨

おなじ頃ならん。杜國亭にて中あしき人の事、取つくろひて、

雪と雪今宵師走の名月歟

そのとしあつ田の御造營ありしを、

とぎ直す鏡も清し雪の花

防川亭

病中

香を探る梅に家みる軒端哉

埜のむさらでも霜の枕かな

しのぶさへ枯て餅かふやどり哉

尾張國あつ田にまかりける頃、人々師走の海みんとて、舟さし出て、

海暮て鴨の聲ほのかに白し　はせを

おなじ頃鳴海にわたりて

星崎の闇を見よとや啼千鳥　仝

畫讃　四幅

巴丈亭

はつかあまりの月かすかに、山の根ぎはいと闇（くらく）、こまの蹄もたど〳〵しくて、落ぬべき事あまたゝびなりけるに、數里いまだ鷄鳴ならず。杜牧が早行の殘夢、小夜の中山に至ておどろく。

馬に寐て殘夢（ざんむ）月遠し茶の烟　はせを

三聖人圖

月花の是やまことの主達

盤斎（ばんさい）背むきの像

團（うちは）もてあふがん人の背（うしろ）つき

菊花ノ蝶

秋をへて蝶もなめるや菊の露

題　二句

野中の日影

蝶の飛ばかり野中の日かげ哉

雲雀ふたつ

永き日を囀りたらぬ雲雀かな

覓レ閑　三句

杉の竹葉軒といふ草庵をたづねて

粟稗にまづしくもなし草の庵

田中の法蔵寺にて

刈あとや早稲かた〳〵の鴫の聲

大曾根成就院の歸るさに

有とあるたとへにも似ず三日の月

むかし此國より武江にくだるとて人々に留別す。

牡丹しべを分て這出る蜂の名殘哉　翁

訪ニ杜國ヲ一紀行

すくみ行や馬上に氷る影法師　はせを

旅宿

（杜國）ごを焼て手拭あぶる寒さ哉

いらこ崎を、見渡して

鷹ひとつ見つけて嬉しいらこ崎

逢ニ杜國ニ

されぱこそ逢ひたきまゝの霜の宿

麥はえてよき隱家や畠村

此時は越人も具せられしとかや。

寒けれど二人旅ねはおもしろき

次のとしならん。越人が方へつかはすとて、

二人見し雪は今年も降けるか

春

舗生鶯

秀正が時代を啼か金衣鳥　巴丈

鶯や啼ずにあそぶ隙もなし　左次

童部が言葉によりて

鶯や藪ある家のはなし飼　斧芥

行がけや侍町のはなさかり　和泉

花にねていかなる事を鳥の夢　露川

畑守が苣(あさ)に酢みそや華の客　松醒

らく〳〵と寐て見る花やいま〳〵し　山山

あした來ばかならず花を黒木うり　女山石

きのふけふ海雲(もづく)まちしか初櫻　抱月

今朝の事わするゝ山のさくら哉　犬山不流

海棠の咲やめくらの晝の夢　杜旭

すい顔の花に咲たる野梅かな　犀角

笠ぬぎてかほ洗ふたる野梅哉　素覽

梅が香を澤山に吹(ふく)みなみかな　鼠彈

かしませに椿ちりたる小庭かな　直仝

客の歸るを送るとて

壁土の畔(くろ)や水越す桃の花　素覽

火はもえて内に人なし桃の花　鼠彈

づんぶりと一日曇るやなぎかな　仝

椿づめに菓子うる家の柳哉　捨石

追立て鬼ころぶや岩つゝじ　犬山隨岐

つばくらや糸に羽を摺(する)いかのぼり　不流

白雲の糸にたはむや紙鳶(いかのぼり)　犬山梅仙

材木に居りわづらへる胡てふ哉　衣吹

がやつきて水田の星に蛙かな　捨石

一節は麥あからむや藤の花　犬山呑水

むら雨や苞(ツト)に花もつ茄子苗　左次

夏

郭公啼やしづかに苣の塔(臺)　露川

寐ほうけて髮のそゝけやかんこ鳥　松醒

若竹や寄合づきの臼の音　友巴

晝がほや日はかたむかず橋ばしら　杜旭

月涼し影すい〳〵とはし柱　左次

銀河(あまのがは)瀨越に涼し夏の月　素覽

箱根山

湖のなぎさやにごる栗の花　鼠彈

菱咲て野中は後(うしろ)こそばゆし　巴丈

黑き藥のにほひも暑し夏木立　仝

桐の花ちるや是から夏木だち　松翁

用いふて門から戻る蚊遣かな　千聲

蚊柱や捨子もあそぶ宵の程　和泉

庭鳥もなかぬ在所や五月雨　枝殘

(莪)片ぶきに鳩のかすりやしやがの花　梅仙

訪幽棲(棲カ)

麥刈に汲でもらへる清水哉　抱月

白雨を見てゐる東あふみかな　仝

秋

秋立や竹の中にも蟬の聲　素覽
早稻の穗や鮒のひたつく桶の中　和泉
秋まちてはづむ桔梗(梗)のつぼみ哉　左次
穗薄の便おかしや晝ぎつね　友也
どか雨に算をみだすや山すゝき　露川
くどからぬ花や野菊に殘る月　仝
かまきりの鎌にはどむや芋の莖　犬山　如山
松茸や飯臺につく田舍客　衣次
松くべて糗する宿や鼻の穴　呑水
うき別あとに連子のうづら哉　杜旭

冬

草むらの花は黄に咲(さく)小春哉　左次
浮あがる土の黑さよ冬ぼたん　杜旭
かまきりや枯葉の笹は右ひだり　山山
薪部屋の女よばるゝしぐれ哉　捨石
(音)もや賣の聲も夕日の時雨哉　卍春
十夜迄たはいくで熟柹哉　卜志

一握(にぎり)すつぼりかねや冬籠(ごもり)　梅仙
食(めし)くふて寄かゝりたる火燵哉　不流
雲の色は海鼠へぎたる空さむし　素覽
桐の木はあかはだか也冬の月　仝
風の志賀は謌にもまだきかず　巴丈

見ㇾ雪ニ興

韋駄天のはやさも見たし雪の原　一狐
錢買がさしきらしたる雪の道　露川

隱士山田氏の亭に
とゞめられて　はせを

水雞啼と人のいへばや佐屋(さや)泊
苗の雫を舟になげ込　露川
朝風にむかふ合羽を吹たてゝ　素覽
追手のうちへ走る生もの　翁
さかやきに睃離せりあふ月の秋　川
崩てわたる椋鳥の聲　覽
耕作の事をよくしる初あらし　翁
豆腐あぢなき信濃海(街)道　川
尻敷の緣とりござも敷やぶり　覽
雨の降日をかきつけにけり　翁
炮烙のもち(餅)にくるしむ蠅の足　川
繭を刈あげて門にひろぐる　覽
切麥であちらこちらへ呼れあふ　翁
お旅の宮のあさき宵月　川
うそ寒き言葉の釘に待ぼうけ　覽
袖にかなぐる前髮の露　翁
咲花に二腰はさむ無足人　川
打ひらいたるげんげしま畑　覽
山霞鉢の脚場を見おろして　支考
船の自由は半日に行　左次
月夜にて物事しよき盆の際　巴丈
かりもり時の瓜を漬込　川
三鉦の念佛にうつる秋の風　覽
使をよせて門にたゝずむ　考
我戀は逢て笠とる山もなし　次
年越の夜の殊にうたゝ寐　丈
扨は下戸いちごのやうに成にけり　川
逢者自慢の先に立れた　覽

金剛が一世の時の花盛　考
つゝじに木瓜の照わたる影　次
春の野のやたらに廣き白河原　文
三俵つけて馬の鈴音　川
それ〲に男女も笸そろへ　覽
よめらぬ先に娘参宮　考
あり明に百度もかはる秋の空　次
疊もにほふ棚の松茸　丈

元祿乙亥のとし三月二十六日
尾城の白鷺亭におゐて記焉。
連衆四十三人

伊勢部

貞享の間なるべし。此國に
抖擻ありし時、
奉納　二句
西行のなみだをしたひ、
増賀の信をかなしむ。

何の木の花ともしらずにほひかな　はせを

おなじ春ならん、

裸にはまだ二月のあらし哉

なにがし寺に詣して、

神がきや思ひもかけず涅槃像

菩提山

山寺のかなしさつげよ薢ほり

二乘軒

藪椿門はむぐらの若葉哉

守榮院

門に入ればそてつに蘭のにほひ哉

楠邊

盃に泥な落しそむら燕

逢二龍ノ尚舍一

物の名を先とふ荻の若葉哉

胡來亭

梅の木になをやどり木や梅の花
是はその父弘氏のむし、此道の
風流に名あるゆへなるべし。

路草亭

紙ぎぬのぬるともをらん雨の花

廬牧亭

蔦植て竹四五本のあらし哉

園女亭

暖簾の奥ものゆかし北の梅

かへし

時雨てや花迄殘るひの木笠　その女
宿なき蝶をとむる若草　翁

讃　二幅

あすは檜の木とかや、谷の
老木のいへる事あり。きの
ふは夢と過て、あすはいま
だ來らず。たゞ生前一樽の
たのしみの外に、あすは
〱といひくらして、終に
賢者のそしりをうけぬ。
さびしさや華のあたりのあすならふ　はせを

美人圖

蘭の香や蝶のつばさにたきものす

春

梅の花

垣草の古葉も寒し梅の花　園女
賣家の奥ほのくらしむめのはな　一道
日あたりの干塩にちるや梅の華　支考

さくら

掃人の跡はさだめぬさくらかな　柳玉
髮そりて見たきもの哉山ざくら　流霞

峰に花ちるといふ
七文字をきゝて

米踏や峰に花ちる朝あらし　路艸
花曇けふはどこぞへいき日哉　夕秋

朝熊山　二句

簾から我を見るらむ花の笠　園女
院／＼の晝食時や花ざかり　賀枝
手づかみに菜はあれたる花見哉　柴友
ぺん／＼と花に鳥啼日和かな　廬本
裸子の菜の花くゞるひよりかな　信昌
結構な日を鳴くらす蛙かな　乙由

小鮎　二句

青柳に頭そろえて小鮎かな　口遊
早川を龜相にのぼる小鮎哉　桂之

鶯　二句

鶯に一日なじむ日傭かな　乙由
鶯やかけつなけつに山屋敷　廬本
明ぼのや茶摘に犬もついて行　仝
種もの丶俵や直に鳥おどし　園女
山吹のしろさやいまだ夜の深き　柳玉
垣越に李の花や星月夜　胡求

夏

ほとゝぎす　二句

つばくらのゐなじむ室や郭公　廬本
ほとゝぎす夜明／＼のまだ寒し　乙由

杜若　三句

轉寐や簀子の下のかきつばた　路草
水際を直さずもがなかきつばた　柳玉
濡色を持て出るやかきつばた　賀枝

百合草　二句

片つりに袂ひたすや車百合　口遊
百合の花風はあれども暑かな　柴友

芥子　二句

いくほどの世に奇麗なりけしの花　支考
蒔たらぬ苣のあまりや芥子の花　夜霜

夕がほ　二句

夕顔の形にくぼむや藥缶　川舟
瓢箪のつるや隣をはゞからず　園女

節供　二句

葺かゝて娘にげ込菖蒲哉　廬本
菖葺屋ねに日和の目利かな　園女

納涼　四句

蜘の巣の顔なで居るや夕涼　信昌
客つれて呂見に行涼み哉　梅知
絹張をくゞりあるいて涼み哉　乙由
穴藏や瓜ひやしたる下涼み　一道

川逍遙

此中に冷麥喰ハぬ人もなし　二木
河狩やおかでさし出る疝氣持　加青
鵜づかひの我も口あく拍子かな　柴友
蟬啼や川に横ふ木のかげり　園女

秋

月　三句

有明に顔ほす螢がしわさかな　路艸

兀山の砂に小松や三日の月　賀枝

名月や濱邊の鳥の長(たけ)高し　乙由

田荘

粟稗を刈(から)れてあとの木槿かな　長利

新田の路のまばらや鴫の聲　園友

泣て來て子も食喰ふや稲の中　乙由

芋の葉よ動くについてひとなるか　信昌

朝がほを切そこなひし薄刄(うすば)哉　柳玉

水栗に菊の香うつれ繪皿　口遊

殘暑　二句

秋もまた膳すはりたる暑さ哉　乙由

初秋に日和あがりのあつさ哉　賀枝

うつの山

細道や蚓ののたる草の色　一道

鉢ひらき　二句

鉢ひらき彼岸に渡る小鳥かな　支考

竈馬(コウロギ)や咳してのぞく鉢開　盧本

冬

十夜

小坊主の伯父に逢ふたる十夜哉　乙由

大根引　二句

ほか／＼と鼻いき立や大根引　路艸

まづ二本寺へもやるや大根引　作者しらず

寒　四句

(簀)梅もどきこぼれ初たる寒かな　蹊之

明家に階子かけたる寒さ哉　桂之

酒盛の張番したる寒かな　賀枝

眞丸に日の影さむし瞎の先　盧本

火燵　二句

かはる／＼火燵にあたる旅ね哉　一道

侍は腹さへ切ルに火燵かな　支考

千鳥　二句

むら千鳥蛤ふみの路淺し　柳玉

村千鳥水かすり行夕日哉　流霞

師走　二句

煤はきや馬のいなゝく藪の中　乙由

師走のそらのあそぶ方なくて

掛乞に我庭みせむ梅の花　園友

手枕に花の夢みむとしわすれ　信昌

歌仙

てら／＼と晝一しきり袷かな　園友

(ざ)お下屋敷の牡丹見に行　支考

片箕(ザル)に卵青ものとり入て　木因

吹あらしたる野分むら雨　乙由

五幾内の旦那を廻る秋の月　盧本

今朝あかつきの寐冷おぼゆる　友

六齋の掃除かゝさぬ砂の上　考

いつも(の腕カ)やうに出來し淺漬　因

立前の着替をとりに狀添て　由

侍の子を弟子に肝煎　本

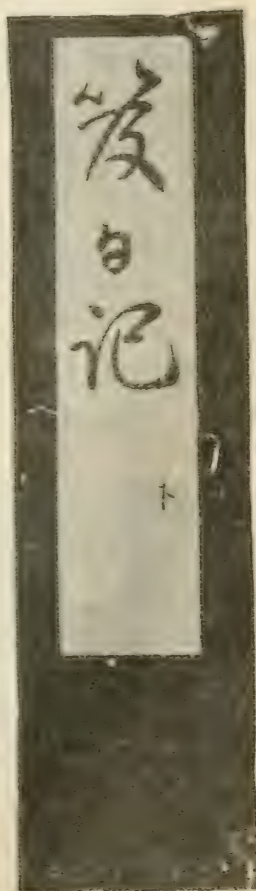
箏も半夏(はんげ)過れば卓散(たくさん)に　友

十日斗の旅をして來る　考

(住)すまふたる跡から家の氣にいらず　因

手鍋をさげる秋の淋しさ　由

平押に小鳥の渡る河原畑　本
朴の廣葉の三日月に散　支
金の間の花はさびたる古法眼　考
初雷にほろ〳〵と降　因
朝東風に川のむかひの馬嘶て　由
在郷の隙に蓮ろり出す　考
奉公もかせひで見たる若盛　友
二度ほど起てたばこ呑也　本
煤掃はことしも雪になりかゝり　因
源介橋の横に賑はふ　友
髪殿はよい仕合であるかゝ　考
湯治の時の酒の友達　由
赤餅の苗をもらふて一せまち　本
番屋の敷屋の低うたくなる　因
朝月のまだちろ〳〵と水の上　由
紅葉をおしむ明神の山　本
茸狩に子どもの足の達者さよ　友
馳走にあふて暮相に来る　考
首途も明日の手筈の荷ごしらへ　因
いとこ夫婦のいとゞ中よき　由
初華にひらりとはいる鶴大夫　本
畠の梅の大かたに咲　筆

今年元祿乙亥の夏五月十二日
涼見齋におゐて記焉。
連衆十九人

笈日記　下

笈日記　下巻

墨水部

今年元祿乙亥の春、伊勢の國より武江の方に旅だつとて、

留別　二句　支考

雁の聲おぼろ〳〵と何百里

むまのはなむけしける人に

しら玉や梅のつぼみも一包ミ

餞別

見送らむ花もかすみも塩見坂　園友
鶯や尻もためずにいとま乞　斗従
川越てかいくれ見えぬ柳かな　蘆本
花はまだかたへら寒き旅ね哉　賀枝
見ひらくやはなの天氣のあみだ笠　乙由

桑名　五句

古益亭

冬ぼたんちどりか雪のほとゝぎす　翁

おなじ頃にや、

濱の地藏に詣して、

雪薄し白魚しろき事一寸

此五文字いと口おしとて、後に
は明ぼのともきこえ侍し。

狼も一夜はやどせ蘆の花

花を吸ふ虻なくらひそ友すゞめ

此二句も阿叟の吟なるよし。此
ほとり漂泊の間なるべし。

又、いかなる時にか侍りけ
む、たどの權現を過るとて

宮人よ我名をちらせ落葉川

途中吟　五句

あれ是をあつめて春は朧也　文考

布子着て夏よりは暑し桃の花

小夜の中山より
かの大井川を
見渡して

日晴ては落花に雪の大ゐ川

安部河はたゞ
名のみして

水上（ミナ）は鶯啼て水淺し

箱根を越る日は
雪なを降ける。

鶯の肝つぶしたる寒さかな

武江

三月四日、武江にいたる。
きのふは桃花の節なりとて

鶏の獅子にはたらく逆毛（さかげ）哉　其角

つとめての日なるべし。其
角桃隣介我、上野の花みむ
とて、いざなひ行けるに、院
〱の風流など見ありきて、

椽からはこなた思ふや花の庭　仝

といへるは、いかなる時の
ほつ句にか侍らん、今おも
ひ出るなどさゝめかし渡り
て、その暮は桑雫亭にこみ
入、酒のみてかへり侍る。

その頃嵐雪亭に、句合（くまはせ）の侍
りけるが、

其一

白つゝじまねくやう也角櫓（すみやぐら）　嵐雪

十二日は阿叟の忌日つとむ
るとて、桃隣をいざなひて、
深川の長溪(慶)寺にまうで
侍る。是は阿叟の生前にた
のみ申されし寺也。堂の南
の方に新に一簣（き）の塚をきづ
きて、此塚を發句塚といへ
る事は、

世の中はさらに宗祇のやどり哉　翁

此短册を此塚に埋めける
ゆへなり。此ほつ句はば
せを庵の一生の無ゐなる
べしと、杉風のぬし、語
り申されし。

かの塚の前に香華をそなへ、
まき木の枝を折、左右にか
ざしをきて、いふ事も思ふ
事も、なき跡はしらずなり
ぬるよと、ふたりながら泣
て出ぬ。その後は舊草を見
に行けるが、たゞ見しらぬ
人の住てぞ侍るなる。

むかし此叟の深川を出る
とて、此草庵を俗なる人
にゆづりて、

草の戸も住かはる世や雛の家

今はまことに、

すまずなりてかなし。

素堂亭

十日菊

蓮池の主翁、又菊をあいす。きのふは龍山の宴をひらき、けふはその酒のあまりをすゝめて、狂吟のたはぶれとなす。なを思ふ、明年誰か、すこやかならん事を。

いざよひのいづれか今朝に残る菊　はせを

残菊はまことの菊の終りかな　路通

咲事もさのみいそがじ宿の菊　越人

昨日より朝露ふかし菊畠　友五

かくれ家やよめなの中に残る菊　嵐雪

此客を十日の菊の亭主あり　其角

さか折のにゐはり(新治)の菊とうたはゞや　素堂

よには九の夜日は十日と、いへる事をふるき連歌師のつたへしを、此あした　しみ(紙魚)を拂ひて申侍る。

又中頃

戀になぐさむ老のはかなさ

むかしせし思ひを小夜の枕にて

我、此心をつねにあはれぶ。今なを思ひいづるまゝに

はなれじと昨日の菊を枕かな　仝

芭蕉庵

十三夜

ばせをの庵に月をもてあそびて、只月をいふ。越の人あり、つくしの僧あり。まことにうき艸のこらず水にあへるがごとし。あるじも浮雲流水の身として、石山のほたるにさまよひ、さらしなの月にうそぶきて庵にかへる。いまだいくかもあらず。菊に月にもよほされて、吟身いそがしい哉。花月も此爲に暇あらじ。おもふに今宵を賞する事、みつればあふるゝの悔あればなり。中華の詩人わすれたるにたり。ましてくだら(百濟)しらぎ(新羅)にしらず。わが國の風月にとめるなるべし。

もろこしに富士あらばけふの月見せよ　素堂

かけふた夜たらぬ程照る月見哉　杉風

後の月たとへば宇治の巻ならん　越人

あかつきの闇もゆかりや十三夜　友五

行先へ文やるはての月見かな　岱水

後の月名にも我名は似ざりけり　路通

我身には木魚に似たる月見哉　(僧)宗波

十三夜まだ宵ながら最中(もなか)哉　石菊

木曾の痩もまだなをらぬに後の月　はせを

仲秋の月はさらしなの里、姨捨山になぐさめかねて、猶あはれさのめにもはなれずながら、長月十三夜になりぬ。今宵は宇多のみかどの、はじめてみことのりをもて、世に名月とみはやし、後の月あるは二夜の月などいふめる。是才士文人の風雅をくはふるなる

や。閑人のもてあそぶべきものといひ、凡は山野の旅寐もわすれがたうて人〴〵をまねき、瓢を扣(たゝき)、峯のさゝぐり(笹栗)を白鴉と誇る。隣の家の素翁。丈山老人の、一輪(りん)いまだみたず二分虧(かけたす)といふ唐歌は、此夜折にふれたりとたづさへ来れるを壁の上にかけて、草の庵のもてなしとす。狂客なにがし、しらゝ吹上とかたり出ければ、月も一きははへあるやうにて、中〳〵ゆかしきあそびなりけらし。

貞享五戊辰菊月仲旬

物しりに心とひたし後の月　敦足書

十四日武江を旅だちけるに

餞別

高砂に足ふみもどせ山ざくら　介我

咲花の中をぬけ出て尻つまげ　乙州

見事なる旅の相手や花に鳥　桃隣

嶋田

十八日嶋田の驛に入て、如舟亭に足をやすめ侍る。此亭はかつて阿叟の往来の労をたすけ侍るゆへありて、吟草もあまた侍りける中に、

額(がく)

五月雨の雨風しきりにおちて、大井川水出侍りけるにとゞめられて、しまだに逗留す。如舟如竹などいふ人のもとにあそびて、

ちさはまだ青葉ながらになすび汁　はせを

さみだれの雲吹おとせ大井川

竹ノ讃

たはみては雪まつ竹のけしきかな

今の嶋田よし助が門も

見捨がたくて

かちの火も殊さらにこそ笠の雪　嵐雪

驚かぬ往来や冬の大ゐ川　桃隣

三河

新城(しんしろ)はむかし阿叟の逍遙せし地也。なにがし白雪といふおのこ、風雅の子ふたりもち侍る。二人ながらいとかしこくぞ侍る。阿叟もその少年の才をよみして、是を桃先桃後と名づけ申されしを、支考も名の説かきてとゞめける也。

其にほひ桃より白し水仙花　翁

是は水仙の花を桃先桃後といへるより、かくはいへるなるべし。

しのぎかね夜着をかけたる火燵哉　桃先

節季候のはりあひぬかす明屋哉　桃後

菅沼亭

京にあきて此木がらしや冬住ゐ　翁

おなじ頃

鳳来寺に

参籠して

木枯に岩吹とがる杉間かな

夜着ひとつ祈り出して旅ね哉

尾張

今月廿七日尾府にかへる。二十九日は杜旭亭にまねかれて、おの〳〵春の名殘をおしみける。

三月盡　二句

ちり〳〵に春やぼたんの花の上

鶯の調子かえたるあらしかな　支考

卯月の始は、亡父の年忌一つとむべきにあたりて、みの路に旅立ける。

餞別

國〳〵に殘しをかれける文のはし〳〵、色紙たんざくなどひろひあつめては、きかせばや伊勢の便にもと、いとま乞もそこ〳〵になりて

つゝめ君笈の小文に花柑子　左次

鶯はなけど卯月の別れ哉　露川

竹の子や見えた通の旅すがた　素覽

此翁の世をさりぬれど、その道は小文にとゞまれる心を、

花橘それぞとにほふ障子越　木之

美濃

此國は支考が古さとに侍れば、武府の行に先だちて、母堂をかへり見侍る。その頃は二月にてありけむ、いなかのけしきまた珍しくて、

前境　二句

くゝ(莖)立の花うちこはす彼岸かな　支考

水澄て籾の芽青し苗代田

雲鴻のぬし、今は世を引かえて、わびし氣なるを思ひわびて、

鶯や枯木がちにていたましき　支考

雪の消れば畠もくろむ　雲鴻

春中は米をうる(賣)なと觸て來て　夕可

水風呂桶のどこもさし合　均水

茸萱のもそつとたらぬ宵の月　闇如

子共のつかひ八重手間になる　筆

各〻一順

遊處　三句

山寺

鳥の巣に蓋(ふた)してをかば椿かな　支考

田家

燕についてはいるや箱まはし

別墅

歸るとて梅に一夜や四十雀

淵原

此すはらといふ所は、左右に山かこみ、中には河舟の往來も侍りて、かの桃源のむかしも殊に思ひ出て、へ桃咲て石にかどなき山家かな　と申侍しは去年の春にや侍らん。

可吟亭

朝鷹のぬれて出るや花の中　支考

山から見れば城のどかなり　可吟

雛賣のやつと一駄をからにして　碧川

降か〳〵と空の氣づかひ　指算

寄紗に網の手おろす暮の月　吟
紙すきかゝる上原の秋　考
新蕎麥にお寺の衆を皆呼て　算
芝居があれば仰(ゲウ)にそはつく　川
誰にやら鋸かしてうろおぼえ　考
蚤掃したる跡はすんなり　吟
初茄子花のすむ間の退屈さ　川
行灯にむきて目薬の沙汰　算
湯に入てけふの寒さを取かへす　吟
秋の仕舞の年貢一段　考
桑名迄便船したる朝の月　算
澤山に居る鴈のほしさよ　川
風のものおはねば風も苦にならず　考
悟り仲間の丁ど四人　吟

支考五句　碧川四句
可吟五句　指算四句

岩崎

此地を過る事、四月十日の程なるべし。二竹堂に一宿す。此人はさるべき世を田舍にのがれて淵明が三徑のむかしを、まねびゐければ、

耕作のまづ手習や夏大根　支考

岐阜

遇レ雨

うね〳〵にながるゝ雨やけしの花　仝

大垣

斜嶺亭

此亭より伊吹山をたゞちに見渡す。此山は此府の名山にもてなして、秋冬の風情はさらによし。殊に夏草の生しげりて、青天にそよぎたるが、いさぎよさに、
〽涼風を青田におろす伊吹かな
と申侍しに、吾叟の爰にも見、かしこにも見て、吟情を此山にまつはれけるもわりなし。

誹家の伊吹ぞ軒の青あらし　支考

水魚吳竹といへるはらからの人は、風雅の心ざし切にして、吾行脚をとゞめて、二人ながらよくもてなされければ、

どこやらか菖(あやめ)にほふかきつばた　仝

柏原

江水亭

行暮て蚊屋釣草にほたる哉　支考

彦根

卯月十八日許六亭に寄宿す。物語の序に、みづから繪かきたる色紙數多取出し給へるに、人々の筆にて、その人のほつ句かゝせをきたるが、卷頭は先師はせを庵の四季の句にてぞおはしける。くりかへしたる中に、梨の花の白妙に咲て、その陰に唐めきぬる人の驢馬の頭引たて背(うしろ)むきに乘たる繪の侍り。是は支考が東路にて〽馬の耳すぼめて寒し梨の花　と申侍しほつ句かゝせむと思へるなるべし。されば此句のからめきて、詩に似たりと見給へる眼は、繪を得て

俳諧をさとり、俳諧をえて給にうつし給へるならん。みづからなしをきたる事の此さかひにいたらざるは、給につたなきゆへならんと、いとゞうらやましかりし。

されば人の句をきかむ事たやすからじ。去年の夏、阿叟の桃花坊におはす時、人々よりいて物語し侍るに、支考が集つくらば、なにがしの桐火桶に似せて侍らん。たとへば、

梅が香にのつと日の出る山路かな

なまぐさし小なぎが上の鮠(はえ)の腸(わた)　翁

梅が香の朝日は餘寒なるべし。小なぎの鮠のわたは残暑なるべし。是を一躰の趣意と註し候半と申たれば、阿叟もいとよしとは申されし也。その後、大津の木節亭にあそぶとて、

ひや／＼と壁をふまえて晝寐哉

此句はいかにきゝ侍らんと申されしを、是もたゞ残暑とこそ承り候へ。かならず蚊屋の釣手など、手にからまきながら、思ふべき事をおもひ居ける人ならんと、申侍れば、此謎(なぞ)は支考にとかれ侍るとて、わらひてのみはてぬるかし。

芹焼や絲輪(すそわ)の田井の初氷

此句は、初芹といふ事をいひのべたるに侍らんと、たづねければ、たゞ思ひやりたるほつ句なりと、あざむかれにける。かゝるあやまりも、殊におほかるべし。

明日旅だゝんと
おもふ今宵

うのはなに祈り過たる曇かな　支考

餞別

駕篭わきの宿の方也ほとゝぎす　許六

さしかえて扇持たる別かな　木導

湖南

二十二日木曾塚にいたりて、師の無縫塔を拜す。拜して、さしむかひゐける塚の神の、何ともいはざるはたゞかなし。その夜は舊草にむかしをしのぶとて、一夜寐侍りて、

夜咄のねぶたかりしも夏の夢　支考

湖水眺望

ほとゝぎす帆掛に出るや日枝おろし　仝

京

風國亭

羽づかひの空に浮ぶや郭公　支考

伊賀

二十六日猿雖亭にたゞよひつきて、撰集の事かたり出たるに、舊交の人々つどひ入て、阿叟の生前死後をさだむるに、君子にしてあらそはず。かくありて此月もみそかばかりにして、伊勢の方に旅立ける也。

途中吟　二句

余所／＼の山は覆盆子(いちご)の盛哉　支考

松風を後にしさる田うえかな

伊勢

園友亭　三句

　酒狂の後、人〳〵の口質まねびてみむとて

瓜喰ふて酒のむ腹は祭かな　支考

竹に寐てすべり落ばや夕涼

涼しさに中にさがるや青瓢

紀行　十六所

漂泊　九十日

雲水追善

悼芭蕉翁　尾州熱田 連中

その神な月の中二日、しばしもとゞめず、今のむかしとはかはりぬ。何事もかくとわきまへかぬるなみだ、思へばくやし。芭蕉翁、十とせあまりも過ぬらん、いまそかりし頃、はじめて此蓬莱宮におはして、へ此海に草鞋を捨ん笠時雨と心をとゞめ、景清が屋しきもちかき桐葉子がもとに、頭陀をおろし給ふより、此道のひじりとはたのみつれ。木枯の格子あけては、へ馬をさへ詠る雪といひ、やみに舟をうかべて浪の音をなぐさむれば、へ海暮て鴨の聲ほのかに白し　とのべ、白鳥山に腰をおしてのぼれば、へ何やらゆかしすみれ草　となし、松風の里寐覺の里かゞ見山よびつぎの濱星崎の妙句をかぞへ、終にかたみとなし給ぬと、互に見やり泪の内に、人〳〵一句をのべて、西のそらを拜すのみ。

泣事も先力なき水の雪　桐葉

見る物にあはれ残るや霜の塚　梅人

戀しさのうつりかはるや村しぐれ　拼三

　伊賀の上野にたづねまかりて、紙子まいらせし事思ひ出て、

悲しさの數にも入や新紙子　鷗白

木枯の名ばかり残す木立かな　野遊

面影にみよや櫻は霜白し　湘水

冬枯て何をたよりに松の聲　南北

露霜の下にかなしや力草　馬蹄

何事も枯はつる世や冬の山　梨雨

月寒てなき人忍ぶ影法師　水酉

なき人を思ひ出せとや鴨の聲　十水

　我泣聲は秋の風　と聞しに、同事と成給ひしかなしさ。愁傷十方なくて一字をたむけぬ。

塚も動け我泣聲は冬の風　東藤

悼二松倉嵐蘭一

金革を衽(袵)にして、あへてたゆまざるは士の志也。文質偏ならざるをもて、君子のいさおしとす。松倉嵐蘭は義を骨にして實を腸にし、老莊を魂にかけて、風雅を肺肝の間にあそばしむ。予とちなむ事十とせあまり九とせにや。この

三とせ斗官を辭して、岩洞に先賢の跡をしとふといへども、老母を荷ひ稚子をほだしとして、いまだ世波にたゞよふ。されども榮辱の間に居らず。日〻風雲に康して、今年仲秋中の三日、由井金澤の波の枕に月をそふとて、鎌倉に杖を曳、其歸るさより心地なやましうして終にいきたえぬ。おなじき廿七日の夜の事にや、七十年の母に先立、七才の稚におもひを殘す。いまだをしむべき齢の五十年にだにたらず。公の爲には腹をし切つても悔(悔)まじきうつはものゝ、はかなき秋風に吹しほたれたる草のたもと、いかに露けくも口をしくもあるべき。今はの時の心さへしられて悲しきに、母の恨、はらからのなげき、したしきかぎりは聞傳えて、偏に親ぞくの別にひとし。過つる睦月斗に稚子が手をとりて、予が草庵に來たり、かれに號得さすべきよしを乞。王我五才の眼ざしうるはしと、我の一字を摘て嵐我と名付。其よろこべる色、今目のあたりをさらず。いける時むつまじからぬをだに、なくてぞ人はとしのばるゝ習。まして父のごとく子のごとく、手のごとく足のごとく、年頃云なれむつびたる俤の、愁の袂にむすぼゝれて、枕もうきぬべきばかり也。筆をとりておもひをのべんとすれば才つたなく、いはむとすれば胸ふさがりて、たゞをしまづきにかゝりて、夕の空にむかふのみ。

秋風に折て悲しき桑の杖　はせを

九月三日詣墓

みしやその七日は墓の三日の月

祭二圖司一

出羽國羽黒の麓なる圖司なにがし呂丸四とせの先ならん、宮古の方をゆかしがりて、古さとは葉月中頃にうかれたちて、野店の月山橋の霜、かねておもひぬるまゝにわびけると也。かくて武のばせを庵に旅ねしてしばしの秋をおしみ、洛の桃花坊にかりゐして、春のやがてきたらんといふ事をまつ。その春の花も半ならんほどは、支考にくみして、大和路の行脚もすべきなどさゝめかしおもひゐけるに、む月の中頃よりやみつき侍りて、何のすべきやうもあらで、春も二月の二日なるに身まかりける也。されば此郎は門にまたるべき子さへありて、妻はいとわかくて侍り。その夢にあえぬつまこに、此便きかせ侍らば、まづ人をなむうらみぬべし。それ雲水漂泊のものはおもふ方もつまじきゆへなりと、誰〳〵もおもふかは。その頃、是をきゝつたへ侍る人は、いとあはれとて、手むけしける人もおほ

かりしが、かつて浪子となりて、ひと
へに客をあはれむといへる、まして此
時の手向なるべし。

しにゝ來てその二月の花の時　支考

鴈一羽いなでみやこの土の下　酒堂

士たかき所あはれや春の草　團友

當皈よりあはれは塚のすみれ草　はせを

雲水發句

春

切干の大根に梅のにほひかな　ミノ闇如

鶯ののぞいて見るや梅の空　ミノ黄蝶

訪山隱

梅白し昨日や鶴をぬすまれし　翁

二月や藪にかくるゝ鳥の影　ミノ二竹

菜の花になりて戀るや猫の面　仝

奉納

ちる花やぬれ草鞋にて神の前　ミノ可吟

笠かふて一度もきぬや花曇　柏原林木

幕／＼に鉢やひらかむ華の山　ヲカザキ睡闇

穗は枯て臺に花さく椿かな　殘香

鰐口や小松の中に雉子の聲　ミノ均水

燕もなれてはそりの烟かな　ミノ夕可

和歌浦　二句

雲雀啼蘆の中なる鳥井かな　殘香

置て行蜆さら／＼片男浪　仝

獨旅

ぬい／＼と身がらひとつや紙鳶　雲鴻

出かはりや在所の寺に因果經　仝

夏

涼風や水にうつろふ松の鷺　均水

涼しさや折目たがはぬ稻むしろ　指算

憶師舊跡

水あびしむかしを今の涼み哉　夕可

寐た家を人のさげすむ涼みかな　井水

水に咲花や扇の白地の繪　二竹

藻の花のちゞみ寄たる入江かな　殘香

長の立ところかぎりや菱の花　雲鴻

此菱の花は落梧子が便し
て、阿叟も一筋の風流い
とよしと申されけるよし、
名殘にしるし侍る。

髮生て容顏青し五月雨　翁

五月雨に襁褓ばかりや置火燵　雲鴻

布杭に桶の尻ほす五月哉　可吟

鶯の啼ても見たるあつさかな　仝

砥草刈日和や雪の駒が嶽　闇如

水無月の鮠やふまれん足の甲　仝

作ばや寒の水にて鮎なます　素人

生垣の間／＼やはな卯木　柏原櫻三

くち／＼と咲や葵の根ぎはから　睡闇

葺替や蜘の糸はる桐の花　黄蝶

商人は小判の桐の花見かな　柏原江水

雲の峯けがにも富士に似たるなし　仝

節供

山鳥の尾は媒びたる菖かな　ミノ角巾

しよんぼりと山鳥出るや栗の花　硯石

宿借や掃除して寐る栗の花　碧川

出羽の便にきこえ侍る。

山畑をこけて落たる胡瓜かな　さか田 不玉

秋

靡かるや西日も月も座敷迄　可吟
芋あぶる朝〳〵せはし鴫の聲　仝
早稲の香や猿も出そめて人の中　素人
稲の香や虎落のうらのあかね染　雲鴻
廣澤や名月渡るいねの花　殘香
子にそひて寐覺や後家の星祭　廣嶋 里洞
送火やよし人なみに燃ずとも　同 柳江
鱠喰ふかほの赤さよ紅葉狩　江水
風かはる鴈のさはぎや帆かけ舟　闇如
榎の實ちるむくの羽音や朝あらし　翁

草庵

手をあてゝ見るや鑵子も秋の風　均水
四五尺のかたき有けり鷄頭花　二竹

冬

線香も一本の間の時雨かな　碧川
時雨ては星のきほつく木間哉　闇如
身は樂に時雨て通る野馬哉　殘香

此作者、いかなる時の境界にや。
いと浦山し。

初雪や酢瓶の壺は氣のつかず　黄蝶
手拭も木になりにけり雪の朝　二竹
割織も袖の不足や雪の花　槐人
ほか〳〵ときらずの湯氣や雪の花　雲鴻
礒際や砂うちかぶる霜ばしら　硯石

山中

水仙も咲やこゝらの年貢時　指算
菰はりや越後そだちの冬牡丹　治棟
蠟燭に顔のてかつく寒かな　櫻三
蝶はらひ牛のしらみの榎哉　闇如
金屏に松のふるびや冬籠り　翁
有明もみそかにちかし餅の音　仝

兼好法師が歌に
ありとだにひとにしられて身のほどや
みそかにちかき有明の月

今年元祿乙亥の秋七月十五日
幾曉庵におゐて記焉。
連衆四十六人

笈日記
卜居篇

世に集作といふ鳥あり。晝は山花野草にわすれて家をおもはず。夜は露霜のふせぎがたきにうんじて、たゞに巣つくろふ〳〵と啼あかしぬるが、あけなば亦わすれぬべし。さればさゞゐのをのれが門をかため、蟹の穴の甲に似せたらん、それもいくほどのよはいにかあらん。世はすべてその時にのぞみて、よろこびもかなしみもしつべき事なるに、さるものはいと不覺なりといへる。いふ人のしたしければ、そも亦あらがひもすべからず。たゞ雲鳥の無心なるものに似ざらんほどは、世にありて殊にたやすからじ。今年は草庵の秋をおもへるより、かのほうしの、こゝもまたみやこのたつみといひけむ、伊勢の國にしかぞ住み侍る。

宇治山の僧もお出や初月夜　支考

薪置二階の窓やはつ月夜　蘆本
寐て見るや餘所の腹にて初月よ　乙由
草庵やまだ誰も來ぬ宵の月　賀枝
へつゝいもかはかぬ盆の祭かな　一道
白壁の間にはさかる月ま哉　如舟

此如舟は、するがの國嶋田の驛より參宮申されしが、吾草庵をたづねて此句申捨られし。

奥深に月は隣の梢かな　團友
花ながら枝折に萩の庵かな　口遊

文通　尾張

草庵出來のよし、まづ／＼珍重の御事に候。定而鍋ひとつ桶ひとつ、たらいはいまだあるまじくと存候。何れ參宮の雨やどりに、生田の森ならば幾度もまいり候はんと、みな／＼よろこび存候。

物賣の聲きゝしるや市の秋　巴丈
朔がほに推(すゐ)して見たる小庭哉　露川

三か月や十工(じつく)ばかりの庵の前　素覽
(「十工」とは大工十人手間の事なり。)
文月の文のしるしや庵見舞　左次
七月六日

七夕　草庵

たなばたや秋をさだむる夜のはじめ　翁
高水に星も旅ねや岩のうへ

後の句の心は、なにがし女の、岩の上にひとりしぬればとよみけむ旅ねなるべし。今宵この事語り出たるつゐでのゆかしきにしるし侍る。

手のとゞく屋根のもちゐや星祭　路艸
椽先や寒うなるまでほし祭　乙由
土佐が繪にあをのく人や星祭　支考
七夕のおどりになるや市の跡　團友
銀河(あまのがは)さらしあげたる今宵哉　蘆本

盂蘭盆　草庵

目にみえぬものゝいそがし盆三日　乙由

男所帶のいとすげなきに

雨の手に四五膳ツゝや玉まつり　團友

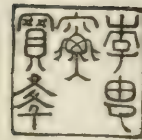
去年の秋は阿叟をまつべき便に、此國にかりの住どころもとめて、へ秋風や身につまされて二枚敷　と申侍しに、卓犖不羈の心ざしも水雲にあきぬるかと、阿叟のさみし給へりけるも、今年は吾草庵にその魂をまねき侍る。せめてはその時のほいなるべし。

松の葉につゝむ心を蓮の飯　支考

元禄七亥の秋八月
十五日洛の桃花
坊にしるす
侯生

寺町二条上ル町
井筒屋庄兵衛板

風雅の實躰、山野に満ていまだ亡師の跡をさまさず。しかれども取捨のたよりをうしなひては、やゝ面ゝの楊貴妃に誇り、をのが甲に似せて是非をあらそふに、翁の畫像唇を動さず。面受口決の輩も、ひとり〱露ときえ、雲と成(なり)南(なん)後(のち)、何を範とし、誰を柱とせむ。嗟(あ)乎(ゝ)かなしむべし。俳諧滅盡三十年に過べからず。かの優婆鞠多は數滴の油をこぼし、夫子は觚ならんや〱と歎ず。まことに後世の翁をまつは

集にならひ十二月わけて終に
韻塞（フサギ）と題す元祿九丙子冬臘
買年李由自序

筆の跡なりとて、許六と額を合せ函底に埋れし古翁の句、遠近親疎の佳什を烈(列)ね侍りぬ。曾丹好忠の家集に習ひ、十二月をわけ、終に韻塞（フサギ）と題す。元祿九丙子冬臘月買年李由自序。

韻塞

十月

宿明照寺 元禄辛未于旹四十有八歳

當時此平田に地をうつされてより已に百年にをよぶとかや。御堂奉加の辭に曰、竹樹密に土石老たりと。誠に木立物ふりて、殊勝に覺え侍ければ、

百年の氣色を庭の落葉哉　芭蕉翁
御玄家も過て銀杏の落葉哉　李由
生壁にぬり込門のおちばかな　老如元
あかぎれの膏藥つゝむ落葉哉　木導
寒山と拾得とよるおちば掻　許六
雜水の恩ををくるや落葉掻　毛紈
狼の道をつけたる落ばかな　程已
掃おろす牛の背中の落葉哉　如行

李由撰

旅行

夜の中に木の葉を聞や駕籠の屋ね　荊口
炭焼や朧の淸水鼻を見る　其角
神無月豆腐のうれる嵐哉　杉風
一しきり間もあかるし神無月　朱佃
兀山や化をあらはす神無月　ヲハリ素覽
裝束の廉も倒さぬ神の留守　大サカ松嵐
新藁の屋ねの雫や初しぐれ　許六
初時雨百舌鳥野の使もどつたか　大サカ諷竹
蔦の葉の落た[illegible]を時雨けり　此筋
蒟蒻の湯氣あたゝかにしぐれ哉　猿雖

無名庵にて當座

流れたる雲や時雨るゝ長等山　北枝
一方は藪の手傳ふしぐれ哉　丈艸
鴻(おほとり)の烈(列)を亂さぬしぐれかな　米[illegible]

惟然が田上の草庵に入けるに贈る。

もらぬかと先おもひつく時雨哉　長サキ牡年
松山や時雨の脚のはこびやう　エド利合
原中や星ばつて居て降時雨　如行
麥糞(こゑ)の土に落つくしぐれ哉　李由
時雨來る空や八百屋の御取越　汶村
水鼻にまと見せけりおとりこし　千那
同日に山三井寺の大根引　許六
乘物につかえまはるや大根引　李由
刈株に一すじ青し冬の稲　エド子珊
木がらしにいつすがりてや雨蛙　正秀
凩にうめる間寒きいり湯哉　荊口
木枯や簀子の下を通る音　エド奚魚
こがらしや百姓起て出る家　亡人馬佛
我形(わがたち)の哀に見ゆる枯野哉　智月

亡師一周忌に手づから畫像を寫して、野坡に贈て深川の什物に寄附す。

鬂の霜無言の時のすがたかな　許六

爐開や左官老行鬢の霜　翁
見臺に髪ゆふうちの火燵哉　毛紈
山寺は山椒くさき火たつかな　千那子息 角上
小若衆に念者きはまる火燵かな　李由
脇見して中さかねたるこたつ哉　徐刁
御命講や顱(あたま)のあをき新比丘尼　許六
御命講や紙子のうへの麻ばかま　奚魚
行かゝり客に成けりえびす講　去來
水鳥も寐あたゝまるか靜也　李由
明方や城をとりまく鴨の聲　許六
瀧つぼを覗て見たる小鴨哉　程已
あげ汐に弟雪ちかし鴨の聲　エド 支梁

有馬歸路

初雪やならぶ伊丹のかはら葺　朱佃
初雪や一面に降る勢田の橋　李由
はつ雪や獄屋(ひとや)見舞の重の内　錢芷
初雪や網代の小屋の高鼾　汶村
はつゆきや拂ひもあえずかいつぶり　許六
初雪をおしまではたく頭巾哉　毛紈
繩すだれ鼻で分たるづきんかな　木導
寒菊や火を燒方の眞さかり　李由
ふくろ戸の押繪に書や水仙花　木導

霜月

初霜や七夜の朝の樽ざかな　荊口
初霜に寢ひかゝるや闇の星　千川
水風呂に垢の落たるしもよ哉　許六
柊の花に明行霜夜かな　汶邨
霜畑やとり殘されし種茄子　エド 桐奚

芭蕉庵十二日月並興行

萱屋ねに霜見る朝の日和哉　同 利牛
朝霜を火桶にのこす寒さ哉　京 謙山
初しもや麥まく土のうら表　北枝
鷹啼やしのび返しの霜の冴　カヾ 遲望
干鮭に喰さかれたる紙子哉　木導
肩置の出所かくすかみこかな　李由
さはがしくならぬとり得や古紙子　正秀
紙子着て樟柱にさはる音　錢芷
飛退て鼠の笑ふふすま哉　ミノ 燕下
綿帽子の糊をちからや冬の蠅　許六

旅行

舟あてゝきや／＼氷る寢覺哉　杉風
大儀(義カ)して鍋蓋ひとつ冬ごもり　李由
人を吐く息を習はむ冬籠　千那
冬籠皷の筒のほこりかな　木導
土鑵子(くわんす)や燒火になるゝふゆ籠　米潛
しづかさや二冬なれて京の夜　其角
六條の豆腐の沙汰や夜の雪　京 吾仲
乞食の事いふて寐る夜の雪　李由
雪の日や先からさきへ子取婆(ばゞ)　程己
わづかなるスサにたよるや壁の雪　汶村

去來が雪の門を題にすえて晋子に句を望まれける時

十四屋は海手に寒し雪の門　許六
帆ばしらに雪降そふや風面　泥足
水鼻を吹きつて行雪吹かな　李由
霙降宿のしまりや蓑の夜着　丈山
川越のふどしをしぼるみぞれ哉　毛紈

これほどの霰に寒き朝かな　日鮮
冬瓜のかくてもあられ降夜哉　句空
紅の鷹の大緒や玉あられ　胡布
麥主の涙をこぼす鷹野哉　不知作者
御鷹野にすくんでゐたり網代守　李由
網代守宇治の駕籠舁と成にけり　許六

住よしにて

星寒き三ッの鼓や松のかぜ　規柳
かな物にさはる手もとや神樂姫　徐寅
晩方の聲や碎るみそさゞい　惟然
鶯に啼て見せけり鷦鷯　許六
狼のかりま高なり冬の月　奚魚
塀裏の桐の木ずえや冬の月　朱佃
冬の月杉を澄するあらし哉　木導
杉の葉の赤ばる方や冬の暮　許六

極月

寒き日は猶りきむ也たばこ切　千那
葱白く洗ひたてたるさむさ哉　翁
兩脇に足袋尾の弟子の寒さ哉　毛紈

鮟洗ふさゝらの音のさむさ哉　木導
蕎麥粕の枕の音の寒さかな　角上
大髭に剃刀の飛ぶさむさかな　許六
氣をつけて見るほど寒し枯すゝき　杉風
鴨のかしらも寒し柞原　汶村
寒ければ寐られずねゝば猶寒し　支考
さむき夜は裾に鞍置旅ねかな　左次
物賣の急になりたる寒さ哉　風國
茶大根の土に喰つくさむさ哉　乙州
寒き夜や二階の下の車井戸　探志
嫁入の門も過けり鉢たゝき　許六
納豆きる音しばしまて鉢扣　翁
臘八は何とたゝくぞはちたゝき　木導
臘八に愚痴を一臼しらげばや　諷竹
臘八や腹を探れば納豆汁　許六
禪僧や悟たうへのくすり喰　盧本
客人に見物させて藥喰　禪桃
寒聲を引づる松の嵐かな　李由
傾城もいとゞねられぬ寒念佛　奚魚

長崎に唐物もなし年の市　氷化
渡し場や人行とまる年の市　奚魚
節季候もはやす乙子の祝ひ哉　毛紈
節季候をまねて出けり煤はらひ　胡布
長明がいかに見るらんすゝ拂　介我
松かぜや琴とりまはす煤拂　臥高
煤はらひ不動に似たる眼かな　木導
すゝはきに鼻の欠たる佛哉　米櫓
煤掃に砧すさまじ雪の上　嵐蘭
すゝ掃や圍爐裏にくばる番椒　李由
煤の手に一歩を渡す師走哉　岱水
煎茶に食粒の入ル師走かな　胡布
問かへす咄もなしや年わすれ　曲翠
追鳥も山に歸るか年の暮　丈艸
氷魚といふ名こそおしけれとしの暮　千那
股引や膝から破れて年のくれ　馬佛
木綿買門の座頭やとしの暮　百里
同じ人に又あふ年の一日かな　仙化
來年は〳〵とて暮にけり　露川

行年や多賀造宮の訴訟人　許六
行年に疊の跡や尻の形　去來
膝がしら出して餅押す寒さ哉　ヲハリ東推
餅の手をはたいて出る衣配　木導
衣くばりいそがぬ顏の廿日頃　望翠

示小坊主阿段

訴を直に聽也節布子　許六
春ちかき三年味噌の名殘哉　李由
待春や机に揃ふ書の小口　浪化

正月

七種や明ぬに聟の枕もと　其角
なゝ草や次手に扣く鳥の骨　桃隣
爼板に寒し薺の青雫　此筋
古猫の相伴にあふ卯杖哉　許六

蜆子の畫贊

白魚や黒き目を明ク法の網　翁
桶鉢もほされぬ梅の盛哉　岱水
寺町や向ひ合せの梅の花　李由
から風をうけつながしつ梅の花　木導

寄梅戀

ふり袖のちらと見えけり闇の梅　野坡
梅が香や屋ねに干たる酒袋　朱佃
むめがゝや山の大師の廻り月　汶邨
梅がゝや通り過れば弓の音　毛紈
むめが香に濃花色の小袖哉　許六
上塗に蹈つくんめの匂ひかな　大サカ保直
かしこさの脱で行けり梅の花　角上
ふるひ行心はしらず坊の梅　諷竹

深川懷舊

豆腐やもむかしの顏や檐の梅　許六
かぞへ來ぬ屋敷〳〵の梅柳　翁
それ〳〵の朧の形や梅柳　千那
寶引に夜をねぬ貌の朧かな　李由
おぼろ夜や桝の楝木の鳥の糞　徐寅
黒土の庚申塚や朧月　許六
乞食の寢所かへるやおぼろ月　毛紈
朧〳〵直に霞て明にけり　杉風
海山の霞冥加や生れ國　千那

氷凝解にほつれて咲や蕗の花　米替
養父入の客のとりけり蕗の薹　木導
やぶ入や親なき里の春の雨　李由
春雨やはなれ〳〵の金屏風　許六
物よはき草の庵とりや春の雨　荊口
幸に柳も寐るや春の雨　吾仲
はる雨に水のいさみや雲出川　昌房
春雨や鶯這入ル石灯籠　杉風
逢坂や鶯きかば小關越　尚白
うぐひすやまん丸に出る聲の色　木導
鶯の鳴破つたる紙子かな　許六
うぐひすにうかれて脱や下ひとつ　千川
鶯の聲もさはらぬ日和哉　濁子
うぐひすや此まに雪も降ながし　支考
春雪や茶糞の上のむら烏　毛紈
下萠の氣色を消すや春の雪　李由
掃ためを諾かけてをく春の雪　許六
初茸の盆と見えけり野老賣　其角
傾城の生れかはりか猫の妻　木導

二　月

二ヶ月の雨より細き柳哉　汶村
梅がゝをくだく柳の梢かな　木導
風のむきけふは隣の柳哉　子珊
川上へ流るゝやうな柳哉　此筋

大和巡路の頃六田の渡りにて

伐たてゝ空に青みや川柳　徐刁
我まゝに枝のそろはぬ柳かな　如元
結たての髮を撫たるやなぎ哉　李由
唐人のうしろむきたる柳かな　許六

奈良にて故人に別る

二俣にわかれ初けり鹿の角　翁
おもひ子をしかるに似たり雉子の聲　千那
大峯や櫻の底の雉の聲　李由
蜂の子をのがれて蝶のそだち哉　丈草
蟷螂の夢見て逃る胡蝶哉　如行
眞直に矢橋を渡る胡てふかな　木導
砂川や芝にながれて鳴ひばり　許六
日中のあをみにすはる雲雀哉　謙山
くろき物ひとつは空の雲雀かな　李由
陽炎や足もとにつく戻駕籠　去來
かげろふや破風(はふ)の瓦の如意寶珠　許六
雀子と聲鳴かはす鼠の巣　翁
鳥の巣に蓋して置は椿かな　支考
春風にむかふ椿のしめり哉　野坡
古佐和や赤菜の中の春の風　馬佛

題餘寒

灸の點干ぬ間も寒し春の風　許六
きさらぎや身は思はねど押やいと　千那
糞艸の烟るも一日やいとかな　毛紈
苗代を先あてにして歸る雁　汶村
苗代やうれし顏にもなく蛙　許六
百姓の訴訟顏なるかはづかな　毛紈
蘆の葉の達磨に似たる蛙かな　木導
菜の花を身うちにつけてなく蛙　李由
菜の花や豆の粉食(めし)の晝げしき　許六
菜のはなや畑まぶりの大蕪　毛紈
涅槃像後は釋迦の立佛　左次

三　月

芳野山又ちる方に花めぐり　去來

寄霞谷元政上人

草の戸の草もゆかしや花の雲　閑照十二世 了超
雛事のつゞきにあそぶ花見かな　李由

五斗の米の爲に腰を折に懶し

年〱に猶いそがしや花盛　許六
日あたりの花見る顏や婢子(へつこ)の目　エド 孟退
花にいざ節振舞(せちぶるまひ)の遲なはり　望翠
崖端をひとりが覗けば花の山　野坡

遊五老井

花の山常にながるゝ井戸ひとつ　諷竹

東叡山吟行　二句

壁土に道せばめけり花さかり　句空
寢(ニヨ)とすれば棒突まはる花見哉　其角
饅頭で人を尋ねよ山ざくら　同
伐口を人のおしむや山櫻　徐刁
鯉のぼる瀧の濁りや山櫻　毛紈
大竹の間に咲や山さくら　木導

茶のはりにそゝつて散や山櫻　許六
山彦に散果したるさくら哉　米䊷
春の夜は櫻に明て仕廻けり　翁
金の間の庭一ぱいや八重櫻　李由
逢坂のかたまる頃や初ざくら　千那
鸛(こふ)の巣や日は入はてゝ散さくら　汶村
桃さくや宇治の糞船通ふ時　程己
實をねらふ足輕町の桃の花　朱佃
火は燃て家に人なしもゝの花　鼠彈
室咲の桃に糀のほこり哉　(ヒコネ)梨期
草餅にいな振舞や鯲汁　土芳
足あとのやさしきもある汐干哉　(ヒコネ)一咕
鹿嶋には杉菜の生(はえ)るしほひ哉　山店
松原に風を殘して塩干哉　風國
出替や傘提て夕ながめ　許六
紙屑や出がはり跡の物淋し　千那
出がはりに替るや髮の結ひ心　木導
五器箸に離れて出るや一季者　李由
出替に郡司王丸の葛籠哉　肅山

長〳〵と蛸も伸(のび)する春の海　(大サカ)附鳥
懺法(せんぼう)のあはれ過たる日の永さ　許六
永き日や大佛殿の普請聲　李由
革足袋や野はあたゝかに木瓜の花　錢芷

旅行

草臥て地にとりつくや木瓜の花　殘香

難波の諷竹、之道といひける時、しばらく行脚の頭陀をとゞめて、又美濃の方へも赴むと申ければ、

紬着る客に取つけ木瓜の花　許六
獨活の香に亭主のすゝむ出立かな　李由

其の頃岐阜の方よりの文通に

うどの香や膳のむかひの稻葉山　諷竹
藤の花さすや茶摘の荷ひ籠　許六
水風呂の置處なし春の暮　(エド)嵐竹
大和路の望の春も暮に凫　(大ツ)ウ月
行春や麓にをとす馬糞鷹　荊口
ゆく春に佐渡や越後の鳥曇　許六
行春に飽や干鰈のむしり物　李由

四月

世の中をうしろの皺や衣がへ　支考
水引て髮ゆふ姫や更衣　李由
上ひとつ脱で大工のころもがへ　許六
いつところに袷になるや黑木賣　キ角
傾城に喰つかれたるあはせ哉　程己
風の日は何にかたよる杜宇　杉風

遊長命寺

笋の鮓を啼出せほとゝぎす　丈艸
蜀魂門は胡桃の茂り哉　木導
草臥て三井に歸るかほとゝぎす　千那
杜鵑鴨川の水山法師　李由
外宮内宮とたんに聞や杜宇　毛紈
兄弟が顏見合すや蜀魂　去來
時鳥眞一文字のきおひ哉　徐刁
子もふまず枕もふまず杜鵑　キ角

大津に住み侍る頃勢田にて　はつねを聞て

ほとゝぎす勢田は鱣(うなぎ)の自慢哉　許六

烏賊賣の聲まぎらはし杜宇　翁
青天に向ってひらく牡丹哉　汶村
題觀心寺牡丹
楠の鎧ぬがれしぼたんかな　其角
三味線の音にはり合ぬ牡丹哉　木導
蠟燭にしづまりかへるぼたんかな　許六
畫賛
から獅子の血を干つけて牡丹哉　李由
芥子の香にたま〲似たるぼたん哉　陳曲
本庄の三ッ目の橋やけしの花　汶村
信濃上野を過、むさしの地にいりて芥子の花を見る。馬頭初見米嚢花といふ句の力を得たり。
熊谷の堤あがればけしの花　許六
花芥子や握りつめたるあたゝまり　木導
白川の關こえける時、竹田の太夫装束つくろひける事おもひ出て、
卯の花をかざしに關の晴着哉　曾良

うの花の葉は持ながら笹の垣　土芳
卯の花に隣ありきやぬれ鼠　諷竹
灌佛や捨子すなはち寺の沙彌　キ角
佛法を裸にしたる産湯哉　許六
傘にかゞやく色やかきつばた　木導
藤棚や池の小すみの杜若　渓魚
日あたりや紺屋のうらの杜若　許六
くらがりに覆盆子(いちご)喰けり草枕　史邦
草刈や蕗の葉もりの蔓いちご　汶村
鼻紙の覆盆子に染る晝ね哉　朱佃
筍やからげてかつぐ手傘　木導
竹の子に身をする猫のたはれ哉　許六
笋の勢にこけたり鮓の石　李由
巻柏(イヘヒバ)を植た痕ありすしの石　嵐竹

五月

夕だちのかしら入たる梅雨哉　丈草
五月雨や蠶わづらふ桑ばたけ　翁
さみだれや焙爐(ほいろ)にかける繭(マユ)の臭(かざ)　汶村
布杭に桶の尻ほす五月哉　(ミノ)可吟

許六が東武に趣(赴)くと聞て申送る
猫の手も江戸拵や夏ごろも　李由
仁和寺懐舊
柑類の花の盛の御室(おむろ)哉　(大ツ亡人)旬兒
競馬見てもどりは陣の噺し哉　朱佃
なよ竹の末葉殘して紙のぼり　キ角
むづかしきすゑのとまりやのぼり竹　胡布
東武吟行のころ美濃路より李由が許へ文のをとづれに
ひるがほに晝寐せうもの床(とこ)の山　翁
晝顔の果も見えけりところてん　許六
出女や水鏡見るところてん　木導
蓑笠もあら鵜づかひや川おろし　李由
鍛冶の火も篝(かゞり)に曇るうぶね哉　汶村
見物の火にはぐれたる歩行(かち)鵜哉　去來
伊勢荻や鵜の進む夜の風の音　馬佛
箸持て鵜籠を覗く宵月夜　朱佃
大名に馴たる鮎や大井川　毛紈
投られてもろき命や簗の鮎　此筋

涼風や青田のうへの雲の影　許六
青鷺や世間ながむる田植歌　正秀
腰のして念佛申す田植かな　ミノ 吏明
菩薩とはならでや道の餘り苗　乙州
燕の下腹さはる早苗哉　胡布
蜀龜や昨日植たる田の濁り　許六

月澤の夜遊　四句

風呂屋より直に見に行螢かな　木導
夜の更るほど大きなるほたる哉　汶村
苗塚を休み處や飛ほたる　李由

宇治川の螢は、昔日三位入道の亡魂なりといひつたふ。今の世は、

かしこさに合戰なしに飛螢　許六

六月

有難き時代にあふや土用干　杉風
内張の錢の暑さや土用干　許六亡父 理性軒

八十に餘る老祖父、子孫の榮ゆくにつけて、はやく死たしとばかり、願はれける。

一竿は死裝束や土用ぼし　許六
南天にしばしと干や汗拭　山店
撫子の泄は落さじ麻地酒　史邦
田の草にをはれ〳〵て富士詣　溪魚
夏不二にほつれて涼し雲の緣　汶村
雲の峯石臼を挽ク隣かな　李由
暮待や藪のひかへの雲の峯　去來
眞白に欄干す庭や雲の嶺　溪魚
照まけて夕立雲の崩れけり　猿雖
夕立に幾人乳母の雨やどり　許六
白雨に一足はやし旅籠町　此筋
ゆふだちやひし〳〵とやむ鳥の聲　李由
桐の葉に埃のたまる暑さ哉　孤屋
大磯や砂のひかりのあつさ哉　陳曲
愁に兀長持の暑さかな　如行
川端をうちかへしたるあつさ哉　游刀

伊賀の舊友より文通の返しに

米の直も大かた似たるあつさかな　大サカ 羅香
蟬鳴や土用の中の書談義　程已

木曾路

棧やあぶなげもなし蟬の聲　許六
あつみ山吹浦かけて夕すゞみ　翁
中入や面をはづして一すゞみ　汶村
乳母共の食の噂や夕すゞみ　毛紈
此あたり二三度もどる涼み哉　野坡
前おたれはづして町の夕すゞみ　李由
山伏の髮すきたてゝ夕すゞみ　許六
中間の塀を見てゐる夕すゞみ　木導
肩衣はおの〳〵すゞし帆かけ船　支考
あげ筥に涼むばかりぞ向ふ風　長サキ 魯町
涼しさや松の葉越の破風造　サカ 野明
爪紅の濡色動く淸水哉　長サキ 卯七
鷹匠のはしりつきたるし水哉　徐刁
いそがしきから臼踏の團かな　許六

ある方より書扇の贊に當座所望

朝顏や扇の骨をかきね哉　其角

かさねて武者繪かきたる扇つきつけられて

すゞ風や輿市を招く女なし　其角

旅行

涼風や峠に足をふみかける　許六

月代をさはぎたてけり蚊のうなり　苔(イガ)蘇

蚊遣火や食にさしあふ西の岡　乙州

世をいとふ心のはしか蚊屋の中　謙山

旅行

大垣は夜明になりぬ眞桑瓜　(ヒコネ)眠石

口の代で蝿をはせぬか瓜つくり　利合

水無月やとりをくれたる舟日待　溪魚

宿山中

川越や蚤にわかるゝ横田川　彫棠

蚤虱馬の尿するまくらもと　翁

七月

素堂の母、七十あまり七としの秋、七月七日にとぶきする。万葉七種をもて題とす。これにつらなる者七人、此結緣にふれて、各また七叟のよはひにならはむ。

七株の萩の手(千カ)本や星の秋　翁

織女に老の花ある尾花かな　嵐蘭

布に煮て餘りをさかふ葛の花　沾徳

動きなき岩撫子や星の床　曾良

けふ星の賀にあふ花や女郎花　杉風

蘭の香にはなひ待らん星の妻　其角

むかし此日家隆卿、七そじなゝのと詠じ給ふは、みづからを祝ふなるべし。今我母のよはひのあひにあふ事をことぶきて、猶九そじあまり九つの重陽をも、かさねまほしくおもふ事しかなり。

めでたさや星の一夜も朝顔も　素堂

五位の聲まだらに更ぬ天の川　汶村

かさゝぎの橋や綸入の百人一首　許六

七夕や馬すし(すゝカ)ますする川の端　錢芷

初秋や帷子ごしにかゝる雨　毛紈

あさがほのうらを見せけり風の秋　許六

燒たての食ひにほひや秋の風　李由

壯ど壁に何をたよりの秋の風　程己

作り木の糸をゆるすや秋のかぜ　嵐雪

さびしさや馬屋の蚊屋の秋の風　汶村

朱の丸の入日の中や秋の風　毛紈

宇津の山を過

十團子も小粒になりぬ秋の風　許六

同じ頃島田金谷の盆火に感をます

聖靈とならで越けり大井川　同

追悼

玉棚の奥なつかしや親の顏　去來

芋の葉に風の吹けり玉まつり　徐刁

そなへ物名は何〳〵ぞ魂まつり　卓袋

秋の蝶一葉と散や夢の中　(大サカ)一桐

蜻蛉のつつとぬけたる廊下哉　(ミノ)斜嶺

贈清貧僧

下帶のあたりに殘る暑さ哉　李由

初秋や親に離れし相撲取　米巒

相撲取の腹に着けり虻の聲　木導

投足に灯籠打消すすまひ哉　朱徊

禪身に麻の匂ひやすまひ取　許六
後から家老のあふぐ勝相撲　汶村
傾城の汗臭くなるをどり哉　木導
食の湯の汗に出たるをどり哉　李由

訪舞庵

秋さびし手毎にむけや瓜茄子　翁
はしり穂を分て出けり三日の月　李由
三日月や柱にすはる高灯籠　錢芷

八月

八朔に酢のきゝ過る膾かな　許六
鶏頭を黒うてらすやけふの月　文鳥
酒臭き皷うちけり今日の月　キ角

病床

捨らるゝ目に度〳〵や今日の月　馬佛
夕月や無事に穗を出す竿はづれ　千那
名月は蕎麥の花にて明に鳬　李由
名月のこれもめぐみや菜大根　許六
小草までともにそよめく月見哉　徐刁
十六夜はとり分闇のはじめ哉　翁
いざよひや有馬を出てかへる人　許六
十六夜の氣色わけたり比良伊吹　汶村
いざよひや堅田かもとる神明講　毛紈
日暮から長屋へやつて碪かな　如元
松茸の笠のひゞれる碪かな　徐刁
松茸や圍爐裏の中に植て見る　イセ園友
松茸や大きな聲のなぐれ賣　吾仲
葉隠れの螇蚸のやどりや番椒　米巒
生れつく草の青みや秋の虫　文鳥
くるゝほどばせをにひゞく虫の聲　許六
屋ねまくる慕(暴)風の中や虫の聲　李由
虫の音や木綿所のわた車　汶村
畷豆を引手にはづむ鎰かな　爲有
豆まはし廻しに出たる日向哉　支考
蜩の音や株ほす藁の日のよはり　汶村
蛉蜩のすがたも見えず稲雀　李由
稲刈の其田の端やこき所　許六
禪門の珠數持そふる落穂哉　木導

亡母年回追悼

同年の尼くづをれて袖の露　李由

おなじく供養に詣て

唐がらし菜摘水汲法の人　許六

源氏の書賛望まれて、いなみけれど、ゆるさゞれば、ひきのけて、

傘持も月にをくるゝすがたかな　其角
大きなる家ほど秋のゆふべかな　許六
石山の石にも蔦のうら表　乙州
霧雨の空を芙蓉の天氣哉　翁
朝霧や水をはなるゝ鵜の雫　毛紈
世の中を這入かねてや蛇の穴　惟然

孟耶観の夜話

夜ばなしの長さを行ばどこの山　丈草

九月

塗物にうつろふ影や菊の花　木導
顔痩て花肥したり菊作り　李由
菊は猶捨じ佛のたてからし　千那
猫の毛の濡て出けり菊の露　佁水
濡落の雫霽けり菊の露　朱細

菊の香やふるき難波の呑手共　千川

加州山中の重陽

山中や菊は手をらぬ湯の匂ひ　翁

水鼻にくさめなりけり菊紅葉　其角

宿山寺

むく起や峯の紅葉の朝しめり　李由

木曾路にて

てりたてゝ夕日舂け初もみぢ　野童

棧や命をからむ蔦もみぢ　翁

遊五老井　二句

早咲の得手を櫻の紅葉哉　丈草

あを空やねざしもならす秋の水　仝

題十三夜

月影やこゝ住よしの佃島　其角

穂のうへに高低もあり後の月　游刀

月代に吃と向ふや鹿の胸　木導

小男鹿やころびうつたる蕎麥畠　許六

むら尾花ふりむく鹿を招きけり　梨期

穂すゝきをたばねよするや畑の畔　蘆本

秋の野をあそびほうけし薄かな　李由

あたゝかに九月日和や藪の照り　水魚

歸り來る魚のすみかや崩れ簗　丈草

又來たと鴉おもふや小田の雁　支考

稲主に啄をかくすや小田の雁　毛紈

雁の行くづれかゝるや勢田の橋　北枝

雁がねのむすび合すや眞野堅田　李由

自畫自賛　二句

白雁や野馬ををどす草の露　許六

落雁の聲のかさなる夜寒哉　仝

訪鴛里舊友

病人と鉦木に寐たる夜さむ哉　丈草

客人の夜着押つくる夜寒哉　程己

遊五老井

毬栗の笑ふも淋し秋の山　李由

いが栗や落る合點に突て迯　苔蘇

徙移や先へ來てゐるきり〴〵す　露川

干鮭の目へかゝんだる竈馬哉　許六

磯際の波に鳴入いとゞかな　惟然

訪ニ隠者一不レ遇

喰殘す柚味噌の釜のいとゞ哉　程己

青き葉をりんと殘して柚味噌哉　園友

麥地ほる一くらがりや民の秋　汶村

のび〳〵て衰ふ菊や秋の暮　許六

謝下芭蕉被レ訪ニ艸菴一悦而舊交上

十年もと葉一つよ暮の秋　禪桃

行秋や身に引まとふ三布蒲團　翁

匂ふたぎ追加

閏月

芭蕉後の遊行、餞別に

五月雨も日と月のびよ閏月　石菊

（『別座鋪』「一月延びよ」とあり。）

さみだれにふた月ぬるゝ青田哉　芳山

衣配りまつや師走の一かさね　立甫

雛の來ぬ閏に咲や遲ざくら　如元

三月も閏の分の寒さかな　水魚

極月に閏ありて、次のとし歳旦
味噌つきより七十五日目也花の春　エド 似春

大

晦日も過行嫗がゐのこかな　尚白
文月の三十日おどろく灯籠哉　此竹

小

助番や二十九日の大晦日　ヒコネ 孟什

朔日

朔日は猶あはれなり鉢扣　イセ 柴雫

日蝕

日蝕の日に喰入や栗の虫　李由

月蝕

練絹の色もうるむや月の蝕　汶村
月蝕の露にあてまじ白牡丹　木導

彼岸

百姓の娘の出たつひがんかな　許六
くゝ立の花うちこぼす彼岸哉　支考
きら／＼と秋の彼岸の椿かな　木導

土用

おぼつかな土用の入の入ごゝろ　杉風

八専

頭痛する八専中や椎の花　程己

十方くれ

てり曇る十方ぐれのあつさ哉　毛紈

庚申

庚申や殊に火燵のある座敷　残香

甲子

甲子をまつや隣の菜菔引　米巒

入梅

胴亀の夜番を起すついり哉　銭芷

八十八夜

ふく病につれなき霜の名残哉　千那

二百十日

菜大根に二百十日の残暑かな　李由

半夏生

半夏水や野菜のきれる竹生嶋　許六
石竹も半夏に胡麻蒔ついで哉　朱徊

冬至

門前の小家もあそぶ冬至かな　不知作者

ゐのこ

しみ／＼と餅腹寒きゐのこ哉　徐刀

寒

月花の愚に針たてむ寒の入　翁
寒に入こゝろにかるし夜着の裾　卓袋

節分

大豆をうつ聲の中なる笑かな　其角

年内立春

冬の春心の外や梅の花　智月

立春

春立や歯朶にとゞまる神矢の根　許六

跋

日本書記は天理の賾を窮め、源氏物語は人情の賓を盡すとかや。今韻ふたぎと題せる二巻は、李由・許六が腸なり。木導・汶邨其ほか羅漢のやうなる者ども、花の雲にあそび、月の水にたゞよひ、天人一如の俳諧の一揆、赫然として百尺の竿にともし火をかゝぐ。詩歌・管絃の舟をかざらば、おの〱身を和げて、夢乗ぬべき彼廬山東林の交り、遠法師・陸道士、車座に酒のむ顔ならむかし。

蒲萄坊　僧千那書

印　印

孟耶觀主頭
月澤衛侯　買年　李由

五老井主人
武林　來羽官　許子六

糸いつや花之葉校

句塞　　許六選

五老井記

霊泉あり。水のたゝゆる事纔に尺あまりして、三尺の盆池より流れ出る事、浮〻滔〻タリ。五老井と名づく。別墅をひらけて五老菴を結ぶ。主人姓は森、名は許六、みづから五老井居士と潜す。五老は予が別號也。驛が原不知哉川流れて、

鳥籠の山南にちかし。十旬の休暇をうかゞひ、半日の閑を領する所也。遙にきく、東江はせをの翁、錫を坂西に趣(赴)しめ給へるの折ふし、霊泉を共に汲て、風騒の匂ひを葎の中にとゞめむとならし。其水の清き事は、恵山の泉脈を通じ、あまきとは肅州の金泉にひとし。立かへる春の朝、白散の薬をさげてより以後、四時の生涯を養ふ事かぞふべからず。一とせの間にわけて泉を翫ぶ事は夏を主とす。霍山鳴が井盤の納涼、西上人の柳の陰も、今此水に彿添ぬ。其徳、其要、廣大にして、神佛の尊をすゞしめ、且ッ堯の井を掘リ、禹の水出を夷らげてより、四民猶おだやかならしむ。後に山あり。さゝ栗の岡といふ。晴に望み雪に對して、眺望きはまりなし。湖水の島〻、江南江北の山のたゝずまひ、日枝伊吹の嵩、比良三上の高根に眸をさく。申酉

の方に衙が岡あり。聖徳太子の御歌より、犬上の名所となりぬ。杖を曳ては籬を廻り、岡に登る。薇は甕(アヘモノ)をたすけ、栗は茗-粥を炊ぐ。抑庵は纔に莚三枚を設けて膝を窄め、賓主六人一座に全からず。茶碗五ッ、枕五ッ、筆墨の外に物なし。月に杜宇を添へ、驛路の鈴に里の砧を合て秋をかなしむ。庭に箒をあてず、樹に木餌(ハサミ)をを入ず。窓外の草自ラなり。たま〳〵畑を穿ては狛の瓜種を求め、五色の茄子を植るといへども、山蟻の爲にせゝり落さる。噫々潜居士文匣に僻する事二十余季、子膽芝瑞を師とし、楊子呆道人が骨髄を窺て、雪裡の芭蕉夏天の梅、自然に一味の風雅を兼むとす。世上、予が筆痕を樂て、予の心頭のたのしびをしらず。風雅は是非をあらそひ、書圖は郷童の前の戯となる。いまだ風雅の爲に文書を樂むものをきかず。予と共に志を同して、

なし四隣の鳥の聲花間の蜂蝶のみ笑て
青天に腹つゞみを鼓し五老の流に脚
を洗て還る于時元祿五季壬申春貳
月於盤欒樹林下濺毫
水すじを尋ねて見れば柳かな

はやく我をたすけよや〳〵。終日樹下に徘徊すれども、更に答る物なし。四隣の鳥の聲花間の蜂蝶のみ笑て、青天に腹つゞみを鼓し、五老の流に脚を洗て還る。于時元祿五季壬申春貳月於盤欒樹林下濺毫。

水すじを尋ねて見れば柳かな

印　印

元祿壬申冬

十月三日許六亭興行

けふばかり人も年よれ初時雨　はせを
野は仕付たる麥のあら土　許六
油實を賣む小粒の吟味して　洒堂
汁の煮たつ秋の風はな　岱水
宿の月奥へ入ほど古疊　嵐蘭
先工夫する蚊屋の釣やう　筆

ウ才はりの傍輩中に憎まれて　水
焼焦(タキコガ)したる小妻(ツマ)もみ消(ス)　翁
粽つむ笹の葉色に明わたり　六
輾(テ)磑(ガイ)をのぼるならの入口　堂
半分は鎧はぬ人もうち交り　蘭
船追のけて蛸の喰飽(キ)　水
宵闇はあらぶる神の宮遷し　翁
北より荻の風そよぎ立つ　六

八月は旅面白き小服綿　堂
焼山こえの雲の赤はげ　蘭
打起す畠も花の木陰にて　水
つらも長閑に鶴の卵(カイ)わる　翁
名春ふかく隱者の富貴なつかしや　六
當摩の丞を酒に醉する　堂
さつぱりと鱈一本に年暮て　蘭
夜着たゝみ置長持の上　水

灯の影めづらしき甲待チ　翁
山ほとゝぎす山を出る聲　六
兒達は鮎のしら燒ゆるされて　堂
尻目にかよふ翠簾の女房　蘭
いかやうな戀もしつべきうす雲　水
琵琶をかゝえて出る駕物　翁
有明は毘舍門堂の小方丈　六
吉のまはらぬ狐やゝ寒　堂
ウ　一すじも青き葉のなき薄原　蘭
篠ふみ下る宮根路の坂　水
宗長のうき寸白も筆の跡　翁
茶磨たしなむ百姓の家　六
花の春まつへて廻る神樂米　堂
七十の賀の若菜薤立　蘭

四唫

鱈船や比良より北は雪げしき　李由
蘆浦納豆寐せ初る頃　許六
酒道具つけて家賣年暮て　汶邨

京の返事に機嫌なをする　徐寅
月くらき腰湯に裾のぬれ廻り　六
一城わたる四十雀鴈(シ)　由
ウ　盆過に濱手の早稻を米にして　刁
女房の供に夫(ト)のいかるゝ　村
門口に化粧立たる宿の者　由
向ふに付る日野の壺皿　六
紫蘇の葉のちり〳〵となる夏の暮　ソン
ざんない尻のあまる小盥　刁
引(キ)飯(メシ)の算用たてる男部屋　六
肩で風きる後の出かはり　由
大坂は木綿のやすき秋の來て　寅
月夜に語る奥の世の中　村
一あらし老樹の花の崩れたち　六
池は田蕎麥に蛙鳴なり　由
名　永き日の十三鐘に暮かゝり　村
惣〳〵醉て禮をいはるゝ　刁
肥足にこびとの革袋(たび)のはな緒ずれ　由
廻したふれのつゞく前橋　六

傾城の心中咄一ぱいに　寅
上の出駕籠の揃ふ朝明(ケ)　ソン
掃ちぎる小庭に柘を作りたて　六
うつぶけて置溜塗の丸　由
物喰の先ロもとにほれ初て　村
やいとの隙をもらふかこつけ　刁
そよ〳〵と廂に風たつ夕月夜　由
腮(アゴ)に挟でむすぶ犢鼻褌　六
ウ　豊(テ)島(じま)御(ご)座(ざ)一枚持て草枕　寅
河に聞あく信濃(ぐ)海道　ソン
鵤(イカルガ)につちくれ鳩の啼つれて　六
糊のまゝ子の鍋をはだける　由
此春は閏に花の遲なはり　村
苣も赤菜も冴かへる色　寅

参吟

秋もはや鴈(シ)おり揃ふ寒さ哉　野坡
藥を見てからかゝる屋普請　許六
暮の月宿へはいれば草臥て　利牛

何ともしれずうまひ臭ずる　坡
大勢の中で精出す疊さし　六
はやい七ツの鐘の穿鑿　牛
ウ
葬禮に傘は隣へことづけて　ハ
女房の酌に一ツ呑む也　六
餅米は手つけの銀をあてゝ置　牛
かい暮かゝる番町の坂　坡
用心のやねの礎に雪降て　六
玉子の殼の多き掃溜　牛
何事も年を越れば長閑なる　坡
日野商人の戻る春風　六
後家鞘をひねくり廻す花心　牛
踏崩さるゝ寺の芝土手　ハ
しん〳〵と月夜の水の落る音　六
惣嫁追出す肌の寒けさ　牛
名
秋さきはならぬ米屋もさはめきて　坡
峯入前の三井の振舞　六
一ふりの雨に涼しき槇の色　坡
女子ばかりがもの思ひ居る　六

煤掃の道具で戀の現はるゝ　ハ
はやう濟たる町の寄合　六
雪院(隠)は場を通つて奥に有　坡
ばんばともえて食の焦つく　六
旅人のもらひばかりに伊達をして　ハ
法界祭日ぐれから行　六
霜稗の穂の見え初る月の代　坡
醉の競ひに鹿を追也　六
ウ
根原越へ水のたしなきかり枕　同
痺癬をうつる江戸の絹買　坡
懸隔に暑や寒むやの梅雨の中　六
立まはつては座敷掃なり　坡
一年の醬油喰込む花盛　六
彌生の雉子の鳴さかる聲　筆

三吟

雌を見かえる鷄のさむさ哉　木導
宵の豆腐の氷る俎板　朱伷
たばふたる昨日の草鞋隙やりて　許六

壹歩が錢を腰中に巻　導
暮切て灯とぼすまでの薄月よ　伷
鷹場の上を雁わたる也　六
ウ
ひつそりと曹洞宗の夏は濟て　導
せつかれて又藥研もどする　伷
五器ふいて下女は化粧にかゝりけり　六
泣出すたびにくらがりをむく　導
芽〳〵とよい茶を入て茶漬食　伷
座敷へ昇て上る駕物　六
鐵の手に琥珀の珠數のたふとさよ　導
藪も動かぬ嵯峨の有明　伷
砧うつ隣は馬のいなゝきて　六
漁村の並ぶ濱の澁糟　導
葭葺の五門徒寺に花もちり　伷
彌生も暮て夜着の洗濯　六
名
筒藥首にふらつく春の風　導
宮井ゆたかに藤堂の藤　伷
早乙女の子持は畦に腰懸て　六
前に鐵よるかひ割の帶　導

瓜茄子戸板の上の魂祭　櫅
まだ瞿麥に秋の初かぜ　六
御前ッから甲を脱で月を見る　導
矢口のさとにかゝる玉川　岫
桑粒のほろ〳〵落る雨の中　六
脚半の紐の廻る草臥　導
精進に箸馳走する旅の宿　岫
解毒の禮を孫にいはする　六
ウ
珊瑚珠の色うつくしき夏羽織　導
木どりではてぬ夷大黒　岫
正月の夜食は餅に極りて　六
佐和山るゐの蕎聞ゆる　導
花盛つれ〳〵草を引出し　六
春から雨の降つゞく年　岫

三唫

秋かぜに吹すかされてけふの月　汶邨
河原柳の一まいにちる　許六
相撲とりの勧進もとを食たてゝ　木導

たよりのたびに上る綿の直　村
かしこさに伯父の跡まで丸めけり　六
能するやうに家の手番　導
ウ
いそがしう見せるも戀の一思案　村
膳にほろりと泪つれなき　六
尼になる宵は潜に洗ひ髪　道
星は氣疎く光る雪空　邨
荒海の久世戸を越る鴨の聲　六
五十過てはならぬ先懸　道
土器をしばしひかゆる葬の内　ソン
青い疊に月の澄きる　六
灯籠の操もちかづく地藏盆　道
白川石の色の露けさ　村
花ざかり衣類法度の御觸狀　六
出替時の外トのそはつき　道
名
より飴に日のさす頃は長閑にて　ソン
伊勢路の者の錢の取あき　六
染物に雲の模様も一はやり　道
作で半分過る城下　村

めつきりと拵え藥仕出來して　六
むす子が嫂をあつらえてやる　道
さゞ波や大津にたよる浪人衆　ソン
又ほめられて見する手鑑　六
夕涼み水増雲に夏の月　道
掃除の跡の十藥の臭さ　村
傾城の土葬はかなき淺茅原　六
小僧が母にぱつと名の立　道
食繼に莖大根を折曲て　邨
師走にしきる支那の糞取り　六
水風呂を居えて焼たる藏の内　道
去年の燕の家を忘れぬ　ソン
本ッ町の垢塵の末は花曇　道
つけ木の輾る東風遙也　六

二二(四)吟

誰宿ぞ穴明き岩に紅牡丹　毛紈
細ふ涼しき水のくま〳〵　米櫅
西行の軍法ばなし小夜更て　程己

秋もやう〳〵湯豆腐の月　許六
菊の花金をならべて遊びけり　ラン
穂むけの風に五反百姓　紈
ウ
ひた〳〵と腹疫病にまいられて　六
武士荷が來れば馬が休まぬ　己
水もなき河原雲雀の夏の雲　丸
よい寺になる黄檗の山　楷
月雪にいつも八百屋の作兵衛　己
五年が中に女房三人　六
奉公の邪魔になるほど戀をして　ラン
酒とたばこで世にもすむ哉　紈
花の陰越前衆の旅枕　六
一本鐘に冴かえるなり　己
山ごしのかねに六尺をき直し　紈
戸板平目の鍋をとりまく　楷
名
順風にしらゝ吹上見渡して　己
物つかふたる公事の勝口　六
とやかくともはや日もなき年のくれ　楷
只身代は眞木の簡略　丸

傾城の地女になるもあはれ也　六
脉が早ふて夢もむすばず　己
青みたる下弦の月の夜明方　紈
松茸植る野屋鋪の山　楷
峯入の過怠に宇治の橋かけて　己
即非の下で禪にかたぶく　六
閑さにやつれ果てたる擧白集　楷
芳野もかれて冬は來に兔　丸
ウ
一時雨筏に下す炭俵　六
晩まで通す晝と場の馬　己
から〳〵と烹豆の上に日のさして　紈
寺請状の判を見に來る　己
よい花もはや端〳〵は火をともし　楷
霞の中にうぐひすの聲　六

二唫

しゆんけいの膳居え渡す花見哉　許六
日向に照らす顔の陽炎　李由
奉公ぶり出替前のきは立て　同

中でとつたる屋根の麥から　六
月の秋うそ〳〵時の切通し　同
腹のふくれた躍聞ゆる　由
ウ
上下で送りむかひの魂まつり　由
死ごしらえの布を嗜む　六
ちやつくりと碁の餘にわな懸て　由
驗氣を得たる尾張商ひ　六
慳貪な女房の顔を化粧だて　由
烏帽子で禰宜の出ッ入ッする　六
青雲に若草山の夏あらし　由
氣をつけて見る小の十五夜　六
初鴈のまだ寢所も定まらず　由
革羽織着て江戸の良寒　六
する〳〵と大根の市の四ッさがり　由
姉がもどつてふえる喰口　六
名
白い物直を持揚て年の暮　同
牛がつかえてよどむ逢坂　由
上紺の衣にはねのきれ草鞋　六
ひよつと餌さしの出る塀間　由

ほか／＼と豆腐の布に湯氣立て　六
兄弟ながら妾奉公　由
祐筆の手を習ひ込むたはれ文　六
御夜詰ひけて世間靜る　由
鼠鳴に灯ロの丁子祝ひ入　六
棚から物の落た音なり　由
水風呂の中より見たる暮の月　六
後の彼岸の談義草臥　由
醬油の二番にかゝる初紅葉　同
田舍芝居の穢多をこはがる　六
雨乞の躍の代に屋ね葺て　由
わめいて通る宿の馬方　六
竈の火もほのかに明て茶の出ばな　由
分限見かけて多賀の頭さす　六

亡師三回忌　報恩

月雪に淋しがられし紙子哉　許六
小春の壁の草青みたり　李由
蕎麥切のおろしの音に座つくりて　木導
相役同志の御用さゝやく　朱徂
懷のふくれてつれる夏衣　汶邨
きふな厂齒を人に押るゝ　馬佛
家／＼に烟をたてる揚や町　米潜
松めづらかに羽子ひゞく也　胡布
數の子に叩き牛房の小重箱　毛紈
春日奥ある醫者の新宅　程己
人宿の後はやがて城の塀　徐寅
外郎買に荷は先へやる　六
雪隱を覗てまはる腹ごゝろ　由
根太つぶして相撲崩るゝ　導
秋の日に村中こぞる喰ひ祭　徂
いつか出てある暮方の月　村
息災で花見る人はうらやまし　佛
一歩もらふて長閑也けり　潜
二
雪消て上る佛の御洗濯　布
藤に暮たる細呂木の關　紈
佩板のひた／＼濡るゝ川越て　己
味噌燒門を叩き明たり　刁
から臼の棹に積たる古莚　六
馬が放れて菅笠を喰ふ　由
いひはやす鏡の食屋見て行む　導
早麥あからむ並松の風　徂
黒い帶女の仕たる夏の月　村
夜宮の町の山のはり番　佛
跡先にだんだと通る十駄物　潜
木曾材木でかゝる琵琶橋　布
ならべ置大落雁の箱の蓋　丸
日は赤う出て雪のひらつく　己
後から被の裾をつまみ上ゲ　刁
門の外より拜む大佛　六
ごろ／＼と車の音の花曇　由
其衣更着の夢の境界　筆

辭世

日は横に鼻は竪也雪佛　馬佛

悼馬佛

茲に予霜月廿二日六成堂の馬佛、例の箭血をはしらして終に身まかりぬ。六年の多病に毎座吟席を缺。ことしも仲秋又病床に臥て、諸士が三夜の遊をしらず。事終て一軸を送れば、跋を作て自ラ病馬佛と披露す。しかはあれど亡師三回忌の追善報恩の席まで這出、そくさいで花見る人はうらやまし　といひ出す句もけふのむかしとはなりぬ。蒼くすゝどきものゝふの顔色も、千鮭と死貌をあらそひ、兩眼を利猪にかけられ、いたづらに烏の腹を肥す。噫〻かなし。風雅の片腕をおとされ、花下月前の遊びにながく一人を缺事、千悔万悔の悲涙、空しく靈前にそゝぎ、各燒香追悼して斷金のちぎりを謝すのみ。

李由

千鮭もさぞな子共の離れ際

時雨てぱつと友千鳥なく　錢芷

道中の味噌にこまらぬ旅ねして　許六

湯桶の酒に月のかたぶく　朱徊

主の留守ぬけて出たる一をどり　木導

うす柿の香に秋の初風　程己

湖を北に見渡す柴屋町　汶村

西大名の二かしらつく　徐寅

鼻よせて嗅で廻れる鮎の鮨　毛紈

灸の順〻にかたびらの蠅　米翀

放參の鉦しづまれば杳の音　執筆

癸酉記行并師友之餞別

許六離別詞

去年の秋かりそめに面をあはせ、ことし五月の初深切に別をおしむ。其わかれにのぞみて、ひとひ草扉をたゝいて終日閑談をなす。其器畫を好む。風雅を愛す。予こゝろみにとふ事あり。畫は何の爲好や。風雅の爲好といへり。風雅は何爲愛すや。畫の爲愛といへり。其まなぶ事二にして、用をなす事一なり。まことや、君子は多能を恥と云れば、品ふたつにして用一なる事可感にや。畫はとつて予が師とし、風雅はをしへて予が弟子となす。されども師が畫は、精神徹に入、筆端妙をふるふ。其幽遠なる所、予が見る所にあらず。予が風雅は夏爐冬扇のごとし。衆にさかひて用る所なし。たゞ釋阿西行のことばのみ、かりそめに云ちらされし、あだなるたはぶれども、あはれなる所多し。後鳥羽上皇のかゝせ給ひしものにも、これらは歌に實ありて、しかも悲しびをそふるとのたまひ侍しとかや。さればこのことばを力として、其細き一筋をたどりうしなふる事なかれ。猶古人の跡をもとめず、古人の求たる所をもとめよと、南山大師の筆の道も（にもカ）見えたり。風雅も又これに同じと云て、燈をかゝげて、柴門の外に送りてわかるゝのみ。

元祿六孟夏末　風羅坊芭蕉述

おなじく五月六日の頃、旅だゝむと申つかはしけるにおどろき、例の次郎兵衛を使として、後の旅は我も木曾路を經て眞一文字に五老井と志す。彥城の諸子にはやく對面せむ事をつねぐにねがふ。かならず人に沙汰する事なかれと、こまやかに文して色紙短尺繪讃の類もたせ給はる。猶離別の情あさからずとて、發句などいとねんごろにしたゝめ、かさねて詞書をそえて、むまのはなむけを寄られたり。井杉風子各餞別あり。

其詞

木曾路を經て舊里にかへる人は、森川氏許六と云ふ。古しへより風雅に情ある人々は、後に笈をかけ、草鞋に足をいため、破笠に霜露をいとふて、をのれが心をせめて、物の實としる事をよろこべり。今

仕官おほやけの爲には、長劔を腰にはさみ、乘かけの後に鑓をもたせ、歩行若黨の黒き羽織のもすそは、風にひるがへしたるありさま、此人の本意にはあるべからず。

椎の花の心にも似よ木曾の旅　はせを
うき人の旅にも習へ木曾の蠅　同

兩句一句に決定すべきよし申されけれど、今滅後の形見にふたつながらならべ侍る。

餞別

笠摺や莽わたしたるあやめ草　杉風
梟啼て跡もさらなる靑田哉　桃隣
木を流しぐ行涼しさよ　百里
木曾山水の旅行をそゝれば書圖俳諧のたすけにすらんといひて

蚊のなきを又かこつけて旅ね哉　草氏才波
夏草にあくび移さむ駕籠の者　安氏孟退
千鳥たつ夏の氣色や諏訪の海　田氏奚魚

甲斐の道すじを教へて

手の跡をわすれな甲斐の覆盆子時　門氏陳曲
不二淺間中にかけはしほとゝぎす　林氏隣郭
いに衾し客の形見や夏の月　松氏日鮮
夏山の形み忘れぬわかれ哉　前氏達化

歌仙ども多ければ、餞別の誹諧今こゝに略す。

甲路記行

五十年の行脚に一點の雜も崇らぬは、西上人獨の上也。蘇氏八州の逆旅は、皆不平の上の流浪也。古人は是なるも非なるも、共に風雅の境を出ずして、万古の情を述たり。我雲水の客となる事二十季。ある時は不破淸見が明月に鞭をあげ、士峯の空に顏をあふぐ事五たび。又むさしかむづけを經て、碓氷の雪にまよひ、木曾の若葉を分入事已に六度に及ぶ。東西南北に奔走する事合て十一度也。水村山郭、木のふり石のたゝずまひ、前後左右はまのあたりにおぼえぬ。明朝趣(赴)むとする道は、甲斐の猿橋を渡て上の諏訪にかゝり、又もや木曾の川音のゆかしきに枕を支むと、灯下に先達の紀行を拔きて、名所の和歌古戰場の由來をとゞめて旅行の囊に収め、足袋はゞきの破を補ひ、竹杖の節をおろして枕の上にかけたり。我むつまじき翁に別れ、行末覺束なく心細き身に成行空に、蜀魂の一聲も尋常ならず。月落烏啼て、やゝ市に行人の足音は已に首途をすゝめぬ。明れば五月六日武江の舘を退。

卯の花に蘆毛の馬の夜明哉

日々の文章は、去ぬる記行にゆづりて筆をとゞむ。猶名所ところ〴〵の句共おほくは前輩の集に出れば、これをもらす。しかはあれど、旅の情のおかしきをあつめ、たはぶれに賦作り、旅すく翁のなぐさめに書あつめて草庵へおくる。今ついでよければ、亡師のかた見の一烈(列)にこれをしるす。

風狂人が旅の賦　并小序

旅は風雅の花、風雅は過客の魂。西行宗祇の見殘しは皆誹諧の情也。我翁白川の田植歌を聞初め、奥羽の間を廻り、高舘の夏草に兵共が夢を驚し、あづみ山の夕すゞみに

は、吹浦をながめ、佐渡に横たふ天の川に初秋の袂をしぼる。それより蛤の二見を渡て、七百三十余程を吟ず。曾良が落髪の力量を感じ、一鉢の飯を分て風流を盡さる。ひとひばせを庵を敲き、翁の雑談に及ぶ時、予に旅十缺の繪をかゝせて、讃して何某が求めに應ず。其風雅にたより俗語をあつめ、狂賦五段となす。穴賢。奥の細道、草枕の類には非ず。

旅店のさま上段に書院床、鈫菱のすかし、火のなき火燵にやぐらかけて、門口の入湯桶傾て居えたり。底に小砂のさはるは、夜べの殘りもいぶかし。出女の堅嶋（縞）は春秋をしらず。根だ板敷は落て、隅〴〵まで蟲とゞかず。天井ふすまは雨もりにきはつき、鉄行灯はくらく、紙は童部の心といふ事に燃えたり。錢賣草鞋賣にせがまれ、やう〳〵に枕を傾け、心よき寐入ばなは、馬さしの聲に夢を破る。出たちは七つと云ふくめたるに、旅人も亭主もよく寐て、夜の明てふためくつらもにくし。

大名の寢間にもねたる寒さ哉

道づれの上をいはゞ、船頭の胸づくしをとり、駕籠廻しをたゝき、馬さしとつかみ合、一僕の跡にさがるをねめまはし、鶏の鳴ぬにつれの男を起し、挑燈とぼして夜道を行を手柄のやうにし、入湯の一番に入たがるは何の爲ぞや。つはの枯葉に雨のはら〳〵といふ前に、

世話やきの友にあきたる旅の宿

といふ句も此情にかなへり。

海道の賣物に餅酒のなき所もなし。摺鉢峠の餅を喰ねば、未來焔王の前にてからきめを見るといへり。寒天にも冷素麵をすゝむるは、逢坂の茶屋、饅頭のほか〳〵と見えたるは見付の臺也。玉子の煮ぬきは木曾の族、はな紙は竹にはさみ、錢の看板は筒をかけたり。昆（崑）蒻の田樂は何者の喰けるぞ。

乗懸に春の蜜柑や宇津の山

舟川の上、馬駕籠の情、しば〳〵かぞへがたし。五月の大水もかり借（かし）の手形に書入れ、おのが艸の戸は流るれど、首たけの借錢を納してしばらく息をつくものは、嶋田金谷の賊也。水の淺深を何文川（なんもんがは）とこたえたるは、大きなる洒落也。天龍の中の瀬は、馬人足を空にまどふ。乗る人は股だけ入て荷を肩にかけてまち、あがる者は負れ支度して舟端に立ッ。旦那が鑓をかたねたるは渡し場の情也。馬士駕籠昇は輕重に日月をおくり、一盃の酒に浩然の氣をやしなふ。一生を漂〻瓢〻とすましで雲介の號を蒙る。炎暑の日玄冬のあしたも榎の木の下に眠て、蟻の都にいたる。終に飲喰を座敷につかず、汁かけて出す馬方の食と作られ、小便ははしりながら、吸がらは手の裏にはたき、錢は耳の穴に納め、金はふんどしにむすぶ。一とせの名

残も暮て、世にある人ゝのことぶく月日を、出替の季と定めけるは、世をやすうおくる人に似たり。

出女も出がはり顔や年の暮

流浪漂泊の上にこそ、あはれなるためしはおほけれ。獨坊主には宿をかし衆、同じ所に二夜はとめず。五月雨の朝、霙の夕暮に情ふかきあるじは、長持臭き衣かして、ぬれたる物を焼火にあぶる。あるは三方荒神といふ物にしがみつきて、しばらく足を休むれ共、極めの札場より追おろされて、却てのらぬ先より股をすくめ、兩方の手に杖を携て歩むべしと見えず。人間病死の到來は時も所もまたず、醫療のたすけはうとく、懐中の振薬はやう〳〵急病を防ぐ。巡禮飛脚の族は、路頭に倒れ臥。大片目なる肝煎に追たてられ、老僧の愍みにて門下に入る。おとろへかさなり、終に黄泉の下に趣(赴)く。かねて何國の土とならん慾りをしらず。犬はしりの土中にこめて、年の齢ひ衣類の模様を小札にしるされて、何國のいかなる人といふ名もしらずなり行也。岡部の辻堂の笠に、經文をよみて同行の別を惜み、隅田川の念佛を尋て、亡子が古墳に登る。今來古往の人、旅懐の情を盡して、風雅の腸をさらす。能因は白川の歌をよみて、二たびみちのくへ趣き、不二都鳥の句を求て、すみやかに故里に歸る者は貞室老人也。東海道の一すじしらぬ人、風雅におぼつかなしといひし翁の聲、耳の底にとゞまる。

于旹元祿九年丙子冬臘月日於

風狂堂選之

五老井主人

武林　木六羽言　許子六

孟耶観主頭

月譯衛人　買年僧李由

京寺町二条上ル町

井筒屋庄兵衛板

芭蕉庵小文庫
上下

芭蕉庵小文庫

木曾の情雪や生(はえ)ぬく春の草　と申され
ける言の葉のむなしからずして、かの塚
に塚をならべて、風雅を比恵日良の雪に
のこしたまひぬ。さるをむさし野のふ
るき庵ちかき長溪寺の禪師は、亡師とし
ごろむつびかたらはれければ、例の杉風
かの寺にひとつの塚をつきて、さらに宗
祇のやどりかな　と書をかれける一番
を壺中に納め、此塚のあるじとなせり。
たれ〳〵もかれに志をあはせて、情をは
こび句をになふ。猶、師の恩をしたふに

たえず。霜落葉かきのけて、かたのごとくなる石碑をたて、霜がれの芭蕉をうへし發句塚　と杉子がなげきそめしより、愁腸なをあらたまりて、

史邦

日の影のかなしく寒し發句塚

小文庫

冬之部

島田の宿にて

宿かして名をなのらする時雨哉　ばせを

旅宿

はつ時雨戸あけて見れば反歩(タンボ)也　山店

米河岸できくや秋田(あきた)のはつ時雨　嵐竹

雷おつる松はかれ野の初しぐれ　丈艸

食どきにさしあふ村のしぐれ哉　去來

板壁や馬の寐かぬる小夜しぐれ　史邦

雜冬

冬空やすがもは江戸の北はづれ　嵐竹

ほうづきやとけその山の九十月　史邦

城山に雉子出けり小六月　山店

青き穂に千鳥啼也ひつぢ稲　史邦

寒菊に野武士も住かわに堅田　仝

薫物(たきもの)のもれてやにほふ枇杷の花　史邦

下刈の藪きれい也つはの花　養浩

大通庵の主道圓居士、芳名をきくとしたしきまゝに、まみえむことをちぎりて、つゐにその日をまたず、初冬一夜の霜と降ぬ。けふはなを、ひとめぐりにあたれりといふをきゝて

其かたち見ばや枯木の杖の長(たけ)　芭蕉

舊庵　師の像に謁

芭蕉會(ゑ)と申初けり像の前　史邦

達磨會やもつさう食(めし)の一文字　仝

水風呂をふるまはれたる十夜かな　仝

御命講や油のやうな酒五升　ばせを

上人の鼻にはくおけ御命講　史邦

ゑびす講酢賣にはかまきせにける　芭蕉

恵比須講あひるも鴨に成にけり　利合

まづ鯛と筆を立けり恵比壽講　史邦

玉あられ百人前ぞおとりこし　山店

御取越内儀の客が一さしき　嵐竹

檜物屋も間にあはせけりおとりこし　養浩

おとりこしまづ左座(ひだりざ)は松の坊　史邦

ひだるさに馴て能寐る霜夜哉　惟然

ころ／＼と虫もむらつく霜夜哉　種文

霜腹の寐さめ／＼や鴨のむれ　丈艸

ふるき世を忍びて

霜の後なでしこ咲る火桶かな　ばせを

火燵より寐に行頃は夜中かな　雪芝

正秀亭當座

革羽織とりかくされて火燵かな　史邦

風のあたりどころやこぶ柳　丈艸

こがらしの藪にとゞまる小家哉　殘香

風や窓にふき込みそさゞい　蘭芳

冬川や木の葉は黒き岩の間　惟然

くむ塩にころび入べき生海鼠(なまこ)哉　梨雪

鴈鴨やわちがひめぐる水けぶり　蘇人

毛衣につゝみてぬくし鴨の足　ばせを

雞の片脚づゝやふゆごもり　丈艸

金屏の松もふるさよ冬籠　芭蕉

小屏風に茶を挽かゝる寒哉　斜嶺

旅宿

大名の寐間にもねたる寒さ哉　許六
猫の食干からびてあるさむさかな　山店
夜神楽に歯も喰しめぬ寒さ哉　史邦
茶をきざむ廣敷寒し吹とほし　支老
留主のまにあれたる神の落葉哉　芭蕉
甲を干すあたゝかけさや胴紙子　史邦
子祭や梅まつ宿の赤豆食　山店
子祭に目貫ほり出す自慢哉　史邦
餅密柑吹革まつりやつかみ取　下風
幽靈に水のませたか鉢たゝき　智月
嫂入の門も過けりはちたゝき　許六
はつ雪やかけかゝりたる橋の上　ばせを
初雪やひじり小僧の笈の色　仝
雪とにうつばりたはむ住居かな　仝
鷦鷯家はとぎるゝはだれゆき　如行
狼の聲そろふなり雪のくれ　丈艸

嶽〳〵や鴫とりまはす雪けぶり　史邦
納豆するとぎれやみねの雪起　丈艸
長尻の客もたゝれしみぞれ哉　史邦
さつ〳〵と荻も氷もあられかな　仝
冬梅のひとつふたつや鳥の聲　土芳
水仙の花の高さの日かげ哉　智月
はち卷や穴熊うちの九寸五分　史邦
あな熊の寐首かいても手柄かな　山店
丹波路やあなぐまうちも惡右衛門　嵐竹
月花の愚に針立む寒の入　ばせを
寒聲や山伏村の長づゝみ　仙杖
一雨や相場のかはる事納　嵐竹
身代も籠でしれけりことおさめ　史邦
金公事もつく〳〵にして事納　山店
せつかれて年忘するきげんかな　芭蕉
魚鳥の心はしらずとしわすれ　仝
さかもりや一雫にて年わすれ　智月
うちこぼすさゝげも市の師走哉　正秀
蛤のいけるかひあれ年の暮　ばせを

さかやきや咳氣をなぐる年の暮　探志
客人の心になりてとしのくれ　乙州
酢がとれて蜜柑も年の名殘哉　之道
いせゑびを取あはせけり衣くばり　史邦
餅舂に小腹たてけり瘭疽やみ　仝

石臼之讃　ばせを

市中に有て俗塵によごれぬ物、げにその始をよくするよりも、その終をとぐる事はかたし。商山竹林の猛士も、たを出てつかへ、寛平華山の上皇も終にたしかならず。たま〳〵是を見るに、唯石臼のひとつのみ。聖一國師は是をもつて肉身をやしなひ、法身をしる。民家にはまた麥刈そむるころよりも、籾こき落す冬に至るまで、片時もよそにする事なし。共たかきとを論ずれば、役の優婆塞の庵の中にかくれて、彼たぐひを道引功の上に立べし。上と下とふたつなるは、力たらざる

者のために事なればなり。不斷土間に有て莚より外を見ぬは、謙に居る事の調へるにあらずや。かりにも黃姉の手にとられざることの有がたきことをふかくさぐりしるべし。目なだらか成時は、かますを荷ふ老翁のいで來りて、こつ〳〵とする音すみて、のちは季札が劍を塚にかくることをはづべし。名をぬすむ盜人はあれども、石うすをぬすむ盜人はなし。またひとの心をみださゞるの至りならずや。月さしのぼるゆふがほのかげに、獨はおどろの髮をまぐね、ひとりは佛のまねをする。あたまなりにてくるしきことを覺えず。挽まはす力に其飢をたすくるは、文王の始に仕たまへるに事たがはず。やゝいま樣のむづかしき歌のふしにかまはず、聲も唱歌も古代のまゝにして、枝もさかゆる、葉もしげると、しはぶきがちにわなゝかれたるぞ、おかしきや。(此文章「不猶蛇」によれば越人の作を芭蕉の添削せるものなりと)

机銘

間なる時はひぢをかけて、嗒焉吹噓の氣をやしなふ。しづかなるときは、書を紐とゐて、聖意賢才の精神をさぐり、靜なるときは筆をとりて、義素の方寸に入る。たくみなすおしまづき、一物三用をたすく。高さ八寸、おもて二尺、兩脚にあめつちのふたつの卦を彫にして、潛龍牝馬の貞に習ふ。是をあげて一用とせむや。また二用とせんや。

應二蘭子求一　元祿仲冬　芭蕉書

對二門人借一

是や世の煤に染らぬ古合子　ばせを

煤掃之說

明ぼのゝ空より物のはた〳〵ときこゆるは疊をたゝく音なるべし。けふは師走の十三日、煤はきのことぶきなり。げにや雲井の儀式、九重の町の作法は嘉例ある事にして、唯なみ〳〵の人のすゝはく躰こそいと面白けれ。をの〳〵門さしこめて、奥のひと間を屛風にかこひなし、火鉢に茶釜をかけて、嫗が帷子の上張、爪さき見えたる足袋もいとさむく、冬の日かげのはやく晝になりゆき、庭の隅、調度どもとりちらしたる中に、持佛のうしろむきたるぞめには立なれ。家の童の椽のやぶれ、すのこの下をのぞきまはるは、なにをひろふにやとあやし。味噌とよばる大男の、袋かぶり蓑きたるもめづらかに、米櫃のサンうちつけ、組しらげ、行燈はりかえて、たづくり鱠、あさづけのかほり花やかに、かみしもの膳すえならべたるに、ほどなく暮て高いびきとはなりぬ。(此文章、芭蕉にあらざるべしと成美云へり)

ばせを

すゝはきや暮ゆく宿の高鼾　山店
なぐれて雪のかゝるから竹　史邦
扶持かたのはし米取に人やりて　嵐竹
またどろ／＼とかみなりがなる　養浩
風雲のはしる間を月のかげ　執筆
毛蓼の花のみゆる塀うら　店
雁わたるむかひは平野久法寺　邦
使にやれば味噌つかゝせける　竹
普請場でこしらへてくる火吹竹　浩
よそほど風のあてぬ山ぎは　邦
松苗のはえ揃ふたる一里鐘　店
田うへの留守に煩ふて居る　浩
夏の月いらぬ葛籠は梁へあげ　竹
たゝきながして雨はるゝなり　店
篠原や黒ばね山もうちつゞき　邦
馬すりかえてしらぬ顏する　竹
はつ花に酒毒が出來て取かぶり　浩
年子まびけば菫みだるゝ　邦

二
御築地の雪もきえ行新在家　店
敷て垢かく水風呂の蓋　浩
兩方へあかりみせたる手行燈　竹
そよ／＼草のなびく日の暮　店
戀人のいつか後に立て居る　邦
文引さいてほうばりにけり　竹
盆まへは貳分にもつけぬ小脇指　浩
隱れて京の月を見るなり　邦
槿のくづれたうへを踏あるき　店
簷はたけば雞がよる　浩
雲ぎれの山の端うすく寒くらし　竹
千日谷の銀杏冬たつ　店
跡さきを木戸でしめたる組屋敷　邦
追／＼醫者を呼にやらるゝ　竹
いら／＼と星のいらつく横雲に　店
野水たゝゆる椿新田　浩
藪岸にほそき櫻の咲出て　邦
夕日の筋に胡蝶むらがる
分別の底たゝきけり年の暮　ばせを

小文庫

春之部

年／＼や猿にきせたる猿の面　芭蕉
　鳰の海邊に年をこえて、
　　三日宵を氷ス。

大津繪の筆のはじめやなに佛　仝
　ふたみの机硯箱は翁ふかくいとをしみて、みづから繪かき讃したまひぬ。また一とせ洛のぼりに、いざさらば雪見に轉ぶ所まで　と興じ申されける、木曾の檜笠越の菅蓑に、桑の杖つきたる自畫の像、此しな／＼はさぬる年、花洛の我五雨亭に幽居し給ふ時、一所不住のかたみとて、予に下し給りぬ。されば師のなつかしき折／＼、あるは月花に情おこる時は、是をかけこれをすえ、ひたすら生前のあらましして句の味をうかゞふのみ。む月七日は、とにわか菜のあつものをすゝめて、例よりもかなしく、

かしこまる袖になみだこぼれて

折そふる梅のからびや粥はつを　史邦

若菜つまん三浦の大助百六ッ　嵐蘭

一かぶの牡丹はさむき若菜かな　尾頭

根小屋までうち下したるなづな哉　史邦

しろ水の押わけて行根芹哉　山店

一村を鼓でよぶや具足餅　史邦

いかなる事にやありけむ、去來子へつかはすと有り。

莨蒻のさしみもすこし梅の花　ばせを

寺の名やわすれて梅の花ざかり　李由

うす雪や梅の際まで下駄のあと　魚日

ひら／＼と菰槌越やむめの花　史邦

鞍馬金銀の隱士が跡尋ねて

むめが香やたが賣喰の火打石　仝

白梅やたしかな家もなきあたり　千川

山崎にて

しら梅や木食寺の料理人　史邦

はれ物に柳のさはるしなへかな　ばせを

此句、浪化子のありそ海に、さはる柳のしなへかな　と去來が書誤りて入集しはべるとて、常に此ことをくやみぬるまゝ、このついでとなしぬ。

春水滿二四澤一の氣色を

川柳水もうごかず柴葉口　山店

青柳の路次がまへなり鎗つかひ　嵐竹

川こして帶ときによる柳かな　岱水

泥龜に人だかりする柳かな　可長

青柳とともにうごくや近がつえ　史邦

馬乘の下くゞり行柳かな　里倫

春風にふき出されけり水の胡蘆　去來

いか(凧)あぐる風にこぼすやいもはしか　白良

草先や追鳥狩のむさう抓　史邦

苔清水

凍とけて筆に汲干す淸水哉　ばせを

おなじく

はる雨の木下にかゝる雫かな　仝

鞍馬

僧正が谷をすべれば餘寒也　野童

黒ぼこの松のそだちや若綠　土芳

呼出しに來てはうかすや猫の妻　去來

鎌倉も別のとなし猫の戀　南鄰

こがれ死ためしもきかず猫の妻　史邦

南良こえ

春なれや名もなき山の朝がすみ　ばせを

二月堂取水

水とりや氷の僧の沓のをと　仝

味噌まめの熟るにほひや朧月　史邦

蛇くふときけばおそろし雉子の聲　芭蕉

多田の御廟に詣

いきほひもさすがに神の雉子かな　史邦

栖去之辨　ばせを

年號いづれの年にやしらず。

こゝかしこ、うかれありきて橘町といふところに冬ごもりして、睦月きさらぎになりぬ。風雅もよしや是までにして、口をとぢむとすれば、風情胸中をさそひて、物のちらめくや、風雅の魔心なるべし。

なほ放下して栖を去。腰にたゞ百錢をたくはえて、柱杖一鉢に命を結ぶ。なし得たり、風情終に菰をかぶらんとは。

雲雀より上にやすらふ峠かな　芭蕉

呂丸追悼　三句

雲雀なく聲のとゞかぬ名ごり哉　會覺
ふみきやす雪も名殘や野邊の供　去來
野をくりや膝がくつきて朧月　史邦

伊賀新大佛之記

伊賀の國阿波の庄に、新大佛といふあり。此ところはならの都、東大寺のひじり俊乘上人の舊跡なり。ことし舊里に年をこえて、舊友宗七宗無ひとりふたりさそひ物して、かの地に至る。仁王門撞樓のあとは枯たる草のそこにかくれて、松(もの)いはゞ事とはむ石居ばかりすみれのみして　と云けむもかゝるけしきに似たらむ。なを分いりて蓮花臺獅子の座なんどは、いまだ苔のあとをのこせり。御佛はしりへなる岩窟にたゝまれて、霜に朽、苔に埋れて、わづかに見えさせ給ふに、御ぐし(頭)斗はいまだつゝがもなく、上人の御影をあがめ置たる草堂のかたはらに安置したり。誠にこゝらの人の力をついやし、上人の貴願いたづ(ら)になり侍ることもかなしく、涙もおちて談もなく、むなしき石臺にぬかづきて、

丈六に陽炎高し石の上　ばせを

賀茂にあそびて

照つゞく日やかげろふの芝うつり　史邦
しこまれて苗代馬のあゆみかな　山店
千刈の田をかへすなり雛波人　一驚
川淀や淡を休むる蘆の角　猿雖
物よはき草の座取やはるの雨　荊口
はる雨や渾雞あがる臺所　游刀
引鳥の中にまじるや田螺取　支老
咲みだす桃の中よりはつ櫻　ばせを

三月三日堺の海邊に遊て　二句

胸透て須磨をのみこむ汐干哉　史邦
のぼり帆の淡路はなれぬ塩干哉　去來
鹿島には杉菜のはゆる汐干哉　山店

すみ吉に詣

一日の日を春かぜや松のひま　史邦

攝刕甲山

上代の春日も光れかぶと山　仝
出替や哀すゝむる奉加帳　許六

下品の情

あかつきやうちとけ安き片むすび　史邦
下〳〵もみな居なじみてよめが萩　山店
馬よけや畑の入なる桃柳　北鯤
梅つばき是にも客し屋敷守　山店
藪に居て挽きらるゝな赤椿　仝

旅行

内庭を見せかけにけり白つゝじ　嵐竹
堀起すつゝじのかぶや蟻のより　雪芝
熨斗目きて來る人もなし菫草　山店

難波にて

海棠やお八ッうち出す堂のまへ　史邦

僧丈艸に別る

慇懃に成しわかれや藤の陰　仝

万日の小屋もみえけり百千鳥　嵐竹

呼子鳥なくか碓氷の盤根石　史邦

西行像讃

すてはてゝ身はなき物とおもへどもゆきのふる日は、

さむくこそあれ。花の降日は、　ばせを

うかれこそすれ。

芳野

花ざかり山は日ごろのあさぼらけ　仝

損にして食たかせけり花曇り　山店

花雪とちらすや錢のあゐの山　去來

ちか道や木のまた通る花盛　洞木

村中へ吹下したるさくらかな　養浩

景清も花見の座には七兵衛　ばせを

しらあやに金王櫻さきにけり　史邦

藪陰に衛門櫻のはなみかな　山店

三月盡

赤猫のうるさくなりぬ春の暮　山店

新宿は麥に穗がつく春の暮　史邦

水風呂の置所なしはるのくれ　嵐竹

三吟

櫻見る袖ちいさしや田舍染　嵐竹

　麥の中からあひる啼だす　史邦

うら座敷山をうしろに春くれて　山店

　手に〳〵膳を持てたゝるゝ　竹

ひつそりと夜半の月のさびかへり　邦

　堤の雁のさきさがりなる　店

八朔のさかやき剃にまはるらん　竹

　御門徒寺のすまふつぶるゝ　邦

秋蟬のいりつく樣に鳴時ぞ　店

　すべつた馬を引をこしける　竹

若黨に內證きかする戀もあり　邦

　汁も鱠もいなだなるらん　店

はつ雪の風にはづれてひら〳〵と　竹

　お堀の月のさえわたるかな　邦

あみ笠を腰にはさみて丹波道　店

　六帖じきをふたりしてかる　竹

花のかげ緣日ばかり掃たてゝ　店

　躑躅くづるゝ赤土の谷　邦

二

ひとつでも皿の揃はぬ小瀧鯛　竹

　宙背中とてけふも灸せず　店

暮かけて啼盛りたるほとゝぎす　邦

　山も御茶屋も青葉なりけり　竹

本堂を右へまはれば反歩にて　店

　ころぶといなや狐はなるゝ　邦

十五夜を吹さらしたる西の空　竹

　稲こす水に祠うきたつ　店

竹藪の鴨上戸うらがれて　邦

　又たゝくやら泣こゑがする　竹

一はしり行て見て來る朝肴　店

　八專あきて晴わたるなり　邦

ウ

庭せゝる松や小笹のうへ所　竹

　返事にそえてかへすぬり臺　店

構はねばしらけて通る鉦たゝき　邦

どこでもおそき町の朝食　竹
景のよき山はづらりと花ちりて　邦
紙鳶のきれ行梅若の森　店
花の雲鐘は上野か淺艸か　ばせを

小文庫

夏之部

文字摺石

忍ぶの郡しのぶの里とかや。文字ずりの名殘とて方二間ばかりなる石あり。此石はむかし女のおもひに石になりて、其面に文字ありとかや。山藍摺みだるゝゆへに戀によせておほくよめり。いまは谷合に埋れて、石の面は下ざまになりたれば、させる風情もみえずはべれども、さすがにむかしおぼへて、なつかしければ、

早苗とる手もとや昔忍ずり　芭蕉

前書きれて見えず

一つ脱でせなに負けり衣がへ　仝
からたちも刈揃へたり佛生會　山店
灌佛や釋迦と提婆は從弟どし　之道

落柿舍閑居　嵯峨日記に見えたり

ほとゝぎす大竹藪をもる月ぞ　ばせを
郭公鳴や湖水のさゝにごり　丈艸
夕やけやきら〳〵ととぶほとゝぎす　山店
ほとゝぎすまづ〳〵宵の丸寐にて　岱水

美濃にて

紅麥に鳴やうきかんほとゝぎす　史邦

あかし

ほとゝぎすきえ行方や島ひとつ　ばせを

すま

月を見て物たらはずや須磨の夏　仝

佛頂禪師の庵をたゝく

木つゝきも庵は破らず夏木立　仝
葉ざくらや千体佛のみがきばへ　史邦
槇の戸をうつぶせにして葉より哉　嵐竹
太鼓にてほいろを返す葉撰哉　史邦
狹莚のへり踏ありく葉より哉　山店
藪畔や穗麥にとゞく藤の花　荊口
かみなりの鳴らで曇し梧の花　史邦
山樫やわか葉のくさき一しきり　北鯤

子にせうといへば逃こむふき籠　乙州
よせ馬の土手のあちらや紙のぼり　嵐竹

乙州餞別

花麥の秋はあふみとおもへども　山店

落柿舍閑居　嵯峨日記に見えたり

柚の花にむかしを忍ぶ料理の間　ばせを

さがにて

おのづから梧にならふやことし竹　史邦
五月雨や蠶わづらふ桑のはた　ばせを
無病さや物うちくふて五月雨　史邦
先立のふみ込音やさつき闇　山店
川べりに狐火立やついりばれ　史邦
箱崎や岩たて雲をつゆあがり　養浩
只おかぬ麥のぐるりや紅の花　山店

間不レ容レ髪といふ事を

ほとゝぎす耙合せたり聲の中　仝

おなじく

雲すきや尾越の鹿のねらひ狩　嵐竹

同じく

草むらや蝿取蜘の身づくろひ　史邦
蘭の花にひた／＼水の濁り哉　此筋
一田づゝ行めぐりてや水の音　北枝
虫の喰夏菜とぼしや寺畠　荊口

卯月のはじめ庵に歸りて、旅
のつかれをはらす程に

なつ衣いまだ虱を取つくさず　ばせを
わが宿は蚊のちいさきを馳走也　仝
みな月の竹の子うれし竹生島　去來
六月をしづめてさくや雪の下　東以

正成之像
鐵肝石心此人之情

なでしこにかゝるなみだや楠の露　ばせを
撫子にふんどし干や川あがり　嵐蘭
ひるがほに虱のこすや蔦のあと　仝
五六十海老つゐやして鮠一つ　之道
どろ／＼とすはや夕だつ鈴鹿山　史邦
ゆふだちや蓮の葉にふる池のくま　木白
蓮の花ちるや八島のみだれ口　史邦

澤潟をうなぎの潟す澤邊哉　嵐蘭
麻の葉のあからむするや雲のみね　史邦
三日月のいつか出て居る欅麻　嵐竹
麻臥て風すゞとをす小家哉　斜嶺
蝿打になるゝ雀の子飼かな　河瓢
日の勢やくるしくうごく百合の花　素繪
鬼百合やりんとひらひて蟬のこゑ　史邦
水仙の種を干日やせみの聲　嵐竹
森の蟬すゞしきこゑや暑き聲　乙州
鴨の子の蘆根はなれぬあつさかな　桐奚

甲斐郡内をすぎて

道ばたにまゆ干かざのあつさかな　許六
あさがほの二葉にうくるあつさかな　去來
煤下る日盛あつし臺所　怒風

旅　行

痩馬の鞍つぼあつし藁一把　史邦

牢人して東武へ下る日、粟田
口にて

すゞかけを着ぬばかりなる暑かな　仝

すゞしさや先蛤の口の砂　句空

丈山之像謁　二句

風かほる羽織は襟もつくろはず　芭蕉
さかさまに扇をかけてまた涼し　丈草
琴引て老をがませよ夕すゞみ　智月
箒木に日かげが出來てすゞみかな　山店
石竹(せきちく)に雀すゞしや砂むぐり　史邦

ふたみ

あら波やあれて涼しき入日影　仝

鴻之臺眺望

切岸や卯の花下(くだ)し一文字　山店
安房上總うしろに當て夏木立　嵐竹
うき雲や左右にわかれて青嵐　史邦

同弔古戰場

山は刀根のながれより生れて、嘗を南にみそなはす。未申に河水をもぶけて、是がためにそばたち、山のしりへを斷て、なを壘をかさねたり。さばかりのものゝふの、おほく此ところにうしなはれて、やゝ百(もゝ)の秋の露むすび霜うつれども、なにがし誰某と時めきのゝしれる名は、さすが人の耳にのこりて、むなしからぬぞせめていちじるき。松櫻よきほどにしげり、うのはなのくもりあひたる空に、時鳥のこゑもたまぎるゝ斗なれば、魂魄の胸もはるゝにや。いとゞ哀に覺えて、

幽靈のあそび所や花うつぎ　山店
いかづちの荒てひさしき夏野かな　史邦
黑雲の折〳〵かゝる青葉哉　嵐竹

首塚

首塚やとげに咲たる花むばら　史邦
首塚やひるは螢の草がくれ　嵐竹
首塚や人ものぼらぬ夏蕨　山店

眞間寺

眞間山や茄子の畔もむかし繩　嵐竹
なつ山や麥も櫻も寺の分　山店
さびしさに涼しき眞間の寺構　史邦

同所楓

日蓮の歌にもみえず若楓　史邦
もの喰に茶莚かるや若楓　嵐竹
大木やはづれ〳〵はわか楓　山店

同繼橋

繼橋の田うえや寺の男ども　嵐竹
つぎ橋や田草もとらぬそゞろ水　山店
つぎはしのあとは水田の水鷄かな　史邦

歸路の吟

ほとゝぎす水戸海道も夜船也　山店
なつ空や精をも出さず渡し守　史邦
背梁もまくらにならずなつ衣　嵐竹

餞別

新麥はわざとすゝめぬ首途かな　山店
また相蚊屋の空はるか也　ばせを
馬時の過て淋しき牧の野に　仝
四五千石のまつのたて山　店
方〳〵へ醫者を引ずる暮の月　仝
躍の作法たれもおぼえず　蕉
盆過の頃から寺の普請して　仝
ほしがる者に菊をやらるゝ　店
蓬生に戀をやめたる男ぶり　蕉

濕のふきでのかゆき南氣　店
丹波から使もなくて啼烏　蕉
節季が來れど利あげさへせぬ　店
雪に出て土器賣を追ちらし　蕉
たゞ原中に月ぞさえける　店
神鳴のぴつかりとして沙汰もなき　蕉
しやくりがやんで氣がかるうなる　店
奥の院をづ〳〵花をさしのぞき　蕉
けさからひとつ鶯のなく　店
春の日に産屋の伽のつつくりと　全
かはり〳〵や湯漬くふらん　蕉
いそがしくみた股立を取並び　店
目つらもあかず霰ふるなり　蕉
からびたる櫟林に日がくれて　店
佛の木地をつゝむ糸だて　蕉
ころ〳〵と臼挽出せばほとゝぎす　店
そゞろに草のはゆる竹椽　蕉
羽二重の赤ばるまでに物おもひ　店
わかい時から神せゝりする　蕉

雛をまたぬすまれしけさの月　店
畠はあれて山くずのはな　蕉
日光へたんがら下す秋のころ　店
くれ〳〵たのむ弟の事　蕉
ゆふかぜに蒲生の家も敗れ行　全
物にせばやとさする天目　店
花のあるうちは野山をぶらつきて　全
藤くれかゝる黒谷のみち　蕉

甲斐にて

行駒の麥になぐさむやどりかな　ばせを

小文庫

秋之部

はつ秋やたゝみながらの蚊屋の夜着　ばせを

弔二初秋七日雨(兩)星一

元祿六文月七日の夜、風雲天にみち、白浪銀河の岸をひたして、烏鵲も橋杭をながし、一葉梶をふきをるけしき、二星も屋形をうしなふべし。今宵なを只に過さんも殘おほしと、一燈かゝげ添る折ふし、遍昭小町が歌を吟ずる人あり。是によつて此二首を探て、兩星の心をなぐさめむとす。

小町が歌

高水に星も旅寐や岩の上　ばせを

遍昭が歌

七夕にかさねばうとし絹合羽　杉風
西風の南に勝やあまの川　史邦

閉關之說

色は君子の惡む所にして、佛も五戒のはじめに置りといへども、さすがに捨がたき情の、あやにくに哀なるかた〳〵もおほかるべし。人しれぬくらぶ山の梅の下ぶしに、おもひの外の匂ひにしみて、忍ぶの岡の人目の關も、もる人なくばいかなるあやまちを仕出てむ。あまの子の浪の枕に袖しほれて、家をうり身をうしなふためしも多かれど、老の身の行末をむさぼり、米錢の中に魂をくるしめて、物の情をわきまへざるには、はるかにまして罪ゆるしぬべく、人生七十を稀なりとして、身を盛なる事は、わづかに二十餘年也。はじめの老の來れる事、一夜の夢のごとし。五十年六十年のよはひかたぶくよりあさましうくづをれて、宵寐がちに朝をきしたる、ね覺の分別なに事をかむさぼる。おろかなる者は思ふことおほし。煩惱増長して一藝すぐるゝものは、是非の勝る物なり。是をもて世のいとなみに當て、貪欲の魔界に心を怒し、溝洫におぼれて生かす事あたはずと、南華老仙の唯利害を破却し、老若をわすれて閑にならむこそ、老の樂とは云べけれ。人來れば無用の辯有。出ては他の家業をさまたぐるもうし。尊（孫）敬が戸を閉て、杜五郎が門を鎖むには、友なきを友とし、貧を富りとして、五十年の頑夫自書自禁戒となす。

あさがほや晝は鎖おろす門の垣　ばせを
槿にまぎれて木槿あはれなり　史　邦
寐道具のかた〳〵やうき玉祭　去　來
乳母が來てまた泣出しぬ魂祭　山　店
灸してなきしも我ぞたままつり　史　邦
おくり火や後さがりの袴ごし　仝
盆すぎて宵闇くらし虫の聲　ばせを
牛部屋に蚊の聲よはし秋の風　仝
雀子の髭も黑むやあきのかぜ　式　之

不破にて

あき風や藪もはたけもふはの關　ばせを
はつ嵐ふけども青し栗のいが　仝
初茸やまだ日數へぬ秋の露　仝
しら露もこぼさぬ萩のうねり哉　仝
ひよろ〳〵となを露けしや女郎花　仝
弓がためとる頃なれやふじばかま　支　老
玉かつらなまりも床し爪根花　史　邦
むかしきけちゝぶ殿さへすまふとり　ばせを
つね〳〵は後世ねがひ也相撲取　史　邦
蜻蛉やなにの味ある竿の先　探　丸

更科姨捨月之辨

あるひはしらゝ吹上ときくに、うちさそはれて、ことし姨捨の月みむことしきりなりければ、八月十一日みのゝ國をたち、道とほく日數すくなければ、夜に出て暮に草枕す。思ふにたがはず、その夜さらしなの里にいたる。山は八幡といふさとよ

り一里ばかり南に、西南によこをりふして、冷じう高くもあらず、かど〳〵しき岩なども見えず、只哀ふかき山のすがたなり。なぐさめかねしと云けむも理りしられて、そゞろにかなしきに、何ゆへにか、老たる人をすてたらむとおもふに、いとど涙落そひければ、

俤は姥ひとりなく月の友　ばせを

いざよひもまださらしなの郡哉　仝

前書されて見えず

夏かけて名月あつきすゞみ哉　仝

名月や門にさし込潮がしら　仝

世波にたゞよひて、日暮の頃、岡崎より京に歸るとて

鴨川や月見の客に行當り　去來

名月や夕日にむかふ宮さかな　塔山

名月の西にかゝれば蚊屋のつき　如行

名月や佃を越せば寒うなる　山店

名月や草の闇みに白き花　左柳

侍の身を露にして月みかな　史邦

常陸へまかりける時、船中にて

あけぼのや廿七夜も三日の月　芭蕉

堅田十六夜之辨

望月の殘興なをやまず。二三子いさめて舟を堅田の浦にはす。其日申の時ばかりに、何某茂兵衛成秀といふ人の家のうしろにゐたる。醉翁狂客月にうかれて來れりと聲〳〵によばふ。主思ひがけず、おどろきよろこびて、簾をまき塵を拂ふ。園中に芋あり、さゝげ有、鯉鮒の切目たゞさぬこそいと興なけれど、岸上に筵をのべて宴をもよほす。月はまつほどもなくさし出、湖上花やかにてらす。かねてきく、仲の秋の望の日、月、浮御堂にさしむかふを鏡山といふとかや。今宵しも猶そのあたり遠からじと、彼堂上の欄干によつて、三上水莖の岡南北に別れ、その間にしてみね引はへ、小山巓をまじゆとかくいふ程に。月三竿にして黑雲の中にかくる。いづれか鏡山といふ事をわかず。主のいはく、折〳〵雲のかゝるこそと、客をもてなす心いと切なり。やがて月、雲外にはなれ出て、金風銀波千体佛のひかりに映ず。かのかたぶく月のおしきのみかはと、京極黄門の歎息のことばをとり、十六夜の空を世の中にかけて、無常の觀のたよりとなすも、此堂にあそびてこそ、ふたゝび惠心の僧都の衣もうるほすなれといへば、あるじまた云、興に乘じて來れる客を、など興さめて歸さむやと、もとの岸上に盃を揚て、月は橫川にいたらむとす。

鎖明けて月さし入れよ浮御堂　ばせを

安〳〵と出ていさよふ月の雲　仝

鬼灯は實も葉もからも紅葉哉　仝

鷄頭にうへ合せけり唐がらし　史邦

桔のぼる華は物うしや鶏頭花　万乎
花葛や松ふきたふす田成畑　史邦
もや〳〵としてしづまるや葛の花　山店
雨晴や煙のこもるくずの花　嵐竹
蚓なく明日は日和ぞ蓼の花　風竹
いなづまやなぐり盡して薄原　史邦

大見

稲妻やうみの面をひらめかす　史邦

小見

蟷螂のほむらの胸のあかみ哉　仝
鶺鴒やはしりうせたり白川原　氷固
せきれいや壁土こぬる畔のうへ　磨盤
鷹の目もいまや暮れぬと啼鶉　ばせを
ひゝなきに夜を待明す鶉かな　山店
はつ鶉時計の六ッもうたせけり　史邦
道〳〵の鶉きくらん藥とり　嵐竹
唐(たう)あみに袖ぬれてきく鶉かな　正秀
尻すぼになくや夜明の鹿の聲　風睡
箙がへりに鹿をどろかす鳴子哉　一酌

東山をめぐりて一乘寺に出る。

丈山の庵はいづこ引板(ひた)の音　史邦
岡崎は祭も過ぬ葉雞頭　仝

前書きれて見えず

菊の香や庭にきれたる沓の底　ばせを
見どころのあれや野分の後の菊　仝
きくの露落て拾へばぬかごかな　仝
人がらも古風になりて菁菊哉　史邦
朝寒や手をもみ初て菊のはな　風斤
借りかけし庵の噂やけふの菊　丈艸
あか棡やまだいきて居る紅葉鮒　嵐竹

芽立より二葉にしげる柿の實　と申侍りしは、いつの年にや有けむ。彼落柿舍もうちこぼすよし、發句に聞えたり。

やがて散る柿の紅葉も寐間の跡　去來
澁柿はかみのかたさよ明やしき　丈艸
木の本に狸出むかふ穂かけ哉　買山
やき米に歌こそなけれ近衛殿　史邦
虫の音や關宿船の麁朶(そだ)の中　養浩

死もせぬ旅寐のはてよ秋のくれ　ばせを
秋の暮主つかはれて歸りけり　山店

嵐蘭追悼　四句

かなしさや日に〳〵ましてちる柳　嵐竹
莨麻(たうごま)の實をしぼり出す涙かな　山店
かたみにはいづれの草ぞ墓の露　史邦
千貫のつるぎ埋けり苔の露　去來

高光のさいしやう、かく斗へがたくみゆると、よみたまひけむは九月十三日の夜とかや、うけたまはりて、

身の秋や月にも舞はぬ蚊のちから　史邦
わが宿は四角な影を窓の月　ばせを

柴の庵ときけばいやしき名なれどもよにこのもしき物にぞ有ける

此歌は東山に住ける僧を尋て、西行のよませ給ふよし、山家集にのせられたり。いかなる住居にやと先その坊なつかしければ、

柴の戸の月や其まゝあみだ坊　芭蕉

伊勢國又玄が宅にとゞめられ侍るころ、其妻の男の心にひとしく、物ごとまめやかに見えければ、旅の心をやすくし侍りぬ。かの日向守が妻、髪を切て席をもうけられし心を、いまさら申出て、

月さびて明智が妻の咄せむ　芭蕉

（「月さびよ」をよしとす）

秋を經て蝶もなめるや菊の霜　仝

梧うごく秋の終りやつたの霜　仝

ゆく秋のなをたのもしや青蜜柑　仝

題鷹山別

正行がおもひを鷹の山わかれ　史邦

題司召

挾箱さいかくするやつかさめし　山店

題百菊

百菊もさくや茶の間の南向　嵐竹

三吟

帷子は日ゞにすさまじ鴫の聲　史邦

籾壹升を稲のこき賃　ばせを
蓼の穂に醤のかびをかき分て　岱水
夜市に人のたかる夕月　邦
木刀の音きこへたる居あひ拔　蕉
二階はしごのうすき裏板　水
ウ
寒さふに薬の下をふき立てゝ　邦
石町なれば無緣寺の鐘　蕉
手細工の雜箸ふときかんなくづ　水
よびかへせどもまけぬ小づかを　邦
肌さむき隣の朝茶のみ合て　蕉
秋入どきの筋氣いたがる　水
鹽竈にふりつゞきたる宵の月　邦
無住になりし寺のいさかひ　蕉
持なしの新剃刀もさびくさり　水
土たく家のくさききるもの　邦
花に寐む一疊あをき表がへ　蕉
小姓の口の遠き三月　水
二
竹橋の内よりかすむ鼠穴　邦
馬の糞かく役もいそがし　蕉

夕ぐれに洗濯（濯）賃をなげ込で　水
とはぬもわろしばゝの弔　邦
椀かりに來れど折ふしゑびす講　蕉
此あたゝかさ明日はしぐれむ　水
夜あそびのふけて床とる坊子共　邦
百里そのまゝ船のきぬ〴〵　蕉
引割し土佐材木のかたおもひ　水
よりもそはれぬ中は生かべ　邦
言たほど跡に金なき月のくれ　蕉
もらふをまちて鴫ののつぺい　水
ウ
摺鉢にうへて色付唐がらし　邦
障子かさぬる宿がえの舩　蕉
北南雪降雲のゆきわたり　水
二夜三日の終るあかつき　邦
考てよし野参のはなざかり　水
百姓やすむ苗代の隙　蕉

座右之銘

人の短をいふ事なかれ
己が長をとく事なかれ

物いへば唇寒し秋の風　芭蕉翁

元祿九丙子歳三月日

京寺町二条上ル町
井筒屋　庄兵衛板

續猿蓑
上

續猿蓑集卷之上

八九間空で雨降る柳かな　芭蕉
春のからすの畠ほる聲　沾圃
初荷とる馬士もこのみの羽織きて　馬莧
内はどさつく晩のふるまひ　里圃
きのふから日和かたまる月の色　沾
狗脊かれて肌寒うなる　蕉
澁柹もことしは風に吹れたり　里
孫が跡とる祖父の借錢　莧
脇指に替てほしがる旅刀　蕉
煤をしまへばはや餅の段　沾
約束の小鳥一さげ賣にきて　莧
十里ばかりの余所へ出かゝり　里
笹の葉に小路埋ておもしろき　沾
あたまうつなと門の書つけ　蕉
いづくへか後は沙汰なき甥坊主　里
やつと聞出す京の道づれ　莧
有明におくるゝ花のたてあひて　蕉
見事にそろふ籾のはへ口　沾
春無盡まづ落札か作太夫　莧
伊勢の下向にべつたりと逢　里
長持に小擧の仲間そは／＼と　沾
くわらりと空の晴る青雲　蕉
禪寺に一日あそぶ砂の上　里
槻の角のはてぬ貫穴　莧
濱出しの牛に俵をはこぶ也　蕉
なれぬ娵(よめ)にはかくす内證　沾
月待に傍輩衆のうちそろひ　莧
籬の菊の名乘さま／＼　里
むれて來て栗も榎もむくの聲　沾
伴僧はしる駕(のりもの)のわき　蕉
剃(ソグ)やうに長刀坂の冬の風　里
まぶたに星のこぼれかゝれる　莧
引立てむりに舞する たをやかさ　蕉
そつと火入におとす薫(たきもの)　沾
花ははや殘らぬ春のたゞくれて　莧
瀬がしらのぼるかげろふの水　里

雀(カラ)の字や揃ふて渡る鳥の聲　馬莧
てり葉の岸のおもしろき月　沾圃
立家を買てはい(ひ)れば秋暮て　里圃
ふつ／＼なるをのぞく甘酒　莧
霜氣(しもげ)たる蕪(かぶ)喰ふ子ども五六人　沾
蓙をしいて外の洗足　里
悔しさはけふの一歩(ぶ)の見そこなひ　莧
請狀すんで奉公ぶりする　沾
よすぎたる茶前の天氣きづかはし　里
有ふりしたる國方の客　莧
何事もなくてめでたき駒迎　沾

風にたすかる早稲の穂の月　里
臺所秋の住居に住かへて　莧
座頭のむすこ女房呼けり　沾
明はつる伊勢の辛洲のとし籠り　里
蓑はしらみのわかぬ一徳　莧
俵米もしめりて重き花盛　沾
春靜なる竿の染纈　里
鶯の路には雪を掃殘し　莧
しなぬ合點で煩ふて居る　沾
年〱に屋うちの者と中惡く　里
三崎敦賀の荷のかさむ也　莧
汁の實にこまる茄子の出盛て　沾
あからむ麥をまづ刈てとる　里
口〱に寺の指圖を書直し　莧
殿のお立のあとは淋しき　沾
錢かりてまだ取つかぬ小商　里
卑下して庭によい料理くふ　莧
肌入て秋になしけり暮の月　沾
顏にこぼるゝ玉笹の露　里

此盆は實の母のあと問て　莧
有付て行出羽の庄內　沾
直のしれた帷子時のもらひ物　里
聞て氣味よき杉苗の風　莧
花のかげ巣を立雉子の舞かへり　沾
あら田の土のかはくかげろふ　里

いさみ立鷹引すゆる嵐かな　里圃
冬のまさきの霜ながら飛　沾圃
大根のそだゝぬ土にふしくれて　芭蕉
上下ともに朝茶のむ秋　馬莧
町切に月見の頭の集錢　沾
荷がちら〱と通る馬次　里
智恩院の替りの噂極りて　莧
さくらの後は楓わかやぐ　沾
狙の鱸に水をかけながし　里
目利で家はよい暮しなり　莧
狀箱を駿河の飛脚請とりて　沾

まだ七つにはならぬ日の影　里
草の葉にくぼみの水の澄ちぎり　莧
伊駒氣づかふ綿とりの雨　沾
うき旅は鵙とつれ立渡り鳥　里
有明高う明はつるそら　莧
柴舟の花の中よりつつと出て　沾
柳の傍へ門をたてけり　里
百姓になりて世間も長閑さよ　莧
ごまめを膳にあらめ片菜　沾
賣物の澁紙づゝみおろし置　里
けふの暑さはそよりともせぬ　莧
砂を這ふ蕣の中の絡線の聲　沾
別を人がいひ出せば泣　里
火燵の火いけて勝手をしづまらせ　莧
一石ふみし碓の米　沾
折〱は突日の起る天氣相　里
仰に加減のちがふ夜寒さ　莧
月影にことしたばこを吸て見る　沾
おもひのまゝに早稲で屋根ふく　里

手拂に娘をやつて軈のさた　莧
參宮の衆をこちで仕立る　沾
花のあと躑躅のかたがおもしろい　里
寺のひけたる山際の春　莧
冬よりはすくなうなりし池の鴨　沾
一雨降てあたゝかな風　里

猿蓑にもれたる霜の松露哉　沾圃
日は寒けれど靜なる岡　芭蕉
水かるゝ池の中より道ありて　支考
篠竹まじる柴をいたゞく　惟然
鷄があがるとやがて暮の月　蕉
通りのなさに見世たつる秋　考
盆じまひ一荷で直ぎる鮨の魚　然
晝寐の癖をなをしかねけり　蕉
聟が來てにつともせずに物語　考
中國よりの狀の吉左右　然
朔日の日はどこへやら振舞れ　蕉
一重羽織が失てたづぬる　考
きさんじな靑葉の頃の椴楓　然
山に門ある有明の月　蕉
初あらし畠の人のかけまはり　考
水際光る濱の小鰯　然
見て通る紀三井は花の咲かゝり　蕉
荷持ひとりにいとゞ永き日　考
こち風の又西に成北になり　然
わが手に脈を大事がらるゝ　蕉
後呼の内儀は今度屋敷から　考
喧嘩のさたもむざとせられぬ　然
大せつな日が二日有暮の鐘　蕉
雪かき分し中のどろ道　考
來る程の乘掛は皆出家衆　然
奥の世並は近年の作　蕉
酒よりも肴のやすき月見して　考
赤鷄頭を庭の正面　然
定らぬ娘のこゝろ取しづめ　蕉
寐汗のとまる今朝がたの夢　考
鳥籠をづらりとおこす松の風　然
大工づかひの奥に聞ゆる　蕉
米搗もけふはよしとて歸る也　考
から身で市の中を押あふ　蕉
此あたり彌生は花のけもなくて　然
鴨の油のまだぬけぬ春　考

今宵賦

野盤子　支考

今宵は六月十六日のそら水にかよひ、月は東方の亂山にかゝげて、衣裳に湖水の秋をふくむ。されば今宵のあそび、はじめより尊卑の席をくばらねど、しば〳〵酌てみだらず。人そこ〳〵に凉みふして、野を思ひ山をおもふ。たま〳〵かたりなせる人さへ、さらに人を興ぜしめむとにあらねば、あながちに辯のたくみをもとめず、唯萍の水にしたがひ、水の魚をすましむるたとへにぞ侍りける。阿叟は深川の草庵に四年の春秋をかさねて、

ことしはみな月さつきのあはいを渉りて、伊賀の山中に、父母の古墳をとぶらひ、洛の嵯峨山に旅ねして、賀茂祇園の涼みにもたゞよはず。かくてや此山に秋をまたれけむと思ふに、さすが湖水の納涼もわすれがたくて、また三四里の暑を凌て、爰に草鞋の駕をとゞむ。今宵は菅沼氏をあるじとして、僧あり、俗あり、俗にして僧に似たるものあり。その交のあはきものは、砂川の岸に小松をひたせるがどし。深からねばすごからず。かつ味なうして人にあかるゝなし。幾年なつかしかりし人〳〵の、さしむきてわするゝに似たれど、おのづからよろこべる色、人の顔にうかびて、おぼへず鶏啼て月もかたぶきける也。まして魂祭る頃は阿叟も古さとの方へと心ざし申されしを、支考は伊勢の方に住どころ求て、時雨の比はむかへむなどもおもふなり。しからば湖の水鳥の、やがてばら〳〵に立わかれて、いつか此あそびにおなじからむ。去年の今宵は夢のごとく、明年はいまだきたらず、今宵の興宴何ぞあからさまならん。そゞろに酔てねぶるものあらば、爵盃の数に水をのません、とたはぶれあひぬ。

夏の夜や崩て明し冷し物　　芭蕉

露ははらりと蓮の椽先　曲翠
鶯はいつぞの稗に音を入て　臥高
古き革籠に反故おし込　惟然
月影の雪もちかよる雲の色　支考
しまふて銭を分る駕かき　芭蕉
猪を狩場の外へ追にがし　翠
山から石に名を書て出す　高
飯櫃なる面桶にはさむ火打鎌　然
鳶で工夫をしたる照降　考
おれが事歌に讀るゝ橋の番　蕉
持佛のかほに夕日さし込　翠
平畦に菜を蒔立したばこ跡　考
秋風わたる門の居風呂　然
馬引て賑ひ初る月の影　高
尾張でつきしもとの名になる　蕉
餅好のことしの花にあらはれて　翠
正月ものゝ襟もよごさず　高

二

春風に普請のつもりいたす也　然
藪から村へぬけるうら道　考
喰かねぬ聟も舅も口きいて　蕉
何ぞの時は山伏になる　翠
笹づとを棒に付たるはさみ箱　高
蕨こはばる卯月野ゝ末　蕉
相宿と跡先にたつ矢木の町　考
際の日和に雪の氣遣　然
呑ごゝろ手をせぬ酒の引はなし　翠
着がえの分を舟へあづくる　高
封付し文箱來たる月の暮　蕉
そろ〳〵ありく盆の上﨟衆　考
虫籠つる四條の角の河原町　然
高瀬をあぐる表一固　翠
今の間に鑓を見かくす橋の上　高
大きな鐘のどんに聞ゆる　然
盛なる花にも扉おしよせて　考
腰かけつみし藤棚の下　高

續猿蓑集巻之下

春之部　花櫻

温石のあかるゝ夜半や初櫻　露沾
寐時分に又みむ月か初ざくら　其角
顔に似ぬ發句も出よはつ櫻　芭蕉
ちか道や木の股くゞる花の山　洞木
角(すみ)いれし人をかしらや花の友　丈草
花散て竹見る軒のやすさかな　酒堂

富貴なる酒屋にあそびて、文君が爪音も醉のまぎれに思ひいでらるゝに、

酒部屋に琴の音せよ窓の花　惟然
賭にして降出されけりさくら狩　支考
人の氣もかく窺はじはつ櫻　沾徳
くもる日や野中の花の北面　猿雖
むつより花見におこる女中哉　陽和
見る所おもふところやはつ櫻　乙州
咲花をむづかしげなる老木哉　木節
我庭や木ぶり見直すはつ櫻　沾荷
二の膳やさくら吹込む鯛の鼻　子珊
簑虫の出方にひらく櫻かな　卓袋

田家

蒟蒻の名物とはんやま櫻　李里
咲かゝる花や飯米五十石　桃首
山門に花もの〳〵し木のふとり　一桐
ながれ木の根やあらはるゝ花の瀧　如雪
花笠をきせて似合む人は誰　其角
はれやかに置床なをす花の春　少年 一鷺
ぬり直す壁のしめりや軒の花　卓袋
一日は花見のあてや旦那寺　沾圃
八重櫻京にも移る奈良茶哉　仝

若菜

濡椽や薺こぼるゝ土ながら　嵐雪
梟の啼やむ岨の若菜かな　曲翠
夕波の船にきこゆるなづなかな　孤屋
一かぶの牡丹は寒き若菜かな　尾頭

梅 附柳

春もやゝ氣色とゝのふ月と梅　芭蕉
きさらぎや大黒棚もむめの花　野水
守梅のあそび業なり野老(ところ)賣　其角
里坊に碓きくやむめの花　昌房
投入や梅の相手は蕗のたう　良品
病僧の庭はく梅のさかり哉　曾良
あたらしき翠簾まだ寒し梅花　万乎
薄雪や梅の際まで下駄の跡　魚日
しら梅やたしかな家もなきあたり　千川
寐所や梅のにほひをたて籠ん　大丹

天神のやしろに詣て

身につけと祈るや梅の籬ぎは　遊糸
それ〳〵の朧のなりやむめ柳　千那
時〳〵は水にかちけり川やなぎ　意元
ちか道を敎へぢからや古柳　江東 李由
青柳のしだれくゞれや馬の曲　九節
輪をかけて馬乘通る柳かな　巴丈

鳥 附魚

鶯に長刀かゝる承塵(ナゲシ)かな　其角

うぐひすや野は塀越の風呂あがり　史邦

鶯に手もと休めむながしもと　智月

鶯や柳のうしろ藪のまへ　芭蕉

灘蓮もひしげと雉子のほろゝ哉　去來

春雨や簑につゝまん雉子の聲　洒堂

駒鳥の目のさやはづす高根哉　傘下

こま鳥の音ぞ似合しき白銀屋　長虹

燕や田をおりかへす馬のあと　野童

巣の中や身を細(ほそう)して おや燕　少年 峯嵐

雀子や鮎にもらひし繩の櫃　槐市

蝿うちになる、雀の子飼哉　河瓢

行鴨や東風につれての礒惜み　釣箒

芳野西河の瀧

鮎の子の心すさまじ瀧の音　土芳

かげろふと共にちらつく小鮎哉　圃水

しら魚の一かたまりや汐だるみ　子珊

白魚のしろき噂もつきぬべし　山蜂

深川にあそびて

白魚をふるひ寄(よせ)たる四手哉　其角

春草

なぐりても萌たつ世話や春の草　正秀

若草や松につけたる蟻の道　此筋

春の野やいづれの草にかぶれけん　尼 羽紅

川淀や淡(泡)をやすむるあしの角　猿雖

宵の雨しるや土筆の長みじか　闇指

味ひや櫻の花によめがはぎ　車來

茨はら咲添ふものも鬼あざみ　荒雀

堤よりころび落ればすみれ哉　馬莧

踏またぐ土堤の切目や蕗の塔　拙候

ふみたふす形に花さく土大根　乃龍

早蕨や笠とり山の柱うり　正秀

みそ部屋のにほひに肥る三葉哉　夕可

日の影に猫の抓出す獨活芽哉　一桐

蒲公英や葉にはそぐはぬ花ざかり　圃萡

猫戀 附胡蝶

我影や月になを啼猫の戀　探丸

うき戀にたえでや猫の盗喰　支考

おもひかねその里たける野猫哉　ミノ 己百

白日しづか也

とまりても翅は動く胡蝶かな　柳梅

衣更着のかさねや寒き蝶の羽　惟然

蝶の舞おつる椿にうたるゝな　闇指

風吹に舞の出來たる小蝶かな　出羽 重行

晝ねして花にせはしき胡蝶哉　雪窓

春鹿

振おとし行や廣野の鹿の角　澤雉

春耕

妙福のこゝろあて有(あり)さくら麻　木節

苗札や笠縫をきの宵月夜　此筋

千刈の田をかへすなり難波人　一鷺

桃 附椿

白桃やしづくも落(おと)す水の色　桃隣

金柑はまだ盛りなり桃の花　介我

伏見かと菜種の上の桃の花　雪芝

梅さくら中をたるます桃の花　水鶍

花さそふ桃や歌舞妓の脇躍　其角

江東の李由が祖父の懐舊の
法事に、おの／＼經文題の
ほつ句に、彌陀の光明とい
ふ事を、

小服綿に光をやどせ玉つばき　角上

穗は枯て臺に花咲椿かな　殘香

取あげて見るや椿のほぞの穴　洞木

ちり椿あまりもろさに續で見る　野坡

欵冬 附 躑躅 藤

山吹や垣に干たる蓑一重　闇指

田家の人に對して

山吹も散るか祭の鮓なます　酒堂

掘おこすつゝじの株や蟻のより　雪芝

藪疇や穗麥にとゞく藤の花　荊口

春月

山の端をちから負せ春の月　長崎 魯町

春雨 附 春雪 蛙

物よはき草の座とりや春の雨　荊口

咄さへ調子合けり春のあめ　乃龍

春雨や唐丸あがる臺どころ　游刀

なにがし主馬が
武江の旅店をたづねけ
る時

春雨や枕くづるゝうたひ本　支考

はる雨や光りうつろふ鍛冶が鎚　桃首

淡雪や雨に追るゝはるの笠　風麥

行つくや蛙の居る石の直　風睡

汐干

のぼり帆の淡路はなれぬ汐干哉　去來

品川に富士の影なきしほひ哉　闇指

雜春

出かはりやあはれ勸る奉加帳　許六

若草やまたぎ越たる桐の苗　風睡

黑ぼこの松のそだちやわか緑　土芳

かげろふや巖に腰の掛ちから　配力

小米花奈良のはづれや鍛冶が家　万乎

聲符に獨活や野老や市の中　苔蘇

木の芽たつ雀がくれやぬけ参　均水

春の日や茶の木の中の小室節　正秀

三尺の鯉はぬる見ゆ春の池　仙化

引鳥の中に交るや田螺とり　支浪

三月盡

朧夜を白酒賣の名殘かな　支考

歲旦

若水や手にうつくしき薄氷　少年 武仙

莚道は年のかすみの立所哉　百歲

鶯や雜煮過ての里つゞき　尙白

蓬萊の具につかひたし螺の貝　圃箔

母方の紋めづらしやきそ始　山蜂

詩にいへる衣裳を顚倒すと
いふ事を、老父の文に書越
し侍れば、

元日や夜ふかき衣のうら表　千川

人も見ぬ春や鏡のうらの梅　芭蕉

明る夜のほのかに嬉しよめが君　其角

檪の世阿彌まつりや靑かづら　嵐雪

萬歲や左右にひらひて松の陰　去來

鶯に橘見する羽ぶきかな　土芳

はつ春やよく仕て過る無調法　風睡

冬年孫をまうけて

元日やまだ片なりの梅の花　猿雖
子共にはまづ惣領や藏びらき　薦雫
背たらおふ物を見せばや花の春　野童
歯朶の葉に見よ包尾の鯛のそり　耕雪
鮭の簀の寒氣をほどく初日哉　左柳
はつ春や年は若狭の白比丘尼　前川
枇杷の葉のなを慥也初霞　斜嶺
世の業や髭はあれども若夷　山蜂
濡いろや大かはらけの初日影　任行
元日や置どころなき猫の五器　竹戸
我宿はかつらに鏡すえにけり　是樂
搗栗(かち)や餅にやはらぐそのしめり　沾圃
虫ぼしのその日に似たり藏びらき　圃角

夏之部

郭公

暁の雹をさそふやほとゝぎす　其角
ほとゝぎす啼や湖水のさゝ濁　丈草
しら濱や何を木陰にほとゝぎす　曾良
蜀魂啼ぬ夜しろし朝熊山(あさま)　支考
鳴瀧の名にやせりあふほとゝぎす　如雪
蕪の居なじむそらやほとゝぎす　盧本
淀よりも瀬田になけかし子規

此句は石山の麓にて巡禮の吟じて通りけると也。

郭公かさいの森や中やどり　沾圃

木曾草花

橙や日にこがれたる夏木立　闇指
里〳〵の姿かはりぬ夏木だち　野荻

園中二句

此中の古木はいづれ柿の花　此筋
年切の老木も柿の若葉哉　千川
姫百合や上よりさがる蛛の糸　素龍

題山家之百合

しら雲やかきねを渡る百合花　支考
山もえにのがれて咲やかきつばた　尾頭
冷汁はひへすましたり杜若　沾圃
手のとゞく水際うれし杜若　(イガ)宇多都
夏菊や茄子の花は先へさく　拙候

ばせを庵の即興

晝がほや日はくもれども花盛　沾圃
夕顔や酔てかほ出す窓の穴　芭蕉
夕がほや裸でおきて夜半過　(亡人)嵐蘭
藻の花をちゞみ寄たる入江哉　残香
蘭の花にひた〳〵水の濁り哉　此筋
蓮の葉や心もとなき水離れ　白雪
客あるじ共に蓮(はちす)の蠅おはん　良品

瓜

朝露によごれて涼し瓜の土　芭蕉

ぼたん

姫ふりや袖に入ても重からず　至暁
麁相なる膳は出されぬ牡丹哉　風弦

早苗

京入や鳥羽の田植の歸る中　(長崎)卯七
早乙女に結んでやらん笠の紐　闇指
ふとる身の植おくれたる早苗哉　魚日
田植歌まてなる顔に謡ひ出し　重行

一田づゝ行めぐりてや水の音　北枝
里の子が燕握る早苗かな　支考

螢

蚊遣火の烟にそるゝほたるかな　許六
三日月に草の螢は明にけり　野狄

納涼

涼しさや竹握り行藪づたひ　半殘
無菓花(無花果)や廣葉にむかふ夕涼　惟然

深川の庵に宿して

ばせを葉や風なきうちの朝涼　史邦
涼しさや駕籠を出ての繩手みち　重翠
石ぶしや裏門明て夕涼み　長崎 牡年
涼しさよ牛の尾振て川の中　万乎

漫興三句

腰かけて中に涼しき階子哉　洒堂
涼しさや椽より足をぶらさげる　支考
生醉をねぢすくめたる涼かな　雪芝

ばせを翁を茅屋にまねきて

涼風も出來した壁のこはれ哉　游刀

いそがしき中をぬけたる涼かな　仝
立ありく人にまぎれてすゞみかな　去來
默禮にこまる涼みや石の上　正秀
職人の帷子きたる夕すゞみ　土芳
涼しさや一重羽織の風だまり　我眉
夜涼やむかひの見世は月がさす　里圃

盛夏

かたばみや照かたまりし庭の隅　野狄
李盛る見世のほこりの暑哉　万乎

藪醫者のいさめ申されしに
答へ侍る

實(げ)にもとは請(うけ)て寐冷の暑かな　正秀
取葺の内のあつさや棒つかひ　乙州
煤さがる日盛あつし臺所　怒風
茨ゆふ垣もしまらぬ暑かな　尾張 素覽
草の戸や暑を月にとりかへす　我蜂
あつき日や扇をかざす手のほそり　印苔
積あげて暑さいやます疊かな　卓袋
粘(つり)になる蚫も夜のあつさかな　里東

立寄ればむつとかぢやの暑かな　沾圃

竹の子

筍にぬはるゝ岸の崩かな　可誠
若竹や烟のいづる庫裏の窓　曲翠

五月雨附夕立

しら鷺や青くもならず黴(雨脱カ)の中　不玉
さみだれや蠶煩ふ桑の畑　芭蕉
五月雨や踵よごれぬ礒づたひ　沾圃
夕立にさし合(あはせ)けり日傘　拙候
白雨や蓮の葉たゝく池の蘆　苔蘇
夕だちやちらしかけたる竹の皮　曉鳥
ゆふ立に傘かる家やま一町　圃水

蟬

白雨や中(ちう)戻りして蟬の聲　正秀
きつと來て啼て去けり蟬のこゑ　胡故
森の蟬涼しき聲やあつき聲　乙州
蟬啼やぬの織る窓の暮時分　曉鳥

かつを

籠の目や潮こぼるゝはつ鰹　業拾

雜夏

晝寐して手の動やむ團哉　杉風

虫の喰ふ夏菜とぼしや寺の畑　荊口

夏痩もねがひの中のひとつなり　如眞

川狩にいでゝ

じか燒や麥がらくべて柳鮠　文鳥

異草に我がちがほや園の紫蘇　蔦雫

夕闇は螢もしるや酒ばやし　水鷗

せばきところに老母をやしなひて

魚あぶる幸もあれ蕋うちは　馬莧

梅むきや笊かたぶく日の面　重羣

澤潟や道付かゆる雨のあと　野童

蝸牛つの引藤のそよぎ哉　水鷗

晋の淵明をうらやむ

窓形に晝寐の臺や簟　芭蕉

枯ごはな帷子かぶるひるねかな　惟然

貧僧のくるしみ、冬の寒さはふせぐよすがなきに、夏日の納涼は、扇一本にして世上に交る。

帷子のねがひはやすし錢五百　支考

穐之部

名月

名月に麓の霧や田のくもり　ばせを

名月の花かと見えて棉畠

ことしは伊賀の山中にして、名月の夜この二句をなし出して、いづれか是、いづれか非ならんと侍しに、此間わかつべからず。月をまつ高根の雲ははれにけりこゝろあるべき初時雨かな、と圓位ほうしのたどり申されし麓は、霧横り水ながれて、平田渺〱と曇りたるは、老杜が唯雲水のみなり、といへるにもかなへるなるべし。その次の棉ばたけは、言葉麁にして心はなやかなり。いはゞ今のこのむ所の一筋に便あらん。月のかつらのみやはなる（實やは生る）ひかりを花とちらす斗に、とおもひやりたれば、花に清香あり月に陰ありて、是も詩歌の間をもれず。しからば前は寂寞をむねとし、後は風興をもつぱらにす。吾こゝろ何ぞ是非をはかる事をなさむ。たゞ後の人なほあるべし。

支考評

名月の海より冷る田蓑かな　酒堂

明月や西にかゝれば蚊屋のつき　如行

もの〱の心根とはん月見哉　露沾

ふたつあらばいさかひやせむ今日の月　智月

名月や長屋の陰を人の行　闇指

明月や更科よりのとまり客　凉葉

明月や灰吹捨る陰もなし　不玉

中切の梨に氣のつく月み哉　配力

名月や草のくらみに白き花　左柳

明月や遠見の松に人もなし　圃水

おがむ氣もなくてたふとやけふの月　山蜂

明月や寝ぬ所には門しめず　風國

名月や四五人乘し艜ぶね　需笑

老の身は今宵の月も内でみむ　重友

明月にかくれし星の哀なり　泥芹

伊勢の山田にありてかりの庵をおもひ立けるに

二見まで庵地たづぬる月見哉　支考

芥子蒔と畑まで行む月見哉　空牙

柹の名の五助と共に月みかな　如眞

山鳥のちつとも寐ぬや峰の月　宗比

名月や里のにほひの青手柴　木枝

場(には)に居て月見ながらや莚機　利合

明月や聲かしましき女中方　丹楓

明月や何もひろはず夜の道　野荻

飛入の客に手をうつ月見哉　正秀

淀川のほとりに日を暮して

舟引の道かたよけて月見哉　丈草

待宵の月に床しや定飛脚　景桃

家に三老女といふ事あり。亡父將監が秘してつたへ侍しをおもひ出て、(三老女とは姨捨、檜垣、關寺。沾圃は能役者寶生左太夫也)

姨捨を闇にのぼるやけふの月　沾圃

露置て月入あとや塀のやね　馬莧

蔦かづら月まだたらぬ梢哉　里東

月影や海の音聞長廊下　牧童

深川の末、五本松といふ所に船をさして、

川上とこの川しもや月の友　芭蕉

十六夜はわづかに闇の初哉　仝

いざよひは闇の間もなしそばの花　猿雖

七夕

更行や水田の上のあまの川　惟然

星合を見置て語れ朝がらす　涼葉

船形りの雲しばらくやほしの影　東潮

たなばたをいかなる神にいはふべき　沾圃

朝風や薫姫(たきものひめ)の團もち　乙州

立秋

粟ぬかや庭に片よる今朝の秋　露川

秋たつや中に吹るゝ雲の峯　左次

穐草

朝露の花透通す桔梗哉　柳梅

細工にもならぬ桔梗のつぼみ哉　隨友

女郎花ねびぬ馬骨の姿哉　濁子

をみなへし鶏坂の杖にたゝかれな　馬莧

一筋は花野にちかし畑道　烏栗

弓固とる頃なれや藤ばかま　支浪

贈芭蕉庵

百合は過(すぎ)芙蓉を語る命かな　風麥

さよ姫のなまりも床しつまね花　史邦

枯のぼる葉は物うしや鶏頭花　万乎

鶏頭や鴈の來る時なをあかし　芭蕉

鶏頭の散る事しらぬ日數哉　至曉

折／＼や雨戸にさはる荻のこゑ　雪芝

蔦の葉や殘らず動く秋の風　荷兮

山人の晝寐をしばれ蔦かづら　加賀山中 桃妖

風毎に長(たけ)くらべけり蔦かづら　杉下

朝がほ

朝顔の莟かぞへむ薄月夜　田上尼

あさがほの這ふてしだるゝ柳かな　闇指

水も有あさがほたもて錫の舟　風麦
朝良にしほれし人や毳帽子　其角

虫 附鳥

ぎぼうしの傍に經よむいとゞかな　女 可南
竈馬や顔に飛つくふくろ棚　北枝
火の消て胴にまよふか虫の聲　正秀
秋の夜や夢と鼾ときり〴〵す　水鷗
みの虫や形に似合し月の影　杜若
蜻蛉や何の味ある竿の先　探丸
蟷螂(の)や腹を冷すか石の上　蔦雫
蓮の實に輕さくらべん蟬の空(から)　示峯
ぬけがらにならびて死る秋のせみ　丈草
鵙がねにゆらつく浦の苫屋哉　馬莧
鶺鴒や走り失たる白川原　氷固
粟の穂を見あぐる時や啼鶉　支考
老の名の有ともしらで四十雀　芭蕉

穐風

秋かぜや二番たばこのねさせ時　游刀
雀子の髭も黒むや秋の風　式之
何なりとからめかし行秋の風　支考
松の葉や細きにも似ず秋の聲　風國
をのづから草のしなへを野分哉　圃燕
ふんばるや野分にむかふはしら賣　九節
あれ〳〵て末は海行野分哉　猿雖

稲妻

獨い(居)て留守ものすごし稲の殿　少年 一東
稲妻や雲にへりとる海の上　宗比
明ぼのや稲妻戻る雲の端　土芳
いなづまや闇の方行五位の聲　芭蕉

木實 附菌

團栗の落て飛けり石ぼとけ　爲有
炭焼に澁柿たのむ便かな　玄虎
秋空や日和くるはす柿のいろ　洒堂
つぶ〳〵と箒をもるゝ榎み哉　重翠
はつ茸や鹽にも漬(つけ)ず一盛(さかり)　沾圃

伊賀の山中に阿叟の閑居を
訪らひて

松茸や都に近き山の形　惟然

伊勢の斗從に山家をとはれて

まつ茸やしらぬ木の葉のへばりつく　芭蕉

楓

後屋の塀にすれたり村紅葉　北鯤

鹿

尻すぼに夜明の鹿や風の音　風睡
寐がへりに鹿おどろかす鳴子哉　一酌

農業

起しせし人は逃けり蕎麦の花　車庸
木の下に狸出むかふ穂懸かな　買山
さまたげる道もにくまじ嚀の稲　如雪

伊勢の斗從に山家をとはれて

蕎麦はまだ花でもてなす山路かな　芭蕉
早稲刈て落つきがほや小百姓　乃龍
山雀のどこやらに啼霜の稲　斗從
居りよさに河原鶸(ひわ)來る小菜畠　支考
一霜の寒や芋のずんど刈　仝
肌寒き始にあかし蕎麦のくき　惟然
百なりていくらがものぞ唐がらし　木節

大師河原にあそびて、樽次
（底深の誤か）といふもの丶
孫に逢ひて、

そのつるや西瓜上戸の花の種　沾圃

菊

翁草二百十日も恙なし　薦雫

ゑぼし子やなど白菊の玉牡丹　濁子

黄木綿の雫に寒し菊の花　支考

題畫屏

むかばきやか丶る山路の菊の露　兀峯

借りかけし庵の噂やけふの菊　丈草

暮秋

廣澤や背負ふて歸る秋の暮　野水

行秋を鼓弓の糸の恨かな　乙州

行あきや手をひろげたる栗のいが　芭蕉

雜

五六十海老つゐやして鯊（ハゼ）一ッ　之道

栗からの小家作らむ松の中　團友

あら鷹の壁にちかづく夜寒かな　畦止

殘る蚊や忘れ時出る秋の雨　四友

身ぶるひに露のこぼる丶靫哉　荻子

更る夜や稻こく家の笑聲　万乎

柿の葉に焼みそ盛らん薄箸　桑門宗波

本馬主馬が宅に、髑髏どもの笛鼓をかまへて、能する處を畫て、舞臺の壁にかけたり。まことに生前のたはぶれなどは、このあそびに殊（異）らんや。かの髑髏を枕として、終に夢うつ丶をわかたざるも、只この生前をしめさる丶ものなり。

稻つまや　かほのところが　薄の穂　ばせを

冬之部

時雨附霜

この頃の垣の結目やはつ時雨　野坡

しぐれねば又松風の只をかず　北枝

けふばかり人も年よれ初時雨　芭蕉

一時雨またくづをる丶日影哉　露沾

初しぐれ小鍋の芋の煮加減　馬莧

平押に五反田くもる時雨かな　野明

柴賣やいで丶しぐれの幾廻り　闇指

椀賣も出よ芳野の初時雨　空牙

穴熊の出ては引込時雨かな　爲有

更る夜や鏡にうつる一しぐれ　鶏口

石に置て香爐をぬらす時雨哉　野荻

柿包む日和もなしやむら時雨　露川

高みよりしぐれて里は寐時分　里圃

浮雲をそなたの空にをきにしの日影よりこそあめになりけれ

沖西の朝月くり出す時雨かな　沾圃

はつ霜や犬の土かく爪の跡　北鯤

ひとつばや一葉〳〵の今朝の霜　支考

元祿辛（癸カ）酉之初冬九日
素堂菊園之遊

重陽の宴を神無月のけふにまうけ侍る事は、その頃は花いまだめぐみもやらず、菊花ひらく時則重

陽といへるこゝろにより、
かつは展重陽のためしな
きにしもあらねば、なほ
秋菊を詠じて人々をす
ゝめられける事になりぬ。

菊の香や庭に切たる履の底　芭蕉

柚の色や起あがりたる菊の露　其角

菊の氣味ふかき境や藪の中　桃隣

八專の雨やあつまる菊の露　沾圃

何魚のかざしに置ん菊の枝　曾良

菊畠客も圓座をにじりけり　馬莧

柴桑の隱士、無絃の琴を翫
しをおもふに、菊も輪の大
ならん事をむさぼり、造化
もうばふに及ばじ。今その
菊をまなびて、をのづから
なるを愛すといへ共、家に
菊ありて、琴なし。かけた
るにあらずやとて、人見竹
洞老人、素琴を送られしよ
り、是を夕にし、是を朝に
して、あるは聲なきに聽き、
あるは風にしらべあはせて
自ぼこりぬ。

うるしせぬ琴や作らぬ菊の友　素堂

草 附 木

水仙や練塀われし日の透間　曲翠

なを清く咲や葉がちの水仙花　氷固

水仙の花のみだれや藪屋しき　惟然

范蠡が趙南(長男の誤カ)の
こゝろをいへる山家集の題
に習ふ。

一露もこぼさぬ菊の氷かな　芭蕉

山茶花は元より開く歸り花　車庸

冬梅のひとつふたつや鳥の聲　土芳

山茶花も落てや雪の散椿　露笠

木葉 附 冬枯 風

おもひなし木の葉ちる夜や星の數　沾徳

屋さえて江の鮒ひらむ落葉哉　露沾

冬川や木の葉は黑き岩の間　惟然

麓より足ざはりよき木の葉哉　枳風

本柳坊宗比の庵をたづねて

はいるより先取て見る落葉哉　イセ 一道

枯はてゝ霜にはぢずやをみなへし　杉風

牛の行道は枯野のはじめかな　桃醉

冬枯に去年きて見たる友もなし　乃龍

草枯に手うつてたゝぬ鴨もあり　利牛

野は枯てのばす物なし鶴の首　支考

木がらしや色にも見えず散もせず　智月

凩や背中吹かるゝ牛の聲　風斤

木枯や刈田の畦の鐵氣水　惟然

こがらしや藁まきちらす牛の角　塵生

夷 講

ゑびす講酢賣に袴着せにけり　芭蕉

惠比須講鶩も鴨に成にけり　利合

鳥 附 いを

のとの海を見て

塵濱にたゝぬ日もなし浦衞　句空

追かけて雹にころぶ千鳥かな　蔦雫

小夜ちどり庚申まちの船屋形　丈草

入海や碇の筌に啼千鳥　闇指

毳につゝみてぬくし鴨の足　芭蕉

たつ鴨を犬追かくるつゝみかな　乍木

杓汐にころび入べき生海鼠かな　亡人 利雪
らか〳〵と海月に交るなまこ哉　車庸
見へ透や子持ひらめのうす氷　岱水
一塩にはつ白魚や雪の前　杉風
かくふつや腹をならべて降霰　拙候
杜夫魚は河豚の大さにて水上に浮ぶ。越の川にのみあるらをなり。

冬月 附 衾

喰ものや門賣ありく冬の月　里圃
あら猫のかけ出す軒や冬の月　丈草
何事も寐入るまでなり紙ぶすま　小柰
水仙や門を出れば江の月夜　支考

埋火

埋火や壁には客の影ぼうし　芭蕉
侘しさは夜着を懸たる火燵かな　少年 桃先
自由さや月を追行置火燵　洞木

雪

初雪や門に橋あり夕間暮　其角
朝ごみや月雪うすき酒の味　仝
雪あられ心のかはる寒さ哉　夕菊
鷦鷯家はとぎるゝはだれ雪　祐甫
雪垣やしらぬ人には霜のたて　蔦雫
ふたつ子も草鞋を出すやけふの雪　支考
片壁や雪降かゝるすさ俵　圃吟
思はずの雪見や日枝の前後　丈草
髪剃ば降來る雪か比良のたけ　陽和
伊賀大和かさなる山や雪の花　配力

神楽

夜神楽に歯も喰しめぬ寒哉　史邦

鉢たゝき

食時やかならず下手の鉢扣　路草
鉢たゝき干鮭賣をすゝめけり　馬莧
婿入の門も過けり鉢たゝき　許六
狼を送りかへすか鉢たゝき　沾圃

煤掃 附 餅つき

煤はきや鼠追込黄楊の中　殘香
煤掃やあたまにかぶるみなと紙　黄逸 米雲
才覺な隣のかゝや煤見舞　馬莧
煤はきやわすれて出る鉢ひらき　ミノ 閭如
煤掃や折敷一枚踏くだく　惟然
餅つきや火をかいて行男部屋　岱水
餅つきやあがりかねたる鶏のとや　嵐蘭
もち搗の手傳ひするや小山伏　馬佛

歳暮 附 節季候 衣配

これかへす道も師走の市のさま　曾良
門砂やまきてしはすの洗ひ髪　里東
賣石やとつてもいなず年の暮　草士
猿も木にのぼりすますやとしの暮　車來
大年や親子たはらの指荷ひ　万乎
袴きぬ聟入もありとしの昏　李由
(此句『炭俵』に出でたり)
年の市誰を呼らん羽織どの　其角
打こぼす小豆も市の師走哉　正秀
引結ぶ一つぶ銀やとしの暮　荻子
桶の輪のひとつあたらし年のくれ　猿雖
天鵝毛のさいふさがして年の暮　惟然
濱荻に筆を結せてとしの暮
此句は圓司呂丸が、羽ぐ

ろより京にのぼるとて、伊勢にもまうで侍りければ、そのとしの暮かゝる事もいひ殘して、今はなき人とはなりし。

盜人にあふた夜もあり年の暮　芭蕉
余所に寐てどんすの夜着のとし忘　支考
漸に寐所出來ぬ年の中　土芳
節季候や弱りて歸る藪の中　尙白
節季候の拍子をぬかす明屋哉　少年 桃後
裁屑(たちくづ)は末の子がもつきぬ配　山峰
一しきり啼て靜けし除夜の鷄　利合

雜冬

小屛風に茶を挽かゝる寒さ哉　斜嶺
植竹に河風さむし道の端　土芳
井の水のあたゝかになる寒哉　李下
寒聲や山伏村の長づゝみ　仙杖
霜ばしらをのがあげしや土龍　圃仙
火燵より寢に行時は夜半哉　雪芝
山陰や猿が尻抓(か)く冬日向　コ谷
俎板に人參の根の寒さ哉　沾圃

菊刈や冬たく薪の置所　杉風

釋教之部　附 追善 哀傷

涅槃

涅槃像あかき表具も目にたゝず　沾圃
ねはん會や皺手合(あはす)る珠數の音　芭蕉
山寺や猫守り居るねはむ像　不撤
貧福のまことをしるや涅槃像　山峰

灌佛

灌佛やつゝじならぶる井戶のやね　曲翠
散花や佛うまれて二三日　不玉
灌佛や釋迦と提婆は從弟どし　之道

魂祭

喰物もみな水くさし魂まつり　嵐雪
寐道具のかた〳〵やうき魂祭　去來
やま伏や坊主をやとふ玉祭　沾圃

甲戌の夏、大津に侍しを、このかみのもとより消息せられければ、舊里にかへりて、盆會をいとなむとて、

家はみな杖にしら髮の墓參　芭蕉

悼少年 二句

かなしさや麻木(をがら)の箸もおとなみ　惟然
その親をしりぬ其子は秋の風　支考

かまくらの龍口寺に詣て

首の座は稻妻のするその時か　木節
はか原や稻妻やどる桶の水　支梁

御影講

柚も柿もおがまれにけり御影講　沾圃

臘八

腸をさぐりて見れば納豆汁　許六
何のあれかのあれ今日は大師講　如行

雜題

洛東の眞如堂にして、善光寺如來開帳の時、

涼しくも野山にみつる念佛哉　去來
有ると無きと二本さしけりけしの花　智月
けし畑や散しづまりて佛在世　乙州

もののふに川越問ふや富士まうで　重寥

手まはしに朝の間涼し夏念佛　野坡

食堂(じきだう)に雀鳴なり夕時雨　支考

旅之部

送別

元祿七年の夏、ばせを翁の別を見送りて、

麥ぬかに餅屋の見世の別かな　荷兮

別るゝや柿喰ひながら坂の上　惟然

許六が木曾路におもむく時

旅人のこゝろにも似よ椎の花　芭蕉

留別

洛の惟然が宅より古郷に歸る時

鼠ども出立の芋をこがしけり　丈草

鮎の子のしら魚送る別哉　芭蕉

甲斐のみのぶに詣ける時、宇都の山邊にかゝりて

年よりて牛に乗けり蔦の路　木節

稻づまや浮世をめぐる鈴鹿山　越人

にべもなくつゐたつ蟬や旅の宿　野徑

出羽の國におもむく時、みちのくのさかひを過て、

そのかみは谷地(ヤチ)なりけらし小夜碪　厶羽

十團子も小つぶになりぬ秋の風　許六

大名の寐間にもねたる夜寒哉　仝

くま野路

くるしさも茶にはかつへぬ盆の旅　曾良

つばくらは土で家する木曾路哉　猿雖

明ぼのはたちばなくらし旅姿　我峯

煎りつけて砂路あつし原の馬　史邦

回國の心ざしも漸〳〵伊勢のくにゝいたりて

文臺の扇ひらけば秋涼し　亡人 呂丸

我蒲團いたゞく旅の寒かな　沾圃

常陸の國あしあらひといふ所に行暮て、やどり求んとせしに、その夜はさる事ありとて、宿をかさゞりければ、一夜別時の軒の下にかゞまりふして、

椽に寐る情や梅に小豆粥　支考

はつ瓜や道にわづらふ枕もと　仝

元祿三(四)年の冬、粟津の草庵より武江におもむくとて、嶋田の驛塚本が家にいたりて、

宿かりて名をなのらするしぐれかな　ばせを

(『泊船集』『小文庫』等「宿かして」とす)

續猿蓑は芭蕉翁の一派の書也。何人の撰といふ事をしらず。翁迁化の後、伊賀上野翁の兄、松尾なにがしの許にあり。某懇望年を經て、漸今歳の春本書をあたえ。世に廣むる事をゆるし給へり。書中或は墨けし、あるひは書入等のおほく侍るは、草稿の書なればなり。一字をかえず一行をあらためず、その書其手跡を以て、直に板行をなす物也。

元祿十一寅　ゐづゝ屋

五月吉日　庄兵衛書　重勝

附録

附錄解說

芭蕉全集の一部として「附錄」の名の下に、芭蕉の追悼集並に傳記關係のものを收錄して、以て芭蕉研究の資料といたしたいとおもふのであります。

芭蕉追悼に關する俳書は多々ありまして、送葬當時のものから、近くは明治二十六年二百年忌の法會の冊子までを計へ立てましたならば、驚くべき數に上る事でありませう。併し眞に研究資料たるべきものはさう多くは無いとおもふのであります。その中から最も重要なりと認めますもの二種を採擇いたしました。

傳記に關しましては現代の研究は大に進んでをりまして、數種の佳書があります。古人のものもそれ〴〵の特長を備へてをりまして、一得一失其記載の一致を缺くのを遺憾といたします。おもふに芭蕉の如き大詩人の幼時若くは雌伏時代はよくわからないのが當然であります。强て之を明かにせんとするが爲めに、種々の異說をも生じ、遂には附會の說話すら出で來るのであります。依て私は最も多分に眞實性を含んでをると認めますもの二種を收錄いたしたのであります。其一つ〴〵に就て申述べま

せう。

▽枯　尾　花　　半紙本　二冊

元祿七年十月十二日芭蕉は大阪の旅行先で病んで歿しました。其發病から終焉までの狀況は、「外篇」に收めた『笈日記』「難波部」の「前後日記」に詳かであります。此時江戶の多賀谷龜翁一行と旅行中であつた其角は、住吉まで來て、芭蕉が大阪に病臥してゐる噂を聞いて、一行と別れて其病床へ駈け附けたのであります。それは終焉の前一日の十一日でありました。師弟の契淺からざるものがあつて、其末期の水を進むる事を得たのであります。十四日義仲寺の葬儀、十八日初七日の追善俳諧等皆其角が中心となつて執行したのであります。京大津には去來丈草をはじめ有力な門弟は多々あつたのでありますが、第一高弟たる其角を推して其指揮に從つたのであります。此間に於けるうるはしい諸子の眞情は、今も尙人を感動せしむるものがあります。其時其角が記した終焉記、七日〳〵の追善俳諧や各國各地からの悼句、嵐雪桃隣がわざ〳〵江戶から上つて來て營んだ初月忌の俳諧などを纂輯し、其角自ら板下を書いて上梓いたし

たのが此『枯尾花』であります。其角の終焉記は爾來此種文章の典型となつた程の名文であります。書名は芭蕉の「ともかくもならでや雪の枯尾花」の句から名づけたのでありますが、尚其角の追悼の發句「なきがらを笠にかくすや枯尾花」も無關係ではないやうにおもふのであります。

▽芭蕉翁行狀記　　半紙本　一冊

行乞の境涯から芭蕉に拾ひ上げられたと稱される路通は、元祿四年の頃から又芭蕉に遠ざかつてをりましたが、芭蕉の死を聞き、驚きもし、悲しみもして大津へ駈け附けたのでありました。初七日の法會に間に合つたのでありますが、其追善俳諧の席には加はる事を得ませんでした。併し多少の同情者もあつて、二七日初月忌等の俳諧を行ひました。それらの連句や發句を輯めた上に、芭蕉の略傳を附けましたのが卽ち此『行狀記』であります。此書は元祿の初版本が至つて乏しく、紀逸本と稱する寶曆の再刻本が行はれてをるのであります。本全集は松宇文庫青印本の初版本を以て校訂いたしした事を特記し、以て伊藤松宇先生の御好意を明かにいたします。路通は美濃の人で、齋部

氏(又忌部氏)或は八十村氏であります。何の爲めに芭蕉から遠ざかつたのであるかは不明でありますが、芭蕉は深く咎めてはをらなかつたのであります。鬼貫の窮乏を救はんとして、何かよからぬ事をしたといふ說は根據が無いやうであります。享保のはじめ頃大阪で歿したといふ事でありますが、其經歷はあまりよくわかつてをりません。

▽蕉翁全傳　寫本一冊

芭蕉の故鄕なる伊賀の上野で書かれました芭蕉の傳記であります。長い間寫本で行はれましたので、多少錯簡竄入の疑ひが無いでもありませんが、芭蕉の傳記としては多分に眞實性を含んでをるものであります。服部土芳などの說話を基本とし、上野地方の所傳を參酌して、川口竹人が寶曆十二年に書いたものであります。竹人は芭蕉門人辻荻子の弟であると申す事であります。土芳とも交際のありました事は『蓑虫庵集』に竹人の東武に行くを送る發句があるので知り得られます。私は潁原退藏氏藏架のものを借り受けて底本といたし、且つ勝峰晋風氏の藏本を參照いたしました。潁原

本は曾て蓼花文庫に在つたもの、勝峰本は山田市の爲豊園耕雨氏の藏されたものであります。耕雨氏に就ては雁魚句を連ねた十餘年前を想起して、追懐の情轉々切なるものがありました。此機會に於て穎原勝峰兩氏の好意に對して感謝を表します。

▽芭蕉翁繪詞傳　　大本三冊

芭蕉の爲めにあらゆる貢献をいたした蝶夢は、其傳記にも手を附けたのであります。しかも普通のものではなくして、繪詞傳であります。其繪は禁裏御用を承る所の狩野法橋正榮の筆、其詞書は蝶夢自ら之に當りまして、三卷の立派な繪卷物が出來上りました。丁度芭蕉百回忌の追福として、之を義仲寺の翁堂に納めたのであります。明治の初期頃此繪卷物が坊間に逸出して、ある私人の手にありましたのを、瀨川露城氏が無名庵第十九世の庵主となつて、鋭意其復興に當り、翁堂傳來の諸什物を買戻しつゝある際、此繪卷物を見付け出しましたが、其金額が手にあまるので、之を三井寺に謀り、三井寺に於て買戻して同寺の什物といたしました。大正天皇が未だ東宮におはせられし頃、三井寺へ成らせられました時、畏くも台覽の榮を得たのであります。蝶夢は其夢想だも

せざりし至高の光榮に、定めし地下に感泣した事でありませう。(此事に盡力せる露城氏は昭和三年五月七日七十八歳で須磨の轉地先で歿しました。 氏は姫路の人であります。)

此繪卷物の繪を田偃武が縮寫し、詞書は蝶夢の筆蹟のまゝを板にいたしたのが即ち此『繪詞傳』であります。 其詞書は其角の『終焉記』、支考の『笈日記』に基き、伊賀の傳說を參酌して、おもむき深く書きなしたものであります。 芭蕉の傳記としては異色あるものであります。

▽芭蕉年譜

私が十數年來取集めつゝあつた資料によつて、今回新たに編しましたのであります。最近芭蕉に關する研究は各方面共に進んで參りましたので、私の此仕事は至大なる便宜を得たのであります。 就中樋口功氏の『芭蕉研究』並に荻原蘿月氏の『詩人芭蕉』の二書は有益なる參考書でありました。

記載事項中二說も三說もあつて何れとも決しかぬるものは、双方擧げる事にいたしたのであります。 輕々な斷定を避けて、研究の餘地を存したのであります。 勿論未定稿でありますから追ひ〱に補正して行きたいとおもふのであります。(昭和四、一、十一)

ばせを翁涅槃像拓本

義仲寺の芭蕉翁碑

枯尾華
上

芭蕉翁終焉記

はなやかなる春は、かしら重く、まなこ濁りて心うし。泉石冷々たる納涼の地は、朝ごとに濕氣をうけて、夜もねられず、朝むづけたり。秋はたゞ、かなしびを添る、腸をつかむばかり也。ともかくもならでや雪のかれ尾花　と無常閑闘の折〳〵は、とぶらふ人も便なく立歸て、今年就中老衰なりと歎あへり。抑此翁、孤獨貧窮にして、德業にとめること無量なり。二千餘人の門葉、邊遠ひとつに合信する因と緣との不可思議、いかにとも勘破しがたし。天和三年（二年の誤）の冬、深川の草庵急火にかこまれ、潮にひたり、苫をかつぎて、煙のうちに生のびけん。是ぞ玉の緒のはかなき初め也。爰に猶如火宅の變を悟り、無所住の心を發して、其次の年、夏の半に甲斐が根にくらして、富士の雪のみつれなければと、それより三更月下入無我といひけん昔の跡に立歸りおはしければ、人々うれしくて、燒原の舊艸に庵をむすび、しばしも心とゞまる詠にもとて、一かぶの芭蕉を植たり。雨中吟、芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉　と侘られしに、堪閑の友しげくかよひて、をのづから芭蕉翁とよぶことになむ成ぬ。その頃圓覺寺大巓和尚と申が、易にくはしくおはしけるによりて、うかゞひ侍るに、或時翁が本卦のやうみんとて、年月時日を古暦に合せて、筮考せられけるに、萃といふ卦にあたる也。是は一もとの薄の風に吹れ、雨にしほれて、うき事の數々しげく成ぬれども、命つれなく、からうじて世にあるさまに譬たり。さればあつまるとよみて、その身は潛ならんとすれども、かなたこなたより事つどひて、心さしをやすんずる事なしとかや。信に聖典の瑞を感じける。さのごとく、艸庵に入來る人々の道をしたへるあまり、とにもかくにも慰むれば、所得たる哉。橋あり、舟有、林アリ、塔アリ、花の雲鐘は上野か淺草か　と眼前の奇景も捨がたく、をの〳〵がせめておもふも、むつまじく侍れど、古鄕に聊忍ばるゝ事ありとて、貞享初のとしの秋、知利をともなひ、大和路やよし野の奥も心のこさず、露とく〳〵こゝろみにうき世すゝがばや。是より人の見ふれたる茶の羽織、ひの木笠になん、いかめしき音やあられと風狂して、こなたかなたのしるべ多く、鄙の長路をいたはる人々、名を乞、句を忍ぶこと安からず聞えしかば、隱れかねたる身を竹齋に似たる哉　と風の吟行に、猶々德化して正風の師と仰ぎ侍る也。近在隣鄕より馬をはせて、來りむかふるもせんかたな

枯尾花　上

し。心をのどめてと思ふ一ｰ日もなかりければ、心氣いつしかに衰減して、病ム鴈のかた田におりて旅ね哉　とくるしみけん其年より、大津膳所の人〻いたはり深く、幻住菴（猿蓑に記あり）義仲寺、ゆく所至る處の風景を心の物にして、遊べること年あり。元來、混（根）本寺佛頂和尙に嗣法して、ひとり開禪の法師といはれ、一ｰ氣鐵鑄ｰ生（ナス）いきほひなりけれども、老身くづほるゝまゝに、句毎のからびたる姿までも、自然に山家集の骨髓を得られたる、有がたくや。さればこそ此道の杜子美也ともてはやして、貧交人に厚く、喫ｰ茶の會盟に於ては、宗鑑が洒落も敎のひとかたに成て、自ｰ由ｰ躰放ｰ狂ｰ躰、世ｰ擧（こぞ）ッてロうつしせしも現力也。凡、篤ｰ實のちなみ、風雅の妙、花に匂ひ月にかゞやき、柳に流れ雪にひるがへる。須磨明石の夜泊、淡路島の明ぼの、杖を引はてしもなく、きさがたに能因、木曾路に兼好、二見に西行、高野に寂蓮、越後の緣は宗祇宗長、白川に兼載（けんさい）の草庵、いづれも〱故人ながら、芭蕉翁についてまぼろしにみえ、いざや〱とさそはれけん、行衞の空もたのもしくや。（奥のほそ道といふ記あり）十餘年がうち、杖と笠とをはなさず、十日とも止まる所にては、又こそ我胸の中を、道祖神のさはがし給ふ也と語られしなり。住つかぬ旅の心や置火燵　是は慈鎭和尙の、たびの世にまた旅寐してくさ枕ゆめの中にもゆめをみる哉　とよませ給ひしに思ひ合せて侍る也。逍子が一生を旅にくらしてはつ、と聞得し生ｰ涯をかろんじ、四たびむすびつる深川の庵を又立出るとて、鶯や筝籔に老を鳴　人も泣るゝわかれなりしが、心待するかた〱、とにかくかしがましとて、ふたゝび伊賀の古鄕に庵をかまへ、（三か月の記有）爰にてしばしの閑素をうかゞひ給ふに、心あらん人にみせばや、と津の國なる人にまねかれて、爰にも冬籠する便ありとて、思ひ立給ふも道祖神のすゝめ成べし。九月廿五日、膳所の曲翠子より、いたはり迎へられし返事に、此道を行人なしに秋の昏　と聞えけるも終のしをりをしられたる也。伊賀山の嵐、紙帳にしめり、有ふれし菌（クサビラ）の塊積（ツカエ）にさはる也と覺えしかど、苦しげなれば例の藥といふより水あたりして、長月晦の夜より床にたふれ、泄ｰ痢（セツリ）、度（ど）しげくて、物いふ力もなく、手足氷ッぬれば、あはやとてあつまる人〻の中にも、去來京より馳くるに、膳所より正秀、大津より木節乙州丈艸、平田の李由つき添て、支考惟然と共に、かゝる歎きをつぶやき侍る。もとよりも心神の散亂なかりければ、不淨をはゞかりて、人〻近くも招かれず、折〻の詞につかへ侍りける。たゞ壁をへだてゝ、命ｰ

運を祈る聲の耳に入けるにや。心弱きゆめのさめたるはとて、

旅に病て夢は枯野をかけ廻る

また、枯野を廻るゆめ心　ともせばやと申されしが、是さへ妄執ながら、風雅の上に死ん身の道を切に思ふ也。と悔まれし。八日の夜の吟也。各はかなく覺えて、

賀會祈禱の句

落つきやから手水して神集め　木節
凩の空見なをすや鶴の聲　去來
足がろに竹の林やみそさゞい　惟然
初雪にやがて手引ん佐太の宮　正秀
神のるす頼み力や松のかぜ　之道
居上(すゑあげ)ていさみつきけり鷹の貌　伽香
起さるゝ聲も嬉しき湯婆(たんぽ)哉　支考
水仙や使につれて床離れ　呑舟
峠こす鴨のさなりや諸きほひ　丈艸
日にまして見ます顔也霜の菊　乙州

是ぞ生前の笑納め也。木節が藥を死迄もと、たのみ申されけるも實也。人々にかゝる汚レを恥給へば、坐臥のたすけとなるもの呑舟と舎羅也。これは之道が貧しくて有ながら、切に心ざしをはこべるにめでゝ、彼が門人ならば他ならずとて、めして介抱の便とし給ふ。そもかれらも縁にふれて、師につかふまつるとは悦びながらも、今はのきはのたすけとなれば、心よはきもとはりにや。各がはからひに、旅の衣の垢つきたるを恨みて、よききぬに脱かはし、夜の衣の薄ければとて、錦繡のめでたきをとゝのへたるぞ、門葉のものどもが面目なり。九日十日はとにくるしげ成に、其角、和泉の府淡の輪といふわたりへ、まいりたるたよりを、乙州に尋られけるに、なつかしと思ひ出られたるにこそとて、やがて文したゝめてむかひ參りし道たがひぬ。予は、岩翁龜翁ひとつ船に、ふけゐの浦心よく詠めて堺にとまり、十一日の夕べ大坂に着て、何心なくおきなの行衛、覺束なしとばかりに尋ければ、かくなやみおはすといふに胸さはぎ、とくかけつけて病床にうかゞひより、いはんかたなき懐(ヲモヒ)をのべ、力なき聲の詞をかはしたり。是年ごろの深志に通じて、住吉の神の引立給ふにやと歡喜す。わかのうらにても祈つる事は、かく有べしとも思ひよらず。蟻通の明神の物とがめなきも有がたく覺侍るに、いとゞ泪せきあげて、うづくまり居るを、去來支考がかたはらにまねくゆへに、退いて妄昧の心をやすめけり。膝をゆるめて病顔をみるに、いよ〳〵たのみなくて、知死期も定めなくしぐるゝに、

吹井より鶴を招かん時雨かな　晋子

と祈誓してなぐさめ申けり。先頼む椎の木もあり　と聞えし幻住菴はうき世に遠し。木曾殿と塚をならべて　と有したは

ふれも、後のかたり句に成ぬるぞ。其きさらぎの望月の頃 と願へるにたがはず。常にはかなき句どものあるを前表と思へば、今さらに臨終の聞えもなしとしられ侍り。辭しるしなき薬をあたゝむるに、伽のものども寝もやらで、灰書に、

うづくまる薬の下の寒さ哉　丈艸
病中のあまりすゝるや冬ごもり　去來
引張てふとんぞ寒き笑ひ聲　惟然
しかられて次の間へ出る寒さ哉　支考
おもひ寄夜伽もしたし冬ごもり　正秀
鬮とりて茶飯たかする夜伽哉　木節
皆子也みのむし寒く鳴盡す　乙州

十二日の申の刻ばかりに、死顔うるはしく睡れるを期として、物打かけ、夜ひそかに長櫃に入て、あき人の用意のやうにこしらへ、川舟にかきのせ、去來乙州丈艸支考惟然正秀木節呑舟壽貞が子次郎兵衛予ともに十人、笘もる雫、袖寒き旅ねこそあれ、たびねこそあれ、とためしなき奇緣をつぶやき、坐禪稱名ひとり〳〵に、年ごろ日頃のたのもしき詞、むつまじき教をかたみにして、誹諧の光をうしなひつるに、思ひしのべる人の名のみ慕へる昔語りを今さらにしつ。東南西北に招かれて、つゐの栖(すみか)を定めざる身の、もしや奥松島越の白山、しらぬはてしにてかくもあらば、聞て驚くばかりの歎ならんに、一夜もそひてかばねの風をいとふこと本意也。此期にあはぬ門人の思いくばくぞや、と鳥にさめ鐘をかぞへて伏見につく。ふしみより義仲寺にうつして、葬禮、義信を盡し、京大坂大津膳所の連衆、披(被カ)官從者迄も、此翁の情を慕へるにこそ、まねかざるに馳來るもの三百余人也。淨衣その外、智月と乙州が妻ぬひたてゝ着せまいらす。則、義仲寺の直愚上人をみちびきにして、門前の少(すこし)引入たる所に、かたのごく木曾塚の右にならべて、土かいおさめたり。をのづからふりたる柳もあり。かねての墓のちぎりならん、とそのまゝに卵塔をまねび、あら垣をしめ、冬枯のばせをを植て名のかたみとす。常に風景をこのめる癖あり。げにも所はながら山田上山をかまへて、さゞ波も寺前によせ、漕出る舟も觀念の跡をのこし、樵路の鹿田家の雁、遺骨を湖上の月にてらすと、かりそめならぬ翁なり。人々七日が程こもりて、かくまでに追善の興行、幸(ヒ)にあへるは予也けり、と人々のなげきを合感して、愚かに終焉の記を殘し侍る也。程もはるけき風のつてに、我翁をしのばん輩は、是をもて回向のたよりとすべし。

於粟津義仲寺牌位下　晋子書

元祿七年十月十八日　於義仲寺

追善之誹諧

なきがらを笠に隠すや枯尾花　晋子
温石(をんじやく)さめて皆氷る聲　支考
行灯の外よりしらむ海山に　丈艸
やとはぬ馬士の縁に來て居る　惟然
つみ捨し市の古木の長短　木節
洗ふたやうな夕立の顔　李由
森の名をほのめかしたる月の影　之道
野がけの茶の湯鶉待也　去來
ウ
水の霧田中の舟をすべり行　曲翠
旅から旅へ片便宜(びんぎ)して　正秀
暖簾にさし出ぬ眉の物思ひ　臥高
風のくすりを惣〱がのむ　泥足
こがすなと齋(とき)の豆腐を世話にする　乙州
木戸迄人を添るあやつり　芝柏
葺わたす菖蒲に匂ふ天氣合　昌房
車の供ははだし也けり　探芝
澄月の横に流れぬよこた川　胡故
負〱下て鳫安堵する　牝玄
菴の客寒いめに逢秋の雨　游刀
ぬす人ふたり相談の聲　蘇葉
世の花に集の發句の惜まるゝ　智月
多羅の芽立をとりて育つる　呑舟
二
此春も折〱みゆる筑紫僧　土芳
打出したる刀荷作る　卓袋
四十迄前髪置も郷ならひ　靈椿
苦になる娘たれしのぶらん　野童
一夜とて末つむ花を寐せにけり　素顰
祭の留守に殘したる酒　万里
河風の思の外に吹しめり　誐ヽ
藪にあまりて雀よる家　這萃
塩賣のとづかりぬる油筒　許六
月の明りにかけしまふ絈(かせ)　回鳬
秋も此彼岸過せば草臥て　荒雀
くされた込ミに立し鶏頭　楚江
小屛風の内より筆を取亂し　野明
四ッになる迄起さねば寢る　鳳國
二ウ
ねんごろに草鞋すげてくゝる也　木枝
女人堂にて泣もことはり　晋子
ひだるさも侍氣にはおもしろく　角上
ふるか〱と雪またれけり　之道
あれ是と逢夜の小袖目利して　去來
椀そろへたる藏のくらがり　土芳
呑かゝるきせる明よとせがまるゝ　芝柏
ふとんを巻て出す乘物　臥高
弟子にとて狩人の子をまいらする　尚白
月さしかゝる門の井の垢離　昌房
軒の露莚敷たるかたがへ　丹野
野分の朝しまりなき空　丈艸
花にとて手廻し早き旅道具　惟然
煮た粥くはぬ春の引馬　靈椿
三
小機嫌につばめ近よる塀の上　正秀
洗濯に出る川べりの石　回鳬
日によりて柴の直段もちがふ也　朴吹
袋の猫のもらはれて鳴　角上

里迄はやとひ人遠き峯の寺　泥足
聞やみやこに瓜刻む音　尙白
七ツからのれども出さぬ舟手形　卓袋
二季ばらひにて國〳〵の掛　芝柏
內に居る弟むす子のかしこげに　探芝
うしろ山迄刈寄る萱　游刀
此牛を三歩にうれば月見して　楚江
すまふの地取かねて名を付　魚光
社さえ五郎十郎立ならび　晋子
所がらとて代官を殿　風國
三ウ
打鎰に水上帳(みつあげちやう)を引かけて　支考
乳母と隣へ送る啼兒(ムシ)　正秀
獅子舞の拍子ぬけする晝下ﾘ　丈艸
雨氣の雲に瓦やく也　昌房
在所から醫師の普請を取持て　臥高
片町出かす畠新田　之道
鳥さしの仕合わろき昏の空　去來
木像かとて倚(椅カ)子をゆるがす　泥足
三重(みへ)がさねむかつく斗旬(はかま)はせて　尙白

座敷のもやうかふる名月　卓袋
漣や我ものにして秋の天(そら)　角上
經よむうちもしのぶ聖靈　牝玄
かろ〳〵と花見る人に負れ來て　土芳
村よりおろす伊勢講の種　芝柏
名オ
暖になれば小鮓のなれ加減　這萃
軍ばなしを祖父が手の物　臥高
淵は瀨に薩埵(さつた)の上を通る也　晋子
朝日にむきて念珠押もむ　正秀
幾人の着汚シつらん夜着寒し　支考
わすれて替ぬ大小の額　魚光
味噌つきは沙彌に力をあらせばや　楚江
かな聾の何か可笑き　游刀
ばら〳〵と恨之助をとりさがし　風國
顏赤うするみりん酒の醉　之道
白鳥の鎗を葛屋に持せかけ　探芝
三河なまりは天下一番　去來
飯しゐに內義も出るけふの月　尙白
功者に機をみてもらふ秋　回鳧

うそ寒き堺格子の窓明り　芝柏
文庫をおろす獨山伏　土芳
浮雲も晴て五月の日の長さ　惟然
海へも近き武庫川の水　丈艸
寮にゐる外より鎖(ちやう)をかけさせて　牝玄
思はぬ狀の奥に戒名　支考
青天にちりうく花のからばしく　去來
巢に生たちて千里鶯　正秀

右四十三人滿座興行。大津膳所京嵯峨攝津伊賀之連衆也。各感㆓愁眉㆒而不㆑求㆓巧言㆒也。(作者名を算するに四十二人也。不審。)

傷㆓亡師終焉㆒作㆑句　初七日迄

忘れ得ぬ空も十夜の泪かな　京　去來
啼うちの狂氣をさませ濱衞(ちどり)　僧　李由

無跡(なきあと)や鼠も寒きともぢから　大津　木節
つゐに行宗祇も寸白夜の霜　同　乙州
いふ事も泪に成や塚の霜　膳所　昌房
暁の墓もゆるぐや千鳥數奇　僧　丈艸
一たびの醫師ものとはん歸花　彦根　許六
風よやみなる跡の舟よばひ　同　汶村
墓もどり十方(とはう)なき世のしぐれ哉　ぜゞ　探芝
拜席に溜るなみだや朝の霜　大津　楚江
かさね着の老の姿や苔の霜　堅田　成秀
木曾柿や木葉かつぎし塚の上　大つ　誐々
日影さす塚にしぐれや湖水迄　同　露玉
月雪に長き休みや笈の脚　僧　千那
しけ絹に紙子取あふ御影哉　大つ　尚白

一とせ翁の踏分られし奥羽寨をめぐりて、人々よりの呈書をことづかり、道すがらをもかたりてとおもひわたりたるに、古人に成給ふ遺懐のあまり、むなしき塚をうごかして泣。

きさがたを問ず語や草の霜　京　轍士

ばせをばの寒しと答ふ聲もなし　僧　角上
滋張の笠かけてみん墓の霜　京　野童
一夜來て泣友にせん鵆の床　同　鳳圃
耳にある聲のはづれや夕時雨　伊賀　土芳
悲しさも云ちらしたる時雨哉　同　卓袋
我眞似を泣か小春の雉の聲　大坂　之道
石たてゝ墓も落つく霜夜哉　同　芝柏
鹿のねも入て悲しき野山哉　僧　支考
入月や日頃の數奇の朝朗　京　春澄

十六日晋子を幻住菴にともなひて、翁のかくれ所といへる椎の木をみせて、いますごとくに俤をしたへる愁吟（曲翠以下六句也）

木がらしや何を力にふく事ぞ　曲翠
腰折て木葉をつかむ別れ哉　正秀
うろ〳〵とひざまづきたる木葉哉　臥高
ねぢてみる別の岩よ冬木立　泥足
見送りし庵の姿や袖の霜　[illegible]椿
まぼろしも住ぬ嵐の木葉哉　晋子
取つかん便もかなし枯柳　嵯峨　野明

線香の煙覆ふや枯芭蕉　同　荒雀
初めての千鳥も啼や礒の塚　大坂　呑舟
冬芭蕉衣にさけて泪かな　ぜゞ　魚光
立かねて袖もしぐるゝや墓の前　同　回鳧
悔まれて夜着かぶりけり冬ごもり　同　游刀
霜消て此道廣し西の山　同　朴吹
木曾寺のゆめになしたる時雨哉　大つ　木枝
今朝獨泪をこぼす火鉢哉　ぜゞ　這萃
さゞ波の時雨を聞か土の窓　大津　土龍
ちり際はもろき櫻の紅葉哉　ぜゞ　遅望
むかし人といひて見廻る塚の霜　同　伴左
待うけて泪みあはす時雨哉　かや女

二七日廟参之席句　所々文通

雪はれて徳の光やかゞみ山　岩翁
小野炭やあとに匂ひの殘りけり　尺草
冬の日や師に奉公の間もなくて　大坂　如柿
今ははや悲しさかゝる柳哉　ぜゞ　牝玄
間違ふてあはぬ命や村時雨　同　吾我
松の霜見ぬ世の形(なり)やひの木笠　同　松泉

此かた見行來(ゆきき)にみせん丸頭巾　同　朔巫
菊檣曉起の馳走かな　堅田　猪睡
朝日うけて霜もまばゆし塚の前　同　重氏
打こけて指(さし)ぬき氷る泪かな　女　素肇
なぐさめし琴も名殘や冬の月　女　万里
花鳥よせがまれ盡す冬木立　桑門　惟然
花桶の鳴音(なるおと)悲し夜半の霜　女　可南
冬の月襟にうけたる泪哉　ぜゞ　徹房
手をつけば霜も湯と成泪哉　同　麻三
木兎の目にも涙のしぐれ哉　同　砂上
力なく墓にかけよる時雨哉　同　蚤鳥
冬柳かれて名ばかり殘りけり　向震軒
枝折て鳥の歎きや竹の霜　さが　來几
國鄉へつ　へてけふのしぐれ哉　小倉　閑夕
幻にみるは枯野の檣哉　さが　爲有
力なき獅のあがきや冬牡丹　彥根　木導
朝霜や夜着にちゞみしそれもみず　みの　如行
主もなき時雨の庵に讃ばかり　堅田　小作
くらつぼに小坊のるやと

聞えし作意俤になん
大根引あとはうづまぬ名殘哉　京　夏木

三七日伊賀連衆追悼句
時雨ゝやおくへもゆかず筆なやみ　いが　玄虎
鶯の子鳴にくゝる檣かな　山岸車來
聞て泣聲もとゞかぬ枯野哉　淺井風睡
寒菊やすゝぐ佛の膳の端　山田雪芝
夢みたか啼て飛ゆく浮ね鴨　杉野配力
六疊に見殘されたり冬の月　岡本苔蘇
塵塚や泪の紙に霜の華　神部や　祐甫
火燵から床のかげ繪を泪かな　京や　一驚
なき跡や時雨てたつる古障子　佐治洞木
手向には何をかれたる菊畠　西澤魚日
佛や足もさゝれぬ置火燵　明覺寺　尾頭
冬桃のなき人しらぬ歎かな　山岸陽和
山茶花の散頬はぬらき世哉　木や　我峯
借シ着つる夜半もありけり丸頭巾　大坂や　万乎
かろき身の果や木葉の吹とまり　猿雖
芭蕉〳〵枯葉に袖のしぐれ哉　小川風麥

紙衣の小しぼに浮むなみだ哉　植田示蜂
一生を旅の仕舞の時雨かな　井づゝや　爲醉
茶のからの霜や泪のその一ッ　濱式之
何事もなみだに成ぬ冬の菴　中尾槐市
菊かれて側に小松も凋れけり　小童　長年
たよりなや風もかく迄枯柳　津子荻子
枯草に顏入て鳴男鹿かな　原田乍木
笠を泣時雨なつかし北南　井づゝや　望翠
そのまゝに降を手向るしぐれ哉　宇多都
聞とりて鳥も歎くか山寒し　大久保　仙杖
歎く手の香もふるふや水仙花　松本氷固
水鳥の遠きわかれや湖の果　内神九節

なにわへの飛脚粟津よりかへりて
亡師の遺書まいれり
夢なれや衒たる文字の村鵆　いが　半殘
手向せん茶の木花咲袖の下　西嶋百歲
限あるうわさばかりや散紅葉　溝水
はら〳〵と泪かれ野の薄かな　來川烏栗

四七日をかけて普音文通之句

猿みのの袖のしぐれや行嵐　伊せ　路艸
夢のあとたが昼みしぞ夜着ふとん　同　園友
待〳〵ておもはぬ文に時雨哉　同　空芽
便なう霜にきえ行月夜哉　同　宗比
みて泣や蓑笠の像に雪霰(あられ)　同　斗従
玉しゐを世に分置て木葉哉　同　廬本
語り合てともに悲しき霜夜哉　いせ　抜不
せめてその笠みて行んあられ笠　同　盧牧

耳の底に水鶏鳴也冬の雨　尾州　露川
枝川や一羽はなれて鳴千鳥　同　素覧
霜にちりて光身にしむ牡丹哉　同　左次
手づからに木葉はく也塚の脇　冬鶯
明て啼冬の日影やかし座敷　大坂　伽香
鵜飼見し川邊も氷る泪哉　みの　低耳
文臺に去(さら)ぬ影也古頭巾　伊豫　黄山

上ノ終

にひろひかさねて、往ゝに歩みを忘れ、富士もみず、大井もしらぬ寒ムぞらかけて、霜月七日のゆふづくよの程に、義仲寺の冢上にひさまづく。空華散じ水月うちこぼす時、心鏡一塵をひかされば、万象よくうつる。此師この道におゐて、みづからを利し他を利して、終に其神不レ竭。今も見給へ、今も聞給へとて、

此下にかくねむるらん雪佛　嵐雪拜

枯尾華　下

十月廿五日共桃隣出武江而暨
義仲寺奠芭蕉翁之墓歎唱

いつの冬か、風のうしろむきそめ、葛のはのおもてみし、秋より春にわたり、枕にさめ笠に眠り、小蓑に病(やまひ)、つゐの浮世をなにはになして、枯野にあそぶと聞え給ひし一句を、今さらのうつゝになしぬ。其角はさる契ありてや、生前のたいめ(對面)後の事迄とりおさめつかへけり。遠き境の人はいまだしり及(およば)ずや。江都に心ざしを盡せるたれかれ、ところ〴〵に席をかまへて、追善興行のくさ〴〵、袖に袂

十月廿二日夜興行

十月をゆめかとばかりさくら花　嵐雪
しぐれの中に一筋の香　氷花
鎰(かぎ)の手の二間は五疊〳〵にて　百里
立居は見ゆる沖の船頭　神叔
有明のはつかに白き山の裾　東潮
眞鶸さそひて豆まはし鳴　浮生

ウ
蜀黍の實をばそがれて畑中　卜宅
木舞あらはに手で土をぬる　舟竹
新川にまだ名もつかぬ橋のうへ　桐雨
雨のふる見て照〳〵といふ　月下
存在に物をおしゆる田植ども　風洗
膳にばらりと明る干鰕　楸下
約束の茶の湯延してさびしかり　成宇
赤い菊より黃な菊を嗅　牧人
上氣して吹れに出る秋の風　當歌
客とならべて床をとる月　銀鈎
ちる花も翁について廻るらん　東潮
山吹もらふ顏ぞわすれね　嵐雪妻
二
春雨に咄のやうな戀をして　浮生
氣相のわろき時は文見る　百里
只あそぶ四十の内の樂坊主　氷花
水享いとて夏冬もなし　嵐雪
くたびれて勝手の鼾聞えけり　神叔
位牌の前の火影靜まる　東潮
眞實に蕎麥切打て送る也　百里

城の近くに旅ごもりする　神叔
傘の外にまぎるゝ傘はなき　嵐雪
夜半夜あるき母の氣遣ヒ　氷花
あたゝかに風呂吹煮ユル冬の月　東潮
先度の雪に師走落つく　百里
來春を今から工む大工寄セ　神叔
中山道は加賀で持けり　嵐雪
一升を米の價のとうがらし　百里
さる代もありと語る老　氷花
此たびはまいりあはづの墓の花　專迹
無常の鐘のかすむさゞ波　絲子

滿座追善各燒香

なき人の詠めも四季の総哉　百里
見おさめの顏はいつ頃雪の頃　氷花

悔前非

身をつめる悲しさをしれ冬の月　神叔
芳しき人の香もあれ塚の雪　浮生
凩の外にあそぶや墓の月　舟竹

尋行てかれ野の草の根に語レ　成宇
彿や二度三度よむ月時雨　專迹
かれ蘆や名をかき寄る潮頭　東潮
時雨にもさめぬ別れや夢咄シ　素イ

芭蕉翁みまかりぬるに跡をだにとてたびだつ人にとづて侍ける

秋風にたへてしばしは殘りしも
霜の芭蕉のあはれ世中　安適

十月廿二日興行
故人も多く旅にはつと逆旅過客のことはりをおもひよせて

彿やなにはを霜のふみおさめ　桃隣
淡くかげろふ冬の日の影　子珊
一面に起ふす小松風やみて　杉風
よごれし馬を引出す也　岱水
名月は夕飯早く過しけり　曾良
どこやら輕き秋の帷子　序志

皃に枝を分たる鷄の聲　太大
細工に入ル古桶の底　龜水
心よき今の住持を憎みたて　孤屋
三里がうちは景の塩濱　子祐
此寒さあられか雪のふる曇　利牛
木綿の重み手にのせて見る　白之
脊戸傳ひと來ては常〳〵長咄　馭足
折角とれば蝸のから　李里
やす〳〵と平泉より木曾の月　野坡
丈幅せばき布の薄綿　太洛
眞白な陰は流るゝ岸の花　八桑
俵のうへに燕あつまる　桃川
そろ〳〵と子をあゆませて春の空　利合
晝にさがりて葺のこす屋根　野ゝ
酒道具干ならべたる笠置川　支梁
風呂敷といて鉦鼓取出す　湖松
鳴ぬ間人をうかゞふほとゝぎす　桐奚
家のふるきを小利口に住ム　嵐戎
丁寧に又挑灯で送らるゝ　石菊

扉なき雪の擣地につく　ちり
樋の口に苦餠ばかりかたまりて　嵐竹
臼に手杵のせはしなき音　此筋
あかまへこいふ程奢る月の宵　素龍
行脚がへりに更る秋風　千川
よは〳〵と葉ばかり多き菊の露　楚舟
流れに添て雨あがる也　角蕉
居間ながら六疊敷に爐を構へ　杏村
髭に白髪のほのかなる年　川鷗
見開ケばをのづからなる花微笑　濁子
香をむすんで朝がすみたつ　滄波

歌仙滿座普吾之吟

うらむべき便もなしや神無月　杉風
枯芝や聲も力もなきあらし　八桑
是非わかぬ枯野に草の種もなし　子珊
見るやうに頭巾をかけん庵の松　太大
聲たてぬ歎きや霜のきり〴〵す　湖松

菊かれて匂を惜む居士衣哉　子祐
山茶花を塚の賴みに植もせん　太洛
うき便望絶たり霜ばしら　序志
茶の花は匂ひ手向んばかり也　龜水
見送りも夢に成けり今朝の霜　李里
骨肉にこたゆるけふのしぐれ哉　楚舟
霜消て蓬を庵のちなみ哉　風弦
悲しびを包みかねたる木葉哉　桃川
寺の花直にたむけん冬牡丹　野ゝ
はかなしや火燵咄も苔の下　愚好
初雪を思ひよらずの手向哉　用陽
かたみ哉粟津がはらの枯柳　杏村
その骸もかくやは雪の水仙花　石人
むせぶとも蘆の枯葉の燃しさり　曾良
ならべたる縄床さびし冬籠　滄波
袖時雨南無あみだ佛趣向哉　角蕉

義仲寺へ送る悼

氷るらん足もぬらさで渡川　法師 季吟
告て來て死顏ゆかし冬の山　露沾

花紅葉夢と小春に成にけり　山夕
錫杖にふみたがはざる木葉哉　直方
泣〳〵と日に吹當る木のは哉　琴風
紅葉ちり櫧は青し塚の前　濁子
手向たる水もや朝氷面鏡　壺蛙
時雨ふる白い卒都婆よ夕嵐　山蓬
野ざらしの句や十余年ゝの霜　涼葉
小莚や火にはなれたる身の凍へ　大舟
行人の徳や十夜の道ひろき　左柳
綸をみるや袖の雫の初氷　此筋
立されば心に消る塚の霜　千川
力艸引切られたるなみだ哉　淵泉
雪や霜尋ねん笠の有所　支老
枯蔦の哀や残る壁の系　卜子
寒菊の咲後れたる名残哉　遊糸
哀しれ菊は戸口にかれて居る　其井
こや形見菴の爐蓋に指の跡　海動
何のかの便りの風や枯薄　蓬山
五十二年ゆめ一時のしぐれ哉　ちり

頭陀袋重きも袖のしぐれ哉　虚谷
その塚はさぞな枯野の土の色　艶子
心澄て頬に凝つく泪かな　馬莧
凩の聲に檜原もむせびけり　素龍

十月廿三日追善　湖春

亦たそやあゝ此道の木葉掻
一羽さびしき霜の朝鳥　素龍
碇綱縮なる月に浪ゆりて　露沾
野分の音のかはる兀山　苹水
秋中に残らずつけし藏の壁　桃隣
青苧の長を引上にけり　岱水
内かたは物やはらかな人づかひ　野坡
ほろ〳〵雨の末は四五町　孤屋
その形に紙で卷たる百合の花　利牛
竈の火けして庵たて寄せ　杉風
雲水の身はいづちをか死所　素堂
帆をもつ舟は曇也けり　筆
山陰にもらひあつめし竹植て　利合
盆を待ずに急な法躰　野坡
膳一所の月片隅もなく照渡り　岱水
二年つゞいてあたゝかな秋　桃隣
花紅葉老かゞまりて押灸　杉風
酒といはれて少やはらぐ　利牛
聞かば見ばお下屋敷の奥座敷　孤屋
立くづれたる雨の蚊柱　岱水
成あいにありけば旅も苦にならず　桃隣
子共の勢のたらぬ柿園　利合
長ゝの粮借り返す力得て　野坡
露霜ふかき大名の寺　杉風
約束の皆ちがふたる後の月　利牛
財布でぬぐふ泪わりなき　孤屋
のし餅の上にかさぬる配り餅　岱水
旦那が出れば賑やかになる　桃隣
山〳〵を信濃の者に語らせて　杉風
木の通りに鼠算用　野坡
高い木の並びし下が猶涼し　孤屋

小あげをかけてゆらぬ駕籠かき　利牛
二三人伊勢上るりの物もらひ　野坡
節句の禮におそなはり来る　岱水
袖に今師の好れたる花の枝　桃隣
雲優美なる春の夕昏　利合

十月廿三日
晋子亭にて興行

今はくも雪のばせをの光哉　仙化
かへらぬ水に寐て並ぶ鴨　是吉
冬の月黒き衣類は影鈍で　介我
拭ひのこせる階のくま　柴雫
一もとの柏檀廻れば二十足　湖月
嚢の鼠の穴をわする丶　神叔
どの向も世丶の隣の日をうけて　揚水
力もよはく鉦しめる音　枳風
倶人を近く召る丶駕籠の内　由之
雀の枝を驚のあらそふ　全峯
日に添て宮木の屑は泥に朽　沾徳
むかしもこ丶が橋本の宿　李下
合羽なき馬より數く雨曇　神叔
小僧になりていさみつく顔　揚水
扇から湯錢さし出す月の昏　柴雫
側のたばこの匂ひ望まれ　仙化
花の雲行徳迄と舟よばひ　揚水
ちいさき松のかすむ洲の入　李下
靑貝の卓もふるびて春の色　湖月
日光椀に似あふ芳飯　柴雫
かしこまる事を忘れし年の程　介我
手紙のおくは名やら判やら　神叔
唐物と見すえし茶入袋して　枳風
あらき踵に羽二重の裾　湖月
墓のごと雪を並べて惜みけり　介我
馬を土戸にはさむ口取　沾徳
かねごとの所々を聞はつり　仙花
生きたる身をぞ戀の入レ物　揚水
午の月に烏帽子の影の直ヲ也　李下
二行に持て並ぶ虫籠　全峯
聲もなく朝の鹿の小草喰ム　神叔
つかみて鍋にはかり込ム米　由之
肩癖の外に跡なきうしろ見よ　仙化
はしりながらに牛除る聲　介我
常にゑむ連衆拈花の花に寄　沾徳
垣せぬ桃を人の敬まひ　湖月

深草のおきな、宗祇居士を譜して
いはずや、友ニ風月ニ家ニ旅泊ニと。
芭蕉翁のおもむきに似たり。

二

旅の旅つゐに宗祇の時雨哉　素堂
落葉見し人や落葉の底の人　沾徳
爐開になき人来ませ影ぼうし　枳風
凩におもひ泣かせよ猿の面　介我
月雪の近江の土や三世の緣　専吟
檜笠いづれ冬野の面がくれ　湖月
凩のなにはや夢のさめどころ　柴雫

初しぐれ笠より外のかたみなし　薯子
かみな月根ざしは殘るばせを哉　拙い
歸花菊をむかしの翁かな　闇指
力艸とりはなしたり朝嵐　山蜂
果は霜夢に逢にし芭蕉哉　寒玉
十德の袖はなみだの氷かな　女秋色
霜ふかき菴ぬしなきうつゝ哉　和水
何の神や此十月の世のくやみ　芝莚
さゞんくはや難波へ向てつかみざし　一雀
驚きて霜の蜜柑を手向哉　是吉
殘る名の手向にむせぶしぐれ哉　林也
雪の夜をおもひ忍ぶや名付親　李下
窓の雪はらひ果たる拂子哉　龜翁
青石の陰もあはれや木葉掻　横几
終の野に捨すましけり霜の杖　景桃
又も來ぬ跡に立けり霜柱　萍水
ちからなや膝をかゝえて冬籠　野坡
竹の縁を掛て悲しき時雨哉　孤屋
油火の消て悔むや冬籠　利牛

すがりつく枝も枯たる柳哉　疎雨
泣籠る冬や今年の廻り合　岱水
深川にとりわけ鳴や友千鳥　石菊
目のさきにまだちら〳〵と木葉哉　利合

義仲寺に參り、亡師の塚のもとに舊來を語らんとす。そも隱逸の志につかへ、一たびは笈のたすけともなりぬ。今更に遠里を隔て、かゝ(る脫)所の苔の下に、むなしき名のみ聞へけるを。

月雪に假の菴や七所　桃隣

十一月十二日初月忌
丸山量阿彌亭　興行

泣中に寒菊ひとり耐(コタ)へたり　嵐雪
向上躰を雪の明ぼの　桃隣
澁(さ)ビ壁のひる間を遲く扇(あふ)がせて　岩翁
車にはこぶ藪の疉(カサ)ナリ　晉子
簾賣聲に告たるほとゝぎす　龜翁
かし傘(からかさ)としれて大文字　横几
名月に持參の一種おもひ付ヶ　尺艸
折かへすほど廣き桐の葉　松翁
ウ
白粉の鏡にかゝる秋の霜　去來
火燵ぶとんの引たらぬ中　正秀
長谷越の山にあいたる昨日けふ　曲翠
榧の木の間の海をたまさか　筆
吹たをす屛風を膝に押直し　轍士
皷かゝへし大がゝりなり　心圭
のまぬかと盃みする人遠し　暮四
岸をすらせて舟や行らん　巨海
蜻蜓の衣紋つくろふやどりやう　荷兮
湯あがりの身の冷かに成　野童
弓はりのひかゆる雲を窺はれ　風國
山家の世帶氣散じな事　集加
獅子の座にみつる心や花の陰　晉子
杖に用なき我老の春　重勝
ニ
うらゝ成和爾や堅田の浦傳ひ　遲望
塩辛桶になれし釣(ツリベリ)　轍士

雨の日は大工もあそびたがる也　桃隣
さてはちんば（跛）と見ゆる後ロ目　嵐雪
のり物は音羽の瀧の下に置ク　横几
あたゝめさせよその藥鍋　荷兮
かけ乞の金をかへすも至極成　去來
上座の聟を覗く透合ヒ　尺艸
風の香もいとゞ扇のきしる音　嵐雪
水もすみたる飛彈曲(ワゲ)の目　岩翁
かしこまる受戒の兒の白素絹(ソケン)　轍士
能(のう)はじめよと使かさなる　晋子
あだ腹の起り出たる夜の月　集加
櫺子(れんじ)明れば朝がほの蔓　桃隣
二ウ
秋風や看ー坊持のまゝならぬ　巨海
衣桁の小袖落る音する　風國
生かはる歯をゆるがして物おもひ　晋子
たのまぬ神はほめも罟(シカ)りも　尺艸
長旅に持あぐみたるつるべ餅　暮四
一日鍬をふり上る數　心圭
たじろかぬ松を都に見直して　桃隣

夜の寐覺やぬす人もなし　岩翁
よごれても禿(チビ)たる杜杖哀也　横几
たねや乞れて殘す鷄頭　巨海
牛祭晝からしての女子客　尺艸
身なげて醉のさむる月影　遲望
折ためて荷ひながらにちらす花　轍士
年越すます坂の櫛挽　荷兮
三
肥肉(ヒヽ)なものは春からじゆつながり　集加
梵天寒く立し川小屋　暮四
灯も閇を添て光るらん　嵐雪
不思儀に嫁をちそうせらるゝ　去來
白粥のさむる間しばし思ひ侘　岩翁
書そこなひももろふ短尺　晋子
三里四里機嫌まかせの旅の空　野童
燒(たき)ながら干すぬれ木也けり　轍士
此あたり此家ばかりこけら葺　風國
をのが法華を獨たうとき　集加
湖を簗(イケス)にみたる山の景　尺艸
夢といふ字を夢の世の額　嵐雪

宵の月脚半もとかず膳待て　桃隣
どこともなしに蜜柑焦るゝ　巨海
三ウ
かし鳥の樫はくはずに梅もどき　暮四
こしもとが尻たゝく飼猿　岩翁
おもはゆき秉燭(ツギ)の立かねて　轍士
遊行の前にならぶ十念　集加
産るゝや聲もたしかに男の子　晋子
とりちらしたる朝夕の酒　風國
節季ゆの年ほどありて拍子ぬけ　横几
憐み四方(よも)に施藥合する　尺艸
形よりこびたる佐渡の人心　桃隣
薄の中に得たる蓍(メドハギ)　暮四
鬼が手に明さして置月の洞　心圭
うは着に君をかこふ露霜　嵐雪
戀せずも花に若やぐ老だうな　荷兮
うら門付る垣の山吹　去來
米(ナ)かす（淅）もかまはて通る蜆舟　集加
地藏を建し夢の浮橋　晋子
箏の制札うすき冬枯て　岩翁

ようはづれずに寐たる木枕　轍士
天井をけはなして置座敷鞠　尺艸
みな刈込や里の夏物　荷兮
秋の蚊のはら〳〵出し八ッ下リ　横几
あつさは殘る馬の腹掛　心圭
錢形の竹つるしたる軒の月　嵐雪
きるもの着よと母のせわやく　野童
打れたる瘤は付屬の證據なり　岩翁
さながら風を薄墨の竹　風國
手分して赤飯くばる大井殿　集加
おかしくあたる百姓の弓　晋子
日(ウ)の色に心さだまる鐘樓守　轍士
行脚の笠に袋して置　尺艸
河風にわろき諷をはりあげて　心圭
新大橋の富士もよく成　去來
なつかしや切干下す尾張宿　荷兮
むしろに書た賤の手質(カタギ)　重勝
外しらぬ琴を悲しむ花の前　桃隣
艸芳しき信の交リ　横几

此一帖者於落柿舍書校合決
井づゝや
寺町二條　重勝判

追加

於義仲寺六七日

花鳥にせがまれ盡す冬木立　惟然
藥の紙の霜にしほるゝ　正秀
隅〳〵に火鉢の炭をかた寄せて　臥高
明日の天氣を亭主請(うけ)とる　探芝
月影に綿抱へこむ杼ぶくろ　昌房
かしらにつれて揃ふむしの音　游刀
茸狩リはこそり〳〵と道かへて　丈艸
庄屋の觸にたのむ代判　執筆
角鍔は今にかゝさぬ家中風　胡故
なまり詞に國の名物　直愚上人
もや柴でひつしと構ふ雪さくみ　尼智月
老ぬるねこの痩はてゝなく　惟然
惠心佛(ゑしんぶつ)守て出たつ秋の旅　正秀
前に當たは鹿兒島の月　臥高
朝霧に繪の具の箱の蓋あけて　昌房
茶を精出してはこぶ弟　游刀
とつくりと花に夕日の入すまし　丈艸

つゝじの株にひかる山どり　胡故
鍬打に隣つれ立はるの風　直愚上人
芝居太皷の拍子ぬけする　魚光
むづかしき思案を無理に書破り　探芝
物見あつめてはいる寐どころ　徽房
塀うらに波のよせくる家づたひ　川支
若衆の髮に氣を付てやる　丈艸
照月を海老名の陣に參る也　乙州
秋の小草にまじる隠ざゝ　曲翠
うれしがる階子の下のにごり酒　臥高
砂鉢(さはち)の鮹(たこ)は双六のかけ　蘇葉
相合の鑓(やり)を持せる道奉行(みちぶぎやう)　牝玄
奇麗にはるゝ雨の卯の花　闘阿
立ならぶ蛤ふみのものおもひ　胡故
きのふの事を三味線にひく　惟然
いり口のめつたに多き門徒でら　這萃
なじまぬうちはつなぐ庭鳥　朴吹
こつそりと散て仕廻し花の跡　曲翠
むく〳〵あぐる芝のかげろふ　昌房

歌仙滿座訃音之吟

肩うちし手どゝろに泣とたつ哉　美濃大垣 竹戸
此悔イや臍の緒切てけさの霜　荊口
冬の蝶存シきられぬわかれかな　斜嶺
寒牡丹楢に添るなげき哉　文鳥
燭消て闇に成けり冬ごもり　怒風
蓑むしも木に離れたる落葉哉　殘香
あら土の墓もはかなや霜ばしら　胡風
草鞋の跡なつかしや勢田の霜　黄逸
冬ごもり飯にうへたるたふとさよ　朱迪
文あけて氷る涙や人の透(すき)　里東
泣入て加減の違ふ寒さかな　野徑
雪霙いつをなみだのとめどころ　蘇葉
蓮の葉の枯れて甲斐なき泪哉　支幽
請る手に俤見へよ墓の霜　竹官
木がらしに便りも遠き手むけ哉　裾道
切石をなでゝ泣けり今朝の雪　尼 敎淸

十方なき泪や枯るゝ柳かげ　柯山
月代をそらでも寒し塚の前　及肩
今朝ははや霜や置そふ頭陀袋　鳩枝

霜月十六日芭蕉翁三十五日
於義仲寺興行

墓近く蓮の香を持ッ氷かな　桃隣
たてゝはあくる冬の柴の戸　智月
跡先に寐に來る鳩の待つれて　正秀

四句目より略之

皇都 諧仙堂 藏板

書林 井筒屋庄兵衛
橘屋治兵衛 板行
浦井德右衛門

行状記
異本
露通
乙州

行狀記

芭蕉老人本土は伊賀の國上野にあり。左右なきものゝふの家の子にて侍しが、わかかりし程頼む方にわかれ、同し道にと思ひ定けれど、天が下掟きわまりてはからひがたく、親はらからのうきめひとかたならねば、甲斐なき命の露をかけて、武藏の國の廣きあたりにはまぎれ行業もやあらんと、中頃より住所を江戸に求む。兼て和く道に心ざしふかく、俳諧風月に遊ぶ。此交り常にすなをなれば、道高く行れて、麓の草分入ひとしげく、手にすがり足にまとふ輩、ちまたにみつ。德いたるに隨ひ、身いよ〳〵靜なり。芭蕉の陰に菴して、ばせをの翁とぞ呼れける。されば此とゝせあまり、荒增を旅の心にもてなし、生涯を頭陀にはたさむとす。厚く心をかよはし、深く情を運ぶたぐひは、たがいのわかれ折々にかなしめども、變化の理にさとくして、さすがに心をとゞめ給方なし。月花の筵かわる〳〵あらためて、風興日々にあまる。元祿七年、翁の齡五十一、老のなかばの春を迎へ、雜煮の餅むまく覺へ、淺漬も齒にしみわたるなれば、としの名殘もちかづくにやと、門人正秀がもとへ文のはしに書て送給ふ。深川の桃梨散り過れば、卯の花雲たちわたるまゝに、かんこ鳥の一聲二聲そゞろに物なつかしきかたもおほしとて、思ひ立旅心しきりにて、五月十一日江府そこ〳〵にいとま乞して、乙州か宿せし京橋の家に腰かけ、いざとよ古鄕がへりの道連せんなど、つねよりむつましくさそひ給へども、一日二日さわり有とてやみぬ。名殘おしげに見へてたちまどひ給ふ。弟子共追々にかけつけて、品川の驛にしたひなく。(慕ひ行くカ)

麥の穗を便につかむわかれかな　翁

箱根の關越て、

目にかゝる時や殊更五月富士

しどけなく道芝にやすらひて、

どむみりとあふちや雨の花曇

島田は、塚本氏杉本氏などいひて久敷音信馴し方あればとて、おぼつかなき五月の雲をはらす。

五月雨や雲吹落す大井川

名古屋にて、

世を旅に代かく小田の行戻り

是より伊勢路にかゝり、古鄕へ立寄、したしきかたへもいつ〳〵よりなつかしみ、會も數有。日數もへぬ。また江上木曾塚の庵は、わすれがたき所なりとて、宇治山伏見の里をへて立いられける。膳所松本のあたりには、むつましき方あまたなれば、心よげにてとゞまり給へども、

六月の照日いとゞ照そひて、宵々の蚊の聲もしきりなるにあきて、嵯峨野の方に赴き、おかしき人の澁團など借て、逍遙せられける。

六月や嶺に雲おくあらし山

玉祭といふ文月十日も過て、しきりに父母のむかしもおもはるゝにや、殊に此秋は氣短に身の骨もとがりぬれば、桃尻のみせむかたなきなどうち笑ひ、又伊賀の方へ心ざし、道すがらなれば此かへるさにも栗津の菴に立より、しばらくやすらひ給。殘暑の心を、

ひや〳〵と壁をふまへて晝寢哉

丹野が好めるにまかせて、骸骨の繪讃に骨相觀の心を前に書て、

稻妻や顏の所かすゝきの穗

古郷に立越、盆の間はなき人の名などくり出し、風雅に心深き亡者、仙風、嵐蘭、コ齋、落梧、杜國など、衣の袖もぬるゝばかりかぞへ給。其日先祖の廟にて、

一家みな白髮に杖や墓參り

此たびは句もあまたにて、むかしより書捨の反古草紙どもあらため、後の形見とにや、奥の細道、白馬集と名づく。おなじ氏のしたしき方にあづけ給ふ。

菊月はじめかた、難波より迎へしきりなれば、音信もだしがたしとて、惟然支考などうち連立て、奈良の京へかゝり、爰にも一夜あるじまうけしける。

ひいとなく尻聲悲し夜の鹿

菊の香や奈良には古き佛達

兎角して浪花に入給ふ。その日は平野あたりよりほのくらくて、たど〳〵敷や侍りけん、

きくにいでて奈良と難波は薄月夜

浪花の人々、師をむかゆるそのきは、いと珍しく翁見むとて、何くれかくれもてはやす程に、しづかなる席も侍らず、天王寺住吉の濱など心まかせてあそび給ふ。

此秋はなむでとしよる雲に鳥

すみよしにて、

升買て分別かはる月見哉

神無月に入て、年頃むづかり給ふ疝氣頻に起て、魂くらみがちに、喰物内にたもたず、つくろひはからへども甲斐なし。京大津膳所より心ざし深きかた〴〵はせ集る。木節は醫の力をはげまし、其外枕に手をそへ、すそに心をくばりて、いさゝかおろかならず。八日の夜伽の人々に賀の句を望給ふ。翁も病中の吟あり。

旅にやんで夢は枯野をかけまはる

時つもり日移れどもたのもしげなく、翁も今はかゝる時ならんと、あとの事ども書置。日頃滯ある事どもむねはるゝばかり物語し、偖から(骸)は木曾塚に送るべし、爰は東西のちまたさゞ波きよき渚な

れば、生前の契深かりし所也。懐しき友達のたづねよらんも便わづらはしからじ。乙州敬して約束たがはじなどうけ負ける。終に十二日正念にして靜まり給ふ。誠に三十年の風雅、難波江の蘆のかりねの夢とうせ給ひけむ。やがてとりしたゝめ、むなしきからを高瀬に乘、廣からぬ船の中つきそふものはおほけれど、心ばせをしたふばかりにて、古郷恩愛のしたしみにはあらず。只此頃のつかれに臥て、眠りがちなるもあり。折々頭もたげて、すごく澄る月の色苫のはづれにけうとく、野寺の鐘の聲は嵐につゝまれて、吹まはす風の間に鳴出たるもさすがなり。其夜臥高昌房探志など行違ひて浪花に下る。伊賀よりはしたしき人大和路を出る。翁の病臥給ふ旅亭に尋つき、其骸にさへ後れまいらせ、空にかなしみながら別れ行けり。さてひつぎは逢坂の關を越し、晝過頃は粟津義仲寺にかき入ける。やつがれは此三とせ折々のたがひめに、翁心障り侍りて、音信も遠ざかり侍りぬ。されどむかしの哀みふかきに社かへつて惡みもつよからんとおもひながして、やをら憂世にまかせうち暮しぬ。然るを定光坊實永阿闍梨心がゝり成とて、翁の方なだめまいらせ、此度萬罪ゆるし給へども、外の障りなど侍れば、面むきうときさまにて、それよりはやつがれ加賀の國へ旅立ける。そこにもむつましき方ありて、日數へぬ。此度翁遺言の次に、餘命たのみなし、なからん後、路通が怠り努々うらみなし、かならずしたしみ給へ、その座おの〳〵聞あへり。今さらくやしさのみぞせんかたなき。やつがれはせめて一七日の法事に參り合ぬ。新舗塚の前、樒の花筒ものあはれに、聲もふるひながら、陀羅尼など唱へ、涙押へて、

ひからかす袖や小春の死出の山

二七日は風の塵ひろひ、水むけて、心あふ一連追善の席をぞいとなみける。

今は夢、師去年の歳暮に、

月しろや三十日に近き餅の音

ことしかぎり成べき數なるべし。兼好法師身まかりぬべき前の月二十八日の夜の歌に、

ありとだに人にしられぬ身のほどや
晦日にちかきありあけの月

と侍りしとかや。兼好も終を伊賀國にとりて侍と傳へしに、此人やふたゝび世に生れて、末の風雅を起しけんと、いとゞしたはるゝ。またいにしへより辭世を殘す事は誰々もある事なれば、翁も殘し給ふべけれど、平生則辭世也、何事ぞ此節にあらんやとて、臨終の折一句なし。兼好法師もかゝる事侍しとかや。夫是思ひあはせければ、年の暮の句いとゞ身にし

みて尊くぞ侍る。
今は昔、師因(ちなみ)に予にしめし給ふ事あり。されば古昔の俳諧は歌なり。雜體あまたなれど、わきてこと葉のいろをはなれ、まめやかに思ひいれたるは此躰なるべし。古今三十の中に、

冬ながら春の隣のちかければ
　なか垣よりぞ花は散りける
思ふてふ人のこゝろのくまごとに
　立かくれつゝ見るよしもがな

これらの品誠にあさからぬたぐひ也。中昔もてはやせし俳諧の狂句なり。たとへば、

かまくら山にあぶらぬらばや

と云に

頼朝のまちやる月社きしみけれ

しどけなき輕口のみ出て、月も花も笑ひあかして、靜なる事侍らず。夫より世になる宗匠あまた出たり。摺子木も紅葉しにけりとをからしのあかき心を興じ、蛇のすしや下になれぬる沖の石と重みをもてあつかいたるばかりなりしを、世に賞翫し、人もよろこびしに、貫之のいとによるといひしかすかなる筋、傳敎大師の三みやく三ぼだいとちかひ給ひし丈夫心ひとつにあはせ、諸法實相の觀となし、人間の常のあらましにつけて情をはこび、おもふ事あらば速に言出べし。かりにも古人の涎をなむる事なかれ。春去(さり)、秋來る。萬物あらたまる事かくのごとし。良(やゝ)みづから落涙して去ぬるも、現とばかり覺へ侍る。

元祿七年冬於二湖上三井寺一綴二此記一
小沙彌　路通謹書

翁二七日　十月廿五日會
追善各集二粟津義仲寺一請二直愚上人一設レ齋

木からしや通ふして拾ふ塚の塵　路通
神なし月の二七日泣　乙州
眠目(ねむりめ)の障子外よりたゝかれて　木節
舟のたよりに下す荒麥　土龍
出る杭は往來の裾にかゝるなり　卓袋(いが)
何事やらん觸る御公領　木志
びう／＼となつて晴たる峯の月　正道
露もうごかず猪の首　如行(みの)
ウ
前漢をよめばそゞろに秋更し　丹野
燈心かりて火打たづぬる　智月
物おもひ晝の捻子(シンコ)は手もつけず　士芳(いが)
坂はてる／＼籠に見る夢　路通
庭腹を二十年目につれて來て　乙州
談義くづるゝ本國寺前　木節
餌ぶくれてひいよろ／＼と鳴てゐる　智月
しよろりとのびし川原撫子　卓袋
影法師の跡に跪(つくば)ふ夏の月　土龍
ふみのよめぬは字が落たやら　丹野
泪にて馬に追つく京藤太　路通

壹分の金をあたゝめておく　正道
おそろしの西宮司の宮の花心　如行
苗代食に呼立にけり　土芳
名 秋風や魔法つかひの人あつめ　木志
博奕はまけてあとにぐとつく　土龍
闇の夜は犬のおどすも伽になる　正道
思ひの外に雨晴て行　如行
唐紙を隔てにくきねすり言　木節
羅綾着ながらせゝこしき中　木志
小栗栖を手にとるやうに秋の蟬　土芳
燈籠賣がながき竿竹　智月
朝月にあたゝめ汁のはしらかし　卓袋
荷の宰領にかるふ時宜する　丹野
郷々を皆うちあけて鶴が岡　如行
空吹風やもゝすぢり坊　乙州
淡紙をおます心でかしてやる　木節
雪にしづかに雛の聲　土龍
名ウ ざくろほど子澤山なる十羅刹　正道
床の小隅に殘る繪行器　智月

ちつくりと見せて引込暮の月　卓袋
そやせばいそぐ堅田船頭　路通
ほとゝぎすからは肴のきれもなし　土龍
煙筒の先で火をかゝげけり　丹野
天井の龍の性根をはなに入　乙州
莊子の後も飛やまぬ蝶　筆

三七日　開ニ翁ノ自畫之像乙州ガ宅ニ

凩や國分山の椎の實は落盡し、木曾塚の深田は氷にとぢられ、日枝ひら野の美景情更にまぎれざるに、士峯のなつかしみや發りけん、師翁は蓑笠さげて立寄給ひしに、言舌むねに横り、頭陀を押へ、草鞋をかくし、漸その夜をとゞめて、風雅の教談會者定離の金言れい〱と更行燈に、智月は紙子の袖かきあはせ、硯を前にそなへ、我に形見となるべき物書殘し給へとしきりにのぞまれぬ。師翁うなづき、六そぢの霜にむかふ人に形見を乞れていとちからなし。我先にしねとやなど興じ給ひながら、智月には幻住庵の記一巻、やつがれはいまだ若し、誠の後の形見とて、自畫の像を出して給りぬ。はた光陰とゞまらず。ことし既にやとせばかりにしてむかへ奉りしが、無常迅速今は過し夜の興談迄思ひ出されて、そゞろに袖をひたす。一七二七日は義仲寺にて追善、三七日は信仰の輩をむかへ、尊像の前におゐて人々句をならべ、生前のごとくうかゞひ奉る。

つく杖は三十棒や冬の風　乙州拜
霰ふる形は木曾路か武藏野か　木節
しめ直す奥の草鞋や冬の月　惟然
立どまる背中も丸し玉あられ　土龍
像の畫に物いゝかくる寒さ哉　智月
霰ふる繪ばかり見てもあられふか　錦江
此繪よりこぼす霰か床の上　丹野
ころびてもすごく見ゆるか雪の像　路通

四七日　翁頭陀笠杖寄ニ進義仲寺ニ。

各題ニ三物ニ有レ句。

此笠はいくつの年の雪みぞれ　木節
生涯はこれかや寒き頭陀袋　路通
是ほどの頭陀に月花雪みぞれ　土龍
寝てかへる奈良の夜寒や笠のしみ　乙州
置霜や手の跡残る穂枝の杖　巍々
花もみぢこべりつきけり笠の煤　丹野
廣々と笠ぬぎ捨て雪佛　高近
冬の日や老もなかばのかくれ笠　智月
忘れては持はしりける笠の雪　木志
山茶花や宿々にして杖の瘦　惟然
木がらしの猿も馴染か蓑と笠　嵐雪

初月忌兩吟

おもひ〳〵の追善ども有中に、

風月の霜の劍を折らしけり　乙州
冬の野原にいなす飼鳥　木節
食をたく煙は同じ時分にて
番の行燈を次へやらるゝ
月の夜はわかひ衆が寄松の下
仕舞て歸る小舩の雜籠
手のひらに乘ていたゞく早稻の米
たる木の煤のおつる首筋
雨雲の間は八町あるかなき
苔ばかりののりし夏菊
見ゆるのが內の嫁子の在所也
碁一盤にて中をたがわれ
朝時から並ぶ天窓は白髮にて
杖笠頭陀は過し世の夢
不自由なる咄しがあれば外の濱
物わすれする實方の後家
夜露にもうたれて庭の月と花
ともにうきたつ鈴菜すゞしろ
春の空いねむる馬に聲かけて
日半に家の出來て屋ね葺
ちん〳〵と茶釜ひとつが煮かへり
唯鶯の音を入て飛
さればこそうかと語らぬ緣の道
九字切かくる奧の法印
大庭に六具をしめてなみ居たる
夜中の過によいと出る月
秋風のいなの笹原さは〳〵と
まづ吸物にあたらしき茸
石臼はうすくなるほどしまつして
祖母樣たちのおほき一門
かい暮にぬかれて歸る三嶋市
横にしぐれて山の腰行
いのらるゝ神の身にても迷惑さ
なくな〳〵と猫をかき撫
百年の牛にちりぬ花の下
豐蘆原のみな霞たつ

五七日　木曾塚會連衆京、江戶、大津、膳所

冬の日も照る上は皆泣まひぞ　木節
沈水いける炭の火加減　桃隣
惣門の前は赤土漉かけて　義仲寺上人 直愚
青きうちよりちぎる南蠻　乙州
松の葉のちら〳〵落る月の影　朴吹
たしかに鹿の鳴聲を聞　丹野

延かゝみ我身を楽にとりまわし　路通
付ちらかして買ぬ小道具　臥高
ウ
傘をさげてもどりし雲の峯　土龍
伯父の思案に田地うけとる　游刀
犬を見て狐とおかむふもと山　嵐雪
片假名まぜてかきにじる文　探芝
酒しいて飛脚の顔に色を附　廻鳧
隣あたりは皆まめで居ル　遲望
ほか〳〵と榾たく朝の富貴にて　惟然
わたりの筋は道に切ル土手　丈艸
笹の葉の小海老を重くふるふらん　昌房
うちへ這入ばぞつとする秋　去來
老骨に力をみせてうつ礁　重勝
半分山にかゝる月しろ　正秀
養育よき駒は信濃の花に寢て　臥高
かすみをたぐりよする網の手　朴吹
二
寒やみの子も這出る春の風　智月
あがり口なる茶碗とり置　廻鳧
指もなき足袋をはきたる墨衣　嵐雪

あかをおとせと風呂すゝめけり　路通
郭公舟路三日を夢でやる　木節
書て覺ゆる世のはやり唄　遲望
つき臼になれとて松をきりこなす　探芝
雫をたらす鱗棚の五器　惟然
若殿の立れたあとを戀しがり　丈艸
元結をこく厦板のかげ　游刀
見事なるしめじを籠に取わけて　者水
月にたばこをすつぱりと呑　乙州
出替りも頓て近付秋の空　去來
和尚へ禮を念頃にいふ　正秀
二ウ
一挺の駕籠にふたりがさし向ヒ　土龍
あはれなかたへ公事勝になる　嵐雪
氏神の社をたゝくあらとやま　遲望
鴨の上毛の雪を寒がる　惟然
節季候の裏の町迄踊來て　游刀
念佛を申歸る盗人　土龍
ほろ〳〵と雨降ながら薄月夜　桃隣
すゝきをまぜて出來し菓子籠　臥高

うそ寒き額は墨にぬりかくし　乙州
淡路に越てづぶり一年　去來
しからるゝ師匠もたねば便なく　路通
藪さへあればうぐひすを聞　桃隣
圓相の中に花さく法を得て　嵐雪
ならびて粥をさます春の日　執筆

六七日　路通亭一座興行

ふみ壇の霜もさびたり袴ずれ　土龍
あとの月おもへば氷るたゝき鉦　智月
雪吹ては雁鳴たゆる塚のズン　乙州
粟津野や塚さへ影の薄氷　正道
大極の輪と消にける塚の霜　木節
草も木も霜をもてなす佛哉　路通
雪あらば旅すく人の夜も寢ず　桃隣

盡七日　反古ざらへ

枯荻は陸奥紙につゝみけり　路通
嚙しだく反古のばさむ生火桶　智月
かきさがす難波くだりや冬の梅　土龍
こゝへ死ぬや旅の皮籠の虫のから　乙州

霜の夜や大鷹小鷹薄がさね　木節

追悼

近きあたり遠き國より集る句ども
おの〳〵次第不同に書あつめ撰集
に加ふ

いふまひとおもへど雪吹死出の旅　智月
へんさんを着せても寒し假位牌　女 錦江
是も散不斷櫻の冬の花　加州 北枝
あぢむらの鳴つれ多きとぶさ哉　同 萬子
一時雨あふとわかるゝ明座敷　大坂 保直
野も山も花も楓も枯野哉　柏原 江水
あら土の塚のにほひや松の霜　加州 巴水
木曾塚の木がらし拜め鳥烏　同 ノ松

翁難波にて身まかり給ふよしつ
たへ聞て

蓑笠も終の着捨や蘆の霜　大和今井 英文
塚さむし耳をすまして磯の波　大津舩 乃期
散はてゝ名斗高し柳陰　同 烏白
見る人の雪の姿や自然石　三井 芦吹

木の鍬で堀に落葉や塚の穴　大津 安世居士
未明までたもとにみがく火箱哉　同 心流
線香の煙むせけり冬の夢　同 江山
ちよぼ〳〵とあつき涙や雪の上　同 露玉
檜笠あられとがむる音もなし　同 丹野
來る人の足跡よわし朝の霜　同 路外
誰がなみだこほりてみする墓の石　同 大武
犬ふまず烏もなかず塚の霜　同 百々
したふ身や時雨の雲のすきまなく　同 夏白
すんごりとふゞきかけたる卒都婆哉　同 五季
つゝほりと起てはひたす夜着の袖　大坂 何處

翁身まかり給ふ菴のさびしさに

見わましてしまらぬ雪の庭木哉　同 芝柏
冬の野や何をとらへて泣相手　京 路靜
見つゞける夢も覺たり六の花　加賀小松 塵生
墓の肌さぞ此ころの雪みぞれ　同金澤 牧童
死光り國の果にも鳴ちどり　出羽酒田 不玉
三光の雪氣に曇泪かな　越中石動 宇白

一筋に上方拜む雪佛　最上 羅隅
大井川隔て悲し神無月　駿河島田 如竹
五月雨に四日留しが死出の雪　同 如舟
猿蓑やきのふのしぐれけふの雪　加州 三十六
なく聲の響て落る木葉哉　同 南甫
椎の葉の塚をもてなす時雨哉　同 旭江
面影は君が有磯の冬の波　周來
めぐる日の茶湯によるや冬の蠅　みの大垣 斜嶺
蓑虫も木にはなれたる落葉哉　同 殘香
燭消て闇になりけり冬籠　同 恕風
寒菊を霜置ながら持佛堂　加州 兮傳
手向けり世の寒菊や幾束　同 文川
枯菊の代々に殘らん譽かな　同 賴光
枯ばせを泣てもたらぬ哀哉　同 十進
此冬や木曾も序におがまるゝ　同 岡水
初雪やふまぬ所が塚の上　京 短長
雪の上に見もせぬ顏の現哉　ミノ 均水
濱ぎくも吹ふゞかれしくやみ哉　ギフ 白蘋

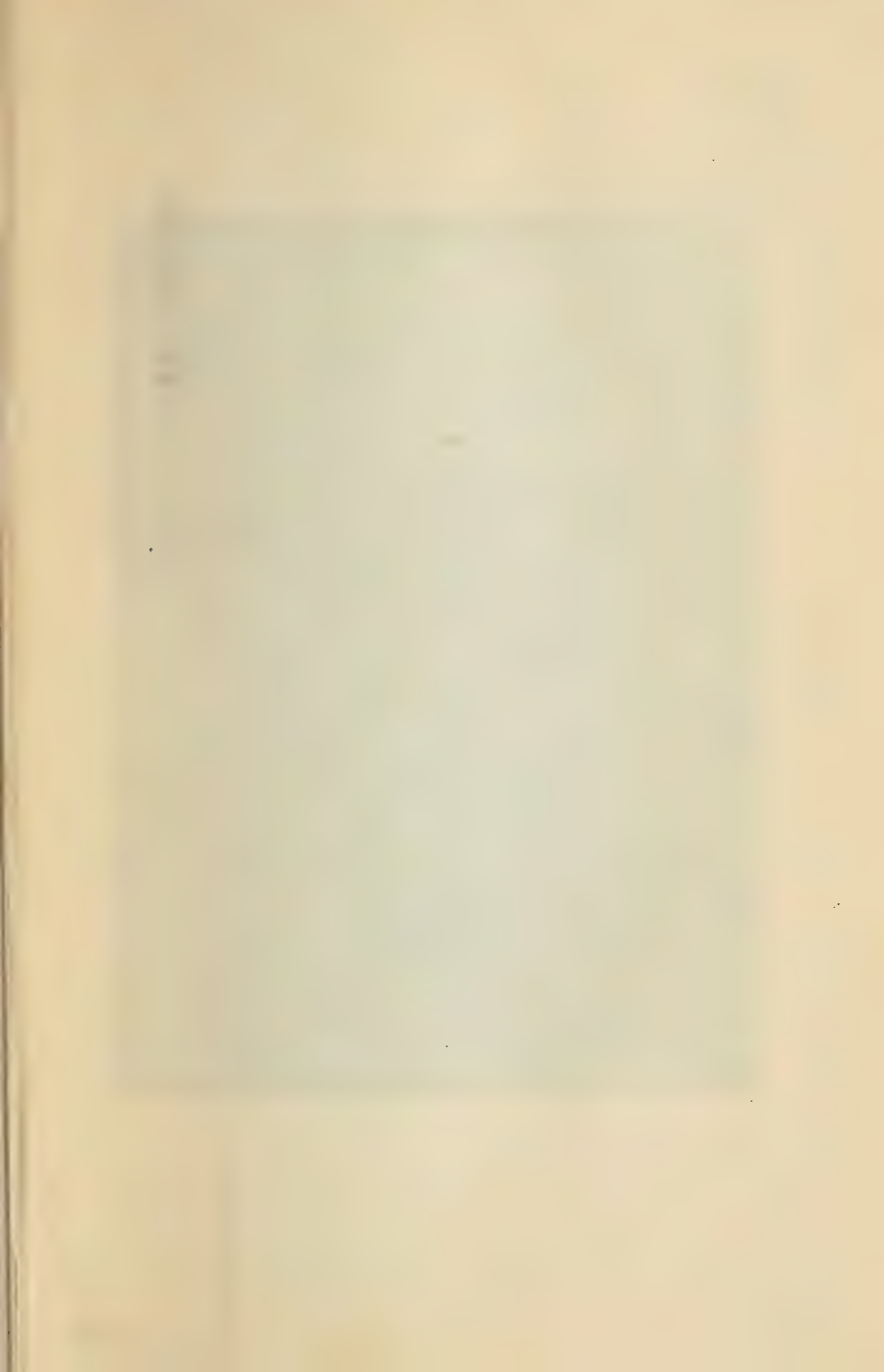
宵月や蓮はかれて水のさび　濃州　夕可

いぬ人やたゞ木枯の一ふかれ　同　竹堂

松本や二度の雪見る翁塚　定光坊　實永

右一巻於粟津義仲寺校考之

井筒屋庄兵衛

蕉翁全傳
完

翁全傳序（勝峰本によりて補ふ）

蕉翁は此國の産出。其はじめ連歌の門より出て、終に變化玄妙の蕉門を開き、其名は新治つくばの峰よりもたかく、奥の細道を分つゝしのぶ人おほく、末野の枯尾花を枝折て、其跡を仰ぎたふとびける。然ども傳説實錄のつまびらかならねば、頻に事歴の考をからしめ、又故翁の筆のすさびの家々に秘藏せしものを拾ひ集れば、多きこと世しらぬほど也。それをつぎ／＼に臨摸し、附錄となす。げに玉は崑の崗よりいで、周の禮こと〴〵く魯にありとは、古人吾をあざむかじ。古往今來未來一正格と鼻たかくおごめき、秋風にくだかれしばせをのあたり、羽だゝきするやうこそおかしけれ。

北伊　再形庵白舌翁

全傳凡例

○翁は隱遁の人なれば、あながち鼻祖の事記すべきにあらず。されど洛東双林寺に碑を建て、東華坊が銘文にも、其先桃地の黨とかや。此あやまりを世に傳ふべきを恐て、系譜に詳にす。

○些中庵の號、もとみのむしの句によりて簑虫庵なり。此三字を改し事奥に記す。

○泊船集、句選をはじめ、諸集に載る所區々にして、たま〳〵書あやまれるもあるべし。此書に出す所も又其違なきにはあらず。

○大和河内攝播紀行の書翰は、ことに行脚の風致一つにあらず。因つて其一章を奥に記して傳記拾遺の部に入。

○他國行住の間、さま〴〵あるべし。伊賀の國にて誹言殊に委しく記すは、おのづから此國によく知る所なれば也。なほ此書に洩らす所、再形庵の文庫にあり。

○他人のほ句脇付句の類、翁の句により所有るは、おのづから此書に載す。

蕉翁全傳

はせを翁は彌平兵衛宗清の裔孫にして、伊賀の國柘植の鄕日置山川の一族松尾氏也。中頃の祖を百司某といふ。父は與左衛門、母は伊豫の國の產、いがの國名張に來りて其家に嫁し、二男四女を生す。嫡子半左衛門命淸、其次則翁也。(家系後に詳記す、)正保元甲申の年、此國上野の城東赤坂の街に生る。幼弱の頃より藤堂主計良忠蟬吟子につかへ、愛寵頗他に異なり。童名金作後に藤七郎又忠右衛門宗房といふ。主從ともに滑稽の道に志篤く、貞德老人の流を汲み、洛の季吟貞室、攝の宗因等にしたしみ遊ぶ事歲あり。寬文五年(翁二十二)歲の冬、貞德十三回忌の追善に、

　野は雪にかるれど枯ぬしをん哉　蟬吟子
　鷹の餌こひと音をはなき跡　季吟

其百韵に翁が句十八の中

　月暮まで汲むもゝの酒
　ならで通ふはむしやうやみの夜
　有明の影法師のみ友として
　竹弓もいまは卒都婆に引替て
　なにの風情も菜飯ばかりぞ

これらみな〳〵若年の作也。則烏羽の里實相寺(現住日進上人 一說日暹(進イ))に書寫し、納めて今にあり。又其頃蟬吟子、

　目出たひぞざれ(にイ)ごとのけて御代の春
　水打は火の用心かほたる籠
　月もうき出入のある雲間かな
　霰降る庭や白地の惣鹿子

翁の句は(にイ)、

　あち東風やめん〳〵さばき柳髮
　しばし間もまつやほとゝき數十年
　寢たる萩や容顏無禮花の貌
　時雨をやもどかしがりて松の雪

右おの〳〵四季を記す。其後の俳諧の變化を知らしめんため也。

かくて蟬吟子の早世の後、寬文十二子の春(二十九歲)仕官を辭して甚七とあらため東武に赴く時、友だちの許へ留別、

　雲と隔つ友にや雁のいきわかれ
　（普通に「友かや」として傳はる）

其頃はみづから釣月軒とも稱しけり。うぶすな上野菅原社に奉納。貝おほひと名づけし一書三十句の中に、

　きてもみよ甚べが羽織花ごろも
　めをと鹿や毛も毛か揃ふて毛むづかし
　（貝おほひに「毛に毛か」とあり）

かゝる俗風のたはぶれごとも聞えしか。諱名土芳と云ふ。薙髮して風羅坊とも號し、又天々軒桃青とも呼ぶ。江戶の杉風といふ者(後衰杖)此翁を師とし仕へて、小田原町に住しめ、後は深川に庵を結ぶ。一柳軒が編る書の中には、

　庭訓往來誰が文庫よりけさの春

猫の妻へついの崩れより通ひけり
（廣小路に妻を戀に作る）

一時雨礫や降つて小いし川

成にけり〳〵までとしの暮

延寶四辰のとし故郷に歸るとて途中

山のすがた蚕（蚤）が茶臼の覆ひかな

其六月伊賀高畑氏市隱亭にて

富士の風や扇にのせて江戸土産

山岸半残が會、

百里來たりほどは雲井の下涼み

桑名氏興行渡邊何某の宅にて、

詠るや江戸にはまれな山の月

京に上りて新玉津島の神前におゐて季吟より傳授の事有。因て世に此老の弟子とはいふなりけり。猶口傳。（此の事やゝ疑ふべし。）

其頃よりひとり正風の眼をひらき、をのづから蕉門一流誹諧に實ある說を立らる。

卯次韻冬の日より猿簑炭俵後さるみのゝ流行およそ二十年の變化なりとぞ。

天和三亥の冬、深川の庵燒失、其あくる年、庵を造りあらためて、一もとの芭蕉をうゑ、雨中の吟、

芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉

これよりばせを菴とは呼ぶ事になりぬ。芭蕉を愛するに、尙口傳あり。

一派の風聲東都に鳴る事九年にして、貞享元年子の秋江戸を旅立して、

野ざらしを心に風のしむ身哉

秋十とせ却て江戸をさす故鄕

客舍幷州已十霜と賈島が吟行おもひあはすべし。箱根を越えて、

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞおもしろき

後松倉嵐蘭が翁一生富士芳野の句なしといへるは、すなはち翁が常話にして、まことに句なきにあらず。口傳。其十三年前初下りさやの中山にて、

命なりわづかの笠の下涼み

ことし此山を越るとて、

馬に寢て殘夢月遠し茶の煙

尾張伊勢路を經て、末の冬廿五日又いがにあり。此間に當麻、よし野、近江、美濃、ふたゝび尾張旅行。

とし暮ぬ笠着て草鞋はきながら

同じく二年丑の二月中旬迄故鄕に遊び、薪の頃奈良におもむき、京に入つて三井秋風が別墅にある事半月ばかり。大津、名古屋を巡行して、又あづまの方に赴かれぬ。其春の吟。伊賀にて、

たが聟ぞ齒朶に餅負ふ丑の年

子日しに都へゆかん友もがな

ある人のもとに屛風の畵を見て、

旅烏古巣は梅に成にけり

些中庵土芳其頃は蘆馬と稱す。此春播磨にありて、歸る頃、翁はや此國を出られければ、跡を慕ひて京に上る。水口の

驛に往あひて、同じ旅ね(同じく旅寢してイ)の夜すがら語りあかすとて、

　命ふたつ中に活たる櫻かな

翌日朝中村柳軒といふ醫のもとに招かれ、此句にて二十年來の舊友二人におなじ句を以て挨拶したりと一興。其里の蓮華寺、伊賀の大仙寺嶽淵各四五日對話。歌仙などあり。其夏より寅卯二とせ武江に在て、又其師走伊賀の國に在。

　ふる里や臍の緒に泣年の暮

元祿元辰のとし、此春武藏野の僧宗波、美濃(尾張イ)杜國伊賀に來り、杜國は万菊と改名して、和州行脚に伴ふ。又伊勢に詣て子良の梅の句あり。瓢竹庵に万菊と旅ねして、此國田井の庄兼好の古跡を尋ね、よし野、須磨明石、京に出て、五月廿日美濃鵜飼あり。京より猿雖が方へ文通の時万菊が舁の圖たはぶれに出來る。今其家にあり。猶其時の書翰奧に記す。直に武江に歸庵也。万菊は京よりひとり伊賀に歸り、猿雖がやどに四五日の足休(休足イ)して、六月廿五日美濃に歸る。其春風麥氏小川亭に會して、

　春たちてまた九日の野山かな

伊賀の古山といふ所にういといふ物あり。土にあらず木に非ず。くさき香して本艸にいへる石炭の類ならんと高梨野也(順)揚考有。其句を案じ置りとて蓑虫庵にての吟、

　香に匂へうに掘岡の梅のはな

みのむしの句自畫讃、其時の携へもの也。

菅社のほとり藥師寺の會に、

　初ざくら折しも今日はよい日なり

藤探丸子(蟬吟子嗣子良長)のもとにて、

さまざまの事おもひ出すさくら哉　探丸子

　春の日はやく筆に暮ゆく

阿波の鄉大佛寺にて、

　陽炎の俤つゞれいしのうへ

此句後丈六に陽炎高しと改る。

彼瓢竹庵に(此瓢竹大須賀屋次郎左衞門といふ者也。)

　花を宿にはじめ終りや廿日程

万菊も其時、

　長閑さに何もおもはぬ朝ねかな　と云ふ句あり。よし野へ旅だつに、

　此ほどを花に禮云ふわかれかな

ひの木笠に書付の句、花を櫻と改て、支考が笈日記に載す。くだくだしければ洩す。其冬武城に歸り、又巳の三月末より松嶋に旅立。直に九月上旬伊勢の遷宮。万菊路通卓袋にあひ、久居二三日のやどり後、李下を伴て伊賀に歸り、霜月迄逗留(李下は一宿路通は暫くあり。)曾良も來り、東に別日、

　ならの隣のしぐれかな　といふ句あり。霜月末(路通同行)奈良御祭禮拜見。夫より大津に出らる。(路通いざ侘ん菊の句あり。)配力亭にて、

　人々をしぐれよやどは寒くとも

(此時、水雞笛と名付しものを頭陀袋よりとり出て配力に附與。近江の人の餞別の具とかきこゆ。)半殘與行一入といふものゝ會に、

　冬庭や月もいとなるむしの吟

平沖といふものゝ宅にて、

　屛風には山を畫書て冬ごもり

此句後に金屛の松のふるさよと改る。同しく三年正月はじめより二月迄伊賀に在。參宮（なにの木の句あり。）卯月より膳所。此夏幻住庵（椎の木の句。）冬又伊賀にて百歳子（西島氏）のもとに、歌仙一卷、

　笈の笠おとしたる椿かな

橋木子の許（藤堂氏本名丹羽）歌仙一折、

　土手の松花や木深き殿造り

三月十一日荒木村白髭の社にて、

　畠うつ音や嵐のさくら麻

鳳麥亭にて、

　木のもとは汁も鱠もさくら哉

膳所に行とて道より物に書付て、半残が許に來る二句、

　一里は皆花守の子孫かや

　蛇喰ふときけば怖し雉の聲

右花守の句は伊賀の國予野といふ所に、奈良のみやこの八重櫻の故事あり。古今著聞集沙石等に詳也。よつて此句あり。

氷固宅にて（此句にて一折あり。氷固松本氏後非群といふ。）

　きり〴〵すわすれ音に啼巨燵哉

同しく四未のとし正月始大津より伊賀に來り、薪の頃南良に行。伊賀に歸り、三月末また大津に在。冬まで爰かしこ歷覽。霜月はじめ粟津より東武に歸菴。（桃隣同行）神の旅寢の吟此時なり。今年橋木子の會に、

　山里は萬歲遲しうめのはな

正月卓袋月待に、

　月まちや梅かたげ行く小山伏

百歳子の宅にて歌仙の催し、

　こまかなる雨や二葉の茄子種

此夜障る事ありて五句にて止むとぞ。

赤坂の庵にて、

　不性さやかき起されし春の雨

　山吹や笠にさすべき枝の形

三月廿三日万乎が別墅に一折、

　年々やさくらをこやす花の塵

未の冬より申酉戌の夏まで武江に在り。

其頃深川の庵再興の記文、

古き芭蕉庵は山氏素翁序製（序を製し）て、貧主が心ざしをあらはし、其角一晶等勸進の聖と成りて、風士の難に一紙半錢を乞ふ。今年辛未の夏、杉風一人の施主と成りて、聊か枳風が志を相兼、住居は曾良岱水が物好に任せて、三間の茅屋池に臨て立り。南にむかひて納涼をたすけ、月光池に移り、疊をてらして、殘夜水樓に四更の雲を吐き、やゝ薰風吹ける秋の初風も身に染みそめて、仲秋三日の夕より雨を苦しみ雲をいとふ。既に三五夜近う成行まゝ、芭蕉を移して又芭蕉菴となす。其葉七尺あまり、凡琴を隱しぬべく、琵琶の袋に縫つべし。鳳凰尾を動かし、雨青龍の耳を穿て、新葉日々厚く、先生の知を卷上、年上人の筆を待てひらかむ

とす。我その芭蕉の役と成て日々破を
かなしぶのみ。（終の處誤脱もあるべく、難讀なり。）
酉の冬、
武士の大根苦き（辛イ）はなしかな
戌の春、
花見にとさす船遲し柳原
右二句玄虎子の旅館にて即興也。大根に一折、花見に六句ありと云。元祿七戌のとし初の五月廿九日尾張の方よりいがのくにゝ歸り、閏五月十一日雪芝宅歌仙一卷、
涼しさやすぐに野松の枝の形
○此の間に町家の圖の如きものあり。雪芝等の宅をあらはしたるにや。略す。
猿雖宅（辛イ）にて、
柴つけし馬のもどりや田うへ樽
難波の之道訪らひし時、
我に似なふたつに破れし眞桑瓜
六月末膳所に行て、魂まつる頃、又立もどりて、
家は皆杖に白髮の墓參り
文月の頃、猿雖宅に土芳と二人稻妻の題にて、
いなづまや暗の方行五位の聲
玄虎子の宅表六句有り。
風色やしどろに植る庭の萩（植る一に植し。）
八月七日望翠宅にて歌僊、
里ふりて柿の木もたぬ家もなし
新庵の月見、
名月に麓の霧や田のくもり
名月の花かと見えて木綿畑
こよひ誰吉野の月も十六里
此三句庵を見するとて門人たれかれ多く招かれし時と也。此菴赤坂にありて、無名庵といふ。（近頃庵を舊地の東白舌翁の別墅に移され、再形庵といふ。）三日月の記、口傳。
其とし秋洛の惟然、伊勢より支考斗從、熱田より白鴻來る。（支考斗從は九月三日なり。）其ころ、
蕎麥はまだ花でもてなす山路かな
松だけやしらぬ木の葉のへばり付
まつ茸の句に歌仙あり。
同し秋新庵にて續猿蓑草稿吟味のころ、句の仕かた、人の情などの事土芳云ひ出て、
貌に似ぬ發句も出よはつざくら
元說宅歌仙一折。此卷伊賀にての歌仙仕をさめと云。
行秋や手をひろげたる栗のいが
猿雖宅。
新藁の出初てはやき時雨かな
其とし伊賀にて名殘の謡賛は、
白露もこぼさぬ萩のうねりかな
九月八日旅立。九日。
菊の香や奈良には古き佛達
其夜大阪着。
きくに出て奈良と難波は宵月夜
十三日雨降。心地常ならされども、すみ

よしに詣で、升買て分別かはるの句あり。

畦止亭に遊び、或は其柳車庸などいふもの、宅に會あり。廿六日新清水彼方此方徘徊して、

此秋は何でとしよる雲に鳥

その頃の事ども枯尾華笈日記等に委しければ、これを略す。十月に入つて泄瀉の病しきりに發り、終に十月十二日申の刻終焉。病中の吟世に知所ながら、

旅に病て夢は枯野をかけまはる

古鄕の兄松尾命淸への書殘しは、自筆を其家に借り寫して別卷に記し侍る。此外正秀が預りて曲翠にて十月十六日披く所の遺書如レ左。

一、三日月記　伊賀に有

一、發句の書付（タイ）此字不分明　同斷

一、新式　是は杉風へ可レ被レ遣候。落字有レ之候間。本寫を改（サイ）可レ被レ校（ガイ）候。

一、百人一首、古今序註　拔書、是は支考へ可レ被レ遣候。

一、埋木　半殘方に有レ之候

江　戶

一、杉風方に前々よりの發句文章の覺書可レ有レ之候。支考校之文章可レ被二付置（引直イ）一候。何も草稿にて御座候。

一、羽州岸本八郞右衞門發句二句炭俵に拙者句になり、公羽と翁との紛れにて可レ有レ之、杉風より急度御斷可レ給候。

右一通

一、伊兵衞に申候。（當年は）（イ）壽貞事に付色々骨折、面談に御禮と存候所、無二是非一事に候。殘り候二人之者共十方を失ひ、うろたへ可レ申候。好齋老など御相談被レ成、可レ然了簡可レ有レ之候。

一、好齋老萬御懇切、生前死後難レ忘存候。

一、榮順尼禪可坊情ふかき御人にて、面上に御禮不レ申、殘念之事に存候。

一、貴樣病起御養生隨分御勉可レ有レ之候。

一、桃隣へ申候。再會不レ叶、可レ被二力落一候。彌杉風子珊八草子よろづ御投かけ、兎も角も一日暮可レ被レ存候。

元祿七年十月（日）（イ）

支考此度働驚深切實を盡候。此段賴存候。庵の佛は、則出家の事にて候へば、遣し候。

右一通

はせを　朱印

一、杉風へ申。久々厚志、死後迄難レ忘存候。不慮なる所にて相果、御暇乞不レ致段、互に存念無二是非一事に存候。彌俳諧御勉候て、老後の御樂に可レ被レ成候。

一、甚五兵衛殿へ申候。永々御厚情にあづかり、死後迄も難レ忘存候。不慮なる所にて相果、御暇乞も不レ致、互に殘念、是非なき事に存候。彌俳諧御勉候て、老後はやく御樂可レ被レ成候。御内室様に不ニ相替一御懇情最後迄も悦申候。

一、門人方キ角は此方へ登、嵐雪を始として不レ殘御心得可ニ下被一候。

元祿七年十月

自筆　はせを　朱印

右一通

以上の三通は何れも支考が筆にして、はせをの三字自筆、此内支考此度もとある三行自筆也。就レ中傳書の事は故ありて記し難し。好齋老は深川の隱者、榮順禪可共に同所の人と也。伊兵衛壽貞なほ尋ぬべし。甚五兵衛と云ふ人中川氏にて美濃大垣の住士、俳名濁子といへるなり。後に意水と云ふ。

故鄕塚之圖　○略す

近江の木曾塚に隣る所、ばせを塚と名付しものすなはち遺骸を埋葬せし廟所。その外笠塚はおなじ國平田村光明遍照寺にありとぞ。檜笠を土中にこめたるよし李由が記有。長崎に尾花塚。深川に發句塚。越中に翁塚。又奥州伊達桑折朝日山法圓寺に田植塚。風流の初やおくの田うゑ歌と云ふ自筆を埋むと也。大阪天王寺の邊に風之梅從等が築く所のばせを塚あり。筑前箱崎にも石碑有とかや。其外尾陽佐夜の驛水雞塚。いせのくにあのゝ津四天王寺の邊又塚有り。播州增位山。美濃のちり塚といへるも、其外かなた此方に多く聞ゆ。越中備中美濃加賀等 中にも伊賀國上野の府、愛染院の故鄕塚は親族並に門葉誰かれ翁死去のとし建る所にしていと二つなきものなり。元文三戊午のとし八月惣墓の中より改葬して、自然石もとのまゝ。

蕉翁傳拾遺雜錄（勝峰本によりて補ふ）

翁在京猿雖への返書

大阪迄御狀忝拜見。此度南都の再會大望、生々の樂ことばにあまり、離別の恨み筆に不レ被レ盡候。我たのもし人にしたる奴僕六にだに別れて、彌おもき物打かけ候而、我等一里來る時は、人々一里可レ行也。三里過る時は各今や三里可レ行也。いまだしや、梅軒何がしの足の重きも、道連の愁たるべきと、墨賣がおかしかりし事ども云ひ〳〵、石の上有原寺、井筒の井の深草生たるなど尋て、布留の社に詣、神杉など拜みて、こゑばかりこそむかしなりけれ、と詠し郭公の頃にさへなりけれと、おもしろくて瀧山に昇る。帝の御覽に入たる事古今集に侍れば、猶なつかしきまゝに、貳拾五丁わけのぼる。瀧の景色言葉なし。丹波市八木と云ふ所、耳なし山の東に泊る。ほとゝぎす宿かる頃の藤の花と云て、たほおぼつかなきたそがれに、哀なるむまやに到る。今は人々舊里にいたり、妻子童僕のむかへて、水きれいなる水風呂に入て、足のこむらをもませなどして、大佛の法事のはなしとり〳〵なるべき。市兵衛は草臥ながら、梅額子へ卷ひけらかしに可レ被レ行。梅軒子は孫どのにみやげねだられておはしけむなど、草のまくらのつれ〳〵に、ふたりかたり慰て、十二日竹の内いま（名高き孝女）が茅舍に入。うなぎ汲入たる水瓶もいまだ殘りて、わらのむしろの上にて茶酒もてなし、かの布子うりたしと云けん万菊のきり物のあたひは彼におくりて過り。おもしろきおかしきもかりのたはぶれにこそあれ、實のかくれぬものを見ては、身の罪かぞへられて、万菊も暫落涙おさへかねられ候。當麻に詣で萬のたつときも、いまをみるまでの事にこそあなれと、雨降出たるを幸に、そこ〳〵に過て、駕籠にて太子に着。譽田八幡にとまりて、道明寺藤井寺をめぐりて、つの國大江の岸にやどる。いまの八間屋久左あたりなり。

杜若語るも旅のひとつかな　愚句
山路の花の殘る笠の香　一笑
朝月夜紙干板に明初て　万菊

二十四句にてやむ。

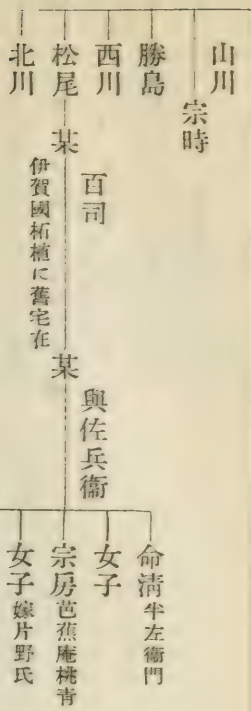
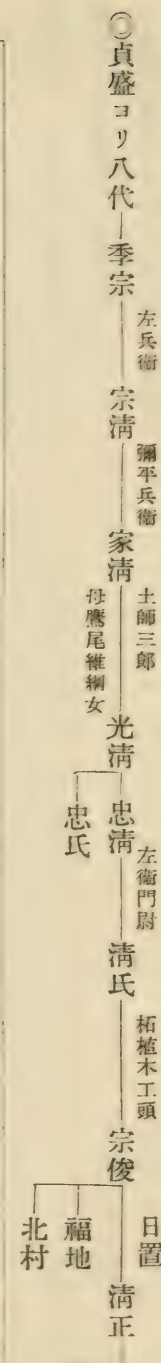
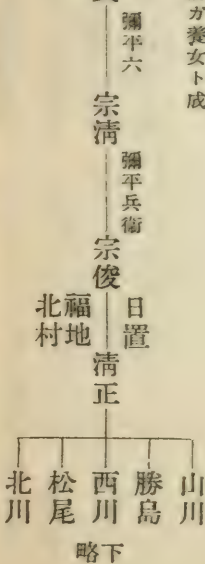
十九日あまが崎出船。兵庫に夜泊。相國入道の心をつくされたる經の島。わだのみ崎。わだの笠松内裏やしき。本間が遠箭を射て名をほこりたる跡などきゝて、行平の松風村雨の舊跡。さつまの守の六彌太と勝負したまふ舊跡。かなしげに過行。西須磨に入て、幾夜ね覺ぬとかや關屋の跡も心とまり、一の谷逆落し、鐘懸松、義經の武功おどろかれて、てつかひが峯に昇れば、須磨あかし左右にわかれ、あは

ち嶋丹波山かの海士が古里田井の畑村などめの下に見おろし、天皇の皇居はすまの上のと云る其代のありさま心に移りて、女院おひかゝへて舟にうつし、天皇を二位どのゝ御袖によこ抱にいだき奉りて、寳劍内侍所あはたゞしくはこび入、或は下〳〵の女官は、くし箱油つぼをかゝへて、指ぐし根卷を落しながら、緋の袴にけつまづき、臥轉びたるらん面影、さすがに見るこゝちあはれなる中に、敦盛の石塔にて涙をとゞめ兼候。磯近き道のはた、松風のさびしき陰に、物古たるありさま、生年拾六歳にして戰場にのぞみ、熊谷に組でいかめしき名を殘し侍る、其日のあはれ、其時のかなしさ、生死事大無常迅速、君わするゝ事なかれ。此一言梅軒子へも傳度候。須磨寺のさびしさ、口を閉たるばかりに候。蟬折こま笛料足十疋見るまでもなし。此海見たらんこそ、物にはかへられじと、あかしよりすまに歸りて泊る。

廿一日布引の瀧に登る。山崎道にかゝりて、能因のつか、金龍寺の入相の鐘を見る。花に散けるといひし櫻も、わか葉に見えて又おかしく、山崎宗鑑屋舗、近衛どのゝ宗鑑がすがたを見れば、餓鬼つばたと遊しけるをおもひ出て、

　有難きすがた拜まんかきつばた

と心のうちに云て、卯月廿三日京に入。

松尾家系略圖（勝峰本によりて補ふ）

伊賀の國喰代村に百地氏黨ありて、式部塚と云ふ事世に知る所也。此系を誤り傳へて東山双林寺の石碑に東華坊が記せし成べし。又案に創業記考異卷二、天正十年壬午の條に、柘植黨甚八宗吉といふもの、米地九左衞門を御案内に出せし事あり。これをあやまれるもの歟。

○中陰後一周忌三回忌に及て、いがの國に來り、故郷塚に詣し人、

△雪中庵嵐雪　戊霜月晦日

例の冬籠るべきとていがの上野に
むすびおかれし庵を尋て、

花立の轉て樒の氷りかな

△同時桃隣

菴に來て甲斐なく拾ふ木の葉哉

△路通粟津よりすぐに十月下旬伊賀に
來り、高野へも參詣。句あるべし。

△大阪玉造京屋吉左衛門彌三郎同稲荷
邊京や新左衛門（右イ）　表徳發句等不レ知る分本名を。奥も同じ

△尾州熱田宮之驛森田八郎右衛門

△惟然　之道　乙州

△尾州宮之驛贓札ノ辻ふじや市郎右衛
門　路専（露川の誤か）

△山田圖書

△井坂猪左衛門　平岡彌次右衛門　相
川左五右衛門

△美濃衆吉田兵左衛門サ吟　河村弾之介
更明　支考同道にて。

○翁の句其據あるものを一つふたつ爰に
出す。

△古池や蛙飛込水の音

右江戸本所六間堀鯉屋藤右衛門簗やしき
の所、其世にあれはて、藻草に埋みたる時
の偶感とかや。唐の呉融廢宅を賦せし律
詩の一聯に、放魚池涸蛙爭聚の句あり。
殊に火後のありさま却有二隣人一爲鎖レ門
といひ、咸陽一火便成レ原と作れる、おも
ひ合すべし。

（風飄二碧瓦一雨摧レ垣　却有二隣人一爲鎖レ門幾樹好華閑二白晝一滿庭荒草易二黄昏一放魚池涸蛙爭聚　捿燕梁空雀自喧　不二獨凄涼眼前事一咸陽一火便成レ原）

△馬に寐て殘夢月遠し茶のけぶり

これは杜牧が早行。さよの中山に至てた
ちまちに驚くと前書あり。爰に贅せず。

△高野にて

△父母の頻りに戀し雉のこゑ

古歌に（玉葉集、行基の歌）

山鳥のほろ〳〵と鳴聲きけば
父かとぞおもふ母かとぞおもふ

△いせ法樂

△何の木の花ともしらず匂ひかな

西行の歌

なにごとのおはしますかはしらねども
かたじけなさになみだこぼるゝ

△粽ゆふかた手にはさむ額髪

物がたりのすがたも一集には有べきもの
とて、猿蓑に載しよし泊船集に記す。こ
れ源氏物語何の巻か耳はさみしてといふ
事也。

△幻住菴の記に

△先頼む椎の木もあり夏木立

椎が本の卷（源氏物語）

立よらむかげとたのみし椎が本
むなしき床に成にけるかな

△こよひ誰よし野の月も十六里

白氏文集に三五夜中新月色

△秋十とせ却て江戸を指す故郷

賈島長江集渡㆓桑乾㆒といふ題

　客舍并州已十霜
　歸心日夜憶㆓咸陽㆒
　無㆑端更渡桑乾水
　却望㆓并州㆒是故鄉

唐詩訓解にもかくのごとし。聯珠詩格には如今又渡桑乾水、却指㆓并州㆒とあり。

△野を横に馬牽むけよ時鳥

馬上郭公

　およぶべき雲井ならねどほとゝぎす
　　駒ひきむけてしたふ聲かな

一座興庵之事
一歌仙之事　（以上二項勝峰本によりて補ふ）

右先師土芳舍兄景賢口傳等を以て是を記す。竹人剃髮後寂川寓子と號す。

寶曆十二壬午七月　日

芭蕉翁繪詞傳
上

芭蕉翁の氏族を尋ぬるに、柏原の御門の御ながれ常陸介平正盛と申す人の末に、右兵衛尉平季宗、その子に彌平兵衛尉宗清と申す人あり。六波羅の入道相國の一門にして、よせ重く、平家の士（つはもの）の中にも宗（むね）徒（と）の人にて、むらなき兵なりしとぞ。

愚按。東鑑ニ彌平兵衛尉。大系圖ニ右兵衛尉季宗子宗清。武家系圖ニ左衛門尉季宗、彌平左衛門尉宗清。參考保元平治物語ニ彌平兵衛宗清爲季宗子。

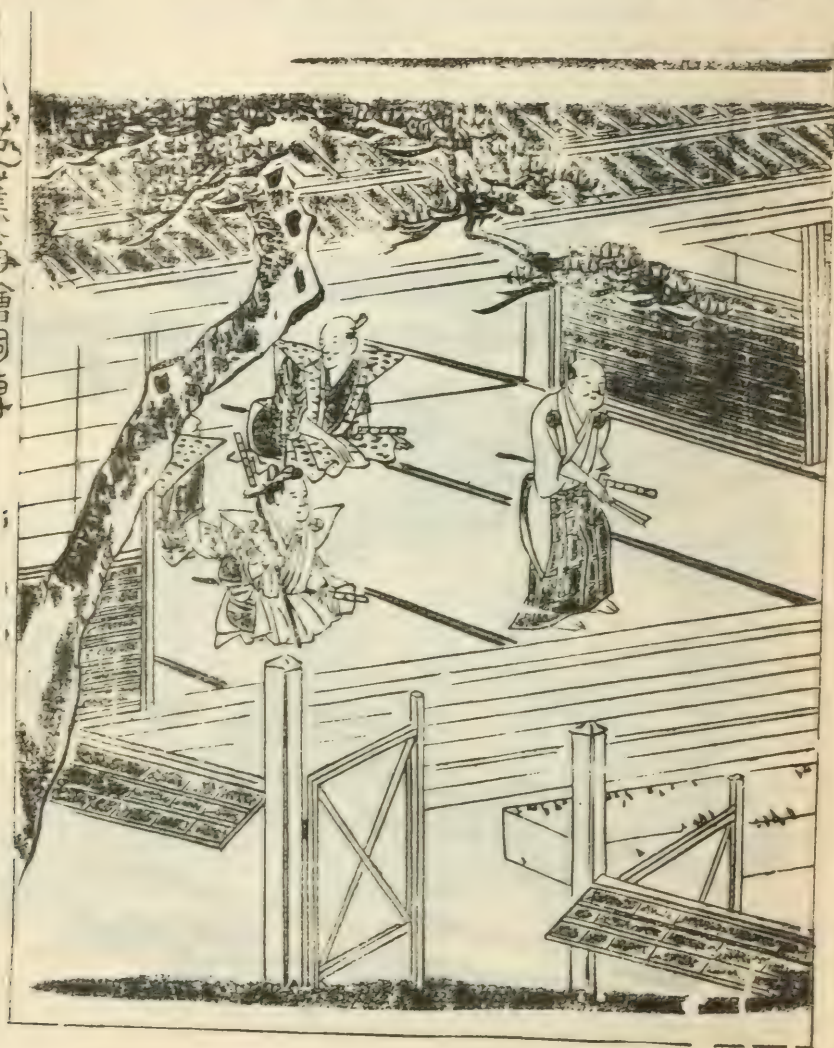
平治の亂に左馬頭義朝の男右兵衛佐頼朝を生捕りけるに、宗清なさけふかきもののふにて、世になくいたはりまいらせける。その宗清が主とたのむ人に池の尼と申すありけるが、頼朝を見て、我子の先だちし面影に似たりとあはれがりて、入道相國へいろ〳〵にこしらへ申しなだめて、ついに頼朝の命を乞ひ、伊豆の國へ流しつかはされける。その折の宗清はことに名殘ををしみて、遠く近江の國までも見送りまいらせける。そのゝち世かはりて、平家はおとろへ源氏はさかへて、頼朝朝臣は鎌倉殿と申して勢ひ猛（まう）になり給ふにも、そのむかし池の尼御前や宗清兵衛がわりなかりし恩をおぼしめしいでて、尼御前の子の池の大納言のもとへ使ありて、御一門こそ都は出させ給ふとも、御身の上は頼朝が奉公にかへて申しなだむべし、あはれ宗清兵衛尉めし具して、鎌倉に下向し給へかしとねもごろに仰送られければ、一門はみな西國へ落ちゆくに、大納言はひとり東國に下向すべしとひそかに宗清をめしいでゝそのよし仰せけるに、宗清いふやう、戰場に向はせ給ふべくは、おのれすゝみて先陣に候べし。おのが身の德つかむとて鎌倉へ下向しなば、御一門の人〴〵傍輩のめむ〳〵には何のめいぼく有てまみえむ。君は東國に下向し給ふべし。おのれは西國にはせ下り、御一門の御先途を見奉り、傍輩の士どもとともに骸をさらさむとこそ、弓矢とる身の本意にて候ものをと云に、大納言も汝が申す所はさることなれど、鎌倉よりも汝をかまへて具せよと申しおこせしものをと、とかくにすゝめ給へども、宗清さらにうけひかず、かくあらがひける評定の間に、はるかに日數の立ければ、今はをくれて西國へ下向せむもおもてぶせなりとて、年ごろ領せし伊賀國阿拜郡の柘植庄にいたり、もしかまくらよりもとめ出られむもつゝましと、さまをかへてかくれしのびて住みしと也。その子家清土師三郎といふ。

愚按。東鑑卷三武衛招ニ請池前亞相一給。中略是近日可レ有ニ歸洛一之間爲ニ餞別一也。中略武衛先召ニ彌平左衛門尉宗清一（左衛門尉季宗男）平家一族也。是亞相下著最初被ニ尋申一之處、依レ病遲留之由被ニ答申一之間、定今者令ニ下向一歟之由令ニ思案一給之故歟。而末ニ參

著一之旨亟相被レ申レ之。太違ニ亭主御本意一。云云。此宗清者池禪尼侍也。平治有レ事之刻奉レ懸ニ志於武衛一。仍爲レ報ニ謝其事一、相具可ニ下向給一之由被ニ仰送一之間、亟相城外之日示ニ此趣於宗清一處、宗清云令レ向ニ戰場一給者進可レ候ニ先陣一。而倩案ニ關東之招引一爲レ被レ酬ニ當初奉公一歟。平家零落之今、參向之條尤稱ニ恥存之由一、直參ニ屋島前内府一。云云。

愚按。東鑑にかくあれど、其外の書に宗清の終りし事つまびらかならざれば、伊賀の蕉翁全傳あるは伊賀の國人の說にしたごふ。そがうへ大系圖に宗清が母の系譜に、柘植彌平左衛門尉宗淸妾、家淸母とあ

り。住所を稱して柘植と號したるならん。たとはゞ同時に同國同郡服部の人に、服部平內左衞門尉家長あり。これ世にいふ伊賀平內左衞門尉也。今も柘植鄕には松尾といふ家多し。

夫より五代を歷て淸正といふ人に子あまたありて家をわかち、山川勝島西川松尾北河と名乘る。代々柘植庄に住めり。その末に松尾與左衞門と申せし人、はじめて國の府なる上野の赤坂に住めり。これ蕉翁の父なり。母は伊豫の國の人とや。姓氏さだかならず。其子二男四女あり。嫡子儀左衞門命淸後に半左衞門といふ。

二男半七郎宗房童名金作これ蕉翁なり。後に名を更て忠右衛門といふ。正保のはじめに生る。明暦の頃出て藤堂新七郎良精の嫡子主計良忠に仕へらる。良忠の別號蟬吟といふ。弓馬の業のいとまには風月の道を好み、和歌及び誹諧をもて遊びて、時の宗匠北村季吟をもて師とす。宗房ともに隨ひて學ばれしとぞ。

愚按。蕉翁全傳には蕉翁の俗名藤七郎とあり。藤堂の家には半七郎とよべりとぞ。兄を半左衛門といへばなるべし。さるを浪花の遊行寺に野坡が建し碑には甚質と書け

り。京都の雙林寺に支考が立てし碑に百地黨と書きしは、松尾氏の先祖に百司と云ひし別姓あり。その謬なりと伊賀の國人傳ふ。

（馬を牽く圖）

さるを寛文六年四月といふに、思ひがけずも主計うせられけるに、宗房そのなき主の遺髪を首にかけて、高野山に登り收めしより、（異案、高野山の宿坊報恩院の過去帳に、遺髪の御供松尾忠右衛門と記せり）頻にこの世をはかなみ、身を遁れんの心せちなりければ、いとまをこふといへども、さる文武のさへあるををしみてゆるさねば、おなじ秋のすゑなりけむ、主の館に宿直しける夜、門のか

たはらなる松をこへ出て、わが住める家の隣なる城孫太夫が門のはしらに、短冊に書て押ける發句に、

雲とへだつ友かや鴈の生わかれ

愚案。此時良忠の子息良長いまだ三歳なりしを、宗房二なく忠を盡し家を續がしむ。されば續扶桑隱逸傳第三巻芭蕉翁傳に仕府主君兩有忠勤云。宗房の住みし家は、上野の玄蕃町といふ所にあり。

（短冊を見つけた圖）

これより延寶のとしまでは跡を雲霞にくらます龍(たつ)のごとく、山にや蟄せし、海にやかくれし。しかるにいづれの年にやむさし野の草のゆかりも

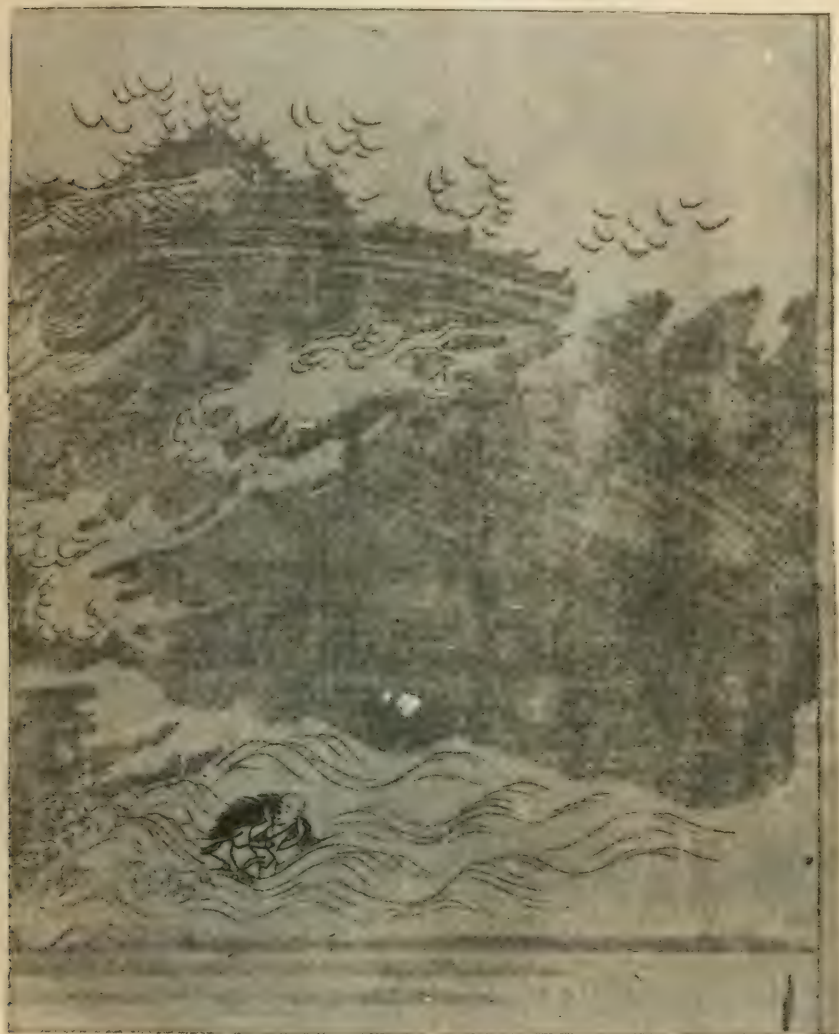
とめて、深川といふ所に住給ふとて芭蕉を栽る。そのこと葉に、風土芭蕉の心にやかなひけむ、數株莖をそなへ、葉茂りかさなりて、庭をせばめ、萱が軒端もかくるゝばかりなり。人よびて草菴の名とす。この葉のやぶれやすきに世を觀じて、

芭蕉野分して盥に雨をきく夜かな

愚案。是より住菴をばせを庵とよび、芭蕉翁と呼べりとぞ。その頃年いまだ四十歳にいたらざるに、此道の師とせし季吟湖春父子をはじめ、翁の號をよべる事もひとへに隱徳のあまりなるべし。はじめ

の名は桃青といひ、別號を風羅房と云ひしも、芭蕉と云へるにひとしく、風に破れやすき身を觀ぜしとぞ。一名を泊船堂と名ぜしも、深川は海に近き地にして、門泊東呉萬里船の詩の景にかなへばなるべし。隱逸傳にも造廬於深川扁號泊船堂。云々。

つれ〴〵なる折にや、笠をはりたまふ詞に、

秋風さびしきおり〳〵、竹取のたくみにならひ、妙觀が刀をかりて、みづから竹をわり竹をけづりて、笠つくりの翁と名のる。朝に紙をかさね夕部にほしてまたかさね〳〵て、澁といふものをもて

色をさはし、廿日すぐる程にやゝいできにけり。そのかたちうらのかたにまき入、外ざまに吹かへり、荷葉の半ひらくるに似ておかしき姿なり。西行法師がふじみ笠か、東坡居士が雪見がさか、宮城野の露に供つれねば、呉天の雪に杖をやひかん。霰にさそひ、しぐれにかたぶけ、そゞろにめでゝことに興ず。興のうちにして俄に感ずる事あり。ふたゝび宗祇の時雨ならでも、かりのやどりに袂をうるほして、笠のうらに書つけ侍る。

世にふるもさらに宗祇

のやどりかな

（笠はりの圖）

あるとし菴のあたりちかく火おこりて、前うしろの家どもめら〳〵とやくるに、炎さかむにのがるゝ方あらねば、前なる渚の潮の中にひたり、藻をかづき煙をしのぎ、からうじてまぬかれ給ひて、いよ〳〵猶如火宅のことわりを悟り、ひたすら無所住のおもひをさだめたまひけると也。

（火難の圖）

そのころ圓覺寺の大巓和尙と申すが周易の文にくはしくおはしけり。ある人翁の本卦をうかゞひけるに、かうがへ給ひけれ

ば、萃といふ卦にあたれり。こは一もとの薄の風にたふれ雨にしほれて、いのちつれなく世にあるにたとへたり。されどあつまるとよみて、その身は潜むとすれど、外よりつどひあつまりて、心をやすくする事あらずとかや。まことに聖典のいつはらさるとはさのごく、道を慕ふともがら蟻のごくあつまれりとぞ。

貞享元子のとし芭蕉菴の春をことぶきたまふならむ。

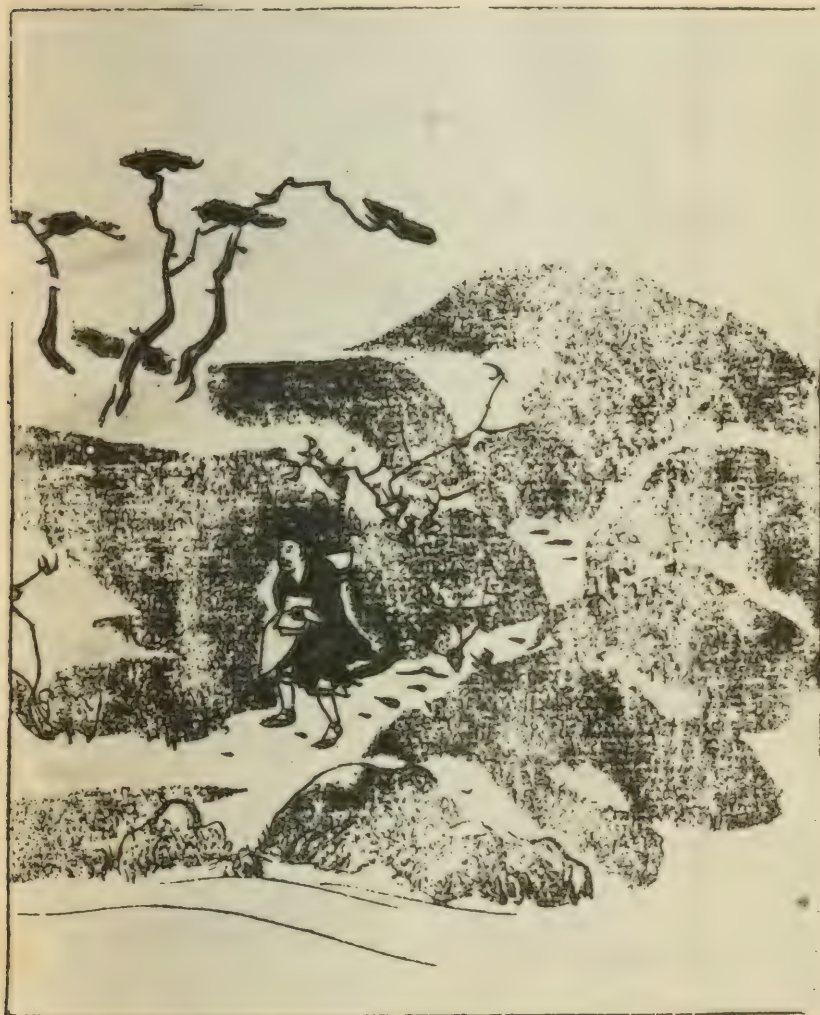
　幾霜に心ばせをの松かざり

江戸を出て海道を上り給ひけるに、富士河の邊り

にて三つばかりの捨子の泣くあり。この河のはや瀬にかけて、うき世の波をしのぐにたへず、露ばかりの命まつ間と捨おきけむ小萩がもとのあきの風、こよひや散らん、明日やしほれむと、袂よりくふべきものなげて通るに、

猿をきく人捨子に秋の風いかに

いかにぞや、汝父ににくまれたるか、母にうとまれたるか、父は汝をにくむにあらじ、はゝはなむぢをうとむにあらじ。たゞ是天にして、汝が性のつたなきをなけ。

（富士川の圖）

芳野の奥に入給ふに、西上人の草の庵のあとは、奥の院より二町ばかり分入るほど、柴人のかよふ道のみわづかにみへて、さかしき谷をへだてたるいとたうとし。かのとく〲の清水はむかしにかはらずと見へて、とくとくと雫落ちけり。

露とく〲こゝろみに
　憂世すゝがばや

伊勢にまうで給ひて西行谷のふもとのながれに、里の女のものあらふを見て、

　芋洗ふ女西行ならば歌
　よまむ

（西行谷の圖）

長月のはじめ古郷に歸り給ひけるに、北堂の萱草も霜がれはてゝ、今は跡だになし。何事も昔にかはりてはらからの鬢白く眉しはより、たゞ命ありてとのみ言つゝ、兄の守ぶくろよりとう出て、母の白髪おがめよ、浦島が子の玉手箱、汝が眉もやゝ老たりとうち泣て、

　手にとらば消ん涙ぞあ
　　つき秋の霜

貞享二丑のとし、伊賀の山家に年こへ給ひて、

　誰聟ぞ齒朶に餅おふう
　　しの年

奈良の二月堂に參籠し給ふ。

水とりやこもりの僧の
　沓の音

（二月堂參籠の圖）

大津の尚白が家にて湖水眺望に、

　唐崎の松は花よりおぼ
　ろにて

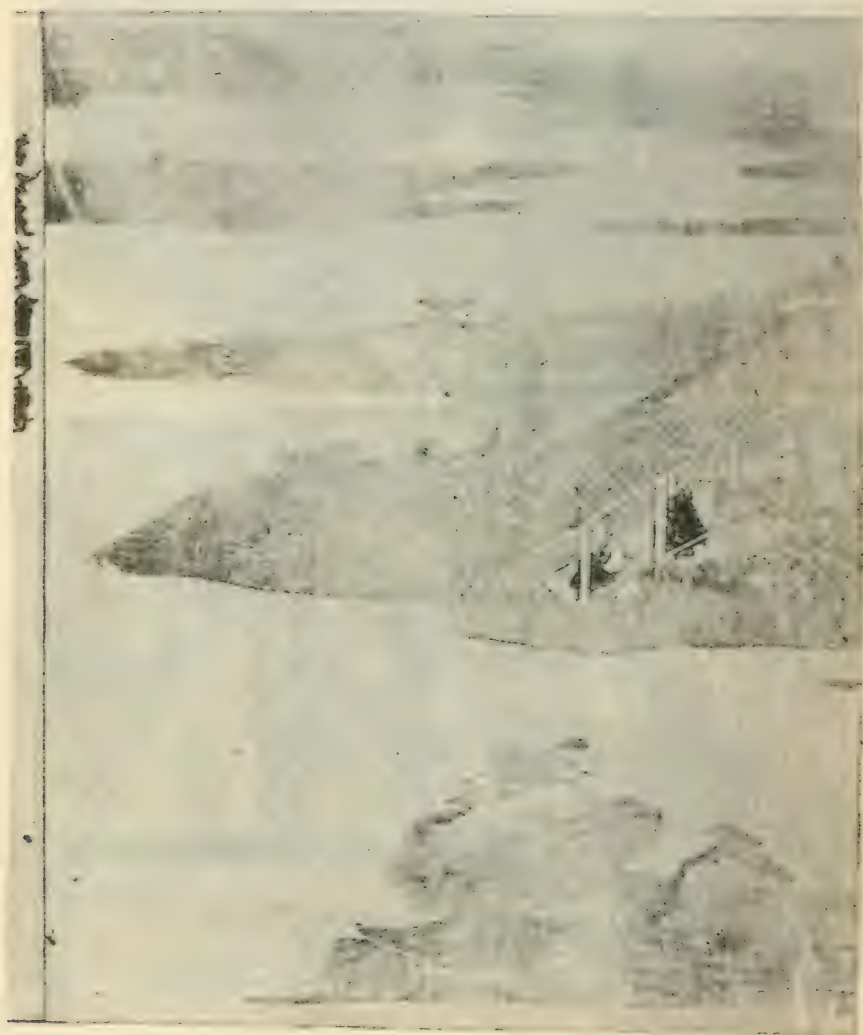
卯月のすゑ江戸に歸り給ひて、

　夏ごろもいまだ虱をと
　りつくさず

秋も半の夜、ことにはれわたりしにや、

　名月や池をめぐりて夜
　もすがら

貞享三寅のとし、草菴の春の夜に、

　古池や蛙とびこむ水の
　音

雪のいとおもしろう降けろ夕べ、おなじ心なる人のあつまりて遊びけるに、もとよりまづしき菴なれば、人〴〵薪買に行くあれば、酒かひに行くもあり。

米かひにゆきのふくろや投頭巾

（草庵の圖）

貞享四卯の年春も彌生の空長閑に、うち霞みたる夕暮ならし。

花の雲鐘は上野か淺草か

鹿島あたりの月見むとて行給ふに、雨しきりにふりて月見るべくもあらず。根本寺の前の和尚おはす

る寺を尋ね入てふしぬ。すこぶる人をして深省を發せしむと吟じけむやうに、しばらく清淨の心を得るに似たり。

　寺に寐てまこと顔なる
　月見かな

愚按。この道の記かしま記行あり。この和尚は佛頂禪師とて江戸臨川寺に住持し給ひて、蕉翁常に參禪し給ひけるとぞ。されば其角が書きし終焉記にも、佛頂和尙に嗣法して開禪の法師といはると云々。又三國相承宗分統譜に、臨川佛頂芭蕉翁桃青と法脈をひけり。

神無月のはじめ空さだめなきけしき、身は風雲の

行脚あまたゝびしてことあり
て。

旅人と我名よばれむ初
しぐれ

参河尾張のかたに日ごろ
あそび給ひて、桑名より
くはで來ぬればといふ日
永の里より、馬かりて杖
突坂をのぼるほど、荷鞍
うちかへりて馬より落ち
ぬ。哀なる旅人や、ひと
りたびさへあるをと馬士
にしかられながら、

歩行ならば杖突坂を落
馬かな

（落馬の圖）

伊賀に歸りつき給ひて、

古郷や臍の緒になくと
しの暮

（原本上卷終）

貞享五辰のとし伊賀に春をむかへ給ふ。

春立てまだ九日の野山かな

阿波の庄の新大佛にまうでんとて、意專惣七の人々を伴ひ行給ふに、そも此所は南都東大寺のひじり俊乘上人の舊跡なり。仁王門鐘樓のあとは枯たる草の底にかくれて、松ものいはゞこととはむ礎ばかり菫のみして、といゝけむもかゝるけしきにたらむ。猶わけ入て蓮華座獅子の座などいまだ苔の跡をのこせり。御佛

はうづもれながら、わづかに御ぐしのみ現然と拜まれさせ給ふに、上人の御影はいまだまつたくおはしまし侍るぞ、其世の名殘疑ふ所なく、誠にこゝらの人のちからを費したる上人の御願、いたづらになり侍る事の悲しく、涙も落そひて物語もなし。むなしき石臺にぬかづきて、

丈六にかげろふ高し石のうへ

（新大佛の圖）

探丸子別墅の花見もよほし給ひけるにまかりたま

ひて、

さま〴〵の事おもひ出す櫻かな

愚按。良長成人の後別號を探丸といふ。蕉翁が宗房たりし時の忠節をおぼし出てはじめて對面ありし時とぞ。この句に探丸の脇の句あり。春の日はやく筆にくれゆく云云。翁の執筆にて一座あり。その筆の跡今に傳はれりとぞ。

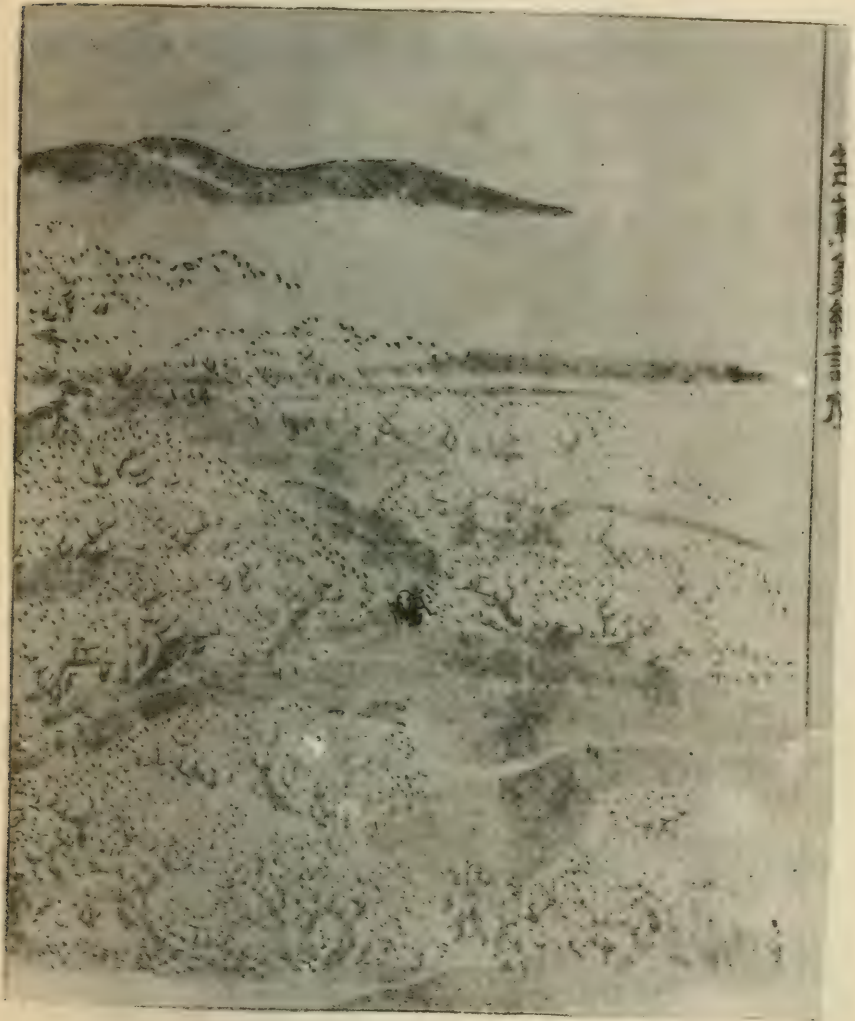
參河の杜國をめし具し給ひ、初瀨龍門にかゝり、吉野の花に三日とゞまりて、曙たそがれのけしき、有明の月の哀なるさまな

ど、心にせまり胸にみちて、あるは西行の枝折にまよひ、貞室のこれは〱とうちなぐりたるに、我いはむこと葉もなくて、いたづらに口をとぢたる、いと口をしとぞかい給ふ。

（よしの山の圖）

それより須磨に遊び給ふに、空もおぼろに殘れるはかなさ、みじか夜の月もいとゞ艶なるを、

月見てもものたらはずやすまの夏

東須磨西須磨濱すまと三所にわかれてあながちに何わざするとも見へず。

もしほたれつゝなど歌にも聞へ侍るも、今はかゝるわざするなども見へず。きすごといふ魚を眞砂の上にほしちらしけるを、鳥のつかみさるをにくみ弓をもておどす。海士のわざとも見へず。もし古戰場の名殘をとゞめて、かゝる事をなすにや、といと罪ふかし。

須磨の蜑の矢先に啼や
ほとゝぎす

（須磨の圖）

この境はひわたるほどといへるもこゝの事にや、

かたつぶり角ふりわけ

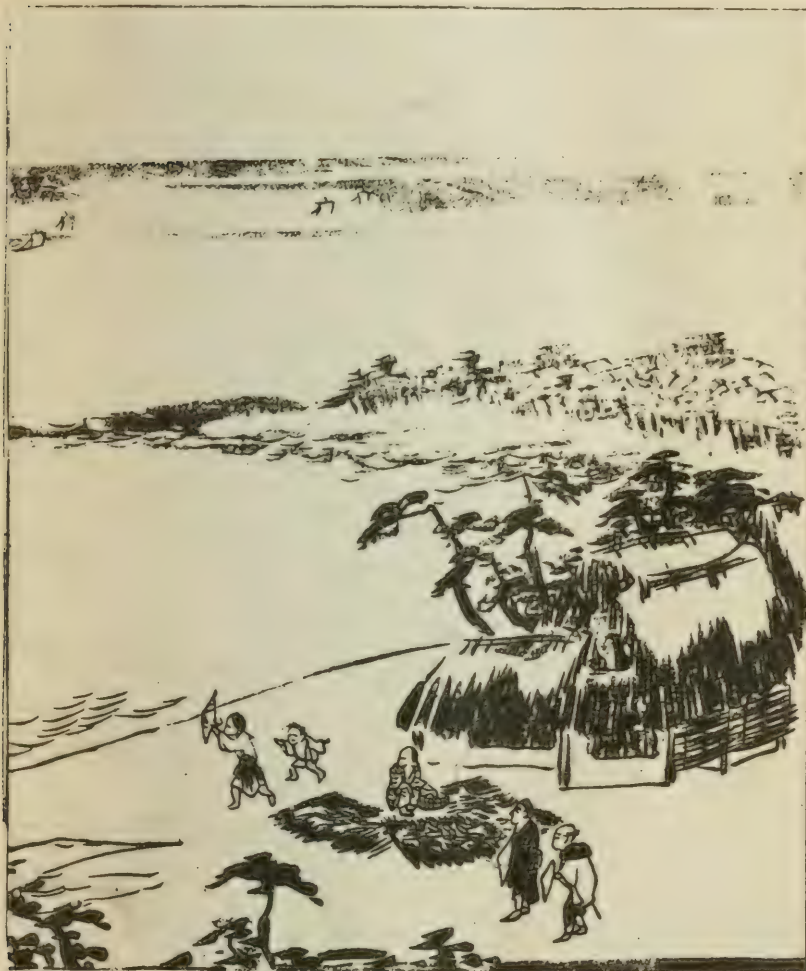
よ須磨明石

愚按。去年よりことしの夏までの道の記あり。卯辰記行とも笈の小文ともいふ。

美濃の國長良川の邊にさすらへありき、鵜遣ふさまを見給ひて、

おもしろうてやがて悲しき鵜船かな

（鵜飼の圖）

更科の里おばすて山の月見むと、頻に秋風の心に吹さはぎて、風雲の情をくるはすとて行給ふに、姨捨山は八幡といふ里より南にあり。西南に横をれて冷じく高くもあらず、

かど／＼しき岩なども見へず、たゞあはれふかき山のすがたなり。なぐさめかねしといひけむも、ことわりにしられてそゞろに悲しきに、何ゆゑにか老たる人をすてたらむとおもふに、いとゞ涙も落そひければ、

面影や姨ひとり泣月の友

（姨捨山の圖）

元祿二巳のとし江戸の春にあひ給ひて、こぞの更科の秋やおぼし出けむ。

元日に田ごとの日こそこひしけれ

立こむる霞のそらに白川の關こへむと、そゞろ神の物につき侍りて心をくるはせば、とるものも手につかず、もゝひきのやぶれをつゞり、笠の緒つけかへて、松島の月まづ心にかゝる。曾良は常に軒をならべて薪水の勞をたすく。こたび松島象潟の眺ともにせむ事を悦び、且は羈旅の難をいたはらむといふに、めしつれたまふと也。

下野の那須野を行給ふに野飼の馬あり。草刈おのこになげきよれば、野夫

といへどもさすがに情しらぬにはあらで、此野は縦横にわかれて、うひうひしき旅人の道ふみたがへむ、あやしう侍れば、此馬のとゞまる所にて馬をかへし給へとかし侍りぬ。ちいさきものふたり馬の跡したひてはしる。ひとりは小姫にて名をかさねといふ。聞なれぬ名のやさしとは書きたまふる。

（那須野の圖）

心もとなき日數かさなるまゝに、白川の關にかゝりて旅心さだまりぬとか、

いかで都へと便もとめしもことわりなり。中にもこの關は三關の一つにして、風騷の人こゝろをとゞむ。秋風を耳に殘し、紅葉を面影にして、青葉の梢なほあはれなり。卯の花の白妙に、茨の花のさきそひて、雪にもこゆるこゝちぞする。古人冠を正し衣裳を改めし事など、清輔が筆にもとゞめし。この關いかにこえつるやと人の問ふに、

風流のはじめやおくの田植うた

（白河關の圖）

しのぶもぢ摺の石を尋ねて忍ぶの里をわけ入給ふに、山陰に石なかば土に埋れてあり。里の童べのおしへけるは、むかしは此山の上にはべりしを、往來の人の麥草をあらして、この石を試みはべるをにくみて、此谷に落せば、石の面下ざまにふしたりと云。

早苗とる手もとやむかししのぶ摺

武隈の松にこそ目覺る心地はすれ。根は土際より二木に分れて、昔の姿うしなはずとしらる。まづ

能因法師おもひいづ・往昔むつの守にて下りし人、この木を伐て名取川の橋杭にせられたる事あればにや、松は此たび跡もなしと詠たり。代々あるは伐り、あるは植つぎなどせしと聞くに、今時千載のかたちとゝのひて、めでたき松のけしきになむと稱し給ふ。

つぼの石ぶみは、高六尺餘横三尺ばかりか、苔を穿て文字幽なり。昔よりよみ置る歌枕多く語りつたふといへども、山崩れ川落て道あらたまり、石

は埋もれて土にかくれ、木は老て若木にかはれば、その跡たしかならぬ事のみを、こゝに至りてうたがひなき千歳のかたみ、今眼前に古人のこゝろを閲す。行脚の一徳存命のよろこび、羇旅の勞を忘れて涙も落るばかりなりとは書給ひける。

（壺の碑の圖）

松島にわたり雄島の磯につきたまひて其景を靑つらね給ふに、松島は扶桑第一の好風にして、凡洞・庭西湖に恥ぢず、東南より海を入て、江の中三里

浙江の潮をたゝふ。しま〳〵の數を盡して、欹つものは天をさし、ふすものは波にはらばふ。左にわかれ右につらなる。負へるあり抱けるあり。兒孫を愛するがごとし。松の緑こまやかに枝葉しほ風に吹たはめて、屈曲おのづからためたるが如し。そのけしき窅然として美人の顔を粧ふ。ちはやふる神のむかし大山ずみのなせるわざにや。造化の天工いづれの人か筆をふるひ言葉を盡さむ。

（松島の圖）

出羽の國月山に登り給ふとて、木綿しめ身に引かけ、寶冠に頭をつゝみ、强力といふものに道びかれて、雲霧山氣の中に氷雪を踏て登る事八里とかや。

雲の峰いくつ崩れて月の山

象潟ちかくしほ風眞砂を吹あげ、雨朦朧として鳥海の山かくる。雨も又奇也と雨後の晴色たのもしく、蜑の苫屋に膝をいれ、雨の晴間を待給ふに、その朝天よく霽けるほどに、

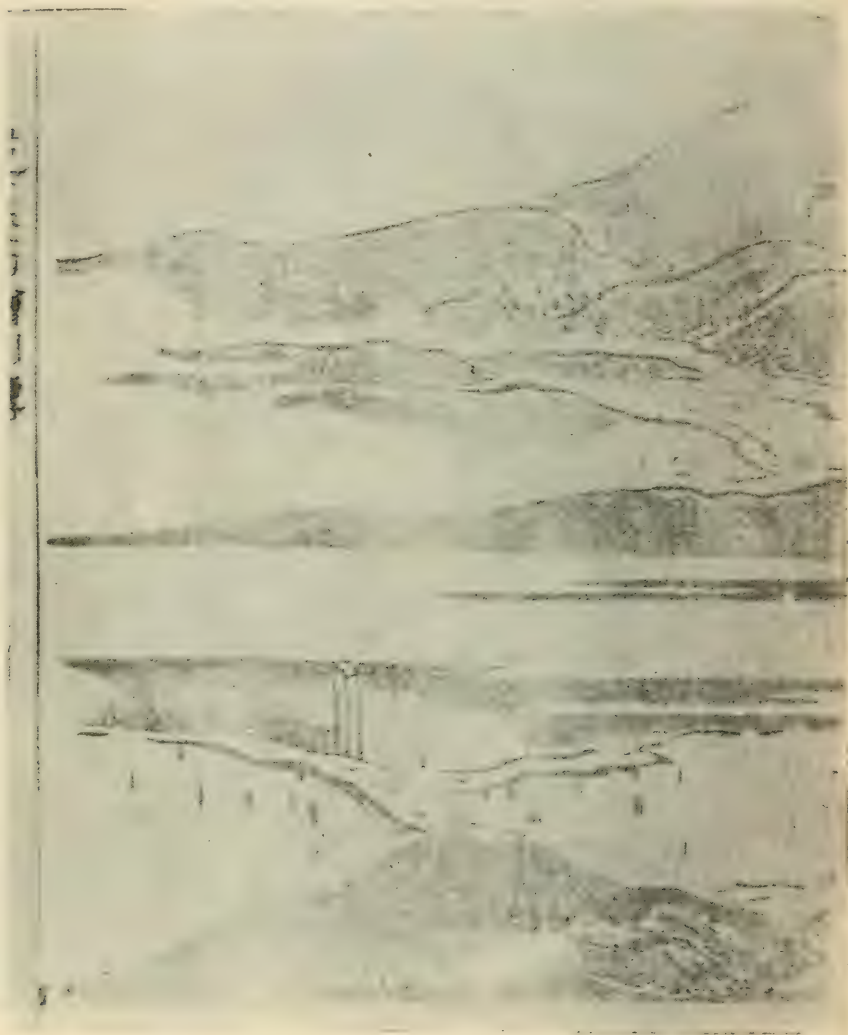
（月山の圖）

象潟に船をうかぶ。まづ能因島に船をよせて三とせ幽居の跡をとぶらひ、むかふの岸にふねを上れば、花の上こぐとよまれし櫻の老木、西行法師のかたみをのこす。南に鳥海山天をさゝえ、その蔭うつりて江にあり。西はむや／＼の關路をかぎり、東に堤を築て秋田に通ふみち遙に、海北にかまへて浪うち入る所を汐ごしといふ。江の縦横一里ばかり、面かげ松島にかよひてまた異なり。松島は笑ふがごとく、象潟はうらむがごとし。さびしさに悲しみをくはへて、地勢

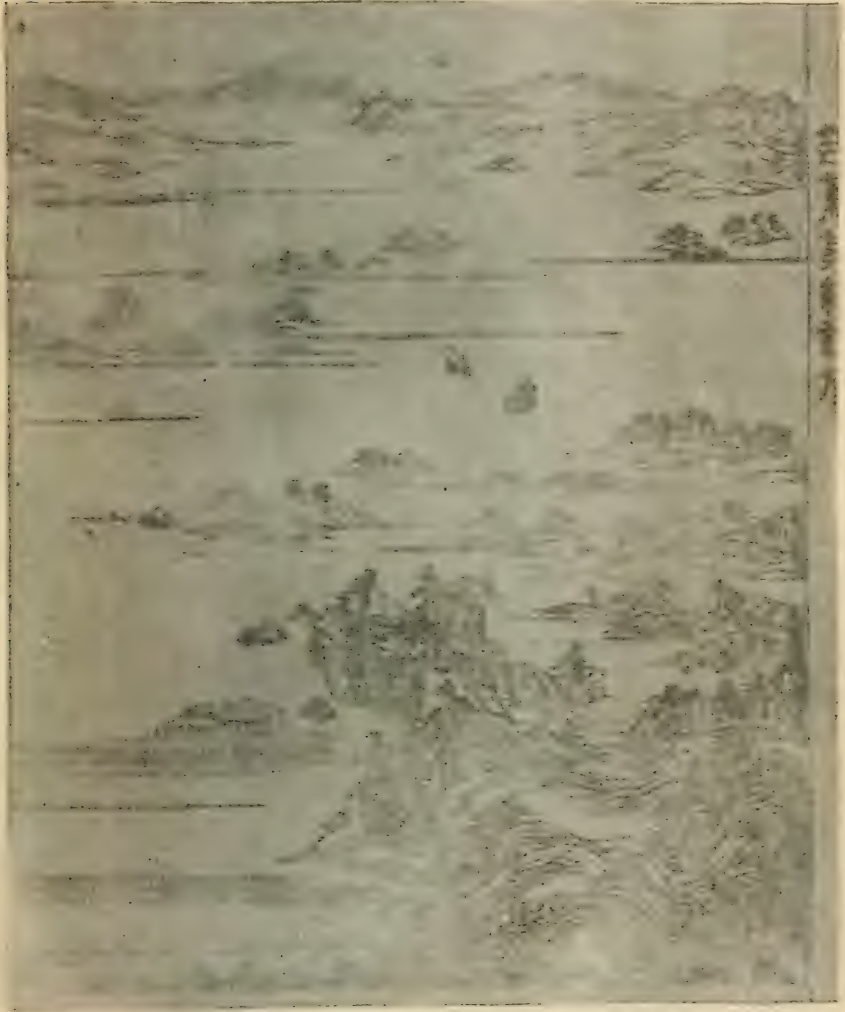
魂をなやますに似たり。

象潟の雨や西施がねぶ
のはな

（象潟の圖）

北陸道を歴て上りたまひ、越後の國出雲崎にてみわたしたまふに、佐渡が島は海の面十八里、東西三十五里に横をりふしたり。むべ此島は黄金多く出て、あまねく世の寶となれば、かぎりなきめでたき島にて侍るを、大罪朝敵のたぐひ遠流せらるゝによりて、たゞおそろしき名の聞へあるもほゐなく、窓おしひらきて暫時の旅愁をいたはらんとするに、日既に海に沈て月ほのく

らく、銀河牛天にかゝりて星きら〳〵と冴たるに沖の方より波の音しばしばはこびて、魂けづるがごとく、腸ちぎれてそゞろに悲し。

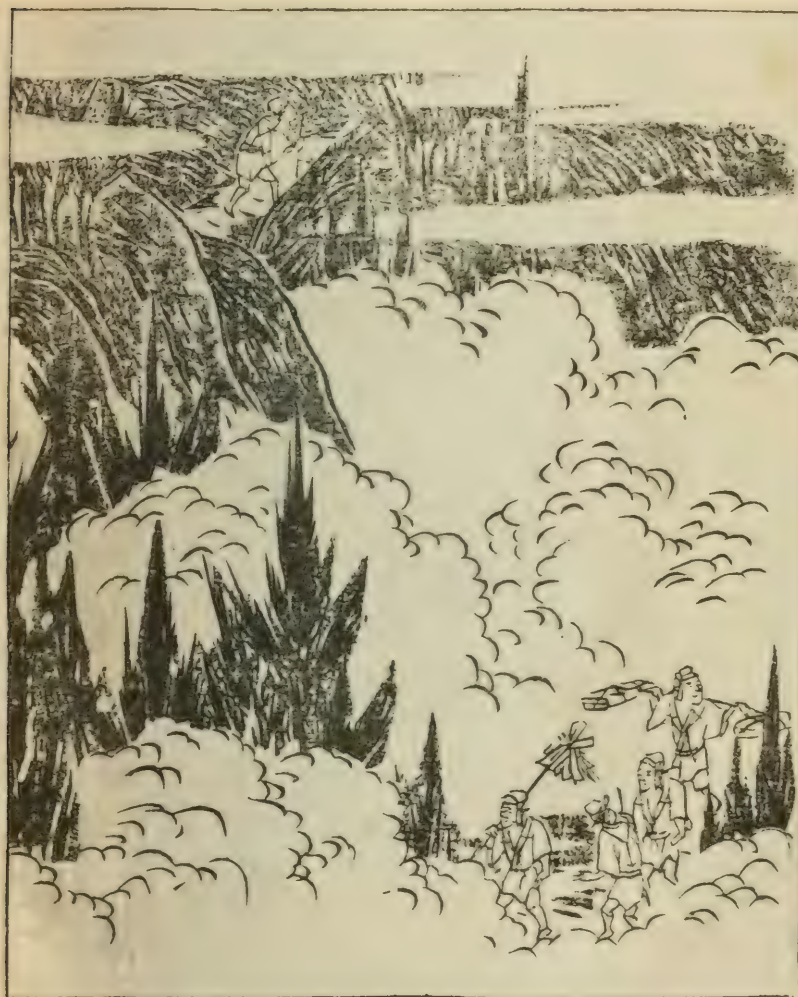
あら海や佐渡に横たふ
　天の河

一ふりの關にとまり給ふ夜は、今日なむ親しらず子しらずといふ北國一の難所をこへて疲はべれば、枕引よせ寐たるに、宿の一間へだてゝ若き女の聲二人ばかりと聞ゆ。年老たるおのこのこゑも交て物語するを聞けば、越後の國新潟といふ所の遊女なりし。伊勢參宮すると

て、此關まで男の送て、翌日古郷にかへす文をしたゝめ、はかなき言傳などしやる也。白波のよする汀に身をはふらかし、あまの此世をあさましう下りて、定なきちぎり日〱の業因いかにつたなしと、ものいふを聞き聞き寐入て、朝たび立に我〱に出むかひて、行衞しらぬ旅路のうさ、あまり覺束なう悲しくはべれば、見へがくれにも御跡を慕ひ侍ん。衣の上の御なさけに大慈のめぐみをたれて、結縁せさせ給へと涙を落す。不便の事には侍れども我〱は所〱に

てとゞまる方多し。たゞ人の行にまかせて行べし。神明の加護かならず恙なかるべしと云捨て出づ。哀さしばらくやまざりけらし。

一家に遊女も寐たり萩と月

（一ふりの宿の圖）

加賀の太田の神社にて實盛が兜、錦のきれを見給ふ。往昔義朝より賜はらせ給ふとかや。げにも平士の物にあらず。目庇より吹返しまで菊から草のほりもの金をちりばめ、龍頭に鍬形うちたり。實盛討死のゝち、木曾義仲願狀にそへて此社にこめ

られ侍るよし。樋口次郎が使せし事ども緣起に見へたり。

むざむやな甲の下のきりぐ〱す

（太田神社の圖）

金聖寺といふ寺にとまりて、朝堂下に下り給ふに、若き僧ども紙硯をかゝへ、階のもとまで追きたる。折ふし庭中の柳散れば、

庭掃て出るや寺に散やなぎ

愚按。春より秋までの道の記、おくの細道といふ。

伊勢に尾張に近江をへて、伊賀に年こへ給ふ。

（原本中册終）

元祿三午の年、都ちかき伊賀にとしをとり給て、

薦をきて誰人います花の春

神路山にまうで給ひては西行の涙をしたひ、増賀の信を悲しむとありて、

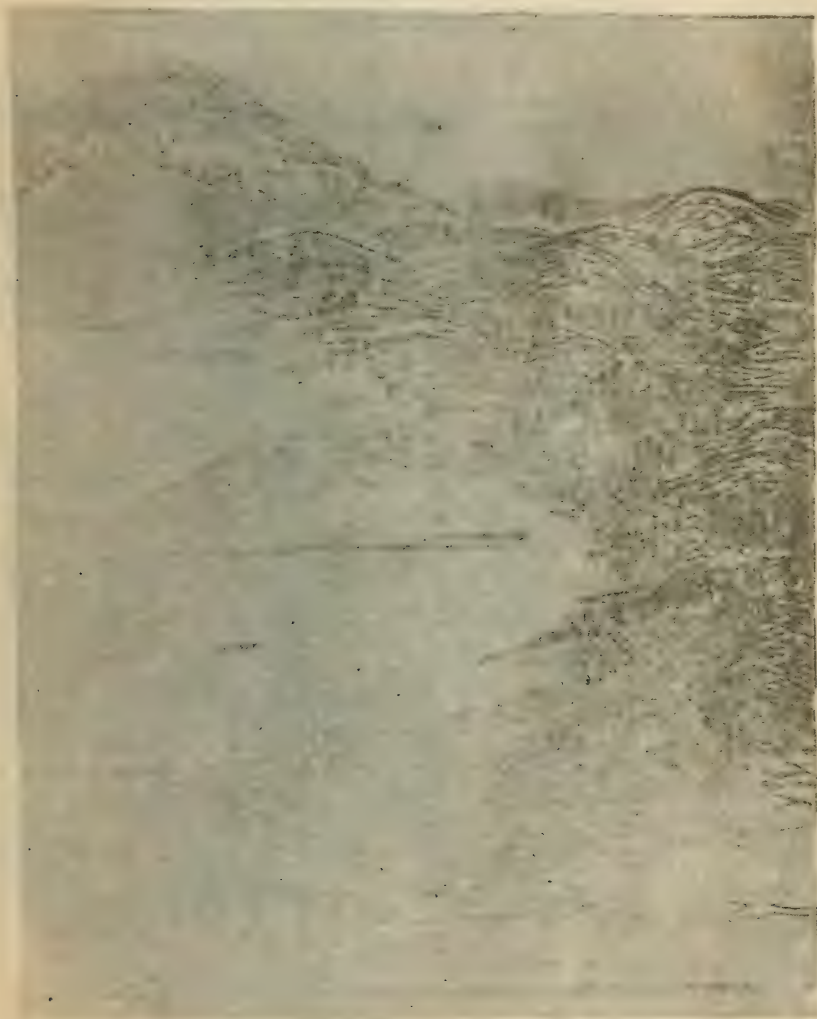
何の木の花ともしらずにほひかな

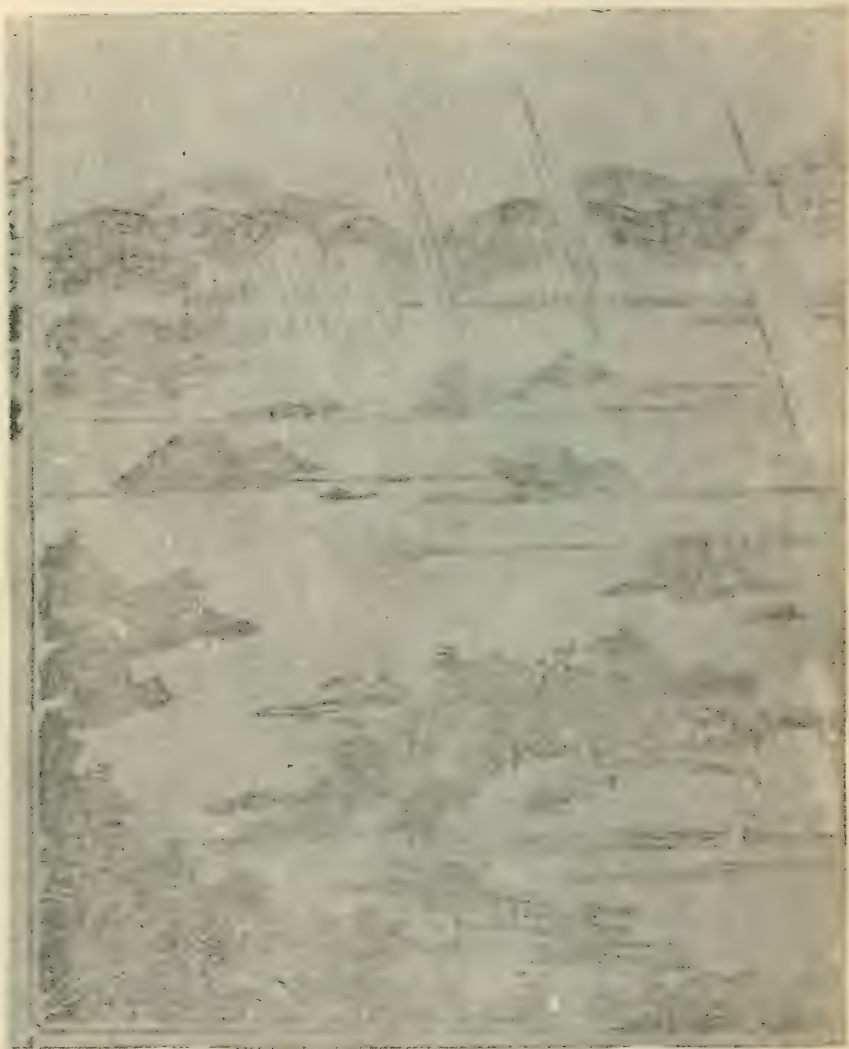
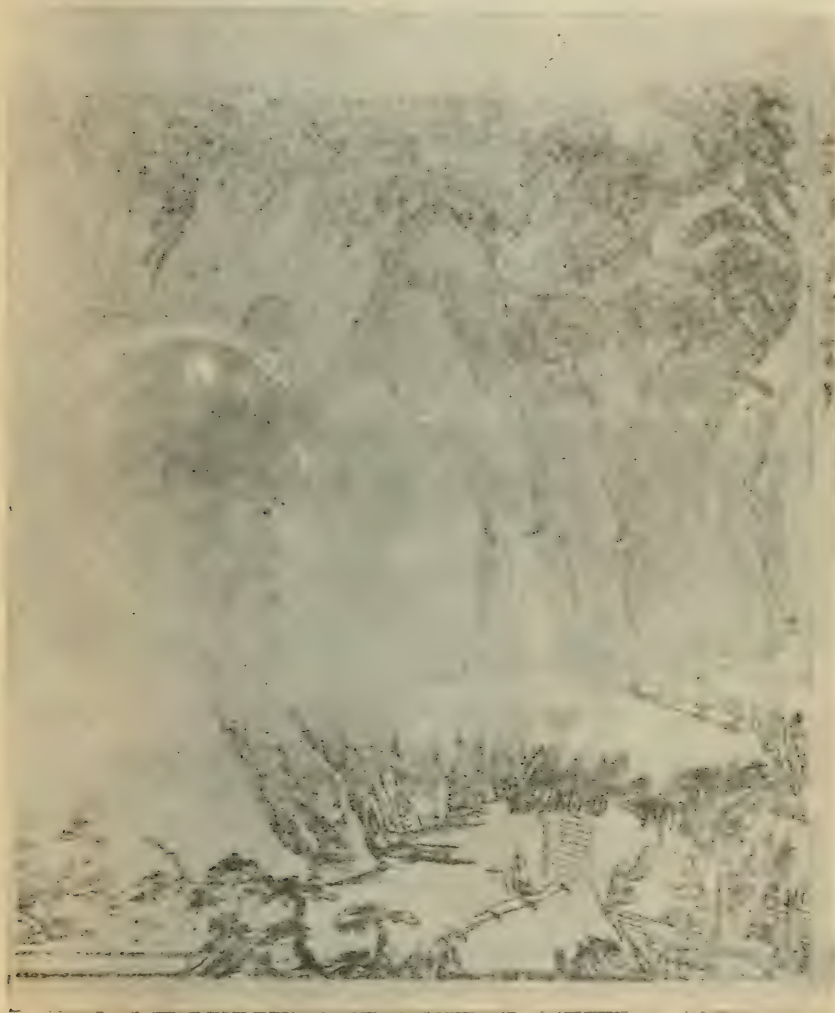
裸にはまだ衣更着のあらしかな

二見のうらにて、

うたがふなうしほの花もうらの春

（二見浦の圖）

ことしの一夏は國分山に籠り、山を下らで、里の

童に谷川の石をひろはせて、一石に一字づゝの法華經をうつし給ふことあり。その記に、

石山の奥岩間のうしろに山あり、國分山と云。そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし。ふもとに細きながれをわたりて、翠微に登る事三曲二百歩にして、八幡宮たゝせ給ふ。神躰は彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚忌(いむ)なる事を、兩部光をやはらげ、利益の塵を同じうしたまふもまた尊し。日頃は人の詣ざりければ、いと神

さび物しづかなるかたはらに、住すてし草の戸あり。よもぎ根ざゝ軒をかこみ、屋根もり壁おちて狐狸ふしどを得たり。幻住庵と云。あるじの僧何がしは勇士菅沼氏曲水子の伯父になんはべりしを、いまは八年ばかりむかしになりて正に幻住老人の名をのみのこせり。予また市中をさる事十年ばかりにして、五十年やゝちかき身は、蓑虫のみのをうしなひ、蝸牛家を離て、奥羽象潟の暑き日におもてをこがし、高す

なこあゆみくろしき北海のあら磯にきびすを破りて、今年湖水の波に漂ふ。にほの浮巣の流とゞまるべき蘆の一もとのかげたのもしく、軒端茨(ふき)あらため、墻根結そへなどして、卯月のはじめいとかりそめに入りしやまの、やがて出じとさへおもひそみぬ。

先たのむ椎の木もあり夏こだち

因按、幻住庵記は猿蓑集にあり。國分山の菴の跡には、蕉翁八十年に當り給ふとき、そのれしるしの石を建つ。

芭蕉翁[illegible]

また石經を埋給ふ上には、勢田の住人雨橋扇律ら經塚の二字の石を立ぬ。

（幻住庵の圖）

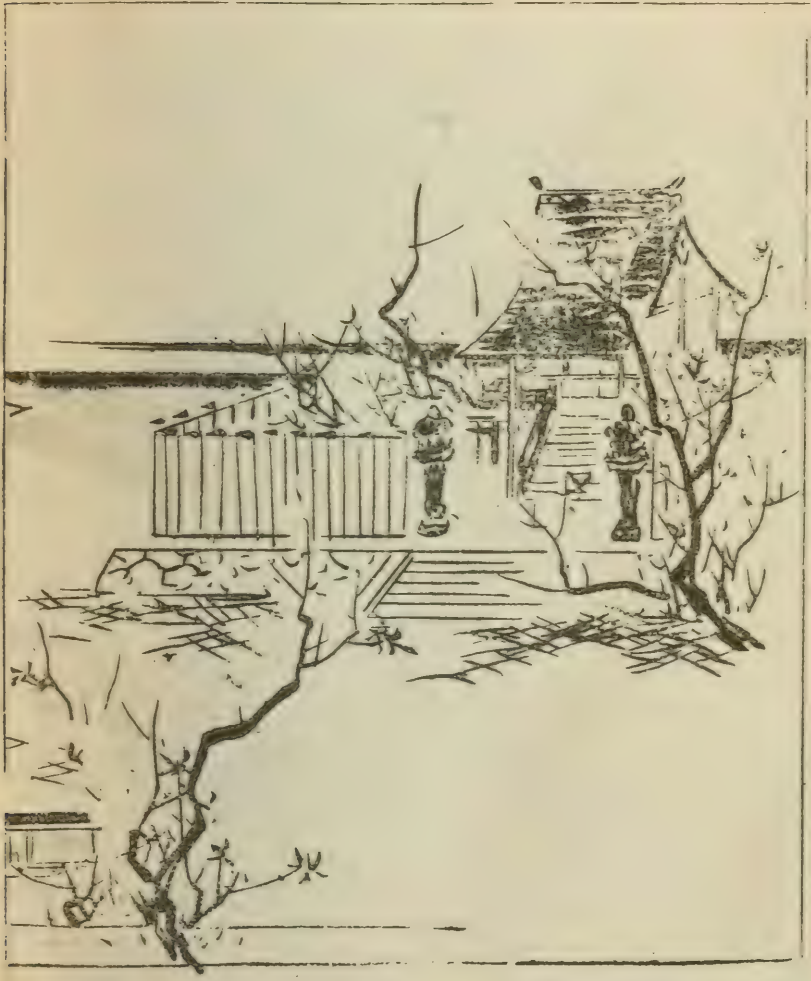
雪のあした湖水をながめ給ひて、

比良三上雪かけわたせ鷺の橋

元祿四未のとし、粟津の無名庵に春をむかへ給ふとき、

大津繪の筆のはじめは何佛

湖水を望て春を惜しみ給ふに、

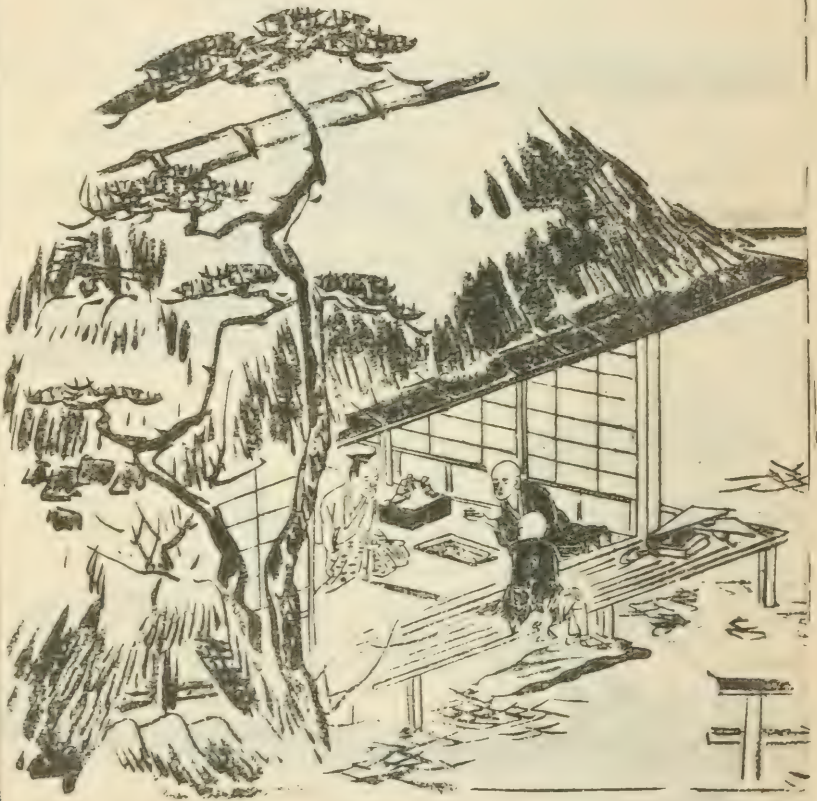
行春をあふみの人とお

しみける

嵯峨なる去來が別業落柿舍に日頃掛錫し給ふに、作りみがゝれし昔のさまより、いまの哀なるさまこそこゝろとゞまれ、彫(ほり)せし梁、畫ける壁も、風にやぶれ、雨にぬれ、奇石怪松も葎の下にかくれたる、竹縁の前に柚の木一本花かうばしければ、

柚のはなに昔をしのぶ料理の間

さみだれや色紙へぎたる壁のあと

（落柿舍の圖）

小督の局の舊跡にては、

明若村の[illegible]、[illegible]女[illegible]の花のむかしおもひやらるとて、

うきふしや竹の子となる人の果

愚按。嵯峨日記にあり。

四條河原の納涼を見て書つらね給ひけるは、夕月夜のころより有明すぐるまで川中に床をならべて、よすがら酒のみものくらひ遊ぶ。女は帶のむすびめいかめしく、男は羽をり長う着なして、法師老人ともにまじはり、桶屋かぢやの弟子こまでいとま得がほにのゝしる。さ

すがに都のけしきなるべし。

河風やうすがききたる
夕涼

（納涼の圖）

月見むとて船を堅田の浦にうかめ給ふに、待ほどもなく月さし出て、湖上花やかに照わたれり。かねてきゝぬ、仲秋望の月は、月の浮御堂にさしむかふを鏡山といふなるよし。こよひなほそのあたり遠からじと、かの堂上の欄干によるに、水面に玉蟾の影をくだきて、あらたに千躰佛の光りを添

ふ。

　鎖明て月さし入よ浮御
　　　　堂

（浮御堂の圖）

三秋を歴て江戸に歸り、
住庵におちゐ給ふに、舊
友門人いかにとゝへば、
　ともかくもならでや雪
　の枯尾花
元祿五申年江戸に春をむ
かへ給ひて、
　年〳〵や猿にきせたる
　猿の面
　數へ來ぬやしき〳〵の
　梅柳
ふるき菴ちかく、あらた
に菴を作りて人〴〵のま

いらせけるに、茅屋つき〴〵しう、杉の柱、竹の枝折戸、南にむかふ。地は富士に對して、柴門景をすゝめてなゝめに、浙江の潮、三股の淀にたゝえて、月を見るたよりよろし。名月のよそほひにとてまづ芭蕉をうつす。その葉廣うして琴を覆ふに足れり。或は半吹折れて鳳鳥の尾をいため、青扇破れて風を悲しむ。たま〳〵花さくも花やかならず、莖ふとけれども斧にあたらず。かの山中不材の類木にたぐへて、その性よ

芭蕉翁繪詞傳

しと也。

深川大橋の造作のころ、

初雪や懸かゝりたる橋のうへ

元祿六酉のとし、江戸におはしてかくれ家の春のこゝろを、

人も見ぬ春やかゞみのうらの梅

みちのく岩城の露沾のきみが館の花見にまねかれたまひて、當坐、

西行の菴もあらむ花の庭

深川のすへにて船に月見たまふ折ふし、

川上とこの川下や月の

友

元祿七戌のとし、春たちそむるより古郷のかたゆかしとやおぼしけむ、

蓬萊に聞ばや伊勢の初だより

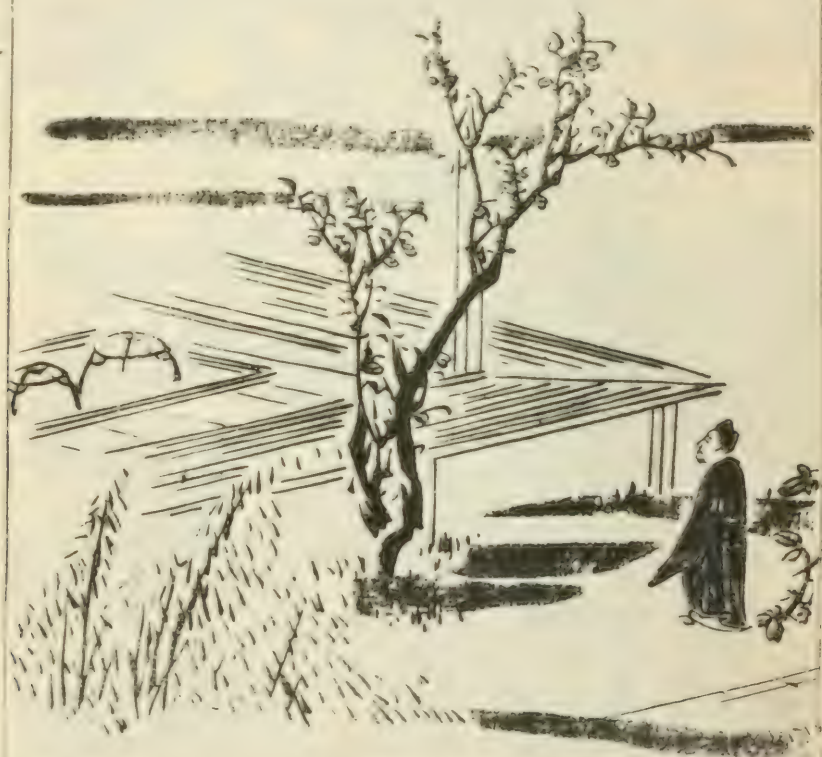
上野の花見にまかり給ふに、幕うちさわぎ、ものゝ音さまぐ＼なるかたはらの松かげをたのみて、

四つ五器のそゐはぬ花見ごゝろかな

尾張にて舊交の人に對して、

世を旅に代かく小田の行もどり

伊賀の雪芝が許におはせ

芭蕉翁繪詞傳

しとき、庭に松うへさせけるを、

涼しさやすぐに野松の枝のなり

（松を植ゑるの圖）

嵯峨の小倉山なる常寂寺にまうで給ひて、

松杉をほめてや風のかほる音

おなじく大堰河のほとりせうようし給ひて、

六月や峯に雲おくあらし山

（嵐山の圖）

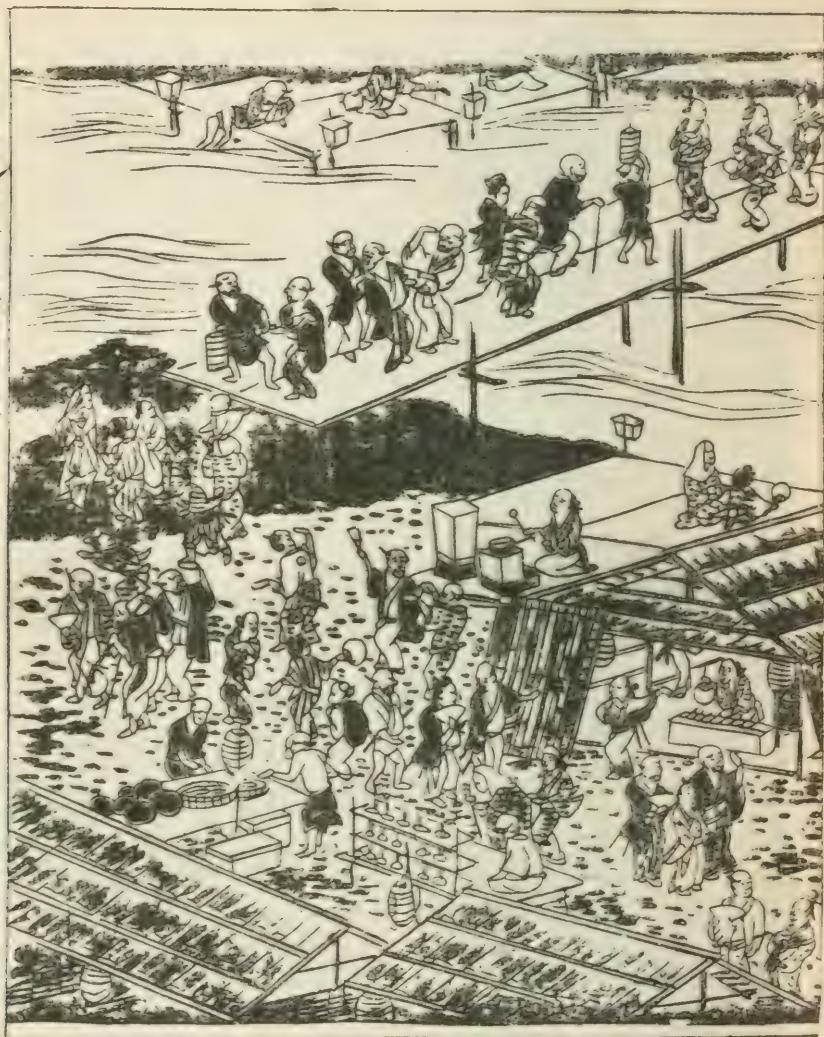
舊里に歸り盆會いとなみ給ひし時、

家はみな杖に白髪の墓

まいり

月の夜ころ同し國におはして、

こよひたれ吉野の月も
十六里

九月八日支考惟然をめしつれて難波のかたへ旅立給ふ。こは奈良の舊都の九日を見むとなり。はらからも遠く送り出て、たがひにおとろへゆく身の、この別の一しほちからなく思ゆるとて、供せし支考惟然に介抱よくしてなどいゝて、うしろ影みゆるかぎり立ておはしけるとぞ。其夜は猿澤のあた

りにやどりたまふに、月くまなく、鹿も聲みだれてあはれなれば、

ひいとなくしりごへ悲し夜のしか

（奈良の圖）

明れば重陽なり。

菊の香や奈良には古き佛たち

十三夜の月かけて住よしの市にまふで給ひて、

升買て分別かはる月見かな

古郷を出たまひて後は、なやみがちにわづらひたまふに、あるときひとりごち給ふは、

此秋は何で年よる雲に
鳥

三十日の夜より、泄痢といふ病にいとつよくなやみたまひて、物のたまふも力なく、手足こほれるごとくなり給ふと聞より、京よりは去來太刀もとりあへず馳くだり、大津よりは木節藥嚢を肘にかけてかちより來つき、丈草をはじめ正秀乙州が輩まで聞にしたがひて難波に下り、病の床にいたはりつかへ奉る。もとより心神のわづらひなければ、不浄をはゞかりて、人を

ちかくも招ぎたまはず。十月五日の朝より、南の御堂の前靜なる所にうつしまいらす。最後、此家花屋仁右衛門といふが別屋にて、今にあり。八日の夜ふけて、かたはらに居ける呑舟と云おのこをめして、硯に墨する音のしけるを、いかならむと人々いぶかりおもふに、

旅に病で夢は枯野をかけめぐる

また枯野をめぐる夢心、ともせばやとなむ。是さへ此世の妄執ながら、風雅の道に死せむ身の、道をせつに思ふなり。生死

の一大事を前に置ながらこの道を心にこめ、いねても朝雨暮烟の間にかけり、さめても山水野鳥の聲におどろく。これを佛の妄念といましめたまへるも、今ぞ身におぼへ侍る。此のちはたゞ生前の誹諧をわすれ侍らむとのみ思ふよと、かへす〴〵もくやみ給とかや。

（病床の圖）

九月十日ことにくるしげなるに、十日の暮よりその身ほとをりて常にあらず。いよ〳〵たのみすくなく、人〴〵心ならず思

ふ。夜に入て去來をめしてさゝ物がたりあり。みづから一通のふみしたゝめ給ふ。兄の許へおくらる成べし。そのころ其角は人とともなひて紀の路まで上りし道、さるべき契ありてや、此地にかくなやみおはすと聞て、胸さわぎ、とく尋まいりて病床をうかゞひ、ちからなき聲をきゝて、こと葉をかはせりとぞ。十一日夜木節をめしてのたまひけるは、わが往生も明暮にせまりぬとぞおぼゆる。もとより水宿雲棲の身の、

この藥かのくすりとて、はかなくもとむべからず。願くは老人の藥をもて唇をぬらしさぶはらむと、ふかくたのみおき給ひてのちは、左右の人をしりぞけて不淨の身を浴し、香を焚て安臥し、ものいひたまはず。十二日申の刻ばかりにねぶれるを期として、死顔うるはしく笑を含みたまふ。行年五十一歲なり。そのからに物うちかけ、長櫃に納て、その夜ひそかに商人の用意にこしらへ、川船にかきのせて、去來其角丈草

より壽貞が子の次郎兵衛まで十餘人、なきがらを守り奉り、夜すがら笘もる露霜のしづくに袖寒く、ひとり／＼聲立てぬ念佛もうして、としごろ日ごろのたのもしき詞むつまじき教をしのびあふ。つねに東西にまねかれて、越のしら山のしらぬはてにてかくもあらば、聞て悲しむばかりならむに、一夜もなきがらにもそひ奉る事、たがひの本意なれと、あるはよろこび、あるはなげきて、十三日の朝伏見につく。

（淀川泝航の圖）

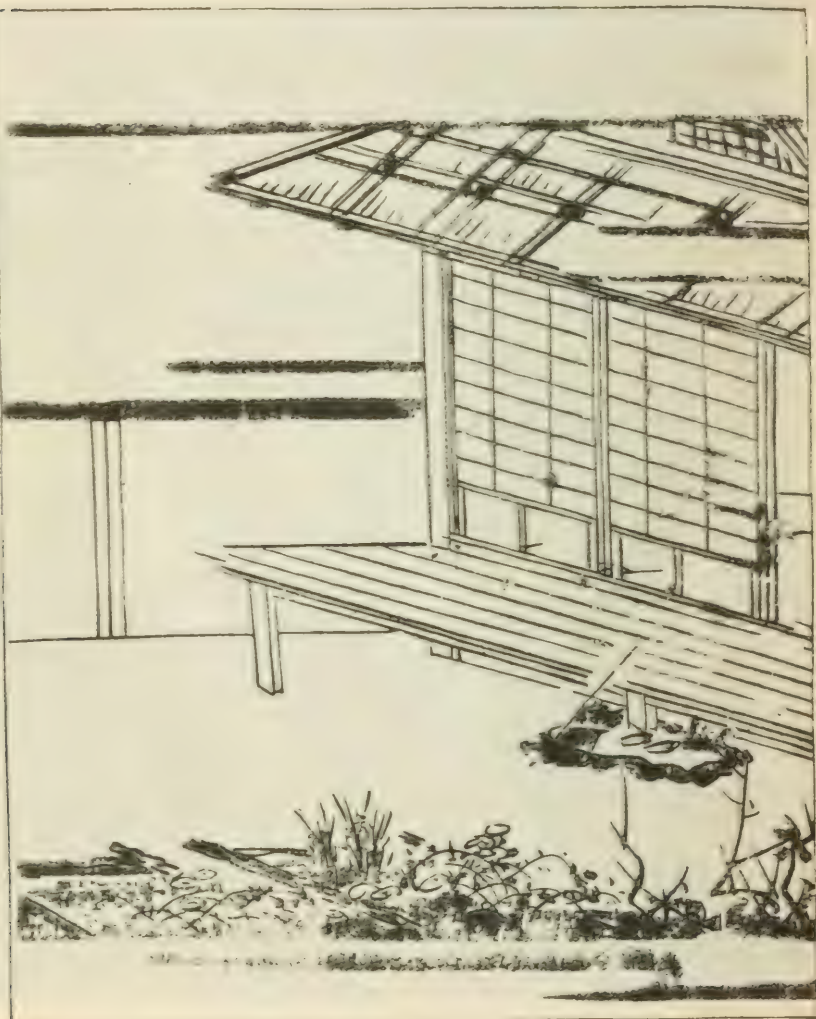
この夜膳所より臥高昌房探志の面〳〵は行ちがひて難波に下り、伊賀のしたしき誰かれは、大和路をこへて同じく來りしも、むなしきからにさへおくれまいらせて、悲しく別れゆきしとぞ。

伏見より手〳〵にかきもて、粟津の義仲寺にうつし奉る。こゝなむ國分山の椎がもとは、うき世へ遠くて、跡とふものゝ水むけむにたよりあし。木曾殿と塚をならべてとありし常の言ぐさによるも

のならし。からにめさせ奉る浄衣は、智月の尼乙州が妻ぬひてきせまいらす。十四日夕づくようちくもりがちに、物おもへる月影のいとあはれなるに、木曾塚の右にならべ、土うがちておさめ奉る。義仲寺の直愚上人を導師として、おの／＼焼香し奉るに、京難波大津膳所より、被官従者までもこの翁をしたひ奉り、招かざるにきたりあつまるもの三百餘人なり。此地におのづからふりたる松あり、柳あり。かねて塚と

なるのいはれならむと、そのまゝに卵塔をまねび、あら墳をゆひ、冬枯の芭蕉を植て名のかたみとす。常に風景を好みたまふ癖ありけるに、所は長等山をうしろにし、前にはさゝなみ清くたゝへて、遺骨を湖上の月に照すこと、かりそめならぬ徳光のいたりなるべし。

（義仲寺の圖）

[illegible]、芭蕉翁の三字の石碑は、その時に[illegible]丈艸が筆にて、其角去來の[illegible]にてゐとかや。墓のめぐりの石墻は百川法橋經營し、行狀の碑文は角上老人[illegible]す。

芭蕉堂は蕉翁八十年のむかし、おのれ蝶夢造立し、粟津文庫は百年のいま沂風成功す。

繪

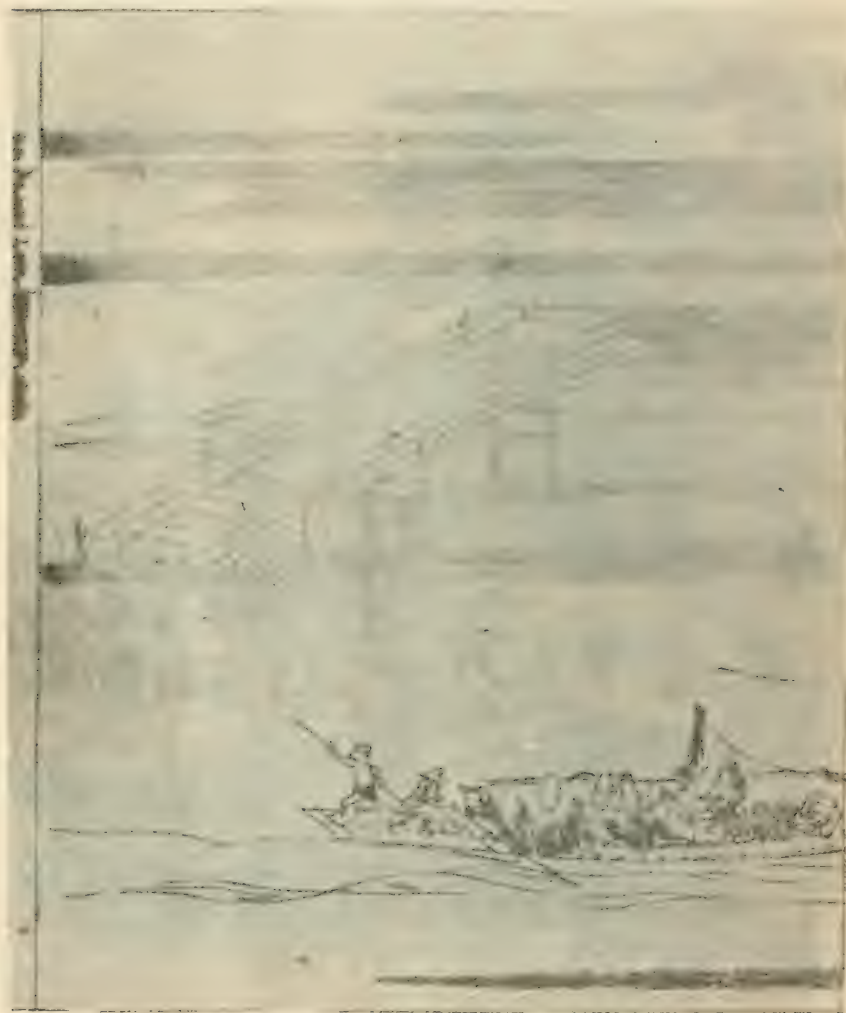
法橋狩野正榮至信

癸丑五月寫爲

蝶夢師縮狩野正榮原圖少有所改定云

田 信武

いかなるすぐせの因縁にや、おのれ鳥を駈るのころより、手ならひ文學ぶのいとまあれば、芭蕉翁の風雅の體を慕ふのあまり、ありし昔の跡をなつかしみて、はじめ伊賀の國にうまれ、浪花の津に終

り、粟津の寺に葬り奉りしまでのあらましを、繪にあらわさまほしく、近きとし友なりける狩野法橋をかたらひよりけるが、すでに筆をとりけるきは、はからずも内裏造營の御事はじまりて、公のつとめにひまなく、やゝ六年を歴てことしの秋のすへ、蕉翁繪詞傳なりぬ。その詞は翁のみづから書給ひし、または其角がものせし終焉記、支考が笈日記のかず〳〵をもてつゞる。さるに詞

を書むに時の右筆は誰ならむと議するに、法橋のいふ、よしなのわざや。名筆ゑらみて何せむ。さは世にある人の手鑑などいひて、筆の寶あつむるがごとし。たゞ法師のありのまゝなる筆の、つたなきあとを殘しなむこそ、後に此道の人の見て、むべかゝる筆にもつゆはぢず、みづから書るぞおこながら、みちにまめやかなりし法師なりしよと、いはむは本意ならずやといさむるに、

げにもさはいはれたり、かならず人に見すべきの料ならず、ひとへにこたび蕉翁の百回忌の懐舊の手向にこそとおもひかへて、わなゝかれたる老の筆をそめて

義仲寺の

芭蕉堂の影前に奉るは、寛政四年子の冬十月十二日

蝶夢幻阿彌陀佛

謹書

寛政五年癸丑歳四月

湖南菊二井口保存

應需書

蕉門俳諧書林

井筒屋庄兵衛

橘屋治兵衛

芭蕉年譜

芭蕉年譜（他石初稿）

◎正保元年（紀元二三〇四年）

○後光明天皇御宇。寛永二十一年十二月十六日改元。江戸幕府三代将軍家光時代

▽（月日不詳）芭蕉、伊賀の上野赤坂町に生る。（柘植出生説あり）父は松尾與左衛門、母は名張の人（伊豫宇和島の桃地氏の女とする説あり。名を「いよ」とする説あり）兄姉各一人（兄を二人とする説あり。半左衛門の上に與左衛門と稱する長兄ありとし、父の名を儀左衛門とす）妹三人あり。（系譜を次に略記す）幼名を金作と呼ぶ。（半七とする説あり）長じて甚七郎（甚質・甚四郎・藤七郎の諸説あり）と稱し、又忠右衛門（忠左衛門とする説あり）といひ、宗房と名乘る。

松尾家系譜略

◎平貞盛—九代—宗清 號平兵衛（此間數代）—清正

- 某 山川
- 某 勝島
- 某 西川
- 某 松尾
  - 某 百司 伊賀國柘植住
    - 某 與左衛門
      - 命清 半左衛門（筆道指南）
      - 女子（山岸半殘に嫁す）
      - 宗房 忠右衛門 芭蕉庵桃青
      - 女子 片野氏に嫁す
      - 女子 堀内氏に嫁す
      - 女子 およし 後命清養女
- 某 北川

する諸説ありて決しがたし。江戸放浪間に於ける生計手段の一なるべし。寛文六・七年の頃、京に上りて季吟に學ぶとする説あり。又儒を田中桐江に、詩を伊藤垣庵に、書を北向雲竹に學ぶとする説あり。桐江は寛文六年江戸に生れたる事を指摘し置く。

▽五月松江維舟編『時世粧』刊行、發句一收錄。

◎**延寶二年**（二三三四）　三十一歳

▽富尾似船校『如意寶珠』刊行、發句六收錄。

▽吉田蘭秀編『後撰犬筑波』刊行、發句一收錄。

◎**延寶三年**（二三三五）　三十二歳

▽五月西山宗因等と百韻一卷を賦す。

▽廣岡宗信編『千宜理記』刊行、發句六收錄。

◎**延寶四年**（二三三六）　三十三歳

▽二月山口信章（後の素堂）と百韻二卷を賦す。『江戸兩吟集』又『奉納二百韻』と稱す。

▽六月伊賀に歸省す。

▽北村季吟編『續連珠』刊行、發句六、附句四收錄。此書中「宗房」とも「桃青」とも記せるを見れば、桃青の號は此頃より用ひしなるべし。

▽神田蝶々子編『俳諧當世男』刊行、發句三附句三收錄。

◎**延寶五年**（二三三七）　三十四歳

▽內藤風虎編『六百番誹諧發句合』に右方の作者三十人の一人として、發句二十を詠ず。

▽冬より山口信章伊藤信德と三吟百韻を賦し、翌六年の春に至りて三卷を了る。『江戸三吟』又『桃青三百韻』と稱す。杉風との兩吟百韻「色付くや」の卷亦此頃なるべし。

◎**延寶六年**（二三三八）　三十五歳

▽六月歸省説あり。

▽神田二葉子編『江戸通り町』刊行、歌仙一卷收錄。其立句は芭蕉の「通り町」の句なり。

▽京の青木春澄江戸に來りて交遊す。芭蕉は似春と共に三吟三歌仙を賦す。春澄之を『武藏十歌仙』に編入す。

▽岡村不卜編『江戸廣小路』刊行、發句十六、附句二十收錄。

▽池西言水編『江戸新道』刊行、發句三收錄。

▽冬ある人の需に應じて十八番句合の判詞を書く。末に「坐興庵桃青」と記せり。

◎**延寶七年**（二三三九）　三十六歳

▽二月夢想開表八句を賦す。（年次尚考ふべきか）

▽池西言水編『江戸蛇の鮓』刊行。發句三收錄。

▽椎本才麿編『阪東太郎』刊行、發句三收錄。

▽神田蝶々子編『玉手箱』刊行、發句一收錄。

▽西治編『新附合千句二葉集』刊行、附句二收錄。

◎**延寶八年**（二三四〇）　三十七歳

▽四月『桃靑門下二十歌仙』刊行。一に『延寶二十歌仙』といふ。

▽岡村不卜編『向の岡』刊行、發句六收錄。

▽其角がねりまの農夫・かさいの野人を左右にしたる『田舍の句合』の判詞を書く。末に『栩々齋主桃靑』と記せり。又杉風の『常盤之句合』の判詞を書く。末に「華桃園」と記せり。

▽秋京の伊藤信德の『七百五十韻』を嗣ぎ、其角才麿揚水と共に二百五十句を賦す。『誹諧次韻』即是也。

▽小西似春編『芝肴』に須磨を諷ひし句を立句とする百韻二卷編入せらる。同書は天和三年刊行なれど、連句の風調は此頃のものに似たり。

▽冬深川六間堀杉風の控屋敷内の草庵に移り住む。杉風が生業の魚鳥を貯ひし生洲の番小屋を改修せるものゝ如し。翌年春李下芭蕉一もとを贈る。「芭蕉植て」の吟あり。人々草庵を芭蕉庵と呼ぶ。「泊船堂」の號も此草庵に冠せしならん。佛頂禪師に參禪せるも此頃なるべし。寛文十二年江戸に下りしより深川入庵まで約十年の行動明かならず。諸說區々たり。深川入庵の年次に就ても延寶六年說（梨一）同七年說（支考）同八年說（許六）天和元年說（素蓮）等あり。

◎**天和元年**（二三四一）　三十八歳

○延寶九年九月二十九日改元（前年五月四代將軍薨じ、八月綱吉將軍となる。後の犬公方なり）

▽池西言水編『東日記』刊行、發句十五收錄。

▽鈴木淸風編『後双六』刊行、發句一收錄。

◎**天和二年**（二三四二）　三十九歳

▽板木屋又兵衛刊行『歲旦發句牒』に桃靑の名の一句收錄。

▽三月二十八日宗因江戸にて歿す。

▽大原千春編『武藏曲』刊行、發句七、百韻一卷收錄。「芭蕉」の名を記せり。

▽大淀三千風編『松島眺望集』刊行、發句一收錄。

▽編者不詳「俳諧三箇津」刊行、發句一收錄。

▽十二月二十八日未下刻駒込大圓寺より出火、江戸の大部分を焼て河東に飛火し芭蕉庵類燒す。甲州都留郡（山梨縣南都留郡北都留郡の地域を郡内と稱す）に流寓

す。（寄食の家に就ても、伽頂禪師の僕六祖五兵衛のゆかりの家、杉風の姉の嫁ぎし家などの說あり）

◎天和三年（二三四三）　四十歲

▽高山麋塒芳賀一品相携て芭蕉を訪ひ、三吟歌仙二卷を賦す。（麋塒を郡内の人とし、芭蕉寄食の家とする說あり）

▽榎本其角編『虚栗』刊行。芭蕉之が跋を草し「芭蕉洞桃青鼓舞書」と記す。芭蕉中心の俳書之を以て嚆矢とす。發句十四、漢句一、歌仙三卷收錄。

▽五月其角等の招きにより江戸に歸る、素堂芭蕉庵再建の勸化文を書く。

◎貞享元年（二三四四）　四十一歲

○天和四年二月二十一日改元。

▽八月歸省の旅に上る。「野ざらし」の吟あり。大和の舊里へ歸るチリ（油屋喜左衛門）同行す。東海道を上つて伊勢路に入り。參宮をなし、九月のはじめ故鄕伊賀の上野に至り、兄の家に旅裝を解く。「手にとらば」の吟あり。チリと共に其舊里に至りて別れ、獨り秋深き吉野山に登り、山城（其角此時京に在り。芭蕉と會せしならん）近江を經廻して美濃に入り、大垣の谷木因を訪ひ、共に多度の權現に詣づ。木因と別れて桑名に至り、本統寺古益上人を訪ふ。「冬牡丹」の吟あり。海を越て熱田に渡り、林桐葉を訪ひ、「此海に」の吟あり。名古屋に入り岡田野水・山本荷兮・加藤重五・坪井杜國等と歌仙五卷・表合一を賦す。『冬の日』是なり。再び熱田に來りて交遊し、十二月二十五日鄕里に歸りて越年す。

◎貞享二年（二三四五）　四十二歲

▽二月奈良に至りて、二月堂水取の行事を拜し、京に上りて三井秋風の鳴瀧の山莊に遊び、「梅白し」の吟あり。伏見西岸寺に任口上人を訪ひ「我衣に」の吟あり。大津に出て尙白亭に入り、「からさきの松」の吟あり。三月の末熱田に至り桐葉等と歌仙二卷を賦し、木曾路を經て甲州に入り、四月の末江戸に歸る。「夏衣」の吟あり。此行の紀行を『甲子吟行』又『野ざらし紀行』といふ。（此行熱田に於ける連句等を輯錄したるものを『熱田三歌仙』と稱す）

▽六月二日鈴木清風等と小石川にて納涼の俳筵を開き、古式百韻一卷を賦す。『根本式』と稱するもの是なり。

▽其角『新山家』を編し、芭蕉の「山路來て」の句に就て記し、且つ旅中よりの書簡一を編入す。

◎貞享三年（二三四六）　四十三歲

▽其角の初文臺に百韻を賦す。『初懷紙』又『鶴の歩』と稱す。其前半五十韻の註記と稱するものあり。

▽三月二十日淸風等と卽興の歌仙一卷を

賦す。『一つ橋』に編入せらる。此頃青莪堂仙化『蛙合』を行ふ。「古池」の吟あり。向井去來江戶に在り、此蛙合に加はる。又其角嵐雪と共に四吟歌仙一卷を賦す。

▽山本荷兮編『春の日』刊行、發句三收錄。

▽去來の爲めに其「伊勢紀行」の跋を書く。

▽素堂との和漢連句を此頃のものとする說あり。

◎**貞享四年**（二三四七）　四十四歳

○四月二十八日東山天皇卽位。（先帝を尊みて太上天皇と曰す）

▽中秋草庵に月を賞し「池をめぐりて」一の吟あり。下旬曾良・宗波を伴うて大利根を下りて鹿島に至り、佛頂禪師の隱栖を訪ひ、歸途潮來に本間自準を訪ふ。自準は醫を業とし、芭蕉と鄕里を同じうするものなり。（芭蕉醫術を學べりとの說あり）此行の記事を『鹿島紀行』と稱す。

▽十月二十五日歸省の旅に上る。（前月來內藤露沾公をはじめ數次送別の俳筵あり。『句餞別』に明か也）東海道を上りて鳴海の下鄕知足を訪ひ、熱田に至り、越智・越人と共に引返して吉田（豐橋）より田原街道に入りて、畑村に杜國の僑居を見舞ひ、伊良古崎に遊び、「鷹一つ」の吟あり。再び鳴海に至り、（鳴海に於ける連句等を輯錄したるものを『千鳥掛』と稱す）十一月二十四日熱田に至りて桐葉と熱田宮再建を賀する歌仙を賦し、尙熱田名古屋の交遊を重ねて、十二月の末鄕里上野に至る。「古鄕や」の吟あり。

▽岡村不卜編「續の原」句合冬の部の判詞を書く。（江戶出發前なるべし）

▽十一月其角編『續虛栗』刊行、發句二十六、世吉一卷收錄。世吉は餞別連句の一なり。

◎**元祿元年**（二三四八）　四十五歳

○貞享五年九月三十日改元。

▽二月參宮、「何の木の花」の吟あり。益光・又玄・勝延・乙孝・一有等と歌仙二卷を賦し、海路を來りし杜國を伴うて上野に歸り、故主別業の花に遊び、「さまざまの」の吟あり。

▽三月十七日上野發足、杜國と共に吉野看花の旅に上る。杜國は萬菊丸と假名したり。名張より初瀨・三輪・多武峰を經て吉野に上り、高野山・和歌浦・奈良を巡りて大阪に出で、四月十九日尼ケ崎より乘船須磨明石一見、「蛸壺」の吟あり。京に入りて杜國に別る。此紀行を『笈の小文』又『卯辰紀行』といふ。京より近江を經て美濃に入り、岐阜大垣の間を悠遊し、初秋の頃熱田・鳴海を訪ひ、名古屋に至り、八月越人を伴うて更級の月を賞し、善光寺を廻りて江戶に歸る。『更級紀行』一篇

あり。
▽九月芭蕉庵に后の月を賞す。「木曾の痩も」の吟あり。

◎元祿二年（二三四九）　四十六歳

▽二月美濃の嗒山を其旅店に訪ひ、「陽炎」の歌仙を録す。
▽三月草庵を人に讓りて杉風の別墅に移る。「草の戸も」の吟あり。『奥の細道』旅行準備の爲めなり。
▽三月二十七日曾良を伴うて發足す。四月朔日光參拜、「あらとうと」の吟あり。那須野を經て「秣負ふ人を」の吟あり。四月二十一日白川の關を越へ、五月五日仙臺に入り、松島・平泉一見、尿前の關を越て出羽に入り、尾花澤に淸風を訪ひ、大石田に一榮を導き、最上川を下り新庄を經て、六月四日羽黑山本坊の俳諧あり。三山巡拜、鶴が岡を經て酒田に至り、「あつみ山や」の吟あり。象潟一見、越後を經て七月十五日加賀に入り、金澤の交遊日を重ねて山中溫泉に至り、曾良は病んで獨り伊勢に向ふ。「今日よりや」の吟あり。八月十四日氣比明神に詣で、其下旬大垣如行の家に入り、九月六日伊勢の御遷宮拜まんと川舟に上る。（これまでの紀行即『奥の細道』也）
▽秋の末上野に歸りて連句數卷あり。霜月の頃奈良を經て京に至り、落柹舍に鉢叩を聞き、膳所に至りて越年す。
▽荷兮編『曠野』刊行、發句三十四、歌仙一卷收錄。

◎元祿三年（二三五〇）　四十七歳

▽正月伊賀の上野に至り、伊勢に赴き參宮をなし、再び上野に至りて悠遊し、三月膳所濱田珍碩の落洒堂に至り、四月幻住庵に入る。記一篇あり。九月義仲寺境内の無名庵に入る。此頃去來凡兆と共に『猿蓑』編纂の事に從ふ。（翌四年五月刊行、發句四十二、歌仙四、文章一收錄）大津京の間を往復し、乙州の新宅に在りて越年す。「人に家を」の吟あり。
▽槐之道『江鮭子』を編す。發句一、歌仙二卷、竭物一を收錄す。珍碩の『ひさご』は歌仙一卷を編入せり。江戶にては服部嵐雪の『其袋』（發句八、半歌仙一收錄）其角の『いつを昔』（發句十二收錄）『花摘』（發句十三、歌仙一）刊行せらる。

◎元祿四年（二三五一）　四十八歳

▽正月乙州の東行を餞して「梅若菜」の吟あり。次で伊賀の上野に至り、喬木子・卓袋・百歲子・万乎・土芳等と俳筵を重ぬ。
▽四月十八日より五月四日まで嵯峨の落柹舍に籠る。『嵯峨日記』あり。のち大津に在りて悠遊し、八月湖上の月を賞す。
▽十月のはじめ平田に李由上人を訪ひ、岐阜・大垣・名古屋を經て、其二十日熱田の梅人亭に遊び、遂に江戶に向ふ。桃隣・

支考隨從す。三州新城の太田白雪を訪ひ、鳳來寺に詣づ。「夜着一つ」の吟あり。島田塚本如舟亭に入りて「宿かして」の吟あり。十一月はじめ江戸に歸る。「都出て」の吟あり。橘町に僑居す。「魚鳥の心」の吟あり。

▽其角編『雜談集』刊行、發句七收錄。

△楚常編『卯辰集』刊行、發句十九、歌仙一卷收錄。

▽路通編『勸進牒』刊行、發句十二、歌仙一卷、書簡一收錄。

▽林鴻編『京羽二重』刊行。芭蕉の住所を「西洞院二條上ル町」とし「物ずきや」の句を記す。

◎**元祿五年**（二三五二）　四十九歲

▽三月支考東北の旅に上る。歸りて『葛の松原』を編し、芭蕉の發句十三を收錄す。

▽五月杉風等舊庵の附近に芭蕉庵を造りて芭蕉を迎ふ。依て「芭蕉を移す詞」を草す。

▽七月七日素堂の母の七十七を祝して「七株の萩」の吟あり。「閉關之說」を書き、人を避けんとす。

▽初秋根津史邦仙洞御所の仕を辭して江戸に下る。夏よりこのかた大垣の人々との俳筵多し。八月九日森川許六芭蕉庵に來りて相見す。九月酒堂（珍碩改號）江戸に下る。十月三日許六を其御小屋に訪ひ「けふばかり」の歌仙を賦す。此頃毎に俳筵に隨ふものは嵐蘭岱水等なり。

▽潮江車庸編『己が光』刊行、發句十七、歌仙一卷收錄。

▽水間沾德編『誹林一字幽蘭集』刊行、發句八收錄。

▽句空編『北の山』刊行、發句二收錄。

▽嵐蘭編『罌粟合』刊行、發句二收錄。

◎**元祿六年**（二三五三）　五十歲

▽二月酒堂膳所に歸り『深川集』を刊行す。發句三、歌仙三卷端物二を收錄す。

▽五月許六の彦根に歸るを送り「柴門辭」を草す。

▽七月七日杉風と共に七夕の句を詠ず。

▽八月二十七日松倉嵐蘭歿す。誄を草す。同二十八日其角の父竹下東順歿す。傳を草す。

▽十月九日素堂殘菊の宴に臨み「菊の香や庭に」の吟あり。

▽其角編『萩の露』刊行、發句一收錄。

▽櫻井兀峰編『桃の實』刊行、發句三、歌仙一卷收錄。

▽荷兮編『曠野後集』刊行、發句四收錄。

▽巴水編『薦獅子』刊行、發句八收錄。

△壺中編『弓』刊行、發句二收錄。

▽七月のはじめ老兄の招きにより郷里に歸りて盆會に列す。「家は皆」の吟あり。尼壽貞の身まかりしを聞て、「數ならぬ

身」の吟あり。（其角の終焉記に「寿貞の子次郎兵衛」と記し、許六の『韻塞』に「例の次郎兵衛」と記す。寿貞は芭蕉の若き時の妾なりとの説あり）此秋は膳所に在りて悠遊俳諧に日を重ねたり。惟然・支考・斗従等来る。

▽九月八日惟然・支考を伴ひ奈良を経て大阪に至り、十三日住吉寶の市に詣で「升買て」の吟あり。二十七日園女亭の俳諧に臨み、「白菊」の吟あり。二十八日長谷川畦止亭に遊び、「秋深き隣」の吟あり。

▽九月二十九日夜より泄痢を病む。十月五日花屋仁左衛門の裏座敷に移る。七日正秀・去来・乙州・木節・丈草・李由等来る。八日「旅に病て」の吟あり。十一日夜其角来る。十二日申の刻歿す。

▽十四日義仲寺に葬り、十八日初七日に當り靈前に於て追善の俳諧を賦す。連衆四十二人にして百韻一巻を満尾す。其角終焉記を草し『枯尾花』二冊を編す。

▽志田野坡等編『炭俵』刊行、發句十七、歌仙三巻収録。

▽子珊編『別座敷』刊行、發句四、歌仙一巻収録。

▽其角編『句兄弟』刊行、發句二、歌仙一巻、文章一収録。

◎元禄七年（二三五四）　五十一歳

▽其角の歳旦帖に十句表合を編入す。

▽春、[illegible]に至りて「花見にと」の吟あり。上野に花を見て「四ツ五器」の吟あり。

▽五月八日（『陸奥衛』による。『行状記』は十一日とす）[illegible]。「麦の穂を」の吟あり。駿河に入りて「花橘も」・[illegible]の吟あり。島田の如舟亭に川留に逢ひ「五月雨の雲」の吟あり。名古屋・佐屋・長島・久居を経て郷里上野に至る。閏五月十六日伽藍（大和）を経て京に至り落柿舎に入る。浪化上人来る。六月[illegible]大津に至り廿一日木節亭に於て「秋近き」の歌仙を賦す。

▽素牛（惟然の前號）編『藤の實』刊行、發句九収録。

▽酒堂編『市の庵』刊行、發句一、歌仙一巻収録。

▽泥足編『其便』刊行、發句七、半歌仙一巻収録。

▽荷兮編『晝寝の種』刊行、發句六収録。

（以上[illegible]）

昭和四年四月二十九日印刷
昭和四年五月一日發行

日本名著全集
第一期出版
江戶文藝之部
第三卷
芭蕉全集
（非賣品）

編輯兼發行者
印刷者
東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
代表者 石川寅吉

發行所
東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
電話浪花一八四〇番一八四一番
振替東京一八四四番

日本名著全集 第一期出版

「江戸文藝之部」全廿七巻及追加篇二巻 書目豫定一覽

（但し種々の事情により多少の變更あるべし。）

第一巻 第二巻 西鶴名作集 上 下

○好色一代男 ○好色二代男 ○西鶴諸國咄 ○近代艶隠者 ○好色一代女 ○本朝二十不孝 ○男色大鑑 ○懐硯 ○武道傳来記 ○日本永代藏 ○武家義理物語 ○新可笑記 ○本朝櫻陰比事 ○一目玉鉾 ○世間胸算用 ○西鶴置土産 ○織留 ○俗つれ〴〵 ○萬の文反古 ○名殘の友 ○好色三代男

第三巻 芭蕉全集（第廿四回配本済）

正篇 ○俳句集 發句集・句選拾遺・補遺・○連句集 俳諧集・補遺 ○俳文集 文集・補遺 ○評言集 貝おほひ・田舍句合・常盤屋句合・[illegible] ○紀行集 甲子吟行・鹿島紀行・笈の小文・更科紀行・[illegible] ○書簡集 書簡・補遺 ○語録集 [illegible] 去來抄・三冊子・山中問答

外篇 ○虚栗 ○冬の日 ○蛙合 ○春の日 ○曠野 ○其袋 ○瓢 ○猿蓑 ○深川集 ○炭俵 ○別座敷 ○笈日記 ○續猿蓑 ○韻塞 ○小文庫

附録 枯尾花 ○芭蕉翁行狀記 ○全傳 ○芭蕉翁繪詞傳 ○年譜

第四巻 第五巻 近松名作集 上 下（第二回配本済）（第六回配本済）

○花山院后諍 ○世継曾我 ○賢女手習并新暦 ○門出八島 ○頭陣八島 ○源氏烏帽子折 ○出世景清 ○團扇曾我 ○蝉丸 ○最明寺殿百人上臈 ○曾根崎心中 ○薩摩歌 ○雪女五枚羽子板 ○用明天皇職人鑑 ○心中二枚繪草紙 ○兼好法師物見車 ○碁盤太平記 ○卯月紅葉 ○堀川波鼓 ○卯月の潤色 ○心中重井筒 ○傾城反魂香 ○心中萬年草 ○丹波與作待夜の小室節 ○淀鯉出世瀧徳 ○五十年忌歌念佛 ○艶狩劒本地 ○今宮の心中 ○百合若大臣野守鏡 ○心中刃は氷の朔日 ○夕霧阿波鳴渡

○吉野都女楠 ○嫗山姥 ○長町女腹切 ○冥途の飛脚 ○大經師昔暦 ○生玉心中 ○國性爺合戰 ○槍の權三重帷子 ○山崎與次兵衛壽の門松 ○曾我會稽山 ○傾城酒呑童子 ○博多小女郎波枕 ○雙生隅田川 ○心中天網島 ○津國女夫池 ○女殺油地獄 ○信州川中島合戰 ○心中宵庚申 ○關八州繫馬

第六巻 第七巻 淨瑠璃名作集 上（第十四回配本済） 下（第廿三回配本済）

○暦 ○本海道虎石 ○心中涙の玉井 ○金屋金五郎浮名額 ○金屋金五郎後日雛形 ○梶久米松山 ○富仁親王嵯峨錦 ○お染久松袂の白しぼり ○鬼鹿毛無佐志鐙 ○愛護若塒箱 ○傾城恩升屋 ○八百屋お七 ○心中二つ腹帶 ○大塔宮曦鎧 ○須磨都源平躑躅 ○鬼一法眼三略巻 ○壇浦兜軍記 ○蘆屋道滿大内鑑 ○苅萱桑門筑紫轢 ○敵討襤褸錦 ○釜淵雙級巴 ○ひらかな盛衰記 ○夏祭浪花鑑 ○菅原傳授手習鑑 ○義經千本櫻 ○假名手本忠臣藏 ○双蝶々曲輪日記 ○一谷嫩軍記 ○本朝廿四孝 ○奥州安達原 ○關取千兩幟 ○近江源氏先陣館 ○神靈矢口渡 ○妹背山婦女庭訓 ○攝州合邦辻 ○新版歌祭文 ○伊賀越道中雙六 ○近頃河原達引 ○絲櫻本町育 ○繪本太閤記 ○名鉄伽羅千代萩 ○鐘倉三代記

第八巻 歌舞伎脚本集（第十九回配本済）

○大名なぐさみ曾我 ○好色傳授 ○傾城淺間嶽 ○桑名屋德三入船物語 ○加賀山廓寫本 ○殿下茶屋聚 ○隅田川續俤 ○男伊達初買曾我 ○あげまき助六廓の花見時 ○東海道四谷怪談 ○十六夜清心 ○忠臣藏年中行事

第九巻 浮世草子集（第十六回配本済）

○好色万金丹 ○御前義經記 ○けいせい色三味線 ○沖津白浪 ○傾城禁短氣 ○日本新永代藏 ○世間息子氣質 ○新小夜嵐 ○世間娘容氣 ○浮世親仁形氣

第十巻 怪談名作集（第十二回配本済）

○伽婢子 ○狗張子 ○怪談全書 ○英草紙 ○繁野話 ○雨月物語 ○唐錦 ○莠句册 ○垣根草 ○漫遊記 ○附録百鬼夜行繪巻

第十一巻 黃表紙廿五種（第一回配本済）

○金々先生榮花夢 ○親敵打腹鼓 ○長生見度記

○咥多雁取帳 ○狂言好野暮大名 ○大悲千禄本
○江戸生艶氣樺焼 ○莫切自根金生木 ○文武二道
万石通 ○孔子縞于時藍染 ○心學早染草 ○即席
耳學問 ○廬生夢魂其前日 ○馬鹿長命子氣物語
○世上洒落見繪圖 ○桃太郎發端話説 ○十四傾城
腹之内 ○金々先生造化夢 ○忠臣藏前世幕無 ○
世諺口紺屋雛形 ○稗史億説年代記 ○御誂染長壽
小紋 ○的中地本問屋 ○人間萬事吹矢的 ○人間
萬事吹矢的（草稿）

第十二巻 洒落本集（第廿四回配本済）

○百花評林 ○聖遊廓契○月花餘情 ○異素六帖
○遊子方言 ○辰巳之園 ○當世氣どり草 ○婦美
車紫鄽 ○妓子呼子鳥 ○深川新話 ○道中粹語錄
○大通多名於呂志 ○愚人贅漢居續雁金 ○狂訓彙
軌本紀 ○和唐珍僻 ○令子洞房 ○通言總籬 ○
田舍芝居 ○和歌始衣抄 ○古契三唱 ○女郎買糠
味噌汁 ○田舍談義 ○娼妓絹籭 ○錦の裏 ○仕
懸文庫 ○辰巳婦言 ○傾城買二筋道 ○讃極史
○籬の花 ○廓宇久爲壽 ○新潟後の月見 ○河東
方言箱まくら ○色深狹睡夢 ○金郷春夕榮

第十三巻 讀本集（第七回配本済）

○三七全傳南柯夢 ○占夢南柯後記 ○天羽衣 ○
飛騨匠物語

第十四巻 滑稽本集（第三回配本済）

○風流志道軒傳 ○古朽木 ○阿多福假面 ○指面
草 ○人遠茶懸物 ○無彈砂子 ○小紋雅話 ○奇
妙圖彙 ○浮世風呂 ○早變胸機關 ○客者評判記
○浮世床 ○人間萬事虚誕計 ○同上後篇 ○假名
手本藏意抄 ○一盃綺言 ○古今百馬鹿 ○八笑人
○七偏人 ○柳巷訛言 ○市川評判圖會室の梅 ○
福來雀 ○一雅話三笑 ○言葉の花 ○鯛の味噌津

第十五巻 人情本集（第廿一回配本済）

○假名文章娘節用 ○春色梅暦 ○春色辰巳園 ○春色
惠之花 ○英對暖語 ○梅見船 ○閑情末摘花

第十六巻 第十七巻 第十八巻 南總里見八犬傳

上（第四回配本済）
中（第九回配本済）
下（第十七回配本済）

第十九巻 狂文狂歌集

○曉月坊酒百首 ○世の中百首 ○雄長老狂歌集
○貞德狂歌百首 ○吾吟我集 ○古今夷曲集 ○後巽
夷曲集 ○狂歌うた合 ○卜養狂歌集 ○狂歌鳩の
枝 ○貞柳全集 ○明和十五番狂歌合 ○狂歌若葉
集 ○万載狂歌集 ○德和歌後万載集 ○狂歌才藏
集 ○四方の留樽 ○吾妻なまり

第廿巻
第廿一巻 **修紫田舎源氏** 上（第五回配本済）下（第十五回配本済）

第廿二巻
第廿三巻 **膝栗毛其他** 上（第十回配本済）下（第十一回配本済）

○東海道中膝栗毛 ○續膝栗毛 ○續々膝栗毛 ○南總記行旅眼石 ○江戸前噺鰻 ○落咄彌次郎口

第廿四巻
第廿五巻 **和文和歌集** 上（第十三回配本済）下（第二十回配本済）

○賀茂翁歌集 ○にひまなび ○歌意考 ○天降言 ○うけらが花 ○琴後集 ○楫取魚彦家集 ○ひとよはな ○東遊日次記 ○藤簍冊子 ○志濃夫廼舍家集 ○六帖詠草 ○同拾遺 ○桂園一枝 ○同拾遺 ○亮々遺稿 ○浦のしほ貝 ○しのぶぐさ ○言道歌集 ○良寛歌集 ○女流歌文集

第廿六巻 **川柳雜俳集**（第八回配本済）

○武玉川十八篇 ○柳多留三十一篇 ○誹風柳多留拾遺十篇 ○川傍柳五篇

第廿七巻 **俳文俳句集**（第廿二回配本済）

○獨言 ○鬼貫句選 ○七車 ○とく／＼の句合 ○五元集 同拾遺 ○玄峯集 ○去來發句集 ○丈草發句集 ○風俗文選 ○職人盡 ○鶉衣 ○千代尼句集 ○松の聲 ○太祇句選 ○同後篇 ○春泥發句集 ○樗良發句集 ○蕪村句集 ○蕪村文集 ○蓼太句集 ○井華集 ○青蘿發句集 ○白雄發句集 ○曉臺發句集 ○闌更發句集 ○俳さんげ ○枇杷園發句集 ○成美家集 ○道彦發句集 ○乙二發句集 ○一茶句集 ○おらが春 ○屠龍之技

第廿八巻 **歌謡音曲集**

○義太夫（近松名作集及淨瑠璃名作集と重複するものは之に採らず。）

○傾城阿波の鳴門（八つ目・順禮の段） ○艶容女舞衣（下の巻・酒屋の段） ○戀娘昔八丈（下の巻・鈴ケ森の段） ○桂川連理柵（下の巻・帶屋の段） ○廓文章（吉田屋の段） ○傾城戀飛脚（下の巻・新口村の段） ○碁太平記白石噺（七つ目・揚屋の段） ○花上野譽の石碑（四つ目・志渡寺の段） ○木下蔭狹間合戰（七つ目・竹中陣屋の段） ○蝶花形名歌島臺（八の切・小坂部館の段） ○三十三間堂棟由來（平太郎住家の段） ○玉藻前曦袂（三の切・道春館の段） ○八陣守護城（八の切・正清本城の段） ○生寫朝顏日記（宿屋の段） ○壺坂靈驗記（澤市内の段） ○近江源氏先陣館（八つ目切・小四郎切腹の段） ○

鎌倉三代記（七の切・三浦別れの段）○加々見山舊錦繪（六の切・草履打の段）○太平記忠臣講釋（七つ目・喜内住家の段）○祇園祭禮信仰記（四の切・碁立の段）

○河　東　節

○松の内○神樂獅子○隅田川舟の内○禿萬歳○灸すゑ殿の疊夜着○雨中花○水調子○うかふ瀬○ぬれ扇○亂髪夜編笠○助六所縁江戸櫻○常磐帶花柵○道成寺○淨瑠璃供養○都鄙○熊野○秦平住吉踊○浮世傀儡師（外記物）○小鍛冶名劍卷（半大夫物）

○一　中　節

○辰巳の四季○松づくし○秦平船づくし○高砂松の段○神樂高砂○蟲繪の島臺○萬屋助六心中○自然居士過去物語○源氏妹が宿○夕霞淺間嶽○尾上雲賤機帶○源氏十二段○賴光大江山入○鉢の木○與作小萬夢路の駒○道行三度笠○鵜飼石和川○お夏笠物狂○萱牡丹○源平妹脊の鷄台

○常盤津節

○老松○子寶三番叟○蜘蛛絲梓弦（仙臺淨瑠璃）○積戀雪關扉（關の戸）○四天王大江山入（古山姥）○雨額月奏繪（忠寶）○戻駕色相肩（戻駕）○帶文桂川水（お半）○倭假名色七文字（源太）○春霞競○松色操高砂（大商樂）○再夕暮雨の鉢木（雨の鉢木）○寄罠娼釣髭（釣狐）○後之月酒宴島臺（角兵衞獅子）○恩愛瞔關守（宗清）○願絲縁苧環（おみわ）○忍寄戀曲者（將門）○花舞臺霞猿曳（新うつぼ）○神負雪間の市川（新山姥）○乘合船恵方萬歳（乘合船）○其扇屋浮名戀風（夕霧）○景清○勢獅子劇花籠（勢獅子）○釣女○戻り橋○三保の松○松の島○三世相錦繡文章（おその六三）○大森彦七

○富　本　節

○年朝嘉例寿（長生）○四十八手戀所譯（相撲をし島）○百夜菊色の世中（關寺）○夫婦酒替ぬ中仲（鞍馬獅子）○其俤淺間嶽（淺間）○道行戀飛脚（梅川忠兵衞）○ゟ連理橋（鳥實）○新曲高尾懺悔（高尾懺悔）○花川戸身替の段（身替お俊）○春夜障子梅（夕霧）○新曲かぐら獅子（神樂獅子）○徒髪戀曲物（松風）○茂懺悔諱言（扇實高尾）○道行念玉蔓（長作）○雛菊常初音道行（忠信）○描筆力七以呂波（乙娘）○草枕露の玉歌和（玉川）○奈須野○御代榮盛穗富種（豐の前）○高砂女夫

○清　元　節

○梅の春○榮能作延壽（長生）○北州千歳壽（北州）○四季三葉草○其小唄夢廓（權八）○綠の五月雨（小菊半兵衞）○深山櫻及兼樹振（保名）○御名殘押繪交書（鳥羽繪）○月雪花名殘文章（玉兎）○詠梅松清元（茶先實）○色山聯深川（待人）○大和い手向五字（子守）○色彩間刈豆（かさね）○法

花姿色岡（山歸り）○月花茲友鳥（山姥）○道花手向橋（吉原雀）○復新三組盞（大山參り）○道行浮寢鴎 ○道行旅路の嫁入（八段目・おかげ參り）○六歌仙容彩（文屋・喜撰）○彌生の花淺草祭（惡玉）○おどけ俄煮珠取（玉屋）○道行旅路の花聟（落人）○再春菘種蒔（舌出し三番）○初霞淺間嶽（淺間）○〆能色相圖（神田祭）○造鈍菊朧言（菊畑三菊）○菊婚間朧言（お岩）○倭假名色七文字（手古舞）○重褄間の小夜衣（白絲）○明烏花濡衣（浦里）○梅柳中宵月（清心）○日月星晝夜の織分（夜這星）○初櫓噂高島（三人三吉）○貸浴衣汗雷（夕立）○忍逢春雪解（三千歳）○色增艶夕映（雁金）○花雲助相肩（雲助）○青海波 ○助六曲輪菊（助六）

○新　内　節

○二重衣戀占（花咲綱五郎）○若木仇名草（蘭蝶）○千日寺名殘鐘（三勝半七）○貞夢血染抱柏（花園平三）○歸咲名殘の命毛（尾上伊太八）○傾城音羽瀧（おとは七郎兵衛）○藤栗毛「赤坂の段」○藤栗毛「市子の段」○明烏夢泡雪（浦里）○明烏後眞夢 ○果身賣の段

○薗　八　節

○道行相合巨燵（梅川）○桂川戀の柵（お半）○鳥邊山 ○花街の色糸（植木屋）○道行菜種の亂咲 ○江戸の繪姿（おひな吉三郎）○道行緣花房（お花半七）○口舌八景（小いな半兵衛）○小春治兵衛巨燵の段 ○夕霧

○江　戸　長　唄（めりやす大薩摩を含む）

○矢の根五郎 ○無間の鐘 ○傾城道成寺 ○風流相生獅子（相生獅子）○二人椀久 ○英獅子亂曲（枕獅子）○百千鳥娘道成寺（さなきだ道成寺）○高尾さんげの段（高尾懺悔）○天人羽衣 ○京鹿子娘道成寺（娘道成寺）○英執着獅子（執着獅子）○風流妹背の杜建（杜建）○門出京人形（水仙丹前）○亂菊枕慈童（菊慈童）○鐘入解脫衣（解說）○鋼鳥帽子照葉盞（鋼鳥帽子）○柳雛諸鳥囀（鷺娘・うしろ面）○初咲法樂舞（法樂舞）○ねこのつま ○乘掛情の夏小立（與作）○鞭欅宇佐幣 ○百夜車 ○姿の鏡關寺小町（關寺）○春調娘七種（七種）○童子戲面破（めんかぶり）○衣かづき思破車（やれ車）○鐵寶獅子 ○敎草吉原雀（吉原雀）○相生獅子 ○染分紅葉（うはなり）○隈取安宅松（安宅）○御代松子日初戀（小松曳）○其容形七枚起請（こもそう）○關東小六後雛形（淡島）○其面形二人椀久 ○黑かみ ○女夫松高砂丹前（高砂丹前）○菊壽の草摺 ○勢五大力 ○吹雪の雛形（雛形狂亂）○三重霞嬉數頭鳥（三重霞傀儡師）○舞扇菌生梅（舞扇）○濱松風戀歌（濱松風）○ゆかりの月 ○美面より○七枚續花の姿繪（汐汲・猿廻し・老女）○遲櫻手爾葉七字（花かり初め傾城・越後獅子・橋辨慶・直撲蛋）○戀男調松風（調松風）○再春菘種蒔（舌出し三番叟）○戀畏奇掛台（犬神）○四季詠寄三大字（門傾城・鹿島踊）○閏鼓姿八景（節季候・心猿・晒女）○正札附根元草摺（正札附）○寄三津再十二支（小原女・乙姫・四つ竹）○其九繪彩四季櫻（丁稚・天下るの傾城）○四

新獅子 ○三升猿曲舞（猿舞） ○石橋（外記の石橋） ○老松 ○不動 ○七所御攝初鐵漿（西王母・藪入娘） ○大和い手向五字（官女・牛若） ○外記猿 ○復新三組盞（初雁の傾城） ○廓三番叟（廓三番） ○歌へす〳〵餘大津畫（藤娘・關三の座頭・關三の奴） ○月雪花蒔繪の巵（月の卷） ○拙筆力七以呂波（芝翫の傾城・供奴・浦島・瓢簞鯰） ○八重霞賤機帶（賤機） ○後の月酒宴島臺（角兵衞獅子） ○御誂玉海老手遊（とんび奴） ○吾妻八けい（八景） ○六歌仙容彩（業平小町） ○姿花後雛形（小鍛冶） ○初子日 ○俄獅子 ○外記の傀儡獅 ○初しぐれ ○巽八景 ○花翫曆色所八景（助六・景清・新造娘） ○勸進帳 ○花兄弟十二月所作（若菜摘・鍾馗・雷） ○島臺 ○軒端松 ○土農工商 ○秋色種 ○[illegible]鶴三番叟 ○花見車 ○手習子 ○織どの ○常磐庭 ○鶴龜 ○五色の絲 ○今樣小鍛冶 ○柳糸引御攝（裸三番叟） ○壽 ○鞍馬山 ○翁千歳三番叟 ○廓丹前 ○菖蒲ゆかた ○喜三之庭 ○紀州道成寺 ○連獅子 ○時雨西行

○歌澤

寅派、芝派の歌詞を全部收める。

○小唄・端唄・雜曲集

江戸時代から唄はれて今日に尙唄はれてゐる雜曲三百餘を收む。

第廿九卷 謠曲三百五十番集（第十八回配本濟）

脇能物

○翁 ○高砂 ○弓八幡 ○志賀 ○淡路 ○御裳濯 ○代主 ○松尾 ○佐保山 ○養老 ○大典 ○放生川 ○老松 ○白樂天 ○鶴龜 ○東方朔 ○白鬚 ○大社 ○源太夫 ○寢覺 ○鵜祭 ○輪藏 ○道明寺 ○難波 ○富士山 ○江島 ○賀茂 ○竹生島 ○氷室 ○和布刈 ○逆鉾 ○九世戸 ○要石 ○嵐山 ○金札 ○岩船 ○玉井 ○西王母 ○呉服 ○右近 ○繪馬 ○鱗形 ○内外詣

修羅物

○田村 ○八島 ○箙 ○忠度 ○俊成忠度 ○經政 ○通盛 ○兼平 ○知章 ○賴政 ○實盛 ○淸經 ○朝長 ○巴 ○敦盛 ○生田敦盛

三番目物

○野宮 ○井筒 ○東北 ○梅 ○佛原 ○采女 ○芭蕉 ○墨染櫻 ○身延 ○半蔀 ○夕顏 ○雪 ○楊貴妃 ○江口 ○定家 ○千手 ○二人靜 ○六浦 ○藤 ○杜若 ○小鹽 ○雲林院 ○誓願寺 ○羽衣 ○落葉 ○遊行柳 ○西行櫻 ○葛城 ○瀧田 ○三輪 ○卷絹 ○吉野靜 ○住吉詣 ○松風 ○熊野 ○草紙洗小町 ○山姥 ○祇王 ○吉野天人 ○胡蝶 ○[illegible] ○源氏供養 ○大原御幸 ○關寺小町 ○鸚鵡小町 ○檜垣 ○姨捨

四番目物

○三井寺 ○櫻川 ○柏崎 ○百萬 ○玉葛 ○浮船 ○三山 ○籠太鼓 ○籠祇王 ○隅田川 ○蟬丸 ○花筐 ○雲雀山 ○飛鳥川 ○班女 ○加茂物狂 ○水無月祓 ○室君 ○初雪 ○花軍 ○富士太鼓 ○梅枝 ○鳥追船 ○竹雪 ○藍染川 ○水無瀨 ○砧 ○求塚 ○卒都婆小町 ○女郎花 ○通小町 ○戀の松原 ○善知鳥 ○阿漕 ○藤戸 ○松虫 ○錦木 ○船橋 ○綾鼓 ○戀重荷 ○鐵輪 ○葵上 ○道成寺 ○雨月 ○木賊 ○弱法師 ○景淸 ○俊寬 ○攝待 ○鉢木 ○土車 ○高野物狂 ○蘆刈 ○盛久 ○小督 ○春榮 ○仲光 ○重盛 ○

楠露○櫻井○正行○木曾○七騎落○安宅○切兼曾我○元服曾我○小袖曾我○藤榮○自然居士○東岸居士○花月○放下僧○歌占○蟻通○三笑○唐船○邯鄲○菊慈童○枕慈童○天鼓○咸陽宮○大佛供養○夜討曾我○橋辨慶○笛之卷○湛海○忠信○錦戸○現在巴○關原與市○禪師曾我○正尊○草薙○泰山府君○現在七面○調伏曾我○望月

五番目物

○鵜飼○鍾馗○熊坂○項羽○昭君○松山鏡○野守○檀風○烏帽子折○鞍馬天狗○善界○車僧○第六天○大會○葛城天狗○松山天狗○舍利○殺生石○小鍛冶○鵺○雷電○谷行○國栖○春日龍神○大蛇○愛宕空也○龍虎○飛雲○大江山○羅生門○土蜘蛛○現在鵺○安達原○紅葉狩○船辨慶○碇潜○張良○皇帝○一角仙人○融○須磨源氏○紘上○海士○當麻○來殿○山姥○石橋○合甫○猩々○大瓶猩々

番外物

○鼓の瀧○徑山寺○兵揃○橫山○玉取○和國○四季○由良物狂○香椎○內府○島廻○玉島○現在經政○卒都婆流○當願暮當○徒然○上宮太子○松浦物狂○蛙○碁○吉野○定家一字題○眞方○近江八景○博多物狂○初瀨六代○舞車○舞車○俱利加羅落○隱岐院○阿古屋松○反魂香○笠取○太刀堀○母衣○更科○五輪碎○西濱八景○鶴龜○曙○菊露○奈良八景○山家秋○東國下○西國下○弓矢立合○箱崎○鵜羽○布留○鼓瀧○阿古屋松○芳野○香椎○浦島○休見○上宮太子○吉野詣○笠卒都婆○貞任○伏木曾我○明智討○柴田○北條○空蟬○高安○裝衣○高安小町○安達靜○宮城野○朝顏○賞方○高野詣○隱岐院○丹後物狂○笛物狂○島廻○松浦物狂○和國○松浦○粉川寺○反魂香○鷄龍田○池贄○苅萱○守屋○佐々木○齋藤五○橫山○春近○十番切○千引○豐干○護法○常陸帶○現在千方○泣不動○橋天狗

以上日本名著全集、第一期出版、「江戸文藝之部」全廿七卷及追加篇二冊は、第十一卷黄表紙廿五種を第一回配本として每月一冊乃至二冊宛を刊行するもので、豫約申込は、大正十五年六月十六日を以て一旦締切りましたが、會員數の增大に伴ふ多量製產の利得を以て、益々いゝ本を作らんがため、その後も、また現在も、おそらく當分は將來も、會員の御紹介による新入會員の申込を歡迎致します。

○豫約會員外には頒たず、分賣の需めに應じ得ぬこと、また申すまでもなし。

○會費は一冊あて一圓六十錢。外に申込金一圓を申受ける。但しこれは豫約權ともいふべきもので每月の會費とは別從つて一時拂の會員でも、二回拂の會員でも同樣に申受く。

○送本料は、會費の外に一冊あて金十二錢を要す。

（終）